

---

# 魔法少女に会っちゃった場合

作戦参謀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女に会っちゃった場合

### 【Nコード】

N0702U

### 【作者名】

作戦参謀

### 【あらすじ】

地元のありふれた県立高校に通う藤島圭介。彼は身体が異常に丈夫だという事を除けば赤点ギリギリ、サブカルチャー系の知識は豊富というちょっとバカでオタクなどどこにでもいそうな高校生。新学期が始まってから一ヶ月、ゴールデンウィークに入る頃。圭介は新たなクラスに馴染み、これからもこの日常が続く……と思っていた。ただ彼女が現れてしまったのだ。「拙者、秀吉公の子孫ににして魔法の国からやってきた魔法使いなのです!」「どうやら俺はエロゲの世界に入ってしまったようだ……!」

秀吉の子孫を名乗る

アホな戦国系魔法少女・木下暮葉と、《多分》普通の高校生・圭介。  
そして《多分》愉快的仲間達や敵共が繰り広げる、おバカでズレた  
ラブコメディー！

## 第1話 まだ平穩だった朝の事

魔法少女なんてファンタジーなもの、信じる？

昨日見たアニメでは偶然主人公が魔法少女と出会っちゃったんだ。まあこういうネタってアニメや漫画だとありがちだよな。

そういうのが現れ、何かと主人公は巻き込まれ、最後は正義のヒーローになる。

うむ、すばらしい王道ストーリーである。

最終的には女の子とも結ばれ、ハッピーエンド……素晴らしい、リア充だね。

さあ、降ってこい魔法少女！

片翼の天使だろうが破壊するものだろうが、この俺が相手になってやろうじゃないか。

……まあ、無理だけどさ。普通に考えて俺がラスボスに勝てるわけないじゃん。

スライムさんにだって勝てるか微妙だと思っよ、どんなに外れた人間でもな。

所詮は人間だ。それに空から降ってくる女の子が普通なわけがない。現実そんな事があってみる。絶対面倒に決まっている。

だから、そういうのは二次元に限るんだ。

そう、二次元は俺らの楽園である。ハハハ……。

「こら圭介！ 早く起きる！」

「……はっ!？」

ドコなんだよ……ココは……。

知らない天井だ。いいや待て、よく知ってるよこの天井。

天井には中々壊れないので、そのまま使用している古臭い電気。

部屋を見渡すと本棚には漫画やライトノベルで溢れ、パソコンの周りには好きなキャラクターの『いんどろいど』のフィギュアが数体。特に後輩キャラ多し、まあ俺の好みだからね。おそらくフィギュアがある時点で普通の人から見ればかなり痛い部屋である。そんな部屋にある俺のベッドのすぐ近くで、美少女が俺の事を機嫌の悪そうな顔で見つめていたのだった。

「ったく、妙にファンタジーな寝言言っちゃって……今日は隕石でも降ってくるのかしらね？」

「アンタ俺をなんだと思ってるの!？」

「変態、バカ、オタク」

「評価最悪ですか!？ 確かに俺はバカでオタだが」

……何故でしょう、何故寝起きの俺に女の子が食いかかってくるのでしょうか。

これなんてギャルゲーでしょうか……いいえ、ギャルゲーではありません。

答えはこの子、俺の幼馴染だから起こしに来ているのだ。ってやっぱりギャルゲー的だな。

銀髪のショートヘアやツンとした紅い瞳が特徴的で八重歯が目立つ

極上の美少女。

なんとなく黒いリボンがお似合いな彼女の名前はくにむねいぶき国宗伊吹。

「な、なにじろじろ見てんのよ……っ」

「ふふふっ、朝から照れる伊吹は可愛いねえ」

「て、照れてないわよ!」

そうは言っているが、やたら必死かつ頬が微かに赤い。

「うーん、中々デレないな伊吹は。攻略に時間がかかりそうだぜ……ッ!」

「っ……なにが攻略よ!」

「まあまあとりあえず笑おうぜ? あと起きるのはもう少し後で。只今俺のハイパー兵器がお盛んなもので……」

「っ……! ……ッッ、バカ圭介!」

つとその時、俺の言葉の意味がわかった伊吹は恥ずかしそうに怒鳴り、同時に大きく足をあげた。

その瞬間白と水色の縞パンが見えました。なるほどねえ、伊吹はああいうの穿くのか……いいよな縞パン。俺は好きだぜ縞パンが。

いやいや朝からいいもの見たよ……と思ったのは一瞬だけである。次の瞬間伊吹の踵が俺の鳩尾へと、勢いよくナチス・ドイツの急降下爆撃機のように落下してきたのだ。

「じぶうつ!?」

鳩尾をやられた俺は当然のように呼吸困難に陥った。

……まあ、この程度ならなんてことがないが。

俺、何故か 異常に身体が丈夫なんです。ハイ。

伊吹もそれをわかってて攻撃したのだろう。伊吹はホントはいい子だし、俺が貧弱だったらこんな事しないハズだぜ。

「セクハラ魔人！ あああ、朝からセクハラってどういう神経してんのよ！」

顔を真っ赤にしてセクハラ言ってくる伊吹も可愛いのだが、正直痛い。

あとセクハラ言われて嬉しいと思うか？言っておくが俺は罵倒されるの大好きなマゾヒスト君ではない。

「セクハラ違ーう！ 仕方ねえだろ事実なんだから」

「うう……昔はこんなセクハラ男じゃなかったのに……っ」

「それを言えばお前だって昔は素直で可愛い子だったのに」

「うっ……うるさい！ とりあえず黙って起きる！」

その時、伊吹は大声を出しながら俺の布団を剥いでしまった。

ああマズイ、これはいかんぞ。

なんたって朝の男は超がつくほどお元気なのだよ。

……ってか見られるこっちも恥ずかしいんだが。まあいいや、伊吹には何度か見られたし。

なにより反応が可愛いのであえて何もしないでおくぜ！

「……ッ！」

伊吹は目を大きく開き、顔を耳まで真っ赤にして俺の股間を直視している。

「……だから言ったら、起きるのはもう少し後にしてくださいって俺はそう言ったものの、彼女はわなわなと震えている。そして遂に彼女は大声で。

「……変態ッ！」

と、叫んだのである。

全く理不尽だ、こんなの全国の若い男の子なら当たり前じゃないか。

「エエッ!? これで変態扱いされるの!? 仕方ないじゃんコレ男の生理現象ですよ!？」

「う、うるさいうるさい! とにかく早く着替えて学校来なさい！」

「あれ? 待つてくれないのか?」

「あ、あんたなんかを待つ理由なんてないんだからっ！」

「アーハイハイソーデスカー！」

「棒読みすんなバカ圭介！」

そう言い残し、伊吹は俺の部屋から出ていった。しかも扉を強く閉



め、階段をドストドと音を立てながら。多分家からも出ていっただろうな、まあ慌てて追いかける必要もないが。その理由？んん……まあすぐわかるよ。とりあえず伊吹も行ったし、俺も起きて下に行くか。……生理現象も丁度収まった事だしな。

「うう朝ごはん朝ごはん！」

今、朝ごはんを求めて全力疾走をしている俺は、初芝高校に通うごくごく一般的な男の子。

強いて違つところをあげるとすけば身体が異常に丈夫つてとこかな

名前は藤島圭介……。

って自分でしておきながら言つのもなんだけど、なにさこのくそみそな自己紹介！

俺は嫌だよフットウーに女の子のほうが好きなんだからね！

……やがてリビングに到着すると、そこから見える台所にまた一人女の子がいました。

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

元気に笑顔であいさつをしてくる少女。

ショートカットにちょこんと可愛らしいサイドテールという髪はなんと水色、決して染めているわけではなく天然らしい。

不思議なものだ、俺の髪色は黒だというのに。  
そして少女の髪には二つの小さな鈴があり、そこからは黄色いボ  
ンが靡いている。

名前は藤島葵<sup>ふじしまあおい</sup>、yes・我が妹である。

同時に伊吹にも並ぶ極上の美少女であります

「おう、おはよう」

「さささっ！ 今日葵が腕によりを籠めて作った目玉焼きがある  
よー」

「……オイ、これ目玉焼き？」

「えっ？ そだよ」

「おかしいだろ！ どうして目玉焼きなのにイトミミズのような色  
してんの！？ ていうかこれイトミミズだよね！？」

「えっ？ んー、見た目だけだよきつと！ さあお口へLet's  
GO！」

嫌だ、こんなの食いたくない。  
毎日の事とはいえ拷問すぎる。  
だって見た目どう見ても下水道とかにいるイトミミズですよ。  
そんなのを目玉焼きとして食えってどんな拷問ですか。

「ほらあ、葵の特製目玉焼きい！」

「目玉焼きじゃない！ これイトミミズ焼きだって！」

ていうか赤いまんまだし、焼いてすらいないよね色的に。  
嫌だ……俺は実の妹にイトミミズを食べさせられてしまうのか！

「はい、あ〜ん」

「きゃああああああああっ！」

葵曰く目玉焼きであるらしい、イトミミズ焼きを葵は俺の口の中へ突っ込む。

その顔は無邪気で笑顔で悪気は全くなさそう。ああ、確かに葵は純粹な子さ。

純粹で優しくて、時々悪魔で

「……アレ、うまい？ ていうか味は目玉焼きだ」

「でしょでしょー！」

「……はあ、一瞬マジでイトミミズ焼きかと思ってヒヤヒヤしたぜ」

「い、イトミミズなんてお兄ちゃんに食べさせるわけないよー！」

少し本気になって口答えしてくる葵は妹ながら実に可愛らしい。  
ちよっとドキってきそうで……ってダメダメ。コイツは妹だ。

流石に現実の妹に手は出しませんよ。妹に手を出す……即ちヨスガ  
るといふ行為は二次元だけで十分だ。

さて、葵のこのイトミミズ焼き……じゃなくて目玉焼きの話に移る

うか。

実はコイツの作る料理は意外とおいしい。ただし見た目が異常に悪いのだ。

この味噌汁に入っているゲジゲジみたいなのは、おそらくわかめだろう。ったく……どうしてわかめがゲジゲジみたいになっちゃうんだ。いくらなんでも見た目が悪過ぎだろう。

でもそれがなかったら本当にパーフェクトなお味。

逆に言えば、見た目の悪さを治さなかったらお嫁に行けないぞ、コイツは。

「お前なあ……いくらなんでもひどすぎるぜコレは。マジで恋人できねーぞ?」

「いいもん、お兄ちゃんと結婚するもん」

そんな事を言いながら葵は拗ねている。

葵は超ブラコンなのだ。まあ俺的には嬉しいが、なんと現実なお兄ちゃんと呼んでくれるんだぜ。

こんな仲良し兄妹現実だと珍しいよね!……でも一応兄妹だし、一線を越える気はない。

「法的に無理だろ!」

「法の限界を超えてこそ真の愛なんだよ!」

「超えちゃダメでしょ法の限界は!」

「いいもん葵とお兄ちゃんの中だけでするもん!」

「妄想結婚かよ!」

「それにお兄ちゃんだって彼女さん出来ないじゃん？」

「とりあえずおだまり！」

悲しい事に俺は彼女いない歴〓年齢……うう、頼む。誰でもいいから彼女になってください。

というわけで俺は絶賛彼女募集中だ。彼女をください……。つと、その前に俺が恋しないとダメっすよね。まあ恋なんてそう簡単に来るわけ

「それにお兄ちゃん今までの恋全部失敗してるじゃん」

「う、うるせえっ！」

「ちなみにお兄ちゃんの初恋の相手は齋賀春香って名前だよね！」

「もうヤメテー！俺のライフはとっくに0よ！」

葵ちゃん最悪や、俺の古傷に触れるだなんて……うつつ、悲しくなってきた。

ちなみにその齋賀さん、俺が告白しようと思った時にはイケメンに取られてました。

畜生、これだからイケメンは嫌いなんだ！

……俺だって、自分で言うのもなんだが、そこまで悪いツラじゃないハズなのに……うつつ！

「あつ、お兄ちゃん早く食べないと遅刻しちゃうよ！」

「お？確かにそろそろヤバいな。さっさと食って学校行くぞ！」

「うん！」

……今日は5月2日。月曜日である。

世間ではゴールデンウィークというものらしいが、学生にとっては明日からがゴールデンウィークなのだ。

やれやれ、一日だけ学校があるとか面倒くさすぎる……。

俺はな、勉強嫌いだし学校も面倒くさいんだ。まあ行かなきゃ友達とも会えないし、そもそも高校くらい卒業しないと皆心配するし……。

面倒だけど行きますか。どうせ今日一日行ったら3連休なんだしさ、ハハハッ。

……しかし、この一日が人生の大きな分岐点になるうとは、この時俺は全く思ってもいなかったのだ。

## 第1話 まだ平穩だった朝の事（後書き）

始めましての方もそうでない方も、こんにちは！作戦参謀です！

以前活動報告で予告した通り、本日より新作連載開始です！

相変わらずのド素人ですが、今後ともよろしく願いします！

さて、知っている人は知っている。

次回より後書きを使って登場人物の紹介をしていきたいと思えます！

……と、言いたい所なのですが。実はアレ、ネタバレになるんじゃないかと最近ふと思いました。というわけで、もう少し物語が進んでからそれをやりたいと思います！

代わりに次回からは後書きを使って、どうでもいいような後書きトークコーナーをやるうと思えます！

今後ともよろしく願いします！

## 第2話 はいはいピンチピンチ

古宇坂市。とりあえず電車で東京に行ける距離にある、人口約13万の都市だ。

人口はやや増加傾向であり、俺や伊吹はこの古宇坂市の住宅街にあるとある一軒家に住んでいる。

我が藤島家は俺と妹の2人暮らし。というのも親父は仕事で滅多に家に帰ってこないし、母さんも滅多に帰ってこないし……。

というわけで事実上兄妹の二人暮らし。オマケに家事は葵に任せている。

ご飯の見た目が悪いことを除けばごくごく普通だし、文句はご飯の見た目がグロテスクだって事以外は特にない。あとたまに伊吹が葵を監視してくれてマトモなご飯が出てくる事がある。

それはもう、普段あんなものを食べているせいかな、御馳走に感じるんですぜ。

……ていうか、今俺と葵は家を出たのだが、どういう事でしょう。

先に学校へ行ったハズの伊吹さんが家の前の電柱によっかかり、俺から顔を逸らして待っておりまして。まるで一昔前のアニメにいたツンデレヒロインのように。

「な、なによ……っ?」

「先に行ったんじゃないの?」

「あ、あんたを待ってたんじゃない。葵ちゃんを待ってただけよ」



ぷいっと顔を逸らし、不機嫌そうにおキツイ言葉を口に出している。確かに俺なんて待つ価値もないのかもね。

本心じゃないとは思うけど。いや待て、本当に嫌われているかしれないぞ。

今朝だつて思いっきり鳩尾に踵落としされましたからな。

ちなみに葵と伊吹も幼馴染、葵は伊吹の事をお姉ちゃんと呼ぶほど伊吹を慕っているようだ。

「お姉ちゃん、そういうのツンデレって言うんだよ」

「っ、ツンデレじゃないわよー!」

ああ、それは正解だと思う。

確かに伊吹は素直じゃないさ。

でもツンの後ろにデレがない、そう……コイツにはデレがないんだ。というわけでコイツはツンデレじゃない……と思う。

ツンデレじゃなかったら何か。そう、俺はおバカな頭で必死に考えました。

デレのないツンの事を何というか!

「そうだぞ。伊吹はな、ツッパリだ!」

「何か一昔前の不良みたいになってるけどわたしは不良じゃないわよー!」

「デレがないけどツンツン突っぱねてるだろ? ほら、略してツッパリ!」

「略になつてない！」

まあ、そんなわけでツツパリ少女国宗伊吹。  
はたしていつデレるのだろうか？

……って、ギャルゲーじゃないんだし。そう簡単に幼馴染がデレる  
わけがない。

増してや伊吹はデレ無きツツン突っぱね、略してツツパリだぜ？

俺の幼馴染がこんなにデレるわけがない。

「ていうかこんな所で立ち話してる場合じゃないよ！ 遅刻しちゃうよー！」

「えっ？ あ、やべえっ！」

確かに現在時刻は8時20分、学校は近いのだが流石にそろそろ行かないとまずい。

学校が始まるのは8時35分からなのである。

歩けば10分、今行けば到着するのは5分前だ。

「ほら圭介！ ほけつとしてないで行くわよ！」

「ちよ、いででで！」

伊吹が俺の腕をぐいっと引っ張ってくる。

手を引いてくれるって地味に嬉しいかもしれないが、これは正直力が入り過ぎていて痛い。

しかも思いつきり走るんですぜ？痛いってコレ痛いって！

きゃああああ〜と叫びながら、俺はしばらく伊吹に引っ張られていた。

全く……やれやれだぜ。なあ空条シヨウ太郎。

県立初芝高等学校。

古宇坂市の文京地区、閑静な住宅地に存在する県立高校、通称『初高』。

中々伝統のある学校で偏差値も高め、ぶっちゃけ言うと俺はここに無理して入ったんだ。

理由？ああ、伊吹と離れるのが嫌だった……ってのは内緒だからな。でも無理した結果が校内でも最低クラスの成績だよ！

……まっ、公立高校だし、いくら馬鹿でも余程の事がない限り、退学させられたりはしないハズだ。

制服は男子は学ラン、女子は少しピンクっぽいブレザーにチェック柄のスカート。

最もかつては女子もセーラー服だったが、元々ここ初高は男子校だった為、女子率が必然的に低かった。

ところが最近女子の制服のみ可愛いデザインに変更され、周辺中学の女子に制服で選ばれ、その結果ついに今年男女比がフィフティーフティになってたのだ。

俺もね、女子が増えて嬉しいんだ。藤島はうれしくなるとついやっちゃうんだ。らんらんるー！

……まあ、授業風景はどこにでもありふれた学校だし、ここでは割愛しよう。

「では、本日はこれで終わります。さようなら」

と、ありふれたセリフを言う頭がハゲかかった中年教師は乙坂隆一。おとさかたかいち我がクラスの担任さんなのである。正直地味すぎるし、現文教師だけどテンポが悪くて人気もない……。

「ああああ終わったあつ！」

「やれやれ、6時間授業はやっぱ長いな」

「ったく。僕は小学生がうらやましいぜえ」

「どうせなら幼稚園時代に戻りたいね。遊んでばかりで気が楽だよ」

SHRが終わり、皆が帰り始める。中にはこの二人の馬鹿野郎共のように友達の所に集まる者もいる。

ちなみに伊吹も同じクラス、だが伊吹は女友達のほうに行ったようである。あと葵は一年生だ。

さて、俺の所に来た野郎二人。片方の一人称が僕なわりには口が悪い男は長宗我部大吾。ちやうそがへだしい黒髪ツンツンに眼鏡というシニールな見た目と、無駄に名前が長い事。

「もう帰んべえ圭介え。ついでに漫画買って帰ろうぜ？」

そして完全二次元派として有名な男である。

俺以上のオタクだ、流石の俺も彼女が欲しいし完全二次元派ではない。

「じゃあ俺も混ぜてくれ。ちょうど神のみの12巻が欲しいからね」

「OK、んじゃあメンバーな広ちゃんと圭介な！」

そしてもう一人の爽やかな男のほうは重原広敏。しげはらひろとし

爽やか〜と思つて近づけばコイツ、かなりデカい。

しかも体育の時に見たがかなり筋肉質な身体を持っている。

何故かと思えばコイツ、『無差別格闘重原流』の跡取り息子で武道家なのだ。

要するにこのメンバーでは喧嘩最強つてわけである。最も喧嘩するような柄ではなく、どちらかというと爽やか系である。実に見た目のギャップが激しい。

「悪いな大吾、俺は帰る！」

「ええっ!? マジで圭介、ああわかつたぞ! お前どうせ国宗か妹だろ!」

「残念、両方であります!」

……という保証もないのだが、まあ多分かなりの高確率でそうなるのだろう。

「……ふん! 僕は全然羨ましくない! だって二次元に嫁がいっぱいいるから!」

「流石の俺も、大吾ほどのオタクにはなりきれないね」

「重原に同意だぜ、完全二次元? 無理やる!」

「無理じゃない! むしろ現実女でもイける二人のほうが、僕から

してみればわけがわからないよ！」

いや、絶対おかしいのはアンタだ。

俺の人生の中でアンタ以上の変人は見たことがない。  
大吾とは、そういう人物なのだ……名字も長いしな。

「ところで実際どうなんだい、国宗さんとは？」

「ああ？　そうですねえ。ツツパリ伊吹さんと付き合ったら逆DV  
が怖くて怖くて」

「ツツパリ？」

おお、二人ともよくそこに突っ込んだ。

流石はmyフレンド。掴みは完璧でございます。

「ツツツツ突っぱね、略してツツパリ！」

「その発想はなかった!？」

「略になってない気もするけど藤島にしてはうまい！」

「と言う訳で以後、彼女の事はツツパリ伊吹ちゃん」

と、その時。伊吹の肘が艦上爆撃機による急降下爆撃の如く、俺の  
ドタマへと降ってくる。

気分はまるで、爆撃される空母ハーミーズだぜ。

確かに伊吹の肘打ちは正確で、それはそれは熟練した搭乗員が操る  
艦上爆撃機のようなであった。

ドーンと鈍い音が響き渡ると同時に、俺は頭部に激しい痛みを感じ

ました。

「んぎゃっ!」

「ツツパリ言うなバカ圭介っ!」

「さ、さあ〜せん……っ」

「はあ、圭くんも圭くんだけ伊吹も相変わらずだなあ」

……と、そこで部外者ですよーと言わんばかりのそぶり、ぶつきらばうな姉御口調で俺と伊吹のデスマツチを観戦しているのは小坂<sup>かあき</sup>亜紀、伊吹の親友らしく俺の数少ない女友達の一人だ。

アンダーテールというこの学校では珍しい髪型の持ち主、またお胸につけた吉備団子はかなりのものである。そう、小坂の胸には夢と希望がいっぱい!……だと思えます。

それに比べて伊吹は……まあゼロじゃないんだけどね。

Bカップらしいよ。うん、なんで知ってるかって。もちろん、彼女が幼馴染だからさ。

その後の帰り道、俺は伊吹と並んで下校中である。予想に反して葵は俺の前に現れなかった。

おそらく、アイツも友達づきあいつかで忙しいんだろう。

そしてツツパリ少女伊吹さんは何故か背中に竹刀を背負っている。

「ところで伊吹、その竹刀はアレか。魔王バラモツに挑みにいくの

か？」

「ち、違うわよー！」

「気を付けるよ。バラモツ倒してもさらに大魔王ソーマがいるからな」

「黙れオタク！」

はいはいわかってますよ、コイツがちゃんと部活やってるって事くらい。

ていうか伊吹はとらゴンクエストやった事ないのか？  
ダメだなあ、国民的RPGでずせ。今度伊吹にもプレイさせてあげなければ。

「そついえば今日は早かったけど剣道部、今日はなかったのか？」

「えっ、うん……」

そうそう、こつこつふうふうに普通していれば伊吹は可愛い。

それなのにツンばっかでデレがなく、ツツパリ状態な伊吹さんともう……。

個人的にはいろいろと残念な幼馴染だぜ。

「でも竹刀は部室に置いておけばよくな？」

「なにいつてるのよ。室内で練習できるじゃない」

「ちよ！？ 器物損壊だぞ！？」



「はあ？ ……っ、別にあんたの家でやるわけじゃないのよ！」

「ならばよし！」

「爽やかにグッジョブするな！」

と、ムキになって俺の反応に嘔みつくツツパリ伊吹。

仕方ないだろ。俺の家が伊吹の竹刀に破壊しつくされずに済むんだ。

それはもう超爽やかに朗らかにグッジョブをしたくなっっちゃうSA！

と、俺が調子に乗っていたその時。

「楓っっ！」

「きゃあああああっっ！」

なにやら車道のほうが騒がしいな。

何事かと思つて俺は車道のほうを見た。だがそこは思いつきり地獄  
絵図であつた。

クラクションを鳴らし、ブレーキを踏んでスキル音をあげている  
一台のトラック。

その前方にはクマのぬいぐるみを持った幼稚園児と思われる女の子。  
そして悲鳴をあげている女の子の母親と思われる女性。

まずいぞ、あのままだと女の子が轢かれてしまう。

よし、どうする。我が身を犠牲にしますか？

それとも女の子を見殺しにしますか？

後者はありえない。女の子の笑顔を守るのは男の務め、ならばこの  
選択肢……前者を選ぶのみ！

「ふっ！」

「ちよ、圭介！？」

伊吹が咄嗟に車道へと飛び出した俺を呼びとめる。

だが一度動き出した俺の足は止まる事なく、女の子のほうへと突き  
進んだ。

そして、トラックが少女を撥ねる前に俺は少女の所に到着。

「あぶねえっ！」

少々乱暴だが仕方ない、命を助ける為にはこうするほかなかった……。

俺は叫びながら少女を突き飛ばした。ふう……よかった、女の子は  
救われた。

トラックに撥ねられて、お見せできない姿になる事はなかった。

え、なんだって。俺は大丈夫かって？

そうだな、俺はだな……

「んぎゃあああああああああつ！」

「け、圭介っ！」



3……2……1……!

「アズにやああああああああああああん！」

ハァーハハ！最高に気持ち悪いぜ俺！

さあてあとはアスファルトに直撃するのみ。

さよなら皆さん！俺こと藤島圭介は第2話で死亡しまあああ

「じぶうるあつー!？」

おおゆうしゃよ、しんでしまつとはなさけない！

……などと言う事もなく、俺はトラックに轢かれたのにも関わらず、  
何故か生きていた。

……あたた、クソツ……滅茶苦茶痛い。

でも腕や足は問題なく動くし、よかつたあゝ骨折はしていないみた  
いだ。

ふう……死ぬかと思った。いや、この体質がなかったら絶対即死だ  
ろ……。

トラックに撥ねられて無事な人間なんてどこにいるんだ。いや、俺  
は無事だったけど。

今朝も言ったような気がするが、俺の体は異常に丈夫に出来ている  
のだ。

ご覧のように俺はトラックに轢かれても生きている。

しかも骨折すらししない……まあ打撲したせいなあちこち痛むんだけどね。  
さらに傷の回復力も普通の人より早い。おかげで怪我してもすぐ治るんだけどな。  
まあ考えようによつちやあ便利な身体だよな。今みたいに女の子の命を救う事だつてできる。  
でもいつそ死んだ方が幸せだったかも……ああ、全身痛いザマス。まさか死ねなくて苦しいという、通常味わう事のできない感覚を味わえるとは……俺の体どうなってるの？

まあ生きてるならいいじゃん……だつて？答えはNO、痛くて動けません！  
骨折れてないけど全身打つたら痛いじゃんフツー動けないじゃん！  
ああ、きつともう少し時間が立たないと動けないであろう。  
でもどうしよう？ここ道だし、車が走ってきたら……  
いくら身体が頑丈だからって、二度も撥ねられたら流石に持たないぞ？

「あの一、大丈夫なのですか？」

「あ、ああ……？」

その時突然聞こえた声、顔を上げるとそこには見知らぬ美少女がいた。

綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛、琥珀色の目に色白で小柄な身体を持つ美少女だ。すげえ日本人離れしている……外国人かな。

でもその女の子は和服に怪しげな日本刀を提げているという、意味不明な戦国少女であった。

「……………」

俺は何の前触れもなく現れた少女の、あまりの可愛さに見惚れてしまっ  
まう。

そしてあまりの意味不明な装備に思わず絶句してしまった……………。

## 第2話 はいはいピンチピンチ（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「オッス！ オラ圭介！ ワクワクすつぞ！」

伊吹「はいはい黙つときなさいオタク」

圭介「なっ！？ と、とらゴンボールは国民的アニメだぞ！？」

伊吹「興味ない人は興味ないのよ。少しは考えなさい！」

圭介「……この小説読んでる時点で皆オタクじゃね？」

伊吹「こらっ！ 勝手に読者の趣味を決めつけない！」

圭介「というわけで始まつちやいましたこの小説。読者の皆様、感想とかがありましたらよろしく願います！ 感想を送ると……なんと伊吹が脱ぐかも」

伊吹「脱ぐかこの変態っ！」

圭介「ごばあっ！？ ちよっ！ し、竹刀はマズいって！ ぎゃああああっ！」

感想お待ちしております！

### 第3話 戦国系魔法少女

ここはさっき俺が倒れていた場所のすぐ隣にある小さな公園。そう、俺は公園の前の道路に落下したのだ。

ここは比較的交通量も少ないし、そのおかげで二度も車に轢かれる事はなかったのだろう。

現在、俺はたまたま出会った女の子と公園のベンチに座っている。しかも二人で。

普通に考えてこれは超嬉し恥ずかしハッピーなイベントなはずだ。

でも素直に嬉しくなれないのはなんでだろう。

やっぱりその、お腰に提げた日本刀のせいだろうか。

というかコスプレだよなそれ、本物だったら銃刀法違反ですよ。

「おっ？　ようやく首がマトモに動くようになった」

「大丈夫なのです？」

少女が首を傾げながら俺の事を心配してくれる。

小動物のように小柄でお人形さんのように華奢な身体、整った輪郭、本物の琥珀を見ているような瞳。

……なにこれかわいい、こんな可愛い生き物が地球上に生息していたのか。

だが、彼女は服の上から推測するに残念ながらぺちやぱいだ。形すら無に等しいだろう。

ムフフ……お胸につけた二つの吉備団子はやっぱり美乳だよな！

と、勝手に美乳派の俺が脳内妄想してみる。



「ああ。まあ何度か撥ねられた事があるけど、今回は比較的軽傷だな」

俺はそんな可愛いらしい（ただし貧乳）彼女に見惚れていた。

しかし折角心配してくれているのに、ノーコメントは失礼極まりないだろう。

なので俺は現在の状態を正確に彼女に伝えた。

「撥ねられたって……な、なににですか？」

や、やべえ！

余計な事言っちゃまった、普通撥ねられたなんて言わねえよな。

……仕方ない、今更隠したって無駄だろう。第一空から降ってきたのだし。

「その……ひ、引くなよ？」

「絶対に引かないのです。正直に言ってほしいのです」

「お、おう。……トラックだ」

「もきゅ？ と、トラック……もきゅうううううっ！？」

もきゅっという可愛らしい叫び声を彼女は上げている。

しかし目を白黒させているし、これは驚いているのか？

……ハハッ、ですよー。

トラックに轢かれたら普通死ぬもんね。おかしいですよー。

「へ、平気なのですか！？」

「まあ信じられねえかもしれないっすけどね……」

「トラックに轢かれても無事……っ、間違いないのです。この人がそつなのです！」

「ん？」

「あ、あの！ 失礼ですがお名前は！」

「名前？ 藤島圭介」

あ、ついノリで本名言っちゃったけど大丈夫かな？

……ま、まあ悪そうな子じゃないし、大丈夫だよな。

一瞬ここはジョン・スミスと名乗っておくべきかと思ったけど、別に本名でもいいや。

一方、少女はというと。

「……っ、ついに発見したのです！」

と言って俺を指差している。

うーん、まず一言言わせてもらいましょうか。

なにがなんだかサッパリわかんねえっ！

俺とこの子は初対面なハズなのに、何故彼女は俺の事を知っているような反応をするんだ？

「もきゅっ！ でもでもホントにあの人の子孫なのでしょうか！？」

あばばばばっ！」

「ちよっ！ よくわからんけど暴れるな！ 落ち着くんだ、素数を数えるんだ！」

「もきゅーーっ！ そ、素数でなんなのですか!?!」

「頭悪過ぎだろ！」

まあ人の事言えるほど頭良くないんだけどな。

それでも57くらいまでの素数なら何も見なくても言えるよ。でも教えるのも面倒だし、とりあえず素数はやめ！

俺が自力で突如慌て始めた、この意味不明少女を落ちつかせよう。

「ようし！ 数を数えようか、おっぱいが一つ！」

「おっぱいがふた……ってなにを言わせるんですか！」

顔を耳のあたりまで赤く染め、突っ込みを入れる彼女。

やべえな、つい最近大吾の家で見た子猫ちゃんよりも可愛いらしい……っ。

やっぱり女の子って……最高だ！

「まあまあ落ちつけて。ほら、落ち着いたろ？」

「もきゅっ？ ……あっ」

うむ、羊の数を数えるっていうのは昔からよくある事だ。

それをただおっぱいに変えただけが、意外と人を落ちつかせるのに有効かもな。

まあこの子かもし伊吹みたいな子だったら、俺は今間違いない殴り

飛ばされていただろうが。

「とりあえず落ち着いたか？」

「も、申し訳なかったのです……っ」

よかったあ、もしあのままの状態が続けば、近所のママンに変人カ  
ツプルと誤解されそうだし。

そんな不名誉な渾名付けられたくないぜ。

そういえば俺、この子の名前聞いてないな。

俺は一応名乗ったんだし、それに俺の名前を知った時のあの反応……

…うん、謎だ。

でも案外どこかで会った事があるのかもしれないし、名前を聞けば  
思い出せるかもしれない。

「そついえば君、名前は？」

「もきゅ？ も、申し遅れたたのです！ 拙者、姓は木下きのした、名は暮く  
葉わという者なのです」

一瞬、自分は坂上田村麻呂であると名乗るかと思っただけど、案外普  
通の名前だった。

というか可愛い名前だな。まあ見た目も小動物的で可愛いしな。

ただ……このコスプレは一体なんなのでしょう？

一人称も拙者だし、もしかやバジーナさん並の相当上級なオタク様な  
のではないのでしょうか？

それにこの日本刀（多分モドキだよね？）が非常に気になる。

うう……き、気になるっ！

「あ、あのさ。今更なんだけどその恰好ってコスプレ？」

「もきゅ？ コスプレじゃないのですよ」

「……ああそうか！ 仕事柄か！」

「そうなのです！」

「なるほどお、こつみえて一流の役者さんか……って事は俺今撮影の邪魔なんじゃねえか？」

「そうそう、もう忙しいの何の者違うのです！」  
「……って違います！ 拙者は役者」

「ノリがいい子だな。正直楽しい、お前みたいなヤツ嫌いじゃないぜ。ていうかむしろお前みたいなのヤツ好きだぜ俺は！」

「でもこの恰好でコスプレじゃない上に役者じゃないってたら、マジで何だろうか。」

「ていうか年齢的に未成年だよなどう見ても。っーか高校生かすら微妙だ。」

「伊吹も背の順だったら前のほうに来るは、わりと小柄なほうではある。」

「だがその伊吹よりも、この子は小柄に見える気がするのだ。」

「じゃあその恰好は何でございませうか？ ていうかどこの中学？」

「せ、拙者は中学生じゃないのです！」

「え？ すまん！ 小学生だったか！」

「小学生でもないのです！」

「えっ？ まさか高校生……？」

「この世界だと年齢的にそうなる……と思うのです」

なんだか不思議な子だなあ、でも高校生か。

もしかすると俺より先輩だったりして……ま、まさかね。

ここは現実だぜ。二次元ならアリだが、現実でロリ系な先輩がいてたまるかってんだよ。

「高校生かあ。もしかして初高？」

「拙者、高校には行った事ないのでしょ？」

「えっ？もしかして中卒？」

「んん、それも微妙に違うのです」

「マジで？ よし、単刀直入に聞くとお前のジョブは何？」

「拙者、秀吉公の子孫ににして魔法の国からやってきた魔法使いなのです」

「……………」

……………え〜っと、とりあえず質問をしようか。

この場合どう反応すればいいんだ。腹ア抱えて笑うのが正解でございませうか？

まず魔法の国とかがありえないだろ。そして魔法使い？

八八ハツ、日曜朝8時半のアニメじゃあるまいし。それと秀吉の子孫って戦国オタの小坂曰く、直系の子孫は完全に途絶えたらしいぜ。というか豊臣家自体が断絶したんだとか。よくわからないけど、戦国オタの小坂がそう言ってたんだ、多分間違いじゃねえだろう。

とりあえずマジでどう反応すりゃいいんだ。そうだ、こういう時こそすばらしいセリフがあるじゃん！

「どうやら俺はエロゲの世界に入ってしまったようだ……！」

眉間に手を当て、妙にリアルな顔を作り、マジな感じで俺はそんなセリフを言ってみる。

「もきゅ？」

ハツ、しまった！

これでは俺が変人みたいでじゃないか！

……いや待て、自分で秀吉の子孫にして異世界から来た魔法使いという、木下のほうが変人だろ。

え〜とだな、とりあえず……真面目な話をしますか！

「君メルヘンで面白いね！ 今から特別にいい精神科を教えてあげるからゆっくり受診して行ってね！」

「も、もきゅー！ 拙者を精神障害者みたいに扱うななのです！」

「障害者手帳もちゃんと持つんだぞ」

「拙者は障害者じゃないのですよ！」

木下は俺に障害者扱いされたせいなのか、マジギレしていた。確かに普通は怒るさ。でも木下がかなり変人な事には変わりないだろ。

大体いきなり魔法少女ですぜ。電波女って最近そんな名前のアニメが放送されてるけど、それに通じるものがあると思いますぜ。

「いや……いきなり秀吉の子孫とか魔法使いとか言われてもねえ？  
こっつ反応するしかないじゃん」

「事実です！ 全部事実なのです！」

「そっか、じゃあせめて電波女にしておこっか」

「拙者は電波でもなんでもないので！ 全部ホントの事なのです  
よー！」

「っで、証拠はあるのか？」

「しよ、証拠？」

「ああ。お前が秀吉の子孫であつてかつ魔法使いだつていう証拠」

「しよ、証拠ですね。にゅふふ……目にもの見せてやるです」

目に物見せるってなんだろう。やっぱり胸部のダブルマウンテンかしら？

いや、でもねえ木下って……どちらかといつとマウンテンと言つよりは平野だよな。



で、冗談はここまでにしておいて、実際目にもものって何だろう？と、その時。木下は日本刀モドキ（？）に手を掛け、それを鞘から引っこ抜いた。

最初は素晴らしい出来の模型だと思ったが、どうも刃が鋭利かつ光っているし、もしかやこれって……ッ！

「オイこれ本物じゃねえか！」

「もきゅ？ そうなのですよ、これは一期一振という豊臣家。今は木下家ですけど我が家に古くから伝わる名刀中の名刀なのですよ」

「はい質問！ 貴女は銃刀法って知ってますか！？」

「もきゅ？ よくわからないのです」

「そうか、とりあえず簡単に銃刀法と言う物を教えよう。それ持つてると逮捕されるよ？」

「もきゅっ！？ そ、そうなのですか！？」

このマジな驚きよう、常識のないヤツだなあ。

それとも銃刀法なんて法律知りませんでしたなんていうけど、本当は知っていましたという確信犯か？

いや、でも銃刀法なんて少なくとも日本国民なら誰でも知っていると  
思うんだけど。

とにかく、コイツが危なっかしいものを持っているのはわかった。

「でも一期一振ってそれ……本物？ レプリカじゃねえの？」

レプリカでも凶器である事には変わりねえけど。

「本物ですよ！ 本物の一期一振なのです！」

「ヘースゴイナー」

「全然信じてないのですね……っ」

「俺は歴史苦手だからよくわかんねえけどさ、そういうのってレプリカが溢れてるもんじゃねえのか？」

本当に俺にはよくわからないけどな。

ただこういうものって物好きが多くて、粗悪なレプリカとか多そうないメージがあるぜ。

……て言うか実際どうなのだろう。今度小坂に訊いてみようかな。まあ、聞いたところですぐ忘れてしまうのがいつものオチだが。

「むう、とにかくこれは本物なのです！」

「じゃあもう秀吉の子孫とかどうでもいいから、魔法使いだって証拠はあんのか？」

「それはもちろんあるのです！ 特別にご披露してやるのです！」

ほおほお、実際にやってくれるのか。

それなら確かに口で説明されるよりも説得力があるな。

もしコイツの魔法とやらのせいで不可解な現象が起こったら、それはもう信じざるを負ないだろう。

「っで、お前はどついう魔法が使えるんだよ？」

「四大元素の一つ、空気なのです」

「空気？」

「要するに拙者は風を操る魔法が使えるのです」

風かぁ、なんともまあありがちな能力……。

どうせアレだろ。トルネードを起こしますとかそんな感じなんだからわかってるんだよ、とらクエプレイしたから魔法とかは学習済みだ。

でもだからと言って実物を見ないと信用できない。

さて、どうするんだろう。

出来ると言っただけにはすごいものを見せてもらわなければ！

「……………ッ！」

おっ、木下の顔がやたらと真剣になった。

どうやらいよいよ魔法とやらをご披露してくれるようだ。

その時木下は強く一歩、地面を踏みつけた。

一見なんてことのない動作。学園都市の第1位ならアスファルトが粉々になるかもしれないが、普通の人がその動作をやったってただ音が響くだけである。

ところが木下の場合は違った。なんと地面に靴底が触れた瞬間……。

「ぎゃあああああああああああっ！」

何故か俺が地面から吹き上げてくる風に押し上げられ、ぶっ飛ばされたのであった。

ちよつと待て、何故俺が飛ぶ。そこは普通木下が風を利用して飛行する所だろ！

「あぁっ！ も、申し訳ないです！ ちよつと間違えてしまったのです！」

「間違いつてレベルじゃねええええええええええっ！」

気分はアポロ11号ことサターンV型ロケット！

空高く突きあげられた俺はとどまる所を知らない、あつという間に木下なんて点に見えるくらい高い所まで来てしまった。

オイオイ嘘でしょ、高々足踏みで地獄の飛行訓練開始ですか！

……あつ、上昇が止まった。まあ実際ロケットのように飛んでいく所まではいいさ。問題は着陸だよ、どうやって着陸すりゃいいんだ。人間様はなあ、飛行機のように上手に着陸できねえんだよチクシヨオオツ！

「つんでれええるがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」

わけのわからない事を叫びながら重力に任せ、ひたすら落下する俺。やがて俺の背中与母なる大地は激しく接吻を交わしたのだった……。し、信じます……。とりあえず魔法信じるからもうやめてえーっ！

### 第3話 戦国系魔法少女（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回二回目ですねっ」

葵「お兄ちゃんお兄ちゃん！ 今回葵の出番がないよ!？」

圭介「いや、仕方ないだろ。一応出会いなんだし、重要部分だぞ」

葵「でもでも葵の出番がない！ お兄ちゃんとのラブストーリーなのにー!」

圭介「この小説はそういう話じゃありません!」

葵「あわわっ！ お、お兄ちゃんが新キャラ寝取られちゃっつよ……」

圭介「俺は誰のものでもねえわ!」

## 第4話 ところにいる理由、そしてツツパリ少女

「あ、ああ……ぐふっ……」

燃え尽きたぜ……何もかも真っ白にな。

子供達がきゃっきゃうふふと遊びまくる、平和な公園。

その公園に通常、クレーターが出来る事はないハズだ。

まあ意図的に穴を掘ったとかならわかるが、俺が言っているのは、本当に何かが落下した事によって出来たクレーターの事である。

そう、普通公園にそんなクレーターが出来るハズがない。

でも出来ちゃったんですよねー。

「もきゅーっ！　だ、大丈夫なのですか!？」

慌てふためきながら俺に寄ってくる木下。

ありがとう俺なんかを心配してくれて……でもね、一つだけ言いたい事がある。

それを今からハッキリ言わせてもらう。それはだなあ……！

「てめえのせいだろアホ！」

「ううっ！　申し訳ないです……ッ、実は拙者魔法は苦手です……」

…っ

なるほど、要するに有り余るパワーをコントロールできないのか。そういうわけで自分が飛ぶつもりだったけど、俺がぶっ飛んじやっただけね。

……っつて、オイ待て待て待て待てえっ！

「全然笑える話じゃねえよ！ もし俺が丈夫じゃなかったら死んでたわ！」

今だけは自分のタフさに感謝するよ。

ありがとうお母様、貴女が俺をこんな丈夫な身体に生んでおかげで俺は今も生きていますよ！

というわけでお仕事頑張ってくれっ、お母様に敬礼。

「もきゆう、本当に申し訳ないのです……っ」

「ま、まあわざとじゃねえんだし。もういいよ気にしなくて、あと魔法の存在も信じてやる」

「ほ、ホントなのですか!？」

「あのなあ、いきなり高度何千mもぶっ飛ばされりゃあ、信じるしかねえだろうが」

それで生きている俺も不思議だけど、足踏みしただけで高高度までぶっ飛ばすその力、絶対普通じゃない。というわけでコイツのいう魔法の存在を信じる事にした。

……というより、信じざるを得なかったのだろう。

だって今のをどうやって科学的に説明しろと？

足踏みしただけで普通高高度まで飛ばせるか？

まあ、頭のいい人なら疑問に思う事ができるかもしれない。だが残念な事に俺はおバカなのだ。

疑問に思ったとしても、それを科学的に説明できない……クツ、無念すぎる！

「ありがとうございます！」

「はあ……でも魔法とかもう二度と人前では使っくんじゃねえぞ」

「バシてまずいとかそれ以前に危険すぎる。」

「下手すりゃ木下の失敗魔法のせいで死人が出るぞ。」

「はい！ 標的はちゃんと選んで魔法を使います！ というか拙者は基本的にこの刀で戦うのです！」

「標的と戦うって何ですか！ もしかして追っかけっこモドキでもやっちゃってんのか？」

「似たような事はしてるのですよ？ それ+護衛任務なのです」

「護衛って……お前一人じゃん」

「どう見ても守るべき対象がいらないと思うんだが。」

「それにもしその対象がいたとしたら、コイツ護衛対象から離れていいの？」

「ていうか何から何を守るんだよ。あと戦うって……もしかしてコイツ、可愛い顔して極道？」

「う、ウソだよね……もし木下が極道なら泣いて土下座しますよ。」

「もきゅう、護衛対象ならいるのですよ。拙者の前に」

「お前の前にいるって俺かよ。言っとくけど、俺は人生一度も殺し屋に狙われた事はねえぞ」



まあ伊吹を狙っている野郎共に妬まれ、時々絡まれる事はあったが……。  
それも過去の思い出、今となっては懐かしいぜ。

「今まではなのです。でもこれからは危険かもしれないですよ」

「なんで？ ていうか魔法は使えるわ銃刀法思いつきり違反しているわ、しかも追いかけてここに俺の護衛ってお前何者なんだよ」

「話せば長くなるです……っ」

「いきなりシリアスモードかい！ もっと肩の力抜こうぜ!？」

「むう、でもホントに説明すれば長くなるのですよ?」

「ま、まあ出来るだけ手短にお願いします」

「……はいっ!」

そしてここから木下は、半ば夢物語というかブラックユーモアというか……。

とにかく危険な香りがブンブンしゃがる話をし始めたのだ。

世界とはどうも一つではないらしい。

俺達がいる世界が“この世界”だとしたら、木下は“レムリア”という世界から来たらしいのだ。

その世界には、魔法がごく当たり前のよう存在し、でも科学技術はこちらの世界と大差ないまでに進歩しているという、とてもシュールな世界なのだそうだ。

レムリアではかつて二つの大国が睨み合っていた。

一つは私有財産等を一切認めない総有主義を掲げていた“サヴィエト総有主義共和国連邦”。

そして総有主義の敵である資本主義を掲げた“ドメリカ合衆国”。

二国の冷たき争いは数十年にも及んだと言う……もうこの時点で色々危ないよね。

しかし20年ほど前、貧困により苦しんでいた国民がついに蜂起し、サヴィエトは崩壊。指導者だった“アリーナ・ウラジミールヴナ・レナ”は失脚、それどころか封印されたのだ。

こうしてサヴィエトは国名を“ロジーナ連邦”とし、国民の生活も少しはマシになったらしい。

しかしつい最近、何者かがレナナの封印を解き、解き放たれたレナナはかつての部下と一緒に“この世界に”漂着し、“サヴィエト亡命政府”を樹立させた。

そして“この世界”の人間をうまくコントロールして魔法使い（サヴィエト側称号魔術師）化し、赤軍を編成した。

赤軍は異世界で戦力を蓄え、ロジーナの現政権を打倒しようとしている。

かつてロジーナは帝政だったらしい。その時みたいに倒されるわけにはいかないと、現政権はこの世界にて力を付けつつあるサヴィエト亡命政府を打倒、関係者の拘束を決定。

その結果特殊部隊である“アルファ隊”が結成された。

アルファ隊の任務は関係者拘束と戦闘である。

木下は魔法は苦手だが、剣技が素晴らしい事。元を辿れば御先祖様はこの世界の住人という事で、精鋭アルファ隊に所属する事になったのだ……。

「って思いつきり東西冷戦じゃなイカ！」

「トーザイレセン？ 南北冷戦なのですよ？」

「そつちじゃ南北かもしれねえけど、こつちじゃ東西なの！」

いくら歴史苦手と言っても冷戦くらいなら分かるわ。というか冷戦とか世界の常識だろう。

しかもサヴィエトにドメリカ？

どっかで聞いた事ある国名ばっかじゃねえか！

新鮮なのは魔法があるって事、レムリアって世界の名前、サヴィエトの独裁者が女性って事だけだ。

「とにかく！ 拙者達アルファ隊は、レニナの暴走を止めるのがお仕事なのです！」

「マジかよ……ってか向こうの世界でもお前が秀吉の子孫だって事、公認なんだな」

「秀吉とは言われなくても、キノシタ・サムライとは言われてるのですよ」

……未だに秀吉の子孫だつて事に関しては、胡散臭く聞こえる。いや、ぶつちやけ言えば全部胡散臭いけど。

でも簡単に信じちゃう異世界人も異世界人だよね。

ていうか、コイツが秀吉の子孫だつて設定本当にいるのか？

「あれ？ でもなんでレニナつてのを捕えるのに、俺を護衛する必要あるんだ？」

「にゅふふ、正確には藤島家の人間全員の護衛なのですけどね」

「それ無理だわ、親父とお袋家にいないし」

「大丈夫っ！ そつちにもちゃんとアルファ隊の人が向かってるハズなのです！ 拙者が護衛するのは藤島圭介さんとその妹さんなのです」

「仕事早えなオイ！ つかマジで俺らを護衛する理由は何！？」

ただでさえ先程の意味不明かつ長い説明のせいで混乱してるってのに。

護衛とかますます意味不明だよ。

「それも話せば長くなるのですが」

と、彼女が一番気になる事を説明しかけたその時であった。

「あー！ いたいたいやがったわね圭介！」

輝くように美しい銀髪のショート、風に靡く黒リボン。紅く染まったツンとした瞳、とつてもキュートな八重歯。

151cm（本人談）という、小柄なボディがその可愛さをさらに引き立てている。

そんな極上の美少女である伊吹が、公園の入り口付近に立っていた。

俺を探し回っていたせいか彼女の息が切れている、よっぽど必死に探してたんだな。

「よお伊吹、なんだか久々に感じるぜ」

「それはこっちのセリフよ！ あんた今まで何やってたのよ？」

「いやあ、トラックに撥ねられるわ高高度まで上昇して落下するわ、とにかくいい事なかったね！」

「自業自得でしょ！ でもっ……あの親子感謝していたわよ」

伊吹の表情が一気に柔らかくなった。

そうかあ、あの助けた女の子とその母親は喜んでいたのか。身体を張った甲斐があったぜ。やっぱりいい事した後は気分がいいな。

……まあそのせいで死にそうな目に遭いましたけどね。

「そっか、でもごめんな心配かけて」

「っ……あ、あんたどーせ身体丈夫だしっ、心配なんて別に……っ」

そうは言っているが、伊吹はやや俯きながら顔を赤く染めている。  
これってアレかな、照れてるのかな？  
ツツパリ伊吹ちゃんもたま〜に可愛いから困る。

「あれっ？　　そういえば圭介、その子誰？」

「コイツ？　　倒れていたらたまたま遭遇した電波だけど？」

「電波じゃないのです！　　拙者は木下暮葉なのです」

「っで、圭介っ。　　どういう関係？」

何故それを拳を握りしめながら笑顔で聞いてくる！

なんだかそれ滅茶苦茶怖えよっ！

ヤンデレ程じゃないにしろ十分恐怖を感じるレベルだ！

「だからさっき出会った電波だっつて」

「もきゅー！　　電波じゃないのです！」

「……………っ。　　な、ならいいわ」

「あ？」

「……………っ」

なに不機嫌になってるんだろう伊吹のヤツ。

まあ不機嫌なのはいつもの事だけどさ、コイツも女の子なんだから  
出来れば笑顔でいて欲しい。

そうそう、この戦国系魔法少女の電波木下さんのようにようにな。

それにしても、なんだかあのトラックに轢かれてから、ありえねえ  
事ばかり起っている気がする。

ていつかさろそろ帰ってゲームしたいっす……………。

#### 第4話 「ここにいる理由、そしてツツパリ少女（後書き）」

後書きトークコーナー

大吾「ところで作者の前作の主人公の名前は藤沢巧」

圭介「誰だよそれ……っ」

大吾「まあ知ってる人は知ってるさ。で、お前は圭介だ」

圭介「その藤沢って人と俺がどうしたんだよ？」

大吾「巧と圭介。漢字を変えると拓海と啓介……つまり、二人はライバルだったのだああっ！」

圭介「な、なんだって……っ!?」

大吾「というわけで、この関係性から考えるに次回作の主人公の名前は、漢字まではわからないけど、多分りょうすけという名前だ！」

圭介「……つか、この作者来年受験生だよな？ まだ書くつもりなのかな？」

大吾「次回作は頭文字H！ HはヘンタイのHだ……ッ」

圭介「マジかよ!? すっごくムフフな臭いがするぜ……っ！」

伊吹「あんたらデマ流すなあ〜！」



頭文字Hなんてそんな……タイトル的に危なっかしいのでやりません！

## 第5話 こんな序盤にして究極の選択！

それから数十分後の事である。既に空は茜色に染まっていた。

あのトンデモ戦国系魔法電波少女。暮葉に、どうして俺を護衛するかを聞きだそうとしたんだ。

ところが途中で警察が現れ、一目散に逃走していった。

まあ普通刀持つてる人がいたら捕まえるよね。

その為、どういっわけなのかサツパリわからず現在に至る。

現在、我が藤島家の前。今から伊吹と別れる所である。

「じゃあ、また今度な」

「ふんっ！ か、帰るなら早く帰りなさいよ！」

「……………」

相変わらずツツパリな伊吹ちゃんだ。

デレたらツンデレに進化するが、やっぱり伊吹はツツパリのままか。はあ、いっその事デレねえかな。

……と、言いつつも別に伊吹に恋愛感情があるわけでもなく、実際そうならどうなるかなんて俺にはわからない。まずそんな事はないとは思っけど。

「な、なにジロジロ見てるのよ……っ、寂しいの？」

「違っつすよ、じゃあな」

「あっ…………っ、うんっ」

何故か急に気を落とす伊吹……ま、まさか伊吹にもとうとうデレ期が！

……んなわけないか。大体さつきそれはないって思ったばかりだろ。さて、予想外の出来事でいつもより遅くなっただし、帰ったらきつと葵がいるだろうな。

とりあえず今日の晩御飯はなんだろう。ウミケムシ焼きだったら泣きますよ俺。

そんな事を思いつつ俺は家の扉を開け、myホームへと足を踏み入れた……その時！

「お兄ちゃんっ！」

「ぐはあっ!？」

その時、葵がいきなり俺の懐へと飛び込んできたのだ。

クソッ、俺だからよかったけど、これ普通の人なら大変な事になってるぞ。

この時ばかりは自分のタフさに感謝するよ。

「お前！ 今の攻撃は俺じゃなかったら耐えられねえよ！」

「お兄ちゃん以外にはやらないもん！ 愛情表現なんだよ！」

「そんな特別扱いクソも嬉しくねえし、そんな愛情はいらねえ！」

「それよりどういう事なの！ お兄ちゃんを探し求めて、うちに女の子が上がり込んで来たんだよ！」

「マジで！？ 女の子の特徴は！？ できればスリーサイズをお願いします！」

はははっ、ついに俺にもモテ期が到来したか！

今までの恋愛は0勝3敗0分の惨敗、理由は大抵相手に彼氏がいたからだ。

だが今回は違う。あえて向こうからいたいけな美少女が来てくれたのだ。

美少女かどうかはまだ顔見ていないからわからないが……美少女だという方向に賭けます！

とにかく一緒に一度のチャンス、俺はこのチャンスを逃さない。絶対家にやってきた彼女を攻略してみせますわよ！

「どうして、お兄ちゃんはいつも話がえっちな方向に行くの！」

「許せ葵……男ほど可哀想な生物はいねえんだよ」

「た、大変だね……って違う！ それより早く来てよ！」

「うおっ！ いででっ！ 手首引っ張るなって、軽くトラックに撥ねられてきたんだから！」

「ええっ！？ だ、大丈夫なの！？」

俺がトラックに轢かれたというと、葵の顔が一気に青ざめた。

なるほど、今度から葵を黙らせる為にトラックネタを引っ張るとしよう。

最も今日リアルに引かれた俺としては、正直もう二度と経験したくない出来事だが……。

「おう！ 骨も折れてないし、全身元気だぜ！」

「骨は平気でも下半身は無事なの！？ 葵すごく心配だよ！」

「…………お前も十分変態だよな」

「えへへ、褒められた」

「褒めてねえよバカ妹が！」

まったく、どいつもこいつも変態だから困る。

俺も地味にそうかもしれないねえ、少なくとも葵ほどじゃねえ。

とりあえず葵の暴走は俺が止め、俺の暴走を伊吹が止める……………いつのまにかこういう図が完成しているのであった。

「それより早く！ お兄ちゃんの知り合いかもしれないんだよ！」

これは藤島家の危機だよ！」

「危機に陥っているのはお前だけだろ……………まったく、仕方ねえな」

どこのどいつか知らないが、とりあえず葵がしつこいし会いますか。

……………ていうか会いたいです。だって相手は女の子らしいぜ？

男の俺としては夢がひろがりんぐだよ！

しかし俺のその幻想はリビングに入った瞬間、瞬く間にぶち殺されたのであった。

何故なら、リビングにいた俺を求めてやってきたという少女は……………。

「あ、お帰りなさいなのです」

「なんですかその不気味な奥様キャラは！？　つかてめえ一体我が家でなにやってんだ！？」

何故か木下暮葉がリビングでお茶を飲み、寛いでいたのだ。しかも床には日本刀を置いてある。

警察から逃げ切れたんだな。でも将来指名手配とかされそうだな。あと、こんな意味不明な秀吉の子孫気取りのヘンテコ魔法使いかつ、電波娘が押し掛けてきたって。

……あんまり嬉しくねえぞ。てか今はそんな事どうでもいい。まずなんでコイツが我が家にいる？

「なにつて、今日から拙者この家でお世話になるのですよ？」

「……え〜とと葵さん？　意味不明っすね」

「さつきから何度言ってもこの調子なんだよ。お兄ちゃんなんとか言つてよ！」

「お、おう……」

とりあえずまずは事情を聞きだそうか。

いきなりこの家で寝泊まりするといくらいだ。それも、彼女と俺はさつき会っただけで、それほど親密な仲だというわけではない。むしろ俺としてはあまり関わりたくない……。

だって、日本刀持つてるし若干オカルトに走ってるっぽいんだぜ？でも本当に何故、その程度の仲でしかないのに俺の家に泊まるつもりなんだろうか。

何かしらの理由はあるハズだ。つか理由聞かなかつたら何も始ま

らないよね。

「んで、お前はなんだって急にうちに泊まる事にしたんだ？」

「実は拙者、リーマンショックのせいで……っ」

「ウソつけ！ お前にリーマンショックなんて関係ねーだろ！」

「つかどうして異世界から来た魔法少女（？）が、リーマンショックだなんて言葉知ってるんだよ。色々とおかしいだろうが。」

「はい、ウソなのです」

「アツサリ認めやがった！ ……つか、本当の理由はなんだよ」

「はい、これ」

「ああ？ ……お、親父から？」

突然と木下から手渡された謎の手紙。

送ってきた人の名前は藤島浩介<sup>ふじしまこうすけ</sup>、俺の親父の名前だ。

親父から俺宛ての手紙。開封して中身を見ると、そこには我が目を疑う文章が記されていた。

“ 拝啓、新緑が目にしみて青葉若葉のさわやかな季節、風薫る五月となりました。圭介と葵の二人にはますますご清祥のことと存じます。さて、二人の下に一人の女の子がやってきたと思います。その子は知り合いに預かってほしいと頼まれたので、暫くお二人と共

に仲良く生活してほしいのであります。急な事で困惑されているとは思いますが、どうかご理解とご協力をお願いします。それでは圭介も葵も、そして暮葉ちゃんも自分は滅多に皆と顔を合わせる事ができないのでありますが、どうかお元気にお過ごしください。敬具”

「ふ……ふ、ふざけんじゃねえぞあのクソ親父い〜！」

しかもなんですかこの気持ちの悪い敬語！？

今までうちの親父が俺らに対して、敬語を使ってきた事があるだろうか。

新鮮だけどなんだかこの場合気持ち悪いぜ。つか誰だよ知り合いて！

親父、テメエは浮気かなんかしてんのか。お袋にチクリますよコノヤロー！

「と、いうわけで拙者は家庭の事情で、こちらでお世話になる事になったわけなのです」

えへつと言った感じに笑顔を浮かべる木下さん。

お前なあ、笑顔なのはよろしいがどこか腹黒さを感じるぞ。

特にお前の事を、少しだけ知っている俺にはな。

「か、家庭の事情って……この手紙本物なんだよね？」

「はい！」

すげえよ木下さん、すっごい嘘ついてるのにその太陽のような笑顔……もういろいろすげえ。



「お、お父さんに頼まれちゃったし、家庭の事情じゃ仕方ないよね……?」

「ええっ、いいのですか!？」

「ちよっ！ 葵、それマジなセリフかよ!？」

「仕方ないよ……葵だって悩んだけど、でもお父さん命令だし家庭の事情らしいし……」

「そ、そりゃあ確かに言葉は綺麗だが、命令だよなこの手紙……」

でも事情をちよこっとな知っている俺としては、こんな手紙があっても納得できねえ！

ていうか木下って確か、アルファ隊とかわけのわからん組織に所属していたよな。

一体コイツの仲間様は親父になにをしゃがったんだ!？」

……き、気になる。けど聞いたらやっぱり負けだよな？

いやでも、子供が父親を心配するのは当然だと思いませんぜ。でも葵に聞かれると面倒だし、後でとことん聞いてやる。

「せ、拙者！ 勿論家事とか手伝います！ ですからその……お願  
いしますのです!」

「お兄ちゃん……っ」

えぐっと、これはアレですか。俺が決定しやがれて事ですか。

困ったぞ、この場合どういう選択をすればいいんだ？

選択肢は二つ、ふざけんな帰りやがれという選択。もう一つは好き

にしろという選択。

前者は前者で面倒、後者は何か後々色々巻き込まれそう……ああもうなんなんだこのエロゲー展開は！

面倒事を回避したいなら前者、木下を攻略するつもりなら後者。

だが俺はコイツを攻略する気にはなれない。でも前者を選択したら親父に超説教されるパターン……。

「……………」

「……………」

「……………」

やべえ！俺のせいでいつもは明るいリビングに沈黙の空気が漂っている！

……………お、おしつ。仕方ねえな。

親父に説教されるのは嫌だし、第一女の子を追い出すのも男としてどうかと。

大体木下の背後にはアルファ隊という、得体の知れない組織が……もし反抗してみる。

そんな場合には、俺は確実にアルファ隊という組織に……。

消される！

そんなBADEND嫌だよ、俺まだ死にたくねえよ。

まだPCにインスコすらしていないゲームがあるっていうのに。

……………だったら俺は、より安全そうなルートを選択するぜ！

「……す、好きにしる」

俺は一言、顔を逸らしながら彼女にそう言い放った。

「ほ、ホントなのですか!？」

「いや、仕方ねえだろ！ 流石に親父には反抗できねえし！」

あの親父普段は優しいが、逆らうとちょっと怖いんだよな……。まあその話はいずれするのでしょうか。

「にゅふふ……ありがとうございます！」

笑った、今コイツ絶対笑った。

太陽のような笑顔、しかし何故か裏を感じてしまう俺。

ああもう、選択ミスったか？

もし嫌なルートに入っていたらどうしようか。

「……………」

一方葵は木下居候を認めたハズなのにも何故か不機嫌そうであった。

……こうして我が家にトンデモナイ家族が一人、増えてしまったのであった……。

第5話 こんな序盤にして究極の選択！（後書き）

後書きトークコーナー！

小坂「圭くんなにやってるの？」

圭介「フツ、ギャルゲーだ！」

小坂「またあ？ 圭くんも好きだなあ〜」

圭介「当然、ちなみに戦国武将を攻略する腐女子向けゲーム売ってたぞ？」

小坂「ええ〜！ 戦国武将をそんなのに使わないで！」

\*\*\*一週間後\*\*\*

圭介「おはよう」

小坂「おはろー圭くん！」

圭介「あれ？ 小坂がゲームなんて珍しいな。なにやってんの？」

小坂「戦国BL！」

圭介「……オイッ！」

小坂「や、やばいなっ！ 伊達政宗イケメンだよっ！」

圭介「元の清潔だった小坂を返してくださいっ！」

「90%はゲームを紹介した圭介の責任である。」

## 第6話 才オカミさんとやらないか？

わけのわからん不思議な女の子、木下暮葉が居候を開始してから数時間後の事である。

まあ木下は予想通りハイテンションな子であった。

その為最初は不機嫌そうだった葵とも、いつのまにか仲良し小好しになっていた。

葵は『暮葉さん』と呼び、木下も葵の事を『葵さん』と呼んでいる。ちなみに木下は俺と同じ年らしい。つまり葵より一個上ということになる。

それなのに木下は敬語。意外と礼儀正しい子なのかな……と一瞬思ったが、それはナシだ。

それは一時間半前の出来事である。

「こ、これがPNPなのですかっ!？」

「そーだよ。ゲーム最高だよ」

「どうやって食べればおいしいのですか!？」

「PNPは食べ物じゃないんだよ!」

……スマン、木下はただのアホの子だった。

葵もアホだと思っていたが、木下はその上をゆく。

すげえよ……登場時からアホの子臭がしていたけどさ、まさかあそこまでとは……。

でもなんだかんだ言っつて、アイツと葵は短期間に仲良しになった。それはまあよかったと思うぜ。

一方の俺。木下から色々な事情は後で聞くとして、現在PCで……。

『に、兄さん……っ』

き、キタキタっ！

遂に俺は……まふゆちゃんとのあーんなシーンの所まで辿りついた！えっ、何をやっていやがるかですって？

俺は今“ねこシス”という18禁ゲーム、いわゆるエロゲーをプレイして……。

コラそこ、変態とか言っつな！高校生がエロゲー持ってて何が悪い！

いやいや、エロゲーだからってナメちゃダメなんですよ。

確かにタイトルは結構ふざけている、絵も超萌え系だ。しかし話は普通におもしろい……というか後半滅茶苦茶感動する。バカゲーランキングでも上位ながら、泣きゲーランキングでも上位という異例の名作なのだ。だいたいソフトってマジ神ゲー作るぜ。絵もむりこぶで超可愛いしな。

さて、やっとの思いで辿りついてまふゆちゃんとのシーン……き、期待だ！

……と思った、その時であった。

「けーすけ様！ 葵さんが呼んでるのですよ〜」

「キエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」

まさかの木下さん乱入、つーかどうして俺の部屋の場所を知っている。

ああそうか、葵だな。葵が教えやがったんだな。

つーか俺の事は様付けで呼ぶのね。なんでだろう……まあそれはいいとしてピンチだ。

とりあえず叫んだけどどうしよう……そ、そうだ。緊急回避！

確かこのボタン………よ、よし……緊急回避だ！

「もきゅ？ どうしたのです？」

「い、いやあなんでもない！ 発声練習だ！」

こんないたいけな女の子に、エロゲーやっていただなんてバレたら俺は……破滅だ！

……まあ緊急回避画面だから大丈夫だと思えますけど。

でも今の奇声は明らかにオカシイ。とにかく純粋な木下さんにバレないように！

「そ、それより葵の用ってなんだ？」

「はい、お使いに行つて欲しいらしいのです！」

「what's that？」

「もきゅ？ ですからお使いなのです」

コイツ本当に異世界人か？



確かに世界共通語だけどさ、どうして英語がわかるんだよ。  
中学時代から勉強している俺は、日常会話のレベル3にすら達して  
いないのに。

「そ、そうか……わかった。今下に行くからもう出ていってもいいぞ」

「つか出てってください！じゃねえと安心して部屋から出れません！あんなもの同じ男である大吾や重原ならいいけど、木下暮葉という女の子には絶対見せられない！」

「え、もしかしてけーすけ様、何かまずいことでもあったのです！？」

「ええっ！？ な、なんにもねえでございますよ！」

「つかかなに！随分と食い付いてきたな木下のヤツ！」

「ほ、ホントなのですか！？」

「なんにもなかったっすよ！」

「……な、ならいいのですけど……」

あぶねえ、危なく本当にあった事を追及される所だった。

木下は心配そうに俺を数秒ほど見つめた後、ゆっくりと下に降りていった。

えっと、助かったって事でいいんだよな？

とりあえず、今回は緊急回避を実装してくださったただいだいソフト様……ありがとう！

アハハウフフなシーンは帰ってからだな。

それにしても葵の奴、こんな時間にお使いって一体なんなんだ？

……と、いうわけで俺は財布を持って家を出ると、“マックスバリユエ”という日本全域に展開するスーパーマーケットに向かった。今日の晩御飯はカレー。まあ葵の事だ、外見は期待したら後悔するだろう。

そのカレーに使うハズのニンジンと玉ねぎ、そしてジャガイモがないのだという。

オイオイ、重要なもの殆どないじゃねえか。というわけで俺が買い物に行くことになったのだ。

「こんな夜中に買い物って……めんどくせえ」

……実は最初、木下も一緒に行くとか仰いやがってたのだ。

だが普通に考えてみる。和服&日本刀姿の女の子を外に出せるか？一度はあの恰好のせいで警察に追われてたんだ、あんなの連れて行ったら俺まで不審者扱いだ。

とにかく、アイツには今後外出する時には日本刀を置いて行くよう、言っておかなければ。

あと洋服買ってあげたほうがよさそうだな。和服もいいんだけど流石にあの恰好で街を歩くと……。

間違いなく世間は白い目で俺達を見てくるはずだ。

……つか、やっとマックスバリユエに到着した。  
この紫色の建物も、何年も前からここにあるせいか見慣れたなあ。  
と思ったその時である。丁度出入り口から見覚えのある人物が、m  
yバックを提げて出てきたのだ。  
その子は銀髪のショートヘアで、ツンとした紅い瞳とか八重歯が目  
立つ。なんとなく付けている黒いリボンがとってもお似合いな、そ  
んな超がつくほどの極上の美少女だ。

「……………あつ」

「あつ……………」

どうやら、ツツパリ伊吹ちゃんは買い物帰りのようであった。

それから10分後、買い物が終わり俺は自宅に帰ろうとしていた。  
ただど行きとは違い、帰りの道にはツツパリ伊吹ちゃんの姿が隣に  
ある。

何故でしょうか、伊吹は俺について来ているのだ。

「わ、私は別に圭介がいたからついてきたわけじゃないんだからっ」

と、というのが彼女の言訳らしい。

まあ、伊吹はツンデレじゃなくてツンツン突っぱね、略してツツパ  
リなのでデレには期待しない。  
ツツパリになってしまったのにも色々事情はあるのだが、あまり触  
れたくもないし説明はしないでおく。

「ところで夕方のあの子、結局なんだったの？」

さて困った、木下が我が家に押し掛けてきた事言うべきなのかな？  
伊吹は何故か学校がある日のみ、頼んでもいないのに俺を起こしに  
来るのだ。

ということはだな、金曜日の朝にバレてしまいかもしれない……。

「ん？ どうしたの圭介？」

「えっ？ いや、なんでもねえけどさ」

「ならいいけど……」

やけに今日は複雑そうな表情をするなあ、何が原因だ？  
コイツがこういう顔をちよっと心配になる……。

「お前こそどうしたんだよ。今日は機嫌が悪かったり元気がなかつ  
たりだけど」

「わ、私もなんでもないわよっ」

「だったら別にいいんだけどよ……」

だったらせめて少しでもいいから笑ってくれと俺も安心できる。  
とにかく伊吹の複雑そうな顔を見るとすげえ心配になる。  
怒ってるんならまだしも、マジでそっという表情は……。

「……………藤島……………藤島圭介だな」

「ああ？」

その時、俺は人通りの少ない夜道で突然誰かに呼びとめられた。よくわからん、でも背を向けるのは危険だよな。

……というわけで俺は振り向くが、そこにいたのは帽子にコートという、この季節としては少々厚着すぎる恰好をしている……。

「ぎゅふ、ぎゅふふ、ぎゅふるるる〜」

そこにいたのは……。

「ええっ！？ なんじゃこりゃ！？ ちょ、怖えっ！」

「けけけけ、圭介！ なによアレ！」

「知るかあっ！」

「ぎゅふるるるっ！ がおおおっ！」

なんとということでしょう。狼男、狼男が奇妙な笑い声をあげていたのです！

え〜っと何だ。どういう風にコメントすればいいんだ、このいきなりすぎる状況。

とりあえずだな……なんだこのありえない光景は！

どうせアレだ、アレは着ぐるみの変質者だ！

でも変質者が何で俺の名前を……ハッ！？

もшыコイツ……変質者な上にホモなのは！？

嫌だよ、こんなオオカミ野郎に掘られるだなんて……そんな結末絶

対嫌じゃ！

「お、おい変質者！ な、何の用だこらあ〜！」

「圭介全然迫力ないわよ！」

「だって、初対面のヤツに名前言われたら怖えだろ！」

あたりまえだ。これで恐怖を感じないヤツは、相当の天然さんだろ  
う。

「大丈夫怖くないよ怖くないよ」

狼男はそう言う、だけどそれってどう考えても不審者のセリフだよ  
ね。

そして、そんなんで恐怖心がなくなると思ったら大間違い。

「怖いわっ！」

「ぐんぬづづううううううっ！」

「ええええええええええっ！？」「」

その時、狼男が脱皮した。

もつとわかりやすい表現で言おう。いきなり筋肉ムキムキになって  
上半身が裸になったのだ。  
なんとということでしょう。毛で覆われていながら、胸板や腹筋が見  
事に目立っている。

すごいよオオカミさん。あなたすごい筋肉！でもね……冷静に考え

てこの状況おかしくない？  
そういうわけで俺と伊吹は、ありえない光景を目の当たりにし、同じタイミングで叫んでいた。

「悪いが藤島圭介、狩らせてもらおう！」

「お、俺の童貞はもしかして……オオカミさんに奪われちゃうんですか!？」

「違うわ！　そういう意味じゃねえ……とりあえず狩らせてもらおうぞ！」

なんか怖え、爪立ててるし物凄い殺意を感じるんだが……。

よくわからないけど、こういう場合って警察に通報すべきなのかな？  
それとも猟友会、いやいや保健所、待て自衛隊のほうがいいかな？  
でも今更通報しても遅いか。やべえっすよこれ、まさかのチェック  
メイト？

そもそも事情が分かるヤツ、今すぐ俺の目の前に来い。  
そしてどうしてこうなったか説明してくれ！

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！」

き、来たあああああ〜！

オオカミさんが獲物〃俺を狙ってダッシュ。これはいかん、俺大ピンチや！

「はあっ！」

もうダメだと思った……その時。

オオカミさんの攻撃は以外にも、伊吹によって防がれた。

……俺の目の前には角材を持った伊吹が立っていたのだ。なんとも勇ましい、そして俺情けねえ。

おそらく角材はそのゴミ箱に入っていたものだろう。

伊吹は罅迫り合いの構えだ。流石は剣道部、今や部長を抜いて一番の実力の持ち主。

伊吹は剣道の技を使えば滅茶苦茶強い、多分不良3人くらいならアツサリであろう。

「がおおっ!?!」

「何びびってるのよ、圭介」

「ちょ、伊吹っ!?!」

助けてくれたのはありがたい。だが何やってるんだコイツは。

明らかに相手は危ないヤツだろ。剣道の試合の相手じゃねえつてのに……ッ!

「私、竹刀以外で剣道やった事ないのにつ。早く構えなさいよ!」

「う、うるせえ! ちょつと攻撃されたくらいだったら俺は平気なんだから、別にお前が出てこなくても!」

そつだよ、トラックに轢かれても無事な俺だぜ?

オオカミさんに攻撃されたつて、一撃くらいなら多分耐えられるハズだ。

だから伊吹が身を危険に晒してまで、出てくる必要はなかったんだ。



「ぎゅふるっ！ まさかこの俺の拳を……女子おんなが受け止めようとはな！」

「っ！ あ、あんた何者よ！」

「ぎゅふふっ！ 俺の名前はヴォルコラク、魔族なんだそお〜ぎゅふるる！」

「ありえねえだろ！ つーかテメエ、さっさとその拳引いて伊吹から離れる！」

「いいだろう……ただし、藤島圭介。貴様を狩ればの話だ！」

「いや、意味がわかんねーよ！」

大体なんで俺達、こんなオオカミ野郎に狙われてんの？

つか狩るって……殺す的な意味で……なのか？

まさか性的な意味だったら……嫌だよ！

とにかく、俺はこんなヤツになんか狩られたくねえ。そんでもって伊吹を傷つけたくねえ。

「そうか、事情は後で話そう……だが従わないのであれば俺も手段を選ばん……がるっ！」

「くっ……ヤッ！」

その時、オオカミ野郎は伊吹から角材を奪いやがった。

伊吹は女の子の中でも握力のあるほうらしく、さっきの角材だってしっかりと握っていた。

あれが竹刀ならもつとちゃんと握れていただろうが、それでも角材

はしっかりと握られていた。

それなのに、あのオオカミ野郎は軽々と角材を伊吹の両手から抜き取ったのだ。己の腕力のみで。

「がるるるっ！ 言う事を聞かなきゃこいつでこの女を撲殺する！」

「くっ……っ！」

伊吹は迷わず、ゴミ箱に入っていたもう一本の角材を手に取ることにする。

「がるるっ！ 遅いっ！」

「ううっ！」

だがしかし、ヴォルコラクはそれを阻止してしまう。

ヴォルクラクは角材を振りおろし、伊吹が手に取った角材を無理やり地面に叩き落とす。

しかもその時の衝撃のせいか、伊吹は右手首を痛めてしまったようだ。

見ているのが辛い、苦しそうな表情で手首を押さえている。

とても痛そうに……伊吹が……。

「ぎゅふふっ、魔族ナメてんじゃねえぞお？ ぎゅふるっ」

……あの野郎オッ。

どうしてこうなったかよくわかんねえけど……伊吹を傷つけやがって。

「伊吹！ …… チツ、てんめえっ！」

俺はゆっくりと拳を構える。

拳を握った時にパキパキと、指の関節が鳴る音が響いた。相手は奇抜だけど、殴り合いなんて久しぶりだな……。

「ぎゅふる？ なんだあやる気かあ？」

「け、けい…… すけっ？」

「俺だったら好きにすればいいだろ…… けどな、伊吹には手え出すんじゃねえよ！」

久々に心の底から怒りがこみ上げてくる。

「ぎゅふ、いい覚悟だ藤島圭介。いいだろう、一撃で沈める」

オオカミ野郎は角材を投げ捨て、俺と同じように拳を構えた。すげえ…… パキパキどころかバキバキって音がしやがった。

それにこの気迫、なんとなくだけどアイツ素人じゃねえかもしれねえ。

…… けどな、俺だつて とある事情により、喧嘩の経験は少し他の奴より多いんだ。

テメエと同じでズブの素人ってわけじゃねえんだよ。

それに俺は身体が丈夫だ。ちよつと打ったぐらいで倒れると思うなよ。

俺はそんな簡単には……。

「……やらねえっ！」

互いに地面を蹴り、間合いを詰めた……その時！

「がるううだあああううあおうああっ！」

「……えっ？」

突然オオカミ野郎の後ろを駆けた謎の影、断末魔の声をあげるオオカミ野郎。

その一瞬の出来事の直後

「がああああううああああ……」

オオカミ野郎の背中からは、血がまるで火山でも噴火したかのように噴射していた。

血飛沫がビチャビチャと路面に染み込み、血の匂いがあたりに漂つ。そして、オオカミ野郎は力尽きたように地面に倒れ込んだ……な、なんだよコレ、何が!?

「ふう……遅くなったのです、けーすけ様」

「お、おまつ!?!」

「あつ……あんたは……っ！」

そこには既に刀を鞘に入れ、先程とは違う真剣な表情をして立っている、木下暮葉の姿があった。

しかも斬られたオオカミ野郎。ありえねえ事にその遺体は次第に虹色に発行し、パキンと割れるような音がした後小さな粉末状の光となり、やがて消滅していったのだ。

……ありえねえだろ。とりあえず、誰か説明してくれえっ！

第6話 才オカミさんとやらないか？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「やあ、遅くなった！」

重原「いつも通り0時に更新しようと思ったら、作者がぶっ倒れちゃったらしいからね」

圭介「全く、たかがちょっと歩いたくらいでダウンとか、どんなひ弱な作者だよ！」

重原「まあまあ、作者だって人間なんだからそれくらいにしておこうよ。それに圭介だって大きなミスくらいあるでしょ？」

圭介「えっ？俺まで作中で重大ミス犯しちゃうの？」

重原「それはネタバレだから言えないね。とにかく人生何があるかわからないものなんだよ」

## 第7話 藤島家の秘密！？

あれから数分後、俺達は近くの公園に移動した。そこで木下は色々説明してくれるらしい。

ちなみに伊吹も一緒だ。そりゃ当然、あんなものを見たら興味が沸くだろう。

あと伊吹の手首は大したことがない。

冷やして安静にして、帰ってから手当てすれば特に問題のないレベルだ。本当によかったですぜ。

現在俺と伊吹の前に木下が立ち、上から見るとトライアングル陣形という状態だ。

まず木下が伊吹に自分の事や、自分がやってきた世界の事、そして今ここで起っている事を説明する。

当然伊吹は困惑した。あたりまえだ、俺だって最初は信じられなかった。

……でも伊吹は案外信じるのが早い方であった。

と、言うのもさつきあんな事があったからであろう。

狼男に襲われ、その狼男は木下に斬られ、しかもその死体は不可解な消滅の仕方をしたのだから。

「圭介、あなたは……知ってたの？」

「えっ？ まあ一応？」

正直信じたくなかったけどな。

でも、魔法とかいうわけのわからねえ能力でぶっ飛ばされりゃあね。誰だって信じますよ。嫌でも信じざるを得なくなってしまうよ。

「それで、木下さんは」

「暮葉でいいのですよ!」

「じゃ、じゃあ暮葉はなんで圭介に付きまとってるの?」

突っ込み所そこかいツツパリ伊吹ちゃん。

まあ俺も気になっていた所だ。何故木下が俺の一族を護衛すると言  
うのか。

何故俺の家によくわからん手を使って居候することになったのか。

「それは……むかーしむかしのことなのです」

「なんか昔話になっちゃってるわよ」

「木下、手短にお願いな」

「はいなのです! それとけーすけ様も暮葉でいいのですよ?」

「ええっ? で、でも」

いきなり女の子の名前を呼べつても……正直恥ずかしい話だ。

「気にしなくていいのです。今日から一緒に暮らす仲なのですから  
!」

ああコイツ、伊吹の前で禁句を言いやがった!

なんとか隠し通そうと陰ながら思っていた事を……。

まずい、俺の隣の伊吹がこっちを見て、笑顔で拳を握ってらっしや



る。

痛めていない左の拳を……こええ、こええぞ伊吹っ。

「圭介え？ 詳しく説明してもらおうかしらね？」

「ちよ〜と待った！ 俺のせいじゃねえぞ、コイツが勝手にだか  
らな！」

「どついう事かしらね、く・れ・は？」

伊吹が怒りの矛先を木下改め暮葉に変更した。

ふう……いや、まだ安心はできねえぞ。

そもそも伊吹さん、なんで俺の家に暮葉が居候しているからって、  
そんなに不機嫌なんだ？

「これから説明するのです。えっと……ロジーナは革命によってサ  
ヴィエトになる前は帝政国家だったのです。当然のように皇帝がい  
たのですが、革命によって帝政は倒され、皇室一家はほとんどレニ  
ナ率いる革命軍に殺されちゃったのです。しかしただ一人生き永ら  
えた男がいたのです。その名はロジーナ皇太子アレクサンドル様。  
なんとか生き永らえた彼はここへと渡り国籍を取得し名を変え、現  
在もその子孫が生きているのです。もきゅもきゅ」

……え〜と、どこから突っ込めばいいのやら。

しかも、めでたしめでたしみたいに話を終わらせているが、結構工  
グイ話してるよね。

「つーか革命前は帝政って。マジで異世界レムリアは……もしかして  
並行世界？」

いや、ありえねえだろ。魔法とかあるし。つーかこれって色々な意  
味で危ないネタじゃね？

しかもそれと俺を護衛する理由、全く関係ない気がするんだが……。

「そのどこが圭介に付きまとう理由になるのよ」

「伊吹さん鈍感なのですねっ」

「ちょ、鈍感って……私は圭介ほど鈍感じゃないわよ！」

「俺って鈍感なの!？」

「……っ、ふん」

伊吹はぷいっと俺から顔を逸らしてしまった……。

あのお。伊吹さんいい加減機嫌直してくれ。

とりあえず、色々わけのわからん事があって機嫌が悪いのもわかる。でも頼む、ここに居づらいから機嫌直してくれ。

で、暮葉は機嫌の悪い伊吹を放置し話を続ける。

「ほら、子孫って所に引つ掛からないのです?」

「はあ、子孫って……まさかアレクサンドルが俺の御先祖様とか、そんなありえねーラノベ的な設定じゃねえだろうな?」

「ぴんぽーん! 当たり前なのですけーすけ様っ」

「「……はいつ?」」

あまりに予想外すぎる暮葉の反応に、俺も伊吹も目を白黒させてしまっ。

神は言っている……。

オカシイと！

「いくらなんでもありえねえだろ！」

「そうよ！ 圭介はどう見ても日本人じゃん！」

「俺黒髪っすよ！？ 肌はフットゥーに黄色人種的っすよ！？」

ロジーナ人って絶対白人だよね。

確かに葵の肌は若干白いけどさ、俺はどう見ても日本人だ。

でもロジーナの皇太子様という、由緒正しいロジーナ人の子孫なら……俺は白人のハズだ！

「それは多分このあたりの人の特徴なのです。でもけーすけ様は確かに。アレクサンドル様の子孫様なのですよ」

「う、嘘だあああああぁぁぁっ！」

「ちよ、嘘つくならもうちよっとうまい嘘をつきなさいよ！」

「なのでしたら、何故さっきの妖怪さんはけーすけ様を襲ったと思います？」

「へ？」

……あ、そういえば。

アイツなんて言ってたっけ？

確か俺の事を狩るとかなんとか……うん、普通に考えておかしいね。俺にあんな意味不明かつメルヘンな、オオカミさんの知り合いなんていなかったはずだ。

「けーすけ様を捕まえようとしていたのですよね？」

「まあ……」

「そ、そうよね」

「それは何故だと思います？」

「知るかつ！」

考えてもどうせわからない、ならば早い話最初から知るかと言っておけばok。

どうせぶっ飛んだ回答だろうが、暮葉が何か答えっぽいものを喋ってくれるだろう。

「あれは多分、サヴィエト亡命政府所属の者だと思うのです。サヴィエト亡命政府は拙者らロジーナの現政権と同じ時期に、何故かアレクサンドル様の子孫の存命を確認したのです。そしてどういう思惑かわからないのですけど、その子孫の中でも一番若い男かつアレクサンドル様の血が濃い、けーすけ様の身柄を狙っているのです」

「……一番血い濃い俺がなんで日本人の見た目してるんだ？」

そうそう、そこからしてまず胡散臭い。

だってねえ、確かに襲われたけど俺どう見ても見た目は日本人だし。

何世か前まで外国人、それも異世界人でしてなんて思えない。信じろっつていうほうが難しいぜ。

「そこはまああよくわからないのです……もきゆう。でもとにかくこれは事実なのです。そして拙者達アルファ隊の目的は、現在藤島を名乗るアレクサンドル様の直系の子孫を守る。もつと厳密に言えば最も血が濃くて、連中のリストにも登録されてしまったけーすけ様を……お守りする事なのです！」

「ありえねえ……けど」

作り話にしては出来過ぎている。確かに俺達はそのわけのわからない狼男に襲撃された。

あの狼男は俺を狩ると言っていた。そして死体の消滅の仕方、アレは普通じゃねえ。

正直幻覚でも見ているかのようにだった。でもおかしいはその幻覚っぽいものを今日一中見ている事。

もしかして暮葉の言っている事って……ホントなんですかい？

とにかく、この件に関しては……。

「とりあえず考えるのが面倒になってきた、もうそれ事実って事でもいいや！」

キラッ！

俺はそんな事を我ながら素晴らしい笑顔で言い放ちました。

「ちよっ！ 圭介、考えるのをやめたらダメよ！」

「いいだろ別に？ 第一さ、二次元でもねえのにいきなりホントの事ですって、ワケわかんねえ事言われても納得できますか？」

「そ、それは……確かに出来ないけど……でもっ！」

「とにかくもう考えるのが面倒だから。暮葉、勝手に俺達信じましたって事にしてもいいよ」

なんて投げやりでしょう。

でも考えるのが面倒になったのは事実だ。

こんなシリアスっぽい話長々と聞いてられますか、俺はシリアス苦手なんだぞ。

こんな感じでとりあえず信じる事にした俺、その事に暮葉は喜んでいる様子だ。

「ほ、ほんとなのですか!？」

「ああ、だからもう長々とした説明はしなくていいぞ」

正直聞くのが疲れました、ハイ。

二次元ならまだしも現実<sup>リアル</sup>じゃ理解不能っす、あんなメルヘンなお話……。

「それじゃあ！ 今日からけーすけ様をしっかりとお守りしますの  
で、家でもよろしくお願いしますなのです!」

「ちよーーーっつと待ったあっ！」

「どわあっ!」

「もきゅっ!?!」

その時、伊吹が怪獣のように怒声をあげた。  
な、なんだ。コイツ一体どうしたんだ?  
なにをそんな……怒ってらっしゃるんですの!

「ど、どどど、同棲はいけないと思う!」

「もきゅ? なんぞなんです?」

「だ、だって圭介だよ? 圭介は変態なのよ、そんな変態と一緒にいたら暮葉がその……い、いつ圭介の餌にされるか……っ」

「しねえよ! 勝手に決めつけてんじゃねえっすよ!」

「そうなのですよ。それに葵さんもいるのですから、同棲じゃなくて同居なのです」

そうそう、うちのは葵がいるんだ。

確かに俺もいきなり女の子が一人増えて非常にドキドキしているんだが……ま、まあそういう事もあるし、伊吹とだって何度か一緒に寝た……もちろんフツーだぞ。やましい意味じゃねえし子供の頃の話だ。

だけどそういう事はあったんだ。だから女の子に対する耐性は少しあるというか……。

とにかくだ、ちよつとの事で自棄にはならねえ。

それに葵もいるから二人きりじゃねえし、少しは安全じゃないか!

「それに一緒に住んでないと、もしけーすけ様が寝込みを襲われたら……」

「エエツ!? ね、寝込み!？」

「大丈夫なのです! けーすけ様はラッキーな事に見た目は普通のこの国の人の見た目なのです。連中もけーすけ様の外見を認識していませんのでし、拙者だつて最初はけーすけ様だとは思わなかったのですよ。それにやつらはけーすけ様の居場所。古宇坂つて場所のどこかにいるとしか認識してないのですし、寝込みを襲われる可能性はほぼ0なのです。ただ念の為に出来るだけけーすけ様の傍にいるようにと上の命令があつたのです」

「そ、そういうわけか……」

それだつたら今日襲われたのはたまたま……。

やれやれ、俺つて今日は運勢悪かつたんですねえ。

んじゃあコイツの話がホントなら、ほぼお前が俺を護衛しに来る意味ないじゃん。

でも上の命令があ。そりや確かに裏切れんわ。

第一追いつ返す言葉が思いつかんし考えるのもメンドイ。あと寝込み襲われて拉致られるのも嫌だ……。

とりあえずコイツの居候、認めておきますか。

……でもただ一人、コイツの居候を認めぬ者がいた。

「と、とにかくダメなの! 圭介と一緒に住んだらダメなの!」

「もきゅ、何故なのです?」

「ダメなものはダメなの!」

「……あ、にゅふふふつ。さては伊吹さん、けーすけ様の事が



と、暮葉がそんなセリフを言いかけたその時。

「ち、違う！ 絶対違う！ ありえないから、絶対ありえないから！」

まるで完熟トマトのように顔を紅く染め、音響兵器のように街中に響く音量で伊吹は喋りまくったのだ。

え〜と。これはデレなのか？それとも本気でありえないのか？

う〜ん、前者だったら正直かなり嬉しい。でもなあツツパリ伊吹ちゃんだし……。

過度な期待はダメか。多分本当にありえねえんだろう。

まあ俺も正直幼馴染に対しては全然恋愛感情が沸かない。

好きだけさ、でもどうしてもただの幼馴染なんだよなあ。そうしか思えない不思議。

まあ、何かエロゲー的イベントがあったら、気持ちは変わるかもしれない。

それより……。

「〜っ」

この真っ赤に完熟した伊吹と。

「にゅふふっ」

何故か笑ってらっしゃる暮葉、この二人どうしよう？

……結局収集がついたのは15分後。  
その後。暮葉と一緒に帰宅したはいいが、あまりにも遅すぎた為、  
当然葵に説教されてしまった。

……こうして、人生で一番長く感じた俺の一日は、幕を閉じたのだ。

## 第7話 藤島家の秘密！？（後書き）

今回後書きトークコーナーはお休みします。

ね、ネタがなかったわけじゃないんだからね！

圭介「ツンデレきめえ……っ」

## 第8話 圭介と愉快な仲間達

朝起きたら……。

「おはろーお兄ちゃん！ 葵はこれから遊びに行ってくるんだよ、葵がいないからって悶え死んだらダメなんだよ！」

「……What for？」

「なんでって、だってお兄ちゃんは葵と赤い糸で……」

「はいその時点で間違ってます！ 血は繋がってるけど赤い糸では繋がってないから！」

妹がバタバタと慌てながら玄関に向かっていた……。

5月3日の朝、暮葉が我が家で居候を開始して一晩が経過した。

突然だが、my妹の葵がパジャマから私服に着替え、どこかへ出かけようというのだ。

なんでもmyフレンドの家に行くとか行かないとか。

つか、コイツも高校に入ってから一ヶ月経つけどさ。友達いたんだな。

てかそれを突っ込むのは流石に失礼か。葵の性格からしていないのはありえないと思う。

なんとって葵は小学生の頃、歌の文句にまである友達100人を見事達成してしまったすごい子なのだ。

一方の俺は……うう、聞かないでくれ！

「けどそれって暮葉と二人きりって事だよな？」

「ん、そだよ。大丈夫だよ、お兄ちゃんは葵一筋だもんね！」

「ちげーよ！」

「そうなの？ でもなんでお兄ちゃん彼女さんいないの？ 葵一筋だからだよな！」

「だ〜から違います！」

まあ確かに暮葉と一緒にだからって過ちは犯さんと思う。

だが突っ込み所はそこじゃない。なんでこいつの頭は彼女いない！自分へのフラグが立っていると考えてしまっただ？普通に考えてみる。妹ルートなんてありえないでしょ。

全国の妹を持つお兄ちゃんならわかるはずだ。妹って何故かそういう目で見れないんだよな。あら不思議である。だけど事実だから仕方がない。

それに暮葉と二人きりだからって心配なのは、俺が自棄になるんじゃないという事じゃない。

だって和服に日本刀持つてるわけわからない子だぞ。

オマケによくわからない世界から来たし、いきなり人の事アレクサンドルとかいう皇太子様の子孫だとか言ってくるし、オマケに魔法とかいうわけのわからない能力まで使いやがる。

そんなのと二人きりって……まあ確かに暮葉は可愛いほうだと思う。でも不思議すぎて不安要素しかねえよ！

「あつ、いけないそろそろ行かないと！ それじゃあ冷蔵庫にチャ  
ーハン入れてあるからチンして食べてね！」

「ま、まあ気を付けて行って来いよ」

「うん、お兄ちゃんも下着ドロには気を付けてね」

「なんで俺が下着ドロの標的に！？ おかしいだろ！」

「あははっ、いつてきまーす！」

「逃げやがったぞあのバカ妹！」

ボタンと勢いよくドアを閉める。葵は友達の家に行ったようだ。

葵の友達、新しい友達かな。中学の頃の葵の友達は何人か知ってるけど、まあとある事情により俺だけ滅茶苦茶嫌われていたけどね。それにしても葵、どんな友達作ったんだろうなあ。

出来れば紹介してほしいぜ。そして人生初後輩をゲットしたいぜ。

ああ〜いつか俺も「せーんぱいっ、お弁当作ってきましたよ」とか言われてみたいぜ！

そして上目遣いで「せんぱい……………っ、ボクじゃダメなんですか……………っ？」なんて言われた日には……………うう、死ねる。萌え死ねるぜ。

「げふんげふん！ いかん……………今の俺滅茶苦茶キモいぞ……………」

あ、そういえば暮葉はまだ寝てんのか？

あとある意味重要な話、暮葉の服だがとりあえず葵のお下がりでは  
ばらく代用する事にした。

アイツ小柄だし、葵がちよっと前に着ていた服とか丁度いいんだよ  
な。

「よつするに身体の凹凸が少な……げふんげふんっ！」

それにしても暮葉って意外とねぼすけさんなんだな。

まあ普段の俺もそうだが、今日は特別起きるのが早かった。

とりあえず起こすのも可哀想だし、お昼まで寝かしといてあげよう。

アイツ……ホントかどうかわからねえけど色々事情もあるみたいだし、疲れてるんだろう。

疲労とか肌に悪いらしいし、女の子の敵だからな。

だからゆっくり休ませてあげよう……。

でもお昼は食べないと身体に悪いし、お昼になったら起こして……ん、お昼？

そっいえば葵の奴……なんて言っていましたっけ？

（それじゃあ冷蔵庫にチャーハン入れてあるからチンして食べてね！）

……突然だが、昨日のカレーの話しよう。

正直最悪でした。ニンジンがフナムシ化していたし、玉ねぎはガンゼキフサゴカイ、じゃがいもは何か最初はなかったハズの芽がありました……。

まあ食ったら普通においしいカレーだったし、特に腹痛とかそういう症状もない。

ただ葵の料理は見た目があまりにもひどすぎる。

毎日食わされている俺はもう我慢したけどさ、昨日の暮葉は完璧涙目だった。

で、今日のチャーハンは葵が作ったと……まさか！？

俺はダツシユで冷蔵庫に向かった。

きつとチャーハンは一番上のデカイ所に入っているハズ……これが、これなのか。

ラップで包装してある皿には、紫色のご飯に何故かダイオウゲソクムシが乗っかっていた……。

「ぎゃああああああああああっ！」

ねえ質問があるの、これチャーハンか？

これはチャーハンなのですよね！？

……ひどい、予想を遥かに上回るひどさだ！

「食えるかこんなモン！」

食ったらきつとおいしいチャーハンの味なんだろうけど、これ食べるの嫌だよ！

ていうか俺なら我慢して食うけど、暮葉にとっては精神的にシヨックだよこれ。

……これ以上アイツにトラウマを植え付けるわけにはいかないな。仕方ない、買い物に行くか……。



それから数分後、俺はマックスバリユエに行くために外を歩いていった。

これも暮葉の為。純粹な暮葉にあんなもの食べさせられません。て言っても俺料理できねえしなあ。

唯一作れるのが焼きそば。理由は簡単、伊吹が焼きそば大好きだからだ。

おかげで伊吹に焼きそばだけはプロ級と称されるほどの腕前になって……。

よし、暮葉に焼きそばを作っただけようか。

「あつ、あんだ」

「あれ、圭くんじゃないか！」

「あ？」

どこからか声が、まあ確実に後ろだろう。

俺は身体はそのまま、首だけを後ろにくるっと半回転させた。

そこには右手首にシップを張ったツツパリ伊吹ちゃんと、その親友である小坂亜紀の姿があった。

二人ともこんな所で何やって……って、遊んでるんだろつな。

「あんだこんな所で何してるの？」

「なについて買い物だけど」

「買い物……ふん」

て、教えたのに感心ナシですか。まあ別にいいんだけど……深く追求されるのも困るし。

妹のご飯が嫌だからって理由で買い物に行く俺もひどいやつだからな。まあこれは暮葉の為なんだ。

昨日のあの慌てっぷりを見た俺としてはとてもじゃないが、紫色のご飯にガンゼキフサゴカイがそのままの状態で乗ったような意味不明な飯は食わせられん。

ちなみに、暮葉の事はあの後伊吹と電話で相談して秘密にする事にした。

つーか普通魔法少女だとかそんな事言えねえよ。

「そつえばあんた昨日も買い物してなかったっけ？」

「昨日は妹に頼まれて、今日は個人的な事情つすよ」

「もしかして圭くんは意外と家庭的な人なのか？」

「小坂、俺の何処が家庭的な人に見える？ 家事全くできねえぞ」

掃除くらいは流石に出来るが、裁縫とかやったり悲惨だぞ。主に指が。

料理は全然作れないね、ただし焼きそばを除く。

「そつね、あんた焼きそば以外作れないもんね」

「うつせほつとけ！」

大体焼きそばだけ得意になったのは誰のせいだと思ってやがるんだ。まあおかげで家事スキルが完全0という、人としてはどうかという事態は避けられたが。

ていうか俺はそろそろマックスバリュエに行きたい。

「はあ、んじやあ俺そろそろ行くぞ」

「随分急いでんのね」

「だってこんな所で立ち話つてのもなんだろ？」

というのはい訳、本当は暮葉が心配だ。

とても心配だ。心配すぎて呼吸するのが辛いんだ。だって……。

間違つて魔法を使って家の中が滅茶苦茶になったら大変でしょ！

「伊吹、行こう。圭くんだって忙しいんだから」

「……っ。勝手にすればっ。行こう亜紀」

「ああ。そ、そーだな」

少し口を尖らせた伊吹は冷たい一言を俺に吐き、親友と共に古宇坂の街へと消えていったのだ。

流石はツツパリ伊吹ちゃん。地味に心が痛くなる言葉を平然と吐きやがるぜ。

さて。さっさとマックスバリュエ行って買い物してこよう。

……それにしても伊吹ってデレたらどうなるのかな。まあ考えるだけ無駄か。

その後、マックスバリュエで買い物を買った俺はついでにラノベも買おうと、ちよいと市街地へ赴きその書店で立ち読みをした。

ラノベの立ち読みは大変だ。だってこんな公の場で笑ったらただの痛い子じゃないか。

「ぶわっはははははっ！ やべえこれマジやべえっ！」

……て、いたよ痛い子。全くだこのどいつだ？

なんとなくああいうのって一瞬だけでも見たくなくなってしまっよな。なんでだろう。やっぱり興味本位というものかな。

とにかく俺は店内で大爆笑をしている痛い子を確認する為、右を向くと……。

「大吾、自重したほうがいいと思うよ」

「仕方ねーじゃん！ これおかしーじゃん！ ……あ？」

「あ……っ」

「あれ、圭介じゃないか」

なんと店内で大爆笑していた痛い子は、俺のリア友の一人である長宗我部大吾であった。

そのつき添いだろうか、あまりに非常識すぎる大吾に呆れている重原広敏の姿もあった。

「圭介じゃん！ まさか僕らのストーカー？」

「あのなあ。男をストーカーとか誰得だよ」

「ハッテン場にいるツナギ男得じゃねえの？ まあ僕は二次元女子にストーカーされたいな」

「二次元は無理でも大吾なら前者のほうにストーカーされそうだね」

重原は爽やかな感じでそう言う。

しかし前者とはその……いわゆるBLというか。

まあそんな感じのもので。当然大吾は女子（ただし二次元に限る）が好きなので当然拒絶反応を起こす。

「アッー！」

「ちょ、声でけえよ！」

「さつきからずっとこの調子なんだよ……俺も流石に疲れたね」

「重原、お前も苦労してたんだな！」

「大丈夫。これでも大吾の扱いには慣れているからさ」

そう、またしても爽やかな感じで発言する重原。

だがその言葉を聞いていた周囲の女子達がヒソヒソ話を始め、終いにはキヤーキヤーと黄色い声をあげていたのだ。もしかしなくてもアレだろう。

彼女達は重原の発言を薔薇色な方向に捉えてしまったのかもしれない。

全くこれだから重原は。

重原は大分マトモなヤツだが、たまに腐女子に誤解されるような事言うんだよな。

「お前らなんか僕の扱いひでえ……それはそうとこれからゲーセン行かね!？」

突然眼鏡を光らせ元気になった大吾、立ち直るの早いなオイ!

「ゲーセンかあ。俺は暇だからいいけど、圭介はどうするんだい？」

「え? 俺はそんなに暇じゃあ……」

「リア充の圭介には伊吹ちゃんがいるもんな! そうかそうか、暇じゃねえんだなあ」

なつ、誰がリア充だこの野郎!

確かに伊吹とはそこそこ仲がいいが、何も恋仲というわけではない。ていうかアイツはツンデレじゃなくてツツパリだし、デレるわけがない。

さっきだってその……つ、冷たい事言われたしな。

とにかく俺はリア充じゃないの。女子のアドレスなんて母ちゃんと葵と伊吹と小坂のしか持ってない。

人生で一度も恋人がいた事ないし。大吾にはしっかりとやってやらねえとな。

「伊吹じゃねえよ。つーか俺はリア充とはかけ離れた存在だ」

「というか、ここにいる俺達みんな女子とはあまり縁がないね……」

「広ちゃんは女子にモテモテじゃねーか！ フラグ折りやがって、そこまで武道好きか！」

「俺は今の所恋愛には興味ないからね。それに大吾は例え圭介が国宗さんといい感じになったとしても、興味なんてないって前に言ってなかったかい？」

「当然！ 僕はとことん現実リアルに失望し、二次元の世界に生きると決めた男ですから！」

自分で言っていて悲しくならんだろうか、コイツは。

恋愛に興味がない、武術一筋の重原はまあ仕方ないとして大吾は悲しすぎると思う。

ああ、俺ももう高2だし。友達の中にもリア充いやがるし、小学生や中学生でさえ街中でイチャラブデートしてるくらいだし。いい加減に彼女が欲しいけど、出会いがないのも事実なんだよなあ。

増してや俺は、ある事情により一部からはあまりいい目では見られていないのだ。

俺、高校生のうちに恋愛するのは無理なのかな。

「まつ、俺はテキストに大吾と二人で遊んでいるから、圭介は国宗さんと頑張ってるね」

「だから伊吹じゃねえ！」

「ヒューヒューリア充乙！」

「大吾、一回シバこうか？」

……疲れた、まさか友達相手にするのにここまで疲れるとは思っても  
しなかった。

というかどうしてそんなに伊吹の事で迫ろうとしているんだ、コイツら。

今は伊吹どころじゃない事態が身の周りで起こってるってのによ…

…。

ていうか、絶対暮葉の事は言わんほうがよさそうだ。

暮葉はもちろん俺や葵とかがフツーに生活する為にも。

……さてと、そろそろ帰りますか。

「ただいまー、焼きそば買ってきたぜ」

やっとの思いで野郎共を追っ払い、自宅へ到着。

しかし野郎共を追っ払う事に成功したのは11時55分。

現在時刻は12時15分……ああ、嫌な予感しかない。

そしてその嫌な予感は現実のものに……。

「もきゅーーっ！ ば、バケモノおおおおおっ！」

丁度暮葉は台所におり、葵が残したのであろうメモ通りに冷蔵庫を開けていた。

そして彼女は見てしまったのだ。ダイオウグソクムシ入り紫チャーハンを……。

「スマン暮葉！ もっと早く帰っていれば！」



もっと早く帰っていればそのチャーハンの存在を知らずに済んだか  
もしれないのに！

ああ、ラノベ立ち読むために書店に寄らなきゃよかった。

……マジで後悔しました。

\*

「……やっと見つけたぞ。グフフ、金曜日に娘に殺させるとしよう  
か……木下暮葉！」

第8話 圭介と愉快的仲間達（後書き）

あ、後書きトークコーナー？

今回と次回はお休み。

じ、時間がなかったただけなんだからね！

圭介「だからツンデレきめえ……言い訳乙」

## 第9話 はじめてのがっじゅ

5月6日金曜日、早朝。

朝っぱらから俺は非常に憂鬱な気分であった。

今日から学校。しかし今日行けば明日からまた休み。

それだけでもかったるいというのに……今日からヤツが。

『にゅふふ、拙者もこーこーという所に行くのですよ。これもけーすけ様護衛の為です!』

……そう、ヤツが高校に通い始めるというのだ。

大丈夫なのかよ。というかいくらアルファ隊だかなんだか背後にいるからって、そんなに簡単に高校に入れるものなのか？

まあ、いつまでもこんな気分にいるわけにもいかないし、とりあえず起きるか。

「ふああ……眠っ」

しかし暮葉が住み着いせいなのか、伊吹の奴今日は起こしに来ないな。

少し寂しい気分もあるけどまあいいか。

流石にこの歳になったんだし、そろそろ幼馴染離れの時なのかもな。とりあえず起きよう。着替えた後俺は下に降り、彼女達に挨拶をした。

「おはよう」

「おはようございませうけーすけ様!」

「お兄ちゃんおはよう！」

朝からテンションの高い……ん？

この時俺は暮葉の服の違いに気付いた。

いつもなら最初に着ていた和服、もしくは葵のお下がりの洋服だ。

しかし今日の暮葉はピンクっぽいブレザーやチェック柄のスカートが特徴的な、初芝高校女子の制服を着用していたのだ。

「……それ、コスプレ？ コスプレするならセーラー服のほうが俺はいいな！」

「失敬な！ これはコスプレじゃないです、予告通り拙者も学校に通うのです！」

「……32÷4？」

「324！」

「……」

暮葉はちゃんと義務教育を受けてから高校に行ったほうがいいのか？

俺は真剣にそう思いました。だって……いくらなんでもひどすぎるだろ。

確かに俺だって赤点ギリギリ程度の学力しかないよ。でも小学生の問題くらいならフツーに簡単だ。

「お兄ちゃん大丈夫だよ！ 教育費とかはクーにゃんの両親が出すらしいから！」

「そ、そうか……」

暮葉の両親なんて知らないし、多分その実態はアルファ隊なんだろう。

第一割り算もロクに出来ない程度の学力しかないのに、どうやって編入試験潜り抜けたんだ？

なんだか背後の組織とか使って、汚い手で潜り抜けたとしか思えないですぜ。

あと葵、いつからお前は暮葉の事をクーにゃん呼ぶようになった。

「それじゃあ二人とも朝ごはん食べようよ！」

「お、おう」

「いただきます」

……ちなみに、あの紫チャーハン事件以来家の料理は暮葉が作っている。

この魔法も苦手でオマケに馬鹿でアホな暮葉にも、料理上手という大変優秀な特技があった。

フーか料理作れるなら最初から作ってくれよ……味は葵と同程度だけど見た目は最高にイイじゃん！

つまりどういふ事かというとな。フツーにおいしいです暮葉の手料理！

「むう……なんか悔しいっ」

まあ暮葉が料理を作ると葵は機嫌を悪くしてしまうのだが。

そして朝食を食い終え支度を終えた俺達は、暮葉以外は歩き慣れた  
通路路を歩き初芝高校に行った。

「職員室は葵の教室のほうに近いから、クーにゃんは葵が案内する  
ね」

「は、はい。よろしくお願いするのです！」

「んじゃあまた後でな二人とも」

「お兄ちゃん行ってらっしゃい！」

「気をつけてくださいけーすけ様！」

こうして玄関で別れた俺達。

多分次に会うのは家に帰ってからだろう。

葵はそもそも学年が違っし、アイツ友達が多いみたいだからきつと  
どこか寄り道していくハズだ。

暮葉は確かに同学年らしいが、そんな都合よく我がクラスに編入し  
てくるというエロゲー的な展開は流石にないだろう。いくら背後に  
アルファ隊がいるからって、クラス決めるのは教師陣だろうし。

そういえば今朝は伊吹見なかったな。教室行ったらいるのかな？

「うーっす」

「おう圭介！」

「おはよう」

教室の扉を開け、いつも窓側で騒いでいる大吾達に挨拶をする。  
アイツらもいつも通りだ。大吾は元気よく、重原は爽やかに挨拶を返してきた。

ついでに伊吹が教室にいないか確認するが……い、いた！

「おはよ、今日は先に来てたのか？」

とりあえず伊吹にも挨拶をするが……。

「あ、おはよ」

……すごく、素っ気ない返事が返ってきました。  
しかも俺の方すら向かず、伊吹はずっと教室前側扉を見つめている。

アレ、もしかして本日のツツパリ伊吹ちゃんは機嫌が悪い？

「なんかあったのか？」

「別に」

「しかも今日日直でもねえのに随分早いな」

「私の勝手でしょ」

「朝から冷たいっすね！」

「……ふん」

なんだ、俺なにかやちまっただんですか？  
いつもに増して伊吹の機嫌が悪い！

これほど機嫌の悪い伊吹というのも珍しいぞ！

「あ、圭くんおはろー」

「あ、小坂か。おはよう……あの、何か伊吹さん機嫌悪いのでござ  
いますか？」

「ああ、圭くん何かやったんじゃないのか？」

「やっぱ俺ですか!？」

しかし考えれば考える程何も思い当たることがない。  
ここ最近伊吹と喧嘩をした覚えもないし、伊吹が嫌がるような事を  
やった覚えもない。  
だったらなんで伊吹さん怒ってらっしゃるんですか！

「……ちなみに伊吹って何時に来た？」

「圭くんが来るちよつと前くらいだけど？」

特別早く来たと言う訳ではなさそうだな。  
でもちよつと前くらいなんだろ？

だったら伊吹を一度くらい見かけたって何も不思議じゃないよな。  
やっぱり伊吹が怒っている理由がわからない。

「……はあ、マジで俺何やらかしちゃったんだろ」



「はははっ！ 圭くんってばホント伊吹の事になると真剣になるな  
！」

「うつせ黙れ！ はあ……何やつちまったんだろ、俺？」

「テメエがやった事ならわかってんぜ、藤島圭介」

ん、なんだろうこの声は。突然俺の背後から男の声が聞こえた。  
後ろへ振り返るとそこには甲高いテノールの声の持ち主がいた。  
ツツンとした金髪にピアス、制服は着崩されいかにも不良といっ  
た風貌。

このほか本人曰く天然の赤毛で、それをセミロングパーマにしてい  
る大柄な男。

さらにおそらく160cmもないであろう、小柄な坊主頭の男が金  
髪男の周りにいた。

コイツらは……確か。

「よお、三馬鹿じゃん！」

「」「誰が三馬鹿じゃ！」「」

三人そろって叫んでいる。息はピッタリ、やっぱり三馬鹿だ。

「それで結局何の用だよ、三馬鹿」

「三馬鹿じゃねえ！ 俺は黒木仁だ！ ボコるぞテメエ！」

「俺は赤佐直人あかひただなおとや。黒やんの名前はどうでもええんやけど、いい加  
減俺の名前は覚えような？」

「僕は大林勇太、いい加減俺の坊主くらい覚えるよ！」

ご覧の通り、この三人はロクなヤツではない。

頭は悪いし問題行動ばかりするし、とにかく柄が悪い。

でもアホすぎて憎めないというかなんと……。。

とにかくただの馬鹿だコイツらは。だからこそ恐れられる事もなく三馬鹿という称号を得れたのだ。

「んで、結局なんだよ」

「ああそうだ。テメエが伊吹ちゃんにやった事……それはテメエの存在自体が悪って事よ！」

「意味不明だ！」

理由として成り立たないだろそれは！

実は赤佐と大林とはそこそこ仲がいいんだが……どうもこの黒木だけは好きになれん。

一応このハイテンションヤンキーモドキ野郎は、三馬鹿のリーダー的存在みたいだが。

「ああ、お前のようなウジ虫がいつから俺が伊吹ちゃんに近寄れねえんだよ。消える藤島！そして伊吹ちゃんは俺の恋び」

「あんたうつさいわ！」

「ぎゃあっ！」

その時伊吹が竹刀を取り出し、黒木にそれを手慣れた感じで振って

いった。

バシツといういい音とほぼ同時に、黒木の悲鳴が平和な教室に響いてしまった。

伊吹さん。馬鹿を退治してくれたのはありがたいが馬鹿の悲鳴は騒音だぞ？

「悪かったな藤島に国宗。コイツ絶賛片想い中なんや」

「チヨクトてめえ！」

「だあくれがチヨクトや！」

「もういいから引つ込もうぜ、黒やんにチヨクトさん」

「俺はチヨクトやない！ ナオトや！」

と、揉めてはいるが三馬鹿は大林に引きずられる形で立ち去ったのであった。

……なんだつたんだアイツら。

つーか黒木。前々から思っていたけどお前、伊吹の事好きだったんだな。

多分このデレのデの字もない伊吹を攻略するのは難しいと思うけど。ちなみに赤佐のチヨクトという渾名は、何か過去にいじめられていた韓国人留学生を助けたら相手は敬意をこめ、赤佐の事を「チヨクトさん」と呼んだらしい。

それを黒木らに聞かれて以降、みんなにああ呼ばれるようになったんだとか。

「はあ……っ」

「つかアイツら余計な事してくれたな。  
伊吹の機嫌が余計に悪くなってしまったじゃないか！」

「圭くん……がんば」

「アンタはいいよねえ他人事だし！」

小坂がうらやましいぜ。あと大吾に重原も羨ましい。  
だってアイツら完全外野だもん。

その窓側の席から今の騒動を見て、大吾に至っては爆笑してるじやねえか。

はあ……ま、とにかく今は伊吹に機嫌を戻してもらえよう頑張るしかないか。

「おはよー。おーし、SHR始めるぞー」

と思ったその時、担任の乙坂が現れてしまった。

これは流石に仕方がないな。怒られるのも嫌なので俺は自分の席に座った。

まあ時間はいくらでもあるんだ。焦らずゆっくり機嫌を直していけばいい。

「えーっと、まず……そうだ、お前らに転校生を紹介するわ」

ええー！！と教室中がざわめいく。

完全二次元派の大吾は興味がなさそうだが、それ以外は大体驚いている。

特に三馬鹿のテンションは異常クラスであった。

先程まで不機嫌だった伊吹でさえ、転校生という言葉聞いてから

は前に釘付けだ。

しかし、中には転校生と言う言葉に不安を感じる人だっているんだ。たとえば俺とか俺とか俺とか……うん、嫌な予感しかない。

「よし、おーい入っつていいぞ！」

ガララという勢いのよい音。

開けられた教室の扉から入ってくる、一人の少女。

彼女は教卓の横に立った瞬間、100点満点の笑顔で……。

「皆さん、本日転校してきました木下暮葉です。いとこの藤島圭介共々、よろしくお願いします！」

「は、はあっ!?!」

いとこというあまりに飛んだ設定に、俺は思わず驚いて声をあげてしまった。

最初から嫌な予感はしてたけど、やっぱり転校生って暮葉かよ！  
つーか道端で出会った少女と同じクラスになっちまっただと？  
えーっつとだな、これはその……なんだ。

……これなんてエロゲーだあああああああああああああ！

## 第10話 / 風紀委員

「木下さん、ホントに藤島のいとこなの？」

「木下さん彼氏いる！？」

「バーカ、転校してきたばっかなのにいるわけねーだろ！」

「木下さんメアド教えて！」

担任の乙坂が出ていった後、転校生である暮葉の周りには定番のように野次馬共が殺到していた。

あまりにの質問攻めに暮葉も困り気味だが、まあアレはアレでいいだろう。

大変そうだけど、この調子だと暮葉はクラスに溶け込めそうだ。

よかったよかった……って待てよ、全然よくないぞ。

どうしてアイツと俺は一緒のクラスなんだ？

いくら暮葉の背後にはアルファ隊がいるからって、出来過ぎにも程があるだろ。

「それにしても、圭くんあんなのどこに隠してたの？」

「それは俺も気になるね」

「思いつきりギャルゲー展開じゃえか。いつから主人公になったんだよ圭介エツ！」

「……ふん」

小坂に重原に大吾はまさかの展開に驚いてはいるが、まあ平常運転だ。  
ただ。だけどやっぱり伊吹だけ機嫌悪い。  
ホントに俺、一体なにやっちゃったんだろう。

「お前らな、俺だつて会ったのはこの前の月曜日が初めてなんだぞ。どこに隠してたなんて知るか」

「まあいいか。それにしても圭くんのことにしては可愛い子だな！」

「小坂、そりやどついう意味っすか？」

「確かに、圭介が隠していた子にしては美少女だね」

「俺は何も隠してねえぞ！ しかも地味に失礼な事言っでんじゃねえ！」

「ふん！ だが所詮は現実女だ！」  
リアルおんな

「お前は黙ってる！」

今日はなんだか質問攻めになりそうな気がする。

ていつか暮葉が質問攻めに遭うならまだわかるんだけど、どうして前からコイツらと一緒にいる俺まで質問攻めされなければいけないんだろう。

これもアイツがいとこなんて変な設定つけやがったのが悪いんだ！ まあ今はこんなくだらな質問よりも伊吹だ。どうにかして伊吹に機嫌直してもらわないと。

「……………」

いつも不機嫌だけどあそこまで不機嫌なのは珍しい。  
何が原因かわからないけど、アイツの不機嫌な姿を見るのは幼馴染  
として嫌な気分だ。

「藤島アツ！ テメエなんでけーすけ様なんて呼ばれてんだよめっ  
ちや慕われてんじゃん！」

「黒木……………頼むから耳元で大声出すな」

「うるせえっ！ 伊吹ちゃんに手エ出しといて、いとこと二股して  
んじゃねえ！」

「お前が一番うっさいわ！ しかも二股どころか伊吹ともそんな関  
係じゃねえよ！」

むしろ今、なんか嫌われている気がします。  
得に今朝からやたら機嫌が悪いッス。

……………やがて時は経ち、2時間目と3時間目の間の短い休み時間。  
俺と暮葉は完全にへバっていた。

「もきゅっ……………っ、疲れたのです」

「ああ、俺転校生じゃないのに俺まで疲れたよ……………」

朝っぱらから俺達は質問攻めであった。  
抜けだす機会さえなかったよ。



1時間目と2時間目の間の休み時間なんて、トイレしてたらいきなり野郎共が殺到してきて暮葉についている質問してきやがったし。もうホント疲れた。

「拙者こちらの学校は初めてなのですが、大変ですね……」

「心配すんな。こんな疲れるのは初日だけだからさ」

多分ね。何事もなければ初日だけだよ、疲れるのは。でも疲れたくってへバってる場合でもないんだよな。

俺は視線を教室の右前方へと向ける。

そこには一人教室から出て行くこうとする伊吹の姿があった。

「もきゅ？ 伊吹さんどうしたのですか？」

「ああ、アイツ朝っぱらから機嫌悪いんだよ。悪いけど席外すな」

「はい、りょーかいですけーすけ様！」

「何かわからない事があつたら誰でもいいからちゃんと聞くんだぞ」

「はいですー！」

伊吹と比べると正直でよろしい子だ！

これで変な登場したり怪しげな能力使ったり、変な説明したり刃で化け物倒したりしないフツの女の子だったら、今頃俺の彼女に対する好感度はMAXだったろう。

実に登場したあたりが残念な子である。

まあそんな事は置いといて、席を外した俺は教室を出ていった伊吹を追った。

探すの大変かな〜なんて思ったが、意外にも伊吹はただトイレに行っていただけのようである。

丁度俺がトイレの前に来ると、ハンカチを持った伊吹がトイレから出てきたのだ。

「い、伊吹」

「っ……………」

「ちょ、スルーはひどくね!？」

「……………なに？」

やっと口を聞いてくれたよ!

冷たいお返事だったけど、さっきまでガン無視でしたからね。これはギャルゲーマーとしての直感、大きな一歩だと思う。

「あのさ、どうしてそんなに機嫌悪くしてるんだよ」

「……………別に、あんたに教える必要ないでしょ」

「俺が原因なのか? そうだとしたらマジで土下座でもなんでもする、別な事でも相談に乗るから」

「……………っ」

伊吹の唇が微かに動いたが、俺には何を言っているのか聞きとれなかった。

でもあからさまにさっきまでの伊吹とは、反応が違った。

やっぱり伊吹が不機嫌なのって俺のせいなのだろうか。

確かに覚えはないけど、無意識に伊吹が怒るようなことをしちゃったのかもしれない。  
だとしたらそれはちゃんと謝らなければいけない。

「なあ伊ぶ」

「いいじゃねえかよ？ 後で返すからさ」

「だ、ダメだって」

俺が伊吹と呼ぼうとしたその時、邪魔をするように二人の声が聞こえた。

全くなんだよ。そう思って俺は右を向くと……。  
そこにはクラスメイトの田中くんという真面目くんを集る、三馬鹿の姿があった。

「なあ頼むってえ。黒やんを怒らせん為にも」

「そうそう。僕らちゃんと金は返す主義だから」

「で、でもお〜」

「そういつわけだからちよいと俺に130円貸してくれよ」

うわあ〜、三馬鹿……いくら馬鹿でもアレはないわ。

露骨に校内でカツアゲしてるぞ。

しかも頭はいいけど気弱な田中くん相手に。

これには流石の伊吹も腹を立てたようで、なんだか先程とは違って  
厳しい視線を三馬鹿に向けている。

まずい……剣道部伊吹vsヘタレ元ヤン集団三馬鹿の対決かこりゃ？

「待て！」

田中くんがピンチで、伊吹が戦意を出し始めていたその時。校内のヒーローは現れた！

「アア？」

「げ、黒やんまずいで？」

「ふ、風紀委員だ……っ」

そう、その校内のヒーローとは風紀委員。

我が校はそこそこのレベルではあるが、特別校則がキツイわけではない。

髪染めもOKだし、髪型について特に規則があるわけでもない。ただしああいふ行為に関してはかなりうるさいのだ。

「校内で露骨なカツアゲとは……2年4組の三馬鹿。これ以上の狼藉<sup>ぜき</sup>は許さないぞ」

黒髪の長いポニーテールにツンとした蒼い瞳。背も高くしてお胸の吉備団子もなかなかの大きさ。

しかもあのしつかりとした口調。なんかカッコいいお姉さんである。しかしあの赤を基調とし、黄金の文字で“風紀委員”と記された腕章。

それは彼女が風紀委員である証拠だ。

「へッ、狼藉だってよ。相変わらず俺達とは使う言葉が違うなあ。明智さんよお？」

「黒やんあんま挑発せんほつがええで？」

「つーか狼藉ってどういう意味なんだろ？」

「さあ？」

「狼が結婚して籍入れるって意味なんやないかい？」

「お前らちゃんと日本語の勉強してるのか？ とにかくこれ以上、校内で暴れるな」

「なんだとコラッ？ 金くらい誰だって貸し借りするじゃねえかよ？ 世の中そういうモンだぜエ」

「まずい、黒木が明智に喧嘩を売っている！」

……あの風紀委員の名前は明智あけちなぎ風紗。

今年春に転入し、風紀委員になった2年3組。つまり隣のクラスの女子である。

会話とかはした事がないが、噂じゃ風紀委員の中でも一際高い実力を持つ、最強の女の子らしい。

実際何度か彼女と三馬鹿は対戦した事があるが、当然三馬鹿の全戦全敗。さて今日はどうか？

「お前達、今日も私とやるのか？」

「へへッ。チヨクト、大林。いつちよこの風紀委員をギャフンと言わせてやるっぜ！」

「せやなあ。これ以上デカイ口叩かれんのも癪やしな！」

「よし、頑張れ黒やん！」

「よし、そんじゃあ今日は特別のストレートパンチからあああっ  
！」

まるで鍵の某泣きゲー原作なアニメを見ている気分だ。

勝てるわけもないのに戦いを挑む黒木。

アイツもまあ、ガタイはいいし元ヤンらしいから弱いつてわけじゃないんだけど……。

明智は黒木の拳をパシッと平手で受け止める。それも表情一つ変えずに。

「なっ!？」

「お前。いつも手、抜いてるだろ？」

「チツ……女だから今まで手加減してわざと負けてやってたんだ。調子乗ってんじゃねえぞ！」

今度はさつきよりも勢いのいい右拳だ。

アレは多分本気、というかかなりのスピードだぞ。

アレを本気で女の子に打ち込むつもりなのか、黒木のヤツ！

なんつーか、かなり慣れた感じでキレのいいパンチだ。

あんな攻撃マトモに喰らったら、下手したら鼻の骨が折れるかもしれない！

「あかん！ 黒やんついに本気出した！」

「流石にまずいつて黒やん！」

他の2人が慌てている。にも関わらず黒木は本気の拳で明智を殴ろうとしている。

しかし明智は黒木の拳を……なんと寸前でひらりとかわし。気を取られた隙の出来た黒木に、なんと目にもとまらぬ速さで黒木の顎に、キックを浴びせたのだ。

「んぎゃあああああああああああああつ！」

「く、黒やああああああああんっ！」

「うわぁ……黒やん、弱っ」

赤佐が叫び大林が呆れ、明智が後ろを向いてこの場を立ち去ろうとする。

なんだ……この地獄絵図のような光景は。つか隣にいる伊吹も啞然としている。

……そりゃあ、喧嘩になるかも微妙なくらい一方的すぎる勝負がいきなり目の前で始まればな。

「ちよつとそこのお二人さん」

「え？」

「あ、はい」

突然明智が俺達に話をかけてきた。

考えてみれば、明智に話しかけられるのはこれが初めてな気がする。

「二人はあの3人のクラスメイト？」

「え？ ま、まあそつだよな？」

「そ、そうよ……っ」

「後の事は頼んだ。もうあいつらが何も問題起こさないように見張つて欲しい」

「わ、わかりました」

「善処します……」

任されてしまったよ、三馬鹿の後の事を……。

まあそこは仕方ないか。明智はクラスが違うからな。

監視するんだつたら同じクラスのヤツに任せたほうが、確かにいいだろう。

でも三馬鹿は正直監視した程度じゃどうにもならないと思うぞ。

「黒やん！ あかんで、完全に伸びてる！」

「顎蹴られれば脳も揺さぶられるよ……あゝあ、折角途中までカッコよかつたのに」

黒木、無残すぎるぜ……。

それにしても明智風紗かあ。

初めて話したけど、やっぱり雰囲気はカッコいいなあ。  
でもよく見るとかわい顔していたなあ。

……もしかして、アレがギャップ萌えというものなのでは？

「おーいお前ら、そろそろ授業始まるぞー！」



げ、乙坂が叫んでいるって事は、次は乙坂の現文じゃないか。  
乙坂の授業は10分くらいで眠くなるほどテンポが悪いし、正直に  
言うと嫌だ。

それにまだ俺、伊吹と何も話してないし……。  
ああでもサボるわけにもいかない。とりあえず仕方がないので教室  
に戻ろう。

伊吹と話す機会はきつとまだあるはずだ。

第10話 / 風紀委員（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「やあ、久しぶりに後書きトークコーナーですぜ！」

暮葉「けーすけ様、読者に対して馴れ馴れし過ぎなですよっ」

圭介「そっか？ お前が来る前はいつもこのノリだったけど？」

暮葉「とにかくけーすけ様も、ちゃんと敬語を覚えるべきなのです  
！」

圭介「し、失敬なっ！？ 俺だってちゃんと喋れるわい！」

暮葉「ホントなのです？ 証拠として喋って欲しいのです！」

圭介「……っ、なのですよ？ 暮葉っ」

暮葉「もきゅっ……気持ち悪いのです、けーすけ様」

## 第11話 / 光差す屋上で

4時間目が終わればお昼の休み時間である。

勉強がダルい学生にとっては唯一、楽しみな時間であろう。

お昼ご飯を食べながら友達との時間を楽しみ、色々おバカな話をする。

この俺藤島圭介も例外ではなく、いつもの奴らと飯を食っていた。まあ今日は伊吹と小坂はいないが、代わりに暮葉という新入りさんが俺達の所にいた。

「なあ暮葉、いいのか？ 女子の友達出来たんだろ？」

そう、暮葉のヤツは早速友達を作ったのだ。

主に小坂と小坂の友達あたりだが……。

まあ転校初日にはすごい戦果だと思えますよフツーに。

「いえ、確かにそうなのですが拙者まだ右も左もわからないので……」

「そ、そうか」

とりあえず表向きの理由はそれね。

きつとコイツの事だ。あくまで俺の護衛が任務だから、という理由が本当の理由に違いなだろう。

別にここまでベツタリでなくても大丈夫だと思っただけだなあ。

オマケに伊吹は相変わらず機嫌悪いし。どうしたら機嫌よくしてくれるのかな……。

「それで圭介エ、転校イベント以外にエロゲーみたいな展開はあつ

たのか!？」

「ねーよ別に」

大吾にそうは答えるが、出会いイベントは確実にこれなんてエロゲ  
ーだったような……。

まあそんなの詳しく答えたら、暮葉の正体がバレる可能性もある。  
もしバレたら、暮葉はもちろんとして関わっている俺の日常まで脅  
かされる。

ただでさえぶち壊されかけてんにこれ以上ぶち壊されたら……。  
と、とにかく俺の人生は俺が守るぞ!

「圭介に訊いてもシラを切るから無駄だね」

「重原てめっ! 別にシラ切ってねーよ!」

「ところで木下さん、圭介とはどこで出会ったんだい?」

「はい! トラックに轢か」

そう言いかけた暮葉の口を、俺は両手で勢いよく塞いだ。

「んむっ! んんんんっ!」

「フツーに道端で会いましたよ! そんなラノベ的な展開一切なか  
ったっすよ! なぁ暮葉!？」

「んむんんんっんん〜!」

口をふさがれて暴れている暮葉さん。

スマン暮葉、仕方がなかったんだ……。  
コイツらも俺の身体が丈夫な事は知っているが、流石にトラックに轢かれて無事でしたなんて言ったら多分思いつきり引かれる！  
俺の日常を守る為にも、トラックに轢かれたくなんてコイツらに教えちゃダメなんだ！  
……まあ伊吹は例外だが。長年一緒にいるわけで、何度もああいうシーンを目撃されたからな。

「言つてほしくない出会って……フフツ、まあいいだろう。所詮は現実だ。これなんてエロゲーなんてイベントが起つたとしても、知れたものだ！」

「そうだぞ大吾！ 知れた程度のイベントだったんだ！」

「まあそこまで言つてほしくないなら、俺達もこれ以上追及するのはよそうか。あと圭介、いい加減木下さんから手を放してあげたらどうだい？」

「お、そうだないけねえ」

俺は彼女の口を塞いでいた両手を放してあげた。  
しかし見た目以上に柔らかい顔だったな。

正直触り心地がよくて手を放す機会を失つちまったぜ。

「もきゅー！ いきなりなにするのですか！」

「す、すみませんでしたあーっ！」

本当に申し訳なかったよ暮葉さん。

俺の日常を守る為には仕方のない行動だったんだ！

それから数分後。暮葉お手製弁当を食い終わった俺は、一旦一人で教室の外に出た。

暮葉はとりあえず大吾達に任せておくとして、俺はまず伊吹と話をしなければ。

もしかすると俺がわがままなだけなのかもしれないけど、とにかくあんな伊吹を見るのは嫌だ。

やっぱり伊吹の機嫌が悪いのは俺のせいだと思う。小坂やその他の友達と話をしている時に見せる笑顔は、まさにいつもの伊吹そのもの。ただ俺に見せる顔はあの不機嫌な顔だ。

と言う事は、俺の事で機嫌を悪くしているのは100%間違いないだろう。

「あつ……」

生徒で溢れる廊下の中で、女子高生としての平均よりもやや小柄で銀髪の、黒リボンがお似合いな女の子の後ろ姿を発見した。間違いない、伊吹だ。

その姿を見た瞬間、俺は思わず小走りで彼女の後を追ってしまった。

「伊吹！」

名前を叫ぶと彼女は一旦止まるが、叫び声を無視するように再び歩き出す。

「やっぱスルーかい！？　ちょ、お願いします！　せめて話だけでもおっ！」

俺は伊吹の前に立ち、柏手を打ちながらお願いしていた。端から見ればかなり情けない俺。

「ただ、そんな情けないことをしてでも伊吹に機嫌を直して欲しかった。」

「……なに？」

「さっきの続きだよ。なんでそんな機嫌を」

「そう言いかけた瞬間、伊吹はいきなり全力疾走を始めたのだ。短距離走を全力で走る陸上部員にすら匹敵しそうな勢いである。」

「ちよ、伊吹！」

「なんでだよ……多分俺が悪い。」

「覚えはないが、今までの彼女の反応を見ていてわかった事だ。だからってこのままでもいいはずがない。」

「もうこうなったらジャンピング土下座だろうがローリング土下座だろうがやってやる。」

「とにかく伊吹の機嫌を直したい。彼女には笑顔でいてほしい。」

「その想いを胸に、俺は校内のどこかにいるであろう、伊吹を探し始めた。」

「こつこつ時ってギャルゲーとかだと、大体屋上にいたりするんだよね。」

「で、伊吹の思考パターンはまるっきりギャルゲーのヒロインそのものだった。」

「俺は人目の少ない屋上に行ったが、予想通り彼女は屋上で遠くを眺めていたのだ。」

「伊吹」

「……………っ!?!」

声をかけると、伊吹は驚いたのか一瞬ビクッと跳ね上がった。風になびく白銀の髪、抱き締めたくなるような潤った瞳。

……………ぐはっ、なにこれ。破壊力高え!

て、今はそんなしょうもない事を考える場面じゃねえだろ。

「はあ、どうして私の居場所を特定するかな? あんたってストーカーの素質あるんじゃないの?」

「ストーカーって……………俺はストーカーよりもスカートのほうが好きだぞ。めくれるからな!」

「……………変態っ!」

「ちょ! いつもの軽い冗談ですって! 引っ搔くな!」

人の顔を引つ搔くつて、ネコさんかお前は!

でもある意味大きな一歩だ。

さっきは戯れ付く事はなく、むしろ避けられていたんだから。

「……………っ」

「いや、その……………ホントにごめん」

「……………何に謝ってるの?」

「わからないけどわかるんだ。お前が不機嫌なのは俺のせいだっ



え〜っつと伊吹さん。どうしてそんな露骨に驚愕するのでしょうか？  
もしかして、俺って物凄く無自覚な男だと思われていたんじゃないか？……。

「……あ、あたりよっ。圭介にしては鋭いわね……っ」

俺にしては鋭いって……俺ってそこまで鈍感な男なの？

流石にここまできると自分が悪いって自覚するよ。

ていうか最初からそんな気もしていた。

けどやっぱりか……ホントに俺は何をやっちゃまったんだ。自覚はあつても覚えがないから正直困る。

「俺が悪いってのはわかっている。ただ俺が何をやっちゃまったのかわからない」

「……やっぱ圭介だわ」

「……………」

おい、今露骨に呆れられたぞ。

だから困ってるんだよ俺は。全く身に覚えがないから。

「でも、知ってる振りされるよりはマシだわ」

「いや、その……マジで申し訳ない」

「……ねえ、あんたってホントに暮葉と同棲してるのね」

暮葉と同棲？

もしかして、コイツはまだその事を引きずっているのか？

確かに伊吹は暮葉が我が家に居候すると言った時、一緒に暮らすわ

けでもないのに一番反対していた。  
ただどそれを未だに気にしていたのか。

「まあ、一応事実だよ……でも同棲つてのは間違ってる。同棲つて要は二人暮らして事だろ？　うちには葵もいるし、正確には同居というか居候というか……そんな感じのものだよ」

「でも一緒には暮らしてるのね。それで朝は一緒に楽しそうに登校してるのねっ」

「それは事実だよ。でもなんで一緒に登校してたの知ってるの？」

「……っ、べ、別に知ってたっていいでしょ！」

待てよ、伊吹が到着したのって俺より少し前だったよな。  
もしかしてコイツ、俺らにバレないようにず〜っと近くにいたんじゃない。

あくまで俺の仮説だけど、もし本当だとしたら伊吹はすごい。  
全く気付かなかったぜ……伊吹にもストーカーの素質があるかもしれない。

「と、とにかく……今朝それを見て同居してるのが事実だってわかって……っ、ムカついたっ」

伊吹は口を尖らせ、子供のように拗ねていた。  
というか伊吹さん。アンタやっぱり。

「やっぱ見てたのかよ……」

「う、うるさい！　細かい事はどうでもいいの！」

また猫のように顔を引っ掻いてくる。正直に言つと顔を引っ掻かれるのは痛い。

たとえ相手が人間だとしてもだ。人間の爪だつてネコには劣るが、一応切れるんだからな。

「わかつたから怒るなつて！」

「怒つてない！ ムカついでるだけ……っ」

「それ、世間一般では怒っていると同じ意味だと思つんですが？」

「だあああもう！ 細かいこと気にするの禁止！」

いかんぞ。このままだとずくつとこの調子の会話が無限ループするだけだ。

どうにかしてこのイベントを終わらせる、何かきつかけを作らないと。

とりあえず伊吹が不機嫌だった理由を簡潔にまとめよう。

どうしてかはわからんが、伊吹は俺と暮葉が同じ家に住むのが嫌らしい。

それで多分俺と暮葉は一緒に住んでいない。事実を認めたくないからそう思っていた。

だからだろう。GW中に会った時は普通に俺と接してくれていたのは、きつとそう思っていたからだ。

だけど現実はその反対。今朝俺は、暮葉と楽しそうに登校をしていた。

それで彼女はどついうわけかは知らんが、機嫌を悪くしてしまったと。

……けどそれって、多分ただの嫉妬じゃないのだろうか。  
だったら解決策は一つしかない。

「ったく、そういう事なら早く言えよな」

俺は一步足を前に踏み、手を伸ばした。そのまま彼女の白銀の髪を、優しく撫でてやった。

ツンとした伊吹の目が一杯に大きく開き、触れればきつと柔らかな頬が赤く染まり始めていた。

「その嫌だっという気持ちは痛いほどわかったよ。でもお前だって事情は知ってるだろ」

「い、一応ね……信じたくないけど」

「俺だっつて超ぶっ飛んだ展開で、未だに色々整理したいと思ってるよ。でもアイツは転校までしてきたんだ。それにアイツ、追い出した所で居場所があると思うか？」

「そ、それは……」

俺の所に来るまで、暮葉は何をしていたのか、俺にはわからない。あの感じだと少しは日本に慣れているようだし、多分アルファ隊の仕事をしていただとは思う。

「ただ、だからってこの世界にアイツの居場所はあったのか？」

俺が思うに今の藤島家こそ、アイツにとって最も安定した居場所だろう。

「アイツは何も言っていないけど、それくらい俺にもわかるよ。」

いきなり異世界から来た奴が、この世界のどこかに家を持っている

ハズがないんだ。

「これはさ、アイツの話が全部本当だとしたらっていう前提の話なんだけど。確かに同居までの経緯は滅茶苦茶な成り行きだったよ。でもいきなり異世界から来た奴が、自分の家を持っているハズがない。アイツにとっては俺の家が唯一寛げる場所かもしれないんだ。それに学校にまで来ちまったし、友達もでき始めているみたいだ。今更暮葉を追い出す事なんて俺は絶対に出来ない」

「そ、それは確かに……そうなんだけどっ。でも……っ」

「もちろん伊吹の気持ちだってわかったよ。それでも暮葉を追い出すことはできない」

「わかってるよそんな事は！ でも……っ」

こうして頭を撫でていると、痛いほどに伝わってくる。

きっと伊吹は不安だったのだろう。

何が不安なのか俺にはわからねえけど、きっとそうだと思う。

「……お前、もしかして暮葉に自分の居場所が奪われるか思ったのか？」

「ち、違 っ！ ……いや、そうかも……っ。でも……や、やっばなんでもない！」

なんだか今日の伊吹はいつもと違ってハッキリしない。

しかも理由を迫ろうとすると、彼女はかなり頬を赤らめ、慌てる。

何かを必死で隠しているようにも見えるが、なんとも言えない……。

「お前……何か隠してる？」

「な、なんも隠してない！」

伊吹の顔は既に、イチゴみたいに真っ赤であった。  
なんだか驚くほどに必死そうだ。

「も、もういい。仕方ないもんね、暮葉にだって事情はあるし。あんたも流石に犯罪に手を染めるほど外道じゃないし。く、暮葉の身の安全の心配した私がバカだったわ！」

しかも暮葉の身の安全を心配って……。  
どう考えてもアンタ、それ大ウソじゃないですか！  
ていうか俺も滅茶苦茶変態扱いされとるし。

「俺、そこまで悪人に見えたんですか！？」

「こつこつ真面目な顔を見せなかったらあんた、ただの変態よ」

「ひでえっ！ 思春期男子がムフフな想像して何が悪い！」

「大っぴらにそつこついう事いうな！ この変態！」

やれやれ、でももうどうでもいいや。

正直、伊吹に変態と言われるのはもう慣れてる。  
むしろ俺にとって変態とは褒め言葉……げぶんげぶん！

とにかく、伊吹は若干自棄気味だったけど、いつもの元気な伊吹に戻ってくれた。

伊吹は怒っているように見えるけど、これは本当に怒っているとは

違う。

なんだか楽しそうである。根拠はと言われると難しいが、俺は長年こういう伊吹を見てきた。

長年見てきたからこそ、なんとなくわかるのかもしれない。

とにかく今の伊吹はいつもの伊吹だ。本当……戻ってよかった。

でも結局、伊吹は何を隠していたんだろうか。

その疑問だけが、俺の頭に残っていた……。

「圭介！」

「あ？」

「……まだ、お昼食べてない」

突然伊吹にそう言われた俺。

つまり、そういう事なんだろう。

「わかった。俺もう食い終わったけど、付き合っよ」

「そうと決まれば早く行く！」

「わかったから走るなって。食後に走ったせいで腹痛い……っ」

……太陽の光が、屋上にいる俺達を照らしている。

その光に見送られるように、俺達は校舎の中へと戻って行った。

第11話 / 光差す屋上で（後書き）

後書きトークコーナー

黒木「なんだこのリア充ども！？ 死ね、そして死ね！」

赤佐「とか言つて、黒やん伊吹ちゃん取られるの嫌なだけやん」

大林「まあ、黒やんよか藤島のほうがいい男だしな」

黒木「うるせえチビにチヨクト！」

赤佐「誰がチヨクトや！」

大林「チビだと！？ テメエ骨へし折るぞコラァッ！」

黒木「ああ、俺と伊吹ちゃんのラブストーリー……いつになったら始まるんだろ？」

赤佐「ないわ」

大林「ねーよ……」

黒木「ひどくねお前ら！？ クソッ、絶対伊吹ちゃん攻略してやる！」



## 第12話 突然過ぎるぜこの展開……ッ！

そして一日が終わり、帰り道の事である。

伊吹は部活、葵は友達との用事だそうで、今この場にはいない。

今日は大変な一日だったな。伊吹の機嫌を直すだけでも一苦労だった。

意外な事に暮葉についてはそれほど手間がかからなかった。

ほとんどクラスみんなが面倒を見てくれたからだ。

しかも本人曰く、日本には一ヶ月前からいるらしく、その上事前に調査をしてきたようだ。

通りで異世界人のわりには慣れていると思ったよ。

まあきつと、アルファ隊の仕事で日本に滞在していたのだろうけど。その暮葉は現在、俺の隣で今日一日の思い出話を語っていた。

「それですね、小坂さんってすごく拙者の家の事について詳しくかったのです！」

「ああ、アイツ戦国オタだからな。ってかお前、まさか木下家について言っちゃったのか？」

「それはないですよ。それを言ったら拙者も困りますし、言っなという上からの通達もありますので！」

「そっか」

そりゃそうだよな。異世界から来た上に秀吉の子孫？

そんなふざけた設定のキャラ、ラノベでも見たことねえぞ。

異世界から来た魔法使いってのはまあ……魔法は苦手みたいだが一

応は使えた事だ。

しかも妖怪みたいなヤツも見ちまったし、それは信じてやろう。

でも秀吉の子孫ってのはやっぱり信じられない。

もし本当だとしたら、どういう経緯で秀吉或いは子供が異世界に渡ったのか、非常に気になる所だ。

いつその事、聞いて見ようか。

「暮葉」

「もきゅ？ どうしたのですか？」

「いや、お前が秀吉の子孫って話、ホントなのかなあ〜って」

「んな！ 失敬な！？ ケーすけ様信じてなかったのですか！？」

いや、最初から信じてねえよ。

だって胡散臭いじゃん。そもそも豊臣家って断絶したハズだから子孫はいないハズだ。

流石の俺でもそれくらい知識はあるぞ。

「いやあ、だってそんなゲームみたいな設定どう信じると？」

「ケーすけ様はオタクだから簡単に信じると思ったのに！」

「……お前、オタクの意味わかってる？」

「はい！ 可愛い女の子の絵を見てハアハアする人の事ですよね！？」

まあ、強ち間違いではないと思うよ。

確かにオタクの中にも変態という人種がいてだな、二次元の女の子にハアハアする輩もいるよ。

でも全てのオタクがそうってわけじゃない！す、少なくとも俺は…

…。  
そ、そうさ。エロゲープレイしているくらいならまだセーフだよな？  
とにかくだ。暮葉のその情報は間違いなくアレだ。

「それただの偏見だろ！ 全員が全員そうってわけじゃねえよ！」

「もきゅ？ そうなのですか？」

「あたりまえだ！」

大吾は間違いなくハアハアするタイプだが、オタクの中にだって紳士的なヤツもいるんだからな。

例えば重原とか。アイツは確かにオタの部類だが、決して邪な感情は抱いていない……ハズだ。

「でも、けーすけ様がオタクなのは事実なのですよね？」

「まあ、それについては何の否定もできないんですけど……つか、なんで俺がオタだってわかったの？」

「はい！ 家では葵さんが言っていました。学校でも皆けーすけ様の事変態オタクって言ってましたよ」

「誰が変態だ失敬な！ つーか誰だ変態オタクって言った奴！」

つーか変態オタクって言われたせいなのか！？

暮葉がオタク!!ハアハアする変態だと思いこんだのは!

「え〜っと、亜紀さんに森島さんに中村さんに渡辺さんに……あ!  
あと伊吹さんも言っていました!」

「へー、ソーナンドーカー」

女子共めえ……つか小坂と伊吹までなに言っちゃってるんだよ。  
アイツらは少なくとも俺の趣味容認してたハズだぞ。

ふざけやがって。俺は変態じゃない、仮に変態だとしても変態と言  
う名の紳士だよ!

つか、小坂とはいつ名前呼び合うくらい仲良くなったんだ?

「けーすけ様、変態なのですか?」

「変態じゃねえ! 紳士だ!」

「し、紳士だったのですか!??」

「あ、ああ。まあな!」

YesロリータNoタッチ。女子は触るものではない、見て心で楽  
しむ物等々……。

そう、俺は紳士だ。決してムフフなものを見て、デユフフとかフヒ  
ヒとかキモい笑い方はしない。

そう……《恥》を感じても冷静でいられる。どんなムフフな場面で  
も冷静でいられる。

それこそ!それこそが変態という名の紳士なのだ!

……ああ。俺、なんでこんなくだらん事で盛り上がってるんだろう。

「それじゃあ葵さんから聞いたのですが、けーすけ様。えっちいゲームしてるってホントですか!？」

「女の子が公の場でえっちいゲーム叫ぶんじゃありません!」

「大丈夫なのです! 拙者、別に少しくらいの下ネタなら平気です!」

「それ、女の子としてどうなんだよ!？」

「やっぱりアレだ。伊吹はちょっとガード硬すぎる気もするが、小坂くらいが丁度いい。」

「とにかく、バンバン下ネタを言う女子ってどうかと思うんだ。」

「それでどうなのですか!？ 護衛対象を知るというのも拙者の仕事なのです!」

「嫌な仕事だなオイ! やってねえから!」

「まあ……実はPCの中には結構な数のエロゲーが入っているんだけどね。」

「オマケにエロ画像フォルダーだけで20GBあるし……。」

「でも、こんなのフツー女子には言えないだろ? それを言ったら俺は破滅だ。だから紳士として、これだけは隠し通さなければならぬ。」

「……まあ、要するに思春期男子は可哀想な存在なんだよ。」

「ていうか秀吉の子孫って話はどこいった!？」

「あ、そうでした! 拙者ホントに子孫なのですからね!」

「で、根拠は？」

「んん、豊臣国松って知ってます？」

「知るか！」

誰だよ豊臣国松って。豊臣おそ松の間違いじゃないのか？

いや、流石にそれはないか。とりあえず国松というのは豊臣家の人間だろう。

とにかく歴史ネタはあまりマニアックなものにはついていけん。こういう時小坂がいたら便利なんだけどなあ。

「豊臣秀頼の息子なのですよ」

「ひでより？ ひでよし？」

「もきゅ？ ……けーすけ様、もしかして歴史苦手なのですか？」

「俺はあらゆる教科が苦手だ」

「もきゅ？ にゅふふ……けーすけ様はバカなのですわ！」

「そこは心が折れるから突っ込むな！」

いいですよ、どうせテストの点数赤点ギリギリのバカですよ。

別にそれでも留年しなかったし、今まで補習すら受けたことがない。ていうか俺、中学の頃はそこまで馬鹿じゃなかったんだぞ。

ただ無理して初芝という、そこそこ偏差値のある学校に入ったせい……うん、一気に落ちぶれた。

そうやって考えてみればあの三馬鹿も、初芝に入れるだけの学力はあるのだ。

いわゆる高学歴ヤンキーというヤツだろう。まあアイツら赤点常習者だし、馬鹿には変わりないが。

「んで、結局その国松がどうしたんだよ？」

「豊臣国松は処刑された事になっているが、実際は何者かに救出され、処刑されたのは替え玉。その後国松と救出者はどこかへ消えた。それが真実の歴史だぞ」

「え？」

「もきゅ？」

ハハハ、わかりやすい説明だったよ。ありがとうございます。

でも問題はそこじゃないんだ。さっきの歴史を説明したのはもちろん暮葉ではない。

突然背後から現れた、明智風紗のような人物だった。

ところで何で明智風紗と決めつけていないか。それにはちゃんと理由がある。

確かに見た目は明智風紗その人だ。だけど……。

「明智……その服装はありえねーだろ！」

妙に短い着物だと？なんだ、このアニメに出てきそうな少し露出度の高い和装！

もしかして明智はコスプレの趣味でもあるのか！？

「もきゅ？ 誰なのです？」

「私？ 私は明智風紗って名前だから、お見知りおきを」

「それはわかってるけど、お前その恰好なに？ コスプレ？」

「お前は今日廊下で見たヤツ。もちろんこの恰好は戦闘服だぞ」

「おかしいだろ！」

ていうか風紀委員たる貴女がなんでその……ふ、風紀を乱すような恰好してるんだ。

その……なんとというか。生足エロいですよ明智さん！

それにそのバスト。なんとというか、男子納得のサイズだ。

正直コスプレをした明智は、普通の男なら思わず見てしまう魅力的なものであった。

「それで、何の用なのです？」

「木下暮葉だな？ 単刀直入に言う……私と、決闘しろ」

「っ!？」

「……what's？」

すまん、サツパリ意味がわからん。

まず何故風紀委員である明智が、ただの転校生である暮葉に決闘を申し込む？

もしかして、明智がキレるほどの無礼を暮葉はやっちゃったのだから？



「暮葉、お前何かやったの？」

「拙者は何もやった覚えがないのですよ！」

「確かにお前自身は何もしていない。でも、仕方ないんだ……」

そのセリフはなんだか意味あり気であった。

それでも意味がよくわからん。

まず明智と暮葉、戦う理由がないんじゃないのか？

「……っ！　もしかして、貴女は明智光秀の子孫なのですか！？」

「エエツ！？　暮葉さん、それは流石に妄想のレベルじゃね？」

「鋭いな、流石は豊臣秀吉の子孫……」

「マジなのかよ！？」

どういう事だ。待て、待つんだ。現実<sup>リアル</sup>に吞まれるな。

冷静に今までの展開を整理するんだ。

暮葉が説明しようとしたら、代わりに突然現れた明智が暮葉の家の事を説明した。

んで、その後何故か明智が暮葉に決闘を申し込み、果てに暮葉は明智の事を明智光秀の子孫と指摘。

明智はそれは事実だと肯定し……待て待て、ありえねえだろ。

そもそも秀吉に討たれた明智光秀に子孫なんているのか？秀吉の子孫並に存在が怪しいぜ。

「も、目的はなんなのですかっ！？」

「っ……仇討ちだ」

「天王山の……なのですか？」

「一応そういうことになるぞ」

あー、もうわけがわからん。

戦国武将の子孫だと思いこんだ方々が、何故かリアル殺し合いしようとしてるよ。

とにかくこれって止めるべきだよな。うん、そうしないと後々面倒そうだな。

「ちよつと待てお前ら！ 戦国武将の子孫とかいうガセネタで争うのやめい！」

「ガセネタじゃないのですよっ！」

「一応事実なんだけど……というか、なんでお前までいるんだ？」

なんか明智さん、今度は俺に話を振ってきたぞ。

しかも完全に俺がいちゃ迷惑なような言い方である。そりゃあね、なんでここにいるかって言われても。

「仕方ねえだろ。暮葉と帰る方向一緒なんだから」

「暮葉？ お前っ、木下の何だよ？」

「何って……まあ家族みたいなもん？」

一応同じ家に住んでいるし、ご飯まで作ってもらっているんだ。

確かに暮葉曰くそれは仕事らしいが、それでも強ち間違いではない。俺も葵もなんだかんだで、家族のように彼女に接しているし。

「お、お前も……もしかして木下家の一員？」

「いや、俺は藤島って名字だけど」

「家族じゃないだろ。もしかして不純異性交遊か？」

「してねーよ！ ていうか風紀委員のお前がそれ言つと洒落に聞こえなくて怖えよ！」

そもそも俺は告白された事すらない非モテ男だ！

そんなニヤニヤな展開があつたんなら今頃ニヤニヤしてるぞ！

「とにかく邪魔だ。死にたくなかったら……今までの会話内容をすべて忘れて帰れ」

「いきなり脅しかよ!？」

「けーすけ様！ あの冗談じゃないのです、危険ですから下がってください!！」

「あのなあ、展開的にお前が一番危険だろ？」

明智は間違いなく、暮葉の事をぶっ倒そうとしている。

二人とも戦国武将の子孫だなんて、今だに信じられない。

だけど明智は確かに彼女と決闘をしようとしている。

それもすつごく胡散臭い理由で。だけど、もしそれが本当の事だとしたら相当まずいんじゃないか？

だって明智ってバケモノみたいに強いじゃん？

あの喧嘩ばかりしていると噂の三馬鹿をアツサリ倒すくらいだしね。暮葉も多分刀を使えば強い。しかし暮葉は今、その刀を持っていない。

当然銃刀法に関わる問題だ。だから持ち歩くなつて俺が言つといた。でも暮葉は魔法少女ながら魔法が苦手だ。あんなの使われたら俺が被害を受けるかもしれないだろ！

魔法を使わないとしたら明智といい勝負、下手したら明智のほうが強いんじゃないか……ふ、不安だ！

「早く帰らないと頭を攻撃するぞ？ 打撃によって記憶をぶっ飛ばすぞ」

「絶対嫌だ！」

「なら帰れ、それから秘密を絶対バラすな」

「いや。お前が暮葉を狙うってんなら、どんな事情があろうと引き下がるわけにはいかないんだが」

一緒に暮らしている人の身が危ないかもしれないのに、引きさがれるわけがない。

それにコイツはサヴィエトの人間じゃないんだろ？

暮葉曰く明智光秀の子孫らしいし。俺は全然信じていないが、多分俺を狙っている組織とは関係ない。

だったら別に……俺が出しゃばつたつていいよな。

「……っ、お前。ただの人間じゃないな？」

その時、明智の目付きが変わった。冗談のじよの字もないほど鋭い。俺はまるで、威嚇されているような気分をいつの間にか味わっていた。ていうかさ、なんで俺がただの人間じゃないってわかったんだろう？ 自分では普通の人だと思ってるのに。みんな普通の人だと思ってるのに。

あ、でも常人に比べてやたら体は丈夫か。

「藤島……だつたっけ？ どこか広い所に行こう」

ひ、広い所って……それって俺と戦うって意味だよな？

狭い場所ならエッチな事を期待するが、広い場所ではないし。そもそも明智が俺に向けているものは、好意ではなく戦意だ。

「ちよっ！ せ、拙者はどうしたのですか！？ というかけーすけ様には手を出さないで欲しいのです！」

「暮葉、下がってる」

「もきゅ？ で、でもっ！」

「いいから」

俺は暮葉を無理やり退かし、一步前へと踏み出した。

この時、完全に俺と明智が睨み合う形となった。

どうしよう。成り行きで出しゃばっちゃったけど……正直戦う理由がない。

大義名分もないのになんで戦う展開になってるんだろう？

「あのさ、俺、出来れば女の子とは戦いたくないんだけど？」

「私はお前に興味が出たっ。正直、木下よりも」

「それで俺と戦うのかよ？」

「ここまで言っても引き下がらない上に、ただの人間にしては異様な雰囲気を放っているからな」

異様な雰囲気かあ。そんな事今まで言われた事ないのに。

最初から変な奴とは思っていたが、やっぱり明智も真性の変人だったよ！

……でもまあ、正直明智みたいなバケモノと丸腰の暮葉を戦わせるのも気が引ける。

どうせボロボロにされるんなら、体が頑丈な俺のほうがいい。それに、相手から敵意は感じてても、それ以外のものは……。

「はあ、わかったよ。それで気が済むってんなら……相手になってるよ！」

俺がそう言うと、明智は一瞬驚いた表情になる。

本当に俺が喧嘩を買うとは思っていなかったのだろう。

しかし彼女は俺の真剣な顔を見ると、本人も真面目な顔になり、コクリと首を縦に振った。

第12話 突然過ぎるぜこの展開……ッ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さてさて、今日から皆がどんなヤツか見て行くぜ！ と、いうわけで最初は俺な」

伊吹「バカ、変態、オタク、鈍感、脳の99%はエロで出来てる最低男」

圭介「……なにこれひどい」

小坂「あはは、ごめん……あたしも伊吹と同じ」

圭介「俺いいところないじゃんっ！」

暮葉「そ、そんなことないですよ！ けーすけ様にだってきつと……っ」

圭介「思いつきり言葉詰まってんじゃねえか！」

伊吹「まあ、焼きそばだけはおいしいわね」

圭介「そこだけ褒められてもうれしくねえっ！」

小坂「そういえば圭くんって友達少ないよな。なんで？ カッコいいと思ってるのか？」

圭介「それクールとか思ったら大間違いだぞ！ 悲しい所なんだか

らな！」

暮葉「けーすけ様っ、ふぁいとなのです！」

圭介「……もう嫌っ、こんな現実！」



### 第13話 / 魔法使いではない者

初芝高校からわりと近い場所に、古宇坂中央霊園という墓地がある。その墓地、規模はそれほど大きな大きさではないのだが、霊園の前は結構な広さの荒地が存在する。

霊園自体お参りに来る人も少ないし、近くに工事現場があるが近頃何か事情があるのか、全く工事をしていない。つまり人目を気にする必要もないし、戦闘するには十分なスペースが確保できるのだ。

俺ら3人は今まさに、古宇坂市内に存在するその荒地にいるのだ。

「け、けーすけ様。元々木下家と明智家の問題に、けーすけ様は関係ないのでから……っ」

「わかったわかった。とりあえず手出し無用だ」

大丈夫だ。何も明智は一般人を殺すつもりはないだろう。それに俺なら少しくらいボコられる程度なら平気だ。あの三馬鹿がああザマだし、勝てるとは思えないが……。

「一応警告しておく。私は戦う時……普段の私よりも強い」

「言ってることがサツパリ意味わかんねえけど……俺も少々殴ったくらいじゃ倒れないからな」

そう言っただけはゆっくりと、拳を構えた。

あんなに丈夫な俺でも、頭を強打したら時々気絶くらいはしてしまう。

だからそれを防げるよう、頭をガードできるようにしっかりと両腕

を上げた構え。

ハッキリ言つと俺は格闘技経験なんてないド素人。しかしちよつとした事情により喧嘩の経験は多い。

前にも言つた気はするが、これでも俺はズブの素人じゃないのである。

「……ふくん、藤島。喧嘩には慣れてるのか？」

「なんでそんな事わかるんだよ」

「構えと雰囲気を見れば大体わかるだろ？」

「お前はプロの格闘家か！」

確かに絶対勝てなさそうな相手なら素人でもわかるよ。

でも微妙な実力を見抜くなんて、素人にはできねえよ！

やっぱり明智はバケモノだ。さて、どんな武術を使ってくるんだ？  
きつとそこの武術とは違つただろう。まさか軍隊が使うようなもの  
使ってくるんじゃない？

「格闘技？ 確かに習つた……でも私は違つ」

「はあ？ まさか三馬鹿をアツサリ倒す実力持つてて、実は素人と  
か言つ気なのか？」

「素人でもない。私は……」

多分この時だろう。明智が本当にオカシイ奴だつて確定したのは。

そこまで言いかけた後、明智の掌がぼんやりと光る。

その時点でも十分におかしいと思つたのに、今度は突然掌が轟！と

爆発したのだ。

「な、なんだそりゃっ!？」

掌の上で燃えあがるオレンジ色の炎。

確かに大した大きさではない。例えるならサッカーボール程度の大きさの火の玉である。

ただ俺はそれでも信じられないんだ。だって、常識的に考えてあんなオカシイじゃん!

どうして明智はライターも何も持っていないのに、いきなり火を起こせたんだよ!

もしかして、明智も暮葉と同じ魔法使いで、あの意味不明な炎は…  
…!

「お前っ、それは魔法か!？」

「けーすけ様! 明智殿からはほとんど魔力を感じないのです!

あれ、多分魔法ではないのです!」

魔法ではないって……じゃあ他になにがあるんだよ!

魔法はとりあえず信じてやるよ。滅茶苦茶だったけど暮葉も使えたし。

でも今の所魔法以外のものは全く信じられない。

結局アレは魔法じゃなかったら、一体何の力なんだよ!

実は人の錯覚を利用して科学的に騙す、マジックとか言うんじゃないのか?」

「ねえ、超能力って知ってる?」

「ちよ、超能力? とあるラノベじゃ良くでてくるけど……」

「私もいつ自分に発現したかわからないんだけど、でも便利な力だぞ」  
緊張が、このあたりを支配する……。

超能力とかいうワケのわからないもの。  
ぶつちやけ魔法と区別のつかない能力<sup>チカラ</sup>。

でも、何より……あんなのを明智が使えるって、チートじゃねえか！  
俺は今まで戦いと言っても、そこらの不良しか相手にしたことがないんだぞ！

なんでいきなりこんなのと戦わなきゃいけないんだよ。俺はそげぶの人じゃねえんだぞ！

「なんだって、こうやって投げつけるだけで……攻撃できるんだから！」

明智は余裕そうな笑みを浮かべながら、オレンジ色に燃える火の玉を俺に投げつけてきた。

それはまるで、野球ボールを投げるようであった。

ただ投げつけるものが、野球ボールよりも大きく、そしてボールではなく火の玉であるというだけ。

そして一回投げられた火の玉は、時速100km/hは超えるスピードで俺に向かってきた。

「けーすけ様！」

「くっ！」

気分は第二次世界大戦時のレジスタンス。これほどのスリル、感じたことがない。

まさに新感覚スリル満点！……って喜んでる場合か！

とにかくあんなの喰らえばフツー死ぬ。いや、死なぬにしても病院送り確定だ！  
こんな体質なせいかな、俺は火傷にも強い。でも火傷はただ殴られるよりも痛いから嫌じゃ！

そんな事を考えている間に、俺は何故か右へ跳躍していた。きつとそれは本能だ。俺は反射的にあの火の玉を避けていたのだ。もちろん火の玉が地面に着弾する。刹那、火の玉は爆発を起こした。吹きつける熱風に衝撃波。俺はそれに押され、5mほど吹っ飛ばされてしまった。

「くそっ！」

地面に体を打った時の痛みを耐え、俺は立ち上がる。

「遅いっ！」

だが俺が行動に移った時には、既に明智は俺の目の前。そして明智が放つ廻し蹴り。綺麗な弧を描く右足。鋭く華麗な一撃。明智は俺のこめかみにソレを打ち込んできた。

「あ　ッ！？」

声にもならぬ一声を俺は放つ。そのまま立ち直る事もできず、勢いをつけたまま荒地に倒れてしまった。

「っ、強い……っ！」

耳はしっかりと聞こえる。暮葉の叫び声がよく聞こえる。それよりも目まいがするな。いかん、今の一撃で軽く脳震盪起こしたかも。

三馬鹿を倒した時とは動きがまるで違う。これが明智の本気かよ……。

だけど、所詮は人の攻撃だ。トラックに轢かれて無事な俺だぜ？これぐらいの攻撃でダウンしちゃうほど……俺はヤワじゃない！ようやく目まいもなくなったことだし、痛みも殆ど消えた。俺はゆつくりと立ち上がり、明智を睨みつけた。

「驚いた。あの馬鹿くろきに放った蹴りよりも強くやったのに……」

「アホ！ そんなもん同級生に打ち込むな！ 殺す気か！」

「やっぱり、ただの人間じゃないんだな……お前」

「そんなの関係ねえよ！ 風紀委員の癖に危なっかしいヤツだな！」

そもそも、どうして超能力者が存在しているんだよ。アレって大体嘘つきの詐欺師だと思っていたが……。それを言っちゃあ魔法使いも怪しいが。

「さて……そろそろ本格的に行くぞ。そしてお前の記憶を消す！」

「消されてたまるか！」

明智が両手首を合わせて手を開いて、体の前方に構える。

腰付近に両手を持っていきながら炎を作り出し、両手を完全に後ろにもっていくと、再びサッカーボール程の大きさの火の玉が、手の

中で激しく燃えていた。

「波！」

両手を一気に突き出し、柱のような炎が俺へと迫ってくる。

「かめはめ波かよ!？」

そうは突っ込んでみたが、アレは炎だ。似たようなものだけど、多分かめはめ波ではないだろう。

このままだとマズイ。あんなのに当たったら大火傷。いや、死ぬかもしれない。

とにかく俺は発火能力バイロキネシスによって放たれた、あの攻撃を避ける為に左へ跳躍する。

ギリギリ、まさにギリギリであった。

体に激しい熱を感じる。それはあの炎が本物であるという証だ。

「トドメ！」

明智はいつの間にか間合いを詰めていた。

さっきと同じように、避けて油断している俺を攻撃するつもりなのだろう。

ただどなあ、考えが甘いぜ。

「二度も同じ手に引っ掛かるかああ!!」

突き刺さるような右ストレート。明智は正確に俺の頭部を狙っている。

ただと言ったろ。二度も同じ手には引っ掛からないと!

反射的に両腕を出し、その攻撃から頭部を守ってみせた。

しかしなんちゅー威力じゃ！防いだ腕が痛えよ。でもマトモに喰らうよりはマシだろう。

「ふっ！ はっ！ ふんっ！」

その後、次々と振られてくる拳に脚。

そのどれもが修業を積んだ空手家のように素早く、鋭く、キレがいい。

クソッ、流石と言わざるを得ない。避けるだけでも精一杯だ。

「素晴らしい反射神経だけど、避けるだけでは状況が悪くなるぞ！」

「くっ！ くそっ！」

確かに、このままだと必ず一発は入るだろう。

そして明智は一発で崩れた俺をさらに追撃してくるハズ。

そうになると逆転の可能性はなくなってしまふ。早くなんとかしないと！

でも、こんな強い奴相手にどうしろってんだよ！

「波あああっ！」

「ぐあっ！」

射抜くようなボディーブロー。

腹部を貫くような痛み、一瞬呼吸が止まる。しかも前に倒れ込んでしまっそうになった。

でも明智に負けるという事は、今までの記憶すべてを失うのと同じ意味なんだ。

そんな結末俺は望んじゃいねえ。何よりこんなくだらない戦い、早



く終わらせたい。

何より俺が負けたら暮葉に合わせる顔がない。アイツは俺を守る為にここにいて言うて言うていたんだ。

もし俺の身に何かあったら、アイツはアルファ隊で……だから俺は負けられない。

その気持ちがあつたらこそ、俺は今の攻撃を踏みとどまって堪える事ができたんだ。

「んぬっ！」

「っ!?!」

既に明智の右拳は俺の顔目前だった。

そんなの避けれるわけもなく、モロに喰らってしまったが……。

それでも俺は、左頬に当たっている拳を気合いで押し戻してゆく。

「っ!」

拳が完全に押し戻されるのを防ぐ為、明智はグリグリと右拳を俺の左頬に押し付けてくる。

痛エ……久しぶりに人の攻撃で痛いと感じた。

でも、これで負けるわけには……いかねえんだよ！

「う、ぐうおおおおおっ！」

「ぐっ！ ぶ、藤島っ！」

「これがテメエの……ッ！」

そう言いながら、明智の拳を右手で振り払い。

「限界だあつ！」

叫び、歯を食いしばる。俺は力の限りのヘッドバットを彼女にかました。

「うっ、ああつ！」

「ぐっ、いつてえ〜！」

滅茶苦茶頭痛い……明智の奴、女の子なのになんて石頭してるんだ！  
ただと決死の頭突きにより、明智は後退りした。それはつまり、俺との距離が離れたという事。

しかも彼女は今の攻撃で痛がっている。そう、隙が出来たんだ。もちろん俺はこの隙を逃さなかった。

でもなあ、流石に女の子の顔面殴るなんてできないし……いや、頭突きの時点で最低だと思うけど。

それでもグーパーンはしたくない。そういうのはそげぶの人がやってりゃいいんだ。

そうだな……こういう場合、俺は！

「うああああああああああつ！」

要するに動けなくすればいいんだ。

「んっ！」

だったら……押し倒すのもアリだよな！

だから俺は一気に駆けだし、勢いで彼女に掴みかかって押し倒した

のだ。

「うっ……」

下から苦しげな声。

俺は今、彼女を押し倒してマウントポジションを取っている。

この体勢だと彼女は行動不能。戦いの主導権は俺が握っている。

……勝った、黒木が何度やっても勝てなかった明智に……俺が勝った！

それにしてもこうして明智を見ていると、やっぱり明智も女の子だなあ。

綺麗な肌、整った顔、美しく蒼い瞳……やべえ、可愛い。

それにこの弾力ある女の子特有の感触が　あれ、ちょっと待て。この感触って？

「こ、これは……っ！」

なんとということでしょう。なんと俺の右手が神聖なる女の子のお胸に……。

「……エエッ！　こ、これなんてエロゲー!？」

思わずそう叫んでしまうような、幸運なのか不幸なのか判断に迷うイベントが……。

そもそも、なんでわたくしの右手が、ふにゅふにゅとした乙女の左胸に？

ちょっと待て。考えようによっちゃあ嬉しいイベントだけど、まずくないかコレ!？

「け、けーすけ様……っ」

「待て暮葉！ こ、これは違う、違うんだ！」

いかん、暮葉が露骨にどん引きしている。まずいぞ、早く手を放さなければ！

いや、でも……なんだろうコレ。すごく……揉みごたえあります。

明智のナイスなおっぱい。俺らの夢が詰まった二つの膨らみ。

多分赤ちゃんの頃お袋の触ったのを除けば、これが初めて触る他人のおっぱいだ。

ああ……おっぱいってここまで素晴らしい感触を持つものだったのか！

「……おい」

「ひえっ!? は、はい！」

……あ、明智の口から放たれた一言がなんか怖い。

低く掠れたハスキーボイス。

大噴火でも起こしそうなくらい不機嫌な顔。

「いつまで触ってるんだ、この変態っ！」

その時、ついに明智山が噴火してしまった。

「ぎゃああああああああっ！」

下から放たれる、アッパーカット。

ダイナミックなその攻撃を喰らった俺は、気付いた時にはお空を飛んでいた。

ハハハッ、ボク飛んでるよハハハ……って喜んでる場合じゃねえ！

気分は落下傘が開かなかった空挺兵。  
こんな状態で受け身が取れるハズもなく、俺は頭から地面に突っ込む。

「んぐつ！ ふんぐぐぐつ！」

うあああああ！

か、顔が、首から上が土に埋まってしもうたあああああつ！

「ふああふいゆふえふえ〜（たすけてえ〜）！」

ああ、いかん……窒息死してしまいそうだ。

幸せだったのは、ホントに一瞬だけでした……。

### 第13話 / 魔法使いではない者（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は暮葉だな」

暮葉「もきゅ？ 拙者ですか？」

葵「クーにゃんは明るくて面白い人だよね！」

圭介「ただのアホなぺったんこだけとな」

暮葉「んな！？ 失敬！ 失敬です！ 拙者はちっちゃくないですよ！」

葵「お兄ちゃんは美乳派だもんね。ほら、葵の胸はお兄ちゃんのどストライクだと思うよ！」

圭介「ただの妹には興味ありません。二次元の妹を連れて来なさい」

葵「なっ！？ ぐぬう……こうなったら葵も二次元の妹に敵うくらい、立派な妹キャラになつてやる！」

暮葉「もきゅ？ にじげんのいもうと？」

圭介「暮葉もいつかわかるさ……現実の精度の低さにな！」

結論：暮葉は純粹、だが圭介はダメ人間である。

## 第14話 とうとうわけだったのですね

「参った……藤島がこんなに強いなんて、一瞬たりとも思わなかった……っ」

「いやあ、戦いをやめてくれるんらいいよ。いいんだけどさ……」

明智との戦いに勝利したはいいが、ちょっとした事故で土に埋まってしまった俺。

あの後暮葉が俺を助けてくれたんだ。大根を引きぬくような感じだな。

そして現在、明智が俺に対し、降参宣言をしている。

そこまではいいんだ。ホント、そこまでは完璧だった……問題は。

「どうして俺を縄で縛ったんですか!？」

暮葉がそこらへんで拾ったと言う丸太。それに俺は縄で縛られているのだ。

今の俺はとても勝者とは言えない、超無様な姿であろう。

「変態は縛るべしって、私は教えられたぞ」

「誰が変態じゃ! 暮葉、助けてくれ! 護衛対象が拘束されてますよ!?!」

「拙者も明智殿と同意見なのです。けーすけ様は少し反省するべきだと思っております!」

「アレは事故ですって！ 決して邪な感情があったわけではないですよ！」

でも明智のお胸の吉備団子。素晴らしい弾力だったなあ。

「けーすけ様！ 顔がニヤけてるのですよ！」

「ソ、ソシナコトナイツスヨ!?」

「やっぱり、藤島はただの変態だっ！」

「だあくから事故だって！ いい加減俺を解放してください！」

殴られるのと押し倒されるのだったら、誰だって押し倒されるほうがマシじゃ！

顔面が血だらけになるよりは遥かにマシなハズだ。

その際に起きた、いわゆる不幸な事故なんだよアレは！

「変態だと認める。じゃないと火刑にするぞ？」

「お前が言つと冗談に聞こえねえ！」

正直縛りがキツすぎて痛いんだが。

しかも明智に超能力で火刑にされそうだなんで……。

窮屈極まりないぜ。気分は火刑に処されるジャンヌ・ダルクだ。

「けーすけ様、やっぱり変態だったのですね……っ」

「コラそこ！ 哀れな目で見るとは人を見るんじゃないよ！」



「明智殿！ けーすけ様は一応皇族なのです。ですから処刑の際はギロチンでっ！」

「そんなもの用意できないなあ。よし、この変態は名誉ある銃殺に処そう！」

「二人揃って怖い事言っな！ 暮葉も護衛対象を殺そうとするな！」

その後、死にそうになったり、「変態」と明智に罵倒され続けた事は言うまでもない。

しかも時間にして30分。なにこれ、新手のSMプレイですか？

だけど俺はマゾヒスト君じゃないし、ちっとも嬉しくない！

それどころか……何度か生命の危機を感じましたよ！

危なく俺は、ジャンヌ・ダルクの如く、焼き殺される所であった。

だけど俺が解放される事はなかった。相変わらず縄で縛られた状態で会話は続けられた。

「んで、結局暮葉や俺を襲った理由ってなんなんだよ？」

「……藤島は興味。木下は父の命令だ」

「もきゅ？ お父様の命令なのですか？」

「俺は興味だけで攻撃されたのかよ……っ」

「そう。私自身木下には何の恨みも持っていない。あと藤島はホントに興味があっただけだよ」

「……………」

このクールな風紀委員の女の子、ガチで言ってるやがる。もうなんだか泣きたくなってきたよ。もう泣いてもいいかな？ だけどこの状態で泣いたら、流石に情けなさすぎるか。というかいつ解放されるんだろう、俺？

「私は本当に明智光秀の子孫らしいんだ。父は二週間前に木下を発見し、秀吉の子孫だと直感的に思ったらしい」

「もきゅ！？ すごいですそのお父様！ 確かに拙者は秀吉公の子孫なのです！」

俺には信じられないが、一応そういう事にしておこう。もう考えるのが面倒になってきた。

でも本当におかしいぜ。豊臣秀吉の子孫が異世界人な上に魔法使い？ 明智光秀の子孫が風紀委員で超能力者？

一体どのレベルから出てるラノベなんだよ。常識的に考えてありえねーだろ。

「それで父は突然、私に木下暮葉抹殺を命じたんだ……っ」

「……やっぱり、天王山の仇なのですか？」

「おそらくそうだと思う……っ」

明智は相当悔しそうな表情をしている。

勝負に負けたからなのか、何かを思い出して悔しんでいるのか。

それはわからない。でも彼女は歯を食いしばり、目をつり上げ俯いていた。

おそらく彼女は本当に殺すのが嫌だったのだろう。

だとしたら、なんで俺達と戦う必要があったんだ。なんでそんな命

令引き受けちまったんだよ。

「本当は嫌だったのはわかった。だったらなんで命令のままに動いたんだ？」

俺がそう訊くと、明智がいきなり口を大きく開き。

「仕方なかったんだよ！ 父は普段はそんな人じゃなかったのに……私を暴力で脅した！ 私の力じゃまだ父に抵抗はできない。だから動かざるを得なかったんだっ！」

叫ぶように真実を明かしてくれた。

明智でも抵抗できないって……どんな親父さんだよ！

あれほどの強さを明智は誇っていたのに、それ以上って……信じられねえぞ。

……明智はさらに言葉を続ける。

「だから私は木下の所に行って、戦う事にした……っ。実力を試す為に！」

「もきゅ？ 拙者の……実力ですか？」

「もし木下が強かったら……共闘すれば……父に勝てたかもしれないかったからっ」

共闘すれば勝てる。うん、実に少年シャンプ的な話だ。

だけど確かに2対1なら、絶対人数の多いほうが有利だろう。

だから明智は態々悪役になりきって実力を試し、実力を知って共闘しようとしたのか。

明智は風紀委員。成績も優秀だって噂だ。だけど、それなのに……。

「お前って意外と馬鹿だったんだな」

「っ？　へ、変態に言われる筋合いは　　！」

「そういう話なら、最初から戦わねえで相談すりゃよかつたろ」

俺の言葉に、明智の動作は止まってしまった。  
ただどすぐにジト目になり。

「……超能力なんてハナから信じてなかったのにか？」

「うっ……で、でも暮葉は魔法を使える！　証拠さえ見せてくれれば……ほ、ほら今は信じてるぜ！？　あの炎のせいで焼死するかと思っただからな！」

「魔法？」

俺の怪しげな言葉を追及されると思ったが、どうやら彼女は魔法という言葉に興味を持ったらしい。

そりゃ超能力と魔法は違うらしいからな。とあるラノベによると。

……実際似たようなもんじゃね？　と思っっているが、まああえて突っ込まない事にしよう。

「ああ、暮葉は超能力は使えないが、魔法ってものを使えるんだ。  
一度使用したら大惨事だけど」

「もきゆううっ！　けーすけ様、まだ魔法で人殺しはしてないので  
すよー！」

「俺が死にそうになっただろ！」

だって スーパーフォートレス 超空の要塞こと、B-29もビックリな高高度までぶっ飛ばされたんだぜ？

もしアレが俺以外の別な奴だったら、もうお見せできない姿になっていただろう。

とにかく俺でよかったよ……いや、全然よくないけど誰かが死体になるよりはマシだ。

と、そんな事を考えていた時。明智が口を動かし始める。

「……でも、相手の実力を知りたかったからっ」

「相手の実力か、別にそんなのどうでもいいじゃねえか」

「お前は父の実力を知らない！ だからそんな口が叩けるんだ！」

確かに、俺はコイツの親父の実力を知らない。

だからこそ言えたというのも、あるかもしれない。だけど……。

「そうじゃねえ！ 協力して欲しいんなら最初から言えばいいって話だよ」

「だけど……っ」

「実力なんて後からでも試せただろ？ 全く、敵だって誤解しちゃうたじゃねえか」

それがなかったら最初から明智の事、敵だなんて思わなかったのに。最初から協力する姿勢でいられたのに。

実力なんて、それから知って行けばよかったんだ。

「わ、私は……敵じゃないのか？」

「はいっ！ 事情はわかりましたので！」

「それにお前、風紀委員だろ？ だったらある意味風紀を乱しているその親父さんを、とっちめに行こうぜ！」

そんなセリフを言ってみた。

すると明智は、少しだけ表情を穏やかにし。

「……ありがとう」

その一言を言ってくれたのだ。なんだか初めて見た気がするなあ。

あのカッコいい雰囲気の明智が、素直にお礼をするシーンを。

何より、こんなに 女の子らしい表情の明智を……。

だけど、まだ何もかもが始まったばかりだ。

おそらくここからが大変なんだろう。だけど苦しんでいる明智を放つてはおけない。

だから必ず親父さんに会って説得してやるよ。もう暮業を狙うなつて。

それから 実の娘を暴行するなつてな。

「……ところで、そろそろ縄解いてくれない？」

「それは嫌だ、変態藤島」

「そうですね。けーすけ様、もう少しだけ反省しましょうー！」

「誰か助けてくださあいつー！」

結局この後30分くらいは縛られたままであった。  
そして、危うく緊縛プレイに目覚める所でした……。

第14話 / そういうわけだったのですね（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は伊吹！」

暮葉「伊吹さんって可愛いですよね！ 羨ましいのです！」

伊吹「そ、そんなっ！ 褒めたって何も出ないわよ……っ」

圭介「まあデレのないツツパリだけだな」

伊吹「ツツパリ言うのやめい！」

圭介「いいか伊吹。ツツパリじゃあ誰も見てくれねえぞ。せめてツンデレになれ！」

伊吹「誰がツンデレじゃばか圭介っ！」

圭介「べ、別にお兄ちゃんの為じゃないんだからねっ！ くらい言わないと、ツンデレには永遠になれないぜ？」

伊吹「言うかバカッ！」

圭介「ちょ！ し、竹刀らめえっ！ ぐぶるあっ！？」

安全な竹刀を使用しております！



## 第15話 決戦前日

あの後……明智を途中まで見送った俺達は、二人で我が家に向かっていた。

なんだか成り行きだが、明日明智家に突撃をかける事になったのだ。なんとという急展開。しかし後悔はしていない。アイツ、真剣に悩んでいるみたいだしな。

「けーすけ様、ホントに明日行かれるのですか？」

「そりゃあ、行くしかないだろ？」

だって、そこには困ってる女子。いや、困っている人がいるんだ。日本男児としてそれは当然放っておけない。

昔からそうだった。アイツも俺も小さかった頃から。すべての始まりは、アイツの為に、俺は……。

「……けーすけ様？」

「お、おうー！」

「どうかされたのですか？」

「いや、なんでもない。それより明日はお前も来るのか？」

「あ、あたりまえなのです！ けーすけ様をしつかり護衛するので。それに明智殿の問題には拙者の家の事も絡んでいるのですよ！」

「そうかつ」

そういえばそうだったな。明智の親父さんが、暮葉を抹殺しろって命令したのが原因。

暴力で脅された明智はそれに従うしかなかった。

だからあんな騒ぎになってしまったのだろう。

俺は未だに、二人が本物の戦国武将の子孫だなんて信じられない。

ただしそう思いこんでいる家庭は小坂曰く、現代でもいくつがあるらしい。

きつと暮葉も明智家もその類の家庭だろうと、俺は思っている。

だったら騒ぎを解決する方法は一つしかない。その親父さんを説得し、木下家と和解させる事。

互いに因縁がなかったとしても、そう思いこんでいるせいで自然と因縁が生まれている。

だからその状態を無くす為には、そういう事にしておいて和解させるしかないんだ。

「そういえばけーすけ様、たくさん打たれましたけど大丈夫なのですか？」

「ん？ ああ、全然平気だよ」

「でもでも！ あれ、普通の人なら大怪我なのですよ！？」

「高高度まで吹っ飛ばされて落下した時のほうが痛かった。言ってなかったっけ？ 俺こうみえても頑丈なんだよ」

「頑丈……？ 確かにけーすけ様、普通の人より打たれづよいのですけどっ」

ああ、やっぱり暮葉のヤツおかしいと思っているな。

そりゃそうだ。俺でさえおかしいと思ってるよ。自分の頑丈さにはな。

トラックに轢かれても死なない。高高度から落下しても死なない。伊吹に殴られようが明智にこめかみを蹴られようが、別に大した事がない不思議な体。

オマケに怪我の治りまで早い。俺の身体……一体どうなってるんだろっ？

……まあいいか、考えた所で無駄だからね。それにこの体質はある意味で便利だし。

「それより暮葉、今日の晩御飯は？」

「はい！ 本日は拙者が日本に来て初めて学んだ料理、焼き魚をやってみたいと思うのです！」

「思いつきり和食だなあ。一ヶ月の間に随分学んだな」

「はい！ 色々ありましたのです！」

「色々ってなんだよ!？」

なんか犯罪臭がするんだけど、そう思ってるのってもしかして俺だけ!？」

……と、こんな感じで俺達は、楽しく会話をしながらmyホームへの帰路を歩いていた。

その後、ようやく到着した我が藤島家。

もう日暮れだ。きつと葵は帰ってきているだろう。

アイツはなにをしているのかなあ。今朝から色々な事がありすぎて、

アイツと会うのが久々に感じるよ。  
ま、葵の事だ。きつと一人でもうまくやっていたのだろう。  
鍵は……開いている。という事はアイツいるな。  
鍵を取りだすのも面倒な作業なのだが、わざわざ開ける必要がない  
のは俺としても少し助かる。  
というわけで、俺は自宅の扉を開けた

「ただい

」

「お兄ちゃんにお兄ちゃんお兄ちゃんっ！」

瞬間、my・シスター葵たんが飛びかかってきたのだ。  
おおすごい、まるでV2ロケットがロンドンを狙うようだ！  
つて、呑気な事言ってる場合じゃねえええええつ！

「おおおわあああああああつ！」

全く準備が出来ないなかつた何の対処も出来ず、妹の思うがままに  
押し倒されてしまった。

その上、マウントポジションまで取られてしまったぜ。  
どうしよう。葵が乗っかっているせいで全く身動きが取れん！  
しかも後頭部を打ってしまった。正直痛いぜコレは……っ！

「えへへっ、おかえりお兄ちゃんっ。あと暮葉さん」

「た、ただいまなのです……っ」

ほら、暮葉が困っているじゃないか。

あと葵さん。一つ問いたい事があるんだ……。

「顔を胸にスリスリさせんな！ 胸を圧迫するな！ つーか降りてくれ！」

「んん〜っ！ だって、葵の中のお兄ちゃん分が不足してるんだもん！」

「なんだよお兄ちゃん分って!？」

「とにかく今補給中なの！」

「ちょ、降りんかい！ ヨスガるのは二次元だけでええわ！」

ヨスガる。それはとあるアニメから生まれた言葉である。

まあ具体的な内容はアレだ。実の兄と実の妹とがあゝんな事をするって事ですよ。

だが、常識的に考えてそれは色々と問題だ。

いくら俺でも超えちゃいけない壁は超えないの事ですよ！

「もうヨスガっちゃおうよ、お兄ちゃん！」

「するかあっ！ そういうのは好きな人とするもんだっ」

「葵はお兄ちゃんLOVEだもん！」

「そういう歪んだ愛はいらねえっ！」

葵は妹だからそういう対象になつてたまるか！

藤島家の近所での評判ガタ落ち。

いや、下手したら学校も停学或いは退学かもしれん。

……とにかく、世間とは兄×妹という組み合わせに冷たいものなん

だ。

そもそも実の兄だからこそわかる、妹には決して芽生えない感情というものもあるのだよ。

とにかく、ヨスガるのは二次元のみで十分だぜ。俺、二次元だったら兄×妹もアリだと思っただ。

その後、色々あって晩飯を食い終わり、俺は自分の部屋に戻った。やっぱり落ちつくよねえ、myルームってさ。

この時々うるさいPCの音、本棚に並ぶ漫画やラノベ達。

そしてこの棚に隠している、エロゲーや同人誌達……げんげん！とにかくmyルームは最高だ。俺が一番落ちつける俺だけの空間である。

……まあ、時々葵や伊吹。最近は暮葉も侵入してくることがあるんだけどな。

しかし明日が決戦だとはとても思えないぜ。明日、どうなるんだろうなあ。

もし親父さんと戦う事になったらどうしよう？

そりゃあそうだったら、もちろん俺は明智や暮葉を助けようとするけど。

……でもなあ、面倒くさいじゃん戦うの。とにかく会話だけですべてが解決するのを祈ろう。

そうなればこの拳で、誰かを殴る必要なんてなくなるんだからな。とにかく、決戦は明日である

「……………んっ？」

その時、俺の携帯が振動している。

携帯電話を開くと……電話か、しかも国宗伊吹という文字が表示さ

れている。

こんな時間に何の用だろう、伊吹のヤツも俺と電話だなんて暇だなあ。

とにかく伊吹からの電話だ。出なければまた機嫌を悪くしてしまうだろう。

「もしもし？」

『あ、圭介っ』

「どうした、暇なのか？ それとも俺が恋しいのか？」

『ち、違うわバカっ！』

いやいや伊吹をいじるのは面白いぜ。俺の趣味の一つでもある。もちろんいやらしい意味じゃないぞ？

最近俺「いやらしい」という図が出来つつある。どついう事だ、俺は紳士なのに！

「じゃあ冗談抜きにどうしたんだよ」

『……来週からの事よっ』

「来週？ 何かあったっけ？」

来週は確か、生徒総会というかつたるいものと、スポーツテスト・身体計測があったな。

クソッ、前者は寝れるからいいとして、後者は野郎の近くにしかいないから本当に嫌だぜ。

『来週つて、あんた行事予定表とか見てないの？』

「全然見ねえなあ。でも大体は覚えてるよ」

『い、意外ねっ』

電話越しからでもわかる。コイツ、笑ってやがる。

そこまで馬鹿にされるほど、俺って記憶力悪い事になってんの！？  
まあここは、大人の対応としてスルーの方向でいこう。

「ごほんっ！ で、結局何の話だっけ？ 今なら生徒総会で先生に  
バレずに寝る方法と、あと身長を1cmくらい高く誤魔化せる方法  
も話すぞ」

『ぜ、前者は別にいいけど後者は教えて！』

「さりげなく背伸びしろ！ 以上！」

『うわっ……期待した私が馬鹿だった……っ』

「なんだ？ それやって怒られた事でもあんのか？」

『う、うっさい！』

背が低い事を気にして、地道な努力をしている女の子……。

な、なんて萌えるんだ！これが二次元なら俺の嫁確定だ！

きつと伊吹は今、顔を赤く染めていることであろう。

こういう時折見せる姿が人気なのか、伊吹は結構野郎にモテるのである。

まあ確かに伊吹は顔も可愛いし、野郎ウケするのは当然だと思うん



だが……。

それでも伊吹は未だに男がいない。というか告白されても断っているらしい。

なんでだろう？俺とは違って恵まれているのになぁ……。

「つで、結局本題なんだつたつけ？」

『そ、そうよ！ あんたが変な事言うから忘れてたでしょ！』

「俺のせいだよ！？ 全く、圭介さんの知恵袋を聞けただけでもありがたいのに……っ」

『yohoo知恵袋のほうはまだいいわよ！』

……yohoo知恵袋って有名だけどさ、確か真面目に答える回答者いなかったよね？

アレと比べたら俺の知恵袋の方が、100倍足しになると思うんだけどなぁ。

まあいいか、下手に褒められても正直照れるだけだからな。

『圭介の家に暮葉が住む事になったでしょ』

「ああ。アイツなら今多分葵とゲームしてるぜ？」

どうやら葵がPNPを紹介した結果、暮葉はそれにハマッてしまったらしい。

まあゲームをするのはいい事だ。ジャンルによってはストレス解消にもいいらしい。

『そ、それはいいけど。それより圭介え……来週から私、起こしに

「いかないほうがいいの?」

「あ? なんでまたいきなり?」

『だって、暮葉もいるし……私お邪魔虫じゃん』

「あのなあ、誰も伊吹の事をお邪魔虫だなんて思っていないよ。来るか来ないかはお前の自由だよ。ただ一緒にほうが朝は楽しいぜ!」

俺も楽しけりや葵や暮葉だって楽しい。

出来れば4人で登校したいな。そのほうが絶対面白いと思うんだ。それを俺は、いつものノリで伊吹に伝えたのであった。

『じゃ、じゃあ来週も行くからね。言っとくけど葵ちゃんと暮葉に会いに行くんだからね!』

「葵と暮葉の為かよ! そこは俺の為って言って欲しかったよ!」

『おお、俺のためっ!? くっつ……き、キみよいわばかばかけえしゅけえっ!』

「馬鹿×2かよ!?! しかも呂律回ってないぞ? もしかしてときめいちゃいましたか?」

『うるさい! なにキモい事言ってるの! もう切るっ、またねっ』

その時、本当に電話をブツツと切られてしまいました。

流石にいじりすぎたかな。滅茶苦茶キモいって言われてしもった……。

しよ、正直伊吹にキモいって言われるとショックだ！

しかし、相変わらずガードの硬い娘だよなあ……。最も俺は所詮幼馴染だし、アイツにとっては眼中にもないんだろう。だけどアイツの場合は、他の男に対するガードも鉄壁だしなあ……。まっ、確かに伊吹に男が出来たと聞いたら……。俺、へこむかもなあ。でも幼馴染とはそういうものなんだ。いつかは絶対、俺の役目が終わる時が来るんだ。

はあ……。役目かあ。

そろそろ明日どう戦つか、どう説教するか……。ゲームとラノベを読んでシミュレーションしないとな！

## 第15話 決戦前日（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は葵か……」

葵「なんでお兄ちゃんテンション下がってるの!？」

圭介「いや、だってねえ？ 毎回これが続くと思うと読者も飽きるだろ？」

葵「ひどいよ！ まだ紹介してもらってないキャラいるんだよ!？」

凧紗「そ、そうだぞ。折角私も登場したのに……っ!」

圭介「もう葵はブラコン、明智は超能力者、大吾はオタク、重原は武道バカ、小坂は戦国オタ。これでいいだろ？」

葵「あつてるけど省かれて悲しいよ!」

凧紗「私だけなんか違う気が……っ」

圭介「まあまあ細かい事気にすんなって。さて、次回はゲスト連れて来るよ」

葵「ええっ!？」

凧紗「た、他作品からゲストって許可とったのか？」

圭介「いや、作者の作品からだけど？」

凧紗「大丈夫なんだろうか？」

葵「お兄ちゃんが寝取られないか不安だよっ！」

## 第16話、エエツ!?ここにきてこれですか!?

翌日早朝、俺の携帯には一通のメールが着ていた。

そこには明智凧紗と表示されている。

明智からのメール……そうだ、今日は明智と一緒に、明智家へ殴り込みをかける日なんだ。

それにしてもどんなメールだろうか……。

「はっ? 親父が明智家を追放されたから殴り込み中止? 詳細は説明するから電話してほしい……だと?」

おいおいおい! どういう事だ、これはどういう展開なんだ! ?  
今すぐ明智に電話だ。そして確認だぜ。

全く意味不明な超展開だ。とにかく、すぐに確認をとろう!  
俺はすぐに明智凧紗を選択し、音声電話という所を押した。

『んん……藤島? どうしたんだ、こんな朝早く?』

「どうしたはこっちのセリフじゃ! 親父が追放されたってどうい  
う事?」

『ああ! 私の爺さんが父のやってる事に昨日気付いたんだ。私の  
爺さんはつい最近織田家と和解したばかりで、親父が秀吉の子孫を  
発見した時も和解する事を望んでいたんだ。それを親父に指示した  
ハズなんだけど……』

「それが実は、子孫を抹殺する為に動いていたと?」

『そう、それを知って腹を立てた爺さんが父を追放したんだ。おか

げで戦う必要はなくなった』

おいおいおいおい！いくらなんでも急展開すぎるだろ！

こんなシナリオのゲーム、人生で一度もやった事がねえぞ！？

「んな馬鹿な！？ 折角脳内シミュレーションまでしたのに!？」

折角とらゴンボールZのゲームでどう戦うか、シミュレーションしたのに。

折角説教のセリフ考えるのに、インなんとかさんの原作読んだつてのに！

こんな展開アリですか!？お、俺の……俺の苦勞の意味は何処？

『すまん……こんな展開になつて』

「い、いやあ。いいさ、戦わずして事態が解決するのは素晴らしい事だと思つてよ」

『出来れば、風紀委員の仕事もそうありたいな……』

「そ、そうでございますか……っ」

……じゃあ黒木と戦わなきゃいいだろ！

確かに黒木から喧嘩を売つてはいるけどさ。

でも気絶するまでボコボコにするって……まあ一発KOだったけどさ。

ああ……でも昨日の努力が。地味に大変な作業だったのに……努力台無しや！

『ああ、でも木下と一緒にうちには来て欲しいんだ』

「えっ？　なんで？」

『木下と和解がしたいって爺さんが言っている。あと……私も二人に謝罪がしたい』

和解かあ。まあ複雑な家庭なのだろう。

多分のほほんな暮葉はそんな事、微塵も気にしちやいなえんだらうけど。

……それでも、ここはそういう事にしておいて、正式に和解させたほうが穏便に済むだらう。でも何故だらう。どうして謝罪の対象に俺が入ってんのかな？

「まあ、暮葉は行かせるとして……どうして俺まで？」

『藤島には迷惑をかけた。散々殴って本当にごめん……っ』

「なんだそれかあ。別にいいよ、殴られ慣れてるから」

『ふ、藤島。もしかして……いじめられてるのか！？』

「ぶっ！　ちよ、どうしてそうなる！？」

『だって、殴られ慣れてるという事は……よく殴られるんだろ！？』

電話越しでもわかる。明智、アイツガチでいじめだと思ってやがる。まあ、確かに一時期いじめまがいの事はされたよ。

理不尽な理由で殴りつけられた事もあるし、その度に喧嘩だっけしていた。

今だって時々見知らぬ人に嫌味を言われる。でもほとんどが過去の



話だ……。

出来れば、アイツと俺のそういう話にはあまり触れたくない。

「あのなあ。お前もわかってると思うけど、俺は丈夫なんだよ」

『そ、それでも殴られ慣れているというのは……っ！』

どうしよう。この突っ込みようがないマジ反応？

そっだ、また自分に得がない事だけ……。

あの手を使つて誤魔化そうではないか！

「本当に気にするなって。大体殴られる相手は女子だから」

『女子？ ああ……藤島、真性の変態だもんな』

「……………」

ほらね、自分に全く得がない。

それに今の明智の声。あの冷たい感じは絶対に俺の事を引いたに違いない。

『よし、絶好の機会だ。藤島、うちに来て変態を治そうか！』

「なんでそうなるの!？」

『そのうち藤島が悪人にならないか心配なんだ。だから藤島の変態を治すという結論に達したんだよ』

「人を犯罪者予備軍みたいに扱うな!」

『え、違うのか？』

「なにそのマジ反応！？ 俺は常識ある健全な男子だ！」

『常識ある健全な男子が胸を揉むか？』

「じ、事故ですよアレは……っ」

『よし、藤島更生は決定だな！』

なんて楽しそうなんだ……クソッ、変態を治す？

無理だな。何故なら人間みんな変態だからSA！

その中でも異常者というのが犯罪者。

つまりなにが言いたいかと言うとだな。変態≡悪というのは間違っているんだ！

全く、明智はそれをわかっていないぜ。風紀委員もまだまだこれからだな……フツ。

『とにかく、謝罪をしたいのは本心だ。その……本当にすまないっ、続きはちゃんと会ってから謝罪するっ』

「い、いや……ホントにいいんだよ？」

『頼む！ というか私の爺さんもお前に興味があるんだ！』

へー、俺って明智の爺さんに興味を持たれているんだ。

爺さんに興味ねえ……えっ、爺さんに興味？

ちよっと待て、それってもしかして……ッ！？

「アッ……」

『ど、どうしたんだ……っ?』

「待て待て待て！ 爺さんに言っちゃってんの!？」

興味があるって、やっぱりそういう意味ですよね？  
お爺さんは俺に対してその……そういう感情を!？  
嘘だ！嘘だと信じたいよジョニー！

『ふ、藤島?』

「かわいい男の娘ならともかく、爺さんと薔薇色でくそみそな青春  
なんて過ごしたくねえっ！」

『……藤島、やっぱりその変態。治そうか』

「どうしてそうなる!？ 変態なのはお前の爺さんだろ!！」

『そういう考えしかできない藤島のほうが、よっぽど変態だ!』

だって興味があるでしょ。常識的に考えてそういう意味じゃないの  
か？

少なくとも俺はそう学んだぞ。ギャルゲーでな!

ちなみに同じ男でも、男の娘なら十分守備範囲内だ。

例えるならば準にゃんとかな。あれは素で可愛いと思います。

正直、男じゃなかったら俺の嫁確定だったぜ……。まあ世の中あの  
子を嫁にする強者もいるのだが。

「じゃあどういいう意味なんだよ?」

『お前、私に勝つたる？』

「えっ？ ああ、あれ勝つたって事でいいの？」

『み、認めたくないけど負けは負けだ！』

明智さん、アナタは意外と潔い子だったのね。

まあ、確かにあの時ある意味では勝った気分になったよ。

『とにかく、私に勝つたお前に爺さんは興味を示した。どんな男か  
って』

「それで来なさいと？」

『そうだよ。全く……ただの変態だって伝えたのに』

「残念そうにそういう事言うな！」

『藤島……将来幼女誘拐とかやりそうだ』

「俺はロリコンじゃねえ！」

どうしてみんな揃って俺を変態扱いすんの！？

俺ってそこまで危険視される程変態なのか！？

世の中俺より危険な人って、いっぱいいるだろ。大吾とか大吾とか、  
大吾とかな。

とにかくひどいよ明智は。そこまで人を変態扱いするだなんて……。

『あ、あと。申し訳ないと思ってるのは本当だ。私は直接藤島に謝  
りたいんだ。と、当然木下にもな』

「明智……っ」

『だから木下と一緒に来てくれ……っ』

電話越しだから、表情とかは読み取れない。

それでも、何故だか明智の真剣な気持ちがビリビリと伝わってくる。

……コイツ、変態更生というのもマジらしいが、こっちの謝罪もマジみたいだな。

正直変態更生はゴメンだが、本人がここまで言っているんだ。

俺も明智家に行こうかな。それが明智の為になるってんなら……。

「……わかった、俺も行くよ」

『うん……待ってるぞ、藤島』

「お昼過ぎに行くけどそれでもいいか？」

『きよ、今日中ならいつでも構わないっ』

「そっか。それじゃあそろそろ切るな」

『必ず来いよ』

「わかってる。また後でな」

最後にそう言っつて、俺は長かった通話を終了した。

突然の展開だなあ。まさか明智家へ行くことになるうとは。

……思えば俺、伊吹以外の女の子の家に行くのは初めてかも。

爺さん付きとはいえ、やっぱり緊張するなあ……。

「けーすけ様！ 明智殿からメール来ましたか！？」

その時、暮葉がドタバタと俺の部屋に入ってきました。それも丁度明智の話のようである。アイツの所にもメール、送ったんだな。

「ああ。昼飯食って少し休んだら行こうか」

「……了解なのです！」

満面の笑みを浮かべる暮葉。

なんというか……伊吹にもしてもらいたい素晴らしい表情だ。

こうして、俺と暮葉は午後に明智家へ行くことになったのである……。

あ、そういえば通話料……どうなるんだろう？

第16話、エエツ!?!ここにきてこれですか!?!(後書き)

後書きトークコーナー

圭介「どうもどうもー! 今回から数人ほどゲスト登場だけ。最初  
は……」

????「だあああつ! ひ、悲劇じゃああああつ!」

????「たくみい〜! 浮気……許さないぞっ!」

たくみ?「ちよ! 誤解です! 誤解ですつてばクーさん!」

クー?「じゃあなんで歩美に抱きついていたのか説明して欲しいぞ  
!」

たくみ?「アイツが勝手にだな……つてうわ!? やめて、エクエ  
スシュヴェルトはやめてエエエエエエエツ!」

伊吹「……なにこれ?」

圭介「さあ?」

伊吹「男のほうは見た目以外ほとんど圭介ね……」

圭介「俺があんな不幸に見えるの!?!」

伊吹「違う、バカっぽそうって所が似てんのよ」

圭介「ひどい！ 泣いていい、ねえ泣いてもいい！？」

クーニグント・コスモバース「ウワキゼツタイユルサナイウワキゼツタイユルサナイウワキゼツタイユルサナイ！」

藤沢巧「ヤンデレ怖えよ！ だああもう不幸です不幸すぎますーっ！」

圭介「……このゲストコーナー、続くのか？」



## 第17話 明智家へ、だがしかあ〜しっ！

昼食後、俺と暮葉は明智家へ向かう事になった。  
準備を終え、まさに今出発する所である。

「それじゃあ葵、留守番頼むな」

「お兄ちゃんとクーにゃんがデートだなんて……葵も行きたい！

「もきゅ〜！ ででで、デートじゃないのですよ〜！」

「そうだぞ、友達と遊んでくるだけだ。それじゃあ行ってくるな」

「わかったよう……お兄ちゃんにクーにゃん。早く帰ってきてね！」

「はいはい、それじゃあ行ってくるな」

留守番は葵に任せた。少し不安だがまあ大丈夫だろう。

こんな事もあるつかと、伊吹にも一応連絡はしてあるんだ。

伊吹は今日暇みたいだし、あと数十分かしたら葵の所に行ってくれるだろう。

いやいや、こういう時には非常に便利だぜ。幼馴染の存在って。

それから明智と幾度とメールをし、明智のメールによる道案内を参考  
考に歩いた……結果。

「けーすけ様……どこなのですか、ここは？」

「すまん、迷った……っ」

「もきゅうつ！？ け、けーすけ様っ！ 古宇坂市民なのですよね！？」

「うるせえ！ 市民だからって市全体の道を把握してると思うな！」

誰だった道に迷う時は迷うんだよ。とにかくここはどこなんだ？

住宅街みたいだし、白陵高校があるみたいだけど……。

そもそも白陵高校が、古宇坂のどこらへんにあるか知らないし。

学校自体は知ってるんだけどね。確か偏差値39のヤンキーばかりが通う学校だったハズ。

知り合い曰く、金髪や服装の乱れなんて甘い甘い。リーゼントとかパンチパーマがいるらしいんだ。

……古宇坂ってさ、一応電車で東京に行けるんだぜ。そこまで田舎だったっけか？

「ど、どうするのですか？」

「どうするもなにも……っ、そういえば明智からもメールが来なくなっただな」

まあ、俺とメールばかりしているわけにもいかないだろうけど。

でも道案内してくれる人がいないと……うっ、ホントにどこなんだよココは。

今日が休日でもよかったぜ。もし平日だったらこの辺にきつと、白陵高校の怖いお兄さん達がうろつろしているに違いない。やだなあ、もし中学時代に絡んできたヤンキーさんがいたらどうしよう？

とにかく、早くこのあたりから立ち去りたい。絡まれる前に立ち去りたいぜ。

「どうしましょう。拙者達、このまま行き倒れに！？」

「流石にこの街でそれはないと思う」

「でもロジーナではあったのですよ!？」

「心配するな、日本で行き倒れはまずできないと思うから」

……まあ、倒れても誰も救急車呼んでくれないだろうけど。  
冷たいよねえ。ところが別な街に行くと、通報くらいはしてくれるらしい。

なんて心優しいんだ。そういう人もいるんだね!

つてか、こんな冗談言ってる場合じゃない。真面目に早くなんとかしないと。

そして明智さん、メールによる道案内を再開してくれえ……。

「それにしても、本当に明智殿の家はどこなのでしょうね?」

「知ってりゃもうついてるわ!」

とにかく記憶を頼りに進もう。

確か明智家は、白陵高校から500m離れたあたりにあるらしいのだ。

だけどなあ、その500mがどつちなのかサツパリわからんと、迷っていたその時だ。明智から一通のメールが届いた。やっとかよ!もう待ちくたびれちまったじゃないか。

というわけで俺は早速、携帯電話を開きメールを確認……したのだが。

「もきゅ? どうしたのです?」

「た、TASUKETE?」

「もきゅ? ホントだ、TASUKETEって書いてあるのです」

何故、助けてがTASUKETEとアルファベット表記なのか。それはよくわからんが、何故だか冗談じゃない臭いもするのだ。どういふ事だ。助けてって……アイツ、何かあったのか?

「けーすけ様……っ」

「待て、焦るにしても行き先がわからねえぞ」

TASUKETEが本当か冗談か、そんなのわからねえ。でも多分、このメールは俺達にさっさと来いと言っているようなものだろう。

そりゃあね、俺達だってさっさと白陵高校から離れたいさ。だけど肝心の明智家の場所がわからん。だからこうして迷っているんだ。

いきなりはよ来いと言われても、少々時間がかかりそうで……。

「むむうゝ、こうなったら……」

「ん? どうしたんだ暮葉?」

暮葉が一言口にしてから、何故か彼女は瞑想を始めたのだ。こりゃ本気である。その為か滅茶苦茶話しかけづらい……。しかし暮葉のヤツ、一体なにをするつもりなのだろうか?

「わかったのです! 明智殿の居場所!」

「マジで!？」

「はい! ここから北東へ大体500mの地点にいるのですよ!」

「ホントか!? ていうかどうやってそんな事を……?」

「はい、魔力を感じたのです。拙者は魔法は苦手なのですが、魔法使いとしての必要最低限。つまり魔力を感じ取るという事は普通にできるのですよ。明智殿は魔法使いではない故、魔力が低めだったので探るのが大変だったのですが、一度会った人の魔力は大体覚えてるので!」

「……………」

……………え〜つと、これは何から突っ込むべきなのだろうか。満面の笑顔で説明する暮葉は、自信という素晴らしいものに満ちていた。

それにしても魔力感知ですかぁ。確かに便利な能力だ。とらゴンボールで言う、『気』を探るのと似たようなものだよね。うん、確かに便利である。けどなぁ暮葉さん……………。

「そういう能力あるなら最初から使え!」

「もきゆうううっ! だってだってっ、思いつかなかったのですから!」

「うるせえっ! このバグ武将!」

そんな使える能力が間近にあったなんて、もう思いつきり脱力しましたよ!

なんだか今、初めて暮葉が役に立ったような気がしたぜ。でも登場遅エよっ！もう少し早く使ってほしかったと俺は思っている。

だって、明智家探すのに無駄に歩いたじゃないっすか……。

「けーすけ様ひどいのです〜！ 折角拙者、頑張ったのにつ〜！」

「わかった！ わかったからこんな時にいじけるな！」

ホントにコイツは俺と同じ年か！？

なんだか妹2号みたいに感じるぞ。

まあ、妹1号よりはある意味扱いが楽であるが。

……そんなわけで暮葉の言う通り、500mを北東へ移動する。

するとそこには、なんとも立派な日本屋敷が建っていた。

表札には、確かに『明智』という文字が墨で描かれている。

しかも何故だろう。中から戦っているような物騒な音が聞こえる。

しかも不吉な予感しかない……。

なんだよ、この異様な空気は。明智家の問題って終わったんじゃないのかよ。

「けーすけ様っ、危険なのでけーすけ様はここでっ！」

危険を察知したのか、暮葉は俺を心配してそんな事を言ってきた。

気持ちはとてもありがたい。でも……危険かもしれないんだろ。

そんな所に、暮葉一人を行かすわけにはいかない。

これでも俺は一応日本男児だ。だから

「嫌だ。俺も行くぞ」

「もきゅ？ ……ですけどっ」

「護衛対象は常に近くにいないと、ダメだったんじゃないか？」

「ひ、卑怯なのですよけーすけ様！」

「ごめん。でもやばい事かもしれないのに、明智や暮葉を放っておくことはできないから」

それに俺は昔からそうなんだ。困ってるヤツがいるのに、見過ごす事なんてできない。

引けと言われても引く事ができない。だったら面倒事に介入するしかないよな。

明智はもう俺達の仲間なんだ。だから……放つてはおけない！

「でも、もしけーすけ様が大怪我をされたら……っ」

「大丈夫だつて。俺の打たれづよさが普通じゃないの、お前知ってるじゃないか」

「でも怪我する時はするのですよ!？」

「心配してくれるのはありがたいよ。でも俺は行きたいんだ、頼むっ」

改まって俺がお願いしてみると、暮葉の瞳に真剣味が浮かぶ。果たして護衛対象を戦場へ向かわせていいのか、それを真剣に考えるように。

だけど、結果は俺の予想通りだった

「仕方ないですねっ。特別なのですよ、危険になったらすぐ後方に下がってくださいね」

「……ああ、ありがとな！」

暮葉は渋々、俺がついて行くことを許可してくれたのだ。ありがとう暮葉。これで俺の気は多分済むよ。

さて、あとは明智家で今、何が起こっているか知っとかねえとな。

そして明智や明智の爺さんが苦しんでるなら、それを俺と暮葉で解決してみせる。

そんな気持ちを胸に、俺と暮葉は明智家へと潜入した……。



第17話 明智家へ、だがしかあゝしっ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さてさて、前は『うちゅうじんですよ！』の主人公とメイ  
ンヒロインに登場してもらいました。んで、今回は……」

伊吹「ああ、そのコーナー中止よ」

圭介「へ？ な、なんでっすか伊吹さん！？」

伊吹「元ネタわからない人には本当につまらないネタでしょ！ 少  
しは考えなさいよこのオタク！」

圭介「いいだろ！？ 前作のキャラクターを使うって、何度も作品  
書いてる作者様だったらよくある事じゃねえか！」

伊吹「とにかく！ この小説は初めて読む人にも優しい小説を目指  
してんのよー！」

暮葉「そうですね！ 前回の巧さんもクーさんも、読者様からして  
みればよくわからない人物なですよ？」

巧「……ひどくね？」

クー「なんの為に妾達、他作品から呼ばれたんだろうっ？」

巧「……不幸だっ」

伊吹「とにかく次回から別な事しないと、このコーナーも打ち切り  
なんだからね！」

圭介「でも展開的にお前は今、本編で出番ないし。打ち切りになっ  
たらお前の出番なくなるぞ？」

伊吹「だあああうっさい！ そうならない為にも、次回なにをす  
るかは次回までの宿題よ！」

圭介「へいへい……け

## 第18話 / 明智家の死闘

ピンクブリッジの死闘……なんてものが、ファーストファンタジーFF5にありました。

アレはね、素直に名曲だと思うんだ。ちなみにFFは7までしかやった事がない。

ところで、それと明智家の中の関係があるかって？

いやあ、関係なんてほとんどないんだ。

ただ、明智家では死闘が行われていたんだ。だからなんとなくピンクブリッジが思い浮かんだのだ。

きつとここに伊吹がいたら、ゲーム脳乙とか馬鹿にされた事だろう。しかし事実だから仕方がない。

それでピンクブリッジ……げふんげふん。明智家の死闘だが、それは

「明智いつ!」

「明智殿つ!」

暮葉が扉を一期一振で斬って開け、俺達は戦場へと侵入した。

……ちなみに、暮葉は背中あたりに一期一振を隠していたらしい。すげえな。どこかでそういうの見た事あるぞ。でも思いつきり銃刀法違反じゃねえか。

まあ今はそんな事はどうでもいい。何故なら  
明智がピンチだからだ。

「ッ!? 木下つ、藤島!？」

「隙アリイツ!」

だが、明智がこつちを振り向いた瞬間。  
明智の前に立ちちはだかる、中年くらいの男が突如として刀を振りまわす。

刀、それは通常は白兵戦用の武器である。しかし男は明智に近づくと事なく刀を振りまわす。

普通なら全く効果のない、無駄な動作　　しかし。

「うっ！」

素早く映った鋭い衝撃波。それは一瞬のうちに明智に届き、彼女を傷つける。

咄嗟に反応した明智は直撃は避けたものの、少しだけ左腕を斬ってしまったようである。

裂けた衣服からはドロドロと、彼女の紅い血が流れ出していた。

「明智っ！」

「わ、私は……平気だっ。それより藤島は爺さんを……っ」

「え？」

後ろを振り向くと、床に倒れる年老いた男性が一人いる。

アレが……明智の爺さん。かつて争った一族との和解を望む人か。

……なんでだよ。なんであの爺さん、背中から血を流しているんだ？  
ていうかその前に、なんで明智は変な男と戦ってるんだよ。これどういう状況なんだ？

とにかく、明智に頼まれたんだ。あの爺さんの面倒を見なければっ！

「明智殿！　拙者は加勢するのです！」

「ほお、木下の小娘か。いいだろう……裏切り者の風紗と共に墓穴に埋めてやるうぞ」

戦闘はとりあえず明智と、たった今一期一振を鞘から抜いた暮葉に任せるとしよう。

暮葉も刀さえあれば滅茶苦茶強い。あの日オオカミ野郎を一撃で倒したのは、まさに暮葉だからな。

とにかく、俺はあの爺さんの無事を確認しねえと！

それから状況を確認しなければ。どうしてこんな事になってんのかとかな。

駆けだした俺は爺さんの所へ、姿勢を低くし声をかける。

「ちよつと！　しっかりしてくださいっ！」

「……ん、うう……だ、誰じゃっ？」

よかった、意識はあるみたいだ。それに思っていたよりも元気そうである。

この爺さんは傷の痛みで苦しんでいるだけのようである。さて、まずは自己紹介をしないといけないな。

「藤島圭介ですよ」

「ふ、藤島……すると君が圭介くん……かの？」

「そうですね、藤島圭介です！」

「話は娘から聞いておる……っ、変態じゃが中々腕の立つ男らしいのお」

「変態つてのは余計ですよ……」

明智めえ、ホントに俺の事を変態だつて教えやがったな。まあ否定はできないが。俺が変態なのは事実だ。

というか、それを言うとな人類のほぼ全員が変態になるぞ。

きつこのこの爺さんだつて若い頃は……うん、お盛んだったハズだ。

「すまんのお……本当は、歓迎パーティーの予定だったのじゃが……」

「一体、何があつたんですか？ 明智と戦つてる野郎は誰なんですか？」

「……このワシ、あけちみつあき明智光昭の息子、あけちみつお明智光雄……あけちみつあき凧紗の父親じゃ」

明智の父親つて……ちょっと待てよ、その話つて終わつたんじゃない。

「明智から聞いたんですけど、その話は確か貴方があの人を追放して、解決したんじゃないんですか!？」

「そのハズじゃつた……しかし、ヤツは我が家を襲撃してきおつた」

その言葉を聞き、俺は一旦明智の父親である光雄のほうを見る。

彼は相変わらず一人で刀を振りまわす。だが、たったそれだけで鋭い衝撃波が、暮葉達に襲い掛かる。

なんだか明智は、さつきよりも傷が増えている気が。

暮葉も刀だけで頑張っている……というかアイツ、衝撃波を斬り裂いてるぞ。

どうなってんだよ。もしかして暮葉は光雄の真似を!?

「ほう。何の能力も無しに衝撃波を生み出し、それで風を斬り裂くとは……中々の腕前だな、木下の小娘」

風って……もしかしてアレは衝撃波じゃなかったのか。

あの鋭いものは風だったのか。だけど風ってあんなに鋭いのか？あんな鋭利な風、今まで見たことがねえぞ。

「そつちこそ何者なのです!? 殆ど魔力を感じないのに……っ」

「木下! 私の父も私と同じ、超能力者だ。それも単純な実力だと私の上だ、気を抜くな!」

「ちょ、ちょーのーりよく? ……意味不明なのですけど、強いのはわかったのです!」

再び刀を構え、今度は自ら突撃をかける暮葉。

速い、暮葉のあの運動性能……並の人間が出せるものではない。

アイツ、魔法少女か疑いたくなるくらい身体能力が高いな。

一方の明智は双方の掌に、バレーボール程度の火の玉を生み出している。

「もうお前なんかの命令は聞かない! 私はな、こいつらに出会ってNOと言える勇気を貰ったんだよ! お前のやってることなんて最初から反対だった、内心じゃお前を倒せる時を……ずっと待ってるんだ! だから……こいつを喰らえっ!」

彼女は本気でそう叫ぶと、明智は作り出した火の玉を光雄へと投げつけた。

右、左と投球される火の玉。その速度は光雄の超能力を防ぎつつ、前進している暮葉の移動速度よりも遙かに速い。暮葉はジリジリと迫る程度であるが、火の玉は100km/hを超えるスピードで彼に迫っていた。当然、光雄はどちらを優先して迎撃するかと言うと、火の玉のほうであろう。

「フッフ、無駄な事だ！ 残念な我が娘よっ！」

一振りすると、何故か両方の火の玉が真つ二つになってしまう。

強い。あの光雄さんは信じられないくらいに強い。

俺でさえ避けるのが精一杯だった、あの攻撃をアツサリ迎撃しやがった。

だが、火の玉を迎撃したその行動こそ、光雄最大の失敗であつた。

カキイツ！

刀と刀がぶつかり合う、金属音。両者とも剣道で言う、鍔迫り合いの構えだ。

金属がぶつかり合い、バチバチと激しく火花が散ってゆく。

だがいくら中年とは言え、明智光雄は男である。女子である暮葉よりも腕力があつて当然だ。

両者とも本気で押し合っているが、若干暮葉のほうに負けている感じである。

「くっ！ んんんっ！」

「ぐぬぬっ！ この細腕でどこからこの力がっ！？ ぐおおおっ  
「！」



「んつきゅううう！」

まずい、力で負けている。このままだと暮葉が斬られてしまう！  
と思っただ、その瞬間であった。

「親父殿、覚悟おっ！」

勢いよく飛びあがった明智は、勢いをつけて回転。

これは、間違いないぞ  
あの蹴りの威力を高める為の加速。あの攻撃は俺が受けた、明智必  
殺の一撃だ。

俺でさえ軽く脳震盪を起こしたあの蹴り。その華麗なる一撃が、光  
雄のこめかみに突き刺さる！

「……………」

暮葉との鏢迫り合いにより、思うように身動きが取れない光雄。

彼は明智の蹴りをモロに喰らってしまった。その威力に、彼は無言  
で吹っ飛ばされる。

それから起き上がることはない。どうやら、たったの一撃で気絶し  
てしまったようである。

「や、やったのですよ明智殿！」

「おおっ！ や、やりおったわい！」

暮葉や爺さんも歓喜。俺も素晴らしい連携プレイを見て、拍手をし  
たくなりそうであった。

やっぱり明智すげえ……………いくら急所とは言え、あんなに強い人間を

一撃でダウンさせるとは。

俺、よくあの蹴りに耐えられたな。今更ながら自分の身体の頑丈さには感謝だよ。

それから暮葉もすごい実力だ。明智でさえ反応しきれなかった、あの風の斬撃を刀で斬り裂いていた。

あんな事、聖剣を持った勇者でもできないかもしれないぜ？

「おう、お疲れさん暮葉。それに明智」

「けーすけ様はご無事なのですか!？」

「心配しなくても、情けない事に俺はずっと後方だったし、それより明智は大丈夫なのか？」

明智の身体には、いたるところに切り傷があった。

間違いなく、あの斬撃によるものであるう。

明智と明智の爺さん、この二人が今回の主な怪我人だ。

特に明智は怪我した状態で戦っていた。それは大きな無理になっていたハズである。

「わ、私は平気だっ」

「それにしても、追放した者が襲撃してこようとはのお……完璧不意打ちであったから、対抗できなかったぞい」

「ごめんなさいっ……私が力不足だったから」

「いやいや、気にせんでええ。風紗はよくやったよ。それにワシも元氣じゃぞ」

「う、うんっ」

こうして橋から見てみると、家族だよなあ。

なんだか羨ましいや。うちの良心は昔っから仕事でよくいないし、だからいつも葵と二人きりだった。

とにかく葵の面倒を見るのは大変である。アイツは極度のブラコンだし、やたらと絡んでくるんだよ。

まっ、それはともかく。今回はこれで終わったってわけだな……。

「み、皆さん警戒するのです！」

しかしその時、突然暮葉が全員に向かってそう呼びかけたのだ。

何故かと言うと、振り向けば光雄の身体から、白い蒸気のようなものが吹きだしていた。

それは次第に人型を形成していき、やがて着色までそれ、完全なる人と変貌したのである。

おいおい……煙が人になるって、魔人プーかよっ!?

しかも顔、なんだか教科書で見たことあるような気が……。

「な、なんじゃっ!?!」

「もきゅっ!?!」

「な、なんだよこれ!?!」

「ちよっ!?! これなんてRPG!?!」

一斉に驚く俺達……何故なら、煙から人になったその人の正体は……。

「やはり……この身体のほうが、動きやすいぞ……フッフッ」

なんと、明智光秀その人だったのである。

……なんだ、この超トンデモ設定なありえない展開は？

そもそも、なんで明智光秀が生きてるんだよ！

本当の地獄はこれからだぜ……な展開であつた。

## 第18話 / 明智家の死闘（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「みんな聞いてくれ、なんとこの、『魔法少女に会っちゃった場合』が来年の春にアニメ化される事になったんだ！」

暮葉「もきゅ!? ほ、ホントなのですか!？」

圭介「ああ、来年4月から独立UHF局放やA - Xにて放送予定。特にA - X版は規制も緩いしパンチラ解禁だせ! あ、製作は」  
「Cね」

大吾「だ、大丈夫なのか? 変なオリジナル入れたりしないよな?」

圭介「大丈夫! 監督が『原作通りにする』って言ってたから!」

伊吹「あんたら詐欺するなああ ないない、絶対ないから! 読者のみなさん信じちゃダメだからね!」

圭介の思いつきのネタです。

## 第19話 / 明智光秀の野望ッ！

明智光秀。

本能寺の変で織田信長を自害へ追いこんだ事で有名だ。

しかし山崎の戦いで敗れ、百姓・中村長兵衛に竹槍で刺され死亡したんだとか。

その戦いも何世紀も前の話である。仮にそこで死んでなくても、現在生きているはずがない。

それなのに、俺達の目の前には何故か、明智光秀その人の姿があったのだ。

「ど、どういうことなんだっ？」

明智が警戒しつつ一歩下がり、光秀らしき人物に問いかける。

「完璧な成りすましましたっ……だが、他人の身体では、力に制限がかかってしまうな」

「てんめえ……っ」

明智が一歩下がる代わりに、今度は俺が前に出る。

今回俺、何もしてないしな。

だったら光秀から聞いてやるよ。なんでこんな事をしてのか。俺の目には明智光秀の姿が映っている。

甲冑を着た男……開いているのは顔面だけのようである。

「けーすけ様っ！ 危険なのです、下がって」

「そ、そうだぞ！ 藤島、丸腰じゃ危険だ！」

「お前らはさつき戦つたる？ だから今度は俺の番だ」

そう言つて、俺はまた一步光秀に近づいてゆく。

光秀……以外と背が低いな。

やっぱり戦国時代の人と、現代人とは体格が違うのだろう。

だが、小柄だからって油断はしちゃいけないな。だってアイツはただの明智光秀じゃない。

煙から生まれたんだぜ？そもそもとつくの昔に死んだ人物なんだ。

だから、あそこにいる光秀がフツーなわけがないんだ。

「我の子孫でも木下家の人間でもないな、何者だ？」

「誰だつていいだろ。ただ一つだけ教えてやる、俺はコイツらの仲間だ」

「……ほお、現代にも仲間の為に身体を張る、おバカがいようとは

……私の時代に生まれれば、戦場の英雄になれたかもしれないな」

「うるせえつ。地味に現代人見下してんじゃねえぞ、エセ武将！」

そうだ、きつとエセ武將に違いない。

じゃなかったら明智光秀が、あんなふざけた超能力なんて使えるわけがない。

多分アレは明智光秀の姿をした、別の何かだ！

……と、俺は勝手に思っております。

「それで、貴様はどうするつもりだ？」

「まずテメエはどうしてこんな事をした？ 何が目的だよ」

「……フツ、復讐に決まっておろう。我は死んでも、我の魂が成仏する事はなかった。そこでちよつとあの男の身体を借り、霊力という、簡単に言えば具現化する力を蓄えていたのだ。しかも……あの男の身体にいた副産物として、我に超能力までついてしまった。これは素晴らしい副産物だ。これで我を討った豊臣秀吉の子孫連中にも、我を裏切った我の子孫たちも、そして……まだ生きていやがるという織田信長の子孫を叩き斬れる！」

要するに、コイツは豊臣秀吉に討たれた。

その事を何百年も根に持った末、こんな犯行に及んだというわけか。つまり恨みを晴らす為に、自分の子孫にまでこんな事を……。自分のプライドの為、負けた屈辱を晴らす為に……。

「ふざけんなよてめえ！ 結局てめえがやろうとしている事は、ただの自己満足じゃねえか！」

「あれは国家の運命が変わる出来事だったのだぞ！？ それを自己満足と言えるのか貴様は？」

「確かにそうだけど、でも違うんだよ。今やってるのはそんな大きな事じゃねえ、ただの人殺しの犯罪じゃねえか！」

「話のわからぬ男だ。いいだろう、我は我のやりたいようにやる。敵は明智家にあり」

「いいぜ、てめえがまだ暮葉や明智を狙うってんなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」



決まった……とあるシリーズ読んでおいてよかったよ。  
説教ウニ男もビックリな説教が、今決まっちゃったよ！

やっぱりアレですな。説教ウニ男さんはこういう場面じゃ最強つすよね。

でもどちらかというと、俺はアクセロリータさんの方が好きだぜ。まあ、こんなオタな話は今は置いておこう。

今の俺は決め台詞が決まって、最高にハイな気分であった。しかし、そう喜んでいる場合でもないのが現実である。

「……フッ」

ニヤツと不敵に笑った光秀は、突如として刀を振りまわす。どうする、勢いで突っ込んでみるか？

……そうするかねえよな、とにかく何も考えずに突っ込め。そしてあの野郎の顔面に一発、確実に入れてやるんだ！

「うおおおおおおおおおっ！」

玉砕覚悟で床を蹴り、一気に敵との間合いを詰めようとする俺。距離にして約10m、大した距離ではない。

走ればすぐに間合いを詰めれる、そんな程度の距離でしかない。

しかし、光雄の能力を手にした光秀を相手とした場合。そんな常識などは通用しなかった。

「くたばれ、天誅だ」

「ぐあっ!?!」

振られた刀、向かってくる幾多の風の斬撃。

それは床板を砕き、俺の肉を斬り裂いていく悪魔のような一撃。

とても風とは思えない切れ味だ。しかも何故だ、さつきより能力が凶悪化している気がする。

「けーすけ様っ！ 相手っ、さつきより強くなってるのです！」

マジかよ、暮葉にもそういう風に映っていたのか。

ということは俺の勘違いではなさそうだ。

明智光秀、アイツが使う光雄の能力は……本人の能力よりも凶悪化していた。

たったの一撃で負ったダメージは結構深いものだ。いつの間にか右腕が血だらけになっている。

右腕だけではない。服にも血が滲み始めていた。どうやら今の一撃であちこち斬り裂かれたらしい。

「確かサイクロンブレード旋風烈剣だったかな。中々便利な力だ。刀と空気特性を生かした、まさに武士向けの能力だ。我の子孫は素晴らしい力を持ったものだ……っ」

「くそ……つたれえっ」

「ほら、もっと来いよ。我の子孫と木下を守ろうとするヤツが、足軽程度のタマで終わってるんじゃないぞ」

「くっ！ ……ちつくしよおおおおおおおっ！」

残りたったの6m、飛び込めば一瞬で相手の懐に入れるんだ。

とにかく一発でもアイツを殴って、能力を無効化させないと……。

先に俺の肉体が切刻まれ、潰れてしまう！

拳を振り上げ絶叫しつつ、俺は相変わらずの突撃を仕掛けている。

だが。

「そんな速度では、我に届く事は一生ないぞ！」

「うああっ！」

轟！という音と共に再び叩きつける斬撃、紅い切り傷が増えてゆく俺の身体。

黙っているだけでも苦痛なほどの激痛がする……っ。

その後びちゃびちゃという男が室内に響く。

その音の正体、それは俺の血が床に落ちている音であった。

鮮血が辛うじて砕かれるのを免れた床板に、水たまりのように溜まっている。

クソツ……まずい。出血量が半端じゃねえぞコレ。

ていっつか分が悪いぜ。俺の体は主に打撃系には強いのだが、斬撃にはちょっと弱いんだ。

そして甘く見た。光秀……滅茶苦茶強い。こうして歯を食いしばって立つだけでも精一杯だ。

「フフフッ！ フウッ！」

「……！」

しかも、いつの間にか明智が間合いを詰め、俺の顎にド派手な蹴りを打ち込んでいたのだ。

吹っ飛ばされた俺は壁に叩きつけられる。ダン！という音と共に、何かか砕ける音。

激痛に耐えあたりを確認すると、壁の破片が床にまで散乱している。どうやら俺は壁に激突した際、明智家の壁をぶち壊してしまったらしい。

「けーすけ様っ！ 大丈夫なのですか！？」

やられてしまった俺を心配し、暮葉が可愛らしく駆け寄ってきた。  
ああ、俺も馬鹿だ……こんな時にまで可愛いつて思うなんて。  
ここは滅茶苦茶痛い、女の子の前で弱音を吐くわけにはいかない。  
日本にはやせ我慢って便利な言葉があるが、それを使わせてもらおう。

「大丈夫！ きつとこれよりSMプレイのほうが痛いつて」

「け、けーすけ様……真性の変態なのですねっ」

「うるさいわっ！ とりあえず平気なのはわかったろ？」

「は、はい！ でも、もう戦わないでほしいのです！ これ以上けーすけ様が傷ついたら……っ」

そりゃあわかってるよ。暮葉の任務は俺の護衛である事。

そいっつうわけなので、俺が怪我するのは好ましくないという事くらい。

でも、この状況でそんな贅沢は言ってられない。

とにかく明智光秀の暴走を止めねば……もっと多くの人が血を流す事になってしまう。

痛いけど……あと一撃くらいなら耐えられそう。だったら我慢して突っ込めばいい。

そうすれば、他の人は傷つかずに済むかもしれない。

ハッピーエンドを迎える為には光秀を止める。光秀を止める為には俺が頑張るしかねえ！

「うっ……っ……っ！」

「む、無理しないで欲しいのです!」

「だ、大丈夫だ……っ!」

「とにかくもう立たないでください!」

そんなわけにはいかない。

立って戦わないと。光秀の暴走を止めないと……ッ!

……けど、どうすれば。どうやってあの野郎と戦えばいいんだ?

「お前のせいで……父が、木下が、藤島が……っ、焼き殺すっ!」

俺がそう考えている間に明智が一人、光秀へと飛びかかっていた。明智の右手には超能力で発生させた炎が、刀のように伸びている。2 mにも及ぶ長い炎剣を持つ明智が、かなりの速さで光秀の懐に潜り込む。

「風紗自身、私の攻撃で十分打ち砕ける。懸念すべきはあの炎剣のみ……ならばっ」

刀を振るといふ、似たような動作を取り続ける光秀。

だが風の斬撃は意外にも、明智ではなく炎剣を切裂いた!

2 mもあつた炎剣は50 cmに分けられ、ガランガランと残骸のように床に落ちて行く。

「……!??」

「ふふふ、パイロキネシス発火能力ゴトギ! より強化された私の能力には及ばん

! ふんっ!」

かなりの勢いを持った右拳が、明智の顔面に直撃する。

女の子とは言え、少なくとも40kgは超えているであろう。

それなのに、光秀は明智をたった一撃の拳で、宙に浮かせてぶっ飛ばしてしまったのだ。

なんとというパワー。常人には無理だぜあんなの。明智でさえ常人離れしてるっつーのに……。

あんなのにどうやって勝ってんだよ。だけど暴走を止めないともっと深刻な事態になっちまう。

そして暴走を止めるには、光秀をぶっ倒すしかないんだ。

アイツを倒したい……ぶっ倒して何もかも解決してやりたい。

だけど俺にはアイツを倒せる程の力がない。クソッ、倒したいのに！

「ふ、藤島っ！ どけっ！」

「へっ？」

光秀にぶっ飛ばされた明智が、俺の方へとぶっ飛んでくる。

ウソッ、まさか光秀さん。俺を明智の下敷きにするつもりですか！？

これは予想外の展開だぞ、一体どういう事なんじゃい！

「んぎゃあああああああつ！」

明智さんの素晴らしいダイブをする姿に、俺は思わず叫んでしまった。

ああ、叫ばざるを得なかったんだ。

だって上からものすごい勢いで、人が降ってくるんだぜ？

いくら明智ほどの美少女でもな、怖いもんは怖いですよ！

結局全身ボロボロの俺は、ダイブしてくる明智を避ける事も出来ず、

見事に爆撃されてしまったのだ。

しかもすげえ勢い……ああ、トルボーイ爆弾にやられた戦艦ティルピッツの気分だぜ……。

それにしてもやたら息苦しいな……。

もしかして、今ので致命傷負った？

いや、でもなんだか生温かいし……それに柔らかいような。なんだろう。この今まで感じた事もないような唇の感触？

「けけけ、けーすけ様っ!？」

しかも暮葉が驚きの声をあげている。

一体何がどうなって……ん？

「おおおおわあああああああっ!？」

あああ、明智顔近ええええええええつ!

なんか唇がっ! 乾いた彼女の唇……しかしそれがまた、なんとも言えないっ。

「んんんっ?                    つ!？」

ようやく俺に気付いた明智は、顔を真っ赤に染め上げている。

その上、石化魔法でもかけられたかのように、ピタリと動きが止まっていた。

っーかコレ、アレですよ。日本語にすると接吻ってヤツっすよね? マジかよ! なにこのロマンもクソもないファーストキス!?

いや、でもこれはご褒美じゃ?

事故とは言え、明智のような美少女とのファーストキス……すげえ、ご褒美だ!

ドクン。

うおっ!?

しかも体中がむくむくと強張り、なんだかズキズキムズムズしてきた。

なんだこの感じ。キスすると男ってこんな変な感覚になるのか？

ああ、なんだか段々……身体が熱くなってきた。胸が高ぶってきた。そしてなにより

超モーレツにみなぎってきたぞ！

「おおおおっ！ 俺のこの手が真っ赤に燃える！」

「けーすけ様……あ、あれってもしかして……っ」

「ふ、ふじ……しまっ？」

恥ずかしがる明智と何か考えている暮葉……。

まあとりあえず、この二人は置いて俺は再び立ち上がった。

あの 明智光秀の幻想をぶち殺す為に！

なんだかよくわからないが、身体が軽いし素晴らしい気分だ。

多分、今ならやれるよっ！

「な、なんだ？ あの男が復活した？」

「さあ〜て、覚悟はいいですか？ 明智光秀エツ！」

「……おもしろい！ ようやくいい目になったではないか。いいだろっ、私の敵として認めようぞ！」



「さてと、んじゃあそろそろ行くぞっ！」

最高にテンションの高い俺は、いつものように駆けだした……のだが、今回は何かが違った。

というか最初から色々の違い過ぎていた。

いつもならノロノロと走りだすだけだ。しかし今日は違う。

床を一蹴りしただけで、砲弾のように勢いよく飛び出していたのだ。しかも、俺と光秀の距離は何メートルもあつたハズなのに、あつと言つ間に5mくらいまで近づいている。

その間、精々2〜3歩足をついただけだというのに。

「速いつ！　だがまだ甘いぞ、サイクロンブレード旋風烈剣の敵ではない！」

おおっ。マジかよ、あの風の斬撃がこの目に見える。

俺は軽くステップを踏み、その斬撃を軽々と避けてゆく。

すごい　自分でも信じられないが、俺は光秀に善戦している。

「馬鹿なっ！？　私の斬撃を避けて……貴様、ホントに人間か！？」

「違う！　俺、ゾンビっす。あと魔装少女っす！」

「嘘つけ！　どこがゾンビで少女じゃ！　ええい面倒じゃ、次で決める！」

「無駄だ、もうてめえはチェックメイトだ！」

明智光秀　復讐という理由で子孫達を巻き込みやがって。

復讐したい、その気持ちはわからないでもないよ。でもなあ……。

ここは光秀の居場所じゃねえ。もう戦国時代は終わってんだよ。

死人は死人らしく、さっさと成仏しやがれエツ！

「喰らえ！ 黄金の左だあああああつ！」

そう叫び、俺は明智光秀の顎に左アッパーカットをかましてやった。華麗に決まった幻の一撃。光秀は空高く飛びあがり……。

「ほぎやあああああつ！？ わ、私の壮大な復讐計画があ！  
やな感じいいい〜！」

お決まりのセリフを吐き捨て、どこか遠くへと消えてしまった。  
そう、青空がキラーンと光ったのである。

それはつまり、明智光秀がお星様になったという事であろう。

明智光秀……謎多き武将だったぜ。もう一度戦国時代に生まれれば  
変わるかもな。

頑張れ、明智光秀。敗北という言葉に負けるなよ！

「おお！ す、すごい……っ。あやつ、あの幽霊男を倒しおったっ」

「ふ、藤島っ……」

「んんっ……あ、あれ？ 私なにしてたんだっけ？ というか何故  
か家がボロボロだぞ！？」

明智家のメンバーが全員驚いている。

それといつのまにか、光雄のおやっさんが目を覚ましていた。

どうやら光雄のおっさん、明智光秀にとりつかれている間の記憶が  
全くないらしい。

その為何故明智家がボロボロなのか、サッパリわからない様子であ  
る。

そして。

「けーすけ様っ！」

「く、暮葉っ」

全速力で暮葉は駆けよってくる。俺との距離1mくらいの所で彼女は停止した。

彼女はとても心配そうな顔をしている。

どうやら俺が勝ったのでやったね！と、いいに來たわけではなさそうだ。

「だ、大丈夫なのですか！？ お怪我は!?!」

「まあ若干痛むけど、この程度ならどうって事ないよ」

「そ、そうなのですか……っ。それにしても、さっきのけーすけ様……っ」

「ん？ どうかしたか？」

なんだろう、この思わせぶりな表情は。一体彼女は何を考えているのだろうか？

俺もいつの間にか、暮葉の考えている事を予想しようと、色々とおバカな頭を働かせていた。

ただど答えを導き出す前に、暮葉が答えを語る前に

「ふ、藤島と木下っ」

「お、おう」

「な、なんでしようかつ？」

今度は俺達の所に、明智が歩み寄って来る。

「……………あ……………ありがとう」

ありがとう……………か。

まあ……………俺にとってはその一言で十分だ。

やっぱり、人にありがとうって言われるのは気分がいい。

「明智、よく頑張ったな。なんだかよくわからないけど、多分明智のおかげで光秀に勝てた気がするんだ」

突然強くなったのも、明智とキスをしてしまった後だしな。

考えてみれば、アレがファーストキスだったんだよ……………。

だ、ダメだ。アレは事故なんだ……………っ、自惚れるなよ。

「だ、だけど藤島には一番迷惑をかけたというかつ……………えと、その……………っ」

頬を少し赤らめ、宝石のように美しい蒼い瞳をうるっと潤ませる明智。

どうやら明智は、俺に迷惑をかけてしまったと思いきこんでいるらしい。

全く、そんな事気にしていたなんてな。

俺はそんな明智の肩に手を伸ばし、自信をつけるようにポンと手を置いてみる。

すると彼女は、その目を俺の目に合わせてきた。所謂上目遣いだ。

「迷惑だなんて思うなよ。仲間を助けるのは当たり前じゃないか？」

「なか……ま？」

「ああ、一緒に血を流したんだ。もう仲間じゃん俺達？」

「……そうだなっ」

「そうそう。だから迷惑だなんて思わないで欲しいよ。俺も暮葉もあたりまえの事をしたんだよ、なっ？」

俺はそう暮葉に話を振りと、暮葉も笑顔で頷いてくれた。

それを確認した上で、再び明智のほうへと視線を戻す。

まだ話があるんだ。それも大事な話、とにかく俺は明智に謝りたい。

「それと、キスしちゃってごめん……」

「ふえっ！？ い、いやっ！ もう……気にしてないっ」

「いや、でもあれって好きな人とするものだろ？ ホントにごめん……っ」

「き、気にするなっ。あれは事故だ……仕方ない事なんだっ」

いや、事故でも気にするだろ普通……。

まあ、あのキスのおかげで強くなったような気もしたけど。

ホントになんだったんだろうか、さっきの？

まるで別人みたいに身体が軽かったし、視力も異常に高くなっていた気がするなあ。

今まであんなに動けたこと、なかったのに……。

「……藤島っ、お相子だっ」

「は？ お相子？」

「ああ、私は藤島が変態だという事はもう気にしていない。だから……そのっ、変な事は気にしないでほしいっ」

「ここで変態関係なくなっ!？」

「くすっ……関係あるんだぞ、世界で一番心強い変態さんっ」

……いかんっ、この明智の笑顔が想像以上に破壊力高いっす。

あのクールな明智だが、やっぱりこうして見ると可愛いぞコイツ。

そこは流石、女の子という生き物だぜっ。

でも、世界で一番心強い変態さんってなんでしょうか？

正直言っと、それって微妙に褒め言葉じゃないような気が……。

ま、細かい事は気にしちゃいけないってシーンなのかな、ここは。

それにつ。

「いやいや皆様、大変迷惑をおかけしました。じゃが幸い食材は無事じゃから、これからパーティーをしようではないかっ!」

どうやらこれから、パーティーっぽいしな。

確かに色々とボロボロだけど、でも折角なんだ。

細かいことは気にせず、思いっきり楽しんだほうが人生楽しいだろ  
う。

「けーすけ様っ！ なに、ご飯食べれるのですかっ!？」

「ああ。昼は食べたけど戦って腹減ったろ？ 食おうぜ!」

「はいなのですっ!」

こうして、昨日から続いていた、俺達にとっても明智家問題が解決した。

掃除の後、立派な食事が並べられ、俺達は楽しいパーティーをこころで行う。

記憶がなかった光雄さんにも事情を説明し、本人は謝るも皆、光秀の影響だとわかっていたので彼を許した。さらに俺や暮葉にも謝罪の言葉が並べられ、当然俺達はそれを軽く許す。明智家と木下家の和解も会話1分以内で完了した。こうして、このパーティーは楽しいものになったのである。

すべてが解決し、みんなニコニコできる状態へとなったんだ。

そして

「藤島っ」

「ん、どうしたんだ明智?」

「これからも、よろしくなっ」

「……おう!」

爽やかな笑顔で言ってくる明智に、俺も笑顔でハツキリと返事をしてみせた。

## 第19話 / 明智光秀の野望ッ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「突然ですが、作者が旅に出ます」

暮葉「もきゅ!? ほ、ホントなのですか!？」

伊吹「ちょ! この小説はどうなるのよ!？」

圭介「ちよっと日高のほうに……」

暮葉「日高って誰なのですか? そういえば噂で聞いたのですが、日高一派ってすごい集団が日本のどこかにいるらしいですよ」

伊吹「日高一派って極道みたいね……ていうか、日高って北海道の日高の事でしょ?」

圭介「仕方ないだろ……学校行事なんだから。つーか作者曰く、なんでこの学年で修学旅行じゃなくて宿泊なんだよ、だそつだぜ?」

伊吹「それ、さり気なく作者の年齢バラしちゃってるわよね!？」

暮葉「もきゅ? どういうことなのですか?」

伊吹「普通修学旅行って高校生なら」

圭介「なお、木曜日になるまで帰ってこないの、更新はいつも通り0時と13時に予約掲載昨日ですが、その間に貰った感想な



どの返信は作者自宅不在の為、木曜日まで不可能なのでございますが、学生にならよくある学校行事などでご了承下さい」

伊吹「こらっ！ まだ私喋って」

圭介「あ！ 感想とかしてくれると俺らも嬉しいぜ？ ついでに暮葉と伊吹がスク水を着てくれるかもしれないぜ？」

伊吹「着るかばかあ！ 無視すんなばかあ！ 2回死ねっ！」

圭介「ぎゃあああううふおあっ！？ うぎゃああぐごがあおうお！？」

大吾「国宗、縞パンだったな……」

重原「どこかで見たとある光景だね……」

暮葉「けーすけ様！ スク水ってなんですか！？」

## 第20話 定番イベント

翌日、日曜日。

実は昨日、とんでもない事実が発覚したんだ。

それは暮葉曰く、俺にはアレクサンドルの能力が、先祖返りして宿っているらしい。

はあ、頭オカシインじゃね？

誰もがそう思う事でしょう。しかし本当にそうらしいのだ。

事実俺は明智とキスをした後、滅茶苦茶強くなっただろ？

アレが俺の能力、そしてアレクサンドルにもあったとされる能力らしいのだ。

暮葉曰く、アレクサンドルは特定の条件を満たすと、滅茶苦茶強くなったらしいのだ。

例えば異能の力を右手で打ち消すとか、性的に興奮すると普段の30倍まで能力が増すとか。

……おいおい！全部どこかで聞いた事あるようなのばっかだぞ！特に後者なんて……釘 病の大吾が悶絶しちゃうだろ？

まあとにかく、そういう話があったんだよ。

つまりアレクサンドルの能力とは、『解放』というものらしい。

潜在能力を最大に引き出す、トンデモな力らしい。

魔法でもなければ、当然ある程度の科学技術が必要になる超能力でもない。

全く異種有能力……暮葉曰く、ロジーナの皇族で時々発現するらしいのだ。

ただし『解放』するには条件が必要らしい。

それが俺の場合、キスするかつ敵を倒したいという感情を抱く。そうする事により、俺の潜在能力が『解放』されるようである。

「全く……だつたら最初から解放してればいいのに……っ」

そう呟いてみるものの、そうはいかないらしい。

暮葉曰く、あまりに強大な力な為、どうも日常生活に支障を来すらしいんだ。

だから普段はリミッターがかかっている。

身体が丈夫で回復力が高いのは、リミッターがかかりきらなかった為らしい。

ホントがどうかわからん。っーか胡散臭いけど……まあ確かにキスをした瞬間、強くなりましたよ。

というわけだから信じてやる事にしたんだ。考えるのも面倒だしね！

「さてと、風呂でも入ろうかな」

晩飯後、丁度我が家ではお風呂の時間である。

実は俺、わりと風呂好きなんだ。旅行とか行ったら絶対風呂は長い。

だから修学旅行とか最悪だ。短い上に裸の野郎がいっぱいなんだぜ？

風呂は静かな所にゆっくり浸かるのが一番なんだよ！

と、というわけで我が家の風呂は、それなのに落ちつくのである。

脱皮……もとい全ての服を脱いだ俺は、生まれたままの姿で風呂場へ突入する。

だが、しかし！

「……も、もきゅっ？」

火照った身体、僅かに上気した頬、濡れた髪……。そんな感じの暮葉が浴室にいました。しかも全裸です。もちろんタオルなんてしていない。そもそも家の風呂で隠す必要性もない。

つまり、彼女は本当に産まれたままの姿なのだ。

「は……にゃ……わっ……あっ」

「……………」

嫌な沈黙である。わなわなと身体を震わせ、みるみる赤くなってゆく暮葉さん。

まずい、叫ばれると非常にまずい。女の子が叫ぶ＝無条件で男は犯罪者という図が社会には存在する。

つまりここで叫ばれば、俺の人生はコンスタンティノープルの陥落。つまり終了というわけだけ。

じゃあどうすりゃいいんだよ……ああ、一つだけ生還の方法がある。あまり使いたくはない手段だが、生きる為には仕方がない！

「きゃああああああああっ！」

そう、腹の底から思いつきり叫んでやったのだ。

当然叫んだのは暮葉ではなく、俺である。

つまり言うとな、先に叫んだ方が勝ちなのだ！

「もきゅっ！？ どどど、どうしてけーすけ様が叫ぶのですか！」

「アホ！ 裸を見られたのは俺もだ！」

言いながら近くにあるタオル等を拾い、大事な所等を隠す俺達は正

に真っ裸。

二人とも母親のお腹の中から出て来たばかりの、ありのままの姿なのであった。

濡れた髪、成熟しきっていない身体。まだ幼さの残る彼女、そこに底知れぬ美しさが秘められている。

そんな暮葉に、素晴らしい魅力を感じてしまった俺である。

「誰も乙女なけーすけ様なんて期待してないのです！」

「誰が乙女だっ！モノだってちゃんとしてたろうが！」

「とにかく変態です！けーすけ様は明智殿の言う通り、世界で最も HENTAI さんなのです！」

「探せば俺以上の変態はいるよ……つか、結局俺が悪かいつ！」

「あたりまえなのです！この変態皇太子様っ！」

いかん、緊急回避として俺が叫んだのに、なんだか俺が悪い方向に話が流れ始めている。

このままだと、本当に人生がビザンツ帝国のように終了しちまうぜ。なんとしてでも逆転勝利し、身の潔白さを証明せねば！

「落ちつけ暮葉。これは事故、不幸な事故なんだっ」

「い、今更謝ったって遅いのですよっ！」

「じゃあどう責任取れと!？」

「せ、責任取って一緒に入ってくださいっ!」

……ん、ちよいと待てよ？

そのセリフは色々な意味でおかしいと思いませんか？  
女の子から一緒に入って……だどっ？

「はいいいいいいいつ！？」

あまりの衝撃に奇声を発してしまっただよ。

え〜っと、やっぱりなんだよコレ。ただの天国じゃねえか！

でも、考えて見れば俺の理性と暴れん坊将軍がまずい事になっちま  
うじゃねえか！

やベエよ俺の理性が！どっかにぶっ飛ばないようにしねエとまずい  
ぜ！

というわけで、藤島家のそれほど広くもない浴室。

俺と暮葉は同じ浴槽に浸かっていた。

当然裸を見るのはまずいので、お互いに背を向ける形である。

それでも……時々暮葉の生々しい背が触れて……っ。

「……………っ」

「み、見ちゃダメなんですからねっ」

「だが断……げふんげふん！ 見ねえから心配すんな」

「……………怪しいのです」

「怪しくねえよ、絶対見ないから」

待て、落ちつけえ〜<sup>リアル</sup>現実に吞まれるな。

どうして責任を取る事が、二人で一緒にお風呂へ入る事なんだよ。女の子と嬉し恥ずかし一緒に入浴って……これなんてエロゲ？確かに滅茶苦茶嬉しいよ。すっごく緊張して、心臓が先程からバクバクうるさい。

ドキドキするし、男として大切なエツフェル塔の制御だって大変だ。大変そうに見えるけど、本能的にそれくらい喜んでるわけですよ。ただどおかしいと思うだろ。どうしていきなり一緒に入浴なんだ？どうしようか、ここはストレートに訊いてみるべきなのかな？

「な、なあ。俺、一緒に入る必要あったのか……？」

「あ、ありますっ。罰ゲームなのですからっ」

へえ、罰ゲームなのかあ。それってむしろ暮葉のほうじゃ……。だってその……すまん、俺には混浴とかご褒美です。でもこれって暮葉には苦痛なんじゃ……。

いくら護衛対象とは言え、俺の事を変態というくらいだ。

きっと好印象ではないだろう。だから嫌いな人と一緒に入る風呂は……。

喜んでいた俺が馬鹿だった。なんだか暮葉が心配になってきたよ……。

「あのなあ、女の子と入浴って全然罰ゲームにならないぞ？」

「そ、そうなのですか！？　だって葵さんがけーすけ様は変態だけど意外と純情だって……っ」

「お前……俺が鼻血を吹いて倒れると思ったのか？」

「は、はい……っ」

……バカだろ。普通に考えて女嫌いか現実女嫌いを除き、誰でもごく褒美と思っちゃうだろ？

全然罰ゲームにならないし、しかも辛いのはどう考えても暮葉のほうだ。

好きでもない人と一緒に風呂なんて……エロゲーでも今時そんなのねえよ。

嫌い嫌いと言いつつ、実は主人公が大好きってパターンがほとんどだからな。

とにかく、今辛いのは俺ではなく暮葉だ。なんとかしないと……っ。

「そんなわけないだろ、それより暮葉はどうなんだよ」

「も、もきゅ？ 拙者ですか？」

「好きでもないヤツと風呂入って、嫌じゃないのか？」

「っ……無神経な人なのですね、けーすけ様」

「む、無神経って……」

そりゃあ何度も伊吹に言われましたけど……。

まさか、こんなちっこい女の子に言われようとは。堕ちねえ俺さんも。

「と、とにかくこれからお風呂上がるまで会話禁止なのですっ！」

「なにその理不尽な要求！？ 気まずいだろ！」

「もきゅっ！ こっこ、こっち見ないてくださいー！」



「うおっ!? す、すまん!」

あぶねえ、一瞬振り向いて見てしまった……。

クソッ、なんて綺麗な肌してやがるんだよ。

おまけに触れると温かくて……ああ、精神的に辛い。

息子の暴走を抑えるのが辛いぜ……っ。

「……………」

「……………」

しかもホントに無言になっちゃったし……なんだこれ、滅茶苦茶気まずい。

やっぱり何か会話くらいしたほうが……。

でも話題がない、そして恥ずかしくて言葉が喉を通らない。

やっぱり暮葉もそうなのかな。だからあえて黙ってるのか……。

「……………あのっ、けーすけ様っ」

「あ?」

は、話振られた……さっき黙ってるって命令されたのに。

一瞬ドキッとしちまったじゃねえか。

「……………昨日は、申し訳ございませんでした……っ」

「昨日?」

なんだ、突然?

コイツいきなり昨日の事を謝りだした。だけどコイツ、昨日何かや  
ったっけか？」

「はいっ、本来けーすけ様は関係なかったのに……拙者の力不足で  
っ」

「……あのなあ。俺から首突っ込んだんだぜ？ おまえは気にする  
必要ないんだよ」

「な、なのですがっ」

「力ならお前のほうがあるだろ？ ほら、俺って身体が丈夫な事だ  
けが取り柄。別に魔法も超能力も使えねえし、変な能力はあるっほ  
いけど、それも滅多な事じゃ発動できねえんだろ？ つー事は普段  
はただの高校生、いつでも実力のあるお前に比べりゃ、俺なんて力  
スみたいな存在だから」

自虐ネタって正直痛いが、暮葉の為には仕方ない。

それにこれは事実だ。実際俺は暮葉よりも遥かに弱い人間だ。  
俺は身も心も弱い。だからあの時 あんな事になっちまったんだよ。  
思い出したくもねえ……そして出来れば暮葉にだって知られたくも  
ない。

知られれば、きっと俺の評価は真性のクズ野郎になるだろうから……  
…。

「けーすけ様っ、そんな……自虐しないでくださいよ。けーすけ様  
は強いのですよ」

「……弱いよ。たった一人をロクに守れなかつたくらい」

「た、たった一人？」

「いや、なんでもねえ……っ」

女の子と風呂に入れて、幸せな気分……なハズなのに、次第に俺は鬱な気分になっていく。

たく、やっぱり弱いぜ俺は。もう終わったってのに何時まで引きずってんだ。

ていつか、なんで暮葉に言っちゃまったんだろっな？

暮葉はそういうのを絶対心配するタイプ。だからこそ余計な心配はかけたくないのに……。

「……にゆふ、けーすけ様」

「なんだよ？」

「……弱いのでしたら拙者、けーすけ様を全力でお守りします！」

お守りするって、元からそれが目的の仕事だろ？

……でも、かと言って彼女の仕事の邪魔はしたくない。

それに、こんなに活気ある声で言われるとなんだか気分がいい。

「……ありがとう」

だから俺は、素直に彼女にお礼を言ってあげた……。

……ところで、いつまで入ってるつもりだろう？

そろそろ息子がホントに限界です！

第20話 定番イベント（後書き）

後書きトークコーナーは木曜日まで中止させて頂きます。  
申し訳ございません！

## 第21話 部活入ろうぜ！ 前編

5月9日月曜日、放課後。

「ぶ、部長おおおおおおおつ！」

血と汗で汚れた黄ばんだ胴着を着た、二人の女の子。

一人は小柄で、もう一人はお姉さん体型。

だが、お姉さんのほうは完全に口から泡を吹き、伸びている。オマケに白目だ、これは完全に勝負が決まっちゃいましたぜ……そして。

「にゅふふっ！ 勝利完勝パーフェクト勝ちなのです！」

笑顔で喜ぶ、小柄で愛くるしい外見を持つ女の子。

……さて、どうしてこんな事になったのでしょうか。

それは遡る事数時間前、お昼休みの事である……。

### 昼休み。

小学生の頃、机を動かし班で一塊になり、みんなで談笑をしながら給食を食べた事がある。

今はそれが弁当や購買のパンというだけで、俺達は机を動かし皆で昼飯を食べていた。

主に俺や伊吹、小坂に重原についでに大吾。

そして先週から初高に通う事になった暮葉と一緒に食うメンバーだ。あと今日になって発覚したけど、暮葉って携帯電話を持っていたらしいんだ。

どうやって手に入れたかは定かではない。おそらくアルファ隊の活動の為だろうが……。

だが、それがわかったので今日の昼はアドレス交換会であった。俺も暮葉の電話番号とアドレスをゲット。やった……母ちゃんや葵を含めれば、女の子6人目だ！

んで、その後も色々談笑をしたのだが……ある時、伊吹が。

「そついえばさ、暮葉って部活とか入るの？」

そう暮葉に言ったのである。

思えばこれがすべての始まりだった……。

「もきゅ？ ぶかつ……って？」

「ああ、どこの学校にもあるけど、基本的には同じ趣味や興味を持つ人の集まり……かな？ ちなみに伊吹は剣道部で一番強いよ」

「こ、こら亜紀！ 余計な事言わないでよ！」

前にも言った気はするが、伊吹は剣道部所属。

そして、今や部長を抜いて一番の実力を持つ、天才剣道少女なのだ。なんとって、あのバケモノの攻撃を受け止めるくらいだからなあ。相当強いよ、伊吹は。

「そ、そうだったのですか!？」

「ま、まあ……一応よ一応っ」

「伊吹さん！ すごかったのですね！ 思わず尊敬しちゃいましたのです！」

「ええっ？ え、えっと……ほ、褒めても何も出ないわよ？」

困ってるように見えるけど、アレは多分嬉しいのだろう。だって顔が微妙に笑ってるもん。

「重原さんや大吾さんは何か部活やってるのですか？」

「僕はやっていない。ゴールデンタイムのアニメが見れない！」

「だから引きこもりって言われるのよ……」

「大吾に限ってはキモオタ乙だよ……うん！」

「ぐはっ！？ ふ、ふん！ 現実女に言われてもショックじゃねえやいー！」

うわぁ、女子からの評価すこぶる悪い。

まあ、似たような理由で部活をやらなかった俺としては。なんだか俺の事を言われている気がして……正直へこみます、ハイ。

「俺は家が忙しいからね、部活はやってないよ」

「でも重原は確か武道家だったわよね？」

「重原は大吾と違って、部活やってない動機が不純じゃないからOKだね」

「なんか僕との扱いの差がひでえ！ くそっ、なんで広ちゃんばかり！」

そりゃあ堂々と現実女の前で、現実女がクソッて言ってるやあね。自然とお前の評価は下がるよ。ていうか俺も大吾の歪んだ愛はどうかと思うんだ。

まあ、俺も二次元は好きだけどね。事実あそこは楽園だしさ！

「けーすけ様はやってないのですか？」

「ん、俺？ 俺はやってねえけど？」

「けーすけ、オタクだから体力に自信ないのよね？」

「いやいや、圭くんは馬鹿だから文化系に入っても脳が追い付かないんだよね？」

「てめえら人の事見下しすぎだろ！ 確かに頭は自信ないけど体力は自信あるわ！」

これでも、陸上部に100m走で勝った事あるんだからね！

……まあ、中学時代の話だけど。流石に高校生にもなると差が半端じゃないね。

ていうか伊吹さん、俺で遊んでやがるな。その嫌な笑顔、絶対遊んでいる時の表情だ。

一方、暮葉はその琥珀色の瞳を輝かせ……。



「拙者も部活に入ってみたいのです!」

ああ、部活に憧れちゃったよこの子……。ていうか、部活に入るは俺の護衛放置だよな? いいのか、職業的にまじいんじゃないのか?

……まあいいか、自分の身くらい自分で守れるし、暮葉にだって楽しみを与えてあげたい。

折角学校に通うんだから、やっぱりこの生活を楽しんで欲しいよ。

「部活って今時期入れたかい?」

「僕は知らん!」

「大吾は黙ろう? あたしの記憶だと、うちの学校いつでも入れたよね?」

「うん。来るものはいつでも拒まないっていうのが、うちの学校の部活だったわね」

そう、伊吹の言う通り、基本的に我が校の部活は来るものを拒まないんだ。

学年も季節もソイツの事情も知ったこっちゃねえ。やりたい人は楽しくやろう。

それが初芝高校の部活動である。しかも、地味に部活は強いほうである。

大会じゃよく上位にいるし。特に陸上部は前の大会まで決勝まで行ったらしい。

「じゃあ、今日あたりにでも許可取って見学に行ってくれば?」

どうせ他人事だしと、俺はテキストに暮葉にそう言ってあげた。  
うん、これは俺なりの優しさなんだっ！

「はい！　じゃあ一緒に行きましょうけーすけ様！」

「ちよっ！？　なんで俺まで！？」

「そうね、暮葉だけじゃ不安だし、あんたも一緒に入ってあげれば  
？」

「い、伊吹さん！？　どうして暮葉をフォローした！？」

どういう事だ。畜生、何故俺まで部活に入る展開になっているんだ？  
しかも小坂や大吾達まで「それいいね」とか言いだすし。  
ちよっと待てよ、部活に入ったらアニメ見たりゲームする時間なくなる  
なるだろ！？

「圭くん、部活入って友達増やせば？」

「な、なんだたったら剣道部でもいいのよ？　一からシバくから！」

「シバかれるなんてお断りじゃ！」

なんで少し恥ずかしそうに言うんだよ、伊吹さん！  
どうせシバくのが目的な癖に。

ていうか、そこまでして剣道部に入って欲しいのかよ！

「拙者……けーすけ様が一緒のほうがいいのですっ」

「ほら、木下さんだってそう言ってるじゃないかい？」

「ふん、部活なんて僕的にはリア充がやるもんだ。でも圭介だし、特別に認めるぜ！」

「逃げられないわね圭介。いつそオタク人生さよならすれば？」

「圭くん、可愛いとこの頼みなんだから。ちゃんとお兄さんするんだよ」

「よろしくお願いします！ けーすけ様っ！」

「……なんでこうなっただっ！」

……というわけで、俺まで部活に入らざるを得なくなってしまうのだ。

もちろん暮葉が入る部活にな。この日の放課後は、それはもう色々な部活を見回りましたよ。

まず最初に見学したのは、県内でも最弱を誇る

「行ってくれ……頼むぞ。目指すは……甲子園だあああああああああああああああっ！」

熱い顔に熱い闘志、どこまでも熱い男が全力投球をする。

時速は110km/h超え、高校野球にしては高レベルであろう。汚れたユニフォームからは漢気あつこけを感じるぜ。

一方、バッターは黒いユニフォームを着用した、近所の古宇坂東高校の生徒。

「打たせるかよおっ！」

バッターはバットを一振り。

カキンという音が響き渡ると、ボールは空高く舞い上がっていた。

「う、打たれたっ!？」

物凄くシヨック顔の少年……。

結局この古宇坂東高校との試合は、我が初芝の惨敗に終わった。

「うううっ! こ、甲子園がああああっ!」

「畜生、せめて砂だけでも持って帰ろう……っ」

お前ら、その砂は母校の砂だぞ!？」

甲子園の砂じゃねーだろうが!

……ダメだこりゃ、初芝高校の野球部本格的に終わってる。

「けーすけ様、あれどうしたのですか?」

「ああ、うちの学校。野球部だけは滅茶苦茶弱いんだよ……今13  
5連敗な」

他が強いのに何故野球部だけ、地元の弱小校にすら負けるほど弱い  
んだろう?

ていうか高校の部活動じゃ、世間では野球が一番注目されるのに……

北海道の高校すら野球のおかげで有名な所、あつたりするのになあ。  
つまり言つとだな、初芝高校は地元でしか有名じゃない高校なのだ。  
でもさ、これだけ弱かったらむしろネタにならないんだろうか?

……ま、世間は雑魚には興味ないみたいだ。連敗記録がすごくても

ネタになるわけないか。

「そもそも、野球部って女子はマネージャーにしかならねえぞ？

「もきゅ！？ そ、そうなのですか！？」

「ソフトボール部があれば似たような事はできるけどなあ」

うちの学校、野球部が弱いせいでそういうのはないのだ。

その代わり水泳部とか相撲部とか、普通いらぬような部活はあるんだ。

理由は当然、強いのでそこそこの結果を残したからである。

「たく、いくら強いからって税金使ってまでプールと相撲部屋作るか普通？」

「とりあえず次どこいく？」

「んん、伊吹さんは剣道部なのですよね？」

「スマン、剣道だけは勘弁！」

「もきゅ？ どうしてなのですか？」

「いやあ、まあ……とにかく剣道部はダメ！」

俺がシバかれるし、剣が得意な暮葉が剣道部に入る。最強フラグなのである。

つまり、伊吹の立場が危うくなってしまっただ。

それでも伊吹が負けて自信を失ってしまったら……うん、流石にそれはいけないと思う。

部としての戦力は上がっても、伊吹がへこんじゃったら元も子もない。

だから、暮葉は剣道部に入っただけいけないんだ！

「んん、けーすけ様がそういっただらう。それじゃあ……じゅーどー部ってなんですか？」

「お前……男っぼいのばっか選ぶな」

「知らないものには興味があるのですよ！」

ま、まあ暮葉は異世界人だし、日本にいたのは一ヶ月ちよいだからな。

まだ知らないことはいっぱいあるだらう。

そうだなあ。入るか入らないかは別にして、柔道がどんなものか見せるのはいい事だらう。

万が一入るとしても、柔道部だったら俺としてもやりやすいかもしれない。

「そっか、それじゃあ柔道部に行ってみるか！」

「もきゅー！ りょーかいなのです！」

こうして、俺達は柔道部に見学に行くことになったのだ。

……そして現在

「ぶ、部長おおおおおおおっ！」

「にゅふふっ！ 勝利完勝パーフェクト勝ちなのです！」

「柔道部に行くなんて言った結果がこれだよ！」

あの後柔道部に行つて、俺達のごく普通に見学をしていたんだ。

そしたら暮葉が「やってみたいのです！」なんて言うので、部長が対戦相手になり、練習試合を始めたのであつた。

そこまではよかつたんだ……ところが、暮葉はアレでも戦闘のプロである。

流石はアルファ隊、そこらの高校生が敵う相手ではなかつたのである。

部長は見るも無残な姿を晒し、無様にその場に伸びていたのであつた……。

「けーすけ様！ 柔道つて、意外と簡単なのですね！」

「お前なあ……」

「部長に勝つちやいましたよ」

やべえ、部員の視線が冷たい。

というか、完全に暮葉を恐れている目だぞアレは……。なんか、風当たりが冷たいですよ！？

「もきゅ？ けーすけ様、帰るのですか？」

「アホ！ 部長ボコボコにしといて長居できるか！ 行くぞっ」

「あわわわっ！ ま、待つてくださいいけーすけ様ーっ！」

慌ただしく去つてゆく俺達に向けられた視線は、冷たいの一言であ

った……。

その後、テニス部にも行ってみたが、そこでも暮葉は大暴走。なんと部長とのシングルスで勝利してしまったのだ。

その為その場に居づらい雰囲気となり、俺達は帰らざるを得なかった。

結局、この日の見学は無意味なものになってしまったのである……。



## 第22話 部活入ろうぜ！ 後編

5月11日水曜日……ん、部活はどうしたって？

まだ入ってないよ。何故なら……運動系の部活は全滅だからだ。

暮葉の神すぎる運動神経には、いくら経験者でもそこらの高校生が敵うレベルではなかったのだ。

中には新戦力として暮葉を招きたい所もあつたが、今度は逆に暮葉が興味がなかったりで……。

一方暮葉が興味を示した所も、こんな恐ろしいのを入れれるかと暮葉入部を却下。

そんなわけで、結局俺達はどこの部活にも入っていないのである。

「もきゆう……ぶ、部活っ」

でも暮葉は入りたみたいだしなあ、どうしよう？

でもなあ、もう暮葉を受け入れてくれる所なんて……。

いや待てよ。まだ文化系には足を踏み入れていないな。

「よし暮葉。今日は文化系の所いこうぜ？」

「もきゆう？ 文化系ですか？」

「ああ、うちの学校文化系のほうが種類豊富だぜ？」

それに俺としても、正直運動系より文化系のほうがいい。

別に体力に自信がないからとかじゃなくて、文化系のほうが楽しそうだし。

週に2回くらい、顔出しとけば問題はなさそうだからな。

正直に言おう。俺はホントは部活なんて入りたくないんだ。

……アニメ見たりゲームする時間がなくなっちまうからな！

「文化系……うん、行ってみましょう！」

「決まりだな」

……とは言うものの、実は文化系の部活なんてよくわからないんだ。伊吹は運動系だし、小坂に大吾に重原はそもそも部活をやっていない。

……そうだ、こういう時こそ我が妹！

アイツ、部活やってる友達とか多そうだからな。

それに暮葉が部活を探しているというのも知っているし、アイツに訊くのが一番だろう。

というわけで昼休み。俺達は1年3組、葵がいるクラスを訪れた。

「すみません、藤島葵さんって人呼んでくれますか？」

「ふじ……ひいつ！？」

あれ、なんか後輩に怖がられたぞ！

……もしかして、俺と同じ中学出身なのかな？

中学時代は色々あったからな……仕方ない、ここは暮葉を使おう。

「けーすけ様……？　なんかあの人、けーすけ様の事……っ」

「あ、ああ。とりあえずお前が呼んでくれないか？」

「わかったのです。あの！　このお方は葵さんのお兄さんなのです。少し用事があるのですが、よろしいでしょうか？」

「お、お兄……さん？ わかりました……っ」

暮葉に頼まれると、後輩の女子生徒は渋々頼みを引き受けてくれた。やっぱり、俺と一緒に来るのは問題だったかな。

ていうか、まだ俺の噂って消えてないんだな。

俺の評判がこのように、すぐぶる悪いのには色々な事情がある。でも今は詳細は省いておこう。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！ あ、クーにゃんも一緒だ！」

「こんにちは、葵さん！」

「よお、呼び出して悪かったな」

「うんうんいいんだよ！ 葵はお兄ちゃんの為なら脱いだっていいんだから！」

「そ、そうですかございませゆか……」

……ダメだこのブラコン妹、早くなんとかしないと。

まあ、妹に好かれるのは悪い気分ではないけどね。

「ところで、お兄ちゃんこっちに来ても平気なの？」

「え？ ああまあ……軽く引かれたけどいつもの事だし、別に気にしてねえよ」

「そっか……大丈夫！ 葵はちゃんと事情、わかってるんだからね！」

「お、おう。ありがとな」

たとえ周囲は悪い目で見ても、家族や友達は味方だ。下手に騒ぐと余計に状況が悪化するのには目に見えている事である。だから、俺は正直この現状でもいいんだ。だけど困ったな。事情を知らない暮葉が心配そうな表情をしている。

「あ、あの。けーすけ様、どうかしたのですか？」

「あ？ いや、大したことじゃないし、別に気にすることないよ」

「なのでしたらいいんですけど……っ」

やっぱり、暮葉には知られたくないな……。

もし知られば、場合によっては俺はただの悪人だ。さっきの後輩のように、俺を恐れてしまいかもしれない……。

「ところで二人とも、葵に用ってなに？」

「ああ、今暮葉が部活探しているのは知ってるだろ。それでさ、文化系の部活ってどんなのあったっけ？」

「クーにゃん、文化系に入るの!？」

「はい！ そのつもりなのです!」

「絶対運動系だと思ってたよ!？」

「お前、そりゃ偏見だぞ」

まあ、運動系に入ろうにも入れない状況になっちまったのが事実な  
んだけど。

それは葵に言っても信じてもらえないだろう。

なんにせよ、運動部に入れなくなってしまったのは事実だ。

しかし文化系なんて俺達は知らない。だから葵に話を訊くんだ。

「お願いします。葵さんだけが頼りなのです！」

「んん〜……葵も帰宅部だし」

「もきゅ？ 葵さん部活やってないのですか？」

「うん！ お兄ちゃんの為にやってないんだよ！」

「け、けーすけ様の為になのですか！？ ……愛されてるのですね、  
けーすけ様」

「正直ちつとも嬉しくねえ……」

それでも言う事聞かないのが葵だな。

まあ別に、帰宅部で悪いって事はないだろう。だから問題はないと  
思うけど。

……ところで、帰宅部は内申点が下がるって本当の話なのかな？

社会に出ると、部活やってないテメエはクスって扱われるのはホン  
トなのかな？

「すみません……葵さん」

「い、いやクーにゃんは謝らなくても！？ あ、そういえば葵の友  
達に人数不足で困ってる部活があるよ？」

「え？ マジで？」

「何部なのですか!？」

「え〜っと、写真部だよ」

写真部かあ、確かにあまり人は入らなそうだな。

それでも人数不足で困ってるって……そりゃ深刻な問題だな。

確か我が校の場合、部員数が半年足りない状況が続いた場合、廃部がサークルへ格下げされるんだよな。

廃部は当然部活自体が消えるし、サークルになると部費も出なくなる。つまり、全額自腹でなんとかしないとイケなくなるのだ。葵の友達の部活……危機だな。

「写真部？」

「うんうん！ でも葵、写真部ってよくわからないんだよ」

「わかんねえのかよ！ まあ俺もわからんが……」

……とりあえず、写真を撮って何かをする部活だとはわかった。

多分そこまで苦労する部活ではないだろう。

それに暮葉がいくらアホでも、流石にカメラの使い方くらいは覚えられるはずだ。

俺としても部活をするなら楽なほうがいいし、それを考えると写真部は案外いい所かもしれない。

「とりあえず行ってみるか？」

「はい！ とりあえず行ってみるのです！ 部活に入らないと二トになるって、大吾さんが言っていましたので！」

「そ、そうか……」

大吾……アイツ絶対某ガールズバンドアニメの話しやがったな。確かにあのアニメの放送以降、軽音楽部って人気になったよね。ウチの学校にも、突然軽音楽部なんてのが出来ちゃったくらいである。

例によって部員の大半は野郎で、しかもオタクなのだが……。

「それじゃあ友達に言っておくね！ きつと友達経由で部長さんに話が伝わると思っから！」

「おう、頼むぜ」

「お兄ちゃんとクーにゃんの頼みだもん。断れないよ！」

我が妹ながら非常に出来た妹である。

勉強もできる。スポーツも得意。交友関係も良好。その上明るくて人見知りは絶対しない。

これでブライコンではなく、適度に仲のいい妹ならパーフェクトなものにな。

そんなmyシスター葵の案内もあり、放課後俺と暮葉は本当に写真部へ見学に行った

## 第23話 写真部

……部室の前、確かに写真部と言う案内がある。  
壁には写真部撮影の写真が数枚。どれも中々の傑作だ。  
それなのに、人の気配はほとんどない。不思議な所である。

「ここが写真部の部室なのですか」

「てか、普通の教室だろ？」

文化系の部室なんて、吹奏楽とか美術とか以外は普通なはずだ。  
でも写真部だしな。パソコンとかスキヤナくらいはありそうなもんだ。

まあ、とりあえずは入ってみないとわからないな。

俺は扉を開け、「失礼します」と一言挨拶をし、暮葉と一緒に部室へ入る。

部室は普通の教室の半分程度の大きさだが、やはり写真部だけあって設備は整っているようである。

ノートパソコンにスキヤナ、プリンタ等はもちろん、奥には暗室なども存在していた。

あの暗室と思われる部屋にある機械……多分現像機であろう。

そして、部室中央にある机。その席に座っている2人の人物。

一人は男、細身で金髪のイケメン野郎だ。畜生イケメンかよ！

一方、もう一人は女子であった。もしかしてあの子が葵の友達かな？

「……っ？」

びくんっとな俺達に反応する少女。



セミロングな緑髪。女子としては平均的な身長。ぱっちりとした瞳は茶色だ。

どことなく大人しそうな雰囲気、優しそうな女の子だ。

しかも顔まであどけない。なんてことだ、これは美少女ではないか！

「やあようこそ、バーボンハウスへ」

「ぶ……………部長。ここ……………写真部ですっ」

「まあまあ青山くん、細かい事は気にしない」

……………なんなんだ、コイツら？

部長はキザだし、青山さんという人はおどおどしている。

青山さんは可愛いが部長はムカつくぞ。イケメンだしな。

「そんな事言うから……………部員、いないんですよ……………？」

「痛い所突くね青山くん……………まあいい、そんな勧誘にホイホイついて来ちゃったのが君じゃないかい？」

「だって……………写真好きですから……………っ。部長が少し気持ち悪いのも我慢です……………っ」

「ひどいや！ ボクそこまで気持ち悪いの!？」

正直……………かなりキモいっす。

でもそれを言ったら殺されるし、今は我慢しておこっ。

それよりもまず、俺達は自己紹介をしないと。

俺と暮葉は隣に並び、部長と青山さんのほうをしっかりと見る。

「あー、俺達見学の者なんです……」

「うん、話は青山くんから聞いているよ！ ようこそ写真部へ！」

葵のヤツ、ホントに青山さんって人に言ったんだな。

なるほど、だからさつきから俺達の事をチラチラと見ているのね。キザな部長さんも、青山さんから話は聞いているみたいだ。

「は、始めまして！ 木下暮葉と申すのです！」

「俺は藤島圭介っす」

「ボクは浅間英樹。射精部の部長さ」

「……写真部です。気持ち悪いですよ……部長」

「おっと失礼。ちなみにこちらはボク以外の唯一の部員、青山千早  
くんだ」

……部員数が足りない理由、なんとなくわかりました。きっとこの部長が原因であろう。

いや間違いない。こんなのが部長なら普通は引くぞ。

そうになると、青山さんの写真にかける情熱は本物みたいだな。

こんなキザで言動がキモい部長なのに、それでも写真部にいるんだもんな。

本人だつてさつき言っていた。きっとその情熱は本物だ。

「よ、よろしくお願ひします……っ」

「は、はあ。よろしくお願ひします」

「よろしく願いますのですっ」

なんか、変な部活に来ちゃった？

いや、でも青山さんはマトモな人だし、変なのって部長だけだよな。

「まあまあ、そう改まらなくてもいいだろう。そこに座るといいさ」

爽やかなスマイルを浮かべ、空席に指を指す浅間部長。

なんでだろう。イケメンだから滅茶苦茶ムカつく……。

だけど冷静に考えれば、浅間部長って残念なイケメンだよな。

「ちなみに藤島くん、そこにエロ本あるけど読むかい？」

「別にいらないうすよ」

いや、ホントは欲しいんだけど暮葉や青山さんがいるし。

世間体を考えなければな。それを守ってこそ紳士になれるのだ。

「……部長っ、やっぱり……気持ち悪いですっ」

「けーすけ様といい勝負かもなのです……っ」

「俺はあそこまでオープン・エロじゃねえ！」

それから数分後、浅間部長の暴走もようやくおさまり……。

俺達は写真部の活動について、ようやく説明を受けたのであった。

長かった……説明されるまでここまで時間がかかった事、今までなかったぜ？

これも全て、浅間部長が残念すぎるせいだろう。

青山さん曰く、浅間部長は真性の変態なんだとか。ちなみにあんな男でも3年、俺達よりも先輩である。

「具体的に写真部というのは、普段は各自で写真を撮影して、活動日にそれを皆で楽しく批評し合ったり談笑したりするんだ」

「……………部長が嫌ですから、その……………今は批評だけですけどね……………っ」

わかるよ青山さん。その気持ち、痛いほどこの胸に伝わります。

「冷たいねえ青山くんは。まあ結論写真を撮って楽しくやろうというのが日常の活動さ。後は色々な技術が学べたりするね。そして文化祭や体育祭などの行事では、生徒が頑張っている姿を撮影するんだ。それを生徒会に送りつけて会誌に載せてもらったり、あと年に一度の校外展でテーマを決め、写真を撮影してそれを展示する。これが写真部の活動だよ」

浅間部長の説明を聞く限り、やっぱりごく普通の部活である。

その手の趣味の人にとっては楽しそうな内容だし、素人でも安心してきる内容だ。

それなのに部員不足って……………やっぱりこの部長が問題なんじゃね？俺や暮葉でさえ引いてしまう程の男だ。普通の人なんて目撃したくもないだろう。

あ、そんな事言ったら青山さんが普通の人じゃないみたいだな。青山さんはごく普通の人だと思うよ。

ちよっと控えめな感じだけど……………正直そこがたまらないです！

「ちなみに今入部すると、安物だけどデジカメ1個。そしてこのエロ同人誌があたるよ」

「もうダメだ……部長のせいで写真部廃部だよ……っ」

……な、なにいいいいいいいいいつ!?

えええ、エロ同人誌。しかもそれは北方projectの同人誌やん!

それも俺の大好きな……みよ、みよんじゃねえか!?

しかもそれって入手困難な限定版なハズ。何故浅間部長がそんなレア物の同人誌を持つてるんだ?

もしかして浅間部長、相当のオタクなのか。いや、それはともかく……滅茶苦茶欲しい!

あのレアな北方projectの同人誌が欲しすぎる!

「もきゅう……面白そうなんですけど……でもけーすけ様、どうしま  
ま」

「よし! 入部しましょう!」

「……えっ!？」

「ほ、ホントかね藤島くん!？」

おお、浅間部長のイケメンフェイスがさらに輝いた。

これなら、彼の本性を知らない子なら一目惚れであろう。

さらに、あれだけ絶望していた青山さんまで驚いていた。

これはいい傾向だ。よし、このまま話を続けよう。

「ああ。妹から事情は聞いています。部員が足りないんですよ?」

「ああ、ボクと青山くんを含めてたったの二人だね」

「部長が気持ち悪い事……するからですっ」

「ボクのせいかい!？」

「9割は部長のせいですよ……っ」

まあ、確かに青山さんの意見に同意だ。浅間部長はあまりにも残念すぎる。

折角宣伝に使えそうなイケメンフェイスが、そのド変態のせいで台無しである。

きっと浅間部長が真人間なら、写真部が廃部の危機に陥る事はなかつたんだろう。

だけど、そんな浅間部長のせいで廃部になんてさせれないな。

青山さんは葵の友達。その友達は写真が大好きで写真部にいる……みたいだ。

だからそんな青山さんの為にも、写真部を廃部にさせてはいけない。我が校は4人入れれば部として認められるんだ。だから俺は入るぞ、写真部に!

……それに、北方projectのエロ同人誌も欲しいしな。

「え、え〜っつと……まあとにかく、写真部は廃部の危機なんですよね。だったら俺達が入れば丁度穴が埋まります」

「けーすけ様……っ、そうですね。実は拙者もちょっと楽しそうだな〜って思ったのです!」

俺の気持ちも暮葉の気持ちも整った。あとは、入るだけだ。

それで暮葉が部活に入れる。青山さんの居場所を守る。

そして、北方projectのエロ同人誌が手に入る。

「ですから俺、入部します」

「拙者も、よろしくお願いしたいのですっ!」

「藤島くん、木下くん……ありがとうございます。君達は我が写真部の救世主だ!」

「あ、ありがとうございます……先輩方っ」

浅間部長も青山さんも喜んでいる。

……よかった。これで暮葉が部活に入ることができた。

青山さんの居場所も守った。そして……北方projectの工口同人誌も入手できる。

部活なんて初めてだけど、多分……。

きっとこれから、それなりに楽しい日常が始まるのかもしれない。

「それじゃあこれ、入部届けは担任に提出するよつに」

「はい」

「ありがとうございます!」

……「ごうして、俺と暮葉の部活選びはこの日で終了したのである。

### 第23話 写真部（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「どうも、今回からこのコーナーまた復活です！」

伊吹「どうせ読む人いなさそうだけど」

圭介「ころそこ！ 夢をぶち壊す事言うな！」

伊吹「ああごめんね。むしろ後書きを楽しみにしていたり」

圭介「そういう事も言うな！ ていうか後書きだからってこんな話するなよ！ フリーダムすぎるだろ！」

伊吹「あんたもいつもこんな感じだったじゃない！」

暮葉「けーすけ様！ それより拙者はご飯が食べたいのです！」



## 第24話 ツインテールの女の子

その後、乙坂に入部届けを提出した俺達は、正式に写真部の部員となった。

時間が時間だけに、提出して報告した後にすぐ学校を出たが……。うん、明日が少し楽しみだ。どうやら明日は活動日らしい。

今日は本来活動日ではないのだが、俺達が訪れるから特別に集まってくれたらしいのだ。

ちよつと悪いことしちゃったかな……。でも、結果的に暮葉は部活に入れたんだ。

写真部も救われたし、それに北方 project のエロ同人誌も手に入った。

……。ちなみに、同人誌はちゃんと鞆に隠しております。こっさり浅間部長から受け取りました。

そんなわけで現在。あかね色の空の下、俺と暮葉は帰路を歩いていた。

「……なあ暮葉、今更だけどさ」

「けーすけ様？ どうされたのですかっ？」

「いや、ホントに写真部でよかったのかなあって。無理して合わせてたりしてないよな？」

「いえいえ！ 拙者はホントに本心から楽しそうだって思いましたよ」

「そうか。よかった……」

もし合わせていただけなら、申し訳ない事をしてしまったような気がするから。

よかった。強引な入部だけど本当によかった……。

「にゅふふ……っ」

暮葉は時々俺を顔を見ると、何故か嬉しそうに笑っていた。

「どうしたんだよ？」

「もきゅ？　けーすけ様って本当に優しいのですね」

「は？　なんで？」

「だってけーすけ様の入部理由って、二人の為なのですよね？」

「……ま、まあ」

確かにそれは合っている。浅間部長も青山さんも、居場所を失いたくはないはずだ。

それを守りたかったから俺は入部した。それはそうなんだけど……。言えねえ……。北方projectの工口同人誌が欲しかったなんて、絶対言えねえ。

それがもしバレてしまったら、俺は……。破滅だ！

「にゅふつ……伊吹さんが必死になるわけです」

「は？　伊吹がどうしたんだよ」

「いえいえ、なんでもないのでしょっ」

なんだろう。この嬉しそうな表情？

確かに、女の子に優しいと言われると嬉しいのは事実だ。

ただどうしてここで伊吹が登場し、どうして暮葉が嬉しそうな顔をしているのだろうか。

……わからん。恋愛フラグではないと思うが、やっぱりわからん。暮葉が喜んでいる理由って一体

「いてっ!?!」

その時、俺は後頭部に痛みを感じ、思わず声に出してしまつた。

「もきゅ? どうしたのですか?」

「いや、今なんか後頭部に……?」

なんだろう。何かを投げつけられたような……。

それも小さくて硬いものだ。つかホントに痛いなあ、後頭部は人体の急所なんだぞ。

つたく、一体何なんだ……ん?

なんだろう、このアスファルトに落ちている、白銀の輝く物体? 気になる物体を拾い上げ、よくこの目で観察してみる。

「けーすけ様、これって……」

「コイン……だな。しかもこれ、近所のゲーセンで手に入るいてっ!?!」

「けけ、けーすけ様っ!？」

いってえ〜!今度はこめかみにヒットしたぞ?

しかも落下したものを拾ってみると、やっぱりコイツ。

さっき俺の後頭部に直撃したのと、全く同じデザインだ。

「畜生お、どこのどいつの悪戯だよ?」

やられたこっちはいたんだからな。悪戯する側もちったあ考えろよ

……。

そう思った、その時

「どこのどいつの悪戯だ! と聞かれたら、答えてあげるが世の情け!」

どこかで聞いた覚えのあるフレーズが、どこかから聞こえてくる。前後左右ではない。少なくとも俺と同じ高さにいるとは思えない。これは……上から声が聞こえてくる感じだ。

「けーすけ様! あそこ、人がいるのです!」

「あ?」

どうやら暮葉が人影を発見したらしい。

その暮葉が指差す方向へ視線を向けると、ブロック塀の上には確かに人間が立っていた。

輝くようなだ橙色のツインテール。若干ツンとした紅い瞳。小動物のように小柄な体躯。

そして獲物を狙う獅子の如く、俺を睨みつけている女の子。

友達になろう……って雰囲気じゃねえよなあ。敵意どころか殺意ま

で感じるぜ。なんだよアレ？

「世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため。愛と真実の正義を貫く、ラブリーでチャーミーな仕置き人。そんなあたいの名前は浅間あかり！」

しかも構わずセリフを続けるし。

それ、大丈夫なのだろうか？著作権的に考えて。だが、浅間あかりを名乗る彼女は、そんな俺の心配なんて完全無視。あの聞き覚えのあるセリフを続けたのだ。

「古宇坂をかけるあたいには、ホワイトホール、白い明日が待っているー！」

「もきゅ！？ 正義の味方というより悪役に見えるのですっ！」

「お前……もしやミサイル団か!？」

「ちがっつ！ あたいは浅間あかりだ！」

ハイテンションだけど、怒ってばかりで血圧の高そうな娘だ。ていうか誰だよ、浅間あかりって。

一応初芝高校の制服は着ているが……俺はあの娘の事を知らないぞ。

「……もしかして、暮葉の知り合いか？」

「違うのです。拙者もあの人は初めて見るのですよ」

「じゃあ誰なんだよあの娘は……」

知らない人なのに何故、俺は敵視されているんだろうか。  
サッパリ意味がわからんぞ。俺が一体何をした？  
まさか……誰かによる、あの娘を使った新手の嫌がらせなのか？

「あたいの友達を蝕み、あたいの友達の部活まで荒らす気が！  
この暴力害虫藤島圭介！」

「はあ！？ 誰が害虫だよ！ つーかてめえは誰ですか！？」

「だから浅間あかりって名乗ってるだろ！？ いい加減覚えるよな  
！」

あれ、おかしいぞ。こういうキャラどこかで見たことあるぞ。  
もしかして浅間さんは、実は異世界から来た魔装少女さんなのかな？  
魔装少女がいるなら、冥界のネクロマンサーさんとか居てもよさそ  
うだな。

まあ俺の嫁はイカ……げふんげふん！吸血忍者の健康系アウトドア  
少女だけだな。

「あの！ 貴女はけーすけ様に何の恨みがあるのですか！？」

「お前！ お前は絶対、その下衆野郎に騙されているんだからな！」

「け、けーすけ様は変態ですけど詐欺師ではないのですよ！」

「フォローはありがたいけど変態は余計だ！」

余計に誤解される事を言うなよ全く。これだから暮葉は……まあ変  
態なのは事実だけどさ。

それにしてもホントに意味がわからん。なんで絡まれた？

一体、どこでこんなイベントが発生が発生するフラグを立てたんだ？

「暴力魔な上に変態だど！？ どうしようもないな……早く死ねよな！」

「いきなり死ねって何様つすか！？ あと暴力魔ってなんだよ！？」

「とぼけんな！ あたいは知ってたからな。あんた、中学時代に見知らぬ先輩を半殺しにしただろ！」

「半殺しって何だよ！？」

いや、確かに中学の時にある意味では先輩である人物を、かなりボコボコにしたことはある。

だけど半殺しにしていけないハズ。ただ動けない程度に痛めつけただけである。

それにそれも、ちゃんとした理由があったんだ。

戦わざるを得なかった理由が……でない俺、ただの不良じゃねえか。

とにかく浅間の言ってる事の8割は正解だが、ちよつと拡大解釈され過ぎだ。

「どこまでとぼけるつもりだよ、この悪魔！」

「悪魔とは失敬な。俺は紳士だぞ？」

「けーすけ様は変態なのです！」

「お前は黙つとれっ！」

ていうか浅間のヤツ、もしかして俺と同じ中学出身かな……。  
じゃなかったらあそこまで俺を敵視する人って……。うん、多分出身  
中学は同じだろう。

それと浅間って名字、どこかで聞いたことあるんだが……。

「こんなのがあたいの友達の兄貴なんてガツカリだ。友達の為にも  
あんたは粛清だからな！」

「女の子が粛清とか怖い事言わないの。つーか、結局てめえは俺に  
何の用だよ？」

「粛清に決まってるんだろ。それくらいわかれよ！」

どこまで魔装少女なんだよ。はぁ……。吸血忍者が俺の嫁として現れ  
ないかな。

出来れば一人称が俺の子が。あと冥界のネクロマンサーでもいいぜ？

「とにかく早く死ね！ 藤島圭介！」

「こんな所で死ねるかよ……。行くぞ、暮葉」

「えっ？ あの人はいいのですか？」

「ああいうわけのわからない、人様に絡んでくる人は放置プレイが  
一番なんだよ」

「もきゅ？ そ、そうなのですか……」

相手が男の場合、そのまんま路地裏という選択肢もあったらう。  
だが、相手はまだ幼さの残る女の子である。



当然、路地裏なんていう選択肢を選べるわけがない。  
まったく感謝しろよ。俺は基本的には女子に手を出さないの。  
明智の時は特別だったんだから……。  
そついうわけで俺と暮葉は彼女に背を向け、この場から立ち去ろう  
としました。

……ところが。

「男が逃げるなよ！ ああもう問答無用だ、喰らえっ！」

「いてっ！？ ちょ、あだだっ！？」

少女は俺を逃そうとしない。例のあのコインを何度も投げてつけてくる。

今度は後頭部のみならず、全身の至る所にコインの痛みを感じた。  
なんということだろう。どこかの激戦地で突撃かけた時の気分だぜ。  
ああそうだ、アレは間違いなく スチール・レイン 鋼鉄の雨だ。

「この！ この！ このおっ！」

「お、お前っ！ レールガン 超電磁砲じゃねえんだから自重しろ！」

「うわっ！？ 変態で暴力魔な上にオタクかよ！？ やっぱり真性のダメ人間だ、友達の為に死ねよな！」

「元ネタ分かる時点でお前もオタクだろっ！」

まったくコインで攻撃とか、ホントにどこのビリビリ中学生だ！  
ビリビリは可愛いが、あの子は正直ただの迷惑にしかならねえ！  
ていうか誰だよ友達って。とりあえず中学の時の騒動で俺を嫌っているのは分かった。

「ただ、それだけでこんだけやられるってわけわからん。友達の為？じゃあ友達って誰なんだよ。全く……せめて納得できる説明してから攻撃しろよ！」

畜生……こうなったら間合いを詰めて腕を押さえよう。

このままコインを喰らい続けていたら、俺の身体が変になっちまいそうだな。

……と、思ったけど。

「クソツ！　いてえっ!？」

「けーすけ様っ！　い、今助けるのです!」

おお、ここで救いの手が！

そうだよ、暮葉って俺の護衛が任務じゃん。

「た、頼む暮葉っ！　なんとかしてくれっ!」

「ふん！　女に助けを求めるなんて流石外道藤島。やっぱり肅清だな！」

「テメエも女だろ　と、思ったその時。」

「やめてよあかり!」

「んみや？　あ、葵……っ?」

はっ、葵だと……?」

俺は目を開け、浅間の後方を確認する……。

するとそこには葵ともう一人、写真部にいた青山さんの姿があった

のだ。

も、もしかして……友達ってあの二人？

「お兄ちゃんを痛めつけないで……っ！」

「わたしも……せ、先輩はなにもしてないと思う……っ」

「んみやっ？ で、でも……こ、こいつはいきなり人を殴る悪魔だよ？ あたいはそんな悪魔から二人を守ろうと……」

やっぱ友達ってあの二人か。ったく、どうして今日になって現れた？

……そういえば、今日昼休みに葵の教室に行ったな。

まさか、その時に俺の正体がバレちまったとか言っくんじゃ？

「そんなのあかりの勝手だよ！ お兄ちゃんは理由もなしに絶対そんなことしないもん！」

「わ、わたしも……事情知ってるからっ、先輩はそんな……悪人じゃないからっ」

えっ……ちょっと待て。なんで青山さんがそんな事を……？

「だ、だけど……っ、あの男は……っ」

「これ以上お兄ちゃんにひどい事したら……あかり、絶交だよ！」

うわっ、絶交宣言キター！これは浅間選手、人生最大のピンチなのでは？

……ていうか浅間か、あの浅間部長と混合しそっだな。

まあ、浅間って名字の人はどこにでもいそつだ。

それより、あの女の子のほうの浅間は、葵に絶交宣言をされた途端にうろたえ始めたのである。

やがて彼女は悔しそうな顔をして右拳を握りしめ、睨みつけるように一瞬で俺のほうへ振り向くと。

「藤島圭介っ！ い、いい妹を持つてるな……っ、きよ、今日の所は見逃すけど次の為に遺言書執筆と遺産分配やっつけよな！」

そんな事を彼女は俺にハッキリと告げた。

背は明らかに彼女のほうが小さいのに、まるで俺を見下すように人差し指を向けながら。

「っか遺言と遺産分配って、どこのビリビリ中学生だよ。」

まあ、アレは一応初高の制服を着ているあたり、高校生なのだろうが。

「べーっ！」

うわあ……ありや謝る気ナシだな。あっかんべーしながら去りやがったよ。

それをしている時の顔、可愛かつただけどなあ。

ていうか、あの子も暮葉や明智に匹敵する残念な美少女だな……。黙ってれば可愛いと思うのに。全く勿体ないヤツであった。

「せ、先輩方……っ」

「お兄ちゃんとクーにゃん！ だ、大丈夫！？」

「もきゅっ！ 拙者は実害ないのですよ」

「俺は散々コインをぶつけられたぞ。無傷だけど」

もし155mm榴弾砲にも匹敵する威力を誇る、そんな化け物コインだったら死んでたけどな。

増してや浅間がソレに加え、電化製品が全滅する程の電撃を出せる超能力者だったら……。

あるわけないだろうって油断はできないぞ。明智という超能力者がいるくらいだ。

暮葉だって不完全ながら、風の魔法を使いやがるんだ。

きつと電撃浴びせるような輩が、世の中に一人くらい居たって不思議ではないだろう。

「あの……あかりさんは決して悪い子じゃないんですっ」

俺が考え事をしていたその時、青山さんがいきなり浅間の話を振ってきた。

……まあ、根元から悪い子ってわけではないのは、俺にもなんとなくわかったよ。

本人はきつと、アレがいい事だと思ってやっちまったんだろう。

「そうだよっ。あかりは本当は明るくて元気で面白くて友達思いな子なんだよ。きつと、あかりがお兄ちゃんの事を悪いと思っているのは……」

葵も青山さんと似たような事を言っている。アイツもこの二人に大切に思われてるんだな。

そしてこの二人の言う事も多分事実だ。アイツも普段はあんなヤツじゃないんだろう。

ただ葵の言う通り、俺が嫌われている理由は間違いなく、中学の時の……。

「わかってる。別にあの子に対して怒ってないから」

こんな状況を作った原因には間違いなく俺の存在もある。

あの子はきつと誤解している。だからこそ友達を守るうと……。

根はいいが、もう少し大人しくしてほしいから……。

まあ、とにかくそういうわけで仕方ないんだ。だから俺はあの子に  
対して怒っていない。

むしろ怒ってる相手は……その原因を作り出した……あの野郎だ。

……久々に隅々まで思い出した。怒りと悔しさが俺の脳や心を回り  
まわっている。

でも、もうアレは終わった事なんだ。今更……何もする必要はない。

「……………っ」

暮葉や葵が心配そうな表情である。だけど、少し気になるのは……。

なんで青山さん、事情を知っているなんて言っていたんだろう？

俺と青山さんは初対面なハズ。仮に中学が同じだとしたら……俺を  
嫌うハズだぞ。

そんな疑問を抱く中、あかね色の空は薄暗くなり始めていた……。

## 第24話 ツインテールの女の子（後書き）

後書きトークコーナー

凧紗「過去作から読んで思ったんだが、この作者の書く主人公がほとんどダメ人間になってないか？」

圭介「は？ どういう事だよ？」

凧紗「だって……」

・保坂充「わりと常識人

・橋立純「バカ

・日高恭介「最強に馬鹿で元ヤン卑怯者、ただし歴代で最も端整な顔で男前。

・藪内遼一「超が付くほど鈍感（連載時、あまりの鈍感さに非難轟々）

・上条春希「自他ともに認めるヘタレ

・藤沢巧「不幸でいつも喧嘩したり逃げたりしている上に、妄想癖でロリコン。

・藤島圭介「どうしようもない変態。犯罪者予備軍、女子にセクハラ発言余裕。

……マトモな主人公が最近、全くと言っていい程いないぞ？」

圭介「ちょっと待てい！ なんで俺だけ犯罪者予備軍なんだよ!？」

凧紗「私、胸揉まれたし押し倒されたし唇奪われた……もちろん、合意なしに」

圭介「事故たるそれは！ もうそのネタ引っ張るのやめい！」

凧紗「とにかく……藤島以上に最低な主人公はいない」

圭介「俺ってそこまでサイテー野郎だったの！？ どう考えても妄想癖でロリコンな藤沢巧が一番サイテー主人公だろ！」

伊吹「あんた達、元ネタわからない人の事考えなさいよ……」

凧紗「すまなかった。でも藤島が最低の変態主人公だとはわかったる？」

圭介「どうしてこうなっちまったんだよ！」

暮葉「けーすけ様！ 讃岐うどんというものを食べてみたいのです

！」



## 第25話 波乱の一日 前編

5月12日、木曜日の早朝。

昨日のあの襲撃騒動の事を考えながら、目覚めると……。

「あ、起きた？」

なんだろう、物凄く久々な気がするんだ。

何故なら、俺のベッドのすぐ近くに伊吹がいたからだ。

中途半端に手が伸びている所、俺をこれから起こす所だったのだから。

それにしても、GW前からずっと来ていないし、やはり久々に感じる。

「んん〜……ここは？ バサラタウンか？」

「なにパケットモンスターの事言ってるのよ。あんたの家でしょ？」

「ああ、そうだな……」

伊吹……コイツは今、俺らの昔の事なんて考えていないんだろうな。俺は今、物凄く考えているよ。昨日あんなことがあったせいか……あの、浅間あかりって子が誤解をしている原因。

……ダメだ、伊吹の前でそれを考えちゃいけない。それを伊吹にバシてはいけない。

もう終わった事なんだから。俺らは皆忘れていたい事なんだから。特に……。

「……？ 圭介？ ねえ圭介ってば」

「……お、おう」

「ボツとしてたけど、もしかしてどっか具合悪いの？」

「いや、なんでもない。朝飯食ってくか？」

「いや、私はもう食べたから。下で待ってるわ」

「おうっ」

アイツは変わらないな……まあいいけどね。

部屋から出て行った伊吹が、階段を降りてているようである。

あまり重々しくなく、むしろ軽々しい足音が室内にまで響いている。さてと……俺も起きようかな。いつまでも考えながら寝ているわけにはいかない。

学校をサボるわけにはいかないし、休みと皆に心配をかけてしまう。

それから、俺らはいつものように3人で登校し、いつものように学校生活を送った。

授業風景は……まあ面倒なので省くとしよう。どうせ、やっている授業なんてどこの学校と比べても、似たようなものである。

所詮は公立高校である。特殊な授業なんて、おそらく私立高校にも行かないとないだろう。

……ん、グラウンドで体育をやっている。しかもアレは女子……なに、女子だと！？

「こ……これは……っ!？」

なんと女子が準備体操中だ。なんだこれ……すごく、エロスです。ああいうのをさり気なく鑑賞できるのは、まさに窓際席の特権。フフフ……窓際席って幸せだ。クソッ、どうしてラノベの主人公はアレを喜ばないんだ。

普通の男の子なら授業より、あっちの体操中の女子に目がいくだろ？

ブルマーじゃないのが悔やまれるぜ。初芝は日本で最後までブルマーを使っていた学校だが、2004年を最後にとうとう廃止してしまったんだ。畜生、誰だよブルマー=変態衣装って決めつけたヤツは!

だが、うちの短パンはジャージ生地で紺色。横に白い線という定番のものまで存在する。

それはそれで中々いいものである。結局、露出度は制服着ているよりも高いのだから。

あの感じは一年生……ていうか、葵がいるじゃないか。

なんだよ……でも妹ながら葵だって女の子。見ているのは正直……たまらんぜっ!

そして、前列にいるのは同じ部活の青山さん。あの位置にいるのは出席番号の関係であろう。

青山さん、制服の時はわからなかったけど……中々美乳ですな。

大きすぎず小さすぎずのバストサイズ。俺好みすぎてグッジョブだ、よくそこまで育った!

あれ?青山さんの隣にいるのは、もしかや昨日俺にコインを投げつけてきた……。

……浅間あかり。確かに美少女だが、全くいい印象がないな。

しかも浅間のスタイルは暮葉並に悲惨だぜ。吉備団子がべったんこではないか!

はたして暮葉とどちらが大きいか、気になる所ではあるな。  
いやいや、窓際サイコー！俺は今、超青春を謳歌しているぞおっ！

「センサー！ 藤島が女子の体育に夢中になってまーす！」

「なっ！？ く、黒木てめえ！？ はっ！？」

気がつくど、主に女子から敵意が込められた視線を向けられている。  
伊吹に小坂、そして暮葉までもがジト目であった。先生に至っては  
額に血管が浮いている。

そう、今は数学の授業。数学教師である野原数馬先生のはいかずまは鬼な事で有名である。

しかしやばいね。地雷踏んじまったよ！つか、もしかして死亡フラグ立つちゃったかな？

「藤島圭介、テメエはまたそれか？」

「野オオオ原くウウウウンよオ！ そりゃ誤解だつつつてンだろオ？」

「はあ……つか、本気でムカつくガキだよなあテメエは。やあシバきたいわ、滅茶苦茶シバきたいわー」

いかん！野原先生の野原くんモードが発動した。

あの人、たまくに某学園都市小説の木原くん化しちゃうんだよね。  
その度に、俺が一方藤島フジシマを演じなきゃならないのだ。

「つかよオ。オマエも男だろオが？ 女子の体操見たくらいで怒ってンじゃねエぞ三下ア？」

「そんなワケで廊下に立たせるわ。このクソガキ！」

野吉良先生が俺の机に向かって走ってくる。

教師が教室を走るというのも、なんだかシニールな光景である。だが、俺と野原先生に限っては時々ある光景なんだ。

で、その野原先生は拳を思いつき振り上げ、俺に突っ込んでくる。へッ、ナニ考えてんだこの馬鹿、さアどう料理して

「ぐはあっ!？」

反射が、効いてねエ……あ、そうか。これって現実リアルなんだよね。

そもそも俺、ベクトル変換なんてできないじゃん。木原神拳とか意味ないじゃん。

結局モロに顔面を殴られた俺は、そのまんま野原先生に引きずられ、廊下に放り投げられてしまったのである。なんとも情けない結果……俺vs野原先生の戦いは、野原先生の圧勝に終わった。

「根元から変態なのですね……っ」

「最っ低……」

最後に聞こえたのは、クラスメイトの笑い声。そして伊吹と暮葉の残念そうな声であった。

あはは。色々な意味で人生オワタ……。

結局、数学の時間は殆ど廊下で過ごしてしまった。

畜生黒木め……いつか去年の宿泊の恥ずかしい話をバラしてやる。

そんなわけで昼休み。野原くん事件のせい不機嫌だった伊吹に、「焼きそばパンを買ってくれたら許す」と言われたので、俺は購買で

焼きそばパンを購入していた。

畜生結構痛いぜ…… 150円消えた。校内だとペットボトル130円だが、外で買つと150円だぜ？

ジューズ代が消えてしまった。5月とはいえ、関東地方はそれなりに気温が高いのだ。喉乾いた……。

「あつ……ふ、藤島っ」

「あ？」

おや、どこかで聞き覚えのある声だ。

背後から声をかけられた俺は後ろへ振り向く。

そこにはポニーテールが靡く、“風紀委員”の腕章が目立つ、背の高い女の子が立っていた。

ところで、風紀委員をジャッジメントだと思っちゃった俺は、もしかして病気なのかな？

「やっぱりっ、その変態オーラは藤島だ」

「変態オーラで判断するなよ！　つか変態オーラってなんですか！？」

「藤島が自然に発している、いかがわしいオーラの事だろう？」

「明智……あんた一体、俺をどこまで卑猥な人物にすりゃ気が済むの？」

「元から卑猥だろ？」

……ひでえ。明智は相変わらず、俺の扱いが変態の扱いであった。

まあ確かにそうだけどさ、実際に言われると悲しいよ。  
よし、もう話題を変更しよう。とりあらずあの後明智家はどつなっ  
たんだろう？

「そついえばさ、あの後お前の家どつなつたんだ？」

「え？ ああ、光秀が父に乗り移る前に戻つたぞ」

「そつか。すべて元通りだな」

「うん。これも変態藤島のおかげだぞ」

「……はあ」

だから何度も言っているが、変態は余計だ！  
俺をそこまで変態にしたいんですか！

「……なあ、藤島っ」

「ん？」

「そ、その……っ、藤島は私以外とキスした事、あるのか？」

頬をほんのり赤く染め、チラチラと視線を逸らしながら、明智はそ  
んな事を聞いてくる。

こ、コイツ……いきなりキスの話題を振ってきやがった。  
確かにしたよな。最近色々ありまくって忘れていたけど、俺は明智  
とキスをしてしまった。

そのおかげで俺は『覚醒』し、光秀撃退には成功したが……。

「え、え〜つと……あ、アレが初めてだ」

とりあえず俺は事実を伝える。

そうですよ、アレがファーストキスですよ。ロマンのカケラもないキスである。

「……ふふっ。そう、初めてだったんだ……」

「なんで喜ぶんだよ……はっ！？ お、お前！ 俺が今まで経験なかったからって笑ってやがるな！」

「ち、違うぞ！ そそそ、それに藤島にあるとなんて思ってなかったしな！」

「ひっでえ！ 事実だけどひどすぎる！」

いいですよどうせ……俺なんて、キスの経験すらないチエリーボーイですよ。

はあ……ファーストキスは好きな人にとっておきたかったのに。

……なんて贅沢言っていたら、永遠にできない気もしないでもないけど。

でも、色々な意味で残念すぎるファーストキスだったよ、アレは……。

「心配するなっ。私も……初めてだったから」

「……へ？」

あ、明智さん……それマジで言ってるのでしょうか。

明智ほどの美少女が、アレがファーストキス？



マジですか。どうせリア充なんだろうって思っていたど、実は非リア充？

しかもキスが初めてって事は、今までそういうヤツがいなかったって事か。

「だからっ、心配するな……藤島の事、絶対笑わない。私も経験なかったら……っ」

マジかよ……ファーストキスを頂いてしまったのか。

それを聞いた瞬間、あの時以上の罪悪感を感じてしまったんだが。好きでもない人相手にファーストキスって……女の子的には辛くないのか？

「明智……ホントにごめん」

「い、いいんだ！ あれは事故だってわかっている。こんな事聞いた私も私だっ、もう気にするなっ！ お、お相子だお相子！」

「大丈夫か、顔真っ赤だぞ？」

「ふにっ！？ ……だ、大丈夫。私は正常だ！」

いや、どう見ても正常には見えないんだが！

明智は普段はクールな子。なのに今は可愛い女の子だぞ？  
そんなの、普段の明智なわけがないぜ。

「はわわ！ そ、そうだ。私はこれから風紀委員の仕事が……またな、藤島っ」

「お、おうっ」

妙に駆け足だった。今日の明智はいつもと違い、慌ただしい。冷静さのれの字すら欠けているように見えるのだ。

何か変わったよなあ……明智家騒動前はあんな事、なかったのに。やっぱりキスの事を気にしているんだろうか。って、あたりまえだよな。

大切なファーストキスを、変態と嫌う男に奪われてしまった。そんなの女の子的に面白いハズがない。

やっぱり俺……明智にとんでもなく悪い事、しちゃったな。

アイツはお相手って言うてるけど、やっぱりちゃんと謝ったほうがいいかもしれないな。

……さて、そろそろ教室に戻るとしようかな。

「藤島あ！」

「げっ、野原くん……」

「さつき女子の下着が盗まれたという報告を受けたが、テメエが犯人かあ！」

「全然身に覚えがねえええええええええええええええええつ!？」

……ダメだこりゃ、あと30分は帰れない予感。

で、教室に戻って最初に待ち受けていたものは……。

「遅い！」

「いや、すみません！ オバチャン手際が悪いもんで……」

「購買で焼きそばパン買うのに、30分以上もかかるわけないでしょ！ もう昼休み終わりの時間よ！」

「ホントすみませんでしたああっ！」

「そ、そこまで改まらないでよ！ わ、私が悪いみたいじゃん……」

……ツツパリ伊吹ちゃんの可愛い可愛い、ありがたいお説教タイムであった。

ああ、野原くんの尋問に比べりゃ、遥かに甘いね。

しかしなんだろう、今日はやたらと不幸だな。午前中だけで一日学校にいたくらい疲れたよ……。

第25話 波乱の一日 前編（後書き）

後書きトークコーナー

千早「は、初めて……後書きに出ましたっ」

圭介「そうか、青山さんは初めてだな」

千早「あの……なにをすればいいんでしょうか?」

圭介「そうだな、テキストにふざければいいと思うんだ」

千早「ふ、ふざける……ですか?」

圭介「ああ、例えばな……次回も読まないと見ないと風穴あけるわよ!」

千早「……………」

伊吹「はいはい、ただ痛いだけよ……ばか圭介」

暮葉「けーすけ様! 風穴よりも落とし穴を掘ってみたいのです!」

## 第26話 波乱の一日 後編

ふう……ようやく帰りのSHRが終わった。

さて、今日は写真部の活動日だったな。

正式な部員としての初の活動だ。と言っても、まだ写真は持っていないが。

一応我が家にカメラは二つあるんだけど、まだ何も撮ってないんだよね。

まあ今日は大した活動はしないだろうし、正直どうでもいいだろう。

「あれ？ 圭介と暮葉は部活？」

「はい！ 伊吹さんもなのですか？」

「うん、私もこれから剣道部があるから」

伊吹は剣道部最強。今日もきつと、伊吹のせいで部員達の悲鳴が空高く響く事だろう。

頑張れ、強くなるには伊吹を超えようとするしかないぜ。

まあ、出来れば伊吹には最強で居続けて欲しいけどな。

それが、彼女の自信にも繋がる事だから

「そっか、まあ頑張れよ」

「け、圭介に言われなくても頑張るわよ。あんたこそ部活中に寝たりにしたらダメなんだからね！」

「俺にはキツいっすね伊吹さん！？ 流石ツツパリや……」

「ツツパリ言うなばか圭介っ！」

あゝあ、ツツパリ伊吹ちゃん行つてしもうた。  
さてと、そろそろ俺達も行こうかな。

「もきゆう、伊吹さん行つちやいましたね」

「そうだな。俺達もそろそろ行くか」

「はいなのです！」

そんなわけで、向かった先は写真部の部室。部員は俺を含め、僅か4人の弱小部であろう。

まあ、そもそも写真部なので弱小とか関係なさそうなのだが。

部室に入ると、そこには浅間部長と青山さんの姿があった。どうやら先に来ていたらしい。

机には数枚の写真が並べられているが、写真を見ているのは青山さんだけで、浅間部長は写真ではなくエロ同人誌を鑑賞していた。なんとというか……部長として論外だ！

「やあ、ようこそ夢の国ネズミーラ」

「写真部です……」

「社会の窓部へ」

「部長……いつそ、死んだほうがいいかと思えます……っ」

ダメだこの部長。相変わらずこのノリだよ！

絶対この写真部が廃部の危機に陥っていたのって、1割がマイナー

なイメージだとしたら、残りの9割は浅間部長のド変態のせいだね？  
でも浅間部長。そこまでオープン・エロだと……むしろ尊敬するッス！

「こんにちはなのです」

「どうもっす」

俺らも一言挨拶をし、自分の席へとつく。

俺の隣は丁度浅間部長……うわっ、随分ときわどいの読んでるな。青山さんだっここにいるのに、やっぱりエロ同人誌は自重したほうがいいんじゃない？

「ところで藤島くん！ これを見たまえ……素晴らしいと思わないかい！？」

「アア……マア、イインジヤナイデスカー？」

浅間部長が見せつけてきたものは、それはもう口では言えないくらいエロい同人誌である。

これはアカンというか、アブノーマルすぎやろ！  
なんというか……あまりにもひどすぎる！

もうエロを通り越して気持ち悪いとすら感じる！  
流石の鍛えた変態である俺も、これにはドン引きしました……。

「欲しいかい？ 今なら3000円だね」

「そんな高額払ってまで気持ち悪い欲しくくないですよー！」

「部長……最低です」

「けーすけ様でもドン引きって……どんな本なのですか」

「ん？ 見るかい木下くん!？」

「見ないのですよ!」

「部長……女子にそういうの見せるのって、どうかと思います……」

「これがまあ、あたりまえの反応であろう。」

「ていうか俺も付き合いきれなくなってきた。浅間部長、まさかここまで変態だったとは。」

「……とりあえず、俺も浅間部長に突っ込んでくべきかな？  
うん、これ以上は女子が可哀想だ。」

「部長、それ完璧セクハラっすよ」

「僕の辞書にセクハラなんて言葉はない!」

「な、なんだってー……!？」

「しかも何このカッコつけ。眼鏡もないのに眉間に指を当てているぞ？」

「よいか。セクハラは性的嫌がらせという意味だ。だけどそれってなんだい？ どころへんからセクハラなんだい？ 基準点……絶対の基準となる基準点が欲しい。だが現在それが無い、言わば定義が曖昧なんだよ! 従って僕の辞書にセクハラなんて言葉はないのだ!」



なななな、なんて無茶苦茶な理論だ！？  
そんなのあつたら、セクハラが社会問題になったりしねーぞ！？  
でもオカシイ。何かがおカシイ気がする！  
なんだか、それは浅間部長のワガママによって生まれたトンデモ理  
論な気がするぞ！

「……やっぱり。部長は写真部の為に退部したほうがいいと思いま  
す」

「拙者もそう思つのです……っ」

とうとう女子から退部しろって言われてるし……。  
まあ、言われても仕方のない事をしてたけどね。

「そ、そんな！？ 僕がいなくなったら写真部はどうなるんだい！  
？」

「部長さんに代わる、新入部員を入れればいいと思つのですっ！」

「藤島先輩か木下先輩が部長になって……もう一人部員を募集しま  
すっ」

「そこまで僕を追い出したいわけ！？」

「「はい」」

「うわあああああっ！ ふ、藤島くんっ！ 木下さんと青山くん  
がセクハラしてくるぅ〜〜〜！」

「浅間部長！ 全然セクハラになってねえですから！」

この時、俺は素直にこう思ったのだ。

よく今まで廃部にならなかったな。この変態写真部……。結局これから30分ほど、全く部活動らしい活動をしなймаま、時間だけが経っていき……。

俺はトイレへ行く為、一旦席を外して校内を歩いていた。

はあ……俺と暮葉、もしかして入る部活を間違っちゃったのかな？でも北方 project のエロ同人誌は手に入ったし、それはすごく嬉しいんだ。

でも男の俺は耐えられるが、女の子の暮葉の精神が持つか……あんな部活について。

「とにかく……なんとかしないと、特に女子は精神的に苦痛だぞ、アレ？」

「あ、あの……藤島先輩っ」

「うおわっ！？ お、おう！」

し、心臓に悪い登場の仕方だったな！まあ、今のは青山さんだったから許すでしょう。

浅間部長だったら……え〜っと、一発殴っていたかもしれないね。

ここは男子トイレ前。雑音は聞こえるが、近くにある女子トイレも含めて現在ここには誰もいない。

つまり俺と青山さんは今、二人っきりというわけである。

「あ、あのっ……お邪魔でしたか？」

「いや別に？ 今用も済ませた所だしな、手は開いているよ」

思えば青山さんとマンツーマンで話すのは、これが初めてな気がする。

そんな彼女は恥ずかしさから、少しだけ俯きもじもじとしていた。青山さんは浅間部長にはストレートだが、基本的には控えめな子みたいだ。

もじもじしている理由はそこであろう。

初めて二人きりで話す相手なんだ、恥ずかしくてあたりまえである。

「青山さんはどうしたんだ？」

「あ、わたしも用を……」

「そ、そうかつ」

頬を染めながら女の子が用。

すると確実にアレであろう。それを口にするのは恥ずかしいに決まっている。

「だ、大丈夫です！ もう……お、終わりましたからっ」

「そうか。じゃあ一緒だな」

「は、はい……一緒です……っ」

相当恥ずかしいんだな。なんだか時々会話が途切れ途切れである。

それにしても、どうしてこんな純粹そうな子が、あの変態写真部にいるんだらう？

余程の写真好きじゃないと居れないと思うが……いつそ訊いてみるか。

「そついえば青山さん。青山さんは写真好きなのか？」

「え？ はい……撮影するの好きですよ。将来その……写真家になりたいんです」

「写真家かあ、いい目標じゃないか」

あの業界は厳しそうだけど、それでも撮る側は楽しいだろうなあ。1000万とか稼ぐ人もいれば、50万しか年に稼げない人もいるらしい。そんな厳しい業界でも、楽しんでやれるかもしれない、そんな仕事だろう。

「あ、ありがとうございます……っ」

「もしかして、それで写真部に入ってるの？」

「はい、技術を学びたかったんです……っ」

「なるほど。通りで部長を我慢してまでやってるわけか」

「あはは……流石にもう一ヶ月は経ちますし、そろそろ慣れましたよ……っ？」

「そっか。まあ何事も慣れが大切だよな」

青山さんは春から写真部にいるんだもんな。流石にあの部長にも慣れたようだ

でも、俺らが慣れるにはもう少しだけ、時間がかかりそうである。

「藤島先輩は……どうして写真部に入ったのですか？」

「ん？ 暮葉が入るって行ったから、一緒に入ったんだよ」

「き、木下先輩……ですか？」

「ああ。暮葉はまだこっちに来てから日も浅いし、知り合いも少なくて不安なんだよ」

「そ、そうだったんですか……でもそれだと写真部、退屈じゃありませんか……？」

退屈か……考えたことないな。しかもそれなりに面白いし。全く活動らしい活動はしていないが、所謂談笑というヤツが面白かった。

ロクな話をしていない気はするものの、それでも楽しかったと感じている。

つまり、部活を楽しんでいるのと全く同じ事であろう。

「全然？ 今日一日の感想、楽しかったよ」

「そうですかあ……っ」

青山さんはホツとしたように、安堵の表情を浮かべた。こうして安心してくれると、俺としてもホツとするな。

「……藤島先輩っ、やっぱり優しい人ですね」

「え？」

「わたし、知ってます……先輩がどうして悪く言われているのか。そうなってしまった原因をっ」

「あ、青山さん……？」

知っているって……やっぱりアレか、中学の時のアレなのか。

そういえば彼女、昨日も不思議な事を言っていたような気がするな。

“わ、わたしも……事情知ってるからっ、先輩はそんな……悪人じゃないからっ”

アレは俺の聞き間違いではないハズだ。

確かに青山さんはそう言っていたハズである。

という事は、青山さんはやっぱり事情を知っている。

「……………」

「っ……？ はわわっ！ っ、ごめんなさい……っ。先輩にとつては思い出したくもない話……ですよね」

「いや、別にいいんだけど。それより何で、俺が暴力魔だと害虫だのって言われる理由を知ってるんだ？」

「中学の時に友達から聞きました……………」

友達って葵かな。まあ確実に葵だろう。

あの事件の真相を知っているのは、俺と犠牲者の他には葵と小坂しかないんだ。

他は誰も信じず、結果的に俺は中学時代の大半を、半ば孤独状態で

過ぎたのだ。

今でさえ俺の嘘の悪名が消える事もなく、浅間あかりのように俺から友達を守る為、俺との関係を引き裂こうとする人までいる。そんな事になってしまっくらの事を、この手でやってしまったんだ……。

しかも、結局犠牲者を満足に守る事はできなかった。ホントに……俺は弱い。

「そ、そうか……」

「はわわっ！」「ごめんなさい……先輩っ！」

「いや、青山さんが謝る必要はないよ」

こうなってしまったのも、すべて俺が弱かったから……。あの野郎の手から、犠牲者となったアイツを守る事ができなかったから……。

正義のヒーローになるって約束していたのに、最低だよ……俺は。

「せ、先輩……っ?」

と、いけないいけない。女子の前で弱い姿を見せるわけにはいかないな。

いい加減前を見ようか。もうアレは終わったんだし、今更後悔する必要もない。

多分、犠牲者もあの時の事はもう、あまり気にしてはいないハズである。

「よし、そろそろ戻ろうか！」

「……は、はいっ」

だから、俺ももう気にしないでおいっつ。



第26話 波乱の一日 後編 (後書き)

後書きトークコーナー

圭介「野オオオ原くウウウウウン！ オレは写真部にも入ったし、これで立派な学生だア！ もう帰宅部なんて弱い生物じゃねエンだよオ！ あぎやはははっ！」

野原「テメエ……何言ってるかわかってんのかあ、アアン？ 部活に入ったくらいで調子に乗ってる……潰すぞゴルアッ!？」

圭介「ぐわはあっ！ す、すみません先生！ 台本に書いてあ

」

野原「台本に書いてあるからってよあ、何言ってもいいと思ってんのかあ!？ ちなみになあ……俺は校長職狙ってんだよ、どうだコノヤロオッ!！」

圭介「ち、ちなみにですね。写真部には暮葉も入ってて

野原「暮葉ちゃんは可愛いからいいんだよあっ!！」

千早「わ、わたしも……春に写真部に入りましたよ」

野原「良かったじゃん!！」

大吾「……僕、こういふのどっかで見たことあるんだけど?」

暮葉「けーすけ様！ 台本より大根のほうがおいしいですよ!！」

## 第27話 / お客様 vs 店員大抗争？

写真部の活動……と言っても、殆ど談笑であった。

だがそれも終わり、俺と暮葉は丁度玄関で靴を履き替えていた。  
今日も暮葉と二人で帰り　　と思いきや。

「あ、暮葉と圭くん」

「もきゅー？ 亜紀さん？」

「あれ、どうしたんだよ？」

突然、小坂がこちらに駆け付けてきたのだ。

確か小坂は頼りないながらもクラス委員、その関係で仕事があったのだろうか？

小坂は帰宅部だし、そうでなければ説明がつかない。

なんにしても、もし仕事だとしたらそれは珍しい事だ。

だって、小坂は面倒くさがり屋の若干二ート予備軍だからだ。クラス委員をやっているのが奇跡と言っても、多分過言ではないだろう。

「フフフ。圭くんや、ちよろつと暮葉を借りるよ」

「もきゅーっ！？ せ、拙者をですか！？」

「このアホを一体何に使うんだ？」

「あたしの友達に是非暮葉を紹介したいんだよ。というわけだから  
ヨロシク」

「もきゅーっ！ け、けーすけ様！ 脱出不可能なのですよ〜！」

あゝあ、暮葉が小坂につれてかれてしまった。

……まあいいか、サヴィエトの魔法使いさんが襲ってくる気配もないし。

俺としても暮葉には、もっとプライベートな時間を与えてあげたい。

「大丈夫だって、ちゃんと一人で帰れるから。友情育んでこいよ」

「な、なのですけどっ！」

「もっとプライベートを大切にするんだぞ！」

「け、けーすけ様あ〜っ！」

こうして暮葉は完全に連れていかれたのである。

多分、その小坂の友達の所に連れて行かれたのだろう。

いいじゃねえか、もしかすると友達が増えるんだしさ。

はあ……なんだか、暮葉のほうから後から入ったのに、友達の数では暮葉に追い抜かれそうだな。

さてと、そろそろ俺は帰ろうかな。

……思えば初めてな気がするな。暮葉が来てから一人で下校をするのは。

気がつけば暮葉はいつも隣にいた。隣で満面の笑みを浮かべてくれた。

それがここ数日で、あたりまえのものになりつつあった。

久々に暮葉がいないと、ある意味で新鮮に感じるな。そして、少し寂しくも感じる。

アイツってこんなに影響力のあるヤツだったのか……。

そんな想いを抱きながら、俺は学校を出て一人夕暮れの住宅街を歩いていった。

……腹減ったなあ。どっかでおやつでも買おうかな。よし、そうと決まればどこかの店まで行ってみよう。

そんなわけで作ってきたのは、幹線道路沿いにあるマックである。

うわぁ……丁度部活帰りの学生で溢れている。

これはちよつと、ハンバーガーを買うのに時間がかかるかもしれないな。

「いらつしゃいませ〜！」

店員さんが営業スマイルを浮かべ、お決まりのセリフを言うてくる。ちよつと待つかなどは思ったのだが、実際そうでもなかったみたいだ。

席がないだけだな。まあハンバーガーは歩きながら食べるし、店で食べる必要性は皆無だ。

「ご注文はいかつ……」

「あ？」

……ちよつと待て、この小柄な店員さんはもしや？

「い、ご注文はいかがいたしましょう!?」

間違いない。この小柄な体躯に橙色のツインテール。

やべえ……コイツは浅間あかりだ。なんでこのコイン女がこんな所に？

まさか、ここでバイトをしているんじゃない？

まずいぞ、ハンバーガーに何をし込まれるかわかったもんじゃない。

「う、ご注文は……っ」

いかんいかん！いくら浅間つつつてもバイトはバイト。

邪魔をするわけにはいかないぜ。とりあえず注文しないと。

「じゃあ……ダブルチーズバーガーとポテトSを」

「ダブルチーズバーガーお一つと、ポテトSお一つでよろしいですね？」

「はい……」

なんか嫌な予感しかしない……だって浅間の顔、妙に引き攣ってるもん。

それに敬語が棒読みだ。絶対これは何か企んでいるパターンだぞ。とにかく、浅間の行動に要注意である。

「スイートコーン一つ！」

「は、はあっ!?!」

おいおいおいおいおいオイイイツ!

今コイツなんて言った。絶対スイートコーンって言ったよな？

チーズバーガーとポテトSは何処に消えたんだ!?

「お客様」

「は、はい」

「他のお客様の迷惑、邪魔ですのでさっさとあちらに行きやがってください」

しかもまだ敬語ではあるものの、いきなり態度が悪くなった！  
「つかなんですか、このザマアみると言わんばかりの笑顔！？  
こんのチビ助え、完璧にお客様をナメてらっしゃるな。」

「いいだろ上等だ。大切なお客様をお粗末に扱うとどういう目に遭うか……。」  
「社会の厳しさを徹底的に叩きこんでやらあつ！」

「失礼、俺はダブルチーズバーガーとポテトSを頼んだハズですが？」

「え？ お客様は確かにスイートコーンと言っておられましたよ」

「いやいやいやっ！ 嘘つきは泥棒の始まりっすよ！？ 俺は確かにダブルチーズバーガーとポテトSを頼みましたっ！」

「お客様。そろそろ移動してください。他のお客様の邪魔になります」

ぐうああああ〜！

これは正直かなりムカつく。この客を客とも思っていないふざけた態度。

いくら個人的に嫌いな人がお客様だからって、この扱いは流石にないだろ！

ていうか、フツーに苦情言ってもいいレベルだぞ。  
畜生……正義は必ず勝つ。意地でもダブルチーズバーガーとポテト  
Sを手に入れてやる！

「ふざけんなっ！ 元はと言えば貴女が注文と違うもの言っちゃう  
のがいけな

「オイてめえ早くどけよ！ 迷惑なんだよコラッ!？」

「げっ……」

やべえ、俺の後ろに立っているリーゼントヤンキーさんの怒りが…  
…。  
ていうか、やっぱりこれって俺が悪人なの？

いやいや、俺は何も悪いことをしていない。むしろ悪いのはこのキ  
ュートな店員さんじゃ！

「てめえ話聞いてんのかよ、表出るか？ アアッ!？」

どうしよう。この小悪魔の成り損ないのせいで……。  
ヤバイルートに突入した気がするぞ!？

畜生、ニコニコ笑いやがって。こっちは全然笑えないぞ？

食べ物全然出てこないし、ヤンキーさんには絡まれるし、もう色  
々と最悪じゃ！

とにかく、ここは最善の選択肢を選択をすしかない。今の俺とっ  
て最善とは……。

「スミマセン デシ タネ エ！」

爽やかな笑顔を浮かべつつ、怒りを込めたその一言。

浅間あかりとヤンキーさんに、その一言を打ち込むように言っていた。

そして俺は、明らかに不機嫌を装って店から出て行ったのである。……まあ、実際かなり不機嫌であったが。

結局、俺はあの後コンビニでおやつを買い、テキトーにこちらの公園でおやつを食べていた。

畜生、あのマック二度といかないぞ。マックに行くにしても別なマックに行つてやる。

初めて会った時は怒ってなかったけど、今はホントに怒ってるぞ。いくら俺とは言え、あれが客に取る態度ですか。もう本気で嫌だぞアイツは。

「んみや？　そこにいるのは……変態暴力魔の藤島圭介！」

げっ……この聞きたくもない暴言のオンパレード。

間違いない、浅間あかり……バイト終えやがったのか。

「はあ……散々人の事ナメといて、今度は何の用だよ？」

「せ、成敗の続きだ、察しろよな！」

「またそれかよ……もういいだろ？　さっきので参りましたよ」

「だ、ダメだ！　あたいはまだあんたを認めた覚えはないんだからな！」

なんて面倒くさい子なんだ……。

泣きまくる赤ちゃんよりも遙かに面倒かもしれない。



友達想いもここまで来ると重傷だぜ。

「認めるも認めないも、俺はお前の思っているようなヤツじゃない。アレには深い事情があつたんだよ」

「し、信じられるかそんなもんっ！ 本人の口ほど怪しいものはないんだからな！」

「じゃあもう信じなくていいから、頼むからもう俺に関わらないでくれよ」

「あ、あんたがあたいの友達に暴行しないって、しつかりきっちり約束したらな！」

「約束する。つか、あたりまえだろ……」

なんで葵や青山さんを暴行しなきゃいけないんだよ。

その時点でもう、ありえない事であろう。

いつから俺は、女子にまで問答無用で暴力を振るう、最低下衆野郎って事にされているんだろうか。

女の子大好きな俺だぜ。殺されそうとかそんなわけでもないのに、どうして暴力なんて。

つか、基本男にも振るいませんよ。問答無用なんて、それだと不良の中の最低男じゃねえか。

「ほ、ホントだな？ もし破ったらびりびりのばりばりのべっちゃんべっちゃんだからな！」

「へいへい……」

例えがよくわからない。まあ、とりあえず恐ろしい目に遭うって解  
釈すればいいのか？

……それにしても。そこで俺と遭遇してからずっと、顔が赤い気  
がする。

それは果たして気のせいなのか？

どう見ても気のせいには見えないが……多分、突っ込んだら負けで  
あるう。

「そ、それじゃあ帰るからな。後ろから不意打ちするなよ暴力魔！」

「するわけねえだろ……」

もう最初っから最後まで呆れっぱなしである。

ようやく彼女は後ろを向き、公園から去ろうとした。

浅間あかり。二度と会話をしたくない人物ベスト10に入るヤツだ  
ったぜ。

「……あっ」

あれ？

今、浅間のヤツがよろめいた気がする。

一応浅間もか弱い女の子の部類だ。心配くらいはしたほうがいいかな。

「おい、大丈夫か？」

「う、うっさい！ あたいは元気だ！」

元気かあ。まあそれくらい元気があれば、確かに問題はなさそ

……と思った、まさにその時であった。

「あっ……」

一瞬、彼女はバランスを崩したように前へと傾く。  
一歩二歩と、足を踏み、三歩目くらいまでは頑張って歩き続ける。  
だが、四歩目で彼女は完全にバランスを崩し、奇妙な音を立てた時には既に倒れていた。

「あ、浅間……？」

呼吸が荒いし、顔色もよくよく見ると悪い気がする。  
倒れた彼女の額に手を触れてみると、熱い……。  
平熱とは思えない熱を、掌に感じたのである。  
まずいぞ、コイツ熱まである。ていうか、完全に力尽きたように伸びている。

「……………っ！」

ああもう、考えるのが面倒だ。確かに、コイツは散々な事をしてくれた。

でも、だからと言って弱っている人を放ってはおけない。  
とりあえずなんとかしねえとな……！

## 第27話 / お客様 vs 店員大抗争? (後書き)

後書きトークコーナー

圭介「ぶつちやけ暮葉って魔法少女じゃないよね」

暮葉「もきゅ? な、なんでなのですか!？」

圭介「いや、魔法使わねえじゃん」

暮葉「し、失敬な!? 使う場面がないだけなのですよ!」

圭介「まあ、確かに使われたら近隣住民に迷惑だしな。お前の暴走突風魔法は」

暮葉「ししし、失敬な!? 拙者はちゃんと魔法を使えるのですよ!」

圭介「ほお、あの暴風以外にも?」

暮葉「もきゅ! と、当然なのです!」

圭介「でも、展開的にしばらく魔法使う場面はねえと思うぞ」

暮葉「ひどい! ひどいのですよけーすけ様!」

圭介「書いてるの俺じゃねえし、苦情は作者まで」

伊吹「ついでに圭介に対する苦情も送っていいわよ」

凧紗「そうだな。藤島は色々な意味で反省したほうがいい」

圭介「お前らひどすぎやろっ！」

## 第28話 アンタお兄ちゃんキャラだったの!?

俺のすぐ傍に、女の子がいるんだ。

先程までありあまる元気を全て俺にぶつけていた、そんな元気な女の子。

だけど……その子は息を荒くし、弱々しくその場に倒れ込んでいた。額を触るとすごい熱を感じる。38度……いや、39度あるかもしれない。

とにかくこのままではまずい。早くなんとかしないと浅間が危険だ。

……とはいうものの、高校生が保険証なんていつも持ち歩いているわけがない。

だから病院なんて連れていけない。じゃあ自宅？

ダメだ。コイツの自宅を俺が知っているわけがない。

クソッ、どうする。俺の家に連れ込む……わけにはいかないよな。

コイツは俺の事を一番嫌っているんだ。葵や暮葉が居た所で、俺がその後攻撃を受けるのは明白だろう。畜生、助けようがねえじゃないか!

「おや、そこにいるのは藤島くんではないか？」

俺が絶望していた、丁度その時。

金髪のイケメンフェイスだが、中身は真性の変態である残念なイケメン。

写真部の部長を務める浅間部長が声をかけてきたのだ。

制服姿にあの鞆。おそらく学校帰りであろう。

……そうだ、浅間部長に協力してもらおう!

「部長! 丁度いい所に来てくれましたね!」

「おや、どうしたんだい？」

「手伝ってください。人が倒れたんです！」

「な、なんだって！？　つて……あ、あかり！？」

「……え？」

その時浅間部長は馴れ馴れしく、自然な感じで彼女の下の名前を叫んだ。

……これは一体？

それから数十分後、俺は浅間部長にどう見ても昭和中期に建てられた、超オンボロ一軒家へと連れてこられた。2階建ての狭い一軒家。

木造ではないにしろ至る所が変色していたり、所々にヒビが入っている。

相当の年代物であろう。風が吹きつける度に窓ガラスもガタガタと音を立てていた。

一応狭い駐車スペースもあり、そこには一台の乗用車もあった。

……アレ、古い型のブルーバードだな。まだ走ってたんだなあんなの……。

そして、中に入るとそれはそれは質素。地デジ化間近だというのにテレビはアナログ式のブラウン管。

テーブルではなくちゃぶ台で、座布団すらなく、誰かの仕事用机が居間には存在していた。

本当……なんとというか、必要最低限のものしかない上に、どれもこ

れも年代物だ。

「ふう……お茶くらいしかないけど、礼儀だから出すよ」

「ありがとうございます。あの……あいつは？」

「あかりなら、部屋まで運んだよ。今日は元々風邪気味だったんだけど、その上過労だね……」

「そうですか……」

浅間部長はまるでお兄さんのようであった。

いつもはただの残念なイケメン。しかし、今だけはごく普通のお兄さんである。

……ていつか、もう名字から想像がつかしました。

「浅間部長。あの、もしかして……」

「ん？ ああ、ボクはあかりの兄だよ」

「やっぱりっすか……」

んなこつたるうと思いましたよ。最初から怪しかったもんなあ、浅間って名字が。

それにしても浅間のヤツ、どうしてぶっ倒れるまでバイトをしていたんだ？

どう考えても、高校生があそこまでバイトをする必要って……。

「ところで、君はあかりとどっいう関係なんだい？」



「どづいつ関係と言われると、まあ……一方的に恨まれている感じ」?

「恨まれている?」

「誤解があつたんですよ……」

それも、解ける可能性が限りなく低い誤解がな。

「そうなんだ。それで君はこれからどづするんだい?」

「どづするって、どづいつ事ですか?」

「気になるだろう? どづしてあかりが倒れるまで働いていたのか」

「まあ、そりゃ確かに……」

滅茶苦茶気になるな。こんな女の子がどづして倒れるまで労働をしていたのか。

どづして、風邪をひいているのに無理をしていたのか。

……なんでだろう。出来ればもう関わりたくないヤツだったのに、なんでそんなに気になるんだ?

「知りたいならば覚悟するんだな。それとも、このまま立ち去って一般人に戻るかい?」

「……部長、厨二展開になつてませんか?」

「フツ。一度言ってみただけさ……!!」

なにカツコつけてるんですか、このおバカな真性変態部長は。変態の上に高三の癖に厨二病とは……全く救いようのない男である。だけど……そんな部長の口からだとしても。

「それで、実際どうなんだい？」

「……教えてください、お願いします！」

事情は知っておきたいな。

一応浅間も葵の友達だ。俺は恨まれているし出来れば関わりたくもないが、だからと言って弱っている人を放っておけるほど、俺も残酷じゃないんだ。

浅間家は親子5人のごく普通の家庭であった。

少し貧乏であり、ご覧のように家もボロボロではあったが、安定した収入もあつて休日には一家で出かけるという、そんな仲良しな家族が存在していたらしい。

しかし、ある日父親が出張中事故に巻き込まれたらしい。首都高でルーレット族に追突されたようで大破炎上。父親がその笑顔を見せることは永遠になかった。こうして浅間家は安定した収入を失った。

まだ中学生だったあかりと下の弟の為、母と浅間部長が全力で働くが、それでなんとか暮らせる程度だったという。だが先日、母が病気で倒れてしまい入院。治療費はなんとかなるものの、子供3人で過ごすにはどうも収入が足りない。そこで部長の妹である、あの浅間あかりが週6でバイトを始め、兄である浅間部長よりも熱心に仕事をし始めたのだという。

当然浅間部長はそれに反対だったが、何せ兄嫌いな妹は言う事を聞かないんだとか。つーか浅間部長、やっぱり嫌われていたんだな。

それでも所詮は高校生のバイトが2人。3人で暮らすには厳しい稼ぎであった。

増してやアイツは母が不在の中、浅間家の家事を全部一人でやっていたらしい。

その上、毎日母の所にお見舞いに行っていたんだとか。

そして本日は彼女も風邪気味であった。にも拘わらず彼女は無理をしていた。

限界ギリギリの貧乏生活。病気の母への心配。学校もあるのに週6というバイト。

風邪をひいていても無理をしている彼女……。

アイツ、意外と家族想いだったんだな。

いや、友達想いでもあるし、そこに俺が含まれていないだけで本当に他人想いなのもかもしれない。

その他人想いな彼女だからこそ、自分に鞭を強く打ち過ぎてしまったのか……………」

「全然……………そんな風には見えないのに……………」

「当然、人間には表の顔と裏の顔があるからね。ボクのように素で通っている人間は希少価値だろうさ」

……………部長は生粋の変態だからな。

部室で女子が見ている中、フツーにエロ同人誌をニヤニヤしながら読む程の男である。

どんな人間も基本的に性欲には素直らしい。アレが素じゃなかったら少し疑うぜ？

「あかりは無理をし過ぎだ……確かに、ボクの稼ぎだけじゃ足りないかもしれない。それでもあかりはやり過ぎなんだ。それでも本人はボクの話なんて聞くハズもないし、だからボクは様子を見ている事しかできなかった。その結果がこれだね……」

「部長……」

アンタ、本当に真性の変態じゃなければいい兄貴だよ。  
ちゃんと妹の事考えてるんじゃないか。

俺なんて特に何もしていない、むしろ妹に迷惑をかけているのに……部長、俺なんかよりもずっとお兄ちゃんやってるじゃないか。

「さて、ボクは風邪薬を買ってくる。藤島くんはそろそろ帰らなくてもいいのかい？」

「薬って……金は？」

「ボクのへそくりを使うさ。流石に薬代をケチれはしないよ」

「でも部長がいない間はアイツ、一人じゃ？　そういえば弟さんは？」

「ああ、弟は最近グレちゃってね。下手すると一日帰ってこない事があるから」

「……………」

兄貴は真性の変態で、妹は他人想い過ぎて暴走しがちで、弟は滅茶苦茶グレたヤンキーさんって……。

浅間家に真人間はいないんですか!?

でも弟が帰ってこないとすれば、本当にアイツは一人だな。  
流石に病人を一人にするのはまずいんじゃないか?

……って、何考えてるんだよ俺は……。

アイツだろ。もう関わりたくないって思ったヤツだろ?

それなのに……なんだってこんなに放っておけないって思っちまうんだよ。

……クソツ、仕方ねえなあ。救いの手を差し伸べるのは今回だけだからな。

「部長! 俺、部長が帰ってくるまでここにいます」

「藤島君? 君にも家族がいるだろう?」

「大丈夫です。少しズレた人達なので遅くなるって言えば、絶対納得してくれます!」

「君はあかりに一方的に恨まれているんだろう? それなのにそのままですって……」

確かに、そんな状態なのにここまでするのは馬鹿げている。

そんなの自分でもわかってる。だけど、どうしても弱っているヤツを放ってはおけない。

たとえそれが、あんなヤツでもだ。

「お願いします部長。じゃないともしアイツに何かあったら、兄貴の部長はどうするんですか?」

「そ、それを言われると……うん……」

浅間部長は相当思い悩んだ末、遂に。

「……わかった。藤島くんなら任せても大丈夫だろう」

「任せても大丈夫って……なんでそんなのわかるんですか？」

「当然だ！ ボクより変態じゃない君が危険なわけがない！」

判断基準がすげえアバウト……。

いや、確かに何もする気はないが……。

ていうか、犯罪行為にだけは手を染めたくないので何もしません。

「あ、ありがとうございます……」

「うむ、それじゃ出来るだけ早く帰ってくるけど、あかりの看病は頼んだ」

「はい！」

「では、ボクは行ってくる」

浅間部長は鍵を取り、そのまんま玄関へと向かった。

やがて扉が開け閉めされる音が響く。どうやら浅間部長は本当に外に出たようである。

……さて、俺も仕事をしないとな。

まったく、出来ればもう関わりたくなかったけど、今回はサービス残業だからな。

第28話 ヲンタお兄ちゃんキャラだったの！？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は重大報告があるんだぜ？」

伊吹「何よ」

圭介「実は……キャラが増えたので、そろそろキャラ設定を載せようと思ったんだ」

伊吹「それって……私らのプロフィールよね？ プライバシーの侵害じゃないの？」

野原「テメエらはクズの集まりだ。クズにプライバシーなんざねえ。テメエらみたいなキャラの補充なんざいくらでもきく。大事な大事な企画を邪魔アすんならぶっ殺しちまっても構わねえんだよ。分かるかなあ。お前、今、一度死んだぞ？ 確認するぞ、分かってんのかあ？」

圭介「野オオオ原くウウウウウン！ そりゃ言い過ぎだろオがよオ！ オマエはキャラの重要性を全く理解していねえ。こういう系の話はキャラがいねえと話が成り立たねえだろオが。どんなモブだつてちゃんとした意味を持ってんだよ！ それほど大切なキャラをいくらでも補充の効くクズ扱いしてンじゃねえぞ」

野原「ハハッ！ 無駄だあ、テメエ一人くらい相手にすんのは簡単なんだよ」

圭介「チツ、ナメてンじゃねエぞ。三下がアツ！」

大吾「な、なんか今の圭介。僕らの為に戦っているように見えるぞ！？」

重原「相変わらず野原先生と会話する時だけ、口調が変だけどね」

暮葉「けーすけ様！ それより今日の晩御飯はなんですか！？」



## 第29話 漢（オトコ）の決意

浅間先輩が薬を買いに外出した後、俺は2階の浅間の部屋へと移動した。

ベッドなんて豪華なものがあるわけがない。当然彼女は布団で寝ている。

「人の寝顔って素直な表情になるもんどすなあ……」

寝ている浅間の表情は、苦しそうではあるがとも女の子的だ。ていうか息が荒いな。本当に大丈夫なんだろうか？

俺は浅間の額に掌を乗っける。やっぱり熱が高いように感じる。

顔色もあまりよろしくはない。ったく………どんだけ無理していたんだよ。

生活が苦しいのはわかっている。ロクでもない兄弟ばかりでも、それでも家庭を支えたいという気持ちもわかる。だけど本人が潰れてしまったら何の意味もないのに……。

「あ、そうだ。暮葉か葵に電話しとかないと」

今日は浅間の看病で遅くなるかもしれない。

だから、あらかじめ暮葉か葵には連絡しておいたほうがいいだろう。得に暮葉は俺がいないと、仕事上まずい所があるかもしれない。

……… そうだな、この場合は両方にメールでもしておこう。

俺は、『今日は私用により遅くなる。晩飯はあるとうれしいぜ』とメールを打ち、それを二人に送信した。……… って早ッ！もう葵から返信が来たぞ。

何々、『りょうかい！早く帰ってきてね』か……… ああ、なるべく

早く帰るよ。

葵に遅れる事1分、暮葉からも『了解なのです。念の為に、サヴィエトの魔法使いに気を付けるのですよ?』というメールが返ってきた。

「サヴィエトねえ……」

すっかり忘れていたよ。俺って一応身柄を狙われているんだよね。でもサヴィエトの連中は、俺の居場所を完全には突き止めていないらしいのだ。

だからだろう。こうして比較的平穏な日常を送っていられるのも。

……もし見つかったらどうなるんだろう?

まあ、見つからない事を祈って生活するしかねえよね。

「……あ、あんた……?」

ん……今、下から声がしたような……?

ていうか、この部屋にいるのは俺と浅間だけだ。という事は、今の声は間違いなく浅間であろう。

「よっ、目が覚めたのか?」

「んみや、ここあたいの部屋……えっ!? な、なんであんたがあたいの部屋に!? 襲う気なのかこの変態!？」

「誰が襲うか! 公園で倒れたのはどこの誰だよ……」

「た、倒れた? あたいが?」

「ああ。っーかお前、風邪ひいてるんだろ? 熱もあつたし大丈夫

なのか？」

俺がそう問う相手、浅間の顔は若干赤い。触ると熱かったし、やっぱりまだ熱が高いのだろう。ていうか熱が下がるハズもないか。ただ一時的に寝ていただけなのだから。

「あ、あたいは平気だ。それよりなんであんたがここにいる？ なんであんたがあたいの家を知っている？ ストーカーか！？」

「ストーカーじゃねえよ。お前の兄貴、俺の部活の部長なんだけどさ、部長に案内してもらったんだよ」

「んみや……アイツが……？」

なんてひどい妹……兄貴の事をアイツ呼ばわりだぜ？ どうやら、浅間は現実世界の妹リアルタイプのようなのである。これに比べたら……ブラコンな俺の妹は可愛いほうだな。

「お前なあ。ちったあ自分の兄貴に感謝しやがれ。お前の兄貴がいなかったら、今頃お前は公園で死んでたかもしれねえんだぞ？」

「……つで、なつ……なんであんたがいるんだよ？」

「覚えてねえのかよ。俺はお前と最初っから一緒にいたろ？ 保険証がないから病院に連れていくわけにもいかねえし、俺の家なんて絶対に嫌だろ？」

「あ、あたりまえだ！ 変態の家なんか」

「でも、俺の家って事は葵の家。つまりお前の友達って事になるんだぞ？」

「っ……あ、あんたがいなかったら……行くっ」

よっぽど俺の事が嫌いなんですか、コイツは……。

まあ、それは仕方がないでしょう。どう足掻いたって誤解が解けるわけがない。

何も起こらないようにする為には、俺が大人しくするしかないんだ。だから出来ればコイツとは、あんまり関わりたくなかったのに……全く、本当に今回だけだぞ。

「とにかく、少しは兄貴に感謝しやがれ」

「……あんたは。あんたは……なにやっただよ？」

「俺？ お前をここまで運んだただけだ」

「あ、兄貴は……？」

「お前の為に薬を買いに行った」

「っで、あんたは今何を……？」

「病人一人にできるかよ……弟はグレてるみたいで家にいねえし。だから看病してたんだよ」

俺は物凄く投げやりにそう説明した。

彼女は俯いている。それは嫌がっているのか、はたまた恥ずかしさなのか不明だ。

ただ彼女は俯き、決して俺にあどけない顔を見せようとはしなかった。

「……弟がグレてる？　なんで、あたいの家の事を……？」

「部長から聞いたんだよ、全部」

「ぜ、全部……っ？」

「ああ。かなり無理してたんだろ？」

「無理なんかしてないっ。それにあたいが働かなかったら生活費が……お母さんの治療費がっ」

「おいおい、話がおかしいぞ。浅間部長は確か治療費は大丈夫って言うていた気が……」

「どういう事だよ、こりゃ聞くしかねえぞ。」

「ちょっと待て。治療費はなんとかなるって……」

「……あんた、ほんとに全部聞いたんだなっ」

「ああ。部長が全部話してくれたから」

正直、申し訳ないとは思っている。

「ただ、人の為に一人で無理をするヤツなんて……俺は放っておけなかった。」

「それに個人的には好きじゃなくても、コイツは葵や青山さんの友達だ。」

「だからこそ放つてはおけないんだ……余計に。」

「……余計な事をつ」

「ごめん。でもそのおかげで見直したよ」

「み、見直したって？ どういう意味だよ？」

「ただの嫌な女だと思っていただけ、誰よりも他人想いで優しいヤツだったって所だよ」

「へ、変態暴力魔に言われても別に……嬉しくもななんともないっ」

「言われなくてもわかってるよ」

「だけど、浅間がいい子だっと思ってしたのは事実だ。」

「確かに俺の扱いはひどいが、無理して倒れてまでその行動をやめようとはしない。」

「そこまで人の為に強い意志を持っている。本当にコイツは優しいヤツだ。」

「だからこそ俺は言っただけでやりたくない」

「倒れてまで無茶をするくらい優しいってのはわかった。だからもう無理はするな」

「なっ……いい、言ってる事が滅茶苦茶だろ！ 兄貴は部活もあるし圭太はグレちゃってるし……あたいが無理しなかつたら誰が生活費を稼ぐんだよ！ 誰がお母さんの治療費を稼ぐんだよ！？」

「やっぱり……コイツは今ハッキリと、お母さんの治療費って言ったぞ。」

何かがおかしい。浅間部長は確かに母親の治療費はあると言っていた。つまり、どっちかが嘘って事なんだよな。一体どっちが嘘だったんだよ。

「なあ……母さんの治療費って……？」

「兄貴は誤魔化してるけど、あたいは知ってただよ！ 本当は全然足りない。あたいが働かなきゃ、手術をするお金がないんだから！」

「ほ、ホントなのか？ それ」

「嘘なんて言わないっ。お母さんは一回手術すれば治るのに……でも、お金が足りないんだよ！」

「……………」

俺は浅間の叫びに、思わず絶句してしまった。

浅間部長の言葉は嘘だったのかよ……じゃあ、全然お金なんて足りてねえじゃないか。

……って、浅間部長を悪く言っちゃいけないよな。

浅間部長は浅間に無理をして欲しくなかった。だからこんな嘘をついたのかもしれない。

それに浅間が気付いてしまったんだ。だから彼女はこんな無理をしたのだろうか。

……けど、浅間は今がこの状態だ。これ以上無理をさせるわけにはいかねえ。

これ以上は浅間部長の為にも。葵や青山さんが心配しない為にも……。

絶対に、浅間に無理をさせるわけにはいかない……！

「……おい浅間」

「んみゃ？」

俺が静かに名前を呼ぶと、いかにも不安そうな表情をした彼女が顔を向ける。

「あと……何円だよ？」

「な、なにがだよ？」

「あと何円か聞いてるんだよ。手術に必要なお金は？」

「……10万。頑張つて溜めたけど、10万円足りないんだよ……」

「10万か……」

学生からしてみればすごい金額だ。でも、世間からしてみればそんな金額できないのだろう。

それに学生二人のバイトじゃ、月収は10万に及ぶかすら微妙なレベル。

増してや3人生活しなけりゃいけないんだ。そんなのすぐに溜まるわけがない。

こうしている間にも、コイツの母さんの容体が悪化するかもしれない……。

とにかく残り10万円か……へっ、なんだよ。予想より難易度が低



くて助かった。

200万とか300万なら引いていただろう。でも、10万くらいなら……ッ！

「わかった。お前はしばらく休んでいろ、金は絶対なんとかする」

「なんとかするって……あ、あんた！ 何する気だよ！ やめろよな！？」

「不正な真似は絶対しねえ。だけど10万円は絶対用意するって約束するよ」

「あ、あんた！ 何をっ！？」

その時、微かに扉が開く音が耳に入る。

きつと、浅間部長が薬局から帰ってきたのだろう。

丁度いい、このまま家を出て今から資金を用意し始めよう。

「じゃ、俺はそろそろ帰るな。無理はしないで休んでろ、絶対に10万円はなんとかするから」

「あ、あんた……っ」

「じゃ、皆を大切にするのもいいけど、その前に自分を大事にしるよー！」

俺は出来るだけ笑顔を作り、そう言い残して部屋を立ち去った。

……さて、こつから先は少しばかり本気にならねえとな。

ぶつちやけ、10万円なんてどうやって手に入れればいいんだ？

バイトしたって最低2ヶ月はかかる。でも出来れば一週間以内に手

に入りたい。

……まあ、頑張るしかねえよな！

## 第29話 漢（オトコ）の決意（後書き）

どうも、作戦参謀です！

今回からキャラ設定的なものに乗せていきたいと思えます！

伊吹「キャラ設定にまでパロディあるわよ……」

No1

ふじしまけいすけ  
藤島圭介

イメージCV：間島淳司（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『とらドラ』高須竜児役

『これはゾンビですか』相川歩役

県立初芝高等学校2年4組在籍

ジョブ：馬鹿でオタクだけどたま〜に頼れる、自称『紳士』の変態

主人公

性別：男性

年齢：連載開始時点で16歳

誕生日：8月26日生まれ

身長：172cm

体重：59kg

趣味：エロゲープレイ、アニメ鑑賞、ラノベ読書、伊吹をからかう

好きな物：アニメ、エロゲー、女の子、ポテチ、平和

嫌いな物：勉強、野原先生、長ネギ、現実

その他：本作の主人公。ボケる事も多いがツッコミ役に回る事が多い。

実はロジーナ皇太子アレクサンドルの子孫。

先祖返りによりアレクサンドルの能力が宿っており、キスをすると能力解放モードになる。

普段はリミッターがかけられているが、身体が異常に丈夫で傷の回復力も高い。

運動は得意だが学力は低く、無理して初芝に入った結果成績はいつも赤点ギリギリ。

何だかんだ言って世話焼きであり、困っている人は見逃せないタイプ。

しかし変態な為、主に女子に『変態』と呼ばれ時には犯罪者予備軍扱いされてしまう。

エロゲーで鍛えている為、キザなセリフは得意。

反応が可愛いという理由で、よく伊吹の事をからかっている。

実は過去に色々あったらしく、今でもその事を気にしているが……。

……まあ、ちよつと馬鹿でオタクで変態だけど本気を出すとすごい人です。

### 第30話 手っ取り早く10万円を稼ぐ方法

短期間で10万円を稼ぐ……普通なら無理な話だ。

とらゴンボールみたいに格闘大会でもあって、もし俺が格闘家に勝てたら10万稼げるかもしれない。

だが、それは非現実的な話だ。そもそも路上でそんな大会やってない。

仮にやっていたとしても、プロの格闘家に勝てるわけがない。

と、思いつつも。ぶっちゃけ金を稼ぐ方法なんて……。

「ただいま」

「おかえりお兄ちゃん！」

「けーすけ様！ 今日遅かったのですね」

「ごめんな、ちょっとトラブルが発生したもんで」

「と、とらぶる！？ なんだんエッチな臭いがするね！」

……ああ、当然絶句したよ。葵が想像しているのは多分漫画のトラブルだろうね。

俺的に美柑は妹キャラだけど可愛いと思うんだ。

やっぱり妹と言えども、二次元になると精度が大幅アップだね。

まあ、話を戻してこの程度の勘違い、葵だけなら問題がないんだが……。

「けーすけ様がエッチなトラブル！？ へへへ、変態！ 今度は誰

を襲ったのですか!？」

「ねえ暮葉さん! どうして俺が加害者だって前提なんですか!？」

「だだだ、だつてけーすけ様。明智殿の胸を……っ!」

「ホントなの!? お兄ちゃんダメだよ! そんなことするくらいなら葵の胸を」

「もうお前らしい加減にしてくださいッ!」

どうしてだ、なんでいつも下ネタ展開に行くんだろう?

俺も変態だが、身の周りの女子のほうがよっぽど変態じゃねーか!

……そんなツツコミを入れてみたいのだが、賛同してくれる人がいなさそうなのでやめておこう。

その後、俺は自室に戻り作戦を練っていた。

如何に短期間で合法的に10万円を稼ぐか。これは俺にとっては大きな課題である。

アイツと約束したからには、この約束は必ず果たさなければならない。

そうは簡単に言ってみるが、現実には二次元よりも厳しいものだった。

そう、現実というクソな世界はそんな簡単に10万円を稼げるようには、できていないんだ……。

「困ったなあ……」

ああもう、格闘大会やるならどんな強いヤツ相手でも戦うよ!

ゲーム大会やるんだったら、どんなクソ強いプレイヤー相手でもやっつてやる!

とにかく、手っ取り早く10万円を稼げる方法を見つけない。

アイツの為にも、浅間部長の想いの為にも、友達を心配させない為にも！  
でもどうすりゃあいいんだ！

「……………んっ？」

ゴ―グル先生で賞金10万円を検索をしていると、丁度いい情報が掲載されている事に気付いた。

房総丘陵トレイルランニング30km、優勝者には賞金10万円：

…おお！

5月15日早朝受け付け、10時にスタートし制限時間は5時間。

「これだ！」

トレイルランニング、ランニングスポーツの一種で、舗装路以外の山野を走るものである。

最もそれがどういう競技か、詳しい事はわからない。

それでも賞金10万円はおいしいぞ。しかも5月15日って今度の日曜日じゃないか。

俺はこれでも足腰には自信がある。万が一これで優勝すれば、15日には10万円が手に入る。

……上等だ、出場してやるよ。これで必ず賞金10万円を手に入れ  
てやる。

というわけで明日から早速特訓だ！

翌日、学校で俺は房総丘陵トレイルランニングへの参加を、  
皆に報告してみました。

すると、皆さんの反応はこんな感じでした。

「け、圭介っ！？ あんた本気なの！？」

「ああ、わりと本気だぞ」

そりゃあ、今回は背負ってるものがあるからな。わりとというよりもかなり本気である。

「けーすけ様！ いきなりどうしたのですか！？」

「いや、俺。実は走るの大好きなんだ！」

「見え見えの嘘ね。圭介って走るの速くても走ること自体は面倒だつて、前に言ってたじゃない」

「い、伊吹さん鋭いっすね……いや、でも本気なのは確かだ！」

そう言いながら、俺はガッツポーズを取ってみる。

けどなんだろう。皆の反応がやけに薄いぞ？

「圭くん。それって足腰の強さにスタミナもいるし、足が速いだけじゃダメなんだよ？」

「そんな事わかってるって。スタミナのほうにも自信はあるよ」

「まあ、あんたは結構タフだからね。でもどうしていきなり出る気になったのよ？」

「そうですね！ 拙者達はその大会の存在すら知らなかったのですよ！？」



存在すら知らなかったって……あんたらそれでも県民ですか!？  
まあ、確かに房総丘陵なんて俺らには縁のない所だ。

「それにしても房総丘陵かあ、懐かしいな」

「あ？ 広ちゃん行った事あんのか？」

「中学の頃山籠りに行った事があるね」

「ぐはっ！ すごい流石広ちゃん、山籠りってフツのヤツはしね  
ーぞ!？」

大吾が驚くのも無理ないぜ。俺だってちょっと驚いちゃいましたよ。  
多分重原という武道バカは、道場破りくらいならやった事があると思  
っていたが……。

まさか山籠りまでしていたとはね、そりゃフツに強いよ。

一度道場で試合を見せてもらったが、重原の廻し蹴りは明智の蹴り  
にも匹敵しそつである。

「じゃあ、重原は向こうの地理に詳しくったりすんのか？」

「まあ程々にね。確かそこまでアップダウンは厳しくなかったハズ  
だよ」

「なるほどねえ……」

とは言え、悪路な上にアップダウンはあるのだ。

フツの馬拉ソンと同じと考えちゃ、きっと痛い目に遭うだろう。

「あ、そういえば私も行ったことあるわ」

「え？ それってマジな話なのか？」

「剣道部の合宿よ、夏休み時々いなくなるでしょ？」

「ああ、なるほど」

どうやら、房総丘陵は重原と伊吹が経験済みのようである。お互い目的は違うけどね。伊吹の目的のほうがマトモな気がするぜ。部活の合宿なら仕方ないよね。

「けーすけ様、葵さんも連れて絶対応援に行きますね！」

「あたしも伊吹と一緒にいくな！」

「ま、まあ……圭介が頑張るなら仕方ないわね。特別に応援してあげるから感謝しなさい！」

「じゃあ僕も行ってみますかい。ラノベのネタになりそうだからな  
！」

「大吾……新人賞狙ってるんだよね。まあそれはともかく、俺も応援に行くからね」

みんな……なんていい友達なんだ。思わず涙が出てしまいそうになったぜ。

……そうだ、他のヤツにも一応この事を伝えておこう。出来れば応援してくれそうな人にしよう。応援してくれるとこっちもテンションが上がる。

戦う原動力にもなってやる気が出てくる。決まりだな、他の奴にも

言おう。

というわけで、次に参加を告げた相手は……。

「ほ、ホントなのか。藤島？」

「ああ、諸事情により出る事になっちゃいましたよ！」

そう、明智光秀の子孫であり、初芝高校では風紀委員を務める明智  
凧紗である。

彼女も俺にとっては大切な友達だ。だから彼女にも伝えることに  
したのである。

「でも、でもどうしていきなり？」

「だから諸事情だよ。その辺には深いワケがあるんだよ」

「藤島……もしかして、罪償い？」

「は、なんで？」

「あまりにも変態すぎて皆に嫌われたから、優勝して信頼を取り戻  
そうと」

「そこまで皆の好感度下がってねーよ！ 頼むから変態と結びつ  
けないでください！」

きっと明智の脳内では俺＝全てが変態という図が、完成しちゃっ  
ているのであろう。

全く迷惑な話である。俺はそこまで腐った変態じゃねーですよ。

「うーん、では深いワケって?」

「そりゃあまあ……」

「はあ……やっぱり罪償いか。今度は何をやったんだ? 覗きか痴漢か?」

「だから違つつってんでしょ!」

コイツ、どうしても俺を犯罪者に仕立て上げたいんだな。

「で、でも藤島が出るなら私は応援するっ。その……頑張れっ」

「はあ……」

応援してくれるのはとてもありがたい。

だけど、なんだか勘違いされたままのような気がするんだ。

まあ、明智も応援してくれるようだし、次は青山さんや葵あたりだな。

そう思って1年の教室に行ってみたはいいが……。

「もう知ってるよ」

「え? そうなのか?」

「はい、わたし達は……木下先輩に訊きましたので」

なるほど、葵と青山さんは暮葉ルートで知ったんだな。

確かに葵も連れて行くとか、そんな事を張りきって言っていたよな。  
……アイツ、変な事をこの二人に吹きこんでいないだろうな？

「お兄ちゃん！ やるからには優勝目指そうね。その為に特訓しよう、お兄ちゃんのベッドで！」

「何の特訓だよ!？」

「藤島先輩と葵がベッドで……っ!？ はわわっ！ そ、そういう関係だったのですか!？」

「違うわ！ 葵の言う事は信じるな!！」

畜生、言わなきゃよかったかもしれない……。  
まさにこんなに変態扱いされたり、露骨に下ネタトークされるとは思わなかった!

流石の俺でも引くレベルだわ。もうホントになんなんでしょうかこの人達は!？

「先輩……わ、わたしは先輩と葵がそんな仲でも……ずっと尊敬する先輩ですっ」

「納得しないでくださいよ!！」

でも尊敬はされていたのね。あれ、尊敬されるようなことやったっけ？

……まあいいか。少なくとも嫌われているわけではないみたいだしな。

「あははっ、お兄ちゃん可愛い」

「元はと言えば、てめえが変な事言うのが悪いんだろ！」

コイツが変な話を始めたせいで、俺が青山さんにシスコンだって勘違いされただろ。

確かに、妹は好きだが兄×妹は二次元のみ許された、禁断かつ神聖なるセカイだぜ？

それをリアルに引っ張ろうとする葵はもう……邪道の一言に尽きるぜ！

葵は俺の知っている人物の中でも、最もトラブルメーカーな存在かもしれない。

「でも……どんな理由でも先輩が出場するのは事実ですよね？」

「まあな、もちろん葵の為ではないぞ」

「バツサリ否定された！？」

そこまで露骨に残念そうな顔すんなよ。欲しかった同人誌が完売していたわけじゃないんだぞ。

どこまでブラコンなんだ、我が残念な妹は。

「先輩……っ、頑張ってください！」

「お兄ちゃんファイト！ 優勝のご褒美は葵だからね？」

「頑張るけど葵はいらないからな！」

「さ、爽やかな笑顔で葵の存在を否定された！？」

うるせえブラコン！

もう少し妹らしく兄を応援しやがれ！ここは二次元ではなく現実な  
んだぞ！？  
リアル

……さて、大抵のヤツにはこの事を報告したな。

浅間部長には……黙っておこうかな。

出来ればドッキリをやってみたいんだ。もしも勝ったとして、10  
万円を手に入れたら……。

その時は浅間に直接諭吉さん10枚を手渡すんだ。

当然、房総丘陵トレイルランニングには数多くの人に参加するだろ  
うし、そもそも30kmなんて長距離を走った事がない。

ぶっつけ本番で優勝なんて殆ど不可能に近いかもしれない。それで  
も……俺はこの機会を逃したくない。アイツの為にも、アイツの母  
親の為にも。そしてアイツを心配している友達や浅間部長の為にも。

……絶対負けられる戦いじゃねえ！

### 第30話 手っ取り早く10万円を稼ぐ方法（後書き）

NO2

きのしたくれは

木下暮葉

イメージCV：伊藤かな恵（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『神のみぞ知るセカイ』エルシイ役

『とある科学の超電磁砲』佐天涙子役

県立初芝高等学校2年4組在籍、アルファ隊所属。

ジヨブ：ちよつと魔法が苦手な魔法少女

性別：女性

年齢：連載開始時点で16歳

誕生日：6月5日生まれ

身長：146cm

体重：37kg

胸ランク：極小（貧）

趣味：一期一振を磨く事、最近はゲームとかにもハマリ出した様子。

好きな物：甘い食べ物、牛乳、地球で出会ったPNPのゲーム

嫌いな物：野菜、辛い食べ物、戦闘

その他：異世界からやってきた魔法少女で、自称豊臣秀吉の子孫。魔法少女と言いつつも魔法が苦手で、戦闘スタイルは魔法使いというより武士。

でも、魔法が役立つ事もあるので、全く無駄というわけではない。アレクサンドルの子孫である圭介の護衛を指示され、藤島家に居候しつつ圭介を護衛。

しかし、遊んでいるようにしか見えないのが現状。

少なくとも圭介と出会う前に一ヶ月ほど日本に滞在しており、その



為日本の事についてはある程度知識があるみたいだ。

性格は明朗快活で人懐っこく、小動物のような愛嬌を持っている。

見た目通り子供っぽいところもあり、圭介曰くアホの子でしかも馬鹿ある。

愛嬌ある外見と活発な性格によつてすぐにクラスに馴染めた。

圭介の事は「けーすけ様」と呼ぶあたり、一応慕つてはいるみたいである。

### 第31話 / 房総丘陵トレイルラン大会

5月15日早朝……房総丘陵トレイルランニング当日。

俺は現在、受け付けを待つ人の行列に並んでいた。

結構早くきたつもりだったんだけどなあ。皆さん中々朝が早いようで既に大行列だ。

選手は見た所老若男女勢ぞろい。子供から老人まで性別問わずに並んでいる。

……まあ、子供や老人は敵じゃないとして。問題はやっぱりある程度若い人だよな。

それに中年の中にもすごい人はいるだろう。例えば現役自衛官とかな。

とにかく、こっちの武器は体力と身体が丈夫な事だけだ。

ただ問題は肺と脚の、どっちが先に潰れて使いものにならなくなるかである。

「……………っ！」

……いや、そんな事を考えていちゃダメだ。

どんな事があるうと勝たねえと。この勝負だけは負けてはダメなんだ。

「……………ん？」

あれ、あのTシャツに短パンって初芝じゃないか？

俺以外にも初芝の生徒が参加していたんだな……。

しかもよくみるとあの子、中々レベルの高い美少女ではないか。

セミロングな黒髪で身長は……伊吹よりは高そうである。

バストサイズ……うはっ、なんて丁度いい大きさなんだ。滅茶苦茶俺好みではないですか！？  
あんな子もトレイルランに参加するのなあ。こりゃ俺もいつも以上に本気を出さねえとな。

やがて受け付けが終わり、開会式も終わって現在スタートライン。

大勢の人々が立ち並び、ただひたすらスタートの時を待っている。こつからじゃ応援席が見えないな。つか皆どこで応援しているんだろう。

はあ……伊吹とかがチアガールの恰好していたりしないかなあ？

「よおし、本気出しちゃうぞお！」

「な……なっ！？」

考え事をしていたその時、さっきの初芝の女の子がなんと……かかか、髪を括った！？

すげえ、どこのギャルゲヒロインだよ全く。現実<sup>リアル</sup>で髪を括る女の子がいるだと？

なんということでしょう。我が初芝高校にはあんな希少価値な子が存在しているのか。

スバラシイ！現実<sup>リアル</sup>もまだまだ捨てたもんじゃねえぜ！

髪を括ったあの子、その為現在ヘアスタイルはサイドテールであった。

元気が出た。俺はギャルゲヒロインのような事をするあの子を見て、パーフェクトに元気が出ました。

フフフ……この元気。これで勝つる！

「……………」

「ん？」

「っ！？ ……」

なんだ？

今、さっきの髪を括った女の子が俺の事を凝視していた気が……。

……ハハハ、気のせいですか。ですよー！

さてと、そろそろスタートの時間だな……この勝負だけは負けられないぜ。

〔スタート5秒前。 4、3、2、1……0！〕

放送が0という数字を告げると同時に、選手たちは一斉にスタート地点から足を動かし始めた。

俺もそのうちの一人である。こういうのはスタートが大事なのだ。

「10万円でエロゲー沢山手に入れるんだあああああああああああ  
あっ！」

「彼女とのホテル代ゲットだぜええええええええええっ！」

「働いたら負けだし、ここで一ヶ月の金を稼ぐぞおお！」

「俺！ この大会が終わったら結婚するんだ！」

……しかし、ロクでもねえ目的で参加している人多いな。しかも誰

だよ死亡フラグ立てたヤツ!?

こっちは超真剣なんだぞ。こんなのに絶対に負けてられない。必ず勝つて10万円を手に入れる。絶対に浅間家を救ってやる……。俺がやなきゃ誰がやる!……そんなとらゴンボールのな事を考えながら、俺は30kmという長距離を走り始めたのであった。

それからしばらく、10kmを走った地点である。

「……………!」

俺は結構先頭のほうを走っているようで、俺の前にはたったの6人しかいなかった。

何故こんなに走れるか。前にも行った気はするが、これでも足腰とかには多少の自信があるんだ。

リアルに陸上部にスカウトされた事もある……まあ、面倒なので断りはしたが。

なので俺は走るの結構得意なのである。それでも追い付けない前方の6人……。

多分いつも鍛えているか、学校に通っていて陸上部にでも所属しているのだろう。

でもよかったあ。陸上選手とか現役自衛官がいたらどうしようかと思っただが、俺でもこうして追いつけるといふ事は……その手のプロの人は今回参加していないんだな。

よし、少しは勝利の兆しが見えたかもしれない。でも前は6人だけとは言え、それでも陸上において1人を抜かすのは大変な事だからなあ……この勝負、少し厳しいかもしれぬ。

……そんな考えはゴールまで残り半分である、15km地点まで走

ってから消えていった。

なんと、6人のうち3人を抜いてしまったのだ。3人は前半調子よく先頭走っていた連中である。

どうやら、最初のほうで体力を使い過ぎてしまったらしいのだ。

俺の方も大分疲れてはきたが……一応、これでも体力は温存しているほうである。

こうして俺の順位は4位に。一番先頭の選手の容姿も見え始めていた。

アレは……髪を括っている？もしかしてスタート地点にいたあの子だろうか？

さらに走って20km地点。

「はあ！ はあ！ はあ！」

ああ、流石に疲れてきた……でも身体のほうはまだ大丈夫だ。

それに……この勝負には負けられない。多少疲れようが関係ないんだ。

ていうか……流石トレイルラン。ここモロ未舗装というか、荒れた山道じゃねえか。

こうして走るのは少し危険かもしれねえぞ。だけど……負けたくはねえ。

ていうか負けられねえんだ。どうしてもやり遂げなきゃいけない事があるんだ！

そして……いよいよ残り3kmという地点。

ついに俺は2位まで上り詰めたんだ……何があったって。単純に体力のおかげである。

短距離走では陸上部員に劣るが、長距離では持久力があるほうが勝ちである。

俺の体質上、身体の強度の他にも心肺能力も高めなので、ぶっちゃけ短距離よりも長距離のほうが得意なのである。じゃなかったらこんな競技には出ないぞ。

……とは言うものの、流石にペースを保ったまま30km近くを走ると、滅茶苦茶疲れる……。

「はあ！ はあ！ はあ！」

「……っ！？」

よ、ようやく……い、一番先頭に並べたぞ……？

やっぱり髪を括っていた女の子。意外だな……女子が一番前か。

ちなみに俺のすぐ後ろには、さっき俺が抜いた連中がいる。彼らも再び抜き返す機会を覗っているのだろう。だがそんな彼らは全員が男である。つまりこの中に女子は先頭を走るあの子のみだ。

「……はあっ！ んっ……ぐうっ！」

クソッ……流石に厳しい……ッ！

やっぱり日頃鍛えてねえからな……いくら御先祖様の恩恵があるとは言え、鍛えてなけりゃ所詮は少しすごいだけの人間である。

「……っ！ っ！」

まずい、あの子との距離が離れて行く……後ろのヤツが近づいてくる……ッ！

クソッ、残り僅かだぜ。こんな所で離されたら……抜き返すチャンスなんてっ！

「あ、皆さん！ 選手が来たのですよ！」

「う、うそっ！？ 圭介が2番目だわ！」

「圭くん頑張るねえ、何か賭けてるのかな？」

「でも藤島のヤツ、相当バテてる……しかも相手は陸上部エースだぞ？」

「そうだね。このままじゃ圭介は最高によくても準優勝だね」

「お兄ちゃんガンバレー！」

「せ、先輩……頑張ってくださいっ！」

「あ、アレ？ 僕何も言う事なくね？」

アイツらゴール地点にいたのか。通りで途中で見かけなかったわけだ。

クソツ……息苦しいっ。足は痛くないがとにかく息苦しいぞ。

滅茶苦茶苦しい、下手すりゃ倒れる……ッ。でもっ！

“あたいが無理しなかったら誰が生活費を稼ぐんだよ！ 誰がお母さんの治療費を稼ぐんだよ！？”

“本当は全然足りない。あたいが働かなきゃ、手術をするお金がないんだから！”



“嘘なんて言わないっ。お母さんは一回手術すれば治るのに……でも、お金が足りないんだよ!”

アイツが……アイツが味わった苦しみなんかに比べりゃ……。こんな全然、大した事は……。

「……ねえんだよっ」

アイツ以上の苦しみなんて、トレイルランでは絶対に味わう事ができない。

だけど、そんな苦しみを味わい続ける必要はない。

アイツ一人が無理をする必要なんて……全くないんだ。

努力するのはアイツ一人じゃねえ。その中にはあの時から俺も含まれた……。

“不正な真似は絶対しねえ。だけど10万円は絶対用意するって約束するよ”

アレは、あの言葉は俺の……覚悟の証だ……ッ!

「ぐッ……ううおおおおおおおっ!」「」

その時だった。

ようやく、消えかけていた気合いが再び入ったんだ。

崩れかけた身体を踏ん張って持ち堪え、大きな声で雄叫び、拳を力強く握る。

相手の女の子も限界ギリギリで、ペースを保ってはいた。だが、悪く言えばそれ以上の事はできない。

多分彼女もここで俺が突然本気を出そうとは、思ってもいなかったろう。

それは、ひどく隙だらけであるのと同じ意味である。

俺は隙だらけの彼女を抜くべく、残る全ての力を籠める。そして大地を力強く蹴りあげる。

一足とびに飛びだした刹那、再び彼女と並ぶ事に成功した。

チラリと左を見ると、Tシャツの右胸のあたりに生駒の文字が見えた。おそらく彼女の名前であろう。

彼女も俺の方を見て、自然と視線が合ってしまう。彼女の目は驚いたように見開かれていた。

そんな隙だらけの彼女にはもう……俺に反撃する術は残されていない。

大地をもう一蹴りし、飛び出す勢いで右手を伸ばす。その結果……

最初にフィニッシュしたのは俺である。

まさに僅差、ギリギリの勝利であった……だが、もう体力が残っていない。

俺はフィニッシュした勢いで、そのまま地面へと倒れ込んでしまった……。

ああ……アスファルト熱い……。

「け、けーすけ様が勝ったのです……」

「やった！ お兄ちゃんが勝った！」

「ふふん。伊吹、圭くんに惚れなおした？」

「っ!？ わわわ、私は別に圭介なんて元々好きじゃないわよ!」

「国宗先輩。その……顔、赤いですよ?」

「それにしても圭介のヤツ、随分熱かったな。なあ広ちゃん?」

「そうだねえ。やっぱり、小坂さんの言う通り何か賭けてたんじゃないかな?」

「……すみじゃん」

ああ、みんなの声が聞こえる……。

ていうか明智さん。すみじゃんって一体なんなんだ……?  
まあ……そんなことはどうでもいいけど。

俺は勝った……。

合法的に10万円をゲットした……。

……ははっ。ようやく……浅間に合わせる顔が出来たような気がする……。

「あのっ!」

「……ん?」

その時、どこからか少女の声が聞こえてきた。

場所は右上。そこを確認すると、胸元に生駒と書かれた髪括りの少女が立っていたのだ。

「同じ初芝で2年の人だよな?」

「お、おう……君は？」

「初芝高校2年の生駒純奈いしまたまなです。今日はありがとうございます！  
完敗です！」

「お、おう……君も、すごく速かったよ」

「ありがとうございます！ ではっ！」

明るい笑顔を浮かべ、彼女は背中を向けて走り去ってゆく。  
話しかけられた……なんとというか、いかにも体育会系だな。  
でも、近くで見ると極上にキュートな子だったな……。

「ナギちゃん！」

その時誰かをそう呼んだのは、まさに先程の生駒純奈であった。  
ていうかナギちゃんって……まさか名字が三千院だったりして。  
……流石にないか。そんな事を思いながら声のしたほうを見ると……。

「すみちゃん。お疲れさん」

「えへへ。ナギちゃん負けちゃったよ」

「気にするな。あの変態は本番に滅茶苦茶強い男だから」

「……なん……だと!？」

ナギちゃんが明智で、すみちゃんが生駒純奈……？

なんじゃこのエロゲーにありがちな、ヒロインと親友みたいな感じ  
はあああ!？

### 第31話 / 房総丘陵トレイルラン大会（後書き）

NO3

くろむねこぶき

国宗伊吹

イメージCV：斎藤千和（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『ストライクウィッチーズ』フランチエスカ・ルッキーニ役

『魔法少女まどか マギカ』暁美ほむら役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ：ツッパリ（？）幼馴染

性別：女性

年齢：連載開始時点で16歳

誕生日：9月4日生まれ

身長：151cm

体重：40kg

胸ランク：小（貧）

趣味：圭介に絡む（？）事、焼きそばを食べる事、音楽・テレビ鑑賞

好きな物：食べ物全般、特に焼きそば大好き、剣道、お昼寝、お笑い番組

嫌いな物

身体測定、ヤンキー、煙草の煙

その他：圭介の幼馴染の女の子。

全然素直じゃない性格だが、デレがないと思っている圭介にはツンツン突っぱね〴〵ツッパリ伊吹ちゃんと呼ばれている。

剣道部に所属しており、部長を超える高い実力を持つ。魔族のヴォルコラクにさえある程度実力を評価されている。

どういうわけか、暮葉の居候に最後まで反対していた。

それどころか、圭介が他の女の子といい雰囲気だといつも機嫌を悪

くしている。

焼きそば大好きっぷりは異常レベルらしく、家事スキルほぼ0の圭  
介さえ焼きそばだけは上手に作れるようになった程。

### 第32話 街灯の下で

房総丘陵トレイルランを制覇した俺。

元気な体育会系である生駒純奈と、実は超能力者である明智凧紗が親友であるという、意外な事実も発覚した。無事に賞金10万円を手に入れる事ができた。

マスコミに勝手に撮影され、その後何故かゴールしてきた人達に伊吹が彼女だと勘違いされ、伊吹が噛みついて来て……うっ、ちょっと傷が出来ました。

あの後、途中までは皆で一緒に帰った。

そして最後は賞金10万円を片手に、ボロボロな俺は暮葉と葵に支えられつつ帰路を移動していた。

……だけど、俺にはこのまま直行したい場所があるんだ。

「二人とも、ちょっと寄り道したい所があるんだけど」

「もきゅ？ けーすけ様、どちらになのですか？」

「いやぁ知り合いの家。ちょっと用事を思い出したんだ」

「お兄ちゃん！ 知り合いつて……女の子？」

うわぁ！ myシスター葵たんからダークなオーラが！？

……まずいぞ。突然「お兄ちゃん、二度と葵以外の女に近寄れないように……してあげ」なんて言われて、イキナリ刃物で四肢切断なんてされたら……。

はわわ、怖ええええっ！ 葵は多分ヤンデレではないと思うが、万が一の事も考えよう。



そんな事になるのは絶対嫌だ。それに浅間の家には浅間部長だって  
いるんだ。

「男に決まってるでしょ！ 女の知り合いなんてしねえし……」

そう。こう言っただって強ち間違いではないんだ。  
フフフ、これぞ噂の緊急回避というヤツである。

「けーすけ様、拙者もお供したほうがよろしいのでしょうか？」

「いや、一人で大丈夫だよ」

「でも万が一けーすけ様が暴漢に襲われたら!？」

「そうだよ！ お兄ちゃんが公園なんかに行ったらその……つ、ツ  
ナギの男に……」

「アッー！ 薔薇色な話はやめい！ そもそも公園なんていかねえ  
よー！」

「それではどちらにいかれるのですか？」

「……先輩の家？」

うん、この答えで合っているハズだ。

浅間の家は一応部長の家でもあるからな。嘘は言っていないハズで  
ある。

「けーすけ様が男の先輩の家に……ですか？」

「お兄ちゃん！ その……汚されても葵はお兄ちゃんの妹だよ」

「お前らどうしても話を薔薇色にしたいのね!？」

葵は腐女子じゃないハズなのに、なんででしょうか？

まあそれはともかく、ようやく抜け出せた俺は浅間家へと向かったのだった。

暮葉、大変心配そうな顔をしていたなあ。アイツの任務は俺の護衛だしな。

……多分、サヴィエトの皆さんには見つからないと思うし、大丈夫だとは思っただけだな。

浅間家。ここに来るのは二度目だが、相変わらず耐震強度が0に等しいオンボロ住宅であった。

浅間部長いるかな。いや、でも休日はいつもバイトしているって言うっていた。

もしかすると、まだ帰ってきていないかもしれないな。

……どうしよう。浅間は絶対俺と二人きりなんて嫌だよな。前は特別だったんだろうし。

流石に俺だけで家に入るのもなあ。やっぱり暮葉を連れてくればよかった気がするぜ。

「あ、あんたは!？」

その時、丁度いい所で浅間が現れた。

しかも私服、こいつ今までどこかに出かけていたんだな。

「よっ、体調はどう……っっておわあっ!？」

「っ！ こ、来いっ！」

なななな、何故だ。何故俺は浅間に手を引かれているんだ？  
しかも手を引く浅間の表情。やっぱり不機嫌そうである。  
そりゃあそうだ。嫌っている相手が自宅の前に不自然に立っていた  
んだから。

ていうか、俺はコイツにどこに連れていかれるんだ！

こうして連れて行かれた場所は、浅間家の近所にある“こ  
うなん公園”という小さな公園。

正直に言おう。こんな公園古宇坂に存在してただなんて、俺は全  
然知らなかったぞ。

滑り台にブランコ、砂場しかないなんて……どんだけ小さいんだ、  
この公園は。

そんな公園まで連れてこられた俺。手を引いてきた浅間は両手を腰  
に当て、仁王立ちをしている。

その目はとても厳しく、肉食獣が獲物を狙うように俺を睨みつけて  
いた。

「おい！ あんたは……家の前で何やってたんだっ」

「え？ ああそうだ。これを渡そうと思っただよ……」

俺はポケットの中から封筒を取り出す。その中には当然、優勝賞金  
10万円が入っている。

浅間にそれを渡すと、彼女は当然のように封筒の中身を調べた。  
そして、予想通り彼女は驚きのあまり目を見開いていた。

「あ、あんた……これって……っ」

「約束のものだよ。これでお母さんの手術ができるんだろ？」

「なんで……どうやって手に入れたんだよ……？」

「房総丘陵トレイルランってあるだろ？ あれって賞金10万なんだけ？」

「あ、あんたがボロボロなのって……」

「ああコレ？ ちょっとゴールでコケちゃって……でも大した怪我じゃないから」

「……ばかだろ、あんた……っ」

突如、彼女は小さな顔を俯かせてしまった。さらに歯を食いしばり、小刻みに震えている

まずい……もしかして、何かやばいフラグを立てちまったんじゃないか。

そんなに怒ることを言っちまったのか。それとも勝手に家に来た事を怒ってんのか？

……多分後者だろう。それ以外には何も思い当たらない。

「ま、待て怒るな。勝手に家の前に来た事は謝るからっ」

「あたいは怒ってない。むしろ呆れてるんだよ……っ」

「あ、呆れてる？」

「なんでこんな馬鹿な事をするんだよ！ あたいがあんたに何やっ

たかわかってるんだろ!？」

ようやく顔をあげたと思いきや、とても必死な表情である。

そんな表情で自分がやった事を知ってるんだろと、叫ぶように問う。

コイツ……少なからず悪いと思っっていたんだ。

……なんだ、やっぱり根はいい子じゃねえか。

「……確かに、コイツを投げ釣られてマックでひどい目に遇った。全部浅間がやった事だよ」

「だって。あ、あんたの事……最低の暴力魔だと思っただから……」

「合ってるよ……どんな理由があろうとも、俺が中1の時に先輩をぶん殴ったのは事実だ。そしてそれは浅間のように後の世代にまで、俺が一番の悪として語り継がれている。だから俺は真正銘暴力魔だよ。コインを投げつけられたりマックで悪戯されたのも、仕方のない事だと思っっている」

「嘘だ! 完全にあたいの誤解だった……あんたは絶対そんなヤツじゃない。そんなヤツなら嫌いな人間の為にこんな事……」

「するよ。俺は最低だけど最低が嫌なんだ」

……言い終わってから思えば、なんちゅーキザなセリフなんだ。ギャルゲーで鍛えたとは言え、現実だとかなり痛いような気がしてきた。

「ど、どつという意味だよ……っ?」

「言葉のままだよ。確かに俺は先輩を殴った最低暴力魔だ。けど誰

かが困っているのを見るのも嫌だ、それを見捨てるのも嫌だ。最低なハズなのに最低が嫌なだけだよ」

「……絶対あんたはおかしい……。っ。殴ったのだって理由があるんだろ？」

「あるけど殴ったのは事実だよ。ぶん殴った時点で善人とは言えないと思わないか？」

「確かに……殴るのはあたかもダメだと思う……。でも！」

「だったらそれでいいじゃないか。今更善良に戻る気もないし、おそらく世間はそれを認めてくれない。だから、俺の評価はそのままでいいんだよ」

「……俺も馬鹿だな。折角浅間が俺の事を見直しているのに、こんなことを言っている。

もしかしたら、このまま上手く広まって悪印象が消えないにしても、限りなく少なくなっていたら。俺は自らそうなる選択肢を選ばなかったのだ。

殴らざるを得ない状況になっちまったのは、あの時俺が弱かったからだ。俺の責任なんだから。

「……あたいには理解できない。そこまで悪を被る理由が……。っ」

「いいだろ？ 実際、生活するにはあまり影響なかったんだから」

「……あたいは？」

「確かに、痛かったし腹も減ったよ。でも……。たったそれだけだろ

「？」

「…………ツ」

いずれ、こんなことになるかもしれないとは薄々感じていた。

それに、アレはコイツが本当にいいと思ってやっていた事なんだ。

確かに浅間は馬鹿だ。やんちゃで正義感は強いけど、後先とかその他の事は一切考えていない。

でも、だからって別に咎めるつもりはない。元々、やられる原因は俺の方にあつたんだから。

「とにかく、理由なんてどうだっていい」

「あ、あたいは納得できない……………あんたが悪を被る必要なんかない。それにあたいはあんたにひどい事を……………」

「浅間はホントに他人想いだな。こんなにいい子だから……………俺も本気になれたんだと思う」

「……………」

またしても、浅間は俯いてしまった。

髪の毛で鼻から上が隠れて見えない。いや、わざと見えないように俯いているのか？

……………とにかく、俺の話はまだ終わりじゃない。最後に言いたい事があるんだ。

「その10万円は本気になった結果だよ。だからそれを治療費に使ってくれ。お母さんを……………大事にするんだぞ」

再び俯いたまま歯を食いしばる彼女。  
だけど、さつきとは違う所があった。

……一筋の雫が、彼女の頬を伝っていたのである。

「……………」

「うん？」

「ごめんな……さい……ごめんなさいッ」

「最初から……怒ってないよ。だからもう謝るのはよそっ？」

その言葉の後、彼女はごしごしと右腕で涙を拭いていく。

その後俺に見せた表情は、何故だか穏やか笑顔で大変清々しい。

浅間がとても可愛い女の子に見える。そんな浅間が俺に言い放った一言は……。

「……………」

「ありがとう……。」

そっか、浅間にありがとうって言われたのか……。

「あと、あたいの事は別にあかりでいい。兄貴もいるし面倒だろ！」

「え、だ………だけどっ」

「気にするなよな。そう呼んでくれたほうが兄貴と一緒に時とか、  
反応しやすいだろ！」

「まあ……そりゃそうだけど」



「だったら、あたいもあんたの事を圭介って呼んでやる。光栄だろっ」

「……よ、よろしくお願いします。あかり」

「うん！ よろしくな、圭介！」

……俺、一応あかりの先輩ですよな。

歳上に敬意を払わぬガサツな態度。やっぱりコイツはどこぞのペリペリ中学生といい勝負だ。

……でも、元気も戻ったみたいだし、これでいいんだよな。

とにかく、悪い方向ではないと思うんだ。これでちょっとした騒動は解決した。

「さてと、そろそろ帰るか？」

「うん！ ついでに送れ」

「へいへい……」

わがままお嬢ちゃんを家まで送る、か。

端から見れば俺達、一体何に見えるんだろっなあ。

……暗くなりかけの空。点灯時刻になり光り始めた街灯が、俺達二人を照らしていた。

### 第32話 街灯の下で (後書き)

NO4

ふじしまあおい  
藤島葵

イメージCV：阿澄佳奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『アマガミSS』 橘美也役

『WORKING!!』 種島ぽぷら役

県立初芝高等学校1年3組在籍。

ジョブ：超絶ブラコン妹

性別：女性

年齢：連載開始時点で15歳だが誕生日を迎えたので、現在16歳。

誕生日：5月5日生まれ

身長：155cm

体重：44kg

胸ランク：中（美）

趣味：お兄ちゃん観察、兄のお世話、料理（ただし下手、アニメ鑑賞、ゲームプレイ。

好きな物：お兄ちゃん、お兄ちゃんのベッド、兄×妹系の同人誌、楽しい事

嫌いな物：お兄ちゃんと自分の禁断の恋の邪魔をする人、つまらない事

その他：圭介の妹。

見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、友達が多い。

根はしっかりもので両親不在の中、家事などしっかりやっている。勉強も得意で高校3年の内容までならほとんど覚えているくらい、

学年どころか学校全体でも三本指に入る学力を持つ。

身体能力は中の上くらい。ただし護身術を習っていた事があるので不良一人なら撃退できるらしい。

そんな出来た妹だがとんでもなくらいブラコンで、家事さえ兄がいないとやる気がでないらしい。本気でヨスガりたいと思っているらしい。

料理は味はすごいが、見た目が如何せんグロテスクで皆に不評。暮葉にとってはトラウマにさえなっている。

兄の趣味や行動、性癖などかなりの部分を把握しているらしく、圭介の初恋の人の名前等、圭介の弱みも数多く握っている。

### 第33話 男にとって一番泣けるイベントだよ

……あれから一週間、5月23日の月曜日。

あの後あの賞金10万円も使い、あかりの母親は手術を行った。

その結果は 大成功。順調に回復すれば6月には退院できるようである。

……よかった。久々に心の底から満足な気分になれたよ。

「もきゅ？ けーすけ様がニヤニヤしてるのですよ？」

「アイツの事よ。どーせ厨二病な妄想でもしてるんでしょ？」

「けーすけ様……やっぱり厨二病なのですね」

「圭介以上の変態なんて、この学校にはいないわよ」

……暮葉と伊吹がひどい事を言う。うっ、ひどいやひどいや。

そこは普通いい事あったんじゃない、とかだよな？

つか、魔法とか言いやがる暮葉のほうがよくばど厨二だろうが。

……さて、トイレにでも行こうかな。

そういえばこの一週間で少し、不思議に思う事があるんだけど……。

なんで野郎共、あんまりトイレに行きたがらないんだろうか？

我慢は身体によくないのになあ。まあいいか、とりあえず俺は行くうっ。

「ん、あんたどこいくの？」

「便所だよ」

「BL展開に気を付けてくださいね、けーすけ様！」

「あのなあ……またそれかよ」

いい加減トイレ。BLも飽きてきたよ。

突っ込んで欲しかったらもつと斬新なネタ考えろよな。

「……それがね、どうも冗談じゃないらしいのよ？」

「What's」

「あら、圭くん知らなかったの？ 最近男子トイレで……お尻から血を流して倒れている男子生徒が続出してらしいんだっ」

「そしてですね。血を流している人は皆、男なのに男性恐怖症になっちゃったらしいのですよ？」

……ハハハ、おもしろい冗談だね。

やだなあ……ハハハ、ハッ？

ちよっと待て。どうして最近野郎共があまりトイレに行きたがらないのだろう？

大吾や重原でさえ、学校で用を足すのは自重しているみたいだ。

それってもしかして……この三人の言う事が事実って事なんじゃ……。

「アッーーーーー！！」

戦場で被弾し、絶叫する兵士さえも真っ青な顔をするほどの雄叫び。俺は、学校という公共の場でソレをあげてしまった。

「けけけ、けーすけ様落ちついてくださいっ！」

「そうよ！　一応教師だって犯人探しくらいやってるわよ！」

「で、でもまだ捕まってないんでしょソイツ!？」

「「「……………」」」

やっぱり捕まってないのか、チクシヨオオオオオオオオ！  
これじゃあ落ちついてトイレもできねえじゃないか！

「じゃあどこで用足せばいいんだよ!？　我慢の限界ですよコンチクシヨー!？」

「そ、外とかどうなのでしょうか…………?」

「外で用を足すのはフツーに犯罪です！」

「いつそ覚悟を決めてトイレでしてくればいいじゃない。男は度胸  
なんでしょ?」

「それ一部の人だけだ！　俺は絶対安全なほうを選ぶぞ！」

「圭くん圭くん。だったら女子トイレですれば?」

「快適そうだけど入った瞬間、犯罪者に成り下がりそうだから嫌だ  
!」

ということとは…………今学校には安全にトイレができる場所がないと?

ふ、ふ……ふざけるなああああつ！  
俺達男共はどこで用を足せばいいんだよ。トイレに入ったら掘られるだど？

そんな悲劇的で薔薇色な展開、おそらく腐女子と本物以外は喜ばねえだろ！

「ど、どうすんのよ……圭介？」

「うう……と、とりあえず今だけはトイレに行ってくる」

「もきゅ！？ 正気なのですか！？」

「じゃあどこでしろってんですか！？」

「と、とりあえず……あたしらは何があっても、圭くんの味方だからね」

「お、おう！」

なんて悲しい応援なんだ。こんな応援されても全く嬉しくないぞ。しかし、学校のトイレで血を流して倒れるだなんて……。

学校での怖いお話とかならありそうだけど、高校生にもなるとそれがBレネタになんのか。

こうして思うとやっぱり小学生って、純粹で可愛らしい生き物なんだなあ。

……っていかんいかん！これじゃあ俺がロリコンみたいじゃねえか！  
言うておくが俺はノーマルだ。強いて言うならば美乳派である。

やがて辿りついた男子トイレ、俺は用を済まし手を洗っている所であった。

それにしても本当に誰もいないな。休み時間のトイレと言えば、必ず一人は騒いでいるハズなのに。でも俺は襲われなかったし、やっぱりガチホモがいるって言うのはただのデマなんじゃ……？

「ヤラナイカ」

「……あ？」

今、不吉な声が聞こえたような気がしたのですが……。ハハハ、気のせいだよな。別に「やらないか」と言っても、いろいろ種類はあるんだ。何も、アッーな事をしよう限定で使う言葉じゃないんだから。気にしないのが一番なのである。

「ウホッ！ イイ男」

「……………」

ひ、ひいいいっ！

なななななな、なんかいやがるぞ。今絶対「ウホッ！ いい男」って声が聞こえた。

「やらないか」だけならまだしも、もうこれガチだろ！？

そのわりには姿を現さないが……そうか。恐怖で怯えている所をイキナリ襲う気だな。

そうはいかないぞ。見せてやるぜ……俺が今までの野郎ともとは違うって所を！

「来いよガチホモ！ 汚れたバベルの塔なんか捨ててかかって来い！」



……アレ、全然こないな。やっぱり今のは幻聴だったのだろうか？  
うーん。よくわからないけど、とにかくさっさとトイレから出よう。  
考えてみるよ。屈強な男さえ屈服させてしまうガチホモ相手に、一  
般高校生が腕力で勝てると思うか？  
増してや相手はガチ変態のガチホモ。会話が通じるとは限らないぜ。  
やっぱりここは、早急にトイレから出たほうが安全であるう。そう  
決めてトイレから出ようとした。

「ヤアアアアアアアセエエロオオオっ！」

「……！」

瞬間、俺は何者かにフェイスロックをかけられてしまった。クソッ、  
完全に油断していた！

さらにこの状況なのでよくはわからなかったが、何時の間に俺は地  
べたに倒れていた。

足首に何かをかけられた感じはしたので、おそらくバランスを崩さ  
れたのだろう。

倒された俺は、謎の男に袈裟固をかけられてしまう。

クソッ……強い。コイツ何者なんだよ……ていうかすごい筋肉質だ  
な！？

「ぐっ……てんめえっ！」

「フッフ……イケツシテルナ少年」

うわっ、すごい筋肉質な上に金髪マリーンカット。

コイツはなんだよ米国人なのか。多分そうだろう、日本語がカタコ  
トだぜ？

「オーオーオコラナイオコラナイ。ダイジョーブコワクナイヨ？」  
「怖いわっ！ アンタ誰だ!?!」

するとオッサンは袈裟固を止め、マウントポジションを取ったまま俺の首を掴んできた。

息苦しくはないが、全くと言っていい程身動きが取れない。  
やっぱりコイツ素人じゃない! 絶対コイツ軍隊上がりだ!

「ミーノ名前八神崎・H・アリック。元Sランク武偵デース!」

「どこのラノベじゃっ!?! アンタただのオタクだろ!?!」

「日本ノアニメ大好きデース! チナミニ海兵隊出身デース!」

「やっぱ軍隊上がりかよ!?! つか何の用ですか!?!」

「ミー、超ボーイズラブラブデース! 二次元じゃ我慢デキマセエーン! ト、言ウ訳で若キ高校生ノオ尻ヲ掘ラセテイタダキマース!」

最低だコイツ。こんなのがいるからオタク⇨変態にされるんだ!

……ていうか俺、どうなっちゃんだろう?

相手は軍隊上がり。正直今も抜けだそうと努力はしているが、ここから抜けだせる気配はまるでない。

あらら、まずいぞますね。俺の貞操がめっちゃ危機ではありませんか!?

「や、やめろっ! やめてくれえええええええっ!」

「ダイジョーブコワクナイヨ？」

「怖いっつってんだろ！　っておわあああああっ！？」

何故俺が叫んだと思う？

答えはいつの間にかズボンが脱げていて、下半身はパンツのみになっ  
っていたからだ。

コイツ、いつの間に……全然気付かなかった。どこまでプロなんだ  
よ！

「ベアーパンツ……」

「うるせえっ！　熊さんパンツしかなかったんだよ！」

葵のヤツ、よりによってこんなもの用意しやがって。

オッサンの顔が更に赤くなってニヤけてきただろ！

「サーテ、オパンチュモ脱ギマシヨーネー」

「嫌アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

ホントお願いします！お金ならいくらでも払うから、誰か哀れな俺  
に救いの手をください！

「そこまでだ犯罪者！」

「アアン？」

おお神よ！

まだ俺の事を見捨ててなかったのか、誰かが男子トイレまでやってきた！

……でも待てよ。なんか今の女の子の声だった気が……。

「幾人もの罪なき男子生徒を犯し、増してやその……ふ、藤島までっ！ これ以上の狼藉は絶対に許さないぞ！」

あの黒髪ポニーテールのクールな女の子は……あ、明智……明智じゃないか！

風紀委員の腕章が眩しいぜ。こういう時には風紀委員って結構頼りになる存在だ。

「フン！ 女ノ子ニ興味ハナイ。立ち去れ！」

「うちの生徒がピンチなのに、立ちさがれるわけがないだろう？」

「フッフ、モウ二度ト刑務所ニハ戻ランゾォッ！」

うわっ、アリックさん前科持ちかよ。それはともかくまずいな……。アリックさんが明智という女の子に襲いかかるが、アリックさんはド素人ではないんだ。

いくら明智が強いとは言え、流石にまずいんじゃないだろうか？

「ウオオオオオオオオオオオオッ！」

「……ふっ！」

「ウオツ!? 熱イツ！」

今、オレンジ色の何かを帯びた物体が飛んでいった。

明智のヤツ……公共の場でさり気なく超能力使いやがった！

しかも炎でアリックが怯んだ瞬間、明智がアリックとの間合いを詰め……なんと。

ビビッと目にも止まらぬ3発ほどの肘打ちを、鳩尾にクリーンヒットさせたのだ。

鳩尾を押さえ、苦しむアリック。アレでも倒れないとは流石は軍隊上がりである。

だが、そんな彼に休む時間など与えられるハズがない。

明智は飛びあがり、あの1〜2回は見た華麗なる廻し蹴りを、アリックのこめかみに正確に当てる。

トドメに床に倒れ込んだアリックを、明智がポケットに隠し持っていた縄で縛りつけた。

これで、風紀委員vs元海兵隊の変態アリックの戦いは、完全に終わったのである。

「アフウ……」

「ようやく最近校内を荒らしているヤツを捕まえられたぞ……っ」

明智はとっても爽やかな笑顔を浮かべていた。

犯人は地面である。いかにも勝利したという感じだな。

「あ、コイツの言う通りホントに熊さんパンツだ……藤島、あんなの穿くのか……」

……はい？

熊さんパンツ……あ、そういえばと俺は自分の下半身を確認する。

確かに俺は下半身はパンツであった。それも、可愛い熊さんがプリントされたトランクス。

それを見た瞬間……俺の中の何かか崩壊したような気がした。

「きゃああああああつ！　ちよ、頼む見ないでくれえっ！」

「す、すまん藤島！」

明智に見られた……葵がテキトーに買ってきた、ふざけたパンツを見られてしまった……。  
な、なんなんですかこの羞恥プレイは！？

「けーすけ様あああつ！　ぶ、無事なのですか！？　も……もきゆ？」

「ちよつと圭介！　叫び声聞こえたけどアンタ平気……えっ？」

「……はあつ！？」

ちよつと待てやコラアツ！

どうしてだ、どうして暮葉と伊吹が男子トイレに現れた？  
しかも暮葉も伊吹も竹刀で武装。おいおい、それって剣道部の備品じゃないのか？

まあ、それはどうでもいいとして。二つある問題のうち一つは二人が男子トイレに入ってきた事。

そしてもう一つ　二人に俺の熊さんパンツを目撃された事だ。

「け、けーすけ様……以外とお子様な趣味してるのですね……っ」

「ぶっ！　あっははははは！　圭介！　ちよ、小学生みたい！」

暮葉は赤面しつつ俺のパンツを評価、一方の伊吹は大爆笑。

……これはひどい、あまりにもひどすぎる結末！



### 第33話 / 男にとって一番泣けるイベントだよ（後書き）

NO5

明智風紗

あけちなぎ ひ

イメージCV：小清水亜美（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『ストライクウィッチーズ』シャーロット・E・イエーガー役  
『スクールランブル』塚本天満役

県立初芝高等学校2年3組在籍。

ジョブ：クールだけど時々可愛い顔を見せる風紀委員

性別：女性

年齢：16歳。

誕生日：12月8日生まれ

身長：165cm

体重：48kg

胸ランク：大（巨）

趣味：圭介を変態扱いすること、映画観賞、ひなたぼっこ

好きな物：正義、温泉、おじいちゃん、お菓子

嫌いな物：爬虫類全般、キノコ類全般、明智光秀

その他：明智光秀の子孫らしい女の子。

去年まで別な高校に通っていたが、古宇坂市へ引越したこの春より初芝高校に通っている。

光秀のせいで自分や自宅が散々な目に遭うも、圭介らの協力もあって解決。

高校では風紀委員を務め、いつも黒木ら三馬鹿を制裁している。

戦闘能力が高く、素手でも黒木を瞬殺し丈夫な圭介でさえ脳震盪を起こす程。



その上発火能力を持ち、火の玉やかめはめ波モドキ、炎剣などを生み出す事ができる。

普段はクールだが、明智家の一件以降圭介らに女の子らしい表情を見せる事が多くなる。

圭介の事を変態扱いしているが、どこか彼の事を意識しているようにも見える。

圭介らとはクラスが違うのにそこそこ出番が多いキャラである。

### 第34話 / 新入部員！

放課後、帰りのSHRも終わりみんな帰る頃。

「んじゃあ僕ら先に帰るなあ〜」

「圭介、部活頑張つて」

「お、おう……」

大吾と重原は先に退場、まあそんな事はどうでもいいんだ。

……俺は今、限りなく鬱な気分なのである。理由？そんなのは出来れば聞かないで欲しい。

とにかく俺が負った傷は、ソ連のコラ半島超深度掘削坑よりも遥かに深いのである。

丁度その時、笑顔で教室から出て行く伊吹と小坂の姿が見えた。

いいよなアイツら……今が幸せで。それに比べて俺は今が苦痛だよ。

「けーすけ様！ そろそろ部活に行きましょう！」

「お、おう……」

「もきゅ？ ……もしかして、まだ気にされているのですか？」

「だ、黙っててくれ……」

ああ、まだ気にしてるんだよ。女子三人に熊さんパンツを見られた事を……。

暮葉も明智も伊吹も、一応はフォローしてくれたけど……。

でも暮葉も明智も汗かいてたし、伊吹に至っては笑っていたし。  
……みんな、下着がアレな時はくれぐれも気を付けるんだよ。  
それは女子のみならず、男子にも言えることである。その事は本日  
身をもつて経験したよ。

あ、ちなみに明智がとつちめたあの元海兵隊のアリックさん。  
当然警察沙汰になりました。俺も襲われたので色々事情聴取はされ  
たものの、未遂だった上に精神的ショックはそれほどでもなかった  
ので、案外アツサリ警察さんに解放したもらった。

まあ……掘られるのも嫌だけど、それ以上に熊さんパンツを見られ  
た事のほうが恥ずかしくて……。

「け、けーすけ様……大丈夫なのです！ 拙者のやつは猫さんがプ  
リントされているのですよ!？」

「お前のパンツの情報聞いても……慰めにならねえよっ」

「し、失敬な!? 報告するの恥ずかしかったですよ!？」

「じゃあしなけりゃよかつたろ!」

「~~~~つ。と、とにかく、今のでお相子なのです!」

……どこがお相子だよ。お相子なら猫さん柄のやつ穿いてる所見せ  
ろよ!

そうは思ったが、そんな事をレディーに言えるわけもない。  
そもそもそれは犯罪なので、俺は決してそういう事は言わなかった。

「わかつたわかつた……じゃあ、そろそろ部活に行くか」

「はい！ 今日の為に拙者、写真撮ってきたのですから！」

「おお、撮ったのか？」

そういえば、俺達が属する部活は写真部。

日頃の活動は写真を適当に撮影し、それを批評し合う事である。

……あ、まずいな。俺は一枚も写真を撮っていないぞ。

どうか青山さんに怒られませんかように……しかし、完全に暮葉のほうか部員としては俺より優秀だな。

俺は優秀どころか何もしていないけど。そんな事を考えながら俺達は写真部の部室へと向かった。

「失礼します」

「お邪魔します！」

「おお、藤島君に木下君！」

「先輩方……こんにちはっ」

「圭介っ！ それにえ〜っと……木下先輩ですよね！」

写真部の面々が入室する俺達に挨拶をしてくる。

浅間部長に青山さんにあかり、いつもと変わらぬ顔ぶれだ。

我が写真部は、この3人と俺らの5人で構成されているのである……ん？

「お？ どーしたんだよ？」

「ちょっと待て。お前って写真部だったか？」

「超ウルトラ究極不本意だけど、あたかも今日から部員だからな！」

「……なんだって……」

イキナリすぎるにも程があるだろ！

いや、あかりが入部「プライベートに余裕が出来た証なのはわかる。それはとても喜ばしい事ではある。でも、なんだって写真部なんですか！？」

「もきゅ！？ けーすけ様、このお方は以前けーすけ様に攻撃してきました！？」

「ちょ、部長！ 何故にあかりが写真部に！？」

「ボクの妹だからに決まってるじゃないか」

「誘ったのはその……わたしですけどねっ」

「圭介のおかげで余裕が出たんだ！ 至少くらい遊んだっていいだろ！」

まあ……確かにあかりはまだ高1だ。本当なら遊んでいた年頃である。

いくら家計が厳しいからって、流石に週6のバイトはキツイだろう。それに最大の難関であった母親の治療費も、この前の大会の賞金でどうになかった事だし。

あかりがシフトを減らしても、少し収入は減るかもだが特に問題はないだろう。

「もきゅ〜!? けけけ、けーすけ様があかりって……あのお方はけーすけ様をけーすけって……はわわわっ!」

「……暮葉? おーい、大丈夫か?」

どういうわけか、暮葉は暮葉で暴走しているし。なんなんだ、今日の写真部はいつも以上にカオスだぞ。

「こ、こんなのおかしいのです! だって、浅間さんはけーすけ様の事嫌いだったのですよね!?!」

「前はそうだったけど、今は好きなんだからな!」

簡単に笑顔で好きと言われると照れますなあ!

……って、流石に自惚れ過ぎか。あかりの好きは友達としての好きなのだろう。

ちよつとだけドキツとしたけど、ここはドキツとしたら負けだ。

「けーすけ様の事が好きだなんて……い、一体けーすけ様と浅間さんの間に何が!?!」

「それが……そのつ、いろいろあったらしいんです。藤島先輩……あかりの事を助けたらしいですっ」

「うん、藤島君には本当に感謝だよ。うちの母も君に会いたいって言うていたくらいだ」

相変わらず自信のありそうな顔で浅間部長はそう言った。

……マザーが会いたいだってさ。他人のマザーに会うのが恥ずかしいのは俺だけだろうか?

「拙者が知らない間に、けーすけ様が感謝されるような事をして  
いる!? あわ、はわわっ！」

暮葉は目を白黒させ、フラフラと部室内を難破船のように漂って  
いた。

アイツ大丈夫なのか。ちょっと危ない人間に見えてきたぜ？

しかもその時。前を見ていなかったせいか、暮葉は額を壁の出っ張  
っている角にぶつけてしまった。

「いたっ!? も、もきゅ〜」

可愛らしい声をあげ、涙目になり痛そうに額を押さえる暮葉。

……くはっ、ナニコレ破壊力高ッ！

一般青少年の俺にとって今の暮葉は破壊力が高過ぎた。やれやれ、  
本当に萌え死にそうになっただぜ。

リアル  
現実で萌え死んだらそりゃもう痛い子確定。それだけは避けなけれ  
ばならないぞ。

「だ、大丈夫ですか!? ……そのっ、絆創膏ならありますよ?」

「平気なのです! 拙者は見た目に反して打たれづよいのですよ!」

いや、滅茶苦茶額から出血しているし!

全然大丈夫そうには見えないし、むしろ出血のせいでヤバそうに見  
えますよ!

「暮葉、一応世話になっとけて。額から出血してるぞ?」

「そうですよっ! その……怪我は放置が一番ダメなんですよ……

「？」

「ううっ、千早さんありがとうございますっ」

「いえいえ……っ！」

毎回そうだが、暮葉つてすぐ他人と仲良くなるよな。

青山さんの事をいつの間にか下の名前で呼んでいる。全く、葵にも匹敵するスピードである。

それに比べて俺は……最近友達が増えた気もするが、相変わらずの少人数である。

でも友達の数が多いからイイってワケじゃないんだ！  
それほど悲観的になる必要もないよね………多分。

「で、でも本当に一体何が!? それに先程けーすけ様の事が好き  
って………そそそ、それって!?!」

「き、木下先輩……っ。落ちついてくださいよっ! あかりの事  
です、きつと友情的な意味ですから」

「フッフ、藤島君も罪な男だ。まさか、あそこまで動揺するほどの  
フラグを立てていたとは………」

「なに言ってるんですか部長は………」

そんなフラグを立てた覚えは皆無だぞ。第一、暮葉は仕事の都合で  
俺の下にいるんだぜ。

普段散々変態言われているんだから、好感度は下手すりゃマイナス  
だろっぜ?



「ええい！ このままじゃ收拾がつかない。みんな一回落ちつけよな！」

いよいよ收拾がつかなくなってきた所で、あかりが大声で全員にそう呼びかける。

その一言によつて騒がしかった部室も、一旦は静かになった。

まさに今はあかりサマサマ。あの力オスな状況を一瞬にして止めやがった。

考えが一直線なバカでも、意外とこういう所はカリスマ的だな。

「勘違いされないうちに言っておくけど、あたいと圭介はただの友達だからな！ あとクソ兄貴は黙れよな！」

「うはっ！？ く、クソって……うああああっ！」

ただの友達である事を証明してくれたおかげか、暮葉が安堵のため息をついた。

青山さんも暮葉と似たような反応をしている。しかし何故にため息なんだろう？

まあ、多分あかりが俺に敵対心を持っていない事に対し、二人は安心でもしたのだろう。

しかしそれと引き換えに部長の涙腺は崩壊してしまった。当然、あかりの毒舌が原因だ。

「それだけなんだからな！ とにかく、あたいは今日から写真部の部員だ！」

相変わらずハイテンションでお調子なあかり……それでも。

「うんっ、よろしくね……あかりっ！」

「もきゆう……よろしくなのですっ」

「よろしくな！」

笑顔の彼女を拒む者は、誰一人として存在しなかった。

「クソって言われた……妹にクソって言われた……クソクソクソ……  
……うっっ」

ただ一人、歓迎せずにへこんでいる男がいたが……。

こうして、この日から浅間あかりが写真部の部員になったのである。  
これで部員は5人、浅間部長が卒業しても4人は残るぞ。  
つまり、ようやく写真部は安泰になったのであった。

### 第34話 新入部員！ （後書き）

NO6

浅間あかり（あさまあかり）

イメージCV：野水伊織（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『これはゾンビですか』ハルナ役

『それのおとしもの』ニンフ役

県立初芝高等学校1年3組在籍。

ジョブ：他人想いのやんちゃな娘

性別：女性

年齢：16歳。

誕生日：4月30日生まれ

身長：145cm

体重：38kg

胸ランク：極小（貧）

趣味：人助け、カラオケ、野球観戦、

好きな物：正義、家族、寿司、愛木みどり（後述）

嫌いな物：邪悪、変態兄貴、野菜類全般

その他：葵や千早の友達で新たに写真部に入った新入部員。

やんちゃで他人想いで正義感が強く、少し思いこみの激しい所があるようで自分が正しいと思った道を突き進む傾向がある。それで自爆する事もしばしば。

強気だが、折れると弱いタイプ。

最初は圭介を暴力魔などと呼び、敵視していたが浅間家の一件で見なおした様子。

運動神経はいいらしいが、頭が致命的に悪く、初芝に入れたのも奇

跡としか言いようがないらしい。

アイドル『愛木みどり』の大ファンらしい。でもお金がないのでイベントに行けない。

実は意外と苦勞人で、一時期生活費と母親の治療費の為に一人で無理をしていた。

簡単にまとめると根はいい子だけど馬鹿で一直線である。

### 第35話 体育館倉庫で……ウフフ

夕刻、部活も終了して帰り道。俺はいつも通り、暮葉と帰路を共に歩いていた。

いや……今日は暮葉だけではない。偶々校門で遭遇した伊吹も一緒である。

伊吹はいつも通り竹刀を背負っている。また自分の家で練習でもするつもりなのだろう。

考えてみればここにいる三人は、みんな部活をやってるんだよなあ。俺もノリで写真部を初めてみた。部員らしい活動はしていないが、それでも皆との談笑は面白い。

今日はあかりも新たに混じったしな。まあ……相変わらず部長の扱いは散々だったけどな。

「暮葉っ、部活はどう？ 圭介に邪魔されたりしてない？」

「なんで邪魔しなきゃいけないんだよ……」

「そーですよ！ けーすけ様は何もしていませんよ！」

「暮葉さん……それ、何か俺がプータローみたいに聞こえますぞ？」

「圭介って半分くらいプータローよね」

「俺はニート予備軍じゃねえぞ!？」

第一学校にも通っていて、なおかつ部活にも所属している。

そんな俺のどこがプータローだ。とにかく、俺は絶対にニートにはならねえぞ。

確かに働くのは面倒だが、二トになったらお金が手に入り辛い。つまりゲーム購入費とかがなくなってしまうのではないか！  
つて、そんな話部活とかとは何の関係もないな……と思ったその時、事件は起こったのである。

「おわっ!？」

突然、高速で飛び出してきた何者かに首の後ろを掴まれ、俺と二人の距離は次第に離れて行った。

「やった! ついに噂の男を捕まえたよ—————!」

「け、けーすけ様!」

「ちょ、ちよつと!？」

次第に伊吹と暮葉が点になってゆく。

速いぞコイツ、人一人を引っ張っているというのになんというスピード!

コイツ只者じゃないぞと思ったけど、その前に一つ言いたい事があるんだ。

「意味わかんねえええええつ!」

なんで俺は引っ張られているんでしょうか。せめて納得のいく説明をしてからにしてくれえーっ!

……そんな叫びなどは虚しく、俺は何時の間にか初芝高校の体育館倉庫へと連れてこまれていた。

マットの上にか弱い乙女のように倒れ込む俺。

そもそも、こんな所に倒れている時点で問題なのだが、一番の問題

は……お、俺は男だぞ！  
なんで男なのに、これから女子に強姦されるみたいな体勢になっ  
てんでしょうか！？」

「あの……念の為に確認しておくけど、俺をどうするつもりなんで  
しょうか？」

俺は目の前の髪を括っている女の子に質問をする。

ところで、あの子をどっかで見たことがあるんだけど……気のせい  
だろうか？

……いや、気のせいではなかった。胸元には生駒の名前が記されて  
いる。

アイツ、房総丘陵トレイルランで俺と競ったヤツではありませんか。

「ごめんね！ どうしても圭ちゃんに用事があったから……っ」

「けけけ、圭ちゃん！？」

「うん！ 藤島圭介って名前なんだよね？ だから圭ちゃんっ！」

「……………」

べ、ベタな幼馴染の呼び方をされたぞ！

最も、リアルの幼馴染にはアンタか呼び捨てでしか呼ばれた事がな  
いが。

でも生駒のは違う。アレはよくゲームで見かける呼び方。

「確か生駒……だったよな？」

「うん！ 私は生駒純奈って言うんだよ！」

「……純奈だからすみにゃん？」

「あつ。それ知ってたんだ。やっぱりナギちゃんと知り合いなのは本当なんだね！」

ナギちゃんというのは多分、明智の事だろう……プツ、ナギちゃんって！

アイツ普段はクールキャラなのに、生駒には随分可愛らしく呼ばれてるな。

それにしてもなんて天真爛漫な子なんだろう。この笑顔が暮葉にも匹敵するくらい眩しいぞ。

「まあ確かに明智とは友達だけど……でも、結局何の用なんだ？」

「おつといけない、本題を忘れる所だったね。単刀直入に言うと……陸上部に入ってください！」

「……えっ？ エエエエエエエエエエエエエエエエエエツ！？」

目を見開き、口を全開にして力いっぱい叫んでやった。

だって、あまりにも展開が唐突すぎるんだもん。いきなり勧誘されちゃったんですよ？

ていうか生駒さん、薄々感じてはいたけど陸上部だったんだな。

「いきなり無理を言うのは悪いって思っているよ。でも、今の圭ちやんはどうしても陸上部に必要なんだよ」

なんて必死な顔！？



俺は写真部だし、ここはバツサリと断るべきだとはわかっている。なんだけど……突っ込み所のない真剣な表情マツをされると、断るにも断れねえじゃないか！

ていうか、うちの陸上部って強かったハズである。なんでロクに鍛えてもない俺を勧誘するんだろう？

この前の房総丘陵トレイルランの勝利なんて、ほとんど奇跡に近かったのに。

……もしかして、強かったハズの陸上部に何か問題でもあったのだろうか？

「ちょっと待て。陸上部に何かあったのか？」

「ううん、ないよ？」

そっかそっか……え、ないのかよっ！

「圭ちゃんは大会で私に勝ったもん。私よりエースとして相應しいもん」

「いや、あの時は背負ってるものがあってですね、殆ど奇跡というか……」

「だったら今日から陸上部の看板を背負おうよ！」

どうして話がそっちの方向に言っちゃうんだよ！

ていうか、俺はもう部活やってるから簡単に変更はできないんだよ。どうにかしてその事を証明し、この勧誘をやめてもらわなければ。

「待て、俺は写真部の部員だぞ？」

「それでも、圭ちゃんの才能を埋めるのはもつたいない。だから私と契約して陸上部員になつてよ！」

「いやいやいや！ 流石に出来る事と無理な事があるって！ てゆーかその幼馴染口調は勧誘の為なのか！？」

「……………チツ、バレちゃったよ」

アツサリ認めやがった、なんて悪女なんて生駒さん！

ここは普通、「違うよ？ 圭ちゃんは圭ちゃんだもん」とか嘘でも言うよね？

……………まあ、さつさと本性を現わしてくれたほうが後のショックも少なくて済む。

「んで、結局お前は何が目的なんだよ……………才能とかそう言うのは嘘なんだろう？」

「ふん、バレちゃったら仕方ないね」

いや、自らバラしたんでしょ……………。

お前がもう少しうまく隠さないから、殆どバラすような形で俺にバレたんでしょ。

……………ていつかまずい。そろそろ時間的に危ない。そろそろ銅魂の放送時刻だ。

「出来れば早く帰りたいんだが……………」

「私もだよ。だって銅魂始まるじゃん！」

「お前も見てるのかよ！？」

「はあ？ アニメくらい、高校生が見るのは常識だよな？」

「いやいやいや、確かに見る人は見るけど見ない人は本当に見ないから！ それ完璧偏見だから！」

あれ、まずいぞ。なんだか銅魂の旧八みみたいなツツコミしちゃってるぞ。

クツソオ〜、コイツのペースに乗せられてたまるか。

むしろ俺のペースに乗せる勢いじゃないと。銅魂の放送時刻に遅れてしまうじゃないか！

「でもクソ介は見てるじゃん」

「見てるけどその前にクソ介って何！？」

「圭ちゃんなんて媚び売るのホントは嫌なんだよ。お前なんかクシ島クソ介で十分だよ！」

……笑顔で中途半端に優しい口調、それなのに言っている事は滅茶苦茶厳しい。

これはこれで全てが厳しいのとは違うけど、でもなかなかショックを受けるぞ……。

ていうかクソ島クソ介って……コイツ、全くと言っていいほどセンスがねえな。

その呼び方だと頭文字Cのイケメン兄貴である、高島涼介だってクソ島クソ介にできるだろ。

「……で、結局何の用？」

「もう誤魔化すのも面倒だから、単刀直入に言うよ。クソ介が陸上部に入る理由は監視」

「なんで監視なんだよ!？」

「そんなの……ナギちゃんを盗られない為に決まってるよ!」

「……はいっ!？」

わけのわからない事を、わざわざ頬を赤く染めて言っついていやがる。一体どういつつもりだ。いや、もう予想はついてるし結果は見えてるが……。

「ナギちゃんは私の嫁! しょーらいはオランダに行つて結婚して、親友じゃなくなったナギちゃんとずっと一緒に幸せに暮らしたいの!」

「な、なんだつて……!？」

やっぱりかよ! そういうオチですか、まあ予想通りだけど驚いたよ!いきなり生駒が百合宣言。どうやら生駒にとってのお嫁さんは明智のようである。

それは、同性結婚が認められているオランダに行つて、ずっと幸せに暮らしたい程であるらしい。

とうとう『とある科学の変態淑女』ポジションが、たった今ここに誕生してしまった……。

「お、思い知ったかクソ介っ! クソ介なんかナギちゃんといちゃつく権利、これっぽちもないんだよ!」

「そもそも俺、明智とそういう仲じゃねえし……」

「ウソだ！ だったらなんで、ナギちゃんはクソ介が熊さんパンツ穿いてるって知ってるの!？」

「く、くま……ハツ!？」

どうして明智が、俺のパンツが熊さんパンツだって知ってたんだろうと一瞬思った。

だけど、思い出して見れば今日、すっかりトイレで見られてしまった気がするんだ。

でも明智は知ってて不思議じゃないが、どうして生駒が……ハツ!？  
明智のヤツ……俺の下着の話を生駒にしゃがったんだな！

「それって……ナギちゃんとエッチな事した証拠だよな?」

「してねえよっ!」

むしろ男に無理やりされそうになったわ！

そんな可哀想な俺を慰めて欲しいわ！

「とにかく、ナギちゃんを汚すクソ虫は絶対許さないんだよ!」

とうとう虫扱いされてしまった。明智を汚した覚えなんて一切ないのに。

ていうか、明智とそんなイベントなんてなかったのに。

胸揉みとキスは単なる事故、しかも生駒が知ってるハズもないのに。

「大体熊さんパンツなんてありえないよ！ ロリっ娘の特権を男が穿くな変態!」

「俺だつて好きで穿いてんじゃないわっ！」

「とにかく、ぜえーったい監視の為に陸上部に入ってもらうんだから！」

「だから、俺はもう写真部だから無理だつて」

「いいよね別に？　クソ介はクソ虫の癖に足速いから、何の影響もないよね？」

「同じ写真部の仲間に迷惑かかるだろ」

ああもう、このままじゃ埒が明かない。

なんとかして、この面倒くさい百合女とのイベントを終了させなければ。

エロゲー鍛えた俺の実力……見せてやろう！

「やだやだ入ってくれなきゃだつ！」

「駄々こねるなよ！？　……はは〜ん、もしかしてお前、明智も好きだけど俺も好きなのか？」

「はあ？　なにキモイ事言ってるんだよ、2万3千回くたばったほうがいいと思うよ」

……ひどい、照れのテの字すらなかった。

どうやら、生駒の俺に対する好感度はマイナスのようである。

しかし、面倒くさいポジションのキャラが増えてしまったな……。

これも全部、あそこで熊さんパンツを見られたせいだ。

でも、一番の原因は学校で男を狙いまくっていた、あの元海兵隊の変態野郎のせいだ！

「とにかく、陸上部には入ってもらおうよ！」

「嫌に決まってるんだろ……」

「じゃあ陸上部はもういいから、私の弟になる？」

「なんでそうなるんだよ!？」

「姉として、類人猿のクソ介を監視できるからに決まってるんだよ！」

「絶対にお断りします！ ていうか明智には何もしないからもう解放してくれ！ 銅魂始まるだろ!？」

俺が言った瞬間、彼女がいきなりきよとんとした顔になった。やがてわなわなと身を震わせ。

「ああああああっ！ い、いけない。銅魂の時間だよ!？ クソ島クソ介！ ぜえーったいナギちゃんに手を出さないでね。手を出したら腸ぶちまけに行くんだよ。わかったなら明日までに写真退部して陸上部に来るんだよ！ きよ、今日の所は同じオタクとして見逃すから！」

そんな特撮にでも出てくる、雑魚敵のようなセリフを吐きながら生駒は遠くへ消えて行った……。

なんというか、アイツの言葉がもう支離滅裂すぎる。

ていうか生駒ってやっぱオタクだったのか。陸上部女子でオタクとか、

どこの俺の妹ですか。

はあ。それにしても、あかりと仲良くなれたと思いきや今度は生駒か。

人間関係って本当、難しいよなあ……………。

結局、俺が家に帰れたのは銅魂が始まって15分後の事であつた。

しかも、保険に録画しといたヤツは失敗。

今日は色々な意味で悲劇な一日でした……………がく。



第35話 体育館倉庫で……ウッフ (後書き)

NO7

あおやまちはなせ

青山千早

イメージCV：花澤香菜（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『化物語』千石撫子役

『Angel Beats!』天使 / 立華かなで役

県立初芝高等学校1年3組在籍。

ジョブ：物静かな謎多き後輩

性別：女性

年齢：15歳。

誕生日：11月21日生まれ

身長：157cm

体重：45kg

胸ランク：中（美）

趣味：写真撮影、読書、音楽鑑賞

好きな物：写真、本、マヨネーズ、友達

嫌いな物：変態部長、自宅、仕来たり

その他：写真部に所属している1年生の女の子。葵やあかりとは友達。

控えめな性格だが、その容姿から男子にはモテモテ。ただし当の本人はその状況に困惑している。

圭介が嫌われている事情や本当は優しい人だと知っている様子。

将来は写真家になりたいと思っており、その為にあまり好きではない浅間部長のいる写真部に所属している。

上記の通り、控えめな性格ではあるが意外と発言はストレートであ

り、浅間部長に対する文句はいつも圭介達以上にキレがいい。  
勉強も得意であるが運動は苦手らしい。写真撮影の他に小説執筆が  
得意かも。

そんな彼女だが、まだ謎が多い子である。

### 第36話 生駒純奈の暴走

とうとう6月1日……今日から夏服期間である。ちなみに中間テストは6月7日から。

正直に言おう。今物凄く鬱な気分である。その理由は当然テストが近いからだ。

前にも言った気はするが、俺の成績は結構ギリギリなのである。増してやここ数日、生駒の勧誘地獄が……。

……最近の例としてはまず三日前。

「クソ介はスク水好きなんだよね？ ほ、ほら。着てあげたんだから陸上部来てよ！」と、何故かスクール水着を来て勧誘。ただしスク水を着ているからと言ってデレがあるわけではない。

そもそも、生駒が俺に向ける感情は敵意のみである。

正直、この日ほど天罰術式を使いたいと思った事はなかった。

……二日前。

今度は「クソ介！ 陸上部に入らないと、風穴あけるわよ！」と、何故かチアガールの服を着用し、おもちゃの拳銃二丁を持って俺に迫って来たんだ。

いやいや、流石に無理があるだろ。第一生駒はツインテールじゃないじゃん。

……そして昨日。

昨日は「もう、私のへそくりカロリーあげるよ」とオムそばパンを貰った後、「ねー！ 陸上部に入ってよ！」と迫って来たんだ。多分今までで一番キャラが合っていたと思う。元ネタも陸上部だしな。ていうか一連の勧誘でわかった事。生駒は結構なオタである。

それも、どう考えても男性向けのアニメばかりであった。

これについて、暮葉や伊吹に意見を聞いてみたんだけど……。

「いいじゃない、楽しそうね！」

「拙者も、なんだか楽しそうに見えるのです！」

「つ、使えねえこの二人いいいいいいいつ！？」

結局無駄でございました。

いや、大体予想はできていたんだけどさ、ここまで全くフォローをしてもらえないとは。

そんなことをしている間に昼休み。来ちゃったよ……絶対生駒とか来るだろ。

「クソ介クソ介クソ介〜っ！」

やっぱり来たよ……しかも、今日の生駒の服装はこれまたオタクなもの。

……ていうか、それはお偉いさんに訴えられるんじゃないか？  
だって、どう考えても某ボカロ風じゃん……。

「おい、その頭の上の白いリボンってモロアレじゃねえか！」

「当然だよ！　だってこれコスプレだもん！」

「お前……人をオタだと思って。つーか必死すぎだろこのキモオタ  
！」

「はあ！？ クソ介も同じだよな。同族嫌悪とかどうかと思うよ！」

「学校で平然とコスプレしているヤツが言うなっ！」

ていうか周りの反応もおかしい。どうしてこんなに浮いた恰好のヤツがいるのに誰も気にしないんだ？

まるで、日頃からコイツがコスプレをしていて、いい加減見るのも慣れたって感じじゃないか。

中にはごく普通の人もいて、生駒を軽蔑するような冷たい目で見ている人もいるが。

つか確かに俺もオタクの部類だろうが、学校で平然とコスプレする奴と同類には思われたくない！

「うるさいよクソ介！ ロードローラーで引き殺すよ！？」

「ロードローラーネタやめい！」

「つか今更ロードローラーっすか。」

後のタコさんネタでさえ、古いし飽きたネタかもしれないという時期なのに。」

「じゃあ猫村コスのほうがよかつたかな？」

「そういう問題じゃねえ！ 学校でコスプレするな、あとついでに勧誘もやめてくれっ！」

「うるさいよクソ介！ いい加減にしないと……みっなみなにしてやんよ？」

「お前、もう狙ってるだけだろ……」

流石にそろそろ付き合ってられなくなってきた。  
まあ、あかりの時とは違って実害があるわけじゃないし、そこらへんはあかりよりはマシだけど。  
でも……正直相手にするのが面倒になってきました。  
やっぱ、この状況が続くと学校生活も疲れるだろう。  
こうなったら最後の手段だ。生駒の原動力に生駒の暴走を止めさせてもらうしかない。

というわけで、俺は生駒を振りきった後に明智の所に向かった。

クラスメイトに訊いた所、今彼女は仕事なので校内のどこかにいるんだという。

廊下を歩く俺はふと思う。ゲームだとヒロインの居場所に矢印がつくよな。

やっぱり……現実じゆんというのは不便な世界だ。

「ぎゃああああああああああっ!」

「く、黒やん!?!」

「黒やんがまた負けたああああっ!」

その時、どこかで聞き覚えのある馬鹿みたいに3人の声が耳に入ってくる。

この時俺は確信した。間違いなく明智はこの近くにいます。

断末魔が聞こえた場所へ行くと、三馬鹿のリーダー格である黒木がトイレ前で伸びている。

その周りには、勝ち誇った表情の明智と泣き顔の馬鹿2人の姿があった。

……てゆーか黒木、アンタまた負けたんですか。

「では、私はもう行くぞっ」

「は、はい！」

「お気を付けてっ！」

ダメだこりゃ。赤佐と大林は完全に明智の言いなりである。これはもう黒木の権力が消えうせたか？

「あつ、変態藤島……っ」

「変態は余計だろ」

明智が向かって来たのはまさに俺のほう。

たまたま居合わせた俺達、明智は俺を目撃すると変な挨拶をしてきたのだ。

変な挨拶とは言っても、俺らにとっては普通の挨拶になりつつあるが。

「さっきの……見てたのっ？」

「あんだだけ悲鳴が聞こえれば嫌でも見たくなるよ」

「ごめん……っ、私は風紀委員なのに、風紀を乱すような悲鳴をあげさせて」

本当に彼女は表情を暗くしていた。

いやいやいや、まずいだろコレは。どうせ黒木から喧嘩を売ってきて

たんだろっ。

だったら別に、明智が落ち込む必要なんてないだろうぜ。というわけで俺は、出来るだけ優しい表情を作り彼女に。

「気にするな。どうせいつものアレだろ？ 黒木のほうから喧嘩を売ってるに等しいんだし、皆もその辺はわかってると思うから」

そう言ってあげた。すると彼女は上目遣いで。

「……………ホント？」

……………ぐはっ、すみません今のは破壊力が強すぎた。

一般青少年な上に、チェリーボーイな俺さんにはちよっと危険でした。

何故だ。明智が時々見せるこの女の子的な表情。いつもの明智は全然違う。

って、こんなくだらないこと考えてる場合じゃない！

「嘘だったら誰も明智の相手なんてしないだろ？」

「……………うん、ありがとな……………藤島っ」

そう言う彼女の顔はほんのり赤く、そしてなんだか嬉しそうな表情をしていた。

「気にするなって。それよりもちよっと頼みがあるんだけど」

「ん、頼み？ 藤島が私に？」

「お、おう。明智にしかどうすることもできない頼みだよ」



「わわわ、私にしかどうすることもっ!? くくくっ!」

明智の顔は、一瞬にしてイチゴのように真っ赤に染まった。

その上、驚愕したように口をかなり大きく開けている。

なんとというオーバーリアクション。俺……明智に何か言っただけ?

「あ、あのー。大丈夫か?」

「はっ!? だ、大丈夫だ問題ないっ! それで用事ってなんだ!」

そのなんてことのない一言が、某シャダイネタに聞こえてしまった俺は病気だろうか。

それにしても明智は本当にどうしたんだろう。そこまで慌てて答える程の事だったのか?

まあとにかく、話は聞いてくれるっばいし、素直に頼みごとをしてみるか。

「お前の友達に生駒純奈っているだろ?」

「……え? す、すみんや……げんげん! 純奈がどうした?」

せき込む明智に一言。お前絶対すみんやんって言いかけただろ。

「いや、アイツの勧誘がしつこ過ぎて困ってるんだよ」

「……え? もしかして用事って……」

「頼む! アイツの原動力は明智みたいなんだ。だから明智の力を

生駒の暴走を止めてくれ！」

もう、クソ介クソ介言われている俺には止めるの無理です。いくら俺でも限度というものがあるんだ。

生駒の暴走を止めるのは、賞金10万円獲得よりも遥かに難しい事だ。

「それが……頼みなのかっ？」

「あ、ああ。頼む！ アイツは俺の話を聞こうとしない。もう明智だけが頼りなんですよ！」

俺は土下座をしながら明智に頼みこんでいる。

端から見れば情けないだろう。でも、それほど俺は必死なのだ。

とにかく、生駒の毒牙から一刻も早く逃れたいのである。しかし、俺の話を聞いた明智はと言うと。

「……………はあ」

何故だか、凄まじい脱力感を彼女から感じる。

あのため息からもソレが強く伝わってくる。

「……………？ どうしたんだお前？」

「いや……………別になんでもないっ」

「そ、そっか」

明智はまるで期待していた話とは全然違ったかのように、肩を落とし残念そうな顔でガツカリしていた。

「……とりあえず、純奈の事は任せてくれ」

「いいのか？」

「純奈は私の友達だ。それに藤島の疲れた顔はその……見たくない  
っ」

「おお！ マジでやってくれるのか!？」

「あ、あつまりえだっ」

明智は微妙に視線を俺から逸らしながらも、生駒の暴走停止を約束  
してくれた。

この時、俺は改めて明智の優しさを知ったのである。  
やっぱり明智はいい人だったぜ。相変わらず俺を変態扱いしてくる  
けどね。

これで、俺はもう生駒に付きまとわれることもなく、いつも通り伊  
吹をからかう事ができるぜ。

この時の俺は徐々にウハウハな気分であった……。

### 第36話 / 生駒純奈の暴走（後書き）

NO8

小坂亜紀  
こさかあき

イメージCV：佐藤利奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『とある魔術の禁書目録』 御坂美琴役  
『みなみけ』 南春香役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ：テキトーすぎるクラス委員

性別：女性

年齢：16歳。

誕生日：10月11日生まれ

身長：162cm

体重：48kg

胸ランク：大（巨）

趣味：グッズ集め、映画観賞、読書

好きな物：戦国武将、そのあたりの歴史、映画、ラーメン、圭介争奪戦観戦

嫌いな物：大吾、玉ねぎ、面倒な事

その他：圭介や暮葉のクラスメイト、伊吹の親友。

超アバウトで面倒くさがり屋な人。

一応クラス委員であるが、面倒くさがり屋な為あまり頼りにはされていない。でもやる時はやるタイプらしい。

伊吹の親友だけに、伊吹の気持ちには気付いている様子。成績は意外と優秀で運動も人並みにはできるようである。

大吾とは喧嘩友達、重原との関係は至って普通。無類の戦国好き。

また大吾の長宗我部という名字に関して『長宗我部元親に失礼』と  
言っている。

圭介の事は『まくん』と呼んでいる。

### 第37話 / 誤解ほど恐ろしいものってないよね！

「クソ介のせいでナギちゃんに怒られたんだよ!？」

残念賞。

明智に頼んだ結果がこのザマだ。

そう、生駒が一筋縄で引つ込む程度の小者なら苦勞はしない。

だけど生駒は人様の胸倉をしつかりと掴み、笑顔で俺にキレていた。確かに明智は仕事をしてくれたようである。だからこそ生駒はその事について怒っているのだ。

現在5時間目と6時間目の間の10分休み。水を飲もうと思ったら捕まっちゃったんだよ。

……女の子に胸倉を掴まれる俺って、男として結構情けない気がする。

「お前がしつこいのが悪いんだろ？」

「ただ俺だって男だ。最後のプライドとして反論だけはさせてもらうぞ。」

まったく、俺らはどこのヤンキー少女とフツーな野郎だよ。

まあ、生駒はヤンキーとは対極の体育会系オタクだけだ。

「だからってナギちゃんに言う？ 私、ナギちゃん相手には反論できかないんだよ?」

「それってさ、自分が弱いって言ってるようなもんじゃね?」

「クソ介よりは弱くない! 私みたいな女に胸倉つかまれてる癖に。カツアゲされる気弱な中学生じゃないんだよ!？」

「じゃあ、殴ったりしてもいいのかよ？」

「男として最低だと思っよう！」

「だから対処しようがねえんだろうが。そろそろ授業始まるから離してくれないか？」

「だが断る！」

生駒は人様の胸倉を掴みながらどや顔だ。

畜生、最初に出会ったときはいい子そうだったのに……。

イザ関わってみればただの百合な問題児だったよ！

なんで俺の周りにはこう、残念な人ばかりが集まってくるんだろう？

「お前、授業に遅れてもいいのか？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「またそれっすか！？ シャダイ好きだな！？」

「ニヤ動ネタ全般大好きなんだよ。クソ介もそうだよね？」

「いや、ニヤ動自体あんまり利用しないけど」

たまに友達がやってるニヤ生は視聴するし、時々MADは見るがそんなにしよっちゅうは利用しない。

意外かもしれないけど、これでもニヤ厨ではないのである。

ちなみにニヤ厨とは重度のニヤニヤ中毒者。あるいはそれらに誇りを持つ人の事だ。

「残念ボーイだねクソ介っ！ ニヤ動利用しないと人生の9割は損するよ？」

「それほとんどじゃねえか！ 一体何時間ニヤニヤしてんだよ」

「5時間近いかも……」

「もうすぐニヤニヤ廃人じゃねえか！ この廃人陸上部員！」

「つかそんなにニヤニヤしていて、オマケに陸上部でも頑張っている。」

「そんな生駒は一体いつ寝ているんだ。ちゃんと睡眠とってるんだろうか？」

「廃人なんてそんな……私、ニヤニヤニート狙ってるのに」

「親が泣くからやめなさい！」

「一日に16時間以上もニヤ動に常駐してられるか！」

「逆に達成できる人がいたとしたら、そいつは俺の前に来い。」

「名誉ある『全国ニヤニヤニート大賞』を授与しようじゃないか。」

「それにしても、体育会系女子って一番ニヤ動と縁がなさそうなのにねえ……。」

「人というのは、見た目とジョブで判断しちゃいけないんだなと改めて思ったぜ。」

「とにかく、クソ介のせいでナギちゃんに怒られちゃったよ？」

「いいだろ？ 好きな人に罵られるってのはMにはたまらない事だ」



る？」

「そ、それもそうだけどつ。確かにナギちゃんに罵倒されるとキモチイイけど……で、でもそれがクソ介の為だと思つとムカつくんだよ！」

これはひどい。

そんな理由の為に俺は胸倉を掴まれているの？

ていうか、生駒つて明智に罵られたいドMの変態さんだったのか。やっぱり、生駒はある科学の変態淑女ポジションであった。

「そもそも、お前がしつこいからこんな事になつたんだろ？」

「だって！ クソ介とナギちゃんがその……下着を見せ合う仲に

」

「ストーーーーップ！ 俺は明智の下着なんて知らねえ！」

「ほ、ホント？ 今日のナギちゃん何色？」

「知るか！ 白とかが無難だと思っけどな」

「合ってるじゃんこの変態クソ介！」

白で合ってたのかよ！

クソツ、勝手に予想しなければよかった。明智は白だろうと妄想した結果がこれだよ。

せめて、アダルトでセクシーな黒と言っておけばよかった。

畜生、女子の下着を妄想する事でここまで後悔した事なんて……今までなかったぜ。

でもやっぱり……伊吹の縞パンは最高だった気がするぜ。

でもなんでだ、なんでコイツは明智の下着の色を知ってるんだろっ？

「ちょっと待て。お前が明智の下着の色を知ってるって変じゃね？」

「普通だよ。だってこっそり見たもん」

「……どうやって？」

「スカートめくりがメジャーだよ？」

「……めくったのか？」

「うん！」

「最低だコイツ！？」

どこまで変態なんだよ。学校でスカートめくりって二次元以外じゃ見たことねーぞ。

とにかくよくわかったぜ。生駒は百合で変態で思いこみの激しい、危険人物だってな！

「黙れクソ介！ クソ介はナギちゃんを脱がして自分も脱いだ癖に……」

「待て、俺は脱がされたんだ！ 決して脱がした覚えはない！」

しかも俺は男なのに男に脱がされたんだぜ？

これ以上、男として可哀想な事はないと思っんですよ。

「ナギちゃんは男を脱がすなんて不埒な真似しないもん！ 嘘つかないでよクソ介！」

「明智に脱がされんだじゃねえよ！」

「じゃ、じゃあ誰に脱がされたの？」

「……男、今日現行犯逮捕されたヤツいただろ？」

その時、生駒の表情が驚愕のものへとなっていた。

目を見開き口まで半開きである。本当に彼女は事実には驚いているようである。

というか、ノリで話していたけどこの展開だと誤解が解けそうだな。

よかった。これで俺と明智の件は白だって彼女に証明できる！

「そっか……クソ介は仲間だったんだ」

「は？」

なにコイツ、いきなり納得したような顔をしてどうしたんだ？

「ごめん。私、完全にクソ介を誤解していたよ……」

「え？ ああいや、わかってくれたんならいいけど……」

「うん。そうだよ……だってクソ介は………同性愛者なんだよね！？」

「はっ………はあああああっ！？」

「ががが、同性愛者ですとおおおおっ!？」

「ちよいと待ちやがれ。今の会話からどうしてその答えに至ったんだ。アレは俺は望んでいない。下品な言い方だがレイプというヤツだった。」

「まあ、未遂だったからよかったけど、された側としては精神的にシヨックだったんぞ。」

「それがどうして……どこから同性愛者という答えになりやがったんだ!」

「わ、私も男は大嫌いだよ……でも女の子は好きなんだっ。そして……ナギちゃんが一番好きなんだよ?」

「そうか、それはよかった。でもその前に一つ言いたい事が」

「クソ介も同性のほうが好きだったんだね! それで、クソ介は誰が好きなの?」

「おいちよつと待」

「同じ同性愛者として、私はクソ介の恋愛相談に乗るよ?」

「だからちよつと待ちや」

「まちや……? 町屋君の事が好きなんだね?」

「頼む生駒さん。お願いですから……すこしは俺にも喋らせてください。ていうか誰だよ町屋君って!」

「初耳だし知らねえよ。でもこの展開的に町屋ってのは男なんだろう。」

そんな……俺は男だ。なのに男と恋愛するなんて死んでも嫌じゃあ  
あああっ！  
ここは断固否定。町屋君なんか好きじゃないって生駒に言ってるや  
らねば！

「違うわ！」

「待ってて。今すぐ町屋君を呼んでくるから」

「町屋君って実在人物なのかよ！？」

「私の前のクラスメイトに町屋君がいたよ？ だから今からクソ介  
と町屋君がトイレに行くイベントを」

「やめてくださいお願いします！ そして町屋君逃げてえーっ  
！」

俺は本当に町屋君を呼びに行こうとする生駒の手首を、しっかりと握  
っていた。

だって……呼びに行かれたら困ることしかないじゃねえか！

「けーすけ様っ！」

「あ？」

おお、あの綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛。  
そして小柄な体躯にあどけない顔、とても元氣な敬語。まさしく暮  
葉であった。

何故だろう。このタイミングで登場してくれた暮葉が女神さまに見  
える。

「あ！ こんなところにいたのですね！」

「く、暮葉！ 丁度いい所に来た。誤解を解いてくれ！」

「もきゅ？ なんの誤解ですか？」

「そ、それは……」

……それを正直に言いやがれと？

うっん、いくら相手が暮葉でも流石に恥ずかしいぞ。

ホモ疑惑をかけられてますなんて言ったら……ああ、嫌だよ言いたくないよ！

「って、疑惑は後で聞くのです！ それよりけーすけ様、野原先生がお怒りなのですよ!？」

「えっ？ あっ！」

俺は時計を確認し、初めて自体の深刻さに気付いた。だって……もう授業が始まってんら10分近くが経過している。しかも次の授業は野原先生の数学ではありませんか。

「早くなのです！ 早めに行ったほうが身の為なのですよ！」

「お、おうそうだな！ とりあえずよく聞け生駒！ 俺は同性愛者じゃねえ！」

「そ、そうなの……？ あ、わかった！ クソ介はバイなんだね！」

「それも全然ちげえええええええええつ！」

「けーすけ様！ 揉めてる場合じゃないのです！ 野原先生の野原神拳が炸裂しちゃうのですよ！？」

「そ、それも嫌だ。というわけでさらばだ生駒っ！」

もう、生駒のくだららいBL話には付き合ってられない！

そんな事よりも早く授業へ行かなければ。じゃないと……俺が野原先生に殺されてしまう！

暮葉もそれを恐れてか、俺の手を引いて全速力で走っていた。

こうして俺は生駒に、完全に同性愛者か両性愛者だという誤解をされてしまったのである

第37話 / 誤解ほど恐ろしいものってないよね！ (後書き)

NO9

ちようそがへだしい

長宗我部大吾

イメージCV：吉野裕行（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『カオス；ヘッド - CHAOS；HEAD -』西條拓巳役  
『機動戦士ガンダムOO』アレルヤ・ハプティズム役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジヨブ：完全二次元派オタク男子

性別：男性

年齢：16歳。

誕生日：7月12日生まれ

身長：171cm

体重：60kg

趣味：アニメ鑑賞、漫画、ラノベ読書、ゲームプレイ、その他二次元全般

好きな物：二次元の女の子。ラノベ、漫画、アニメ、ゲーム等々……  
嫌いな物：現実、現実女子、その他不条理なモノ、理不尽なモノ。

その他：圭介の悪友A。何故かいつも重原とつるんでいる。

我欲に素直であり、圭介ですら『変態』と引くほどの男。

おちゃらけた性格であり圭介にすらウザがられ、女子からの評判は心底悪い。

しかし現実女に何を言われても平気らしく、完全二次元派。

成績は意外と優秀だが、校則で禁止されているハズのPNPを学校に持ち込んだり、その他生活態度にかなり難があり教師陣は彼を問題児扱いしている。



自称『ギャルゲーの神』、しかしネット上で有名な某落とし神には到底敵わない存在である。

なんだかんだ言って圭介や重原とは仲がよく、この男三人で行動する事は多い。一人称は『僕』、しかし口は悪い。

### 第38話 / 疑惑の圭介

「圭介、あんたってホモだったの？」

「圭くんまさかのBL!？」

「けーすけ様って実は男性のほうが好きだったのですか!？」

「……………」

ヘルプ・ミー!

誰か助けてください!

あれからしばらく経過し、テスト明けで憂鬱な気分の月曜日の事。

校内にはある噂が広まっていた。それは、俺こと藤島圭介ガチホモ説である…………。

…………多分、こんなのを広めたのは生駒だろう。ていうかアイツ以外には考えられない。

そうじゃないとすれば、あの時の会話を誰かが聞いていたとか……まあ、考えても仕方がない。

おかげで男には近寄るな言われるわ、女子も大半がキモがり腐女子だけが歓喜。

それどころかリアルガチホモ青年が俺に近寄ってきて、それを迎撃すべく時々路地裏で喧嘩。

……もう嫌だ。色々突っ込みたい事があるけど、まずはどうしてこうなった!?

「なあ、どうすれば誤解って解けると思う?」

「誤解は変な事をするとか余計に真実と思われませんか? 拙者は我慢する事をオススメするのです!」

「そうね。まあ少なくとも私らはちゃんとわかってるから。気にしないで生活すればいいわよ」

「僕はそもそも二次元以外に興味ないし、同じオタクなら別に圭介がどうであろうが関係ねえぜ?」

「まあ、俺も圭介が美乳派なのはわかってるから」

……重原、それフォローになってくね?

確かに俺は美乳派だけど、要するに変態って言うてるようなもんじやないか?

失敬な、俺は変態ではなく紳士だぞ。

「圭くん。いつそ女子と付き合ってるのはどお?」

突然、小坂がニヤニヤしながらとんでもない事を言いだした。

「ぶっ! な、なんでだよ!」

「だって、要するに圭くんが女に興味がない人って誤解だよね? だったら簡単、女子と付き合っちゃえば万事解決だ!」

た、確かにそうだ……！」

俺がリア充になっちまえば、もうそんな誤解とはオサラバできる。でも簡単に言うけどさ、高2にもなって彼女いない歴〃年齢だぜ？そんなモテない野郎が、これから先彼女が出来るとは限らないだろ。

「ただだ、ダメよ亜紀！ 圭介に彼女なんてその……か、彼女の身が危険よ！」

「俺がデートDVするような人に見えるんですか！？」

「で、デートDVはしなさそうだけど……む、無理やりエッチな事しそうよアンタは！」

「俺はそこまで強引な男じゃねえ！」

伊吹もとことん失礼なヤツだぜ。そんなに強引な男なら今頃彼女の一人や二人はいたっつーの。

肉食系じゃないからいないんだろ？。でも草食系ってわけでもねえし……雑食系？

まあ、身体が丈夫な事と回復力が高い事。念じながらキスをすると強くなること以外、俺は多分ごく普通の健全な男子高校生である。とにかく、俺はそんなに強引エロじゃないんだよ。

「だったら俺と一緒に武道やらないかい？ 男にも女にも興味がないように見えるよ？」

「いやダメだろ！ 男と格闘する時点で余計に誤解されるから！」

重原みたいな爽やか系男子との武道も、当然腐女子ホイホイなネタなのでアウトだ。

「だったら一日中P N Pでギャルゲーをするってのは!?!? 眼鏡なら僕が貸すぜ!?!?」

「どこのオタメガだ!」

「僕は尊敬してるけどな……っ」

「お前はリアルにオタメガだっ!」

ダメだ。大吾の案に乗ったら人生負けな気がする。そう言うのは家でこっさりプレイするに限る。  
流石に学校でプレイする気にはならないな。

「けーすけ様っ。拙者はやっぱり我慢が一番かと思うのです」

「そ、そうよ! 恋愛とか格闘とかギャルゲーなんかより、我慢が一番いい方法よ!」

「そ、それもそうだよな……っ」

恋愛なんて可能性がないし、格闘なんかモロ腐女子ホイホイだからアウト。

学校でギャルゲーなんて、そんなオタメガチックな真似は俺にはできないぜ。

でも……我慢するのも辛いよなあ。だって大半の人にはキモがられ、一部の人には集られて……そんな日常が続いてみる。絶対現実が嫌になってくるから。

「そんなまっくんによっぱり、あたしは恋愛をオススメしよう」

「小坂……お前は人の心でも読めんのかよ？」

「ふっふっふ〜！ あたしはこうみえても友達から鋭いと評判なんだっ」

小坂のヤツ、地味にドヤ顔で自慢してるし……。

まあ、確かに鋭いというのは世間では便利なスキルだ。

「確かに、亜紀ってホントに鋭いわ……」

「特に伊吹の気持ちはお見通しっ」

「お、お見通しってどういう意味よ……？」

「え、気になるひ」

「だあああつ！ そ、そんなのいない！ いないわよ！」

やけに必死になって伊吹は叫んでいた。

言いかけで伊吹の叫び声が入った為、結局小坂が何を言いたかったのかがわからなかった。

だけど、伊吹にとってはあまり話して欲しくなかった事なんだろう。

「っで、圭くん。やっぱりあたしは誤解を解くために彼女を作るべきだと思っの」

「まあ、お前の意見は確かにいいかもしれないけど。でもねえ相手が……」

3度の恋は失敗。現在出会いのカケラもナシ。  
仮に暮葉達とのアレが出会いだとしたら、出会った女の子は美少女  
だけどこか残念。  
辛いぜ……非モテ男は。

「そつだ！ 身近な人から選らべば？ 例えば暮葉とか伊吹とか隣  
の明智さんとか」

暮葉は何故目を輝かせている？

そんなに人の色恋沙汰が面白いのか。まあ暮葉だつて女の子だしな。

「もきゅっ！？ せ、拙者もなのですか！？」

「わああ、私は別に対象にしなくていいわよっ！」

「あのなあ……簡単に言うけどそれも結構無理があるだろ？」

「そつだねえ。じゃあじゃあ、圭くんにあたしらの中で誰が一番  
好み？」

「ええっ？ 好みかあ……」

まあ、好みの女の子を妄想するくらいなら。

でも、それを本人の前で答えろというのも中々の羞恥プレイである。  
ていうか、俺は誰が好みなんだろうか……とりあえず選択肢を絞ろ  
う。

1：暮葉

2：伊吹

3：小坂

- 4：明智
- 5：青山さん
- 6：あかり
- 7：生駒
- 8：葵

……うわ、絞ろうと思ったけど結構な人数になってしまった。  
まずは……葵は実の妹だから論外。生駒も元はと言えばアイツの暴走がこの結果を生んだんだ、当然論外である。ていうか女子をこんな風に評価するのって……何か嫌だな。

でも実際の所を言うと俺は美乳な青山さ                    げふんげふん！

でもなあ、青山さんとはたまに1対1で話すけど、回数自体は少ないし。

明智とはそこそこ話せるが、近寄ると変態生駒さんからボロクソ言われそう。

あかりはシスコンの浅間部長の監視に遭いそう。

そうなると話しやすいのは暮葉か伊吹か小坂の三人。

そう。どうせ無駄だろうが、からかった時の伊吹の可愛い反応が見てみたいかも。

……よし、伊吹だ。いつもの調子で伊吹と答えてみよう。

「圭くん、決まった？」

「お、おう。俺の好みだっけ？」

「そうそう！　っで、誰？」

「伊吹、君に決めたっ！」



なんとかモンスター風に、俺は伊吹を指名してみる。  
すると伊吹はわなわなと震え、目を白黒させ。

「え、エエエエエエエエツ!？」

彼女は本気で驚いていた。

まさか、自分の名前が出てくるとは思っていなかったかのような様子。

……うん、やっぱり伊吹の反応が可愛い。

「もきゅ!？ け、けーすけ様……伊吹さんの事が好きだったので  
すか!？」

「圭介……まさかの幼馴染ルート突入か？」

「やっぱり。まあ俺は絶対国宗さんだと思ってたよ」

「お前らなあ……タイプを聞かれただけなのに、なんでそこから好きって事になる?」

しかもいつも通りのジョークなのに。

ていうか、タイプ=好きな子というのも色々とおかしいだろ。

あの子可愛いとか、そういう日常会話にもありそうなノリである。

いつも伊吹に可愛いって言ってるんだ、伊吹も流石に本気になったりはしない……と思う。

「そーだそーだ。というわけで圭くんは伊吹は今日からカップルね」

「……え?」

……え〜っと、この小坂さんは今なんと仰いやがったんだろうか？  
伊吹と俺がカップル……？

ちよ、ちよっと待て。話が冗談のレベルじゃなくなってきたぞ！？  
もしかして、俺は思わぬルートに突入するという地雷を踏んじまったのか？

「ちよ、ちよっと亜紀!？」

「いいじゃん。誤解が解けるまでの恋人ごっこなんだから。まあ……  
あたしとしては、ホントに付き合ってくれと面白んだけどねえ？」

小坂のニヤニヤとした顔が何かムカつくうっ!

ていうか伊吹も、何かもの欲しそうな視線を向けてくる。

……と思った刹那、突然伊吹は不機嫌そうな表情になり。

「け、圭介! どーせいいつもの冗談でしょ!? あ、あんたも亜紀  
に何か言ってるやいなさいよっ!」

「お、おう! 小坂、悪いけど今のはいつも通りの冗談だよ」

我ながら実に最低である。そんな事は自分でもわかっている。

でも毎朝こんな感じだし、伊吹もいい加減慣れた感がある。

だからこそ、こんな最低なやりとりでも俺達は気を許せている。

「ええ〜? 絶対いい案だと思ったのに。それに伊吹はいいの?  
このまま圭くんがガチホモ扱いされた辛い思いをしても」

小坂のヤツ。意地でも俺と伊吹をくっ付けたいらしい。

さて、どうしようか。伊吹の言う通り俺はいつもの冗談を言ったつ

もりだ。  
だけど、ガチで幼馴染ルートに突入しそうな展開になってしまったぞ？

「……………っ……っ……し、仕方ないわね。本物は嫌だけどフリくらいならしてあげるわよ！」

「ちょ！？ い、伊吹……………マジで？」

「あんだ、このままガチホモ扱いされたいの？」

「そりゃ確かに嫌だけど……………」

「恋人じゃなくてあくまでフリよ！」

何故でしょう。何故だか伊吹さんまで乗り気であった。腕を組んで見下し命令するように、彼女は俺に迫ってくる。

……………でも、伊吹はそれでいいのか？

あの時から伊吹は俺に対して冷たかった。まさに今のツツパリ伊吹ちゃんになった。

きつと俺はあの時の事で、他の人程じゃないにしろ伊吹にも嫌われたのかもしれない。

ある程度の距離を置く為に、伊吹は俺にツンツンするようになったのかもしれない。

そんな伊吹が、フリとは言え俺と恋人になる……………？

「伊吹、それで本当にいいのか？」

「……………えっ？」

「お前……普段がああだし、俺の事そんなに好きでもないんだろ？」

「……っ、とっ……当然よ！ 嫌いだけどその……っ、困ってるし、どーしても助けて欲しいからっ！ 別に好きだからじゃなくて仕方なくよ？」

仕方なく……か、やっぱりそうなのか……。

だったら俺の答えは一つしかない。

俺は伊吹が嫌いなわけじゃない。むしろ好きかもしれない。でも、伊吹がそう言うなら

「だったら、無理なんてしなくてもいいだろ？」

「む、無理……？ 無理って……なによ？」

「大した好きでもないヤツと恋人ごっこなんて、そんなの伊吹だって嫌だろ？」

「それはその……あたりまえよ！ でも圭介がどうしても

「さっきも言っただろ、いつも通りのやつだって。だからそんなに無理はしなくても……」

伊吹に無理はしてほしくない。

嫌いな人と恋人のフリをするなんて、女子としてはそんなに嫌な事はないだろう。

男でも同じだ。それなのに、伊吹は好きでもない人と恋人にフリをしようとする。

俺は……そんな無理をするような。そして真剣じゃない恋愛なんて嫌だ。

「……ごめんっ」

その時、口から零れたその一言。  
それを吐いた刹那伊吹はゆっくりと歩み、教室から出て行ってしまった。

「……え？　ちょ、伊吹！」

さすがにこれはマズイと思った俺は、教室から出て行くこととする伊吹を追う。

しかし、俺が廊下に出た時には既に彼女の姿はなかった。

何故だろう。廊下に出た瞬間に走りだしてしまっただろうか？

「伊吹さん……っ」

「ああ……ちょっと、あたしも悪いことしちゃったかな……？」

伊吹を心配する皆。特に小坂なんて親友だけに本当に心配そうだ。  
あんな提案さえしなければ……と思っっているのかもしれない。

でも、一番悪いのは俺だ……多分俺がアイツを傷つけるような事を  
無意識に言ってしまった。

そくに違いない。でもなんで。アイツ無理してたんじゃないのか？

……おかしい。ツツパリなのにわからない。

とにかく、何よりも先に伊吹に土下座でもなんでもしねえと

### 第38話 / 疑惑の圭介（後書き）

No10

重原広敏

イメージCV：小野大輔（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『涼宮ハルヒの憂鬱』古泉一樹役

『デユラララ！！』平和島静雄役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ：武道家学生

性別：男性

年齢：17歳。

誕生日：4月18日生まれ

身長：180cm

体重：70kg

趣味：身体を鍛える事、アニメ鑑賞

好きな物：武術、ラノベ、漫画、アニメ

嫌いな物：身体に悪いもの、セロリ

その他：圭介の悪友B、長身で筋肉質だが爽やかなキャラ。

家が『無差別格闘重原流』の道場であり、重原流武術の使い手。

山籠りなんて常識離れな事もやってきたらしく、圭介曰く腕前はかなりのもの。

武道家で恋愛にも興味はないが、圭介や大吾に匹敵するほどのオタク趣味を持つ。

大吾とつるんで行動することが多い。

一人称は『俺』だが、圭介や大吾と違ってそこまで荒い言葉使いはしない。

実はある秘密があるらしい……。

第39話 / side story 伊吹編

あゝあ、結局授業サボっちゃったな……。

あの後、学校を飛び出した私は古宇坂駅前の、古びた商店街をフラついていた。

お昼休みに何も言わず飛び出してきちゃった。きっとサボり扱いよね……。

でも、そんなことは仕方ないと思っている。それに飛び出してきた私が悪いんだから。

「……はあ」

……やっぱり、アイツは私の事心配してんのかな？

アイツは世話焼きだし、私が少し不機嫌でも真剣になってくれるヤツだから。

そんなヤツだから、いつも通りの冗談を言い合える。

でも今回は違う。いつもアイツに冷たく当たっているのは私なのに、アイツが嫌われているって思っちゃうのも、別に不思議な事なんかじゃないのに……。

って、別に私はアイツが好きだから。だから気にしてるとかじゃっ！

でも、このままの状態は嫌だ。世話焼きなアイツは私のために必死になるかもしれない。

それって、アイツにかなりの心配をかけちゃってるって事よね。

それに今回はアイツだけじゃなくて、亜紀や暮葉達にも心配をかけちゃってる。

ホント……私は身勝手だ。絶対心配するような事をしてしまった。別にわかってたのに。アイツの言葉はいつも冗談だって事も。亜紀



の提案もノリの思いつきだったって事も。アイツが『無理するな』  
って言ったのは優しさからだって、全部全部わかっていたハズなの  
に。

でも、今から戻るって雰囲気でもないわよね……。

「はぁ……」

やっぱりアイツ、今頃私の事心配してんのかな？

……バカみたい、何を考えるにしてもアイツの姿が脳裏に浮かぶ。  
胸が高鳴る。頭の中までわけがわからなくなるくらいに混乱してい  
る。

アイツの馬鹿づ。頭の中にまで出てこないでよ、胸をもやもやさ  
せないでよ……っ。

「……はぁ」

またため息ついちゃった。今日で3回目……。

そう言えば誰だろう。ため息をつくときと幸せが逃げちゃうって言った  
人。

これだけため息ついたら、私の幸せも逃げちゃってるのかな？

……確かに、今は幸せじゃない。皆に迷惑掛けちゃっている。それ  
にアイツに嫌われて当然のように冷たく当たってきたのに、それが  
嫌で勝手に飛び出してアイツに心配をかけている。

……嫌、か……やっぱり変わらないのかな……私の気持ちは。

ずっとそうだった。ずっと昔からいつもも考えている事はアイ  
ツの事。

胸のもやもやだって、別に最近感じるようになったものじゃない。  
ずっと昔から 子供の頃から感じていた。

否定しているけど、やっぱり溢れ出そうで……。  
……ダメだな私。今でも否定しようとしても、全然否定ができない。  
それに私は、私の中の莫大な感情の正体なんて、もうとっくの昔に  
自覚している。  
何があるうとも変わらない。変わることがなかった……そんな莫大  
な感情。  
苦しいけど、でも時々幸せになれる……そんな不思議な想い。

……つて、そんな事思っちゃダメよ！  
それじゃあ私……強くなんてなれない。そういうのは強い子はしな  
いんだから。  
決めたのに……もう二度と誰にも傷つけられたくない。アイツにを  
傷ついて欲しくない。  
だから私は今までずっと、強くある為に人を変えてきた。  
誰にも迷惑をかけたくなって、アイツに傷ついて欲しくなくて、自  
分を守る為にもずっと強気でいた。  
でも

「やっぱり、私ってばか……」

そんな事をしていたら、確かに自分を守ることができた。  
でも、誰にも迷惑をかけていない？  
アイツを傷つけたりなんかしていない？  
……それは、やっぱり嘘になる。結局私は自分を守ること以外は何  
もできていない。  
だから今みたいに皆に迷惑をかけている。日頃の冷たい言葉がアイ  
ツを傷つけてしまっている。

でも……っ、今更私を変える事なんてできない。

あの時みたいいきなり変えられない。今更素直になんかなれない……っ。

「……っ！」

「おうっ？」

いたっ……しまった。考え事をしながら歩いていたら、誰かとぶつかってしまった。

古宇坂の商店街は空洞化も進み、人通りは少ないけどそれでも人は必ずいる。

ホントばかだわ……前すら見えない程に考え事をしていたなんて……。とにかく、早く相手に謝らないと。

「ご、ごめんなさ……っ!？」

私が顔を見上げると、そこにはどこかの高校の制服を着た長身の男が立っていた。

でも制服は着崩され、赤い坊主の髪にはラインアートが入っていた。耳にもピアス、灰色のちよつとダボっているズボン。

上は蜘蛛の模様が入っている紫色の長袖シャツを着用。ズボンには金色のチエーンを付けている。

どこをどう見ても不良として思えない外見の人が、私を見下ろし狂気のような笑みを浮かべる。

そんな彼を見て私は……。

「っ……っ……っ?」

息が喉で詰まる、そして足がガクガクと震える。

いや、足だけじゃなくて……身体そのものが震えている気がする。とにかく……相手を見た瞬間、私は思わず恐怖を感じてしまった。そして、脳裏にいつかの光景が広がってくる……。

「久しぶりだなあ伊吹ちゃん」

「あっ……っ……」

なんで……どうしてコイツが昼間から商店街をフラついてるの？

「ハハッ、ンだよオそんなにビビっちまってよ。久々の再会だったのに冷たくねえか？」

……なによ、ビビる必要なんてなのに。

こういう時の為に、コイツから身を守る為に強くあるうとしてきたんじゃない。

一応念の為に、制服の中には竹刀を隠している。

こんな、こんな不良なんて恐れる必要……全くないのよ。

「……ながぶちあき永淵晃、何の用？ 私に何か用でもあるの？」

「ほお？ しばらく見ねえ間に随分強気になったんじゃないかねえか」

「別に、私は元々こういう人よ」

「ヘッ、嘘ついちゃってよお……強がりとか一番嫌いなんだよなあ」

そう言いながら、永淵という男は徐々に私に近寄ってくる。

一歩近づぐごとに、私は思わず後ずさりをしてしまう。

それでも、永淵は私なんかを気にせず迫ってくる。

……危ない。これ以上永淵に近寄られたら……危険すぎるっ！

私は警戒しつつ後ろへ右手を廻し、竹刀の握りの部分を握った。いつでも竹刀を取り出せるんだから……変な事したら、すぐにこれを振りまわすんだからっ。

「なんだあ、手なんか後ろに廻して……もしかしてそのポーズで誘ってんのかあ？」

「近寄らないでよ……っ」

「……フツ、いいだろ別に？　っーか伊吹ちゃんと会えたのは都合がいいぜ。丁度俺も伊吹ちゃん達に用事があつたからさあ」

「よ、用事……？」

「ああ。悪いけど……伊吹ちゃんには俺に付き合ってもらっぜ？」

……嫌だ、そんなの嫌に決まっている。

私はこういうのが一番嫌い。しかも嫌いになつた理由は全部コイツ……っ。

永淵さえいなければアイツが悪く言われることも。私が今の私でいる必要も……っ！

「……っ！」

「さてと、んじゃあ来てもらおうか」

不敵な笑みを浮かべるワルな男。

私はそんな永淵の伸びてくる手を、空いていた左手で叩き払った。

「はア……?」

いかにも、意外な事が起こったという表情をしている永洵。

……バカじゃないの。普通よ普通、こんなのに連れ去りたい人なんていないわよ。

それに私だつて忘れたわけじゃない。永洵に何をされたか……忘れ  
るわけがない!

「嫌だつて言ってるでしょ。帰つてよ!」

「……ぐっ、こんのクソアマアツ!」

私が嫌といった瞬間、永洵は突然キレ始めた。

どんだけ短気なのよ……と思ったその時、永洵がその拳をいきなり  
振るってくる。

私は咄嗟に後ろへ跳躍し、ギリギリの所で永洵の一撃を避けた。

私はわけがわからなかった。突然殴られそうになった意味って……。

……いや、そんな事は後で考えればいいのよ。とにかく今は自分の  
身を守らないと。

元々右手で握っていた竹刀。私はそれを取り出し身構えようと

「させると思ってたのかよ。このクソアマがあっ!」

「きゃっ!」

気付けば左頬に激しい痛みを感じていた。口の中に血の味が充満し  
てゆく。

そんな中でようやく状況を整理できた。完全に身構える前に殴られ

てしまった……。

「い……痛い……」

当然だけど痛い……でも、それ以上に私は……っ。

何故だか次第に震えが止まらなくなる。マトモに身体が動かなくなつてゆく。

そして……脳裏にいつかの光景が蘇っていく。

……こ、怖いっ。怖いよ……っ。

「オラア！ さっきまでの勢いはどうしたんだよ？ テメエ、人の手え叩いてくれて痛エだろコラアツ！？ どおしてくれんだよ……マジでざけんじゃねえぞコラアツ！？」

「い、ぐ……！」

馬鹿みたいなセリフを吐き、永洌は私の鳩尾を握った拳に叩き込んでくる。

殴打を受け、横隔膜の動きが一瞬止まってしまったせいか、痛みだけではなく息苦しくなる。

マトモに呼吸が出来ない。痛みで思わず右目から一筋の雫が零れてしまう。

そうして怯んでいる間にも、永洌は大きく振り上げた拳を放つてくる。

「あ、あ！？」

拳は私のこめかみを直撃し、薙ぎ払われるように吹っ飛ばされてしまった……。

朦朧とする意識の中、気付けば私はアスファルトの上に寝転がって

いた。

……竹刀が、近いのに遠く見える。動こうにも満足に動けない……  
なによりもっ。

「へッ、そおーだよ最初っからそうやって寝てるよ。なあ？」

「う、く……いやっ……」

「ああ？ はは、聞こえねえなあオイ！ まあいいや。それより約束通り、伊吹ちゃん付き合ってもらうからなあ？」

いや……だ、やだよ……こんなやだよ……っ。

……助けて、誰か……助けてっ！

「さてと……伊吹ちゃん。そろそろ終わりにすつかあ……恨むんならテメエの幼馴染にでも恨みな……フッフ、ハハハハハ！」

……最後に聞こえた言葉。そして蹴りでも撃ち込まれたのか、脇腹へ感じる激痛。

この時から、私の意識は次第になくなっていった……。



第39話 / side story 伊吹編(後書き)

NO11

いこますみな

生駒純奈

イメージCV：竹達彩奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『けいおん!』 中野梓役

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』 高坂桐乃役

県立初芝高等学校2年3組在籍。

ジヨブ：オタク系変態陸上部員

性別：女性

年齢：16歳。

誕生日：7月29日生まれ

身長：154cm

体重：43kg

胸ランク：中(美)

趣味：ナギちゃんと一緒にいる事、漫画、アニメ鑑賞、ニヤ動

好きな物：ナギちゃん、アニメ、陸上、ナギちゃんが好きな物、ニ

ヤ動

嫌いな物：クソ介、その他ナギちゃんにちよっかいを出すもの

その他：圭介が房総丘陵トレイルラン会場で出会った天真爛漫な少女。

陸上部に所属しながらオタク趣味を持っている。

凧紗とは同じクラスであるものの、圭介と全く接点がなかった為、見た目と凧紗の友人であるという事は知っていても名前までは知らなかった。

低身長ながら二年ながら陸上部エースを務めている。

その実力は同じ部の先輩や男子を遙かに上回っている。  
本気を出す時に髪を括るといふギャルゲー要素アリ。  
凧紗の事は『ナギちゃん』と呼び慕っている。凧紗にも『すみんや  
ん』と呼ばれている。百合属性でナギちゃんが大好きで、ある誤解  
から圭介の事をやたらと敵視している。

第40話 / side story 部長編

学校が終わった後、ボクこと浅間英樹は帰路を歩いていた。ボクだけはなく妹の浅間あかりも一緒だ。ただし、あかりは不機嫌そうであった。

「はあ、どうして兄貴なんかと一緒に……っ」

「仕方ないだろう？ 家も同じなんだから」

「うう……少し離れろよな！」

「わかってるよ」

あかりはボクの事を嫌っている。

その理由はわからない。藤島君には『ボクが変態だから』だって言われている。

でも、男が変態なのは皆そうだろう。ボクだってナチュラルに変態なんだい。

それに、悲しい事実だけど現実の妹とは、自然と兄を嫌っていくもの。

ブラコンの妹だなんて、そんな夢のような妹は存在しないはずだろう。

仮にいたとしたら、その子はこの世界でもかなりの希少価値なはずだ。

「……あ、兄貴っ」

「ん、なんだい？」

「圭介って本当にガチホモだったりすんのかな……？」

……そういえば、藤島君ガチホモ説という根拠のない噂が最近校内で流れている。

あかりはその事が気になっているようだ。

確かに、あかりは藤島君と友達になれた。折角出来た友達の噂だ、気にならないはずがない。

「大丈夫だ。藤島君は決してガチではない」

「ほ、ホントか!？」

「嘘はつかない。彼は浅間家を救った人だから」

もちろんボクはわかっている。藤島君はボクの同人誌を喜んで受け取った。

だから、藤島君がガチホモなわけがない。仮にそうだとしても写真部の部員である事には変わりないんだ。個人的には嫌でも拒むつもりは全くない。

個人的な理由で部員を退部にする部長がいるとすれば、その人はただの馬鹿だろう。

「……うん、もうあたいは噂だけでは動かないんだからな！」

「いい心がけだね」

きつと藤島君も大喜びだろう。今のあかりなら彼でも好印象を持てるだろう。

問題は一つ……ブラコンになってくれないかな！

ボクだつて……ボクだつて実の妹に好かれたいんだよ！  
ヨスガるとまでは言わなくても、『にひひ、お兄ちゃん！』って懐  
かれないよ！

……まあ、ボクは今まで全然あかりに甘えられたことが

「お、アレ写真にあつたヤツじゃねえか？」

「おーおー、確かにそうだな」

「ん？」

ボクらの目の前に、何かを喋りながら突然現れたのはどこぞの不良  
あの灰色のズボン……確か古宇坂のどこかにある、白陵高校の連中  
じゃないだろうか？

でも、先頭に立っている金髪リーゼントだけ服装が違う。  
なんというか……短ランというヤツにドカンという太いズボン。い  
つの不良だよ……。

「アヒヤツ！ おいテメエら。初芝高校だろ？」

「そうだけど、何か用かい？」

「……！」

金髪リーゼントの問いにボクが訊き返すと、ボクの横であかりが身  
構える。

ボクも左右両方の拳を握っているが、不良達はケラケラと笑いな  
がボクらを目視している。

……そもそも、市内一の不良校の生徒が、一体ボクらのような一般  
人に何の用だろう？

まあ、おそらくはカツアゲだろう。しかしカツアゲをするのにこんな大人数を使うのか？

見た所、相手の人数は6人……普通に考えてこの人数はまずい。

「じゃあさ、テメエら写真部だったりするか？」

「……っ？ 確かに……ボクらは写真部だね」

「それがなんだよ。早く帰れよな！」

あ、あかり……元気なのはいいけど、そんな風に不良を挑発するのはマズイと思う。

ボクは穏便に事を済ませたい。絡まれた以上会話で事態を収束させたい。

だけど、どう考えでも相手はそんな雰囲気ではない。

「帰れ？ ケツ、無理な話だ」

「なんでだい？」

「俺らが初芝の坊ちゃんを相手すんのも、クソ大人げねえ事のような気がすっけどよお。永瀬さんの命令だからなあ……ちゅーわけだから、テメエら拉致るからな！」

金髪リーゼントの男が、パキポキと指の関節を鳴らしながらボクへと接近してくる。

どう考えても……会話をしましょって雰囲気ではない。

それに拉致だと。一体どういつつもりなのだ……コイツら？

とにかく、このままだと危ないぞ。隙を見て逃げるのかなさそうだ

「うあ!?!」

その時、あかりの叫び声がボクの耳にしつかりと入る。  
その声を聞き振り向くと、あかりは茶髪の不良にフェイスロックを  
かけられていた。

「あかり!?!」

「な、なにするんだよ! 離せよな!?!」

「アヒヤ! うるせえよおテメエ! 女は黙ってる!」

金髪レーザーは怒鳴りつけた瞬間、握った拳をあかりの腹部へ打  
ち込んだ。

ゴキゴキと嫌な音が聞こえ、あかりは口から紅い血液を吐きだす。  
そんな……吐血するほどの威力でぶん殴ったのか……?

「あつ! が……っ」

今の一撃のせい、ガクツと首の力が抜けたようにあかりは俯く。  
その後……あかりが動くことはなかった。腕もぶらんとぶら下がる  
のみである。  
何より一番腹立たいのは、あかりを殴りつけた金髪レーザーは  
笑顔である。

「アヒヤ……完全にねんねよ。さあて、次はテメエだぞお兄さん  
よお!」

「……あ、あかり……っ」

「あかりちゃんって名前なのかぁ。へへ……次はテメエがあかりちゃんみたいになる番だぜ？」

あかりを取り押さえている人を除く、不良達がボクを取り囲んでいく。

あかりを傷つけられたせいか、ボクは今非常に機嫌が悪い。

今にも冷静さを失ってしまいそうだ……い、いやダメだ。冷静になるんだ……ッ！

理性を失って暴れたって、こっちには何の得もない。でもあかりは助けたい……ッ！

逃げ道は……ない。あかりを助けた上で逃走するなんて、この状況では不可能に近い。

どうする……ボクは一体、こういう時にどう行動すれば？

「アツヒヤヒヤッ！ さあて、どうされてえかな。金髪のお坊ちゃん？」

「君も金髪だろう？」

「そおだな。俺ら似たモン同士じゃねえの？」

「ふざけるな！ ボクを……女の子さえ簡単に殴る不良と一緒にするな！」

「アヒヤヒヤッ！ テメエ何様だア？ 不良が全員女殴ると思ってるのかあ？」

そんな事はわかっている……。

すべての不良がそういうわけではない。とりあえずは知っている話



だ……でも。

「そうだね……失言だったね。でも少なくとも君は見境無しに女子も殴る、男として……いや、人間として最低の奴だ！」

「アツヒヤヒヤ！ カッコイイ〜！ よくそんなクセエセリフ吐けるなあキザな金髪さんよお？ んじゃあ、その最低野郎の俺っちを止めてみるよお？」

そう言いながら相手は拳を構える。

リーゼントのみならず、周りにいる仲間の不良まで皆拳を構え始めていた。

……どうしてもなのか。どうしても戦わなきゃ……いけないのか？

「あ………にきつ」

「っ！？ あ、あかり………？」

ボクはあかりの微かな声を聞き逃さなかった。

歯を食いしばる口からは血を流し、苦しそうに片目だけを開けたあかり。

失っていた意識を取り戻したのだろう。でも……意識があるほうが苦しそうに見える。

「あたいに……構うな……っ、早く倒せ………よな！」

あかりがボクに告げたこと      それは、さっさと周りの不良達を倒せという事だ。

そんな事言われても……ボクは喧嘩なんて生まれてこの方やった事がないんだぞ？

そんな弱々しいボクが、6人もの不良全てを倒せる……のか？

「だってよ？ 妹さんからやっちまえって言われてるけど、テメエ どうするよ？」

余裕そうな笑みを浮かべ、ボクを小馬鹿にするように嫌味な感じで告げるリーゼント。

……仕方ない。やれるだけやってみよう……。  
期待はしないで欲しい。ボクにとって殴り合いはこれが初めてだ。そう決意しボクも拳を構えた……。

「ペッ！」

「うっ！ め、目があっ!？」

刹那、突然何か生温かいのか冷たいのか微妙な、気持ちの悪い液体が目に入って来た。

物凄く染みる……目を潰されたボクは自分の目に両手を当てる。しかも その動作が大きな隙となってしまった。

「オラアッ！」

「ぐはっ！」

襟首を掴まれると、続いて感じたのは腹部の痛み。

ようやく視力が回復し確認をすると、リーゼントは膝蹴りをボクの腹に打ち込んでいたのだ。

なんて痛いんだ……っ、男にマトモに殴られたのもこれが初めてだ。ボクはあまりの痛みに、思わず叫んでしまいそうになった。しかもリーゼントの暴力はこれで終わりではなかった。

「オラオラまだ倒れるんじゃねえよ！」

「ツツツ！」

勢いよく顔面に打ち込まれた右ストレート。

ミシツという激しく嫌な音が響き、その上殴られた影響が脳まで揺さぶられる。

倒れそうになるも、なんとか踏ん張る事によって持ちこたえた。

しかし鼻が潰れるように痛む。思わず顔面を触ってみると、掌には真っ赤な血がべつとりと。

それだけではなく、ピチャピチャという音まで聞こえる。赤い雫がアスファルトへ落ちる音だ。

「アヒヤ！ ああゴメン！ 鼻の骨折れちまったかも？ でもまあ……イケメンなんだから、少しくらい顔の形変わっても問題ねえよな！」

「き、貴様あ…… あああああああつ！」

もうこうなれば自棄である。ボクはリーゼントの懐に入り込み、低い位置からのアップパーカットを仕掛けようとする。何度も漫画で見た戦法だ。

でも、現実リアルは二次元のように甘くできていない。

岩をも砕きそうな勢いのエルボーが、スイカを割るかのようにボクの後頭部を打ちつけた。

「がつ！ あ、くあ………っ？」

め、目まいが……意識が………ッ！

……ど、どろしてだ。漫画だと……カッコよく敵を倒せるのにつ！  
このまま……あかりを助けることだって出来るのに！

「やりましたね船木さん！」

「ヘッ……コイツはもうダメだな。よし、コイツらアジトに運ぶぞ」

「うっすー！」

「アヒヤヒヤ……後は、残りの連中を倒して、永渕さんが藤島をぶちのめすだけだな……」

藤島……だと。藤島君の名前がどうしてここで？

朦朧とする意識の中、その会話だけ上手く聞き取ることができた。  
そして、この時を最後にボクの記憶は一旦途切れていた……。

第40話・side story 部長編（後書き）

No12

黒木仁くろぎじん

イメージCV：日野聡（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『ゼロの使い魔』平賀才人役

『とある魔術の禁書目録』浜面仕上役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ：三馬鹿A

性別：男性

年齢：17歳。

誕生日：4月27日生まれ

身長：175cm

体重：59kg

趣味：伊吹にアプローチ、ゲーセンのゲームプレイ、音楽鑑賞

好きな物：伊吹、味噌ラーメン、ゲーム、音楽

嫌いな物：圭介、勉強、その他ダルいと思った事

その他：三馬鹿の一人、通称『黒やん』でいつも赤佐と大林とつるんでいる。

元ヤンキーで素行が悪く、風紗ら風紀委員にも目をつけられている。伊吹に惚れており何かとアプローチを仕掛けているが、いつも失敗している。

ちなみに当の伊吹本人は彼の好意を快く思っておらずかなり鬱陶しがっている。

圭介の事を敵視する発言が多い。というかかなり敵視している。

性格は超ハイテンションで自由気まま。とにかく楽しい事大好き。

基本的に遊び人。  
日常的に風紗と戦っているが、連敗中だ。

## 第41話 / 悪魔襲来

「それじゃあ今日はこれで終了な。気を付けて帰れよ！」

帰りのSHRも終わり、乙坂が書類か何かを持って教室を出ていく。それ以外にも三馬鹿や、大吾に重原も早々に教室を飛び出してゆく。結局、伊吹は昼休みに飛び出し以来帰ってくることはなかった。

完全に俺のせいだ。じゃなかったら他に何かあるってんだよ。とにかく俺が悪いんだ。早く伊吹に謝りたい……でも、メールを送っても無視。

電話をかけても出る気配がない。困った……アイツ、ちゃんと家にいるのかな？

「け、圭くん……」

「けーすけ様……っ」

「ん？ 暮葉に小坂か……」

複雑な表情を浮かべる二人が、まるで俺を心配するかのように俺の所にやってきた。

……やめてくれよ。俺のせいなのに俺を心配すんなよ……。

「圭くん……ごめんっ。あたしが変な提案しなかったら……」

「いや、小坂は悪くないだろ？」

「けーすけ様こそ思い詰めないで欲しいのです。わかってるのです……けーすけ様は伊吹さんを心配していたからっ」

確かに伊吹の事は心配した。嫌いなヤツと恋人ごっこなんて辛いだろうって。

でも、逃げ出しちゃったって事は違うのだろうか？

好かれてるとまでは行かなくても、別にそこまで嫌われているわけじゃないのか？

……流石に自惚れすぎだろうか。でも、間違いなく伊吹が飛び出したのは俺のせいだ。

とりあえずこの二人は俺を心配してくれている。それに対してはお礼を言わないと。

「ありがとな、二人とも」

「ううん。圭くんは友達だから」

「拙者も、落ち込んでいるけーすけ様なんて見たくないのです！」

「悪い、ホントにありがとう」

暮葉も小坂も、神レベルなくらいいい人すぎて目から汗が出そうである。

いや、でも男は泣くもんじゃないっばいし。学校で泣く事ほど恥な事はないぞ。

ここは我慢だ藤島圭介！とりあえず耐えとくんだ！

その後、小坂に別れを告げた俺達は帰路を歩いていた。

葵からメールがあり、今日は友達と用事があるから遅くなるらしい。アイツも友達多いからなあ、今日は誰だろうな。もしかしてあかり



達かな。

「けーすけ様！ この後どうされるのですかっ？」

「そうだな、とりあえず伊吹の家に行こうと思うんだ」

「もきゅ？ 伊吹さんの家にですか？」

「ああ。今日の事をちゃんと謝っておきたい」

謝ってどうにかなるとは限らない。今までなんとか生きていたとしても、今回それが成功するとは限らない。それでも俺は伊吹に謝りたい。悪いことをしたんだから謝るのは当然だ。

伊吹には土下座でもなんでもする。それくらいの気持ちで謝りたい。

「小坂さんも言っていたのですが、けーすけ様って伊吹さんの事になると本当に本気出しますよね」

「そうか？ ……でも、ふざける時以外は基本的には真面目だぞ」

特に伊吹はな。アイツはああ見えて結構弱いんだ。

それに昔の事もある。俺はもう二度と伊吹を傷つけない。

だから俺はアイツに対しては基本的には本気だ。

それでも……今回また伊吹を傷つけてしまった。しかも殆ど俺のせい……。

だから、せめて真面目に謝っておきたい。

その為にはまず伊吹を探さないとな。多分伊吹は自宅にいるハズだ。いや、仮に居なくてもいつかは伊吹が戻ってくるハズである。

順調に行けばそこで伊吹に謝れるハズ。そう、順調に行けば……

…。

けど……この日は全く順調にはいかなかった。

「……………よお、藤島」

道の向こう。ポケットに手を突っ込む、いかにも不良といった風貌の男が立っていた。

ダボタボのズボン。紫色の長袖シャツ。黄金のチェーン。坊主にラインアート。

そのどれもが奇抜で、そしてワルそうな雰囲気を持つ男……。

しかも、相手は久々に俺に会ったかのように挨拶をしてきたんだ。

………そういえばあの顔と髪型。俺もあの男をどこかで見たような気がする。

「もきゅ？ けーすけ様っ。お知り合いなのですか？」

ようやく立ち止まる男の顔を、俺はもう一度よく見てみる。

結構整った顔立ちだ。でも、見た目が怖いせいで女の子は近寄りそうにない……。

ていうかコイツ……やっぱり……ッ。

「な、永淵……っ!？」

思い出した。永淵……永淵晃だ。

俺が中学の時にぶっ飛ばした先輩……アイツの心を踏みにじり、俺が世間で悪党になってしまった原因の……ッ!

全てを思い出した瞬間、俺は本能で全身に少し力を入れ、それでもしっかりと身構える。

歯を食いしばり、強い眼差しを向けてみせる。俺は完全に永淵を警戒している。

「久しぶりに会ったと思いきや、伊吹ちゃんじゃなくて別な女の子が隣にいやがる……ンだあ、ソイツはもしかしてテメエの彼女かあ？」

「もきゅっ!?! か、かのっ、! 彼女っ!?!」

永淵のヤツ。どこをどう見れば俺と暮葉が恋人同士に見えるんだ。暮葉とはただの友達。しかも暮葉は仕事上俺の近くにいるだけなのに……。

でも、実際俺は暮葉にどう思われているんだろうか。

伊吹にどう思われているかと同じくらい、暮葉にどう思われているのかが気になって仕方がない……。

……とりあえず、彼女である事だけは否定しておこう。

「違うよ。コイツは俺の友達だ」

「もきゅ……友達っ」

ん、さっきまで驚いていたのに急に大人しくなった。どうしたんだ? まあ、それはともかく。事情を聞かねえとな。

「で、お前は一体こんな所で何やってんだよ。その制服白陵だろ? ここは白陵のテリトリーじゃねえだろ?」

県立白陵高校……明智の家の近所にある、筋金入りの不良が数多く通う不良校だ。

かつては太田高校という名前で、今の白陵同様荒れた学校だったら

しい。

その為かネット上で『バカ田高校』と馬鹿にされ、学校が存在する太田地区も『バカ田地区』と呼ばれようになってしまった。

そのせいか、地元住民から校名変更しろという署名が数多く寄せられ、結果現在の校名になる。

そういえば、たまに10年前の太田高校時代の制服、つまり学ランを着ているヤツも見かけるな。

俺は白陵の詳しい場所までは知らないけど、それでもこのあたりに白陵の生徒が現れるのは珍しい。

アイツらは黒木達曰く、普段はテリトリーからは出てこないらしい。という事は……今は通常モードってわけじゃない。テリトリーの外に出た奴らは何かを企んでいる。

「フツ……その言い方だと。俺らが普段テリトリーから出ねえ事を知ってたんな？」

「あたりまえだろ」

「そうかあ……」

永淵はポケットから煙草とライターを取り出し、煙草に火を付けてそれを吸い始めた。

オイオイ、アンター一応高校生でしょ。煙草吸うなよ……ん？

そういえば永淵って、俺が中1の時には3年だったよな。なんでまだ高校生なんだ？

……もしかして永淵、何度も留年<sup>タブ</sup>った？

「あの、けーすけ様！ あのお方けーすけ様も伊吹さんも知ってるんですけど、やっぱり知り合いなのですか？」

「まあ……会いたくもない知り合いだよ」

「もきゅ？ 会いたくもないって……？」

そっか、暮葉がここに来たのは先月だもんな。

永淵の事なんて知らなくて当然だ。ていうか、永淵なんてただの不良を知ってるヤツも数少ないだろう。

もちろん俺は不良じゃないぞ。でも、なんでアイツの事を知っているかと言つと……。

「そりゃあそうだろうなあ。テメエ、俺をぶん殴ったせいで悪モン扱いだもんなあ？」

「……っ！」

とても嫌味な顔で事実を言ってくる。クソ……滅茶苦茶ムカつく！  
……でもダメだ。あんな馬鹿野郎の挑発に乗ったら負けだ。

「ぶん殴ったつて……もしかして、あかりさんが言っていた事つて……！」

「……っ」

暮葉はあかりが襲ってきた時の事でも思い出したのだろうか。

あかりは確かに、俺の事を『暴力魔』だの『いきなり人を殴る悪魔』だと言っていた。

その事が事実だつて　　暮葉にバレちまった……。

でも、殴ったのには理由がある。そうせざるを得なかった……でも、殴ったのは事実だ。

やっぱりどんな理由があろうとも、ぶん殴るってのはいい事じゃない。

「いやあ最高に愉快だったぜ？ だってよお、俺はほぼ無実になっちまったんだからなあ！ テメエだけが悪モンになっしてくれて本当にありがてえよ」

「ぐっ……！」

いちいち癪に障る事を……ってダメだ。  
落ちつけ、挑発に乗ったら本当に永淵の思う壺だぞ。

「さて、そろそろ本題に行くとするか」

「……っ、何の用なんだよ？」

俺がそう問うと、相変わらず不敵な笑みを浮かべる永淵はフィンガースナップを行った。  
学ランとブレザーが入り混じった、筋金入りの不良達が何処からともなくゾロゾロと現れる。  
白陵の歴史を知らない人から見れば、まるで白陵が他校と組んでいるかのような光景だ。

「もきゅ！？ に、人数が増えたのですよ！？」

「やばいぞ……？」

木刀や棍棒、金属バット等と言った武器で武装している不良達。  
その人数は、少なく見積もっても10人を超えていた。

「拙者達をどうするつもりなのですか!？」

「俺の目的？ フッフ、そんな藤島への復讐に決まってるだろ？」

「復讐？」

「やられっぱなしじゃ気分悪いしよ……」

復讐って……やっぱり中学の時にぶっ飛ばした事か。

まだ根に持っていたのかよ……。

どう考えても、アレは永淵のせいだっていうのに。

「あと藤島よお。テメエがあの時最も大切していたヤツは、こっちの手にあるんだからな」

一瞬、永淵の言っている事の意味がわからなかった。

だが、その意味はすぐに分かる事になった。

突然十数名の不良達の中に割って入って来た、茶髪のボサボサ頭の男。

ソイツが汚い手で掴んでいるのは

「あ……な、なん……でだよ……っ」

「け、けーすけ様っ！ あ、あれ……っ！」

俺も暮気も驚きを隠せなかった。

同時に、久々に心の底から押さえる事が出来ない程の怒りを感じた。シヨックを受ける以前に全身に力が入って行く。次第に他の事を考えられなくなっていく。

何故なら……そこには

「おお怖えなあっ！ いいツラしてきたじゃんかよ……やつぱ、テ  
メエを怒らせるにはコレが一番だ」

「てめえ、どういう事だよ……？」

茶髪の男が手で掴んでいる白銀の髪。  
綺麗な髪の持ち主は美少女であった。

ただし瞳は閉ざされ、口元や鼻から紅き血が流血している。その上  
頬にも殴られたような跡がある。

……クソツタレ。この中の誰だよ……伊吹をボコボコにしたヤツは！

「どういう事って？ テメエには少し暴れてもらわねえと割に合わ  
ねえんだよ。伊吹ちゃんはよお……テメエを怒らせるには丁度いい  
道具なんだよ」

道具……？

道具だと。伊吹というたった一人の女の子を……道具扱いだあ？  
あの野郎オ。どういう事なんだよ……だってアイツは元々伊吹の事  
を  
！  
いや、そんな事はどうだっていい。それより伊吹を道具扱いしやが  
ったな……。

しかも伊吹を……あんなに傷つけやがって……ッ！

「てめえ……ッ！ 永ア瀧イイイイイイイイ！」

「け、けーすけ様っ！」

もう、俺は何も考えていなかった。



きつとまた悪い噂が流れる。下手をすれば停学や退学だってありえるのに……。

それでも俺は

この足を止める事はできなかった。

## 第41話 / 悪魔襲来（後書き）

NO13

あかさなおと

赤佐直人

イメージCV：細谷佳正（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『電波的な彼女』 桑沢ジユウ役

『会長はメイド様！』 黒崎龍之介役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ：三馬鹿B

性別：男性

年齢：17歳。

誕生日：4月6日生まれ

身長：185cm

体重：68kg

趣味：人助け、無駄に身体を鍛える事、ツーリング、バイクいじり

好きな物：焼き鳥、女の子、エロい事、バイク

嫌いな物：勉強、ダルい事、先生

その他：三馬鹿の一人、通称『チヨクト』でいつも黒木と大林とつるんでいる。

三馬鹿の中でもわりと常識人で、基本的に黒木の暴走を止める掛かり。

ただしとにかくエロいのが好きな変態でやはり嫌われ者。

人助けが好きみたいで、かつていじめられたいた韓国人留学生を助けたらしい。

ただ、その時韓国人に敬意をこめて『チヨクトさん』と呼ば、しかもそこを黒木に聞かれ、いつのまにかあだ名が変なあだ名がついて

しまったらしい。

自称関西出身らしいが、喋っている言葉はエセ関西弁。

黒木とは中学時代からの付き合い、同じく元ヤンキーである。ただし、ガタイはいいけど腕っ節が強いかどうかは不明。

## 第42話 涙色の夕日

「うおおおおおおおおおっ！」

感情任せに何の考えも持たず、ただ只管駆けるのみの俺。

永洩との距離は5m。ここから一気に跳躍して間合いを詰める。

……とにかく倒す。伊吹を傷つけたクソ野郎を潰す！

その怒りの感情のみが俺の頭と心を支配していた。

「永洩イイイイイイイイツ！」

力の入れ過ぎで拳が痛いほど、俺はしっかりと右の拳を握った。

右足でアスファルトを蹴りあげ、右拳をミサイル発射前の様に構える。

永洩の懐に入り込み、その勢いでボディーパーを仕掛けようとした。

だが、永洩は殴られそうなのにも関わらず、唇の端を歪め。

一言。

「ダメだなあ……」

あざ笑うかのように放たれた一言。

それを言った時、俺は既に拳を突き出し攻撃を仕掛けていた。

だが、当たったハズの拳には何の手応えもない。それどころか

「がッは……っ!？」

何かか鳩尾へ突き上げて来た。

その瞬間俺の呼吸が止まり、中途半端な体勢であった為かバランスを崩してしまう。

幸い、そのまま地面へ転ぶという事はなかった。

「ゲホツ！ ゲホツ！」

クソツ……なんだ？

痛い。まるで鳩尾をぶん殴られたみたいだ。

永淵も周囲の不良達もケラケラ笑っている。茶髪の手には掴まれた伊吹は今だ眠っている。

そして、無様に攻撃を受けた俺を見ていた暮葉は。

「けーすけ様！」

いつもの事だけど、俺の名前を腹の底から出すような大声で叫んでいた。

暮葉のけーすけ様も、最初は違和感全開だったけど聞きなれたな……。

つて、今はそんな事を思っている場合じゃねえ。

全く……身体が丈夫でよかった。もう鳩尾を殴られた痛みは完全に消えている。

即ち……俺はもういつでも次の攻撃に移れる。

「ああ遅いつ。テメエそんなに弱かったっけ？」

「ぐっ………！」

「スマン、俺が強くなり過ぎただけなのかもなあ？ フハハッ！」

「うう……！」

確かにオカシイぜ。中学の時はこんなハズじゃなかった。確かに永洌は強かったよ。でもここまで差がある程ではなかったはずだ。

でも今はどうだろう。永洌は単なるヤンキーとは言い難い程の強さだ。

痛みが完全に消えるの時間が、ただの不良に殴られた時よりも長かった……。

それはつまり、アイツが滅茶苦茶強いつて証拠だ！

「さあてどうする藤島あ？ あ、そうそう。伊吹ちゃんの身柄は俺らの手にある事を忘れんなよ。やろうと思えばいつでもテメエよりも先に、この伊吹ちゃんをぶん殴る事ができるんだからなあ？」

「てんめえ……っ！」

「熱くなんなよ？ テメエが今動くとお……伊吹ちゃんにこんな事やっちまうぞコラアツ！」

永洌は信じられない事をしやがった。

だって、アイツは気絶している上に取り押さえられている、ボロボロの伊吹をさらに何発も殴りつけたのだ。顔面ではなく身体を殴っていた。だから顔面が血だらけになる事はなかった。

でも……永洌が無抵抗な伊吹を殴りまくったのは事実だ。

「や、やめてください！ それ以上は」

「ハッ！ オイオイ藤島ア！ テメエの友達が言ってるぜ？ なあどうする？ 伊吹ちゃんの顔が変わっちまう覚悟で俺と戦うか？」

「アア!？」

クソツタレ……!!

なんなんだよ永渕のヤツ。強い癖に小者くさい真似をしやがって! さらに永渕は再びフィンガースナップを行う。

すると、今度は永渕ではなく、先程まで待機していた不良達が一歩ずつ俺らに近付いてきた。

「な、なんだ……ッ!？」

「ゲームだぜ藤島ア? テメエ何発耐えられっかな？」

「卑怯な手えばっかり使いやがって……ッ!

「フハハ! 喧嘩に卑怯もクソもあるかよ。オラアテメエら! 藤島も藤島の友達も好きにやっていい。ブツ殺しても構わねえぞッ!」

永渕が怒鳴りつけるように命令をする。

「いくぞコラアアッ!」

「うっしやあ最高のタイムじゃあっ!」

「あの子可愛いぜえ……イタダキマアアアアス!」

「藤島アアア死ねやああああっ!」

刹那、一斉に10人を超える不良達が襲いかかってきたのである。いくら身体が丈夫でも、所詮元々の身体能力は人間なんだ。

念じながら誰かとキスでもしない限り、俺は元の弱い人間のままた

んだ。

リミッターがかかっている、こんな状態じゃあこの人数相手に出来るかわからねえ！

伊吹は捕らわれ、俺達は大勢の敵に囲まれ……まさに絶体絶命のピンチ。

いよいよ、目前に迫った不良達が一斉に攻撃を加えてくる。その直前で。

「けーすけ様っ！」

「うおっ!?!」

何故だろう。いつこんなフラグを立てたんだろう？

ピンチの中、俺は思わずそんな事を考えてしまった。

何故なら、俺は暮葉にぎゅっと可愛らしく抱きつかれたからである。

「しばらく間、我慢していて欲しいのです!」

「え？ ちょ、暮葉?」

「~~~~っ……っぎゅっ!」

踏ん張るような声をあげたその瞬間。

叩きつけられるような暴風が下から吹き上げ。

轟!という音が響いたとわかった時。俺達は既に上空高くに舞い上がっていたのだ。

……え〜っつと、これは……。

「エエエエエエエエツ!?!」



どどど、どついう事なんじゃコレは!?

永瀧達が点に見えるぞオイ。大体どうして暮葉に抱きつかれた瞬間、俺達空を飛んでいるんだよ!

「け、けーすけ様暴れないでくださいっ!」

「仕方ねえだろ! つーかお前、何やったんだよ!?!」

「飛行術式なのです。簡単に言えば舞空術みたいなものなのです」

「とらゴンボールか! つーか永瀧達の前で魔法使ってもいいのかわよ!?!」

「大丈夫! 上昇は一瞬の間なので多分あの人たちに目視されてないのです!」

だ、だからってなあ……こんな魔法で。

ていつか暮葉って魔法が苦手だったんじゃ……?

飛行術式なんてカッコいい事を言っているが、果たして大丈夫なのだろうか?

「なあ暮葉。お前魔法苦手じゃなかったっけ?」

「もきゅ? に、苦手とは失敬な!? ちょっと難しいだけなのですー!」

……もう、言い訳乙としか言いようがないわ。

「で、この後どうするんだよ?」

「……そ、そのっ。着地がちょっと乱暴になるのですけど……か、覚悟してくださいね！」

「はぁ？ ら、乱暴？」

それってどういう意味なんだろう？

……だが、この直後俺は身をもって経験するのである。

暮葉の言う乱暴な着地という、恐ろしきモノを。

「……！」

その時、暮葉を俺を抱く手の左手のみした。

片手だけになったせいか、腕の力をさらに強くし俺は一層締め付けられる。

うおっ！く、暮葉の胸が当たる。暮葉の貧乳は貧乳だがそれでも柔らかい。

なんて事を考えていると、暮葉は右手を背中に廻し服の中から何かを取り出す。

暮葉さん、その……それってもしかして。

「ちよ！？ 一期一振！」

「一期一振いちいっぺんの力を借りて着地するのです！」

調子よく暮葉が言う。

刹那、暮葉はどこぞの悟空が如意棒をぶん回すように、一期一振を右手で大胆にぶん回し始める。

気分は輸送ヘリであるCH-47チヌークに吊るされるが、何かのミスで降りれなくなった兵隊さん。

確かに乱暴だ！次第に地面が迫るもの……オイオイ速度早過ぎだ

る！

絶対一期一振あんまり役に立ってない。ただ落下しているだけな気がするぞ！

「衝撃に備えてなのです！」

「んな無茶なっ！？」

アホかよ暮葉さん！

いくらなんでも無理がある。この高さからこの勢いで落下したら…

…。

へ、下手すりゃ死亡だ。衝撃に備えてなんて言われたって限度があるだろ！

「ぎゃああああああああああああっ！」

お、オワタ。人生オワタ！

このまま落下してこの世とオサラバじゃああああああっ！

……と思っただが、ギリギリの所で一期一振が効果を発揮したのか、地面と激しい接吻を交わす前に俺達は、僅かに1mほど空中に浮いた状態で停止したのである。た、助かった……のか？

その後、1mをジャンプするように着地し、俺は徐々に陸地を踏んだような錯覚に陥ったのだ。

## 第42話 涙色の夕日（後書き）

No14

おおはやしゆうた

大林勇太

イメージCV：代永翼（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『おおきく振りかぶって』三橋廉役

『いちばんうしろの大魔王』三輪ヒロシ役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ：三馬鹿C

性別：男性

年齢：16歳。

誕生日：2月26日生まれ

身長：155cm

体重：48kg

趣味：サッカー、ゲーム、彼女とイチャイチャ、あと秘密の趣味が

……

好きな物：サッカー、彼女、カミソリ

嫌いな物：背が高くて生意気な人、勉強、先生

その他：三馬鹿の一人、身長155cmと男子としては小柄な体躯の持ち主。

サッカー一筋のスポーツ少年だったらしく、高校に入ってからだらけ初めて現在はやめているが、その時の名残で今も坊主頭。リア充らしい。

元サッカー部員でしかも天才と呼ばれていただけに、脅威的な体力と脚力を誇り現在でもサッカーの技術は現役部員にも勝るほど。また足も陸上部員より少し速い。

ただし所詮スポーツバカなので頭は悪く、テストはいつも赤点を取っている。  
三馬鹿の中で唯一元ヤンではない存在だ。あと意外な趣味もあるらしい。

### 第43話 / 圭介の過去

「アホかお前はあああああつ！」

誰もいないハズの明智には人影が二人。それは俺と暮葉であった。そんな人気のない空き地で、俺は暮葉に思いつきりのツッコミを入れていた。

「うううう、ごめんなさいけーすけ様っ！　せ、拙者飛行はできても着地は苦手なのです！」

「やっぱり魔法苦手なんじゃねえかつ！」

「もきゅー!?　し、失敬な！　難しいだけだと何度も言ってるのですよー！」

「なあ……いい加減自分の弱点認めないか？　その方が楽だぞ」

「と、とにかく助かったのですから！　もういいじゃないですかっ！」

まあ確かに俺達は助かったけど……。その代わり、一番大切な存在はまだ永淵達の手に移ったままなのである。

そんなんでは全く意味がない。俺達だけが助かったって何の意味もない。

ただ、俺達が地獄を見るまでの時間が少し伸びただけである。

「……クソッ！」

「もきゆう、けーすけ様……」

次第に腹が立つてきた。

当然永淵に対してもあるが、一番腹が立つ相手はあの時伊吹を助けられなかった俺自身だ……。

俺がもつと強ければ伊吹を助けられた。いや、こんな事未然に防げたはずだ。

俺はまた……またしても伊吹を守る事ができなかった。

伊吹は二度も永淵に襲われちまった。それもこれも……全部俺が弱かったせいだ。

……でも、いつまでも落ち込んでいる場合じゃねえのはわかっている。

だから俺は、今からでも伊吹を

！

「暮葉！ お前確か魔法か何かで、相手の魔力を感じ取れるんだっ  
たよな？」

「は、はい！ 初歩的な魔法なので拙者でもそれは使いこなせるの  
ですっ」

「だったら、それを使って永淵の居場所を調べてくれ」

「な、永淵さんってさっきの……？ ど、どうするつもりなのか！  
か！」

「決まってるんだろ！ 今から行って永淵をぶっ飛ばす。そんでもっ  
て伊吹を助けるんだよ！」

未然に防ぐことはできず、既に事件は起こってしまった。

だったらやる事は一つしかない。さつさとソレを解決しちまう事だ。とにかく、永淵さえ倒せば俺はどうなるかは知らないけど、伊吹は助かるんだ。

中学の時だっつてそうだったじゃねえか……。

「……あの、けーすけ様っ！」

「ん？」

「永淵さんは、どうしてけーすけ様と伊吹さんを……？」

不安げな顔で真相に迫ろうとする暮葉。どうしよう、ちゃんと説明すべきなんだろうか？

出来ればアレは1mmたりとも思い出したくない。

……永淵が現れた時点で全てを鮮明に思い出しちまったけど。

まあ、もう暮葉の目の前であんな事があつたんだ。上手く誤魔化す方法さえ思いつかない。

どのみち永淵の所へは行かなきゃならない。だったら先に説明しておこう。

「……暮葉、教えてやる」

「もきゅ、何をですか？」

「こうなっちまった原因。過去の話だよ……」



人間っていうのは本当に色々な奴がいる。正義感あるヤツもいれば可愛いヤツもいる。

俺みたいに馬鹿なヤツもいれば、テストはいつも95点以上の天才だって存在している。

みんなそれぞれがこの現実で努力をして、それぞれの生活を営んでいる……。

でも……中には努力もしないで、ただ他人の生活をぶち壊す連中がいる。

俺がその事を学んだのは中学1年の時だった。

圭介、今日どっか行こうぜ！

おう！　つーか500円しか持ってねえから安上がりで済む所な。

俺も300円しかねえし。金使わねえ所でヨロ！

……当時の俺はそこそこ友達も多かった。

あたりまえのように友達がいて、クラスメイトの女子の殆どとも会話する事ができて。

そうだな……あの時に頑張っていれば、初彼女が出来たのかもしれない。

当時は家に親父は仕事でいなくても母親はいたし、普通の中学生としての生活をそこそ楽しんでいた気がする。伊吹もその頃までは今とは違って、結構素直な子だったハズだ。

そう、今でさえモテモテなのに、当時は素直だったから余計にモテ

モテだったんだ。伊吹は……。別のクラスの野郎共とかが、伊吹目当てで俺らのクラスにやってくる程であった。

その中の一人にアイツがいたんだよ。永洌晃つてのが……。

ねえねえ、国宗伊吹さんってアンタだよな？ 今日さ、俺と一緒に遊びにいかねえ？

そんな軽いノリで教室にやってきた、当時3年の先輩だった永洌晃。見た目は今よりも若々しいが、それほど変わっているわけではない。その頃から永洌には悪い噂がいつぱいであった。

例えば、ちよつとメンチを切ってきたチンピラ5人を即日整形外科送りにしたり、自分の前を横切ったサラリーマンをボコボコにして川に投げ捨てる等。とにかくやる事は極悪人そのものである。

ただ、容姿が端整である事と強い事とみんな中二病だった事が理由なのだろう。

一部の女子にはそこそこの人気があったらしい。

どうやら永洌は伊吹が好きだったらしいが、当然そんなヤツを伊吹が好きになるわけなかった。

ある日、いきなり永洌は仲間の不良を率いて、俺らの教室にやってきたんだ。

伊吹ちゃん！ 好きだ、俺と付き合ってくれ！

堂々と、俺らの前での告白……。

正直、永洌は結構根性のあるヤツなんだなと思ったよ。だけど、伊吹の答えは。

私、好きな人いるから。ごめんなさい。

当然N.Oであった。俺としては、そんな事よりもあの時の好きな人が誰なのか気になるけど……。

誰なんだろう。でも伊吹に彼氏が出来た気配なんてないし、片思いで終わったんだらうか。

それはともかく、ここまではごく普通だった。永渕晃の短い恋が終わっただけ……だったハズである。

でも、それから一週間後の事であった。

放課後、水飲み場の近くで俺は男友達3人とゲームの話で盛り上がっていた。

そんな時、小学校の頃からの付き合いで伊吹の親友だった、小坂が俺の所にやってきたのだ。

それも、いつもとは違う血相を変えて……。

ん、どうした小坂？

け、圭くん助けて！ い、伊吹が……伊吹がつ！

ちょ、落ちつけよ！ 一体どうしたんだよ？

伊吹が……永渕に拉致られた！

はあっ!？

嘘だと信じたい事態が起こってしまった。

小坂と伊吹は下校中であつたが、その途中に永渕ら不良グループに襲われたらしい。

小坂は隙を見てなんとか逃げたようであるが、伊吹が永渕らに捕まってしまった。

告白を断られた腹いせか、永洌は伊吹をいきなり拉致ったそうなのである。  
場所を聞く、数分前に体育館倉庫前で嫌がる伊吹を見たのが最後らしい。

俺も中1だったし、その話を聞いた時点でマズいと思った。  
それと同時に、たかが振られただけでそんな事をする永洌に対し、俺は怒りを覚えた。

あんのクソ野郎っ！

け、圭くんっ！

おい圭介っ！？

やべっ！ だ、誰か先生呼べっ！

俺を止める声が聞こえるも、カッとなった俺にそんな声など届くはずがない。

今思えばあの時の俺は子供だった。子供だけに短気であった……。まず俺が向かった先はグラウンド、野球部だった友達に俺は。

谷口！ バット貸してくれっ！

え、な………なんで？

いいから！ 後で必ず返すから！

ちょ！ 圭介っ！？

友達から野球部のバットを強引に借りた。

そのバットを片手に俺は体育館倉庫で突撃をかける

アア？　なんだテメエ！？

何見てんだコラアツ！？

倉庫に入ると、いきなり不良達が俺を怒鳴りつけてきたのだ。たかが倉庫に入っただけ。あそこは不良のたまり場ではないのに。そして不良の他には、マットに倒れ込み涙を流す伊吹の姿があった……。

伊吹の服装は乱れ、幼さの残るブラジャーも外されかけていた。

チツ、これからお楽しみだったのによ……。

これからお楽しみ……当時の俺でも、その言葉の意味くらいは理解出来た。

あと少し到着が遅かったら、本当に取り返しのつかない事になっていた。

伊吹の初めては、本人の望まない悲しい形で奪われる所だった。ギリギリだったけど間に合ってたよ……。

そう思ったが、それと同時に永渕に対する怒りがさらにこみ上げてくる。

伊吹にひどい事しやがって……ムカつくんだよテメエら！

そう言った瞬間から、伊吹のみならず俺まで崩壊し始めたのである。不良グループの一人が、いきなり俺に攻撃を仕掛けて仕掛けてきたのだ。

一発殴られると2人3人……次々と不良が俺をぶん殴ってくる。

……俺も黙ってはいなかった。数発ぶん殴られた後、俺はついに反

撃を初めてしまったのである。

本格的な不良との喧嘩は初めてだったが、意外となんとかなるものだ。

散々ぶん殴られはしたものの、元々身体が頑丈なのであまりダメージを受けなかったんだ。

数分の戦闘の後、永洵以外の3人を倒してしまった俺。

続いている相手は当然永洵。永洵は怒り狂ったように殴りかかってきたのである。

永洵は滅茶苦茶強かった。始終圧倒されまくったけど……それでも感情任せに戦ってなんとか勝てた。

気付いた時にはもう、永洵も俺も血だらけであった。

特に俺の血は自分の血だけではなかっただろう。きっと、永洵の血も身体についていたはずだ。

体育館倉庫には血だらけの不良達4人。恐怖のあまり声すら出せない少女が一人。

そして……金属バットを持つ血だらけの俺の姿があった……。

当然、この事は暴力事件として問題にされた。

しかも伊吹をレイプしようとした永洵ではなく、助けようとした俺が悪い方向で話が流れて行く。

親呼び出しを喰らい、担任に校長など……いろんな人に全部俺が悪いと怒鳴られた。

君のようなダメ人間が将来、事件を起こすんだ。

お前には失望したよ。そんな底辺なヤツだったとはな……。

誰も俺の話を聞いてくれなかった……。

伊吹はショックで何も語ろうとしない。家族は話を聞いてくれたが学校側が信じてくれない。

そんなわけで俺は……二週間の家庭謹慎を食らってしまったのである。

小坂からは『伊吹を助けてくれてありがとう』って、そう言われた。小坂曰く、伊吹も感謝はしていたらしい。何も言われなかったけど……。

そして二週間後、俺は久しぶりに学校へ行った。

いつものように友達へ挨拶をしたが、帰って来たのはぎこちない返事。

女子からは露骨に避けられるし、何かがおかしイと思った。すると、小坂がこんな事を言っ来て来たんだ。

圭くん……沢山悪い噂が流れてるけど……大丈夫？

わ、悪い噂……？

それは、俺が『理由もなく先輩を半殺しにした』だとか、『男をボコッて女子をレイプした』だとか、そんなような噂である。

前者は確かに永淵をボコボコにした。伊吹だってあと少いで危険だった。

……でも、俺は伊吹に何もしていない。レイプをしようとしていたのは永淵だ。

しかも、それはギリギリの所でなんとか防いだ事である。

だけど……いつのまにか全てが俺のせいになっていた。その上伊吹の態度も……。

べ、別に感謝なんかしてないわよ！

こんな感じで今まではあったかもしれない、デレという要素が消えてしまった。

この頃から、伊吹は“ツツパリ伊吹ちゃん”になってしまったのである。

もちろん思ったよ。あの件で嫌われたなって……それでも伊吹は友達でいてくれたけど。

今まで友達だったヤツとも、あの一件以来殆ど話をしていない。

皆避けるから……いや、俺も皆を避けていた。

証人だっているんだし、頑張れば俺の汚名だって消えるハズである。それでも俺は皆を避けた。正直このままでもいいって思ったのである。

俺さえ悪なら、それで全てが解決する。だったらそれでもいいって思うようになってきた……。

……とにかくこの日以降、俺は自分の事がどうでもよくなった。

それこそ。俺が見つけた誰かを救う方法である。

……そして結局、俺は高校に入るまで、友達なんていう存在はたったの2人しかいなかった。

伊吹と小坂。その二人だけが俺の友達だった。

他の奴らは皆俺を避ける。いや、一部は近寄ってくる連中がいたな……。

喧嘩無敗と言われていた永瀧を倒したせいだろう。どこぞの不良が俺に喧嘩を売ってくるのだ。

俺もストレスが溜まっていたのだろう。馬鹿な事に鬱憤を晴らすべく、喧嘩を買っていた……。

不良達を相手にしているうちにも、どんどん俺の悪い噂が広まり……



…。  
学校での俺の扱いはまさしく、“孤独がクールでカッコいいと思っ  
ている痛いヤンキー”だった。

不良じゃねえのに……好きでこんなことになってるわけじゃねえの  
に。

今いる友達は全員、高校に入ってからであつた奴ら。つまりあの事  
件を知らない奴らばかりである。

それでも、不良に絡まれる事はなくなったが、同じ中学出身のヤツ  
に時々冷たい視線で見られる。

それは多分、今後も変わる事はないだろう。もういいんだ……どう  
でも。

とにかく俺はその事を忘れようとした。伊吹にも思い出させないよ  
うに努力をしていた。

それから、どんな事があつても伊吹の笑顔を守ろうとしたんだ……。

でも、結局守る事ができなかった。

俺が弱かったせいで……また伊吹が永淵の手に……っ！

### 第43話 / 圭介の過去（後書き）

NO15

浅間英樹

あさまひでき

イメージCV：杉田智和（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『銀魂』坂田銀時役

『涼宮ハルヒの憂鬱』キョン役

県立初芝高等学校3年1組在籍。

ジヨブ：写真部の変態部長

性別：男性

年齢：18歳。

誕生日：4月10日生まれ

身長：181cm

体重：64kg

趣味：同人誌、アニメ鑑賞、エロゲープレイ、写真撮影

好きな物：写真部、カメラ、エロいもの、家族（特にあかり）、部長という地位

嫌いな物：妹に無理をさせる事、荒事、ゴキブリ、熟女（母は除く）

その他：写真部の現部長で高校3年、圭介や暮葉の先輩にあたる人物。

金髪で背も高くてイケメンだがデリカシーがなく、その上大吾もビツクリなオタクである。

その為千早をはじめとした写真部の部員、周囲の女子からの評判はすごい悪い。

勧誘の際、何故か北方projectのエロ同人誌を活用。ちなみに圭介はまんまと釣られた。

基本的にふざけた男だが、部の事を誰よりも考えている。

妹であるあかりには殆ど無視され、仮に会話したとしても暴言を吐かれる程嫌われている。

だが、妹を含む家族想いの人であり、圭介に言わせれば変態である事を除けばいいお兄ちゃんである。

18歳なので合法的にエロゲーを購入できる。

#### 第44話 雨の中の……

「そんな……みんなひどいのです！ 普通は永洌さんも悪く言われるハズなのです！」

「普通……ならな」

でも、普通じゃなかったんだよ。ウチの学校は……。

永洌は問題児だったけど、アイツが問題児なのは元々の話だ。

それに、噂じゃあ永洌は基本放置の方針だったらしい。

学校側としても、あの暴れ者を相手にはしたくなかったんだろうな。けれど、普通に過ごしていた俺となれば別だ。普通の人が永洌がやるような問題行動を起こせば、問題児とは違って激しく怒られるに決まっているだろう。

増してや、やられたのは永洌だ。重傷だったらしいのでしばらく永洌は暴れられない。

学校一の問題児である永洌が暴れないのは、学校側としても非常に好都合なのだ。

つまり……俺は学校の都合の為に、全ての責任を押しつけられたわけである。

……確かに、伊吹を助ける為とは言え、あんな事をやったのはマズいと思う。

それは俺も悪いと思っている。でも……俺の持つ責任とはそれ以上のものであった。

「……拙者は、納得いかないのです！ どうしていつの間にもけ様が悪い事になってるのですか！？ どうして学校側はけーすけ様だけに制裁を加えたのですか！」

「仕方ねえよ……世の中そういうモンなんだから」

だから永淵とは関わりたくない。永淵が動けないのは学校にとって好都合。

そういう理由なんだよ……でも、暮葉に説明したって無駄だよな。別にこんな事実を今更言っただって、ウソ乙と笑われるのが関の山だ。それに……俺一人で全てが丸く収まるんなら、安い犠牲だろ？

「拙者は……わからないのです。けーすけ様ばかりが悪人にされる理由が、全然わからないのです！」

「俺は悪人だぞ？ 永淵をぶん殴ったし、売られた喧嘩は買っていた」

「で、でも！ それも伊吹さんの為なのですよね。だったらいいじゃないですか！」

暮葉って本当にいい子だよな。

こんな馬鹿みたいな俺の味方までするって……優しすぎるだろ。ひよっとすると、仕事柄で味方せざるを得ないだけなのかもしれないけど。

それでも俺は、この時暮葉は本当にいい子だと思ったのである。

「ありがとな、暮葉……」

「もきゅ、あたりまえなのですよ。けーすけ様が極悪人なわけないのですよっ」

そう言ってくれる人がいるだけで、俺はもう幸せな気分だ。

……でも、例え暮葉がそう言っているとしても、世間での俺の評価が変わる事なんてないだろう。  
俺はいつまで経っても“暴力魔”なんだから……。  
もう、今更光の道に帰るつもりなんて全くねえ。  
とつくに昔に決めただよ。元々評価はこれ以上下がらないくらい最悪なんだし、誰かを救うためなら俺が泥を被ったっていいってよ。だから今回も

「よし、行くぞ暮葉。永淵の魔力を感じ取ってくれ」

「もきゅ……わかりました！ 拙者もけーすけ様をしっかりとサポート  
ト護衛するのです！」

サポート護衛つて、随分無理やりくつつけたな。

まあいい。これで永淵のクソ野郎がどこにいるかがわかる。  
待つてる伊吹……絶対に助け出して見せるから！

「おっ、いやがったぞ！」

「間違いないで、藤島や！」

「藤島あゝ！」

オイオイ嘘だろ……？

まさか、永淵達のほうから攻めてきたつてののかよ。アイツらどんだ  
け俺を潰すのに必死なんだ！

自業自得でああなったのに、ここまで必死に復讐しようとするもの  
なのか？

……でも、向こうから来てくれたのは正直ありがたい。

足代が浮いたからな。ここで永淵達を倒して伊吹を救ってみせる！

「永淵いつ！」

「アア？ 永淵見たいな馬鹿と一緒にすんじゃねえよ。俺は黒木だ」

「え？」

「もきゅ？ けーすけ様……この人達って！」

この空き地に現れたのは永淵達ではなかった。

いかにも馬鹿っぽい金髪のピアス男、関西弁な長身のセミロングパーマ男、低身長坊主男。

3人とも、ちよつとだけ怪我しているような気がするけど……コイツらは確か。

「「さ、三馬鹿！？」」

間違いない。この超おバカっぽい見た目の人達……ああ三馬鹿だよ。素晴らしき三馬鹿じゃないか！

思わず俺と暮葉の声がハモッてしまったよ。

まあ、アイツらがそれほど三馬鹿という名で有名になっている証拠だな。

「コラアーツ！ 折角の出番なのに三馬鹿言っつなっ！」

「そーやそーやー！」

「絶対名前覚えてないから三馬鹿って一纏めにしたんだろ！？」

「ソ、ソннаコトナイノデスヨ！？」

「そうそう！ 黒木に赤佐に小林だろ？」

「僕は大林だ！ いい加減名前とこの坊主頭覚えやがれっ！」

俺がそう言うと、小林……じゃなかった。大林がキレ気味で自分の名前を叫んだ。

小林じゃなかったのか。スマン、流石に名前を間違えるのは失礼だった。

それにしても脱力するなあ。なんでこれから永淵をぶちのめしに行こうとした所で三馬鹿なんだよ。

一気にテンションが下がってしまった……いや待て。三馬鹿って結構使えるかもしれないぞ？

しかも、黒木に至っては永淵の事も知っているみたいだ。

「っで、お前ら一体何の用なんだ？」

「チツ、伊吹ちゃんを守れなかったヤツが偉そうな口聞くんじゃねえっ」

「……っ！」

な、なんで黒木がそれを知ってたんだよ……？

「お、おい黒やん！ そんな事言ったら藤島に悪いだろっ！」

「そうや！ 少し黒やんは黙れ！」

「うっせえぞハゲにチヨクト！ 事実だろおーが！」



「誰がハゲだコラアツ！」

「チヨクトヤと？ ええ加減にせいや！」

……あのー、なんでコイツらが喧嘩してるんだろつ。

ていうか、真面目にコイツらは何の用でここに来たんだよ？

俺も暮葉も、3人の醜い争いを呆然と見ていた。そんな中暮葉が勇氣を出し。

「いい加減にするのです！ 全然話が進まないのですよ！」

「おっ」

「アカンなあ、黒やんのせいやな」

「そうだな、殆ど黒木のせいだよな」

「ざけんなよテメエら！」

「まあまあ落ちつこうぜ？ そないな事よりも本題を藤島達に話さないとな」

「本題？ やっぱ何か用なのか？」

俺がそう問うと、赤佐が黒木や大林を置いて一步前に出てきた。

どうやら用事というものは、黒木ではなく赤佐が説明するらしい。

まあ確かに、赤佐は三馬鹿の中でもわりと常識人なほうではあるけど。

「さつき、俺ら白陵のヤツらに絡まれたんや。その中には永漕や国

宗の姿もあつたで？」

「ほ、ホントなのですか!？」

「ああ、大人数なだけに疲れたわ」

そっか……コイツらの傷は喧嘩の傷だったのか。

俺がここで暮葉に過去話をしている間に、アイツら三馬鹿まで襲っていたんだな。

……でもおかしいだろ。俺らの件に三馬鹿は一切関係がなかったはず。

だったらなんで、三馬鹿は白陵の連中に絡まれちまったんだよ？

「赤佐、アイツら何か言っていたか？」

白陵が三馬鹿に絡んだ理由が知りたい。俺は赤佐にそんな質問を試してみた。

「それが本題や。藤島に伝えて欲しいって永淵が言っていたんや」

「何をだよ？」

「明日午後3時までには、白陵のテリトリーに來いちうわけや。來ないとその他の人質は殺害、伊吹ちゃんも滅茶苦茶に犯してやるって

……」

他の人質……オイオイおかしいだろ。伊吹以外にも人質がいるってのかよ!

永淵の野郎何がしたいんだよ。ていうか人質って誰なんだよ。

「そ、それで！ 永淵さん達は他にも何か言っていたりしましたか！？」

「1分でもオーバーしたらアウトらしいちうわけや。ほんで、殴りこむのに人数制限はないみたいや」

暮葉の質問に答える赤佐。回答から察するに、相手も多分かなりの大人数でお出迎えするんだろう。

人数制限がないって所が怪しいぜ。それは絶対、人数が多い時にしか言えないセリフだぞ。

とにかく赤佐の話は為になったよ。明日の3時までには助ければ、全然大丈夫なんだよな……？

「わかった。暮葉！ 白陵のテリトリーに行くぞ！」

「もきゅ！？ で、でも白陵高校のテリトリーなんて拙者、全然わからないのですよ！」

「お前の魔法チカラを使うんだよ」

「わ、わかりまし」

「待てや藤島っ！」

その時、先程まで大人しかった黒木がいきなり怒鳴りつけてきたのである。

しかも黒木の表情は鬼の形相だ。あんな顔の黒木は初めてである。まるで、裏切り者をこれから殺そうという感じで、俺を睨んでくる……。

「テメエみてえな雑魚が、勝手に動いてんじゃねえよ」

「っ!?!? ……誰が雑魚だよ……っ」

「テメエ以外に誰がいると思ってんだよ。このヘタレ野郎が」

「……誰がヘタレだよ。ヘタレヤンキーにだけは言われたくねえよ」

待て、落ちつけよ俺。

黒木の言ってる事のほうが正しいハズだろ？

それなのに、なんで俺が黒木の言ってる事に反発してんだよ……。俺がヘタレなのも雑魚なのも全部事実だろうが……。

「うるせえ。伊吹ちゃんを守れなかったクソ野郎が……調子のいい事ほざいてんじゃねえよ」

「お、おいおい黒やん！ や、やめとけて！」

「そつや！ 藤島だつて故意じゃなかったんやで？」

「お前らは黙ってる。俺は藤島と話をしてんだよ」

黒木の言ってる事は事実。俺は伊吹を守れなかった……。それなのに、なんで俺はこんなにイライラしてるんだよ。

「……確かに、俺は弱いよ。だけどてめえはどうなんだよ。あの場にもしてめえがいたら、伊吹は助かったのかよ？」

「あたりまえだろ！ ……俺は昼休みのテメエらの会話を聞いてたんだよ。なんでこうなっちまったかわかってんのか？ テメエがあ

まりにも鈍感すぎるからだよ！ テメエ自身はわかってねえかもしれねえけど、テメエは伊吹ちゃんを傷つけたんだ。逃げ出したくなるくらいに傷つけたんだよ。伊吹ちゃんは多分、シヨックで逃げている所を永洌にやられたんだよ……どういふ事かわかるよな？ 全部テメエが悪い。テメエがもう少ししつかりしてれば、伊吹ちゃんが永洌に襲われる事なんてなかったんだよ！」

気がつけば空が暗くなり始めていた。別に日が暮れているからではない。

6月のこの季節にもなれば、もう少しだけ明るい時間が続くからな。この暗さは厚い雲によって日光が遮られた時の暗さだ。オマケにピチャピチャと、空高くから雫が降り始めてきた。

……雨だ、こんなタイミングでいきなり雨が降り出したのだ。

そんな中、俺の中で更に怒りが爆発しようとしていた。

畜生……なんでだよ。黒木の言葉は正論過ぎて反論ができないハズ。それなのに……俺は

「……喧嘩、売ってんのか……？」

「やっと気付いたか鈍感野郎。その鈍感さが伊吹ちゃんを傷つけた事……わかってんだろうな？」

俺は、そのセリフを聞いた後に黒木と向き合ってしまった。

お互いに厳しい視線を向ける。メンチビーム、火花がバチバチと出ていそうな感じだぜ。

「や、やめろよ黒やん！ 僕ら喧嘩しに来たわけじゃねえだろ！？」

「藤島もや！ それくらいでやめとけ！」

「二人ともやめてください！」

そんな三人の声も……今の俺達には全く聞こえなかった。雨が俺達の身体に強く打ち付ける。凍えるように冷たいその雫。そんな雨の中、まず黒木が

「このクソ野郎オツ！」

「ぶおっ!?!」

一瞬にして間合いを詰めてきた黒木は、目にも留まらぬ速さで拳を振るってきた。

口内に広がる苦い味。脳にまで激しく響いた振動。

そして、ストレートを完璧に決められた俺は背中から地面に落ちてしまう。

びちゃん！と泥が飛び跳ねる音が響く。

当然俺は起き上がるうとするが、その前に黒木がマウントポジションをとってきた。

「テメエが鈍感でもあまりにもダセエから！ 伊吹ちゃんが永渕に拉致られただろ！ どう責任取ってくれんだよテメエ！」

殴りながら説教をしてきやがる黒木。顔面が痛え、なんだよ黒木……滅茶苦茶強いじゃねえか。

だけど、一方的に殴りつけられるのも嫌だ。それに黒木が強いと言っても高校生レベルでの話だ。

俺の頑丈な身体には大した威力には感じねえ……！

攻撃を見切った俺は、黒木の拳を左の平手で受け止めた。

その後は平手と拳の押し合い、そして相変わらず黒木の説教が続く。

「てめえ……ッ！」

「だから俺はテメエが嫌いなんだよ！ お前が存在しねえほうが伊吹ちゃんの為だ！ お前みたいなのに伊吹ちゃんが騙されてるから、こんなことになっちまったんだろっが！」

「……ふざけんじゃねえよ、てめえっ！」

叫んだ勢いで、俺は黒木の右頬を握った拳で殴りつける。

その衝撃でマウントポジションを取っていた黒木がぶっ飛ばされ、俺の体は自由の身となる。

だけど、それだけでは何の意味もない。

立ちあがった俺は追撃の為に駆けだし、逆にマウントポジションを取ってやった。

襟元を左拳でガッチリ握り、右拳で黒木の顔面を殴りまくる。

顔面を殴る度にバゴッ！という嫌な音が響いた。

「てめえだつたら……てめえだつたら未然に防げてたのかよ！？ 仮に伊吹が襲われたとしても、その時てめえは伊吹を救えたのかよ！？」

「……うるせえよ三下野郎！ 逃げたヤツがほざいてんじゃねえ！」

その言葉を聞いて俺の胸が痛くなる。

逃げた 黒木が言ったその一言。そう、確かに俺はあの場から逃げた

暮葉が飛行術式を使ってしまったからだけど、それでも逃げた事には何の変わりもねえ。

俺は……伊吹という大切な幼馴染を敵に残したまま、逃げてのんびりとしていた。

最低だよ……正論を言う黒木さえ、こんな風に殴りつけて……全く俺は最低な野郎だ。

「オラアツ！」

「ぐあっ!？」

すべての怒りを込めたような一撃。

顔面に突き刺さった瞬間、一体何mくらいぶっ飛ばされたのだろうか。

気付いた時には濡れ濡れの地面に倒れ、黒木が俺を見下していた。

「逃げるとかよお……男として一番最低じゃねえか！」

「が……は……っ!？」

まるで隕石のように降ってきた黒木の足が、俺の鳩尾を突き刺す。

いてえ……っ!しかも、呼吸があ……!

その上、見下す黒木の冷たい視線……その視線が俺にとっては一番痛かった。

どんな攻撃なんかよりも、ただの冷たい視線が痛かった……。

「最低野郎の癖に……調子に乗るなよ！」

「ぐっ!?! ああ……っ! あ、があっ!?!」

何回も、何十回も。俺は全身を踏まれ蹴られる。

その度に思うんだ。どうして俺は……こんなに弱くて最低なんだと。ハハッ……もうダメだな俺は。そうだよな……黒木は伊吹が好きな

んだもんな。



俺は自分の幼馴染、そして黒木の好きな子を泣かす最低野郎なんだ。殴られたり蹴られたり踏まれたりしたって……何の文句も言えねえよな。

ホントそう思うよ……俺はただ、自棄になって黒木に当たっていただけなんだ。たったそれだけで黒木を殴りつけてしまった。俺はマジで最悪な男だ……。

下手すりゃよ、俺なんて生きてる価値すらないかもしれねえ……。

「オラアッ！ この！ 死ねヘタレ！」

「く、黒やんもうよせ！」

「そうや！ それ以上やったら藤島が死んじまうで！」

「……チツ。行くぞテメエら……オイ藤島。伊吹ちゃんは俺が助けつからよ、テメエはママの膝で寝てやがれ。テメエは出てくんない、それから俺と伊吹ちゃんの前にその間抜けなツラ出すんじゃねえぞ」

そう言い残し、黒木は俺と暮葉を置いて去っていく。

赤佐と大林も、暮葉と俺に「ごめん」と一言を言い残して、黒木の後を追って行った。

雨の空き地に残るのは……。

「けーすけ様っ！ だ、大丈夫なのですか！ しっかりしてくださいいけーすけ様っ！」

俺の名前を叫びながら駆けよって来た暮葉と、そして無様に伸びている俺だけであった……。

#### 第44話 雨の中の……（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「このコーナーも久しぶりだな」

伊吹「そうね……ていうか私本編で出番ないわよ!？」

暮葉「伊吹さん、捕まっちゃってますしね! そついえばどうしてキャラ紹介コーナーが終わったのでしょうか?」

圭介「そりやお前、主要キャラっぽいのが尽き  
ふがあっ!  
?」

伊吹「メタな発言は控えなさいこのばか圭介っ!

小坂「このコーナー事態メタの塊だと思うけどね」

圭介「ふあぐうふえふえ（たすけて）〜!」

暮葉「も、もきゅ! それ以上はけーすけ様が窒息死しちゃうので  
すよー!」

キャラが増えたらまた設定コーナーは再開します!

## 第45話 決意

あれから40分後くらい経ったのだろうか。

俺は自宅で暮葉や葵に手当てを受けていた。

黒木に散々ぶん殴られ踏まれ蹴られまくったが、流血があまりにもひどかったらしい。

……俺の身体は丈夫だし、回復も早いから心配する必要もないのに……。

なにより、俺に手当てされる権利なんざねえ。家でくつろぐ事さえ許されない。

……なにしてんだよ全く。明日までに助けなきゃ伊吹も他の人質も皆……。

「はい、手当て終わったのです」

「ああ……」

「お兄ちゃん……大丈夫？」

「ああ、大丈夫……」

「……」

藤島家が沈黙に包まれる。これも全て俺のせいだ……。

俺が自分のせいでへこんでるから、余計に重たい空気を作っちゃまったんだ。

……でもいいのかよ。確かに俺は最低だしヘタレだし、しかも伊吹を残して逃げてしまった。だからってよ……黒木に何でもかんでも

任せていい理由ワケになんのかよ？  
たとえどういう形でも、どんなに俺が人間のクズだとしても。

俺が伊吹の幼馴染である事には変わりねえだろ！

そうだ、だからこそ俺は……こんな所で閉じ困っているワケにはい  
かないんだ。

黒木になんと言われようが、伊吹に拒まれようが関係ねえ。

俺はただ伊吹を助けたい。俺らのせいで犠牲になった人質も助け出  
したい。

こうなってしまうたのも俺の責任だ。だから、その責任は俺が取ら  
なければならぬ。

それだけだろう。俺に出来る事と言えば……唯一俺が出来る事がソ  
レだ。

「……………っ！」

そう決意した俺は、拳を握りしめた状態でふと立ち上がった。

「お兄ちゃん？」

「ど、どうされたのですか！？」

「二人とも……ちょっと出かけてくる」

「……………！ ダメなのです！ もう少し安静にしてから」

「それでも俺は行く。揉めてる余裕なんてないんだよ！」

立ち上がった俺はスタスタと玄関へ向かおうとする。

だけどその時、俺の右腕に何かが掴まったような感じがした。右を向くと、そこには必死そうな表情で俺を止める暮葉の姿があった。

「けーすけ様……落ちついてくださいっ」

「離してくれ……っ、責任は俺が取るんだよ」

「何もけーすけ様だけの責任じゃないのですよ！自分をそんなに責めないでください！」

「でも、黒木の言っていた事は全部本当の話だ。やっぱり責任は俺にあるんだよ」

こんなことをするだけで、全てがチャラになるなんて思っていない。だからって、責任を取らないで消えるなんて真似もできない。それが俺の最後の役目だ。

決意を固めた俺は優しく暮葉の手を離していき、完全に離れると前を向き一歩ずつ、確実に玄関へと歩んでいく。背中に2人の視線を感じるが……俺が二人に振り向く事はなかった。だが、靴を履いてドアノブに手をかけた。

「待つてください！」

瞬間、玄関に俺を呼びとめる暮葉の声が響いた。

その時、初めて俺は後ろを振り向く。すると暮葉はいつも以上に真剣な表情で。

「拙者も……拙者も一緒に行くのです！」

「くれ、は……？」

突然、暮葉と一緒に行くと言いだしたのである。

「永淵さんの魔力を感じれば、白陵のテリトリーがわかるのです。それに拙者の役目はけーすけ様を護衛する事なのです。ですから、拙者も一緒に行ってけーすけ様をお守りするのです！ けーすけ様の周りの世界も守りたいのです！」

「暮葉……わかった、一緒に行こう」

俺はすんなり暮葉の要求を受け入れ、暮葉も一緒に白陵のテリトリーへ行くことになった。

本当なら巻き込みたくはない。だが生憎、俺は白陵のテリトリーの場所を知らない。

その上、リミッターがかかっている通常の状態では、俺の実力なんて暮葉の足元にも及ばない。

情けない話だが暮葉が居たほうが、あらゆる確率が上がるのである。さっきだって……暮葉に助けられたようなもんだしな。

「お兄ちゃん！ 暮葉さん！ 晩御飯までには帰ってくるんだよ！」

葵はまるで母親のセリフみたいな事を俺らに向かって叫んだ。

晩御飯までに帰ればいいな。相手はマジ殺人とかやりそうな相手だし、下手すりゃ死ぬぜ？

扉を開けて外に出た俺と暮葉。しかし、どういっわけか玄関の前に一人の男が立っている。

男は長身で筋肉質だが、どこか爽やかな雰囲気放つ優しそうなヤ

ツである。

しかも男の服装は白い道着に黒い帯、左胸元には“重原流”という刺繍が入っていた。

俺も暮葉も この男には見覚えがある。

「し、重原さん!？」

「お前……! なんで俺ん家ちの前に!」

「……行くよ、白陵のテリトリーに」

重原の口から放たれた意外な言葉。

……コイツ、どうして今回の件を知っているんだ?

「なんでだよ……っ、お前が何でこの事を?」

「俺も守れなかったからね」

「もきゅ? だ、誰か襲われたのですか!？」

「不意打ちを食らってね。不良はほとんど退けたけど大吾はボコボコ、小坂さんは拉致されてしまった……」

「じ、小坂!？」

「亜紀さんが拉致されたのですか!？」

「すまないっ、俺が居ながら不覚だったよ……!」

重原の口調はいつもの優しい感じでも、その表情と握られた拳が悔

しさを表している。

永淵の野郎……一体どういっつもりなんだよ。

他の人質もいるとか言っていたらしいけど、なんだって態々知り合いを襲うんだよ。

もしかして他の人質ってのも……知り合いとかなんじや！

ふとそう思った俺はポケットから携帯を取り出し、一人ずつ確認を取って行く。

そのうち、出てくれたのは青山さんと凧紗と大吾のみ。部長とあかりは全然繋がらない。

「けーすけ様、どうしたのですか？」

「いや……確認してただけだよ。クソッ！ 長淵の野郎……ッ！」

「圭介、もしかしてその永淵というヤツ、知り合いなのか？」

「一応知り合いだ。中学の時に色々あつたんだよ」

「圭介、俺は状況がよくわからない。知っているのは圭介が関わっているらしいって事だけだよ。だから詳しく説明してもらえるかい？」

どうする、下手すりゃ友達を失う過去だぞ。

重原はいいヤツだけど、俺がそんな最低な暴力魔だと知った瞬間……

……。 なに友達を失う事で怖がってたんだよ。俺なんてもっとくつの昔に堕ちた存在になってるだろ。

それに、うまく行けば協力を得られるかもしれない。だったら事実を話すしかねえだろ。



俺は、俺の過去やどうして白陵が初芝の生徒を襲うのか、その理由の全てを重原に説明した。

「そんなことが……？」

「悪い。今回の件は殆ど俺のせいなんだ」

「待て、今の話でどうして圭介が全て悪い事になるんだい？」

「なるだろ。俺がもつとちゃんとしてれば、こんな事にはならなかったハズなんだよ。だから今回はその責任を取る、全てがチャラになるってわけじゃねえと思うけど、それでも俺はテリトリーに殴りこんで永淵をぶっ飛ばして、伊吹と他のみんなを助け出してやる！」

……しかし、重原も暮葉も相変わらず表情は暗いままであった。そんなに俺の自虐が嫌かよ。でも自虐しているわけじゃねえ。全て事実なんだからしょうがねえだろ。俺は事実を言ったただけだ。それなのにコイツらは

「……けーすけ様っ、そこまで自分だけの責任だって思い詰めると、身が持たないのですよ……？」

「そつだよ。それに、事実これは圭介だけの責任じゃないよ」

コイツら、優しすぎだろ。

ここまで最低な事をおいた男に、どうしてここまで優しくするってんだよ？

黒木の反応が普通なくらいだぜ。それなのにどうしてコイツらは……。

いい友達すぎるだろ。目から汗が出たらどうするんだよ……！！

「……ありがとう」

とりあえずはそう言った。ここで否定したってしょうがないから……。

でも優しい人が何人か居ようが、所詮俺は最低のクズ野郎だ。

たった一人の幼馴染さえ満足に守れなかった、ただの雑魚でヘタレ野郎だ！

「わかってくれればそれでいいよ」

「重原さんの言う通りなのです。あまり自分を責めないでくださいね！」

「わかった、ありがとな」

……この二人は本心なんて知らないんだろうな。

出来れば知られたくないけど。こんな事を考えていると知れば、二人とも優しいから絶対に救いの手を差し伸べようとする。俺にはその手に触れる権利なんてないのに。

「よし、それじゃあ白陵のテリトリーに行こう」

「おう」

「了解なのです！」

……時刻は18時丁度、俺達は白陵せみじょうのテリトリーへと赴く。

## 第45話 決意 (後書き)

後書きトークコーナー

伊吹「し、信じられない……圭介が主人公してる!？」

暮葉「ホントなのです! けーすけ様が主人公なのですよ!？」

圭介「お前ら、俺は一応」

伊吹「今まで圭介なんて村民Aレベルだったのに」

暮葉「全くなのです! けーすけ様……いつ主人公になったのですか!？」

圭介「悪かったな個性の薄い主人公で! 俺は元々主人公だ!」

以下、本編で出番のない人達のつぶやき

凧紗「私、出番がないのはなんで? 三馬鹿よりも出番がないなんてひどくないか？」

千早「多分……ちゅ、中途半端に強いからだと思いますっ」

大吾「今まで広ちゃんとセットでの出番だったのに。とうとう僕の出番が広ちゃんより少なくなった!」

純奈「私はナギちゃんとの愛さえあればどうでもいいんだよ!」

## 第46話 夕日の下の戦場

夕焼けが素晴らしい時間帯……。

本当なら家でエロゲーをプレイしている時間。

それなのに、今日の俺はエロゲーなんてものとは無縁な生活を送っていた。

下手をすれば、今日が人生最後の日となるかもしれない……。

ここは白陵高校や明智家からわりと近い、自動車工場の跡……。

敷地内は荒れ果て、ゴミや廃車が山積み状態である。

その上、大勢の不良達が俺達を待ち構えていたのである。

「へへへ……」

「たった3人で良く来たな、褒めてやんぜえ!？」

不良達はバットや木刀など、あらゆる武器で武装している。

ブレザーと学ランが入り混じっているのだが、俺はコイツらに対して素直に思った事がある。

……コイツら、一体いつの時代の不良だよ!あまりにも古風すぎるぞコイツらは!

「クソッ、なんちゅー数だよ!」

「流石にこれはまずいですね……っ!」

「この人数で男二人に女子一人じゃ、10分持つか微妙だね」

喧嘩と言うのはどんなに鍛えられた人間でも、やはり数が多いほう

が有利だ。

そんなことはよくわかっている。3人相手にするのだったって結構キツいもんだ。

相手はどう考えたって、一クラスの人数よりも多いんだぜ？

いくら武道家と戦国系魔法少女がいるからって、なんとかなるんだろうか？

でも重原も暮葉も苦しそうな表情だし、やっぱりマズいんじゃないだろうか……と思った。

「ちょっと待てやコリアツ！」

「アア？」

「なんだアイツら、どこの学校だ？」

刹那、何者かの声が響きそれに白陵の不良達が反応した。

その声は俺達のすぐ後ろから聞こえた。ていうか、どこかで聞き覚えのある声である。

確認の為、急に後ろを振り向くがその視線の先には。

「チツ、藤島までいやがる……あんだだけボコツたのに、よくこんな所に来る根性あるなアイツ」

「まあまあ。ええやないか別に」

「うう……なんで僕までこんな喧嘩に……っ！」

三馬鹿だ。なんと三馬鹿がいやがったのだ。

当然黒木の姿も……黒木は完全に俺の事を敵視しているようで、鋭い目つきで俺を睨みつけている。

赤佐や大林がいなかったら、また黒木が飛びかかってきそうな勢いだ。

……ところで疑問に思う事があるんだ。三馬鹿の後ろにいる如何にも不良な人達は何？

「チツ、まあ藤島は我慢するか。オイテメエら！好きなだけ暴れていいぞ！」

「マジっすか黒木さん！？」

「上等だコラア！この機会に白陵ブツ潰してやんぜ！」

「やったるぞオラアツ！」

ま、マジかよ！黒木に仲間というか手下のような存在がいやがるだ  
と？

確かに黒木は元ヤンだって話だけど、手下がいるほど偉い地位に  
たのかよ！

とにかく、黒木が連れてきた不良達は結構な人数だ。これはもしか  
するとイケるんじゃないか？

……いや、仮に可能性が殆どないとしても、俺は突き進まなければ  
ならない。

伊吹やほかのみんなを助ける為に……責任を取る為に！  
そして叩き直してやるわ……あの永淵の腐った根性を！

「……………」

「……………」

睨み合いが数十秒ほど続く。

とにかく相手の数が多い、三馬鹿のおかげで俺達の数も多くはなつたが……。  
正直、これはどうなるかわかせないぜ。でも……そんな事、俺達には全く関係がない。  
やらなきゃならない事が山積してんだよ……こっちは！

「行くぞみんな！」

「はい！」

「藤島テメエ！ 全ての原因が指図してんじゃねえぞ！」

「うおおおおおおおおおつ！」

俺を先頭に一斉に皆が駆けだした。  
暮葉は鞘に入れたままの一期一振を両手に持ち、重原もとにかく走る。

黒木らは何らかの武器を持ち、それを手に持って敵中へと突撃をかける。

「ナメヤがつてえ………！ 俺達も行くぞ！」

「おおおおおおおおおおおつ！」

俺らに対して白陵の不良達も向かって来た。  
しばらくして遂に両陣が衝突、俺らと白陵ヤンキー集団の殴り合いが始まる。

こうして 最悪の乱闘が始まってしまったのである。

「……ッ！ ツ！ ツ！」

暮葉が全長106cm、刃渡りにすると73cm程度の一期一振を振りまわす。

ただし鞘付きなので、攻撃は斬るといふよりは突いたり打ち込んだりする形であった。

暮葉の素早い動きに不良達はついていくことが出来ず、ただその鞘に打たれるのみだ。

当たった場所によってはミシツという嫌な音が響く。

しかも暮葉の狙いは正確であり、たったの一撃で不良達を沈めて行く。

「オラアツ！」

「ぐ、は！」

そんな実況をしている間に、俺の所にも一人の不良が襲いかかって来た。

一発顔をぶん殴られ、その時の衝撃に任せてくるりと一回転をしてしまう。

……だかなんだよ、たかが不良が放つ拳だろ。身体が丈夫な俺には

「……ッ！ 生ぬるいんだよっ！」

咄嗟に突き出したアッパーカット。なんとその攻撃で不良は宙に浮いた。

地に落ちた不良はボロ雑巾のように倒れている。意識はあるっぽいと思うように動けないらしい。

俺は経験上知っている。顎を思いっきりぶん殴ると脳震盪を起こす。特に資料なんて読んだわけでもないし、元々そんな事を知っていた



わけではない。

ただ過去の経験上、腰の入ったアッパーカットを決めた相手は大抵、脳震盪を起こした。

そして、後でそこは急所であると知ったんだ。うまくやれば一撃で倒せるかもしれない急所。

急所はそこまでの力を入れなくても普通に痛いと感じ、力を入れると下手すれば危険な場所である。

「あ……ぐう……っ」

「テメエ！」

俺に倒され、伸びた不良を見て仲間が次々と襲いかかってくる。

今度は二人……人数が多い時にはスピードだ大事だ。

「ふんっ！」

「んがあっ!？」

向かって来た一人に対し、俺はヘッドバットを放つ。

バゴ!という植木鉢を高い所から落とすような音がする。

それによって一人は怯むが、もう一人はいつの間にも俺の後ろに回り込んでいた。

背後に回り込んだ不良に俺は、左腕をぶん回し裏拳を不良の眉間へと打ち込む。

人体の急所でもある眉間に拳を打ち込まれた相手は、声にもならぬような声をあげてバランスを崩し、ゆっくりと後ろへ崩れ落ちる。

「ぐっ………テメエー……ッ！」

さつき怯ませた不良が立ち直り、決死の突撃を仕掛けてくる。

「ぐおおおおおおっ！」

俺も不良に立ち向かうかのように駆け出す。

直前で相手から放たれた拳を避け、俺も右拳を放つ……が、あえてそれを当てなかった。

相当不良は驚いている。不良は何の回避もしなかったので、普通は外れるはずがないのである。

にも関わらず、俺の拳は僅か1cmの差で外れたのだ。

相手は何かの奇跡だろうと思ったかもしれない。しかしこれは俺の作戦であった。

外れたと安心をさせた所で

「がっ ばっ、ア!？」

後頭部、俺が狙ったのは後頭部だ。

後遺症の残る危険性がある箇所なので、格闘技では反則技にされている急所である。

そこに俺は、しっかりと握って右の裏拳を打ち込んだのである。

まあ、多分大丈夫であろう。一応程度というものは身体でわかっている。

眉間に後頭部、急所ばかりを打たれた相手はたまらず大地と接吻を交わす。

「ぐっ！ オラア！ だあっ！」

「フッ！ ありゃ！」

「だああもう！ チクシヨオオオオオッ！」

3人を倒した所で俺は前方を見ると、三馬鹿が白陵の不良相手に頑張っていた。

黒木のヤツも明智が相手じゃなかったら、結構強いもんでほぼ一方的な勝負だ。

赤佐も黒木に負けていおらず、その大柄なボディーにタツクルされればひとたまりもない。

大林も小柄で非力ながら、サッカーで鍛えた脚力と素早さだけで頑張っていた。

黒木が連れてきた不良達も、白陵の不良とほぼ互角の戦いを展開。  
重原も

「フッ！」

「！」

顔面に打ち込んだ素早くキレのよい裏拳。アツサリと崩れ落ちる白陵のヤンキー！

その直後の達人のように隙のない構え。

山籠りをした事があるだけに、重原の武術の腕前は達人級であった。

戦況は確実に、暮葉や重原といった達人。

そして黒木に赤佐といった喧嘩慣れした奴らのおかげか、若干俺らのほうが有利である。

だけど、それでも白陵の不良の勢いがなくなったわけではない。相変わらずの大人数で俺達を襲ってくるんだ。全くキリがねえぞこれじゃ！

「圭介！ 大丈夫か！？」

「ああ、まあなんとか」

重原が俺を心配してか、大ジャンプで俺の所にやってきた。

……しかも、飛んでいる間に蹴りで2人を撃退していた。もう重原  
ってチート級に強い！

無差別格闘重原流って一体どんな修業をしてんだよ。

しかも、アレでも重原は父親や爺さんには敵わない存在らしい。重  
原家……恐るべし！

「けーすけ様！ ご無事ですか！？」

「え、おう！ 暮葉こそ大丈夫か？」

「はい！ この程度の相手ならなんともないのですよ！」

「木下さん見かけに寄らず強いんだね。なにかやってたのかい？」

ま、まずいぞ。実は異世界人で特殊部隊の人なんですーなんて、絶  
対に言えない事だ。

暮葉も困惑しているようだし。仕方がない、テキトーに誤魔化すし  
かない！

「く、暮葉は銃剣道やってたんだよな！？」

「もきゅ！？ は、はい！ 拙者の家はかつて軍人家庭だったので  
！」

「そうなんだあ。通りで！」

……よかった。テキトーに銃剣道の達人って事にしておいたら重原

も納得してくれたよ。

まあ、オリジナルの銃剣道とは全然違う戦い方だったけどね。でも、重原だって戦っていたんだ。そこまで細かくは見ていないハズである。

「それにしても、すごい数なのですね……っ」

「っーか、さっきよりも増えてねえか？」

「確かに、このままだとまずいね……」

どういう事なんだよ。全然白陵の不良の数が減らねえぞ。

まさか永渕の野郎。白陵に通う不良生徒全員を動員しやがったのか。だとしたらマズいぞ。このまま戦ってたら疲れるだけだ。

さっさと戦いに終止符を打たねえと、その為には

「二人とも。先に永渕を叩くぞ！」

「……そうですね！ 大将さえ叩けば戦いは終わるのです！」

「でも、三馬鹿とその仲間だけでは厳しいよ。俺はここに残って戦うよ」

「ではけーすけ様！ 永渕さんの居場所まで拙者が護衛するのです！」

「お、おう！ 重原、頑張れよ！」

「任せて。そっちの戦いが終わるまで……全力で食いとめるから！」

それを言い残した後、重原は再び敵中へと飛び込んでいった。

重原がここに残り、暮葉が俺の護衛をする。

確かに敵の数が多い場所よりも、敵の数が少ない場所のほうが暮葉の身は安全だ。

いくら強いつたって暮葉は女の子。無理だけはさせたくない。

この展開だと重原にはとても悪いけど、でも重原がいないと三馬鹿もおそらく敵しいだろう。

「けーすけ様！ 先を急ぎましょう！」

「おう！」

みんなが頑張る中、俺と暮葉は大将を叩くべく先へと進んだ

## 第46話 夕日の下の戦場（後書き）

後書きトークコーナー

千早「藤島先輩……その、す……好きですっ！」

圭介「ええっ!? ちょ、青山さんそれマジっすか!?!」

千早「は、はい……っ。ずっと昔から先輩の事、見てました」

圭介「……いいのか、青山さん？」

千早「はい！ 私……藤島先輩じゃなきゃ嫌です。だって……ミー、君ノ才尻ノ形ダイスキダカラ」

圭介「エッ？」

アリック「ヤア、久シブリダネ！ 神崎・H・アリック参上ダボーン！」

圭介「嫌アアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

……

圭介「……というっ夢を見たんだ」

伊吹「の、ノーコメントよ……」

暮葉「拙者はお菓子に囲まれる夢を見ました！」



## 第47話 白陵No2

「誰も……いないですねっ」

「不気味なくらい静かだな」

荒れ果てた工場内部へと進んだ俺と暮葉は、敵の襲撃を警戒しつつ慎重に足を前に進める。外はあんなに騒がしかったのに、工場内部は静けさに包まれている。なんだか不気味である。

畜生……永淵は一体どこにいるんだよ。人質がいる事以外、こつちには何の情報もねえぞ。

何か情報さえ手に入れば、永淵の居場所を掴める情報があれば……！

「アヒヤヒヤヒヤッ！」

「……！ 誰か来るのです！」

「っ！？」

静かな空間に、不気味な足音と狂気じみた笑い声が響き渡った。

タッタとゆっくり、気味の悪い笑い声をあげながら何者かが近寄ってくる。

それは短ランにドカン、金髪のリーゼントで凶悪なツラをしている、明らかに時代を間違っている古風なヤンキーであった……。

「アヒヤヒヤ！ よく来たじゃねえかテメエら……外の広場でくたばると思ってたのによ」

言いながらヤンキーは、口に銜えた煙草を吐き捨てて火を踏み消す。

露骨なポイ捨てだ。煙草のポイ捨てって古宇坂の条例じゃ違法じゃなかったっけ？

まあそれはともかく。アイツ、なんだか危なっかしい雰囲気のある男である。

「何者なのですか！」

「アヒヤヒヤ！ 俺は船木健太ふなきけんたっーモンだけだよ。通称“右方の船木”ってんだ、まあ白陵のN02よ」

この男が……古宇坂最強を誇る不良校。白陵高校のN02。つまり、永淵の次に喧嘩が強い男ってわけか。でもちよつと待てよ。右方の船木だって？

「てめえは神の右席気取りかよ！ しかも右方って最強キャラじゃん！」

「いいじゃねえか！ 右方の船木って強そうじゃね？ アヒヤヒヤ！」

「もきゅ！ わ、笑い方が気味悪いのですっ！」

なんだよ船木さん、あんたとあるラノベに影響された厨二病かよ！ しかもあまりの不気味さに、暮葉が思いっきり引いちまってるじゃないか。

同じく気味悪いキャラ繋がりで、舌に十字架でも付けて“前方の船木”って名乗っとけよ！

全く……最初にそげぶするぞコノヤロー！

「アヒヤヒヤッ！ さあ〜て、二人まとめてボコボコにしてやろう

か？」

「……されてたまるかよ！ それより永洵の居場所を教えろ！」

「そうなのです！ 大きな趣味の悪いパンを頭に乘せてるくせに、出しゃばるなのです！」

「テメエこれはリーゼントだ！ 食べ物と一緒にすんじゃねえ！」

暮葉も地味にひどい事いうな！

金髪リーゼントだって船木してみれば立派なチャームポイント。ていうか、アレがなかったら船木じゃなくなるだろ。

よくあるヤンキー顔なので、あの髪形じゃなかったら誰だか見分けがつかなくなる。

「り、リーゼンとってああいう髪型だったのですね」

「知らなかったのか？」

「は、はい！ すごく新鮮なのです！」

確かに暮葉は異世界人だしな。

世界情勢が一昔前の地球みたくても、細かい文化とかは地球とは全くの別物なのだろう。

魔法が存在するくらいなのでそれくらいの違いがあったって、別に変な事ではないハズだ。

たまたま、暮葉の世界にはリーゼントという髪型がなかったんだろ  
うぜ。

「でも今時アレは流行らねえぞ？」

「もきゅ、そうなのですか？」

「今時のヤンキーもあんな髪型のヤツ、そんなにはいねーぞ？」

「なるほど、つまり時代遅れってわけなのですね！」

「誰が時代遅れだコラアツ！ テメエらリーゼントの素晴らしさを全く理解していねえ！ 短髪剃り込み？ 丸刈り剃り込み？ 角刈り？ パンチパーマ？ そんなの全然気合いが入ってねえ。俺から言わせて貰えば永渕さんの髪型だって気合いが足りねえ。ツツパリならリーゼントがあたりまえだ！ どうだ参ったかコラアツ！」

……すげえ。リーゼントについてあそこまで熱く語る人、初めて見た気がするよ。

不良漫画とかあんまり読んだ事はないけど、でも俺の知ってる不良キャラでさえ、あそこまで熱く語るキャラクターはいなかった。

そもそも、今時リーゼントなんてツインテールの貧乳口りっ娘よりも希少価値だぜ？

リーゼントの硬派なツツパリ……これはもう絶滅危惧種の国宝レベルだ！

「随分とまあ……リーゼントにこだわりがあるようつで」

「あたりまえだ！ そのピンクのアホ毛とは違うんだよバーカッ  
！」

「も、もきゅ！？ よくも拙者のアホ毛をバカにしたのですね！  
アホ毛は拙者のチャームポイントなのですよ！」

く、暮葉さんそのアホ毛。チャームポイントだったんだ……。どちらかという俺は、その琥珀色の瞳がチャームポイントだと思っ  
ていただけ……。  
つか、暮葉も船木並に自分の髪にこだわりがあるんだな。  
正直、特にイジリもしていない黒髪ナチュラルな俺にはわかりませ  
ん。

「うるせえ！ 大体ピンクとかありえねえだろアニメかよ！ 金髪  
のほづがフツーだし！」

「もきゅ！？ き、金髪なんて素行が悪いだけに見えるだけなので  
す！ それに拙者の髪は天然だから仕方ないのです！」

暮葉のピンクはおかしいだろと思ったの、俺もです。

でも、金髪も十分奇抜な色ですよー。それを言ったら伊吹の髪色  
も不思議だけど。

……まあ、結論を言えば世の中いろいろあるというわけだ。

「素行も何も不良にンなモン関係ねエ！ とにかく俺の金髪リーゼ  
ントを馬鹿しやがって、テメェら処刑確定だ！」

ダツ！という突然の足音。

狭苦しい工場内を駆け始めた船木は、僅か数秒で5mという距離を  
詰める。

アイツ、ふざけたキャラだけど実力は確かも。動きは滅茶  
苦茶速エ！

「アヒヤヒヤ！ まずは……女からミンチ確定だあああつ！」

間合いを一気に詰めた船木は右足で跳躍し、拳を振り上げながら暮

葉へ飛び込む。

暮葉も透かさず鞘に収めた一期一振を突き出し、飛び込んでくる船木を自滅へと追い込もうと試みる。

あのまま突っ込めば、確実に一期一振の先端は船木の腹に突き刺さるだろう。しかし　ガシッ！

まるで、刀を突き出されるのが予想済みだったかのようだ。

鞘を力強く握った船木。勢いで突っ込む事も刀の先端が刺さる事もなかった。

そして猿のように身を動かし、空いていた右拳で思いっきり暮葉を

「ぐっ！　させるかよてめえ！」

ぶん殴る前に、俺は衝動的に飛び出してしまった。

そして、眼を睨り衝撃に備える暮葉を助けるように　俺は船木の横顔をぶん殴る！

「だ　ハアッ！」

ゴギンツ！と、如何にもぶつかり合うような嫌な音が響き渡る。

その衝撃でぶっ飛ばされた船木は、どうにか自らの脚力で倒れずに済むものの、頬を痕を赤く腫らして口元からも血を流していた。

「けーすけ様っ！」

「大丈夫か、暮葉！？」

「は、はい！　助かったのです！」

よかった　暮葉が無事で本当によかった。

何故俺があのだいニングで飛び出したか。それは当然、この可愛い顔を守りたかったのである。

一方の船木は左頬を左手で押さえ、鋭い目つきで俺達を睨んでくる。しかも、船木の右拳は血が出る程に握られていた。

「アヒヤ！ この野郎オ…… 1対2とは聞いてなかったぜえ？」

「それはお互い様だ。今はてめえ一人でも、もう一人いたら仲間も使って攻撃するんだろ？」

「そりゃあ当然だ。サシで勝負するって誰も言ってねえからな。あところも言ってねえな……」

思わせぶりの台詞を吐いた 刹那。

船木は短ランの中から鋭く光る、バタフライナイフを出してきやがった。

オイオイ。刃物って冗談で済まされるレベルじゃねえぞ！

「もきゅ！ は、刃物！？」

「誰も武器を使っちゃいけねえとかな、そんなふざけた事言ってねえよなあ！」

「くっ……てんめえ！ いくら喧嘩でも刃物なんて普通使うかよ！」

「そういうテメエらこそ武器持ってんだろが。刃物だって武器なんだよ、同じだろうが！」

確かに、刃物も武器と言えば武器だ。

ていうか道具なんてものは、使い方によってはどんなものでも武器

になり得る。

でも 喧嘩に刃物は邪道だろ！

「だったら……拙者も！」

え……ちよ、暮葉さんもしかしてアンタ！

その時、暮葉は握りに手を移し、鞘から一期一振を抜きだしたのである。

ギリリと輝く鋭利な刃。明らかにバタフライナイフとは格が違う迫力。

まさに本物の日本刀。そんな本物を見た船木は

「ほほほほ、ホンモノ！？ て、テメエ！ 日本刀は卑怯だろっ！」

「もきゅ、知らないとは言わせないので。日本刀だって……刃物なのですよ？」

こ、怖え……。

笑顔で言う所が余計に怖い。暮葉の事は絶対に怒らせないほうがよさそうだな。

下手をすればあの刀の錆になってしまふ。そんな刀の錆にされそうな船木は明らかにビビっていた。

冷や汗をダラダラと流し、顔面蒼白となり、その上足までガクガクと小刻みに震えている。

「あ、はわ、ああ……っ」

「もきゅ！ では……覚悟はいいですね？」

「は、はああ……あああああ母ちゃーんっ！」



に、逃げた……あの強かった船木さんが一期一振にビビって逃げた！  
いくら強いと言っても、やっぱりただの不良である。  
……ていうか、刀なんて誰でも怖いモノだと思っけどね。  
恐怖心を煽ると言う意味では今の作戦、間違いなく成功だったろう。  
暮葉は安心したように一期一振を鞘へと収め、満足そうな顔をして  
俺の傍に駆けよって来た。

「やりました！ サシゴロになる前に相手が逃亡してくれたのです  
！」

「さ、サシゴロって……」

意味わかる人いるんだろうか。ていうか俺も少しわからなかったぞ。  
多分サシゴロとは刃物を持って喧嘩をするって意味だろう。  
……おそらく、本職の方でも一部の人しか使わないと思う。  
暮葉もよくそんな日本語知ってたな。何か漫画でも読んだのだろうか？

「さっ！ けーすけ様、先に進みましょう！」

「お、おう……」

まあ……いいのか。邪魔をするヤツを退けたんだから。  
でもどうしよう。相変わらず永洲の居場所はわからないぞ？

まあ、根気強く探すしかないか。待ってるみんな……絶対  
助けてやるからな！

第47話 白陵No2（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「弱くたっていいだろ。誰がそんな事で文句を言っただよ……」

伊吹「う、うっさい！ そんなの……っ！」

圭介「そんなのでいいんだよ。弱いからって、それでなんかの罪になるハズがないだろ？ 人間誰だってどこかは必ず弱いんだから。確かに努力で己を強くする事はできるけどさ、それでも弱さというのは誰にでも残るものだよ」

伊吹「け、けい……すけっ」

圭介「……それでも、どうしても強くなりたいってんならいい事を教えるよ。思いつきり泣くと……強くなれるらしいぜ？」

伊吹「圭介……圭介っ！」

圭介「……伊吹」

……

圭介「……という小説を書いてみたっ！」

千早「先輩のセリフが臭すぎて……そのっ、キザすぎます……っ」

あかり「流石千早、バツサリだな！」

葵「確かにお兄ちゃんの臭いセリフで恋に落ちる女の子なんて、葵以外にはいないよね！」

伊吹「ていうか……なんでヒロインが私なのよ！」

凧紗「いくら伊吹編だからって……わ、私の出番がっ」

圭介「思いのほか酷評かよ！ 自信作だったのに！」

暮葉「けーすけ様！ それよりも本日の晩御飯何にしますか!？」

## 第48話 / 恐怖の男

結局 その後も俺達は永洌や人質の居場所を求めて、狭苦しく黴臭い工場内をさ迷っていた。

延々と続く古びた通路は、次第に俺達をイライラさせていった。

この工場は以外と広いのである。中々永洌達の居場所を突き止める事ができない……。

畜生。まだ明日の午後3時までには時間あるけど、このままだと今夜のアニメに間に合わない。

……いや、葵との約束。晩飯の時間に合わねえぞ。

皆を助けて葵との約束も守る。このままだとそれが出来ない……クソッ！

「全然……辿りつかないですねっ」

「ああ。ホントに永洌はここにいんのか？」

「それは間違いないです！ 魔力自体は物凄く近くに感じるので、必ずここにいます！」

「とにかく、今は暮葉と感だけを信じるしかねえな」

こんな事になるんだったら、白陵のヤンキーを一人捕まえておけばよかった。

そうすれば、もしかすると永洌の居場所とそこまでの道を教えてくれたかもしれない。

でも、今更後戻りはできない。外では重原や三馬鹿が頑張っている。この中でも……伊吹や捕まった人達が傷ついている。

こんな所で後戻りなんてできねえ。もう二度と逃げたりなんかはしねえ。

「ぎゃあああああつ！ ああ！ や、やめてくれっ！ がはっ！  
あああああつ！」

「もきゅ！ す、すごい悲鳴なのです……っ」

「しかもこの声、さっきの船木って野郎のじゃないか？」

なんだよ、一体どういう事なんだよ。

今の叫び声は間違いなく、さっき俺達と戦っていた船木の声である。ただどさ、そんな敵だった船木が叫ぶって色々とおかしくないか？ 人質が叫び声をあげるのなら許せないが、決してわからないわけではない。

だけど、永淵にとっては味方のヤツがどうして叫ぶんだ。俺達以外に戦えるヤツはいないハズだぞ？

「けーすけ様！ こっちです！ こっちから声がしたのです！」

「お、おい待てよ！」

俺は一足先に駆けていた暮葉を追いかける。

暮葉に追いつき並ぶと、やがて俺達二人は大きな扉の前に佇んだ。錆びた大きな扉……その向こうから響く船木の雄叫び……。

「ど、どうしますっ？」

「……開けるぞ」

俺達に残されている選択肢は前進あるのみ。この先に永渕も人質のみんなもいるんだ。

「あ、あの……けーすけ様っ！」

「ん？」

「い、いえ……なんでもないのでっ」

暮葉は少し恥ずかしそうに俯き、その上左を向いて俺から視線を逸らしていた。

その後はただ口ごもるのみ。何かを言いたそうではあったけど……。でもその直後、強い意志を感じる表情の暮葉が顔を上げ、俺の事を見てきたのである。

「暮葉？」

「行きましょう！　けーすけ様！」

「……おう！」

俺は暮葉の言葉に大きな声で返事をし、そしてガシツと勢いよく取っ手に手を掛ける。

ここを開ければ敵陣の中央。そして捕まってしまった人質も沢山だ。……俺はその人質を助けなきゃならない。俺のせいで捕まってしまった人質を。

そして助けて、全ての責任を取らなきゃいけないんだ。その想いを胸に……。

遂に重たい扉を開け、俺達は本当の戦場へと足を踏み入れ

た。

「伊吹！」

「皆さんっ！」

俺は伊吹の名前を、暮葉はみんなの事を叫ぶ。だが、そこには思わず息をのんでしまうような、衝撃的な光景が目の前に広がっていた。

「あ、あれ……藤島君に木下君ではないかっ？」

「……け、圭介……っ？」

「うそっ、圭くん！ やった助かった！」

「圭介が来たって……ほんとなんだよな！？」

浅間部長、伊吹、小坂、あかり……。

そしてその前には船木をボコる永渕の姿がある。

オカシイ事に人質達はチェーンで縛られていたのだ。オイオイ普通は縄とかだろ！

こんなくだらねえ作戦で、どんだけお金かけてんだよ白陵の不良どもは！

……しかも、人質達はみんな明らかに怪我をしていた。

浅間部長なんてぶん殴られたような跡が変色してるぞ。ホントに大丈夫なんだろうっか？

そんな事を思っていたその時

「アア？ へへ……やっとお出ましのようだなあ」

「永洩……！」

永洩がようやく俺達に気付く。今まで気付かなかったあたり、よっぽど船木をボコるのに夢中になっていたのだろうか。先程までボコられていた船木は見事なまでに血だらけだ。

「うう……な、永洩さ……がはっ！」

永洩の名前を呟く船木の首筋に、永洩は踵落としを打ち込んだ。色々ありえねえだろ……永洩、アイツ外道すぎるだろ。

大体、船木はてめえの仲間だったのに、なんててめえは船木をボコボコにしてんだ。

船木は、さっきの永洩の一撃で完全に伸びてしまった。白目を向き口からも流血。

明らかに船木は人質達よりも重傷を負っていた……。

「てめえ！ なにやってんだよ！」

「ああん？ 敵前逃亡をしたボケに制裁加えてたんだよ」

「てめえ……なんだって友達にそんな事ができるんだよ！」

「友達？ フツ、俺に友達はいねえ。ただし手下なら山ほどいる。この船木も俺の手下の一人だあ」

友達はいないけど手下はいる……なんだよそれ、ただの寂しいヤツじゃねえか。

しかも、友達以外に唯一自分について来てくれる存在にさえ、そんなふざけた真似をすんのかよ。



……この大馬鹿野郎は！

「ふざけんじゃねえよてめえ！ たとえ手下だとしても、ちよつとの失敗でそこまですんのかよ！」

「そうですね！ 今時軍隊でもそこまではシバかれないのですよ！」  
少なくとも、暮葉が所属するアルファ隊ではそうなのだろう。  
世の中先輩軍人にシバかれる軍隊なんて、山ほどありそうなものだが……。

でも、それでもあの永洌は許せねえ。船木のヤツ気まで失ってんじやねえか！  
今までアイツがやってきた事に加えて、余計に腹が立ったぞ！

「なに必死になっただかなあテメエら……さ、んな事より地獄のシヨ―でも初めっか？」

そんな事を言いながら、永洌は拳を構えて臨戦態勢に入った。  
そのポーズが示す意味はただ一つ。  
俺も永洌同様拳を構え、永洌の事を強く睨みつけた。  
……つまり、ポーズが示す意味とはこういう事なのである。

「……！」

「おお怖え、滅茶苦茶怖えっ！ その顔最高じゃねえかよ、やっば暴力魔のてめえにはその凶悪な顔がお似合いだな！」

「……誰が」

「あ？」

「誰が暴力魔だった？」

俺は永淵の暴力魔という一言について訊き返していた。

暴力魔、いつの間に広がっていた俺の異名の一つ。

あかりも最初は俺の事を散々暴力魔って言っていた。

決して名譽があるわけではない。むしろ不名譽な俺の異名……。

俺はそんな異名を言いやがる永淵に対し、いつのまにか文句をぶちまけていた。

「ふざけんなよ！ 確かに俺はてめえをぶん殴ったし、てめえの仲間さえも血だらけにした……そんな暴力魔だよ。だけどてめえ自身はどうなんだよ？ 過去に伊吹を襲つといてそれで俺にやられて……その復讐の為だけにこれだけの大人数に暴力を振るって、拳句の果てには失敗した仲間にまで暴力だと？ ……俺は確かに俺のせいでみんなを傷つけた。たった一人の幼馴染さえ守れなかったクス野郎だ。でもな、みんなが傷つく主な原因はてめえが暴力を振るうからだろ。てめえが手下に暴力を振るえって命令するからだろ。結局俺は何が言いたいかって言うとな……てめえが一番暴力魔なんじゃないかかって事だよ！」

今まで溜まっていた事を全て解き放つような そんな俺の叫び声。本当にスツキリした 胸中に秘めていたものを解き放つ。

確かにこれほどスツキリするものはない。

きつとそれは永淵も一緒なハズだ。ただ永淵の場合は解き放つ方向を間違っていた……。

そんな間違っている永淵は俺の叫び声に対し。

「ハッ、くだらねえ……そんなんでハイやめますなんて言うほど、テメエの敵は甘い存在じゃねえんだよ。必ずテメエは殺してその

女も滅茶苦茶に犯してして、人質も男はブツ殺して女は俺の肉奴隷  
になってもらう。復讐もできるし最高の樂園ハラダイスも出来る……。テメ  
エの説教ごときで俺がコレをやめると思ってたのかあ！ アア！？

「やっぱり……。てめえはそうやって今まで人を傷つけてきたんだな。  
最低だ……っ」

俺は俯くも、両方の拳には力を入れながら言い放つ。  
拳……いや、次第に全身に力が入ってゆく。

永淵に対する怒りがもう、押さえられないくらいに表面化してゆく  
……。

「最低で結構！ 俺はテメエとテメエの周りの世界をぶち壊す為に  
動いてんだ！ その目的が達成されるとは俺にとっちゃあ……。最ッ  
高に嬉しい事なんだよオ！」

「……。だったら、そんな最低野郎を止めてやるよ！」

「止められるモンなら止めてみるや！ 藤島ア……。止めたきゃ俺と  
タイムン張って勝ってみやがれエエツ！」

タイムン 簡単に言うとな良用語で1対1の喧嘩の事である。

なんでも学校やグループの番長、大将同士が抗争の最後にタイムン  
でケリをつける事が、不良の間では美徳なんだとか。まあ確かにタ  
イマンは楽だ。だって……。人数を気にしなくて済むからな！

「わかった……。勝ってやるよ。そしててめえを止めて、ここにいる  
全員を必ず助け出したやる！」

「やれるモンならやってみるよ……。」

不敵な笑みを浮かべ、指の関節をパキパキと鳴らしつつ永淵は俺へと迫る。

こっから先は、俺と永淵の1対1の勝負。だとしたら……

暮葉は！

「暮葉！ お前は人質を助けてくれ」

「もきゅ！ で、ですがけーすけ様は！？」

「俺と永淵の勝負には手を出すな。それよりお前は人質を助けてみんなを誘導してくれ。みんなと一緒に逃げてくれ」

それもすごく重要な役目である。ていうか、ここまで来れた暮葉にしかできない大切な役目なんだ。

とにかく人質を戦いには巻き込みたくはない。

俺達の戦いに巻き込まれて怪我をされるなんて、そんなの一番嫌な事なんだ。

「……わかりました！ けーすけ様、やられちゃ嫌なんですからね  
！」

しばらく思い詰めた顔で黙りこんだ暮葉は、ようやく口を開いて了解してくれた。

しかもやられちゃ嫌……か。こんな時に何考えてるんだかだけど、今の可愛くてよかつたな。

……さて、暮葉が人質を安全に救出する為にも。人質を安全に逃がす為にも……。

そして、この事件のすべてを終わらす為にも……。

俺は目の前のクソ野郎をぶっ倒す！

## 第48話 / 恐怖の男（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「突然だが、やっぱりギャルゲーは素晴らしいな」

圭介「あ、どうしてだよ？ 確かにすばらしいけどさ……」

大吾「だって現実の人気アイドルは歳は取るし、後になって当時のファンが絶望するような姿で出てくる事が多い……それに対し！ギャルゲーのヒロイン達はいつまで経っても輝かしい姿を保っている！ そのギャルゲーが存在する限り、ヒロイン達が消える事はない！ いや、ギャルゲーが消えてもヒロイン達が存在したという事実は決して消える事などない！」

圭介「つまりお前は何が言いたいんだ？」

大吾「フツ……つまり、現実なんてクソゲーだ！」

圭介「現実には確かにクソだよな。はぁ……彼女欲しいっ」

小坂「大吾……キモッ」

伊吹「亜紀、もういいじゃん……大吾なんていつもあんなもんよ」

暮葉「そーですよ！ けーすけ様が変態なのと同じで、大吾さんのアレももう二度と変わらない事だと思っつのです！」

圭介「変態は余計じゃっ！」

## 第49話 男なら拳で語れ!

永洩は滅茶苦茶強い。何時間か前の一戦で思い知った。

一撃しか喰らっていなかったが、あの動きと狙いの正確さは素人が打てるものじゃない。

永洩の奴、何か格闘技でもやって鍛えたのだろうか……まあ、そんな事は関係ねえ。

とにかく大事なのは永洩を止める事。

たとえ勝てないとしても、人質が逃げるまでは俺が永洩を足止めしなければならぬ!

そうすれば、逃げた人質も次の襲撃に備えてくれるだろう……。

……とにかく今重要なのは永洩を止める事。1分でも長く永洩を止めてやる。

いや、出来る事なら永洩をここでぶっ倒してやる

!

「うおおおおおおおおおおおっ!」

比較的広いこの空間<sup>スペース</sup>で、俺は拳を振り上げ永洩への突撃を仕掛ける。俺には暮葉のように風を操ったり、明智のように炎を操る事はできない。

キスをすれば強くなれるが、そんな相手など存在するわけがない。

即ち、俺は丸腰の状態で戦う事しかできない。それでも……どんなに弱くても俺は戦う!

十分に間合いを詰め、俺は右拳を放った

「てえっ!」

「ハハッ!」

刹那、笑い声をあげた永洩。

そこで俺の目は見開かれる。

何故永洩はこんなにも余裕なんだろう。俺には全く理解ができなかった。

しかし次の瞬間、永洩はひらりを身体を右へ揺らし、俺の精一杯の右ストレートを回避したのだ。

そして次の瞬間、ストレートを空振った俺に向かってクロスカウナーが飛んできた。

「ア……！」

永洩の拳は何の躊躇もなく、俺の鼻柱に容赦なく打ち込まれる。

痛みに怯んだ俺に、永洩が追撃を仕掛けてくる。

ドゴ！バゴ！全身の至る所を何発もぶん殴られた俺……とりあえずこのままヤツに近くににいるのは危険と判断し、後方へと勢いよく跳躍してみせた。

「はははっ！ 甘えんだよ、テメエの攻撃はよお！」

「くッ、てめえ……っ！」

再び俺は接近し、今度は廻し蹴りを仕掛けたみた。

だが、永洩はぴょいっとジャンプをしただけで廻し蹴りを避け、着地と同時に拳を放ってくる。

それが、俺の顔面に野球ボールのように飛んできた。

「が、あっ！」

打ち込まれた時の衝撃と痛みにより、思わず俺は後退りをしてしま



う。

……畜生、いくら身体か丈夫だとしても、それは長期的に見てのものだ。  
打たれた時の一瞬は普通の人と変わらない。それ相応の痛みを感じるんだ。

ただ俺が普通の人と違うのは、その痛みに身体が耐えられる事。そしてすぐに痛みが消える事だ。

でも、結局ぶん殴られたりした瞬間は、普通の人を感じるのと同じくらい痛いのである。

「オラア……もつとかかって来いよ。テメエにはもう少し付き合ってもらわなくちゃあ……割に合わねえんだよオ！」

「く、そオオオオオオオオオッ！」

とにかくダメージを与える。そうすれば永淵のバランスと自信は崩れるハズだ。

とにかく ヤツに一発でも与えて、なおかつダメージを与える事ができれば！

そう考えた俺はタツクルを試みた。だがひらりを永淵は俺を避け。

「あゝっ！」

刹那、衝撃が俺の尻を襲った。

顎から床へと落ちてしまい、その時の衝撃のせいか脳が揺さぶられる。

畜生……俺は何をされた。多分ケツを蹴られたんだろうが……クソ、頭が。

「フハハアーツ！」

「…………！」

その時、永洩が踵を突き出しつつ降下してきた。おそらくはジャンプをし、その勢いで俺を踏みつけようとしたのだろう。

咄嗟に危険を感じた俺はゴロゴロと床を転がり、永洩の踵を回避はしてみせるも、永洩はすぐに次の動作へと移り右足をぶんつ！と振ってくる。

俺はその足を左腕でガード、ミシリという嫌な音は響いたが……こめかみに当てられるよりはマシだ。

「オラオラ！ ジタバタしてんじゃねえぞ！」

「ぐっ！」

ジタバタと地面をゴキブリのように這い、なんとか距離を取った俺は立ち上がる事に成功する。

だが、目の前には既に拳を構えた永洩の姿がある。この距離からじゃ避けられねえ クソ、どうすれば！

「 永洩晃！」

！？

…………い、今………… 確かに女の子の声が聞こえた。

そして何より、永洩の拳は俺の眉間目前で止められたのだ。

永洩は声が出たほうに釘付けである。

そんな状態で永洩が攻撃をしてこないと判断すると、俺も永洩と同

じ方向を見てみる。

そこには、工場内のどこかで拾ったのであろう鉄パイプで武装して、伊吹の姿があった

「い、伊吹……っ」

「……アア？」

俺は驚き永淵も機嫌の悪そうな顔をする。

「……動かないで。あんたを……これで叩くわよ！」

おそらくは脅しのつもりなのであろう。

ボロボロの伊吹は震えながらも、これ以上俺を攻撃すると鉄パイプで叩くと脅しをかけていた。

歯を食いしばり、頑張つて恐怖を我慢している伊吹。

……だが、苦勞して永淵の前に立つ伊吹に対する永淵の反応は。

「……フツ、相変わらず強がりな女だ。そういえば他の人質がいねえな？」

「暮葉が……助けてくれたのよ。私はただ戻ってきただけ」

そっか、暮葉のヤツ……今の間に全員を逃がす事に成功したのか。手際がいいというか、きつと一期一振を使ったんだらうな。

アレなら確かにチェーンを簡単に斬る事ができる。

人質達も捕まつてからそれほどの時間が経っていないのか、少しは体力や思考力に余裕があったのだらう。でもなんでだよ……なんで折角逃げれたのに、伊吹はここに帰って来ちまつたんだよ！

「逃げる伊吹、すぐにこつから逃げる……！」

「へッ……戻ってきた上玉を、逃がすわけねえだろうがよ」

永洌はパキポキと拳を鳴らしながら、伊吹へと徐々に接近してゆく。伊吹は明らかに顔色が悪いものの、それでも歯を食いしばり鉄パイプを構える。

アイツ あんなに怖がつてんに、それでも戦うつもりなのかよ！

「やめろ……伊吹も永洌もやめろ……っ！」

「……ごめん。私は……あんた一人を放っておけなかったから」

「そういうこつたあ。俺にも前進って選択肢しかねえしなあ」

畜生……このまま突っ込んだところで、永洌に強烈な一撃を貰っちゃまうのは安易に予想ができる。

でも、だからってこのまま伊吹を放っておいていいワケはない。

助けなきや……無理してあの場に頑張つて立っている、伊吹を永洌の魔の手から！

とにかく他の事は何も考えるな。永洌を止めて伊吹が逃げる時間を稼ぐんだ。

そう心に決め、両方の拳を握つた……。

「……！ぶ、はあっ！？」

刹那、どういうわけか永洌が崩れ落ち、地面へと落ちた永洌は顎を叩きつけていた。

その時に唇でも噛んだのだろうか、痛そうに起きあがった永洌の口

元からは血が出ている。  
でも、永洌は口元よりも後頭部を押さえている。何故なら永洌は後頭部を攻撃されたからだ。  
当然位置から言って伊吹のハズがない。だったら他に誰が居るだろうか……正解は。

「船木……テメエツ！」

「アヒヤヒヤツ！ 後ろくらいしっかり見とけよ……永洌さんよお！」

そこには、血だらけながらも角材を持ち構えている船木の姿があった。

痛がる永洌を見て船木は、どういっわけか口元が笑っている。

……どうなってるんだ。確かに散々制裁を食らっていたけど……アイツら仲間じゃなかったのかよ？

しかも、船木は永洌が完全に体勢を立て直す前に、その角材を勢よくぶん回した。

永洌は右腕でそれをガードはしてみせたが、永洌のミシミシという痛々しい音が俺にも聞こえた。

「ぐっ！」

「オラア！ テメエらはこっから逃げな……永洌倒すのは俺だからよお！」

永洌を倒すのは俺

ちよつと前の船木からでは、考えられないようなセリフである。

それでも船木はそのセリフを、なんともまあ嬉しそうな笑顔で言い放ったのである。

「テムエ……どういづつもりだ船木いつ！」

「アヒヤ！ 決まってるだろオがよ。よくもこの俺の端整な顔を傷つけてくれたな……第一テムエがN01なんて俺は認めてねえ。だからテムエを潰して俺が白陵のN01になつてやんよ！」

「謀反つてわけか……上等だ。まずは裏切り者からブツ殺すぜ！」

その言葉を最後に、いよいよ戦いの火蓋は切つて落とされる。

船木も永漕もほぼ同じタイミングで、床を蹴りあげ一気に間合いを詰めたのである。

そこから先は言うまでもなく 船木と永漕の死闘デスマッチであつた。

「チツ！ よくそんなボロボロの状態でここまでやれるな……」

「アツヒヤヒヤヒヤ！ 伊達にN02名乗つてねえんだよ！」

「チツ、ほざいてんじゃねえぞ！ N01とN02じゃ圧倒的な差があるつて事……たつた今思い知らせてやるぜえっ！」

「上等だあ！ だつたらテムエにもN01に勝てる可能性を秘めてるのは、N02だけだつて事を教えてやんぜエエツ！」

すげえ……本気のカチバトルだ。永漕もすごいが船木もすごいぞ。さつきあれだけボコボコにされたつてのに、永漕とほぼ互角の勝負を展開している。

体力全開だつた俺でさえ、さつきまで散々ボコボコにされたつてのに……。

確かに、あれだけの差しかないんなら……船木のヤツ、永漕に勝て

るかもしれないな。

「圭介っ！」

その時、突然伊吹が俺の右手をガシツと握ってくる。

その目は何かを訴えているようで、俺は思わずドキッとしてしまった。

……なんなんだよ。今真剣な時だったのに余計な事を考えるなよ、俺。

「な、なんだ？」

「逃げるわよ、あの船木って人に任せよう」

「で、でも！」

「いいから！ とにかく走るっ！」

「おわあっ!？」

永淵と船木が激闘を繰り広げる中、俺は伊吹に引っ張られる形で戦線を離脱した。

## 第49話 男なら拳で語れ！ (後書き)

後書きトークコーナー

圭介「さて、本日は作者の友人からの苦情を紹介！ もう特に目的のない学園コメディーモノ飽きたんだけど、別なモン書けやコラッ」

大吾「確かに、処女作からず〜っと学園モノ執筆してりやマンネリ化するよなあ〜。魔法とか超能力とかファンタジー的要素入れて誤魔化してるけど」

圭介「じゃあ結局何すりゃいいんだよ……」

大吾「そうだな……特に目的がないってのが問題なんじゃねえか？  
というわけで僕は、最初から主人公達にはある目標があるストーリーを提案する！」

圭介「おおソレいいな！ 例えばどういふのだよ!？」

大吾「プラスバンド部の存続を賭けたコンクール対決ってのどうだいエビ?」

圭介「むがあ〜！ エビって呼ぶな！ それってただのパクリじゃねーか！」

大吾「んん〜。じゃあ不幸体質の主人公の家にダンボールで神様が送られ」

圭介「兄さん、それもパクリですよ！ どーせ神様の一人称が妾な



「んだろ!?」

大吾「じゃ、じゃあ貧乏な主人公が自分そっくりの人と会って、その後色々あって影武者のバイトを」

圭介「うにゃ! 失敬、失敬ですよ! これだけパクリ連発ってゆソフトに失礼だろーがっ!」

大吾「うるせえ! 佐 みたいな妹が欲しいよぉ〜!」

圭介「馬鹿野郎! 佐 もいいけどやっぱりひ ただろ!」

大吾「大体圭介は最近の話ばかりして。僕はちゃんとぶ ばんからプレイしてるんだぞ! 僕はエビから攻略したんだからな!」

圭介「俺もぶ ばんから初めてぶ くすもプレイしたわ! ちなみに俺は須 たんを初めに攻略したぞ!」

浅間部長「……これ、ネタ全部わかる人いるんだろっか?」

第50話 / 戦いの結末は…… 前編

伊吹に引つ張られるまま、工場内を移動する。

しかし、散々永淵にボコボコにされ、体力も失っているのだろうか。伊吹は途中で息を切らして立ち止まってしまった。

狭い通路に黴臭い空間、ゴミや工具が廊下の端に散乱する……廃工場の狭苦しい通路。

さつき、俺と暮葉が通って来た場所である。

「はあ！ はあ！ はあ！」

伊吹は苦しそうに荒々しい呼吸を繰り返す。

よっぽど無理して走っていたのだろう。おそらく、もう伊吹の体力は限界に近い。

「大丈夫か、伊吹？」

「わ、私は平気よ。それよりあんたも随分殴られてたけど大丈夫なの？」

「俺トラックに轢かれても平気なんだぜ？ 永淵の拳とか全然効かねえから」

「そう？ 結構痛がってたような気がするけど……」

「き、気のせいだ！ あんな痛みどうって事ねえから！」

「結局痛かったのね……っ」

うわあ、伊吹さんがジト目で俺を見ている。そりゃあまあ、普通はぶん殴られたら痛いよ。

いくら俺だつて鋼の身体をもってるワケじゃないんだから。

でも、こんなの伊吹が味わった痛みなんかと比べれば、まだまだ甘いもんだろつ。

永渕から味わった痛み。俺から味わった痛み……俺から？

……そうだ、今丁度俺と伊吹は二人きりだ。だったら昼の事を謝るいい機会なんじゃないか。

善は急げだ。早く伊吹に昼休みの事を謝ろつ。

「……なあ、伊吹」

「なによ……圭介」

俺が伊吹に声をかけ伊吹もそれに答えると、この場に沈黙が続いてしまつ。

なにしてんだよ俺、とにかく謝れよ。

許してもらえとは思っていない。だけど……土下座くらいはしないと。

だから俺は 地べたに手をつき頭を下げ

「ごめん！」

「え……ちよ、あんた……なにを？」

「あの時、俺は伊吹を好みのタイプって言った。伊吹が折角誤解を解くために恋人のフリをしてくるっていうのに、それを勘違いして無理だとか勝手な事を言ってしまった。本当にごめん！俺を……ぶん殴ってくれ！」

やべえ……これはマジでぶん殴られるかもな。  
しかも、いつもの冗談では済まされなくらい強烈な一発を。  
でも、悪い事をしたのは俺である。それでぶん殴られるんなら何の  
文句も言えない。

「ちょ、ちょっと……頭上げなさいよつ、なにも土下座なんかしな  
くても……っ」

しかし、帰ってきた伊吹の反応は予想外のものであった。  
何故だか彼女は土下座をしている俺に対し、心配をする言葉をかけ  
てきてくれたのである。

……どうしてだよ、心配される権利なんざ俺にはないのにっ。

「……………」

「……わ、わかったわよ。あんたがそのままでもいいならそのまま  
いい……っ」

そう言った伊吹は次の瞬間　自らもしゃがみ込んで、俺の肩に優  
しい手を置いてくれた。

俺は伊吹の予想外に行動に思わず反応し、顔をあげてしまった。  
視線の先には、今にも泣きだしそうな伊吹の姿があった

「い、伊吹………?」

「これなら、嫌でも顔をあげちゃっつでしょ?」

「な、なんでだよ………」

「わ、私もその……圭介はいつもの冗談を言っただけで、無理とかそういうのもあんたの優しさからだってわかってる。それなのにわけもわかれないで逃げちゃって、勝手に永淵に捕まって……私のほうこそごめんなさい！」

なんだよ、珍しく素直だと思ったら謝罪かよ……。謝るなよ……ほとんど俺が悪いのに、伊吹なんて悪い事はしていないのに。

伊吹は犠牲者だ。俺や永淵にいいように振りまわされた……ただの犠牲者なんだ。

その犠牲者が加害者に謝るなんて。俺はただの加害者だったのに。

「いや、伊吹が謝る事なんてないよ。俺が過去に永淵をぶっ飛ばしたからこんなことになっちまった。なにより、今回は俺が無意識に伊吹を傷つけるような事を言っちまった」

「……っ、やっぱあんたって鈍感ね！」

うう……怒鳴られてしもうた。

伊吹には何度も言われ、黒木にはそれが理由でぶん殴られたんだが、俺ってばそこまで鈍感だったのか。俺、色々な意味でダメ人間だな……。

「ごめんなさいっ」

「……っ、だああもう！ 謝るの禁止！ 折角助かったんだからもう喧嘩はここまでよ」

あんなら、伊吹に謝るのを禁止されてしまった。しかも、この時の伊吹はいつもの伊吹に近い表情をしていた。

……いや、微妙に違う。いつもと違って何だか爽やかな印象を受ける。

どういう事だ。珍しく伊吹が本当に可愛い女の子に見える……。

「ゆ、許してくれるのか？」

「ま、まあ。ばか圭介にしては謝るのが早かったから。と、特別よ特別！」

「……………」

頬をほんのり赤く染まっていたが、言っている事はいつも通りで、しかも俺から視線を逸らしていた。

はたして、俺は本当に許されたんだろうか？

確かに伊吹はいつものツツパリ伊吹ちゃんには戻ってくれたが……。

「ハア、ハア……へへッ、なにハッピーエンドっぽい事しちゃってんのよデメエら」

「……………!?!?」

その時、俺らの目の前に信じがたい事が起こってしまった。

汚れた制服に殴られた跡が沢山の顔面、口や鼻からは流血しており息も切れている。

ボロボロではあるものの、相変わらず凶悪で不敵な笑みを浮かべる永瀧の姿……。

ここに永瀧がいるって事は……ふ、船木は？

「な、なが……ぶちっ？」

「てめえ……船木はどうしたんだよ！」

「ああ？ ククツ、死にかけたゴミを潰すのにそこまで苦勞はしねえよ」

まさか、船木の野郎がやられたつての……。

さっき見た時はほぼ互角、どっちが勝ってもおかしくはなかったのに。

永淵……やっぱりアイツ、ただのヤンキーにしてはバケモノみたいに強い。

俺らが中1の頃の話だから5年くらいかな。一体5年間で何があったんだよ……！

「け、圭介……っ」

伊吹は震えている。もう伊吹はさっきまでのように強気にはなれない。

彼女は永淵に怯え、小刻みに震えながら後退りをする。

ただし、口では俺の名前を言っていた。

どうしてそこで俺の名前なのかはイマイチわからんが……とにかくこうなったら手段は一つ。

「大丈夫だ伊吹ちゃん。藤島を殺した後にたっぷり相手すつからよ」

「……ッ」

「怖がんじゃないよ……俺、経験は豊富だからよお？」

永淵が下心が丸見えなセリフを吐いた直後、俺は伊吹を庇う様に前

に立つ。

そうやって永淵の前に立ちふさがるのである。

「させねえよ……指一本触れさせねえ！」

「ハツ……テメエは伊吹ちゃんの王子様のつもりかよ？」

「王子様？ ハツ、確かにそれはいい響きだな。でも、俺は伊吹の王子様なんて大層なモンじゃねえよ」

「だったらなんだよ！ 言ってみろやコラアツ！」

俺は王子様でもなければ勇者でもない。武士なんてもんでもなければ騎士でもない。

そう 俺にカッコいいジョブなんてものはない。

ただ、それでも一つだけ確実に言える事がある。

それは昔からそうであって、これからもその事実は永久に変わる事がないもの

「俺は伊吹の幼馴染だ！ 伊吹は俺にとって大切な存在なんだよ！」

「け、けいすけ……っ」

「そんな大切な存在を傷つけるてめえの腐った根性を、今ここで叩き直してやる！」

永淵は船木との戦いで傷ついている。しかも少しばかりが疲れているようにも見える。

という事は……今なら通常モードでも永淵に勝てるかもしれねえ。

口づけなんて言う相手とっても悪いし、何より恥ずかしすぎる事を



しなくてもいいかもしれない！

「おもしれえ雑魚だな。いいぜ、やれるもんならやってみるよ？」

「永洌……」

俺は、音もなく両方の拳を握りしめた。

永洌もボクシングのように構え、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべる。

「さあ来い暴力魔！ もう一回俺を倒してみろよ……今の高校でも皆に嫌われるがいい！」

「永洌イイイイイイイイイツ！」

叫んだ俺は、永洌に向かってて全力で走る。

永洌は後ろを下がる事はなかったが、右手をズボンの中に手を突っ込んでいる。

ガサゴソとズボンの中をいじくる永洌。なんだ、アイツは何を企んでいる？

そう思った 刹那、永洌はズボンの中から伸縮式の警棒を取り出した。

あんなのをズボンの中に隠していたのか……って、無駄な事を考えている場合じゃねえ！

「ハッハッ！ オオオオラアアッ！」

永洌は一気に駆けてきた。念の為に拳を顔の前に構えておくが、その判断は正解であった。

十分な距離まで近づいた瞬間

俺の耳にビュン！という風を切る

音が聞こえる。

音の正体は当然、あの警棒が振られた音であろう。

「ッ！」

こめかみを狙った一撃を左腕で防ぐと、なにやら鈍い音が立つ。

……まあ、普通なら骨にヒビでも入りそうな一撃である。

でも俺は違う。俺の体質ならこんな一撃　　どうってことねえんだよ！

「油断してんじゃねえぞ！」

「ッ、アッ！」

思い切りのいい膝蹴り。鋭利な膝が痛々しく俺の腹部を突く。いきなり襲ってきた腹部への痛みにも、思わず顔を歪めてしまう。だがたったそれだけだ。

永洩の攻撃自体は確かに高いし、不良とは思えない腕っ節の持ち主である事は確かだ。

だけど……所詮永洩はただの人間である。増してや背負ってるものなんてなにもない。自分の為だけに戦うしようにもないヤツだ。

俺にはそんなヤツの攻撃なんざ、全然効かねえッ！

「うおおおおおおおおおつ！」

「ッ、ばあつ

「！」

腹を抱え込んでいた為に低くなっていた俺の頭。

それを一気に上へ突き出し、永洩の顎へ頭突きを仕掛ける。

ゴン！という衝撃的な轟音が鳴り、さらに永淵の口からは白くて小さなモノが飛び出していた。

コイツ、今の一撃で前歯でも折ったのだろうか？

「うう……あつ！ て、テメエツ！」

目を見開き驚いた表情で俺を見る永淵。

ヤツは俺を見てはいるが、どんな素人でも攻撃を当てられ程に隙であつた。

永淵晃……コイツは多くの人の心を踏みにじり、なにより大切な幼馴染を傷つけた。

俺はコイツが絶対に許せねえ。

たかが復讐という目的だけで、全く関係ないヤツまで巻き込みやがつて……

皆が感じた恐怖や悲しみ、そして痛み……。

「全てを思い知れ……」

一瞬で間合いを詰め、懐奥深くへと突っ込む。

そして、俺の最大の武器である右拳に全力を注ぎ込み。

「このクソ野郎がアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

咆哮ほしゅうと共に、俺は全てを賭けた全力の一撃を放った。

ドン！と、顔面に打ち込んだ拳の勢いで永淵を薙ぎ倒す。

埃まみれの床に倒れた永淵はピクリとも動かない。

汚い床に転がる永淵を見捉え、荒々しく乱れた呼吸を呼吸を整えながら

「もし、また伊吹や皆にちょっかいを出すってんなら……またこの手でぶん殴ってやる！」

拳を突き出した俺は、倒れた永洵に確かにそう伝えた。

永洵にこの言葉が聞こえているかは微妙だけどな。

とにかく、永洵を倒した事によって全てが終わった。

今回のふざけた騒動。そして、おそらく俺の高校生活もここで……。

第50話 戦いの結末は…… 前編 (後書き)

後書きトークコーナー

純奈「ぶっちゃけクソ介ってテンプレ主人公すぎるよね!」

圭介「は、なんで?」

純奈「バカだし時々ネガティブだし、でもヒロインの為に奔走しまくる上に喧嘩はそこそこ慣れていて、臭い台詞が得意で……ほーらテンプレ主人公だよ!」

圭介「悪かったな特徴なくて……」

純奈「そうだよ! というわけで今日からキャラ変えようよ!」

圭介「どういう風に?」

純奈「とりあえず……青いツナギでも」

圭介「待て待て待てエツ! 俺はどここの自動車修理工だよ!」

純奈「だったらイケメンになって余計キザなセリフを言って。そして可愛い後輩の男の子と」

圭介「それなんてBLアニメ!? しかもイケメンになれとか無理だろ!」

純奈「だったら気弱になってみれば? すると肉食系のイケメン男

子がクソ介をバツクから

「

圭介「生駒……お前、腐女子にでもなっちまったのか？」

第51話 / 戦いの結末は…… 後編

「おお、圭介と国宗さんが帰ってきたよ！」

「ふう……今回もまた、藤島君に助けられたな」

ようやく工場の外に出ると、そこには割とピンピンしている重原やポロポロの三馬鹿。

そして、救出された人質達や暮葉の姿もあった。

……俺はあの後、永淵をその場に放置しておいて、疲労でマトモに動けない伊吹をここまでおぶってきた。

背負うまでにちよつと揉めたが、結局はこうなってしまったのである。

しかも、伊吹は一度背負うと眠たそうな子供のように静かであった。

「けーすけ様ああ！ ぐ、ぐ無事なのですか！？」

「圭くん！ 伊吹！ 大丈夫！？」

「圭介！ あの坊主アタマに散々殴られてたけど、平気なんだよな！？」

暮葉に小坂にあかりが駆け寄ってくる。

ハハッ……伊吹だけかと思いきや、俺も心配されていたんだな……。

「け、圭介……っ。そ、そろそろ降りるっ」

「え？ お、おう！」

流石にみんなの前だと恥ずかしいしな。俺は姿勢を低くし、伊吹を背中から降ろした。

それでも、若干小坂の顔がニヤニヤしているのが気になるが。あと、なんであかりは不機嫌そうなんだ。

やっぱり永洲と殴り合いなんかしたからであろうか？

「ねえ伊吹、ホントに大丈夫？」

「わ、私は別に平気よっ！ それより亜紀は平気なの？」

「うん。あたしも怪我自体は大したことないから」

笑顔なあたり、小坂は本当に大丈夫なのだろう。

よかった……確かに小坂は人質の中でも一番軽傷っぽいしな。

問題はあかりだな。さっきから苦しそうにお腹を押さえているし。

「あかりは大丈夫なのか？ 腹押さえてるけど痛いのか？」

「気にするな。ちょっと殴られただけなんだからな。あたいは別に平気なんだからなっ」

「平気ならいいけど無理だけはするなよ」

「あっ……ありがとうっ」

恥ずかしそうに顔を伏せつつも、彼女は俺にお礼を言ってくれた。別にお礼はいらなかった。ただ、わかってくれるならそれでよかった。

とにかく、あかりはいい子だ。だからこそ無理はして欲しくないんだ。



無理のし過ぎで倒れたのがちょっと前の話だしな。

「それよりけーすけ様は大丈夫なのですか！？ お怪我はないですか！？ 無理とかされてないですか！？」

最後に暮葉、場合によってはあかりよりも手間のかかる子である。その理由はご覧の通り、暮葉はやたらと心配性だからだ。

「暮葉も心配性だなあ……俺は何発殴られたって平気だって何度も言ってるだろ？」

「で、ですけど……ッ！」

「だから心配し過ぎだよ。永洌結構弱かったし！」

「……………」

あ……あれ、なんで皆さんジト目で俺を見ているんですか！そりゃあ確かに、永洌がすごく弱かったというのは嘘だけど。

「すみません、調子乗り過ぎましたアツ！」

「……………ぷっ！ あっははははははは！」

エエッ！ちよ、今度は伊吹さんが大笑いし始めた！

それに釣られてあかりや暮葉、小坂とか後ろの男共まで笑い始めたぞ！？

ちよっと待て、俺そんなにおかしい事した！？

「圭介っ！」

「ん、どした？」

機嫌よく、俺の僅か50cm手前に飛び出してきた伊吹に訊き返すと、伊吹は嬉しそうな笑顔を浮かべる。そして、そのまま唇を動かして

「あ……  
ありがとう」

一生懸命な、たったの一言なのに心がこもっているお礼を言った。それも、中学のあの一件以来中々見せてくれなかった、満面の笑みで

「そうだな……圭介、ありがとうな！」

「ありがとう、圭くん！」

そして、伊吹に釣られてなのか、みんなが俺にThank youを言ってくる。

あかりも伊吹のように満面の笑み、小坂までもが機嫌の良さそうな笑顔を浮かべていた。

「僕もお礼がまだだったね。ありがとう藤島君、おかげで助かったよ」

「圭介が頑張ってくれたから戦いは思った。俺からも礼を言っよ、ありがとう」

「お、お前ら……」

みんなが俺にありがとうを言ってくる。

その言葉をただ受け取る俺。なんだろう……胸のあたりがふわふわして落ちつかないな。

こう、なんとというか……言葉の一つ一つが妙にくすぐりたい。

「けーすけ様！ よかったですね！」

「あ、ああっ」

でも、こういうのもいいな。

こんなのがずっと続けばいいと思う。多分続かないとは思っけど。

……俺は永淵を倒してしまった。いや、俺のせいでここまで大きな暴力沙汰が起こってしまった。

多分、俺はただじゃ済まされないだろう。停学……いや、下手したら退学だな。

だけど、そんな覚悟ならとっくの昔にできている。覚悟の上で俺は行動したんだ。

だからまずは そんなネガティブな事を考える前に、皆で家に帰ろう

それから数時間が経った、ここは自宅ではなく国宗家。

伊吹はかなりお疲れの様子だ。正直俺も疲れているが、俺とは違って伊吹はただの人間である。

それなのに永淵の攻撃を受けたのだ。食らったダメージが俺とは決定的に違うのである。

そんなお疲れの伊吹を俺は放っておけなかった。だから俺は

「やきそばしか作れねえけど、それでいいか？」

「うん……焼きそば大好きだから。それに、助けてもらったのに贅沢なんて言えないわ」

「そっか」

俺は伊吹に微笑みかけた。

そうだったな。確かに伊吹は焼きそばが異常なまでに大好きだった。だから、家事スキルがほぼ0の俺でも焼きそばだけは作れるんだ。

結局、俺は自宅には帰らなかった。

いや、この後帰るつもりではあるが直接は帰らなかった。

だって……今の伊吹を一人にはしたくなかったから。

国宗家は父親が中々帰ってこない上に、母親は父と既に離婚しているのである。

その離婚の理由がいわゆる薬だ。母親は伊吹がまだ幼稚園児の頃、覚醒剤の所持で逮捕されたらしい。

当然旦那である父親も疑われ、結局身の潔白さは証明されたものの、そんな事があつたせいで国宗家は近所から散々言われていたようである。

国宗さんには決して関わるな。

その話は子供達にも広まり、あの頃の伊吹は野郎共に結構ひどいじめを受けていた。

たまたま近所だった俺の親だけは親父さんと仲良くし、俺や葵も伊吹とはずっと仲良しだった。

でも……伊吹は小学校に上がるまでは孤独だった。

今でも母親の消息は不明であり、父親は俺の親父みたいに仕事が忙しくて帰ってこれない。

学校では友達に恵まれていても、家庭内では伊吹はいつも孤独だ。

「……よし、結構上手く出来たかもな」

俺が回想をしている間に、丁度焼きそばが出来上がった。

焼きそばはやっぱソース焼きそばだよな。うん、青海苔と紅生姜がまたいい雰囲気を出している。

「伊吹、焼きそばできたぞ〜」

俺はそんな自信作の焼きそばをテーブルに置き、テレビを見ていた伊吹を呼んだ。

「お、おいしそう……っ」

「おう。今日は腕によりをかけて作ったからな」

「あれ、あんたの分は？」

「多分暮葉が晩御飯作って待ってると思うから。俺はこの後戻って家で食べるよ」

「なによ。も、もしかして私が食べ終わるまで居るの？」

「食器洗いに風呂沸かしに、あと入浴の面倒も見ないとな」

「な、なにさり気なく一緒に入ろうとしてんのよ！ ばかけいすけ！ へんたいっ！」

俺の作戦は大失敗！

顔を赤らめ、少し機嫌を悪くした伊吹は俺へと飛びかかり、いつも

のよう引っ掻き始めたのである。  
全く、何度も思ったけどコイツはツン猫かよっ！

「ちょよ！ ふ、風呂は冗談だから引っ掻くな！ とにかく伊吹は怪我人でお疲れなんだから。食器洗いと風呂沸かしまではやっておくよ。他にも困ってる事があったら言ってくれよ」

ああ……エロゲーならここで入浴イベント発動、エロいCGも回収できるというのに。

……やっぱり伊吹はガードが硬いな。

まあ、簡単にホイホイついて来ちゃうのもどうかと思っけど。

「……ねえ、圭介」

「ん、どうした？」

恥ずかしそうに俯きながら、俺の名前を呼ぶ伊吹にそう訊き返す。すると伊吹は何かを言いたそうに唇を動かし、そして

「……ありがとうっ」

一生懸命に、不器用ながらも伊吹をお礼を言ってくれた。

本日二度目である。なんとというか……不思議な気分だ。

だって、伊吹にお礼を言われたのなんてすごく久々な気がするからだ。

「べ、別に構わん……っ」

少し言葉が詰まり、その上素っ気のない俺の返事。

俺は照れいてるのだらう。自分の顔だから見えないが多分俺の顔は

赤いハズだ。

「……………ねえ、圭介」

「ん、今度はなんだ？」

また、伊吹が恥ずかしそうにしながら俺の名前を呼ぶ。今日は随分と伊吹に名前を呼ばれる日だな。というか、ここまでベツタリ伊吹と一緒にいた日も久々な気がする。そんな伊吹の次の質問は。

「も、もしまた……………圭介だけが悪者にされたら……………っ」

「……………」

「そ、その時はその……………っ。し、仕方ないから面倒くらいは見てあげるわ！」

がく……………っ。何か大切な事を告げられるのと思いきや、伊吹はいつも通りであった。

でもやっぱりいいな。こうして、わかってくれる人がいるのは。

それに、今の伊吹の言葉は洒落にならねーかもしれないし。

バシたらホントに下手すりゃ退学だもんなあ。退学になった瞬間、俺は無職になってしまう。

退学させられたヤツに仕事をさせてくれる会社とか、もう一度勉強をさせてくれる学校なんて存在しないだろう。

退学になると本当に人生が終わる。そう考えても強ち間違いではない。

そんな俺を、伊吹は面倒見てくれると言っているのだ

「……………」ありがとうな

自分が情けないけど、事實は受け止めなければならぬ。

何より、俺なんかの為に微妙な優しさを伊吹は見せてくれた。  
だから、俺は伊吹に対してお礼を言ったのである。

……………はあ、それにしても。俺は本当にこれからどうなるんだろつな



第51話 / 戦いの結末は…… 後編 (後書き)

後書きトークコーナー

圭介「野オオ原くウウウウン！ オマエは先生キャラとしてどうなんだよ。わかってんのかア、アア!?」

野原「テメエなに言ってやがんだア……アア!? 学生の間際でいい気になってるとお、潰すぞコラア!?」

圭介「ぐはっ！ すみません！ 台本に書いてあるモンで……ッ！」

野原「台本に書いてあるからってよお！ 何喋ってもいいと思ってるのか!?」

圭介「ち、ちなみに伊吹も内心アナタの事が嫌いでした」

野原「伊吹ちゃんは可愛いからいいんだよ！」

暮葉「拙者もけーすけ様を暴行する人は嫌いなのです！」

野原「いい事言っじゃんっ！」

伊吹「……なにこれ？」

## 第52話 はがない圭介、弱い圭介

「期末に出るからしつかり覚えとけよ。わかったかなマゾヒスト君ども？」

……あれから一週間後。何もかもが元の日常に戻った。  
いや、まだ戻っていないモノがあるけど。

あかりが思いのほか重傷だった為に入院。なんでも吐血するほどお腹を強く殴られたらしい。

部長もすっかり落ち込んでおり、写真部はあかり入院中は活動을自粛するんだとか。

お見舞いに行きたかった所だけど、校内で部長すら見かけないし。

行きたくても場所がわからなくて行けないという……あかり、大丈夫なのかな？

浅間家の家計がヤバのは俺もわかっている。あかりの入院費とか……うん、心配だ。

そして、現在野原先生の授業をかつたるそうに受けている俺。

結局俺の日常は崩壊する事がなかった。

そりゃあ、ちよつとは説教を食らったけど……でもそれだけで済んだんだ。

アイツのおかげでな。

2時間目と3時間目の間の休み時間。俺と暮葉と伊吹は特に要は無いが廊下を歩いていた。

「よかったですね、けーすけ様！」

「ああ、何かあったっけ？」

そんなある時、暮葉が笑顔でそんな事を言っ  
て来たのだ。  
一体何の話だろう。よくわからん俺は  
そう思いましたよ。

「あんだ知らないの？ あの一件の噂が  
広まって皆あんだの事見直したら  
しいわよ」

「え、それって……」

「はい！ けーすけ様を悪者だと思っ  
ていた人が、今はけーすけ様は別に悪者  
じゃないって思ってるのですよ！」

「そうそう。あんだ、校内じゃ正義の  
ヒーロって思われてんのよ」

「ま、マジでございますか！？」

知らなかった……いつのまにそんな  
噂が流れていたとは。  
噂って恐ろしいね。本人が知らない所  
でいつの間にか広まっているんだもん。

でも、今回の噂は悪い方向ではないっ  
ぱいし、正直どうでもいいや。それに  
しても、暴力魔から正義のヒーロー  
ねえ……俺の異名もコロコロ変わる  
もんだなあ。

「もきゅ！ 拙者達は歪曲報道はし  
ないのですよ！」

「そーそー！ よかったじゃない。そ  
れに……あんだの評判がいいと私も  
気分いいしっ」

「ん、なんでお前の気分が良くなる  
んだ？」

「　っ！？　し、き、気分がよくなるとか言ってないわよ！　調子に乗るな変態圭介っ！」

「ぐはっ！」

で、デレ期に突入したと思いきやいきなりこれですか……。

やっぱり伊吹はツツパリだ。ツツパリからツンデレに変わる事なんて……ううっ！

「にゅふふつ　伊吹さん。素直なほうがけーすけ様の気を惹けるのですよ？」

「ば、ばっ！？　き、気を引くとかそんな……っ！　私はこんなヤツを攻略する気ないわよ！」

「攻略って……お前オタクだったっけ？」

顔を赤らめながら攻略言う伊吹さん。

しかし、他人を攻略なんてエロゲーでよく使う用語だぜ。

多分、というか確実に一般人は他人を恋に落とすのに攻略なんて言葉は使わないだろう。

そーかそーか。ついに伊吹もオタクに……フフツツ、いいぜテンション上がってきた！

「むがあゝっ！　あ、あんたのせいでしょ！　あんたのせいで言葉が伝染しちゃったのよ！」

「けーすけ様の趣味が他人に伝染する事、あるのですねえ」

「お前だって葵の趣味伝染してね？　最近家でPNPばっかやって

るだろ？」

「もきゅ！ だってだって面白いんですもん！ レムリアにはあんなものなかったのです！」

「学校でレムリア言うな！ バレたら日本での生活オワタになるだろ！」

よかったあゝ、たまたま一緒にいた人が伊吹で。

伊吹は一応事情を知ってるからな。というか事情を知っている唯一のただの人間だろう。

ん、何故そこに明智をカンウトしないかだって。だって明智は超能力者じゃないか。

異能の力なんか持っていない、ただの人間という枠の中では伊吹が唯一の存在。そういう意味である。

「そうよ。あんたの事が私ら以外にバレたら大変よ」

「もきゅう……申し訳ないのです。ついテンションが上がっちゃったのです……っ」

暮葉ってテンションが高い時と低い時の差が激しいよな。

まるで、昼間は熱いけど夜は寒い砂漠のような女の子だぜ。

……暮葉って小さいし。大事な所も砂漠みたいに何も生えてなさそ……げふんげふん！

「まあいいや。それよりそろそろ戻ろっぜ？」

「そうですねっ！」

「次は物理かあ……まあ早く行こう」

こうして、俺達はぼちぼち教室に戻ったのである。

一時は終わるかと思っただけど、結局終わらなかつた素晴らしいこの日常。

この日常が続いたのも、まさにアイツのおかげである。

昼休み、俺は例のアイツに会いに行った。

いや、正確にはたまたま遭遇したという感じである。

「お？ よお明智」

「お、ふ……藤島つ。おはよう」

「おいクソ介！ 私はスルー？」

「悪いっ、ちゃんといるのはわかってるから心配すんな」

「そっか、でさクソ介、最近町屋くんとはどんな感じ？」

「……………」

案の定苦手な人も一緒にいたけどね。

まあ、生駒については我慢しよう。別に生駒自身は悪い人でもないし。

ただ……いい加減俺ガチホモ説から離れてください！

折角その噂も校内から消えたというのに。つーかまだ町屋くんネタ引っ張ってるのかよ。

「藤島、藤島がガチホモの変態さんだつての……ホントの話なのか？」

「違うわっ!」

「……そうだな! 藤島はただの変態だもんな」

「なんかちつとも嬉しくねえっ!」

もういい加減慣れましたけど……はあ、いつになったら俺〓変態  
つてイメージがなくなるんだ。

変態だつて事はもう認めるけどさ、それを面白がって言いふらして  
いるわけじゃないのに。

出来るだけ真人間だつてアピールしてるハズなのに。

「素直に喜べばいいのに。クソ介はナギちゃんに人生助けられたの  
に」

「まあ……確かに助けられたけどさ」

そう、俺は明智に人生を助けられたのだ。

何の処分も受けずにこうして平穏な日常を送っていられるのも、す  
べて明智が頑張ってくれたからだ。

明智は先生にも随分信頼されている風紀委員である。

その風紀委員の発言力はかなりのものなのだ。多分明智の発言力は  
生徒会もビックリであろう。

そんな発言力があつたからこそ、悪い言い方をすれば先生を脅せた  
のである。

だから、俺は明智にはかなり感謝をしている。ラーメン三杯くらい  
奢ってもいいくらい感謝している。

……でもね、それと俺⇨変態とか俺⇨ガチホモは関係ないと思うんだ。

「そ、そんな低姿勢になるなよ。私はその……友達を救うという当然の事をしただけでっ」

「いや、もう何度頭を下げればいいのかってくれい感謝してるよ。ありがとう明智」

「どっ！ ど、どっいたしまして……っ」

明智は恥ずかしく思ったのかはわからないが、後頭部に手をやって軽く搔いていた。

まあ、照れ隠しって事にしておこつ。

「おいクソ介！ 男のお尻を追うのは勝手だけど、ナギちゃんに手を出したら去勢だよ？」

「なんでお前は話題をそっちに持っていくのかな！？」

もう嫌だ！明智には感謝だけど生駒は何か嫌だ！

……結局、昼休みは明智や生駒と一緒に過ごした。

それはもう当然のように、俺の扱いは変態だのガチホモだのとひどいものであった……。

放課後、今日の俺は一人帰りである。その理由は伊吹は部活で暮葉は小坂に拉致られたからだ。

野郎共は重原は今日は道場、大吾は新作発売だからさっさと帰っちゃった。



明智は明智で忙しいし、浅間兄妹は学校で見てすらいない。

部活もないもんだから青山さんも見かけないし、葵は多分友達と一緒なのだろう。

そして三馬鹿だが……うん、赤佐と大林は元々仲良しだったからいいけど黒木がねえ……。

アイツ、あの一件以来俺を見る度にガンを飛ばしてくるんだよ。

まあ黒木は伊吹の事が好きだし、その伊吹を満足に守れなかった俺が悪いのは分かっている。

でも、それで黒木と殴り合いの喧嘩になるのは嫌だ。だから黒木とは距離を置く事にしたのである。

……こうして見ると、誰も一緒に帰る友達がない。

というか他に友達と呼べる人がいない。他の野郎共は別なクラスだし部活だし……。

はあ……まさに俺は友達が少ない。はがない状態である……。

まあでも、明智のおかげで悪い噂は消えたようだ。

これから1人でもいいから新しく出来ればいいなあ……それと、もう一つ一番重要な事がある。

伊吹を守る。それは幼馴染としての俺の役目だ。

でも今までの俺……いや、今の俺でも満足に伊吹を守る事はできない。

いや、伊吹だけじゃねえな。他のみんなも守らなきゃいけない。

……でも、今のままでは絶対不可能だ。今の俺はすげえ弱いんだ。

俺がこんなに弱かったから……今回のように多くの人々が傷ついてしまった。

「……………っ！」

だから もっと強くなろう。

どんな危険が来ようと伊吹や皆を守れるように……もっと強くなる  
う。

永淵……いや、この前の光秀みたいに異能の力を使う連中だって、  
これから先相手にしなきゃいけないかもしれない。なんたって俺の  
守る対象には暮葉や明智も含まれているんだから。

だから今のままじゃダメなんだ。キスしないと強くなれないようじ  
や……まだまだなんだ。

「……上等だ。もっと強くなって皆や皆の周囲の世界を護ってやる  
！」

俺は拳を力強く握り、沈みかけの太陽に向かってそう叫ん  
でいた。

第52話 はがない圭介、弱い圭介（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「まずい事が発生した……」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「……この小説、ストックが0になった」

伊吹「ちょ！ だ、大丈夫なの！？ 折角順調に更新できてたのに！？」

圭介「大丈夫だ！ 幸い学校の都合で作者は三連休……根性で持ち直すぜ！」

伊吹「し、信じていいのかしら？」

圭介「今までリアル忙しかったけど、夏になって少し余裕が出てきたらしいしな……とりあえず更新ペース保つ為に頑張りますのでよろしく願います！」

暮葉「もきゅ！ 以上、珍しく真面目なお話でした！」

### 第53話、神は言っている……オカシイと！

それは、俺がある決意をした翌日の事である。

いつも通り帰りのSHRも終わり、皆がぼちぼち帰り始めている頃。

「そんじゃあ僕は先帰るな」

「圭介、部活頑張ってね」

「おう、じゃくなお前ら」

さっさと帰りやがる野郎共……まあ仕方ない、アイツら基本的に暇人だしな。

それはそうと、今日から部活があるのである。

先日の一件であかりが重傷を負った為に入院し、その間自粛していた部活が今日から再開なのだ。

その理由はもちろん、あかりが退院して浅間部長の元気が戻ったからである。

「あかりさん、元気にしてるのでしょうか」

「そうだなあ。まあきつとアイツのことだ、部室の扉を開けた瞬間やたらテンションの高い声で挨拶してくるよ」

「そうですね！ そーだけーすけ様！ 拙者は今日の為にいっぱい写真を撮ったのですよ！」

まるで、楽しい事でもあったかのように言う暮葉。

というかいつの間に撮影したんだ。家にいる時はいつもゲームして

いるイメージしかないのに。

ああ、あと最近は葵に変わって料理してくれているな。

正直助かる……暗黒物質ダークマターを食べる必要がなくなるからな。

でもそれだけだ。暮葉がどこかへ外出していただなんて全然知らなかったな。

「ホントかよ。お前いつの間撮ったんだ？」

「にゅふふ。拙者がいつも家でぐーだらしていると思ったら大間違いなのですよ」

「そっかあ、それで何を撮ったんだ？」

「はい！ 便所コオロギにゴキブリさん、あとけーすけ様のベッドの下のえっちな本です！」

「ちょっと待ったア！ ロクなもん撮ってねえな！ しかもいつベツドの下なんて見たんだよ！」

「けーすけ様が寝ている間なのですよ」

しかも居候に勝手に部屋を荒らされ、ベッドの下のエロ本まで発見されてしまった。

畜生。葵にはどこに隠しても見つかるからもう諦めたけど、暮葉に見つけられるのは正直恥ずかしい。

うっ……プライバシーの侵害だ。恥ずかしさで死んでしまいたくない。つちまうよ。

「お前……寝ている人の部屋に勝手に入るってどうかと思うぞ？」

「で、でも！ もしサヴィエトの魔法使いさんに寝込み襲われたら……」

「その心配は殆どないってアンタ言ってたじゃん！」

「ソ、ソナナコトナイデスヨ？」

なんと笑顔でしょう。そして新人声優もビックリなほどの棒読みである。

「……で、結局お前はどこまで漁ったんだよ？」

「けーすけ様の机の二段目の引き出しにしまつてある、参考書のカバーを被せた“快感のマテリア”って本を見つけたあたりまでです！ けーすけ様……そのっ、えっちな本も二次元派なのでねっ」

「やめてえ！ こんな往来で俺の趣味をバラさないでください！」

しかもコイツ、なんでそのエロ本の場所を特定できたんだよ！

滅茶苦茶苦悩した上でようやく見つけた、かなり見つかる確率の低いエロ本の隠し方を実践したのに。

葵には見つかったても、親父やお袋には見つかった事がなかったのに……！

暮葉恐るべし。というか完全プライバシーの侵害だ。ああ、なんだか自害したくなってきた……！

「けーすけ様……拙者はその、けーすけ様の事ロリコンだと思つてましたのにつ」

「俺にそんな性癖はねーよ！」

「あ、でも本棚に数学の参考書のカバーを被せた“みよんなとれーにんぐ”って、どう見てもロリコン向けなえっちな本はありました！」

「ちょ、それは部長に貰った北方 project の……っ」

葵にはバレたけど、それ以外の人に対しては完璧な偽装だったハズ。それなのに……なんで暮葉にバレちゃったんだよ！

折角のレア物同人誌だったのに。俺の嫁の一人であるみよんの同人誌だったのに！

「けーすけ様！ 拙者、けーすけ様の守備範囲が気になります！」

何歳から何歳までOKなのですか！？」

「もうこんな猥談やめようよ！ そんなの暮葉のキャラじゃねーよ！」

それにその、それ以上エロ同人誌について突っ込まれると……。正直、精神的にキツイです。恥ずかしすぎて死にたくなるっす……。母親は息子のエロ本の隠し場所を全て把握しているとは言うが、俺の場合は妹と居候に把握されているようだ。一体なんなんだ……。この色々な意味でおかしい状況は？

結局、俺はその後もエロ本について暮葉にからかわれ続けた。

普通なら変態と引く所であろう。なのに暮葉はどういうわけか楽しんでるようだった。

その上必死にも見えた。まるで……俺の趣味を理解しようとしてい

るような……。

結局、その理由は全然わからねーけど。

そんな事はさておき、ようやく俺達は写真部の部室に到着した。

だが、ここでも俺は衝撃の光景を目の当たりに驚いてしま  
うのである。

「お、お帰り……兄貴っ」

「お帰りなさい……え、えっと……兄さん」

「お兄ちゃんお帰りーっ！」

いつもの質素なものとは違い、悪趣味なくらい金ぴかになってしま  
った部室。

どこから仕入れたのだろうか、高級そうなグラスにはりんごのジュ  
ース。

執事のような恰好をしている浅間部長……うん、この時点で既に変  
である。

だがもつと変な事が目の前で起こっている……そう、それは

「なんで葵がここにいるんだよ！　つーか二人もその作ったような  
妹キャラは何！？」

「そそそ、そうですよ！　不自然ですよ皆さん！」

俺も暮葉も衝撃的な光景を目の当たりに、思わず大声で驚いてしま  
った。

どういっわけでしょうか、青山さんとあかりが妹キャラになってい



ただ。

しかも実の妹までいやがるし。ていうか立派な装飾と執事の恰好をしている浅間部長は何？

「だってえ……葵が圭介はシスコンだって言うからっ」

「わ、わたしもその……葵からそう聞いたので……っ」

「俺はシスコンじゃねえ！あとなんで葵がここにいる！？」

「ああ、彼女も今日から写真部の部員だよ。君の妹みただし、お世話はよろしく頼むよ」

浅間部長は平然とした顔で衝撃的な事実を告げる。

ホント、嘘だと信じたいような事実をね。

「嘘だあーっ！っーか部長もその恰好はなんですか！？」

「これ？ハハッ！コスプレに決まってるじゃないか！」

イケメンだけど中身は残念な超絶変態野郎の浅間部長。

一体、彼のコスプレを誰が望むのであるうか。誰得という言葉がピッタリ合うぜ……浅間部長！

……あと、なんだか頭がクラクラしてきたぞ。

「ああ、頭痛が……っ！」

「けーすけ様あゝ！し、しっかりしてくださいー！」

「だ、大丈夫だ……それより葵、なんだっていきなり写真部に？」

もう色々と面倒だけど知りたい事もいっぱいだし、とりあえず一つずつ聞いていこう。

まず、葵が写真部に入部した理由である。

葵は小中高と今まで部活をした事がない。その分友情を大切にし家事なんかも必死でやっていた。

そんな子だったハズなのに、どういう風の吹きまわしで部活を始めたんだろうか。

葵は人差し指を自分の顎へと当て。

「んーっとね。千早やあかり、そしてお兄ちゃんを追って入部したんだよ！」

両手を開くと、元気よく満面の笑顔でそう答えた。

ああそうか。そういうわけでしたのね。

要するに、このブロンズ妹は俺目当てで写真部に入ったというわけね。

……んじゃあ、次は浅間部長に質問だ。

「次、部長！ この変な装飾は一体なんなんですか？」

「もちろん気分転換」

「ウソつけ！ そんな目的の為に貴重な部費を使っわけないでしょ！」

「ええ。藤島君は気に入らなかったかい？」

「派手だし目が眩しいわ！」

金ぴかすぎる今の部屋。お城で偉い人しか入れないようなレベルである。

もうコレ、どこの昭君之間しょうくわんのまだよ。こんな装飾の為に部費いくら使ったんだよ！

……まあいい。浅間部長は馬鹿だからこれ以上聞いたって時間の無駄だ。次は青山さんとあかりだ。

「次は青山さんとあかり。なんで妹キャラなんて演じてるんだ？」

「それは圭介が喜ぶと思ったから……っ」

「え？」

「あかりの言葉のままです。その……それで葵に聞いて……っ」

恥ずかしそうにしながら、それでも正直に答えてくれたあかりと青山さん。

その葵のアドバイスで二人は妹キャラを演じていたというわけか。

……葵のヤツ、この二人に俺がシスコンだと言いやがったのか。

しかも別にシスコンでもねえし、全く……二人にシスコンだと思われてるじゃねえかよ。

「もきゅ。それならどうしてけーすけ様が喜ぶような事を？」

「ああ、ちゃんとしたお礼がしなかったんだよ」

暮葉の質問に真っ先に答えたのは、残念なイケメンこと浅間部長である。

あかりと青山さんの間に割って入った彼は、穏やかな表情で俺と暮葉を見ていた。

「部長……どうしてですか？」

「ボクらがまたこうしてここに集まったのも、藤島君と木下君のおかげだからね。だから女子陣はシスコンの藤島君の為に妹キャラを演じ、木下君は女の子だからこのボクが執事さんの恰好をしてご奉仕を」

「拙者は別に部長さんのお世話はいららないのです」

「ぐはっ！　そ、そんなあっ！」

暮葉に振られて撃沈してしまった浅間部長。なんだ、すごく落ち込んで見えるぞ。

もしかして浅間部長は暮葉を……流石にないか。この人はいつも冗談で生きているし。

「で、では藤島君はどうだった！？　3人の妹達に迫られる気分は！？」

しかも落ち込んだと思いきやもう復活している。

なんとという立ち直りの早さ、やっぱり暮葉を狙っているのとは違う見たい。

「か今度は俺ですか。その話題を俺にも振るんですか。」

「俺も別にシスコンじゃないですし、というか妹は二次元以外に興味ないんで」

「あ、葵の嘘つき！　圭介のどこがシスコンなんだよ！」

「そ、そうですね……っ、その……藤島先輩の反応、どう見ても妹に興味ない感じですよ?」

「そ、そんなあ! お兄ちゃんは絶対シスコンだと思ってたのにな!」

どう考えても葵の勝手な妄想じゃねーか!

そりゃまあ好きではあるよ。家族だしたった一人の掛け替えのない妹なんだから。

でもねえ……そんな危ないほど妹が好きってわけでもないし、やっぱり妹は妹なのである。

これでも世間一般のお兄さんと比べると、十分妹に対して好意を示しているほうだと思っぞ。

「はあ……それで結局、皆はこの前のお礼を俺達にしようとしたんですね……」

「そ、そうだぞっ。あたいもありがとう以上のお礼がしたかったんだからな……っ」

「わたしも、あかりを助けてくれたから……先輩にお礼がしたくてっ」

「葵は入部ついでに面白そうだったから企画したんだよ」

「ボクはお礼がしたかったのと、あと木下君とちゅっちゅしたかったからね」

間部長はもう人として最低だな。葵の企画もロクでもないものだった。

……でも、あかりや青山さんはそれを信じてやっていた。本当に俺にお礼がしたかったかのように。  
おそらく、彼女達の想いは本気だったんだろう。

「ありがとう、気持ちはずっごい嬉しいよ。でも、俺達は別にこんなことされなくてもよかつたんだぜ」

「そうですね。拙者達は言葉だけでも十分なのですよ」

「……え。そ、それじゃああたい達……は、恥かいただけ!？」

「~~~~~ツ」

今更自分達がやっていた事に気付いたのだろうか、二人は顔を赤く染めて恥ずかしがっていた。

……でも、この二人の妹キャラ。案外よかったかもしれない。

元々が美少女な二人だからだろうか。それとも俺達の為に本気だったからなのだろうか。

とにかく、二人も葵も俺達の為に努力をしてくれた。だったらその努力を水の泡にはしたくないな。

「……でも折角のお礼だしな。どっちかって言うらと続けてくれると嬉しいかな」

「拙者も……お姉さんにしてけると嬉しいです!」

俺と暮葉は笑顔になり、優しい口調でそう言ってみると。

「藤島先輩……木下先輩……っ」

「……わかった！ 今日だけあたいが圭介と木下先輩の妹になってやる！」

「葵はお兄ちゃんの実の妹だし、クーにゃんもお姉ちゃんみたいな存在だもん！」

二人＋葵は嬉しそうな表情を浮かべてくれた。  
ハハツ、なんだかこういうのもいいかもな。

端から見れば奇抜だけどさ、お礼をされている俺はとっても嬉しい気分だ。

こうして写真部も復活し、俺達の日常は完全に元に戻った。

……いや、元に戻ったんじゃない、パワーアップと言ったほうが正しいかな。

だって今日から myシスターである葵も写真部の部員なのだから。

俺と暮葉へのお礼と葵の入部祝いを合わせたような、そんなパーティーは何時間も続いた

「……あの、ボクが存在なかったことにされてないかい……？」

第53話、神は言っている……オカシイと！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「ふう！ 0時の更新には間にあつたぜ……」

伊吹「で、でも13時の更新はどうなのよ？」

圭介「大丈夫、それは実現できる。というかなんとかストックでき  
そうな段階らしい」

伊吹「作者は学生らしいけど、よっぽど暇人なのね。だから彼女と  
か出来な」

圭介「コラッ！ そういう事言わない！」

暮葉「そついえばけーすけ様も彼女いないですけど、けーすけ様も  
暇人だから出来ないのですか!？」

圭介「お前は俺をショックで殺す気か！ うあああああ〜！」

浅間部長「恋愛資本主義社会って残酷だよね……」



## 第54話 / 凶悪な男と特異点？

世の中には、決して触れてはいけない真実がある。  
真実は常に真つ暗で血みどろで……それを知った瞬間“普通”には  
戻れなくなる。

そんな闇の秘密が世の中には数多く存在している。

これは永淵との戦いが終わり、平穏な日常を取り戻した圭  
介達が知らない間に起こった真実だ。

\*

6月15日の深夜。

今日は風が強い……その上曇り空だ。

オレは東京都民だったのに、この日は東京から少し離れた古宇坂つ  
て所を歩いていた。

ただ、目的を果たす為だけに。

「はあ！ はあ！ はあ！」

オレから逃げようとする一人の女の子。

歳は大体オレと同じくらい、多分高校生くらいの女の子だろう。

女の子の恰好はそれは奇抜だ。クソみたいに重そうなロッドに馬鹿  
げた帽子。

外見は見るからに魔法少女である。その魔法少女がなんて事のねえ  
オレから逃げているのだ。

「……っ!？」

「へっ……行き止まりでしたってなあ」

「……っ!」

「さあて、どうすっかなあ。行き止まりって事は、オマエはもうチエックメイトじゃねえの？」

どこまでも楽しいそうに、そして狂った笑みを作って少女にそう語り掛ける。

一方の少女はオレを恐れ振るえるが、それに耐えて戦おうとしている。

ロッドを構え、厳しい視線をオレへと向けてくる。

「んだアその構えは？　もしかしてこのオレ、はやかわゆう早川悠と一戦交えるつもりかあ？」

「……っ!　サヴィエトの魔法使いめ……っ!」

「魔法？　ぎやはっ、イイネそういうメルヘンなの。オレは嫌いじやねえよ。でも違うんだよ……オレは魔法とかそういうのは一切使えねえ。でも、魔法以外のそういう力なら使えるんだよなあ。あと、オレにはサヴィエトってのか何だかよくわからねえな。流石……謎の多い特異点だぜ」

それを告げた

「……!」

刹那、魔法少女はロッドを振りまわしてきやがった。  
ぶん回されたロッドからは火の玉……いいねいいね、アレが魔法つてモンかア？  
でも、所詮は火の玉だよなあ。だったら……そんな程度じゃあこのオレは倒せねえ。

「……………フツ」

火の玉が俺の目前まで迫った　瞬間、その火の玉は俺の前で消滅した。

まるで、燃える為に必要な何かが消えてしまったかのように。

炎は完全に消え去ったのだ。オレは全く熱すらも感じなかった、火傷すらもしていねエ。

魔法少女は驚きを隠せていない。いや、オレが何をしたのかサツパリ理解できていねえみたいだ。

……仕方ねえ。バカみてえな女の為に、少しだけこのオレが講義をしてやるとするか。

「なあオマエ、炎ってどうして燃えるか……それくらいは知ってるよなあ？」

「……………つ、気体が燃焼するのよね……………？」

「まあそうだなあ。んでだ、炎が燃えるには酸素って重要だよなあ？　さて問題です、酸素がなくなっちゃったら炎はどうなっちゃうかなあ？」

「……………つ！？」

「ハッ！ まあ大体は消えるよなあ。炎を消すには水なんかいらねえ…… 空気中の酸素濃度を0にしちまえばいいんだよ。無酸素状態じゃ燃烧なんてしねえしなあ？」

「なんで…… どうして酸素濃度が0になるのよ……っ？」

オレはちゃんと炎が消えた理由を説明したが、それでも魔法少女は納得いかないようである。

…… まあ、確かに消える理由だけしか説明してねえからなあ。

仕方ねえ、このオレが…… 何をやったか特別に教えてやろうか……。

「酸素濃度が0になる理由ねエ…… じゃあそれがオレのせいだとしてたら？」

「……？」

「魔法じゃねえ…… けどなあ。能力で酸素濃度を上げ下げが出来るんだよなあ」

「魔法じゃない？ ま、魔法じゃなかったら何なのよ！？」

「答えは超能力…… もしかして初耳かア？」

超能力 通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力を指すための名称。

科学的にも合理的に説明できず、超自然的な力…… とされている。実際は脳とかいじくれば誰でも使えるんだけどなあ。

まあ、確かにオレは元々超能力を使えた。

一応…… バレたらマズいつて事で超能力者が集まる施設に在籍はしているけどなあ。

けどそんな事は今はどうでもいい。オレは目標を果たすだけだ……  
そうすれば。

「ちょ、超能力……っ」

「まあ確かに魔法と超能力、違いを説明しろっつわれても難しい話  
だけどなあ。ンで、オレはその超能力で風・空気・気圧といったも  
の全般を操作できるんだよ。例えばさつきみたいに酸素濃度をいじ  
くっちまうとかなあ」

オレの言葉を聞いた魔法少女は次の瞬間、ロッドを構えつつオレへ  
と接近してくる。

全力疾走。どうやら魔法が通用しないと思ったからか、少女はオレ  
に接近戦を挑むらしい。

まあ確かに正しい判断だよなあ。魔力つつたっつけか……それを無  
駄に消費せずに済むからなあ。

……でも、魔法少女はまだオレの能力をわかつちやいない。  
オレに接近戦を挑んだって意味はねえんだよ。例えば……こんなふ  
うに。

「が……っ!」

少女はオレに触れる寸前、まるで何かに吹き飛ばされたように弾き  
返される。

言うておくが、オレは少女に触れてすらいねえ。

少女の柔らかい身体、体温、ロッドに打たれる痛みさえ感じていな  
い。

それでも少女はオレにふっ飛ばされた……ぎゃはっ、さてさて……  
オレは何をやったでしょう？

「な、なん……で？」

「言つたら、オレは大気を操作できんだよ……なあ、暴風つてあらゆるものをぶつ飛ばせるよな？」

「……そ、それがどうしたのよ……っ」

「台風で暴風が吹いてみる。看板は吹つ飛ばし下手すりゃ車だつて横転しちまう。それくらい風つてのは強いモンなんだよ……んで、さつきオレは何をやったかっていうとなあ。暴風で膜みてえなモンを作り出したんだよ」

「ま、膜……？」

「ああ、それに触れただけで暴風で対象はぶつ飛ばされる……その気になれば9mm弾はおるか、155mmの榴弾だつて防げちまうんだよ」

それがオレの超能力。最もこれが全てつてわけじゃねえけどな。ほんの一部……本気の1%にも満たねえ程度の力を少女に見せただけだ。

オレが本気を出せば、このあたりは多分吹つ飛ばさるう……ぎゃは。

「う、く……っ」

「隙見て奇襲でもできればオレを倒せるかもしれないけど……オマエじゃ無理だな。このオレに触れる事すらできねえ……死ぬしか道は残ってねえんだよ」

オレはそう言いながら、少しずつ少女へと近づいていく。

チツ、可愛い顔してんじゃねえか。殺すのがもつたいねえ……。でも、殺さねえと目標は達成されねえ。殺す事の先にある目標がな……。あんな……クソみてえな所に関わらねえ為にも。オレはコイツらを殺さなきゃいけねえ。

「うう……うあああああああああああ……！」

「……ぎゃはっ、最後の悪あがきかあ？」

少女は再びロッドを握り、敵うハズのないオレに向かってくる。十分に間合いを詰め、ロッドを振りおろす……オレはそれを避ける事はない。

ただ先程と同じ、暴風の膜を生成して待機するのみ。態々こんなガキを殺すのにオレが動く必要なんてねーんだよ……相手が勝手に自滅するからなあ。

「うぐあ……っ！」

ロッドが膜に触れた瞬間、少女は暴風によってぶっ飛ばされた。その時の衝撃でロッドが手から離れ、いよいよ少女は丸腰となったのである。

オレの眼下には振るえる丸腰の少女……頭から足まで完全にガタガタと震えてやがる。やれやれ……既に戦意は喪失してるってかあ。

「最高に怖いみてえだなあ。さて、そろそろ殺すけど……オマエだつて楽に死にてエよな？」

「……う、く……っ」

「そこで、だ。いい方法があるんだけど……気圧を操作してオマエの身体を押し潰す、それか思いつきり膨張させる……どっちがいいかなア？」

「……っ……っっ！」

狂気じみた笑顔を作って迫ると、少女はさっきよりも震える。目は見開かれ、冷や汗もダラダラと出ている。

ダメージはそれほど受けていないようだが、恐怖で全く足が動かない。

……もう、少女は全てにおいて終わっている状態だ。

「そっだあ……今日は膨張させつかあ。最高に愉快的なバラバラ死体が出来上がるからなあ……」

「……っ！」

「大丈夫……バラバラになるんだぜ？　痛みは感じねえよ」

「……嫌っ！」

「さて……覚悟はできたかな……ふふ、あはは……あひゃはっ！」

オレは気圧を操作する事で、目視可能範囲にあるあらゆる物質を押し潰したり膨張させる事ができる。

今回はそれが人体っただけだ。

さて問題です、人体が思いつきり膨張するとどうなるでしょう？

正解は、たった今気圧操作を行い膨張させ破裂させたあの少女のよ



うに……。

……もう女の子だったかすらわからねえ程、ぐちゃぐちゃのバラバラ死体に……。

「クソツタレ……最高に哀れな死体だ……」

まあいい……これで目標には一歩近づいた。

とにかく、このままこの少女のような特異点を潰していけば……。オレはいつか、あんなクソツタレた場所から

オレは少女の死体を放置し、そのまま夜の古宇坂へと姿を消した……。

## 第54話 / 凶悪な男と特異点？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「……ねえ伊吹」

伊吹「なによ？」

圭介「今回俺、物語を語ってないんですが」

伊吹「確かに、名字も名前も一回も出なかったわね」

圭介「もしかして……主役交代なのかな？」

伊吹「さ、さあ……逆に言うと、あんな凶悪そうな人が今度から主役なの？」

圭介「っーか……あれって一方 行さんだよな？ 絶対一方 行さん 真似てるよね？」

伊吹「そ、そうなの……？」

圭介「前作のフィリーネといい、作者はどっただけ一方 行さん好きなんだよ……」

大吾「そのうち木原くんっぽいのも出るんじゃない？」

野原「ハハッ！ 誰だアこの俺を呼んだ奴はア！？」

圭介&大吾「もういたわ！」

暮葉「一難去つてまた一難……この話どうなっちゃうのでしょうか  
！ 次回に続くのです！」

## 第55話、いつもの朝

6月16日早朝、今日は木曜日である。

週末に迫ると段々テンションが上がってくるよね。

だって……週末は見るアニメも多いし、何より土日という休日が迫っているから！

フフフ……今日と明日学校へ行けばもうお休み。

もうそろそろ春アニメも終わるけど、それはそれでいい。7月からは夏アニメの放送開始だ。

もう夏に何を見るかは決めている。

もう今月はアニメ以外には何もなし、あとは夏アニメ放送開始と文化祭がある7月を待つのみだ。

「圭介っ！ ああもう、やっぱり寝てる……」

「んん……………」

「ほら朝よ、そろそろ起きなさいよ。下で暮葉も葵ちゃんも待つてるわよ？」

ああ……見慣れた天井だ。そして妙に安心できる聞きなれた声だ。

……今日も起こしに来てくれたんだな。

さてと、そろそろ起きようかな。折角伊吹が起こしに来てくれた事だしな。

「……………んんっ、おお……………おはよう伊吹」

「ったく、あんたは私来ないと起きないのかしら」

「一時期来なかった時はちゃんと起きてたろ」

「うっ……そ、それじゃああなたは私がないほうがいいの？」

怒ってるんだか寂しいんだか……伊吹の表情は複雑だった。

落ちつけ俺。ギャルゲーで鍛えた洞察力をフルに活用するんだ。

こういう場合の選択肢は一つしかねえだろ。

「俺は嬉しいけどな。毎朝伊吹が起こしに来てくれるのは」

「っ……し、仕方ないわね！ ねほすけ圭介の為に明日以降も起こしに来てやるわよ」

「へいへい、よろしくお願いします」

なんとというツツパリ伊吹ちゃん、相変わらず素直じゃないぜ。

これじゃあ起こしたいのか起こしたくないのか、サツパリわからないじゃねえかよ。

うっん。エロゲーで鍛えた洞察力って現実でも使えるものなのかな？

「それじゃあ、私は先に学校行くから」

「ん、何かあるのか？」

「部活の朝練があんのよ。運動系はあんたがやってる文化系と違うんだから」

「文化系だって吹奏楽部とかは朝練あると思うぞ？」

「だああもう！ 細かい事はいいの！ それより遅れると迷惑かけ

るから本当に先に行くね！」

「わかったよ。白陵のヤンキーに気を付けるんだぞっ」

「そう何度も襲われないわよっ！」

そう言っつて伊吹はボタンと扉を閉め、ドカドカと階段を降りる音を立てながら下へ行く。

やがて、玄関の扉が開閉される音が響いた所、どうやら伊吹は本当に先に行っちまったようである。

アイツ剣道部でも一番強いしなあ。そういえば、今度大会があるらしいな。

俺もいつものメンバー誘って応援に行こうかな。

……さて、伊吹と会話したおかげで完全に目が覚めたし、そろそろ下に降りようっと。

下に降りると、居間にはいつも通り暮葉と葵が俺よりも早く起きていた。

暮葉は朝ごはんを作っており、葵はテーブルで待機している。

……以前は葵が飯を作ってたんだけどな。まあ、葵の料理は暮葉にとってトラウマだし。

俺としても好き好んでは食べたくない……おいしいんだけどね。その、見た目がグロテスクすぎて……。

「おはようございます、けーすけ様っ」

「あ、お兄ちゃんおはるー！」

「おはよう、二人とも」

しかし、こうして見ていると暮葉の制服エプロン姿も中々似合うもんだなあ。

小柄だけど、何故か時々見せる表情が大人っぽくて……。  
ってオイオイ、なにロリな暮葉に見惚れてるんだよ。これじゃ俺がロリコンみたいじゃねえか。

「お兄ちゃんお兄ちゃん。 葵も久々にお兄ちゃんに料

」

「それより葵、寿司の出前でもとってみないか？」

「ひどい！ 葵はまだ全部発言してなかったんだよ！」

だってねえ……。葵が何を言いたかったかわかつちやったし。  
それが現実のものになるとその……。暮葉のトラウマが。

「せ、拙者もお寿司の出前のほうが嬉しいのです……。っ」

「クーにやんまでひどいよ！ 葵だっておいしいご飯作ってあげたいのにつ！」

すまん葵。たとえお前は本気だとしても、暮葉にとってアレはトラウマなんだ。

ていうか、俺も我慢して食べるのが辛いんだ。  
特にダイオウグソクムシの紫チャーハンを見てからは……。やべっ、頭痛くなってきた。

「にゅふふふ……。っも、もうしわけないのですっ」

「悪い葵。手料理はそのうち彼氏に作ってあげればいいじゃないか」

「彼氏なんか作らないもん！ 葵はお兄ちゃんさえいれば問題ないもん！」

「……………」

うん、その時点で色々な意味でどうかと思うんだ。

現実世界で妹属性のない俺としては、正直ただのいい迷惑である。世の中にはごく少数だけど、妹が彼女だと思われて中々彼女が出来ない。

そんな人がいるらしいからな。

『あちらの路上でバラバラになった身元不明の遺体が見つかりました』

その時、そんな男の声が俺の耳に入った。

今藤島家には俺以外に男はいない。しかし俺はそんな事を喋った覚えがない。

だったら声の主は決まっている。それはテレビに写っている人の声であろう。

台詞的に考えて何か事件でもあった感じである。

映像もどこかの住宅街……………ってアレ、ちよつと待てよ。ここどこかで見た事ある気が……………？

『今日午前4時前、 県古宇坂の民家の前で、バラバラになった人が倒れていると警察に通報がありました。遺体は完全にバラバラな形で身元の特定が困難との事です。警視庁は身元の確認を急ぐとともに、近頃古宇坂市で頻発している連続殺人事件との関連性も視野に入れ、捜査を続けています』



今度は見慣れた光景と女子アナの声……というか、やっぱり古宇坂かよ！

俺と永淵が戦い終わった頃からの話であるが、近頃随分とまあ古宇坂で事件が発生するな。

しかもその遺体というのが、殆ど触れられた形跡がないらしいのである。

全く……同じ犯人が殺しているとしたら、そいつは一体どうやって殺しをしているんだ？

第一、なんでこんなに頻発して殺人事件が発生するんだよ。古宇坂だけでもこれで3件目だ。

「うわあゝ、また殺人事件……怖いねお兄ちゃん」

「そうだなあ。最初の二件は確か女の子だったらしいから、葵も暮葉も気を付けるんだぞ？」

「うん！ だいじょーぶ、葵はこれでも護身術習った事あるもん！」

「はいなのです……」

葵はまあ大丈夫だろう。なんだかんだ言って葵はサバイバルアスペクツの高い子だし。

暮葉も達人級の強さだから多分問題ない。

俺だって身体は丈夫だ。一度刺されたくらいならそのまま逃げるくらいは出来るハズである。

……ただ、気になったのは今の暮葉の表情である。

いつもの暮葉なら「拙者なら全然平気なのですよ！」とか言いそうなのに、どういつわけか今の暮葉は暗い。まるで……強大な敵が迫っている時のアニメキャラのような……。

「どうしたんだ暮葉？」

「もきゅ！ な、なんでもないのでしょ！ さて、そんな事より朝ごはんが出来たのです！」

あれ、急に元気になった。

さっきのあの暗い顔は気のせいだったのか。いや……そんな風には見えなかったけどな。

でもまあ、連日の深夜アニメで俺は結構朝は寝ぼけてるし、そんな風に見えたのかもしれない。

それよりも暮葉の作った朝ごはん。またまたこれがおいしそうだなあ。

白いご飯に焼いた鮭、何かの和風なサラダにお味噌汁。これどこの旅館の朝ごはんだよ。

もうなんというか……暮葉の作った朝ごはんは豪華であった。

「おお！ 今日もおいしいそうだね！」

「っーか俺はもう食ってるけど、うまい！ 相変わらず最高のお味だぞー！」

「あ、ありがとうございますので二人ともっ」

暮葉は恥ずかしそうに少し赤くなりながらも、そんなお礼を言うてくれた。

最近、特に暮葉が来てからの藤島家の朝は、いつもこんな感じである。

伊吹が起こしにきて、俺と葵が暮葉の朝食をべた褒めして。それから、伊吹の部活がない日は伊吹も混ぜて4人で登校。

最近の朝はとても楽しくて、毎朝が楽しみな感じである。

ああ、暮葉という怪しい世界から来た子もいるけどさ、こっついう平穏な日常って素晴らしいよね。

今までが平穏じゃなかったからか、最近は本当にそう思うようになったよ。

……よし、そんじゃあ今日もいい気分だから。

今日も一日頑張って過ごしますか。

## 第55話、いつもの朝（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「皆さん、重大報告です……なんとこの旅、この『魔法少女に会っちゃった場合』がゲーム化される事になりました！」

大吾「な、なんだってー！ー！ー！ー！？」

圭介「ゲームはシナリオを読み進めて選択肢を選ぶことで各ヒロインのルートに分岐するオードソックスな形式。ちなみにヒロインはメイン5人＋サブ2人だ！」

大吾「なにその大ボリューム!? つかどこのエロゲーだよ!?!」

圭介「エロゲ? フッフ、文章読むだけならそうかもな。だが! このゲームには戦闘イベントもちやんとあるんだぜ?」

大吾「は、戦闘イベント?」

圭介「プレイヤーが俺や暮葉とか、とにかく戦闘要員を操作して光秀や永淵とかをぶっ倒していく。格ゲーモードも搭載! もちろんキャラの特性を完全再現!」

大吾「すげえええっ! ど、どんだけ機能搭載してんだよ!?!」

圭介「ちなみに全年齢版と18歳未満は買っちゃダメってのがあるけど、後者はヒロインとのエッチなシーンも収録!」

大吾「もろエロゲーじゃん！　で、でもそれって高いんじゃない？」

圭介「全年齢版はPNPソフトとして発売。新作6090円！　18禁版はPCにて発売、格ゲーモードもあるからちよっとお高いけど、それでも12000円以内になんとか収めたぜ！」

大吾「ぐはっ！　ぼ、ボリュームのわりに安い！　頑張ったな製作会社！」

圭介「発売日は今年の11月30日、みんな予約はもう済んだか！　？　『魔法少女に会っちゃった場合』……是非買ってプレイしてみてください！」

伊吹「嘘つくなぁーっ！」

圭介「ごばあっ！？」

大吾「あべしっ！」

伊吹「み、皆さん！　こんなのデマ、ばか圭介が撒いたデマなんだから！　第一ゲーム化なんてありえないわよ！　しかもその……えっ、エロゲーなんて！　わ、私と圭介がエッチな事するなんて……  
~~~~っ！」

暮葉「それより拙者は、葵さんから借りるのではなくて自分のPNPとモ　ハン3rdが欲しいのです！」

## 第56話 / ちょーのーりよくしや

「……不幸だ」

放課後、俺こと藤島圭介は掃除当番を任されていた。

もちろんたった一人で……はあ、最初は3人いたハズなんだけどな。

「大吾に重原……畜生、アイツら雲隠れしやがったなっ！」

大吾は不真面目だし、重原も大吾の付き合いでたま〜にだがサボるし。

伊吹は部活、暮葉も先に部活に行き用のない小坂はとっくの昔に下校。

そんなわけで俺は、一人寂しく教室掃除をしていたのである

「はあ……畜生、いじめられっ子の気持ちは今よく理解したぜ」

外からは野球部や陸上部の気合いの入った声。

校内からも、まだがやがやと生徒たちが行動している音が聞こえる。どれもこれも楽しそうな音であり、そんな音が孤独の俺の心を痛めつけていく。

ああ、俺も部室に行って早く皆と遊びたいぜ……。

「……あ、変態藤島」

その時、聞きなれたハスキーボイスが耳に入る。

ハスキーボイスな上に俺の事を変態と呼ぶ者、そんな人はこの学校に一人しかいないであろう。

「よお明智。ってか、そろそろ変態ネタから離れないか？」

「胸揉んだ癖に……熊のパンツ穿いてる癖に」

「おいやめる。深すぎる心の傷を掘り返すな！」

思えばあの時、明智に葵がテキトーに用意をした熊さんパンツを見られたせいで、色々と狂ったんじゃないかと思うんだ。

あの後生駒には狙われ、何故かガチホモ疑惑が流れてしまい、その結果伊吹を傷つけ……。

畜生。トイレでズボンを脱がしやがった神崎・H・アリック。俺はためえを永遠に許さないぞ！

「すまない。で、でも事実じゃないか？」

「事実だけ思い出したくない事ってあるじゃん？」

「まあ、確かにな……」

「頼むからもう思い出せないください！ お願いします！」

俺は柏手を打ち、やや頭を下げて明智に頼みこんでみた。

うん、実に情けない光景である。

でも思い出したくないのも事実だ。その為にはやむを得ない行動である。

「私の御先祖を一撃で倒すくらい強いのに、案外中身はチキンなんだな」

「うっせ黙れ！ お前だってパンツを異性に見られるのは嫌だろ！」

「うん。好きな人だったらわからないけど、確かに嫌だな」

「だろ？ 俺だってめちゃくちゃ恥ずかしかったんだよ。もう頼むから傷に触れないでください」

「悪かった……藤島だって男の子だもんね」

なにその　だって女の子だもんね、的なセリフは？

きつと明智は俺を慰めているつもりだろう。しかし何故だ、全然嬉しく思えないのは俺だけか？

「はあ……それで結局何の用なんだ？」

「用はない、ただ藤島が一人で掃除していたから……」

「ん、ああ。友達が雲隠れしやがったんだよ」

「それ……友達って言えるのか？　実は藤島って友達がいな

」

「コラッ、そういう傷つく事言うのやめい！」

リアルに友達が2人しかいなかった時期があつた俺にとって、その言葉は妙にズキッとくるよ！

今でさえ、本当にお願ひ事友達の数なんてそんなにいないのに……。  
はあ……心から友達って呼べるヤツいるのかな、俺。

「大丈夫だぞ……私は藤島の友達だからっ」



「なに悲しい雰囲気作っちゃってんだよ！ いるから、ちゃんと友達いるからな！」

「ホントか？ 木下と伊吹以外の人と一緒にいる所、あまり見たことないぞ？」

「……意外な事実が発覚しました。明智、伊吹のことを名前で呼ぶんだね。」

「ということは二人は意外と仲良しなんじゃ……そんな疑惑が脳内に浮上りました。」

「俺の知らない所で色々な交友関係ってあるんだな。」

「……まあ、俺が友達少ないだけなのかもしれないけど。」

「あのなあ。今日逃げやがった馬鹿野郎どもとはよく遊ぶし、部活の皆とだって結構話せるんだぞ」

「だからって友達とは限らないぞ。藤島、利用されているだけかも」

「妙に現実味ある事言つのがめましようよ、明智さん！」

「すまなかった。リアルパシリの藤島には荷が重すぎたか」

「まだパシられた事ないよ俺！ 一応対等な扱いは受けているぞ！」

「そ、そうだったのか……！？」

「なにその突っ込み所のないマジ反応！」

「もしかして明智さん、マジで俺が友達のいないただのパシリだと思つてたの？」

……もう、そんな人生だったらとっくの昔に自害コマンド選択して  
るよ。

今頃、富士の樹海で身元不明の遺体が見つかっているかもな。

「……お前、どうしても俺をぼつちにしたいんだな」

「もちろん冗談だぞ。友達に冗談も言い合えるくらいじゃないと！」

「そりゃそうかもだけど……悲しくなる冗談はよそうぜ？」

「もしかして藤島……いじめられてたのか？」

「いじめられてはいなかったけど？」

まあ、それに近いくらい周囲から冷たくされた時期がありました。が、  
それも、結構最近まで。特に同じ中学出身のヤツからはね。

思えばそんな誤解が解けたのも、明智が風紀委員の発言力を利用し  
て頑張ってくれたからなんだよな。

ホント、この明智風紗って一人の女の子には頭が下がるよ。

「そうか……じゃあ変態だから女子に嫌われてたんだな」

「もう俺〓変態ネタは飽きたわ！」

「大丈夫……っ、藤島がぼつちになっても私はずっと一緒だっ」

「俺をぼつちみたいに扱っな！」

やたらと変態扱いしてきたら、どうしてもぼつち扱いしようとしな  
ければ、本当にパーフェクトなのに。

容姿端麗、頭はいいかは分からないけど正義感ある風紀委員。  
でも、俺をいじめて楽しむ所があるし……やっぱり明智は残念な美少女である。

というか絶対明智ってさだよね……。

「そうか、それじゃあ……あ、そうだ」

「今度はなんだよ」

「私とした事が、わりと重要な話を忘れていたぞ」

「ああ、重要な話？」

明智が重要な話って一体何だろう。

明智家の問題はもう解決したハズだし、するともしかして明智本人の話……。

ハッ、まさか明智が俺に告白でもするのか！

オイオイもしそうだとしたらどうする。

そんなフラグを立てた覚えは皆無なのだが、でももし本当に告白だとしたら

いや、俺が明智に恋とかしてないから、告白されてじゃあ付き合つかじゃ流石に失礼かな。

でも明智はハッキリ言ってお玉である。それを逃すのも勿体ない気が……。

「うん」

「な、なに真剣に悩んでるんだ？」

「え？ ああいや！ なんでもないツスよ！」

「怪しいぞ、藤島。どうせ卑猥な妄想でもしていたんだろう？」

今ジト目で変態扱いされた……。

ところで、明智に告白される妄想は卑猥な妄想に入るだろうか？  
でもエロ要素はハッキリ言って皆無だ。

卑猥ではないと思うけど……クールだが意外と純粋ビュアな明智には卑猥  
に思える事なのかな？

……ってそんなことはどうでもいい。それよりこのまま変態扱いさ  
れるのは嫌だな。

「お前なあ……俺が悩む〓卑猥な妄想って、流石にそれはないと思  
うぞ？」

「ほ、ホントか？ 変態なのにか？」

「もう変態は認めるけどさ、年がら年中エロい事考えてるわけでも  
ないんだぞ？」

というか、そういう事を考えるのは一日のうち30%未満だ。

これだけは断言できる。俺は至って健全でお年頃な男子高校生なん  
だ！

「そうなのか……って、大事な話を忘れる所だったぞ！ これも藤  
島が変態なせいだ」

「だああもう！ 変態変態うるさいわ！ それで、結構重要な話っ  
て一体なんなんだよ？」

「ああ、実は……藤島。最近殺人事件が頻発しているだろ？」

「え、ああ。そういえば今朝もニュースでやってたな。古宇坂だけでもこれで3件目だぜ？」

殺人事件が頻発するようになったのは、まさに俺達が永洲ら白陵高校を倒してからのものである。

東京で5人、隣町3つくらいで3人、そして古宇坂でも3人である。これほどの大人数が不可解な死に方をしているのである。

触れられた跡もないのに、何故か窒息死していたり……そして、今朝のようにバラバラだったり。

とにかく、殺人犯は人間技とは思えないような殺し方をするヤツらしい。

……全く、どこの殺し屋がやったんだよ。しかも身元がわかる人は女の子ばかり。

しかも、不思議な事に殺害された人々は皆、どういうわけかどこの国の国籍も持っていないらしい。

「うん。その事に関してなんだけど、古宇坂で起きた一件目の事件の現場は私も見たんだ」

「え？　だ、大丈夫なのか？」

「安心しろ。これでも普通の人よりはグロテスクなのに慣れてるぞ」

いや、そういう問題じゃねえだろ……。

ていうか明智は女の子なんだから、少しは怖がるとかしたらどうなんだろっか。

「そうか……でも誰なんだろうな。おかげで周りの誰かが巻き込ま

れないか、不安で仕方ねえぞ？」

「大丈夫だ。殺されているのは何故か無国籍の人達だけ……多分、日本人は大丈夫だと思う」

「無国籍つてのも不思議だけど、やっぱり一番不思議なのは犯人だよな。どんなプロの殺し屋だよ？」

「そこに思い当たる事があるんだ」

明智が犯人に心当たりだと？

んな馬鹿な。もしかして某名探偵的な展開で、実は犯人は明智でしたとか？

……んなわけないか。明智が殺人をやったら必ず触れた跡があるはずだ。

仮になかったとしたら、その遺体は間違いなく焼死体であろう。  
バイロキネシス  
発火能力じゃ跡ナシで殺すことは多分、不可能である。

「……え。マジで仰ってるんですか、明智さん？」

「うん。誰が犯人かまではわからないけど、犯人はおそらく……」

「……………っ」

「超能力者だ」

「……………っ!？」

超能力者って……………それって明智みたいなヤツの事だよな。

例えば明智の発火能力とか。  
バイロキネシス

あと能力名は忘れたけど、あの明智光秀が使っていた風の斬撃。でも、ああいうのを使う人って明智家の人だけなんじゃ……？

「ちょっと待て、明智家の人間以外に超能力者なんているのかよ？」

「いる、そんなの当たり前だろ？ 公にはなっていないけど、日本には超能力開発を行う私立佐井学園。通称“PSI研”が存在しているからな」

「佐井学園？ それって東京に最近できた私立の進学校だろ？」

「表向きはそうだよ。でも実際には表向きは技術開発分野を専攻する“開発科”では、私のような超能力者の育成が行われているんだ」

「なんですか、その某学園都市ラノベみたいなお学校！？」

「ていうか、超能力者を育成する機関って日本にあったのかよ！」

「そこって卒業生とかもいるし、増してや今は情報社会である。」

「よく今まで騒がれずに済んだな……超能力なんて、いいニュースのネタになるのにな。」

「ん、そういえば明智って随分そこについて詳しいな」

「あたりまえだ。だって私、1年の最後までそこに通っていたんだから」

「それってもしかして、初芝に転校する前に通っていたって事か？」

「そ、そうなるな……っ。だって、私は元々能力が発現していて、ある日佐井学園の学園長にスカウトされて……っ」

「それで一度は入学したのか」

「うん……親父殿がうるさかったから家に戻って初芝に転校したけどな」

そのうるさかった親父、きっと光秀がとりついていた頃の話なんだろうな。

それにしても初めて知ったぜ。日本にそんな学園が存在していたっ  
てのか。

確かに、それなら他にも超能力者がいたっておかしくはないよな。

「けど、なんで超能力者が犯人だって思ったんだ？」

「そ、それはその……ちょ、超能力者としての感だ！」

「それ信用していいのかよ!？」

「あたりまえだ！ バラ・ゲラーのスプーン曲げよりは信用できる  
だろっ！」

まあ……明智は実際超能力とかいうのを使えるしね。

バラ・ゲラーのように超能力かもわからないうじよ、ちょっと疑っ  
ちまうけど。

「それで、私は犯人に心当たりがあるのもう一つ、警告に来たん  
だよ」

「警告？ もしかして超能力者は俺を狙ってます〜とかか？」

「違う。藤島は多分平気だと思っけど……あ、危ないのは多分木下



だ

「暮葉が？　なんで……あつ！」

そういえば、殺害されているのは国籍のない人達ばかり。

確かに暮葉は学校には入っている。だがそれはアルファ隊が仕組んだからこそ出来た事なのだ。

暮葉はこの街で普通に日常生活を営んでいるが、日本国籍を持っているわけではない。

それどころか、全世界のどこの国の国籍も持っていないのである。

「わかった……だろ？　だからその、出来るだけ木下から離れるなよ？」

「あ、ああ……わかった」

またまた明智に助けられたよ。おかげで手遅れになる前に気付けた。そうだ……この状況で一番危ないのは暮葉じゃねえか！

畜生、どうして今まで気付かなかったんだよ。

でも、おかしいよな。どうして犯人は無国籍者ばかりを狙って惨殺しまくっているんだろう？

無国籍者連続殺人に何か意味でもあるんだろうか？

「……あ、そうだつ。それはそうと藤島、その……そ、掃除手伝おうか？」

「え？」

「だから掃除だ掃除つ。一人で困ってるんだろう？」

なんだいきなり。明智が暗い話から嬉しい方向に話題を変えたぞ。掃除を手伝ってくれるって、俺としては滅茶苦茶助かる！

「いいのか？」

「い、いいんだっ。その、藤島は友達だからな……っ！」

「……ありがとな、明智」

本当、最近俺は明智に世話になりっぱなしだな。ここまで頭が下がる相手は先生と親以外にはいないぜ。

その後、俺は明智と二人で掃除をし、終わった後はいつも通り写真部の部室へと向かった。

第56話 / ちょーのーりよくしや (後書き)

後書きトークコーナー

凧紗「やった！ 久々にまとまった出番だ！」

圭介「よかったな明智！」

凧紗「セリフも今回は多かった！」

圭介「そ、そうだな……」

凧紗「しかも、なんだか藤島の役に立っているっぽいぞ！」

圭介「あ、ああ……」

凧紗「これからも私の出番があるかな？ いや、主人公になれるかな！？」

圭介「……………」

凧紗「いつその事タイトルも『変態藤島に会っちゃった場合』でいい気がするぞ！」

圭介「いい加減落ちつかんかい空気委員！」

凧紗「なっ！？ く、空気委員……うわああっ！」

凧紗はショックで3時間ほど倒れました。

## 第57話 自己防衛本能【モザイク】

「圭介、あたいの兄貴のシバき方を教えてくれよな！」

「……はい？」

部室に入ると、突然あかりが上目遣いで言ってきた一言。ハッキリ言っただけの意味不明だ。ただ一つだけわかる事がある。

どうやら、あかりは自分の兄である浅間部長をシバきたいようである。

全く……今度はあのバカ部長、なにをやらかしゃがったんだ？

「……なんじゃこりゃああ！」

で、俺が部室の奥まで行くと　なんと浅間部長が全裸で立っていたのだ。

ああ……自己防衛本能で視界にモザイクが。ていうか……。一緒に入って来た暮葉と元々いたあかりの他に、葵や青山さんまでいるのになんで全裸なのこの人！

しかも全く恥じらいとか感じていないっばい。あれじゃあまるで露出狂じゃねえか。

とにかく……ここは公立高校という立派な公共の施設だぞ。

そうじゃなくても自分の家ではない外。更衣室とかトイレとか、そういうものではないただの外。

そんな所で全裸になるって……浅間部長は公然わいせつ罪の現行犯だな。

「け、けーすけ様っ！ な、なんか……下にぶらぶらっつて」

「待て暮葉！ それ以上は放送禁止用語になるからやめろ！」

「ぶ、部長……最低です」

青山さんの反応は普通だと思うよ。俺もそう思うし、多分青山さんが一番普通の反応をしている。あとあかりも引いているし、あかりも正常である。

暮葉もアブナイ事を言いかけはしたが、少し引き気味なあたり彼女も正常だ。

ただ、女子の中にも一人問題児がいて

「うっん……お兄ちゃんのほうが大きいかな」

「てめえは何ガン見してんだよ！ 少しは恥じらいやがれ！」

「ええ？ でも葵が小さい頃よくお兄ちゃんの見ていたし……」

コイツ何過去話暴露してるんだよ。

いや、確かに見られたというか……絶対見られるような状況だったけどさ。

でも、このタイミングで言う事じゃねえだろ！

「なっ！？ け、圭介も露出狂かよ！ このエロスペシャル！」

「藤島先輩……もしかして、最低な人？」

「けーすけ様、露出狂になるほど変態だったのですね！」

「違うわ！ 小さい頃に兄と妹が風呂に入るのってよくある事だろ！？」

そう、お風呂である。

時間短縮の為に親が兄と妹と一緒にいれるというのは、多分よくあることかもしれない。

ただしそれは小さい頃の話だ。もちろん今はちゃんと一人で入ってるぞ。

ていうか、この歳になって妹と風呂に入ったら色々大問題だ。

「せ、先輩。その……何歳まで葵と入っていたんですか……？」

「そ、そうだ！ それによっては許してやるからな！」

「そんなの小学せ

「葵が小6の時までだから、お兄ちゃんは中1だったよ！」

おまつ！バカだろ、確かに事実だけどそれを言っちゃうわけですか！？」

しかも、あの時は葵に迫られた仕方なく入っただけなのに。

おかげで青山さんは青ざめ、あかりもジト目になり、冷たい視線を向けてきちゃってるじゃねえか！

「先輩……そんな歳になるまで葵とお風呂に……？」

「うわっ、流石yes・エロキュア5……ただのシスコンの変態だろ！」

「シスコンじゃねえ！ しかもどちらかと言うと俺は被害者だ！」

「嘘です！ けーすけ様……最近拙者とお風呂に入りましたよね？」

「……エエエエエエエエエエエエエエエエエエツ！？」

驚く三人の女の子たち。当然だ、だって暮葉が爆弾発言をしやがったからだ。

事実だから否定はできないが、わざわざこのタイミングで言うかこのアホは！

しかも、そんなうるうると涙目で語られたら……まるで俺が悪いみたいじゃん！

「無理やり脅して入れたのか！ このエロ口軍曹が！」

「違うぞあかり！ 事故だよ、事故なんだってば！」

「は、入ったのは……事実なんですね」

「ちょ、青山さん？ 事故ですよ事故、不幸な事故があつたんですって。邪な感情は皆無でしたよ！」

「お兄ちゃんズルイ！ どーしてそこに葵をまざてくれなかったの！？」

「お前は少し黙れ！」

もうダメだ、本格的に青山さんとあかりが引いているよ。

そして葵は若干怒っている気がする……いや、一緒に入れなかった事に気分を悪くしている。

そして暮葉は耳まで真っ赤だ。恥ずかしいなら言つなよ……俺の立

場まで悪くなったじゃねーかよ。  
でも、そんな暮葉も流石に責任を感じたのか。

「み、皆さん。その……けーすけ様の言う通り、本当に事故なので  
すよ」

「え、木下先輩。それはホントの話なのか？」

「はい！ けーすけ様はチキンですから、そんな大胆な事はできない  
のですよ？」

なんだかひどい事を言われた気がする……。  
でも、暮葉のおかげで大きな誤解は解けたようである。

「んみや……ごめん、圭介」

「別にいいよ。ひどい扱いを受けるのは慣れてるしね」

あかりは思ったよりも素直に、瞳を閉じて申し訳なさそうに謝って  
くれた。

前々から思っていたけど、あかりは馬鹿だがやっぱりいい子である。  
元々容姿は可愛らしいし、もう少し女の子らしくしていれば絶対モ  
テるのに……勿体ない。

「よかった……そうですよね、先輩がそんな……無理やりな人なわ  
け、ないですもんね」

「あ、ああ……無理やりなんてするわけないだろ？ 八八八……ッ」

青山さんアンタ、思いっきり引いてたじゃん。そしてあかりと同じ



くらい俺の事疑ってたじゃん。

「申し訳ないのですけーすけ様……拙者が余計な事を言っただけに……っ」

「全くだぞ。つーかお前、あんな事暴露して恥ずかしくないのか？」

「~~~~~っ」

瞳を詰めって耳元まで顔を赤く染めているあたり、相当恥ずかしかったのだろう。

まあ、暮葉にだって悪気はなかった。

それにあの時は事故とは言え、暮葉の裸を見てしまった上に一緒に入浴までしまつた俺も悪いしな。

「大丈夫、怒ってなから元気出そうよ。でも、もう恥ずかしい事は言っんじゃないぞ？」

「はい。ありがとうなのです、けーすけ様……っ！」

「お兄ちゃん。今度ぜえーったい葵と一緒にお風呂」

「却下！ 一人で入れ！」

「ええ〜！ 大切なお兄ちゃんの息子さんを洗ってあげようと思っただのに！」

「汚すの間違いでしょ！ とにかく葵は少し黙りましようよー！」

ダメだこの変態妹、早くなんとかしないとホントに一生彼氏が出来

ないぞ。

まあ、何はともあれ誤解も解けたし別にこれでいいや。

問題は危うく忘れる所であったが、部室で全裸で立ちつくしている浅間部長である。

このおバカ部長はどうして全裸なんだよ、しかも部室で。

「ふんふん　　ふんふん　　……ん、どうしたんだい皆の衆？」

「どうしたじゃねーよ！　部長はなんで全裸なんですか！？」

「いや、なんとなく脱ぎたくなる時ってあるじゃないかい？」

「すげえ。全裸で、しかも真顔でこんなことを言っているよこの部長。カッコいいようなカッコわるいような。でも常識的に考えてこれは……。」

「ねーよそんなもん！」

「このエロスティックバイオレンス！　早く死ねよな！」

「部長……最低ですっ」

「何故だ。どうしてボクの見解は反対される？　一体ボクはどこで服を脱げばッ！」

……いや。

それ以前にこんな所で服なんて脱ぐなよ。

しかもここには男の毒牙を知らない、いたいけな女の子が4人もいるのに。

「部長さん。早く服を着た方がいいのですよ？」

「そーですよ！ お兄ちゃんより小さい癖に生意気なのですよ！」

……葵、コイツはどうして俺のサイズを知っているんだ。

俺、知らない間に実の妹に寝込みを襲われているのかな。

不安になってきたし、今度から部屋に監視カメラでも設置しておくかな？

「全く……裸になって何が悪い！」

……いや、悪いだろ。

ガラパゴス諸島で全裸になっても、もしかすると怒られないかもしれないけど……日本じゃ犯罪です。

しかも、そのセリフどこかで聞いた事があるんですが。

「……とりあえず部長。今なら通報しませんから服着ましょうよ」

「やれやれ……裸になれないんじゃヌーティストが犯罪者みたいじゃないか」

脱ぐならヌーティストビーチにでも行ってください。

合法的……なのかはわからないが、低いリスクで女子の裸が見放題だぞ。

まあ、ああいう所にいる人達はきっと経験豊富で、しかも鍛え抜かれていている人達ばかりだろうけど。

とにかく俺達はその後、部長に服を着てもらったためにあの手この手の交渉術を用いた。

結局この日の部活は部長を説得するだけで終わってしまった。実に残念な一日である。

とりあえず、今日一日で俺の中で部長の評価がガクンと下がりました。

……しかし、こんなに馬鹿な事をしていても、俺の頭の中からたった一つの単語が中々抜けない。

“超能力者”。畜生、一体どういう事なんだよ 明智！

第57話 自己防衛本能【モザイク】（後書き）

後書きトークコーナー

伊吹「結局超能力ってなによ？」

圭介「シラネ。レベル0からレベル5まであるんじゃないの？」

伊吹「圭介、それどうせアンタが見てるアニメの話でしょ？」

圭介「だってねえ？ バラ・ゲラーは胡散臭いしねえ？」

伊吹「だからって二次元に走る、普通？」

圭介「あたりまえだ！ 超能力なんて二次元以外にありえない！  
どうせなら俺はヒロインを簡単に攻略できる超能力が欲しいな」

伊吹「な、なによそれ……？」

圭介「フフフ……そんな能力さえあれば。俺は某落とし神にも匹敵  
するギャルゲーの神になれる！ フフフ、フハハハッ！」

伊吹「ダメだ。圭介の厨二病モードが発動しちゃったわ……」

暮葉「けーすけ様！ ゲームのキャラがエターナルフォースブリザードなんて技を覚えたのです！」

## 第58話 / 超能力者

放課後。私、明智凧紗は自宅とは正反対の方向に向かっていた。

ここは古宇坂市でも南端に近い所。

別にここら辺に私が通っている塾とかがあるわけではない。

そもそも私は塾なんて、佐井学園に入る前以外には行った事がない。だったらなんで私がここにいるのか。それは　普通とは違う人物を探しているからだ。

「超能力者……」

私と同じ存在。でも、結局その超能力者は誰なんだろうか。

私には全然わからない。予想のしようがない。

でも間違いないんだ。木下のような魔法使いがそう何人もいるとは思えない。

だからといってどんなに優れた殺し屋でも、あんな完璧な殺しができるとは思えない。

だったらあの死に方は間違いなく超能力者。それもかなり高レベルな超能力を使う奴の仕業だろう。

……けど、一体誰が？

佐井学園には5人ほど、軍隊を相手にしても負けないような超能力者が在籍していたはずだ。

そのうちの一人は私も会った事がある。

確か……この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る。

チートのような能力を使うようなヤツだった。それでも学園では2番目だったけど。

……やっぱりその波を操る奴が犯人なのかな？

アイツ以外の5本指なんて、精々写真で見た容姿と使える能力くらいしかわからないぞ。

でも、私の中で一番怪しいのはやっぱり、波を操るチートな超能力者だ。

アイツ以外に考えられない。あんな奇妙な死に方をさせれるヤツなんて早々いないぞ。

それに……アイツの性格なら、普通に汚れ仕事もやってしまいそうだよ。

あれ……なんでだろう。私はいつのまにか探偵のように推理をしていた。

「……ん」

推理をしながらなんとなく周囲を見回していると、家と家の間の狭い道路が視界にはいる。

どうしてだか、その道路に何か引つ掛かる。何かはわからないけど何か引つ掛かるんだ。

どういうわけだかわからないけど、まるで喧嘩でもしているような音が聞こえるからだ。

……だからなに。超能力者が無国籍者を殺しているとは限らない。ただの不良の喧嘩かもしれないけど……私は風紀委員、些細な喧嘩でも見逃す事ができない。

そういう仕事を日常的にしているから。たとえ他所の学校の生徒でも放っておけない。

そんな正義感から動いてしまった私。そんな行動が 真実を知るキツカケになってしまった。

「……………っ」

私は只管狭い道路を歩き続ける。

滅多に人が通らない上に、やっぱり不良のたまり場になっているせいか、ブロック塀は落書きだらけ。

煙草の吸殻やビールの空き缶、袋や吐き捨てたガム。そして武器のような何かの残骸。

……本当に汚いな　ん、ちょっと待って。どうして武器の残骸みたいなのが転がってるんだろう？

緊張で喉がつまる。それでも私はこの足を止める事はなかった。再び歩み始めた私。延々と続く汚い道路……ま、待て。

「こ、これ……血痕？」

どうして血痕が塀に……？

不良が喧嘩して、怪我による出血が染みつけたのならわかる。

でも……この血の量は明らかにおかしい。しかもその血はこの道の先まで続いている。

……一体、どういうことなんだろう？

恐る恐る足を進めみると、そこには

「……………ッ！」

道の真ん中で一人寂しく立つ人の下に、何か生々しいものが散乱している。

どこまでも紅くて、ぐちゃっとしていて……所々紅以外のピンクっぽい何かが散乱している。

本当に生々しい。まるで何か生き物を隅々まで解剖したかのようなだ。



……でも、これは解剖じゃない。これって……ほ、本物の……っ？  
「お、うげ、え……っ！」

散乱しているもの　それは人のパーツ。つまりそれはバラバラ死体だった。

ぐわっと、喉に何か……吐き気がこみ上げてくる。

だ、ダメだ……吐いちゃダメだ。死体なら数日前に見たじゃないか。……でも、あの死体はまだ完全体。ちゃんと人の形はしていた……というよりもほぼ無傷だった。

でも今回は違う。あまりの損傷にその人が誰だったか、サツパリわからない……っ。

「アア……？」

その時、死体の前に立っていた人が振り向いてきた。

どう見ても少年だ。身長は大体私と同じくらい。肩に後ろ髪が当たるまで伸びている白髪。

肌も白く、瞳の色まで紅く……お世辞にも強そうには見えない。

何より不思議なのはその少年。上こそベージュ色のTシャツだったものの、穿いているスポンはやや緑っぱいの佐井学園の制服そのものであった。

……こ、コイツが……連続殺人事件の犯人の超能力者……？

「そ、そこでなにしてるんだよ……お前っ？」

「なんだアアイツ？　オレが潰すリストにあんなヤツは登録されてねえハズだ」

その言葉を聞いた瞬間、私はいつでも戦えるように身構える。

……でも、少年はただ、歪んだ笑みを見せつけるのみであった。

「お、お前か。最近無国籍者ばかり連続で殺している……超能力者は！」

「アア？ ……ヘッ、よくオレが超能力者だってわかったな。オマエ何者？」

「あたりまえだぞ。私だって超能力者だし……元佐井学園の生徒だぞ」

「へえ、オマエも超能力者だったのか。そりゃ失礼したねえ」

案外アツサリ自分が超能力者である事を認めた。

……でもなんで。なんだか馬鹿にされているような気がするの……  
……なんで？

「お……お前つ、何者？ 波を操るヤツとは全然違うな」

あの男は小柄な少年じゃなかった。

もつとこう……藤島よりも身長が高くて金髪の男だった気がする。

「アア？ ……チツ、あのクソ野郎とオレを一緒にするなよ。オマエも佐井学園の生徒ならオレの事知ってるだろ？ さて問題です。佐井学園で最も成績が優秀な人物と言えば一体誰でしょうか？」

「……っ！ も、もしかして……っ！」

「わかつちまつた見てえだなあ。答えは早川悠に決まってるよなア？」

早川悠……うん、名前だけなら聞いた事がある。  
佐井学園で最も成績がよくて、その上一番完成された超能力者だ  
という……あの。

「なんで……成績優秀な優等生のハズなのに、どうしてこんな事を  
……？」

「簡単に学校を辞められる、オマエのような低レベルの超能力者は  
羨ましいなア。んで、オレがこうして特異点を潰してんのも、すべ  
てはオレの為ってわけだ」

「それって……すごく個人的な理由じゃないか！ そんな事の為に  
人殺しを働いているのかっ！？」

私は、早川のくだらない理由を聞いてしまった。

そのせいだろう。怒りが腹の底から込み上げてくる。

その怒りを言葉にし、いつの間にか私はそれを早川にぶつけていた。

「オマエのように簡単に辞めれたヤツには、理解できねエよ」

早川悠……くだらない事の為に人殺しを続ける極悪人。

コイツを止めなかつたらそのうち、無国籍者の木下の命が危ない。

木下は……私の友達だ！それから木下がいないと……藤島やその友  
達も絶対に悲しむ。

それと、これ以上早川に無駄な殺生はさせない！

「早川……！ 火傷したくなかつたら帰れっ！」

私はそう叫びながら、パイロキネシス発火能力で両手に炎剣を作りだした。

燃えあがる双方の剣は2mの長さを誇る。コイツで早川を斬れば無事では済まされない。

私は勢いよくアスファルトを蹴り上げ、素早く早川の懐へ入り込む。……早川って馬鹿なのか。何も動こうとしない……隙だらけすぎる。どんな素人でも殴れるくらいに。

とにかく幸運だ。この間合いじゃもう早川に避ける術なんて

「……あ、はっ！」

「ん　っ！」

刹那、早川が気味の悪い狂った笑い声をあげると　信じられない事に双方の炎剣が消えたのである。

……強制的になんらかの力で炎が消された？

私は自分で能力使用をやめたわけではない。それなのに炎は消えてしまった。

しかもなんだったんだろう、今の一瞬感じた息苦しさは。

まるでそこに酸素がなかったかのようだった

「ど、どうなってる……んだ？」

「驚く事はねえだろ？　ただオマエの周りの酸素濃度を0にしただけだあ……迷惑のわからねえ消化方法だろ？」

「くっ……！」

酸素濃度を0に……コイツ、酸素濃度の調整が出来るのか。

だとしたら、私の発火能力は非常に相性が悪い。ハイロキネシス

つまりコイツに超能力は通用しない　なら！

「ふっ！」

さっきのお返しだ。こっから鳩尾でも突いて呼吸困難にしてやる。  
生きる苦しかったんだぞ。その苦しさをお前も味わってみる  
!

しかし！

「あ、ぐあー！」

な　　んで？

私は早川に触れる事さえできなかった。拳は早川の鳩尾ギリギリに  
まで迫っていた。

でも触れてはいない。けどなんで……どうして私は吹っ飛ばされ  
たんだろう？

一瞬すごい風みたいなのを感じたけど……一体早川は何の力で？

「残念。やっぱり同じ超能力者でも、オマエ程度じゃこのオレの相手  
にはならねえなあ」

「……こ、このっ……」

「……行けよ、オマエみたいな小者なんざ眼中にねえんだよ」

こ、こいつ……完全に私をナメている……っ！

でもなに……この止まらない震えは。

なんなんだ一体……私と早川の何が違うんだよ……っ！

「……っ……っ」

「ハッ、もう戦意はねえな。じゃあ、オマエから行かねえ見たいだからオレはもう行くわ」

「……っっ……っ」

「ちなみにイイ事教えてやろうかア？ この事言ったら殺しに来るから……そんな時はヨロシク」

早川悠はそれだけ言い残し、誰かのバラバラ死体を乗り越え、この細い道の奥へと消えて行った。

……怖い、震えが止まらない。どうなってるんだよ。

とにかく一つだけ確実に言える事がある。間違いなく早川は私の御先祖様よりも 強い……っ！

……私はそんな事を考えながら、しばらく死体の前で立ち尽くして  
した

## 第58話 / 超能力者 (後書き)

後書きトークコーナー

千早「あ、あれ？ 今日藤島先輩……いないんですか？」

暮葉「もきゅう……けーすけ様、ゲームにハマっちゃいまして」

千早「ゲーム好きなのですか？」

暮葉「たま〜にやっています。でもけーすけ様は熱中するとやり込むタイプなのです！」

千早「あはは、いますよね。私もその……趣味は熱中すると止まらないですっ」

暮葉「わかります！ 拙者もやめようと思っても中々やめられないのです！」

千早「葵も言っていました。その……せーぶぼいんと……でしたっけ？ それがあっても何故かやめられないって」

暮葉「わかります！ セーブポイントがあってももう少しだけ続けたくなる事あるのです！ そうしているうちに時間が経っちゃうなんてよくあるのです！」

千早「木下先輩も……ゲーム好きなんですか？」

暮葉「葵さんに教えてもらっていろいろ、ハマっちゃったのです！」

千早「あはは……っ、藤島兄妹ってホントにゲーム、好きなんです  
ね……っ！」

伊吹「……あれ、なんでだろう。圭介がいないとこの後書きトーク  
コーナーの会話内容、かなりマトモな気がするわっ！」

圭介は話がおかしくなる原因であった。



第59話 夜……そして

“違う。藤島は多分平気だと思うけど……あ、危ないのは多分木下だ”

暮葉が危ない……かあ。確かに暮葉は無国籍者だよなあ。

思えばアルファ隊ってすごいよな。よくそんな状態の暮葉を初芝に入れたものだ。

大した試験もやらなかったらしいし。全く、あの特殊部隊は色々な意味で謎の組織だぜ。

でもいいんだろうか。異世界でロジーナの国籍は持っているのだから、この世界では暮葉は無国籍扱い。今まで考えた事がなかったけど、これからの生活とか大変なんじゃないだろうか。

異世界の記録なんて当然無効だし、やっぱり日本の国籍を取得させたほうがいいのかな……。

でも難しいかなあ。帰化するという方法はあるけど、アレって結構条件が厳しいらしい。

「……はあ、なんだか……」

考え事をしていたら外の空気が吸いたくなってきた。

たまにあるよね。家の中において無性に外の空気が吸いたくなる事って。

今がまさにそれだよ。こういう時は素直に気分転換をするのが一番だな。

と、いうわけで俺は誰にも何も言わず、ただ気分転換の為に外に出た。

外に出たからと言って何かをするわけではない。どこかに行くわけでもない。

ただ、こうして外の空気を吸うだけである。

晩御飯の時間もあるからな。外に出ていられる時間はよくて30分くらいだろう。

でもどうせ10分もしたら飽きるし、このまま玄関の前でボーツとしていよう。

「……あ、もしかして圭介？」

「ん？」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

誰だろう、多分この近所の人だろうから伊吹だとは思つが……でも伊吹にしては声が。

「やっぱり圭介。じゃあここが藤島家であってるんだな！」

「あれ、あかり？」

意外や意外。伊吹かと思いきや、俺の家の前を通っていたのはあかりであった。

輝くようなだ橙色のツインテール、ツンとした紅い瞳、小柄な体軀で小動物のような美少女。

そして何を入れているのだろう、とても大きな鞆を肩からさげている

た。

「おっす、めっちゃ久しぶりだな！」

「めっちゃやって、さっき部活で会ったじゃないか」

「にやははは！ まーまー、細かい事を気にしたら負けなんだからな！」

「まあ、今日は気にしないでおくよ。それよりどうしてウチの前にいるんだ？」

確か、浅間家って我が家から遠かった気がする。

ていうか、初芝高校から見て思いっきり逆方向だった気がするぞ。

「ん、そんなの下見に決まってんだろ」

「下見？」

「あたい！ そのうちこの家に遊びに来るからな！ その下見だよ、それくらいわかれよな！」

だからお前はどこの魔装少女だよ。

まあそはともかく、あかりが我が家に遊びに来るだと？

以前は死んでも嫌だ〜とか、そんな事を言っていた気がするのになあ。

思えばあかりとはアレだけ仲が悪かったのに、短期間で随分と仲良しになったよな。

男みたいなノリの子だし、正直言うと男友達みたいで話安くて面白いヤツだ。

それなのに時々女の子っぽくて、可愛くて……何より中身は馬鹿だけれどもいい子。

俺もあかりは結構好きだ……も、もちろん友達としての意味だぞ！それはともかく、俺の家に遊びに来るなんて言うものだから、ついそんな事を考えてしまったよ。

「そうか。俺も暮葉も葵も、みんな待ってるからいつでも来ていいぞ」

「んみや！ ありがとな！」

あかりは満面の笑みを浮かべ、元気よくお礼を言ってきた。それにしても、時間の進みというのは早いんだな。

こうして話しているだけでも、既に1分近くが経過していたのである……。

「葵さん！ 拙者ちょっと出かけるのです！」

「えっ？ く、クーにゃん！？ もうすぐ晩御飯だよ！？」

「多分すぐ帰ってくるのです！ ご飯は作りましたのでけーすけ様と食べていてください！」

その時、家の中から暮葉と葵の声が聞こえてきた。

大声でなに話してんだらうアイツら。屋外だからかよく会話を聞き取れなかったぞ。

……と、そんな事を考えていた

「あ、けーすけ様！ 拙者ちょっと出かけるのです！」

「え？　ちよ、暮葉！？」

「木下先輩、なんか急いでるなっ」

何が起こったのやら、どこかへ駆けてゆく暮葉は必死そうな表情をしていた。

アイツ、もうすぐ晩御飯なのに。折角自分の分まで作っていたらうに。

なのに、どうしてあんなに血相変えて夜闇に包まれた古宇坂の街へと消えたんだろう。

「どうしたんだアイツ？」

「さあ、でも急用を思い出したかのように必死だったような……」

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」

今度は葵が血相を変えて家から飛び出してきた。

しかも葵さん、それパジャマじゃないですか。

ネコさんがプリントされている葵のパジャマ……まるで子供そのものである。

ちなみに我が家は晩御飯を食べてから風呂に入る日と、風呂に入ってから晩御飯を食べる日の両方がある。要するに、統一性の全くないバラバラというわけだ。

「葵、どうしたんだ？」

「あ、アレ？　どうしてあかりもいるの？」

葵は驚きのあまりに目を白黒させていた。だって、そこには普段は

いないあかりの姿があつたから。

「たまたま通りかかったんだ、あとさつき木下先輩が全力疾走でどつかに走って行った！」

「そ、そうだよソレだよ！ お兄ちゃんお願い、クーにゃんを追って！」

「え、俺が？」

「お願いお兄ちゃん！ ニュースを見た瞬間飛び出しちゃったクーにゃんを追って！ 葵、クーにゃんがいない晩御飯なんて嫌だよ！」

確かに。日常的に一緒に食べているヤツが一人でも欠けていると、それはそれで寂しい気分である。

それにしても不思議だなあ。ニュースを見た瞬間飛び出したって……。

……なんだか、嫌な予感しかしねえな。

「葵、そのニュースって何のニュースだ？」

「え〜っと、確か連続殺人事件のニュースだったような……」

「れ、連続殺人事件！？」

「それって最近ここら辺で起こってるヤツだろ？ あたい犯人を捕まえないな！」

正義感溢れるあかりはともかく、暮葉が連続殺人事件のニュースを見て飛びだして行った？

暮葉とは全く関係のなさそうな事件なのに、なんだって暮葉がその  
ニユースで……。

しかも暮葉は無国籍者。殺人犯殺害しているのも主に無国籍者。  
暮葉が一番危ない存在だろ……それなのにアイツは……っ！

……ええい、飛び出した理由なんてどうだっていい。追って暮葉の  
所に行かないと！

「わかった。俺は今すぐ暮葉を追う！」

「ごめんねお兄ちゃん！ あ、後でキスするからっ！」

「圭介！ あたいも協力するからな！」

「気持ちありがたいけど、相手は下手すると連続殺人犯だし危険  
だぞ？ 大丈夫、悲劇になる前にアイツを連れ戻すから。あと葵、  
キスとかはいらないからな」

「そ、そんなっ！ 妹の愛を否定されてしまったよ!？」

妹の愛って……お前の愛は色々な意味で歪んでるわ！

まあバカ妹は放っておいて、そんなことよりも今は暮葉である。

俺は、殺人犯に殺される可能性のあるアイツを一人にしてはいいけ  
ない。

むしろ今まで助けてくれたお礼に アイツを守るつもりで行か  
ねえと！

「それじゃ、ちよつくら行ってくる」

「圭介！ ホントにあたいも一緒じゃなくていいのかよ!？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「気をつけてねお兄ちゃんっ！」

「おう！」

わかってるよ……気を付けねえとな。下手すりゃ連続殺人犯と遭遇するかもしれねえ。

相手は不可解な方法で人を殺しやがる超能力者だ。

そんな危険な相手と暮葉を……絶対に戦わせたくない！

相手がどんなヤツかは知らないし、もしかしたら現れないかもしれない。

出来れば後者のほうを望みたいが、それがもし敵わなかった場合は

今までの恩返しに、俺が連続殺人犯と戦ってやる！



第59話 夜……そして（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「あー、暇だなあ……」

伊吹「あら、今回は圭介がいるわよ？」

凧紗「これは荒れるパターンだな」

圭介「どうして俺をトラブルメーカーみたいに扱うんですか二人とも!？」

伊吹「だって前回でわかったのよ。あんたがいないと如何にこのコーナーがマトモなものかって」

圭介「ひどくね!？ それって遠回しに俺に消えろって言ってるんじゃないね!？」

純奈「大丈夫! クソ介が消えたら町屋君呼ぶから!」

圭介「だから町屋君って誰だよ! いい加減正体見せるよ町屋君!」

謎の人物、町屋とは一体何者なのであろうか……!？」

圭介「カッコいい予告風にすんじゃないやねえよ! BL展開は俺がお断りだ!」

## 第60話 / 衝突

拙者は今、古宇坂港の工業地帯にいます。

古宇坂港は重要港湾に指定され工業港として発展し、事業所の数でも100を超え……らしいのです。

全部拙者が調べた事なのですが、正直合っているのか不安なのです。それより、どうして拙者がこんな所に来たのか。それは

「ここにいますよ！ わかっているのです、出て来てください！」

拙者は連続殺人事件のニュースを見た後、けーすけ様の家を飛び出してしまったのです。

……でも、それにはちゃんと理由があるのです。

今は仲間の危機。だから……拙者が殺人犯を成敗するのです。

実は今回の事件について、アルファ隊の上から通達があるのです。

“各個で自衛戦闘を行いつつ、特隊員は敵能力者を抹殺せよ”

特隊員とはアルファ隊の中でも、特に戦闘能力の高い隊員の事を示す隠語なのです。

一応拙者も魔法はあまり得意ではないのですが、この剣術のおかげでそれに分類されているのです。

古宇坂に特隊員なんて……アルファ隊の人数的に拙者しかいないのです。

それどころか、通常の隊員さえこれまでの戦闘で皆亡くなってしまいまいいました。

……許せません。大切な仲間を……どういう理由なのでしょう。

第一、相手はサヴィエトの魔法使いじゃないらしいのですが……一

体誰が。

……今、拙者がここに立っている理由。

それは殺人犯のものとと思われる魔力を追ってきたのであります。

「ハツ……次のオレの標的はオマエってかア？」

……その時、使われなくなった引き込み線の上を怪しげな人が歩いている。

闇から現れた人は全体的に白いイメージで、でも着ている服はベージュに緑色のズボン。

すごいのです……その、髪も伊吹さん以上に真っ白です。

瞳も植えた狼の血の色のような紅く染まっているのです。

なにより、あの不気味で歪んだ笑みが……。

「ついに……現れたのですねっ！」

拙者は鞘に手をかけ、一期一振を抜く準備をする。

にもかかわらず、相手のあの人はたどこもでも狂気に満ちた、そんな笑みを見せるだけ……。

「へエ……オマエ、今までの特異点とは違うな。刀使いなんて初めて見た気がするなア」

「戦う前に一つ教えて欲しいのです。どうしなのですか……どうして拙者達、アルファ隊の人間ばかりを襲って殺害しているのですか！」

拙者は最初から知っていたのです。だって……アルファ隊から連絡があったのですから。

けーすけ様達は絶対に知らないでしょうけど、そのほうがいいのです。

こんな事にけーすけ様達を巻き込みたくない。これは拙者達だけで解決しなきゃいけない事なのです。

だから……この件に関してだけは、けーすけ様達に触れさせてはいけないのです！

「まあオマエもどうせ死ぬんだからな。オマエには特別に説明してやってもいいかなあ？」

拙者が理由を尋ねると、相変わらず狂気じみた笑みを浮かべるその口から、相手はそう口にしたのです。

更にあの人は一度舌打ちをした後、さっきの話の続きをし始め。

「一応オレが在籍している、佐井学園って所の命令なんだよなあ。最近地球で暗躍している魔法という怪しげな能力を使う無国籍者の集団。オレ達はソイツらの特異点って呼んでるんだけどなあ。ソイツらを潰すようにオレに命令があったんだよ。条件付きでなあ……」

「条件……？ 一体、何の条件なのですか？」

しかも、拙者達が異世界人って事には気付いていないのです。

まあ、そのほうが拙者達アルファ隊にとっても都合がいいのです。

そのほうが……拙者達もこの世界で活動しやすいですからね。

「なあオマエ。学校ってのはさア……成績優秀者を手放したくはねえんだよな。オレは今すぐにも佐井学園ってのを辞めたいんだけど、学校がソレを決して許さねえんだよ。でも、学校はオレが辞める為の条件を出してきた。それがオマエら特異点を全員残らずブツ殺すって事だア」

「まさか……そんな理由で拙者達を!？」

ただ学校がやめたい。

そんな事の為に佐井学園という、普通の学校じゃありえない殺人命令を受け入れた……。

そんなの、絶対オカシイのです!大体そんな命令を出す学校自体がオカシイのです!

やっぱり……戦友達なかまを殺したヤツは狂っているのです!

「オマエにはエリートってのがどんなかわからねえんだな。まあいいわ、オレが佐井学園を辞める為には……どうしてもオマエらに付き合ってもらわなくちゃいけねえしなあ。悪いけど早く死んじまえよ」

「……そうは、いかないのです!」

その時、ついに拙者は鞘から一期一振を抜きだしました。

もう我慢の限界。あんなに単純な理由で、しかもあれだけ楽しそうに戦友が殺されていたとわかると……。

腹の底から怒りが沸いてきて、どうしようもなくなっちゃったのです!

「やっぱオマエも戦つのか?」

「あたりまえなのです!拙者は……皆の仇をとり。そしてまだ殺されていない皆を守る為にここに立っているのです!」

「へエ……いいヤツじゃねえか。そういうヒーローもガキの頃は憧れたなあ」

「悪いですけど、貴方はヒーローとは逆なのです！」

「わかってんだよそれくれエ……さてと、ンじゃあオマエが戦意を表明した所で、そろそろ地獄の殺し合いデスマッチを始めてえんだけど、覚悟はできてんだよなあ？」

「ええ……絶対に貴方を倒すのです。仲間の仇、皆を守る為……絶対に負けられない、貴方を許せないのです！」

ついに拙者は足から腰のあたりにまで力を入れ、いつでも飛び出す準備を終えた。

後は……火蓋が切って落とされるのを待つだけ。でも、それももうすぐのような気がするのです。

何故なら……もう必ず拙者達は衝突するという雰囲気、この場が包まれているからなのです。

「そっか……ンじゃあ、そろそろおっぱじめるとするかア」

なんで……拙者にはわからないのです。

殺人がそんなに楽しい理由が。どうして人を殺しているのに……あんな狂気じみた笑みを浮かべられるのか。

心から楽しんでいるのでしょうか。それとも、ああしないと自分が崩壊してしまえそう。

だから凶悪そうな顔を作っているのでしょうか。

どっちにしても、やっている事は絶対許せない事なのです。

拙者は必ず、あのやたら強いと噂のヘンテコ能力者を……倒さなくちゃいけないのです！

「……さて、ンじゃあ……行くぞオラアっ！」

相手の人が拙者に向かってくる。イキナリ間合いを詰めてくる相手。拙者は相手の攻撃を避ける為だけにジャンプし、そのまま積み上げられたコンテナの上に乗る。

うわっ……錆びている。このコンテナも、しばらく使用されていないですね。

「へエ……それは魔法か？ それともオマエの身体能力か？」

「避けようと思えば、いつでも貴方の攻撃なんか避けれるのですよ？」

「そっかぁ……大した自信じゃねえか！ ぎゃは、じゃあその自信をもう少し俺に見せてくれよ……っ」

そうですね……避けているだけではどうにもなりません。なら、今度は拙者から攻勢を……仕掛けてみるのです！

「いいですよ……」

拙者は先ほどよりも力強く、ぎゅっと握りを握りしめた。

そして、出来るだけ力強強く相手の歪んだ笑みのその顔を見て

「見せてあげます。今までの皆様の苦しみを……拙者の怒りを貴方に全てぶつけてやるのです！」

「最高にいい気分になってきたぜ……来いよ、オマエら今まで弱過ぎたから……オマエはこのオレを少しでも楽しませるように努力でもしてみろっての！ ふふふ……あはは、あっぎゃはははっ！」

拙者は飛び降り、相手は駆け出し……。

こうして拙者と殺人犯は“衝突”したのです。



第60話 / 衝突（後書き）

後書きトークコーナー

葵「はわわっ！ く、クーにゃんが戦っているよ!？」

凧紗「珍しく真面目な展開だな。それにしても木下……大丈夫かな？」

葵「まずいよ、クーにゃんってそもそも強い!？」

凧紗「うん、まあ……私よりは遥かに戦闘力高いと思う」

葵「と、とにかく葵はクーにゃんを応援します！ 頑張ってください  
いクーにゃん!」

伊吹「……やっぱり圭介がいないとこのコーナー、マトモだわ」

## 第61話 / 卓川悠

連続殺人事件のニュースを見た後、すぐに飛び出したと言う暮葉。彼女を追うために、俺は古宇坂港南岸から隣の街に掛けて存在する工業地帯の近くまで移動していた。

ここはまだ、工業地帯の近くに存在する住宅街なので、全然工業地帯という感じもしないのだが。

というか、俺はここに来てもよかつたんだろうか。

暮葉が工業地帯にいるって保障すらねえのに……。

万が一違う所において、もう連続殺人犯と出会ってしまったとしたら……。

……ってダメだ。そういうネガティブな事は考えないようにしよう。

「それにしても……」

古宇坂の南部にも初めて来たもんだ。

古宇坂市民だからといって、すべての地域を制覇したわけでもないし、古宇坂博士というわけでもない。

多分、俺のこの街に関する知識なんてオタクの小学生以下のものだろう。

そんな程度の知識しかないからこそ俺は今、とても驚いているんだ。工業地帯が近いのに、存在しているのはただの住宅街……こんな予想と全然違うよ！

「はぁ……」

思わずため息をついてしまった。

畜生、俺も暮葉みたいに魔力を感じ取ることができれば……。

こうして考えてみると、アイツってやっぱり役に立つヤツだったん

だな。

今までアホの子扱いしてごめんね暮葉さん。

「ふじ……しま？」

「ん？」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。  
聞きとるのがやっとなくらいに小さく、震えるように掠れたその声の主は。

「……明智？」

長く凛々しい黒髪のポニーテールに、ツンとした蒼眼の肌白で綺麗な女の子。

明智凧紗と偶然出会ってしまったのであった。

しかしどうしたんだろう。今の明智はなんだか元気には見えないぞ？

「藤島。どうしてこんなところに……？」

「いや、なんつーか……誤魔化しても仕方ないか。飛び出してしまった暮葉を追い掛けてたんだよ」

「木下をか……？ しかも木下が飛び出したって……」

「アイツ、どういうわけか連続殺人事件のニュースを見た直後に飛び出しちまったんだよ」

「……ッ！」

“連続殺人事件”という言葉を言った瞬間、明智が突然ビクンと身体を震わせた。

それと同時に顔色も悪くなり、目は見開かれ口も半開き状態になる。瞳さえひどく覚えているような感じである。

ちよ、これは絶対オカシイ……どう見ても何かあった感じだ。

「ちよ、どうしたんだよ明智。何かあったのか？」

「れ、連続殺人事件……藤島っ、ヤツには関わるな！　すぐに家に帰るんだ！」

「すぐに帰れって、それじゃあ暮葉を連れ戻せねえじゃないか」

しかも明智が言う、ヤツって一体誰の事を言ってるんだよ。

連続殺人事件と関係しているヤツだという事は、流石の俺にもわかった事だけど。

「そ、そうだった……それじゃあ早く、木下を見つけてうちに帰れ。木下の命が危ないっ」

「ちよっと待て。一体どういう事なんだよ」

「……っ……っ」

相変わらずおびえ続ける明智。その姿はいつものクールなものとは違い、やけに弱々しい。

こんな時にこうい言う方もどうかと思うが、その姿は正に女の子であった。

あの明智が怯えている……待てよ、それってただ事じゃねえに決まってる。

知りたい。明智がどうしてこんなに怯えているのか。連続殺人事件と何か関係があるのか。

それがもし、事件解決のカギになるってんなら

「なあ、辛いのはわかるよ。でも……俺はこの事態を何とかしたいんだ」

「む、無理だ……光秀なんかとは格が違う。あ、アイツはホントにやばいぞ……っ」

「そのアイツとか言うヤツは一体誰なんだ。一連の騒動と関係のあるヤツなのか？」

「は……犯人。この事件の犯人だぞ……っ」

重く閉ざされた口から徐々に放たれた言葉。

その中には確実に、犯人という言葉が含まれていた

犯人……え、それじゃあ……。

明智がこの一連の騒動を巻き起こした犯人の顔を知っている？

「……教えてくれ。その犯人ってヤツは一体どんなヤツなんだ」

「……っ……っ」

「頼む。辛いのはわかる……でも知りたいんだ。無意味な殺生をしやがるクソ野郎の事を」

「……わかった……全部、話すから」

「わかった……っ！」

……いよいよ、か。  
いよいよ一連の事件を起こしやがった犯人の、目撃情報が手に入るのか。

緊張してきたな……でも、しっかり聞かねえと。  
なんたつて今回は暮葉の命もかかっているかもしれないから

「佐井学園……つて、藤島も聞いたっけ？」

「ああ。進学校と名乗りつつ、超能力者を育成してるって学校だろ？」

「うん。そこには“五本指”っていう、学校内で強い超能力者5人の事を指すんだけど……反応はその中の一人で、しかも五本指の中でも一番すごい存在なんだ」

「一番すごい存在？」

それってつまり、最強って事だよな……。  
えーっと。こんなシリアスな時にオタクな話をするのもなんでありませんが。

……これなんて一方 行さん？  
そのうちソイツは幼女とのフラグでも立つちやったりって、ミサカはミサカは……げふんげふん！

「……藤島、今しようもない事考えてただろ？」

「す、すいませんっ！ 真面目に聞くから許して！」

「たく、ホントに藤島はしょうがないヤツだ……とにかく、そーい

「うヤツがいるんだよ」

最強の超能力者ねえ……。

やっぱりオタクな俺には一方 行ってイメージしかないけど、実際はどんなヤツなのかな。

つて、連続殺人事件を犯している時点でマトモとは言えなさそうだよな。

困ったなあ。一方 行は正直説教ウニ男よりも好きだけど、現実でああいうのがあると流石に困る。

というか、一方 行は二次元だからカッコいいんだ。現実だったらただのム力つくヤツだぞ？

「それで、その超能力者の頂点つてのはどんなヤツなんだ？」

「名前は早川悠。見た目は弱そうだけど……実力は化け物だった」

見た目は弱そうなのに実力はバケモノの超能力者の頂点？

オイオイ……それつてもうモロじゃねーか！

リアル一方 行って……とりあえず一方 行に謝れこのヤロー！

「あ、あのー……もしかしてその早川さん。ベクトル操作とかやつちやつたり……？」

「ん、早川の能力は<sup>エアオペレーション</sup>大気操作だぞ？」

「能力名までモロ似たようなモンだな！ ていうか佐井学園の校長、ぜつたいオタクだろ！」

まあ、ベクトル変換じゃなかっただけマシか。

あんなの俺にどうやって倒せと。もしかして木原神拳でもやりやが

れと？

……無理でしょ、あんな神業現実の人間には真似できません。

「でも、ナメてかかると死ぬぞ藤島……アイツには、炎もこの拳も通じないっ」

「な、なんでだよ？」

「アイツは酸素濃度を操作できるし、暴風で膜を作って攻撃してきたヤツを弾き返すんだ……っ」

「結局反射っぱい事はできるのね！」

やっぱりチートだ。ベクトル操作じゃないだけマシかと思つた俺が馬鹿でした。

結局ソイツは攻撃を反射できるのか……うわっ、最悪だ。

ていうか、それじゃあどんな異能の力を打ち消す右手がない俺じゃ勝てなくね？

……いや、でも大気操作系の超能力らしいし。きつと何処かに隙があるハズだ。

「それで、無国籍者を襲っている理由は学校を辞めたいから……らしいんだ」

「そ、それだけ……なのか？」

「それだけ……だと思っ」

学校を辞めたい。

なんだよ。確かに人生の中でそういう選択肢もアリだとは思っ。



「ただ、その為に殺人つて一体どういう事なんだよ……。  
くそつ、ふざけんじゃねえよ……そんな事の為に罪なき人々が殺さ  
れてるってのかよ。  
そして……下手をすれば今度は暮葉が……。」

「……明智、早川の居場所ってわかるか？」

「え？ は、早川に何か……って藤島。ま、まさか……っ」

「そんな事の為に誰かが殺されるのって許されるのかよ。だったら  
それは止めるしかねえだろ」

「む、無理だ！ 間違っているのは私だってわかる。でも……早川  
はバケモノなんだ！」

「いいから任せろ……これ以上は何もさせねえ。俺がソイツを止め  
てやる」

標的の無国籍者の中には多分、暮葉も含まれているハズだ。

多分殺された無国籍者も暮葉の仲間。と言う事はアルファ隊の隊員  
なのかもしれない。

そうだとしたら、連続殺人事件のニュースを見て飛び出す暮葉の気  
持ちもわからないでもない。

仲間がどこぞの馬の骨ともわからないヤツに、次々と殺されている  
んだ。

アイツは仲間想いだから……きっと居ても立っても居られなくなっ  
たんだろつ。

それで、きつとこれ以上仲間を傷つけない為に。アイツは自ら戦場  
へと向かったんだ……。

……でも、俺は暮葉に傷ついて欲しくねえ。

ついさつき決めた事だ。連続殺人犯　早川悠から暮葉を守るって  
今までの恩返しを今してやるんだって

「ふじ……しま……っ」

「頼む、どこか教えてくれ」

「……わからない。でも、もし木下と早川が戦うなら……戦うなら  
人が少なくて影も多い港の近くの工業地帯が望ましいぞ」

「わかった……とりあえずそこに行ってみるよ」

「ふ、藤島。待てっ！ やめろ、早川に勝てるわけがない……アイ  
ツはバケモノなのにつ！」

それでも俺は、アイツの為に戦わなきゃいけないんだよ！  
酸素濃度をイジくる？ 攻撃を暴風の膜で逆にぶっ飛ばす？

……そんなの、俺の丈夫な体で耐えてみせるよ。

この身体さえあれば……俺は一方　行だろうが未元　質だろうが全  
然怖くねえっ！

俺は、明智の言う事などを無視して……ただ一人、工場の敷地へと  
走り続けていた。

そして、走る事数分だった。ついにそこに到着したんだ。

やけに静かだな……と、フェンスを乗り越えようとしていた。

刹那、何だろう……戦いの音が聞こえたのだ。

……いる。間違いないねえ……暮葉と早川はここにいる！

第61話 / 卓川悠（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「圭介が上さん化してる!？」

浅間部長「藤島君がやたらとモテルのは、もしかしてそのせいなのか!？」

重原「主人公補正だね。正直主人公補正がひどすぎるのはどうかと思うよ」

大吾「それはそうと、作者は今月赤字らしい」

重原「なんでだい?」

大吾「ゲーセンで高歩美のフィギュアを手に入れようと悪戦苦闘した結果……玉砕っ!」

浅間部長「バカだ! まあボクは霧希の枕をゲーセンで手に入れようとして失敗したけどね」

重原「浅間先輩、家貧乏なんですよね? そういう事していいんですか?」

浅間部長「ハハハッ、あかりに30発くらい殴られたね!」

重原「家計を圧迫してるんですから……文句言えないですね」

大吾「殴られるだけありがたく思え。ホントに嫌なら姿さえ見せな  
くなると思っぞ?」

浅間部長「……泣きたいっ」

## 第62話 / 魔法使い vs 超能力者

古宇坂市内にある工業地帯。今は使用されていないであろう操車場は戦場と化してしました。

魔法使いと超能力者……本来ぶつかる事のない両者によつて

拙者と相手の距離は10mもありません。

「えいつ！」

拙者はそれくらいの高さまで飛び上がり、右手に一期一振を握り左手の手のひらを相手へ向ける。

脳内で理想を描き、その理想を具現化させた風を掌の前に起こす。

魔法とはそうやって扱うものなのです。

魔力とかいう要素よりも、いかに理想を具現化させられるかが大事なのです。

拙者は理想を具現化させた、ドッジボールの二倍の大きさの風の弾を相手へ放ちました。

それなのに相手は一步も動きません。一体あの相手の人はどういうつもりなりでしょうか

「ぎゃ、は……」

「う、嘘っ!？」

どこまでも不気味に歪んだ笑みを浮かべる。

それでもなお、あの場所から動かなかった相手に風の弾が直撃した

ハズだったのです。

ところが相手の人に風の弾が当たる寸前、どういっわけか風の弾が消滅したのです。

まるで　あの風が何らかの形で崩されたかのように……。

……ですが、その程度で諦められませんか。拙者は二回三回……何回も風の弾を放ち続けたのです。

でも、さっきと同じように風の弾はアツサリと消されていきます……っ！

「ハッ、なんだよそりゃあ。ワンパターン戦法だなア、そんなんでオレを楽しませられるのかあ！」

「こ、このっ！」

もう一度、今度の拙者の理想はすごいのですよ。

あらゆる物を吹き飛ばす四大元素のひとつ、風……その風の力を最大限に利用した……。

今の拙者に放てる最大の魔法　　！

「んっきゅううう！」

あらゆる物を吹き飛ばせる威力を誇る、風速150mを軽く超える暴風が、渦を巻きながら相手へ突き進む。

どこまでも一直線に、アルファ隊の皆さんの仇を打ち込むかのように　　しかし！

そんな必死の一撃も、どういうわけだか相手の寸前でかき消されてしまったのです。

そんな……意味がわからないのです！確かに拙者は魔法が苦手です……。

たったのこれしか戦っていないのに、もう魔力なんてものは残っていないのです。

でも……さっきの一撃は普通は避けられない。喰らえば確実に死ぬような威力の暴風だったのです。

それなのに相手の寸前で暴風は完全に消滅した。  
どうしてですか……拙者が魔法の扱い方を間違えちゃったのでしょ  
うか……っ。

「へエ……オマエ、今の風は中々だなあ。ひよつとしてアメリカで  
記録された巨大トルネード並だったんじゃないかねえの？ でもダメだな  
あ……そんなんじゃこのオレに触れるなんて、百年経っても無理だ  
っつーの！」

「……」

そんなに強い威力の魔法が……どうしてあんなにアツサリ消えちゃ  
ったのですか……？  
わからないです。拙者には何が何だかさッパリなのです……。

「なんだあ、その困ったちゃん見てエな顔？ オマエ、もしかして  
このオレ早川悠の能力を知らねえで戦ってたんかあ？」

「の、能力……？」

それ以前に貴方の名前すら知らなかったのです……。  
早川悠、すごくいい名前……なのに、どうしてこの人はここまで気  
がふれているのでしょうか？  
あと早川の能力って一体なんなのでしょ……！

「オレは風・空気・気圧といったもの全般を操作できるんだよ。だ  
からオマエの風の魔法とかいうヤツなんざア、オレが風をちよつと  
操作すりゃあ動かねえでも攻撃を防げるんだよ……」

ポケットに手を突っ込み、口元をニヤニヤとさせ、早川は自分の力

を説明していました。

風・空気・気圧……早川は、もしかして大気そのものの操作を自由自在に行えるのでしょうか？

アルファ隊の皆さんがみんなアツサリ負けていたから、ある程度は覚悟していたのですが……。

あの人、バケモノ級に強いのです！

拙者は魔法の扱いは苦手とは言え、それでも一応特隊員のハズなのです。

でも、早川は一度たりとも動いていないのに、苦戦しているのは何故か拙者のほうです。

「要するにお前じゃオレには及ばねえんだよ。さっさと諦めちまえよ？」

「……そうは、いかないのです……っ！」

「アア？」

「貴方なんかに負けるわけには……絶対に行かないのです！」

拙者はそう言い放った瞬間に、一期一振を両手で握りしめた。

もう覚悟は決めたのです……魔力なんてもう残ってないですし、仮に使えたとしても早川は拙者が起こした風を操作してしまう。操作されると風はいとも簡単に消されてしまうのです。

だったらもう手段は一つ　接近戦を挑んでみるのです！

「……ッン！」

拙者は大地を蹴るように飛び出し、ミサイルのように一瞬で早川との間合いを詰めました。



早川は反応に遅れたのでしょうか……全く動こうとしないのです。どういふ事でしょう。でも　ハッキリ言っただけはチャンスなのです。

拙者はこのチャンスを絶対逃しません。隙だらけの敵のこの一期一振で切り裂いてやるのです！

そして拙者は果たすので……生き残ったアルファ隊の皆さんを、けしげ様を守る事。

そして　殺された戦友なかまの仇討ちを　しかし、刃が触れようとした　！

「もきゅっ！？」

刹那、気付けば拙者は背中を地面へぶつけていたのです。

痛い……背中も痛ければ刀を持っている手首も痛い……。

どうして、なんですか……今の間合いから避けれるハズがない。というか、早川は避ける素振りなんて全く見せなかったのです。

それなのにどうして拙者が吹き飛ばされてしまったのでしょうか……っ！

「残念、風もダメなら斬撃もダメでしたっとなあ」

「……くっ！」

「さて問題です……オレはどうやってオマエの攻撃を防いだでしょうか？」

「……ふ、吹き飛ばされた……風っ？」

「ぎゃは！　中々いい線イクじゃねえかよ！　正解です、オレは一瞬の間に暴風で身体の周りに膜を張り巡らしたんだよ。多分、大和

の46cm砲を受けたってオレはビクともしねえよ」

46cmって……すごい大きさの砲ですね。

拙者の世界では魔力を込めて大幅に強化した小口径砲が主流なので  
す。

ですから、46cmなんてバケモノにしか聞こえないのです。

でも あの早川悠という男はそれさえも防いでしまつらしいので  
す……っ！」

「オレにとつちあ、日本刀の斬撃を防ぐ事なんざ造作もね工事なん  
だよ」

「……………」

どうしましよう、相手はチート級に強いのです……っ！

こんなのにも勝てるワケが いや、待つのです。

一瞬で暴風の膜を張り巡らせる。確か早川はそう言っていたはずな  
のです。

という事はあの暴風の膜は……試してみる価値はありそうですね！

「……………えいつ！」

咄嗟に、拙者は一期一振を投げつけて突き刺す槍のように投げつけ  
ました。

当たれば普通は最後 人体を真っ二つに斬り裂ける鋭い刃が突き  
刺さるのです。

でも、どうせ早川にはその攻撃は効かないのです。

そんな事は既に計算済み、だから拙者は一期一振を投げつけてみた  
のです。

本当の狙いは一期一振で早川を串刺しにする事ではありません。本

当は

「ハッ、学習能力がねえなあ！ たった今オレにはどんな攻撃も通じねえって言ったばっかだろオ！」

やっぱり一期一振は暴風の膜に触れた瞬間、弾かれるように吹っ飛ばされてしまいました。

今の間、早川の注意は完全に疾風の如く向かってくる一期一振か、その後方にいた拙者でした。

だから後ろは隙だらけ。攻撃をするなら正に今がチャンスなのです！  
一期一振を反射された 刹那、早川の背後へと回り込んだ拙者は、大きくジャンプをして両足を突きだしました。

ドロップキック、葵さんと一緒に見たプロレス技の一つなのです。

拙者はそれを 完璧とも思えたのに、僅かに油断をしていた早川に打ち込まうとしました……でも。

「…………ツ!？」

残念、ギリギリの所で避けられてしまいました。

……でも避けたのです。暴風の膜を張り巡らす事により、どんなに強力な攻撃を受けても無事でいられるハズの早川が なんと拙者の攻撃を回避したのです。

初めて早川が見せた動き。一見大した事のないように見えて、その行動には重要な意味が含まれています。それは 早川が常時、攻撃を風で逆に吹っ飛ばす事が出来ないという事を証明したのです。

「…………チッ、あの野郎。まさか気付きやがったのか？」

露骨に驚く早川……やっぱり、拙者の読みは当たったのですね！

「見つけましたのです……貴方の、僅かな隙を！」

「……ふふ、ぎやははっ！ 最高じゃねえかオマエ！ このオレをここまで楽しませたヤツは久しぶりだなア」

何故でしょうか……拙者は弱点を見破ったのです。

つまり、ほんの僅かでも拙者に勝利の光が見えたハズなのです。でも、早川は相変わらず不敵な笑みを浮かべているのです。

あの狂ったように余裕そうな顔……この状況でどうして出来るのでしょうか？

「退屈しねえなオイ。今までの雑魚が嘘みたいに思えてきた。イイぜ最高に愉快だぜ？ オラア！ もっとこのオレを楽しませてみるよー！」

「……上等なのです。でしたら　！」

拙者は早川に向かうのではなく、そこに落ちている一期一振。

そしてもう一つ、線路の上に落ちている鉄パイプを回収しようとしてました。

その為に拙者は今、早川に背を向けて全力疾走中なのです。

一見危険なこの行為。でも……あれだけヒョロヒョロな身体では多分、拙者の足についてはこれないハズなのです！

「またオレが油断している時を狙うってか。オマエ中々いいアタマしてんなあ……でも一つだけミスがあったな。この作戦はオレがオマエに接近したら何の意味もねえよなア！」

その時　信じがたい事が起こったのです。

早川は一步だけ足踏みしました……それはいいのです。でも、何故か足踏みをした瞬間、早川が砂埃をあげながら信じられない速度で拙者の横に並んだのです

「い、一瞬で間合いを詰めた!？」

「なに、ただ風の力で高速移動をしているだけだ。オマエだって魔力が残ってればそれくらい出来るんだろぅがア！」

叫びながら放たれた一撃 咄嗟に両腕でガードをしようと試みるも、アツサリそのガードは崩され、拙者の顔面に早川の拳が突き刺さってきました……っ！

それもただの拳ではありません。まるで 殴る時さえ風を利用しているような

……気付いた時には、拙者は既に仰向け状態で倒れていました。夜だからか地面が冷たいのです。

そして、拙者に向けてくる早川の視線も狂気に満ちつつ、どこか冷たい気がするのです。

「い、ふー」

突然脇腹に打ち込まれた蹴り、早川は楽しそうに拙者を何回も蹴ってきます。

「サービスだサービス！ オマエはオレを楽しませた……だからオマエにはもつと痛い目に遭う権利があるんだよオ！」

「い、はあ

っ！」

ぼやける視界に、お腹の底から吐き出される紅い液体が映った。  
もうダメ……動こうと思っても……どうしてだか、ダメージのせい  
か動けないのです……っ。

……ごめんなさい。皆様……ほんとにごめんなさい。

拙者は弱いです……超能力者に勝てませんでした……っ。

ごめんなさい……ごめんなさい、けーすけ様……っ！

「……………」

……あ、れ……？

どうしてなのでしょう……殺そうと思えば早川はいつでも拙者を  
殺せた。

拙者にだってもう戦意はない。でも、どうして早川は攻撃を

「なんだアアイツ……もしかしてオマエの仲間だったりすんのか？」

……うそっ、早川の後ろに立っている人……。

黒髪で、少し痩せ形でもどこか頼りのある感じで、握りしめられた  
拳が熱く感じる……。

「け……けーすけ……さま……？」

どうしてか、そこにはけーすけ様が立っていました。

第62話 魔法使いvs超能力者（後書き）

後書きトークコーナー

あかり「な、なんだ一方（ry）……あ、アイツ……強っ！」

圭介「殆ど動かないでアレだもんなあ」

あかり「……というか、話題がない！ なんとかしろよな！」

圭介「確かに話題がねえけど、俺に振られても困るよ。俺だって話題がないしな」

伊吹「だったら、私が圭介の恥ずかしい過去話してあげよっか？」

圭介「はい？」

あかり「ほ、ホント！？ 楽しみだな！」

伊吹「そうねえ、例えばオネシヨの話とか  
」

圭介「ちょ！ 黒歴史ヤメテエーッ！」

### 第63話 / 一般人 vs 超能力者 前編

疲れた……工場内を探しまわっていたけど、ようやく暮葉達を見つけた。

暮葉はボロボロであった。多分、あの白いヤツが早川悠ってヤツなんだろう。

女の子の腹部を楽しそうに蹴る所に俺が登場。俺の扱いに困る早川悠……。

……どこまで早川は一方行なんだよ。髪型は銃でやられた後っばい感じなのだが。

そんな事よりアイツ……暮葉をあんなに散々ボコボコにしゃがって生きてるだけマシかもしれないけど、かと言ってそれで言いわけがない。

そういう問題じゃねえんだよ……ッ！

「け、けー……すけ……さま？」

「おいてめえ……邪魔だからどけよ」

「……チツ、やっぱり仲間か。こりゃ予想外の展開だったなあ」

胸を貫くような一言を放った瞬間であった。

早川悠が初めて、笑み以外の表情を見せたのは。でも、これでは全然足りない。もっとキツイ、激しい言葉を浴びせてやらねえと。

「どけって言うてんだよ、聞こえてねえのかよてめえ！」

早川を激しく睨みつけつつ、俺は早川を怒鳴りつけた。



すると早川は驚きとも何とも言えない、複雑な表情を俺に見せてきた。

……でも、それはたったの一瞬だ。すぐに早川は瞳を閉じ口元を笑わせる。

そして遂に　俺に対して初めて一言を言っ てきやがった。

「まあオレの存在は公にはなつてねえから、知らねえから仕方ねえかもなあ。でも一応教えといてやるよ……オレはオマエと違つてただの人間じゃねえんだよ」

すげえ……アイツの言葉からピリピリと伝わってくるよ。

その言葉には優しさのカケラもない。伝わってくる感情は殺意のみだ。

……わかつてんだよこつちは。てめえが普通の人間じゃねえつて事くらい。

明智があんなに恐怖するほどの、あの暮葉をこんなにボロボロにできる程に強くて残忍なヤツだつて事くらい。そんな事は承知の上だからこそ、俺は今ここに立っているんだ

「……ッ」

俺はさらに強く、早川を睨みつけた。

流石にメンチビームは出なかつたけど、本当にそれが出そうな程に彼を睨みつける。

拳も力強く握られ、足も何だか今すぐ飛び出してしまいそうな程、ウズウズしている。

「へえ……オレと会つたヤツは大抵、自信過剰になり過ぎるか恐怖するかのどつちかなんだけどなあ。オマエは違つみたいだな」

「……………」

「なるほど、少しは覚悟できてるってのかア？ …… おもしれえ」

早川が初めて、ポケットの中から手を出した。

たったそれだけの動作が余計に俺を緊張させる。

明智を恐怖させ、暮葉をあんのところまで追い詰める……………おそろく  
というか確実に早川は強い。

しかも、実際どれくらい強いのかは戦ってみなければわからない。

もしかすると、本気を出される前に殺されちまうかもしれない……………。

……………でも、要するにたったそれだけじゃねえか。

それだけ強いヤツだからこそ存在している、僅かな隙ってのは絶対  
にあるハズだ。

「けーすけ様……………だ、だめです……………逃げてくださいっ」

「ん？」

暮葉が喋っている。俺に逃げろと言っている、喋るのがやっとなく  
らい弱っているのに……………。

あれだけ無理して、自分がヤバいのに俺の事を心配して……………。

「殺される……………のですっ。けーすけ様が殺されたら……………何の意味も  
……………」

「死なねえよ」

「もきゅ……………？」

「お前の前で死ぬるわけねえだろ。お前の任務は俺の護衛、俺に死

なれるのが一番困るんだろ？」

「だ、だったら……逃げて」

きつと暮葉は俺を守りたいから。だから連続殺人犯である早川から俺を遠ざげたいと思っている。

だからこそ、アイツはしつこく俺に逃げろって言うてくるんだろ。確かに、俺がこのまま早川から猛ダツシユで逃げれば……俺は助かるかもしれない。

でも、その方法で助かるのは俺しかいねえじゃないか。そんなの俺は絶対に嫌だ……だから

！

「でも、俺だつてお前に死なれるのは嫌なんだよ」

「……ッ！」

仰向けで寝ている暮葉は、俺の言葉を聞いた瞬間 目を見開き小さな声を上げた。

おそらく、俺の言葉は暮葉にとって予想外だったのだろう。

俺の中では予想外と言つか……あたりまえの事を言っただけだったのだけだ。

「それに俺達は友達だろ？ 友達つてのはお互いを助け合うものだろ？ 俺は日頃からお前に助けてもらっているけど、俺からお前にした事つて殆ど何もねえじゃないか」

「え……え……？」

「俺は今までみたいない一方通行なのは嫌なんだよ。だから、今日は今までの借りを返す。今からお前を助け出してやる……絶対に！」

叫ぶような言葉を暮葉に放つと、俺は咄嗟に早川のほうを見た。距離にして数十センチ。攻撃する素振りを見せてはいないものの、俺と早川はかなり近い所にいた。相変わらず早川はどこまでも狂っている、そんな歪んだ表情を見せつけていた。

脅しのつもりなのだろうか……生憎、俺はそういう表情を何度も見てきた。

だからてめえなんて怖くねえ　てめえ、どう考えても一方　行みたいなキャラだからな！

そんなキャラは今まで漫画とかアニメとかラノベとかゲームで……散々見て来たんだよ！

「なんだオマエ、カツコいい事言ってるじゃねえよ……それで負けたら恥かくだけだろ？」

「うるせえ……てめえなんか、負けてたまるかあつ！」

ドン！左足で大地を蹴り、跳躍するように前へ大きく飛び出した。

この距離からなら一瞬で飛びこめる。素早く拳を振り上げ、狙いを早川の顔面に定める。

よし、今だ……喰らいやがれ、俺の怒りの鉄拳を　　！

「チツ……魔法も超能力も使えねえクソか」

「　　！？」

刹那、早川が右足で足踏みをする、信じられない程に強い風が下から吹き上げてきたのだ。

俺がそれに気付いた時には既に時遅し、俺はあまりの暴風に耐えき

れず、いつの間にか身体が浮いていた。しかも、小石だかなんだか知らないけど、それが機関銃の弾のように俺の身体に突き刺さる。クソツ　なにこれ、暴風も苦しいけど小石のほう滅茶苦茶痛えぞ！

「ぐ、あつー！」

畜生……背中から落ちる時、受け身はとったもののここはレールの上。

肘をぶつけてしまった。体質的にすぐに消えるとは思いが、結構痛いもんだな……。

「なに驚いたような顔してんだよ。ヘツ、マリリン・モンローのめくれるドレスのように、下から風を吹かしただけなのになあ？　なあ、オレに喧嘩を売るって事は……下調べくらいはしたんだろ？　だったらそれくれえ理解していて欲しいもんなんだけどなあ」

そうだ……早川は明智曰く、大気そのものを操る事ができる。

酸素濃度を操る事も風を自由に吹かす事も、早川にとっては造作もない事なんだろう。

忘れていたけどさ、確か暴風の膜を一瞬で張り巡らせ、風の力で攻撃を吹き飛ばすらしい。

畜生……どこまで某学園都市ラノベの最強さんだよ。

でも、今はそんな事は関係ねえ。さっさとアイツをぶっ飛ばさねえと　　！

「ぎゃは！　そうだ、おもしれエ事してやろうかア？」

「……………！？」

その時、早川が一度足踏みをする……。なんと、廢線同然に錆ついたレールや、そこらに散乱しているゴミ。さらに暮葉の一期一振や落ちていた鉄パイプまで、何もかもが風の力で空に浮かび上がったのだ。なんだ……早川のヤツ。一体何をやらかすつもりなんだ？

「あはぎやははっ！ あひやはっ！」

楽しそうに、狂気に満ちた笑い声を発する早川は次の瞬間  
なんと、自分の能力で吹かせたものなのだろうか。

竜巻もビツクリな程の暴風を吹かせ、風の力で浮かせた様々なモノを俺に飛ばしてきた  
！

「やべえっ！」

思わず叫んだ俺は咄嗟に、2、3回地面を転がり、ようやく立ちあがった所で必死に走り回った。

ただ、飛んでくる様々なモノを避ける為に。だが　その時！  
銀色に輝く一期一振の鋭い刃が、猛スピードで俺に飛んでくる。  
その刃が僅かに俺をかすり　俺の左腕を僅かに鋭く傷つけた。

「ぐあっ！」

痛みには耐えられず、思わず声を上げて右手で左腕を押さえてしまう。本当に軽くかすっただけなのに……畜生痛え。

左腕からの出血も半端じゃねえな。少しだけ深く切ったのかしれない。

……まあ、体質的にすぐに治ると思うけど。

「オラア！　もう一度やってやつから、愉快にケツ振りながら逃げ

てみるっての！」

そう言いながら早川は、散らばっていたレールや一期一振等を再び宙に浮かせ、それを暴風の力で俺へと再び放ってきやがる。俺はそれからだだ必死に逃げるのみ。

逃げる事しか俺にはできねえ　ただ、反撃のチャンスを覗いながら。

……でもどうしよう、完全に俺は遊ばれている。早川のヤツ……滅茶苦茶強いっ！

「はあ……はあ……はあ……」

なんとか全ての攻撃を回避したものの、走りまわったせいで息が切れてしまった。

畜生……アイツ、こつやつて遊びながら俺の体力を削いでいくつもりか。

ナメやがって。他のアルファ隊の隊員は一瞬で殺しただろうに……！

「クソツタレ、結構楽しいじゃねえか。あんなの良く避けれたなあ？」

「クソツ……てめえっ」

「でもいい加減面倒になって来たなあ……じゃあそろそろ、終わりにするとすつかあ？」

早川は下に落ちていた小石を軽く蹴る……。

瞬間、地べたで竜巻並の風が発生し、その小石は狙撃銃から放たれる弾のように俺へ向かってきた。

いくら身体が丈夫とは言え、あんなのを食らって貫通したらどうし

よう？

とにかくマズい。避けなきゃマズいけど避けられねえ……どうすれば！

そうだ、いい事考えたぞ。俺は咄嗟に早川にぶっ飛ばされた残骸を手に取り。

「ぐっ！」

カァン！と、小石を弾く音が響き渡る……。

鉄板。そう、俺は鉄板で小石を弾いたのだ。

敵戦車の砲撃によって被弾したものの、それを装甲で弾き返す。そんな光景を思い出せた事と、早川が暴風で残骸を作りまくってくれたからこそ、今の作戦は成功したのである。

「ハア？」

早川は信じられないものを見たような目で、俺の事を見ている。

おそらく、今までいかなかったのだろう。自分の攻撃を防いでしまうようなヤツは……。

プライドが傷つけられ、その事に対して腹でも立てたのか……早川は。

「ギッ！ うああああああああああああああっ！」

物凄い雄叫びを、この戦場で上げたのである………！！



第63話、一般人vs超能力者 前編（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「クソツ、胸が苦しい」

圭介「恋でもしたんじゃないかねえの？」

大吾「そんなハズはない！ 僕は二次元世界に生きる聖職者だ！  
現実女などに惚れるハズがない！

圭介「じゃあ他に思い当たる事でもあんのか？」

大吾「ある！ 昨日な は同人誌が完売していてショックだった！」

圭介「……それかよっ！ ああもう悲しくなってきた……彼女欲しい」

一方、伊吹と小坂は。

小坂「あゝあ、最近あたし。本編で出番ないなあ……学校が出てこないもん」

伊吹「はあ……」

小坂「ん、どしたの伊吹？」

伊吹「なんか……胸が苦しいっ」

小坂「ふふふ、もしかして圭くんの事かな？」

伊吹「っ！？　ち、違う！　あんなのありえないって！　ただの幼馴染だから！」

小坂「ほほう………わかりやすい反応ありがとうございます」

伊吹「亜紀っ！　あんた絶対楽しんでるでしょ！」

## 第64話 / 一般人 vs 超能力者 中編

「うあああああああああああ！」

突然雄叫びをあげた早川。

瞬間、右足をリズムを刻むように、小さくアスファルトを足踏みした早川。

その動作に何か意味でもあったのだろうか、強烈な暴風が下から俺を襲う。

最後に見えたのは両手を真横に開き、叫び続ける早川の姿。

その姿も次第に小さくなっていき……俺は気付いた時には空中に浮いていた。

おそらく、さっきの暴風で上に吹き飛ばされ、未だに身体を浮かすくらいの風が吹いているのだろう。

「く、くそお……っ！」

畜生、こんな状態じゃ身動きが全く取れねえじゃないか！

しかも早川はもう叫ぶのを止め、拳を握りしめながら俺へと接近していた。

さっきも言ったけど、俺は今早川の能力のせいで空を飛んでいる。

そんな俺に早川がどうやって接近するか 答えは簡単、早川は信じられない事に空を飛んでいるのだ。

「あぎやはははっ！ あひゃぎやはっ！」

危なっかしい笑い声をあげながら俺へと迫る早川の背中からは、四つの噴射する竜巻が出ていた。

それがどういう効果かはわからねえ。でも、早川は確実に上空を飛んでいやる。

「ぐあっ！」

ガコン！と顔面に突き刺さる、早川の拳。

コイツ……滅茶苦茶ヒョロヒョロな体型の割に力が……ッ！

いや待て、どう考えても早川に筋肉なんてものがあるハズねえ。という事は、今の正拳突きは能力の手を借りた……ッ！

「ぐうっ！」

ちくしょ……よくわからねえけど、背中を壁か何かに打ちつけてしまった。

鼻っ柱も背骨も痛え……まあ、動けない事はないけどさ……って、安心してている場合じゃねえ！

悪夢なのかこれは。無数のレールが早川が起こした暴風により、空中に浮いている。

そしてそれは、間違いなく俺の所に高速で飛んできていた。

「……！」

身体に痛みは残っているものの、あんなのを食らっては骨の一本はヤバいかもしれない。

咄嗟に立ちあがり、焦って転びそうになるものの、それでも俺は必死に走り続けた。

ヒュン、ヒュンと、レールが俺の真横を飛行する音が耳に入る。

これ………なんとというか、超怖ええええええっ！

「うわあ………っ」

レールが来なくなつたので、試しに後ろを確認してみると……。  
地獄絵図。建物に無数のレールが突き刺さっている。

もし避けなかつたら、レールが俺の身体に突き刺さっていたのかな？

……俺、一応身体は丈夫だ。でも、モノが刺さつたらどうなつちやうんだろつか？

うん……流石にヤバい気がするな。というか、想像しただけでも冷や汗が出てくる。

「へへ……オマエもしれえな。オレのパンチ喰らつて立っていられたヤツは初めてだし、あれだけのレールを全部避けるなんて、オマエもしかして身体も鍛えている未来予知系の超能力者かア？」

「お生憎様、俺は魔法も超能力も使えない普通の人間だよ」

「だったら……余計におもしれえよ！ そんなおもしれえヤツにもう一つ……おもしろい事してやろつかあ？」

「お、面白い事……？」

「一体なんだ。今度はどんなバケモノじみた事をしやがるつもりなんだ。」

「ここは工場だし、さっき破壊した建物はヤバい工場だったみてえだ。可燃性のガスが充満しているんだろっぜ？ なあ……ガスを集めて、そいつを静電気が火花か何かで爆発させるとさあ……このあたりはどうなつちまうと思っ？」

「……ッ！？」

ようやく、バカな俺にもその言葉の意味が理解できた。

コイツ……もしかして、ガスを集めて爆発させる事とかも出来るのか？

走れ、とにかく走って距離を取れ。爆発に巻き込まれたら流石の俺でもまずいかもしれない！

「ウフフ、フフフ、ハハツ、アハハ、アヒヤハハ、アハ！ ギヤハ！ アギヤハハ！ アツギヤハツハツハツハツハツ！」

どこまでも楽しそうに、早川は笑いながら両手を伸ばす。

どんな処理をしているんだろう……サッパリ理解できねえ。でも、さっさと逃げないとマズい。

そんな事を思っていた 次の瞬間。

半径数十メートルの範囲が一瞬にして、光と炎と熱風に包まれた。炎に焼かれる事はなかったものの、激しい衝撃波や熱風が俺の背中を叩くように吹きつける。

第一撃の衝撃波で吹き飛ばされ、熱風で焼かれるような熱さを感じた。

「が……ハア……っ！」

くそ……っ、声を上げる事さえ辛い……っ！

なんなんだよ早川は……やっぱりアイツはバケモノなのか？

ハナから勝ち目なんてない。隙も全くの0だったりすんのか……ッ！  
しかしチャンスだぞ。周囲は煙に包まれており、誰がどこにいるかさえ把握が難しい状況だ。

この状況なら早川も俺を探しだせない。今のうちの冷静さを取り戻し、作戦を練る事ができる……。

「よく無事で居れたなオマエ、ひよつとしてオマエ不死身なんじゃねえの!？」

……と、思ったけど……やっぱリムリです。

燃え盛る炎と煙の中から、細くて折れてしまいそうな早川の影が見える。

影は次第に近づき、やがて煙の中から白いヤツの姿が現れた。

「それに比べて俺は死にそうだな。軽く酸欠になっちまったぜ……まア、このオレに完全なる酸欠なんてありえねえんだけどな。要するに水中や宇宙空間じゃねえ限りは好きなかだけ酸素濃度を操作できる。エベレストの山頂だってオレなら余裕だぜ？」

「そんな能力があるんなら……どうしてそういう、フツの事をやってすごいって褒められようとしなかったんだよ……てめえは！」

俺は拳を握りしめ、歯を食いしばりつつ早川を厳しく睨みつけ、足に入れるだけの力を入れて立ちあがる事に成功した。畜生……フラフラだ。

身体が丈夫と言ってもこういう経験は初めてだからな……身体が覚えていないのも結構辛いものだ。

というか、俺自身自分の身体の限界を知らない。

限界を試せるイベントが、今までの日常で発生する事などありえなかったからである。

ところが……今はなんとなくだが限界を感じている。

これ異常激しいのを喰らえば、ホントに骨折くらいしてしまうかもしれねえ……ッ!

「それを許さねえのが佐井学園ってモンだア」

「さ、佐井学園……そういえば、てめえもその生徒だったよな。そして、そこをやめてえからこんな事をしてやがんだよな」

「へえ……中々オレの事情に詳しいんじゃないか。最も、同情するつもりはねえ感じだけだな」

「あたりまえだろ！ たとえ指示だとしても、それで暮葉の仲間が殺されていい理由にはならねえ！ てめえが佐井学園でどんなに辛い目に遭ったとしても、そこから意地でも逃げ出したかったとしても、殺人なんてもの、認められるハズがねえだろ！」

「は〜ん。オマエ、わかってねえ……学園つつてもあの学園は一つの組織だ。組織を裏切るってのは相当な覚悟なんだぜエ？ なあオマエ……オマエがもし軍隊に入っていたとしたら、そう簡単に自分の軍隊を裏切れたりすんのか？」

「……っ」

「答えはN oだよなあ。例え組織からは除名されても、裏切り者を意地でも潰そうとする連中は現れるハズだア。そいつらと永遠に戦う覚悟がオマエに出来たりすんのかア？ オレには出来ねえ、そんな事より学園から出された条件をクリアして、余生を平和に過ごしたほうが人生得だろオがよ」

笑顔でそんな事を言っている。恐ろしい事を笑顔で言っていていやがるでも……アイツはそんなヤツだけど、それでも少しは伝わってきたぜ。

アイツ、佐井学園でそんなにひどい現実を見てきたのか。

だから、ここまで必死になって学校を辞めようとしてんのかよ。

……気持ちはわからねえでもねえ　でも、結局早川は根本から問



違っているんだ。

「それでも罪のねえヤツを殺していい理由にはならねえ！ てめえが嫌がつている学園が出した殺人命令を、なんで聞く必要があるんだよ！ 大体、てめえくらい強かったらどんなヤツにだって負けたりするハズがねえじゃないか！ てめえがそういう覚悟を決める勇氣さえあれば、こんなふざけた自体にはならなかったんじゃないのかよ！」

「勇氣ねえ……ずっと永遠に血みどな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがいいかって話だけどなあ……オレには前者を選ぶ事はできねえ。それだったら前者を選ぶ方が遥かにマシだ。それともなんだア？ オマエはオレに単独で佐井学園と戦う勇氣でもくれるつてのかア？」

「いいぜ……だったら俺がてめえを勇氣づけてやるよ。この拳でな！」

「おもしれえなオマエ……上等じゃねえか。愉快に素敵にやってみやがれよ！」

そのセリフを早川が言い終えた後、ゆっくりと拳を構えた。

いつも通り咄嗟に頭をガードできるようにする為、両腕をしっかりと上まで上げた構えである。

一方の早川も口元を歪ませ、血に飢えたような目で俺を見ながら、両腕を大きく開き始めた。

……まだ戦いは始まったばかり。本当の意味での戦いは たった今、これからだ！

第64話 / 一般人 vs 超能力者 中編（後書き）

後書きトーカーコーナー

大吾「圭介が完全に上 さんになりきってるな……」

重原「それを言ったら敵さんも完全に某最強になりきってるけどね」

伊吹「ていうか、今回随分と戦闘シーン長いわね。いい加減読者も飽きてる頃じゃないの？」

小坂「まあ、これだけ長引くくらい早川が強いつて事だと思う！」

伊吹「で、でもそんなヤツに圭介が勝てるの！？ も、もし圭介が死んじゃったら……っ！」

小坂「あれえ？ もしかして圭くんの事心配だったりするの？」

伊吹「ち、違う！？ 圭介なんてどーせ身体が丈夫だから大丈夫よ！ べ、別に私は圭介なんか心配じゃないから！」

大吾「これは……ツンデレなんだろうか。それともいつものツツパリなんだろうか？」

重原「さあね……ふふふっ」

## 第65話 / 一般人 vs 超能力者 後編

身構える俺、両手を広げて気味悪く笑っている早川。  
俺達の睨み合いは続いていた。でも、先に口を開いたのは。

「まア……オマエも幸運だよなア」

「……？」

「オマエひよつとして稀に見る幸運体質の持ち主なのか？ このオレを前に未だに息してるなんてよ」

いや、俺はどちらかと言うと不幸だと思っぞ。

未遂で終わったからいいけど、ガチホモに掘られそうになったし。  
あと、もう終わったからいいけど校内でガチホモ疑惑が浮上したし。  
とにかく、最近ロクな事がない気がするんだ！

「あのピンクのアホ毛とどっちがすげえかな？ アイツはオレの弱点まで見破ったしなあ」

……弱点。暮葉のヤツ、早川の弱点を突いたのか？

いや、その前に早川の弱点って一体何なんだよ。  
すべてが完璧に思えるほど強力な力を誇る早川悠。そんなヤツに弱点があんのかよ。

「でも、オマエはピンクのアホ毛よりも長い間、オレの前で邪魔をしやがっている。オレからしたら迷惑な話だけだなア、それって結構すげえ事じゃねえの？ オマエ、ホントに頑張るなあ……」

「……あたり前だろ。友達の為に頑張る事の何が悪いってんだよ」  
友達がいないヤツにだけは言われたくねえぜ、そのセリフは。  
……と、そんな事を思った。

「へエ……頑張るねエ。希望に満ちたいいセリフじゃねえかよ……  
チツ、でも無神経だな。まあいい……オマエは頑張ったから頑張る  
必要はもうねえよ。そんな事より　そろそろあの世にでも行きや  
がれ！」

刹那、セリフを全て言い終わった早川はダン！と、地面をとても強く蹴りあげた。

アスファルトの残骸と砂埃が舞う、早川だけは俺へと近づいてくる。その速度があまりにも速い所、アイツはまた超能力を使いやがったに違いない。

クソツ……いざ来るとなると、やっぱり怖いかもしれねえ……。

2〜3歩歩んだだけなのに、何メートルかの距離があったハズなのに……。

それでも早川は　一瞬で俺との距離を詰め、右手を突き出し始めた。

畜生……どうすりゃいい。多分引いてもすぐに間合いわ詰められる。かと言って殴りつけても、明智曰く早川は攻撃を暴風で防ぐらしいからな。避けても殴っても無駄……ああもう対策がねえ！

こうなったら手段は一つ……どうせ身体は丈夫だ。玉碎覚悟でコイツをぶん殴る！

「ちくしょおおおおおおおおおおおっ！」

俺は目を瞑り、ただ只管前を走り始め、どこを狙っているかもわか

らない右ストレートを放ってみた。

……でも、ガツンと言う鈍い感触を拳に感じる。  
なんだ、これ……慣れた感触だな。過去に何度も経験した……まさか？

「ぐあ、が、あ……ッ！」

……あれ、殴れた。おかしいぞ、明智の話って実はウソなんじゃ？  
だって今、俺は確かに早川をぶん殴った。早川のぶっ飛ばされて倒れているぞ。

「あ、はは……面白エ畜生。殴られたのは随分久しぶりな記憶だぜ。  
オマエ……ついにピンクのアホ毛を越しやがったな。アレを超える  
くれえ面白いヤツが、まさか魔法使いでも超能力者でもねえヤツと  
はなあ……」

ぶん殴られた顔面を押さえながら、狂気じみた声で早川は語る。

早川もよく喋るよなあ。戦闘中なのにここまで喋る人、俺は初めて  
みた気がするな。

「さて、と……じゃあそろそろ、本格的に始末だクソ野郎オ！」

さつきと同じく、再び衝撃的に突撃をかけてくる早川。

確かに早川の動きは早い。おそらく、また風を利用して加速でもし  
ているのだろう。

ホントに便利だよなあ風って。他にも酸素濃度操作や気圧操作、ガ  
スマで集めて爆発させられる。

ホントにすごい能力の持ち主だ……だけど。

「てえっ！」

「ぐ、ぼおっ！」

身体を少しだけ振り、早川の右手を優雅に回避する。

そして空いていた右拳をぎゅっと握りしめ、カウンターを決めるように俺は早川をぶん殴った。

一度吹っ飛ばされた早川は痛みに耐えつつ、近距離から俺を攻撃しようとして手を伸ばしてくる。

だが、俺は何度も避けては早川を殴り続けた。3発、4発……5発6発と。

ここで俺の疑いは確信へと変わった。そう、早川は 殴り合いの喧嘩だけは滅茶苦茶弱い！

「ク、ソオ……ッ！ この三下野郎オ！」

早川は振るわれる俺の拳を掴もうとする。

多分、拳を取って零距离で超能力を使うつもりだったのだろう。

だが、その手は確かに速かったが、どこか抜けている感がある。

拳を寸止めた俺は、ひらりと身体を一回転させ、低い位置からボディーブローを鳩尾へ打ち込んだ。

「ぐぼあっ……！」

「フッ！」

「が、はあ　　ッ！」

ボディーブローの次は顔面へのストレート。

今の一撃で早川は、数mは吹っ飛ばされた事だろう。

しかし何か超能力でも使いやがったのか、早川はなんとか立って持

ち堪えやがったのだ。

「ちつくしょう……オマエ、どうして……っ」

「は、てめえは確か暴風の膜で攻撃を防げるんだっただよな？」

「チツ……そんな技、オマエには使ってねえのに」

「確かに、でも俺は知っているんだ。だから俺はてめえを恐れていた……でも、てめえには致命的な弱点があるだろ。攻撃中は暴風の膜を張り巡らせられないっていう弱点が！」

絶対的な風の壁を作り、それが作りだせない攻撃時は誰も抵抗する事が出来ない程の、破壊力が凄まじすぎる攻撃を放つ早川悠の戦闘スタイル。それは一見完璧とも見えた。

……だけど、そんな僅かな所に弱点は存在していた。だって、攻撃時は俺の普通の右ストレートさえ、満足に防ぐ事ができないんだから

「あと、お前は素手で喧嘩なんてした事、ねえんだろ？」

「なっ……」

「遅いんだよ。どう考えても喧嘩のやり方しつてるとは思えねえ。能力に頼り過ぎだ……てめえは！」

超能力に頼り切った戦い方。確かにそれは強い……。

彼の能力は態々手を使わなくとも相手を殺せる凶悪さを秘めている。その凶悪さは本当に最強を誇るレベルである……ただ、接近戦での弱点を知らない時点では。

でも、ちょっとでも弱点が表に出てしまった瞬間、その弱点は大きな弱点となってしまう。

俺と早川の僅かな差とは正にその話なのだ。

弱いけど近接戦闘に慣れた俺。強いけどそこだけは苦手な早川……俺と早川の差は歴然だ。

「……チツ！ ふざけんじゃねえぞ、この三下ア！」

早川が再び地面をたん、と軽く足踏みする。

それだけど、アメリカの巨大トルネードもビックリするほどの、巨大な竜巻が生成された。

それは次第に俺へと迫り、どうする事もできなかった俺を上空へと一瞬で突き上げてしまった。

……だが、俺はこのピンチを逆にチャンスに捉えた。

「ぐおおおおおおおおおおおっ！」

空中で体勢を立て直した俺。

早川のほうへと落下するが、その勢いで早川の顔面を思いっきり殴りつけた。

突き刺さった俺の拳は落下する時の勢いもあったのか、通常よりも重い一撃であったらしい。

真っ白な早川とは真逆である、真っ赤な鼻血がドロドロと流れていた。

「ぐ、はぁ……ちつくしゅう……この野郎オ」

「……暮葉も暮葉の仲間も、みんな必死に生きてんだよ。てめえの勝手な都合で必死に生きる皆を傷つけてんじゃねえよ！」



「さつきも行つたじゃねえか……オレに残された選択肢のうち、一番楽なのを選んだんだ。その途中にいる特異点なんざオレにとつてはどうつて事のねえ、ただの学校を辞める為に必要な道具に過ぎねえんだよオ！」

早川はムカつく事を吐き捨てた……。

「……大気中の分子運動を抑制・活性化。湿度……操作」

瞬間、早川は笑う。そして両手を上に広げて何かを呟き始めた。

なんだ……あの野郎、一体何をするつもりなんだろうか。

ハッキリ言つて早川がやるうとしてしている事がサツパリわからん。でも、ホントに嫌な予感しかない。

危険を感じた俺は再び拳を握りしめ、いつもでも戦えるよう再び身構えた。

「くく……か、ぎゃは……うふふ、あはは、はっぎゃあはははっ！」

な……マジかよアイツ。頭上へ伸ばした手の上には巨大な火の玉が。なんだよコレ、とらゴンボールの元気玉じゃねえんだぞ。

すっげえでかい……軽く直系10mは超えているかもしれないぞ。

アイツ、あんな巨大な火の玉をどうするつもりなんだ？

「さて、と……焼け死ぬかアオマエ？」

「！？」

狂った笑顔の早川の口元が、さらに大きく歪んでいく。

その瞬間　まるで太陽を小さくしたかのような火の玉を投げつけてきた。

アレを喰らえば身体は黒こげ決定。完全に黒こげになったら治るかわからねえぞ……。

そんな事を恐れた俺は背を向け、全力疾走をするのだが。

「ぐあああつっ！」

瞬間、俺の背後からイキナリ火の海が襲ってきた。

というか、このあたり一帯が一瞬にして火の海に包まれたのだ。凄まじい熱、奪われていく酸素……。

く、そ……まずいつ。これ、もう少し近い所にいたらホントに死ぬっ！

「ぎゃあっははははは！ 最高に綺麗な火の海じゃねえか！」

「て、てめえ……っ」

「おらあ！ 今度こそオマエを徹底的に焼き殺してやるから、悔しかったら火の海渡ってオレをぶん殴ってみろっの！」

早川は笑いながら、さっきのように大きな火の玉を作りあげて行く。でけえ……段々と出来上がっていく火の玉。その大きさはさっきの倍はあるかもしれない。

……というか、まだまだ大きくなっていく。

畜生、あんなの打ち込まれたらいくら逃げても……今でさえ輻射熱がすごえっのに！

「結局、オマエじゃオレを止める事はできねえってなあ！ よく頑張ったけどこれが最後だ、さてさて……最高に愉快的な火刑の始まりだぜエ！」

暴風、飛行、酸素濃度、気圧、爆発、防御……ああもう、なんでもアリだなあの野郎。

とにかく、このままだと本当に火刑にされちまう……。でも、火の海がすぐくてマトモに動けない。畜生、こりゃまさかのチエックメイトか？

俺はこの後どう行動すりゃあいいんだよ、畜生！

「さあて、そろそろ焼死の時間だぜ！ 愉快で素敵な焼死体にもなりやがれ！」

「ちつくしよお……………っ！」

動けねえ。完全に火の海に囲まれて動けねえ！

でも、早川は容赦なく攻撃をしてこようとす。

避ければいい話なのだろうが、さっきも言った通り火の海が邪魔で満足に動く事すらできない。

……終わった、完全に終わりかもしれない。

早川相手に俺じゃあ話にすらならねえ……そう思い、苦しき焼死を体験する覚悟を決めた

「……………チツ、今日は随分とクソみてえな風が吹くな……………」

刹那、早川は俺を殺すのではなく、機嫌の悪そうな顔で独り言を言っていた。

……………どういう事だろう。しばらく意味がわからなかったが、火の玉を見てようやく納得ができた。

なんと、早川が作りだした火の玉はウネウネと、まるで風でも吹きつけているかのように動いていた。

「……………どういう事だこれ……………この風、自然のモンじゃねえ。クソツ、蠟

燭やライターの火じゃねえからまだいいけど、こんな状況じゃ満足な火の玉を作り出せねえ」

奇跡と言ってもいいのだろうか。突然吹きつけてきた風は早川の調子を狂わせていた。

この奇跡としか思えない風はもしかして、神が吹かせる風こと神風なんじゃないだろうか。

でも、早川のヤツが自然の風ではないと言っていた。じゃあどういう事なんだ？

近くに巨大扇風機でも……あるわけないよな。どうやってこの風は起こっているんだろうか。

「けーすけ様っ！」

「く、暮葉!？」

その時、暮葉が一期一振を振りまわしながら、乱暴に俺の隣へ着地してきた。

コイツ……そういえば最初っからいた。早川にボコボコにされていたのは暮葉であった。

そうか、今までずっと俺と早川の戦いを見ていたんだよな。

でもどうしてだ。なんでこのタイミングで戦場に割って入ってきたんだ。

逃げていれば……そうすれば、こんな地獄なんて見ずに済んだかもしれねえのに！

「けーすけ様。ご無事なのですか!？」

「俺は無事だけど、火の海が邪魔で動けねえな……」

「だったら今、この炎を消火するのです！」

暮葉がそう叫んだ瞬間、どういふ事だか空中から大量の水が巻かれ始めた。

別に天ぷらの油とかで発火したわけではない、俺の周りで燃えている炎は次第に鎮火してゆく。

水の力すげえ………というか、どうやってこんなに大量の水を放水しているんだ？

「な、なんだこれ！？」

「けーすけ様。急遽他所からアルファ隊の皆さんが駆け付けてくれたのですよ」

「じゃ、じゃあこの水って……」

「はい！ 水系統の魔法使いによるものなのです！」

なるほど。

炎や風の魔法を使えるヤツがいるんだから、水の魔法が使えるヤツがいたっておかしくはないよな。

ハハッ、なんだかよくわからないけど、コイツはいい気がしてきたぞ。

なんだか、次第に俺達が有利になってきた気がするんだ。

……一方、大量の水を浴びている早川。

何故か早川だけ水が激しい。まるでバケツで水をかけられているかのようにあつた。

「クソッ！ この……野郎オ……殺すっ！」

しかし早川は気付いていた。これはすべて、暮葉達アルファ隊の仕業である事に。

だからこそ、早川はあのように殺意をむき出しにしているのである。

「おそらく早川は本当に暮葉達を殺すつもりであろう。あの目はマジだ……。」

「……でも、そんな事をさせるとおもつか。俺はなんの為にここに立っているってんだよ？」

「あの子への恩返し、そしてあの子とあの子の周囲の世界を守る為に……俺は立ってんだろ！」

「……させねえよ」

「アア？」

「させる、わけ……ねえだろ！」

魔法使いの魔法による雨と、未だに小さく燃える複数の炎の中……俺はゆっくりと歩んでいく。

「一步、また一步……ゆっくりではあるが少しずつ、確実に早川へと接近していく。」

「視界の先には早川ただ一人。アイツさえ……アイツさえ倒す事が出来れば。」

「アイツに佐井学園と戦う勇氣さえ 与えてやる事ができれば  
！」

「……おもしれえクソツタレ。いいぜ、そこまで言うなら……オマエから殺すッ！」

轟！という音と共に、全速力で走る新幹線の如く早川が迫ってくる。

だが、それは俺にとっては大変都合がいい。正直に言つとこつちも結構疲れている。

走つたら多分、戦う体力なんてなくなつちまうだろう。

……早川のヤツ、どうして接近戦なんて挑んでくるのだろうか。

実はかなり焦っているのか、だからよく考える事も出来ずにただ近寄るだけなのだろうか。

確かに、総合的な戦闘能力は俺が一番低いだろうし、俺さえ潰せば暮葉とその他のアルファ隊の皆さんを、存分に相手にする事ができるハズだ。

だから、まずは一番弱いが一番邪魔くさい俺を潰そうと……早川は駆け出したんだ。

……でも、接近戦を挑むのは馬鹿すぎる。なんたつてアイツは攻撃中は他のヤツと同じで防御なんて出来ねえんだから！

「く、ぎゃは、アッ！」

一瞬で俺の懐に入ってきた早川。右手を勢いよく突き出してきたが俺は右手をひらりと回避。

続いて第二撃、振るわれた早川の左手を右腕でガードしてみせる。

……大した威力じゃない。コイツ、熱くなり過ぎているあまりに能力を満足に使う事を忘れている。

力も全く入っていない。俺は……そんな早川の左手を払い除けてやった。

「……ア……ア……ッ！」

隙だらけの早川悠　ハッキリ言って、今の早川なら子供でも一発入れられるであろう。

それくらい早川は隙だらけであった。

オマケに早川は目を見開き口も明け、激しく驚いた表情を見せている

「……………このリアル一方 行……………ッ！」

攻撃手段も失い、冷静に対処する能力さえ奪われた早川に対し、俺は冷たくそう言い放つ。

そして……………ダッ！と勢いをつけて、僅かな距離を前方に跳躍し。

「……………もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎オ！」

言い放った、瞬間。

俺の全力の右ストレートを、超能力者である早川悠の顔面深くに突き刺してやった。

早川の弱そうで軽々しい身体、はゴロゴロと乱暴に地面を転がっていった……………。

がくつと仰向けで伸びている早川。完全に力が入っておらず、瞳は閉じられ口は無様に開いている。

呼吸は苦しそうだが、一応しているあたり多分死んではないだろう。

とりあえず……………な、なんとか……………勝てた……………ッ！



## 第65話、一般人vs超能力者 後編（後書き）

どうも、作者です！

18時に更新すると言っておきながら出来なくてごめんなさい！  
しかも0時の更新もいつもより30分も遅れて申し訳ございません！  
もっと小説を書く時間が欲しいです……（涙）  
とにかく色々とし訳ございませんでした！

以下、後書きトークコーナー！

圭介「お、終わった……やっと戦闘シーンが終わった！」

伊吹「今回長かったわね」

大吾「しかもほとんどパク（ry）」

圭介「おいやめる！全部早川がアレに似ているのが悪い！」

伊吹「それにしてもよくあんなのに勝てたわね。圭介に勝てるんだ  
つたら重原は余裕じゃないかしら？」

圭介「俺……どんだけ弱く見られてるんだよ！」

## 第66話 トモダチ

ここはベッドの上、つまりは病院……などというわけがなく、実際ここは俺の部屋である。

一応病院へ行くことをオススメされたのだが、実際大した怪我をしていないわけではないし、正直早く家に帰ってこの疲れを癒したかった。だから俺は病院などに行かず、自宅へ直行したのである。

……それに、もう痛みなんて大分消えてきたしな。やっぱり自分の体質には感謝だよ。

「けーすけ様っ！」

特攻隊の如く俺の部屋に突入してきた暮葉。

もう葵のお下がりのパジャマに着替えたのだろう。

随分と可愛いらしいピンク色の花柄パジャマを着用していた……子供か、でも可愛いからOKだ！

「暮葉か……」

俺がそう言つと、暮葉はゆっくりとベッドに上がってきた。

……ちょ、待て。男女二人がベッドだと……！？

これは色々な意味でまずい……いや待て、一瞬でも変な事考えた俺が一番危険だ！

「けーすけ様、もう大丈夫なのですか？」

「まあ、元々大した怪我とかしてねえしな。あと何時間かすればもうどこも痛くねえだろ」

「にゅふふつ、圭介様の体質ってやっぱり凄いんですね!」

「あ、ありがとな」

畜生、ストレートに褒められるのも何だか恥ずかしいな。

それに、この体質って元々は御先祖アレクサンドルってヤツの体質だったんだろ？  
確かに俺もこんな体質を持っているが、何も俺だけの体質じゃねえのに……。

まあ、アレクサンドルはとっくの昔に死んだ人だし、今はどうでもいい話なのかもしれない。

「……あの、けーすけ様？」

「今度はどうしたんだよ」

「すみませんっ、拙者の力不足で……けーすけ様を戦わせて」

暮葉が本当に申し訳なさそうな表情で謝罪をしてくる。

確か暮葉の任務は俺の護衛。だからこそ自分が負ける事は許されな  
い。

ところが、暮葉は早川との戦いには負けていた。だからこそ、責任  
を感じているのかもしれない。

「……いいじゃねえか。それを言ったら俺だって謝りたいよ」

「もきゅ？」

「俺も大した事ないヤツで、最後は暮葉とその仲間に使われた。  
本当にごめんな」

「け、けーすけ様は謝る必要はないのですよ……だって、元々は早川とアルファ隊の問題なのです。けーすけ様は元々何の関係もなかったのですよ？　むしろ謝るべきなのはけーすけ様を巻き込んだ拙者達なのですっ」

完全に俯いてしまった暮葉。本当に……暮葉は落ち込んでいる。

関係のない戦いに俺を巻き込んでしまった事に、これでもかというくらい責任を感じている。

でも……よくよく思い出してみようか。関係のない戦いに口を出したのは

「暮葉こそ、何も謝る必要はないよ」

「へ、変な優しさはいららないのですよ……」

「変な優しさじゃねえよ。大体、あの戦いに口を出したのは俺自身じゃねえか」

「もきゅ……けーすけ様が？」

俯かせていた顔をようやく上げてくれた暮葉は、上目遣いで俺の事をジロジロと見てくる。

……いかん、なにこの可愛い生物。少し目を逸らそう……っ。

「だ、だってそうだろ？　俺は自ら暮葉達の所に行ったんじゃないか。それって要するに戦闘に巻き込まれたんじゃないじゃなくて、態々自分から戦場に足を踏み入れたって事だろ？」

俺はただ……助けなかった。ただ暮葉を守りたかった。

今までの恩返しもしたかった。その為だけにあの場に行ったんだ、別に巻き込まれたわけじゃない。

……まあ、完全に守る事も恩返しもできなかったけど。

むしろ暮葉がいなかったら、多分今頃俺は早川の言う愉快的焼死体になっていたんだろう。

恩返し所かもっと多くの借りが出来てしまった気がするよ。

「そんな……でも、けーすけ様が傷ついたら……っ」

「わかってる。俺が死んだりすると暮葉の立場が悪くなる事くらいでも……俺を守る為には生きてなきゃいけないだろ。暮葉が死んだら元も子もないじゃないか」

俺は出来るだけ優しい顔を作って、暮葉に一言一言を確実に伝えていく。

「そ、それはそうですけど……っ」

「だったらいいじゃないか」

「いいって……けーすけ様は拙者を……許すのですか？」

「許すも許さないも、暮葉は悪い事なんてしてないじゃないか。それに俺達は友達だろ」

「と、友達……？」

「うん、友達だ」

なんだかんだ言って、俺達はお互いの価値を認め合っている。

相手の為に出来る事をなんでもしようとする。時には相手の為に自己を犠牲にしている。

そして、なんだかんだ言っただけで信頼もしているし、暮葉の事も好きだ。もちろん友達としての意味だぞ！

「友達は友達を助ける。それは多分普通の事なんじゃないか？」

「ともだち……けーすけ様も友達」

「ああ、俺はそう思っている。だから助けられるのは俺だけじゃない、暮葉が危ない目に遭ったら俺も暮葉を助けるよ」

「……………」

無言で口を開いたまま固まっている暮葉。

頬がほんのりと赤く染まっていた。その状態で彼女は俺をじっと見つめている。

「く、暮葉……？」

「はにゃっ!?! す、すみませんっ!」

ほんのりどころかトマトのように真っ赤になってしまった。コイツ、素で意識がどっかにぶっ飛んでいたようだ。突然意識がこの世に呼び戻されたかのような反応だったぞ。

「大丈夫か、顔赤いぞ？」

「その、えと……拙者は平気なのですよ」

「そっか、よかった」

安心したげ、もしかして熱でもあるのかな〜とか思っちゃったよ。だって……暮葉の顔がどう見ても赤いんだもん。

「あの……けーすけ様？」

「お、おう。なんだ？」

暮葉が四つん這いになりながら、覗きこむように俺を見ながら名前を呼んでくる。

同じベッドの上に暮葉と二人きり、しかも俺と暮葉の距離は僅か数十センチ程度だ。

そんな近い距離から女の子に迫られると、なんとというか……恥ずかしいな。

多分、自分では見えないけれど俺の顔も赤くなっているかもしれない。

「拙者達……友達、なのですよね？」

なんてことのないようで、とっても重要な確認。

何度も彼女の事を友達だとは言っているが、それでも確認を取ろうとするあたり、彼女はとても不安に思っているのかもしれない。自分が本当に俺の友達なのか……そんな不安を抱いているんだろう。だから　俺はそんな彼女に対して

「うん、友達に決まってるじゃないか」

「……けーすけ様っ」

彼女から離れようとしなかった不安を取り除いてあげると、彼女は少し笑顔になつてくれた。

よかった。ようやく暮葉がまた笑ってくれたよ。

俺はやっぱり……暮葉の笑顔が一番好きだな。

「えへへ……友達。うん、友達っ」

なんだか暮葉は、友達という言葉が大変気に入った様子である。

別に俺が初めての友達ってわけでもないのに、彼女の喜び方はそれに近いようなものであった。

眩しい程の笑顔で、ぎゅっと枕を抱きよせて。

好きな人の事で妄想でもしちゃって、思わず嬉しくなっちゃった女の子のようである。

……って、暮葉は本物の可愛い女の子だったな。

……しかも、こんな事を考えている俺も正直、初めて友達が出来たくらい嬉しいような気がするな。

元々、本当の友達と呼べる友達が少ないせいもあるかもしれないけど……。

「けーすけ様！」

「ん、どうした？」

満面の笑みを浮かべた暮葉。その素晴らしい笑顔を俺に向け。

「ありがとうございます！」

ありがとう……嬉しいな、友達にありがとうって言われると、なんだかとても嬉しい気分だ。



それと同時に、ちょっと恥ずかしい気もするんだけどね。

「お、おう……暮葉。俺達は友達だからな、お前を頼る時もあると思うけど……暮葉だって俺を少しは頼ったっていいんだぞ？」

ああもう俺の馬鹿！

なに言ってるんだよ、今のセリフはあまりにも臭すぎるだろ！

いくら友達である事をアピールする為とは言え、流石に今のセリフは失敗だ！

……と、思ったが

「……はい！ 拙者も……けーすけ様の事、頼ってみるのです！」

何故か暮葉は喜んでくれた。今のくさいセリフで……。

な、なんでだろう？

ま、まあいいか。喜んでくれたんならそれで。

この日から俺と暮葉の関係は、ただの上下関係から友情へと変わったのであった……。

## 第66話 トモダチ（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「そろそろ、この後書きトークコーナーもネタが尽きてきたな」

伊吹「ちょよ！ いつもこのコーナーを盛り上げているあんたがそんな事言わないでよ！ このコーナーが終わったら出番のないキャラ達の出番がホントになくなっちゃうわよ！」

圭介「いつからこのコーナーは救済コーナーになったんだよ！」

千早「……お、お願いします。このコーナー終わらせないでください……私の出番がっ」

凧紗「わ、私もだ。出番が減る」

大吾「僕なんて重原より出番ないんだぞ！ ここで少しは出演させてくれ！」

小坂「あたしも正直、出番がないからなあ……」

圭介「お、お前ら……まあ、全てはキャラを増やし過ぎた作者のせいだな」

暮葉「過去作見るといつもこんな感じですけどね、進歩がないのですね！」

伊吹「あんた達自虐ネタやめなさい！」

## 第67話 戻ってきた平穩(?)な日常

あれから数日が経過した、俺も暮葉もいつも通りの日常を適当に満喫していた。

明智も、最初は早川に勝ったなんて信じていなかったけど、どうやら少しは安心したようである。

そして事件の後の休日、暮葉はアルファ隊の戦死者の葬儀の為に一時レムリアに帰還。

ただし、翌日にはいつもの元気な顔を見せ帰って来てくれた。

そして……現在、7月1日の金曜日。

いよいよ7月。7月と言えばテストも終わってお気楽な気分である時期だ。

それと同時に文化祭も近づき、その準備で少しずつ忙しくなる時期でもある。

「文化祭なんて、ぶっちゃけ5人の女の子がステージで演奏すればいいよな!」

「うっせ黙れ! てめえはけ おんのアニメでも見てろ!」

「まあまあ二人とも。だったらいつその事天下一武道会でも開いたらどうだい?」

「この武道オタクがっ! ンな危なっかしいの出来るかっ!」

大体、もう文化祭でウチのクラスが何をやるか、とつくの昔に決まった事じゃねえかよ。

文化祭でやる事は大体、どこの学校も6月か遅くても7月のアタマ

には決まっているハズである。

うちの学校の場合、6月のうちにさっさと決めちゃうようであり、既にクラス委員を中心に話しあいが行われ、その結果ありがちすぎる喫茶店をやる事になったのだ。

「い、伊吹……そんなに清水 太好きなの？」

「な、なによ変！？ 歌の歌詞もいいし、なにより声が最高じゃないっ！」

「もきゆう……拙者は音楽聴かないからよくわからないのです……」

「まあまあ、音楽の趣味なんて人それぞれだから」

「あ、亜紀さんはどんなの聞くのですか！？」

「あたし？ あたしは結構ロックとか聞くけど」

……まあ、ウチのクラス委員つてのがあの小坂で、小坂はクラスでも発言力のある女子だ。

その取り巻きにも伊吹や暮葉などの人気者がいるし、そもそも我がクラスは女子の人数が多い。

男子にも黒木ら三馬鹿や大吾と言った、いわゆるうるさいヤツはいるのだが……。

それでも、人数的に必然的に女子のほうが発言力があって……。

「はあ、どうせならコスプレ喫茶とかがよかったね」

「重原……無理だろ。うちのクラスの場合女には勝てねえよ」

「大体それでいいじゃねえか。僕的には、三次元の女の子がコスプレしても何の意味もないと思う！」

「お前は色々な意味で特殊なんだよ！」

この完全二次元派め！

なんでも三次元はクソと言いやがって、二次元は確かに素晴らしい。だが、二次元では決して出来ない事がある……三次元の女の子は抱けるじゃねえか！

とにかく……お、俺は完全に三次元を捨てる事ができないっ！

「も、もしかして清水 太聴いてるの私だけっ!？」

「すみません……その、CD貸してくれたら聞いてみるのですっ」

「暮葉、無理に伊吹に合わせようとしなくてもいいと思うよ。あと伊吹も音楽の趣味は本当に人それぞれだから」

……で、その三次元女子達でよく話す暮葉達だが、どうやら音楽トークで盛り上がっているようだ。

まさに健全。さっきからオタク談義ばかりしている俺らと違って本当に普通だ。

「そういえばさ、圭くんとか色々いるけど、男子って音楽なに聞いてるんだろっ?」

「どうせ圭介なんてアニソンばっかだと思っわよ」

「そうですよ！ けーすけ様がアニソン以外聞くとは思えないので

すよっ！」

クソツ、伊吹と暮葉め……まあ、確かに大体合ってるけどさ。これじゃあ俺が重度のオタクみたいじゃないか。また、確かに重度のオタクなだけどさ……。

これでも一応身だしなみには気を使ってるんだからね。毎日お風呂には入るし無駄毛処理は完璧。制服以外に私服だって結構いっぱい持ってるんだぞ。

「うっん、こりゃ本人から聞いたほうが早いかな」

「さ、三馬鹿は嫌だからね！」

伊吹さん、ホントに三馬鹿が嫌なんですネ。

というか三馬鹿は何処に行ったんだろう。アイツら元ヤンだけによく学校サボるしなあ。

多分、今日も街中のゲーセンで遊んでいるんだろう。

「大丈夫大丈夫！ 圭くん達に聞くから」

「け、けーすけ様達にですか!？」

「ま、まあ……悪くはないわねっ」

「よし決まり！ ちよいとそこの野郎ども〜！」

野郎共って……俺達かよ！

俺達に音楽の話を聞いてどうするつもりなんだろうか。

俺は基本、ゲーム音楽とかアニソンくらいしか聞かないし、大吾も俺と全く同じであろう。

そもそも俺の妹もどちらかと言うとオタクだから、ごく普通の音楽つてのがよくわからない。

重原はアニソンは聞くだろうが、他の曲は古いのしか聞かなさそう  
なイメージだしなあ……。

「ん、皆さんどうしたんだい？」

「突然だけどあんた達ってどんな曲聞くの？」

本当に突然だな、小坂のその質問……

まあ俺は横で聞いていたから、どうせそんな質問だろうとは思っていたけど。

「そんなの放 後ティータイムに決まってるじゃないか！」

「だ、大吾……っ」

若干引き気味の伊吹と小坂。まあ一般人として普通の反応であろう。

「そもそも普通の歌はクソなんだ！ ほとんどが何かのパクリじゃないか！ それに比べて……ああ、なんて完成度が高いんだ放 後  
ティータイム！ 僕はもう一瞬で唯ちゃんのファンになったね！

そして同時に唯ちゃんは僕の嫁だ！ 唯ちゃんこそ全ての救世主なんだ！ 唯ちゃんがいればどんな困難だって乗り越えられるさ！

唯ちゃんLOVE！ 唯ちゃんマジ天使！」

途中から唯に対する愛を叫んでるだけになってんじゃねーか！

どこが音楽の話だよ。音楽の話なんて前半のちよつとだけじゃねえか。

どんだけ大吾は唯が好きなんだよ。そこまで愛を叫ぶほどですかっ！

確かに唯は可愛いよ。可愛いけどさ……俺の中ではアズにゃんが一番 げふんげふん!

「大吾、相変わらずキモいわ……っ」

「大吾さんはホントにアニメ好きなのですね」

「いや、もうこれ病気のレベルだと思うよ?」

引き気味の伊吹に関心する暮葉、そして病気の大吾を心配する小坂。まあ、正直に言おう……これはひどいと言いたいようがない。

「もういいわ、重原はどんなの聞くの?」

後ろで唯への愛を熱く叫ぶ大吾を無視し、気を取り直すかのように伊吹が重原に質問した。

「俺はどつちかって言うと、海外のロックとかよく聞くよ」

「へえ。あたしもロック好きだけどどんなの聞くの?」

「そうだねえ、俺は」

小坂と重原。ロックが好きという事で意気投合した様子である。しかし意外だなあ。絶対重原は古い曲が好きだと思っていたけど。まあ、ロックと言っても別に今の曲とは限らないしな。

それにしても意外だ。重原はロックと言うより爽やか系だと思っていたのに。

「けーすけ様はどんなの聞くのですか!」



「え、俺？」

「どうせ圭介だからアニソンよアニソン。圭介の部屋にアニソン以外のCDってそんなに数はなかったハズよ」

「なんで知ってるんだよ！ 泥棒みたいに家の中漁ったのかよ！」

「ほらやっぱり。それを言っつて事はアニソンしか聞いていない事は、肯定してるようなものよ」

ぐっ……クソッ、ゲーム音楽とかアニソンしか聞かないのは事実だ。事実なんだけど……なんだかムカつく！

結構小馬鹿にされている気がしてならないぞ。こうなったら……知ったかぶってやる！

でも音楽とかよくわからないし……一日勉強する必要があるな。だけど明日は休日だし……あ、そうだ。いい事を考えたぞ。

「じよ、上等だゴルアツ！ 明日カラオケ行ってみるか！？」

「え？ どうしたのよ。そんないきなり……？」

「カラオケ行つて歌えたら知ってるって事だよな？ 知ってるって事は聞いてるって事だよな？」

「た、確かにそうだわ……で、でも無理はしなくてもいいのよ？」

「無理なんかしてないっ！ これでも一応聞いてるんだからな！ それを明日証明してやる！」

まあ……実際は伊吹が聞くような音楽に関する知識は、一切なかったりで……。

伊吹の言う通り、結構無理をしていたりするのである。

それに気付いたのか、暮葉が俺の袖をくいくいって引っ張ってきて。

「ん？」

「だ、大丈夫なのですか？　けーすけ様……ホントにアニソン以外にもOKなのですか？」

ヒソヒソと語り掛け、俺を心配をしてきたのである。

「あたりまえだろ。俺は大吾とは違うんですよ」

俺は小声でそう返し、暮葉を安心させてあげようとした。

まあ確かに知らないよ。でも今日一日で覚えればいいじゃないか。

そして見せてやろうじゃないか。俺がアニソン以外にも聞くなって事にな！

……まあ、伊吹に馬鹿にされたくないから、うまく知ったかぶろうとしているだけけどね。

「わ、わかったわ……っ。あんたとカラオケ行くのも初めてな気がするし……そ、その代わりっ、アニソン歌ったら罰ゲームで翌日言う事なんでも聞いてもらうからねっ！」

「OK上等だ。じゃあ俺がアニソンを全く歌わなかったら……伊吹も翌日俺の言う事聞くんぞぞ？」

「わ、私もっ!？」

突然驚いた伊吹。彼女の頬が同時ぼんつと赤く染まった。

「あたりまえだろ？　じゃないと不公平だろ？　心配しなくてもよ、俺が伊吹に負けたらちゃんと伊吹の罰ゲームを受けてあげるから」

「っ……わ、わかったわ。じゃ、じゃあ明日カラオケ行くわよ……っ！」

「お、おうっ」

明日カラオケへ行くことを決めた伊吹に、俺は調子のいい事を言うてみせた。

やばいぞ……言っちゃまった以上は伊吹の奴隷にならない為にも、頑張って今時の音楽を覚えねえと。

でも、そもそも俺はそういうのがよくわからない。

他人に訊くと言う手段もあるが、このやりとりを見ているクラスのヤツには聞けないな……。

そうだ……音楽の話なら部活のみんなに訊いてみよう。

みんな、どんな音楽を聴いているのか

第67話 戻ってきた平穩(?)な日常(後書き)

後書きトークコーナー

大吾「唯ちゃんの為なら死ねる！ この世は唯ちゃんが存在があるからこそ存在しているようなものだ！」

圭介「てめえはまだ唯に対する愛を叫んでるのかよ！」

大吾「圭介は嫁に対する愛を叫ばないのか!？」

圭介「叫ぶのはネットと脳内だけにしておくっす……」

大吾「愛が足りない！ 足りないぞ！」

圭介「そういう問題じゃねえだろ！ 好きなのはわかるけど、実際に教室で叫んだらただの痛い子じゃねえか！」

大吾「まったく……これだから三次元を捨て切れないアマは……っ」

圭介「三次元を完全に捨てるのもどうかと思うわ！」

大吾「大体こんな世の中に期待して何の得がある！ 不条理かつ不合理的なこの現実……僕は、もうとっくの昔にこの世界を捨てた。僕は二次元世界の神だ！」

圭介「確かに二次元はいいよ、俺も好きだよ。でも、だからって現実世界を捨てるのはマズいだろっ！」

大吾「いいや！ 僕は捨てた、後悔は全くしていない！」

圭介「せめて1秒でも後悔しろっ！」

二次元 vs 三次元……この二つの世界の戦いは、未だに続いている。

## 第68話、おんがく

放課後、困ったぞ……考えてみれば今日は部活の活動日じゃない。あかりも浅間部長も早々にバイト。二人の家計は苦しいし、邪魔だけは絶対に出来ないな。

暮葉はあのやりとりを見ていたし、葵はオタク系女子だから多分アテにならない。

生駒のせいで学校内で明智に近寄るのは難しいし……というか、個人的に生駒が嫌だ。

こうなったら……そうだ、青山さんを探そう。

青山さんなら話題に乗ってくれるかもしれないな。

というわけで、俺は青山さんを探すために一年の階へと移動した。

「あ、あの……先輩っ？」

「おわっ!？」

さて、青山さんを探そうかと思ったその時だ。

誰かが甘く幼く澄んだ可愛らしい声で俺を呼びとめる。

先輩……そう俺の事を呼ぶのは青山さんだけなハズ。

という事は青山さんだな。青山さんだと予想しながら振り返ると

「す、すみませんっ。その……驚かせちゃいましたか？」

「やっぱり青山さんだったのかぁ。全然大丈夫だよ」

「いえいえ、その……すみませんっ、いきなり話し掛けちゃって」  
そういえば、青山さんから話しかけられるのはなんだか珍しい気がするかも。

「だから全然大丈夫だよ。それに俺、丁度青山さんに用があったから」

「ふえ？ わ、わたしに御用……ですか？」

「おう、実は頼みごとが……」

「た、頼みごと……ですか？」

首を傾げる彼女に思わず、胸がドキッとしてしまった……。  
一般青少年の俺にソレは破壊力高すぎるっす……っ！  
って、青山さんにデレデレしている場合じゃないぞ。それよりも青山さんに事情を説明しないと。  
まずはそっからだ。いきなり『好きな音楽は何？』と聞いても、青山さんは多分困惑するだろうし。

そんなわけで、青山さんに事情を細かい所まで説明してあげた。

「そ、それって……先輩の自業自得ですよね？」

「小馬鹿にされなくなかったんだよ。ちょっと見栄を張っちゃったんだよ」

「……ぷっ、ふぷっ」

ええ！

わ、笑われた……100点満点の笑顔で笑われたぞ！

「ちよ、青山さん？」

「っ！？ す、すみません……っ！ でも……意外と子供な所もあるんですね、先輩っ」

「子供言うな！ 泣けてくるでしょ！」

「すみませんっ。でも……お気持ちはわかりますよ。オ・キ・モ・チは」

「なんでお気持ちって所を強調するの！？ それ以外はわからないのかよっ！」

「ソ、ソナナコトナイデスヨ？」

素晴らしい笑顔だ。でも言葉がカタコトであった。

フツ……笑うがいいさ。どうせ俺は見栄っ張りのお子様な性格しますよ。

だって……伊吹に馬鹿にされるのって傷つくんだもん。

「それで、青山さんはどんなのを聞くのかなっって」

「うっん……BMPとかでしょうか？」

「な、なんすかソレ？」



「え〜つと……ロックバンドですっ」

物静かな青山さんがロックとは……い、意外や！

大人しそうなイメージとは違って、意外とそういう系のものを聴くのか。

小坂が聞くならなんとなくわかるが、青山さんがロック……なんつか、ギャップ萌えだ！

「青山さんってロック聴くんだね」

「え、え！？ お、おかしいですか……っ!？」

「そんなことはないと思うよ。音楽の趣味なんて人それぞれだし」

「……せ、先輩はホントにアニソン以外聴かないのですかっ？」

「元々音楽に興味がなかったというか、アニソンはなんとなく聴いていたら気に入ったというか……まあそんな流れで結果的に、アニソンしか聴かない状態になっちゃったんだよ」

「そ、それでアニソンばかりに……っ」

「お、おう……そうなっちゃったんだよ」

その結果、アニソンとかゲーム音楽に関しては大吾もビックリなくらい詳しくなったよ。

ただし、普通の音楽に関しては全然話についていけなくなってしまったのである。

正直今何が流行っているのかも、どの曲が全国的に有名なのかも俺にはわからない。

たとえ歌手やバンドの名前を知っていたとしても、どんな曲を歌ったりしているのかわからない。

なんつーか……高校生としてどうかと思う感じである。

まあ、アニソンだってよくオリコン上位にランクインしているらしいし、神曲もいっぱいだけどな！

「それで……そのつ、先輩は今度カラオケに行くのに、それだといけないと……？」

「いけないというか、アニソン歌ったら罰ゲームというルールが出来ちゃったんだよ！」

「……それ、皆さん知っているような定番のものでもダメなんですよつか……？」

「多分ダメなんじゃね？ 伊吹のヤツ、アニソン歌ったら罰ゲームって言うってたし」

「それは……オタクの先輩には厳しいですねっ」

よかった……青山さんが理解ある人で本当によかった。

まあ、あれだけ毒のある部長を間近に見ていれば、少しは耐性がつくのもかもしれない。

「どうしよ……調子のいい事言っちゃって、結局は恥かくだけなのかな」

「だ、大丈夫です先輩……っ！ その……先輩さえよければCD……貸しますよ？」

「ほ、ホントか!？」

「はいっ。親に内緒で買ったCDが丁度あるんです……っ」

「親に内緒? ロックって親に内緒にするものだっけ？」

「い、いえっ! 普通は違うと思います。その……わたしの家、お父様が厳しいのでっ」

「そ、そうなのか……っ」

ロックを聴いただけでお説教って、本当に厳しい親父さんだな。確かにロックを聴く人は不良とされている人もいるらしいけど……。それでもロックは老若男女、幅広い層に支持されているハズである。ロック聴いたくらいで説教する親父、しかも青山さんのお父様って……。  
青山家、一体どんな家庭なんだろう。まあ、家庭の事情とか色々あるわけだから聞かないでおこう。

「そ、それでどうしますか……っ? その、借りてくれるとわたしも助かりますっ」

そっか……自分の手元からCDが離れるもんな。

親父さんに見つかる心配もなくなる。聞けないのは残念でも、リスクは確かに減るよな。

それに、明日うまく知ったかぶる為のいい勉強道具になるかもしれない。

「わかった、それじゃあちょっとだけ借りようかな？」

「……っ！ あ、ありがとございますっ！」

「おう、次の部活の時にでも返すね」

「は、はい……っ！ あの、これ……どうぞっ」

青山さんが鞆から取り出したのは、確かにBMPのCDであった。本当に聞くんだな……そしてケースが綺麗な事。

家でも親父さんに見つからないよう、厳重に保管されているんだろうなあ。

「おう、ありがとな」

「いえいえ……っ、先輩のお役に立てたならその……わ、わたしも嬉しいです……っ」

頬をぽつと赤く染め、少しもじもじとしながら青山さんは言ってきた。

「そ、それじゃあその……今日はそろそろ帰らないと、お父様がうるさいので……っ」

「ああ、わかった。また来週な」

俺がそう言うと、青山さんはニコニコと笑いながら手を振る。

よっぽど時間がないんだろうか、『また来週』という言葉はなかった。

ただ、俺にはあの手を振るといのが『また来週』という意味に感じた。

多分、タイミング的にそれで合っているはずである。

やがて青山さんは手を振り終え、背を向けてゆっくりと立ち去っていく。

靴音が空しく響き渡る中、俺はただ彼女の後姿を見送っていた。

「やっぱり不思議な子だよなあ……」

出会いの時から既に謎が多いとは思っていた。

でも、今日はそんな数多き青山さんの謎に、新たな謎が追加された気がするよ。

その中でわかった事は二つだけ。青山さんもロックを聞くこと、そして家の事で苦労している事だ。

「けーすけ様〜っ!」

元気な声が聞こえる。この声は間違いなく暮葉だ。

ただし、二人分の靴音が聞こえるあたり、暮葉一人で来たわけではないようである。

「あ、いたいた。お兄ちゃん探したよ?」

「あれ、暮葉に……あれ、誰だっけ?」

「ひどいっ! 実の妹が存在しなかった事になってるよ!？」

もう一人は葵であった。

一年の教室が並ぶ階まで来たっていうのに、青山さんも葵も背後から現れた。

なんだか、ちよつとだけ不思議な気分だな。

「泣くなよ、軽いジョークだって」

「でも拙者達、けーすけ様を探していたのは事実なのですよ」

「そうなのか？」

「だってだって！ 今日には部活がないからお兄ちゃんの教室まで行って見たら……お兄ちゃん、どこにもいないんだもん！」

帰りのSHRが終わった後、すぐに青山さんを探しに行ったからなあ。

多分、葵とはどこかですれ違ってしまったのだろう。

「そうか、悪かったな。ちょっと青山さんに用があったから

」

「ち、千早に？ ハツ！？ お兄ちゃん……まさか千早にえっちな要求を！？」

「してねえよ！ 兄貴を犯罪者みたいに扱うなよ！」

「あはははっ！ そんな事より帰ろーよお兄ちゃんっ」

あの純粹そうな笑顔……葵の事だ、きつと裏があるに違いない。

それでも何故か憎めねえ……妹効果シスター・エフェクトってここまで強烈なのね。

まあいいか。こういう扱いを受けるのもいつもの事だ、もう慣れっ  
こですよ。

「けーすけ様っ！ 帰りましょっ！」

「……そうだな！」

とりあえず、今日の所は家に帰るとしようかな。  
この後、俺達は何かと盛り上がりながら帰宅したのであった

第68話、おんがく（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さて、今回は重大発表があります」

伊吹「どーせいいつものアニメ化詐欺とかゲーム化詐欺でしょ？」

圭介「ち、違うぞ！ 今回はマジだ！ ほら、活動報告で第二回『夏の感謝祭』やるっていつてたじゃないか」

伊吹「知らない人は知らないわよね……それ」

圭介「……い、いつ始まるんだと思っていた人もいるハズだよ……多分！ もう7月も半ばを過ぎちゃいましたが、いよいよ『夏の感謝祭』、本格開催です！」

伊吹「まずなにをするのよ？」

圭介「短編あげたり夏のホラー2011に参加したり、ネタバレにならない範囲で読者様の要望を番外編でやろうと……」

伊吹「そ、それで最初はなにを……っ？」

圭介「まず最初に、キャラクター人気投票をやるっと思うんだ！ 期間は今から8月31日までの予定です」

伊吹「な、長いわねっ！」



圭介「一応夏の間が投票期間の予定だからな。ちなみに投票場所はです」

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

圭介「読者の皆様はどのキャラクターが好きでしょうか、もしよかつたら投票してみてください！」

伊吹「どーせ票なしで終わるんでしょ……」

圭介「コラ伊吹っ！ ネガティブな事言っなっ！」

読者の皆様のたくさんのご投票、お待ちしております！

そして、見事一位に輝いたキャラは そのキャラの短編を執筆しようと思います！

どうかよろしくお願いします！

## 第69話 やんちゃっ娘参 上!

7月2日土曜日早朝。

……ああ、緊張してきた。一晩かけて勉強はしてきた。

青山さんから借りたCDだって何度も聞いた。

見たいアニメだって録画で我慢する勢いで、俺は今日のカラオケで歌うために勉強をしたんだ。

でも……イザ本番で上手く歌えるか心配である。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんっ！」

「ぐ、ハアツ！」

その時、元気のいい声と共に、体中の骨が折れるんじゃないかという勢いで女の子が抱きついてきた。

明るい髪色のショートカットにちょこんとサイドテール。Tシャツにハーフパンツ。大きな瞳と弾けるような笑顔。

藤島葵。俺のブラコン妹様のご登場であった。

「お兄ちゃんおはよーっ！」

「あふおっ！ もう少して骨折する所だったぞ！」

「そうですよっ！ けーすけ様が壊れちゃうのですよっ!？」

暮葉も葵の背後から現れ、休日なのに何故か一家三人が玄関に集結してしまっただ。

しかも、三人とも私服姿である。どうやらみんな何処かへ出かける

ようである。

「はぁ……で、葵は何処に行くんだ？」

「ゲーセンだよ！ 今日M Oの公式大会の日だから、葵も参加してみる！」

葵はよくゲームの大会に出場しては、いつも好成績を残して帰還してくる腕のいいプレイヤーである。

俺もゲームは得意なほうんだけど、それでも対戦で葵に勝った事は一度もない。

一部では“神”と呼ばれ崇められている葵。

その努力を現実で役に立つ事に回せば、多分葵は今頃天才と呼ばれていた事だろう。

ちなみに、葵が参加しようとしているM Oの大会とは、その名の通りM Oというゲームの大会だ。

「そ、そうか。頑張れよっ」

「うん！ 優勝は7泊8日イタリア旅行2人分だから。お兄ちゃん

……もし優勝したら葵と二人で行こうね！」

「……………」

前言撤回、是非とも全国の強豪に負けてください。

というか、どうしてゲームの大会に優勝したくらいでイタリアに行くんだ？

しかも7泊8日って……ただの旅行にしては滅茶苦茶長い気がするぞ。

……そのイタリア旅行ってさ、もしかしてシチリアのマフィアのボ

ツタクリなんじゃねえのか？

「けーすけ様！ 拙者は亜紀さんの家へ行くのですけど……その、大丈夫なのですか？」

「うーん、多分大丈夫じゃないか？」

暮葉の俺を心配する言葉に、俺はそう答えた。

暮葉は多分、今日のこのカラオケの事を心配しているのだろう。でも、多分大丈夫なハズである。この日の為に青山さんからCDを借りたり、ニヤニヤ動画でテキストな曲を検索して聴いたりしたからな。

多分、今の俺ならNOアニソンでもイけるハズである。

そして伊吹、俺に勝負を挑んだ事……たつぷりと後悔させてやろうじゃねえか！

「もきゅ、でもけーすけ様。アニソン以外というのが条件なのですよ？」

「お、お兄ちゃんカラオケ行くの！？」

「伊吹とな。あと昨日勉強したからアニソン禁止でも多分OKだよ」

「む、無理だよ！ アニソン禁止なんて辛すぎるよ！」

そりゃあ婆はどちらかと言うとオタクだからな。

というか、俺だってアニソン禁止は辛いよ。

だから昨日寝る間も惜しんで音楽聴きまくったんじゃねえか！

おかげでブラックアウトしそつなくらい眠たいぜ……っ。

「もきゅ、心配なのです！　けーすけ様がアニソン歌っちゃって、伊吹さんの尻に敷かれちゃいそうで恐ろしいのです！」

い、伊吹が暮葉に鬼嫁扱いされている！

まあ確かに、お仕置きという理由で引つ搔かれそうな気がするけどね。

伊吹の引つ搔き……猫ちゃんみたいで可愛いんだけど、正直さわれているこっちは痛いんだよな。

やられた後はヒリヒリするし、出来れば避けたいものだ。

「そうならない為にも頑張るから」

「応援してます、負けないでくださいね！」

「が、頑張ってお兄ちゃん！」

「おう、んじゃあ俺はそろそろ行くからな」

「気を付けてくださいね、けーすけ様っ！」

こうして藤島家を後にした俺は、伊吹との待ち合わせ場所である……。

「……………」

自宅玄関から僅か数メートル。

家を出るとすぐに見える、我が藤島家の目の前にある電柱へと向かった。

向かうと言っか、家を出たらすぐそこなんだけどね。

そんな近すぎる待ち合わせ場所には、既に彼女が電柱によっかかり

ながら待っていたのであった。

「な、なによ……っ?」

少し頬を赤く染めながらも、むっとした表情で振り向いてきた伊吹。風に靡く白銀の髪と、最近では中々お目にかかれない私服姿がとても美しい。

でも、現代の女子高生としては小柄な体躯を持つ伊吹。

八重歯があつたりと、美しい女性というよりは可愛い女の子だ。

俺はそんな伊吹にゆっくりと近寄り

「よお、待ったか?」

「ま、待ったもなにも家の目の前よ?」

「どうせここで待ってるんなら家にいればよかったのに」

「う、うっさい! どこで待ってようが勝手でしょ!」

顔を赤くしながら、今にも噛みつきそうな勢いで怒鳴りつけてくる伊吹さん。

うぐん。やっぱり中々デレないものですなあ。

一瞬ようやくツンデレになったかと思いきや、やっぱり伊吹はツンパリのままであった。

「で、まだ開店時間までしばらくあるけど、その間どこで暇潰す?」

「そうね。とりあえず市街地まで行ってみる?」

「そうだな、街中に行けば何かあるだろうな」

というわけで、俺達はカラオケの開店時間まで古宇坂の街中で時間を潰す事にした。

古宇坂市自体人口は13万人程度に過ぎないので、大した遊び場があるわけではない。

それでも、街中に行けばここら辺よりは暇を潰せる場所があるだろう。

「……………」

俺の隣をてくてくと歩く伊吹。

…………… そういえば何年ぶりだろうな。

登校する時や下校する時は何度か並んで歩く事はあったけど、こうして遊ぶために伊吹と歩くのは中1以来な気がするぞ。永渕の一件以来、俺達は話にしても一緒に遊んだりはしなかったからなあ……………。

やがて歩いていけると、気付けばそこは古宇坂駅前であった。

意外と大きな駅舎の前にあるロータリーには、今日も数代のタクシ―が停車している。

一応古宇坂市の中心駅なので、規模はそこそこ大きいのである。

「さて、ここまで来ちまったけど」

「ど、どうする？ まだ1時間くらい時間があるわよ？」

…………… え〜っと、これはアレだな。

どうして1時間も早く来てしまったかというと、俺達があまりにも張りきり過ぎたからである。

はあ…………… 張りきり過ぎるのもよくないよね。こういう失敗だったた

まにはあるから。

「とりあえず、そのデパートにでも行ってみる?」

一応デパートは数分前に営業を開始した所である。

今行けばきつと品ぞろえは豊富、食品を見てもしょうがないと思  
うが、ブランド物の服とかなら結構揃っているハズである。  
服とかなら俺も伊吹も十分に楽しめるハズである。

「そうね……時間を潰すには丁度よさそうね」

「それじゃあ、ちょっとあそこに行ってみ」

と、言いかけた。

「オイお前っ!」

瞬間、なんだか軽そうな男に俺達は声を掛けられてしまった。

男は半そで半ズボンで、盛った金髪にネックレスという……いかに  
もチャライ感じの人であった。

ああ、この時点で俺はわかったよ。きつとコイツは伊吹をナンパし  
に来たに違いない。

「なんですか、貴方?」

「随分可愛い彼女連れてんじゃねえかよ?」

「な。なによあんだ。別に私は圭介の彼女じゃないわよっ!」

「へえ〜彼女じゃない? じゃあお前さあ、その子俺にくんねえ?」



「なんでですか？」

「だって付き合ってるワケじゃねえんだろ？ だったらさあ、俺と遊んだって問題ねえよなあ？」

うわあ……なにこのラノベでありがちな展開は。

しかも小者臭が半端ねえ。不良が怖いハズの伊吹でさえ強気な態度である。

そしてなにより男の腕……細っ！

見た目は派手でチャラいけど滅茶苦茶弱そうだった！

「いや、問題大アリだろ！」

「アア？ なんだよテメエ……もしかしてこの俺に喧嘩売っちゃうわけ？」

「今の会話の流れでどうしてそうなる！？」

あとアンタ、弱そう何だから無理するなよ！

伊吹でさえジト目で呆れて見ているぞ。

……全く、こういうのって弱い癖にしつこいから面倒である。

どうしようかな、一番手っ取り早いのは倒す事だけど……流石にそれをやると色々問題だしなあ。

第一、無駄な体力を消耗したくない。あと、警察沙汰になるような事はしたくないぜ。

「け、圭介っ、行くっ？」

「え？ あ、おうっ」

俺がそう答えると、伊吹は俺の左手をぎゅっと握ってきた。そして、俺は伊吹に手を引かれるまま、この場を去ろうとしていた。……まあ、そうだよな。こういう馬鹿は相手にしないに限るぜ。

「おいおいテメエら無視しちゃってんじやねえよ？ やっぱ喧嘩売ってんのか！？」

ああうぜえ……でも相手にしないほうがいい。仮に殴られたとしても、俺の身体は普通の人より丈夫である。だから、あんな普通の人に何発殴られようが平気なハズである。一方的に暴行され続けていればそのうち警察も来て、自然にアイツが悪い事になるだろう。

「待てって言うてんだろがこの野　ぐあああつ！」

……え？

今、なんか後ろからさっきのチャラ男の悲鳴が聞こえたぞ？俺と伊吹は流石に気になったので、後ろを振り向いてみた。するとそこには

「こらあゝ圭太あつ！　あたいの友達に喧嘩売るなよなっ！」

「いででっ！　ちょ、このチビ姉貴っ！」

「誰がチビだこの厨二のチャラ男！　早く家に帰れよなっ！」

「あ、ぐああぎゃあああつ！　ちょ、悪い！　悪かった姉貴！　もうヤメテエエエエエツ！」

あ、姉貴……？

なんだかよくわからないけど、そこにはチャラ男にキャメルクラッチを掛けるあかりの姿があった。

……え〜っと、色々言いたい事はあるが一言だけ言わせてもらおう。

「……なにこれ、どういう事だ？」

## 第69話 やんちゃっ娘参 上！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

後書きトークコーナー！

作者「今日は0時の予定がいつもより更新が遅れて申し訳ございません！ いきなりの腹痛と腰がいきなりつつたように痛くなったりともうボロボロで……っ」

圭介「言い訳はもうどうでもいいよ！ それより今日は重大発表があるんだろ？」

作者「そうでした！ 実は……コラボのお知らせです！」

圭介「え？ コラボしてくれる優しい人いんの？」

作者「コラッ！ 失礼な事言わない！ 実は只今開催中の夏の感謝祭ですが、それでkuxuさん執筆の『Freedom/Story』とこの『魔法少女に会っちゃった場合』のコラボをやる事になりましたので、ここで報告させて頂きます！」

圭介「ネタかと思ったけどマジなのかよ!？」

作者「マジです。許可もとってあります！ 出来れば7月中にコラボ番外話をあげたいな〜と思いますので、皆様よろしく願います！ そしてコラボを提案してくださったkuxuさん、本当にありがとうございます！」

## 第70話 / カラオケ

カラオケ開店15分前、ここはデパート内にある休憩所である。休憩所と言っても、ベンチが複数あるだけの簡単なものだけ。あの後、あかりも入れた俺達はデパートに入り、ここで途中から入ってきたあかりと話をしていた。

「え、ええっ!? 今の弟さんだったの?」

「そつだ、残念すぎるだろ!」

確かに残念すぎる………というか、あれがあかりの弟だったのか。

「確かにお前の弟、グレているとは言っていたけど………」

「そうなんだよ、あたいと変態兄貴はアイツの食費を稼ぐ為にも必死なんだからな」

……そりゃまあ、御苦労さまとしか言いようがない。

本当ならお世話もしたくないんだろうが、一応浅間圭太あさまけいたという人物は、アレでも元気の中学生なのである。

少なくとも、義務教育を受けている間は世話をしないとイケないのだ。

ただでさえ浅間家は家計が苦しいのに……ホントにお疲れっす!

「ところで圭介、なんであなたはあかりの家の事情を知ってるのかしら?」

伊吹が拳を握りしめ、笑顔で俺へと迫ってくる。

その笑顔が軽くホラーだ、紫色のオーラさえ立ちこめている気がするぞ。

今の気分は大国に圧力をかけられる小国の首相だ。

「ちょ、伊吹少し落ちつこう!」

「そーだぞ伊吹! 圭介はあたいを助けてくれたんだ。べ、別に深い出来事はなかったんだからな!」

ていうか、お前らも地味に仲良しになってるな。

いつの間に名前で呼び合っているし、先輩後輩とかそんな上下関係を微塵も感じねえ!

今の2人はまるで、昔から近所に住んでいて、姉妹のような関係になった二人のようであった。

「ほ、ほんとなの?」

「ホントだよ、別に大した事情はねえよ」

「……わかったっ」

どうしましょう、伊吹が少し落ち込んでしまった。俺、何かコイツに悪い事言っちゃったのかな。

これから遊びに行く所なのに正直この空気は重すぎるぞ? 仕方ない……俺が適当に話を振ってこの空気を

「あ! そーいえば二人はどこに行く予定だったんだ?」

この重たい空気をぶち壊す為に話を振ろうとした瞬間、あかりが先に話を振ってきた。

俺がやるうとした事を、あかりが真っ先にやってくれたのである。  
ナイスだ、あかり！

「俺達はこれからカラオケに行く予定だけど？」

「そ、そうよ！ お互いの明日を賭けた戦いよ！」

「明日をかけるって……面白そうだな！ あたいも混ぜてくれると嬉しいな！」

あかりは瞳を輝かせ、おねだり光線を俺へと放ってきた。  
その眼差しに俺は……ぐふっ、これは勝てませんっ！

「あかりも来るか、別にいいけど？」

「えっ！？ ちょ、圭介！ 話が違っわよっ！」

怒ったり落ち込んだりまた怒ったり……伊吹は忙しいヤツだなあ。  
まあ、確かに最初は二人きりの予定だったし、当初の予定とは違っ  
よな。

とりあえず、あかりをパーティーに加える為にも伊吹を説得してや  
らないと。

「別にいいだろ。本人も行きたがっているし、折角なんだからさ」

「で、でも……っ」

「ん〜、多分人数は多いほうが楽しいんじゃないか？」

それに正直、あかりが来てくれるのは俺としても助かる。

こっそりあかりに何を聴いているのか、あかりの好きな音楽を聞き出せそうだからだ。

そして、その聴きだした音楽をテキストに知っていると誤魔化し、上手く合わせて一緒に歌う……。

この完璧な作戦！これからNo.1アニメソンでも数時間歌えるはずだぜ！

「……………わかったわよ……………」

伊吹は渋々と、あかりのパーティー加入を認めてくれた。

よかったあ……………でも何故か機嫌を悪くしちゃったなあ……………。

仕方ない、後でお昼に焼きそばでも奢ってあげよう。

「圭介！ 今から行ったら数分待つだけで開店時間になるはずだ！」

「ホントかあかり？ ……そういえば、もうそろそろ開店時間だな」

「うん、行こうか二人とも！」

「そうだな。伊吹、行くぞ？」

「う、うん……………」

こうして俺達は休憩所のベンチを立ち、これから俺にとっては戦場になるであろう、恐怖のカラオケへと歩み始めたのであった。それにしても伊吹のヤツどうしたんだろうか？

さつきから全然元気がないんだけど……………まあ、カラオケに行ったら少しは元気になるかな？

「二人きりがよかった……………圭介と二人きりがよかった……………っ、3人なんかやだ……………」



や、ヤバい。よく聞こえなかったけど独り言を呟いている！  
伊吹さん……まさかのツツパリからヤンデレへのジヨブ変更！？  
とにかく恐怖しか感じねえ。こりゃ何としても機嫌を直してもらわ  
ないと……っ！  
……それと、後で聞いた事だけどあかりはカラオケが好きらしい。  
だからカラオケという言葉聞いた瞬間、張り切って行きたくなっ  
たんだとか。

### カラエケ店【ドックアイ】

どこにでもあるごくごく普通のカラオケ店だ。  
特徴と言えば、看板に二匹の可愛らしい犬がいる事くらいであろう。  
店内にはカラオケルームはもちろんのこと、ゲーセンまで存在して  
いてゲーセン目当てお客さんまで店内にいたり、意外と混んでい  
る店なのである。

到着とすると普通の部屋を2時間取って、一応マラカスやらタンバ  
リンやらをせっせと運び込んだ。

……まあ、ただ歌うだけだからな。使い道があるかどうかは微妙な  
所だけだ。

2時間って結構短いものだけど、人数はたったの3人である。

多分、思っているよりは長く歌えるハズであろう。

さてと……部屋にも入った事だし、そろそろ俺も曲を入れようかな。  
つい何時ものノリでアニソンを入れちゃわないよう、気をつけて操  
作しないと　　ピッ。

【only my aillgun】

しまったあああああああああああああああつ！

初っ端から大失敗だ。いつものノリでアニソンを入れてしまった！  
もうダメだ。俺は明日……伊吹の奴隷確定だ！

……でも、入れてしまったものは仕方がない。泣きながらこの熱い  
神曲を歌ってやるうじゃねえか！

もうヤケクソじゃヤケクソ。さあ伊吹よ、早速アニソンを歌ったと  
して失格扱いするがいい。

そして 明日は俺を奴隷にするがいいっ！

「け、圭介！ よくわからないけどソレカッコいい曲だな！」

「ほ、ホントだ……圭介がアニソンじゃないの歌ってるっ」

え？

あれ、案外女子からのウケがいい………というか伊吹さん、これ普通  
にアニソンなんですが？

某学園都市アニメのOPなんですが。俺の大好きな佐 涙子さん大  
活躍なアニメなんだけど。

……そうか。アニソンかアニソンじゃないか、その判断をする為  
には元ネタを知っている必要がある。

オタクじゃないので伊吹は この曲の元ネタを知らない！

それに、伊吹のアニソンのイメージというのは、とにかく妙に声が  
高くて早口でオマケに歌っているのは声優さんというヤツなんだろ  
う。

要するに……それ以外のヤツならアニソンでも誤魔化せるとい  
うワケか！

「~~~~~っ！」

俺が見事に某学園都市アニメのOP曲を歌い上げると……。

信じられない事に拍手が沸き起こった。

「盛りあがる曲だったしうまかったな！」

「圭介っ！ これなんて曲なの？ か、歌手は誰なのよっ？」

「……南 愛乃さん？」

あ、しまった。そういえばこの人声優もやってるじゃん。

……まあ伊吹の事だ。後でじっくり調べるなんて事はないだろう。

「……っ、まあ圭介にしては頑張ったじゃないっ」

「は、ハハッ！ 見たか！ 俺だってアニソン以外歌えるんだからな！」

……実に悲しい演技である。神様、どうか後でアニソンだって事がバレませんように。

さて、どうでもいい話かもしれないが、伊吹とあかりは俺を挟むように両側に座っている。

伊吹は俺の左側、あかりは俺の右側だ。

俺から歌い始め、左に行つてから右に戻るといふ順番なので、次に歌うのは伊吹である。

伊吹の歌声なんてそんなに訊いた事がないな。伊吹って歌上手いのかな？

そんな歌唱力が謎の伊吹が入れた曲は、清水 太の【アイシテル】。とりあえず、清水 太の名前なら俺でも知っている。

伊吹が愛してやまない歌手らしい。多分、俺が好きな曲とは違って至って健全な曲を歌う人だろう。

……一度写真見たっけ、結構イケメンなヤツだったしな。  
まあ、どうせ俺みたいな凡人が勝てる相手ではないだろう。

「~~~~~」

それにして……う、うまいぞコイツ。

伊吹のヤツ、実はド下手かと思っただけど……滅茶苦茶歌上手いじゃねえか。

俺は原曲聴いた事はないけど、伊吹の歌唱力はもうプロでも通用しそうなレベルである。

……歌い終わった伊吹は、自分の好きな歌手の歌を上手く歌えたからだろう。

なんというか、いつもは中々見せない爽やかな笑顔を浮かべていた。

「うまかった！ 原曲並に上手かった！」

「えっ？ ええ！？ そんな……っ、私なんか原曲には全然……っ」

「謙遜する事ないだろ、フツーに上手かった！」

「あ、ありがとうっ」

なんかあの二人通じあってるし！

しかもあかりさん、一応原曲知ってるのね！

……どうやら、アニソンやゲーム音楽以外に関心がないのは俺だけのようである。

さてと、次はあかりだな。あかりはカラオケが大好きらしいし、という事は歌うのも大好きなハズだ。

きつと素晴らしい歌を披露してくれることであろう。

あかりが入れた曲は、B MPの【天体観測】。

コイツもB MP聴くのかよ！どんだけウチの学校で人気なんだっ！

まあそれはともかく……期待のあかりの歌唱力は……！

## 第70話 / カラオケ (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

後書きトークコーナー

圭介「どうしよう……」

暮葉「どうしたのですかけーすけ様っ!？」

圭介「PCの容量がそろそろギリギリなんだ」

暮葉「もきゅ？ で、でしたらいらいデータを削除すれば……?」

圭介「それが出来ないんだよ！ ToHer t2とか anon  
とか！ 古いゲームでも消すのはもったいないんだよ！」

伊吹「またエロゲーか！ この変態ばか圭介っ！」

第71話 はたして勝者は？

.....

.....

.....は？

こ、ここはどこだ。俺は今までどうしてたってたんだよ？

そういえば知らない天井だ。いや、知っていると言えば知っている。何故なら大吾達とはよく【ドッグアイ】に来るからだ。

そうか.....ここは【ドッグアイ】なのか。そういえば俺達はカラオケに来ていた気がするな。

確かアニソン禁止と言う縛りプレイで.....それで、俺と伊吹が歌い終わってあかりが歌い始めて.....。

「はっ！？ そ、そうだった.....っ」

そういう事だったのか.....。

とりあえず、俺の横でぐったりしている伊吹を起こしてやらないと。

「おいっ！ 起きろ伊吹！ しっかりしろ！ まだあの世に行くには早いぞ！」

とりあえず伊吹の肩を揺さぶり、彼女を起こそうと頑張る俺。

その努力が向かわれたのか、伊吹はようやく目を覚ましキョロキョロと周りを見渡し始めた。

そこで彼女もここがカラオケである事に気づく。何があったのかを考えている様子で.....。

「っ!?! け、圭介っ! あん……あの悪魔のボイスは!?!」

どうやら、彼女は全てを思い出したようである。

「心配するな。もう終わった……終わったんだ」

「ホントなの? ホントに悪魔の雄叫びは終わったの?」

「ああ、大丈夫だ。もうあの雄叫びは」

「あああんたあああああああああつ!」

俺の声を斬り裂いたのは、ただ一人ピンピンしているツインテールの女の子である。  
ガオオと言わんばかりに口を大きく開けている。どうやらお怒りの様子だ。

「なんであたいが歌い始めたと同時に気絶するんだよ! しかもあたいを悪魔みたいに扱うなよな!」

「ちよっ! おまつ、くるぢいつ! 胸倉掴むなっ!」

まだあどけなさが残る女の子に、胸倉を掴まれる男子高校生……。多分、これほどシユールな光景は中々お目に掛かれないだろう。気分は不良にカツアゲされる気弱な少年だ。

「だってみんなしてあたいを悪魔扱いするんだもん! 圭介だけは……圭介だけは信じてたのに!」

「信じてたのかよ!?! ついでに伊吹も信じてやれよ!」



「私はずいがかいっ！」

しまった、伊吹がついでという何気ない言葉に腹を立ててる。

「いや、その……すみません伊吹さん。つーかあかり、そろそろ手を離そうぜ？」

「その前に質問！ なんであたいが歌ったら気絶するんだ！ あたいはマイクカー イか！」

「似たようなもんだったぞ？ お前……歌ヒドすぎ」

声デカい音遭ってない妙に響くの三拍子。

歌というよりは騒音であった。近くで155mm榴弾砲を撃つよりうるさいかも。

下手すりゃあかりの歌声は……大和の46cm砲の砲声に匹敵するかもしれない。

とにかく……これならまだジャ アンのほうがマシだ！

「あ、あたいが……10年も掛けて生み出した芸術なのに！」

「芸術というより必殺技だろ！」

しかも10年もカラオケ通ってるのかよ！

もしかしてあかりは10年間、こんな間違いまくっている歌い方をしてきたのだろうか？

「必殺技……あ、なんかそれカッコいいな！」

「それで納得するなよ!？」

「必殺技……ボイス・ザ・ボイス昏睡の狂声なんてどーだ!

「お前、絶対厨二病だろ……」

ちなみに、俺も中学生の頃はバリバリの厨二病だったな。

その頃にやっていたネトゲのハンドネームは、もちろん厨二チックなものであった。

確か……？古宇坂の夜天光？だったような……ああ、思い出しただけで痛い。

「そ、そんな事より次は圭介の番よ!」

「え？ ああ……そういえばそうだったっけ？」

確かに、あかりの次は順番的に俺だったな。

あかりのジャ アン・リサスタイル騒動のせいですっかり忘れていたぜ。

そうだそうだ、じゃあさつさと歌を入れねえと……今度は間違つてアニソンを入れませんかように。

【未 への咆哮】

ぎゃあああああああああああっ!

ま、また間違えた。ついノリでアニソンを選んでしまった!

さつきは上手く誤魔化せたけど……今度は上手くいくかわからねえぞ。

ま、まあこの曲は元々エロゲーのOPだし、多分伊吹達も元ネタ知らないだろう。

……でも、あかりは兄貴が浅間部長で、浅間部長はオタクでしかも18歳で合法的にエロゲーを。  
まずい……あかりが兄貴の影響で知っている可能性がある。  
でも学園都市OPを知らなかったからなあ。神様、どうかあかりがこの曲を存在を知りませんように。

「~~~~っ！　　」

とにかく、選んじまった以上は仕方がない。

演奏停止を選択すると伊吹に疑われてしまう。

……ならば、最後までノリで歌いきる事だけを考える　　！

「　　」

俺はノリで歌い続ける。この曲エロゲーの曲じゃないか………という疑いは出てこない。

よし、あかりも伊吹も元ネタを知らないらしい。

……だ、だよなあ。だって二人ともエロゲーをプレイするような柄じゃないし。

ちなみに俺はこのゲーム、18禁版と全年齢版の両方を持っているぞ。

とまあ……そんなどうでもいい情報はともかく。

「~~~~~~~~っ！　　」

サビを歌え終わると、伊吹とあかりが拍手をくれた。

どうやら元ネタがバレる事もなく、二人は妙に熱くてカッコいいこの曲を気に入ったらしい。

……まあ、この調子だと俺の不正がバレるのも時間の問題か。

でも、この局面さえ乗り越える事が出来ればそれでいい。

それにこれは元々エロゲーの音楽だ。アニソンと似たようなものか  
もだが、正確には全然違うもの。  
ゲームとアニメを一緒にしちゃいけないぜ！

「圭介！ 今のも熱くてよかった！ もう歌手になるオーディション受けちゃえよな！」

「ま、まさか圭介が二曲続けてアニソン以外を歌うなんて……しかもちよつとカッコいい曲っ」

「は、ハハハッ！ ま、まあ俺が本気を出せばこんなもんだよ！  
ハハハッ！」

言えねえ……エロゲーの曲だなんて今更言えねえ……っ！  
まあ、バレたら伊吹の奴隷確定だし、もうこのままでいいや。

それから、1時間と数十分が経過した。

「圭介も伊吹もすっごいうまくった！ あたいには敵わないけどな  
！」

「そ、そうね……っ」

「ああ、あかりには敵わないな……」

あかりの必殺奥義、ボイス・ザ・ボイス昏睡の狂声に勝てる日は永遠にないだろう。  
あの全てを破壊し尽くすような歌唱力、とてもじゃないが俺には真  
似できないぜ。

……カラオケで2時間、無事に歌い終えた俺達。

現在、俺達3人は【ドッグアイ】の出入り口の前で屯っていた。

「あかりはこの後どうするんだ？」

「んん、もう少し遊びたいけどあたいはこれからバイトだからなあ」

「バイトなの？ それじゃあ……仕方ないわねっ」

「バイト頑張れよ。またな、あかり」

「んみゃ！ 明日の為にちょっと働いてくるからなっ！」

まるで戦争に行く兵隊さんのように元気よく叫ぶと、くるっと向きを変えて次第に遠ざかって行った。

あかりにとって、バイトとは大変重要な意味を含むものだ。

浅間家は母親が退院したとは言え、家計が苦しいのは相変わらずの話である。

だから、浅間家の明日の生活の為に 彼女は今日もバイトで汗を流している。

可愛い外見とは裏腹に、あかりは皆が思っている以上に苦勞をしているんだ。

「……さて」

「……………」

あかりが去ると、急に伊吹がしょんぼりとした様子で俯いてしまった。

何故なら 今日のカラオケ対決の結果は

「ん、どうしたんだ？」

「なんでもないわよ……そ、それより罰なら早く言ってちょうだいよ！」

「罰？ ああっ」

全てを思い出したぞ。

俺がアニソン以外を歌い続ける事が出来た場合、伊吹が明日俺の言う事を聞くんだっけ？

確か、そんな条件だったような気がするな。

「は、早く言いなさいよ……そのっ、なんでも受けて立ってやるんだから……っ」

……伊吹のヤツ、本気で罰を受けるつもりだったんだ。

俺へ向けられる強い眼差しのせいか、痛いほどに伊吹の本気の気持ち伝わってくる。

伊吹の言葉は間違いなく冗談じゃない。今、俺が冗談を言えば確実に落ち込んでしまうだろう。

だから俺は

「わかった。罰を言うよ……」

「……………っ！」

瞳を閉じ、ビクッと一瞬震えた。

怖いんだろうか、伊吹は俺に何をされるのか……不安で仕方がない

のだろう。

俺に恐怖している伊吹に、俺は

「あ、明日は……好きにしていいいぞ？　それが罰だっ」

真っ直ぐ。

どこまでも素直に。

俺はちよつと不器用ながらも、本当に思っている事を伊吹へ言っ  
てやった。

「……え？　ど、どついう事……なのよ？」

「どついう事って、言葉のままだよ。明日は好きにしてい、伊吹  
の自由だつて言ってるんだよ」

「そ、それっ！　罰にはならないでしょ……？」

「あのなあ……俺がビクビク震えている女の子に、罰だと言っ  
てひどい事をするヤツに見えるか？」

「び、ビクビクしてないわよ！」

よかった。

こんな風に怒って突っかかってくるあたり、伊吹はいつも通り元  
気な様子だ。

「とにかく、明日は伊吹の自由。俺に縛られる必要なんで全くな  
いんだぞ？」

「……け、けいすけ……っ。あ、ありが……と……う」

「ん、今なんて？」

“あり”までは聞きとれたが、そこから先は声が小さすぎて聞きとれない。

だからもう一度聞こうと、言葉を返してみたのだが。

「……な、なんでもないわよ！ そろそろ帰るわよばか圭介っ」

「へいへい……っ」

ダメでした。伊吹はやっぱ何も言ってくれなかった。相変わらずだな……伊吹はいつものツツパリ伊吹ちゃんである。

でも、なんでだろう？

俺の前を歩く伊吹は時々、俺のほうをチラチラと見てくるのだ。

その時に見える伊吹の横顔。なんだか頬がほんのりと赤かったよう  
な……。

……結局、伊吹が何を想っているのかよくわからないまま、俺は自分の家へと戻ったのであった。



第71話、はたして勝者は？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

後書きトークコーナー

あかり「アツカリ〜ン！」

千早「あ、あかり……どう、したの……？」

あかり「よくわからないんだ。ただ、あたいのエロ兄貴が最近あたいの事をこう呼ぶんだよな」

千早「……あかり、悪い事は言わないよ。今のうちに部長を……施設に送ったほうがいいよ？」

あかり「んみゃ？ あたいは昔から兄貴を収容所送りにしたいと思ってるけどな！」

その頃、浅間部長は。

浅間部長「ボクの妹の影が薄くなりませんように、アツカリ〜ン！」

圭介「俺、ゆ ゆり見た事ないんだけど……」

## 第72話 恋バナ 暮葉side

小坂家、10階建てマンションの8階に亜紀さんは住んでいます。拙者は本日、亜紀さんに誘われてこの家まで来ました。拙者と亜紀さん他には、何故か明智殿や生駒さんの姿もありました。今、この四人で色々駄弁りながら過ごしています。

亜紀さんの部屋はけーすけ様の部屋よりも狭い気がしますけど、けーすけ様の部屋よりも片付いていてとっても綺麗です。けーすけ様も見習ってほしいくらい綺麗なのです。

綺麗なのにちゃんとポスターもありますし、本棚にもいっぱい本があります。

本当に、亜紀さんの部屋は理想の部屋と呼べるものです。

「こ、こらすみにゃん……っ。く、くっ付くな……っ」

「えへへっ！ いいじゃんナギちゃん……んんっ」

「はいはい、あたしの部屋でいちやつき禁止ねー」

「明智殿も生駒さんも相変わらずなのですっ」

本当に仲よしなのです。あのお二人はいつも抱き合っています！……若干明智殿が嫌がっている気もしますが、でも仲良しである事には変わりありません！

本当に仲のいいお友達って、ああやって抱き合ったりするのですね。せ、拙者も……けーすけ様と抱き合った方が、お友達としてよろしいのでしょうか？

「おかしいなあ。フラグを立てて行けば抱きつくと思はれるってギヤルゲーしたんだよ?」

「わ、私とギヤルゲーのヒロインを一緒にするなよ。それに私はノーマルだぞ?」

「そんな! 私はガチ百合なのにつ!」

「すみにゃん……そんなの、ちつとも誇れないと思うぞ? あ、あとくっ付くな!」

「けーすけ様は……どうなのでしょう。」

拙者が抱きついたら喜ぶのでしょうか?

お友達として、抱きついてあげたほうがよろしいのでしょうか?

「えへへ、でもさナギちゃん。ナギちゃんって男の人と付き合い合った事ないよね? ホントにノーマルなの? 実はガチ百合だったりするの!?」

「つ、付き合い合ったことはないけど……でも本当だ! 私は本当にノーマルだぞ!」

……つて、これじゃあ拙者がけーすけ様に抱きつきたいみたいじゃないですかっ!

にゃ、なんででしょう。変態さんみたいな事を考えているのに……嫌な感じじゃないのです。

……拙者とけーすけ様がお友達になってからでしょうか。最近です、拙者はずっと……変なのです。

なんかこう、胸がもやもやして落ちつかないのです……っ。

「私は男なんかと付き合いたくないもん！ ナギちゃん一筋なんだよー！」

「あはは、愛されてるねえ〜凧紗は」

「あ、亜紀……別に嬉しくないぞ」

「またまたーっ！ ナギちゃんはツンデレだね」

拙者だったら。もしけーすけ様に愛されていたら……。  
つて、なんでここでもけーすけ様なのですかっ！

け、けーすけ様は護衛対象。そして大切なお友達なのです！

……はあ。拙者は一体、けーすけ様に何を求めているのでしょうか……？

「……な、なあ。亜紀と木下はそのつ。男と付き合い合った事……あるのか？」

「付き合い合ったこと？」

「もきゅ？ だ、男女交際……ですか？」

明智殿、いきなりどうしたのでしょうか？

お顔が少し赤いのです。それで、いきなり男女交際のお話なのですか……？

「あたしは……一回だけあるかな？」

「もきゅ！？ ほ、ホントなのですか！？」「」

「い、意外だ……っ」

「す、すごい！ 亜紀って付き合った事あるんだね！」

亜紀さんの回答に一同驚き。

だって亜紀さん……全然男女交際とかに興味がなさそうでしたし……っ。

「そ、それで。どうだったんだ？」

「ん？ 別に何もなくて終わったけど？ 中学の時だったかなあ。野球部の人に告白されて、先輩な上に相手が本気すぎて断りづらかったからOKしてみたんだけど。でも……やっぱりあたしはその人が好きになれなくて……結局キスすらしないで3日で別れちゃったっ」

「は、早っ……！ それって付き合ってたうちに入るのか？」

「ど、どんまいなのですっ」

「亜紀に3日で振られるって……やっぱり男ってクソだね。で、3日の間にエッチはしたの？」

「するわけないじゃん！ 手すら繋いだ記憶がないし……っ」

明智殿の言う通りなのです。亜紀さん……それってホントに付き合ってたうちに入るのでしょいか？

でも、亜紀さんファーストキスもまだみたいなのです。

その上の階段も登っていないみたいなのです。

よかったあ……って、何が良かったのかサッパリわからないりです

けど。  
というか、人の失恋をよかったなんて言う拙者。最低なんです……  
っ！

「き、木下はどうなんだ？」

「もきゅ？ 拙者も明智殿と一緒になのです」

そもそも、元々の世界で通っていた学校が女子校だったのです。  
男の人と付き合う機会なんてなかったのです。

拙者は……恋がよくわかりません。  
経験も機会もなく、というのが恋なのかサツパリなのです。

「そっか……皆意外と経験少ないんだなっ」

「ナギちゃん、それ経験豊富な人が言うセリフだよ？」

「すみにやんだって男嫌いな癖にっ」

とにかく、今日わかった事は……皆さん意外と付き合った事とかないですね！

明智殿も生駒さんも亜紀さんも、みんな綺麗で可愛いのに。

……あれ、伊吹さんはどうなのでしょう？

ちよ、ちよっただけ亜紀さんに訊いてみましょう！

「あ、あの！ 伊吹さんは付き合った事とかあるのですかっ？」

「え？ 伊吹はないと思うよ。あの子、キツイ事言っようで圭くん一筋だしねえ」

「もきゅー!? け、けーすけ様の事を……っ?」

「伊吹がその……ふ、藤島に?」

「え? そうなんじゃないの? だって伊吹って圭くんがあたしらと二人きりで話してると、いつも機嫌悪そうに拗ねてるじゃん?」

それは確かに……伊吹さん、けーすけ様の事好きみたいなの行動しますけど。

でもでもホントなのですか。伊吹さんがけーすけ様を狙っているって……?

……な、なんでしょう。この妙なもやもやは……っ。  
もきゅー……わからない、わからないのです。

「あんなクソ介のどこがいいんだか。ナギちゃんの好きな人は当然私だよー!?」

「え、わ、私は……別に好きな人なんて……っ」

「はは〜ん。もしかして凧紗の好きな人って圭くんだったり?」

「ち、違う! 藤島は友達だつ。あ、あんな変態恋愛対象なんかに……っ!」

そうは言ってますけど、明智殿……顔が真っ赤なのです。

……明智殿も伊吹さんみたいに、けーすけ様の事が……? もきゅーっ、わからない。どうして拙者が変な気分になってるのでしょうか?

なんか、気に入らないって思っているのはなんでなのでしょうか……っ?

「あんのクソ介え〜！ ナギちゃんを虜にするなんて……やっぱ陸上部で監視すべきだったかも！」

「だ、だから私は別に藤島なんて……」

「あはは、真つ赤だね！」

「うう……亜紀はどうなんだ？ す、好きな人とかいるのか……？」

「あたし？ ん〜……好きな人の検索結果は0かな？」

もきゆ……よかった、亜紀さんはけーすけ様の事、男の人として好きってわけじゃないみたいなのです。

……あれ、そういえば拙者。どうしてそれがわかった瞬間安心しているのでしょうか？

「そ、そうか……木下は？」

「もきゆ！？」

「木下は好きな人、いたりするの？」

「せ、拙者も好きな人はいないので！」

多分……というか絶対なのです！

そもそも、アルファ隊でけーすけ様護衛という任務中に、誰かを好きになるなんてありえません！

恋なんてしたら……し、仕事が捗らないのです！



もきゆう……そういえば、恋をするとどんな感じになっちゃおうのでしょうか？

それから……さっきからやたらと脳内に出てくるけーすけ様。どうでもいい場面ですら、脳裏に浮かぶけーすけ様の姿。

けーすけ様の事を考えると感じる、変な胸のもやもや。

さっきから……一体なんなんでしょうか？

わからない、全然わからないのです……。

## 第72話 恋バナ 暮葉side（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「さて、今回のオマケは野郎共の恋愛話だ。ちなみに僕は三次元に興味ナシ！ 二次元なら最近はもう平 唯ちゃんにハマリまくりで（ry）」

圭介「もう唯への愛はいいわ！ 皆はどうなんだ？」

重原「俺は付き合った事とかないね。あんまり興味もないし」

大林「僕はまあ……色々だ色々！」

赤佐「モテないんやなあ俺」

黒木「伊吹ちゃん一筋だし。つかテメエはどうなんだよ？」

圭介「失恋3回、クソもモテません……リア充とイケメン死ねえっ！」

大吾「所詮、現実リアルなどそんなもんだ！ それに比べて僕の唯ちゃんは永遠に僕を愛してくれて」

圭介「画面の中の女子は誰でも愛せるけど、別に愛されるわけじゃねーだろ！」

重原「まあ、二次元と三次元は完璧好みだよな」

### 第73話 マトモに活動？

翌週月曜日。

いつものように乙坂が帰りのSHRを勝手に進め、いつものように気付けば終わっていた。

さてと……放課後だな。今日は確か部活の活動日だった気がするな。

「圭介、今日あんた部活？」

「え？ ああ、そうだよ」

「なんだ、部活か……っ」

どうしたんでしょうか伊吹さん。

何故か、俺が部活だと言うと落ち込んでしまった。

……ていうか、伊吹も剣道部の試合が近いとかで、最近は部活が忙しかったりするんじゃないのか？

「今日、お前も部活なんだろう？」

「え？ そ、それはそうだけど……っ」

「だったら一緒に帰ろう。俺もお前も部活やってんだから、多分一緒に帰れると思うぞ」

「……っ、わかったわよ。暮葉もいるし……そこまで言うなら仕方なく一緒に帰ってあげる」

伊吹は不機嫌そうに腕を組み、ぷいっとなつぽを向いてしまった。

やれやれ……相変わらずと言えば相変わらずだ。

ホントに伊吹は素直じゃねえな。いつも嫌々言いつつ絶対一緒に行動するもんなあ。

まあ、それは暮葉の存在があるからこそなのかもしれないが。

「けーすけ様っ！ そろそろ部活に行きましょうー！」

「お、そうだな」

そろそろ行つてやろう。1年生三人組も変態浅間部長も待っている事だろう。

それに今日はどうやら、写真部始まって以来のマトモな活動らしいしね。

というわけで俺達は今日も皆が待っているであろう、写真部の部室へと向かったのである。

なんてことのない教室棟に存在する写真部の部室。

普通の教室の半分程度の大きさの部屋。

室内にあるテーブルの上にはPC、隅っこに並べられている机にもスキヤナとプリンタ。

中央のPCが乗っているテーブルの周りには、いつもの部活のメンバーが勢ぞろいであった。

「ちーっす」

「こんにちは！」

テキストに挨拶をしながら入る俺と、その挨拶を返すいつものメンバー。

中でも、しつこく俺と話をしようとしてきたのは妹の葵だった。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！ 遅いよ待ちくたびれたよ！」

「悪い、ちよつと今日はSHRが長引いたんだよ」

俺は謝りながら、不貞腐れる葵の髪をくしゃくしゃと撫でてあげた。葵は目を細めて、気持ちの良さそうな顔で俺に凭れかかってきた。

「にひひっつ、なでなでしてくれたから許してあげる！」

「そっか、ありがとうな」

よかったよかった。葵が機嫌を直してくれて……。

で、葵は俺達が遅れた事に対して不貞腐れていたようだが、その原因はというと

そう　こんな日に限って乙坂のヤツ、帰りに渡す予定のプリントを忘れやがったのだ。

オマケにその場所すら忘れ、結局クラス委員長の小坂も動員して探すという始末。

結局、プリント自体は見つかり皆の手には渡ったのだが……。

正直、クラスみんなのイライラは頂点に達していた。

黒木とかはもうキレて暴れてたし……まあ、例によって明智に制裁されていたけどね。

「にゅふふっ。葵さんはホントに」

「ホントだな、兄妹愛ってなんか見ている微笑ましいよな！」

葵を撫で撫でする俺を見て、暮葉とあかりは羨ましそうな眼差しを向けてくる。

「しよ、正直痛いぜ……いい意味で。」

「あかりにもその……一歳年上のお兄さん、いるよね？」

「ち、千早。冗談はやめろよな！ あたいはあんな変態兄貴に甘えたくないんだからな！」

「うう……どうして藤島君は妹に好かれ、ボクは妹に嫌われるの？」

あかりのストレートすぎる言葉がよっほど効いたのだろう。

半ば空気と化していた部長が初めて口を開いた。

それも、泣いているかのように掠れた声であった。

そんな泣いている浅間部長への部員の反応は、それはまあ実に冷たいもので……。

「部長……自業自得だと思います……っ」

「拙者も原因の100%は部長さんのせいだと思っつのです」

「俺もそう思います。部長……今まで何してきたか思い出してください。部室でエロ本読んだりエロゲーやったり、拳句の果てに全裸になる人が慕われると思いますか？」

俺も彼女達が言い終わった後、最期に率直な感想を浅間部長にぶつけてみせた。

それも、浅間部長が犯した罪（一部）を挙げてやったぞ。

俺の挙げた事にあかりや葵もうんうんと頷き、それを見てた浅間部

長は余計に落ち込んでしまった。  
いつもならそこで再起不能になる部長。しかし、今日の部長はど  
か違った

「はぁ……って、落ち込んでいる場合じゃないんだ」

「ぶ、部長にしては……復活早いですね」

「いつもこんなもんだろ？ あたいの兄貴、何気に生命力はゴキブリ並だからなっ」

「浅間部長よりもお兄ちゃんの方が丈夫で打たれづよいもん！」

いきなりキリツと復活した部長に対する皆の反応。

それはもう、ひどいの一言に尽きる。

……… どんだけ嫌われているんだ、我が写真部の部長さんは？

「みなさん！ それ以上は部長さんが可哀想なのですよっ」

「そうだぞ。現実女子リアルじょしと二次元の女の子に罵倒されるとじゃ、圧倒的に前者の方がシヨックなんだからな？」

「おお！ 二人とも、ボクの味方をしてくれるんだね！」

「いえ、全然、これっぽちも」

「まあ、俺も正直暮葉と同じっす」

「ぬぐわああああっ！ く、クソゲーだっ！ やっぱり現実リアルなんてクソゲーだああ！」



完璧に現実<sup>リアル</sup>に失望してしまった浅間部長。

まあ、こうなったのも殆ど貴方のせいっすよね。

浅間部長……黙っていればイケメンなのに、この男は本当に残念なイケメンである。

ていうか、さっきから浅間部長が叫んでいるだけで、何も話が進んでいない気がするぞ。

仕方ない……ここは俺が、話を進ませるようなセリフを言ってやるうか。

「それで部長。結局写真部始まって以来のマトモな活動ってなんですか？」

「おつといけない。ボクとした事が取りみだしてしまった……ありがとう藤島君！」

「全くだ変態兄貴っ、圭介に感謝しろよな！」

「ごほん、さてと……それじゃあそろそろ説明しよう。もうすぐ初高祭なのは皆理解しているよね？」

初高祭　どうやら、【初芝高校の文化祭】の略らしい。

なんてありがちな……なんて思っちゃったら多分負けだろう。

「もきゅー！ 拙者は楽しみなのですー！」

「私も……こつという行事は楽しみかな？」

「そつだな、あたかも好きだな！」

「葵もすっごい楽しみなんだよ」

みんな文化祭が楽しみなようである。

葵達1年生はこれが初めてだし、暮葉だって2年生だけど文化祭的な事をやるのは初めてだろう。

俺は正直面倒くさい……だって、別に関係ないでしょって仕事までさせられるじゃん？

去年は俺と大吾と三馬鹿の5人でサボって、野原先生にぶん殴られたもんだ……。

「うん、その楽しみな文化祭でボクらの写真部はなんと、生徒の勇姿を撮影しなきゃならないんだ」

部長がそう言った瞬間、楽しみムードだった彼女達は

「じゃ、写真撮影……なのですか？」

「うげえ面倒くさいっ。兄貴一人でやれよなっ」

「葵も文化祭の準備とかもあるから、当日くらいは遊びたかったのに……っ」

テンションが一気に下がってしまった。

特にあかりと葵の下がりよう。この二人は心底面倒くさいみたいである。

まあそりゃあそうだ。俺だって文化祭は遊んで過ごしたい。

正直、生徒の勇姿を撮れと言われてもねえ……。

「ま、まあ心配するな。全員でやるわけじゃないから」

「ホントか！？ あたいは絶対やらないからな！」

「葵も……やらない方向でお願いします」

早速かよコイツら！？

面倒くさい気持ちはわかるけど、やらないって決めるのが早すぎるだろ！

「拙者もその……亜紀さんや伊吹さんとの約束で、クラスの準備に回らないといけないので」

ああ、そういえば暮葉は今日、クラスでそんな話をしていた気がするな。

こういう忙しいヤツは仕方ないよな……。しかしどうするんだよ。あかりと葵はやる気ナシで暮葉は仕事で忙しい。

かといって俺も面倒くさい。でも、この展開だとカメラマンになる人は必然的に

「あ、あの……部長。わたし……写真撮影やりたいですっ」

写真を撮るのが大好きで、将来プロの写真家を目指している青山さんになる。

そんな事はわかっていた。だが問題は……青山さん、このままだと一人ぼっちだな。

たかが写真撮影だ。大人数で行動したって無意味なのはわかっている。

だけど、流石にぼっちはキツイよなあ……。

「そうか、ありがたい！ 編集はボクがやるけど……でも青山君一

人で大丈夫なのかい？」

「……ああもう我慢できん！」

青山さんを一人には出来ない。こうなったら俺もカメラマンになつてやりますよ！

「部長、俺も青山さんを手伝います」

「え、ふ……藤島先輩っ？」

「おお、ホントかね藤島君！ いやあく助かるよ、青山君一人では心細いだろうからね」

どうやら部長も、少しは青山さんの事を心配していたようだ。

俺が撮影隊に志願をした瞬間、浅間部長はどこか安心したような表情を見せたのだ。

「あの……藤島先輩」

「ん？」

「その……ホントにわたしと一緒によかったのですか……っ？」

青山さんが両手を胸に当て、少しだけおどおどしながら尋ねてきた。

「嫌がる理由なんてないだろ？ 俺は青山さんを手伝いたいんだよ」

「……っ。その……あ、ありがとうございます……っ」

頬を少しだけ赤く染め、上目遣いをしながらお礼を言ってきた。

だけどお礼を言った後、恥ずかしかったんだろうか、青山さんはすぐに顔を背けてしまった。

……ちよつと待てよ青山さん。その破壊力は卑怯でしょ。

俺、今軽く萌え死にかけましたよ。今の表情は全国の男の子がドキッとするくらい可愛すぎた。

「お兄ちゃんが千早にデレデレしてる……っ」

「な、なんかその……気に入らないのです」

「で、デレデレすんな圭介！」

……なんか、その他の女子の視線が痛いです。

なんでだろう、突き刺さるように痛い……痛すぎる！

### 第73話 マトモに活動？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「二次元妹と現実妹……そう言われてもピンと来ない人がきつと読者にもいるだろう。そこで今日は！ 僕がこの二つの違いを教えようではないか！」

重原「まさに誰得コーナーだね……」

大吾「コラそこ！ 妹ファンに謝れ！ さて……口で説明するより実物を見たほうがいいね。そこでまず最初に、二次元の妹に限りなく近い行動をする圭介の妹から見ようか」

藤島家。

葵「お兄ちゃん！」

圭介「なんだよ？」

葵「勉強わからないから教えて欲しいなっ」

圭介「お前……勉強得意っ！ か学年でも三本指に入るだろ？」

葵「えへへ、バレちゃった？」

圭介「バレバレだっつーの。まあいいや、たまには一緒に勉強しようか？」

葵「お兄ちゃん！ その……お兄ちゃんのお膝に座りたいなっ」

圭介「あのなあ！ ……つたく、今日だけだからな」

葵「ありがとう、お兄ちゃん」

一方、大吾達。

大吾「こんな甘えてくる妹が現実にいるかああああああっ！」

重原「お、落ちつかないかい大吾！」

大吾「クソツッ！ まあ……わかつただろう？ 要するにありえない程プラコンなのがよくいる二次元妹だ。続いてどう見ても現実妹の浅間あかりを見て見よう」

浅間家。

浅間部長「あ、あのーあかり？ き、気まずいし……母さんもそこで見てるからね？ 少しはお話でも」

あかり「やだ」

浅間部長「……そんなにお兄さんの事、嫌い？」

あかり「黙れ変態兄貴」

浅間部長「あ、あかりさん……?」

あかり「……………」

一方、大吾達。

大吾「どうして現実の妹ってこうなの！ 全っ然可愛くねえ！」

重原「だから落ちつこうよ大吾！」

大吾「やっぱり現実リアルはクソゲーだ！ 二次元サイコーだ！」

あくまで大吾の主観です。



## 第74話 不思議な青山さん

まだ活動時間中の事だ。

俺はトイレへ行くために一度部室を出ていた。

今はその帰り。用を済ませた俺は部室へ戻る為に一人で歩いていた。

写真撮影かぁ。確かに、写真部に入ってからというものの毎日が談笑。

写真部らしい活動なんてした事がなかったな。

正直、部活として成り立っているのか疑いたくなる。写真部とはそんな部活であった。

……でも、今回は違う。生徒会に頼まれているので学校祭の様子を撮影しなければならない。

初めての活動らしい活動だ。青山さんを手助けする目的で志願してみたけど……責任重大だよなあ。

「あの……」

その時、俺の背後から澄んだ可愛らしい声が聞こえた。  
まるで俺を呼びとめるように

「……ん、青山さん？」

声の主は青山さんだった。

しかし、いつも聴いてもいい声だよなあ青山さんって。  
まるでどっぞの声優さんのようである。

「あの……少しお話、してもいいでしょうか……？」

「話？ うん、別に構わないよ」

「あ、ありがとうございます……っ」

どうやら青山さんは俺に話があるようだ。彼女は俺について来いと  
言わんばかりに歩き始めた。

青山さんの話ってなんだろうなあ。態々二人きりで話すような事な  
んだから……ハッ、まさか！

ああああ、愛の告白とかじゃあ！？

……はは……流石にそれは違うよね。でも少しだけ期待しちゃった  
ぞ……っ！

でもそんなわけがないだろう。

何故なら……青山さんに告白イベントを発生させるフラグを立てた  
覚えは皆無だからだ！

「……あの、先輩……？ 顔赤いですけど……？」

「えー？ ああ気にするな。土日風邪ひいてただけだから」

「だ、大丈夫ですか……熱はっ？」

「もう治ったよ。仮にあったとしても動く分には何の問題もないか  
ら」

「は、はい……その、無理だけはしないでくださいね……？」

「おっ……」

畜生……いい子過ぎて今度は涙が出そうだ。

しかしなんとか誤魔化したけど、この調子だといずれ俺の内心がバレるかもしれないな。

余計な事は考えないように気をつける事にしよう。

でも、青山さんのお話って本当になんなんだろうな？

……そういえば、俺も青山さんからCDを借りっぱなしだ。

丁度いい機会だ、話のついでにCDを返そうかな。

こうして、青山さんに案内された場所は学校の屋上であった。

初めて来るなあ屋上って。

そういえば、6月に入ってから一般生徒にも開放してるんだったな。赤佐がそんな事を言っていた。三馬鹿はよく屋上で屯っているらしいのだ。

「……すみません先輩っ、急にこんな所に呼び出しちゃいまして……」

「別にいいけど……それより俺に話って？」

放課後、屋上、男女二人つきり……普通なら告白イベントが待っているハズだ。

そんな事も見抜けなくらい鈍感ってわけじゃない。

このシチュエーションは間違いなく、エロゲーでもよくある告白イベントだろう。

……と、言う事は……もしかして青山さん、本気で俺に告白を……!?

ままま、待て待て。いつ青山さんにそんなフラグを立てたんだ！ありえんっ。ロクなフラグも立てていない相手が告白してくるなん

て……。  
そんなの現実<sup>リアル</sup>では絶対にありえない！

「あの……先輩っ」

「お、おう」

「……先輩は苦勞人ですよね」

「えっ……？」

突然苦勞人<sup>クワウジン</sup>って言われた。まあ確かに色々な意味で苦勞はしているが。

「いつも一人で罪を被って……いつも誰かの為に奔走して……っ、先輩は無理し過ぎだと思えます」

まあ……確かによく言われるけど。  
けど、どうして青山さんがそれを俺に……？

「今回だってそうです。わたしを……手伝うって……っ」

「もしかして無理して言っただって思ってるのか？ 心配しなくてもあれは本心から言っただ事だよ」

「わ、わかってますっ！ その……わたしも嬉しかったです……っ、でも、無理はしないでください」

久しぶりかも、ここまで他人に心配された事って。  
つい最近までは心配されるどころか、一方的に恨まれる存在だった

からなあ。

なんだか、心配されるっていう普通の事が不思議な感じだ。

「……無理って、他人から見たら無理しているように見えるかもしれないけど、やってる本人は全然無理していないって事、あるんじゃないかな？」

「えっ……？」

「少なくとも、俺は無理なんか全然してないよ。苦痛とかは感じてないぞ？」

まあ、永淵と戦ったりした時は滅茶苦茶痛かったけど……。

それでも、みんなを助ける事が出来たんだ。

殴られた時は苦痛でも、それをやった事自体は苦痛じゃなかったな。

「せ、先輩……っ」

「ん？」

「先輩は……不思議です。そこまでその……現実と向き合えるなんて、なんだか……不思議です」

その時、青山さんは不思議な表情を浮かべていた。

一応穏やかに笑ってるようには見えるものの、その表情はどこか寂しげで悲しげで……。

まるで、誰かに助けを求めている。今の彼女はそんな感じであった。

「青山さん」

「ふえ？」

「青山さんのほうこそ、無理とかしてないか……？」

「……っ、わ、わたしは別に無理なんて。毎日を楽しく過ごしてますよ……？」

「そ、そうか……」

その割にはさっきの表情。そして思わせぶりなあのセリフ……。

……ダメだ、心配になってきてしまった。

だって今の青山さん。どう考えても嘘をついているとしか思えないから

「……あのさ、青山さん」

「は、はい……？」

「もし何か悩みがあるなら相談してくれても構わないよ」

「え、で……でもっ」

そりゃあいきなりこんな事を言われれば、躊躇するのは当たり前である。

……でも、さっきのあの青山さんを見たせいなんだろうか。

俺はすごく　青山さんが心配で仕方がない。

「大丈夫、俺も悩みがあるなら相談するから。これで俺達是对等だろ？」

「た、対等なんて……わ、わたしは後輩で先輩は先輩ですよ……？」

「先輩後輩とか、そんな上下関係は関係ないよ。妹の大切な友達で、そして同じ部活の大切な仲間の事を放っておけないんだよ」

「……せ、先輩……ありがとうございます……っ」

不器用で、恥ずかしそうに、彼女はリンゴのように  
しかも俯いているせいか、前髪で目が隠れて青山さんの目が全然見えない。

「……お、おうっ。あ、あんまり気にしなくてもいいぞ……？」

そうして、しばらくの間の沈黙……。

いかん……こっちまで恥ずかしくなってきた。

俺も右手で前髪を引っ張り、手と髪で自分の顔を隠すようにしていた。

頬が熱い……多分、今は俺も顔が赤いかもしれない。

……そ、そろそろ戻ろう。流石に屋上で二人きりでコレは恥ずかしくない。

どうやら告白イベントじゃなかったみたいだし。暮葉達も多分部室で待っているはずだ。

「そ、そろそろ戻ろうぜ？」

「……っ！ せ、先輩！」

「ん？」

青山さんにしては珍しい、とても大きな声で俺を呼びとめてきた。今みたいに大きな声は初めて聞いた。青山さんが珍しく叫んだのだ。振り向くと、恥ずかしそうにもじもじとしている青山さんがいた。

「……っ！」

その瞬間、何かを決心したように右手を胸に当て、真っ直ぐに俺を捉えてきた。

そ、そんな直視するなよ……恥ずかしいだろ。

でも一体……今度は何なんだろうか？

「先輩は大きな障害があつたとしても、突き進む覚悟がある人ですよね……っ？」

「大きな障害？ んん、まあ程度によるけど」

それが一体どうしたんだろう。

そもそも、大きな障害ってどんな障害なんだ？

物理的な何かか、それとも精神的・身体的な何かなのか……いまいちよくわからない。

「わたし……先輩に迷惑掛けるかもしれないけど、でも……もう我慢ができませんっ」

「え……青山さん」

なんだ、何が起こってる？

一体なんのイベントが発生したってんだ？

「好きです、中学生の頃からずっと好きです……」



青山さんの口から放たれた言葉……それは  
冗談とは思えない お互いの人生を左右する大事な言葉であった

第74話 不思議な青山さん (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「暮葉、世界を構築する三大元素って何だか知ってるか?」

暮葉「もきゅ? 四大元素なら知ってるんですけど……なんなのですかそれ!」

圭介「教えてやろう……神が発見した……三大元素を!」

暮葉「もきゅ! 楽しみなのです!」

圭介「答えは……エロゲーとエロゲーとエロゲーだ!」

暮葉「……エエエエエエエエエエエエエエエエエッ!?!」

## 第75話 告白の返事

言われてしまった。

生まれてから約16年と10ヶ月……いや、来月誕生日だから11ヶ月か。

俺は人生で初めて 女の子に告白をされてしまった。

「……………」

恥ずかしそうに片手を胸に当て、イチゴのように真っ赤な顔にいつも以上に潤っている瞳。

そんないつもとは違う青山さんは、恥ずかしそうに視線だけを横に逸らしていた。

それでも逃げる事もなくいつまでも、ずっと告白の返事を待っているようであった。

「……………あ、青山さん。今、俺の事……………」

「す、好きです……………って、言いました……………」

「えっ、でも中学の時からって……………?」

「は、はい……………わたしはその……………葵達と同じ中学で、先輩の事も中学の事から知っていました……………」

ああ、そういう事だったのか。

時々青山さんは永渕の件を知っているような発言をしていた理由……………。

なるほど、同じ中学だったら確実にあの話は知っているだろうな。

なんせ、俺は全校生徒から暴力魔だと思われていたくらいだ。  
……でもあれだけ散々言われていたのに、青山さんだって俺の悪い噂を聞いていたハズなのに……？

「な、なんで？ あれだけ悪い噂が広まっていたら普通……」

「確かに……わたしも最初は怖い人がいるって思っていました」

「で、ですよー」

「でも……葵から事情を聞いて、僅かな時間を見つけてこっそり……」

「それってもしかして……俺を追跡していたの？」

「すみません……っ！ ストーカーだってわかってました……でも  
気になって……っ」

「別に気にしてないからいいけど……」

というか葵のヤツ、青山さんには事情を説明したんだな。

……いや、一応あかりにも言ったのかもしれない。

でも、あかりは性格的に事実を信じようとしなかったのかもしれない。

ただ青山さんはあかりと違って、ホントかどうか事実を確かめようとして……。

「すみません……でも見たんです。先輩がその……階段でお婆様の荷物を持っていて……っ」

「そんな事やってたっけ？」

「し、してました……っ！ この目でちゃんと見ました……っ！」

まあ確かに、時々困っている老人がいたら手を差し伸べたりはするが……。

中学の時にはやってたんだ。んで、それを青山さんに見られていたのか。

しかもお婆様って、すっごい改まった言い方っすな。

「あんまり覚えてないなあ……でもそんな事してたんだ」

「は、はい。それで……そのお婆様はわたしのお婆様で……っ」

「え、青山さんの！？」

「はい……っ」

身内だったんかい！

でも、おかしいな……身内なのに様付けって。まるで青山さんが圧倒的格下みたいじゃねえか。

それを言ったら暮葉も俺を様付けで読んでいるけど……。

アレ、俺が暮葉の支配者みたいで嫌なんだよなあ。

でも行っても治らないから、半分くらい諦めているけど……。

「その光景と……その後のお婆様とのお話で、その……確信しました」

「確信？」

「は、はい……その、先輩は親切で優しい人だって……っ」  
「……………」

あの中学でそんな風に思ってくれている人が、まさかこんな身近にいたなんて。

普通は誰だって俺を嫌がる。そんな空気が校内どころか学校周辺にまで漂っていたのに。

そんな中で彼女はただ一人、俺との関わりもないのに事情を知っていた。

暴力魔ではない俺の姿を知っていた……。

「だから気になっちゃったんです……どうして、あんなに親切な人が悪く言われるのか……先輩は国宗先輩を助ける為に、自らの身を挺しただでしたのに……っ」

「……………いいよ。人を助けたって、その過程で永淵を殴った事には変わりない。俺は本物の暴力魔だから」

「そ、そんなっ、ごめんなさい！ その……先輩を落ち込ませるつもりで言ったわけじゃ」

「大丈夫、わかってるから……………」

そんな事はわかっている。それにもう、永淵の件は過去の事なんだから。

今はそんな事よりも、青山さんの告白に対する返事を

「……………せ、先輩はわたしの憧れでしたっ。自由で、でも優しく、あれだけ先輩に散々な事をやっていたあかりさえ受け入れて……………」

「そりゃあね、怒ってもしょうがない事じゃん？」

あかりは友達が大切だったからこそ、友達に危害を加える可能性があつた俺を遠ざけとした。

友達の為を想つてやっていた事で、別に悪気があるわけではないってわかつていた。

それに……永淵をボコボコにしちまったのは本当の話だ。あかりに言い返す言葉なんて、全く思いつかなかつたよな……。

「……心、とつても広いんですねっ」

「そんな事はないと思うけど」

多分、重原とかでもキレたりはしないだろう。

大吾は多分、これだから現実にはクソゲーだって叫びそうだけど。

「……やっぱり、わたしはそんな先輩が……大好きですっ」

「……っ！」

だだだだ、大好きです……だと!?

……初めてだ。葵以外の女の子に好きだって、ストレートにそんな風な事を言われたのは。

すげえ……これからバンジージャンプをするわけでもねえのに、滅茶苦茶心臓がバクバクするぞ。

そして、今まで感じた事のねえようなこの……へ、変な感覚。

「先輩……教えてください……っ！……先輩の正直な気持ち、お願いします……っ！」

青山さんは本気だ。罰告とかそんな遊びではない、ただ……  
彼女は本気だ。

青山さんとの会話を思い出す限り、青山さんはずっと俺に片想いを  
していたらしい。

何年も俺なんかの事を想っていてくれたなんて……。

正直嬉しい。思わずハッスルダンスを踊っちゃいそうだ。

嬉しいって思うって事は　俺、青山さんの事好きなんだろうか？

……いや、よっぽど嫌いな相手でもない限り、男なら告白されて嬉  
しくないハズがないだろ。

でもこうして見ていると……あ、青山さんって可愛いよな。

見た目ヨシ中身ヨシ。どんな男でも思わず惚れちゃいそうな青山さ  
ん……。

やっぱり彼女を見ていると……俺は

「あ？　おいおいテメエらそろそろ下校時刻だぜ？　そんな所でよ、  
恋人ごっこしてんじゃねえぞ！」

荒々しく扉を開け、俺らに説教をしてきた白衣の男。

つたく、空気読めよ野オオオ原くウウウウウン！

野原先生には婚約者どころか彼女すらいない……つまり、独身のオ  
ッサンというわけである。

その為、校内恋愛に比較的寛大な教師が多いこの学校の中で、唯一  
校内恋愛禁止を掲げる男だったりするのである。要するに野原先生  
は、自分がモテないから生徒が恋愛するのがムカつくだけ。

……校内恋愛反対の理由があまりにも個人的すぎる！

「す、すいません。すぐ帰りますんで……ハハハッ！」



ま、まあ……一応野原だつて教師である事には変わらない。  
逆らつたらまた殴られるだろう。  
仕方ねえな……ここは一応従つておくか。

「……せ、先輩っ」

「ん、ん？」

「その……返事はまた今度で構いませんから……っ。気持ち、整理  
してくださいね……？」

「お、おう……っ」

そう言い残し、青山さんは一足先に屋上を後にした。もしかして、  
青山さんにはバレていたのかな？

告白の返事、どう答えればいいのかを滅茶苦茶悩んでいた事……。  
なんだか、折角告白されたのに悪い事をしたような……というか、  
悪い事をしてしまったんだろう。

告白されたら即返すのが普通だ。しかも相手は青山さんだぞ？  
断る理由なんてないハズなのに……それなのに俺はチンタラと……  
ああ、俺ってやっぱり最低だ。

そもそも、俺は青山さんの事が好きなんだろうか。

そうじゃないのに告白をOKしたら、やっぱり青山さんに失礼だよ  
なあ……。

……って、そんな事をチンタラ考えていたからこうなつたんだ。  
やっぱり、俺は最低のクソ野郎だよな……。

「……………」

青山さんの野原先生もつくの昔に立ち去った屋上。  
そこでただ一人、俺は脳内真っ白状態で立ち尽くしていた……。

## 第75話 告白の返事

(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「何故だ……」

伊吹「どしたのよ、圭介？」

圭介「どうして俺にはボクっ娘で元気な後輩がないんだ！」

伊吹「そ、そんな事で悩んでたの!？」

圭介「だってボクっ娘後輩で可愛い子がゲームに」

伊吹「またエロゲーか! この変態ばか圭介!」

圭介「のーるわああつくす! ぐは……ちくしょ……ボクっ娘後輩……っ、現実にいるんだろうか?」

その頃、関東地方某所。

????「ふえつくしよん!」

????「どうしたんだ、奈々?」

奈々「ふにゃあ……先輩、なんかボクの噂をされたような気がするま

すっ  
「

先輩（？）「気のせいじゃねえの？ それより週末皆でカラオケ行かない？」

奈々「いいですよ！ また先輩の微妙な歌が聞けるんですね」

先輩（確定）「悪かったな歌唱力微妙で！ これでもクーや吉野よりはマシじゃ！」

## 第76話 悩む圭介

あの後、部活が終わって暮葉とか葵とか伊吹とか、その辺の面子で下校した。

……でも、三人の女子が会話で盛り上がる中、俺はただ一人黙りこんでいた。

別に話すのが嫌だからとかじゃない。ただ、単純に悩んでいるだけである。

告白 されたのに、結局返事を言う前に……はあ、どうしていつもこうなんだよ。

俺がこんなヤツだからだよな。今まで全部相手がリア充で、結局片想いで思っちまったのも……。

というか、そもそも俺は青山さんの事が好きなんだろうか

「けーすけ様？」

「……………」

「あ、あの！ けーすけ様！」

「…………え？ お、おう」

気付かなかった。暮葉がいつの間にか話を掛けきてくれたようだ。

「完璧上の空でした。体調でも悪いのですか？」

「し、心配するな。ちょっと考え事をしていただけだ」

「もきゅ？ 考え事……そ、それってなんですか!？」

「未来の事……?」

……まあ強ち間違いではない。

青山さんの告白にどう答えるかで 俺のちよつと先の未来が変わってしまう。

これは、エロゲー的に言うと重要な選択肢なんだ。

「けーすけ様、未来の事とか考えるのですね!」

「ふ〜ん。あんたの脳内っていつもエロ一色かと思ってたけど……違うのね」

「……………」

伊吹さんひでえ……俺、そこまでピンク色な人間じゃないよ?

少なくとも女の子は脚こそ最高とくらいしか……あ、ゴメン、やっぱり脳内ピンク一色かもしれない。

……って、今はピンクい事を考えている場合じゃない。

「お兄ちゃんの未来は葵と結婚してずーっと幸せに暮らす事だよね」  
「!」

「アホかお前は! 近親婚は禁止っすよ!??」

というか、今は葵のどうでもいい話に付き合っている余裕がない。

……はあ、結局俺はどうすりゃいいんだよ。

「ちなみにあんたって何か将来の夢でもあるの?」

「全然ないっすね。しかも思いつかないし……」

正直に答えると、三人とも呆れたような表情で俺を見てきた。

まあ、そりゃあ呆れるだろう。だって、将来の夢が全くないんだぜ？  
現実主義つてのもいいかもしれないが、やっぱり人間夢は持つべき  
かもしれないし。

ああ、青山さんの事もそうだけど、将来マジでなににして暮らそう……？

「……や、焼きそば屋でもやってみたら？ 味は私が保証するわよ？」

「あ！ 拙者もけーすけ様の焼きそば、すごくおいしかったような気がします！」

「葵もお兄ちゃんの作る焼きそばは大好きだよ！」

「……俺、真面目に焼きそば屋でもやってみようかな？」

でも焼きそば以外は作れないしなあ。

しかもソース焼きそば限定だ。他の味の焼きそばは正直作った事がないな。

焼きそば屋と言っても、ソース焼きそばの他にも色々出さないと売れねえだろうし。

はあ……今度の休日から料理の練習でもしようかな？

「ほ、ホントにやんなら……仕方なく圭介の店で働いてもいいわよ？」

「拙者も！ けーすけ様の手助けをしたいのです！」

「葵だつて手伝つよ？」

「まだやるとは言つてねえし……つーか、お前ら無理しなくてもいいんだぞ？」

特に伊吹に至つては仕方なくだ。

まあ、伊吹らしいっちゃ伊吹らしいけどね。

でも無理してまで働いて欲しくないし、そもそも焼きそば屋をやるなんてまだ決めていない。

それどころか、就職するか進学するかすら……今が楽しけりゃそれでいいやと思つているのが現状で。

……つと、そんな未来の話はまあ重要だが、今は置いておこう。それより重要なのは青山さんの告白への返事だ。

「……………」

「け、圭介が真剣だわ……………」

「もきゅ、あのけーすけ様が真剣だなんて珍しいのです」

「ホントだね。こんなお兄ちゃんはレアだね」

……… どんだけ普段不真面目な男だと思われてんだ、俺。

まあ否定しようがないけどね。俺は普段トコトン不真面目に生きているし。

授業中寝たり野原くんとバトルしたり、そんなヤツのどこが真面目なんだよつてね。



その後、結局女子三人とロクな会話をする事もなく、俺は悩みつつも自宅へ足を踏み入れた。

しかし、自分の部屋ほど落ちつく場所ってないよなあ。

俺はそんな事を想いつつ、朝から直していない荒れたベッドの上に転がった。

寝る時にでも直しとかないな……寝相が悪いらしく、毎日の事だけどよく荒れるんだよなあ。

「はあ……っ」

いかん、誰かがため息は幸せが逃げるって言ってたな。

誰だろう、最初にあんな事を言ったヤツは？

……まあ、正直誰でもいいんだけどね。そんな事より真剣に青山さんの事、考えねえとな。

）

あ？

携帯様が鳴っておりますぞ？

……電話か、誰だよ人が真剣に悩んでいる時に……えっ、明智？

明智から電話だと、これまた珍しい。光秀を倒す前以来な気がするなあ。

そういえば明智とはしばらく会話をしていない気が……って、んな事考えている場合じゃねえな。

さっさと電話に出ないと相手に失礼だろう。

「もしもし？」

『よ、よかった……出てくれたっ』

「そりゃ出るだろ？ あ、でも寝てる時は出れないかもな」

『うん、寝てるんだった仕方ないな』

それでも、電話をスルーされるのは女の子的にはムカつくんじゃない？  
まあ、明智は心が広いって事で納得しておこう。実際明智はいいヤツだしな。

「それで、なんか用か？」

『う、ううん別に。特に要は無いが……最近、藤島と話していない気がして……』

「ああ、丁度俺もそんな事を思っていたよ」

『お、思ったたのか！ だ、だったら学校で話しかけてくれても……』

「スマン！ その、生駒が……」

『藤島はすみにゃんが苦手なのか？』

「まあ……正直」

ちよつと、というかかなり苦手だ。

正直ガチホモネタでイジられるのは嫌だ。

増してや明智に絡もうものなら、きつとガチレズの生駒は噛みついてくるに違いない。

そういうわけで、学校で明智に話を掛けるのはアルティメット級に難しいのだ。

『すみにゃんを悪く思わないでくれ。私の友達だし、すみにゃんだって悪気があるわけじゃないから……』

「わかってるよ、心配すんなって。別に顔を見たくないくらい嫌ってるわけじゃないから」

『だ、だったら一度、すみにゃんと会って話してくれないか?』

「えっ、なんで?」

『すみにゃんからお前の悪口を訊くと……なんか気分が悪いんだ』

わ、悪口って……アイツ陰口叩いてたんですか!

まあ別にいいけどさ、そういうのは慣れっこだ。しかも、生駒の悪口ってのも大体想像できるぜ。

どうせ俺が明智に近寄る害虫だとか、ガチホモの癖に〜とか、そういうくだらん悪口なんだろう?

だったらスルーが一番だと俺は思うんだ。でも……。

「なんで明智が気分悪くなるんだ?」

『えっ!? あ、ふあ……べ、別に深い理由はないんだぞ……?』

「そ、そうか?」

『そ、そうだ! そうに決まってるんだ!』

なんかゴリ押しされた気がするなあ。

しかし本当に不思議だ。悪口を言われて傷つくのは普通言われた俺じゃないか？

でも、どうしてそれを聞いただけの明智が？

……やっぱり明智って、ちょっとS気味だけど優しいんじゃない？

「仕方ないな、そこまで言うなら生駒と話しとくよ」

『そ、そうか。ありがとうなっ』

「まあ、仲が悪いつても嫌なもんだしな」

『……あ、そうだ、藤島っ』

「ん？」

いきなり話題を変えようとする明智。

一体今度はどういふ話をしようとしてるんだ？

まあ明智の事だし、いつも通り俺を変態扱いするつもりなんだろう。

『お前、青山に告白されたのか？』

「……………ブッ！」

オイオイオイオイ待てえっ！

おかしい、この話は絶対にオカシイぞ。明智って今日の放課後校内に居たっけか？

それ以前に明智は屋上にいたのか？

いなかったとしたらオカシイぜ。なんで明智がその話を……………っ！？

『あれ、まさか……凶星なのか？』

「ちょー……っつと待て！　なんでお前がそれを知っている？」

『の、野原先生が廊下でボソボソと……』

「……………」

明智に聞かれたって事は当然、他の生徒にも聞かれた可能性があるな。

あの野郎……全校に俺と青山さんの言いふらすとは中々いい度胸だ。……いつか絶対ギャフンと言わせてやるっ！

『藤島……その話、ホントみたいだな』

「……確かに今日、青山さんに告白されたよ」

『……そ、それで、藤島は青山と付き合うのか……っ？』

なんだか、とても不安げで震えているような声だったな。明智にしては珍しく弱々しかったような気がするぞ。とにかく、ここは事実をありのまま伝えるべきだろう

「いや、野原の乱入で結局保留のままだよ」

『ほ、ホントか！？』

……なんか、超嬉しそうな感じがするのは俺だけか？  
ま、まあ気のせいだ。気のせいだと信じておこう。

「お、おう」

『で、でも……藤島、お前は青山になんて返す気なんだ……？』

またしても不安げに……喜んだり落ち込んだり、明智も中々忙しい人だなあ。

まあ、忙しいからこそわかりやすい。

少なくとも、明智は俺と青山さんがくっつく事に何らかの不安を抱いている。

その理由はわからないけど、その事だけは多分間違いないと思うんだ。

「俺はまだ自分の気持ちの整理ができてなくて。確かに告白されたのは嬉しいけど、でも……」

『……要するに藤島は、青山に対する恋愛感情がないんだな？』

「え？ な、なんでそれが？」

『言葉を聞いていればわかるぞ』

「流石というか……中々鋭いんじゃないか？」

『こ、これでも推理は得意なほうなんだぞ？』

い、意外や……推理なんて全然関係のない人だと思っていたのに。まあいいや、俺の気持ちは完全に明智にバレているようだし。ここから誤魔化したって何の意味もないだろう。

「わかった、負けを認める。確かに告白自体は嬉しかったけど……」

恋愛感情はないよ」

あんなに可愛い子に告白されたのに、どうして恋愛感情が湧いてこないんだろう？

生駒の言う通りのガチホモでもないのに。というかそれはありえない。

今までに3度くらい女の子を好きになった事があるし、ホモなわけがねえよ。

でも……なんなんだホントに。

好意を受け入れようとした時、意味不明な気持ちこころがそれを追いだそうとする。

なんでなんだろう……まさか、無意識に好きな人でもいるんだろうか？

……っ。一瞬、誰かの姿が浮かんだような気がしたけど……気のせいだ、というかありえないだろ！

ないない、俺は別に誰も好きじゃない。でも何かか青山さんからの好意を遮るんだ……。

『……藤島？ 藤島』

「……え？ ああ！ わ、悪い！」

『全く、相変わらず何も考えずに空を見ていそつな男だ』

「……………」

すいません。

よく授業中に暇だから何も考えずに青空見えます。

……ちくしょう、なんて鋭いんだ……明智凧紗！

『そ、それで……青山に恋愛感情は抱いていないんだな?』

「あ、ああ。青山さんは好きだけど……それは後輩とか友達とか、そういう意味だよ」

『だ、だったら断れ……私もその……藤島と誰かが付き合うのは嫌だ………』

「えっ?」

『……ッ! な、私はなにも言っていないぞ!』

最後のほうを聞き逃しちまった。

断れてあたりで話が終わったと思っちまったよ。

畜生、一体明智さんは何を言っただろうか?

「すまん、最後の方は聞いてなかった。なんて言っただんだ?」

『な、何も言っていない!』

「そ、そうか」

まあ、どうでもいい事だったんだろうな。

でも気になるなあ。やっぱり俺も最後の明智の呟きを聞きたかったな。

『と、とにかく。恋愛感情もないのに付き合うのは相手にとって失礼だぞ……だからっ、お互いの為にも断れ……っ』



「……わかった。なんか、相談にまで乗ってくれてありがとうな」

『ふふ、気にするな。私らは友達だぞ？』

「……そうだな！」

俺達は友達だ。

友達なんだから困った時はお互い様で、相談し合うのはあたりまえだろう。

明智と話をしたおかげで、なんだか色々気持ちが落ち着いた気がするなあ。

というか、明智のおかげで決心がついたような気がするよ。

とにかく告白の返事は明日しよう。こういうのは出来るだけ早い方がいいに決まっているしな。

その後、俺と明智はしばらく談笑をした後、数時間くらい経った頃によろやく通話が終了した。

長電話だったな……通話代、大丈夫かな？

## 第76話 悩む圭介（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「眠い……」

暮葉「け、けーすけ様！ 目の下のくまさんがすごい事になってるのですよー!？」

圭介「お、おっ……っ」

小坂「圭くん、寝不足？」

圭介「まあそんな所だよ」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「……ア ガミやってた」

三人「真性の馬鹿だ（ね）（なのです）！」

## 第77話 / なんだ、このギャルゲー的展開は!?

翌日、告白の返事は早めにしておいたほうがいいよな。

というわけで、俺は朝っぱらから青山さんを探して校内を歩きまわっていた。

前に葵から聞いたのだが、青山さんはいつも登校してくるのが早いらしい。

だからもういるはずなんだけど……おかしいな、どこにもいないよ  
うな気がするぞ。

まあここは学校だし、学校と言っても結構広いものだ。

所詮は現実<sup>リアル</sup>、そう簡単に女の子の居場所を突き止められるなんてありえない話だ。

「もきゅ！ けーすけ様！」

「え、暮葉？」

あれ、暮葉は教室に置いてきたはずなのに。

どうしてここがわかったんだろうか？

……あ、そういえば暮葉は魔力を感じる事が出来るんだったな。

「けーすけ様！ こんなところで何やってるのですか？」

「青山さんに用があるんだよ」

「もきゅ？ 青山さん……ん？確かに今日は見てないのです」

「そうかあ……」

今日は暮葉も青山さんの姿を見ていないのか。

風邪でも引いて休んじゃったのかな？

もしそうだとしたら……あの告白の返事はいつすればいいんだろうか？

出来る事なら早く返事をしてあげたい。そのほつがお互いの為でもあるしな。

「それより、青山さんにどんな要件なのですか！？ ならなら拙者がひとつ飛び」

「ま、待て！ 魔法とかは使つなよ？」

「もきゅ？ だいじょーぶなのです！ ああいうのはバレなきや何やってもオーケーなの」

「いいわけあるかつ！ ファンタジー世界でやれ！」

「もきゅ……魔法が実在している時点でじゅーぶんファンタジーだと思つのですよ？」

何故だ、全く否定ができねえ……。

確かに魔法が存在する時点で十分ファンタジーかもだが、それでもここは現実世界だ。

魔法の存在が世間で認められているハズがない。

やっぱり、この世界で堂々と魔法を使うのはまずいだろう。

「……とにかく、自重しとけて」

「もきゅう、わかつたのです……でも青山さんに用事つて本当にな

んなのでしょうか？」

「た、大した用事じゃねえよ！　そうそう、CD返すんだよ！」

「もきゅ？　CD……い、いつの間に借りてたのですか！？」

「まあ、青山さんって結構音楽聞らしいし」

そして、俺が持っているほうが都合がいいんだとか。

ロツクを聞いたら説教され、お婆さんの事をお婆様と呼ぶ。

……青山家、一体どんなご家庭なんでしょうか？

まあそれはともかく、昨日の告白騒動でCDを返しそびれたのは確かだ。

このCDも返事をするついでに返してあげないとね。

「やっぱり拙者が青山さんの魔力を追跡して」

「だ〜から魔法は使うなって！」

しかも俺達が魔法とか魔力とか、そんな事を大声で言っているせいか周囲の視線が痛いぞ？

まあ、どうせ一般高校生が考える事だ。

オカルトマニアがいるというよりも、厨二病の頭の痛い人がいると考える人のほうが多いだろう。

正直、オカルトマニアより厨二病のほうがマシかもしれない。

「でも学校に来てないなら仕方ないのです……あ、そーだ！　葵さんやあかりさんに頼んでみるのはどうでしょうか！？」

「それも一つの手だろうけど、出来れば俺は直接返したいな」

というか、CDを返すのはオマケでメインは告白の返事だ。  
返事だけは葵やあかりじゃ絶対に出来ない。

いや……それだけは俺がしなくちゃいけないんだ。

青山さんは俺に対して好きって言うてくれた。だからその返事は俺がしなければならぬ。

「け、けーすけ様にしては律義なのですね！」

「俺にしてはってなんですか!？」

「ジヨ、冗談ナノデスヨ！」

「嘘つけ！ 思いつきり某読みじゃねーか！」

いつそのこと、こんな事を言われぬない為にも真面目に生きてみようかな？

でも今更ねえ。第一クソ真面目に生きても人生って面白くないじゃん。

折角の青春なんだぜ、テキトーに馬鹿な事をやっていたほうがいいに決まってるぜ！

……っと、というのが藤島圭介青春謳歌理論の一説である

「もきゅ!？」

初芝高校の廊下にて、事件は一瞬して不意に発生した

何者かに体当たりされた暮葉。

小柄な彼女はアッサリと吹っ飛ばされてしまい、何故か俺のほうへと倒れ込んできた。

あまりにいきなり過ぎる事態      というか、このまま避けたら暮葉

が転んで怪我をしてしまう。

「　　っ！」

「……っ！」

なんとか暮葉を抱きしめ、暮葉が転んで怪我をするという最悪の事態だけは回避した。

回避はしたんだが……しまった、抱きしめたのは失敗だったかもしれない。

「わ、悪い　　って、エエッ!？」

「す、すごい……っ！」

「え、なになに！　こんな所で？」

「うわっ、リア充マジで爆発しろよ……っ！」

なんてこつたい。

暮葉に当たって来たヤツも、そこらへんで立ち話をしていた1年の連中も。

とにかく、俺達の周りにいた殆どの人達が野次馬と化してしまった。その中で暮葉を抱く俺……なにこれ、すっごく気まずい……。

「す、すみませんけーすけ様！」

「え、いや……」

ていうか、俺も早く暮葉を離せよ。

なんだよ俺は、なんでまんざらでもないとか思ってるんだよ……！  
でも、正直に言つと……なんだろうかこの安心感は？  
ドキドキするのと同時に安心できる、なんだか意味不明だぞ？

「あ、あの……けーすけ様っ？」

「えっ？ ご、ゴメン！」

暮葉に名前を呼ばれ、俺は咄嗟に暮葉から離れてしまった。

……というか、最初から離ればよかつたんじゃないか。

そしたら何かの事故だと思われたかもしれないのに。

「なんだか初々しいわね、もしかして付き合ってから日浅いのかな  
？」

「ご、こら明美！ そういう事言わないの！」

……周りもみんな、俺達の事をバカップルだつて誤解してしまつた  
じゃないか。

まあ、俺の事を知っている人はこの中でも少数だ。

1年内では噂になるかもしれないが、2年3年に伝わる事は多分な  
いだろう。

それにしても、さっきの暮葉……小柄なのに柔らかくて、とても甘  
い匂いがして……。

なんつーか、女の子って感じだった……。

やっぱり、あの暮葉も一人の女の子

「……けーすけ様？ 完全に上の空でしたけど、どこか具合でも……

……？」



「…………えっ？ お、俺はいつも通り健康でございますよ！」

「そ、そうなのですか…………っ」

これでも、今まで風邪で休んだ事がないんだ。

身体だつて丈夫だしな。俺の身体は外からの攻撃にも中からの攻撃にも強いのだ。

だから、風邪のウイルスごときに負けるわけが　　コラそこ、馬鹿  
とか言つな！

「……………」

「……………」

暮葉は頬を赤くし、少し俯きながら視線だけを俺から逸らしていた。  
俺達を包み込む沈黙。ちくしょう…………話しかけづらい。

それに心拍数がヤバい、ドキがムネムネでござるよ。

「……………」

相変わらず同じように黙りこむ暮葉…………。

なあ、暮葉って…………こんな可愛い子だつたっけか。

俺の知っている暮葉と何かが違う。

俺の知っている暮葉はもっと元気で、敬語なのに無邪気で子供っぽ  
くて…………。

とにかく、実年齢を言われてもピンと来ないようなヤツだったはず。  
それなのに、今の暮葉は少し大人っぽく見える

「あ、あの…！」

「お、おうー！」

さっきまで視線を逸らしていた暮葉が、今度は俺を見上げてきた。おそらく140cm代の暮葉。普通に立っけていても俺より顔は下である。

そんな暮葉が　可愛らしく赤面し、さらに上目遣いで俺の事を真っ直ぐ見ている。

「け、けーすけ様……っ、その……あの……っ」

えっ、えっ、なに、どうしたんだよ暮葉のやつ？

も、もしかして……暮葉からも告白されるパターン！？

もしそれがホントだとしたら……青山さんに返事すらしていないのに、なんちゅータイミングだ！

で、でも……まだ告白だって決まったわけじゃ

「あー！　いたいたいたーっ！」

……えっ？

この超お元気そうな声は……まさか。

「お兄ちゃん！　クーにゃん！」

そして、聞きなれた心を癒すやわらかなボイス。

振り向くと、そこには二人の女の子が仲良く並んでいた。

だが、必死そうに息を切らしている。どうしたんだろう？

「も、もきゅ？　葵さんにあかりさん！？」

「二人で血相変えて、一体どうしたんだよ？」

「呑気な事言ってる場合じゃないんだよ！」

やたらと必死な葵が俺に近付き、ぐいぐいとワイシャツを引っ張りながら叫びかけてくる。

この時、ようやく俺は確信できた。

二人が血相を変えているのは冗談ではなく、本当に何かがあったせいだと

「お、落ちつけて！ まずは事情を説明しろよ？」

「千早が……千早が急に転校するらしい！ とにかく早くこっちに来てくれよな！」

……………えっ？

あかりが放った信じられないその言葉。

俺も暮葉も叫ぶ事さえできず、絶句してただ立ち尽くすだけだった。というか、一瞬脳内まで真っ白になってしまった。

俺にとってそれほど衝撃的な言葉だったからだ……………。

青山さんが……………転校だと？

## 第77話 / なんだ、このギャルゲー的展開は！？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

黒木「おい藤島、テメエぜってえーリア充だよな？」

圭介「はあ、なんでだよ？」

黒木「テメエいつも女の子と一緒にいるじゃん！」

圭介「あのなあ……暮葉とか伊吹とか、友達であって恋人ではないんだぞ？」

黒木「うるせえ！ 女の子と会話できるヤツはみんなリア充なんだ！」

圭介「なんじゃそりゃ理不尽すぎだろ！？」

黒木「テメエ彼女欲しいとか言ってたな？ ぜってえーすぐ作れると思うんだけど？」

圭介「そりゃねえだろ。イケメンでもないし金も持ってないし、モテないし……」

黒木「ざけんなよテメエ！ 何がモテねえだよこのクソ野郎！ 口クに女子と会話したことねえ俺に謝れ！」

圭介がリア充かどうか、多分それは見る人それぞれ！

どうもです！

今回は以前も後書きトークコーナーで予告しました……。

kuxu様執筆『Freedom / Story』とのコラボストーリーです！

キャラ崩壊(特にFreedom / Storyのほう)があるかもしれないません。

kuxu様ごめんなさい！そしてコラボ提案&許可ありがとうございました！

なお、今回のコラボは両作品の本編とは殆ど関係ありません。

それではいつもと違う、『魔法少女に会っちゃった場合』をどうぞ！

「圭介！ 今度科学都市って所に行こうぜ！」

ある日の昼休み、俺は野郎どもと飯を食っていたのだが……。  
二次元マスター長宗我部大吾くんが、突然科学都市なんていうわけのわからない名前を出し、そこに行こうと誘ってきやがったのである。

第一科学都市ってなんだよ、能力者が沢山いる学園都市って街なら電 文庫のラノベであっただけ。

「科学都市って……いったい何処にあるんだよ？」

「多分東京都？」

「知らねえのかよっ！ つーか、なんだってそんな所に行きたくなつたんだ？」

「いやあ。そこにある私立星道高校に<sup>ディスター</sup>団殺者つてのがあらしいけど、なんと警察の学生バージョン。そう、武偵だ。武偵がいるらしいんだ」

厨二臭い設定やなあ……というか大吾さんよ。

「どこの緋弾のア アだよ！ ちなみに俺は白雪押しな」

「なっ！？ ば、馬鹿か圭介。やっぱア アだろ！？ ツンデレにくぎゅだぜっ？」

「惹かれる所がそこかよ！ お前はアレか、釘 病患者か！」

「yes！」

……大吾、そりゃ悪かったな。

釘 病患者なら確かにア アは素晴らしいキャラだろうさ。  
ちなみに、俺は竹 病だ……アズにゃん。

……てか、俺達真昼間からなんちゅー会話してるんだろつ。

こんな事だからいつまで経ってもリア充になれないんだよなあ……

はあ、彼女が欲しい。

そんな調子で、俺は今日も一日をテキトーにぐーだらと過ごしていた。

そして放課後。

今日は部活もないので暮葉と二人での下校だ。

「け、けーすけ様。歩きながらPNPは危険なですよ？」

「大丈夫だ、問題ない！」

とりあえず、誘導とかは暮葉に任せて俺はPNP。

折角PNP版ToHeart2買ったんだ。存分に楽しまないと損  
じゃないカ。

つと、いうわけで今日は小 愛佳ちゃんを攻略する事に全力を注ぐ  
ぜ。

いやあ、しかし俺はPCのエロゲ版は買ったけど、エロのないP  
NP版も案外いいものだな。



「もきゅ！ け、けーすけ様！ 前っ！ 前っ！」

「よっと」

俺は暮葉の慌てっぷりを頼りに、なんとか前方から迫ってきたママチャリを回避してみせた。

フフフ……案外歩きながらギャルゲーと言つのも悪くないな。

暮葉のサポートさえあれば、ごく普通に歩けるじゃないか。

「けーすけ様あ！ このままじゃいつかオタメガさんになっちゃうのですよ!？」

「お前、俺の部屋にあつた漫画勝手に読んだろ？」

「ち、違つのです！ 拙者は葵さんから借りて読んだのです！」

「そ、そうか……」

葵のヤツも神 み読んでたのかよ！

知らなかったぜ……というか、最近葵の部屋に一步も足を踏み入れてないな。

まあ、この歳になつて妹の部屋に入る兄もどうかと思うが。

その割には葵は部屋に入ってくるし、今度仕返しのつもりで部屋に入つてやるのかな？

……と、考え事をしていたその時

「けけけけっ、けーすけ様、後ろ！」

どうしたんだ暮葉のヤツ。志村後ろみたいなのりで俺の事を呼んで

……。

っと思った、次の瞬間

「ぎゃあああああああああああああああああああああ  
あっ！」

激しい痛みを感じた。

さらにドン！という轟音が響き、口や鼻からも大量に流血していた。  
……そういえば俺、どうして眩しき青空をフライしているのだろうか。

とりあえず頑張って眼下に広がる地上を見てみると、さっき俺がいた所には大型トラックが不自然に停車しており、何か慌てた様子で運転手さんが駆け下りていた。

地上と今の俺の状況から考えるに……ああそうか、俺はトラックに轢かれちゃったんだ……轢かれた？

「呑気な事考えてる場合じゃねーじゃん！」

ど、どうしよう。今回はいつも以上にド派手にぶっ飛んでいる。

明らかに最後にトラックに撥ねられた、暮葉と出会った日とは飛距離が比べ物にならないぞ？

ていうかどうしよう。トラックに撥ねられたという事は……。

「お、俺のPNPとToHea t2がああああああああっ！」

相変わらず、激痛を感じながら空を飛ぶ中、俺は自分の身の心配よりもゲームの心配をしていた。

些細な事で壊れてしまうPNP3000……多分、というか確実に壊れただろう。

しかもToHea t2と一緒に散ったぜ……うつ、両方とも高かったのに！  
その二つが無事である可能性はほぼ皆無。仕方ない、自分の身の心配でもしよう。

ところで、俺はこの後どうなっちまうんだろうか？  
相変わらず落下するどころか、さらに空高くへ上昇している気がする。

その証拠に地上が段々離れて行く。気温も低下していく。そして……さ、酸素が薄くなってきた！

数分後。

あれ、なんだか落下している気がするぞ。

そうか……いよいよ隕石の如く、大地と激しく接吻を交わす時が来たようだな。

いやあ、何分も飛んでいたら地面が久々に感じるよ。

久々の地面ってどんな感じなのかなあ。まあ言うまでもないだろうが……。

きつと、久しぶりの地面は                   ！

「じぶうるあつー!？」

おおゆうしゃよ、しんでしまつとはなさけない！

……という事はなかったが、ちくしょう……動けないくらい痛い。

そりゃあまあ、確かに日航123便もビックリな速度で大地に衝突したけどな。

おかげでアスファルトにクレーターが出来てしまったぞ。

「あ、あきにい……空から人が……っ！」

「僕にもそう見えました……」

なんか今、男女の声が上から聞こえたような気がするぞ。

ああそうか、クレーターになっちゃったけど一応ここ、道路のど真ん中なんだよな。

もしかして、こんな所で倒れている俺って邪魔なんじゃないか？

……邪魔以外の何者でもないよな。とりあえず、さっさと立ち上がるとしようか。

「ちつくしょう痛え〜っ」

身体も痛けりゃ損失も痛い。

…… P N P が、 T O H e a t 2 が、俺の小 愛佳ちゃんが……っ！

「あきにい、どうする？」

「一応倒れてましたし、声をかけてみますか」

俺は後頭部を押さえながら、さつきから二人でコソコソ話をしている男女を見る。

女の子のほうは小柄だ。金髪で小柄で……おお、峰・理子・リュン4世じゃん！

多分別人だろうし、よくよく見ると似ていないがパツと見りこんじゃないか！

り りんと違う所は瞳の色と、胸のサイズだろうか。

服の上からの推測にすぎないが、彼女の胸はもしかすると暮葉並に

小さいかもしれない……！

男の方は白髪で、髪の毛の長さは大体肩に後ろ髪が当たるくらい。瞳は紅く染まっており、オマケに細身で……ん、こんな男をどっかで見たような……？

“おもしれえなオマエ……上等じゃねえか。愉快に素敵にやってみやがれよ！”

……っ！

こ、こいつ……まさかあの時のっ！

男の姿を見た瞬間、思わず立ち上がり拳もしっかりと握った。そして、力強く目の前のアイツを睨みつけ

「てめえ……早川悠っ！」

「……？ あきにいいこの人怖い！ しかもなに言ってるかわからないよ……」

「とりあえず……あの、僕は早川悠じゃなくて優輝晃ゆつきあきいですよ？」

「……えっ？ べ、別人！？」

ウソや！

だって……肌白で細身で白髪で一方行みたいで、そんなヤツ早川以外にいるのかよ！

……でも確かに、目の前の男は早川と違い、なんだか優しそうな雰囲気である。

目付きだって早川みたいに悪くないし、狂気じみた笑みも浮かべて

いない。

やっぱり別人……じゃあ俺、この人に滅茶苦茶失礼な事をしたんじや？

「誰かと誤解されたようですけど、僕は君の探している人とは違うと思います」

「そつだよ！ あきにはあきにいだよ、早川悠なんて知らないから！」

や、やべえ。ホントに別人みたいじゃないか！

それじゃあ、やっぱり俺は滅茶苦茶失礼な事を……。とにかくここを乗り越える為にやることはただ一つ！

「すみませんでしたあーっ！」

俺の勘違いだとわかった瞬間、俺はジャンピング土下座を実践してみせた。

謝罪、こういう場合何よりも重要な事であろう。とにかく謝れ、ここは頭を下げておくんだ。

「……どうする、あきにい？」

「……じゃなんですし、場所でも変えましょうか？」

……え？

優輝さん、もしや俺とお話するおつもりで……？

……まあ丁度いい、この二人にここがどこかを聞いてみようか。正直言うと、俺……ここが何処だかさッパリわからないっす

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

早川「なんだア? このオレを写したような三下はア?」

晃「いきなりなんですか……というか、いよいよコラボが始まりましたね」

暮葉「序盤は殆どそちらのキャラクターさん登場しませんでしたけどね!」

真「次回は私もあきにいも、他のみんなも登場するよ!」

晃「また地味言われないように頑張らないと……っ」

圭介「俺のPNPが……ToHea t2がつ!」

kuxuさん。ありがとうございました!

「はい、と……東京だと!？」

「はい、ここは東京の下町です」

う、ウソだ……トラックに轢かれただけで東京まで来ちゃうとか。そんなの二次元にしかないと思っていたのに、あんまりだあ!

……俺こと、藤島圭介はあの後二人に連れられ、“自由荘”とか言う場所へ来てしまった。

他人の家に上がるなんて久しぶりだけど、よく掃除でもしてんのかこの部屋は綺麗だなあ。

まあ、そんな事はどうでもいいんだ。それより俺を襲う現実があまりにも厳しすぎるぞ？

「こ、古宇坂って街は知らないっすよねえ？」

「こつさか？ あきにい、それって隣の県だよな？」

「確かにそうですね。ですが、一応東京圏内だったと思いますよ」

古宇坂の人口はたったの13万だ。

古宇坂港とか工業地帯がなかったら東京圏内だって実感沸かないよなあ。

でも、晃ってヤツ曰く曰く一応東京圏内であるらしい。

は、初耳や。地元なのに知らなかった……っ!

……どうでもいいけど、なんだか晃って名前に抵抗があるぜ……間違いなく永渕のせいだな。



「はあ……まあ、古宇坂まで帰るくらいの交通費なら」

とりあえず俺は財布を取ろうと、鞆を探してみたのだが……。あ、あれ。どうしてでしょうか……鞆がないぞ！？

「あの、どうかしましたか？」

「……鞆、古宇坂だわ」

なんてこつたい。

トラックに轢かれた時、きつとわが身から離れてしまったのだろう。でも、財布も勉強道具も何もかもが鞆の中だし……それを古宇坂に置いてきてしまった。

運が良ければ暮葉が回収しているかもしれないが、運が悪けりゃ今頃貧乏人の手に渡って現金に……。

「ふ……不幸だっ」

「お、落ち込んだじゃったよ？」

「元気出してくださいよ……必ず古宇坂に帰れますから」

「一銭も持っていないのにどうやって帰れと!？」

無理でしょ！

いくら古宇坂が東京圏内だとしても、一応他県だし……。歩いて帰ったら何時間……いや、何日かかると思ってんじゃ! どうやって帰れば……あ、そうだ。

俺ってトラックに撥ねられてここまで来たんだよな。

だったら……痛いのを我慢してもう一度轢かれれば　もしかしたら古宇坂に帰れるかも！

「すごい、奇妙な笑いだね」

「……あ、あの。藤島さん？　どうしたのですか？」

「思いついたんだ。古宇坂に帰る方法をな！」

「えっ？」

「悪いなお二人さん！　お世話になった、じゃあ機会があったらまたいつかなーっ！」

俺はそう叫びながら、飛び出すように“自由荘”を後にした。  
目指すは　トラックが飛ばして走っている首都高か幹線道路！  
ふふふ、これで俺は古宇坂に帰れる　　！

「あきにい、あの人やっぱり変だよ？」

「ぼ、僕も……あのノリにはついていけないです」

やがて数十分後、どういいうわけか俺はとある学校の前に来てしまったが……。

「ま、迷った……」

“東の丘学園”という高校の前で俺は絶望していた。

ついノリで優輝家を飛び出しちゃったけど、完璧に道に迷っちゃったね。

はははっ、すっかり忘れていたよ。ここは東京で俺の地元じゃないって事にな。

困った、首都高の【し】の字も幹線道路の【か】の字もねえ……。

「ねえ、あの制服他校じゃない？」

「ホントだ、どこ校だろ？」

「もしかして……東の丘に殴り込みかけるつもりか!？」

「いや、流石にないでしょ……」

なんだ、ここらへんの連中は他校の生徒が珍しいのだろうか。なんだか俺を囲むように、東の丘学園がぞろぞろと現れ始めた。ちよ、やばいんじゃないか。このままだと抜け道を塞がれてしまう。ていつか……どうしてそこまで他校の生徒が珍しいんだよ!

「静音さん!」

「会長! 例の怪しいヤツはあの人です!」

「あら、確かに他校の制服ですね」

げっ……誰だよ生徒会長呼びやった奴。

面倒くさい事になるフラグが立つちまったような気がするぞ。

ま、まあ……ここはアレだ。さっさとこの学校の前から消えたほうがいいだろう。

というわけで俺は学校に背を向け、さっさと立ち去ろうとした

「その貴方、ちょっと待ってください」

「……っ!？」

ヤバスヤバス!

呼び止められてしもうたぞ、しかも銀髪の美人じゃなっすか。  
いいなあこの生徒会長は可愛くて。

初芝の生徒会長は戸愚呂みたいな感じで、とにかくゴツイ野郎だぜ?  
美少女が生徒会長なんてこれなんてエロゲー?

……て、そんなどうでもいい事を考えている場合じゃないだろ。  
考える藤島圭介!このピンチをどう乗り越えればいいんだ……っ!

「あの、先程から校門でなにをされているのでしょうか?」

「……えっ? あ、いや……もしかして俺、滅茶苦茶怪しい?」

「はい、凄く怪しいですよ?」

「すみません……なんつーか、道に迷っちゃったもんで……」

「そつえば見かけない制服ですね。ひょっとしてこの近隣の学校の生徒ではないのですか?」

「まあ、そんな感じっす……」

言えない。トラックにぶっ飛ばされて古宇坂から遙々飛んできました  
たなんて……。

そんな超ありえない事を、こんな清楚なお嬢様には絶対に言えない!

とりあえず万が一聞かれた場合、東京都内のどっかから来たって事で誤魔化しておこう。

「……ふふっ、わかります。貴方は今物凄くお困りのようですね？」

「ま、まあ有り金も0で正直……」

せめて古宇坂まで帰るくらいの交通費が欲しい。  
でも、そんなものが簡単に手に入る程、この現実リアルは甘くないのである。

全く、これだから現実リアルは大変だ。

……と、こんな調子で現実リアルの厳しさを感じていた

「か、かいちよーっ！ 大変だよ！」

「あ、あら福本さん？ どうかしたのですか？」

「あ、あっちのほうでアツキーを探して暴れている人達がつ！」

「……もしかして、また反逆者レジスタンスでしょうか……？」

な、なんだ。なんだかちよっとなヤバい空気になってきた気がするぞ。

「早く早く！」

「わかりました。それでは私、これにて失礼します」

「えっ？ あ、ちよっとな！」

あの可愛らしい生徒会長の女の子は、元気な女の子に手を引っ張ら

れる形で去って行った。

どうしよう、全く状況がわからない。

とりあえず何か問題が発生したのはわかったけど……。

「うわっ！ な、なんだデメエ！？」

「お前ら大人しく科学都市に引き返せ！」

「デメエ柊翔太　ぐあああっ！」

……なにこの声、すげえ気になるんだが……？

い、行ってみるか……とりあえず事件ってんなら俺も行くっ。  
明智だったら絶対に介入しているだろうしな。

そう決心した俺は大地を蹴り上げた。

ここの生徒の注目を浴びている事さえ気にせず、何も考えずにとにかく学校内へと侵入する。

えっと、次はどっちに進もう。とりあえず右に曲がるっ。

「きゃっ！」

「うおっ！？」

しかし、丁度曲がり角で俺は一人の少女と遭遇してしまった。

黒髪のショートカットでオマケに小柄で……うむ、この子も中々の美少女。

やっぱり東京の女の子って可愛い子が多いですなあ！

……ってそんな事考えている場合じゃないだろ、俺。

ぶつかりそうになってしまったんだ。相手はおどおどしているし、謝っておかないと……っ！

「じゅめんっ!」

「え……? い、いえっ! 私のほうこそ不注意で……それより、ここは危険らしいので」

危険?

そういえば、さっきの生徒会長や元気な子も何か慌ただしく動いていた。

あと、男達の悲鳴も聞こえたし……畜生、この学校で何が起こってるってんだ。

この子が言う危険……まあ危険なのかもしれない。さっきの悲鳴もあるし。

やっぱり行かないほうがいいんだろうか?

「ぐああああっ!」

「チツ、なんちゅー数だ!」

「翔ちゃん! アキ君はもう少しです!」

「くっ……早く来てくれよ、親友!」

……そ、そうだよな。なんだか危なげなアロマが漂っている。今回は仲間が関わっているわけではないんだ。

わ、態々こんな危険な事に首を突っ込む必要はない……よね?

それに偶然出会ったこの大人しそうな女の子……危険地帯にこの子を一人にするのもアレだよな。

……仕方ねえ、戦闘はまあ誰が戦っているかは分からないが、今戦っている人に任せて。

俺はこの子と一緒に学校の外まで行くことにしよう。

「あのさ、君の名前は？」

「え？ ……ふ、藤森渚ふじまさるなほです」

「よし藤森さん、ここは危険なんだよね？」

「は、はい。怖そうな人達が暴れてて……」

やっぱりいまいち状況がわからない。あまりにも超展開すぎて話についていけない。

けど……小刻みに震えるこの子を見て確信した。

詳しい事はよくわかんねえけど、それでも事件は確かに起こっている

「わかった、とりあえず一緒に校外まで逃げようぜ？」

「えっ？ で、でも……っ」

「緊急事態なんだろう？ だったら一人より二人のほうが安全なはずだよ」

「は、はいっ、わかりました……ありがとうございますっ」

藤森さんは少しだけだが、表情を穏やかにしてくれた。

よかったあ。やっぱり女の子に暗い顔は似合わないよな。

「あの……お名前は？」



「ん、そういえば自己紹介がまだだったな。俺は藤島圭介だよ」

「藤島……よ、よろしくお願いします……藤島さん！」

「おう、そんなじゃあさつさと逃げようぜ？」

いよいよ逃走開始だ。

さて、さつさとこんな所から逃げて、首都高か幹線道路を探してトラックに轢いてもらおう。

そして 俺は古宇坂に帰るんだ！  
だ。が。

「……動くな」

振り向くと、俺達の進路を遮るように

茶髪の男が立っていた。

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ぶつちやけこれ、『Freedom/Story』読んでない人にはわかりにくいんじゃないか？」

晃「確かにそうですね、ちよつとは考えて書くべきだったと思います」

圭介「全く、作者はホントに馬鹿だなあ」

晃「まあまあ、折角なのですから文句はなしにしましょう」

圭介「それにしても、最後に出てきた敵キャラ……早くも浜面臭がするんだが」

大吾「はー づらあ」

Freedom/Story本編・<http://ncode.syosetu.com/n1960s/>

背筋が凍る。

俺達の行く手を阻むように立っている人影が一つ。

茶髪で黒木と似たような体格で、誰かと戦ったような跡があり鼻血を流していた。

「動くなよテメエら……テメエらは今から俺の人質だ。団殺者をぶつ倒すまでは……テメエらは俺の支配下だ」

団殺者という言葉に、俺は眉をひそめる。

確か、今日の昼休みに大吾がそんな事を言っていた気がする。

大吾がテキトーに考えた厨二設定だと思っていただけ、どうやら本当に存在するヤツらしいな。

目の前の男の表情もやたらと真剣である。

ああもう……事情がサツパリわからねえよ。

「<sup>ディスター</sup>団殺者だと？」

「ああ、テメエらは事情を知らねえんだな。まあ一般人に説明したって何の意味もねえけどよ」

「何の事かサツパリだ。理由もわからねえで人質にされるなんて納得できねえ。俺達にもわかるようにちゃんと事情を説明しろ」

せめて事情が知りたい。

コイツが<sup>ディスター</sup>団殺者と何の関係があるのか。

なんだってこの学校に殴りこんできたのか。

「俺は科学都市の反逆者<sup>レジスタンス</sup>って組織のモンだけだよ、ここに団殺者<sup>ディスター</sup>がいると聞いてなあ、ちっと襲わせてもらったんだよ」

科学都市……これも大吾が今日言っていたな。

どついう街か詳しい事は知らねえ。某学園都市ラノベに出てくるような街かもわからねえ。

科学都市、団殺者<sup>ディスター</sup>、反逆者<sup>レジスタンス</sup>……ああもう意味がわからん！

「とりあえずでめえ……よくわかんねえけど、くだらねえ事で人様に迷惑かけてんじゃねえよ！」

「迷惑？ ハハッ！ 迷惑してんのはこつちなんだよ！ 団殺者<sup>ディスター</sup>の存在が俺達にとっては超迷惑なんだよおっ！」

相手の男は、今にも襲いかかってきそうな勢いで叫んだ。

本能的にまずいと思った俺は拳を構え、獲物を狙うベヒのように力強く男を直視する。

「待ってください」

声が聞こえた、俺の背後からである。

妙に落ちついた声で優しそうではあるが、そこに激しい怒りが籠められているような気もした。

前方の男に警戒しつつ、まだ襲ってこないと判断した所で俺も後ろを確認すると……。

「<sup>ディスター</sup>団殺者です！ おとなしく降伏しなさい！」

「あ、晃……さん!？」

「て、てめえが……団殺者!?」

ディスター

白く、細くて壊れそうで、でも正義感に満ちていて……。そんな男、優輝晃という人物が真剣な表情で立っていた。その後ろに女の子が数人いるのが気になるけどね……。

「あきにいい!」

「アツキー頑張つて!」

「アキ君の前にいるあの人……他校の生徒っぽいけど誰なの?」

さっきの妹キャラに赤髪ツインテール、水色のロングの美少女。き、奇抜や……まあ俺の周りにも奇抜な色の人はいるけどさ。それより昇つて随分信頼されてんだな。

ハハッ、初芝での俺とはまるで違うもんだな……。

「さて、どうしますか? 君達の得意のロボットは翔太達が撃破したのでもう一台もないですよ」

「ふ、ふざけんな! そんなちつせえ事で降伏なんざしねえよ!」

「出来れば実力行使はしたくないのですが……」

「う、うるせえっ! こうなったら……テメエらみんな殴り殺してやる!」

言いながら、相手の男は服の中から何かを取り出す。

おそらくアレは伸縮式の警棒、要するに特殊警棒というヤツである

う。

それを右手に持った男は一気にこちらへ駆けてくる。どうする、晃はさっきまでカッコよかったけどさ……細身だし、なんだか喧嘩とかは弱そうだぞ？

かといって女の子に戦わせるわけにはいかない。

じゃあ逃げる……無理だ。俺のすぐ後ろで藤森さんが怯えている。

この状況じゃあアイツから逃げる事もできねえ。

戦うしか選択肢は残されていねえけど、戦うにしたって体格的に晃じゃ勝てるかわからねえ。

だったら仕方ねえ……俺が戦ってやる！

「みんな下がってる！」

「え？ あ、貴方は藤島さん！？」

晃がそう叫んだ。さっきちょっと会っただけだったけど、俺の名前を覚えていてくれたんだな。

さて、この危機から脱する為にも頑張って戦わねえとな。

「ハアッ！」

誰よりも先頭に立って男を迎え撃とうとする俺。

男のほうも、最初のターゲットを俺に変更したようである。

俺へと一直線に駆け寄ってくる……クソッ、アイツ意外に動きが早い！

俺が身構えた頃には既に、男は俺の目前に迫っていた。

それどころかビュン！という警棒が風を切る音が響き渡っていた。

既に警棒はテニスラケットのように振られていたのである。

「ッー」

恐らくこめかみを狙う予定だった一撃。  
そこを打たれると流石にマズいし、俺は咄嗟に左腕に左腕を上げた。  
久々に感じた激痛……まあ俺の身体の事だ、骨にヒビが入るとかそ  
んな事はないだろう。

「うっ、はあ！」

しかし、少しだけ安心していた隙に　男は膝で鳩尾を蹴りあげた。  
鈍い痛みと、呼吸を難しいものにするその一撃。  
体質上、身体は壊れなくてもその痛みだけは感じる俺は、攻撃の痛  
みに思わず顔を歪ませた。  
さらに追撃するように、警棒を左拳を合わせた一撃が俺の頭部を狙  
ってきた。

「くそっ！」

左へ跳躍するように攻撃は避けた。  
だが、跳躍した勢いでアスファルトに全身を強く打ちつけてしまっ  
た。  
硬いアスファルトは、ごろごろと車輪のように転がるだけでも痛み  
を感じるものだ。

……でも、俺の場合その痛みはすぐに消える。  
さっきまでは滅茶苦茶痛かったけど　もう痛くもなんともねえ！

「オラアッ！」

「が、はあっ！」

だが、立ち上がった瞬間。  
特殊警棒が俺の横顔に直撃してしまった。  
顔面どころか脳さえ揺さぶられる一撃に、俺は思わずよろめいてしまった。  
さらにゴン！という嫌な音、どうやら男は俺の顎を思いっきり蹴りあげたらしい。

「ぶ、ごあっ！」

脳を揺さぶる一撃……つか、この野郎随分高い所まで足が上がるな。アップercutを足でやりやがった。  
だが、相手はどうせ素人である。達人格闘家とは違い足と手じゃあ俊敏さが違うハズである。

その僅かな差こそ隙であった。足を元の位置に戻す隙に、俺は素早く体勢を立て直し

「……オオッ！」

「……ッ！」

全力疾走をして相手の腹を目かけ、思いっきりタックルを仕掛けてみせる。

このまま押し倒し、マウントポジションを取って殴りまくる作戦だ。だが俺のタックルは通用せず、ずっと後ろへ下がっただけで男は倒れなかった。

その時俺が抱いていた疑惑は事実だと判明し、確信した……。

「俺を相手にここまでやれるなあ、テメエも……随分慣れてんだな？」



「く、そお……っ」

コイツ 相当喧嘩慣れしてやがる！

そこらの不良が1人なら、ここまで慣れたような行動はできねえ。俺だって昔の事情で残念ながら、少しはこつこつという荒事に慣れているハズである。

だから、ちよつとした不良1人くらいなら余裕なハズだ。

なのに コイツには結構手間取っている。この野郎……鍛えてるし戦い慣れている！

「俺らの敵は<sup>ディスター</sup>団殺者……アイツらは道具使って超能力じみた能力を使うし、銃火器などの武器も豊富だ。こっちはロボットと銃は持っているけど、それ以外には何もねえ……」

「だから……その為に身体を鍛えてるってのか？」

「察しがいいな teme！ その通りだ……俺達は<sup>ディスター</sup>団殺者と戦うために、ある程度身体を鍛えてんだよ！」

言葉と共に、男は特殊警棒を投げつけてきた。

なんとかギリギリで特殊警棒を避けてみせたが

「てえあっ！」

「いっ、ばっ！」

刹那。

射抜くようなボディーブロー、脇腹を貫くような激痛に呼吸が止まる。

それからずっと、男は

「あきにい！ あの人負けそうだよ！」

「アッキー！ あの人を助けてあげて！」

「アキ君、お願いっ！」

「真、美紀、結衣……わかってますよ、そんな事

晃が女の子たちの願いを聞き受け、いよいよ飛び出そうとしたが。

「動くな！ テメエらはコイツを倒してからゆっくりとだ……動いたらコイツをブツ殺すからな！」

「ッ！」

動けば俺を殺す、その言葉で晃の動きは止まってしまった。

女の子たちは震え、俺もその言葉が冗談ではない事を確信した。

「ホアッ！」

「が、はっ！」

またしても膝蹴りが、俺の腹部へ激しく突き刺さる。

一瞬だけ感じるあまりの痛みに、俺は思わず腹を抱えて身体を丸めてしまう。

次の攻撃が来る事も覚悟していたが 攻撃は来ない、男は俺の目上で笑みを浮かべていた。

「テメエがいくら頑張っても無駄なんだよ。一般人が俺達<sup>レジスタンス</sup>反逆者に

刃向かってんじゃねえぞ。さつきも言ったけど俺は団殺者ディスターと戦う為に身体鍛えてんだよ……この船山健太

（ふなやまけんた）をそこらのチンピラと一緒にしてんじゃねえぞ  
！」

ハハツ……そうかよ。そりゃあ悪かったな……確かに俺はアンタをただのヤンキーだと思っていた。

科学都市とか団殺者ディスターとか反逆者レジスタンスとか。

そんな言葉を使いまくる、邪気眼系とDQN系を足した厨二病ヤンキーだと思ってたよ。

だけど違うんだな……そりゃあ素人じゃ太刀打ちできないわけだ。でも、お前は一つ大事な事を知らないな……！

「ナメてんじゃねえぞ……この野郎オ！」

ゆっくりと船山って男の胸倉を掴み、起きあがると……。

俺は少しずつ頭を下げ、一気に力強く自分の額を船山の眉間に叩きつけた。

激しい音が響き渡り、船山は俺のヘッドバットの衝撃で後ろへ下がろうとしたが、胸倉を掴む左手に力を入れて向こうへ吹っ飛ばうとする船山を、無理やり俺の近くまで引き寄せる。

そこへ、俺は船山の鼻っ柱に強く握った拳を叩き込んだ。

「あ！　が、ぐああああっ！」

地面へ叩きつけられた船山は、転がりながら己の顔面を両手で押さえていた。

押さえられているにも関わらず、船山の手や下のアスファルトが血で染まってゆく。

どうやら、今の一撃で鼻血が出てしまったようである。

「ち、くしょお……やってくれたなクソ野郎おっ」

手で鼻を押さえながらもぞもぞと起きあがる。

出血が結構ひどいけど……まあ、多分命に別状はないだろう。  
鬼のような形相で俺を睨み付けれる元気があるしな。

「クソ野郎？ クソ野郎はてめえだろうが。なんでここまでして団殺者イスターつてのを狙ってんだよ！ なんだって、その為に関係ないヤツまで巻き込まれなきゃならねえんだよ！」

「俺達はなあ！ ガキンちよの癖にどこの犯罪者だろうが裁ける、団殺者ディスターの存在が気に入らねえんだよ！ なんでアイツらだけ特別なんだよ！ なんて団殺者ディスターつて学生集団だけが、科学都市にいる警察よりも上にいやがるんだよ！」

ようやくわかったきたぜ……ディスター 団殺者つて組織が。

ようわからんけど、要するに学生がやってる警察なんだろ？

……でも、それだけじゃないか。警察の存在の何が悪いんだよ。  
むしろそういうのが存在する理由って

「ディスター 団殺者つてのが存在する理由は、てめえらみたいな犯罪者が暴れまくってるからじゃねえのかよ？」

「なん……だと？」

「それくらいわかってるよ！ 犯罪がなけりゃあ警察も何もいらねえだろ！ 俺は科学都市とかディスター 団殺者とか、そっちの事情はサツパリわかんねえけど……でもこれだけは言える。てめえらが暴れまくってるから、ロクに平和に暮らせねえような事をやってやがるから、

だからそついう組織が結成されたんじゃねえのか!？」

馬鹿馬鹿しい。そんな常識的な事すらわからねえのか、コイツら反逆者<sup>スタンス</sup>つてのは。

結局船山達反逆者<sup>レジスタンス</sup>つてのは、ただの自己中心的な奴らの集まりじゃねえか。

コイツらが何もしなけりゃ別に不便な事はねえ。

要するに、不信に思っているのは犯罪者だけなんだろ。

「うるさい！ 科学都市は……科学都市は何をするかわからねえ場所じゃねえか！」

「でも、科学都市の中だろうが外だろうが、てめえらがやってる事は犯罪以外の何者でもねえだろ！」

「この野郎……<sup>ディスター</sup>団殺者でもねえのに、科学都市の事情なんてこれっぽちも知らねえ癖に……俺達に説教くれてんじゃねえよ！ クソガキがああああつ！」

船山は右拳を振り上げ、大きく叫びながらこちらへ突っ込んできた。そんなアイツを迎撃すべく、俺も拳を握りしめた。

ちくしよう、最初から最後までホントにわけがわからねえ……。

多分、事情なら<sup>ディスター</sup>団殺者を名乗る晃のほう詳しいんだろつ。

でも、知識のねえ俺でもわかる事 やっぱり相手は犯罪者。

科学都市だろうがその外だろうが関係ねえ。取り締まられるような事をやっているんだ。

「てめえらの科学都市や<sup>ディスター</sup>団殺者に対する不安はくだらねえ……」

言いながら歯を食いしばり、右拳をさらに強く握りしめる。

一方の船山は雄叫びをあげながら、俺に向かって突っ走ってくる。

「一度刑務所かどつかで頭でも冷やしやがれ！ この大馬鹿野郎が  
あ！」

全力を振り絞った放った俺の右ストレート。

船山の右ストレートと俺の右ストレートが、お互いの顔面に同時に  
激突した。

脳さえも揺さぶる衝撃に、お互いバランスを崩した。

だが、倒れたのは船山だけであった。

俺は力強く踏ん張り、絶対に地面に倒れ込む事はなかった

それから数十分後。

複数の警察車両や救急車両、そして警察官や野次馬等が学校のグラ  
ウンドを埋め尽くしていた。

怪我人の大半……というか、ほぼ全員が反逆者のメンバーである。

その他奇跡的に無傷だった反逆者のメンバーも、当然現行犯で逮捕  
であった。

そして、そんな中で俺は

「本当に病院へ行かなくても平気なのですか？」

「晃も心配性だなあ。これでも身体の頑丈さには自信があるんだぜ  
？」

俺も随分殴られたが、今では全く痛みを感じない。

それどころか、どこを怪我したのかさえわからない。

だって痛くないんだもん。ふう……俺の体質って本当に便利である。あれだけ暴れて殴られたつてのに、既に怪我もないし意味も感じないのだ。

「すみません……他校の生徒をこんな事に巻き込んでしまつて。東の丘学園の生徒会長としても、そして一人の人間として深くお詫び

」

「え〜つと、柊さんでしたっけ？ 別に気にしなくていいですよ」

「……え、ですが……っ」

「あんなの大した事ないですから。それに学園側の皆が怪我しなくてよかつたですよ」

一応先輩らしいので、俺は敬語を使ってそう説明した。

まあ確かに、船山なんて光秀や早川に比べりゃあ……全然大したことなかつたし。

事情を知らないからちよつと混乱したけどね。

「藤島さん。藤島さんがいなければ、僕が到着する前に渚ちゃんが拉致されていました。本当にありがとうございます」

「あ……ありがとうございます、藤島さんっ」

「おう、二人もそんなに気にする事ないよ。困っている人を助けるのは当然だろ？」

「ハハッ！ 藤島さんは団殺者向きの人かもしれませぬ」

ディスター

晃が笑顔を浮かべながらそんな事を言ってきた。  
「団殺者ねえ……団殺者かあ……」。

「誘ってくれたのはありがたいけど、面倒くさそうだから止めとくわ」

「そうですね。僕もこれ以上藤島さんを巻き込みたくありません」

「さてと、俺はそろそろ帰ろうかな？」

流石にそろそろ帰らないと、暮葉達だって心配しているハズだ。それに、これ以上何か事件に巻き込まれるわけにもいかないしね。

「藤島さん、また自由荘にでも遊びに来てくださいね」

「あきにいがそういうなら……私も歓迎するよ」

「わたしは一之瀬美紀、まあ……よろしくね」

「羽衣結衣です。その、よろしく」

「おう」

なんだか知らんけど、トラックに轢かれると言っ些細な事故がキツカケで、東京に知り合いが出来てしまったな。しかもこの人達自由荘の面々だけではない。

「私は柊静音、東の丘学園生徒会の会長です。是非学校にも遊びに来てくださいね」



「藤島さん……私も図書館にいますので……来た時には足を運んでみて下さいね……っ」

東の丘学園の人とまで、俺は事故がキツカケで知り合いになってしまった。

まあいいか、知り合いは多いほうが人生楽しいし。

何より、みんなとってもいい人そうだしな。

……今度、東京に来た時にでも遊びに来ようかな。

「……わかった、皆も古宇坂に遊びに来たら、俺も俺の仲間も皆で歓迎するよ」

「それでは、お気をつけてください。藤島さん」

そんな晃の言葉に対し、俺は。

「おう、またな」

さよならは決して言わない。

多分、これが最後ってわけじゃないから。

というか最後にはしないだろう。

そのうち、今度は事故で偶々じゃなくて正式に遊びに来よう。

その時は 暮葉達も連れてこようかな。きっとここにいる人達も喜ぶはずである。

さて、古宇坂で暮葉達が心配しているハズだし、俺もそろそろ帰ろう

……あ、交通費ねえし結局道もわからない。どっやって古宇坂に帰  
る……？

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「どうもー! 今回でコラボは最後、次回からまた本編です!

晃「藤島さん、その前に言う事がありますよね?」

圭介「あ、更新時刻から1時間近く遅くなって申し訳ございません

……ネタを考えるのに時間が (ry」

晃「藤島さん、余計な事は言わなくてもいいと思いますよ?」

圭介「ぐっ……晃のツツコミが的確すぎる……っ!」

晃「そうそう、Freedom / Story のほうでもいつか『魔法少女に会っちゃった場合』とのコラボをやる予定ですので、よろしく願います」

kuxuさん、本当にありがとうございました!

そしてFreedom / Story 本編・<http://ncode.syosetu.com/n1960s/>



## 第78話 突然すぎるぞ？

俺と暮葉は二人に手を引つ張られ、写真部の部室へと連れてこられた。扉を開けると、そこにはいつもと違って真剣な表情の浅間部長がいた。なんか……いつもよりも部室の空気が重たい。

「失礼します……」

「変態兄貴、圭介達を連れてきた」

「うむ、ありがとう二人とも」

空気どころかみんなも暗い。

やっぱり……青山さんが転校するって言うのはネタじゃねえのか？

「あの、部長……」

「藤島君、話は聞いていると思う」

「はい……その、青山さんは……？」

「今朝、青山君の母親が青山君の代わりに退部届を提出してきてね、転校の話はどうやら本当らしい」

「た、退部届って普通本人が提出するんじゃない……。なんだって青山さんの母親が？」

しかも、今日は青山さん本人を見かけていない。  
……なんだこれ、もう色々と滅茶苦茶すぎてワケがわからない。  
青山さん。一体どうしてこんなに急に……？

「もきゅ、部長さん……青山さんはどうして？」

「それが僕にもわからないし、顧問の先生に訊いても何も事情を知らされてないらしいんだ」

「なんでだよ……全然意味がわからねえ」

今日、青山さんに告白の返事をするはずだった。

正直な気持ちを伝えるはずだった……でも、青山さんがいないんじや何の意味もねえ。

それどころか、この先青山さんに会えなくなるかもしれない。  
転校なんて止める事ができないだろう。だけど……せめて事情くらいは知りたい。

青山さんがいきなり転校してしまう理由を

「今日みんなを招集したのはこの事の報告だ。青山君は今度の文化祭の写真撮影係だった、もう一人藤島君がいるが……藤島君、一人でも大丈夫かい？」

「……はい、仕方ないっすよね……任せてください」

青山さんがいないんじや仕方ない。

元々、俺は青山さんを手伝う為に立候補したんだ。

だったら 青山さんが不在の今、俺がしっかり仕事をしなければならぬ。

「けーすけ様……っ」

「あ、あたいたい、手伝うから忙しかったら言ってくれよな！」

「葵も、全力でお兄ちゃんの事サポートするから！」

「……けーすけ様、拙者も暇を見つけて頑張るのです」

「おう、ありがとうみんな……」

手伝ってくれるのは本当にありがたい。嬉しいハズだ……でも、ちつとも喜べない。

青山さん、どうして転校なんかしちゃうんだよ……。

その日の昼休み。

俺は野郎共に伊吹や小坂、そして暮葉を加えて弁当を食べていた。今日はハンバーグとか卵焼きか。はあ……好きなメニューのハズなのに、ちつとも美味しく感じない。

俺の頭の中は未だに、あの子の事でいっぱいだ。

確かに、青山さんに対して恋愛感情があるわけじゃないさ。

でも……だからって転校して悲しくないわけがない。

青山さんも大切な仲間なんだ。だから……出来る事ならいなくなつて欲しくない。

けど、転校するにはそれなりの理由がある。転校を止めるなんて事は難しいだろう。

……でも、せめてその理由くらいは知りたい。

それから、最後に会ってCD返却と告白の返事をしたい。

青山さんに会いたい……このままだと未練たらたらだ。

「圭くん……なんか今日は大人しいね？」

「……………」

「あ、亜紀の話のスルー。圭介……重傷だわ」

「…………え？ あ、わ……悪いっ！」

しまった。小坂をスルーしてしまった。

いくら思い悩んでいるからって、今のは人として最悪すぎる。

「いやいや、いいんだよ！ 圭くんだってお年頃だしねえ？」

「あ、亜紀さんっ！ 今のけーすけ様は…………っ」

「…………あ、ご……ごめん」

暮葉の言葉で気づいたのか、小坂はいきなり謝ってきた。

確かに、「冗談に乗るような気分じゃないけど……何も全く言うなというわけでは。

……やっぱり、落ち込んでいる俺の存在が場の空気を悪くしてるのかな？

「ねえ圭介、なんか悩みでもあるの？」

「いや、大した事じゃねえよ」

「あ、あんたが落ち込むって……大した事だと思うわよ？」



「そ、そうか……心配してくれてありがとうな」

「べ、別に心配してるわけじゃないわよ……っ」

言いながら、伊吹はぷいっとそっぽを向いてしまった。

その時の伊吹は何故か、頬がほんのり赤く染まっていた。

まあ……どう見てもいつものツツパリ伊吹ちゃんだな。

「空気が重すぎて僕ら話しかけ辛え……」

「大吾、シリアス苦手だねえ」

「うつせ！俺はブヒる事が専門だからな！」

「それ、全然威張れる事じゃないような気がしないかい？」

「し、重原にはわかんねーよーだっ！」

野郎共は相変わらずだなあ……はあ、俺も出来ればあれくらいのテンションでいたい。

でも、今の俺には無理だ。青山さんの事で頭がいっぱいで……。

その後。

昼飯を食い終えた俺は一人、廊下をふらついていた。

最初は暮葉も一緒だったのだが、暮葉は別なクラスの友達に呼ばれて途中でログアウト。

暮葉、他のクラスにも友達いたんだなあ。

アイツの交友関係も中々広いものだ。まあ確かに、葵と似たような

もので社交性あるヤツだしな。  
きつと今じゃあ、俺なんかよりもずっと友達の数が多いのだろう。  
それに比べて悩みながら一人でふらついている俺……何やってんだ  
ろうなあ。

仕方ねえ事なのに。もうほぼ確実に会えないのだろうに……。

「あ、藤島」

「……え？」

背後から女の子の音がする。

振り向くと、そこには背が高く、胸まで大きいクールなポニーテールの女の子が立っていた。

「明智……？」

「うん、学校で話すのは久しぶりだな……？」

「そう言えばそうかもしれないな」

昨日電話で沢山話をしたけどな。

まさか、その翌日に明智に声を掛けられるとは思ってもしなかった。  
赤を基調とし、黄金の文字で“風紀委員”と記された腕章をつけて  
いるあたり、今は風紀委員の仕事で見周りか何かをしている所なの  
だろう。

だったら、邪魔をするわけにはいかないよなあ。俺も今は気分がよ  
ろしくないし……。

「なあ藤島……元気がないように見えるが、ど……どうした？」

「え？ そ、そう見えるか？」

「あたりまえだ。いつもの藤島ならエッチな発言をしているハズだぞ」

「……俺、普段そんなにオープンエロだったっけ？」

「す、すまない……冗談を言っていていい時じゃなかったな」

「いや、別にいいけどさ……」

ダメだ。明智と会話をしてるってのに……こんな態度じゃ明智に悪いじゃないか。

青山さんの事が心配だとしても、今はそれを考えている場合じゃない。

俺は今、明智と話をしてるんだろうが……っ！

「藤島、もしかして……青山の転校の話か？」

「えっ？ どうして明智がそれを？」

「一応私の家は青山の家と並ぶ家、故に青山家の情報は普通に入ってくるからな……っ」

「エエッ！？ マジで！？」

初耳や、明智家と青山家が同等……でも、どうしてだ？

明智家って前にも行った事があるが、確かとんでもなくデカイ家だったような気がするぞ。

その明智家と同等らしい青山家……一体、どんな家庭なんだよ？

……待てよ、明智は青山さんが転校するって話を知っている。  
そして明智家には青山家の情報が入っている。  
という事は、青山さんが転校する事情を知っているんじゃないのか？

「……なあ明智」

「……ど、どうした藤島？ そんな急に真剣に？」

「教えてくれないか」

明智家には青山家の情報が入る。

その明智家の一人娘である明智は、青山さんについての事実を知っているかもしれない。

だったら、明智に聞いてみる価値はあるだろう

「な、なにをだよ……？」

「青山さんが転校する理由……いや、出来れば青山家について知っている事を、全部……っ！」

俺は力強く言い放つ。しかも、その勢いで明智の両肩に手を置いていた。

「は、にや、あ……わ、わかった……わかったから……は、離れて欲しいぞっ」

明智は口元をわなわな小刻みに震わせ、何故か顔を耳まで真っ赤にしていた。

目もすっかりと見開いており、恐怖していると言っよりはあがっている感だ。

「だ、大丈夫か明智？ 顔赤いぞ？」

「っ！？ ななな、なんでもないぞ！ 心配するなっ」

「そ、そうか？」

「~~~~~」

いや、どう見ても大丈夫じゃないでしょ。

相変わらず、明智の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

……まあ、時間が経つにつれて次第に収まってきたけど。

もしかして、俺が勢いで肩に触れたのが原因なのかな？

まさか明智って……実は男性恐怖症だったりするのかな！？

アレって確か、触れられたり話したりするだけで震えたり顔が赤くなったりするらしいし。

こ、今度から明智と話す時は気をつけよう。なるべく触れないように、怖がらせないように……っ！

「……そうだっ！ あ、青山の話だったな？」

「お、おう。頼むぜ明智、教えてくれ……っ！」

「わかった。一度しか言わないからよく聞くんぞぞ」

明智にそう言われ、俺はもちろん首を縦に振った。

……いよいよだな。青山さんの……いっばいある不思議の一つが明らかに

## 第78話 突然すぎるぞ？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「さて、今回から本編だな！」

伊吹「圭介……鈍感っ」

圭介「え？ ど、どうした伊吹？」

暮葉「確かに、あそこで男性恐怖症なんておかしいのです」

圭介「く、暮葉までどうしたんだ？」

小坂「圭くんに彼女が出来ない理由、なんとなくわかったかも」

圭介「ちょ！ こ、小坂さん！？ 俺が何をしたって言うの！？」

黒木「こんな鈍感野郎がモテモテなんて……クソムカつく！」

圭介「さっきから皆さん揃って鈍感鈍感って一体なんなんですかあ  
ああ！？」

## 第79話 青山家

青山家……。

この古宇坂市で一番の歴史を持つ名家。

かつてはこのあたり一帯の名主をつとめていたらしく、その上明治以降は華族で最後の当主が子爵であり、現代でも莫大な財産と広い土地を持っているらしい。

なんでも厳格な家庭らしく、明智曰く青山さんが初芝に通っているのも部活をやっているのも、全て青山家の現当主である青山流あおやまながれの特  
別許可があつたかららしい。

つまり、この由緒正しい名家に生まれた青山さんは、所謂箱入り娘というわけである。

確かに大人しくて上品な雰囲気はあつたけど、お嬢様って感じではなかつたよなあ……。人は見かけによらずとはよく言うけど、まさにその通りかもしれない……。

「そ、そんな家が古宇坂にあつたんかい！」

「うん、私も明智家も理由ワケあつてこっちに移ってから知った事だぞ」

「青山さんがお嬢様ねえ……ん、でもなんで？」

「なにがだ？」

「いや、どうして青山さんが転校する事になつたのかなつて」

青山家の事はわかつた。青山さんがお嬢様だつて事もたつた今知つた。

でも、まだ肝心な事を知れていないぞ。

青山さんが転校してしまう理由……俺は何よりもそれが知りたい。  
そして、青山さんが行ってしまう前に　どうしても返事がしたい！

「そんな事……本人に訊かないとわからないと思うぞ？」

「じゃ、じゃあ理由を知るのがって無理じゃねえか……？」

「会わなかったらな……っ」

そう簡単に言うけどさ、旧家のお嬢様となんて早々街中で出会えるとは思えないぞ？

困った……というか絶望的だ。

まだ告白の返事どころか、借りたCDだって返していないっていうのに……。

「……………」

「ふ、藤島……っ、青山に会いたいのか？」

「えっ？」

「そういう顔、していたぞ？」

気付かれちゃったか。まあ隠しようがないくらい落ち込んでいたかな。

ここはもう、無理だとわかっていても正直な事を言おう。

「……………」  
「そりゃあ、会いたいとは思っているよ」



「そうか……」

……でも、無理だ。

そんな事情があるってんなら、青山さんに会おうと思っても会えないだろう。

でも会いたい、せめて残されたやるべき事だけはやっておきたい。

「なあ、藤島……」

黙りこんでいたその時、俺はいきなり明智に声をかけられた。

「なんだよ？」

「……青山に会えるかもしれないぞ？」

「ま、マジで!？」

「う、うん……絶対ではないけど」

その時の明智の言葉で、俺のテンションは思わず上がってしまった。青山さんに会える……そんなありえないと思っていた事を明智は言っただのだ。

まあ、【かもしれない】と言っていたという事は、確実に会えるわけじゃないんだろうけど。

……それでも、僅かでも可能性があるってんなら

「明智、どうやって会えばいいか……教えてくれっ」

「わかった、私が青山家に連絡をつけておく」

「…………えっ？」

「この地域で青山家にタダでお願いできるのは、多分私の家だけだ。青山家だって私と会って条件なら青山の外出を認めるハズだろう」

おお、こんな所で明智が役に立とうとは予想もしていなかった。

やっぱり、明智ってすげえな……。

俺も暮葉曰く、一応アレクサンドル皇太子って皇族の子孫らしいけど、生憎異世界の皇族だからこの世界じゃ何の意味にもならないんだよなあ。

しかも胡散臭いしさ、多分誰も信じたりはしないだろう。

そういう意味で明智家ってすごいよ。明智光秀の子孫だって言うのも事実だしな。

だからこそ 青山家と対等に話をする事ができるんだ。でも……。

「い、いいのかよ？ お前にそこまで迷惑を掛けるわけには……」

「藤島には私を光秀から救ってくれた恩がある。だ、だから……恩返しだと思ってくればいいぞっ」

明智……いつも思っているけど改めて思ったよ。

ホントにいいヤツすぎる !

「ありがとな、明智！」

俺がお礼を言うと、明智は少しだけ頬笑みながら頷いてくれた。

その後、青山さんと会うまでの作戦を話し合い、作戦が決まったのは昼休み終了ギリギリであった。

明智が青山家へ電話し、放課後明智家の近所の青山さん呼び出す。もちろん、青山家には明智と話をすると伝えて……でない就多分青

山家は話を聞こうともしない。  
もし全てが上手くいって明智家の近くにある公園まで青山さんがきたら、次は俺の出番である。  
青山さんが転校する理由。やり残したこと……すべてをそこでやるんだ。

「それじゃあ今日はこれにて終了、気をつけて帰れよ」

ずっと考え事をしていたら、いつの間にか乙坂が勝手に進めていた帰りのSHRが終わっていた。

しまった……午後の授業なんて殆ど聞いていなかった。

……。後で暮葉か伊吹にノートでも借りよう。でも、今はそんな事よりも……。

「……………んっ？」

ポケットのあたりに振動を感じる。

多分、ケータイにメールが何かが届いたのだろう。

まさかと思ってケータイを開けて見ると、確かにメールが1通来ていた。

そこからさらに受信ボックスを開いてみると……やっぱり明智からのメールだ。

“ 成功したぞ、私の家の近くにある公園で待っていてくれ”

……………やった！

でかしたぞ明智、よく青山さんを選んでくれた！

後は俺が遅れないように、急いでその公園まで行かねえと。

今日は一応部活の活動日であるが、そんな事は今の俺にとっちゃあ

どうでもいい話だ。

それより、青山さんとお話がしたい

「けーすけ様！ そろそろ部活に」

「悪い暮葉！ 一身上の都合により俺は先に帰りますぜっ！」

「もきゅ！？ ちょ、けーすけさまぁ！」

悪いな暮葉、そのうち何か奢るから今は勘弁してください！

……俺はただ只管、明智家の近くにある公園へと駆けていた。

走る事数十分、明智家って結構学校から遠いよな……ようやく公園に到着した。

既に7月、春頃なら夕日が辺りを包んでいるだろう。

でもこの季節は日が長く、未だに青空が眩しい。

そんな太陽の光に照らされた公園にある、一本の大きな樹の下に彼女は立っていた。

「青山さんッ！！」

「っ！？」

俺が大声で彼女の名前を呼ぶと、彼女はビックリした様子で俺のほうを見てきた。

最初から最後まで、ずっと彼女は驚いていた。

大声で呼ばれた事と、そして……自分をここに呼んだ人物とは違う

人物が現れた事に……。

「よかった、本当に来てくれたんだ……っ！」

「えっ……う、うそっ……藤島先輩、どうして……っ？」

青山さんは俺が現れた理由<sup>ワケ</sup>を知らない。

きつと明智が現れると思っていたに違いない、それなのに俺が現れたんだ。

一応、これでも詐欺ではあるから謝っておかないと。

あと、勝手に青山家の事情を知ってしまった事についても……謝らねえと！

「明智から来てほしいって言われたんだろ？」

「えっ？ ど、どうして……っ？」

「全部聞いたよ、明智から」

「ぜ、全部って……わたしの家の事も？」

「……ごめん、どうしても青山さんに会いたかったから」

「先輩……そのっ、わたしも……会いたかったですっ」

まだ全てが終わったわけじゃないからな。

それにしても青山さん、やっぱりいつもよりもテンションが低い。本人も望んでいなかった転校なのだろう。

でも、どうして青山さんがいきなり転校する事になったんだらうか？告白の返事は一番重要だから最後だ。CD返却もこの後すぐにすれ

ばい。

まず最初に転校する理由から聞いてみようか。

「あのさ青山さん、色々話があるんだけど……まず最初に一つ聞いていいかな？」

「な、なんででしょうか……？」

「青山さんってどうして転校する事になったんだ？」

「……………」

俺が問うと、青山さんはどこか悲しげな表情で黙りこんでしまった。まずい、流石に今はストレートすぎたか。

「いや、ちょっと気になったただけだから。話しづらかったらスルーしてくれても……………」

「…………わたし、心配かけてますよね…………？」

「えっ？」

さっきまで黙りこんでいた青山さんが、俺を直視しながら問いかけた。

その視線は、とても強いようでとても弱々しい。

見ているこっちが辛くなってしまう程に、とても…………。

「…………話します、わたしも…………みんなに何も知らせないまま消えた  
くはありません…………っ」

「青山さん……」

こうして俺は、青山さんが転校する理由を聞ける事になった。  
名家青山家のお嬢様。彼女はどんな理由で転校してしまうのだろうか……。

## 第79話 青山家（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「そういえば皆の家って昔何やってたんだ？」

伊吹「私の家はよくわからないわ。刀鍛冶って説があるけど」

小坂「あたしは多分農民かな？」

大吾「僕は名前に武家じゃねえの？」

小坂「長宗我部ねえ……？ あんたが子孫じゃ長宗我部元親に失礼だと思っ、しかもどーせ名ばかりで実は農民でした才チなんだろう？」

大吾「ひでえ！ これだから現実女は嫌いだ！」

重原「俺の家はずっと武道一筋だね」

伊吹「そういえば、圭介の家ってどんな感じなのよ？」

圭介「お、俺の家か……シラネ」

小坂「……ダメじゃん」

伊吹「言いだしっぺの癖に」



圭介「うっせ黙れ！」

（アレクサンドルとかいう異世界人が御先祖様なんて言えるかよ！  
しかも伊吹は事情知ってるだろ！ 嫌がらせかよ！）

## 第80話 / 理由

「わたしの家……多分先輩も知ってると思います……とても厳しくて」

青山家、古宇坂で市で一番の歴史を持つ名家。

そんなお家柄だからこそ、厳しいのは当たり前のことだろう。

でも、それと転校の理由が何の関係があるんだろうか？

特別許可さえ出したらしいのに、なんだって今更転校する必要があるんだよ……。

「だから、最初はわたしが初芝高校に通う事さえ……両親は反対でした。部活動をする事さえ反対でした……」

確かに、初芝はレベルこそ高いものの一番ではない。

増してや男女共学。隣町にはもっとレベルの高い女子校が存在している。

大事な自慢の娘を男がいる共学より女子校に通わせたい。

両親はきつとそんな事を考えていたんだろう。

それなのに俺と中学が一緒だったのは、多分この近隣に女子中がなかったからだろう。

「でも……わたし、どうしても友達と一緒にいたくて、先輩もいて……だから、どうしても初芝に進学したくて……っ」

「お、俺も？」

「は、はい……っ……」

そうか、青山さんは俺に好きと言ってくれた人。

その好きって気持ちは中学の時からあった。

だからなんだろう、初芝にどうしても入りたかったのは。

友達も入る予定だし、そこには青山さんにとつての憧れもいた。

「それで……お兄様と一緒に強く望んだ末、ようやくお父様とお母様の特別許可が下りました……」

「お兄様って……青山さんって兄貴がいるのか？」

「はいっ、今はその……社会人なので中々会えませんが……っ」

「そうなんだ。じゃあ青山さんが今まで初芝に通っていられたのも……」

「はい、お兄様のおかげなんです……っ」

青山さんは瞳を閉じ、何か思わせぶりの表情でそう答えた。

青山さんの兄貴ってどんな人なんだろうな。

とにかく、妹想いのいい兄貴だっけ事はなんとなくわかったよ。

兄貴と一緒に頑張ったからこそ、青山さんは今まで初芝に通っていられた。

友達と一緒に笑っていられた、それなのに……。

「じゃ、じゃあ。折角兄貴と二人で頑張っつて、ようやく許可を貰っつて入学できたのに、なんで今更転校する事になっつちまったんだよ？」

「それが……一週間前、わたしの家の前で喧嘩があつたのです……っ」

「えっ、喧嘩？」

「はい……それがっ、喧嘩をしていたのが初芝高校の生徒とうちの執事で、初芝のほうはどう見ても不良で……」

「初芝の不良って……も、もしかしてっ」

そういえば一週間前、黒木と赤佐が顔面にガーゼを貼って登校してきたような。

まあ、アイツらが怪我して登校してくるのはよくある事だし、そもそもアイツら短気だから、むしろ一ヶ月に一回も喧嘩をしないほうがおかしいくらいだった。

どうせいつもの事だって軽くスルーしていたけど……。アイツら、よりによって青山家の前で喧嘩するなんて……。

「せ、先輩……どうしたのですかっ？」

「え？ ああいや、犯人に超心当たりが……」

「……え？ も、もしかして……先輩？」

「違うよ。クラスメイトに丁度一週間前、怪我して登校してきた二人がいたんだよ。その二人ってよく喧嘩してるって話だからさ」

「あっ、そういえばお母様も……初芝の生徒は二人だったって……」

黒木と赤佐あゝ！

別に皆諦めてるし、白陵の不良と殴り合う分にはもう文句は言わな

いよ。

相手だつて黒木や赤佐と似たようなもんだからさ。でも、なんでよりによって青山家の前で、しかも青山家の執事と殴り合つたんだよ！

もう大体読めたぞ。青山さんが転校してしまふ理由が……！

「要するに、その二人を見て青山さんの母親は初芝は危険と思つたんだな」

「……えっ？」

「そんな危険な所に娘を居させるわけにはいかない。だから安全な学校へ転校させよう」

「……っ！ ど、どうして……っ？ せ、先輩……なんで何も言つていないのに……っ」

「ん、もしかして正解だつた？」

「は、はい……っ、殆どそれで合っています……っ！」

「……」

やっぱりな、そんなこつたるうと思つたよ……。つたく、黒木と赤佐め……あんな所で殴り合いなんかしやがって。

「……わたし、嫌です……転校なんか嫌ですっ」

「転校の話はやっぱり、親が強引に進めている事なのか？」

「はい……っ、折角……折角お兄様と頑張ったのに、努力が水の泡です……っ。それに、先輩達とお別れするなんて絶対に嫌です……っ！」

「……………」

大人しく、物静かでお上品な雰囲気で、それでも元気だった青山さん。

それが……今は両目に涙を浮かべていた。真珠のような雫が頬を伝って流れていた。

本心を強く言い放った後はただ只管、歯を食いしばり、きつく閉じた目から涙を溢れさせ続ける。

そこから感じる彼女の想いの強さ……。転校したくない、仲間と別れたくない。

……でも、現実には逆らえない。こうして俺のような他人に愚痴を言うのが精一杯、自分にはどうする事も出来ない。

そんな……とても弱々しい青山さんを、俺はただ黙って見ている事しかできなかった。

「……………」

「……………」

ちくしょう、俺って本当に男かよ……。

こう言う時、何か言っちゃったり彼女の為に何かをするのが、本当の意味での男じゃないのか。

少なくともエロゲーの主人公なら、今頃ヒロインを慰めているハズだ。

でも……俺にはそれができない。ただ、無言でそばに立っている事

しかできない。

男失格、先輩としても失格だよな……俺。

「……っ！　せ、先輩、後ろっ！」

「えっ？」

泣いていたのにいきなり慌てだした青山さん言われ、俺は後ろを振り向いてみた。

すると　俺の後ろに誰かが立っていた。

黒髪眼鏡でその上イケメン、しかも黒服を着用している若い野郎。すげえな……黒執事のコスプレかよ。ていっつか何者？

なんで俺の後ろに立って

「お嬢様から、離れろ」

「はっ？　　ごはっ！」

な……なん……で？

突然黒服のイケメンは、突き上げるようなボディーブローを俺に放ってきた。

貫くような激痛に俺はたまらず、地べたに膝を付いてしまった。

さらに執事は膝を付き、腹を抱える俺のこめかみに廻し蹴りを打ち込んできた。

頭蓋骨さえ打ち砕くような蹴りを受け、俺の体は数メートル程吹き飛んでしまった。

「ぐあっ！」

……ちつくしよう、受け身は取ったが体中痛え。  
まあ、ボディーブローはこめかみへの一撃の痛みはもう消えたが。  
でもこれ、普通の人なら気絶してるぞ？

「せ、先輩……っ！」

「ちつくしよう……てめえ！ いきなり何するんだよ！」

「ごめんあそばせ、千早さんにちよっかいを掛ける初芝の輩がいた  
ものだから、ついつい追っ払うよう命令しちゃったザマス」

もう一人、新しいヤツが俺達の前に現れた。  
和服の中年の女性だ。

その人は先程俺を攻撃してきた執事の横に立ち、俺をあざ笑うかの  
ような見下してきている。

……なんか、扇子に銜え煙草にあのゴミでも見るような表情、ムカ  
つくババアだ……っ！

「お、お母様……っ」

「え？ お、お母様って……あの人がお母さん!？」

「あらまあ！ 貴方にお母さんなんて呼ばれたくないザマス。やっ  
ぱり初芝は教育程度が低いザマスね」

うるせえ……っ！

ザマス口調のてめえよかずっとマシだろ。

ていうか、いきなり人様ぶっ飛ばしといて、嫌そうな表情しながら  
テキトーに謝るだけでお終いか。

どう見てもあんたらの方がずっと無礼だろ……。



「お母様……どうして？」

「オカシイと思ったザマス。明智の者なら千早さんに会いたければ、向こうから来るハズなのに……心配して千早さんの後を追ってみれば、千早さんを泣かす下衆な平民が……っ！」

「ち、違いますっ！ 泣いたのはわたしが勝手に

」

「わかってるザマス！ この平民のゴキブリの仕業なのは存じてザマス！」

ザマスザマスうるせえ！

しかも、勝手に俺が青山さんを泣かせた事になっているし。

まあ……青山さんに何もできなかった俺にも、責任があると言えばあるけど……。

でも、この人明らかに理不尽すぎるだろう。

「さあ千早さん。明日には転校の手続きが終了し、隣町の有名女子高へ通う事になるザマス。そろそろ家に帰り、英気を養うザマスよ」

「……っ！」

青山さんの手を握る母親。

しかし、青山さんは明らかに嫌そうにしていた。

止めなきや、青山さんは道具じゃねえんだよ！

「ちょっと待ってください！ 娘の話くらい聞いて

」

「岡本」

「はい……君、シャラップだ！」

その時、背中まで突き抜ける衝撃が鳩尾にめり込んだ。  
やべえ……一発が強力だ。

すぐに痛みが消えたとしても、激痛で瞬間的に行動が出来なくなっ  
ちまつ……っ！

「お嬢様に手を出すな、さもなくばこうだ」

瞬間、右アツパー。

ゴソツ！という嫌な音が響いた。

突き上げる強烈な一撃に、さっきの鳩尾パンチで倒れかけていた身  
体が起き上がる。

……気付けば、俺は公園の砂場に倒れ込んでいた。

痛みは消えた。でも……未だに母親と執事の冷たい視線。

そして、俺を心配する青山さんの悲しげな視線が、容赦なく俺に突  
き刺さってくる。

「フツ、ところで千明様。殴ってもよろしかったのでしょいか？」

「大丈夫ザマス。岡本も御存知でしょう、初芝の生徒は暴力沙汰が  
好きザマスよ」

「……そうですね」

ふ……ざけんなあ……っ。

初芝の生徒がみんな不良みたいな事言いやがって……。  
だからって、俺を黙らせる為に暴力振るうかよ……？

これが……青山家つてもんなのかよ……っ！  
同じ金持ちでも明智とは全然違え……なんだよ、この外道な家は……？

「いいことそのこの平民。今後、千早さんにまとわりつくようなら……古宇坂港に沈めるザマスよ」

「先輩……っ」

「行きましよう、千早さん」

「……はいっ」

「あ、青山さん……っ！」

ちくしょう、流石に暴れるわけにはいかないよな……。

でも、青山さんが……このままだと青山さんが！

まだ告白の返事とか、大事な用事が残っているっていうのに。

それだけじゃねえ……このままで青山さんが幸せだって言えるのか？

俺はその後も10分程、別に痛いわけじゃないのに砂場で寝そべっていた……。

## 第80話 / 理由（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

一方藤島「野オオオ原くウウウウウウン！ 宿題出し過ぎなんだよオ！ もつと減らさねエと皆が遊べねエじゃねエか！」

野原「だあくから言ってるじゃねえかよ。テメエら学生は学校の僕なんだよ。学校はさあ、生徒が優秀なら優秀なほどその学校がいい事になるんだと」

一方藤島「だからってエ、この宿題の量はオカシイじゃねエかよオ！」

野原「はあ………うるせえな。このクソガキ！」

一方藤島「ごぶるあつ」

夏休みシーズン、宿題が多くて困っている学生はきつと多いですよ。

………作者も困ってます。

## 第81話 決意

「……………」

公園のブランコにただ一人、寂しく座っている俺はずっと考え事をしていた。

まず第一に、ブランコなんて久々に乗ったなあという事。

小学生の頃は伊吹と一緒に乗ったりしたけど、流石にこの歳になると全く乗らなくなったよなあ。

まあ、この歳になって喜んで乗っているのもどうかと思うけどさ。

……………そういえば、ア ガミで後輩とブランコに乗るシーンあったなあの子、俺の中では結構好きなキャラだったなあ……………。

……………まあ、そんな事はどうでもいいや。

それよりも第二の考え事だ。第二に青山さんの事である。

無理やり母親に引つ張られ、嫌がる青山さんの姿が脳裏に焼き付いてしまった。

「……………なんで、だよ……………」

俺は怒りに任せて拳をぎゅっと握りしめた。

……………クソムカつく、なんなんだよ青山家は……………。

確かに俺は馬鹿だし青山家の人間に及ぶとは思えない。

でも、あのオバハン……………勝手に人様の程度を決めつけやがって。

初芝を馬鹿の吹きだまりみたいに言いやがって。

なにより娘を、青山さんをあんなに乱暴に扱いやがって……………っ！

結局、青山さんを転校させたいのってただの我がままじゃねえか……………。

……………

「……………あ、藤島っ」

声だ、声が聞こえる。

その声に反応して振り向くと、そこには制服姿の明智が立っていた。おそらくは学校帰り、たまたま俺の姿を見かけて駆け付けてきたのだろうか。

「明智か、今から帰る所か？」

「藤島と青山がここにいる予定だったろ。だからちよっと寄り道したんだけど……………あれ、青山は？」

「……………」

「……………その様子だと、青山の両親あたりの妨害を受けたみたいだな」

ははっ、明智さんは全部お見通しってか。

流石というか鋭いヤツだよなあ。

正確には母親と青山家に使える執事だったけど、それでも明智の言葉に間違いはない。

話の途中で俺達は

「……………すげえ、大当たりだよ」

「やっぱり……………すまない、怪我とかはないか？」

「怪我はないけどどうして殴られたって事まで？」

「最近あの三馬鹿が青山家の執事と喧嘩をしてな。それ以降、青山

家は初芝の生徒に対して万が一の場合、実力を行使しても問題ない  
って……」

「な、なんだよそれ。意味わかんねえよ！」

そういえばあの母親も、初芝の生徒は暴力沙汰が好きだとか言っ  
ていたけど。

まさか、そんな事まで思っていたなんて。

ホントに青山家って歴史も長い由緒正しき名家なのかよ？

「私にもわからないぞ。でも……喧嘩の後、青山家はそう言っよう  
になってしまった……っ」

「喧嘩って、そもそもなんで喧嘩になっただんだ？」

初芝が散々言われる原因や、青山さんが転校する理由になった三馬  
鹿と執事の喧嘩。

そもそも、その喧嘩はなんで起こっただらうか。

普通に考えて学生とどこぞの執事が喧嘩するだなんて、ありえない  
に決まっってんじゃねえか。

「それが誰も口を開いてくれなくて、私も全然わからないんだ……  
っ」

「んじゃあ、事情を知ってるのは三馬鹿と執事だけなのか」

「そっいう事になるぞ」

「そっか……」

だったら、いつそのこと三馬鹿に訊いてみよう。

でも大林は関わってないっばいし、黒木は個人的に嫌だし……。

よし、ここは赤佐に訊こう。赤佐とはそこそこ仲もいいいな。

とにかく、このままじゃなんか嫌だ……このまま終わりになるなんて絶対に嫌だ。

俺は決めたぞ 絶対に真実を知ってやる、意地でも青山さんに会って用事を済ませてやる。

いや……出来る事なら青山さんの転校を阻止してみせる !

「明智、ありがとくな」

「えっ？ そんな、私は全然大した事してないぞ？」

「いや、明智のおかげで僅かな時間でも青山さんと会えた。そのおかげで色々知れたんだ。本当にありがと」

「藤島……っ。ど、どういたしまして……っ」

明智が恥ずかしそうにそう言った。

そして、明智は俺に背を向けて公園から去って行った。

「それじゃ」などのお別れの挨拶がなかったのは、多分恥ずかしさからなんだろうと思った。

恥ずかしいから思わず逃げてしまった。まあ……エロゲーだとよくある事だな。

明智はドSだけど割と純粋だ。ストレートにお礼を言われると恥ずかしくなるのだろう……。

さて、明智との話が終わった所で……そろそろアイツを呼び出してみるか。



数十分後。

俺は相変わらず、明智家の近くにある公園のブランコに座っていた。ただ、アイツを待ったためだけに。

そのアイツはジーパンにタンクトップという、なんだか涼しそうな恰好で公園に現れた。

「よお藤島、用事って一体なんや?」

「赤佐、ちょっとお前に訊きたい事があるんだけどよ」

「なんや? メールじゃアカンような事なんかい?」

「メールより直接のほうがいいかなって思ったんだよ、話が話だけに」

言つと、赤佐は俺が冗談を言つつもりじゃないって気付いたのか、急に表情を真剣なものに変えた。

ここまで真剣な赤佐、そう言えば今まで見た事がないような……。それくらい今の赤佐は、普段の赤佐とは全然違うというわけである。

「それで、一体何の話なんや?」

「なあ赤佐。お前……一週間前に黒木と一緒に執事みたいなヤツと喧嘩しなかつたか?」

「……なんの話や?」

「とぼけないで答えて欲しい。頼む……イエスカノーで答えてくれ」

赤佐は目を閉じて歯まで食いしばっている。  
怒っているのではないんだろうが、相当悩んでいるのだろう。  
きつと、あんまり話したくない話なのかもしれない。

「……その質問、イエスやな」

「……やったんだな」

「ああ、黒やんと二人でやったね」

まあ、その事は最初からわかっていた。  
だから別に聞いても意味のない事だった。

確認の意味で本人に訊いてみたんだけど……まあ、やっぱり事実であつた。

でも俺が知りたいのはその事実ではなく、どうして喧嘩に至つたかである。

ここからが勝負だよな……明智には話さなかつたという喧嘩の理由。  
「それじゃあもう一つ、どうしてその執事みたいなヤツと喧嘩したんだ？」

「そ、そりゃあ言えへんな」

「なんで？　まずい事でもあるのか？」

「……まあ、そんなところやな」

言えないような事したのかよ……。

つたく、黙られたら余計に気になっちまうじゃねえか。

「大丈夫だ。俺は乙坂だろうが野原だろうが絶対に先生には言わない。いや、先生だけじゃなくて誰にも言わないって約束する。もし破ったらぶん殴っても構わねえ。頼む、この通りだ！」

俺はセリフを言い終わった後、土の上に直に坐り平伏してぎ座礼を行う。土下座を敢行した。

ここまでする予定はなかった、でも事情を聞きだす為には仕方ねえ。俺は真実を知る為なら。多少の恥だつてかいてやるさ。

「藤島……え、ええから頭あげい」

「……？」

「わあつた、説明するから土下座はやめろ」

「赤佐……無理言つてすまねえな」

「もうええ、それより立つてくれや」

俺は赤佐に言われ、土下座をやめて立ちあがった。

土下座とは非常に屈辱的だが、同時に他人の心を動かす可能性を秘めている。

頻繁にやり過ぎると効果はないが、普段全くしない俺がやると効果は抜群だ。

「そんやあ、一回しか言いまへんからよく聞いとけ」

赤佐と黒木は二人で青山家の前を歩いていたらしい。  
その目的は、近所に知り合いの家に遊びに行くためだったらしい。  
その途中で二人は偶然、青山家を見かけたんだとか。

すっげえ！ でけえ家だなあ！

ホンマや！ こんなお家古宇坂にもあつたんやなあ。

二人は青山家の大きさにビビっていたらしい。

…… どんだけ大きいんだ。

実物を見た事がないからイメージが沸かないが、あの二人が驚くつて事は相当デカいのだろう。

とりあえず明智家には行った事があるので、明智家みたいなのを想像しておこうか。

何坪くらいあるんだろうなあ。

そうやなあ。 ああ、俺らもいつそ金持ちに生まれたかったなあ。

赤佐と黒木はそんな話をしていたらしい。

別になんて事のないごく普通の話……ところが、二人の前に黒服の執事が現れた。

その執事は赤佐達を睨み付け、最後に「平民のゴキブリが何の用だね？」と言われたらしい。

その他、ゴミだとか失せる八工だとか……とにかく見下すような暴言のオンパレード。

途中まで我慢していた二人だが、とうとう我慢の限界に達し

「って、先に喧嘩を売って来たのって青山家の執事じゃねえか！」

「それで俺ら頭にきて……けど藤島、なんでいきなりこないな事を聞いてきたんや？」

「お、おう。実は」

赤佐が聞いてきたので、俺は事情を全て赤佐に話した。

青山さんが転校するという話。青山さんの転校理由、そして青山家の状況もすべて……。

事情の説明を終えると、赤佐はなんだか申し訳なさそうな表情になり。

「す、すまん藤島。俺らが執事と揉めたせいで……」

「気にするなよ。赤佐が俺だったとしてもキレてるレベルだよ」

「せやけど、藤島の大事な後輩さんがっ」

「……青山さん」

青山さんと小声で呟いてみる。

ダメだ、虚しくなるだけだな。

でも、俺はまだ諦めたわけじゃねえ……いや、むしろ始まったばかりだぜ。

喧嘩の理由。その喧嘩が原因の青山さん転校話。青山家の実態。青山さんの気持ち……。

……ふ、フフフ。見えたぞ……青山さんルートのエンディングが！

「な、なんや藤島……？ きゅ、急にニヤニヤして……？」

「赤佐！ 俺、今からちよっくら青山家に突撃してくるぜ」

「……な、なんやって……!?!?」

俺のトンデモ宣言に赤佐は当然のように驚いた。  
まあ、それが普通の反応であろう。

「さて、青山さんを青山家から救ってやるぜ！」

「な、なんや。藤島がぶっ壊れた……?」

一見自棄になつたような調子のよすぎる俺のセリフ。  
だが、これは別に自棄になつているわけではない。  
ちゃんと見えたんだ……青山さんの転校を阻止する話が。  
つまり、青山さんルートのエンディングが見えたんだ

!

……ああ、眼鏡があればよりリアルに落とし神ごっこができたのに。  
まあいいや、それより早速青山家に突撃だ!

## 第81話 決意（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

暮葉「けーすけ様がついに壊れたのです……」

圭介「暮葉までそんな事言っの!?!」

暮葉「だっておかしいですよ！ シリアスシーンでいきなりあのテンションなのですよ？ シリアスブレイカーにも程があるので……!?!」

圭介「うるせえ！ 確かに空気は読んでねえかもしれないけど、でもエンディングが見えたんだから仕方ねえだろ！」

暮葉「もきゅ？ えんでいんぐって……どんなエンディングなのですか!?!」

圭介「そ、そりゃあ……ネタバレだから次回以降を読め！」

暮葉「そ、そんなあ！ 少しくらい教えてくれないじゃないですか!?!」

圭介「一つだけヒントを言おう。全く同じ展開のゲームをプレイした事がある!?!」

暮葉「もきゅ!? ま、またゲームなのですか!?!」

圭介は重度のゲーム脳です。



## 第82話 突撃ッ！青山家！

夕方、俺は青山家の前にいた。

赤佐から大体の道を聞いてここまで来たんだけど、やっぱり街一番の名家だけあって大きいなあ。

中々立派な日本屋敷じゃないっすか。

……というか、明智家をイメージしてきたけど想像通りだ。

確か明智家も日本屋敷だったような気がするぞ。

でも、青山家は正直明智家よりも大きいかもしれない……。

さて、どうやって乗り込もうかな。

まあ正面から突撃するのが早いんだろうが、相手はあの名家青山家だぜ？

さつき俺を殴りつけてきた執事のような連中がいっぱいいたら……。うん、とてもじゃないが俺一人では手に負えないぞ。

……でも、そんな小さい理由がどうした。その程度の事で突撃を躊躇するのか。

俺の覚悟は　その程度のものでしかねえのか？

「……違つよな、藤島圭介っ！」

こんな所で立ち止まって立っただしょうがないぜ。行くぞ……。

「突撃イイイイイイイイイイイイイイツ！」

突撃ラツパ鳴り渡る。

出て来る敵は皆々倒せ出て来る敵は皆々倒せ！

……まあ、ラッパないから脳内再生だけだね。

青山家の立派すぎる城壁（ただの塀だけだね）をよじ登り、なんとか城壁を乗り越えた俺は ついに青山家の敷地に侵入。警備の者はおらずどうやら侵入成功のようだ。

さてさて、問題は青山さんとその両親がどこにいるかだけど……それにしてもいい匂いだな。

まるで焼き魚でも焼いているかのような……。

「そういえば腹減ったなあ……っーかい匂いだなあ」

「あたりまえだチエリーボーイ。今は夕食の時間なのだぞ？」

「……エツ!？」

ちよ、やべえ……早速青山家の執事に見つかってしまった。

しかもコイツ、さっき俺を殴り飛ばした野郎じゃねえか。

相変わらずイケメンなヤツだなあ。

確か名前は……あの母親が岡本って呼んでいたから多分岡本なんだろう。

「いい度胸だなチエリーボーイ。青山家に堂々と侵入してこようとは……そこまでしてお嬢様を泣かせたいか！」

「うるせえっ！ 青山さん泣かしてんのはどっちだよ！」

「無論君だろっチエリーボーイ？」

「っーかてめえ！ さっきからチエリーボーイうるせえわ！」

「ん？ チェリーボーイがダメなら童貞君がいいかな？」

「同じじゃねえか！ ったく、いきなり童貞だのチェリーボーイだの、失礼極まりねえだろ！」

まあ、俺はコイツの言う通り本当にチェリーボーイなのだが。

だって女の子と付き合った事はないし、かと言って犯罪じみた事に手を染めたわけでもない。

セフレ？ いわるわけねーじゃん……つか、いたらいたで高校生だし色々問題だろ。

「じゃあ君はアレかい。ヤツた事あるのかい？」

「ねーよ！」

「ふっ、やっぱりチェリーボーイか」

「うるせえっ！ 見境なしに女の子と遊ぶヤリまくりよりはマシだろっ！」

「失礼な。僕も童貞だ！」

「……………」

人の事言えないけど突っ込みたい……い、威張れる事じゃねえっ！  
まあ、やりすぎってのもどうかと思うけどさ。

実際チェリーボーイって全然誇れないよね……。

あれ、でもそうじゃない人は今度は馬鹿みたいに見られるし……世の中って難しいなオイ！

「さて、男同士の悲しい話は置いて……そろそろ終わりにしようか」

「……っ！」

「運がいい事に今は夕食時間。警備の者も僕を含めて8人のみだ。つまり……残り7人を見つからず、なおかつ僕に勝つ事が出来れば家の中に侵入できるぞ？」

「……殴り合えつてのかわか？」

なるほど、数学とか英語とか物理なんかよりもずっとわかりやすい。この岡本ってヤツも結構な腕っ節だったからな。

絶対頭脳ゲームよりも、こういう身体を張った事のほうが得意だろうと思つてたよ。

でもなあ……正直言うとコイツと戦うのに時間はかけたくない。

出来れば短期決戦でアツサリと勝負を決めたい。

だが、コイツは動きを見る限り相当の達人である。一筋縄では倒せないだろう……。

「まあね、僕もこつみえてかつては体育会系でね。ぶっちゃけ言うとな勉強よりこつちのほうが得意なんだ……君もこつちのほうが頭が楽でいいだろう？ 身体は忙しいかもしれないがなあ……」

「……ああ、上等だ！」

……仕方ねえ、出来れば滅茶苦茶疲れるからやりたくなかったけど。久々にアレ、やってみるか。

さっさと戦いを終わらせる為に

！

「それじゃあそろそろ行くけど、死なないでね」

岡本が駆け出し、俺との間合いを詰めようと走って来た。流石に早いな……距離も近いしこのままだと殴られる。

……だが、俺だって何もしないわけじゃないぜ。

左手で右腕を押さえつつ、俺は右腕全体にこれでもかという程に力を入れる。

筋肉のおかげで普通の状態よりも明らかに腕が太くなり、さらには血管まで浮かび上がる。

「死ねええええええええええつ！」

岡本が素早く右ストレートを放ってくる。

マトモに喰らえば普通は失神、防いでも衝撃で後退りしてしまうレベルであろう。

そんな高威力な右拳を受ければ、防御をしたとしてもただでは済まされないハズ。

……だが、俺は岡本の全力全開パンチをパシンツ！と、なんて事のない右手だけで受け止めたのだ。

かなりの威力かつ衝撃だったハズだが、俺はその場から微動だにしない。

右腕の力だけでどうにか拳を受け止めたのだ。

これには、流石の岡本の驚きを隠せない様子だ。

「あ、ば……馬鹿な……っ」

「俺を……普通の人間と一緒にだと思ちなよ！」

言いながら右拳を握り締め、瞬間。

ゴガン！という壮絶な激突音。

大理石をも砕くかもしれない勢いの右ストレートが、岡本の眉間にクリーンヒットしたのである。

あまりの衝撃に岡本の身体が吹き飛び、何メートルも芝生の上を転がった。

転がり、何度も跳ね上がってようやく動きを止めた岡本。

その時既に岡本は気を失っていた。

「…………ふうっ」

終わった……………予定通り、アッサリ戦いが終わったぜ。

その代わり右腕が痛いけどな。まあ、1分もしないうちにこの痛みは消えるであろう。

その1分が泣きそうなほど痛いもんだから……………普段は100%の力を使わないんだよなあ。

つまりどういう事かと言うと、さっきの一撃は普通の人間には中々出せない一撃なのだ。

俺は身体が頑丈であり傷の回復も早い。

生まれつきこういう体質なもんだから、脳もそれを記憶しちゃっているらしい。

んで、続いて別な話に移るけど、人間は通常100%の力を使えないらしいんだ。

なんでも肉体が耐えられないので、脳が勝手に力をセーブしているらしい。

で、俺がさっきも言ったように、脳が身体が大丈夫だって記憶しているんだ。

だから 自分の意志で瞬間的に100%の力を出す事が出来るのである。

「なぐんか、ゾンビにでもなった気分だよなあ」

俺、一応生きているのにゾンビで魔装少女な気分っす。  
まあ、俺は生きているから痛みも感じるし、ぶっちゃけ100%の  
力を使うと身体は壊れる。

その損傷した身体が1分程度で回復するだけだ。

100%の力を使うと身体は痛いし、オマケに滅茶苦茶疲れるし…  
…。

だから、普段の喧嘩では極力使わないようにしているんだ。  
もし力を使っても倒せなかったとしたら、しばらく行動不能でフル  
ボッコにされちゃうしな。

…さてと、無駄な事を考えていないでそろそろ先に進もう。

この立派な日本屋敷に 青山さんはいるんだ。

確か今は夕食の時間だって岡本が言っていたよな…。

だったらとりあえず中に侵入し、お食事処でも探してみよう。

そこには 青山さんも青山さんの両親も… 一家全員揃っている  
ハズだから。

「よし！ 痛みも消えたし、そろそろ突撃再開だな！」

青山さん、必ず青山さんを不自由な世界から解放放つてやる。  
だから待っていてくれ、今行くから !

## 第82話 突撃ッ！青山家！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「今回は報告だけ。なんと……つい最近コラボをした『Freedom/Story』のほうで、この『魔法少女に会っちゃった場合』とのコラボをしてくれました！」

暮葉「もきゅ！ 拙者も出演してるのですよ！」

圭介「kuxuさんありがとうございます！」

伊吹「地味に圭介が他作品進出してるわね……」

圭介「伊吹、お前も出演していたぞ？」

伊吹「う、うそっ！？ ……い、一応感謝はしておくわ……っ」

大吾「……ツンデレ乙」

重原「ツツパリじゃなくてツンデレだったねえ」

圭介「そうだな、珍しくツツパリじゃなか」

伊吹「ツツパリ言うなばか圭介っ！」



圭介「ほぎゃああっ！ な、なんで俺だけえええええええええええつ  
!？」

Freedom/Story本編・http://ncode.  
syosetu.com/n1960s/

### 第83話 全てを賭けた対決

ちよつと悪い事しちゃったなあ。

青山家に入るには当然鍵を開ける必要があるのだが、その鍵を俺が持っているはずがない。

だったらどうやって屋内に侵入したか……。

倒れている岡本が鍵を持っていたんだ。  
だから俺は岡本から鍵を奪い、正面玄関から堂々と屋内へ侵入したのである。

普通コソ泥つてもっとマイナーな所から出入りするじゃん。  
だから、俺はその裏をかいて真正面から侵入したのである。

それにしても広い屋敷だ……どこがお食事処だかサツパリわかんねえな。

と、思っていたその時。

俺の視界に思わぬものが飛び込んできた。

なんと【お食事処】と書いてある部屋が……わかりやすいな、しっかり書いてあるじゃないか。

「……よしっ！」

折角青山家の庭で腕痛めてまで執事ぶつ倒したんだ。

もう後戻りはできねえ……このまま突撃して青山さんに会ってやる。  
そして 青山さんの転校を阻止してみせる！

俺は扉に手をかけ、勢いよくサーッと襖を開けてやった。

「えっ？ ちよ、なんなのアイツ!？」

「んっ？ な、なんだね君は？」

「まあ！ あ、あの男は先程の……！？」

「……せ、せん……ばい？」

襖を開けた瞬間に視界に入ったものはテーブルに並ぶ、多分俺なんかじゃ一生食べる事がではないであろう、それほど豪華な食べ物の数々。

高級そうなスーツに身を包んだ眼鏡の中年男性と、青山さんの母親である和服の中年女性。

青山さんの姉なのだろうか、でも青山さんよりは元気そうな二十歳くらいのお姉さん。

そして、いつもと違って和服姿の青山さん。

この四人がテーブルを囲い、立派なご飯を食べていたのである。

「まあ何ザマスの！？ 不法侵入だなんて……やっぱり初芝の生徒は猿並ザマスね！」

「まあ母さんや。彼もそれなりの覚悟で来たんだろう？ ここは私に任せなさい」

「あ、あなた。でも……」

「私に任せなさい」

す、すげえ迫力だ親父さん……。

映画に出てくる極道の組長以上に恐ろしいかもしれぬ。

そんな恐ろしき親父さんがゆつとりと俺へ歩み寄って来た。

……怖え、青山さんも心配そうな表情で俺達を見つめている。

「君は誰だね？ 千早が先輩と呟いていたから……学校の先輩か何かかね？」

「それで合ってます。俺は青山さんの先輩です」

「ふん、それで君は一体何をしに不法侵入などと犯罪じみた事をしたのだね？」

「青山さんの転校をなしにしてもらう為に……話をしにきました」

両足に力を入れ、ついでに両方の拳もぎゅっと握りしめる。

そうでもしないと恐怖でバランスを崩してしまいそうだからだ。

圧倒的な威圧感……そのおばさんやさつき戦った岡本とは比べ物にならない。

多分本物だぞ……このオッサンは……っ！

「普通、人間はこういう局面で遠回しな事を長々と言うもんだ。だが君は違ってみたいだ、中々素直でいいではないか……だが、千早の転校をなしにする事は絶対に出来ないね」

「どうしてですか？」

言いながら、威圧的に親父さんを睨んで見せる。

相手の方がより威圧的な雰囲気なので、俺はそれを返すように睨みつけた。

「先日、うちの執事が君や千早が通っていた学校の生徒さんに殴られたって話、君は聞いたかな？」

「はい。そちらの執事さんと喧嘩をしたのは俺のクラスメイトなん

で

「なら話は早いだろう。そんな……危なっかしい不良がいる学校に、大事な大事な娘を居させておけるかい？」

予想通りの展開と予想通りの理由だ。

というか、青山さんから聞いた通りである。

この馬鹿親はそんな程度の事で青山さんの自由を奪ったってか。

「……喧嘩の理由、貴方は知ってるんですか」

「知ってるも何も、うちの岡本は一方的に殴られたと話しているが」

「その岡本さんって人の言葉が、本当に事実だと思っただんですか？」

「少なくとも、不良少年の言葉よりは信用できるんじゃないかな」

まあ確かに、執事と不良じゃ執事の言葉のほうが信用はできる。

……でも、これだけはハッキリと言える。

「岡本さんと殴り合ったヤツは多分、黒木と赤佐っていうヤツですけど……ハッキリ言って二人は正直者です。黒木は嘘を付くのが苦手です。赤佐も馬鹿正直なヤツです。俺は直接話を聞いたのですが、なんでも岡本さんが二人を挑発して怒らせたって話らしいですよ」

「ふーん。君はよっぽどクラスメイトを信用しているようだね」

「個人的にあんまり好きってわけじゃないですけど、それでもアイツらは嘘をつくような奴らじゃありません」

「そうか……中々信頼を置いているな。だが、私らも岡本に信頼を置いている。岡本が嘘をつくとは思えない……残念ながら君と同じで私は相手の話が信用できない」

ちくしょう、やっぱりその事を言ってきやがったか。

まあ予想通りだったよ。絶対こういう事を言うとは思っていたよ。

そりゃあ自分の家の執事だし、疑いたくない気持ちや言葉を信じたい気持はわかるよ。

俺だって友達の事は信じている。いや、黒木は友達じゃないけどそれでも信じている。

「……じゃあその信じている人がもし、本当に最初に挑発をしたとしたら？」

「君の方こそ、二人がうちの岡本を一方的に暴行していたとしたら？」

「……………」

「……………」

俺達はしばらく睨み合う、きっとゲームなら俺達の間で火花が散っているだろう。

「まあとにかく、岡本が殴られた事は事実だ。そんな危ない生徒がいる所に千早を通わせられない。安全かつ高レベルな女子校への転校は決まった事だ。今更やめますだなんて言えるわけがないだろう？」

俺はその言葉に思わず口籠る。

何も言い返す言葉がなくなったからではない。  
ただ……この馬鹿げたオッサンに対する怒りが、心の底から段々込み上げてきた。

「……それだけか？」

「何？」

「たったそれだけで、青山さんから自由を奪おうとしてんのかよ」

「っ！？ ……ほう、いきなり強気になったではないか？」

オッサンは表情を崩さない。

俺だけが感情的になっていた。

今回の相手は古宇坂一の名家、青山家の現当主である青山流という男。

そんな相手にさえ、俺は荒々しい言葉を放っているのだ。

端からみれば俺はどこまでも子供っぽく、みつともなくて恥ずかしいヤツに見えるだろう。

それでも 俺はあのオッサンに言ってやりたい事があるんだ。

「確かに殴るっていい事だとは思えねえよ。黒木や赤佐だって元々ヤンキーでよく喧嘩もしていた。でも、たったそれだけの事じゃねえか！」

「それだけ？ どういう事だね？」

「結局青山さんを転校させたい理由って、てめえが安心したいからなんじゃねえのか？」

「私も安心すれば千早も安心する」

「ふざけんじゃねえよ！ 親と子供は一心同体みたいな事いいやがって、子供は親の操り人形じゃねえんだよ！ 親だからって勝手な理由つけて子供の人生変えようとしてんじゃねえよ！」

そうだよ。青山さんが転校する理由なんて簡単な事だったんじゃねえか。

この親たちは青山さんが心配だ。子供が心配なのはどんな親だって同じハズだ。

でも、この親の場合は心配が行き過ぎた。

だから子供を守って……自分が安心する為だけに大切な子供の自由を奪おうとしている。

娘を大切に思い過ぎた為に奪われる自由。ちくしょう……やっぱり馬鹿じゃねえか。

「娘を心配して当然だろう。娘の為を思って行動するのが親の務めだ」

「だったら、娘を信頼して見守ってやるのも親の務めじゃねえのかよ」

「何を言っている？ もちろん信頼して」

「じゃあこのまま青山さんが初芝にいたら、青山さんが暴力の被害にでも遭うと思ってるのか？ 大体てめえら初芝には黒木や赤佐みたいなのしかいねえと思ってるのかもしれねえけど、それは間違いだぞ！ アンタ知ってんだろ！ 初芝が市内でも高レベルの学校だつて事を！ そんな所に何の理由もなく、見境なしに人を殴りつけるようなヤツばかりが通えると思ってるのか！？」



「君の事ではないのか？」

……そうかもしれない。

伊吹を助ける為とは言え、永渕を殴りつけた事がある。

暮葉を助ける為とは言え、早川だって思いつきりぶん殴った事がある。

端から見れば俺はただの暴力魔だ。こんな人間のクズが正しいわけがねえ。

……だけど！

「確かに俺も人様の事は言えねえかもしれない。でも、何の理由もなく暴力沙汰を起こすほど、自分の都合で誰かの自由を奪うほど落ちぶれたつもりはねえよ！」

「けど、そういうヤツがいるのも確かではないのか？」

「確かにそういうヤツだつて全くいないとは限らない。でも、初芝<sup>あそこ</sup>は青山さんの居場所なんだよ！ 大切な友達がいて、一生懸命打ち込める部活があつて……そんな、アンタが想像しているような地獄のような場所なんかじゃねえ！ 青山さんが転校を嫌がるくらい素晴らしい居場所なんだよ！」

その叫びを聞いた瞬間、オッサンは目を見開き。

「千早が嫌がる？ どういう事だ？ 千早は確かに転校には賛成

」

そんな事を言いだしたのだ。

きつと、青山さんは親の前では転校に賛成していたのだろう。

とというか、嫌でも賛成しないと説教されていたのかもしれない。青山家の自慢の娘として失格だと思っただのかもしれない。だから 親の前では本当の気持ちを言う事ができなかった。……でも今は、本当の気持ちを言う絶好のチャンス。

「青山さん。本音を言ってもいいよ」

だから俺は、ここで青山さんに話を振った。  
青山さんに本音を言ってもらおう為に

「せ、先輩……でもっ」

「大丈夫だよ。正直に言う事は何も悪くないよ」

そうは言ってみるものの、彼女にはまだ勇気がないのだろう。  
俯いて黙りこんでしまった。しかも、そんな彼女に追い打ちをかけるように。

「千早さん！ あんな男に耳を貸しちゃダメザマスよ！」

「……………」

「千早さん！ 千早さんは嘘つきじゃないザマスよね！？ 千早さんは心から転校をしたいって」

「……………」

その時、青山さんが何かをつぶやいた。

小声過ぎて誰も聞きとれなかったが、確かに何かを呟いたのである。

「千早さん、今なんて……？」

「わたし……転校なんかしたくない……」

「えっ？」

「転校なんか……したくないですっ。お友達や先輩と別れるのなんて嫌です……っ！ それに……先輩の言う通り、わたしは初芝あそこが大好きです……っ！」

青山さん……よかった、ついに青山さんが本音を叫んでくれた。

両親にとっては意外すぎる言葉に、オッサンもオバサンも驚愕の様子だ。

特にオバサンは半ばヒステリック状態となり、「千早さん！ 嘘よ、嘘と言って！」と叫んでいた。

一方の親父さんは冷静に千早を見つめ、そして。

「ほ、本当かね、千早？」

「……はいっ。今まで嘘をついていて申し訳ございません……っ」

「だ、だけど千早。あそこにいたら千早が何らかの事件の被害に

」

「……大丈夫ですっ、初芝あそこにそんな人はいません……っ！」

そう、少し涙目になりながら必死に訴える青山さん。

大切にしている実の娘に、そう訴えられたオッサンの心は動くに違いない。

いや、もう心は動いていた

「千早……っ、そんなに、そんなに初芝あそしがいいのか？」

「はい……お兄様と努力して、ようやくお父様とお母様から登校許可を頂いた初芝高校……わたしは、初芝あそしが気に入りました。通いたいから入ったのです……ですから、今更転校なんてしたくありません……っ！」

その言葉に、しばらく黙りこむオッサンとオバサン。  
広いお食事処を沈黙が包んだ。

……そんな沈黙を最初に突き破ったのは

「流、千明さん。お二人の負けです」

「お、お袋？」

「お義母様っ！」

「お婆様……っ！」

なんと、突然現れた老婆が沈黙を突き破ったのだ。

しかも……あ、青山さんのお婆さんだっけ？

それじゃあ青山さんが以前言っていた、俺が偶然助けたお婆さんって……。

あの優しそうな雰囲気のお婆さんだったというのか！？

「二人には残念かもしれないですが、その少年の言う事は全て正しいですよ。かわいい子には旅をさせるとはよく言うじゃありませんか？ 心配だからと言ってそこまで子供の事をやっっては駄目ですよ」

しかもその言い草だと、俺の言葉を最初から聞いていたのだろうか？  
まあそれはともかく、ナイスタイミングだぞお婆さん。  
老婆とは言え、それでもオツサンやオバサンと比べれば目上の人間  
である。

そんな簡単に逆らえはしないだろう。青山さんが自分の親にそうだ  
ったように……。

「お義母様！　そうは仰いザマスが」

「千明さん。千明さんはどうい風生きてきましたか？」

「それはもちろん、己の信じる道を」

「でしたら千早にも同じように、自分の信じる道を歩ませてはどう  
です？　それを暖かく見守るのが親の務めではないですか？」

おお、老人が言うつと馬鹿な若者である俺が言うつより説得力があるぜ。  
あのヒステリックババアな青山さんのの母親が、なんと後退りして  
いるぞ？

しかも、青山さんの親父さんだつて黙りこんでいる。

「……次、初芝で何か問題がありましたら、問答無用で転校させる  
ザマス」

「千早。好きにしなさい。その君ももし千早を泣かせるようなら  
……八つ裂きだからね」

あの二人がお婆さんに負けた……ッ！？  
強え、誰よりも長く生きていただけあつて最強だな。

ていうかオツサン、八つ裂きって……アンタそれ脅迫じゃねえかよ。まあいいや。結果的に勝ったんだから　　多分。

「まったく……頑固なお二人です」

「お、お婆様……っ」

「千早、私はこの後もあの二人と話をしてきます。絶対に千早の夢を壊したりはしませんよ」

「……はいっ、ありがとうございます……っ！」

「ふふっ。お礼なら私よりもその少年に、ね？」

言いながら、お婆さんは俺のほうへと視線を向けてきた。

お礼って……果たして俺はお礼を言われるほどの事をしたんだろうか。

結局事態を収束させたのだって、青山さんのお婆さんだし……。ぶつちやけ俺って喧嘩を売りにきて、ただこの場を滅茶苦茶にしただけなような……。

「先輩……っ」

「お、おう」

「その……ありがとうございます……っ」

和服姿の青山さんはお上品に、でもどこか恥ずかしそうにお辞儀をしてきたのだ。

……そうだ、折角両親撃退に成功したんだ。

青山さんとお話をしよう。そしてやるべき事をやってしまおう。  
このまま終わらすわけにはいかない、ちゃんと返事をしないと失礼  
だ

「いや、俺は大したことはしてないよ。それより青山さん、ちょっとお話があるんだけど……いいかな？」

「せ、先輩……っ？ ……はい、わたしも……先輩とお話したい  
です」

「うん。じゃあ、ちょっと庭にでも出てみる？」

「ふふ、先輩。まるで自分の家のように言ってますね」

久々に笑ってくれた青山さん。

ああ、やっぱり可愛いなあ。

どんな女の子にも言える事だけど、青山さんはやっぱり笑顔が一番  
だ。

「はははっ。それじゃあ行くか」

「……はいっ！」

こうして、俺と青山さんは青山家の広い庭へと行くことになった。

「そういえば、あの少年どこかで会ったような……何にしても、い  
い人ですね……ふふっ」

お食事処こしじょから立ち去ろうとする中、背後からお婆さんの声が聞こえ  
たような気がした。

……まあ、多分のせいだろう。

さて、いよいよだな……返事をするぞ。

青山さんが俺にしてくれた告白に対して



### 第83話 / 全てを賭けた対決（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

伊吹「ぶつちやけ圭介、ゴリ押しよね」

圭介「い、伊吹さん？ どういう意味っすか？」

伊吹「だって今回、テキストにそれっぽい言葉を並べて叫んでるだけじゃない？ だから圭介は読者に上さんって呼ばれるのよ？」

圭介「なんで俺が上さん！？ 確かに禁 目録全巻揃えたけどさ……」

伊吹「あと、ゴリ押しばっかりしていると読者に嫌われるわよ？」

圭介「か、上さんは割と人気なほうじゃないか!？」

伊吹「でも圭介、あんたに対する苦情が……」

・作者の友人N氏より、藤島圭介について一言。

「ぶつちやけ圭介ってウザくね？ 説教臭いしいつも都合のいい展開ばっかじゃん？」

圭介「ウソダドンドコドーン!」

大吾「それ、ネタわかる人いるのか？」

## 第84話 その日の夜

日も暮れてきた頃である。

俺は青山さんを青山家の庭へと呼び出した。

綺麗な芝生に鯉でも泳いでいそうな池、そして程良く手入れされた樹林。

なんだか心が現れる庭だなあ。

日も暮れ始めているが、それがまた妙に合う感じである。

「……………」

青山さんは頬を赤くし、視線だけを俺から逸らしていた。

多分、青山さんもこれからどんな話をするのかわかっているのだろう。

「青山さん。まずは……………これ、返すな」

「えっ？ こ、これは……………？」

告白の返事かと思いきや、最初に俺がやったのはCD返却である。

完全なる不意打ちに青山さんは驚愕の様子だ。

驚いた様子でCDと俺を交互に確認する。

その反応がまた可愛い事この上なのだが、あんまりやらせると可哀想なのでそろそろ説明しよう。

「この前借りていたCDだよ。折角両親との騒動も終わったことだし、ずっと借りっぱなしっていうのも悪いからな」

「あ、ありがとうございます……っ」

「借りていたのは俺だし、お礼言うのは俺のほうだよ」

そう言うと青山さんは俺からCDを受け取り、なんと胸元へとしま  
い込んだのだ。

ちよ、地味に胸が見えたような。

まあ、残念ながらブラはしていたのだが……しかしええ乳やないか！  
……げぶんげぶん！いけない、そんなしょうもない事を考えている  
場合じゃなかった。

それよりCDを返したんだ。次は一番の目的でありとても重要な事  
を

「それで青山さん。青山さんは昨日俺に……なんつーか、告白して  
くれたよな？」

「……えっ？ は、はい……っ！ そういえばまだお返事を聞いて  
ませんでした……っ」

「うん。だから今返事をしようと思ったんだ」

「……っ！？ は、はいっ！」

青山さん普段とイメージが全然違うな。

今の青山さんは輝いている。

なんだか目がキラキラしてる気もしないでもないぞ。

なんか、こんな表情をされるとすごく返事し辛いなあ。

俺は青山さんに対して恋愛感情を持っていないし、中途半端な気持  
ちで付き合うのは相手にとっても失礼な事だと思う。だからごめん  
と言おうと思っただけ……。

すみません。青山さんの必死すぎる表情のせいか、とても言いづら  
いです……。

「……………」

「……………」

俺が迷っている間も、青山さんは真剣な表情で俺の事をじっと見て  
いた。

待っているんだろっなあ……それなのに俺は、答えは決まっている  
のに言えずにいる。  
全く最低な野郎だ。ここで言わないとダメだっていうのに……。

「……………」

ん、どうしたんだろうか。

青山さんの表情が次第に暗くなってゆく。

まるで究極に落ち込むように……ちよ、待て、もしかして俺のせい？

「先輩……わたしのこと、好きじゃないんですね……」

「えっ？」

「顔……見ていたらわかつちやいました。だって先輩……困ってま  
したから」

「……………」

見抜かれてしまったか、青山さんかなり落ち込んでいるなあ。  
なんだか本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

俺はただ青山さんに謝る事しかできなかった……。

「そ、そんなっ！ 謝らないでくださいよ……っ、わたしも振られると思っただけだから……っ」

「えっ？」

「……ダメ元で告白してみたんです。そしたらやっぱりダメで……っ」

あわわわわわ！ど、どないしよう！

青山さんが泣きそうになってしまった。

そりゃあ俺の気持ちに気付いて悲しくなるのはわかるけど、さっきあんな騒動があっただばかりだ。

それに青山さんは女の子だし、というか誰であっても同じだけど流石に泣かれると……。

どうしよう。こういう時ってこういう風に慰めればいいんだ。

下手に慰めたら相手にまだ気があるんじゃないかって、そう思われる可能性があるからやめとけっていう話も聞いた事はあるが、だからと言って泣かれるのは嫌だしなあ……。

こ、こっぴつ時って経験ある人はどうするんだろっ？

「……でも、わたしは先輩を諦めたくありません……っ！」

「えっ？」

「先輩の事を嫌いになるなんて無理です……っ、ですから……わたしは絶対に先輩を諦めません」

……あ、あれ？

なんだろうか、このラノベによくありがちな展開は。

好きでもないのに恋人になっちゃったという事態回避できたが、もつとややこしい方向に話が進んでいるような気がするの、果たして俺だけであるうか？

「青山さん……？」

「……先輩、覚悟しててくださいね。絶対に……先輩を恋に落とすって見せますから……っ！」

突然の宣言。

どうやら青山さんは意地でも俺を攻略したいらしく、楽しそうに微笑みながらそう宣言した。

普通笑顔でこんな宣言をする人がいるであろうか？

いや……俺の目の前にたった一人だけ存在していた。

青山さんは宣言の後にくるりと背を向け、その状態で後ろを向いて俺を微笑みながら見ていた。

セミロングの緑髪が風に靡き、月光が静かに彼女を照らしていた。彼女の全てがなんとも神秘的かつ清麗な雰囲気醸し出している。

……ちくしょう可愛い。こんなに可愛いのにどうして好きにならないんだよ俺？

やっぱり好きな人がいるんじゃない　いや、それを考えるのはやめよう。

「……先輩っ」

「お、おう」

「また会いましょうね……それではこれで失礼します……っ」

「ああ……それじゃあ俺もそろそろ帰るな」

「はいつ、お気をつけて」

完全に向こうを向き、青山さんは青山家の屋内へと戻った。

結局、青山さん告白の件はナアナアで終わったような気がした。

いや、まだ正確には終わりでないかもしれない。

何故なら彼女はまだ俺を諦めていないからである

「……………っ」

ちくしょう……俺ってば、ホントに何やってるんだろうな。

……そろそろ帰ろう、きつと暮葉や葵が心配しているハズだ。

「ただいまー」

数十分後、青山家を出た俺はようやく自宅に帰ってこれた。

扉を開けてただいまを言うと、そこからは予想通りの展開だ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん………んっ  
！」

爆竹のような声を出して突撃を仕掛けてくる女の子。

コイツにはきつと悩みなんてないんだなあ、彼女の表情を見て思わずそう思ってしまった。

そう思ってしまうほど、彼女は明るく天真爛漫としているのである。

藤島葵。



……改めて紹介する必要のない、俺のMyシスターである。  
今日も葵は全速力で俺へと突っ込んでくる……だが、その手に二度も引つ掛かる馬鹿はいないぜ。  
俺は直前で葵の全力タツクルを避けてみせた。

「うにやぎゃあああつ！」

避けても止まる事を知らない葵は、そのまま玄関のドアへと激突してしまつた。

……ふう。よかつたあ……うちの暴走特急葵が衝突してもドアは壊れなかつたぞ。

あ、もちろん葵の心配もしているぞ。葵にも怪我がなくてよかつたぜ。

「ひどいよお兄ちゃん！ 避けるなんてひどいよ！」

「アホかお前つ！ 普通の人なら避けねえと死ぬわ！」

「大丈夫、葵はちゃんとシャワーは浴びてきたから」

「何の準備だよ!？」

「えつ？ お兄ちゃんとエツチする準備だよ？」

「アホかつ！ ンな事よりゲームか勉強でもしていなさい！」

「そ、そんなつ!？ 兄は童貞を妹で捨てなければいけないって、  
刑法265条に」

「話聞けエツ！ つーかそんな法律はねーよつ！」

葵め、勝手に刑法265条なんぞ作りやがって。

刑法は確か264条までだったような気がするぞ。

刑法265条なんて思いつき架空の法律じゃねえか。

しかも近親相姦を容認する法律って、一体どんなふざけた法律だよっ！

二次元の妹ならまあいいかもしれないが、リアルいもつと現実妹がいる俺としてはいい迷惑だ！

「あ、けーすけ様っ！」

「えっ？ おう暮葉かつ」

「もきゆ、部活サボってどこに行っていたのですか？」

どうしよう。青山家に突撃をかけましたただなんて流石に言えないよな。

……ようし仕方ない。ここはおバカな暮葉が簡単に信じるような嘘をつこう。

「ば、バイトの面接だ」

「もきゆ、バイトですか？」

「お兄ちゃんバイトするの!？」

「まあ面接に受かったらの話な。相当厳しい所だし人数も多かったから受かるかわからねえぞ?」

「面接なのですかあ。なら仕方ないですね!」

「うん！ バイトをしようとする必死な姿に、葵のお兄ちゃんに対する好感度はさらに上がったよ！」

「そうか、ハハハッ」

誤魔化せた……暮葉が馬鹿なのはわかっていた。

でも葵は成績はいいハズなのに……案外馬鹿だったな。

まあいいや、誤魔化せたんだから結果オーライである。

数日後にバイトの面接は落ちましたって報告すれば完璧であろう。

やれやれ、今日は戦ったり走りまわったり説教したり嘘ついたり、

色々大変で疲れたな……。

今日は早めに寝よう。見たいアニメは録画でもういいや。

……こうして、俺の一番長い一日が終わったのである。

## 第84話 その日の夜（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

大吾「ちよつとだけネタバレしよう。次回の主人公は圭介じゃない！」

圭介「な、なんだってーーーーー！！？」

大吾「しかも！ そいつはとんでもないヤツだ！」

圭介「だ、誰だよ。つーかなんで俺視点じゃないんだよ」

大吾「さあ？」

圭介「……もしかして、主役交代？」

大吾「さあ？」

圭介「ちくしょう……誰だよ、次回の主人公つて。あと俺の立場はどうなっちゃうんだろう？」

あくまで圭介は主人公です。

## 第85話 新たなる出会い？

昼間の古宇坂は人々で溢れ、それなりに明るい街で治安も非常にいい。

ンじゃあ、夜の古宇坂はどうかってなア。

深夜の古宇坂の路地裏をオレは一人、だるいと思いつながら歩き続けていた。

歩き続けていたんだ……ただそれだけだったが、やがてオレの周りには。

「へっへっへっ……」

「この前の借り、たっぷりと返させてもらっぜえ？」

今日もお出ましのクソ野郎共……。

コンクリートに阻まれた狭い直線。おそらくここは廃れた商店街の裏だろう。

そんなクソ狭い所でオレを取り囲むクソ野郎共。

連中はバットや木刀、それどころかギラリと輝くナイフを持っていやがった。

ナイフとか、コイツらには銃刀法ってモンが通じねえのかア？

……まア、どうだっていい話だけどなア。

さてと、今日はどう料理してやろうかア……。

「早川ア！ 死ねエエエエッ！」

「オオアッ！」

一斉に襲い掛かってきやがったクソ野郎共。  
やれやれ……どう料理するっつってもなア、こんなヤツらを相手に  
本気を出すのも面倒癖え。

いつも通り、暴風の膜でも張り巡らして攻撃を防いでおくか。

「ぐ、あつ！」

「ぎゃはあつ！」

「い、ああつ！」

「……チツ、クソツタレ」

戦闘……つて感じすらしなかったな。

オレはただ暴風で薄い膜を作りだし、それを向かってくる相手の逆  
へ吹きつけさせていただけだ。

だが、暴風に触れただけで連中は吹き飛ばされ、蹲ってそのまま動  
かなくなってしまった。

まア……痛がつているだけだし、死んじやあいねえだろっけどなア。  
はあ、全く面白くねえ……クソも張り合いのねえヤツらだ。

まあ倒した事は倒したし、コイツらから財産を奪っていくとするか。

「チツ、ロクな金も持ってなかった……」

このオレ早川悠はあの一戦以来、こうして不良から金や食  
い物を奪いながら生きていた。

堕ちたモンだ。まあ元々汚エ仕事ばかりやっていたんだ。

不良から物を奪う以上に凶悪で、悪質で、汚らわしく不名誉な仕事

をなア。

結局、特異点を全て潰せなかったオレは佐井学園を辞めれなかったというか、未だに特異点を潰している最中という事になっている。けど、その特異点潰しはあの野郎に阻止され、今じゃあオレもやる気を失っちまった。

オレにはもう戻る場所もねえ。佐井学園を辞めるには佐井学園と真正面から戦うしかなくなった。

「ったく、どーやれってんだあ？」

面倒癖エ事してくれやがったぜ、あの野郎。

だから、オレは佐井学園から逃れる正面対決以外の方法を考えた。

このまま……特異点潰しをやっているっちゅー事にしておき、テキトーに物でも奪いながら連中に気付かれねえように過ごす。

要するにクソしょぼい盗賊をやるって事だ、オレのような人間のクズには丁度いい生き方だろ。

……けど、何やってんだかなア。

あの野郎はオレのほうで圧倒的に強いのに関わらず、何の躊躇も無しに向かってきた。

そこまでは普通だった。でも、あの野郎にどんな攻撃を仕掛けても倒れなかった。

むしろオレのほうで追い詰められ、いつの間にかオレは工業地帯のアスファルトに転がっていた。

普通ならオレの強さに途中で絶望するハズなのに、最後まであの野郎は向かってきやがって。

あんな馬鹿げた勇氣のあるヤツは今までに見た事ねえ。

あんな野郎だつてこの世の中にはいるんだ。オレはあの夜にそんな事を学んだ気がする。

だと言うのにオレは　　佐井学園から逃げているだけか。

やれやれ、どこまで堕ちれば気が済むってんだア？

まあいいけどな。オレはそんな事を考えながら夜の古宇坂を歩いていた。

さてさて、さつさと今日の寝床でも探さねえとな。最近は何だかエゴミ捨て場の近くで寝ていたから、今日はせめて公園で寝てえなクソ、身体も臭エし水道水でも浴びたいモンだ。

「……………へっ、丁度いい公園みつけ」

久々にマトモな所を見た気がするぜ。

確かここは古宇坂でも高級住宅が立ち並ぶ地区。

でっかい日本屋敷見たいなモンも2軒くらいあったかな。

そんな所にある公園は中々の広さであった。

水道もあるしトイレもある、一通りの遊具だつて揃っていた。

多分昼間になれば子供やその子供の母親で溢れている事だろう。

ハッ、あんまり長居は出来そうにねエが……………一晩過ごすには最適の環境だな。

「さてと、んじゃあそこのベンチで寝るとするか」

公園つてだけに愉快地ベンチまでありやがる。

まあ、路上で寝るよか遙かにマシだろう、今まで寝ていた所に比べれば遥かに綺麗な場所である。

つて、くだらねえ感想考えてねえでさつさと寝よう。

最近は何だか馬鹿共の相手とロクな寝床がねえから寝不足だ、ちよくちよく寝とかねえと身体が持たねえ。

オレは割と綺麗に手入れされているベンチに転がろうとした

「んにゃあっ！」



刹那、背後から女のものと思われる悲鳴が聞こえた。

「まったく……夜遊びしようと思ったけどコケちゃったオチか？」

「オイオイ勘弁してくれよ。こっちは眠くて今すぐにも寝たい気分なんだっつーの。」

とにかく、夜遊びするつもりだっつてんならさっさとこの公園から追い出すとするか。

というわけで、オレは後ろを向いて女の姿を確認した。

歳は小柄だけど大体中学生くらいか。女の瞳は綺麗な緑色で、澄んだ水のように明るく淡い青色のツインテールはどこかの外国人の風貌を感じさせる。

まあ、そこまではいいんだが……問題は女の服装である。

頭の赤いリボンにハート、胸元の赤いリボンにもハート、持っているステッキの先端にもハート。そして桃色のフリフリドレスはどこぞの魔法少女を思わせる。

「なんなんだコイツ……オレが潰していた特異点にもこんなコスプレをしているヤツはいたが。」

「はん、くっだらね……っ」

倒れているクソガキを見てオレはそう吐き捨てた。

まあ、こんなガキなら何かをしなくてもすぐにどこかに消えてくれるだろう。

でもまあ、ちつたあ心配してやんのが大人の礼儀ってモンかあ？

「オマエこんな所で何やってんですかあ？ ガキは家に帰ってママの膝の上で寝ている時間だろおが」

「いたた……あれ……っ？ 早川悠？」

「アア？」

なんだコイツ、今紛れもなくオレの名前を呟きやがったぞ。

コイツはオレの事を知ってんのか？

……チツ、くだらねえな。

「早川悠！ やっぱり早川悠だよね！」

「オマエはオレの事を御存知見てえだな。だがお生憎様、オレはオマエなんか知らねえな」

「うん、知らなくて当然だよ。だってミネットは貴方と初対面だから」

「チツ、気味悪いな。初対面が名前を知っているってオカシイじゃねえかよ」

「そんなことないよ？ だって貴方は部隊じゃ有名人だから」

待て、部隊だ？

コイツ一体何者なんだ。まるで今までブツ殺してきた特異点みたいな事を言いやがる。

もしかして、このコスプレはギャグじゃねえってのか。

本物の特異点だって言うのか……にしては、随分とまあオレに対する態度が甘いモンだ。

もし特異点だとしたらオレを恐れるか、或いは大いに恨んでいるはずだろうに。

まあ、部隊って発言しただけでまだ特異点とは限らねえけどな。

それにオレには何の関係もねえ……どうでもいい話じゃねえかよ。

それにしても夜の公園がここまで騒がしいとは思わなかった。

やっぱ他をあたるとしようか。身体とかはクソ臭エが一日くらいは

我慢してやるうじやねえか。

「そおかい。ンじゃあその有名人とももうお別れだ」

そう少女に告げ、速やかにこの場から立ち去ろうとした……。

「シャアアアアアアアアアアアアッ！」

刹那、突然濃霧があたりを包み込み、ようやく晴れたかと思いきや……。

オレの目の前には何かデカイバケモノ見てエなのがいやがった。

「あん　？」

なんだこりゃ？

見た目はタランチュラか何かだな。

だが、どう考えてもタランチュラがこんな大きさまで成長できるとは思えねえ。

4トトラックよりデカく見えるって、一体どういう生き物なんだこりゃ？

超能力者や特異点のような魔法使いは散々見てきたが、こんなバケモノは初めてみた気がする。

「しまった、追いつかれちゃったよ……っ！」

追いつかれた？

なに言ってるやがるんだこのクソガキは。

……チツ、仕方ねえなオイ。

「オマエ、このバケモノとどういう関係なんだ？」

「強いて言うならばミネットの敵だよ？」

「ミネットっつーのはオマエの名前か？」

「そつだよ、ミネットの名前はミネット・ローランって言うんだよ」

「そつかい……」

ミネット・ローランねえ……どう考えても日本人の名前じゃねえな。何というかフランス人癖エ名前だな。

けど、フランス人がこんなワケの分からねえバケモノと戦うのか？ 部隊とかオレの名前を知っているとバケモノと戦っているとか、色々気になる事が多いヤツだな。

面白エ……最近退屈していつまんねえんだよ。暇潰しにコイツと会話でもしてみるか、その為には……。

「んじゃあオマエの自己紹介が終わった所で、目の前のバケモノを殺すとすつかあ」

「えっ？」

ミネットはオレのセリフに驚いたようだ。

おそらくミネットにとって予想外の事をオレは言ったんだろう。さてさて……相手は蜘蛛のバケモノときた。どう料理してやるうかなあ……？

虫は虫らしく焼くのがいいってかあ？

だったらやる事は簡単だ。大気中の分子運動を抑制・活性化させてやればいいんだ。

オレには急激な温度変化で炎とか氷を発生させる事ができる。

今回の場合は発火点まで上昇させてやって……ぎゃは、腹ア抱えて笑いたくなる発火パラダイスだ！

「ぎゃ、は　！」

面白いくらいにアツサリと、タランチュラの化け物が燃え始めた。

「オラア！　臭エからさっさと燃え尽きちまえよ！　こっちはテムエを燃やすのにアタマ使ってただからちったあ感謝して天国にでも行きやがれ！」

そう叫びながらタランチュラのバケモノを燃やし続ける。

しかし、不思議な事にバケモノは命が尽きた瞬間、バケモノの死体は虹色に発光し、パキンと割れるような音と共に小さな粉末状の光となり、完全に砕け散って消滅したのである。

オイオイ、バケモノの黒焦げ死体をどう後始末するかまで考えていたってのに、この結果はあまりにも予想外すぎるぞ。つーか現実的に考えてありえねえだろうが。

「なんだこりゃ……どうなってんだ？」

「すごい……っ、やっぱり本物の早川悠だよ」

「さてと、おいオマエ。オレが本物とかどうとか言ってるねえで、どついう事が説明してもらおうか？」

「ふえっ！？　う、うん！　わかった。もうバレちゃったもんね……今から貴方にわかりやすい説明をするよ！」

どうやら、ミネットのヤツも今の状況を説明する気になったらしい。

一体どんなぶつ飛んだ説明が来るんだか。  
やれやれ、眠いけど我慢して聞いてみつかあ……。

## 第85話 新たなる出会い？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「俺出番ねえええええええええええええええええつ！」

暮葉「大丈夫です！ 拙者も全く出番がないのです！」

圭介「しかもこの話、なんか続くっぽくね？」

暮葉「そ、そうですね……っ」

圭介「俺……主人公なのに」

暮葉「まあまあ！ きつとあと何話かしたらけーすけ様や拙者にも出番がありますよ！」

圭介「俺……主人公なのに」

伊吹「あんたそれ本日何度目よ。虚しくなるだけだからそろそろ言うのやめなさいよ……っ」

## 第86話 男の子？女の子？

オレはミネットっていう変な女から、今がどういいう状況を説明してもらおう事になった。

なったはいいんだが……このクソガキ、オレをどこへ案内しようってんだ。

遠足に行く小学生みたいなルンルン気分で歩きやがって、そんな楽しい所に行こうってのかあ？

くっだらね……と思いつつオレはミネットの後を歩いていた。

やかて辿りついたのは一件のマンション。

つーか表札にミネット・ローランって……オマエの家じゃねえか！しかもここって高級マンションじゃねえか。

もしかしてミネットってのはいいとこ育ちのお嬢様か？

「ただいまーって！　そういえばミネットは一人暮らしだったっ」

「チツ、オマエは小学生かっの」

「ひどい！　ミネットはこうみえても14歳なんだよ！」

「14だあ？」

十分ロリじゃねえかよ、大事な所もぺったんこだし。

まあ、どうでもいい話だしあえて突っ込まない事にしよう。

噛みつかれるのを阻止すのに、暴風の膜を張り巡らせんのも面倒だからな。

「その顔、信じてないね？」



「オマエがあまりにもガキくさすぎんだよ」

「ひどい！ ミネットはちゃんとこの世界で言う中学生だよ！？」

「証拠あんのか？」

「学生証が家の中にあるもん」

「はン　そおかい……」

「自分から聞いた癖に興味がなさそうだね？」

「黙ってるクソガキ。つーかオレを家まで連れて来てどうするつもりなんだ？」

もしかして、いくらオレでも他人の家では戦いづらいから、そこでオレを不意打ちしてブツ殺そうとしてたりするんじゃないやねえだろうな……ぎやはっ、そういうのは無駄だと思っけどな。

オレは他人の家だろうが何処であろうが、この超能力チカラを使う事に何の躊躇もねえ。

もしミネットがオレを殺すつもりなら、その時はマンションそのものを破壊してでも身を守る。

「どうするって、ミネットは貴方にお風呂に入ってもらいたいんだよ」

「あん、風呂だア？」

「こんなことを言うのは失礼ってわかってるけど、正直に言っと倒れそうなくらい臭いかも」

「チツ、今までゴミステーションの近くで寝てたんだから仕方ねえだろ！」

「貴方も臭いのは嫌だよな？ だからミネツトの家のお風呂を貸すよ！」

なんだよコイツ、親切のつもりで言ってるんだろうか。その風呂つてのがトラップだとしたら……。

まあいい、このオレが臭エのは自分自身でもわかってる事だ。水で洗い流したいから公園で寝ようとしていたくらいだし、風呂を貸してくれるってんならとりあえずは借りておこうか。そう言えば風呂なんて夏に入ってから入ってねえな……。

「…………チツ、案内しろ」

「んにゃ！ ご注文承ります！」

「オマエはどこぞの怪しい店員かっつーの…………」

まあ正直どうでもいい。

それより風呂だ風呂、温かい湯つてのが本当に久々だからゆっくり浸かるとしようか。

…………あてこのクソカギ。覗いてきやがったらぶち殺すからな。

んで、オレはミネツトから風呂を借りて現在身体を洗っている所だ。

オレの東京にある家にも一応風呂があるが、そことは比べ物にならない広さだ。

全く、オレの家は一軒家でここはマンションだったのに、普通風呂

の大きさは逆じゃねえのかよ。

いくらオレの家が築50年近いボロ屋だからと言って、あまりにも差があり過ぎじゃねえか。

それにしても……あのタランチュラの化け物、ミネットが吠いていた部隊がなんとか……結局アレはどういう事だったんだろうか。それを風呂上りに説明してくれるらしいが……。

チツ、さっさと洗って浸かるだけ浸かってあがるとしよう

「おっじゃまっしまーす！ ……ってミネットいきなり乱入してみたよ！」

「あん う、オアっ!？」

このクソガキどういうつもりだ？

突然やかましい声をあげやがったと思いきや、バスタオル一枚で風呂場に侵入してきやがった。

オイオイ、なんだよその可愛らしいピンク色のバスタオル。

っいかミネットのヤツ、バスタオル一枚って誘ってやがんのかあ？

……って、突っ込み所ソコじゃねえだろ。

「オマエ、どお言う神経してやがるんだ？」

「貴方は結構焦っていたから、だからお背中でも流しながら説明しようかなって思ったんだよ」

「ほおそうかよ……ンじゃあなんでオマエは全裸なんだ！」

「服が濡れるのが嫌だったし、ミネットもお風呂に入りたいんだよ。大丈夫、ミネットはこれでもバスタオルは完備だしこの下には水着も来ているよ！」

「そういう問題じゃネエだろっ！ よく知りもしねえヤツに裸晒してんじゃねえぞ」

「……っ！ ミネットだってすごく恥ずかしいんだよ……？」

「急に乙女になってんじゃネエ！ 能力使ってオマエの所だけ氷点下にするぞコラア！」

「まあまあ肩に力を入れないで。ミネットだってその……っ、他人にここまで見せるのは初めてなんだからね？」

「あっそ……チツ」

俺は舌を打ちながら前を向いた。前を向けばミネットから視線を逸らす事ができるからである。

「まったく、予想外のイベントが発生しやがったぜ。」

「誰だア混浴なんてふざけたイベント考えやがったヤツは。」

「って風呂場に突撃してきやがったのはミネットか。」

「まあ、ホントにそこまで見せるのはオレが初めてみたいだし、特別に大目に見てやるとしよう。」

「それじゃあ……洗うね？」

「チツ、勝手にしやがれ……」

自分から入って来た癖に躊躇ってんじゃねえぞクソガキ。

結局コイツが何をしたいんだか、オレにはサツパリわからねえ。

「ミネットはオレの背中をゴシゴシと、濡れ濡れ泡泡なタオルで洗い始めた。」

コイツは手先が器用なんだろうか、中々気持ちいいじゃねえか。

「すっごい……細くて綺麗な身体だね」

「褒めてるつもりかナメてんのか、どつちなんだア？」

「ミネツト的には褒めてる方向だと思うよ？ 色白で肌も綺麗で細くて……貴方ってまるで女の子みたいだね」

「<sup>アルビノ</sup>先天性色素欠乏症って知ってるか？ オレはどうもそれらしくてなア、メラニンだかってヤツの生合成に係わる遺伝情報の欠損のせいで、先天的にメラニンが欠乏する一種の病気みてえなモンだ。肌が極端に白いのはそのせいじゃねえのか？」

「身体が細い理由は？」

「オレは生まれつき超能力つてのがあつたからな。その気になれば風の力を利用して高速移動とか、空さえも飛べるから運動の必要がねえんだよ。飯だつてそんなに食わねえからな、必要最低限の筋肉してついてねえんだよ」

そのおかげで身体能力は正直最悪で、超能力ナシでの戦闘が危険なレベルになつちまったがな。

ただでさえアルビノは弱い種だつてのに、そのせいじゃ握力も20ちよつとしかねえよ……。

まあ別に後悔はしていない。超能力<sup>チカラ</sup>さえあれば運動の必要もねえ。肉弾戦をする時だつて、能力を使えば普通の人間よりは素早く動ける。

それが何故か、あの時に戦つたあの野郎には通用しなかつたけどなア。

「もしかして髪の色もアルビノのせい？」

「まあな、天然の白髪ってヤツだ。幸いアルビノは弱視なハズなのに、そこだけは普通の人間と同じで視力は1・2以上はあるけどなあ」

「そうなんだ……でも貴方とっても綺麗だよ！ 貴方の性別がよくわからないくらい綺麗だよ！」

「ああそうかい……」

「っで、貴方の性別って結局何？ 男の子？ それともやっぱり女の子？」

「やっぱりって、コイツオレの事を女だと思ってんのか？  
確かに中性的だとはよく言われたが、最初から女だっって言いやがるヤツはコイツが初めてだ。」

「オマエ、オレをなんだと思ってるんだ？」

「うーん。男の子かなって思ったけど、やっぱり女の子かな？」

「どっという基準で判断してやがんだテメエは？」

「だって貴方、男らしい感じがしないくらい綺麗なんだもん！ それで、貴方の性別はどっちなのかな？」

「チッ、愉快に楽しそうに一方的に喋りやがって。  
このアマ遊んでやがるな。」

「ーかミネットのヤツ、事情を説明するって話はどうなったんだ？  
いつまでオレの身体的特徴の話をしてるつもりなんだクソが。」

「おいミネット、くだらねえ話してねえでさっさと説明しろ」

「く、くだらなくなんかないよ！ 一応性別を確認しておかないと  
これからの扱いが」

「オマエは男女平等って言葉を知らねえのか？ どーでもいいから、  
さっさと今がどういう状況か説明しろってんだ。オマエの事もあの  
蜘蛛もバケモノの事も全部話せ」

「ぶーっ……わかったよ、今からちゃんとわかりやすい説明をする  
よっ」

「つたく、遊び好きで気分次第な感じで。」

「どこまでガキ臭いヤツなんだミネットは。」

「まあ、ようやく質問攻めから解放された事だ。」

「さあて……ゆっくりと事情を聞かせてもらおうとするか。」

## 第86話 男の子？女の子？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「そういえばさ、早川って作中で男とか女とか言われた事ないよね」

暮葉「もきゅ！ 確かにそうなのです！」

圭介「おう、それで思ったんだ……結局アイツの性別って何なんだ？」

暮葉「さあ？ 拙者は男性だと思うのですが……」

圭介「そうか？ 案外女子の制服とかスク水とか似合いそんな感じだぞ？」

暮葉「エエツ！？ で、でも髪も地味に肩にかかるくらい長いですし、そういえば体格も中性的ですし……まさか！？」

圭介「うん、わからん。ここは第3の性別が秀吉だから……第4の性別悠ちゃんだな！」

暮葉「もきゅ！ まさかのそっち方面ですか！？」

早川「オマエら死にてエか！？ アア！！」



正直早川の性別は決めてないので、読者様のご想像にお任せしますorz

そして人気投票、キャラを増やしましたのでよろしくお願ひします！

## 第87話 ミネットの事情、辛かった悠？

「アルファ隊って知ってる？」

「あーん　なんだそりゃ？」

背中を洗ってもらいながらの説明だが、クソツタレが。

何がわかれやすい説明だよこのクソガキ。

さつきから知らねえ単語のオンパレードじゃねえか。

オレは複雑な超能力を扱うだけに頭脳には自信があるのだが、いくらオレの頭脳でも意味不明な単語ばかり並べられると理解に苦しむっつーの。

「このことは違う世界、レムリアってところのロジーナって国にある特殊部隊だよ」

「はいはい、素晴らしい設定の小説でも書こうってか？」

「小説じゃないよ！ 事実だよ一応！ それに貴方だってある程度は知ってるハズなんだよ？」

「はーん　ある程度ねえ……ンで、そのアルファ隊がどうしたってんだ？」

とりあえず、知らねえ単語ばっかで意味不明でも、オレは頑張って理解しようとしていた。

新たなる計算式を覚えるよりは簡単なハズだからな。

「アルファ隊は反政府組織、“サヴィエト亡命政府”の打倒と関係

者拘束の為に結成された、基本的には腕のいい魔法使いの部隊なんだよ」

「魔法使いねえ……」

そういえば、オレがブツ殺しまくっていた特異点のヤツらも、魔法だとかふざけた事を言っただけでやがったな。おまけにミネットは部隊だとか異世界人だとか言いやがる。

「―事はやっぱりミネットは、オレが潰しまくっていた特異点だったのか？」

まあそれを訊くのは後でいい。それよりあの蜘蛛のバケモノについて知っていてエ。

「ンじゃあ、あの蜘蛛のバケモノはなんだ？」

「多分魔族かも。サヴィエト亡命政府はどういうわけか、魔族とも何らかの関わりがあるらしいよ」

「オイ……色々言う前にその魔族がなんだか説明しろ」

「すっごく恐ろしいんだよ！ 腕力も魔力も人の上をいくし、今は封印されちゃったとか死んじゃった説があるけど、魔族の頂点には魔王と大魔王が存在していて、かつては勇者や魔法使いが頑張ってたその二人と戦っていたんだよ」

「チッ、ふざけてんのか？ なんだよそのクソみてえな王道ファンタジーな話は？」

「ミネットはこの事を疑問に思っている貴方に疑問だよ。貴方はすごい超能力が使えるのに、ファンタジーなお話は信じられないのか」

な？　かな？」

「わかあった、信じときゃあいいんだろ……」

突っ込みまくるのも面倒癖え。

だったらもういつその事、魔族も魔王も大魔王も存在しているという事にしておけ。

ンで、昔は勇者がいたって話も事実だと言う事にしておこう。

こんなクソツタレな話、考えるだけでも面倒癖えっーんだよ。

あとは、ミネットに聞きたい事は一つだけだな。

この野郎……どうしてオレの存在やオレが超能力を使える事を知っていたんだ？

いくら異世界人の魔法使いだからって、初対面のヤツにそこまで知られてちゃ気味悪いつーの。

「はい、お背中流し終わったよ」

「ああそうかい」

「むう、もっとミネットに感謝して欲しいかも！」

「そうかい、ンじゃあ恩返しにオマエの背中でも洗ってやるうか？」

「え、遠慮しておきます……っ」

急に敬語になりやがって。

ンじゃあどういふ風に感謝すりゃあいいってんだ？

つたく、女つてのはいつも思うが面倒な生物だ。

そんな事を考えながらオレは浴槽に入り、身体を伸ばしてくつろぎ始めた。

久々に風呂つてのも悪くねえな。しばらく入つてねえだけに妙な有難味を感じる。

「一応忠告しておくけど、ミネットが身体を洗う所を見るのはNGだからね！」

「誰もオマエみてえなガキの入浴シーン、無理やり見せられても見たくねえっつーの」

「貴方つてストレートにひどい事言うよね。でも下手に隠し事をする人よりは信用できるかも」

「ンじゃあどうでもいいじゃねえかよ……」

結局、ストレートに物事言われるのが好きなんだか嫌いなんだか、どっちなんだよこのクソガキは。

まあどっちにしたって、別にオレはミネットの裸なんざ興味はねえし。

オレにはロリコンなんて特殊性癖はねえんだよ。

それよりも、コイツからしか知れねえような知りたい情報が山ほど事があるんだ。

「ふんふんふんふんふん」

ミネットのヤツ、香気に鼻歌歌いやがら愉快に身体洗いやがって。ふとミネットのほうを見ると、ミネットは既に泡だらけで大事な所が隠れていた。

泡で隠したつもりっつか。ったく……ガキの考える事はよくわからねえ。

それよりも……。

「オマエ、愉快に鼻歌歌ってねえでオレの質問に答える」

「　　っ!?!?　　ちょ、見ないでっつてミネットは言ったのにひどいよっ!」

「うるせえ、泡で隠れてるから問題ねえだろ」

「……貴方っつてロリコン?」

「オマエ……死にてエのか?」

そこまで脅すと、ミネットは頬を赤くして俯いてしまった。

そりゃあ、降参のサインっつて捉えていいのか?

まあとにかく、これで話は聞ける事になったっばいな。

「さて、と。じゃあ聞くけど……オマエはどうしてオレの名前を知っている?」

「それ、さっきも言ったよ?　貴方はアルファ隊では有名人なんだよ?」

「ふん。んで、どういう風に有名人なんだ?」

「……強いて言えば、かなり恨まれているよ?」

恨まれている、ねえ……。

そこでオレはようやく確信した。

アルファ隊っつのがオレが潰していた特異点の所属する組織だっつて事に。

オレはとにかく特異点をブツ殺しまくっていた。  
恨まれるのは当然の事だろう。つーか、恨まねえほうがオカシイっ  
つーの。

「ふくん、つまりオマエらがオレが殺しまくっていた、無国籍者ど  
もの特異点だって言うんだな？」

「貴方の言い方だと、それで合っているよ」

「そおかい、そんじゃあ第二の質問だ。オマエはオレをどう思っ  
てんだ？」

「んにゃ？」

「オマエもアルファ隊の一員だろ。にも関わらず、オマエらを殺し  
ていたオレを風呂に入れるってどういう神経してやがんだ？」

それがオレの中の一歩の疑問だ。

コイツは最初から、あまりオレに敵意を向けたりはしていねえ。  
にも関わらずコイツは特異点で、アルファ隊の連中は仲間なハズで  
ある。

だからこそオカシいんだよ。

オレはコイツらを楽しんで殺していたのに、なんでミネットは  
オレに好意的なんだよ。

「……………ミネットも、正直貴方を恨んでいるよ？」

「だったら何でだ！ 恨んでるんだったら不意打ちでもしてオレを  
殺せばいいだろ！」

最も、こんなヤツの攻撃なんざ風で跳ね返してオシマイだがなあ。

「そつだよね……でも、ミネットは知っちゃったから」

「あん？ 何を知ったってんだオマエは？」

「貴方が……殺したくなくても殺さなきゃいけない。そんな状況に置かれていた事だよ」

「……っ？」

コイツとは初対面なハズだ。

第一、オレが特異点との戦闘でそんな事を漏らした覚えはねえ。だったらコイツは……なんでそんな事を知ってやがるんだ？ しかも、まるでオレは被害者だって言い方じゃねえかよ。

「オマエ……どういうことだ？」

「ミネットは……貴方と木下先輩、そしてアルファ隊の護衛対象との戦いを見ていたんだよ。その時に貴方は学園を辞めたくて、ずっと永遠に血みどろな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがマシかって話をしていたよね？」

「……………ッ」

このヤロウ……まさか、あの一般人のクソ野郎との戦いを見物してたつてのか。

そういえば、最後のほうで特異点が多数駆け付けたつて、あのピンクのチビが言ってやがったな。

まさかミネットもそのうちの一人。水系の魔法を使えたりすんのか？



「貴方はしつこい学園を辞める条件として、嫌々ミネットたちと戦っていたんだよね？」

「ふざけんじゃねえぞ。あの言葉のどこにそういう意味が含まれてるってんだ」

「含まれているよ。確かに言葉はものすごく汚かった。でも、貴方の辛い気持はミネットにも……そして貴方を倒したあのお方にも伝わっているハズだよ。だからミネットは仲間を殺されて当然貴方を恨んでいるけど、貴方だつて辛かったんだから……恨み切れないんだよ？」

……クソツタレ、さつきから知つたようなセリフをペラペラペラペラ。

“ 勇気ねエ……ずっと永遠に血みどな日常を送ると、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがいいかって話だけどなア……オレには前者を選ぶ事はできねえ。それだつたら後者を選ぶ方が遙かにマシだ。それともなんだア？ オマエはオレに単独で佐井学園と戦う勇気でもくれるつてのかア？”

一体あの言葉のどこに、そんな辛い意味が込められてるってんだよ。確かに、あの学園は二度と見たくねえくらい嫌だが……ッ。

「……チッ」

「あ、あれ？ どこに行くの？」

オレは荒々しく浴槽があがり、この浴室からオサラバしようと思き始めた。

そんな時にミネットに呼び止められたのだ。

クソツタレ、呼びとめてんじゃねえぞガキんちよが。

「オマエとはここでお別れだ。精々、オレのことでも忘れて幸せに暮らしやがれ……」

「ちよ、ちよっどー!」

そんな背後から聞こえるうるせえ声は無視して、オレは浴室から出ようとして……あ、アレ？

急に頭がクラクラしてきやがった。く、そ……寝不足が今更響いてきやがったってか？

……まずい、マトモに思考できなくなってきた。

それどころか、こうして足で身体を支える事そのものが……っ!

「……………っ!」

いてえ……………倒れたのか……………オレは？

そして、意識が……………。

「えっ……………ね、ねえ貴方! 大丈夫なの!? しっかりしてよ!」

最後に聞こえたのは、ミネットのうるせえ叫び声……………だったような気がする。

## 第87話 ミネットの事情、辛かった悠？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「なにこの一方 行？」

伊吹「圭介、もうそのネタいいわよ……読者だって多分わかって読んでるから」

圭介「それにしても女体に興味ナシとは……ますます早川女性疑惑が」

伊吹「あんたは興味ありすぎなのよ！」

凧紗「そうだぞ……っ？ そういえば藤島はまだ変態なのか？」

圭介「うるせえ！ 男が変態で何が悪い！ つーか変態ってのは不治の病だ！」

伊吹「迷惑な病よね……？」

凧紗「TPOをわきまえない変態はただの迷惑だぞ」

圭介「うっせ黙れ！ 俺は紳士だからちゃんとわきまえてるわ！」

## 第88話 / まだ残っていた心

「……………?」

気付けばカーテンの隙間から光が差し込んでいる。

……………という事だこれは。

オレは昨日夜の古宇坂を歩いていて、それで変なガキと出会って風呂に入って……………。

その後の記憶がまるでねえぞ。しかもなんでオレは布団で寝ているんだ?

……………ここは一体どこだっただ?

「ふ〜ん!」

「あん　　?」

覗き込むように俺を見下ろす外国人のような少女。

間違いねえ、昨日オレをここに案内しやがったのはコイツだ。

そしてここはおそらくコイツの家だろう。

「すごく優しそうな顔だったよ。寝顔って誰でも素直なものなんだね!」

「……………オマエ、このオレのどこをどう見たら優しいヤツに見えるんだ?」

「またまた〜! 謙遜しなくてもいいんだよ? 昨日帰ろうとしたのだからミネットに配慮したからなんだよね?」

なに言つてやがるんだコイツ？

付き合いきれねえから帰ろうとしたに決まってるじゃねえか……多分な。

「ッかオレはあの後、どうしたんだっけな？」

「そういえば、なんでオレは布団で寝ている上に服着てんだ？」

「ちよつと待て……オレは風呂に入っていたハズだ。」

「オイ、なんでオレはここにいるんだ？」

「んにやつ？ そ、それは……うん、ミネットが頑張ったからだよ？」

「頑張った……ッ!？」

そこでオレは理解しちまった。

このクソガキが寝ている間に、とんでもねえ事をされたってなあ。

確かこのガキはオレと一緒に風呂に入っていたハズだ。

そんでオレは風呂場で倒れて、何故かオレは似合わねえ明るい柄の服を着て布団で寝ていて。

つまりどういう事か。んな事あ言わねえでもわかるだろ……ッ!

「このガキ……ッ、人様の裸をタダで見やがるとはいいい度胸してんじゃねえか!」

「仕方なかったんだよ! だって……お風呂場で放置するわけにもいかないから……ッ。しかもそのセリフはミネットのセリフでもあるよ!？」

「チッ、貴重な情報の代償がコレかよ……ッ」

「ま、まあまあっ！ 裸を見られたのはお互い様なんだよ？ お相子お相子！」

「フツーそう言うのは男のセリフじゃねえのか？」

「昨日男女平等って言ったの、誰だったかな？」

ニヤニヤしながらそんな事を言うミネツト。

このオレをいじろうとは……いい覚悟だ、上等じゃねエか。

ここまで精神的にオレを追い詰めた特異点、初めてじゃねエかよ……畜生、腹立つくらい愉快だなあ。

まあ、もうこのガキには用はねえけどな。

それよりさつさとこの家を出て、今日の朝飯でも調達しに行くか。いつまでもこんな所にいたらそのうち……佐井学園の刺客が来る可能性はあるからな。

「…………チツ」

「およ？ どこか行くの？」

「ここから消えるんだよ。オマエとはもう二度と会う事はねエと思  
う」

「えっ？ でも貴方の服はまだ乾いて」

「関係ねえ。服はどこにあるんだ？」

「…………っ、ベランダ？」

「そオカイ……一つだけ言っといてやる。災難に遭いたくなかつたらオレとは関わらねえほうがいい」

オレと関わればそのうち、連中に襲撃される可能性があるからな。連中つつつても佐井学園の連中だけじゃねえ。

普段、食糧とか金を奪ってるこのあたりの不良も含む。

ソイツらとオレの戦いに巻き込まれねえ為には……オレとは関わらねえほうがいいだろう。

「貴方って……どうしてそんなに他人を避けてるの？」

「……深い理由はねエ、面倒癖エんだよ。それより着替えるから見るんじゃねえぞ」

「んにやつ!？ う、うん……っ!」

ミネットはあつちを向きやがったが、果たして本当に見ねえんだろ  
うな？

まあいい。今更ミネットに下着くらい見られようが、オレはもうど  
うとも思わねえ。

それにしてもオレの服……ありえねえくらい濡れ濡れパラダイスじ  
やねえかよ。

まあ今日は幸い快晴だ。着てりゃあそのうち乾くだろう。

滅茶苦茶深不快だけどそこは我慢だ。

こっつして。

着替え終わつたオレはミネットの家を出て、食い物か金でも持つて  
いそうな不良を探し求めていた。

それにしてもいい天気だ……まあ、オレにとつちゃあこっついう天気  
は苦手なモンだけだな。

アルビノってのは非常に弱いモンで、オレは幸い弱視にはならなかったがこういう日光には弱いんだ。

日光、特に紫外線で皮膚が損傷したり、普通のヤツよりも皮膚がんのリスクが高エ。

その上、目が明るい所を苦手としてんだよ。眩しくてしょうがねえ……。

「ったく……不便なモンだ」

だが、オレには生まれつき超能力が発現していた。

最初は精々小せえ風を吹かすとか、そんな程度の事しか出来なかったが、成長と共に能力も強力になっていき、今じゃあ佐井学園……というより全世界で最強の超能力者になっちまった。

そのおかげでガキの喧嘩にも負けなかった。筋力がなくても何の不便にも感じずに生きてこれた。

オレをここまで強くしゃがった佐井学園。まア、その事に関しては感謝しといてやろう。

……だが、あの学園のやり方はもうゴメンだ。

それにしても金持ってそうな不良なんて全然歩いてねえモンだな。

まあ所詮古宇坂も田舎ってかア？

仕方ねえ、そろそろ古宇坂からオサラバして東京にでも行くか？

……いやダメだ。東京には佐井学園がありやがる。

んところに行けばすぐにオレの居場所が特定されちまう。

クソツタレ……これから先、オレはどうやって生きていけばいいんだア？

「こちら陳、これよりアルファ隊殲滅作戦を開始する。OK？」

「あん　？」



なんだア、あのチャイナ服を着た怪しげな野郎。  
変なことを呟きながら古宇坂の住宅街に消えたが、畜生怪しいなあ  
の野郎。

アルファ隊殲滅つて要するに、さっき別れを告げたミネットをブツ  
殺すつて事だよなア。

……だからなんだつてんだ。オレはもうあのガキとは関係ねえ。

「チツ……!!」

ポケットに手を突っ込み歩き始めたが、クソツタレ……なんだかム  
力つくな。

「……………」

……あの怪しい野郎、一体これから何をするつもりなんだア？

まア、知った所でオレにどうしろつて話なんだが。

それでも気になる、そしてクソム力つく……。

オレはどうしてこんなにム力ついているんだ？

もう関係ねエだろ……たとえあの中国人見たいなのがアイツを殺す  
としてもだ。

たかが一泊半ば強制的に止めさせられただけだ。

貴重な情報を教えてもらっただけだ。それで……ふざけた事を言わ  
れただけだ。

たったそれだけだし、オレとは関わらねえほうが安全に決まっ  
てんだよ。

“貴方も臭いのは嫌だよな？ だからミネットの家のお風呂を貸す  
よ!”

あんなガキはもう関係ねえ……。

“……ミネットも、正直貴方を恨んでいるよ?”

それにアイツはオレが殺しまくっていた特異点。

“貴方が……殺したくなくても殺さなきゃいけない。そんな状況に置かれていた事だよ”

もし、さっきのヤツに殺されようが知ったこっちゃねえ……。

ヤツらがどれだけ死のうが、目的を果たす為なら関係なかった。

いや、その目的が果たせなくなった今でも……もう他人だ、何の関係もねえ。

“貴方って……どうしてそんなに他人を避けてるの?”

チツ、あのクソ野郎。

こんなタイピングでアルファ隊の名前を出しやがって。

アルファ隊ってヤツを殲滅するだとか言いやがって。

おかげで、あのクソガキが脳裏から離れなくなっちまったじゃねえか。

なんなんだろーなア……オレもまだ甘いつてエのか……?

「……クソツタレ」

ム力つく……こうなったら暴れるしかねえ。

さつき走って行った、あのチャイナ服の怪しげな野郎を相手になア。つたく、あの野郎が誰を襲う気かは知らねえが……。

あの野郎に襲われた死ぬんじゃないぞ。

アルファ隊の連中を殺していたオレが、間接的にオマエらを救ってやるんだからなア……!

## 第88話 / まだ残っていた心（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeligh>

・後書きトークコーナー

圭介「あー暇だあ。そういえばそろそろ花火の季節だよなあ」

浅間部長「何言ってるんだ藤島君！ 僕に言わせれば海水浴の季節だね！」

圭介「海水浴……水着……お姉さん……おおっ！」

浅間部長 & 圭介「夏ってスバラシイ！」

あかり「……誰か、アイツらシバいてもいいよ！」

## 第89話 / 最悪

あの中華野郎、確かこっちの方向に行きやがったよな。

ここは確か……元々旧日本軍が使ってたって言う、自衛隊の滑走路があるあたりだったな。

滑走路の周囲は住宅と畑だ。あの野郎……こんなただっ広い場所でどうするつもりだ。

って、アルファ隊の連中を潰すんだからやる事は決まってるよなア。

「あア？」

不自然に立ち入り禁止という看板が立てられた、自衛隊基地付近にある運動場。

はン、バレバレだったっの。

何の声も聞こえねえし、この中で何かの大会なんかやってるわけがねエ。

そもそも、大会なら一般公開していたっておかしくはねえハズだ。にも関わらず、わざわざ立ち入り禁止にするたアね……やれやれ、人間ってのはホントに馬鹿だ。

まア、オレも一応その人間だがなア……。

「さて、と……オレにしちゃあ珍しい事をしてやろうか。10分で終わらせてやる」

オレは立ち入り禁止の看板を無視し、笑いながら運動場へと足を踏み入れた。

……つで、堂々と立ち入り禁止の場所に来てみたはいいが。

「アイヤー可哀想だネエ！ でも、そろそろ終わりだネエ」

「まだ……だよ……っ！」

「減らず口だネエお嬢チャン？ じゃあそろそろレニナ様の計画の  
為だ、死んでもらおうかネエ」

「オイオイなんだこりゃ……あの中華モドキにミネットのヤツが負け  
てやがる。」

「つたく、どこまで予想通りのシナリオなんだ。」

「しかもなんなんだ、このナイスすぎって言われそうなタイミングは  
まあいい……ちつとだけ運動してやるか。」

「見せてやる……オマエらサヴィエト亡命政府の連中だって、このオ  
レと戦えばひ弱なオタクと90式戦車くらい差があるって事をなア。  
ゆっくりと、オレは二人の下へ歩んでいった。」

「アア？」

「中華野郎がオレの気配に気づいたのか、まるで嫌なヤツに向けるよ  
うな目でオレを見てきた。」

「それでも俺は気にせず、何処までも狂った笑みを浮かべ、ただ只管  
中華野郎へと近づいていく。」

「中華野郎はミネットを殺す為か、さっきまでしゃがんでミネットに  
手刀しゅとうを向けていたが、オレが近づくとそれをやめ、細い目でオレを  
睨みつけつつ拳を握り締めて立ち上がる。」

「アイヤー！ 立ち入り禁止って看板建てといたのに、どうして侵

入しちゃったのかネエ？」

「……………あ、あな……………た……………っ？」

弱々しくオレを呼ぶミネットに、嫌味な感じで語り掛けてくる中華野郎。

やれやれ……………クソムカつく口調だなあの野郎。

「君は一般人だネエ……………悪いけど、君には死んでもらうかな？ 秘密を守る為にも……………個人的にも日本人は嫌いだからネエ！」

そうかい……………別にオレはオマエがどう思っようが、知ったこつちやねえんだよ。

けどな、このオレがオマエのようなヤツに殺されるってえ？

はン　くったらね……………。

オレがオマエごときに殺されるわけがねえだろ。

寝言は　寝ながら言えってんだよ！

「死ネエ……………ッ！」

カツコいいつもりで、でも実際は情けなく叫びながら中華野郎は掌を突き出す。

別に飛びかかってくるわけでもない。銃を向けて撃ってくるわけでもない。

ただ、掌を一步も動かずに俺へ突き出す。あの野郎はたったのそれだけしか動かなかつた。

当然距離的に右手がオレに届くはずがねえし、そんな事をされたつて痛くも痒くもねえ。

むしろ、目の前の中華野郎の存在が痛く感じるくらいだ。

だがそう思っていた瞬間、あの中華野郎の掌がぼんやりと光り始め

やがったのだ。

おもしれえなオイ……あれって確か特異点どもも使っていた、魔法とかいう変な能力なんだろ？

サヴィエトの連中は魔族つてのとつるんでるらしいし、オマケに魔法まで使うつてなア。

「……………つ！ 波アアアアアアアアツ！」

ぼんやりと光っていた掌から出たのは、別に驚く事もねえ……ただの光線だった。

おもしれえ畜生。ありや一体どういう魔法なんだ？

ただ一つだけわかるのは、オレに向けて放ったんだから攻撃魔法だよなア。

だったらオレがやる事は一つしかねえな……。

「……………ひいっ！」

突然驚き、情けねえ声を出しやがる中華野郎。

無理もねえ。人間理解が出来ねえ事が起これば、誰だってあんな風に恐怖を感じるものさ。

きつとあの野郎は攻撃を弾かれた事がねえのだろう。

まあ正確には、弾くというより風でヤツの魔法を吹き飛ばしたただけだな。

弾き返されるように飛んでいく光線は、中華野郎目がけて一直線に突き進む。

そのまま自滅してくりやあ楽なモンだが、残念な事にあの野郎は寸前で右に跳躍しやがったのだ。

はン 中々反射神経はいいみてえだ。

流星は中国人。魔法使いであると同時にクンフーの達人ってかア？

「怖がる事はねえだろ？ オレはただ、一瞬で暴風を身体の周りに吹かして攻撃を防いだだけだ」

「な、なんだネお前！？ アルファ隊の新人りか、それともロジーナの軍人か！？」

「お生憎様、オレはこの世界の人間で……今のも魔法ってモンじゃねえんだ」

「ウソだネ！ この世界に……魔術以外のチカラがあるだなんて！？」

「へエ？ ミネットは魔法つつつてたけど、オマエらは魔術って言葉を使うんだな？」

「……は、ハハ！ 敵性語だからネ……こっちで勝手に言い変えてるってわけネ」

「そオかい……じゃあ、オレはオマエの敵だから魔法って言っとくわ」

あの中華野郎は露骨にオレを恐れていた。

魔法以外の力は信じられねえらしい。

だけど、オレはそれ以外の力を使ったとヤツに言った。

事実オレは魔法は使えねえが、それ以外の力なら自由自在に使える。事実を伝えたただけだったのに、随分とあの野郎オレを怖がってやがるな。

やっぱり、オレが光線を弾き返しちまったせいなのか。

まあ確かに、ビビっててくれたほうがいじめがあって面白エ……

……ぎゃはっ。



「お、お前誰なんだ！ どうしてアルファ隊の味方をしているネ！？」

「味方？ ぎゃは、笑わせんじゃねえよ……このオレがアルファ隊の連中にどう思われてるか、オマエわかってんのかア？ 答えは恨まれている……最も、オレがこのミネツト達に恨まれるような事をしたから、まあ当然のことなんだけどなあ」

「だ、だったらアルファ隊の味方をする意味もないだろ？ どうだネ！ お前は私の魔法を弾き返したんだ。いつそレニナ様の下で財産とかそういうあらゆる不平等を平等に、すべての人が皆平等に生きられる社会を使ってみないかネ！？ その為に、それを阻止しようとするアルファ隊という蛮族の組織と戦わないかネ！？」

平等ね……言い言葉じゃねえの？

あくまで理想としてはなあ。

まあ、現実そんな甘いもんじゃねえからそれは不可能だろう。

どう考えても無理な理想を追い掛ける上に、もうゴメンな事までしろってか。

そんなの、オレの答えは当然

「お断りだア。オマエらに協力する理由だってねえし、それに特異点潰しなんてモンを再びすんのも、もうゴメンだからなあ？」

「ゆ、悠……貴方……っ」

なに物珍しそうな顔してんだ、ミネツトのヤツは。

しかも、コイツがオレを名前で呼ぶなんて珍しいモンだな。

まあどうでもいいけど……それより、今は目の前のクソ野郎を葬ら

ねえとな。

「は、ハハハ……ッ！ 我らに協力しないと言うのネ？」

「当然だ。オマエらに協力するくらいなら、クソツタレな学園に戻るほうがマシかもしれねえ」

まあどっちにしても、あの学園には今後一切関わりたくねえがな。けど、それと同じくらいコイツらとは手を組みたくねえ。オレはもう 何かの為に汚れ仕事をすんのはゴメンだ。

「いいだろう……ならばこうするまでだネ！」

「あア？」

すると突然、中華野郎が大きくジャンプをしゃがった。

おーおーよく飛ぶねエ。

ひよっとして、マンションの3か4階くらいの高さはあるんじゃないか。

大胆なハイジャンプしゃがって、あのクソ野郎一体何をするつもりだ？

「ん、にやっ!？」

「ヒヤハハッ！ 大人しくしろアルファ隊！」

あの……ヤロウ……ッ！

ミニットの近くに着地しゃがったと思ったら、左腕でミニットを抱きしめやがった。

恋人同士でするような、そんな生易しい抱き方じゃねえ。

プロレスの試合で相手レスラーを締め付けるような、そんな荒々しい抱き締め方である。

一方の右手ではチャイナ服のポケットに手を突っ込み、そこから黒々とした何かを取り出しやがった。

「チツ……ンだあそりゃ、トカレフトT-33ってヤツか？」

「我が祖国でライセンス生産したものネ。それより動くなよ？ 動けばこのガキの脳味噌が花火みたいに飛び散る事になるからネ！ この子の死体を見なくなったら……君は我らに協力することだネ！」

ライセンス生産だろうがコピー生産だろうが、そんなくだらねえ情報はどうでもいい。

それより、あの中華野郎は中々の小者みてえだな。

ミネツトのこめかみに銃口をしつかりと当て、それで動けないオレを見ながらニヤニヤしてやがる。

まったく……やる事が小悪党すぎるぜ。

だが、いくら小悪党のやることだとしても　コイツあちつとどうするか、考えなきゃいけねえな。

オレに銃を撃つんなら何の問題もねえ。

ただ暴風で膜を張り巡らせ、向かってくる銃弾をクソ野郎にお返しすればいいだけだ。

……だが、標的がミネツトとなれば話は別だ。

アイツはただでさえ怪我して弱ってるのに、元から銃に対しては弱い存在だろう。

うかつに動くのはマズいが、だからと言ってあの野郎の条件を飲みこむつもりはねえ。

「……っ！」

「恐怖で何も言えないみたいだネ。さて君はどうする！？ この子の死体を見るか、それとも我らに郷協力するか！？ そしてら、この子を死体にする事だけは特別にやめてやるネ」

「……………」

ミネットが捕まってるとなると、あまりド派手な技は使えねえ。もし使ったらミネットまで巻き込まれちまう。

思いきって飛びこむか……いや、どんなに風の力を使って高速移動したって、引き金を引くには十分すぎる時間があるだろう。オレがヤツの目の前に行った時には、既にヤツは引き金を引いているハズだ。

仮に間に合ったとしても、ヤツは間違いなくオレかミネットに発砲する。

ミネットに当たればアウト……だが、このまま何もしないわけにはいかねえ。

一か八かの賭けだ。一気に間合いを詰めてあの野郎を殴り飛ばし、ミネットを助け出す

「アアアアアアアアアアアアッ！」

「な、何イ！？」

ドン！と力強く足踏みをし、風の力を利用して弾丸のように中華野郎の懐へ突っ込む。

右拳を握り締め、中華野郎の目の前まで来ると、握った拳を能力使って加速させつつソイツを放った。

「あ、があ　　っ！」

当たれば大怪我、確實の拳は確實に中華野郎の顔面に突き刺さる。殴られたと同時に中華野郎は、左腕からミネツトを荒々しく離してしまった。

ここまでは読み通りだ。それに案外今の攻撃が効いたのか、中華野郎が反撃してくる気配もない。

だったら今のうちにミネツトを助け、とにかく中華野郎から距離を取ろう。

倒れそうになっていたミネツトをしつかりと抱き、吹き上げるような暴風を吹かしてオレは空を飛んでみせた。その結果、着地すると中華野郎とは10m程の距離を取る事に成功した。

「……ひゃ、はは……っ、ヒヤハハハハ！」

「……ッ!？」

オレはどうやって体勢を立て直したのか、歪んだ表情を見せる中華野郎……ではなく、中華野郎がオレに向けている黒々とした拳銃の銃口を見つめた。

冗談じゃねえぞオイ……!

あの中華野郎、今オレが暴風の膜を張り巡らしたら、このガキも一緒に吹き飛んでしまうじゃねえか。

ミネツトは衰弱している。ちよつと吹き飛ばされたって、荒々しく地面に叩きつけられりゃあ大きなダメージとなりやがる。これ以上ミネツトがダメージを受けるのは危険すぎる。

畜生、こんなガキ早く地面に置いて、中華野郎が撃つ拳銃くらい……簡単に弾き返して……ッ!

「ひゃ、はっ! 仕返しだ……受け取るがいいネ小日本人ッ!」

中華野郎が銃弾を放ったのは、まさにオレがミネットを優しく地面へ置いた瞬間だった。早く手を離せば、乱暴にミネットを放り投げていればオレは確実に助かっていた。

…… ったく、オレも甘いぜ……。ミネットがこれ以上怪我すんのが危険だからって、それが嫌だと思っちまったからって、この手を離さず優しく置く所までやっちまうだなんて……。

「…………ア…………ガ　　ッ!？」

何かが突き刺さった。

突き刺さると同時に吹き飛ばされた。

痛みは…… 感じない。

感じる前に視界が揺らぎ、次第に真っ暗になっていったからだ。

一応、この後オレが勢いよく背中を地面に叩きつけた事はわかった。そこから次第に意識がなくなっていくことも。

ったく、オレの人生ここで終わりか？

まあいい、それより…… あの中華野郎からさっさと逃げる、そして生きるよ…… クソガキ…… ツ!

## 第89話 / 最悪（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「最近暇だなあ」

大吾「圭介、最近お前はなにやってるんだ？」

圭介「ん、そうだなあ……なあ大吾、ネット住人って馬鹿じゃね？」

大吾「なんで？」

圭介「いや、女子中学生のフリしてチャットに入り込んだら……変態親父と馬鹿なヤンキーっぽい兄ちゃんっぽい釣れたし」

大吾「おまつ！？ それで遊んでるの！？」

圭介「まあな。しっかしなんで見抜けないんだろう？ アニメキャラ参考にテキストに作った女子中学生キャラだったのに」

大吾「圭介ひでえけどクソワロタ！ まあ、見抜けないくらい二次元キャラが完璧ってことだよな！」

伊吹「こいつら……ロクな遊びしてないわね……っ」

## 第90話 / 死闘

「……やった？ ひやはは……冗談じゃないかネ？」

いきなりあの人が駆けつけて、ミネットを助けてくれて……。

でもあの人は吹き飛ばされてしまった。

陳炎彬チンヤンビンという名の、サヴィエト亡命政府では気功と拳法の達人の男の攻撃で。

陳が放った一発の銃弾によって……。

「私の気功を弾き返したコイツが、一発の銃弾に負けた……？ ふ、ひやははははっ！ こりゃあ確実に死んだネ！ 7・62mm弾を額に受けて生きてるハズがないネ！」

死んだ……えっ？

あのアルファ隊の魔法使い何人掛かりでも倒せなかった、あの早川悠を殺した……？

なんで……どうしてなの。ミネットを助ける為？

だからって、仲間を楽しんで殺していた人が自らの命を投げる？

助けに来てくれた時点で何かがおかしいとは思っていたけど、ここまでしてくれるなんて……。

どうして……ミネットが死んでも、アルファ隊全体では何の影響もないんだよ。

ミネットを助けても……あなたには何の利益もないのに……っ。

「さて……次は君ネ」

「……っ！」



その言葉が耳に入り、ミネットはポロポロの身体でなんとか身構える。

先端にハートを飾ったステッキ。

ハートは飾りだけど、ステッキ自体は魔法を使うためには必要なもの。

でも……陳には四大元素の一つ、万物の根源こと水の魔法アルケイが全く効かない。

増してやもつ……ミネットには戦うための体力が……っ。

「貴様の王子様は弱かったネ。さて……そろそろ死ねエツ！」

「……………!!」

叫びながら陳は銃をミネットに向ける。

あの人を殺した銃……ミネットだってあんなには耐えられない。しかも、ミネットは普段のあの人とは違って、銃弾を防ぐ術もなければ避ける術もない。

もうダメだ……ミネットはもう死を覚悟した。

「ひゃ、は、はあっ！」

炸裂する銃声。

1秒以内にミネットは死ぬ……覚悟を決めた 刹那。

ミネットは死ななかった。銃弾がミネットに直撃どころか掠りさえもしなかった。

陳が下手糞というわけではないと思う。さっきだって、あの人額に正確に弾を当てていた。

きっと陳は射撃の達人でもあるのだろっ。そんな陳が目標に弾を当てられなかった。

射撃の達人であるハズの陳が、ミネットに弾を当てられなかったそ

の理由は

「あ、うぐああああああああああつ!!」

「、死なせてたまるかよ……このクソ野郎オ」

なんで……どうして……?

理解が追いつかなかったけど、奇跡が起きているのはミネットにもわかった。

あの人が……生きている。生きていてミネットを助けてくれた……つ。

「うあ、はあ……はあ……ぎいっ」

陳は右手を怪我していた。ボタボタと血が地面に垂れている。左手で押さえ隠しているけど、きつと右手はグロテスクに裂けているのかもしれない。

そんな右手では何も持てず、陳は持っていた拳銃を地面に落としていた。

そのまま怯えながら後退りしていく陳。あの人は額を押さえながら、ゆっくりと陳に歩み寄る。

「な、なんで貴様が生きてるネ！ 一体なにをやったんだネ!？」

「……………ッ」

「もしかして魔術、いや貴様は超能力か……それを、直撃の寸前に使ったのかネ!？」

「ぎゃは……推理……ご苦労様だなア……っ」

あんなにボロボロなのに。今にも倒れそうなのに。  
あの人は齒を食いしぱり、目をギラギラ光らせながら陳へ近づく。  
陳はあの人が近づくとびに恐怖し、右手を左手で押さえながら後退りしていった。

「なんでだネ！ ひやは、今更貴様に何ができると言つのだネ！」

「知るかクソ野郎オ……こんなどこまでも堕ちたクソ野郎が、こんな事をしてるつて時点で奇跡みたいなモンだつてのによ。これ以上ヒーローじみた事をしろつてかア？」

「だつたらやめればいいネ！ 貴様動けるなら……今から病院に行けば助かるネ！」

「ハッ、オレが逃げたらこのガキを殺すつて魂胆か？ 丸見えだつつーの……」

自虐しながらも相手を威嚇するあの人は、本当に勇者のようだった……。  
カッコいい……ミネットにとって恨むべき人なのに。

どこまでも傷ついた人なのに……なんだかとってもカッコよく見える……。

「なんで……貴様、本気でアルファ隊の味方をしているわけじゃないのにネ。その上、貴様はどう見てもヒーローじゃない、悪人が足掻いているだけにしか見えないのにネ。悪人がなんでこんな事をしてるネ！ 悪人は悪人らしく、さっさと我に協力してソイツを殺す手伝いをするネ！」

「わけわかんねエ事言っでんじゃねえぞクソ野郎オ……確かに、オレはコイツの仲間をブツ殺しまくった極悪人だ。それ以外にも通った学園の汚れ仕事を沢山引き受けた。だからってなア……オマエの味方をする理由にはならねえだろ」

「ミネツト達を殺す以外にも……汚れ仕事を……？」

「やっぱり、あの人はそれが嫌で……」。

「だからそんな仕事ばかりを押しつける、佐井学園という所を辞める為に……？」

「ふ、ふざけるでないネ！ 綺麗事言っでんじゃないネ！ 貴様がどう足掻こうが……なにをしようが！ 所詮悪人は悪人だネ！」

「それくれえ分かって動いてんだよ。確かにオレみたいなクズが何やったって、それで全てがチャラになるとは思ってもいねエ……けどよお、だからってコイツを見殺しにしている理由になんのかア！ だからコイツをここで死なせるわけには、絶対にいかねエんだよッ！」

「そう言いながら、あの人は弾丸のように陳へと右手を伸ばして突っ込んだ。」

「目で追うのがやっとな速度。あの人もう瀕死の重傷なのに、ミネツトの為なんかに……っ。」

「あのまま行けばあの人が勝ちそう……だけど、ミネツトだってアルファ隊。」

「それなりには戦いを経験しているから、不利なのは陳ではなくむしろあの人だとわかってしまった。」

「確かに陳も右手を大怪我しているけど、あの人の怪我は陳の怪我とは比べ物にならない。」

「あの人はギリギリで貫通を防いだと言っても、銃弾が頭に命中した」

んだよ？

大怪我している人が長時間、今までのように動けるはずがないよ……ッ！

「ひい！ ああっ！」

怖がりながらも、あの人が振るう悪魔の右手を回避してゆく陳。避けられても避けられても、あの人はしつこく陳を狙って右手を振るう。

気圧や酸素濃度を操ったり、暴風を吹かせたり爆発を起こせたりするあの人が、どうして苦手な接近戦を挑んでいるのだろう。きつと怪我がひどくて大胆な攻撃ができないのかもしれない。だから、息の根を止める為には接近する必要があるのかも。でも、瀕死の重傷の人の動きなんて知れたものだった。

頼りない攻撃を次々と避けていく陳。その頼りない攻撃を延々と続けるあの人……。

「ア、う……が、ア………ッ」

やがて……あの人はバランスを崩した。立て直す事もできず、力尽きるようにボタンと地面に転んでしまった。

それからもう……あの人はピクリとも動かない。

「そんな……っ」

「う、は……ハハハハハッ！ そうだよな……コイツは撃たれたんだ、無事なわけがないよネ！」

もうダメだ……陳はボロボロ。

でも、ミネットに戦う力は残されていない。

最後の希望だったあの人も動けない。

終わった……ミネットは、上から課せられた任務さえ達成出来ずに……ここで死ぬんだよね？

しかも、関係がなかったあの人まで巻き込んで……っ。

最悪だ。ミネットは本当に最低だよ……。

「さて……そろそろ」

ニヤニヤしながらミネットのほうを見てきた。

「警察だ！手をあげて地面に伏せろ！」

刹那、いきなりパトカーや機動隊の人員輸送車がここに入ってきて、中からゾロゾロと警官や機動隊の人達が降りてきた。盾を構え、威嚇の為に銃を構えている。

もしかして、誰かがこの光景を見て通報したのかな？

「……くそっ！」

とにかく、助かったのかな……？

流石に気功や拳法、射撃の達人だった陳も数の暴力には勝てないらしく、警察相手に大人しく降伏しそのままひれ伏した。よかった……

「君！大丈夫かね！」

一人の警官がミネットの所に駆け付けてきた。

ミネットが男に捕まっついていて、その男が銃を乱射しているって通報だったのかな。

「み、ミネットは大丈夫です！ それよりあの人を……っ！」

「あの人……？」

あの人をのほろを見つめると、頭部からの夥しい量の出血に警官は絶句していた。

でも大丈夫……あの人、まだ生きている。

ミネットにはわかるもん。

あの方はまだ……辛うじて生きているよ。

「これはひどい……」

「あの人　悠はまだ生きてます！ ミネットはどうでもいいからあの人を助けてください！」

ミネットはまだ軽傷だもん。

戦えないけど自力で動けるし、こうして元気に喋っていられる。

でもあの方は重傷……いや、意識不明の重体だった。

意識はないしピクリとも動かない。何より出血がそろそろ危険なレベルのような気がするよ。

「……っ！」

ミネットの叫びに答えたのか、警官は無言のまま行動に移った。

それから数分後、近くに飛行場があったからかヘリが到着。

早川悠という一人の超能力者は東京の病院へ搬送された……。

あれから3日、7月も半ばの頃。

ミネットは大した怪我じゃなかったし、何より無国籍者だつてバレたら行動が出来なくなるから、だからミネットは入院をオススメされても拒否し、一旦本部へ戻って回復魔法をかけてもらった。そのおかげで今はとっても元気です。

ミネットは今、東京都にあるとある大きな病院に来ています。この病院のとある病室にはあの人が寝ている

「早川悠」

調子よくミネットは病室へ足を踏み入れる。

つていけないここ病院だったよ。病室では静かにしていないと怒られちゃうよね。

「……………」

「やっぱり、人の寝顔って素直だねっ」

ベッドの横に來ると早川悠が眠り姫のように眠っていた。単に意識がないだけだけだね…………。

でもお医者様曰く、意識を取り戻す予兆はあつたらしい。

早ければ明日くらいには起きるかもしれないらしい。

でも、お医者様曰く心配される事がいっぱいあるらしい。

例えば後遺症……………。

『よく撃たれてこの程度で済んだね。僕の腕にかかれば死にはしないと思うけど、ただ……………脳の一部分が破片によって欠損している。欠損部分はおくわずかだが……………まあ何らかの後遺症は避けられないだろうね』

後遺症。



病気や怪我が治癒した後も、機能障害などの症状が残ること。

まだ目覚めてもいないし、重度か軽度かはわからないけど……。

心配だよ……悠。目覚めたら超能力は使えるかな？

いや、その前に日常生活を送れるのかも心配だよ。

だから……もし元気でそんなふうじゃなかった場合でも、ミネットはこの人を全力で介護します。

早川悠はミネットの命の恩人だもん。

なにより……この人はいっぱい傷ついて、どこにの行き場がなくて……。

ミネットは弱いから守れないかもしれない。むしろ迷惑を掛けてしまいかもしれない。

それでも、せめてこの人の心の支えにはなりたい……だから。

「悠、たとえみんながあなたを恨んでも……ミネットはあなたの味方だよ？」

優しく言いながら微笑んで、さらに一言。

「だから、早く元気になってね……悠！」

ミネットはまだ目覚めぬ命の恩人に、ゆっくりと、約束を刻むように唇を触れ合わせた。

## 第90話 / 死闘（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ども！ お久しぶり、本来の主人公藤島圭介だぜ」

伊吹「あんた主人公だったっけ？」

圭介「ちょ！ 本来の主人公は俺だぞ！ 決して6話連続で俺の出番を奪った一方 行野郎じゃないぞ！ 主人公は俺なんだからな！」

あかり「うそだろ！？ あたはずっと早川悠が主人公だと思ってた！」

暮葉「拙者もミネットさんがメインヒロインで、早川悠が主人公だと思ってました！」

明智「藤島、確かお前は春に原って書いて春原じゃ……………」

圭介「ちょっと待てコラアツ！ 俺はポジション的に春に原よりも岡に崎って書いて岡崎だぞ。これでも主人公だからな」

千早「先輩…………先輩の名字って確か井ノ原（井ノ原）で、いつも筋肉って言うていたような」

圭介「それも違うから！ むしろ筋肉は重原だから！」

純奈「ふん！ クソ介の名字なんて吉野<sup>ふじしま</sup>で狂犬で  
」

圭介「それも違うわ！ 俺は鍵ゲーのサブ違うからな！」

葵「お兄ちゃんっ。とうとうお兄ちゃんが脇役に……でも皆の見て  
いない所でいちゃつき放題  
」

圭介「やめい！ 次回から俺視点に戻るからな！」

## 第91話 プールって嬉しいイベント!……のハズ

時は遡る事3日前、金曜日早朝の藤島家。

……眠い、なんという眠さだ。

朝ごはんを食べているというのに、眠気のせいかロクな味がしねえよ。

今日は特別寝起きが悪かったもんだから、伊吹にいい加減にしろとビンタされたし。

にも関わらずまだ眠たい……ちくしょう、絶対昨日まよキを見たせいだな。

しかも今日は帰ったらバカス。さらに今夜は夜深ししてい天を見なけりやいけない。

ハードすぎるぜ……俺のアニメ三昧な日常。

「けーすけ様、味噌汁落としそうなのですよ」

「悪い、ああ……眠っ」

「お兄ちゃんまた深夜アニメ見てたの?」

「うつせ黙れ。葵、てめえも水曜日はいつも眠たそうだろ」

水曜日に眠たいって事はどーせ葵の事だ、神様 オルズでも見ていたのだろう。

葵は俺の突っ込みに何も言い返せないのか、ただ苦笑いをしているだけであった。

「あっ! そういえば今日はお兄ちゃんとクーにゃん、体育の授業

でプールあるんだよね?」

「はい! 夏だけにプールなのです!」

「プールねえ……」

我が初芝高校は古宇坂で最も伝統ある高校である。

部活動も活発であり、中には水泳部というものも存在している。

その水泳部がまた強豪であり、何故かと言うと学校にプールがあるのだ。

つまり、夏期は態々高い金払ってプールを借りなくても、自分の学校でプールの練習ができる。

水泳部にとってはありがたい施設なんだよな。

でも、巻き添え食らうように一般生徒にもプールの授業があるのだ。はあ……プールとか憂鬱すぎるぜ……。

「もきゅ? けーすけ様、なんだか顔色がよろしくないのですよ?」

「ね、寝不足だよ……」

「あれねえ? もしかしてお兄ちゃん……まだ うにゃっ!」

そう言いかけた瞬間、俺は瞬時に葵の口を左手で塞ぎ、右腕で首をガシッと固定してみせる。

「ああおいくウウウウウン! 少し黙ってようかア? あア!」

「け、けーすけ様がフジシマレータに一方藤島っ!」

「はわわわっ! ご、ごめんなさいお兄ちゃん!」

THE・顔芸。

葵を捉えた俺は鋭い目つきで彼女を睨み、殺意すら感じる勢いで彼女を脅してやった。

これぞ俺流うるさい妹の黙らせ方である。

ぐふふふ、言わせねえぞ……俺とプールの事については絶対になア。さて、葵も反省したようだからそろそろ解放してやろう。

「はふう〜……あ、ああ……はにや……っ」

「葵さんしつかりしてください！ けーすけ様の眼力に負けちゃダメなのですよ、葵さん！」

暮葉が葵の必死に肩を揺さぶる。

どうやら、今ので葵の魂はあの世へ行きかけてしまったらしい。よかったな葵。死ねば死んだポチと再会できるぜ。

「葵を勝手に殺さないでよ！ しかもポチはお兄ちゃんの友達のペツトだよね!？」

「お前人の心が読めんのかよ!」

「ま、まあまあ二人とも！ それより早く食べないと遅刻しちゃうのですよ?」

「ええっ!?! お、お兄ちゃんが葵を脅すのがいけないんだからね!」

「お前いつからツンデレになったんだよ。まあいいや、さっさと飯食って学校行くぞ」

危うく葵との口喧嘩から変な求愛イベントが発生する所だった。葵がデレモードになると長いからな。本当に遅刻しちまう可能性が高い。

褒めすぎずいじめ過ぎず、これが正しい妹の扱い方である。

全国の妹の事で悩むお兄ちゃん諸君。これ家族関係良好の一番の秘訣だからな。

さてと、飯も食い終わったしそろそろ学校にでも行こう。

靴を吐きドアを開けると、やっぱり家の前の電柱に伊吹がによっかかっていた。

俺ら三人に気付くと伊吹はわざとなのか、俺に視線を合わせないように近づいてきた。

うう……ツツパリ伊吹ちゃん。それって新手のいじめ方でございましょうか？

「おはようございます伊吹さん！」

「お姉ちゃんおはよう！」

「二人ともおはよう」

ニッコリ笑う伊吹ちゃん。

ちよっと待て、なんか一人足りなくありませんか？

「あ、あのさ伊吹……俺は？」

「あ、圭介。あんた部屋でおはろーしたじゃん？」

「……寂しいからもっかい」

「っ……おはようは一回で十分！」

「ぐはあっ！」

まるで飼い犬に説教するような言い方で、伊吹はビシッと正論を俺にぶつけてきやがった。

ちくしょう……俺は伊吹のペットちゃんじゃないんだぞ。

朝っぱらからシヨックだぜ。しかも今日は一日鬱になる予感。

だって……今日授業でプールあるんだもん。

えっ、普通男なら女の子の水着が見れるから、大いに喜ぶべきイベントじゃないかって？

ハハハッ、確かに女の子のスク水姿は最高だよ。俺だって超みたいしそれだけは楽しみだよ。

でもプールだぞ、プールって事はもちろん泳がされるんだぞ？

「そーいえば葵さん！ 青山さんの事って何か聞きました？」

暮葉のヤツ、いきなり誰かの名前を出したと思ったら青山さんだっ  
て？

そついえば転校騒動あったよな。しかも昨日か一昨日の話のような  
気がするぜ。

頑張ったよなあ俺。古宇坂一の名家の当主相手にお説教だぜ？

あの時は勢いでやっちまったけどさ、今思い出すとおしっこ漏らし  
ちまいそうだよ。

「うん！ 千早の転校なくなっただって！」

「もきゅー!? ホントなのですか!?!」



「あの子の転校取り消しになったんだ。よかったわね！」

「よかったあ〜」

青山さんが転校しないことがわかり、大喜びの暮葉と伊吹。とりあえず、俺もよかったって相槌を打っておこう。

衝撃の事実を告げられたような気もするが、別に俺は知っていたのであまり驚けない。

だって昨日、青山さんからメールでそんなお知らせがあったから。ちなみに、最後のありがとうにハートで萌え死にそうになったのは秘密だ。

「一時はどうなるかと思いましたよ！」

「そうね。とりあえずこれで安心だわ」

「うん！ お兄ちゃんもよかったね！」

「お、おう」

本当に良かった……青山さん、この学校で自由に出来る事になって本当……転校が取り消しになってよかった。

その後も、俺達はくだらない雑談をしながら学校へ歩き続けた。

やがて時が経ち、初芝高校2年4組教室。

2時間目が終わって次は体育。そう、プールのお時間だ……。

そんなイベントがあるせいか、2時間目が終わった瞬間教室が騒がしくなった。

「おっしやああプールじゃあああっ！」

「女子の水着やでえーっ！」

「僕もテンションが上がってきたぜ！」

特に三馬鹿なんて今朝からこのノリ。

そりゃあ女子の水着は嬉しいけどさ、よくプールでそこまでハイテンションになれるぜ。

こっちはもう今朝から憂鬱だったのによ。

「どーしたんだよ圭介？」

「冴えない顔してどうしたんだい？ 何か悩みごとでもあるのかい」

「大吾に重原か……別になんでもねえよ」

「そっかあ。僕ら先行ってるからな〜！」

「そうそう、圭介も早くパラダイスにおいでよ」

「わかったわかった。授業には出るから心配すんな」

大吾と重原はルンルン気分ですプールへと向かった。

大吾は多分単純に泳ぎたいだけだろうが、重原はきつと女の子目当てであるう。

アイツ、普段は興味ない素振りを見せているが、意外にムツツリスケベだからなあ。

女の子に興味がないと言いつつも、部屋にはちゃんとお宝本もあっ

たしな。

まあ、俺らは健全な男子高校生。お宝本の一冊や二冊は持っていて当然であろう。

しかしプールの授業……ああ、ホントはサボッていたいぜ……でもよ。

「あれ？　けーすけ様行かないのですよ？」

「圭くんプールなのに張りきってないねえ」

「意外だわ。いつものメンバーで一番変態の癖につ」

「誰が変態じゃ！　わかったよ行けばいいんでしょ行けば！」

全くみんなせつかちだなあ、つーか俺は男だぜ？

皆さんと違って水着は海パン一丁だから、着替えにそんな時間はかからないだぞ。

暮葉はプール好きっぽいし、小坂や伊吹も何気に好きそつだ。

大吾も泳ぐの結構好きらしくて、重原や三馬鹿は女の子目当てで。

まあ……女の子目当てって所なら俺も同意できるぞ。

だけどなあ、プールの授業自体は心の底から嫌だぜ。

だって俺、水恐怖症な上に泳げないから……ッ！

## 第91話 プールって嬉しいイベント!……のハズ(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

小坂「ねえ、誰が一番女装似合うと思う?」

暮葉「もきゅ? 大林さんは小柄ですからいいと思いますよ?」

伊吹「ダメダメ、大林は顔がいかにもスポーツ少年よ」

生駒「クソ介とか案外似合うかもしれないよ?」

明智「ふ、藤島は男前だからダメだ……っ!」

あかり「変態兄貴は女装させたくない……キモイから!」

ミネツト「はいはいはい! 悠は絶対女装似合うと思うよ!」

暮葉「悠って早川悠ですか……? 確かに中性的ですよねあの人!」

明智「案外本当に女の子に見えるかもしれないぞっ」

葵「なるほど、鈴 百合子ってわけだね!」

圭介「お前ら人様で気持ち悪い想像してんじゃねえ!」

悠「チツ……誰が女装似合っつて？ アア！？」

## 第92話 プールなんて嫌だ……と思っていたら！

突然だけど、俺は水恐怖症なんです……ハイ。

いや、なんでって言われても怖いもんは仕方ないじゃん。

別に洗顔とかは平気なんだが、何故かプールや海に入るのに抵抗があるんだよなあ。

こうなっちまったのにも理由があるが、話すと長くなるので手短にまとめよう。

あれは俺はまだ8歳だった頃

けいすけっ！ けいすけっ！

あ、ぶあ！ た、たす けてっ！

あの時俺は伊吹とプールで遊んでいたのだが、俺は溺れていた5歳くらいの女の子を目撃。

そのまま助けようとしたんだが、しがみつかれたまま泳げず、結局俺まで溺れてしまった。

しかも、助けた女の子に足蹴りされてしまい、俺はどうする事も出せずに水中へ落ちる。

5歳の女の子に悪気なんてない。怖くて暴れたという幼稚園児ならよくある行動だ。

だが、8歳だった俺はそれにやられてしまい、水中で次第に意識を失っていった。

結局5歳の女の子は親に助けられ、俺も伊吹に助けられたのだが……。

何故だかその一件以降、俺はプールとか海とか……とにかく、泳げるくらい溜まった水が怖くて仕方なくなってしまうた。

見る分には何の問題もないんだが、入るのは絶対に嫌だ。

「つーか、この歳になっても怖いって……水恐怖症だってバレたら笑いモンだぞ？」

みんなより後に登場した俺は、ぶつくさ呟きながらプールサイドを歩く。

既にみんな着替えて集まっている。プールサイドで談笑をしている者が多い。

んで、俺は一人憂鬱な気分で……………。

「あつ、クソ介じゃん」

「はい？」

「藤島、こんなところで何やってるんだ？」

なんだあ、この声は明智と生駒かあ。

明智はいいけど生駒は苦手なんだよなあ。

まあスルーすると明智にも悪いし、とりあえずここは振り向いて

「ぶ、はあ　！？」

「うげっ！　クソ介が鼻血噴いた……………っ」

「ど、どうした大丈夫なのか！？」

心配して迫ってくる明智…………アカン、近づかれるとまずいぞっ。

しかも女の子の前で鼻血って、これじゃまるつきり変態じゃねえか。とにかく…………今からでもコイツらから離れて誤魔化さないと。

「ス、スマン……さつきチヨコ食い過ぎたんだ」

「どうだか？ どーせクソ介はナギちゃんの水着姿に興奮しただけだよ。下心丸見えだっつーの」

「すみにゃん藤島を信じてあげよるよ。藤島、チヨコは程々にするんだぞ？」

「お、おう。心がけとくよ……っ」

「言えねえ……今更生駒のツッコミが事実だつて絶対に言えねえ。そうですよ。どーせ俺は明智のスク水姿に興奮したんですよ。だつて巨乳にスク水だぞ。貧乳スク水ならなんとも思わんが……正直、破壊力強すぎるっす。」

「反則だろ……その二つの吉備団子は……ッ！  
ちくしょう誰だよ水泳の授業を男女混合にしゃがったヤツは。  
しかもいくら伝統ある高校だからって、なんで今時旧型スク水なんだよ。」

「このままじゃ……俺が出血多量で死んでしまっじゃねえかよ！

「そろそろ整列の時間だ。藤島は鼻血出てるから無理はするなよ」

「えっ？ アッハハハ、鼻血くらいどうってことねえ！」

「プールを鼻血で汚すなよ。クソエロ介」

「俺はクソエロじゃなくて紳士だ！」

ふう……やっとあの二人が立ち去ってくれた。



明智は破壊力強すぎる。巨乳だけにやっぱり谷間がすげえもんだ。しかも生駒のスタイルも何気によかったし、胸は明智ほどじゃないが美しい気がしたよ。

やっぱスク水はラインがモロに出るからな。

つるぺったんなロリよりも、ある程度成長した娘が着るのが一番ヤバイぜ……。

クソツ、水恐怖症だつてバレる前に貧血で倒れそうだ。

……もちろん、4組に整列しても地獄は続いた。

当然俺ら男子の視線は女子なんだか、その女子のスク水姿がまたなんと。

特に我が4組のミス・おっぱい、小坂亜紀ちゃんなんて……。

「ぶ、がはあ　　！」

「む、ムツツリーニ圭介！　大丈夫か、しっかりしろおおおおつ　　！」

「忘れていたよ。圭介って画像なら二次でも三次でも平気だけど、実際に見ると一番初心だった」

や、やべえ……明智とどつちが大きいんだろう。

小坂のスク水姿もヤバすぎる……ああ、貧血で死にそう。

しかも小坂だけじゃない。伊吹の起伏の少ない身体も中々抱き心地が良さそうだ。

暮葉のぺったんこボディも捨てがたい……スク水つて誰でも似合うから困る。

特にぺったんこな暮葉ややロリ体型な伊吹はお似合い。

生駒だつてスタイルいいし……でも、スタイル抜群の小坂と明智は

46cm砲以上の威力だ！

「もきゅ？ けーすけ様……鼻血噴いてません？」

「暮葉は知らないかもだけど、圭くんって意外と初心なんだよねえ」

「普段一番変態な癖に、なんでなのかしらね？」

仕方ねえだろ、水着って全裸よりもエロく感じるんだから！

俺はな、別に全裸なら辛うじて耐えられるんだ。

暮葉と一緒に入った時だって耐えられたし、葵のだって事故で何度か見た事あるからな。

あとパンチラを見たって、そりゃ嬉しいし興奮はするが鼻血は噴かない。

けど……水着や裸ワイシャツ、裸でもニーソとか穿いていたらもうダメだ。

全裸はエロいけどエロくない、興奮するけど鼻血を吹くほどではない。

やっぱり女の子は着エロでしょ。そして俺は 実際に見る着エロに滅茶苦茶弱いんだ！

「う、ぐ……油断した。着エロフェチの俺には厳しいぜ……プールって場所は！」

「おお！ 僕らの性戦士圭介が復活したぞ……っ！」

「立派だよ、よく復活したね！」

「僕には理解できないが、よくぞ死の淵から蘇った！」

「ふ、はははっ！ 俺のド根性をナメてんじゃねえぞ！」

あの世に行きかけたがなんとか復活を遂げた俺。  
そんな俺を褒め称える大吾と重原は笑顔で泣いていた。  
ただどいつ倒れる事か……こうして鼻血を押さえるので精いっぱい  
だぜ。

水は怖いし女子の水着姿で貧血になりそうだし。  
女子の水着だけは嬉しいが、ああ……早くプールの授業終わらない  
かな。

……案の定、プールの授業というのは名ばかりだった。  
体育教師の紅瀬先生は基本遊び人で、教師の癖に髪が金髪で……。  
俺ら生徒の間では彼を“ヤンキー紅瀬”と呼んでいたりする。  
人柄はもちろん見た目通り軽く、今日の授業だって

『そんじゃまあ！ 今日自由でいいや、つか面倒だしモ前から高校生だから毎回自由でよくね？』

と、いうわけで授業は完全に自由時間、つまり俺らの遊び時間にな  
ってしまった。

まあ……自由だからこそ泳ぐ必要もないし、俺にとっては都合がい  
いけどわ。

「きゃ〜！ 重原くんすっごい筋肉！」

「はははっ、一応毎日鍛えているからっ」

「ねえねえちょっとだけ触らせて！」

「いいよ」

「あーたーしーもおーっ！」

「はいはい順番だからねー」

ちつくしょう重原の野郎筋肉でモテやがって。  
普通の爽やかキャラ+健康的で強そうな筋肉。  
ツラだつてむしろいい方だ。まったく……モテ男ってクソムカつく  
ぜ。

「ダァーッハハハ！ 喰らえ、ウォーターパラダイスウウツ！」

「黒やん過激やあぁっ！」

「うおおお、右手が……右手が真っ赤に燃えるっ！」

「喰らえ三馬鹿！ 僕の唯ちゃんへの愛を込めた……ハイドロ唯ち  
やんカノオオオオン！」

大吾は三馬鹿に混じって馬鹿な水遊びをやっているし。

「うひひひっ。ナ〜ギちゃんここがええんかあ〜？」

「ん、ひゃ、あ……だめっ、すみ、にゃん……っ」

生駒のヤツなに明智のおっぱいマミマミ……いや、モミモミしてる  
んだよ。

これもう下手すりゃ18禁のアウトだろ。

あの二人が不純異性交遊で停学になりませんように……。

「伊吹ーパスッ！」

「ッ！ 亜紀っ！」

「あいよつと！」

伊吹と小坂は友達とプールでバレーをやっていた。

なんともまあ微笑ましい光景。伊吹のあの姿は本当に癒されるぜ。

……しかし、さつきも思ったけど本当に自由な授業だな。

これ野原にバレたらヤンキー紅瀬シバかれるんじゃないか？

「けーすっけ様っ」

「うおわあっ!?!」

いきなり後ろから締め技……かと思いきや、ただ暮葉が抱きついてきただけであった。

その……背中に微妙に膨らんでいるものが。

暮葉でも一応あるんだ。っーか小さい割に柔らかい ってツッコ

ミ所ソコじゃねえ！

「けーすけ様はプール入らないのですかっ？」

「俺は別にいいよ。っーか早く離れて欲しい、じゃねえとみんなが

……」

俺は冷や汗を掻きながら辺りを見回す。

野郎共が横目で俺を睨みながら、ヒソヒソと何かを話していやがる。

「藤島の野郎オ……やっぱ木下と付き合ってたんじゃないのか？」

「マジかよ。アイツ確か国宗と付き合ってるんじゃないか？」

「いや、3組の明智と付き合ってるって話もあるぞ」

「ちょっと待て。俺は一年のツインテールの後輩と付き合ってるって聞いたぞ」

「はあ！？俺は物静かな1年の子と付き合ってるって聞いたんだけど」

「待てよお前ら。藤島って妹に手え出したんじゃないか？」

犬もキュイーンと鳴きながら逃げるくらいの殺意が、俺に向けられている気がしてならない。

いや、絶対に向けられている。

今俺が暮葉と下手な事をすれば、確実にモテない野郎共に殺されてしまう。

つてか、俺もモテない男子の一人のハズなのに、なんで俺が野郎共に妬まれているんだよ。

そして、なんで暮葉相手にこんなハッピーなイベントが起こってるんだ？

こんなに嬉しいフラグを建てた覚えは皆無なんだが……。

「も、申し訳ありませんけーすけ様っ！」

咄嗟に離れた暮葉は本気で頭を下げてきた。

角度は斜め45度……コイツ、一番丁寧なお辞儀をしてきやがった。

「何もそこまで謝らなくても……」

「でもでも、拙者のせいでけーすけ様が恨まれている気が」

「大丈夫。重原は俺以上に妬まれているし、誤解は多分すぐに解けると思っから」

そう……最近まで女子のメアドが数えるほどしかなかった俺。いや、今も数えるほどしかないが、今年の春頃と比べれば大分マシだ。

だが女友達が増えたからと言って、別に彼女が出来る気配はない。結局俺は非モテ野郎だし、彼女なんて生まれてから一度もないから妬まれる要素ナシ。

今回は単なる誤解である……。まあ、青山さんには告白されたけど、何故だか恋愛感情が沸かなかつたし……。

俺、ホントに彼女が欲しいと思っているんだろうか？

それは思っているはずだけど、じゃあなんで青山さんを好きになれなかつたんだろうか。

やっぱ、俺って気付いていないだけで好きな人がいるんじゃないや、流石にねえよな。

「……あの、けーすけ様………っ」

「……え？」

「だ、大丈夫ですか？ 今朝からぼけーっとしてますし、鼻血も沢山噴いてました。あと……今だって表情が冴えないのですよ？」

まずい。

あまりにもボケっとしていたせいで暮葉に心配をかけている。

「ゴメン、俺は大丈夫だから暮葉は遊んでおいで」

「もきゅ、やっぱり変なのです！ 遊び好きなけーすけ様が遊ばないだなんて！」

仕方ないだろ水恐怖症なんだから。

……なんて、こんな小さな女の子に言えるハズがねえよな。

やっぱり体調不良って事で誤魔化そうかな。

でも暮葉は心配性だから……困った、このピンチをどう切り抜ければいいんだ。

「別にいいだろ。泳ぎたい気分じゃねえんだよ」

とりあえず不機嫌そうにそうは言ってみた、だが。

「ウソはやめてください」

「う、ウソ？」

「けーすけ様は隠しごとが下手糞です。今の言葉なんて嘘丸出しでしたよ？」

「……………」

いつもと違って真剣みを帯びた暮葉のマジな言葉。

弱ったなあ……完全に俺の嘘がバレている。

ここでまだ嘘をつくようなら完全に暮葉の信頼を裏切っちゃまっし、事実を言うべきなんだろうか？



……でも嫌だなあ、絶対馬鹿にされるじゃん……暮葉にだってあんなへタレな事言いたくねえよ。

「あの……本当のことを言ってください……っ」

「……………っ」

「けーすけ様。どんな理由でも拙者は絶対に笑いません。けーすけ様のことを小馬鹿にしたりなんかしません。ですから拙者に打ち明けて欲しいのです。トモダチの拙者に……っ」

暮葉は俺の前に座り込んで顔のみを近づけ、至近距離から俺を潤った瞳で見つめてくる。

ちよっと動けば額や鼻、そして唇が触れ合ってしまったいそうな……それほど近い距離。

彼女の生温かい息が顔にかかる。やべえぞ……これ、マジでカップルだって誤解されちまう。

だが、ヤバい状況なのに何故か嫌な気がしなかった。

太鼓を叩くような心臓の鼓動が早く、激しくなっただけ。

頬までかあっと熱くなる……きつと俺の頬は紅く染まっているに違いない。

困った。嫌じゃないけど不思議な気分で……その上暮葉に迫られていて……っ。

でも、暮葉に引く気はなさそうだし。それに暮葉は無意識に顔を近づけているっばいし……。

……ああもうわかったよ。馬鹿にされる覚悟で言っただけですよ。

「……………俺、水恐怖症なんだよ……………っ」

「もきゅ？ 水恐怖症……………ですか？」

それを言うとようやく暮葉が離れてくれた。  
よかった……でも暮葉との距離が近いのは相変わらず。

向かい合う俺達との距離は1mもなかった。というか暮葉の綺麗な  
太股が俺の足に当たっている。

ちくしょう、何故だか鼓動が全く落ちつかねえ……っ。

……ってくだらねえ事考えてねえで、暮葉に事情を説明しろよ  
俺！

「その……アレだ。水道水とか洗顔とか、そういうのは平気なんだ  
けど……海とかプールとかとにかく泳げる深さと量がある水がダメ  
で……」

「けーすけ様……それでさっきから……っ」

「おかしいだろ？ トラックに轢かれるのは平気なのにさ、たかが  
過去に溺れたただけで水が怖くなっちまうなんて。笑えよ暮葉……」

俺はヤケクソ気味に、自分を嘲笑うように言い放った。

こんなヘタレのクソ野郎は笑われて当然だ。  
むしろ笑われない方がおかしいんだ。

だが。

「笑えないですよ！」

暮葉は俺みたいなのヤツの為に怒鳴ってきた

「くれ、は？」

「ふざけるのもいい加減にしてください！ 誰にだって欠点はある

のですよ……?」

「そりゃあそうかもしれねえけど……」

「それで苦しんでいる人だっているのです、今のけーすけ様のよう  
に」

暮葉が俺の肩を掴んで熱血教師のように訴えてくる。  
なんてこつたい……俺が暮葉に負けてるぜ。

でも　もしかするとこれでいいのかもしれない。

「だから拙者はけーすけ様の欠点を笑えません。ネタにして馬鹿に  
することもできません」

「暮葉……」

早川悠と戦って後には俺が暮葉を慰めた。

そこで俺と暮葉は友達になった　でも今は逆である。

俺が暮葉に怒られ慰められている。

友達とは対等なモノ　そう、つまりこういことなのだ。

「あ……っ、も、申し訳ございません……」

俺を怒鳴った事に対する謝罪であろうか。

何かに気付いた暮葉は急に頭を下げてきた。

「気にするな、悪いのはどう考えても俺なんだから」

「けーすけ様……あっ、そうだ!」

暮葉は何かいい事でも思いついたのか、表情を明るくしてポンっと手を叩いた。

「どうしたんだよ」

「今は恥ずかしいでしょうから……放課後、一緒にここで泳ぎましよう！」

「えっ……な、なんで!？」

アメリカ軍に特攻するゼロ戦の如く、暮葉はぶっ飛んだことを提案し、それを俺にぶつけてきた。

放課後二人きりで泳ぐって……ちょ、待て。これなんてエロゲー？

「水恐怖症、嫌で嫌で悩んでいるのですよね？」

「ま、まあそりゃあ……治るものなら治したいけど」

水恐怖症のままだったらイザ海に行った時、俺だけ泳げず女子に引かれる悲しい自体に。

もし間違つて海上自衛隊にでも入って、万が一戦争になって護衛艦が撃沈されたら一人だけ泳げず、というか海が怖くて飛びだせず、艦と運命を共にするという昔の提督みたいな事に。

そして何より……将来もし子供が出来たらヤバい、子供にナメられてしまう。

絶対に嫌だ……そんな絶望しかない未来なんて嫌だ。

「でしたら今日から拙者と特訓なのです。けーすけ様、夏という絶好の機会に水に慣れましようっ」

暮葉も乗り気だし、この笑顔をぶち壊したくはない。

何より男としてこんな恐怖症……さっさと治してしまいたい。

「よろしく頼むな、暮葉」

「お任せなのです！」

こうして、俺と暮葉は放課後に特訓する事を約束した。

「ばか圭介……っ！」

第92話 プールなんて嫌だ……と思っていたら！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「プールで生駒で思い出した。神 みに生駒みなみって子いたよね？」

圭介「あ？ そっいえばいたような……それがどうしたんだ？」

大吾「あの子可愛くないか!？」

圭介「いきなりどうしたんだよ、また二次元キャラに惚れたのか？」

大吾「フフフ……あれこそ水泳部って感じでイイよね！ 僕はもう一瞬で惚れたよ!！」

圭介「唯に惚れて撫子に惚れて……お前って結構浮気性だよな」

大吾「じゃあ圭介の好きな子は？」

圭介「アズにゃん歩美希メイ子ハルナ打ち止めマサムネ秀吉黒猫（ry）」

大吾「好きな子のうち4人が同じ声優って……竹 病乙、つか圭 介口リコン気味だろ……」

重原「あれ、一人だけ男の娘じゃない？」

圭介の好きな子は20人はいます（ただし二次元に限る）。

## 番外話 超能力が使えちゃう場合

超能力                   今日の科学では合理的に説明できない、超自然な能力を指すための名称。

でも、それは一般レベルの話でしかない。

どついう事かと言うと、実は超能力者は実在するという事。

世間で認められないからその存在は影のものになっているだけ。

超能力者の中には自然に発現した人もいれば、私のように東京の人工浮島にある私立佐井学園に通う事によって、能力を発現させた超能力者だっているわ……。

これは、ようやく春本番と言う3月ごろのお話よ……。

「へえ、君可愛いね？」

「綺麗な黒髪じゃん、俺こついう長い髪の女の子好みだわあ」

「マジかよ、でも胸小さくね？ お前ロリコンかよ！」

「うつせ黙れ！ 幼さがちつと残ってるけどよお、見た目と逆に大人しそうなのがいいんだろ？」

私の名前は西園寺雪乃<sup>さいおんじゆきの</sup>、私立佐井学園2年……これでも超能力者。佐井学園は全寮制なので、許可を得ないと外出が出来ないという面倒くさい規則がある。

増してや私達、超能力者は外での能力使用は基本禁止だから。



外出許可を得るのは結構難しい事なのよ。

でも、私はなんとか学園から外出許可をもらい、私は東京の街を一人ふらつき遊んでいた。

そしたら……変な奴らに絡まれてしまった。

「へえ〜赤い瞳、すっげえ珍しいかも」

「緑っぽい制服つてのも珍しいなあ、もしかして最近出来た佐井学園って進学校のお嬢様？」

「ねえねえ！俺ら暇なだけとさあ、これから遊びに行かねえ？」

馬鹿馬鹿しい誘いをしてくる男3人。

正直、嬉しい気持ちよりも不快感しかないわ。

別に顔がいいと悪いとかそういう問題ではない。

ただ……私は単純にこういうのが嫌いなだけ。

「丁重にお断りさせていただきます……貴方達と遊んでいるほど暇じゃないわ」

「ああ？」

「なんだよコイツ……お高く留まりやがって」

はあ……こんな奴ら、恐怖も何も感じないわね。

ただ、あまりに頭が悪過ぎる上に、相手の実力も見抜けないだなんて……。

正直、ただのおバカさんにしか見えないわ。

「おい、こいつヤツちまおうぜ？」

「そうだなあ……まあたまにはガキ臭い女も悪くねえな！」

「……ふふ、おバカさん」

私は不良達を嘲笑った。

だって彼らはホントにおバカさんだから……私の実力を全く見抜けなかつたんだから。

襲ってくるなら仕方がないよね。少しくらい能力を使つたつて文句を言われる筋合いはない……。

数十分後。

私は佐井学園開発科の寮、自分の部屋へと戻り自分のベッドに転がっていた。

佐井学園開発科とは、表向きは技術開発分野を専攻するするものだけど……。

実際は私達のような超能力者を育成する、そんな怪しげなものだわ。私も最初は知らないで入って……いつのまに超能力者になってしまった感じだわ。

ところで、さっきの不良達はどうしたのって？

そんなの、能力で氷漬けにしたに決まってるわ。

私の吹雪念力は僅かでも水分さえあれば、瞬間的に冷やす事によつて氷などを発生させられる。吹雪だろうが氷の塊だろうが、私にかければそれくらい作るのは余裕。

そして作った氷は雪は念力によつて勢いよく飛ばす。もちろん氷以外のものも念力で動かせる。

そういうわけで私は、そこらの不良には絶対に負けない力を持っているわ。

「あ、雪乃お〜おかえりっ」

「ふふ、ただいま」

寮の私の部屋に戻ると、早速ルームメイトの木山朱実きやまあけみが歓迎してくれた。

朱実は私のクラスメイトであり、同時にルームメイトで幼馴染のとっても元気な子。

簡単に言えば、私は朱実と一緒に学園に騙されたってわけ。

「もあ〜こんな時間までどこほつつき歩いてたの？　もしかしてまた秋葉原？」

「御名答。今日は沢山同人誌を仕入れてきたわ」

「うわあ〜すごい量……あんたのオタク趣味も相変わらずね」

「ふふふ、私にとってその言葉は褒め言葉よ」

「まああたしは別にいいんだけどね、一応雪乃は学園で五本指に入る超能力者だぞ？　雪乃の趣味を知ったらみんなどう思うかな〜」

「さあ？　でも私はこの趣味を捨てるつもりはないわよ」

理由は分からないけど、私は二次元がとっても大好きだわ。むしろ現実リアルがクソに思えるくらいにね。

だから、誰が何と言おうと私はこの趣味を捨てるつもりはないわよ。

「あっはははっ。あ、そうそう雪乃、学園長がなんか雪乃に用事あ

るらしいよ?」

「学園長が私に? 珍しいわね、普段は早川と久我って人以外とは接触しない頑固親父が」

「早川と久我ってアレ? 学園で一位二位を争う超能力者で、確かライバル同士だったけ?」

早川は風系の超能力者で……一度だけ会ったけど冷めた人だったわ。まるで全てを捨ててしまったかのように……。  
対する久我はクールだけど不良みたいな感じ。

……まあ、二人とも普通の人ではなかった気がするわ。

「あの親父の事だから口クナ用事じゃないとは思っけど、とりあえず行ってくるわね」

「おっけ〜気を付けてね雪乃っ」

「ふふっ、生きては帰ってくるわよ」

そんなセリフを残して私は部屋を出る。

ふふっ、一見戦場に行くようなセリフだけど、別にそういうわけでもない。

そもそも学園長は生徒が大事で仕方がないハズ。

だから、死ぬような事は普通はありえないハズよ。

……ただ、一部の生徒に汚れ仕事をさせているって噂はあるけど。

「失礼します」

薄暗い西洋風の広間、その中央に佇む背の低いバーコード頭の男。ワインのように紅いスーツに、金ぴかの腕時計。成金のようなその男は不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと振り向いてきた。

「君が五本指の一人、西園寺雪乃君だね？」

「はい……あの、学園長。私に何か用でございますか？」

「うむ。彼だけでは厳しいだろうから。実力の高い君にも是非手伝って欲しい事がある」

「私に……ですか？」

学園長はゆっくりとその足を動かし、少しずつ私に近寄ってくる。

煙草臭いわね……出来ればその銜え煙草はやめて欲しいわ。

でも、生徒が教師にモノ申すなど反逆に近い。

増してや相手は学園長。そんな小さなことで注意など私には出来なかった。

弱気な私に近付いてきた強気な学園長は、私に一言。

「……お前に人殺しをしてほしい」

「……ッ、どういう意味でしょうか……？」

「言葉のままだ。これは極秘情報なのだが、最近どうも無国籍者が国内で暴れているらしい」

「無国籍者……ですか？」

「そつだよ君。存在が許されない無国籍者だよ。その無国籍者は無国籍者同士で争っており、至る所で何らかの能力を使った痕跡を我が学園は発見したんだ。無国籍者の2グループが争う事自体には問題はないが、そいつらは超能力か何かは知らんが何らかの能力を使う連中だ。このまま野放しにしていたらいずれ我々も危険かもしれない。将来の事を考えての、身の安全の為の極秘作戦だ……どうだね西園寺君？」

ちよつと待つて、これつてどういふ事なのよ。

普通学園長が生徒にこんな話をする？

ここは現実よ。<sup>リアル</sup> やっぱりこの学園は何かが狂つてるわ……っ。

「……申し訳ございません。そんなトチ狂つた作戦には参加したくありません」

相手が善か悪かもわからないのに……増してや人殺し？

そんなの、自分が死んだつてやりたくないわよ。

やっぱりこの学園は 狂っているわね。

「……そうか、下がつてよいぞ。ただし……この事は秘密でありもし暴露した場合は……君に特別指導が待ち受けているからな」

「……わかりました、失礼しました」

背を向けて早歩きで逃げるように部屋から出る。

一応、学園長相手にお辞儀はしたけど、正直そんなことなんてしなくなつた。

私は今あの学園長に対し、猛烈に不信感を抱いている。

あの人の考えている事がわからない。あの人のやりたい事がわから

ない。

どうして善悪も決まっていけないのに、増してや無国籍者だって証拠も怪しいのに。

どうして学園長は人殺しを……よりによって立派な犯罪を生徒に犯させようと……？

「はあ……っ」

思い返せば学園に入って以来、ロクな事がなかったわ。

学園に騙されて超能力を発現させられて……まあ、そのおかげで不良にはアツサリ勝てるけど。

それでも常人とは違う人になるよう、脳を散々いじくられてしまい、拳句の果てには学園長からの殺人命令……狂っている。この学園は何もかもが狂っている。

……いいんだろうか。立派な教育機関がこんなんで、ホントに正しいことなのかしら？

「……正しいわけないわよね……っ」

このままじゃいけない……絶対にいけない。

生徒がいつ学園長の無理な頼みごとに巻き込まれるか。

いつ生徒が何かの騒動に巻き込まれてしまうか。

そのような状況に置かれている学園なんて、絶対におかしわよ。

みんなが騒がないのは知らないから。でも私は違う……知ってしまった。

知りたくもなかった事実を知ってしまった。

そして、知ったからにはもう黙ってはいられない……っ。

私の中の何かが真実を闇に埋めてはいけないうつて、私自身に強く訴えかけている。

「……そうよ。特別指導なんかで震えている場合じゃないわ……っ、私は五本指の一人よ？」

その気になれば軍隊だって相手にできるのよ。

そんなすごい能力の持ち主が、内容が不明な特別指導が怖いからって真実を見過ぎす？

できるわけがないわ。そうやって……今まで情報が隠蔽されてきたんじゃないの。

だから 変えてみせるわ。この学園そのものを……この超能力チカラを使つて……っ！

「ふふ、やってやるですっ」

つと、私は気合いを入れる為にアズにゃん風にそう言ってみる。

そして衝動的にくるつと振り向き、私はある場所へと向かった。

……場所は変わって学園の東側、実を言うと学園の東側には出入り口がない。

実際にはある事にはあるのだが、警備員らしき人達によるお堅い警備のおかげで侵入不能。

だから私は裏ルートからの侵入を試み、それは見事に成功した。

その裏ルートとは天井裏のダクト。ふふっ、ここから潜入する人はラノベの武偵くらいだろうね。

「よっつ」

通気口から抜けだし無事に着地を果たす。

今度から通気口付近も警備することね。



超能力を使うに当たって最も重要なのは頭脳だから、レベルの高い超能力者は基本頭がいいのよ。

私でさえ、校舎東側への侵入方法をパツと思ひ浮かべれたのだから、まあそもそも、頭の固い大人達には無理な発想なのかしらね。

「さ、てと……お仕事開始よ」

こうみえても東側に侵入したのには理由がある。

だって生徒はおろか教師さえ一部を除き、侵入が認められない未知のエリアよ。

普通に考えれば秘密はここにあるわ。きっと、何かの機密文書くらいはあるハズよ。

それさえ盗めば学園長が何をしようとしているか、その為には何が行われるのか、闇に包まれ隠された真実を暴く事ができる

「止まりなクソアマ」

「……ッ」

しまった、あまりにもものんびりすぎたのかな。

私は見張りの者に見つかってしまったらしい。

仕方がない、一瞬で倒して情報が伝わる前に先に進もう。

私は後ろを向き、超能力を使うために身構える　　が。

「久しぶりだな。テメエは確か……西園寺雪乃ってヤツだったか？」

「久我劉生……ッ」

背が高く、整った顔立ちでくすんだ金髪の男。

まさしく早川悠のライバル　　久我劉生その人であった。

「ここは立ち入り禁止だ。 テメエは一体ここで何をしたいやがる」  
「それはこっちのセリフよ……貴方こそ立ち入り禁止区域で何をしているのかしら？」

「逆に質問して自分は答ええない魂胆か。 まあいい、俺は学園に頼まれてここの警備をしているだけだ。 クソが……特異点潰しを俺にやらしてくれたらよかったのよ。 こっちはアイツの影に隠れて地味な警備だぞ」

久我は不満そうにブツブツと文句を言うが、その中に気になる言葉がいくつか含まれていた。

学園に頼まれたって、今日の私みたいな感じかしら？

それと……特異点潰しって一体……？

聞いた事のない単語に深まる謎……直接聞いた方が早いかしら。

「久我、特異点って一体なんなのかしら？」

「テメエ関係はないだろ。 知った瞬間テメエはカタギじゃなくなるしな……」

「カタギ……？ もしかして、特異点潰しは人殺しかしら？」

「ハア……？ あゝあゝカタギは見逃そうと思ったけど、どうやらテメエ……それを知っていてここに侵入したみてえだな？」

知っていて？

それって、まさか本当に特異点潰しは人殺しなの？

しかもまぐれで特異点潰しの中身を当てた瞬間、久我の目付きが9

0度ほど変わってしまった。

獲物を狙う肉食獣の目、徹底的に殺すと言わんばかりの殺意。まずいわね……このままじゃ私は食われる豚だわ。

「カタギには手を出さない……相変わらず硬派なのね」

「関係ねえ奴は関係ねえ……区別はしっかりしているつもりだ」

「貴方のその硬派なキャラ、漫画のキャラなら好きになってたわよ？」

「お生憎様リアルここは現実だ……」

「残念ね……五本指同士、出来れば戦いたくはなかったのに……っ」

本当に出来る事なら戦いたくはない。

何故なら久我は最強と言われる早川と張り合う男。

つまり 学園で一位二位を争う強さとチートな能力を振るう男よ。

私も同じ五本指とは言え、彼との直接対決で勝てる自身はないわ。

本当……出来る事なら戦いたくなかったわ、でも……。

「さてと、お片付けの仕事開始だ……」

久我は不気味なくらいゆっくりと、細いが若干筋肉質な腕を横に大きく広げた。

そして 目が前髪で隠れ、口元が不気味に笑うと。

「テ、メ、エ、は、殺、し、確、定、だ、な」

そう告げた。

「ッ！」

刹那、突然身体が重く、全くと言っていいほどに身動きが取れなくなる。

全身に満遍なく重りを乗つけられたような感覚。

いや、自分自身が重くなったような感覚かもしれない。

私は潰されるような重みに耐えられず、思わず膝を綺麗に布かれた絨毯についてしまった。

私は久我が使う超能力を知っている。だから、久我が何をやらかしたのかもすぐにわかった。

「じゅ、じゅう……りよく……っ？」

「知ってたか。確かにテメエの所だけ重力を10倍に設定してやった」

「……波動操作ウェーブハウンド」

ウェーブハウンド波動操作。久我が持つ超能力。

この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る。

他の能力の代用的な技も使えて応用力は極めて高く、使い方次第では破壊力も抜群。

「動けねえだろ……？ なら、次はコイツだな……」

あまりにもチートすぎる能力の持ち主、久我の次なる攻撃とは何かしら。

答えは今すぐ私に放たれようとしている。

突然、久我の掌から光り輝く光線が放たれる。

今の私は10倍の重力に耐えるので限界。あの光線を避ける事なんて不可能だわ。

でも、氷の装甲を作りだす事なら辛うじて。

精神を集中させて複雑怪奇な計算を瞬時に行う。同時に己の幻想を思い浮かべる。

すると、ごく僅かな水分をかき集める事に成功し、私の前に強固な氷の装甲が完成した。

「……………ツ……………ツツ！」

装甲と言っても所詮は氷。瞬時に粉々に破壊されてしまったが、光線から身を守る事には成功した。

久我め……………相手を見下して本気を出していないわね。

本気でやればあんな装甲、砕かず貫通して私の胸さえも貫いたハズよ。

「手を抜いたわね……………っ？」

「小手調べだ。テメエがどの程度の使い手だな」

「それで、私の力はどうなのよ……………？」

「……………同じ五本指にしては大した事ねえな」

「ふざけた事言ってくるわね……………私は動けなくても貴方を攻撃できるのよ？」

あまりの重力に身動きを取る事ができない、全身に激痛を感じる。それでも単純な演算なら余裕のよっちゃんだわ。

ニヤニヤと笑いを浮かべながら私は、水分を集めて4本の大きな氷柱を生成する。

先端が刀のように鋭利な氷柱を、今度は念力で砲弾のように動かして見せる。

氷柱も粉々になるが、恐らく戦車の装甲さえも貫く威力のハズしかし。

「全く　面白い技を使ってくれるな　」

一言呟く時間。

そんな時間なんてなかったハズ。氷柱は喋り出す寸前に久我に突き刺さっていたハズ。

でも、あの氷柱が身体に突き刺さる事はなかった。

氷柱はなんと久我の手前で水となり、細かい飛沫だけが久我に噴きつけていた。

ただそれだけ……全くの無傷で北叟笑む久我の姿が私の目に映った。

「そんな　」

「驚くなよ。俺は物質を別モンに変えたただけだ」

「……超弦理論ね……ッ」

「よく御存知だな。素粒子レベルの波として変換し、不思議じゃねえけど別の物質に変化させる」

説明しながら久我はゆっくりと近づき、いや……いつの間にか私の目の前に立っていた。

しゃがんだまま動けない私を見下ろし、相変わらず北叟笑む久我。

なによ……その人を嘲笑う目は？

「重力、解除」

「……ッ！」

何故か久我は重力を元に戻す。おかげで身体が身軽になった。

身体に痛みが残る一方で、解放感が私の身体を支配する。

久我が重力を1Gに戻し、元気に動ける今のうちに攻撃をしようとした。

「いぎゃ、あッ！」

刹那、革靴の先端が私の顎に突き刺さる。

久我の足蹴りを受けてしまった私は、成す術もなく後方へ吹き飛ばされる。

その後方にはT字路があり、私は背中をその先の壁へ強く叩きつけてしまった。

「ぐ、ぎゃ、あ　　ッ！」

「重力を元に戻したのは動く為だ。俺も10倍の重力じゃ満足に動けねえ……」

説明しながら嫌らしく歩み寄ってくる。

敵が近づくにつれて心拍数が上がってゆく。

あまりにも強すぎて……久我が怖い……。

「しかし学園も難しい注文をしてきやがる。校舎を破壊せずに能力を使いやがれとは……あの暴風野郎には無理な話だな。だからこの俺を警備員に選んだわけか」

しかも久我は本気を出していない。屋内だから本気を出せない。待  
て、考えなさいよ私。

屋内だから本気を出せない。という事は……久我は真の力を発揮で  
きない。

……理解出来たわ。この状況だからこそできる、久我への必勝方法  
「さてと。さつさとクソアマを愉快的な死体に仕上げてるか」

能力を使えば校舎が傷つく。

そんな判断からか、久我は慣れた手つきで拳銃を構え

「 させると思つかしら!？」

私は久我が拳銃を構える僅かな隙を突き、一瞬のうちに銃を持つ右  
手を握る。

しかしそれだけだと撃たれてしまう。ならどうするか 答えは決  
まっている。

私は大気中の僅かな水分を瞬間的に冷却。その範囲は私の右手が握  
っているもののみ。

ただし私は影響を受けないよう、能力を使用した瞬間この手を久我  
から離れた

「う、ぐあ つ、めっ ツッ！」

「……凍傷になっちゃえば、銃は使えないわよね？」

そして、痛み故に人間は冷静さを失う。

久我も例外ではなかった。



焦って左手を突き出し　光を変換して光線<sup>ビーム</sup>でも放つつもりだった  
のでしよう。

「遅いわよ　ッ！」

右手に作りだしたバレーボール程の塊。

それをボーリングのボールのように投げつけるが、距離が近い  
ために久我の腹部に命中する。

「　が、はっ！」

減り込む氷の塊の弾を受け、久我は大きく開けた口から鮮血を吐き  
だす。

密度の高い白色の塊が、久我の血で紅く血みどろに染まってゆく。  
でも、この程度じゃ久我はまた動きだす。だから

「吹き飛びなさい　久我劉生ッ！」

「う、ああ　ッ！」

私は念力で塊を動かし、塊に押される久我も一緒に吹き飛ばしてみ  
せた。

吹き飛ばされた久我は50m程先にあった壁に激突。

丁度、そこは廊下がL字型に曲がっている場所だった。

壁への衝突による背中への大打撃、腹部に力強く減り込む氷の塊。  
久我は血を吐き、直後に力強く歯を食いしばる。

あの攻撃に耐えた久我は、激痛にムカついてしまったのか。

「痛ってえ……だろオッ！」

「18インチの電……二段射撃　　ッ！」

左右両手に作り出した約46cmの巨大な電。  
ネブラスカ州に降ったものより若干小さいけど、それでも十分巨大な電を二個念力で飛ばした。

前後に並び、一直線に突き進む電。先頭を砲弾のように飛ぶ電は久  
私の光線で粉々に破壊される。

校舎の破壊を防ぐべく、最低限の威力でしかなかった光線は電と共に  
砕け散った。

しかし　私が放った電は二つ。そのうちの一つは未だ久我へと突  
き進んでいた。

「な……ッ！　防御と攻撃を同時に　　！？」

「これが私の全力全開　　突き進めええええええッ！」

「格下が……ッ、この屈辱はいつから晴らす　　ッ！」

ドゴン！という衝突音が炸裂する。

衝撃は一瞬、でもその一瞬はあまりにも残酷。

この一撃で、五本指同士の勝負は決した。

夜空は輝いていないけど、その代わり東京の街灯りが綺麗だわ。

私はお台場海浜公園から夜景を眺め、勝利の余韻に浸っていた。

あの後　顎への一撃と激突による背中への痛みが思いの外大きく、

結局私は東側校舎から脱出した。

機密文書を盗み出す事に失敗し、結局何の秘密もわからなかったけ  
ど……。

でも、私という一人の人間にとっては、とても大きな事をしたような気がする。

だって……勝ったのよ。最強と呼ばれる早川悠と張り合っていた、あの久我劉生に

「勝利、ねえ………っ」

いまいち実感が無いわ………だって、相手があの久我劉生だもの。きっと戦場が校舎内で、校舎破壊禁止令があったからこそ、私は久我に勝てたんだと思うわ。

久我の能力は強すぎて、強大な能力を満足に使う事ができなかった。戦場が狭いから行動範囲が狭かった。

学園による制限と狭い戦場、そして久我の僅かな油断が勝負を決した。

「……………」

「……………つたく、一人で勝利の余韻に浸ってんじゃねエよ」

声がした。聞いただけで背筋が凍る、冷たく残酷で血に飢えた、狂気に満ちた声が……。

「ッ！」

衝動的に振り返る。

月明りと街灯りとが照らす砂浜に一人、白く狂った悪魔のような人の少年。

狂気に満ちた超能力者 早川悠が不気味に佇んでいる。

「奇跡的に久我のクソ野郎を倒したって聞いてなア………」

「……だ、だから何。貴方には全く関係のないことでしょうか？」

「佐井学園からオレへの御命令。潰して身柄を確保しろってよオ？」

つまり最強の超能力者、早川悠は佐井学園の命令で動いているのね。だから久我の名前が出てきたのね。

そして、敵意……いや、殺意を私に向けている理由も……っ。

「な、なによ……やるの？ 私は貴方のライバルを倒したのよ？」

「なに言ってるんだ三下。オマエ……もしかして調子に乗っちゃってるワケエ？」

「乗ってないわ。ただ事実を素直に伝えただけよ……っ」

「オマエ程度が久我に勝てるってのは、1%程度の奇跡が起きたって事だろ？ それによオ……オマエ、まさかオレが久我と互角だっと思ってんのか？」

「なによ……違うの？」

「確かにあのクソ野郎とは一度も戦ってねえ。けど、なんでオレが一番なのか知ってるか？」

早川悠が一番でいる理由……そんなの、私が知ってるわけないじゃない。

しかも何様よ。直接戦った事がない癖に、自分のほうが強いって思いこんで。

こういう勝ってる気分だけの人……私、あまり好きじゃない。

早川悠との比較ならまだ久我のほうが好きだわ。

「知らないわ。第一、貴方と久我がどっちが強いのかもね」

「なら、たっぷり愉快に素敵に教えてやんよ……」

つまり……私と一戦交えたってわけね。

いいわ、やってやるわよ。

久我を倒した勢いで早川も倒してやる。

そうすれば、私は一番最高の超能力者に勝った超能力者として、学園から恐れられる存在になる。

そうなれば警備員は逃げ出すし、強力な人間も戦うのを躊躇するはずよ。

本当にいい機会じゃない……。

「……倒してあげるわ、早川悠……ッ！」

「遊んでやるよ……三下ア」

早川は確か大気そのものを操る能力者だったはず。

でも、所詮それだけよ。氷の塊を暴風で吹き飛ばす事はできない。私の念力は暴風程度じゃ無効化できない！

「……ぎゃ、は……！」

「ッ！」

信じられない事が発生した。

ざっと直径25cmはあった塊が、砲弾のように突き刺さるはずだった。は

ただど塊は早川を目前に、瞬間的に蒸発してしまった。  
なにが……一体、何がどうなったのよ……。  
どうして……なんであんな一瞬で大きな塊が蒸発しちゃったのよ。

「例え念力を使っても、オレの暴風の膜を突破できねえと思うが…  
…今のはサービスだ」

「さ、さーびす……っっ？」

「ホントは気圧操作で押し潰してもよかつたんだけどな。愉快的なシ  
ョーを見せつけんのも面倒だし、だから分子運動の操作で我慢っつ  
ーわけだア」

「うそ……っ」

「オマエの氷くらいいくらでも砕ける、蒸発もさせれる。仮にオレ  
に近づけたとしても、オレの周囲に張り巡らした暴風の膜がソイツ  
を弾き返す。吹雪ブリザードつても無駄だア……逆に風を吹かしてオマエに  
吹雪を向けれるんだからよオ？」

「そんな」

全身の震えが止まらない。足が震えて動かない。冷や汗が流れ続け  
る。

背筋が凍って死後硬直のように硬い。そして……恐怖によって感じ  
る圧迫感。

……違う、何かが違うわ……早川悠と私。根本的な何か……ッ。

「さっつてとオ……そろそろおやすみするかア？」

「いや……っ、た……助けて……っ」

殺される　瞬間的にそう悟った。

「ふふ、あはは……ふぎゃは、ふはぎゃは、あはっ、いひゃはっ、ぎゃははははっ！」

私が最後に聞いたのは　早川悠の正気の沙汰とは思えない笑い声だった。

笑い声が響くと同時に、私は次第に意識を失っていった……。

……

……

……

「……ん、あれ……っ？」

夢……だったのね。

気付けば空き地に放置してある土管の中。　そういえば、昨日も一昨日も野宿だったわね。

その度に私、西園寺雪乃は……つい4ヶ月前の出来事を思い出していた。

あれから私は特別指導を受け、その真っ最中だったけど……耐えられなくて逃げ出してしまった。

ついに一昨日学園を飛び出し、気付けば古宇坂という知らない街に来ていた。

……そういえば、夢で思い出したけど……朱実、元気かな？

今朱実はなにをやっているのかしら。

それと、早川に久我……アイツらも今はなにをしているのかしら？  
多分……懲りずに汚れ仕事を続けていると思うけれど。

結局、私があの時決起した意味ってあったのかしら……？

決起の結果は早川に惨敗して、学園にあった私の居場所がなくなっ  
てしまっただけ……。

「……はあ、高校……行こうかな？」

ふとそんな事を思った、佐井学園……上に勝てないなら辞めちゃう。  
う。

反乱を起こした私ならきつと学園も不要と判断し、バツサリと勢い  
よく捨てるはずよ。

じゃあ、捨てられたら……せめて、普通の女子高生として生きよう  
かしら。

「……決めたわ。もう転校しちゃう……っ」



番外話 超能力が使えちゃう場合（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

あかり「なんだよ!? この無駄に長い番外話っ!」

圭介「さあ? でも後々本編に響くんじゃね?」

あかり「んみや、なんで?」

圭介「いや……なんとなく?」

あかり「なんとなくかよ! そんなはつきりしない圭介はあたい信用しないからなっ!」

圭介「だってわんらないだろ? 某学園都市ラノベが好きな作者がインスパイアしてそれっぽい書いただけかもしれんし」

あかり「それインスパイアじゃなくてパクリだろ!」

圭介「とにかく……よくわからんっ!」

あかり「だ、だめじゃんっ!」

特異点潰しの裏側を書きたかったのが本音です。

### 第93話 特訓と乱入と夢と

そして約束通り、全ての授業が終わった放課後。

俺と暮葉はマジでプールに来てしまった。

なんてこつたい……3〜4時間目のプールのせいで水着がびしょびしょだ。

正直着心地は最悪であるが、暮葉曰くプールに入っちゃえば気にならないとのこと。

それにしても、なんだって今日に限って水泳部の練習がないんだか。おかげで今日の放課後は……超怖い目に遭いそうな気がするぜ。

「さあけーすけ様っ、早速ですけどプールに入ってみるのですっ」

「あの……ちなみに拒否権は？」

「ありません！」

「……ですよねー」

ちくしよう水怖えええええっ！

でも暮葉に逆らうとなんか怖いし、晩御飯とか抜かれそうだ。

抜かれたら葵に作ってもらうか、俺が自分で焼きそばを作ればいい話だが……。

今はお金がないし、葵のグロテスクな料理は出来れば食べたくない。

「けーすけ様っ！ 水恐怖症克服にはとにかく水に慣れることが大事なのです」

「水になれるねえ……って、お前まさかいきなり突き落したりし

ないだろうな？」

「大丈夫なのです！ 無理強いたり急に慣れさせようとするのは逆効果だって、同じアルファ隊の水系統魔法が得意な後輩に言われた事があります！」

でもアルファ隊ってただの魔法使い集団だし、信じていいのかそんなこと。

あと、暮葉に後輩なんていたんだ……。

しかも水系統の魔法使いつて、俺にとっては恐怖以外の何者でもねえぞ。

「でも、無理強いしない癖に拒否権はないんだな」

「だって慣れなきゃ治らないのですよ？」

「……………」

「大丈夫ですよっ、拙者がちゃんと支えてあげますから！」

「お、おう……………」

このちっこい暮葉が何故だかお姉ちゃんに見えるよ。

それにしても、スク水は身体のラインがよく出る水着だが。こうして見ているやっぱり暮葉ってぺったんこ

「……………今、失礼なこと考えましたよね？」

「ソナナコトナイゾ！？」

「なんでカタコトなのですか!？」

「キノセイダ、ツツケタマエ」

「もきゅ！ やっぱりけーすけ様失敬な事考えてるのです！」

だって仕方ないじゃん男の子なんだから。

そりゃ目の前に水着の女の子がいたら、自然に女の子の事を考えちゃいますよ。

男と言う生物ほど可哀想なものはいないだろう。

目の前に乙女がいればすぐに反応しちまうんだから……フッ、だが逆に考えよう。

女子にだって変態はいる。つまりだ……変態じゃない人間っているのだろうか？

「……あの、今度はなに小難しい事考えてるのですか？」

「気にするな。ちょっと夏休みどうしようかな〜って考えてたんだ」

「今夏休みのこと考えるような場面じゃないですよね？」

……ちくしょう、なんて鋭い子なんだ。

暮葉の前じゃ下手な事は考えられないな。

しかも暮葉との距離が……その、今にもくっ付いてしまいそうなくらいに近い。

でも、そんなことを考える前にまずこの場をどう切り抜けよ

「ぐ、ぼあ　　!?!」

その時、突然尻を何者かに蹴られた俺は、成す術もなくプールへ地

獄のダイブを果たしてしまった。

ていうか俺は恐ろしき水ではありませんか！  
し、しかも俺泳げねえ……ッ！

「あ、ぶお　　ちよ、助けてえ〜っ！」

「け、けーすけ様っ!？」

沈みそうになって慌ただしく暴れる中、俺は暮葉の横に立っていやる犯人を見た。

俺を蹴り飛ばし、恐ろしきウォーターパラダイスへダイブさせた犯人は……。

「公の場でいちゃいちゃすんな！　ばか圭介っ！」

スク水姿の伊吹がプールサイドで、俺を蹴った右足をあげて必死に叫んでいた。

伊吹のヤツめ……よくも俺をプールに突き落としてくれたな。

しかもアイツ　俺が泳げないのを知っててやりやがったろ！

ちくしょうあのツツパリめ……悪魔のような事をしやがって……ッ！

暮葉が妙に近くにいるのは俺のせいじゃない。暮葉が勝手に近づいているだけなのに。

「い、伊吹さん！　けーすけ様は水恐怖症で泳げないのですよ!？」

「あはは〜ごめん暮葉。伊吹が止めても言う事聞かなかつたんだよな〜」

「い、はあ　　ッ…」

あ、アカン　小坂までスク水姿でプールサイドに立っていやがる。その丰满な胸に抜群過ぎるスタイル。

何より微妙に濡れたその身体。裸よりもエロく見える旧型スクール水着（巨乳ver）。

あまりのエロに俺の鼻が悲鳴をあげた。

鼻血、そう　鼻血だ。我慢の限界に達した俺は遂にそれを噴射してしまったのだ。

それもプールの中で……プールの水は俺を中心に真っ赤に染まってゆく。

「もきゅっ！？　け、けーすけ様がまたムツツリーニ状態に！？」

「ごめん、圭くんの鼻血はあたしのせいかも……っ」

「へ、へんたい……非常識……ばか圭介っ！」

うるせえ変態は仕方ねえだろ。こちらら元気が有り余る思春期の男子だ！

思春期男子が変態つてのは健康的でいい事じゃねえかよ。

まあ、浅間部長のようにアブノーマルすぎるのは流石に危険だが。

しかし……ぺったんこの暮葉。体つきは女の子でもロリ体型な伊吹、そしておっぱい小坂……っ。

うぐ……なんだここは。天国ってヤツなのか……ッ？

「が、は　ア　ッ！」

「もきゅっ！？　け、けーすけ様の出血量が危険なレベルに！？」

「圭くん泳げないしみたいだし、しかもあの様子だと貧血だから……

……そろそろやばいんじゃない？」

「あいつ……まさかまだ泳げなかったの……っ？」

オイッ、ツツパリ伊吹ちゃんめえ〜忘れてたのかよッ！

ちくしょう………忘れたとは言わせねえぜ。俺はまだ……泳げない、そして水が怖え。

でも今は水よりも……お前らの水着姿のほうが……ッ。

「……我が生涯に一片の悔い無し……ッ！」

「はわわわわわっ！ 死んじゃいますっ！ このままだとけーすけ様が死んじゃいますよっ！」

「圭くん死んじゃうって。いいのかな〜伊吹？」

「……えっ……いや……圭介っ！」

伊吹がプールに飛び込み俺の所まで泳いできた。自分で突き落とした癖に必死になって泳ぐ伊吹。それを見た時安心した俺は やがて目の前が真っ暗になる。

……

……

……

「ねえ、けいすけっ」

空が茜色に染まる時間、古宇坂市内にあるとある公園。

その公園にあるブランコに、まだ幼かった俺と伊吹はちょこんと座っていた。

赤いランドセルにシヨールパンに水色のTシャツ。

伊吹はどこにでもいそうな小学生の恰好をしていた。

この伊吹はおそらく、小学校1年生の頃……それも伊吹の様子から入学してすぐの頃かな。

暗黒時代を抜けだし、ようやく友達が出来てこの頃の伊吹は上機嫌だった。

そういえば、俺の視線も低い……俺も子供になっているのか？

「なんだよ？」

「あしたの作文になんて書く？」

「そーだなあ……俺、サシレッドになるって書く！」

「けいすけ昔からずっとそれだね！」

サシレッドとはサシレンジャーの登場人物で、サシレジャーとは当時流行っていた戦隊モノだ。

戦隊モノと言いつつ最後はレッドと敵キャラのタイマンという……。

まあ、ぶつちやけ戦隊の意味があるのかわからない物語であった。

戦隊モノにありがちな特殊兵器はあっても、肝心のレッドに必殺技がなかったりで。

結局、レッドの攻撃手段は殴る蹴る程度であった。

「うん！俺、レッドになってこれからも伊吹を守るんだっ！」

「えっ……でも私、もういじめられてないよ……？」



「でも悪い奴はぜったいいるもん！ だから俺、強くなつて伊吹を守るんだ！」

ぐはぁ……ガキの頃の俺、どんだけ痛くて恥ずかしい事言つてんだ。

「……決めたっ！」

「え、なにを？」

「私はね、作文にけいすけのお嫁さんになるつて書く！」

おい、ガキの頃の伊吹がなんかすっげえ爆弾発現しやがったぞ！俺のお嫁さんになるつて……しかもこんな満面の笑みを浮かべて。いやいや、でも誰もが子供の頃「結婚」つて、超軽い気持ちで言うだろ。

俺だつて葵に結婚しようつて言つた事がある。もちろん幼稚園の頃に。

「じゃあ、俺はレッドになつて伊吹の旦那さんになるっ！」

「うん、約束だからね……！」

「うん！」

ホントに子供つて軽いよねえ……微笑ましい。今だったら冗談でもこんな事言えねえぞ。

……つてアレ、なんだか視界がぼやけてきて……。

……。

### 第93話 特訓と乱入と夢と（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「さて今回は過去暴露大会だ。みんな子供の頃に軽い気持ちで結婚しよって言った事ある!？」

重原「圭介は葵ちゃんかあ……圭介も昔はシスコンだったんだねえ」

大吾「今でも十分シスコンだと思うけどな」

圭介「てめえら勝手に言うな！昔は知らなかったんだよ、兄妹じゃ結婚できねえって！」

重原「じゃあ今なら駆け落ちEND目指すのかい？」

圭介「しねえよ！二次元じゃねえんだよ、妹なんて恋愛対象になるか!」

大吾「広ちゃんは？冗談で言った事ある？」

重原「俺は近所に住んでた子かな。でもその子とは卒園以降会ってないよ」

大吾「ギャルゲー的にはこの後、その幼馴染は帰ってくるな」

重原「ないない。所詮現実だからね」

圭介「大吾はどうなんだよ。お前って案外言っただな」

大吾「もちろん言っただよ！ おんぷちゃん将来は結婚しようねって！」

重原「……………」

圭介「今の子、おジャ 女知ってるのかな…………？」

大吾は昔から完全二次元派だった。

## 第94話 侵入者（前書き）

あれ、おかしいな？

ちゃんと1時に投稿設定しておいたはずなのに……。

いつもより遅れて申し訳ございません！

## 第94話 / 侵入者

不意に目が覚めた。

随分と昔の夢を見ていたような気がする。

ぼやける目を細めると、視界には延々と続く青空と点々と存在する白い雲。

どうやら俺はプールサイドで横になっているらしい。

「あつ……圭介……っ！」

何かの声優のように綺麗かつ可愛らしい声が聞こえる。

伊吹……ああそっか。出血多量で気絶したんだっけか。

目がぼやけていてよくわからんけど、伊吹……泣いてるのか？

「おお〜圭くんが復活したっ」

「けーすけ様っ！ よかったのです……」

「んん……な、何分くらい俺寝てた？」

「え〜っと、10分くらいピクリとも動きませんでしたよ？」

10分……その間ずっと俺は夢を見ていたのか。

随分と昔、俺と伊吹の軽い約束……。

きっと伊吹はあの約束とか覚えてないんだろうなあ。

まあ覚えていたらいたで大変だよ。もし本気だった時の事を考えたらな。

とりあえず思い出されても困るし、夢の事は言わないようにしよう。

「け、圭介……大丈夫……？」

「……あれ、伊吹……泣いてんのか？」

「ば　　ッ！　　な、私が泣くわけないでしょ！」

伊吹は顔を真っ赤にしながらも涙目で必死に訴える。  
なんだよ。これって相当我慢してるって事じゃねえか。

「心配かけてごめん……」

「えっ……け、圭介が謝る必要は………っ」

いつものように否定はするものの、いつもみたいな勢いを感じられない。

今の伊吹はツツパリではなく、一人の弱々しい女の子であった。

その後ろで小坂が何故かニヤニヤしており、暮葉は伊吹のように今にも泣きだしそうであった。

なんか、俺のせいでプールが修羅場になってる気がする。

小坂は修羅場を楽しんでいるみたいだ。でもこっちは全然楽しめねえ……っ。

「……ごめん」

「……ッ」

あまり事態を大きくしたくは無かった。

そんなヘタレた理由のせいかな、俺はただ謝る事しかできなかった。

水恐怖症……ちくしょう、てめえのせいだぞ。

って、水なんか怖い俺が一番悪いんだよな……。結局この後特訓という空気でもなかったので、全員プールから上がって現地解散となった。

夜、俺は自分の部屋のベッドで考え事をしていた。

プールから出た後の事。つまり解散してから今までの事を思い出す。俺は暮葉と伊吹との3人で帰ったんだが、家に帰るまで殆ど会話ナシ。

伊吹も暮葉も妙に暗くって、話をしようにも声をかけ辛いという……。ちくしょうどうすりゃいいんだよ。俺はどっちにも悲しんで欲しくないんだぞ。

それがなんか……殆ど俺のせいみたいないな感じで。

……ってか、事実俺のせいだよな……水恐怖症の俺ホントに死ねばいいのに。

「……………ッ」

色々この後の事を考えるよりも……まず二人に謝った方がいいよな。あーだこーだ言う前に謝った方がいい。絶対にそのほうがいいと思う。

よし、まず同じ家に住んでいる暮葉に謝ろう。

決心した俺は起きあがって扉を開けようとした

「けーすけ様っ！」

「えっ？ く、暮葉っ!？」

刹那、勢いよく開けられた扉。

特攻隊のように突撃してきたのは血相を変えた暮葉だった。

「あの……もうお身体は大丈夫なのですか!？」

「え、俺はなんでもないけど……それよりどうした？」

「おバカのけーすけ様にも分かりやすいよう単刀直入に言います」

心配して来たのかと思いきや用事があつて、しかも地味に馬鹿にされたような気がする。

ちくしょう暮葉のヤツ、一体何の用事で来やがったんだよ。

まあいいけど、俺も暮葉に謝りたかったから。でも謝るって空気じゃないよな……一体。

「ホントに何があつたんだ？」

「サヴィエト亡命政府の魔法使いが古宇坂に侵入してきました」

「サヴィエト？ それってアレか、俺の身柄を狙ってるっていう？」

「はい、人数は2人です。1人は今朝拙者の後輩を襲いまして、途中で乱入してきた何者かとの戦闘で重傷を負った上に逮捕されらしいのです」

「何者かって……サヴィエトのヤツって魔法使いだろ？ そんなのを倒すってどこのバケモノだよ」

「拙者的にはけーすけ様も十分バケモノなのですよ？ 素手しか武器がないのに魔法使いにも匹敵する人達を倒したのですからね」



それって……明智光秀とか早川って野郎とか、あの辺の連中の事言  
ってんだよな？

確かにアイツらバケモノだった。光秀でさえ暮葉と互角で早川に至  
ってはチートじゃん。

でも、確かに俺ってその二人に勝ったよな。

「それを言われると反論できねえ……ッ！」

それにしてもアルファ隊でもねえのに、一体誰が魔法使いつてのを  
倒したんだ？

まあそれだけ敵が減るわけだし、別に誰が倒したっていいけどさ。  
でも気になるよなあ。そんなに強い奴が古宇坂にいるってのか。

フフフ……案外明智だったりして。超能力者のアイツなら十分互角  
に戦えそうだな。

でも今朝って事は俺ら学校だしなあ。筋肉馬鹿の重原って可能性も  
あるけどアイツずっと居たし。

まあ、さっきも思ったけど誰が倒そうが別にどうでもいいや。

「すけ様っ、けーすけ様ってば！」

「えっ？」

「もきゅ、ちゃんと聞いてるのですか？」

しまった、くだらない事を考えていたら話を聞き逃してしまった。

「す、スマン！ なんだって？」

「ですから、拙者はこれからサヴィエトの魔法使いを倒すのです。

けーすけ様、撃退に成功するまではぜえーったいに外に出ちゃダメ

なのですよ？」

「あのなあ……明日は土曜日だからともかく、このまま倒せなかったらどうするんだ？」

暮葉からの外出禁止令。

それは、暮葉がサヴィエトの魔法使いを倒すまで有効らしいのだがしかし暮葉が魔法使いを倒せなかったとしよう。

外出禁止令は当然解除されないし、その間俺は学校に行けないのだから、来週は文化祭本番がある週だ。

特に火水木は準備期間と言う、本番に向けて本格的な準備が取り行われる期間なのだ。

文化祭は全3日。1日目のド派手なオープニングに仮装行列。2日目3日は一般公開があったりでもう大変で……特に3日目は展示とステージ発表が同時に行われたりする日だ。

当然その準備には多大な労力が必要だが、なんせ準備時間はたったの三日。

もし貴重な労力である生徒一人が休んでみる。学校行った時間違だいいひんしゅうくなく大顰蹙だいきんじゆうだぞ？

「なっ、拙者を信じて欲しいのです！拙者だって魔法使いなんですからね！」

「お前……魔法苦手じゃなかったっけ？」

「もきゅ！失敬、失敬ですよ！別に拙者は魔法が苦手じゃないですよ、難しいだけなのです！」

「そつでございますか……っ」

結局苦手なんじゃねえかよ、やっぱり不安だ。

思い出してみれば暮葉が単独勝利したシーンなんて1度しか見た事ない。

しかも相手は分けがわからんオオカミ野郎。

光秀には善戦はしても勝てはしなかったし、早川に至ってはボロ負けだったじゃん。

要するに強敵に勝った所を見た事がないわけで、やっぱり暮葉一人じゃ危険なんじゃないか？

「あのさあ、よかつたら俺も手伝ってやろうか？」

「けーすけ様こそ引つ込んでいてください！ けーすけ様が藤島圭介様だってバレちゃいましたら、一日に一回は魔法使いが襲ってきますよ、多分っ！」

魔法使いとだけ数多いんだよ！

まあ、思想的に一致するこの世界の人間を、魔法使いに育てているって話だからな。

きつとかなりの数の魔法使いがいるんだろう。だけどよ……。

「俺が藤島圭介だってバレなきゃいいんだろ？ 変装でもなんですからから」

「けーすけ様っ、どうして態々危険な事に足を踏み入れようとするのですか？ もしかしてけーすけ様は結構なヤンちゃさんなのですか？」

「ああそうだよ。喧嘩は男の仕事だっつーの」

今までだって伊吹や、最近は暮葉を助ける為にやってきたんだ。

魔法使いが今更なんだってんだ。俺はこの拳で超能力者を二人もぶん殴ったんだぞ。

そりゃあ……俺は魔法も超能力も使えない。その他の特殊技能だって全くねえよ。

でも身体は丈夫だ。少なくとも暮葉の盾にはなれるハズだ。隙を見て相手をぶん殴る事くらいはできるハズだ。

「もきゅ……けーすけ様のその一直線な所、拙者のお姉様にそっくりなので……っ」

「あ？ 暮葉……姉貴いたのか？」

「はいっ！ 最もお姉様は戦闘員ではなく科学者で魔法学者なのです」

「要するに学者さんってわけか。明らかに俺より頭良さそうだし、どこが俺とそっくりなんだ？」

「確かに頭はけーすけ様の1万倍いいと思いますっ！」

「ひでえっ！」

暮葉マジでひどいや、そこまで差があるなんて……ううっ！

これでも俺、進学校である初芝に入る頭はあつたんだぞ。中学の頃の成績はそこそこだったんだからな。

……まあ、無理して入った結果がこのザマでございますが。

「……でも根本は似ているのです」

「根本？」

「はい、お姉様が学者様になられたのは、それで誰かを救うためなのです」

「誰かを……救う？」

「はいっ、お姉様は科学と魔法を融合させた、最先端医療技術の開発を行っているのです」

科学と魔法を融合させた医療技術の開発……。

確かに、誰とは言えないが誰かを救うための研究だな。

「けど、やっぱり俺と似てるってわけじゃ」

「似てるのですよ？ だってその為に研究してますもの、馬鹿正直に一直線に」

馬鹿正直に一直線に……ねえ。

なんか自分の事を馬鹿にされたような気もするが、不思議と悪い気もしないな。

「いい姉貴じゃねえか？ 今時そんな良心持つてる学者さんなんていねえよ」

「もきゅ……それって自分の事褒めてるのですか？」

「違う違う。純粹にお前の姉貴の事を褒めてんだよ」

「もきゅっ……ありがとうございますっ」

大体自画自賛ってどこのナルシストだよ。

でも、コイツの姉貴ってホントにいい奴そうだな。

暮葉の姉貴って事は俺よりも年上かぁ。

やっぱり暮葉と同じ体型で、しかも年上だけに合法ロリってヤツなのかな？

……って、そんなことはどうだっていいよな。

「さて、んじゃあさっさと魔法使い倒して、今週の土日も伸び伸び過ごそうや」

「結局……けーすけ様は止めても無駄なのですねっ」

「おうっ！ 俺達友達なんだから、一人だけで危険な目には遭わせたくねえしな」

「……もう、仕方のないおバカさんなのですっ。バレないように気を付けてくださいね」

バレるわけねえだろ。

向こうの魔法使いは俺が藤島圭介であることも、俺がこの街に住んでいる事も知らねえって話だ。

……さて、倒しに行ってやるか。サヴィエトの魔法使いってヤツを！

## 第94話 / 侵入者（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

変態レベル

浅間部長<<超えられない壁<<<圭介<<<大吾（二次元限定）

<<<その他野郎共、純奈<<<その他女子

圭介「ちよつと待てコラアツ！」

あかり「どーしたんだ圭介？」

圭介「なんで俺がめえの兄貴の次に変態になってんだよ！」

明智「藤島……変態だろ？」

小坂「鼻血も噴くしねえ」

圭介「俺より黒木とかのほうの変態じゃねえか！　なんだって黒木達はその他野郎共で一纏めなんだよ！」

純奈「ひどいよ！　私も男みたいなのと同じくらい変態に扱われるなんて……きつとこれはクソ介のせいだよね！」

圭介「俺なにもしてないって！　めえは何でもかんでも責任を押しつけるな！」

千早「あの……でもっ、強ち間違ってないと思います……っ」

暮葉「確かにけーすけ様、PCも部屋の中もエッチなものばかりなのです！」

葵「もつと言えばお兄ちゃんは歴代で最も変態な主人公なのです！」

圭介「嘘だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」



## 第95話 / 泥人形使い

その頃、古宇坂市南部。

「と、止まれっ！」

アタシの前に立ちふさがる日本の警察官達。

前列に盾を構えた奴らが数十名。後方には拳銃を構えた奴らが数十名。

全く……折角遙々遠い所から来てやったのに、なんて野蛮な歓迎方法なのかしらねえ。

「ふふふ……随分と手荒な歓迎ね。人様に拳銃向けてんじゃねえぞオ！」

アタシは警察官たちを指差す。

すると、アタシの背後の巨大な泥人形ゴレムが大きな足音を立てて前進する。

警察官は恐怖し発砲してきたが、泥人形ゴレムは何発受けようが倒れる事はない。

小さな破片だけを撒き散らしつつ、ドシンと足音を立てて少しずつ警察官へ接近していった。

もはや恐怖のあまりに狙いが滅茶苦茶で、ただ拳銃を撃ちまくる警察官は無力そのもの。

アタシが生み出した泥人形ゴレムは、十分に間合いを詰めた時にその拳を振るった。

「まずい……ッ！ このままだと死人が……ッ！」

「今朝は中国人の発砲事件。今度は何人か知らないが白人とバケモノ……今日はなんだって凶悪事件ばっか起こるんだよ！」

仕方ねえでしょ。アタシには仕事があるんだよ。

アタシがこうして暴れていれば、そのうちアルファ隊のヤツが来るだろ。

ソイツを倒し、アレクサンドルって野郎の子孫がどこに居んのか聞きだしてやる。

その為なら人が何人死のうが……関係ねえんだよッ！

「腕はいいわねアンタ達。けど経験不足だわ……こんな素人さっさと蹴散らしちまいな泥人形ゴレム！」

「グ、ゴゴオ……ッ」

アンタら武装した治安維持部隊なんてな、アタシら魔術師からしたらただの雑魚なんだよ。

アタシの本命はアルファ隊とあの野郎の子孫。

アンタらは所詮ソイツらを誘き寄せる磁石でしかねえのよ！

「ちつくしょうこの金髪女……ッ！」

「上は何やってるんだ！ こんな武器じゃ勝ち目がないぞっ！」

「ヘッケラー&コツホは欲しいぞ……クソツタレ！」

無駄無駄、どんな武器を持ってこようがよ……。

アンタら雑魚じゃこのアナスタシア・アベルツェフ様には勝てねえ！ さっさと地面にひれ伏しちまいな！

その頃、藤島家周辺。

あの後、晩御飯を食べた俺と暮葉は自宅を飛び出し全力疾走していた。

家を出る時に隣の国宗家が見えたが、そこで俺は大事な事を思い出した。

暮葉はもう気にしていない様子だが、伊吹は後々まで引つ張るし、何よりアイツは泣いていた。

今は忙しいから無理だけど、後で必ず伊吹に謝っておかないと。それともう一つ重要な事。古宇坂に侵入したっていう魔法使いはどこに？

「暮葉！ 魔法使いつてどこにいるんだよ？」

「斥候部隊によるとこの街の南側で暴れているらしいのです」

「せ、斥候つて……」

斥候つてアレだよな。偵察と攻撃と追跡の三つの事だよな。さすがアルファ隊……ナメてたけどやっぱり軍隊なのね。

「けーすけ様っ、敵は泥人形ゴレムの使い手なのです」

「ゴレム？ ゼ の使い魔とか禁書 録に出てきたアレ？」

「詳細不明なのですが、多分けーすけ様のイメージ通りだと思うのです」

要するに土系統の魔法を使うヤツってわけね。

ゴーレムってどれくらいの大かさかな。

よくわかんねえけど、俺が現場に向かって役に立つんだらうか。

ゴーレムって絶対デカそうだし、殴ってもダメージ与えられないよ  
うな気が……。

そうだつ。ゴーレムを操るのは術者。なら術者を叩けばゴーレムと  
戦う必要はないんじゃない？

フフフ……日頃から厨二臭いアニメって見とくものだな！

……あ、そういえばアニメで思い出したぞ。

「なあ暮葉！ い 天放送時間に間に合うかな？」

「もきゅー！？ ろ、録画してないのですか！？」

「思いつきり急いでて忘れたんだよ！」

「もきゅー……仕方ないのですつ。さっさと相手を倒しちゃいませよ  
う！」

「倒すって言ってもねえ……」

多分デカいであろうゴーレムと、それを自由自在に操る魔法使い。

さつき術者を叩くって思いきった事を考えたが、考えてみれば術者  
も馬鹿じゃねえだらうし、きつと近づいたらゴーレムをこっちに向  
けてくるよな。

……そんなチートじみたバケモノ使い、俺や暮葉だけで勝てるのか  
ねえ？

……数十分後、俺達は魔法使いが暴れているという古宇坂南部へ来たが。

「な、なんだこりゃ……!？」

「全滅みたいですね、ひどい有様なのです……っ」

なんとということでしょう。

場所は古宇坂南部の幹線道路、数多くの車両が並んでいる。

警察車両が多めだが中には一般の車両も……だが、どれも事故車であつた。

しかも衝突事故によるものではなく、まるで何かにぶつ飛ばされたかのように転がっている。

転がっているのは車両のみではない。一般人や銃を持った警官達が倒れ込んでいた。

まだ生きている者もいれば、もはやそれが人間であつたかもわからな者まで……。

まずい……リアル死体は初めて見たが、なんだか吐き気がしてきた……っ。

「だ、大丈夫ですかけーすけ様？」

「う、ぐ……心配すんな、これでも男ですぜ？」

「あの、無理はしないで欲しいのです……っ」

とは言つものの結構辛い……ちくしょう、アニメとかで結構慣れているハズなのに。

暮葉は平気……みたいだな。

まあ一応特殊部隊の人間だし、もしかしたら見慣れているのかもし

れない。

こんな見た目口リな女の子が慣れてるって……何だか複雑な気分である。

吐き気や複雑な気持ちが巡り巡る。

だが、時が経つにつれてその気持ちよりもっと荒く、野蛮で破壊的な感情が……。

「クソ……っ、暮葉……相手の魔法使いの目的は俺たちだよな？」

「はい、間違いなく拙者達なのです」

「だったらこの人達は関係なかったんだよな？」

「元々拙者の世界の問題なのです。この世界の人々には基本的に関係のない事なのです……けど」

警察と魔法使い。どっちが先制攻撃をしたかなんて、別に考えなくてもわかる事だ。

日本の警察は他国の警察よりも甘い。

たとえ凶悪犯相手に発砲したって、後々世論がふざけんなと騒いでしまう。

その上、撃った警官が殺人罪で有罪にもなるらしい。

元々甘い上に世論がうるさい。マトモに戦闘さえ行えない……それが警察だ。

そんな警察が先制攻撃なんて、おそらく出来ねえだろう。

と言う事はこの事態、かなりの高確率で魔法使いから起こされたものなんだろう……ちくしょう。

「……上等だ魔法使い。標的ならここにいてのに、俺達を誘き寄せる為か何の為かは知らねえけど……無関係な人間を巻き込むっ

てんなら 「

そこまで言いかけて、俺は近くの電柱に一発の拳を打ち込んだ。電柱はビクともしないし、ただ拳が痛むだけだが……それでよかった。

今の一撃は俺の怒りを籠めた一撃。そして

「てめえのツラは俺がぶん殴ってやる！」

「……っ」

怒りにまかせて叫ぶ俺を暮葉は黙って見ている。

ごめんな暮葉……でも、俺らを倒す為にこんな事をしやがる敵がすつげえムカつくんだよ！

その頃、同じく古宇坂南部……工業地帯付近。

あゝあ、あのエロ兄貴め……バイト帰りのあたいにお使い頼むだなんて。

全く、兄貴は今日暇なんだから自分で行けよな！

あたい、浅間あかりは兄貴に頼まれ、このあたりに住んでいるお母さんの知り合いの所に、なんていえばいいのかな……お菓子を届けて欲しいと頼まれたのだ。

お母さんは退院したけど、それでも体力が低下しているので兄貴に頼んだんだけど……。

あたいの馬鹿兄貴、よくもその仕事をあたいに押し付けたな。

……そういえば、まだ今週は圭介を見てないよな。

千早の転校を阻止してくれたあの人……あたい、すつごく圭介にお

礼がしたいのに……。

「……………圭介っ」

…………… ああもうあたいがくよくよしてどうするんだ！  
今度会ったらお礼すればいいだけの話だろっ！  
元気出せよな

「へえ…………… 圭介。 んじゃあアンタ藤島圭介ってのと知り合い？」

「んみや？」

あたいは誰かに声を掛けられた。  
だから振り向いたが、見知らぬ色白で金髪の妙齢の女性が佇んでいた。

「……………だ、誰……………っ？」

あたいはあんな人知らないぞっ。  
しかも圭介の知り合いらしい…………… 圭介、お前は何人の女の子と知り合ってるんだよ？  
いい加減にしるよな　いい加減に……………。  
なんだか、その事を考えると胸が痛む。圭介なんかの事なのに……………  
なんで。

「その圭介が藤島圭介かどうかは知らないけど、とりあえずアンタには付き合ってもらおうわ」

「な、なんだよ……………っ、あたいになんか用か？」



「ふふふ……肉の塊になつてもらおうじゃねえかおチビちゃんッ！」

「                   ッ!?!?」

その時、あたいは信じられないものを見てしまった。

アスファルトが盛り上がった   瞬間、兄貴が見てるアニメに出てくるようなバケモノが現れたんだ。

## 第95話 泥人形使い（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「1話に三回も視点が変わるとか……読み辛っ！」

大吾「最大のタブーだよなあ。まあ新人賞狙ってる作品じゃねえからいいけど」

圭介「大吾、お前新人賞狙ってんの？」

大吾「yes！」

圭介「マジすか！？ どんな作品だよっ！」

大吾「僕と唯ちゃんのLOVEストーリー……ッ！」

圭介「……第一次選考にすら残らねえな、それ」

## 第96話 ヲアナスタシア・アベルツェフ

幹線道路には死人と負傷者と物の残骸のみ。

そこには絶望という一言しか残されていなかった。

そう、犯人である魔法使いはそこにはいなかったのだ。

「暮葉、魔法使いの居場所がわかるか？」

「はい。かなり大きな魔力を近くに感じるのです」

「じゃあ案内してくれ」

「気を付けてくださいね。くれぐれも無理はしないで欲しいのです」

「無理はしねえよ。暮葉こそ無理とかするなよ？」

「大丈夫なのですつ、それじゃあ先に進むのです！」

俺達は再び走りだす。無関係な人々の命を奪いやがった魔法使いの居場所へ向かって。

それにしても暮葉の魔力感知、やっぱり便利な能力だよなあ。

暮葉と一緒に居れば索敵が簡単で助かるぜ。

さて、くだらねえ事の為に人殺しをしゃがった、クソ野郎の顔面をぶん殴ってくるか。

歩く事数分。何だか見覚えのある場所にやってきた。

ここは……間違いない。古宇坂南部にある工業地帯の近く。

あのあたりにある住宅街である。実を言うと俺は一度だけここに来

た事がある。

このあたりに友達に住んでいるわけでもないし、家族ぐるみの付き合いの家庭があるわけでもない。

6月ごろ。早川と戦う前に通り、確かこのあたりで明智と会って話をしたような記憶がある。

まさか……また戦場はあの施設の中なのだろうか？

いや、それはないはずだ。

確かあの戦いの後、工場は警備が硬くなって侵入が難しくなったはずだ。

「はあ、はあ、はあ、た……助けてっ！」

「もきゅ、けーすけ様……あ、あの人っ！」

「あ？」

暮葉が反応した先。確かに誰かが叫びながら走ってくる……と言うかアイツは！

輝くような橙色のツインテール。若干ツンとした紅い瞳。小動物のように小柄な体躯。

そして狩人から逃げる野生動物のように、必死に自分の命の為に走る女の子。

女の子の名前は浅間あかり。俺の後輩であり友達であり同じ写真部の仲間でもある。

「やっぱアレってあかりだよな？」

「あかりさんっ！」

「ッ！？ 圭介っ！？ それに木下先輩まで!？」

俺らとの遭遇に驚愕の様子のおかげ。

なんだか随分服が汚れてるな。

必死に走っていたし……もしかしてあかりのヤツ、例の魔法使いつてのに追われてたんじゃ？

「どうしたんだよそんな血相変えて？」

「……ッ！ け、けーすけ様……敵が来るのですっ！」

「ッ!?」

暮葉の呼びかけで前を見ると、なんだかどんでもなくデカイヤツがいる。

土色でゴつゴつくて、その上目がギラリと赤く光っていて……。

間違いねえ。こういうヤツをアニメで見た事がある。

100人中99人はゴーレムって答えるだろう。

つまり 俺らを追っている魔法使いはすぐ近くだ

！

「はにやわあわわっ！ で、出た化け物っ！」

「化け物って……あかり、アイツに追われてたのか？」

「襲われたんだよ！ ああもう、こっちに来るなよな！」

いつものやんちゃな強気口調ながら、小刻みに震えながら俺の背後に回り込むあたり、態度だけは正直のご様子である。まあ、あんなの怖くないヤツは普通いないと思うんだ。

俺だって正直怖いわ。あんなバケモノどうやって倒せと？

「へえっ、アンタ圭介って名前なのねえ？」

しかもバケモノを操る術者さん　サヴィエトの魔法使いもお出ましのようである。

しかもまずいぞ。暮葉が俺の名前を叫んだせいか、相手に俺が藤島圭介だったバレかけている。

その事に気付いたのか、暮葉は慌てて両手で口を塞いでいた。

もうすっかりと聞かれちゃったし、そんな事をしても無駄だとは思  
うが。

「なんだよ……てめえっ」

「もう一度問うわ、アンタ名前が圭介って事は藤島圭介だよねえ？」

ここで藤島圭介を名乗ったら負けだよな。

仕方ねえ、こうなったら　偽名を名乗ってやんぜ。

「俺は確かに圭介って名前だけどな、残念だけど藤島じゃねえんだよな」

「へえ？　じゃあアンタの本名はなにさ？」

「俺は　かみじょうけいすけ上条圭介だ！」

「か、カミジヨウ！？　圭介の名字は　ふぐおふあしゅっ！」

「あかりさん、話を合わせて欲しいのです……………」

俺の本当の名字を言おうとしたあかりの口を、暮葉は必死に押さえつけた。

なんか……すつごく悪い事をしている気分だ。すまないあかり……  
これも生きる為なんだッ！

ちなみに俺の偽名、某学園都市ラノベの主役から取った名前だったのは内緒な。

これはあくまで正体を誤魔化す為の偽名。

幸い相手は俺が藤島圭介だって気付いていないっぽいし、暮葉とあかりのやりとりにも無反応だ。

つという事は……上条圭介ってありがちな偽名で誤魔化せたんだ

「へえ、じゃあアタシの標的とは別人ってワケね」

「標的だと……？」

「折角だから聞いとくわ！ アンタ達、藤島圭介ってヤツ知らないかしらあ？」

「知らねえよっ」

「拙者もその人の行方がわからないのですっ」

「????」

俺と暮葉は上手い事嘘をついてみせるが、あかりは何かなんだかよくわからない様子。

あかりのヤツ、うっかり俺の本名を言っちゃわないか不安だ。

でも今は信じるしかないか。大丈夫、あかりならきつと話を合わせてくれるハズだ。

「なんだあゝ関係者じゃないのねえ？ そんなじゃなまあ仕方ないわ

ねえ……秘密を知った一般人の口を封じるってのかアタシらのやり方。三人とも汚え肉塊になってもらうわあっ！」

サヴィエトの魔法使いが叫ぶと、彼女の背後で構えていたゴーレムが動きだす。

ドシン！という凄まじい足音をあげ、じわじわと俺達へ接近してくる。

「はにゃ、あわわ……っ！ ふ、二人とも逃げよ」

「さて、と……こんなはどうやって倒せばいいんだ？」

「泥人形ゴーレムを倒す方法は三つ。完全に消滅させるか頭の部分の核を破壊するか、あとは召喚者ジョウハンシャを気絶させるかのどれかなのです」

完全に消滅させることと核を破壊する事、召喚した本人　つまり目の前の魔法使いを倒す事？

うくん……こんなバケモノ消し飛ばす事なんてできないだろう。

核を吹き飛ばすにしてもねえ。せめてM72 LAWがあればできそうだが……素手じゃ無理だ。

戦いで態々不利な選択をする必要はない。ここは常識的に考えて

「術者を倒すしかなさそうだな……ッ！」

「けーすけ様っ、拙者がゴーレムを食いとめます。その際に相手を気絶させてくださいっ！」

「け、けどそれじゃあお前が危険だろ！」



「危険なのはどっちもなのです！　大丈夫……拙者だって一応魔法使いなのですよ？」

……まあ、魔法のほうはあんまり信用できないが、確かに暮葉は刀使いとしては相当の腕前。

オオカミ野郎を一刀両断し、光秀の素早い攻撃にも対抗でき、その上空まで飛ぶ事ができる。

個人的には暮葉を囚にするなんて、死んでも嫌なんだけどな……でもこの状況じゃ仕方ねえか。

「わかった。3分以内に片付けるから、絶対死ぬなよ……ッ！」

「けーすけ様こそ相手は魔法使いなのです。くれぐれも魔法攻撃には気を付けてください……！」

ゴーレムと魔法使い……倒すなら魔法使いのほうが簡単そうだ。

しかし、俺には何の特殊技能もない。精々身体が丈夫な事とキスをすれば強くなる事くらいだ。

つまり俺が魔法使いと戦うのは、暮葉がゴーレムと戦うのと同じくらい危険な事なのかもしれない。

なるほど、考えてみれば対等かもしれない……。けど、警察が勝てねえようなバケモノだ。そんなヤツと暮葉を戦わせるのは流石に気が引ける。

でも戦わざるを得ない……それだったら戦闘時間が短いほうがいい。その為にしなけりゃいけない事はただ一つ　あの魔法使いをさっさとぶっ倒す！

「けーすけ様……拙者が先に飛びかかります。泥人形ゴーレムが拙者を狙っている間に……けーすけ様はあの魔法使いをやってくださいっ」

「わかった。必ず早めに倒す」

自分の身を守る為。あかりの身を守る為。  
暮葉を傷つけない為。そして……古宇坂の平和の為にな。

「ちょ、ちよつと待って！ 馬鹿だろっ！ 二人とも人間とバケモノの実力差考えるよなっ！」

「あかり、いいから下がっていてくれ。勝てるかもしれないからさ」

「む、無理だろっ！ 圭介も木下先輩も戦っちゃダメだっ！ あたいの命令だからな！」

相変わらずのやんちゃな口調……でもビリビリ伝わってくるよ。

あかりのヤツは本気で俺達を心配している。

ありがたい……けど、目の前にいるヤツを倒さなきゃ後で大変な事になっちまう！  
だから

「ごめん……くっ、オオオオオオオオ！」

あかりにその一言を告げ、直後に俺は大地を蹴りあげ、ゴーレム目掛けて突撃を仕掛ける。

ほぼ同時に暮葉も駆け出し、凄まじい速さであっという間に俺を追い抜く。

暮葉がゴーレムに飛びかかる。俺はひたすら走って突撃を掛ける。  
そして、遂に

「おもしろいわね！ しょうがないねえ……このアナスタシア・アベルツェフ様がテメエらを血祭りにあげてやんよオッ！」

魔法使い、アナスタシア・アベルツェフとの戦いの火蓋が  
切って落とされた。

## 第96話 ヲアナスタシア・アベルツェフ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

作者「またしても大幅に更新が遅れて申し訳ございません！」

圭介「つたく、ホントにしょうもねえ作者だな」

作者「仕方ないじゃん、疲労が溜まって小説書けない……っ」

圭介「そういう愚痴はしないほうがいいと思うぞ？」

作者「オープンキャンパス行ったり夏期講習行ったりその他諸々、先週と今週忙しい上に小説書いたり寝る時間がなかったんだよ！」

圭介「ダメだこりゃ……っ」

本当に申し訳ございませんでした！

## 第97話 ヲスリート並の魔法使い

「おおおおおおおおおっ！」

喉に響いて痛いほどに叫びながらの全力疾走。

標的は前方のゴーレム……ではなく、その後方にいるアナスタシアだ。

アナスタシアを攻撃するにはまず、ゴーレムを避けてアイツの所にいかなければ。

その為には……右や左から回り込むのはかえって危険だろう。

巨大なゴーレムに拳でも振るわれたら、まあ耐えられない事はないだろうが大怪我は確実だ。

なら、暮葉がゴーレムに攻撃をして怯んでいる隙に

「天神無双木下流“天下統一”！」

「グ、ガガ……ッ！」

なにあの新必殺技みたいなの!?

しかも地味にすげえ威力……暮葉は一期一振でゴーレムの腕を斬り落とした。

ゴーレムの腕たったって岩石とかそんなものだぞ。しかも太いから普通は斬れないと思うが……。

神 火織もビックリかもしれないねえ……うん、暮葉は身体能力的に聖人に果てしなく近いだろう。

「ガ、グゴ、ガガ……ッ！」

しかしゴーレムもやはりバケモノ。

アスファルトから土を吸い出し、それを身体に吸収する事によって身体を再生させている。

だが、再生中のゴーレムは隙だらけであった。

ただでさえ鈍重な上に、再生に全力を注いでいる為かゴーレムは微動だにしない。

最も、ゴーレムの再生もかなりの速さではあるが

「く、おあぁっ！」

この難関を潜り抜けるには十分すぎる時間があった。

ゴーレムは体長4m程の巨大な土の塊。

腕力も高くて防御力も高く、その上斬撃を受けても身体は物体を吸収して再生してしまう。

だが、そんなゴーレムにも死角という弱点があった。

このゴーレムは首の構造上、下を向く事ができないようだ。

増してやゴーレムの腹部はデブのお腹のようで、従って自身の下半身は絶対に見えない死角だ。

スライディングをし、俺はゴーレムの足の間を一気に突き抜ける！

「なっ……アタシのゴーレムを避けやがっただと？」

「てめえのゴーレムは足元がお留守なんだよ！」

そう叫ぶ俺の後方では、暮葉がまだゴーレムと激戦を繰り広げていた。

暮葉はゴーレムにダメージを与え、一見押しているかのように見えるが、ゴーレムは傷ついた部分に次々と物体を吸収していき、新たに土の塊にくたいを作りだす。

暮葉とゴーレムの戦いは簡単に言うと、際限のない消耗戦であった

……。

「ふ、はは……っ！ 面白い事してくれるわねアンタ達。警官よりは有能じゃねえか！」

「ふざけんなよてめえ……その警官つてのは関係者じゃねえんだろ？ だつたらなんで襲いやがった！」

「そんなの、アタシがゴーレムを使っていたら来ちまいやがったから。その姿がムカついたから攻撃したら銃撃されたんだよ。銃を撃つてくるヤツを攻撃して何が悪いんだあお坊ちゃん！？」

「悪いに……決まってるだろ！ 先に攻撃したのはてめえだろ！ 自分や周りの人々の生命の危機を感じたから警官は発砲したんじゃないかねえのか！？」

俺は何が言いたいかと言うと……撃たれるほど街中で暴れていたアナスタシアが悪い。

本来も標的である俺や暮葉相手ではなく、街中で無差別に暴れていたコイツが悪い。

予想通りだったけど、結局警察が戦った理由はアナスタシアに襲われたからだった。

「うっふふふ……全く、ここまでうるさいガキンちよは久々だわ」

「……………ッ」

不意にアナスタシアが不敵な笑みを浮かべる。

「困ったわねえ。ゴーレムは一度に二体も作れないし、アタシは召

喚魔術以外は専門外でね、あんまりうまくは扱えないのよ」

「だったら降参するか？ 今なら警察送りで勘弁してやるよ」

「でも……こつちにはこつちの目的ってモンがあんのよ！ こんな所でチエリー君にに負けるわけには いかねんだオツ！」

叫んだ 刹那。

ロシアの民族衣装のようなものを着ているアナスタシアが、長いスカートの裏から何かを取り出す。

黒光りする神秘的な塊。それは先端を鋭く研いだ黒曜石であった。

「アツハハハッ！ 串刺しにしてあげるわっ！」

「ッ！」

黒曜石を構えたアナスタシアが決死隊の如く突撃してくる。

アナスタシアが目前まで接近した刹那、先端が大変鋭利な黒曜石を振られる。

俺は反射的に身体を斜めに逸らし、アナスタシアの攻撃をギリギリで避ける。

その反撃として俺は右拳を振るったが、不安定な姿勢だったせいがかがらん。

結局俺の右ストレートは空振りである。

だが、反動で前へ転びそうになると、アナスタシアが背中を刺そうと黒曜石を突き出してきた。

咄嗟に身を屈めてこれを避ける。お返しに右の肘打ちを放つが、アナスタシアは後ろへ2〜3歩ほど後退し、俺の肘打ちを避けやがった。そこで俺はある事にようやく気付いた。



「……………こ、こいつ……………ッ！」

「召喚魔術以外は使えない。アタシは魔術師としては欠点だらけだわ……………だけど、そのおかげでアタシは魔術に頼り切る事ができない。だからこれでもアスリート並に鍛えてんのよ？」

「ちつくしょう……………やっぱりそうかよ……………ッ！」

通りで動きがやけに鋭いと思った。

あまり力強そうないメージはないのだが、アナスタシアの実力は素人のものではなかった。

まずいぞ……………一応俺も喧嘩で鍛えたが、流石にアスリート並のトレニングはしてねえし。

けど、魔法使いに殴り合いで負けたらそれこそ勝ち目はゼロ。意地でも勝たねえと

！

「さあ〜て、一般人のアンタがどこまで持つかな!？」

「うるせえよ……………てめえに負けてたまるかつ！」

負けたら今後ろで戦っている暮葉が危ない。

コイツに勝たなきゃゴレムは止められない。

だから、どれほどの差があったとしても 負けてはいけないんだ！

「くあぁっ!」

俺は走る勢いに乗せて拳を放つ。程良く体重の乗った拳はきつと当たればかなりの威力。

しかし、アナスタシアは俺の拳を華麗に避け、黒曜石を脇腹へ突き刺そうとしてくる。

でも、さっきの経験からこうなる事くらい……予想は出来てたんだよ！

「ぎゃあぁ　　ッ！」

悲鳴を上げたのはアナスタシアだった。

くるりと身体の向きを変え、勢いよく放った左拳が彼女の右頬を捉えたのだ。

アナスタシアは鍛えているだけあり、一発殴られた程度じゃ倒れず持ち直すが、右手に握っていた黒曜石はアスファルトに落ちていた。よって今の彼女は丸腰　　素手の殴り合いなら五分五分だ。

「ぐおおッ！」

「チツ、素人が調子に乗ってんじゃねえ！」

黒曜石を拾わずに向かってくるあたり、やっぱりアナスタシアはプロであった。

普通は殺傷力がある黒曜石を真つ先に拾おうとするが、それだと対応が遅れて攻撃を受けてしまう。

アナスタシアはその事を理解していた様子である。

拳を構えながら迫る俺達二人。先に拳を放ったのは俺のほうだ。

だが、アナスタシアはひらりと身体を廻す。避けられたと思った

「ぐ、は　　っ！」

刹那、鈍い痛みと息詰まる感覚が俺を襲う。

民族服越しながら、その膝蹴りは確かに俺にダメージを与える。

でも、この程度でくたばるような……そんなありがたい身体を

俺は持つてねえんだよ！

「てえっ！」

「きゃあ　っ！」

痛みを堪えて左拳で殴り返す。

ゴリゴリと右頬に減り込んだ拳を引いて、痛みも消えた所で次なる攻撃を移ろうとする。

顔面を押さえて怯んでいるうちに、俺は廻し蹴りをアナスタシアのこめかみを狙って放つ。

だが、アナスタシアは反射的に身を屈める事により、俺の蹴りを避けやがった。

「だ、はあっ！」

背中を拳で打たれ、それで一瞬俺は怯む。

当然痛かったが、その痛みは俺の体質のおかげですぐに消えた。

だからアナスタシアに肘打ちを放つ事ができた。

怯んだ俺を抑え込もうとし、アナスタシアは接近してきた。

俺は腹部にあつた僅かな隙を突き、見事に肘打ちを成功させたのだ。

「さつきから面倒くさいわね……っ、素人のくせに……さつさと倒れちまえよっ！」

「倒れねえ……やられもしねえ」

数秒の睨み合いの後、俺との距離をゼロに縮めるべく、アナスタシアはただ前へと駆け抜ける。

アナスタシアの攻撃を避けるつもりはない。

避けても意味がない、際限のない戦いが続くだけだ。だつたら……右腕の筋力100%で一撃で仕留める

！

「素人が！ 少しは避けようとしないうケエ！？」

「避ける必要なかねえよ……」

全速力で迫るアナスタシアに近付くべく、俺もゆっくりと歩み始める。

歩きながら 俺はアナスタシアに告げる。

「刑務所にも行って反省してきやがれ、このクソ野郎が！」

極限まで固く握りしめた拳。それがゴン！とアナスタシアの鼻っ柱に突き刺さった。

俺もアナスタシアの拳を受けたが、そんなのをモノともせず拳をめり込ます。

アナスタシアの身体は数メートルも飛び、夜の冷たいアスファルトにぐつたりと倒れ込んだ。

## 第97話 ヲアスリート並の魔法使い（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

浅間部長「\アツカリ〜ン／」

あかり「からかつのもいい加減にしろよな！」

浅間部長「何故だ……何故ボクの妹には元ネタが通用しない！」

圭介「あかりは健全な子だからじゃねえの？」

浅間部長「ちなみにボクはあかりが好き」

あかり「キモいんだよシスコン兄貴っ！」

浅間部長「ちよ！ 確かに名前はあかりだけど君のことじゃないって！ あぎゃあああああああっ！」

圭介「妹と同じ名前のキャラを好きになるって、お兄さんのどんなんだよ？」

第98話 / あれ……こんな展開予想してませんでしたよ？

アナスタシアは俺の拳を食らって気絶した。

瞬間、暮葉と一進一退の戦闘を繰り返していたゴーレムは崩壊を始め、気付けばゴーレムはただの土くれと化していた。つまり 俺達は戦いに勝ったんだ。

「けーすけ様っ！ ありがとうございますっ！」

「おう、どっか怪我とかしてないか？」

「拙者はご覧の通りとっても元気なですよっ？」

確かに暮葉はどこも怪我をしていないし、精々土か何かで服が汚れている程度であった。

ホントにゴーレムと互角の勝負をしていたんだな。

斬っても斬っても再生する厄介な相手に、暮葉は一步も引かなかった。

俺がアナスタシアと殴り合っている間にも、コイツはゴーレム相手に背を向けたりしなかった。

よし、褒めてあげよつと。そう思った俺は膝を伸ばし、暮葉のピンクの髪を優しく撫でてやった。

「あ……っ」

「天下統一だっけ？ あの技すごかったぞ」

「もきゅ……あ、ありがとうなのです……っ」

撫でられて照るているのか、それとも褒められて照れてるのかな。  
暮葉は珍しく頬を赤らめていた。

「おいつ、あたかもいるんだけど」

「えっ？」

「もきゅー!？」

しまった。そういえば確かにあかりも居たわ。

その事を忘れて暮葉を褒めていたが、端から見ればムカつく光景だったんだろうか。

何故かあかりはむすっと頬を膨らませていた。アカン……ご立腹の様子だ。

「あ、あかりもすごかったぞ!? 逃げないでちゃんと見てたしな  
!」

「だ、だって2人が急に戦い始めたから……仕方ないだろ!」

「も、申し訳ないのですっ」

「でも倒さないと危険だしさ？」

「戦う方が危険だろっ! しかも木下先輩……なんか人間離れた動きしてたようっ、刀持っていたようっ……っ、あとのバケモノは一体なんだよ……っ」

いかん 誤魔化さないと今後の生活に関わるぞ。

暮葉も慌てているし。仕方ない……ここは俺がテキトーに!

「知ってるかあかり。人間って窮地に陥ると幻覚を見るらしいぞ？」

「げ、幻覚……？」

「そうそう。つまり今まであかりが見ていたのは全て幻覚。ゴーレムだって凶悪犯がそういう風に見えただけなんだよ」

「じゃ、じゃああたいを追っていたのは人間？」

「あたりまえだろ。この世にゴーレムなんて存在ハズないし、あかりは恐怖のあまり幻覚を見てたんだよ」

まあ、恐怖を感じて幻覚を見るってのは、今俺が咄嗟に思いついたデタラメである。

恐怖で幻覚見るなら俺なんていつもも見てるよ。

だけど、あかりは何を隠そう“アホの子”である。

「さすが圭介っ！ 一歳年上だけあって頭いいなっ！」

「フツ……もっとお兄さんを頼ったっていいんだぜ？」

「うん！ あたい圭介のことこれからも信じるっ！」

満面の笑みを浮かべてあかりはそう言い放つ。愛想笑いをしながら俺はこう思った。

あかりが馬鹿で本当によかった……。

これが明智だったら誤魔化せなかっただろう。

ってか明智は俺の事を名字で呼ぶし、俺が藤島だって確実にバレていた事であろう。



とにかく……たまたま遭遇した人があかりでよかった。

「けーすけ様っ、うまく誤魔化せましたね」

「お、おう。俺の読書<sup>ラノベ</sup>で鍛えた話術が役に立ったぜ……っ」

俺と暮葉はあかりにバレないように、小声でこっそり会話をした。

一方のあかりはまだ笑っている。ハハハ……あかり、やっぱりアホの子ですね。

「さてと。暮葉、コイツどうする？」

あかりを誤魔化した所で、次にアナスタシアをどう扱うかを暮葉に訊いた。

警察に引き渡すってのが一番現実的だが。

一応サヴィエト亡命政府の人間だし、アルファ隊の行動目的の中にも関係者拘束つてのがあったし。

だから通報するかしないべきか、念の為に確認を取ろうと俺は思ったのだ。

「えっと……身柄は拙者達が拘束するのです。なのでけーすけ様……できればあかりさんをつ」

なるほど。言葉では言わなかったが暮葉の言いたい事はわかった

「わかった。それじゃあ後はよろしくな」

「はいっ！」

「よし、あかり！ 気晴らしに2人でどっか行かないか？」

暮葉の元気な返事を聞いた後、俺はくるりと向きを変えてあかりに声を掛けた。

「えっ？　で、でも木下先輩は？」

「暮葉は用事があるからゴメンだって」

「はいっ！　その、すっごく大事な用事ですのでっ！」

「そーなのか？」

「ああ。とりあえず幻覚を見て気分も悪いだろうし、だから気晴らしに散歩でもしようぜ？」

暮葉が俺に頼んだ事。それは、アナスタシア拘束の為にあかりを遠ざける事だ。

あかりは俺達の事情には全く無関係であり、関わらせたくないし秘密を知られたくもない。

知られればたとえあかりは認めても、その秘密が何処からか漏れてしまう可能性がある。

そうなると、暮葉達アルファ隊の作戦行動に支障を来す可能性がある。

俺だってそうだけ。折角学校の皆に受け入れられ始めたのに、また変な事に関わってるからって引かれるかもしれないぞ。きつと暮葉はその二つの事を心配したのだろう。

だから　俺にあかりを遠ざけるように言ったんだ。

「んむう〜いいぞっ！　あたかも圭介と少し話がしたい！」

「よしっ、んじゅあ早速行くとしようか」

「うん！」

暮葉にも匹敵するくらい元気のいい返事だな。

ふと思ったんだが、暮葉とあかりってキャラ被ってないか？

“元気なアホの子”っていう点で。まあ……どうでもいいか！

それより散歩だ散歩。暮葉の仕事を助ける為にあかりとお散歩だ。

「暮葉も気を付けろよっ！」

「それじゃああたいらはこれで、お仕事頑張ってください木下先輩  
」！

なんだか普段の口調のせいかな、あかりの敬語に違和感を感じるのは  
俺だけだろうか？

「はい！ お二人ともお元気です！」

暮葉は無難に言葉を返してきた。

さて、極力あかりに気付かれないように暮葉から離れないとな。

とりあえずあかりとどの辺を散歩しよっかな。

そんなことを考えながら10分後、いつの間にか古宇坂港にある海  
浜緑地公園まで歩いてきていた。

「んんっ！ 潮の香りっていいよなっ！」

「おう、ここ初めて来たけど中々いい所じゃねえか」

夜の海は暗いが、月明りと遠くの船のあかりがとても綺麗だ。

こういう所って昼間や夕方に来るもんだと思ってたが、夜の海浜公園ってのも案外いいものだ。

なにより、このクソ暑い季節に涼しい風はとてありがたい。

「……なあ圭介」

「ん？」

「千早の転校を阻止したの……圭介だってほんと？」

「えっ？ それ誰が言ってたんだ？」

「千早が言ってたんだ。圭介のおかげで転校せずに済むってすっごく嬉しそうに！」

一瞬なんであかりがその事を知ってたのかって思ったが、なんだ青山さんから聞いたのか。

転校を阻止……かあ。確かに俺は転校阻止の為に必死だったな。けど

「そっか。でも別に誰がやったとかって気にする必要はないと思うぞ？」

「んみや、なんでだ？」

「結果的に青山さんは初芝に残る事になったんだ。その結果だけで十分だと思うよ」

だから俺は 余計で無駄な高望みなんてしない。

別に褒められたってそりゃあ嬉しいけど、でも殆ど意味がないだろ。

とにかく、青山さんが転校しないって結果だけで十分なんだ。

「そ、そんな……圭介はそれでいいのか？」

「なんで？」

「だ、だって……っ」

少し俯いたあかりは遂に口ごもってしまった。

……もしかして、心配してくれているのか？

「大丈夫だよ。だからあかりは気にしないで、お礼とかそんなのは  
いらないからさ」

「そ、そうか……っ」

それに、俺は褒められることがあまり好きじゃない。

今まであまり褒められた事がないし、何より返す言葉が思い浮かばない。

それでテキストに返した言葉が、相手に不快な思いをさせるかもしれない。

ただの嫌味になっちまうかもしれない。逆に否定すると謙遜が嫌いな相手を怒らせるかもしれない。

だから俺は　褒められるのが苦手だ……。

「それじゃもう一つ。千早を振ったって本当……？」

「えっ……？」

「千早から聞いたんだ」

「そ、そうか……っ」

青山さん、とにかくあかりに何でも報告したんだな。

まあ、それで俺に害があるわけでもないから別にいいけど。

「なあ圭介っ、なんで千早を振ったんだ？」

すると、あかりがやたらと真剣な表情で振った理由を訊いてきた。

こういう時なんて答えればいいんだよ。素直に答えればいいのかもだが……。

恋愛感情が沸かなかったからとか、そんな理由じゃあかりは怒るだろうな。

でも嘘をつくのはもっと悪い気がする。やっぱり、ここは事実をありのまま告げよう。

「恋愛感情が沸かなかったから？」

「ッ……そ、そんな。それだけの理由で振ったのか!？」

「悪い事じゃねえだろ？ 中途半端な気持ちで付き合って、それで青山さんを傷つけちまうよりはずっとマシだと思っ」

「け、けど……振られるってすっごく悲しいことだとあたいは思っぞ！」

「でも好きじゃないのに付き合っって、すごい失礼じゃないか？」

そんな失礼なことを青山さんにしたくなかった。

中途半端ほど失礼なことは無い。そして後で絶対相手を傷つけてし

まう。

俺はそれが嫌だ。嫌だからあの場で青山さんを振ったんだと思う。それでも……青山さんは諦めてくれなかったが。

「……圭介、絶対チャラ男だと思ってたけど……案外誠実なんだな！」

「俺の何処がチャラ男!？」

「だって圭介の周りって女の子ばっかだろ!？」

あかりさん、貴女も女の子っすよね。あと皆が思ってる程女友達は多くないと思うぞ。

それにしても、俺って周りからどんな目で見られているんだろうか。俺……そんなに女癖悪く見えるの？

「あのなあ……っーか、あかりはどうなんだ？ 誰かと付き合った事とかあるのか？」

「んみや、そんなもんないぞ」

この人ガチで誰とも付き合ったことがないらしい。

即答な上に真顔だ。まあ確かにあかりって恋愛とか興味なさそうだけど……。

でも、それで納得するのも面白くないしなあ……よし、少しからかってやるう！

「ホントか？ 好きな人くらいいるんじゃないかねえのか？」

「好きな人………あ……ッ！ そ、そんなのいないっ!」

突然、風邪でも引いたかのように顔を赤らめ、そうだと言っているかのように否定をする。

あかりのこの反応は……絶対好きなヤツがいる。これでも俺は三度の恋愛を経験したんだ。まあ三回とも告白すらしてないけど……。

それでも恋と違ってのは理解しているハズだ。だからこの僅かな反応でわかったぜ。

あかりに　好きなヤツがいるっ！

「嘘つけえ〜！　その反応は絶対にいるだろ？」

「だ、だからあたいにそんなのはいないっ！」

「まあまあ折角だから言っちゃおうぜ？　安心なさい、これでも俺は口堅いからさ！」

「な、だ、誰が言うかつ！」

真っ赤になったあかりが、全然力が籠っていないハンマーパンチを、俺の胸板へと打ち込んでくる。

しかしいい事を聞いたぞ。誰が言うかーっと言っつて事は……好き  
な人いるんだな！

フフフ……これは面白くなってきた。他人の恋愛話ほど面白いものは無いぜ。

「女は度胸！　なんでも言ってみるものさ！」

「それ、男は度胸だろ……？」



「細かい事気にすんなって」

「き、気にするに決まってるだろ！　くくくッ」

叫んだ直後に再び顔が真っ赤に染まる。あかりってやんちゃな癖に結構初心な子だなあ。

おそらく今が初恋って感じなのだろう。

恥ずかしくて仕方ない……ちくしょう、今のあかりは何か女の子な感じで可愛いな。

俺よ、あかりのせいでロリコンに目覚めちゃダメだぞ……ッ！

「大丈夫だって言っちゃおうよ。恋愛相談ならいくらでも乗ってやるからさ！」

もうずっと顔が赤いあかりは、急に借りてきた猫のように静かになっってしまった。

ハハハ、流石にちょっとからかい過ぎたかな。

ちよっと謝った方がいいかなと思っただ　刹那。

「……………け、圭……………介……………」

「えっ？」

俯いているあかりが何かを呟く。

誰かは聞きとれなかったがそれは人の名前、間違いなく誰かの名前だった。

やがてあかりは拳を握り、力強く俺を見つめて

「だ、だから……………圭介だって言ってるだろ！　……………ッ、くくくッ！」

「……………へっ？」

思わず呆気にとられた声を漏らす。

好きな人の名前をハツキリと告げた後、彼女は顔を完熟トマトのように赤くして、そのまま逃げるように背を向けて走って行ってしまった……………。

「い、今の……………って……………？」

あかりの今のあれって、ひょっとして……………。

コクハク？

第98話 / あれ……こんな展開予想してませんでしたよ？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

葵「ま、またライバルが増えた……しかも友達がライバルだよ!？」

千早「あはは……あかりまで先輩に取り付かれちゃったね」

あかり「そ、そんなことないんだからな！ あたいと圭介は友達だっ！」

葵「でもお兄ちゃんの事大好きなんだよね？」

あかり「……っ、だ、黙れよな葵っ！」

千早「あかりに先輩を盗られたら……わ、わたしもつと頑張ろうっ！」

あかり「ち、千早ダメだっ！ 必要以上圭介と仲良くなるなよな！」

葵「こらあ〜！ お兄ちゃんは葵のものだよ!？」

一方、2年の教室。

圭介「ああ、出会いが欲しい……ふおぐおっ!？ にゃにすんれすかーっ!？」

赤佐「いやあ、藤島が言つと嫌味にしか聞こえないんや」

黒木「つたく！ てめえそんな事言いやがって……殴られて当然だ  
クソ野郎っ！」

圭介「だ、だからって殴る事ないだろ……ちくしょう不幸だ……っ」

作者も圭介は殴られて当然だと思います！

## 第99話 学園モノにありがちな出会いのシーン

……よし、整理しよう。

頭の中が混乱していて真っ白だし、とにかくこう言う時は整理するのが一番だ。

まず、俺はあかりに好きな人がいるのかと聞いた。

あかりは最初は躊躇ったが、遂に好きな人の名前を言ってくれた。ついで、そのあかりの好きなヤツの名前つてのが ケイスケ。

……ケイスケ？

はて、どこかで聞き覚えのある名前だ。

そういえば俺の名前つてなんだったかな。記憶が正しければ俺は藤島圭介つて名前だ。

圭介……圭介。ひょっとしてあかりは俺の事が好きなのか……？

いやいやいやいや待てよコラッ。あかりにそんなハッピーなフラグを立てた覚えは皆無ですぞ？

それを言ったら青山さんにだって、フラグを立てた覚えはなかったけど……。

「だああああちつくしょうー！」

ラッキーなイベントなハズなのになんなんだこの苦悩はっ！

しかも結構嬉しかったし………なんたってあかり、見た目は超弩級に可愛い美少女だからな。

ヤベエどうしよう。俺はこの後どうすればいいんだ？

と、とりあえず落ちつこう。うん、告白された直後つて気持ちが高ぶるからな。

落ちついた時にあかりの事をどう想っているか……返事はその時の

気持ちだろう。

とにかく、中途半端ってのが一番ダメだ。

一番重要なのは俺があかりを好きなのかって事だよな。

……まあ、それを考えるのは後だ。とりあえず葵も心配しているだろうし、そろそろ家に帰ろう。

特に何も考えず、ただボケーっと歩いていると、いつの間にか古宇坂市の中心まで来ていた。

あと何キロくらいかな。中心街つつつても南部からは結構遠い。

でも、気分のせいかすごく短く感じたなあ……。

はあ……なにやってんだろうなあ、俺……。

とにかくアレは告白……だよな。だったら次に会った時までには返事をしないと。

伊吹には謝らないといけないし、あかりには告白の返事をしないとイケない。

オマケに超能力者や魔法使いと戦う羽目になるし、高校2年の夏……

……予想以上に忙しい……ッ！

「キミ可愛いねえ〜。おお〜しかも最近東京で有名な佐井学園じゃん？」

あ、佐井学園？

それって明智が前に通っていたって言う、名ばかり進学校の超能力者養成所……。

その声を聞いて振り向くと、如何にも不良な人達が一人の少女を取り囲んでいた。

「……………はあ」

長い黒髪、紅い瞳、冷たいが可愛らしい顔立ちで、この辺では見かけない緑っぽい制服。

俺はある事を思い出した。そういえば早川ってヤツも緑っぽい服を着ていた。

なるほど。緑は佐井学園の制服の色ってわけか。

でも、佐井学園で能力開発を行っているのは開発科のみ。

それ以外の学科では進学校らしく、レベルの高いあくまで普通の授業を行っているらしい。

だから彼女が超能力者とは限らない。そもそも、外で超能力をバンバン使うのはまずい事だろう。

つと、言う事はあの子……不良に囲まれてヤバい状況なのかもしれない。

「今から俺達と遊びに行かない？」

「帰りは送ってやるからよオ。まあ、いつ帰れるかわからねえけどな！」

「だっはははははー！」

馬鹿だろアイツら。ナンパはもつと上品にやらないと。

あんな下品な言葉じゃ女の子に引かれるぞ。

まあ、ナンパ自体女の子に引かれる行為な気がするが。

しかしまずいぞ。あの兄ちゃん達はあどけない彼女を取って食うつもりだ。

あの子はさっきから黙ったままだし。ヤバい……この状況は非常にマズい。

「だいじょーぶだいじょーぶ！　ちゃんと送って帰るって！」

「だからさあ〜俺達と遊ぼうよ。きつと楽しくて気持ちいいからよ！」

気持ちいいって言うてる時点でもうオカシイだろ。

下心丸見えだっつーの。しかも気持ちいいのは回数を重ねた子のみ。

女の子は初めてって痛いらしいぞ。まあ……エロゲーで得た知識だが。

第一こんな奴らにやられるって相当な屈辱だろう。彼女だってそれを望んではいないハズ。

よ、よお〜し……ここはひとつ、俺が一肌脱いで助けてやろう。

しかし……相手は8人。流石にこの人数をぶっ倒せつてのは無理があるよな。

よ、よお〜し……こうなったら上さん戦法を試してみるか。

そうと決めた俺は勇氣ある一步を踏み出し、不良達の間割り入り

「ああ〜いたいたっ！」

「あ？」

女の子と不良達が一斉に俺を見る。

女の子は少し驚いた様子だ。一方の不良達は俺を睨みつけている。

「ダメだろ勝手に逸れちゃ！ いやいや〜どうも、皆さん連れがお世話になりました〜！」

よし、出だしは完璧だ。

不良達は威嚇モードから驚きモードへと変わった。

この隙に彼女をこの場から連れ出し、安全な所まで移動して彼女と



別れる。

相手がビリビリ中学生じゃないだけに、この作戦の成功率は100%。

俺は「ほら行くぞ」と言いかけてっつ、彼女の手を引いた

「誰かしら……貴方？」

「あははは……ははは……へっ？」

彼女の一言により、場の空気が凍りついた。

や、ヤベエこれじゃ上さんとまるっきり同じじゃん！

「ちよ！ うまく合わせろって！ 知り合いのフリして自然に助け出す作戦が台無しだろ！」

「知らない人についていたらダメって、私は親にそう言われたわよ？」

ちくしょくまさか同じ運命を辿るとは！

ああもうやっぱり手え出さなきゃよかった。

おかげで不良達が再び威嚇モードに移り、メンチを切りながら柄悪く歩み寄ってきやがったぞ。

「なんだテメエ何か用でもあんのかあ？」

「ふざけた真似しやがって。殺すぞ、アア？」

「あははへえ、えっつと……」

どないしようこれ。気付けば8人の不良に俺は囲まれてしまった。

不良は確かに一人じゃ弱い。酒やたばこで身体を壊し、しかも服装は動くには適していない。

不良の喧嘩の腕はアスリート並に鍛えていた、あのアナスタシアに比べれば遥かに劣るだろう。

だが不良達は弱いから仲間と群れている。それはつまりどういうことか。

いくら個人レベルで弱くても……群れば大きな力となる。

実際、俺の喧嘩の腕じゅあ一度に3人くらいまでが限度。

つまり言うとな……この人数相手じゃ体質上、大怪我はしないだろうがフルボッコは確定だ。

ちくしょ〜フルボッコ嫌だ。身体は丈夫でも殴られると痛いんだぞ！でもなあ。無抵抗のままフルボッコにされるのもカツコ悪いし……つたく、仕方ねえなあ。

「つたく、てめえら恥ずかしくねえのかよ！　こんな大人数で女の子一人に寄ってたかって、それが大の男のすることかよ！」

「アア？　なんだてめえいきなり？」

「俺達に説教くれるってのかよ？」

「ああそうだよ！　てめえらムカつくんだよ！　俺はな、お前らみたいなのもなきや学もねえ奴ら大っ嫌いなんだよっ！」

「なんだとコラッ？」

「てめえやっぱ殺されてえんだな？」

よしよしい感じだぞ。実を言うと、これは女の子救出の為の作戦だったりするのだ。

俺の作戦とは　　まず、不良達を見下すような言葉で挑発し。

「いいぜ、殺せるもんなら殺してみるよ。言っとくけど俺は強えから怪我しても泣くじゃねえぞ！」

あえて喧嘩を買うような素振りをみせて。

ついでに自分は強いと思わせておいて、それで潰し甲斐あるヤツだと想いこませる。

すると、不良達は額に血管を浮かべ遂に激昂する。

「上等だ！　てめえらコイツブツ殺すぞ！」

「おう！」

さてさて……誰かが一人駆け出す瞬間。俺の作戦はそのタイミングが重要なんだ。

そして　遂に不良の一人が大地を蹴りあげ前進を開始。その瞬間、俺は　　！

「藤島流秘奥義……馬鹿の相手はしない！　さらばあああああああ  
あつー！」

不良達が進む逆の方向に、俺は瞬く間に駆け出した。

すれ違いの瞬間、不良達は驚きや呆気に取られた顔をしていたが……まあそんなのは気にしない。

とにかくあんな人数相手に勝てるわけがないし　今はただひたすら奴らから逃げるのみ！

「なつ！？　ま、待てやコラアツ！」

「てめえの秘奥義つて逃げる事かよ!？」

「うるせえ! 殴られなかつただけ感謝しやがれ!」

1、2、3、4、5、6、7、8……。

よし、8人全員が俺を追い掛けている。

ヤンキーさんつてホントに馬鹿だなあ、まあ俺の犠牲によって女の子は解放された。

よかつたよかつた。後は俺がコイツらを振りきるだけだ。

房総丘陵トレイルランを制したからこそ言えるが、俺はこれでも長距離には自信があるんだ。

不良なんて酒と煙草で身体を壊しているし、靴だつて走るのには適していないし、しかもアイツらはペース無視の全力疾走をしている。このままで行けば間違いなくアイツらはスタミナ切れで倒れる。

俺が狙っているのはそこだ。不良を倒すことではない……逃げて振りきるんだ!

「この野郎お……てめえこそ逃げて恥ずかしくねえのかよ!」

「うるつせえ! てめえらにいい言葉を教えてやるよ……逃げるが勝ちだつ!」

「てめつ!? それでも男かよ! そして日本人かよ!」

「男でも日本人でも逃げる時は逃げるんだよ、このサル並野郎!」

敵は幾万つて歌を御存知だろうか。

既に著作権の切れた日本の軍歌だが、その歌詞に【敗れて逃ぐるは國の恥 進みて死ぬるは身のほまれ】というものがある。確かに逃げるってのは恥ずかしい事かもしれん。

それより突き進んで玉砕したほうが、よっぽど華々しい事なのかもしれない。

だが！俺はこう考える。

死んだら後で何もできないじゃん、なら一度引いて態勢を立て直すのもアリだと。

だから俺は逃げるぜ。この後の人生をエンジョイする為にも 逃げる事は恥じゃねえ！

「待てコラア！」

「おるあ止まれ〜っ！ 玉となりつつ砕けやがれっ！」

ああもう！

プール学習があつて貧血になったり、溺れ時にそうになってしまったり。

その後暮葉と伊吹を傷つけてしまい、魔法使いと戦った拳句のこれですか。

あかりに告白された以外はホントにツイてねえ！

「ちつくしよお〜〜っ！ これじゃい 天放送時間に間に合わねえええええええっ！」

……こうして、俺の人生で一番不幸な一日は終わった。

結局家に帰った時には既に暮葉もいて、しかも疲労で寝てしまい、結局い 天を見逃してしまった。

伊吹に謝る事もできなかつたし。ちくしょう、明日必ず謝らないと。ああ……色々な意味で俺って最悪だ。

ところで、あの女の子との出会い……意味あつたんだろうか？

## 第99話 学園モノにありがちな出会いのシーン（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「おおっ！ 次回で100話じゃん！」

伊吹「長っ、半分くらいでよかつたんじゃないの？」

暮葉「そうですねえ。作者も友人に「お前の小説長過ぎ」って、文句言われた事何度もあるらしいのですよ？」

葵「その他、読者様にも言われた事あるらしいよ！」

重原「長いと読む気失せるよねえ。俺も禁 目録原作が20巻以上出てるって知った時、読もうかどうか渋ったものだよ」

圭介「お前ら折角次回で100話達成なんだから、もう少し喜びやがれ！」

## 第100話 デレ期？いいえ、ツツパリです

その翌日、俺は我が家の隣 国宗家の前に立っていた。  
ちくしょう緊張する。俺はこれから伊吹に謝ろうと思うんだ。

けどなあ、昨日は魔法使いと戦ったりに不良に追われたり、結局一日が経ってしまった。

どうなんだろう。謝るのが遅いつていうのは。よくそれで非難される政治家はニュースで見るが。

けど、だからって何もしないのは気が引ける。

伊吹が落ち込んでしまったのは、俺が水恐怖症のチキンだったからだし……。

「……………あつ、」

「あつ」

なんて考え事をしていたら、伊吹が制服姿で家から出てきた。

俺と目があつた瞬間、俺と伊吹の間に気まずい空気が流れる。

やっぱり……向こうも昨日の事を気にしているのだろう。

「あのよ」

「あのさっ！」

俺が声をかけようとする、伊吹も同時に同じ事を言ってくる。

なんとというタイミング。アニメではよく見るシチュエーションだが、まさか現実で経験するとは。

えーっと……こういう時は常識的に考えて。

「さ、先に言っていないぞ？」

「えっ……？ け、圭介が先に言いなさいよ」

風に靡く銀色の髪と微かに染まった頬、視線を逸らして小さく呟くその姿。

長年の付き合いのせいかわ、普段は全く意識しねえけど……やっぱり伊吹って女の子だな。

黒木が惚れちまうのも無理がない。ていうか俺、これから謝るってのになに考えてんだよ。

とにかく伊吹から予想通りの返しがきた。だから俺が先に言わなければ

「ごめん伊吹！」

どこまでもストレートに、俺は45度のお辞儀をする。

少しかだけ視線を上に向けると、伊吹は呆気に取られた顔で俺を見ていた。

だがそれも一瞬。次第に伊吹は悲しげな顔になっていく。

「ちょ、ちょっと圭介……なんで謝るの……っ？」

「昨日の事で今更かもしれないけど、心配かけてホントにごめん！」

「し、心配ってそんな……私のほうが悪いのよ？ 圭介が泳げないってことを忘れていて……そのっ、私のほうこそごめんなさいっ！」

……あれ、なんだか予想外の展開だぞ。逆に伊吹に謝られてしまった。

しかも、さっきの俺と同じく斜め45度のお辞儀を伊吹はしていた。



「俺は別に気にしてないよ。アレは俺が泳げなかったから……だからあんなことになったんだ。伊吹は別に悪くないよ」

「……あんたさ。ずっと前から思っていたけど、なんでもかんでも自分のせいにし過ぎよ」

「えっ？」

「マイナス思考なのよあんた。いつもはふざけていて、時々ちよつとだけカツコいいのに……」

ちよつとつて所を随分強調しますね、伊吹さん……。でも少なからずカツコいいは思われていたのか。

まあそれよりも、俺って伊吹が言うほどマイナス思考なのか？ そりゃあたまに自分を責めたりするけど、でもそれは事実を脳内で考えているだけだ。

それに普段はゲームの為に徹夜をするくらい、超能天気かつ不規則に生きているんだぞ？

「別にマイナス思考ってわけじゃねえだろ……？」

「誰が見たってあんたはマイナス思考よ。いつも自分のせいだ自分のせいだって言って……いい加減あんたが鬱にならないか心配になるわよ……」

「鬱って……そんなのなるわけないだろ？」

「でも、あんたの自虐っぷりはホントになるそうなくらいよ……」

紅い瞳を一直線に向け、本当に俺を心配するかのような表情を伊吹は見せている。

その表情を見て懐かしいと感じる俺。これは 間違いない。8歳の頃にプールで溺れた後、伊吹はこんな顔でプールサイドに倒れる俺に迫っていた。

ただ、あの時は今とは違い、必死なあまりに目に涙を浮かべていたが……。

それでも涙がないだけで全く同じだ。伊吹は本当に俺を心配している。

「……ごめん」

「……あんたのそのすぐ謝る癖、やめたほうがいいわよ？」

「えっ？」

「その、お互いあまりいい気分にはならないでしょ……？」

まあ確かに。時と場合によっては謝られても嬉しくない、むしろ謝られて自分が罪悪感を覚える。

そんな事が俺にも何度かあった。もしかして、今の伊吹も同じように感じているのだろうか。

つたく。俺ってホントになにやってんだらうな……。

結局、俺は幼馴染を困らせる事しかできねえのかよ……っ。

「ほら、元気出しなさいよっ！ 圭介は男の子でしょ？」

「ははっ。なんか今の伊吹、お姉ちゃんみたいだな」

「お、お姉ちゃん？ あたしは一人っ子よ？ それにあんたのほう

が誕生日早いでしょ？」

「そういえばそうだったなあ。ってことは俺は伊吹のお兄ちゃんかっ！」

「っ！？」 あ、あんたには葵ちゃんがいるでしょ！？」

伊吹は妹というポジションが気に入らなかったのか、むがあゝっと両手をあげて、まるで怒った猫が襲いかかるかのように突っかかってきた。

本気で怒っているわけじゃないのはわかっている。

伊吹が猫のように突っ掛かってくるのはいつもの事だ。要するに伊吹は猫みたいな女の子だ

「俺は伊吹が妹でも別にいいけどなあ」

「わ、私が嫌よ！ 別なやつなら妥協してあげてもいいわよ？」

「別なヤツねえ？ 幼馴染はデフォルト設定だし……フッフ、恋人とかどうだっ！」

「ここここ、恋人っ！？ こ、恋人なんてそんな……っ、別なのでいいわよっ！ 例えば夫婦とかでもっ！」

「もしもし。恋人より重たくなってますよ伊吹さん」

「ひっ！？」

伊吹はボンッと、完熟トマトのように赤くなってしまった。その上、借りてきた猫のように静かになってしまった。

ありゃりゃ、少しからかい過ぎたか？

「は、にゃ……わ、訳のわからない事言わないでよばか圭介っ！」

「夫婦って言ったのは伊吹だろ」

「そんな事言っちゃったのはあんたが恋人って言ったからでしょ！」

「ちょ！ 悪かった！ 悪かったから引っ搔かないでゴメンナサイ  
ッ！」

俺は顔をカチャカチャと引っ搔かれてしまった。  
いつもの事とは言え、伊吹は爪が鋭いから痛いぜ……。  
ていうか……やっぱり伊吹はネコさんだった！

「……………」

「ん？ どうしたんだ、借りてきた猫みたいに」

「……………」

「伊吹？」

「ッ！ 仕方ないわね……あんたがどうしてもっていうん  
ならその……………」

またしても俯いて小さく呟いている。

途中までは聞こえても、声の小ささで言葉の後半が全く聞こえないぞ？

「~~~~っ！ どうしてもって言うんならその……あんたと付き合  
つてあげてもいいわよっ！」

ちよ、伊吹のヤツ。ヤケクソ気味にとんでもない事を叫んでいるぞ？  
仕方ねえな。伊吹の爆弾発言にフオロー入れておくか。

「あの〜伊吹さん？ すっごく発言ぶっ飛んでませんか？」

「は、はあ！？ 最初に告白してきたのはあんたでしょ！？ 私の  
こと恋人って言ったじゃない！」

「えっ……ちよ！ おま、本気にしてたのかよ!?!？」

「別に本気になんかしてないわよ！ でも……あんたモテないでし  
よ？」

「うっ……」

そこを突かれると胸が痛いんだが。でも、最近は何故か本当にモテ  
ないのか疑わしいんだ。

青山さんに告白されて、あかりにまで似たような事を言われ……。  
はあ。こんなの赤佐とかが聞いたら絶対キレルぞ？

しかも中途半端つてのが嫌だからって、青山さんとは付き合わなか  
つたし……。

「私だって嫌で嫌で仕方ないのよ？ で、でも圭介が彼女欲しいっ  
て言ってるし、ガチホモ疑惑だって消えちゃうでしょうから……っ」

「まだガチホモ疑惑気にしてたのかよ！」

それって春頃か初夏の頃の話じゃねえか。  
もう最近は大抵ガチホモだって噂も聞かなくなったのに。

「と、とにかく！ 私が付き合ってあげるって言うてんのよ！？  
返事は！？」

……あれ、おかしいぞ。

確かにパツと見は嫌々って感じだし、告白のセリフとは思えないくらい恐ろしく命令形だ。

でも……なんだろう。この本気で言っている感は？

「付き合っつて男女交際だろ？ そんな無理してするものじゃないと思っぞ？」

「……っ、じゃあ確認。あんた、私のこと……すすすす、好きなの？」

「好きか嫌いかで言えば好きだけど……」

「だ、だったら付き合いなさい！ 仕方なくモテないあんたと付き合っつてあげるわよ！」

おいおいおいおい。なんだよこのデレ期に入ったツンデレ娘は？  
あのツツパリ伊吹ちゃんだぞ。こんな事を言う子じゃなかったハズなのに。

もしかして……ああ、もしかするとの話だよ。

俺が自惚れているだけかもしれないが、伊吹は俺の事が好きなのか？

「あのなあ。それはラブじゃなくてライクって意味だぞ？」

「ら、らいく？」

「普通に友達としてって意味だよ。俺達、何だかんだで付き合いも長いし、よく喧嘩もするけど何だかんだで上手く行ってるだろ？」

「そりゃそうだけど……あんたは……っ」

「ん？」

「……ごめん、やっぱりなんでもないわ」

途中で打ち切るように、何かを言い直すように伊吹はそう告げた。伊吹は俺に微笑みかけてはいたが、なんだろう……何処か寂しげな瞳をしている気がするぞ。

「伊吹？」

「……わ、わかってるわよ。圭介は普段冗談ばっか言う人だって」

「なんかそれ、俺が軽い男みたいじゃねえかつ！」

「軽いでしょ？ 冗談でも恋人言うんだから……っ」

「あのなあ」

そりゃああんなこと、伊吹だからって冗談で言ったのは悪いと思うよ。

でもそのせいか、俺は伊吹の中ではチャラ男になってしまった

「とにかくわかってるから。その……私だって全然気にしてないん

だからねっ!」

「お、おう」

ホントに気にしていないのか?

そのわりには、伊吹の瞳がやけに真剣な気がするが。

「そ、それじゃあ私……そろそろ部活行くからっ!」

「えっ? ちょ、伊吹っ!?!」

行っちまったよ……剣道部で使う竹刀を持って行って。

うーん……伊吹のヤツ。本当になにも気にしていないんだろうか?

やっぱり伊吹はツツパリ伊吹ちゃんだろうか?

さっきのあの伊吹の反応、あんまりそんな風には映らなかつたけどなあ。

……まあいいか。部活の邪魔になったらいけないし、今日はこれ以上はやめておこう。



第100話 デレ期?いいえ、ツツパリです(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ついに100回目キターツ!」

伊吹「テンション高いわね……」

圭介「そりゃ100回だぞ? 天下分け目だぜ?」

暮葉「けーすけ様、意味不明なのです」

圭介「……だって、100回だぞ?」

凧紗「長すぎるぞ?」

圭介「……みんなもつと喜べよ!」

第101話 好きな人と力仕事とラッキー……???

それから数日後、遂に文化祭準備期間へと突入してしまった。

文化祭準備期間とは、前にも説明したような気もするが、とにかく文化祭の準備をする期間だ。

授業などはなく生徒が文化祭に向けて、ひたすら準備に取り組む。

毎年恒例、俺達遊ぶのが大好きな高2男子にとっては面倒くさい期間である。

「6やでっ!」

「7……っ!」

「はい黒やんだウト!」

「だああああちつくしょうっ!」

「黒やん相変わらずダウト弱いんやなあ」

「こらあ男子っ! 遊んでないで働きなさいよっ!」

カードゲームで遊ぶ三馬鹿に対して一喝が入る。

怖え。今の伊吹の顔は間違いなく鬼だったぞ?

あの日から俺と伊吹の間には、なんだか気まずい空気が流れ続けていた。

伊吹の視線を感じて振り向き、そこで目が合つと必ず伊吹は視線を逸らしてしまうのだ。

なんてこつたい。謝って関係を修復するつもりが余計ぎくしゃくしちゃったよ……。

「圭介、国宗さんと何かあったのかい？」

「うわっ！？ ビックリしたあゝなんだ重原か。まあ、何もなかったと言えば嘘になるけど……」

「国宗さん。圭介の事を意識してないかい？」

「あ？ あの伊吹が？」

「そつだよ。恥ずかしそうに目を逸らすじゃないかい」

やっぱりそうなのか。伊吹がとうとうデレ期に突入したってのかわいいわい。その割にはツンな言葉しか聞いていないし、というか視線を逸らされるんだぞ？

これってつまり、目を合わせたくないくらい嫌ってるってことじゃねえの？

「わっかんねえなあ……」

「ちなみにこれ大吾情報、国宗さんは昔から想い人がいるらしいよ？」

「へえ……まあアイツだって一応女の子だし、好きな奴の一人くらいはいるだろ」

その伊吹が好きなヤツって誰なんだろう？

なんだかムカついて嫌な気もするけど、それで伊吹が幸せになるなら応援しようかな。

まあ……相手が誰だかは気になるし、伊吹が誰かと付き合っつて嫌

な気しかしねえけどよ。

「それが自分だとは思わないのかい？」

「あのなあ！ 万年非モテ男の俺が女子に好かれるわけねえだろ。増してや伊吹だぞ？ あれだけ冷たく当たられるって嫌われてる証拠じゃねえのか？」

まあ、完全には嫌われていない様子だが……それでも、少しは嫌われているかもしれないな。

特に今日は顔さえ合わせてくれないし。

ああ……どうしよう。伊吹と普通に話が出来ないって精神的に結構くるよ。

「俺でも気付く事に気付かないって……流石は圭介だよ」

「なんだよそれ？」

「いやいや気にしないでいいよ。それで圭介、圭介は国宗さんの事どう想っているんだい？」

「伊吹のことか？ そんなの幼馴染で大切な仲間だと思ってるよ」

「恋愛対象じゃないんだね？」

「幼馴染が恋愛対象ってのは、多分ギャルゲーとか二次元限定の話だと思っぞ」

現実の幼馴染が付き合うだなんて話、今まで俺は聞いたことがねえぞ。

事実、俺だつて伊吹に対してそんな感情を持つてないし……多分。とにかくだ。それは二次元だけの話だ。

リアル  
現実じゃそんな事はありませんよ……多分。

伊吹は俺に言わせれば家族みたいな存在で、どうしてもそういう目では見れないんだ。

それに、恋人なんてすぐに壊れるかもしれない関係。俺はそれが嫌だな……。

伊吹とは今まで仲良しだったんだし、これからもずっと仲良しでいたい。

……やっぱり、俺つてある意味じゃ伊吹が好きなのかもしれないな。

「現実つて退屈だねえ……それじゃあ木下さんはどうだい？」

「えっ……く、暮葉っ!？」

ななななな、にやんで暮葉しゃんなんでしゅかつ!

……つつか、なんなんだこの変な感じ?

一瞬胸に感じた違和感……どこか懐かしい感じの不思議な感覚。

「二人は校内スキンシップも余裕らしいし、大吾情報だと1年の廊下で抱き合つて、1年の間では2人は付き合っていると思われているらしいよ」

「なんでやねんっ! 別に俺と暮葉は付き合つてねえよ。その……いところだといこー!」

確か俺と暮葉はいとこつて設定だったはず。

いとこなんだからスキンシップがあつてもいいだろ。

そうだ、だから別に特別な意味なんて……第一、1年の廊下でのアレは事故だったんだ。

馬鹿な1年が暮葉に体当たりしたから、その勢いで暮葉が抱きついて来ちゃっただけなんだ。

暮葉は何とも思っていないだろうし、抱きついてくるのはいつもの事だ。

だから……別に特別な意味は。俺だって別に暮葉には……っ！

「もしかして圭介、木下さんの事が好きなのかい？」

「はい!？」

「まんざらでもない感じだねえ」

「ふっざけんな！俺はロリコンじゃねえよっ！」

俺はロリコンなんかじゃない。だから暮葉を好きになるわけがない。俺は……女子高生が好きなんだ。暮葉は……アレだ、妹みたいなもんだ……ッ！

妹……でもなんでだろう。葵とは全然違うような……っ、ああもう！余計なこと考えてんじゃねえよ俺！

「圭介も国宗さんに負けないくらいツンデレだね」

「うつせ黙れ！そういうてめえはどうなん」

「ちよろつとそこの野郎共あゝ！力仕事手伝って〜！」

「けーすけ様っ！荷物の量が多いので手伝ってくれと助かるのですっ」

重原に叫ぼうとした瞬間、気だるそうな小坂と元気が暮葉が、俺達

に輜重兵しちゆうへいとして出兵しやがれと優しく迫ってきた。  
力仕事かあ。確かに女の子には厳しいよな。  
暮葉は力があるほうだけど、小坂はあんまり力がなさそうだし……  
何より二人とも女の子だ。

「暮葉も小坂も随分働いただろ？ 俺ら今まで遊んでたんだし、だから力仕事は任せてくれ」

「もきゅ？ で、でもけーすけ様っ。結構な量なですよ？」

「そーだよ？ 圭くんの細腕二本じゃキツいかもだよ？」

「あのなあ、こう見えても腕力には自信があるんだ」

悪かったなああんまり強そうな見た目じゃなくて。

そりゃ鏡で見たら自分でも思うよ。平均的すぎて全然強そうに見えないって。

けど、この拳で魔法使いや超能力者を倒した。永淵だってこの拳で倒したんだ。

それに 俺には強力な助っ人がいる！

「俺と圭介で全部やっつくから、2人は休んでも構わないよ」

とても爽やかな笑顔を浮かべ、レディーに対して優しく振舞う重原  
広敏くん。

彼は武道家でもって筋肉質なのだ。

多分、いつも一緒にいる俺と大吾と重原の三人組の中じゃ、重原が  
最も腕力のある奴であろう。

「けーすけ様に重原さん……ありがとうなのです！」

「へえ。日頃からそうしてれば圭くんもモテるのにねえ」

「うっせ黙れっ」

なんでそんなニヤニヤしながら言うんですか。

あと暮葉。モテるって言葉を聞いた時、なんで不機嫌そうな顔になるんだ。

まあ、そんな事を気にしていても仕方がない。それよりさつさと仕事に行こう。

えーっと……小坂から手渡されたメモ帳を見ると、行き先は第一準備室か。

取ってくる物は……2・4と書かれたシールが貼ってある段ボールね。

さつさとブツを取って教室に戻ろう。廊下で生駒や野原には絡まれたくないからな。

と、いうわけで俺と重原は準備室前まで辿りついたのだが。

「う、ぐあ……っ」

「どうしたんだ重原？」

「圭介……俺、トイレに行ってくる」

「えっ？ なんだよ、お前もしかして今日はあの日か？」

「馬鹿！ 俺は男だ……まあお腹が痛いのは確かだね。10分以

内に戻ってくるからヨロシク！」



「あ、ちょ……オイ重原っ!?!」

ダッシュすんの速え……。  
まるでドイツのロケット戦闘機、me163コメットが急上昇する  
かのような。

まあ、腹が痛いなら仕方ねえか。  
とりあえず重原の負担軽減の為、一人で仕事をちやっちやとやっち  
やいますか。

でもなあ。あの筋肉男が使えないとなると、結構キイい仕事のように  
な……まあいいか。

とりあえず、俺は任務を遂行する為にドアを開けて

「……えっ?」

「ッ!」

「ぶ……藤島　ッ!?!」

驚きの後に流れる沈黙。瞬間、2人の少女の顔が真っ赤に染まった。  
そう、視線の先に　マンガみたいに着替え中の女の子がいたんだ。  
一人は豊満な胸の持ち主で、なおかつクールなイメージのある明智。  
明智は何故か片手に青系の男モノの衣装を持っており、近くには剣  
のようなものが置いてあった。

ちなみに下着の色は黒。ぶ、ぐ……やべえ、エロスな身体にエロス  
な下着で鼻血がでそう。

その隣で着替えていたのは生駒だ。美乳でスタイルのいい生駒は黄  
色い帽子を被っていた。

何の衣装であろう。ちなみに下着の色は白。なんとも生駒らしい……  
……ってかヤバくねコレ?

とにかく言い訳をしなければ

!

「こ、これはそのっ！ 荷物を取る為にやったことで、決して邪な感情があつたわけでは」

「ふ、藤島……やっぱり藤島はヘンタイさんだ……っ！」

「ちょ、違っ！ 俺は紳士」

「クソ介え……くたばれエロ野郎おっっ！」

瞬間、生駒のしっかり握られた拳が顔面に激しく突き刺さった。鼻っ柱が折れる勢いの拳をモロに受け、俺は後方へ数メートルも吹き飛ばされた。

そして 俺は殴られると同時に壮絶なる悲鳴をあげてしまった……。

第101話 好きな人と力仕事とラッキー……??? (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

黒木「ちくしょく羨ましい! なんでテメエにラッキースケベがあるんだよ!」

圭介「うつせ黙れ! どこがラッキーだよ、顔面殴られたんだぞ?」

黒木「それでもラッキーだろ! 女の子の下着姿を見れたんだぞ!」

圭介「確かにそれは嬉しかった……だが、殴られるのはゴメンだ!」

黒木「馬鹿野郎! 殴られて感じるのが真の男だろ!」

圭介「お前DMかよ!? 俺にそんな趣味はねえっ!」

## 第102話 主人公は修羅場を経験する運命

「うへえ〜……」

ちつくしように生駒のヤツ。ホントに思いっきり殴りやがったな。

どうやらアイツは俺が心底嫌いらしい。くそつ、これが普通の人なら病院送りだぞ？

まあ着替えを見ちまったのは悪いと思うよ。でも、流石にこの仕打ちはねえよ。

やっぱ俺、生駒は苦手だ……ッ！

まあその生駒は明智にこつ酷く説教され、現在は

「うにゃあああつ！ こゝごめんによさいナギちゃ〜んつ！」

「全く。すみにゃんは陸上部で鍛えているんだ。藤島は素人なんだぞ？ ホントに気を付けろよ」

そつか。生駒があまりにも変態すぎるせいで忘れていたが、アイツ陸上部だったんだよな。

それはいいんだけど……。

陸上は俺が間違っていないけりゃ、ただ単に走ったり跳ねたりする競技だ。

そんな陸上部に所属する女の子が、なんでボクサーもビックリなパンチを出せるんだよ。

しかも生駒はニヤ厨のオタクなんだぞ？

「藤島つ！ すみにゃんがすまなかった……っ、その、怪我とかしてないか？」

「別に怪我なんてしてないよ。俺の方こそ着替え見ちゃってごめん……」

「き、気にするなつ。準備室で着替えていた私らが悪いんだ」

「ああ、ノックくらいすればよかった……」

でも、そのおかげで明智の破壊力抜群なボディーが生駒の美しいスタイルが……あかん、思い出ただけで鼻血が出そうだ。

やっぱ下着姿は全裸よりエロですな！

「うう……すまなかった、藤島……っ」

「明智、そこまで落ち込むなよ」

俺は一步ほど明智に歩み寄った。なんかその……落ち込んでいる女の子は放っておけない。

何より明智は俺の友達だからな。うん、放っておくわけにはいかないぜ。

というわけで接近し、慰めてあげようかな〜と思ったのだが……。

「ちえすとお〜っ！」

「ふおがあッ!？」

刹那、ゴン！とこめかみに激しい衝撃。

グラツと脳が揺さぶられ、視界がぼやけてフラフラとしつつも何とか体勢を整える。

ふう、俺の体質ってホント便利だ。脳震盪すら起こさず痛みさえも既に感じない。

そんな通常の状態になったからこそ、俺は誰に何をされたのか整理する事が出来た。

犯人は生駒である。生駒が飛び蹴りで俺のこめかみをやりやがったのだ。

おそらくは靴の踵の部分。あのあたりでこめかみを蹴りやがったのだろう。

「ちっ、角度が甘かったみたいだよ……っ」

「おおまえっ！ 今の下手すりゃ死ぬぞ!?!」

しかもなんだよ角度が甘かったって。

コイツ……俺を殺す気満々じゃねえか ツ！

「クソ介がゴキブリ並に丈夫だって、ナギちゃんから聞いたからだ いじょーぶだよっ」

「明智っ！ お前余計なこと生駒に吹き込むなよっ！」

「うっ……すまん、つい言っちゃったんだ……っ」

「ああもっ！ とにかく効こうが効くまいが、あんな攻撃を躊躇なく仕掛けるって……てめえは一体どういう神経してんですかっ!?!」

「私の任務はすみにゃんを守ること！ 害虫クソ介駆除は私の仕事だよ！」

あははは、ねえねえ俺さ……キレちまってもいいかな？

流石にそろそろ我慢の限界っすよ。  
もうね、怒りを押さえるのが……そろそろ限界っす。  
でもなあ。女の子にキレる男って情けなく映るだろっし。  
やっぱ世の中理不尽。絶対現代は女尊男卑だ。ちくしょう誰だよ男  
女平等って言ったヤツは！

「いでっ！」

「すみにゃん！ 藤島に乱暴するな、謝れ」

「うにゅくだってナギちゃん……っ」

「謝れ」

拳骨までして俺に謝れと言う明智のあの姿……怖え。  
流石は明智光秀の娘。そして我が初芝高校の風紀委員。  
正直ヤクザの組長よりも迫力があるかもしれん。  
まあ、ヤクザの組長なんて映画でしか見たことないけど……。

「ごめんなさい藤島君……」

「えっ？ ああ、まあ……気にするな」

生駒の態度が180度も変わってしまったんだなんて……明智、恐ろしい子！

「すみにゃんが本当に悪かった。私からもこの通りだ」

「いやいやいや、もういいから頭上げようぜ？」

「許して……くれるのか？」

「許すも何も怒ってねえからさ」

まあ、生駒に対してちよつぴり怒りを覚えてはいたが……。  
ここまで謝られると、なんだか怒る気も失せてくる。

それに、生駒の扱い方がなんとなくわかった気がするよ。

生駒が暴走した時は　とにかく明智を利用すればいいんだ！

「おい圭介え……つてあれ？　4組の明智さんじゃないかい？」

「ん？　おお、確か藤島の友達の……」

その時、トイレに立て籠もっていた重原が戻ってきた。

なんだよアイツ。明智の事知ってたのか。

そつえば……何度か顔を合わせている所を見た事あるかもしれん。

「俺は重原広敏、よろしくね」

「うむ、明智凧紗だ。こつちは生駒純奈、よろしくな」

「よろしくね重原くんっ」

う……ッ、生駒のヤツ、吐き気がするほどに猫かぶりをしているぞ。  
本性を知ってる身としては、まあなんとも見ていて不快な……ッ！  
後で重原に教えてやらねえとな。生駒純奈という人物の本性を、純  
奈だけに隅から隅まで。

「それじゃあ、そろそろ仕事を再開しようか」



「おう！ んじゃあ明智も生駒もまたな」

「仕事頑張るんだぞ二人とも」

「圭ちゃんに重原くん！ まったねー！」

うおおああああつ！ やめろ、やめるんだ生駒。

猫かぶりするのもいい加減にしてくれえ〜！

それにして生駒のヤツ。圭ちゃんなんて呼び方よく覚えてたな。

まあいいや。それよりさつさと仕事を片付けよう。

……うげえ、とんでもねえ量だなダンボール……やっぱ筋肉重原がいてよかった。

ちなみに、明智達のクラスではステージをやるらしい。

その内容はロミオとジュリエット。明智がロミオで生駒がジュリエットらしい。

……ダメだな。ロミジュリは俺的にやっぱ律濤だっ！

放課後、つと言つても帰れるわけではない。

放課後はクラス展示やステージ発表などの準備に加え、部活や有志の準備や練習が行えるのだ。

我が写真部も例外ではない。今日は当日活動に向けた打ち合わせがあるのだ。

ただし、部員全員参加というわけでもなく、それに部員全員が参加できるわけでもない。

「申し訳ないのですけーすけ様……拙者はその、クラスのほうが忙しくてっ」

現に暮葉はクラスのほうが忙しいらしく、今回は写真部に顔を出せ

ないらしい。

「大丈夫だよ。俺の方こそクラスは手伝えねえけど、まあお互い頑張ろうな！」

「はい！」

「暮葉〜！ ちよろつとちよろつと〜！」

「はいはい今行くのですっ！ それじゃけーすけ様、また後で会いましょうっ〜！」

「わかった、お前も頑張れよ」

こうして小坂に呼ばれ、暮葉は教室のほうへと向かったのだ。暮葉が部室にこない……か。なんだか残念な気分だなあ。まあ、仕方ねえか……文化祭は皆それぞれ忙しいもんな。

「栄〜！」

「く、黒やんがあがった!？」

「黒やん、麻雀は強いんやで〜。黒やんが金旭中の番長の頃は、賭け事は黒やんの得意な麻雀以外は認められなかったんや」

「ちょよ！ 赤佐テメエ変な事言うんじゃねえっ！」

「ちょっとあんたら！ いい加減にしないと竹刀でシバくわよ!？」

まあ、中には遊んでいるヤツらもいるが。

そして伊吹にお説教されているのだが……伊吹、一体いつになつたら顔を合わせてくれるのかな？

ていうか、やっぱり俺が謝らないと。でもこれ以上謝るなって言われてるし。

いやいや、でも昨日のアレと今のコレは話が違つたろうし。

……やっぱりいやだな。伊吹に嫌われるって……。

まあ悩んでいても仕方ないし、とりあえず部室に行こう……。

写真部の部室。一見ただの狭い教室だが、意外にも機材な

どは揃っているのである。

そういえばこの部室に入るのも、青山さんの一件が終わってから初めてだな。

つまり、その間一切青山さんとは会っていないわけで……元気にしてるかなあ青山さん。

いや待て。そう言えばあかりも写真部で、俺はそのあかりに告白されたような気が……。

どうしよう！もしかかりが部室で堂々と言ってみろ？

【藤島君も所詮はリア充……失望だよ、退部確定だ！】

【先輩……わたしがいながらひどいです……っ】

【お兄ちゃんサイテー！ 何人落とせば気が済むの！？】

やがては暮葉達にもバレて……。

【けーすけ様……拙者が必死で働いている間にそんな事を……？】

【し、死ねばか圭介っ！】

【へえ〜？ あたし的にはおもしろい展開になってきたかな？】

【流石ヘンタイ。藤島、お前には失望したぞ】

【さすがクソ介、マせてんな】

嫌アアアアアアアアアアアアアアアアアツ！

人生が終わる　　あかりが下手な事を言えば人生が終わっちゃう！  
野郎共も強敵だが女子陣も強敵だ。

何故か俺の友達は……他の女子と仲良くしていると機嫌を悪くする  
どころか、突然蹴ったりひどい事を言ったり……とにかく、最近み  
んなが何故か厳しいんだ！

「落ちつけエゝ考える。なんとか生存ルートに突入する方法を考え  
るんだ……ッ！」

ここはギャルゲーマーとしての意地の見せどころ。

無難に死亡フラグを回避しつつ、なんとか生存フラグを回収してい  
くんだ。

その為にはまず何をすれば。いや、どうやってあかりを口止めすれ  
ば

「あ、圭介っ！　やっぱりここにいたんだ！」

「　　ッ!?」

出たアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！

火種を撒き散らす可能性のある存在　　浅間あかりが！  
さらに、部室のドアが不意に開かれ。

「あつ、先輩とあかり……よかった、約束通り来てくれたんですね  
……！」

瞬間、俺攻略を掲げる青山さんまで入場してきました。

どうする……俺。この修羅場をどう切り抜ける　　!?!?

## 第102話 主人公は修羅場を経験する運命（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「今回はお悩み相談コーナー！俺と暮葉が皆の悩みを解決するぜ！」

暮葉「まず最初の一通は…… 県I市在住R・Iさんのお悩みなのです！」

『レナには好きな先輩がいます。でも先輩はバイト先に住んでいる人と付き合っています。でもレナは先輩を諦められません。そこで先輩を寝取る方法をレナに教えてください』

圭介「なるほどNTRってわけか。確かに好きな人に恋人がいちゃ辛いよな……けど寝取るのはダメだと思うぞ？ その人の彼女さんがどれだけ悲しむか、自分が先輩を寝取られたらどんな気持ちになるか。それを考えるとやらねえほうがいいと思う。それよりR・Iさんは多分若いんだから、もっといっぱい恋愛を経験してその先輩よりいい男を探しなさい！」

暮葉「けーすけ様……くさいけどいい事言うつのですね！ さてお次は 県K市在住T・Fさん！」

『不幸です、よく不良に絡まれます。教師に変な因縁つけられます。あと最近彼女がヤンデレで怖いです。悲劇じゃ……助けてください』

「！」

圭介「なにこのリアル上 さん？ こんなヤツホントにいるんだな……不良に絡まれたらとりあえず逃げる！ 教師に因縁つけられたら一方 行になれ！ ヤンデレ彼女は……まあ、浮気しなけりゃいいんじゃないか？」

暮葉「もきゅ、けーすけ様の言葉がT・Fさんの力になる事を望むのです、さて最後次は 道S市在住Sさん！」

『小説の時間が進まなくて悩んでいます。まだ4月から始まって102話の時点でまだ夏休みに入っていないだなんて……あと、睡眠不足が響いて指が進まず執筆速度が低下して……あと、身体が鈍ったもんで正拳突き練習やったら腕がだるいです……たったの100発（空手じゃ基本）ごときで……ッ！』

圭介「いい加減にしる作者ア！ あ、言っちゃった……」

暮葉「もきゅ、Sさん運動不足なのですね……」

写真部の部室。今のここに部長である浅間英樹の姿は無い。  
俺と青山さんとあかりだけだ。

2人によると、浅間部長はクラス委員なのでクラスのほうが忙しいらしい。

おいおい浅間部長。アンタあれでもクラス委員だったのか。  
そして葵も似たような理由で忙しいらしく、時間通りに集合できたのはこの3人だけらしい。

「つか、招集かけたの部長だよな？」

「は、はい……部長です……っ」

「ったくうちのエロ兄貴は。ちゃんと時間を守れよな！」

あかりは兄貴のルーズさにお怒りのようである。

まあ、人様を呼んでおいて呼んだヤツがないってのは、俺もあかり同様ムカついてますけどさ。

どうせ浅間部長だし……もう、あの人の場合は怒っても仕方がない気がするよ。

「部長がいない事には何も始められないし、雑談でもゲームでもして時間でも潰さないか？」

「おっ！ 圭介ナイスアイデアだなあ！」

「わ、わたしも……先輩の案に賛成です……！」

案の定、2人が俺の提案に乗ってくれた。  
フフフ……いいぞ。これはいい展開である。

ここで説明しよう。俺の死亡フラグ回避作戦要領を！  
まずは俺から適当に話を振って二人に乗ってもらうんだ。

続いて恋愛のお話……つまり、恋バナというヤツに発展しないように気を付けて話を進める。

そして雑談している間に浅間部長が来るハズだ。浅間部長が来れば部活の話になるだろう。

そして 部活が終われば真っ先に部室を出て、俺は暮葉達がいる教室へ向かう。

ぐっふふふふ……見よ！この完璧の作戦。これで俺は死なずに済むぞ！

「よ、よおし………そんなじゃあ何の話する？」

「あ………っ！ その前にその………し、失礼します………っ！」

「いいっ！？」

「なっ！？ ち、千早 ツ！」

これは予想外の展開。なんと青山さんが椅子を持ち、立ち上がった  
と思いきや俺の隣に椅子を置き、なんと肩に凭れかかってきたのだ。  
おいおいやべえぞ………こんな自体は予想もしていなかった！

「あの一青山さん？ こいつぁ一体どういう事？」

「えへへ………先輩はわたしの彼氏なんですよ………？」



「待て！ ちょくつと待て！ 何かぶつ飛んでやいないか！？」

「気のせいですよ先輩っ」

こんなにも早く修羅場が訪れるとは思ってもしなかった。

あかりが対抗心をむき出しにしているぜ。歯を食いしばり力強くこちらを睨みつけている。

「ち、千早あつ！ 今すぐ圭介から離れるよな！」

「え……？ なんであかりが怒るの……？」

「……ッ！ と、とにかくどけよな！」

「いいじゃん。わたしのこと……応援するって言ったよね……？」

「言ったけどダメなんだ！ ……ああもう仕方ない、こうなったらあたしも」

その時、あかりまでもが俺の肩に凭れかかってきたのである。

あまりの驚きに思わず情けなく声をあげてしまう。

右方のあかり。左方の青山さん……。

そりゃあ当然嬉しい事は嬉しいよ。女の子の感触、匂い、そして温もり……。

すべてが男である俺の心を満たし、同時に純粹かつ邪な欲望を生み出しつつある……ってダメだろ！

もしこんな所でエッチなイベントが発生し、誰が見られたら……俺の学園生活は破滅だ！

「二人とも、肩が重いんだが……」

「……ごめんなさい先輩、キスのほうがよかったですか……？」

「いや、そういう問題じゃねえから！」

「そうですよね……先輩は男の人、エッチなことがしたいんですよね……」

「ちいいいがああううううう！ いや、違わないけど違うんです！」

「わたし……先輩が相手なら、いつでも来いですから……っ」

「青山さん！？ もっと自分を大切にしようね！」

これまた予想外だったぜ……青山さん、まさかここまで積極的な子だったとは。

これもアレか。俺が青山さんを家から解放して自由にさせたせいなのか？

いやいやそんなハズがない。俺に告白して心を広いただけなんだろう。

でも 心と一緒に股は開かんでもいいわ！

「圭介！ 千早が好きじゃないんなら誰が好きなんだ。いい加減ハッキリ教えるよな！」

「あのかなあ……特に好きな人はいないぞ？」

「……そうなんですよ、先輩……困ったちゃんなんです。だから……わたしは先輩に好きになっただけなら……先輩の望む事をな

んでも」

「ってなんで制服に手をかけるの!? どうして服を脱ごうとするんですか!？」

しかも着替える女子ってなんかアレだよな。ぶっちゃけ全裸よりヤバイよね……ッ!

「千早、ただのビッチだな!」

「違うよあかり! 先輩も誤解しないでくださいね……わたし、こんなこと先輩にしかした事ありません……っ!」

「いや、そりゃわかってます……」

青山さんは中学生の頃から俺を想っていたらしいし、なんだかそれが初恋っぽいし。

とっても純粹な子……だったはず。うん、今は白黒子もビツクリな変態淑女だけど。

でもきつと……今がオカシイだけなんだ。

恋というウイルスに毒され、マトモに思考ができないだけなんだ

!

「圭介! 千早が好きじゃないんならもっと手厳しくしろよな!」

「そう言われてもなあ……」

このベタ惚れ状態の女の子を突き離せと?

そりゃあそうしないと面倒なのはわかっている。でも、流石にそこまで心を鬼には出来ねえし……。

「あかり……わたしの事、応援……してくれる約束だったのに……」

「そ、そうだけど……でも千早は進み過ぎだ！ 恋愛はもっと順序を踏めよな！」

「経験ないくせに……」

「っ！ ち、千早だって圭介が初めてだろっ！」

な、なんか俺の目の前で女子同士の喧嘩が始まっちゃったんですが、こりゃあ男として止めるべきか。それともしばらくささせておくべきか。

うーん……なんせ恋愛絡みの喧嘩だからな、判断に苦しむぜ……。

「……あかり、すごく必死だね……っ」

「あたりまえだろ！ あたいは千早が大事なんだ、だから千早には間違った道を歩んでほしくないんだ！ 圭介との交際なんて絶対間違ってるんだからな！」

あかりは応援するのかわからないのかどつちなんだ？

って、応援したいわけがないか。応援する＝ライバルがさらに強くなるって事だしな。

多分、あかりも俺が

「あかり……その、先輩の事……好きなの？」

「ッ！ そ、そんなわけないだろ！ 吐き気がする事言っ

なよな！」

「ぐはっ！ は、吐き気……」

そんな。まさかあの時俺の名前を呼んだのって……幻聴？

ハハハ……ですよねー。そういえば忘れていたよ。

あかりは最初俺を嫌っていたんだ。

好感度はマイナスだったのが最近0になって、ようやくプラスになり始めて……。

フッフ、あかりも伊吹みたいなものか。デレ期なんて来るはずがない！

「あ……け、圭介違う！ 今のは違うんだからな！」

「せ、先輩……っ！ その、元気出してください……わたしは先輩のこと大好きですから……っ！」

「……どうしてこんなことになったんだろ？」

こんなカオスな状況……ハハハ、もう笑うしかねえや。

アハハハ……なんだろう、この妙な虚しさは……。

そして 完全下校時刻となり、俺はただいま一人で下校中であつた。

暮葉と伊吹は小坂に拉致られ、部活のメンバーとも部室でお別れ……と言つか逃げてきた。

結局、あの後気を落としたあかりを慰め、青山さんの暴走もなんとか止め、部室が落ち付きを取り戻した所で浅間部長と葵がやってき

て、それでようやく打ち合わせが行われたのだ。

「しかし……………」

この状況がずっと続くのは流石にダメだな。

早く終止符を打たなければ。

その為には2人のうちどちらかと付き合うか、2人以外の誰かを彼女にする。

あるいは　もう高校での恋愛は諦めて、とりあえず純粋を保っておくか。

三番目は無理っす。青春に燃える高2男子にはキツすぎる。

じゃあ二番目…………困ったことにあの二人を友達以上として見れないんだよ。

好きだつて迫ってくれるのは嬉しいが、俺がこんなに半端な気持ちじゃ付き合うのはダメだろ。

失礼極まりないし、そしていつかは本気じゃない為に傷つけてしまおうかもしれない…………。

とにかく、片方でも中途半端な気持ちを持ってんなら、お互いの為にも付き合いたくはない。

「…………なんて言ってもなあ」

そういえば、高1の頃のクラスメイトに同じ事を言った時かな。

お前は考えが堅すぎる。そんな事じゃいつまで経っても彼女が出来ない…………って言われたな。

俺…………そんなにお堅い考えの持ち主なんだろうか。

「…………とにかく、このままじゃダメだな」

現状が一番ダメなんだ。だから　早く現状に終止符を打たなければ

ば。

……こうして準備一日目が終わり、二日目三日目も順調に準備が進み。

木曜日、文化祭一日目が訪れた。

第103話 準備(?)

in部室(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

凧紗「ふう、やっと文化祭か。ようやく私の出番がありそうだな」

暮葉「明智殿は文化祭で何をされるのですか!?!」

凧紗「私はステージでロミジュリをやる。ちなみに私はロミオ役だ」

暮葉「すごいんですね! 拙者、必ずけーすけ様と一緒に見に行きますね!」

凧紗「う、うん……藤島が来る……うん、頑張る……っ!」

生駒「暮葉のクラスは何するの? クソ介が馬のアニマルマスクを付けてハイポーションでも作るの?」

暮葉「もきゅ! 作りませんよそんなもの! 拙者達は喫茶店なのです! そしてけーすけ様が女装しちゅうんです!」

圭介「誰が女装なんかするかあ~~~~っ!」

圭介が女装するかは、それは当日のお楽しみ



**番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 メインキャラ編！（前書き）**

どうも、今回は夏の感謝祭企画！

キャラも増えたので、ここらでキャラクターを一挙紹介したいな！  
と思います！

途中作者のおバカ主観や、完璧作者の妄想であるイメージ声優まで  
あったりなので、そういうのが苦手な方はご注意ください。

それではどうぞ！

## 番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 メインキャラ編！

ふじしまけいすけ  
・藤島圭介

イメージCV：間島淳司（高須竜児、相川歩など）

……いや、阿部敦（上条当麻、相馬空海など）？

初芝高校2年4組在籍。

身長172cm、体重59kg、8月生まれ。

この物語の主人公。

一人称は【俺】で外見上の特徴と呼べるものはあまりないが、どうしても治らない寝癖がピンと立っててアホ毛みたいになっている。

それが多分唯一の特徴っぽい。

親が共働きで滅多に帰ってこない為、現在は妹の葵に加えて居候の暮葉と三人生活。

全く家事が出来ず、家ではいつもゲーム（主にエロゲー）をプレイしているが、焼きそばだけは作るのが得意である。

馬鹿の部類だが、進学校である初芝に入れるだけの学力はある。初芝に入った理由は単に伊吹と離れるのが嫌だったかららしい。

異常に身体が丈夫でトラックに引かれても死なず、B-29の飛行高度から落下しても死なない。

過去に伊吹を守る為に奔走していた為か、そこそこ喧嘩慣れしている。そこらの不良よりは強い。

本人曰く、「一度に倒せるのは三人くらいまで」らしい。

それでも彼の相手は基本的に身体能力が低く、仮に高い相手と戦っても持ち前の防御力のおかげか、最終的には勝利に持ち込む事が多い。

実は革命で失脚したロジーナ皇太子だったアレクサンドルの子孫で、暮葉曰くその能力や体質が先祖返りしたらしい。だから異常に身体

が丈夫で、怪我をした時の回復力も異常に高いんだとか。

しかも、敵を倒すと念じながら女の子とキスをすると、爆発的なパワーを手にする事が可能。

多分、リミッター解除モードの彼なら亀 人くらいは倒せると思う。一方で弱点は攻撃手段が素手しかない事。リミッターを解除するにはパートナーが必要な事。そして何より水が怖い事である。

性格的には優しくして面倒見がいいが、多少感情的で口も時々不良並に汚い。

だが精神的に弱い部分もあり、何か事件、特に伊吹絡みだと自虐的になる事が多い。

一応常識人なのでポジシヨン的にはツツコミだが、エロの方面ではボケに回る事が多い。

いわゆる性欲豊富な変態さん。女の子にセクハラ的な発言をする事もあるが、本人は『変態という名の紳士』であるとアピールしている。

重度のオタク趣味を持っており、もう深夜アニメどころかエロゲーにまで手を染めている。

彼女いない歴〃年齢で当然彼女が欲しいとは思っているが、当の本人が恋愛に関しては鈍く、数多くの女性に好意を寄せられてもあまり気付かない。

本人曰く友達も少なく嫌われ者。実際途中までは永渕との一件でかなり嫌われていたが、最近は見直されている様子。あとモテないらしいけど、どう見てもハーレムです本当にありがとうございました。ちなみに部活は2年の途中から写真部に入部。

また水恐怖症であり、海やプールは苦手で当然泳げない。

まあ…… 良くも悪くもありがちな主人公キャラ。

イメージCV：伊藤かな恵（佐天涙子、エルシィなど）  
初芝高校2年4組在籍。アルファ隊所属。  
身長146cm、体重37kg。6月生まれ。

某エロゲーに影響されて誕生した本作のヒロインの一人。

豊臣秀吉の子孫、綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛、琥珀色の目に色白で小柄な身体を持つ戦国系魔法少女。異世界【レムリア】の【ロジーナ】出身。ちなみに御先祖様は豊臣秀吉（自称）。

アレクサンドル皇太子の子孫である圭介を、【サヴィエト亡命政府】から守るべく藤島家に居候することになり、その上日本人に成りすまして高校にまで通っている。部活は圭介同様写真部。

なんか、アルファ隊が怪しげ（秘密）な手続きをして誤魔化しているらしい。

性格的には明朗快活で人懐っこく、小動物のような愛嬌を持っている。見た目通り子供っぽいところもあり、要するにアホの子である。学校では人気者らしく、男からも女からも愛でられている。

圭介の護衛任務と言いつつも、藤島家では結構ぐーだらしているようで、圭介曰く『ニート予備軍』との事。背が小さい事と貧乳である事を気にしており、その事を指摘されると激怒するらしい。

戦闘能力が非常に高く、小柄ながらも鍛え上げられた大の男や化け物とも互角に戦う事が可能。

最近考えた必殺技は『天神無双木下流“天下統一”』、使用武器は一期一振という有名な日本刀。

一応魔法少女だが、魔法が苦手で一度使えば周囲に甚大な被害をもたらす。

だが全く使えないわけではないようだ。一応風系統の魔法を使える。あと、魔力を感じ取れる為、何かと圭介に頼られている。

圭介に好意を抱いていおり、最近ようやく自覚した様子。

読者様には結構人気キャラらしく、作者も扱いやすい上に可愛いから大好きなキャラの一人です。

・くにむねいぶき  
国宗伊吹

イメージCV：斎藤千和（フランチエスカ・ルッキーニ役、暁美ほむら役）

……いや待て！青葉りんごのほうか（ry

初芝高校2年4組在籍。

身長151cm、体重40kg。16歳、9月生まれ、A型。

（多分）圭介がだあくい好きだが、何故かいつもツンツンしている幼馴染。

銀髪のショートヘアやツンとした紅い瞳が特徴的で八重歯が目立つ極上の美少女。また黒リボンを好んでつけている。

あまりのツンばかりな態度なせいか、圭介に「ツツパリ伊吹ちゃん」と呼ばれているが、本人にそれを言うと殴られるので気をつけましょう。

幼い頃母親が薬で捕まり、その後父と母は離婚。そのせいか周囲から無視、あるいはいじめられ続けてきたが、そんな中圭介や葵だけが彼女と仲良くしていたらしい。

圭介曰く、中学1年の頃までは素直だったらしいが、中1の頃に永淵にレイプ未遂に遭う。以降もう暴漢に襲われない為か、あるいは弱い自分を隠すためか、急にツンデレになっちゃったんだとか。とっても強気だが、少しでも折れると誰よりも繊細で弱々しい女の子。

いつも助けられていつも一緒にいてくれる圭介に対し、恋愛感情

を抱いている様子だが、素直になれない上に圭介にも「伊吹がデレるわけがない」と思われている……なんだか可哀想な子。そんな彼女も圭介の事以外になれば普通の女の子で、剣道部では部長を通り越して実力No.1。

交友関係も良好で友達も多い。普通にモテるが告白は全て断っている（多分圭介が好きだから）。

焼きそばが大好きで、そのせいで圭介が焼きそばだけ得意になったらしい。

背が伸びない上に胸が全然大きくならず、その事で悩んでいる。作者的に一番好きなキャラ……というか俺の嫁（オイ！）。

読者からの人気も高いようで、ぶっちゃけ伊吹ルートが書きたいのですが……どうしょ、皆さんはどうでしょうか!?

#### 明智風紗

あけちなきほ

イメージCV：小清水亜美（シャーロット・E・イエーガー、麦野沈利など）

初芝高校2年3組在籍。

12月生まれ。17歳、身長165cm、体重46kg。

黒髪の長いポニーテールにツンとした蒼い瞳。姉御口調で喋り一人称は『私』。

容姿端麗、頭脳明晰、御先祖様は明智光秀。クールな雰囲気だが時々女の子な初芝の風紀委員。

昨年まで佐井学園開発科に通っていたが、古宇坂市へ引っ越しこの春より初芝高校に通っている。

その際豹変した父、光雄に頭を悩ませ仕方なく暮葉に勝負を挑み、何故か圭介と対決するが敗北。

その後三人がかりで光雄（光秀）と戦い、彼女が圭介にキスをしたおかげで何とか勝利する。

実は超能力者で発火能力者。バイロキネシスト

その能力自体はバレーボールくらいの火の玉を投げたり、2mの炎剣を作りだしたり、本気を出してもかめはめ波のように放つ事くらいしかできない。

それでも身体能力が高いため、肉弾戦と併用して能力を使用している。戦闘力は作中でも高いほう。

だが発火能力は弱点が多く、悠との一戦では酸素濃度を操作され、炎を消されてしまった。

スタイル抜群の巨乳で、それはスミ水を着た時に圭介が鼻血を噴くほどらしい。

交友関係も良好。特に純奈とは親友と呼べるほどだが、純奈のレズっぷりに本人は困惑している。

真面目で教師達からも一目置かれており、発言力も高くそのおかげで圭介の学校生活を救った事も。

圭介の事は友達……と思っっている様子だが、どうも好意を抱いている様子があるっぽい。

あまりクール系キャラを書かない作者だけど、読者には好評でもっと活躍して欲しいとの意見も。

超能力者であることと、過去のことから一番短編が書きやすいかも。

・浅間あひまあかり

イメージCV：野水伊織（ハルナ、ニンフなど）

初芝高校1年3組在籍。

身長145cm、体重38kg、4月生まれ。

輝くようなだ橙色のツインテール、ツンとした紅い瞳を持つ美少女。一人称は『あたい』、やんちゃな性格で正義感が強い。そんな性格からか、圭介の悪い噂を聞くと友達を守る為に圭介に喧嘩を売る。その後も険悪な関係だったが資金不足の一件以降、彼の事を見直して徐々に仲良くなっていく。

今では恋愛感情を抱いており、遠回しに告白もしているが、本人は口では否定しようとしている。

頭が致命的に悪く、初芝に入れたのも奇跡としか言いようがないらしい。

先述の通り正義感が強いが、後先考えずに行動に移る事が多い為、思わぬ所で失敗することがある。

とても強気だが、一度折れるとツンデレ娘のように脆い。

家庭の事情でかなり厳しい生活を送っているが、普段はそれを感じさせない雰囲気。しかし一度過労によって倒れてしまい圭介の世話になってしまう。

交友関係は良好。葵や千早とは親友と呼べるほど仲が良く、暮葉ともそこそこ仲がいい。

反面兄貴や弟には手厳しく、特に兄貴の事を【馬鹿兄貴】【エロ兄貴】と軽蔑している。

馬鹿だが部活とバイトを両立している、結構すごい子なのかもしれない。

最近人気が出てきた様子。このキャラ紹介を機にもっと人気が上がればな〜と思います！

あおやまちはや  
・青山千早

イメージCV：花澤香菜（千石撫子、天使 / 立華かなでなど）  
初芝高校1年3組在籍。

身長157cm、体重45kg、11月生まれ。



控えめな性格だが、その容姿から男子にはモテモテ。ただし当の本人はその状況に困惑している。

圭介が嫌われている事情や本当は優しい人だと知っており、密かに想いを寄せていた。

圭介が暮葉と一緒に写真部を訪れた時、初めて彼との会話を交わす。将来は写真家になりたいと思っており、その為にあまり好きではない浅間部長のいる写真部に所属している。

前述の通り、控えめな性格ではあるが意外と発言はストレートであり、浅間部長に対する文句はいつも圭介達以上にキレがいい。最近デレ期に突入し、圭介に告白したが積極的にアプローチ中。

実は由緒正しき旧家の出身で、所謂箱入り娘である。部活動に励む事すら特例とされており、一時は転校させられそうになるが、圭介によって阻止され初芝に留まる。

交友関係は良好。あかりや葵とは親友と呼べるほど仲が良く、暮葉ともそこそこ仲がいい。

だが、最近は圭介を巡ってあかりと抗争状態に突入(?)。作者的にはもっと人気が出て欲しいな〜というキャラだったり。

この紹介&これからのデレ青山さんが人気出ればな〜と思います！

・ふじしまあかり  
藤島葵

イメージCV：阿澄佳奈（種島ぽぷら、橘美也など）

初芝高校1年3組在籍。

身長155cm、44kg、誕生日5月5日。

ショートカットの水色の髪にちょこんと可愛らしいサイドテール。

またその髪には二つ鈴がありそこからは黄色いリボンが靡いている。そしてその無邪気そうな顔が特徴。

圭介の妹で、見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、友達が多いようだ。

ブラコンで圭介が大好き……というか病気レベルの感情を抱いており、圭介と肉体関係を持ちたいとすら思っている様子。もちろん、他の女子と圭介が仲良さそうにしていると不機嫌になってしまう。根はしっかりもので両親不在の中、家事などしっかりやっている。勉強も得意で高校3年の内容までならほとんど覚えていくくらい、学年どころか学校全体でも三本指に入る学力を持つ。

身体能力は中の上くらい。ただし護身術を習っていた事があるので不良一人なら撃退できるらしい。

趣味は兄の影響を受けてかなりの二次元ラブ、特に兄妹（義理モアリ）で恋愛する話が好きらしい。

それと同じくらい兄の観察が好きで、兄の趣味や行動、性癖などかなりの部分を把握しているらしく、圭介の初恋の人の名前等、圭介の弱みも数多く握っている。

また楽しい事も大好きで、人（主に圭介）をからかうのが大好き。ニヤニヤする話も大好き。

料理が壊滅的に下手で、味はいいものの見た目がグロテスクになってしまう。

作者的には「これサブ？ ヒロイン？」と悩みましたが、一応彼女もヒロインにいれました！

はやかわゆう  
・早川悠

イメージCV：岡本信彦（一方通行、アッセラレータ烏丸与一など）

一応佐井学園の生徒（退学志望）

身長168cm、体重不明（軽い）、誕生日不明、年齢も不明（一応高校生）。

本作のもう一人の主人公。

肩のあたりまで伸びる白髪に紅く染まった瞳、白い肌でホストのよ  
うに整った顔を持つ。

その正体は超能力者の中でも頂点に立つ存在。大変弱々しい外見を  
しているが戦闘能力は高い。

学園の依頼で特異点潰し（異世界人殺し）をやっていた。その理由  
は佐井学園を辞める為に、佐井学園から出された条件をクリアする  
為。本人は今すぐにでも汚れ仕事から離れたかったようである。

しかし汚れ仕事を続けてきたためか、人格は破綻寸前でかなり気が  
ふれている。

人を殺す事に何の躊躇いもなくなっており、普段はクールだが戦闘  
時には必ず虐殺的な笑みを浮かべている。

特異点潰しを続けていたが圭介に敗北した為、それを中止してしば  
らくは街の不良から物を奪って生活。その後ミネットと出会い、良  
心が完全に消えていなかった為に彼女の救出に向かう。

しかし銃撃され重傷を負う。医者曰く脳にダメージを負ったのでほ  
ぼ確実に後遺症が残るらしい。

能力『大気操作』を持ち、暴風を吹かせたり風の力で自ら飛行した  
り、さらには大気中から成分の濃度を操作したりもでき、その気にな  
れば可燃性のガスを集め、爆発させる事もできる。

【暴風の膜】という風を利用した防御も可能。

気圧操作や大気中の分子運動の操作まで可能。空気中の酸素濃度を  
下げる事もできるので、某最強のロリコンレベル5でも危ないかも  
しれない。

最強に恥じない能力の持ち主だが、反面身体能力が低いので単純な  
殴り合いは大変弱い。

その事が圭介との戦いで敗因となった。

その上、陳との戦闘で脳にダメージを負って以降は、魔力エネルギー  
ー変換機による恩恵を受けなければ超能力を使うどころか、満足に

歩く事さえ出来ない身体になってしまった。

機械に頼れば今まで通り能力を使う事が出来るが、制限時間は現時点で15分程度。

登場はかなり遅かったのに、本来の主人公である圭介より人気っぽい。

やっぱり一方通行効果であろうか。

ミネットには甘いので、そのうちロリコン扱いされる日も近いかもしれない。

ちなみに性別不詳なのでミネットによる女の子説アリ。

#### ・ミネット・ローラン

イメージCV日高里菜（ラストオーダー打ち止め、香椎愛莉など）

アルファ隊所属、暮葉の後輩らしい。

身長142cm、体重38kg。ちなみに14歳。

悠曰く「小柄だけど大体中学生くらいか。女の瞳は綺麗な緑色で、澄んだ水のように明るく淡い青色のツインテールはどこかの外国人の風貌を感じさせる」外見らしい。

アルファ隊の一員。いかにも魔法少女といった外見をしている。

ある意味この子が一番タイトルに合う子かもしれない。

魔族と戦闘中に悠と出会い、彼と一夜（いやらしい意味ではない）を過ごした。

翌日陳との戦闘で苦戦し、あと少しで負けそうな所を悠に助けられる。

命を賭けてまで自分を救ってくれた悠に感謝の気持ちと同時に、意識のない彼の唇を奪った事から好意のようなものを抱いている様子。以前は一応悠の事を仲間の仇として恨んでいたが、同時に彼の気持

ちも理解しており、完全には恨み切れなかつたらしい。だからこそ悠に対して優しく接していたんだとか。

悠の事を男……だとは思っているが、時々性別不詳な悠が女ではないかと思う事も。

性格は明るく元気で、純粹すぎて悪を知らない雰囲気。悠曰く「ガキっぽくて単純」との事。

登場直後から人気者なキャラクターで、作者も大好きなキャラの一人です！

イメージC.V? 早川が岡本ときたらやっぱり彼女は……ねえ?

日高里菜こと、ヒダカリちゃんと作者は同い年 いやなんでもないっ！

・リーネ・デイトリツヒ

イメージC.V: 田村ゆかり(高町なのは、古手梨花など)

身長146cm、体重40kg、15歳。

木下木葉の助手。

見た目は黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールで、活発そうな瞳を持つ元気な娘だが助手と言うだけに意外と頭脳派。しかし文化祭ではミネットと一緒に迷子になる等、子供な所も多い。

その為悠には「クソガキ2号」と呼ばれるが、胸だけはミネットとは対照的らしい。

他人を「くちゃん」と呼び、語尾に「くの」あるいは「の」を付ける口調で話す。

意外だが、これでも車の運転が出来るらしい。

悠が変換機入手の為にロジーナに行った際、セルゲイに襲撃されるも悠に助けられる。

それ以降命の恩人である悠に懐いているようで、好意のようなもの

を抱いているようだ。

悠の事を大変心配している様子。

悠を励ましたり悠の為に変換機の制限時間を伸ばそうと努力している。

悠サイドのもう一人のヒロインのような存在である。

・白藤早苗（ちいさいめなえ）

イメージCV：後藤沙緒里（稲森弓弦、加賀愛など）

身長154cm、体重43kg、16歳。

圭介のクラスメイト。

明るい青緑色の股まで伸びたふわふわロングヘアを、頭の横から水色っぽい白リボンで束ねた髪が二房伸ばしている、無口で携帯電話に文字を打って会話をすると言う不思議な女の子。

その正体はサヴィエトの魔法使いであり、圭介の身柄を拘束しようとして媚を売っていたが、本人もサヴィエトを不審に思っていたもの、上が怖くて命令に従っていたらしい。

そこから救ってくれた上に、「友達」になってくれた圭介の事を気に入っている。

同時に圭介に恩返しをしたいと思っており、8・17事件では圭介への恩返しと圭介の日常を守る為、単身シルフと共に侵入してきた魔法使いの迎撃に向かった。

瞬間移動（レポート）という魔法を扱う事が出来る。「記憶」した物体を自分の手元へ呼びだす魔法だが、記憶した場所に物がなければ転送不可能という欠点を持っている。

その為、戦う際は必ず武器を一定の場所にまとめて隠している。

また自分自身の転送も80メートル以内での範囲なら可能である。

殆ど言葉を発しないが、強い衝撃を受けた場合や感情的になると叫

び声を上げるらしい。

以下追加……するかも

番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 メインキャラ編！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「メインだけでこの長さかよ……」

悠「クソツタレ。オイ、もっと短縮できなかったのかよ？」

作者「今から短縮作業をしると？ 徹夜で書いたのに……！」

圭介「うるせえ！ いいからもう黙れ！」

悠「んで、次回は脇役のクソ野郎共だつて話らしいなア」

大吾「こらあゝ誰が脇役だっ！」

純奈「私はメインヒロインだよ！？ ナギちゃんに攻略されたいのに！」

圭介「……相変わらずカオスな後書きだ」

作者「ああ……絵が上手くなりたい……っ」



## 番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 敵キャラ編！

・久我劉生くがりゅうせい

イメージC V：中村悠一（岡崎朋也、グラハム・エーカー）  
佐井学園の生徒。

身長は不明だが多分180は超えている。

悠とはライバル同士であり、直接会った回数は少ないがそれでもいつも競い合っていたらしい。

現状では悠に次いで2番目の超能力者。

長身で金髪に端正なという整った容姿を持つ。口癖は「テメエは殺し決定だな」。

悠同様口が悪いが、カタギには絶対に手を出さない主義。しかし関わった者は徹底的に叩き潰す。

雪乃は「こういう硬派な人は好き」らしい。悠と同じく汚い仕事を行っているらしい。

【超能力が使えちゃう場合】で登場。校舎東側警備の為に雪乃と戦闘を行い始終圧倒していたが、全力を出せない状況だった事と、その余裕から生まれた僅かな隙を突かれ雪乃に敗北する。

能力的にはこの世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る【波動操作ウェーブハウンド】を持つ。

他の能力の代用的な技も使え、使い方次第によっては最高の破壊力を誇る最強と成り得た能力。

作者的には大変お気に入りキャラで、出来れば今後本編にも登場させたいな〜と思います！

・明智光雄（明智光秀）

イメージC V（光雄）：大塚明夫（フォンヴォルテール卿グウェン

ダル、西村宗一（鉄人）など）

イメージＣＶ（光秀）：緑川光（明智光秀（戦国無双など）、人造人間16号など）

凧紗の父、本来は優しい人らしいが光秀に取りつかれてしまつて以降は鬼のようになってしまつた。

しかし光秀が抜けて以降は元の温厚な性格に戻る。

光秀は山崎の戦いで秀吉軍にやられた事を根に持つており、彼が秀吉の子孫の存在を知らされると同じ女子高生であり、比較的近寄りやすいであろう凧紗に暮葉殺害を計画。

その為に光雄に取りつき、彼からエネルギーを吸い取る事によって具現化に成功する。

具現化後は光雄に取りついていてる頃よりもパワーアップ。圭介、暮葉、凧紗を追い詰めるがリミッター解除モードの圭介によつてぶつ飛ばされ、その後は多分成仏したと思われる。

戦闘には刀と超能力、旋風烈剣サイクロンブレイドを用いる。

大気中の分子運動を活性化させ、空気による斬撃を可能とする能力。簡単に言えば、見えない空気ですきた刃を作り出すことができるらしい。

……まあ、劣化版ねーちんみたいな戦い方をするキャラである。

・永淵晃ながぶちあき

イメージＣＶ：高橋広樹（播磨拳児、菊丸英二など）

白陵高校の番長。本来は卒業している年齢だが何度か留年している。圭介達が中学時代にその中学で番長を務め、伊吹に好意を抱いていた。

しかし告白を断られて腹を立てたのか、彼女をレイプしようとする

が圭介に阻止される。

しかしこの一件以降彼のせいなのか、圭介が一方的に彼を暴行したという噂が流れ、圭介だけが悪人として扱われるようになってしまった。

最近再び圭介達の前に現れ、圭介達を全員潰して伊吹を自分のものにしようと企む。

喧嘩の腕は圧倒的で始終圭介を圧倒していたが、船木の妨害や本気を出した圭介に撃退された。

・船木健太

イメージCV：高木渉（鬼塚英吉、青木勝など）

白陵高校No.2の不良。元々どこかの学校の番長だったらしく、喧嘩の腕も立つ。

あかり達を襲い重傷を負わせ、圭介達と戦っても暮葉の日本刀にビビって敗走。

その後永渕から制裁を食らうも、彼を裏切り立ち上がり永渕を襲う。結果的には敗北するも、圭介が永渕に勝利するキツカケを作った人物である。

何故かリーゼントに異常なこだわりを持っており、本人の髪型も当然リーゼントである。

・陳炎彬  
チャンピン

イメージCV：関俊彦（アレキスター・クロウリー、ムースなど）

サヴィエトの魔法使い、サヴィエト亡命政府では気功と拳法の達人の男。

ミネットと戦い彼女を追い詰めるが、悠に襲われ恐怖心を感じる。それでもミネットを人質に取って戦ったり、悠を銃撃したりと果敢に戦うが最後は警察に逮捕される。

・アナスタシア・アベルツェフ

イメージCV渡辺明乃（シェリー・クロムウエル、結城リトなど）

サヴィエトの魔法使い。古式魔術である召喚魔術の天才でゴーレムを自由自在に操る。

だが一度に一体しか作れない上、ゴーレムを操っている間は他に魔法を使うことができない。

その分アスリート並に身体を鍛えており、喧嘩慣れした高校生程度の圭介を苦戦させる。

それでも最終的には圭介に敗北し、その後はアルファ隊に身柄を拘束された。

古宇坂では警察や機動隊を全滅させ、あかりまで襲っていた。

だがその行為が圭介を怒らせる結果となる。

・セルゲイ・ベレゾフスキー

イメージCV：中田譲治（ディートハルト・リート、破壊大帝マスターマガトロンなど）

ロジーナ人の魔法使い。サヴィエトとは一切関係ないらしい。

扱う魔法の詳しい詳細は不明だが、スリングショットで普通ではありえない速度で鉛玉を撃つ事から加速系の魔法を使うらしい。

娘を救うために仲間たちと共に魔力エネルギー変換機を奪うべく、

木葉の研究所に襲撃を仕掛けるが早川悠との戦闘に負け、木葉に銃

撃され計画は失敗する。

人生で何度も挫折したらしい。また、木葉とも面識がある様子。騒動の後、地元の警察に引き渡されたらしい。

・鷲尾有資  
わしおありすけ

イメージCV：三宅健太（瀬戸豪三郎、駒場利徳など）

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
AMAという不良集団のアタマの男。

大柄で筋肉質で顔に傷がある。依頼を受けて動く男であり、「依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する」という信条で行動している。

サヴィエトからの依頼で圭介拘束を試み、彼を引き寄せる為に秋葉原で部下の不良達を暴れさせていた。最も、本人は依頼主がサヴィエトだとは気付いていなかった。

サヴィエトから貰った魔法衣服マジッククロスを着用し、普通の人間では不可能な運動性能を発揮し圭介達を追い詰めた。しかし、圭介達のチームワークの前に結局は破れてしまう。その後、警察に逮捕されたようだ。

・近藤政信  
こんどうまさのぶ

イメージCV：鳥海浩輔（斎藤一、黒田坊など）

新撰組に似たデザインの服を着た、20代後半くらいの男。サヴィエトに所属する自称武士のお雇い兵士である。圭介を捕える為に圭介達に襲い掛かるが、圭介達の連携プレイの前に敗北する。

その後、圭介達に犯行動機と警告を行い、解放を求めたが結局身柄はアルファ隊に拘束された。

病弱な息子を救うために魔法を覚えたが、その事が当時勤めていた会社にバレてしまう。

口止めの代わりに職を失い、稼ぎと行き場を失った彼はなんとかしてでも息子を助けるべく、魔法使いを募集していたサヴィエトに身を売った。

やった事はともかく、何だかんだ言っただけ息子想いのいい父親ではあった。

・アマデーオ・ベルサーニ

イメージC.V：若本規夫（セル、アナゴなど）

サヴィエト所属の魔法使い。

魔術系の秘密結社にいた過去があり、基本的に宗教を信じていた。しかし、何らかの理由で弾圧され居場所を失い、サヴィエトに身を投げる。

ただし、とにかく迫害されずに魔術師として生きればよかった為、総有主義などという思想はどうでもいいみたいである。むしろ、神を否定するその組織に不満を感じている節もある。

老人ながら2m近い長身で、その上重々しく引きづりそうな衣装を着用しているのにも関わらず、杖など使わないで自らの足で歩ける等健康ではあるらしい。

ただし所詮は老人である事と、魔術に頼り切った戦い方をする為身体能力は大したことはない。

近代西洋儀式魔術を極めており、『魔法日記』に記録されたこれまで行った訓練や儀式の内容、状況など様々な経験を魔法の杖を介して再現する事ができる。ロータスフンド

葵達を拘束し、ガブリエルを召喚したり、その他にも反則級の魔法を次々と扱い、戦闘能力は作中でもかなり高い部類に入る。

それでもリミッターが解除された、覚醒した圭介には敗れた。

アリーナからは「神様なんてくだらないものを信じる魔術結社崩れの魔術師。藤島圭介に敗れる程度の小者」と称される等、サヴィエトという組織内でも厄介者だったらしい。

・アリーナ・ウラジミールヴナ・レニナ  
イメージCV：水橋かおり（巴マミ、呂蒙（恋姫）など）

元サヴィエト連邦国家主席、元サヴィエト連邦共産党中央委員会書記長、サヴィエト亡命政府代表。

さらっと長い銀髪にサファイアのような瞳を持つ小柄な美少女。別名『氷の女王』。

不老不死の薬を飲み、全世界征服の野望達成の第一歩としてロジーナという国を手に入れるべく、表面上は人類の平等を掲げた『総有主義』を考案した。

革命により帝国を滅ぼし、国の頂点となったが自分と上層部にのみ贅沢な暮らしをさせ、国民には貧乏生活を強いる。圧政を布く、自分にとって都合の悪いと思つた人物を次々

々と粛清するなど可愛らしい見た目に反してやる事はダーク。その為国民の反感を買い20年前のクーデターで失脚、国民に封印された。

しかし何者かによって封印が解かれ、再び自らの野望の為に動きだす。

現在レムリアから抜けだし、この世界で魔術師を育てているらしい。現時点ではまだ謎の多い人物である。

・リリア

イメージＣＶ：中原麻衣（古河渚、竜宮レナ）

レナの友達、彼女の事を唯一アリーナと呼ぶ。

ふわっとした金髪ツインテールでピンク色のコートをいつも着用している。

アリーナの事を心配しており、さらに昔のアリーナの姿を知っている様子。

それほど悪人ではないような描写があるが、詳細は現時点では不明である。

・ニキータ・ヴァシレフスキー

イメージＣＶ：玄田哲章（海坊主、黒獅子ラルゴなど）

サヴィエト亡命政府の元帥、元軍人。

アリーナに忠誠を誓っている。兵隊など捨て駒と考えており、何百何千何万と死のうが関係ないと本気で思っているらしい。

・三原寅彦  
おほしむらじ

イメージＣＶ：藤原啓治（野原ひろし、木原数多など）

佐井学園の科学者、三原中隊カンパニーの隊長。

学者としては大変優秀な人材だが、人格に問題があり極めて冷酷非道な性格である。

行き場のなかつた早川を受け入れた、特科会時代から早川の能力開発に携わってきた人物。

早川的能力や思考パターン、性格など早川の全てを熟知している。

8月17日、学園長の命令を受け、特異点を回収すべく三原中隊を



率いて出撃。

風が循環し膜の裏に戻る僅かな一点を突き、暴風の膜を突き破って早川にダメージを与えると言う凄まじい理論の実践で、早川を圧倒し勝利する。

その後、科学と魔法を融合させた最強の魔道能力者を生み出し、魔道能力者を量産して学園長をブツ殺し、さらにその力で世界を征服するという野望を持っている事が発覚。

そこで、再度早川と戦うが……果たして勝敗は？

### ・風剣ふうけんのシルフ

イメージC.V：沢城みゆき（ペリーヌ・クロステルマン、九条和音など）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。

ブリガンダイン風の鎧を身に纏った金髪縦ロールの少女。背はそれほど高くは無く、見た目はヒロイン級に可愛い容姿を持っている。風の精霊【シルフ】の力を持つ。

しかし、女の子には不似合いな大剣を軽々と振り回している。

アリーナの指示で圭介拘束の為に出勤し、ついでに古宇坂市の占領を試みる。大剣を利用した風の魔法を得意とし、その威力は小さな風の塊でさえ自動車を簡単に破壊し、突発的に吹かす暴風は弱っている状態で放つても、建物を瞬時に破壊するほど強力なもの。

ものの数十分で、しかも単身で警察や自衛隊を壊滅に追い込み、初めて圭介と遭遇した際の戦闘では圭介を圧倒。続く二戦目でもリリヤによる【魔女殺し】の魔法を受け、魔法の出力が低下してもなお彼を圧倒するなど、その高い実力を遺憾なく発揮している。

幼少期、友達を守るために行動するが、そのせいで多くの人々に裏切られてしまった。それ以降現実世界に疑問を抱き、「自分が破壊した素晴らしい新世界を創る」という結論に達する。

赤の軍神の一員になったのも、それが理由だ。

圭介に敗北後、重傷を負っているようで行動不能状態にある。

・硬質ハードのノーム

イメージCV：大塚芳忠（自来也、チボデー・クロケットなど）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。

黄緑色の修道服を着た、白人にしては小柄で痩せた初老の男性。地の精霊【ノーム】の力を持つ。

戦闘においては、属性に合った大地に存在するものを利用して戦う。砂の槍や砂の嵐、石剣せうけんなど技のレパートリーは豊富。シルフに同じく、単身で軍隊と戦える実力を持つ。

大規模震災術式を組んで日本を滅茶苦茶にし、圭介達と争うことになる。

始めは圧倒的な実力を見せつけたが、結局はこれまでの敵のように圭介の頑丈さに敗れる。

圭介やアレクサンドルの正体を知っているようで、それを語ろうとした所で悠の攻撃に晒され、圭介の前から姿を消した。

実は生き延びていたのだが、彼を嫌う邪炎のサラマンダーに粛清されてしまった。

作中において、圭介を初めて気絶させた実力者でもある。

・邪炎じやえんのサラマンダー

イメージCV：東地宏樹（草加拓海、バルドロイなど）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。

茶髪の筋肉質な中年の男、爽やかな雰囲気を持ち、白人ながら重原に似ていると圭介に評される。

火の精霊【サラマンダー】の力を持つ。

詳しい戦闘力は現時点では不明だが、聖人だけにリーリヤと同等かそれ以上のレベル（？）

硬派な男で、硬質のノームのやり方を嫌う。その為硬質のノームを処刑した。

シルフの過去の事情を知っており、彼女の保護を最優先している様子。

元々硬質のノームとは教会で同僚だったらしく、今でも神を信じており、サヴィエトの思想は嫌いだと宣言している。

以下、追加予定

番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 敵キャラ編！（後書き）

キャラが増えたらまた追加します！

番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 愉快な仲間編！

初芝高校関係者

・小坂亜紀こさかあき

イメージCV：佐藤利奈（御坂美琴、南春香など）

初芝高校2年4組在籍。

身長162cm、体重49kg、10月生まれ。

ぶっきらぼうな姉御口調で話すアンダーテールの女の子。

伊吹の親友である、何かとアバウトだけど何故かクラス委員長。

圭介や伊吹とは中1の時に知り合い、永渕との一件でほぼ全員が圭介を敵視するようになった時も、彼の友達で居続けたという。なので圭介には意外と感謝されている存在。

戦国オタク……らしいがあまり活躍シーンがない。よく聞くのはロツクらしく重原とは趣味が合う。

恋愛関係のニヤニヤ話が好きらしく、伊吹が圭介に惚れているのを見抜いているのでよく彼女をイジっている様子。本人は一度付き合ったことがあるらしいが、キスすらせず3日で別れたらしい。

今は好きな人はいないらしい。成績は意外と優秀で運動も人並みにはできるようである。

圭介が鼻血を噴くほどの破壊的なボディーの持ち主。もうスク水を着たらただのエロ（ry

・長宗我部大吾ちようそがべだいご

イメージＣＶ：吉野裕行（西條拓巳、アレルヤ・ハプティズム）  
初芝高校2年4組在籍  
身長171cm、体重60kg、7月生まれ。

黒髪のツンツン頭に眼鏡というシユールな外見をしている少年。

圭介の悪友。我欲に素直であり、圭介ですら引くほどの男。

おちゃらけた性格であり圭介にすらウザがられ、女子からの評判は心底悪い。

その実態は現実の女子になにを言われても平気で、現実女子に何の興味もない完全二次元派。

成績は意外と優秀だが、校則で禁止されているハズのPSPを学校に持ち込んだり、その他生活態度にかなり難があり教師陣は彼を問題児扱いしている。

好きなものはアニメなどにかく二次元。嫌いな物は現実。ちなみに彼の嫁は平沢唯らしい。

最近は唯に対する愛ばかりを叫んでおり、圭介達に完全に引かれて

いる。  
本編での出番はあまり多いとは言えないものの、扱いやすさから後書きでの出番はかなりのもの。

自称『ギャルゲーの神』、しかしネット上で有名な落とし神には到底敵わない存在である。

なんだかんだ言って圭介や重原とは仲がよく、この男三人で行動する事は多い。一人称は『僕』、しかし口は悪い。

あと何かと情報収集能力が高いが、なんでもかは詳細が不明である。

・重原広敏<sup>しげはらひろとし</sup>

イメージＣＶ：小野大輔（古泉一樹、平和島静雄）

初芝高校2年4組在籍。

身長180cm、体重70kg、4月生まれ。

身長が高く筋肉質、多分初芝高校では最も強い男。

家が『無差別格闘重原流』の道場であり、重原流武術の使い手。

攻撃手段は素手しかないものの、白陵の不良を一人で何人も圧倒する事ができる程の腕前。

また、山籠りをしていたせいかわたし山のことについては詳しい。

基本的にはしっかりもので爽やかなイメージもあり、その健康的すぎる筋肉や元々の顔面偏差値がそこまで悪くないせいか、女子には結構モテるが本人は恋愛にそれほど興味はない様子。

いつも圭介や大吾と一緒にいるが、多分この三人の中では一番マトモな人だと思う。

しかしマトモと言っても三人の中での話であり、山籠りをした事がある等やっぱり普通ではない。

圭介達と一緒にいる時はいつもオタク談義に花を咲かせ、最近是小坂と音楽の話をしているらしい。

もしかして2人は意外といい感じかも……作者的には扱いやすくしてお気に入りなキャラ。

・生駒純奈  
いしまたすみな

イメージCV：竹達彩奈（中野梓、高坂桐乃など）

初芝高校2年3組在籍

身長154cm、体重43kg、7月生まれ。

普段は黒髪セミロングだが、本気を出すときは髪を括るのでサイドテールになる。バストサイズは圭介好み。圭介が房総丘陵トレイルラン会場で出会った天真爛漫な少女。陸上部に所属しながらオタク

趣味を持っている。

凧紗とは同じクラスで親友……というか彼女は一線を越えようとしている。

その為に邪魔となりうる存在（圭介）を排除しようと、いや……監視しようとする圭介を無理やり陸上部に入れようとしたが、なんだかなで失敗に終わる。

圭介をクソ介と呼んだり、最近は凧紗と圭介の会話を妨害しようとするなど、とにかく圭介に対する扱いがひどい。その為圭介からはあまり好かれていない様子。

本人も圭介が嫌いらしい……が、本当に嫌いというわけではないような描写がたまにある。

そんな百合百合で滅茶苦茶な彼女だが、それ以外を除くとごく普通の女の子で陸上部所属。

その実力は同じ部の先輩や男子を遙かに上回っている。  
低身長ながら二年ながら陸上部エースを務めている。

・黒木仁くろきしん

イメージCV：日野聡（平賀才人、浜面仕上など）

初芝高校2年4組在籍。

身長175cm、体重59kg、4月生まれ。

亜麻色の短髪で耳にピアスをつけている。

愛称【黒やん】、クラスの三馬鹿のリーダー的存在。

元ヤンキーで素行が悪く、いつも凧紗に目をつけられては彼女と対決して敗北している。

伊吹にベタ惚れ状態であり、故に圭介の存在が許せないが完全に仲が悪いわけではない様子。



学校のサボりはあたりまえで、時々喧嘩もしているらしい。

そんな彼だが中学時代は金旭中の伝説の不良と呼ばれ、そのカリスマ性と腕っ節で大勢のヤンキー集団を纏め上げていたらしい。今でも権力があつて白陵への殴り込みの際、大勢の仲間を招集できた。赤佐曰く『バカみたいに強い』『そこの不良が敵う相手じゃない』らしい。

でも今はただのおバカ。

性格は超ハイテンションで自由気まま。とにかく楽しい事大好き。

基本的に遊び人。

・赤佐直人  
あかさなおし

イメージＣＶ：細谷佳正（桑沢ジュウ、黒崎龍之介）

初芝高校2年4組在籍

身長185cm、体重68kg、4月生まれ。

三馬鹿の一人。

身長は180cmを超えており赤髪のセミロングパーマというどこぞの戦場伝説に出てきそうな騎士のような面構え。しかし中身はただの馬鹿。

とにかく面白い事とエロい事が好きで、女子からの評判はすごい。悪いが圭介達とは仲良し。

人助けが好きみたいで、かつていじめられたいた韓国人留学生を助けたらしい。

ただ、その時韓国人に敬意をこめて『チョクトさん』と呼ば、しかもそこを黒木に聞かれ、いつのまにかあだ名が変なあだ名がついてしまったらしい。

自称関西出身らしいが、喋っている言葉はエセ関西弁。

黒木と同じ中学出身で黒木同様元ヤン。その実力は不明だがガタイと黒木と対等な所から察するに、かなりの腕っ節の持ち主だと思われる。しかしいつも凧紗との勝負に負けている。

・大林勇太おおはやしゆうた

イメージCV：代永翼（三橋廉、三輪ヒロシなど）

初芝高校2年4組在籍。

身長155cm、体重48kg、2月生まれ。

三馬鹿の一人。かなり小柄な上に一番キャラが薄い気がする……が、かつてはサッカー部に所属しており、坊主頭はその時の名残なんだとか。

小柄故に動きは素早く、それがサッカーの試合などではかなり役立っていたらしい。

ただし所詮スポーツバカなので頭は悪く、テストはいつも赤点を取っている。

基本的にいつも黒木や赤佐と一緒にだが、意外にも大吾や圭介と仲がいい。

一人だけ違う中学出身な為。黒木や赤佐が元ヤンキーだとは知っていたが、黒木が伝説の不良だとは信じておらずかなり疑っている。

実は影でリア充説が浮上しているが、真相は不明。

・浅間英樹あさまひでお

イメージCV：杉田智和（坂田銀時、キョンなど）

初芝高校3年1組在籍。

身長181cm、体重64kg、4月生まれ。

圭介達が所属する写真部の部長、あかりの兄貴。金髪でしかもイケメンであり、一見モテそうな男だが中身は部室で全裸になったりなど真性の変態。

デリカシーもなく、その上大吾もビックリなオタクである。

その為千早をはじめとした写真部の部員、周囲の女子からの評判はすこぶる悪い。

ただし圭介は同人誌をプレゼントしてもらったので、内心いいヤツだと思っっている。

基本的にふざけた男だが、部の事を誰よりも考えている。

また千早曰く、「本当に彼が嫌いな人はいない」らしい。

だが部の為ならなんでもやるらしく、勧誘の際、何故か北方projectの工口同人誌を活用。ちなみに圭介はまんまと釣られた。

ただし妹であるあかりにはかなり嫌われているが、本人はあかりに罵倒されるのが嫌な様子。

18歳なので合法的にエロゲーを購入できる。しかも自動車の運転免許まで持っている。

インドア派なので体力などはあまりない様子で、喧嘩なども白陵に襲われるまではやったことがなかったらしい。その為船木にアツサリ敗北し、あかりを守れなかったことを未だに悔んでいる。

また彼女に無理な心配をさせない為にも、自分の家庭の事で彼女に嘘をついているなど意外と他人想いのいいヤツである。

・乙坂隆一

イメージCV：津田健次郎（海馬瀬人、風間千景など）

初芝高校2年4組担任

身長体重生年月日不明。

圭介のクラスの担任。  
頭がハゲかかった教師であり、圭介曰く「正直地味すぎるし、授業のテンポが悪くて人気もない」。  
ちなみに担当教科は現文。担任という都合上超脇役であるにも関わらず、意外と出番は多い。

・野原数馬

イメージCV：藤原啓治（野原ひろし、木原数多など）  
初芝高校教職員。  
身長体重生年月日不明。

数学教師であり体罰上等でオマケに口が悪い。  
なんというか……狙ったように木原くんな感じでいつも一方藤島と死闘を展開。  
ちなみに大抵は教師である彼の勝利である。  
完全にネタキャラとして登場させたキャラだが、意外にも人気がある。  
彼に対して一言あるとすれば、もちろん……野オオオ原くウウウウウン！！

さいおんじゆきの  
・西園寺雪乃

イメージCV：喜多村英梨（美樹さやか、涼月奏など）  
佐井学園2年（元）  
身長152cm、体重42kg、12月生まれ。

長く綺麗な黒髪に紅い瞳を持つ少女。小柄な体格で胸も控えめだが、

本人はあまり気にしていない様子。

元々は佐井学園開発科に通い、悠などと共に五本の指に入る超能力者であった。

【超能力が使えるちゃう場合】で先に登場し、当時1年だった彼女はしょっちゅう外出許可を貰っては秋葉原をふらついていたらしい。

ある日、学園長から特異点潰しの誘いを受けるが拒否。

その為口止めをされはしたが、特異点潰しに疑問を抱き計画を中止に追い込もうと試みる。

しかしその行動が学園側にバレ、学園2番目の久我劉生と衝突する事になり、始終圧倒されるものの久我が本気を出せない状況であった事や、彼の僅かな隙を突くことよって辛勝。

しかしその後、早川悠に襲撃され戦闘をするがあまりの実力差に指一本触れる事なく敗北。その後、逃げるように学園を飛び出したらしい。

その後古宇坂にいるらしく、第99話「学園モノにありがちな出会いのシーン」では、彼女らしき人物が不良に絡まれ圭介とも出会っている。

その後初芝高校に転校し、暮葉達とは良好な関係を築いている様子。使える能力は吹雪フリザードサイコ念力。水蒸気など水分から氷や雪を発生させ、念力よってそれらを自在に操る能力。大気中に僅かでも水分が存在していれば、それらを瞬間的に冷やす事よって氷などを発生させられる。

作者的には今後の活躍に期待なキャラクターである。

・ジャンボしやま鶴屋

イメージCV：石塚運昇（ヴァン・ホーエンハイム、藤原文太など）  
身長196cm、体重127kg、18歳。

第109話「ジャンボと付きまとう理由」に登場した一発キャラ。

初芝レスリング部の主将。その鬼のような強さから【怪物】と呼ばれており、まさにヘビー級王者並の強さを誇る男。何故か「オー！」と叫ぶ時に右腕を大きく上げる。  
ジャンボ・ラリアットやジャンピング・ニー・バットなどを得意とする。

作中では明智と対戦し、脅威的なタフネスさを見せつけるもアツサリ敗北してしまった。

元ネタは作者や神 みの長 純先生も好きなプロレスラー、ジャンボ鶴田。

・木山朱実 きやまあけみ

イメージCV：野中藍（佐倉杏子、伊吹風子）

身長163cm、体重49kg

元佐井学園の生徒、雪乃や明智とは元々クラスメイトで雪乃の元ルームメイト。

化粧がいらぬ程に整った顔。肩まで届く紫色のしなやかな髪。その両サイドに赤いリボンが結ばれた活発そうな雰囲気を持つ少女。

【超能力が使える場合】で先に登場し、雪乃とは仲のいい親友ポジションにある。

その後、雪乃を追って初芝に転校したらしく、雪乃の学園を潰すという提案に賛成する。

オフザーフック  
偏差電換という能力を持ち、戦闘向きではないがサポート要員としては有能。

父親が軍オタらしく、ミリタリー関係の知識は豊富らしい。

明智家

・明智光昭あけちみつあき

イメージCV：前野智昭（堂上篤、橘純一など）

明智家現当主、凧紗の祖父。

68歳、温厚な性格で織田家と和解したという功績を持ち、秀吉の子孫を発見した時にも木下暮葉との和解を望んだ。

しかし本人腰痛の為光雄に和解を任せ、しかも光雄は和解どころか娘を使つて暮葉を殺害しようとしていた。その事を知ると激怒し、

光雄を勘当して明智家から追い出したが

今度は光雄に恨まれ、命を狙われてしまう。

光雄の攻撃によって負傷するが、凧紗や圭介達に助けられ一命を取り留める。

そして遂に本人が望んでいた和解が成立し、明智vs木下の戦いは終了したのである。

## 無所属異世界人

・木下木葉きのしたのきは

イメージCV：悠木碧（鹿目まどか、ヴィクトリカ・ド・ブロワなど）

ロジーナに住む科学者（魔法学者）。

暮葉の姉らしく妹同様小柄で妹と同じ髪色を持つ少女。自分の研究で誰かを幸せにしたいという信条を持ち、科学と魔法と融合させた最先端医療技術の開発を行っている。

「〜かな？」という語尾を多用する口調で喋る。

妹の暮葉に「お姉様」と呼ばれ尊敬されている。同時に暮葉の目標でもある。

暮葉曰く、何かに真つ直ぐな所は圭介そっくりらしい。

魔力を脳波に変換するという魔力エネルギー変換機を開発した張本人でもあり、超能力者としての早川悠を救った人物でもある。ミネツトとは暮葉繋がりであり合いらしい。

### 圭介の家族

・ふじしまこうすけ  
藤島浩介

イメージCV：乃村健次（ラルゴ・ポツテル、範馬勇次郎など）

圭介の父親、普段は仕事で家を開けている。

圭介曰く変態のロリコン親父らしい。

・ふじしまあおは  
藤島青葉

イメージCV：井上喜久子（グレイス・オコナー、ベルダンディーなど）

圭介の母親、普段は仕事で家を開けている。

歳のわりには若く見える美人で、息子の恋愛事情に興味深々な様子。昼ドラ的な展開が好きらしい。

### アルファ隊・ヴィンペル隊

・リーリヤ・コステイリナ

イメージCV：門脇舞以（サーニャ・V・リトヴァク、イリヤスフ  
イール・フォン・アインツベルンなど）

アルファ隊の隊長。



身長168cm、体重50kg、誕生日は不明だけど冬。

アルファ隊の隊長を務める少女、実年齢は不明だが多分10代後半。長い金髪と赤い瞳を持つ美人な人……しかし顔は可愛い系。ロシア風の民族衣装を着ており、首からは八端十字架のネックレスを提げ、胸元にはアルファ隊のペンダントを装着しており、ジャラジャラとして装飾だらけの杖を常時持っている。

聖人の一人でもあり、隊長というのは名ばかりではなく、レムリアでも10本指に入る実力者。

その戦闘能力は現在の所殆ど不明だが、「魔女殺しの術式」を即効で組み上げ、赤の軍神の一人である風剣のシルフの風の砲弾を、装飾品だらけの杖を振りまわすだけで掻き消すなど、既に普通の魔法使いとはケタが違う描写がある。

暮葉曰く「基本自分で何でもやっちゃうタイプ」らしく、他人への頼み事は珍しいらしい。

部下には慕われ、ロジーナ正教からは聖人認定されるなど、何かと幸せ者。

性格は冷静で頭脳派。口調も「〜とリーリヤは〜します」と独特である。

今後の活躍に期待なキャラクターである。

#### ・電話の男

イメージCV野島健児（佐藤啓作、七原文人）

ヴィンペル隊所属の男、本名容姿ともに不明。

連邦特殊情報総局から、ヴィンペル隊経由で早川悠を暗部へ引き込むよう指示されたらしい。

非常に丁寧な口調だが、悠とミネット達との面会を許さないなど、徹底している部分もある。

以下、追加予定

番外話 作者による馬鹿なキャラ紹介 愉快的仲間編！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「やっとこの無駄っぽい企画終わったなあ」

暮葉「けーすけ様！ 無駄言わないでくださいよっ！」

圭介「ていうか思った事があるんだ。イメージC.V.とあるの声優多くね？」

大吾「あのアニメも有名どころ使ってるからね。ちなみに僕の好きな声優は豊崎愛（ry）」

圭介「わかった！ わかったからもう黙れ！」

暮葉「それではそろそろ、次回の本編予告に移るのです！」

圭介「次回は当然文化さ」

悠「先にオレの話だ三下ア……」

圭介「うそ……だろ？」

## 第104話 復活の可能性 前編

文化祭準備二日目が行われた火曜日、その頃……東京都のとある病院では。

「……………」

このオレ、早川悠は目が覚めれば知らねえ所にいた。

白い天井に白い壁。独特すぎる匂いに時々廊下から聞こえる慌ただしい音。

どうやらオレは入院しているらしい。らしいっつーのはよくわかんねえからだ。

目エ覚めたのは今朝だしな。

クソツタレ……オレはあの魔法使いに撃たれた後、一体どうなったってんだ？

一応一般の病院らしいけどなア……けどオレは結局、どこのどいつに搬送されたんだ？

オマケに頭には包帯を巻かれ、未だに頭痛が激しい……チツ、これも銃撃された傷のせいか。

「……………」

それだけじゃねエ……。

頭がぼんやりとしていて、全くと言っていいほど超能力が使えねえ。その上歩行も困難だ。

どうやらオレは脳に穴が開いたせいで、歩行障害になった上に脳の演算能力も低下したらしい。

常人レベルにまでだ。つまりどういふ事かと言うと　オレはもう超能力を使えない。

「……クソツタレ」

「なにがクソツタレなの？」

「あん？ ……オマエいつから居たんだ？」

「ひどい！ ミネットはさっきから窓の外を眺める貴方を見ていたんだよ？」

「ああそーかいそりや御苦労なこつたあ」

「むう、いくらなんでもミネットの扱いがぞんざいすぎるよ！」

「ああそーかいそりや大変なこつたあ」

「むかあ！ 相変わらず貴方はサディストなんだね！」

オレがいつマゾヒストになったってんだこのガキ？

このオレは昔からサディスト一直線だろオが。

つたく。打たれるのが好きな豚になるワケねえだろオがよ。

つーか目覚めたらいきなりこれだ。耳元できゃーきゃーうっせえんだよクソガキが。

「それで貴方っ、身体のちょーしはどんな感じ？」

「んなモン最悪に決まってるんだろ。撃たれてから一週間経ってねえんだぞ。傷口だってまだ完全に塞がったわけじゃねえってのによ」

「そのわりには手術で一回髪の毛全部剃ったハズなのに、すぐに元

の長さまで伸びちゃったね？」

「髪だけは伸びんの早エんだよ。1日もあれば元に戻るっつーの」  
昔からずっとこの髪型で、どんだけ切るうがハゲになるうが、1日以内に元の長さまで伸びちまう。  
どオやらオレは不思議な体質の持ち主のようだ。まあ、だからって困る事もねえがな。  
むしろハゲで悩む必要もねえし、これ以上の贅沢ってねエんじゃねえの？

「そうなんだ……不思議な髪」

「勝手に言っつてやがれ。オレからしてみればオマエの髪の色の方が不思議だわ」

「それはミネットのセリフだよ。貴方の髪の色は何、若白髪なの？」

「オマエ……前にも説明しなかったか？ オレはある意味先天的な病気なんだっつーの」

「あ、そっか！ そのせいだったね！」

この野郎……ぜってえーわかってて聞きやがっただろ。  
オレがコイツの髪の色を不思議がった仕返しってかあ？  
……チツ、ガキの考える事は単純極まりねえな。

「んで、オマエまだオレに付きまとうつもりか？」

「じゃあ逆に質問するよ。貴方はこれから先どうやって暮らしてい

くの？」

……そういえば、オレはこの先どオ暮らしていけばいいんだ？  
超能力が使えねえ以上、佐井学園は退学確定だ。

まア最初から辞めるつもりだったから、そいつぁオレにとってはむ  
しろ好都合だ。

けどなア、能力使えねえんじゃ馬鹿共から財産さえ奪えねえ。

つーか能力どころか歩けねえし。クソツタレ……この先オレはどう  
しろってんだア？

一応汚れ仕事で稼いだ金はあるが、だからって家を建てんのも馬鹿  
馬鹿しい。

建てた所で、こんな身体じゃマトモに生活できねえつーの。

「……………」

「歩行が難しいし超能力も使えないし、時々神経痛とか痙攣とかひ  
どいんだよね？」

「……………」

「遂行機能障害にならなかったのが奇跡って、お者様が言ってたく  
らいなんだよ？」

「……………」

「あとサヴィエト亡命政府はね、貴方をブラックリスト登録したら  
しいんだよ？」

「……………」

「戦闘は不可能な上に日常生活も困難な今の貴方……自力で生活できるの？」

「……………」

「だからミネットはね、これから先の貴方のお世話をするよ！助けてくれたお礼にね！」

「……チツ、勝手にしろ……………」

うるせえなあ……どんだけ世話焼き女房だったんだ。

ミネットは結婚したらうつせえ嫁になりそうだ。

まあ、こんなクソガキを結婚相手に選ぶヤツは、相当の覚悟があるヤツかただのバカだろう。

つーかブラックリスト登録ねえ。勘弁しろつーの……こっちは能力使えねえんだよ。

こんな無害なヤツをリストに登録して、一体ヤツらはどうするつもりだっつてんだ？

今更攻撃したって、今のオレなんて殺す価値もねえだろうに。

「でも困ったね。貴方の介護と戦闘、両方を同時にしなきゃいけないんだよ……………」

「ンなあ？ やっぱり連中はオレを殺す気か？」

「たぶん……だから、戦えない貴方の命をミネットは守るよっ」

戦えねえ……………か。

クソツタレ……………一般人に戻れてハッピーなのかもしれねえが、全く嬉しくねえのはなんでだ？



オマケにこのオレを守るって、このクソガキ弱えじゃねえかよ。雑魚に守られても安心できねえ。むしろこのガキが守られる側じゃねえのかア？

……ったく、やっぱこのガキに守られるんなら、全くと言っていいほど安心できねえ。

「おいミネット」

「んにゃ？ なになに？」

「顔近づけてんじゃねエゾクソガキ……ンで、オマエは異世界人なんだって？」

「う、うん！ ミネットはレムリアからやってきたんだよ」

その異世界ってのがどの程度の技術か。どんな魔法が他にあるんだか。

よくわかんねえけど……まあ、一応訊いてみる価値はありそうだ。

「そのレムリアってのに足りねえ演算能力を補う魔法とかねえのか？」

「えんざん？ なにそれ？」

「そこからかよバカガキが。計算する能力って事だ」

「そーなんだっ！」

佐井学園じゃ常識だっつーの。能力使うには自分の想像を思い描く必要があんだよ。

その想像を思い描く為には、複雑な計算式を瞬時に組まなきゃいけねえ。

ミネット達を使う魔法で例えると、呪文を唱えた術式を組み上げるって感じだろう。

似たような事を超能力者は一瞬で行い、それぞれの想像通りの超能力を使うんだ。

最も……結局重要なのは脳だ。魔法は多分脳なんてあんまモノは使わねえだろ。

脳が良けりゃあすごい能力を使え、逆に悪けりゃシヨボい能力しか使えねえ。

だから今のオレには能力が使えねえんだ。脳の重要部分が欠けちまつたんだからな……。

「ソで、オマエら魔法使いにはソな事は出来ねえのか？」

「うん……ごめんね。流石に脳の能力を上げる魔法なんてないよ」

「……チッ」

流石にそういうぶっ飛んだ魔法はねえってか。

魔法ってのはすごいんだかすごくねえんだか、よくわからねえ能力だ。

「……あ！でもね！」

「うっせえぞガキ……耳元で叫んでんじゃねえぞ」

「ごめん……でもね、魔法じゃないけど脳の能力を補助する機械ならあったと思っつよ？」

「 あア、ンだアそりゃ? 」

「 え〜っと……高次脳機能障害を持つ人の為に作られたらしいけど、貴方にも多分有効かもだよ? 」

高次脳機能障害ってアレか。脳の損傷のせいで起こるっていう……なんだったかな。

オレの記憶が正しけりや神経心理学的症状だったハズだ。

まあ、要するに脳が傷ついた事によって引き起こされるわけだ。

けど、その障害を補助する機械つてのが……果たしてこのオレに意味あるモンなのか?

いや待て。それが演算補助に繋がるかは知らねエが……試してみる価値はあるかもしれねえ。

異世界の技術ってんだ。この世界の常識が通用するとは限らねえだろ。

「 オイ、今すぐそれがある所にオレを案内しろ 」

「 えっ? で、でも貴方は入院中だし、それにあの機械は特注品で本人に頼まないと…… 」

「 医者なら脅す。本人に頼む必要があるならオレをソイツの所に案内しろ 」

「 貴方って時々すごく横暴だよな? 」

「 いいから案内しろ。それで演算能力が戻ればまた超能力が使えるんだ 」

「 そ、そうなの!? 」

確証はねえけどな……異世界の技術で期待ができる半面、信用も全く出来ねえからなア。

下手すりゃ副作用があるとか、演算能力を補助する機械ではなかったりとか、とにかく様々なマイナスの可能性があるってモンだ。未知の機械だから仕方のねえ事だ。

だが……それでも試す価値はある。

ぎゃ、は……いいぜ、中々面白エ展開になってきてンじゃん。

「とにかく、オレとソイツを会わせる……交渉だけでもしてえモンだ」

「でも、その人と貴方を合わせるってことは……貴方をレムリアに送る必要があるんだよ？ レムリアはこの世界と違って魔物がいるし……貴方は歩くことさえままならないんだよ？」

「あ、は　なんとかやってみるっての」

とにかく　オレは今無性に異世界に行きたい。

行ってソイツを会って……上手くいけば超能力が復活する。

そうすりゃあこのオレを狙うクソ野郎共から、自分の身イくらいは守れるだろう。

ついでに……このクソガキの身の安全もなア。

「……わかったよ。ミネット、今から転移魔法の使い手と貴方の為に杖か何かを持ってくるね！」

「頼むぜ……これがオマエの最初の介護だ」

さてさて……どうなる事やらな。

上手く行くなんて全く思っ  
ちやいねエが、それでもオレに超能力が  
戻ったら

第104話 復活の可能性 前編 (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「こんな話ばかりやるから時間の進み遅いんじゃないか?」

重原「夏休みどころか文化祭もまだだからねえ」

圭介「一体何話まで続く事やら……でもプロットは書いたっばいからネタ切れは多分ないぞ?」

重原「もう長いのは仕様だね」

大吾「さて次回はアクセラ(ry ……げふんげふん! 早川悠、復活なるか!？」

圭介「そういえばコミケで【な は完売】の代わりに【ま か完売】が現実になったよな」

大吾「そりゃ当然だ! 僕もコミケでま マギの同人誌買ったからね!」

重原「まだこの作品内では8月入ってないけどね、大吾」

第105話 復活の可能性 中編

夜、オレは密かに病院を抜け出す為の準備をしていた。

ミネットに服のサイズを教えてやり、それで買ってきてくれたジーパンと赤と黒の縞々カットソー。

そして右手に持つものは、どオやら病院にあったらしいロフストランドクラッチ。

杖の一種で大変現代的な形をしていやがる。

しかも、なんなんだこりゃ……オレの腕のサイズに合ってたやがるな。ハッ、まさか病院もこっそり用意していたってオチかア？

「服と杖はこれで大丈夫かな……？」

「あア……完璧すぎるくらいになア。後は如何に病院を抜け出すかだ」

「それならミネットに提案があるよ！」

「あッ？ 言ってみろオ……」

「ミネットは今日ずっと院内、いや市内を走り回っていたんだけどね、この病院に入院している元軍人さん達が深夜に揃って外出するらしいんだよ。」

「軍人？ 元日本兵か？」

「ミネットはこの国の事情はよくわからないけど、みんな元気そうで暇してるらしいんだよ。だから迷惑かからないように夜中に集団

でお出かけするらしいんだよ」

なら、その爺さん達と一緒に出て行けば……まあ病院側の目も誤魔化せるかもしれねえな。

要するに朝までに戻ればいいんだ。

だったら、オレが元気になる為にも……爺さん達に間接的に協力してもらおうとすつかア。

「その爺さん達は何時に病院こいを出るんだ？」

「えっと……15分五くらい後だよ？」

「……フツ、いいね最高に面白エ……ッ！」

さて、と……旅に出るとすつかア。オレの超能力復活の為の旅になア……。

この後、爺さん達に合わせて行動した結果、無事にオレ達は病院を抜け出す事に成功。

やがてミネットは本人は専門外と言いつつも、空間転移の魔法を発動させる為のルーン文字を、そこから買ったような大量のコピー容姿に書いていく。

やがて、変な魔法陣がアスファルトに描かれ 気付けば視界は真っ暗であった

目が覚めると、目前に怪しげなコンクリート建築の建物が聳え立っていた。

オマケにさつきと比べると肌寒い。この長袖で丁度いい感じである。もしかして、ここがレムリアにあるロジーナって所なのか？



「んん、自信なかったけど座標は合っていたみたいだね。丁度目的地の前だよ」

「あア？ ひょっとしてここが例の機械作ってるヤツの研究所か？」

「そつだよ。ロジーナが誇る木下木葉きのしたの研究所だよ」

「ふん……」

その木下くんが例の機械を作ってるってワケか。おもしれエ……早速会ってみて交渉するとすつかア。

ミネットが静かにインターホンを押す。すると、数秒ほど経ってから何かが繋がる音がし、そこから女の声が響いてきやがった。

『はいはいどちら様でしょうか？』

「み、ミネット・ローランですっ！」

『ああ〜うちの妹の後輩ちゃんね！ ミネットちゃんお久しぶり！』

なんだよミネットの野郎。木下木葉ってヤツと知り合いだったのか。なら話は早エ……こりゃあ交渉は上手く行くかもしれないな。

最もそれはオレの理想だ。現実、どうなるかわかったモンじゃねエけどなア……。

『待っててねえ、今鍵開けるから』

ぎゃは、さてさて……木下木葉ってのはどんなヤツかなア。

まあ木下木葉に興味があるワケじゃねえ。ソイツの発明品、オレは

そっちのほうに興味がある。  
……やがて鍵が開くと、オレはミネットに案内されつつ屋内へと足を踏み入れたのだ。

屋内。如何にも研究所と言った感じだ。

あまり掃除はされておらず、その上部屋によっては試験管などが放置されている。

全く汚エ……これじゃあ、佐井学園の研究部と似たようなモンだな。佐井学園にも立派な研究所つてのがあった。そこでは様々な研究が行われていた。  
だがオレが知る限り、ロクな研究ではなかった気がすんな……。

「こつちこつち。あ、この部屋だよっ！」

「ンだアこの不自然に綺麗な扉はア？」

汚エコンクリート造りの建造物の中に、一際綺麗な西洋風のドアが存在していた。

ミネットはコンコンとノックし、取っ手を握ってドアをゆっくりと開ける。

ギィィッと古い洋館のようにドアが開く。まあ、このドア自体中世ヨーロッパ風だがな。

部屋は結構広かった。広くて立派でここだけが掃除もされ、手入れがされていたのだ。

その中に一人、白衣を着た女が佇んでいた。

女は形が違うから絶対にそうとは言えねえが、パソコンらしきもののキーボードを打っていた。

だが、オレ達が部屋に入ったと気付くと、すぐさま作業をやめてこつちを向いてきやがった。

「き、木下さんお久しぶりですっ！」

「久しぶりねミネットちゃん。でもウチの事は普通に木葉と呼び捨てでいいかな」

「で、ですが……っ」

「ウチはね、下手に距離を置かれるほうが嫌いな」

「……わかりました、木葉さん！」

「うーん……ま、さん付けだけど妥協してあげよっかな」

コイツが木下木葉か……見た所ミネットと大して変わらねエクソガキだ。

桃色ブロンドの髪の木下木葉は、背も胸も小さく顔つきだ誰かに似ていた。

誰だったけなア……一度だけ会った記憶がある。

全く思い出せねエ。けど、コイツと似たようなヤツに何処かで会ったような……。

オレはそれを思い出したいが為に、じゅっつと木下木葉の事を見ていたのだ。

「あれ？ ミネットちゃんその人は知り合い？ もしかして彼氏かな？」

「じゅっつ！？ ち、違います！ 悠はミネットの彼氏じゃありません！」

「あア、なに赤くなってるんだコイツ？」

「そっかあゝ。それで実際その人は誰？」

「木葉さんっ、お願いがあるんです。この人の為に【魔力エネルギー変換機】をください！ お金は後でミネットが必ず払います！」

魔力エネルギー変換機ってどういうセンスだア？

だが、ソイツが演算能力復活に繋がるかもしれないエ、オレが求めていた機械ってワケか。

その名を聞いた瞬間、あの女の顔もふざけた感じから真剣なものへと変わりやがったし。

「それが欲しいってことはその人……どこか悪いのかな？」

「え、えゝつと……そのっ」

「オマエは下がってる。詳しい事はオレが説明するわア……」

ミネットは超能力などに関してはド素人だからな。

オレが魔法に関して素人なのと一緒になア……だから、この場はオレが説明したほうが早いだろう。

オレは真っ直ぐ前方の木下木葉を見つめる。そして、オレは木下木葉に事情を説明し始める。

「まず最初に質問がある。【魔力エネルギー変換機】ってのは演算能力を補えるのか？」

「そりゃあそうに決まってるかな。魔力エネルギー変換機は高次脳機能障害を持つ人の為に作ったものだからね。失語症とかは計算能

力の低下も原因だったりするんだよ？ でも君は怪我をしている以外はとつても元気そうだけど……一体どこが悪いのかな？」

「オレは数日前に脳にダメージを負った。そのせいで超能力が一切使えなくなりやがった」

「超能力者？ ふ〜ん、妹から存在は聞いていたけど……ホントにいたんだあ〜」

コイツの妹がどんなヤツかも気になるが、今はそれどころじゃねえ。とりあえず流石は科学者つて所かア。ちゃんとオレの話についてきているじゃねエか。

「ンで、今のオレは超能力を使うには演算能力が足りねえ。だからオマエの機械で補助とかは出来ねえのか？」

「ん〜どうかな？」

言いながら木下木葉は何かを手取る。チョーカーと補聴器だ。チョーカーには黒い機械があり、そこから細い線が伸びて補聴器に繋がっている。

なるほど……それが魔力エネルギー変換機つてヤツか。予想とは全然違う形をしている上に、結構小さくて使いやすそうだな。

なるほど……こりゃ医療器具として使うには丁度いいなア。

「最大出力にしても補えるのは一人分程度。それでどこまで君の計算能力が復活するかはわからないかな」

「そんな事は構わねエ。とりあえずどうなるか試してくれ」

最悪、暴風の膜を張り巡らせる程度の超能力チカラが使えればいい。  
それだけ使えれば攻撃を弾き返せる。後は武器か何かを使ってどうにかすればいい。

とりあえず 第一の目標は防衛手段、の復活だ。

「わかったわ。その為には……君の波長を知る必要があるかな」

「波長まで合わせる必要があるってか」

「当然よ。じゃないと確実に君の脳に影響がでるかな？」

「そりゃ大変なことだ……」

「それじゃあ早速調べるから、君にはちよつとした検査を受けてもらおうかな？」

「ぎゃは、上等じゃねエか……」

予想以上にいい展開に進んでるじゃねえか。これでオレに超能力が復活するかもしれねえ。

超能力が復活すりゃあ、そのチカラでなんだつて出来るだろう。前より弱くたって構わねエ……ただ、オレは色々な物の為に超能力を復活させた。

ただそれだけであつた。それ以外にはあまり望む物はなかつた。

……一時間後、検査は終了しオレの首にはチョーカー、耳には補聴器が取り付けられた。

ついに オレはお目当ての物を手に入れたんだ。

さて、超能力は使えるようになったか……そこが問題だよなア。

第105話 復活の可能性 中編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「つ、疲れた……」

伊吹「どしたの圭介？」

圭介「一日田舎に行っていた分ずっと作品を書き続け……ああ、締め切り一日前だから今日も徹夜だ！」

伊吹「それアンタの話じゃないよね！？ 絶対違うわよね！？」

圭介「大賞の為にユケルが欲しいぜ！」

伊吹「だからそれアンタの話じゃないでしょ！？」

小坂「次回予告、早川悠に超能力は戻ったのかな？」

圭介「あと作業用BGM！今のうちにアニソンを（ry」

伊吹「いいからアンタは寝なさいっ！」

## 第106話 復活の可能性 後編

多分、一日くらいが経過したと思う。

全ての検査を終えて木下木葉が機械を調節し、遂にオレ用【魔力エネルギー変換機】が完成した。

この機械はなんでも蓄えた魔力を脳波に変換し、装着者の演算能力を補助する。

あらゆる場合にも対応し、演算能力を回復させて日常生活を補助する。

そんな便利アイテムである。特に今回は念には念をとという事で最大出力にしてもらった。

まア……そのおかげで木下木葉に「超能力を使用すると魔力は15分で切れる」と言われたが。

「悠っ！ 遂に完成したんだね！」

「オイ木下木葉、このスイッチを押せば電源がONになるのか？」

「ええ、それで変換機が作動するかな。たださっきも言ったけど、君の場合は計算能力があまりに凄すぎるせいかな。消費魔力が異常に多くて超能力を使えば15分で魔力が切れるかな」

「ハッ、使えるだけマシだ……」

さて、早速試したい所だが……暴れようにも場所がねエな。

流石にここで暴れたら木下木葉を怒らせそうだ。

この機械の発明者を敵に回すのは利口な判断とは言えねえな。



「ねえねえ使わないの？ 超能力使わないの？」

「うっせえぞクソガキ。能力使ったらこの辺が吹っ飛ぶだろオガ」

「へえ〜。君の能力ってそこまで凄いのかな？」

オレの超能力の話に木下木葉が口を挟んできやがった。

……まあ、一応説明しておくか。この世界でオレの話をしたって何の問題もねえだろ。

「オレがその気になれば、この辺の天候や大気中の分子運動を操作できるってなア」

「へえー……なんだかよくわからないけど、とりあえず研究所を壊す能力なら勘弁かな」

「チツ、だから自重してんだろオガ……」

全く、これじゃあ超能力を試しに使えねえ。

オレの能力は破壊することに特化していやがる。それ以外は全くの専門外だ。

だから試に使ってみれると、下手すりゃ周囲を破壊し尽くくかもしれねえ。

つたく。どっかのクソ野郎がオレに喧嘩を売ってくれれば、遠慮なく超能力を使えるんだがなア。

まあ……そうタイミングよくイベントが起こるハズもねえ

ドウツツツツ！！！！

「あん　？」

「爆発音……だよね？」

「あれ、ウチの研究所のほうからかな？」

その時、狙ってんじゃねえかと言いつてエくれエ、ナイスなタイミングで何かが起こりやがった。

突然響いたのは爆発音。250kg爆弾くらいかそこらだろうか。研究所のほうを確認すると、確かに反対側から黒煙が立ち上った。

同時に聞こえてきやがった女の叫び声。ハッ、面白エ……いいタイミングで何かが起こりやがった。

「今の声……リーネかな！？」

「リーネさんって……木葉さんの助手ですよね？」

「そつだよ。ウチの助手が向こうで危険な目に遭っている……ッ！」

「あっ！　ダメですよ木葉さん危険です！」

衝動的に飛び出しそうになった木下木葉を、ミネットは強く押さえつける。

そつだア……インテリちゃんはテンテリちゃんらしく、そこで大人しくしてやがね。

さてさて、リハビリでも始めるとすつかア。

「おいミネット。オマエはそこで木下木葉の面倒見ていやがね」

「え……？ 貴方もだめだよ！ まだ超能力が使えるって決まったわけじゃ」

「リハビリだア。いいからオマエらはそこで大人しくしてろ」

「ちよ、ちよつと！」

オレはミネットのうるせえ言葉をガン無視し、ひたすら杖をつきつつ戦場げんばへと向かった。

おそらくミネットは木下木葉の事で手一杯。オレを妨害する事はねエだろう。

なら、静かな今のうちに向こうに移動しちまおう。

そして数分後。

足が不自由なものも不便なモンだ。ようやくオレは戦場げんばへと辿り着いた。

研究所の一部が崩れ落ち、地面には鉄筋むき出しの残骸が散らばる。さらに奥を見渡せばそこには、傷だらけで倒れる女の姿があった。

肌は純白。黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールは、程良く綺麗に手入れされている。

さらに瞳は活発そうで口元もとっても元気そうであった。ただし、背はともかく胸はクソガキとは正反対だ。

そのさらに奥には敵と思われる姿。ンだア……あの背広の中年くらいの親父は？

「はいクソ野郎オ」

「……っ？」

「うむ……？ あやつ……何者だ？」

声をかけた瞬間、女も背広のクソ野郎もオレのほうを見た。背広のクソ野郎の周りには、さらに大勢のクソ野郎がうじゃうじゃしていやがる。

ソイツらは銃か何かで武装し、その銃口をオレへと向けていやがる。

「それはこっちのセリフだ。折角ブツが手に入ってハイな気分だったのに、オマエらは何が目的でこんなクソみてエな所に来やがったんだ？」

「ふ……貴様には関係なかるう。さて……この者を射殺せよ」

ハッ、どオやらあのクソ野郎はこのオレを殺すつもりらしい。

確かに、さつきまでのオレなら瞬殺されていただろう。

だがなア、オレだって何時までもあのままってワケじゃねえ。

オレは杖を持つ手の反対。即ち左手で首筋にある変換機をスイッチを押す。

小さな電子音が響くと同時に、不思議と懐かしい感覚に陥る。

コイツぁ……間違いいねえ。ちゃんと演算が働いていやがる。

「殺れ、標的はあの男だ」

刹那、一斉にクソ野郎共の銃が放たれた。

迫りくる無数の銃弾。オレの視力じゃ全てを捉える事き出来ねえ。

だが 弾丸が進む座標値が脳に入ってきたやがる。完璧だ。完璧に能力が復活している。

「ぐ、は　！」

「だア！」

「う、ぎゃア　！」

暴風の膜を何の問題もナシに張り巡らされた。

ぎゃ、は　木下木葉もいい仕事やしやがる。超能力が不完全だがチカラ復活しやがったぞ。

膜に触れた弾丸は反射でもされたかのように吹き飛ばされ、次々とクソ野郎共を襲っていった。

クソ野郎共の身体に風穴が開き、血飛沫が愉快に素敵に飛び散っている。

それを見ていた女は呆気にとられた様子で、オレとクソ野郎共を交互に見ていた。

「何故、だ……何故貴様は銃弾を反射できた？」

「やはり回復した演算能力は前の半分程度だな。まア上出来だ、半分もありゃあ十分だ」

オレが以前の半分程度まで弱くなった所で、別に他の連中が強くなつたワケじゃねえ。

これだけ回復すりゃあ十分、他の連中にも勝てる力を持っている。

普通に風を起こせ、普通に酸素濃度や気圧の操作が出来て、普通に分子運動の操作もできる。

ただ、それが出来る範囲が狭くなっただけだろう。

「何を言っているのだ？　貴様……一体何者だ。そんな魔法はこの世に存在せぬ……貴様、異世界人か？」

「御名答。オレはオマエの知らねえ世界から来たモンだ。ンで、オマエは何者だ？」

「先程も言ったハズだ。貴様に関係のある話ではない」

「じゃあ、サヴィエトのクソ野郎って事でいいかア？」

「……っ！ 違う……私はそんな連中の仲間ではない」

刹那、背広のクソ野郎がスリングショットを構え、黒光りする鉛玉を放ってきやがった。

スリングショットで撃った割には、初速も速過ぎる上にそこからさらに加速している。

普通じゃありえねえ動きだ。あの野郎、何らかの力で弾を加速させていやがるな。

けどダメだなア オマエさっきオレを見ていたのに、全く学習能力がねエ馬鹿野郎だなア。

膜に触れた刹那。暴風によって弾かれた鉛玉はスリングショットに直撃。

破片が飛び散り、その破片がクソ野郎の右腕をズタズタに引き裂いていく。

「う、ぐ……アああああああ！」

無様に血飛沫を噴く右腕を、クソ野郎は必死に抑える。

左手の面積的に不可能だっってわかってるハズなのに。

まあ、人が窮地に陥ると冷静さを失うのは当たり前のことだろう。

「……何故。何故貴様に攻撃が効かん。貴様の存在が邪魔だ……貴様さえいなければ全ては成功していた。私は娘を救うことが出来たのに……」

「娘を救うだア？ 教えるオ……殺されたくなけりゃあオマエの目的を正確になア」

オレの問いの後、しばらく沈黙が流れた。

だが、遂に観念したのか背広のクソ野郎が口を広く。

「……ここに来れば高次脳機能障害者を救う機械がある聞いた。だが、私の家は貧乏だ……それでも私は娘を救いたかった。その為に仲間を招集した……だがそれがどうだ？ 貴様が邪魔をしたせいで、私は仲間を大量に傷つけてしまった。娘を守るどころか仲間の身体を……」

「バツカじゃねエの？」

「……？」

「娘を救いたい？ だが仲間を殺したア？ 全ての原因はオマエにあるんだろオガ」

「……っ、だが……それでも私は娘を救わなければならない。私の未来などどうだっていい……ただ私はあの子の未来を救いたいのだ。その為なら私はなんだって　ぐ、オ！？」

不意に銃声が響いた。それは男がやったものではない。

そもそも、今のあの野郎に銃を撃つ余裕などなかった。

発砲したのはコイツでもなければ、そこで呆気に取られている木下木葉の助手でもねえ。

振り向くと、そこにはミネットと銃を構えた木下木葉が佇んでいた。

そう、発砲したのは木下木葉であった。

「き、貴様……木下、木葉……っ」

「久しぶり、3年ぶりくらいかな……セルゲイ・ベレゾフスキー」

なんだア　木下木葉とクソ野郎が知り合いだった？

オイオイ聞いてねエぞこんな展開。

「う、ぐ……何故。私は何故こう何度も挫折を……っ」

「君のその人格、相変わらず変わっていないかな」

「私の人格を理解しているのなら貴様にもわかるハズだ」

「……さあ？　ウチと君は親しいわけじゃないし、詳しい事は全然わからないかな？」

オイオイ一体コイツらはどういう関係なんだ？

しかも、いつの間にかオレの左右にはミネットと、あとは木下木葉の助手がいやがる。

確か助手の名前はリーネだったか。コイツは大した怪我じゃなさそうだな。

あの叫び声から骨くらいは折ったかと思っただが……まア、これでハッピィなんじゃねえの？

「悪いのか？　我が身を犠牲にして娘を助ける事が……う、ぐっ」

「悪いかな？　例え娘が助かったとしても、父親が死んでいたら娘が可哀想でしょうっ？」

「だが私は……既に仲間を大量に傷つけ、娘の為だけに貴様らを襲



った。私など生きる価値が」

「ないとは言えないかな？ 君がどれほどの極悪人だとしても、君の存在なしに娘は生まれなかったでしょ？ それに娘を育てるのは誰かな？」

「……っ」

「それを考えれば、君は今すぐ刑務所で反省すべきかな？ 反省してやり直して……また娘の為に働けばいいんじゃないかな？ 今度はこの真似なんてしないで真つ当な方法でね」

木下木葉が喋り終わると、背びれのクソ野郎から嗚咽する声がもれる。

どオやらオッサン、何かに感動して泣いているらしい。

やれやれ……面倒なオッサンだった。だがこれで一つだけ分かった事がある。

オレの能力は不完全ながら復活していた

それから1時間くらい経った。

あのオッサンは地元の警察っぽいものに引き渡された。そして

「あの、ありがとうなの！」

「……………ッ」

丁寧にオレにお辞儀をしゃがる木下木葉の助手 リーネ・ディー  
トリッ。

どうやらオレに命を助けられたと思いきや、こんでいるらしい。  
チツ、おめでたいヤツだ……オレはただ、リハビリの為にちつと暴  
れただけなんだがなア。

「ねえ悠。貴方つてもしかしてツンデレ？」

「うっせエぞクソガキ……絞って果汁みたいにしてやるオカ？」

「まあまあ、そんなに怖い顔しないで欲しいんだよ！」

「……チツ」

「まったく、このクソガキはいつもいつも……。」

「君もアレかな。もう少し素直になったほうが人生は得だと思うよ  
？」

「あア？」

「ボクもそう思う。少しツンツンしすぎなの」

「オマエらどオいう目エしてんだ？」

「オレのどこがツンデレだったんだ。思いつきり感情には素直じゃね  
えかよ……。」

「まったく、まアいいや……こんな事もあったが、無事にオレの超能力  
は復活した。」

「後はさっさと元の世界に戻るだけだな。」

「あ、そうそう。説明し忘れていたんだけど……その変換機に魔力

を注入する方法ね」

「あつ。そういえば聞いてなかったね！」

「ンで、どうやって魔力を注入するんだ？」

「それがその……魔力を持つ人とキスする事……かな？」

「え、ええええっ！？ き、キス！？」

「オイ……なんだそのふざけた方法は？」

キスすりゃ全てが解決って、一昔前のアニメか何かですかア？  
今時そんな設定流行ったりしねえっつーの。

けど、なんだって魔力を持つヤツとキスしなきゃいけねんだ？

「ぼ、ボクが考えたんだけど……仕方なかったの！ それ以外効率よく魔力を注入する方法がなかったから……だから仕方なくその方法を採用しただけなの」

「そ、そうそうっ。だからリーネやウチに悪気はないから」

ふざけやがって……このオレが一体誰とキスしろってんだ。

そんな彼女彼女がイマス なヤツじゃねえと使えねえ医療器具って、医療器具としてどうなんだ？

つたく、能力復活以外は期待外れの品だった。

しかもその能力もあと数分だけ。キス相手がいなければすぐに魔力は切れてしまう。

つまり オレはまた超能力が使えなくなるって事だ。

あーあ。束の間の喜びってヤツだったなア……………。

「くっ、ゆ……悠っ！」

「あッ？ 人が本気で悩んでいる時になン ツ！？」

「おお？」

「大胆なの……っ」

いきなり胸倉を掴んできたと思いきや ミネットがオレの唇を塞ぎやがった。

オレは思わず目を見開くが、ミネットはその反対で瞳を閉じていやる。

初めての感触 チツ、誰だ。キスの味はストロベリーだっと言った野郎は？

キスの味はキスの味しかしねエじゃねえか。っーかそれ以前に

「ぶ、はっ、このクソガキいきなり何をっ！」

「魔力……注入されたんだよね？」

「……ッ……？」

このガキ。まさかオレに魔力を注入する為だけに？

チツ、ありがたいんだか迷惑なんだか。

だが、嫌な気分ではねえ……っって何考えてんだアオレ。

「言ったよね？ ミネットは貴方の介護をするって……その、これも介護の一つだよ！」

と、言っているミネットは耳元まで顔を赤らめていた。瞳も妙に潤っており……って、クソガキの癖に女見てエなツラしやがって。

まあ実際、コイツにキスでもしてもらわねえと……オレは能力を全く使えない。

このクソガキには世話になりっぱなしだな……… ったくコイツは仕方がねえな。

オレはその恩返しに　コイツのおかげで使える能力で、コイツの身の安全を確保してやるか。

今のオレに出来る事はたったのそれだけだ。だが、それは結構重要な事のような気がする。

このガキの為でもあれば　オレの為でもあるからな。

「わかったア……… 介護はオマエに頼んだわ」

「……… うん。これからもその……… よろしくね」

「……… チツ」

全く、本当に仕方がねえなア。

まあ悪い展開じゃねえ、これで正しいんだろう………。

第106話 復活の可能性 後編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「まずい……大賞作品が半分も終わってない」

伊吹「またその話!？」

圭介「ちくしょう、徹夜したのに……っ!」

伊吹「寝なさいよっ!」

圭介「だが断る……寝たら作業時間がなくなる。締め切り近いようわああ!」

大吾「ついでに夏休みも終わりが近いよあああっ!」

伊吹「ダメだわコイツら……」

## 第107話 文化祭一日目

木曜日、ついに文化祭一日目が始まってしまった。

始まってしまったという、それほど嬉しそうに聞こえない表現にはワケがある。

第一に伊吹は目を合わせれば逸らしてしまうという、相変わらずのツンツン反応。

第二にあかりや青山さんに告白され、でも当の俺が2人を友達以上に見れず、そんなこんなで生まれてしまった中途半端な状況。

そして第三の理由は

「あのさ小坂……なんで俺が女装しなきゃいけないんでせうか？」

「そんなの決まってんじゃん。あたし女子にアンケート取ったんだよねえ、女装させたら一番似合いそううちのクラスの男子は誰って」

「それで俺が選ばれたと？」

「うん、今日は仮装行列があるし。だから圭くん！ しっかり女の子やっというてね！」

「ふっざけんな！ 藤島さんに女装趣味はないのことよ!？」

そう 俺は今、小坂やその他女子の言いつけで女装させられているのだ。

白と黒のオードソックスなフリフリメイド姿＋黒髪のロングヘア。ああ、鏡で見たよ。完璧に女の子だったね……ちくしょう情けねえ。俺は男のハズなのに……なんで意外にも女装が似合ってるんだよ。

ちなみに、小坂はジャンヌ・ダルクもビックリな西洋女剣士の恰好であった。  
小坂って確か戦国オタだったよな。なんか戦国武将とは真逆じゃないっすか？

「けーすけ様っ！ とってもお似合いなのですよ？」

「うっせ黙れ！ 暮葉、てめえそれは嫌味か何かっすか!？」

「そんなことないよねえ？ 流石、女子全員が圭くんって答えただけあって、圭くんミスコンでも上位狙えそうなくらい可愛いじゃん」

「……………ッ」

相変わらず伊吹とは気まずいし、女装は嫌だし嫌味は言われるし。ちくしょう。散々悪口言われるだけだった去年のほうが、まだ100倍マシだったかもしれん。

とにかく今日は不幸だ。これが不幸以外の何者なんだろうか。うう……………早く男に戻りたいです。男に戻って堂々と青春を謳歌したいっす……………。

だが、こんなのは悲劇の序章に過ぎなかった。

文化祭OPが終了後、俺達は校門前の道路に整列していた。当然、仮装行列の為である……………畜生、こんな恰好で知り合いに遭遇したら……………。

「あれー？ 圭介どこ行っただん？」

「おかしいね。今朝はいたはずなんだけどねー」



おいアイツら！

どうして俺がわからない、どうして俺を探しているんだ！

大吾と重原は俺が真横にいるというのに、何故か俺の事を探していたのだ。

そんなに俺の女装がわかり辛いかコラー！

「おいお前らいい加減気付けっ！」

「あ？ …… ツ！ やべ…… 現実女なのに……っ」

は、何をおっしゃっているんでせうか大吾のヤツ？

いきなり眼鏡を光らせ、頬を赤らめるなんて…… 正直気持ち悪いことこの上なし。

「ねえ、君は2年かい？」

「あのおなあ重原いい加減に」

「すみません！ いきなりですが……俺、君に思わず惚れてしまいましたっ！」

「……ハアツ！？」

待て待て待て待て待て待て待てエ！

どういうことだよ。なんで俺が重原に惚れられているんだよ！？

「僕も現実に対する初恋だよ……その、僕と付き合ってください！」

「ブツ！」

ひどすぎる現実に思わず俺は吹いてしまった。  
ちくしょう、なんで完全二次元派の大吾まで俺に惚れちゃってんだ  
よ！

どうみたって俺は女装男子だろうが。ていうか中身はホントにただ  
の男の子ですよ？

コイツらにBLな性癖があるとは思えんし……ああちくしょう、勘  
違いって怖い！

「お前ら落ちつけ！ お、俺は圭介だ。藤島圭介だぞっ？」

「藤島圭子ね。あれ？ なあ重原、圭介と同じ名字じゃね？」

よし、大吾が早速疑問に思い始めたぜ。

俺の名前を藤島圭子と間違えた所はなんかムカつくが、まあそこは  
仕方がない。

このまま俺だと2人がわかってくれて、それで解放されるってんな  
ら

「確か圭介って妹がいなかったかい？」

「ああ！ いたな……なるほど圭介の妹か」

「違うわっ！」

どうして二人とも物事をそういう風に考えちゃうんだよ。

確かに妹はいるよ。いるけどその妹は葵って名前だし、それに葵は  
真正銘本物のメスだ！

「圭子ちゃん。兄貴にはちゃんとよろしく言うておくぜ？」

「だから俺と付き合ってください！」

「なっ!? 重原デメエ、圭子ちゃんと付き合うのはこの僕だ！」

「なに戯言を言ってるんだい！ 大吾は完全二次元派じゃないかい！」

「圭子ちゃんだけは除外する。圭子ちゃんは僕の恋愛対象だ！」

大変恐ろしい事態が俺の目の前で起っていやがる。

まずい……このままだと俺は2人に食われてしまう。

何度言い訳してもコイツらは聞く耳持たないし……こうなったら仕方ねえな。

いつそのカツラを取ってコイツらに正体を

「ぐ、はあ！」

「ぎゃ、お!?」

その時、重原と大吾が何者かによってぶっ飛ばされてしまった。

「ったく……コイツらは！」

その何者というのは ホスト風の恰好をして黒木であった。

よかったあ……黒木、この気持ち悪い光景に耐えられずに飛び出してきたんだな。

ありがとう黒木。俺、お前の事を少しは見直したぜ。

俺の事をトコトン嫌っているお前だけは、俺の女装姿を見たって間違える事はないよな。

というわけで俺は笑顔を作り、思い切って黒木に声をかけてみた。

「いやあ、危ないところ悪かったな」

「ホントだぜ……危うくアイツらに奪われる所だった」

「……はい？」

その時、俺の背筋が凍った……ような気がした。

なんか、黒木がいつもより色気づいているような気もしないでもないし……。

ま、まさかっ!？

「圭子ちゃんだっけ!？ その、俺と付き合ってください!」

やっぱりか……!……!……!……!……!

「て、てめえ! 伊吹の事が好きなんじゃ

」

「伊吹ちゃんも好きだけどお前も好きだ! だから俺はハーレムを

」

サイテーだコイツ!

そりゃあ二次元ならハーレムルートもありだと思っさ。

だけど、黒木の馬鹿野郎は現実でハーレムを形成しようとしていやる。

ていうかハーレムってダメだろ。いつかは伊 誠みたいな運命を辿るぜ?

ていうかそもそも、こんな野郎の恋人にだけはなりたくねえ!

「ちえすとーっ!」

「ぶ、はあ　！？」

だから俺は最終自衛手段として、黒木の下顎に握った拳を打ち込んでやった。

いくら黒木が喧嘩慣れしているからと言って、流石にこの不意打ちから体勢を立て直す事はできなかったようである。背中からアスファルトに落ちた黒木は、そのまま動かなくなってしまった。だが　俺にとっての脅威は黒木だけではなかった。

「け、圭子ちゃんは僕の……っ」

「いや俺のだよ。俺、強い女の子好きだよ……っ」

「俺も惚れちゃったで！」

復活した大吾に重原、そして赤佐までが俺に惚れてしまったようである。

なんたる地獄！しかも今度は筋肉野郎が2人もいやがる。

ハッキリ言って俺に勝ち目はない。だったらここは　逃げたほうが得策じゃあ！

「あ！　待って僕の圭子ちゃん！」

「俺のマイ・ハニーよ待ってくれ！」

「俺これでもエッチだけは自信あるんやでー！」

「俺は男だ！　バカヤロオオオオ！」

俺はただひたすら野獣と化した野郎共から逃げていた。  
もちろん、泣きながら女の小走りで

こうして文化祭1日目、仮装行列はただ逃げるだけで終了した。

それから数時間後。現在俺達は3人揃って晩御飯を食べていた。  
葵も暮葉も美味しそうに食べているなあ……俺、俺はその……まあアレだよアレ。

「それでね！ お兄ちゃんやクーにゃんの学年にね、すつごく可愛  
いというか……うん、カッコいい系かな？ そんな感じの女子が  
いたらしくてね、葵のクラスの男子もみんなその人に告白しようと  
していたんだよ！」

「もきゅ！？ す、すごいですねその人……学園のアイドルみたい  
なのです！」

「そ、そうだね……あはは」

その女子は俺です。なんて言える空気じゃねえ……。  
どれだけ全校の男子にモテてんだよ、藤島圭子ちゃん。

今までで一番最悪の文化祭1日目だった。こんなに野郎共に迫られ  
た事は今まで一度もないぜ。

いや、迫られる事が地獄以外の何者でもないが……。  
とにかく色々言いたい事があるけど一言、これだけは確実にハツキ  
リと言える事がある。

そう、それは

「うう、二度と女装なんかするもんか……っ」

楽しい食卓でただ一人、俺は密かに涙を流していた。

## 第107話 文化祭一日目（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

大吾「結局あれから圭子ちゃん見てないけど、何組の子なんだろう？」

重原「圭介の妹らしいからね。きつと1年だと思っよ？」

大吾「じゃあ圭介に訊くのが手っ取り早いな」

重原「圭介。圭子ちゃんって何組か知らないかい？」

圭介「……知らん」

伊吹「圭介、テンション低いわね……」

小坂「あはは、悪い事しちゃったかな……？」



第108話 文化祭二日目 両親と再会と無口と……？

金曜日、今日もまた3日間の文化祭のうちの1日であり、今日は昨日と違って生徒間による展示などがメインとなる……まあ、本格的なお祭りとなる一日だ。

最も、このお祭り騒ぎは明日も続き、特に今日からは一般公開があったりで色々で大忙し。

まあ今日はまだいいほうだ。金曜日は他校は殆どが授業な為、一般人と言っても保護者くらいしか来ないもんだからな。

本当に大変なのは明日だ……明日は学生が主な客だからな。

「……んで、なんで暮葉がメイド服を着てんだよ？」

「もきゅ？ え〜っと大吾さんの提案でして……男の人はこの恰好でご奉仕すると喜ぶと」

「確かに嬉しいけど何か間違ってる！ ちくしょう大吾のヤツめえー！」

「もきゅ？」

アイツ、絶対暮葉をコスプレさせて楽しんでるんだろ。

普段は完全二次元派の癖して……アイツ唯好きと言いつつまさかのロリコンだったのか！

「どつたの圭くん？」

「あ？ 小坂 でえっ!？」

小坂は赤と白の巫女さんの恰好を、その隣の伊吹は女中さんのような和服を着ていたのだ。

いくら喫茶店とは言え、このコスチュームは色々とおかしやろ。そういえばと思いい周囲を見渡す。

野郎共は普通の制服だが、女子の大半は何かコスプレっぽい恰好をしていた。

これはアレか……全てはアイツのせいだったりすんのか？

「くそーっ！ これも全部大吾か、いや大吾しかいねーだろっ！」

「まあまあ圭介そう怒らないで。その大吾は今日いないんだしさ」

「もきゅ？ 大吾さんいないのですか!？」

「は？ 重原……なんでまた今日に限って大吾がいないの？」

「豊 愛生のソロライブと文化祭が重なったって言うていたし、大吾的にはライブのほうが大切だったんじゃないかい？」

……ひでえ、呆れて言葉も出ねえよ。

ひよっとしてアイツ、声優のライブが楽しみで文化祭サボったのか？ やっぱり大吾は完全二次元派だった。

ちくしょう、アイツ……現実なんてジャガイモ程度にしか思っ  
えぞ。<sup>リアル</sup>

「相変わらず大吾はキモいね。やっぱり大吾の名字は長宗我部元親に失礼だなあ」

「いいじゃないの別に。だって大吾よ大吾？」

「まあ確かに……大吾さんは居てもいなくても変わらないですね！」

小坂もひどいが伊吹と暮葉もひどいモンだ。

どうやら女子達は大吾の事を、なんてことのないパセリ程度にしか思っていないようである。

「それにしてもあたしら前半はお仕事かあ。それじゃあ伊吹、今のうちに作戦考えようね？」

「……え？ あ、亜紀？ 作戦ってなによ……っ？」

「いいからいいからっ」

「あっ！ ちょ、ちよつと亜紀!？」

ニヤニヤしている小坂に背中を押され、伊吹がこの場から強制退場させられた。

しか伊吹は作戦ってなにといいつつも、内容自体は知っているようだ。

何故ならアイツ、頬が赤く染まっていたからだ。

アイツはツツパリな癖に赤面症だしな。それにしても作戦って一体なんだ？

あと、未だに伊吹と一言も交わしていない俺って……。

「伊吹さんに亜紀さん、どうされたのでしょうか？」

「ふ〜ん……まっ、俺達は聞かないほうがよさそうだね。特に圭介は絶対にね」

「なんで俺!？ つーかやっぱ俺の話!？」

ちくしょう……まさか作戦会議って俺を如何にぶっ倒すかとか、そんな話なんじゃ……？  
まずいな。今のうちに竹刀で襲われた場合の護身術を練習しておく。

それから数十分後。

店の中では暮葉、小坂、伊吹などの女子共が男性客をご奉仕。  
重原ら野郎共も女子共のハートをキャッチすべく、この教室の中で奮闘中であつた。

そして、今の俺はお客さんを集める為、廊下に立って呼び込みを行っていたのだ。

しかし呼び込みって殆ど効果がないし、その上超気まずい空気が……。

そう、この気まずい空気の原因は

「……なあ白藤、お前も少しは呼び込みの為に喋らないか？」

「……………」

「あ、あんのー白藤さん？」

「……………」

「白藤ちゃん？ 早苗ちゃん？」

「……………」

「もぉーっ！ 一言くらいは喋ってくださいお願いしますー！」

白藤早苗<sup>しじいじななえ</sup>。

2年4組の在籍する……まあ簡単に言えばクラスメイト。ただそれだけである。

白藤とは仲がいいわけではないし、というか白藤が誰かと話をして  
いる所なんて見たことねえぞ。

「……………」

「あのお白藤。一応呼び込みの仕事なんだからさ、何か喋らない  
と意味ないんだぞ？」

「……………」

白藤はどう見ても美少女である。背は伊吹よりは高く青山さんより  
は小さい程度。

とっても明るい青緑色の髪は長く美しい。長さは太股まで伸びたふ  
わふわロングだが、それとは別に頭の横から水色っぽい白リボンで  
束ねた髪が二房、伸びている。

しかもリボンには小さな鈴が二つずつ、可愛らしい飾りのように取  
り付けられていた。

紫色の瞳は何かグツとくるものがあり、正直その……あどけない顔  
が可愛いです。

しかもなんだその首に巻いた黒リボンは。あと襟の辺りに黄金に輝  
く鈴は。

もうそれ狙ってるよね。俺のような男のハートをキャッチする為に  
狙ってたよね？

だが 彼女はそもそも言葉を話せるか自体怪しい程、超絶無口な  
女の子なのだ。

「……………」

「……………」

どうしよう。会話が全く続かない……。

青山さんは単に恥ずかしがりなだけだし、物静かなだけだけど……  
白藤は違う。

白藤は物静かとかそれ以前に コミュニケーション障害なのかと  
疑いたくなるほど、無口なのだ。  
無口な上にいつも一人なせいか、誰も白藤の好きなものを把握出来  
ていないという……。

つまり、共通の話題がない上に無口……困った。

俺としては出来れば仲良くしたいのに。ほら、友達が増えれば人生  
はそれなりに楽しいだろ？

「……………」

「……………」

でも話題がない、そもそも声をかけても返事をしてくれない。

それでも成績は葵に並ぶ学校の3本指だなんて……うん、信じられ  
ねえ。

「あらあら浩介さん。あちらにいらっしやるのは圭介さんじゃあり  
ません？」

「お、ホントだ。おゝい圭介っ！」

「あん …？」

はて、聞き覚えがあるというか……なんだか懐かしい声が人ごみの

中から聞こえてきた。

誰だ。中学の時の知り合いだとは思えない。

今日は他校は授業だし、そもそも中学の時の知り合いはまだ俺の事を敵視しているハズだ。

けど 大人にそんな知り合い居たっけか？

そもそもこの声は一体どこから

「ん？」

その時、ぐいぐいと袖を引っ張られたような気がした。

振り返ると なんと白藤が俺の袖を引っ張っていたのだ。

「ど、どうした……？」

「……んっ」

白藤は控えめに人差し指を西側に向ける。

ちくしょう、コイツ喋らねえけど滅茶苦茶可愛いな。

でもなんでだ。なんでコイツ指差したんだろうか、西側に何かあるつてののか？

というわけで俺はそっちを振り向くと そこには。

「おー、ようやく気付いたかぁ！」

「元気そうだなによりだわ圭介さん」

「貴方……あの時の？」

なんだこれ、どういうことなんだよ？

そこには人が三人いる。一人は中年の男でなんとなく俺に似ている

ような気がする人。

もう一人は葵に似た青髪ショート的女性。多分中年男性と同一年くらいだろうが……異常に若い。

そしてもう一人は長い黒髪の少女だ。初芝の制服を着ているが……どこかで会ったような？

つか、俺の親父とお袋が何故文化祭に来ているんだ。二人とも一体仕事はどうしたんだ。

そして、なんで可愛い女の子を連れて歩いてるんだよ。なによりこの女の子は確か前に街中で

「うるあロリコン親父っ！」

「ひい！？ い、いきなりなんだ圭介！？」

俺はつい衝動的になって、自分の親父の胸倉をガシツと掴んだ。しかもそこから強引に揺さぶり、俺は親父に事情聴取を始める。

「なんでお袋と一緒に文化祭に来てんだ！ 仕事はどうしたんだよ 仕事は！？」

「いやあ～お盆は忙しいからな。代わりにこの時期に休暇を取ったんだ」

「いきなりすぎるだろ！ せめて連絡くらいは入れやがれ！」

「くわああっ！？ ちょ、圭介っ！ 悪かったから揺さぶらないでくれ！」

だって揺さぶりたくなるだろ。

いきなり何の連絡も無しによ、遠くに行っていた両親が戻って来た



んだぞ？

事情を小一時間くらい問い詰めたいに決まってんだろ。

「あらあら、圭介さんは両親との再会が嬉しいのね」

「違うわ！ お袋も仕事はどうしたんだよ！？」

俺は今度はお袋

ふじしまあおは  
藤島青葉の事情を聴取しようとする。

「私も浩介さんと同じ理由かしら？」

「夫婦揃って息子にビックリショーしてんじゃねえ！ つかロリコン親父、その子は一体何なんだよどうい関係なんだよ！」

俺はビツと長い黒髪の少女を指差した。

だったこの子 前に街中で不良に絡まれていた佐井学園の

「ああ、道に迷って困っていた所を案内してもらったんだ」

「そうそう。圭介さんの同級生みたいだけど、とってもいい子だったわよ」

「えっ？ え、え〜つと……」

俺は再び長い黒髪の少女を見る。

うわぁ〜見られている。じっと見られているよ俺……きつと怪しまれているんだろう。

相手もきつと、俺の事を何処かで見た馬鹿だと思っているに違いない。

「私は西園寺雪乃よ。貴方と同じ2年……この前はありがとうございます」

「え？ や、やっぱり貴女様はあの時の？」

「ええ、おかげで面倒なことにならずに済んだわ」

「あ、あっははは。まあ気にすんなって、いい運動にはなったからさ」

西園寺雪乃……やっぱりあの時の絡まれ少女だったか。でもコイツって確か佐井学園の生徒じゃ……？

「あらあら圭介さん？ 西園寺さんとは知り合いだったのかしら？」

「知り合いと言うか……まあ、知り合いでいいのか？」

とりあえず知り合いでいいだろう。一応、お互い面識はあるんだからな。

それにお袋に細かい事を説明しても無駄だしな。

お袋はとにかく恋バナが好きなら若づくりオバハンだ。

下手に詳細なんかを語れば 「それはフラグじゃないかしら？」なんて馬鹿にするに違いない。

親父もそつだ。というか親父はロリコンだし、西園寺を狙わないか心配だぞ？

「ん？ それじゃあさつきから圭介の袖を握ってる子は誰だ？」

「ん？ ツー!？」

「……っ」

おかしいな、一度離れたのにどういう事なのさ！  
気付けば白藤が俺のそばにおり、何故だか俺の左の袖をぎゅっと握  
っていたのだ。

「あらあら。圭介さんに彼女がいたのね」

「違うわ！」

俺の彼女がこんなに無口なわけがない！

「そうかあゝ、ついに圭介にも春が……父さん嬉しいぞ！」

「違うっつってんだろっが！」

「へえ？ 貴女ってお節介焼きな割には恋人がいたのねえ」

「西園寺！ てめえも少しは人の話を聞け！」

なんだって俺の周りには会話が通じない相手が多いの！？

ていうか……なんか次第に俺ら、他人の注目を浴びている気がする  
のだが？

4組の連中まで野次馬として現れ、三馬鹿が「死ねリア充！」とか  
騒いでいる。

なんか、他の奴らにも俺と白藤の関係を誤解されてないか？

「あれえゝ？ 圭くん先客がいるじゃん」

「……え？」

思わず俺は凍りついてしまった。

それでも頑張って無理やり振り返る。すると、そこには小坂と伊吹、あと暮葉の姿があった。

そして何故だか、伊吹と暮葉がお怒りの様子で俺に接近し

「あなたは次から次へと……」

「あ、あの〜伊吹さん？ 貴女は何か大きな誤解を」

「けーすけ様？ そんなに異性の友達が欲しいのですか？」

「なんで暮葉まで怒ってんの！？ 違います、お二人はなんか誤解してますって！」

アカン、伊吹と暮葉から紫色の恐ろしいオーラが……ッ！

こうなったら仕方ない。折角親がいるんだ、大人の力で助けてもらおう。

「ちょ、助けてお父様！」

「ハハハ、そういえば圭介には伊吹ちゃんがいたな。しかも圭介と仲のよさそうな女の子がまた一人……流石の父さんにもその修羅場はどうにも出来ないな〜」

「お母様なんとかしてくださいお願いしますっ！」

「あらあら。こういう昼ドラ的な展開、お母さんは好きよ？」

なんで息子の危機を笑ってみてんだよ、うちの馬鹿両親は！

絶体絶命の危機なのに。下手したら殺されるかもしれないのに！

「だああもう！ 西園寺様、どうか俺を助けてくださいっ！」

「あら、浮気をした貴方が悪いんじゃないかしら？」

「浮気も何も俺は誰とも付き合ってねえっ！」

白藤は……ダメだ、俺から離れようとしなさい。

ちくしょう、いつ俺が白藤にこんなフラグを立てたんだ。

思い出せば声をかけたのは今日が初めて。白藤とこうなるイベントをこなした記憶もない。

それなのに……なんでこんなことになってしまったんだ？

とりあえず白藤に離れてもらった方がここは安全。

しかし、そんな事を言っても無口な白藤が返答するとは思えない。

「歯あ食いしばりなさい……ばか圭介っ！」

「けーすけ様……これは教育なのです。超法規的措置なのです……ですから覚悟なのです！」

「ちよ、おま……ヤメ だああああっ！ 不幸だあああ

あああああああっ！」

俺は説教ウ二男のように叫び、そして何故か怒る乙女達にシバかれたのであった……。

第108話 文化祭二日目 両親と再会と無口と……？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

黒木「藤島のハーレム野郎……マジで死ねばいいのに」

圭介「てめえは女の子にシバかれる状況が嬉しい状況に見えるのか？」

黒木「あたりまえだろ！ 我々の業界ではご褒美なんだよ！」

圭介「どんなDM願望だよ！？ 俺はゴメンだっ！」

重原「すると圭介はDSなのかい？」

圭介「知るかつ！」

大吾「僕の予想、圭介は多分エッチの時だけDS……」

圭介「どこのエロゲー主人公だコラア！」

## 第109話 シャンボと付きまとう理由

2年4組の展示でやっている喫茶店。

クラスの女子が提案した可愛らしい装飾に包まれ、大吾が提案した可愛らしいコスチュームに身を包んだ女子達。女子達の要望でホスト風の恰好をしている重原達。

そんな色々なものに囲まれる形で、お茶か何かを頼んで飲んでいる俺の両親がいた。

「お、おっ、お久しぶりですっ！」

「久しぶりだねえ伊吹ちゃん。ああでもそんな堅くならないでいいんだよ」

「そうそう。私達にとって伊吹ちゃんは家族みたいなものよ？」

「始めましてっ！ 性は木下、名は暮葉と言つ者なのですっ」

「おお、すると君が子供達と一緒に暮らしている暮葉ちゃんだな」

「あああら、始めまして。私達は圭介と葵の父と母よ、これからもよろしくね」

畜生、こっちは色々とボロボロだったのに、なにアイツら人の親と楽しくふれ合ってるんだよ。

ていうか、親父もお袋もホントにアレだよ。帰ってきてるなら連絡くらい入れるよ。

俺や葵が暮らしてられるのも、全部あの二人の稼ぎのおかげだ。だから帰ってくると知っていれば、恩返しのための準備とかもできた

のになあ。

そういえば葵のヤツはこの事知ってんのかな。

まあ家族なんだし、そのうち知るとは思うけど……一応後で教えておくとしよう。

それよりも……俺が殴られた主な原因をなんとかしなければ。

「おいこら白藤。てめえ……いつまでそうしているつもりだ？」

「……………」

白藤はまだ俺の袖を掴んでいた。

それはまるで、超内気な彼女が彼氏を超頼っている感じであった。

そう　まさに【超】がつくほど控えめベッタベタなのである。

「……………あのさ、視線逸らさないで何か喋ろうぜ？」

「……………」

「とりあえず俺から離れない理由をだな　」

「あら、貴方達まだ離れてなかったのかしら？」

その時、西園寺がニヤニヤしながら冷やかかしを入れてきやがった。  
なんすかそのカップルを見るような目は。

「うっせ黙れ！　こちとらコレのせいで殺意向けられてんだよ！」

もう一度周囲をよく見回すと、主に三馬鹿や他のクラスのヤツが俺を殺したい目で見ていたのだ。

先に言っておくが、白藤が俺から離れないのは俺のせいではない。



これは勝手に白藤がくっ付いているだけだ。  
まあ嬉しいと言えば嬉しい。でもねえ、周りの視線と言つものがありましてですね……。

「まあでも、以外とお似合いだわ」

「か、からかってんじゃねえよ……っ」

「その代わりに、あそこの2人は相当不機嫌みたいだけど」

西園寺が横目でその2人のほうを見る。

西園寺の視線の先には暮葉と伊吹がいるが、その2人はまあ怖い目で俺の事を見ていたのだ。

そして、ガンバレとサインをしゃがる我が両親。

「うえ……」

「ふふふ、まあ頑張りなさい」

「ん？ 西園寺、どっか行くのか？」

「これでも仕事なのよ？ 折角恩人と出会えてもうお別れなのが心残りだけど、どうせ同じ学校だわ。また後で会えたら会いましょ  
う」

「そっか……またな西園寺」

「ええ、またね」

西園寺は背を向け、長い髪を靡かせながら立ち去っていく。

なんだかアイツ楽しそうだな。

確か佐井学園の生徒だったような……明智のように初芝に転校してきたのかな？

しかし気になるなあ。西園寺雪乃……アイツは超能力者なのかな？あともう一つ。まだ大事な問題が解決していない気がするんだ。

「さて、おい白藤。いい加減離れないか？」

「……………」

「頼むお願いします！ 周囲からの視線が痛いんですよ！」

相変わらず俺に向けられる殺意。ちくしょう、みんなして俺を汚いゴミを見る目で見やがって。

まあ確かに事情を知らなけりゃ、今の俺を見るとムカつくかもしれねえけど。

「オー！」

「あ？」

なんだ、この妙に特徴のある雄叫びは？

しかも白藤がまたぐいぐいと、俺の袖を引っ張ってきたのだ。

そして雄叫びの聞こえた方を指差す。

白藤……無口だけどこういう時は便利だな。

でも、いい加減野郎共の殺意ある視線が痛いから離れて欲しいぜ……。

「おいおいマジかよ？ ホントにやっちまつのか？」

「ああ。初芝レスリング部の怪物、ジャンボ鶴屋と最強の風紀委員、明智凧紗がガチバトルだぜ？」

明智とジャンボ鶴屋がガチバトルだった？  
そういえばジャンボ鶴屋ってどこかで聞いた覚えが……多分アイツだな。

確か3年で身長は190cmを超え、体重も120kgを超えている初芝レスリング部の主将。

鬼のように強いらしく渾名は【怪物】。その異名通りの強さなんだとか。

んで、なんでソイツと明智がガチバトルする事になったんだ。しかもこんな廊下で……？

しかも相手は怪物ジャンボ鶴屋だぞ？

「明智のヤツ……なんで鶴屋なんかと」

「オー！」

右腕を豪快に挙げ、雄叫びをあげるジャンボ鶴屋。

どういつ成り行きでこんな事になったかは知らんが、アイツ明智に勝つつもりらしいぞ。

「お前……本当に私と戦うつもりなのか？」

「人生はチャレンジだ、チャンスは掴め！」

「はあ……わかった。戦えばいいんだろ？」

どうやら、勝負を挑んだのはジャンボ鶴屋のほうらしい。

明智は明智でバケモノみたいに強いし、ジャンボ鶴屋は異名が【怪

物】なだけに相当パワフルな戦い方をするヤツなんだろう。案外この勝負……わからないかもしれない。

「ナギちゃん頑張つて！」

「鶴屋あゝ！ 明智なんかぶつ倒しちまえ！」

明智を応援する生駒と鶴屋を応援する黒木。

まさか……黒木じゃねえだろうな。ジャンボ鶴屋が明智と戦うように仕組んだのは？

可能性は十分あるな。自分じゃ勝てないから強い奴に頼みましたとか、アイツならやりかねないぞ。

「オオオオ！」

鶴屋が駆けだした。足はそこまで速くはないものの、あの巨体が突き進むんだ。

襲われる側からしてみれば、重戦車がけたたましい音を上げて近づくのと同じくらい怖いだろう。

だが 明智もやはりプロだ。

鶴屋のジャンボ・リアットに怯む事もなく、なんとそれを回避したのだ。

そのまま明智は背後に回り込み、素早く鶴屋の腰のあたりに蹴りを打ち込んだ。

「オウ！？」

鶴屋の巨体をも突き飛ばす威力の蹴り……やっぱ明智はバケモノだ。だが、鶴屋も流石は【怪物】。蹴りの一発や二発でダウンなんてするはずがない。

「ウオオ！」

「ッ！」

鶴屋が走る、ジャンボが明智目がけて一直線に進む。

そして　　ここぞという間合いで鶴屋はいきなりジャンプをしゃが  
った。

「鶴屋が膝を突き出した……あ、アレは！」

「やべえ！　ジャンピング・ニー・バットだ！」

「決まったらまたオーが来るぞ……ッ！」

どうやら明智の一撃で鶴屋は、明智のことを相当の実力者と判断し  
たらしい。

いきなりジャンボ鶴屋は自身の大技を繰り出したのだ。

アレが顔面に突き刺さったら、明智はまず立っていられないだろう。  
だが　　拳を構えた明智はまるでZ戦士の如く、残像だけを残して  
鶴屋の前から姿を消した。

「ば、バカな！？　どこに消えた！？」

レスリングはスピードも大事かもしれない。

だが、それより大事なのはどんな攻撃にも耐えられる屈強な肉体。

そんな肉体にダメージを与えられるパワー。

そして、どれほど攻撃を食らっても折れぬ　　メンタル的な強さだ。

鶴屋はパワーとタフネスさが自慢のご様子。

……だが、明智はそんな鶴屋さえ撃退できる程の　　馬鹿力の持ち

主であった。

「フッ！」

不意に鶴屋の背後に現れた明智。鶴屋が振り向いた時には既に遅かった。

明智は既にジャンボ鶴屋のこめかみに 鋭く華麗な一撃を放っていた。

勝負はそれで決まったのだ

「ア……………ぐ……………オ……………ッ」

「安心しろ。ちゃんと手は抜いたぞ」

「すげえや明智……………アレで本気じゃなかったのかよ。」

「おおおおおおっ！」

「あ、あのジャンボ鶴屋が負けた……………ッ!?」

「強え……………明智のヤツ反則級だろっ！」

「なんだあんな強いヤツが風紀委員やってるんだ!？」

「まあなんとというか……………」。

「最近明智の実力も隠れ気味だった気がするが、やっぱり明智はバケモノ級の強さを持っていた。」

「なんたって、あのジャンボ鶴屋をあそこまで簡単に倒したんだ。」

「すごかったなあ、白藤」

「……………」

どうせ無反応だろうとは思いつつも、俺は白藤に話を振ってみた。だが、その時白藤は微かに反応してくれたのだ。

なんと 静かに首を縦に振ってくれたのである。

初めての白藤のマトモな反応……これはひょっとすると、聞き出せたりできるかもしれないな。

「なあ白藤。さっきから俺にくっ付いてる理由ってさ……………」

「……………」

「やっぱり教えてくれねえのか？」

「……………」

すると白藤はポケットの中から携帯電話を取り出し、何か必死に文字を打ち込んでいた。

そして、その画面を白藤は恥ずかしそうに俺に見せる。

オイオイ……何もエロ画像見せるんじゃないんだから。

ていうかこれ、紙のいらぬ筆談ってヤツか？

無口な上に会話がコレとは……白藤、アンタは冥界のネクロマンサーかよ。

でも、俺に付きまとう理由はなんとなくわかったかもしれない。

白藤の携帯の画面にはこう書かれていた

【相手にしてくれて嬉しかったから】

なんだ……そういうことだったのか。

それなら喋ればいい　とは思ったが、白藤早苗とはこういう人物なのだ。

それに、声を全然出さないのには理由があるのかもしれないし。某冥界のネクロマンサーみたいな……！

「俺でよかつたらいつでも相手するよ」

そう言うと、白藤は再び携帯に文字を打ち込む。

再び恥ずかしそうにもじもじしつつ、白藤は携帯の画面を俺に見せてくれた。

【ありがとう】

ありがとう……か。

やっぱりお礼を言われるのって嬉しいな。

俺は微笑みながら窓の外を見る。

今日は快晴。夏の日差しが入りこんで、俺達を見守るかのように照らし続けていた。

それから数時間後、俺は教室に戻ったが……。

「あ、あのー暮葉さん？　これは一体なんでござんしょうか？」

「伊吹さんと二人で用意したのですよ？　大変でしたよ」

「伊吹と二人で用意したのかあ。んで、これはなんでござんしょうか？」

「もちろん鉄の処女なのですよ？」



「お前！ それ拷問道具じゃねえか！」

そもそもなんで教室に鉄の処女があるんだよ。  
ていうか持ち込みOKなのかよ。一応これだって使い方によっては  
痛い拷問具だぞ？

大体、こんなものどこに入手してきたんだよ。

「圭介……日頃の不満、今ぶちまけるわ……っ！」

「ちょ、伊吹さん？ なにをそんなに怒ってらっしゃるのでしょうか？」

「圭くんごめん。暮葉と伊吹の気を沈めるには圭くんが犠牲になる  
しかないよ？」

「う、ウソだ……21世紀なのに鉄の処女で拷問されるだなんて……  
…そんなのあんまりだああああああああっ！」

こうして、文化祭二日目は終了したのだ。

まあ鉄の処女と言っても所詮はオモチャ。

ただ暗くて狭くて怖いだけだったのだが……でも鉄の処女の中は色  
々スリル満点であった。

ちくしょう……一体俺が2人になにやっただってんだよおお！

## 第109話 ジャンボと付きまとう理由（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeligh>（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

大吾「女の嫉妬怖えええええええええええええええええつ！」

浅間部長「大丈夫だ。バテスのヒロインのお仕置きよりはまだマシだ」

大吾「それにしても今回ネタだらけだけど、元ネタ全部わかる人いるのか？」

浅間部長「ジャンボなんて今の人知らないかもしれないな」

大吾「……浅間先輩もこの小説書いてる作者も今の人だけだね、一応」

浅間部長「一応とはひどいな！ボクは立派な現代人だ！ちなみに、アツカリくんはボクの嫁な！」

あかり「あ、あたいが嫁……？キモいんだよバカ兄貴っ！」

浅間部長「ぐわなにをするやめ（ry）」

大吾「なんなんだこのオチ？」

## 第110話 裏の動きと一家の日常

その頃、地球のどこか

薄暗い紫色のような背景。

その中央の赤く高級そうな椅子に一人、少女が座っていた。さらっと長い銀髪にサファイアのような瞳を持つ小柄な美少女。だが、彼女が他人に向ける視線は氷のように冷たいものだった。

「失礼します！」

一人の地味が軍服を着た白人男性が、何かの報告書を持って彼女の前に現れる。

「ふふふ、なにか報告でもあるのですか？」

「藤島圭介の居場所について新情報であります」

「それじゃあ、その情報が書かれたその紙。読んで欲しいな」

つと、銀髪の少女の隣にいた少女が言い放つ。

彼女はピンク色のコートを着用して、ふわつとした金髪ツインテールと銀髪の少女とは対照的だ。

彼女の名前はリリア。そこに座っている銀髪の少女のただ一人の友達。

「読みます。」 発 SS、宛 連邦総有党中央委員会書記長 クラスメイトの藤島圭介は標的の藤島圭介と認む。速やかに回収命令を下し、上記の者の身柄を拘束せよ。」

「へえ……いよいよ藤島圭介の居場所が特定できたんですね」

軍人の報告を訊くと、銀髪の少女は頼杖をつきつつ、ニヤリと微笑みを浮かべた。

その様子をリリアは不安げな表情で見ている。

一方の軍人は一歩前に出て、ハッキリと銀髪の少女に何かを進言する。

「どうします。アルファ隊の妨害が入っているとの情報も存在します、精鋭の魔術師を初芝高校という場所に送ってやりましょうか？」

「その必要はないですよ。そのSS……本名は私も知らないですが、その者に身柄の拘束をさせなさい」

「しかし、アルファ隊が……」

「クラスメイトですよ？ 馬鹿正直にぶん殴れるとは思えませんけどね」

「りよ、了解しました！」

軍人は報告書を片手に、血相を変えて逃げるようにこの部屋から出て行った。

銀髪の少女はその光景を、不安になるような微笑みを浮かべ、やはり冷たい視線を向けている。

やがて彼女は左手で自分の長い髪に触れ、そのままリリアの方を少し嬉しそうな顔で見た。

「ねえアリーナ、遂に標的を発見できてよかったね」

「ええ。これで憎き皇族を全員排除したことになりますね」

「……これで、アリーナの支えになれば……アリーナが元に戻れば……っ」

リリアが俯き、かなりの小声で自身の想いを口から漏らす。

だが、微かにそれはアリーナと言う少女に聞こえていたようだ。

アリーナは眉間を寄せ、彼女のほうを見つめる。

すると冷たい言葉しか発しない口を、また冷たい言葉を吐く為だけに開けた。

「リリア、なにか仰いましたか？」

「い、いえっ！ なにもっ！」

「ふふふ……」

不敵な笑みを浮かべる氷の女王。

彼女の名前はアリーナ・ウラジミールヴナ・レニナ。

そう、圭介の身柄を狙い、異世界で戦力を蓄えるサヴィエト亡命政府の代表である。

その頃、藤島家。

「お、お父さんっ、お母さん！」

「おお、久しぶりだな葵！」

「あらあら、葵さんも元気そうだなによりだわ」

俺は今、リビングで喜ぶ葵の姿を見てなんとなく心が満たされていた。

葵が喜んでいるのは当然理由がある。

今日 俺の両親が何の連絡もなしに家に帰ってきたのだ。

その事が葵は嬉しくて嬉しくて、もう仕方がないようなのである。

葵は俺とは違って親の事が大好きみたいだし、ぶっちゃけこの光景は見ていて心が温まるよ。

「けーすけ様っ、家族仲がよろしいようで拙者も安心なのです!」

「そ、そうか……」

暮葉も家族仲がいいのはいい事だと言っている。

だが、何故か俺はそれに納得ができなかった。

確かに暮葉の言っている事には同意だ。問題はそれを暮葉が言っているという所にある。

コイツ……おもちゃとは言え、俺を鉄の処女に閉じ込めやがって……ッ!

「いやあ、今日は父さん達文化祭の会場にいたんだよなあ」

「そうだったの!? 葵の所にも来てほしかったよっ」

「ごめんなさいね。途中で圭介さんと遭遇しちゃって、そこでの出来ごとが面白かったから」

あんなあ……こっちはクソも面白くなかったぞ。

むしろず〜つと自分の生命の危機を感じていたくらいだ。

実際、そのせいで俺は鉄の処女に放り込まれ……はあ、不幸だ。

「なになに面白い事って!？」

「ん？　なんだっけ、確か圭介に彼女がいたことだっけ？」

「あああら、もう覚えていないのかしら？　でも浩介さん、それで正解ですよ？」

なっ！

あ、アイツら葵になんとという事を言っちゃまったんだよ。

葵はブラコン。俺が誰かと交際するなんて……絶対に認めない子だぞ。

その葵にそんな嘘情報を吹き込みやがったら

葵は殺気が溢れるように目を光らし、凄まじい足音を上げてたつたの2秒で間合いを詰めてきた。

そして、俺の目の前で止まったと思いきや　　葵は人様の胸倉をガシリと握ったのである。

「お兄ちゃんどういうこと？」

「ちょ、落ちつけ葵！　あの二人の言ってる事はウソですウソ！」

「そうですね！　けーすけ様は誰とも付き合っていないのです！」

ちなみに暮葉と伊吹にはあの後、ちゃんと事情を説明したんだ。

もう暮葉は怒っていない様子だが、伊吹はいつものことながら、相変わらず不機嫌そうだった。

伊吹……やっぱり目も合わせてくれなかったよなあ。

なんでだろう。照れているって事も考えられるが、ツッパリ伊吹だしなあ……。

やっぱ俺、伊吹に嫌われちゃったんだろうか。

「ウソつけ圭介。だってお前、女の子にずっとくっ付いていたじゃないか？」

「ごるあ親父イ！ それは殆ど事故みたいなモンだろ！」

「ひどい……ひどいよお兄ちゃんっ！」

「ち、違う葵。これはまあ誤解というヤツでして……」

まずいぞ。葵のヤツが本気で泣きそうな目になっている。

涙を溜めた瞳とむすっとした表情。そんな状態で葵は上目遣いで俺を見つめてくる。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃんの童貞は葵のものなんだよ！？ っていつかお兄ちゃんの初彼女は葵だよ！？ だから葵以外の女の子と付き合うのは絶対にダメっ！」

「なんでその結論に達するんだよ！？」

「兄と妹は初めから結ばれる運命。別にヨスガちゃっても問題ないんだよ？」

「ありまくりだろ！ 玄関での行為の末同級生に見つかるプレイなんかしたくねえよ！」

どうして葵はヨスガなんて知っちゃったんだろうか。



そのせいか、葵のヤツすつかり俺との既成事実を作ろうと本気だよ。  
ちくしょう……アレは二次元だからいいけど、コレは現実リアルである。  
現実リアルでヨスガったらもうね……笑える話じゃねえよ！

「相変わらず仲がいいなあ〜圭介と葵は」

「あらあら。私は兄と妹のドロドロ恋愛も好きよ」

「てめえら親だろ！ 責任持って妹の行動を止めんかいつ！」

この時、俺は確信したんだ。

ダメだこの家、変態と無責任者しかいねえ！

暮葉が一番マトモに思えてきたよ……はあ。

## 第110話 裏の動きと一家の日常（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

黒木「畜生！ やっぱり藤島はギャルゲー主人公だ！」

圭介「なんで!?!」

黒木「意味もなく妹に好かれやがって……畜生！」

浅間部長「ボクなんてゴキブリ扱いだよ!? 藤島君、君というヤツはモテまくりな上に妹とまで……」

黒木「テメエ、マジで罪深いヤツだな……」

圭介「ちよ、なんでこんな話になってんだよ！」

第111話 文化祭三日目、そして……

文化祭三日目、今日は多くの学生達で校内が賑わっていた。

多くの学生達……という自分の学校だけと考えそうになるが、今日は文化祭の日なのである。

どちらかというところ、自分の学校の生徒よりは近隣の学校の生徒のほうが目立っていた。

今日はうちの地味な喫茶店も、まあ女子陣や大吾の案によって結構繁盛していたのだ。

最も、今日は非番なので結構暇な俺なのだが。

ただ……午後のステージでちよっくら仕事があるがな。

そう、青山さんと一緒に文化祭の写真撮影をしなければならないのだ。

「ああ……このまま蒸発でもしたい」

「どうしたんだよ圭介？ お前も昨日のライブ来ればよかったのに」

「うっせ黙れ。俺は学校行事はサボりたくてもサボらねえの」

「むしろ圭介の場合、サボったら野原先生あたりにシバかれるよね」

「うっせ……」

俺は今、大吾や重原と一緒に1年がやっている猫カフェという所に来ていた。

猫カフェだけにどっから集めてきたんだか、大量の猫が教室内にいて……結構痛いです。

痛いと言つのはもちろん、猫が俺を引つ搔いてくるのだ。  
だから俺、今日は異常にテンションが低いのである。  
猫さん……しつけ悪過ぎだろ。つかなんで俺だけ引つ搔かれるんで  
しょうか？

「ていうか圭介、どうして僕らと回るんだ？」

「あ？」

「そうだね、女子はどうしたんだい？」

「あのなあ……お前ら俺が女たらしか何かだと思ってねえか？」

「そうじゃねえの？」

「俺もそうだと思ってたよ」

「お前ら……」

そんな女たらしならもうとっくの昔に彼女がいるわ。  
つたく、コイツらは毎度毎度大げさだぜ。

「　　って、置いてかないでよ！ ミネットはあそこでわたあめ買  
いたかったんだよ！」

「あん　　？　　つたく、ちったあ黙りやがれクソガキ」

「なんで貴方はいつもミネットに対する扱いがひどいの？　もうキ  
スしないよ？」

「オマエ、それじゃオレが能力使えねエだろオが！」

なんだ、廊下のほうがかなりの大声が聞こえたぞ。

女の子のほうは随分大声で話すモンだな。誰と話してんだろうか？  
それにしてもミネットって……どう考えても外国人の名前じゃねえか。

「どうしたんだ圭介？」

「んいや、別に」

大吾が心配してきたが、別にどこかおかしいわけじゃないし。

たまたま聞こえた声に気をとられただけだからな。

それにしても、暮葉達も今非番なんだよな。アイツら今頃なにやってんのかなあ。

同時刻、初芝高校の廊下に……白きあの男が不機嫌そうに歩いていた。

チツ、なんちゅー数の人間がいやがるんだ。

出来れば病室でぐーだらしていたかったんだが、ミネットのクソガキめ……何がリハビリだ。

こっちは杖つかねえとロクに歩けねえってのに、容赦なく周りの人間がぶつかってくるじゃねえか。

しかも謝罪の一言もなし。

クソツタレ……能力使ってブツ殺したかったが、ミネットに止められちまったし……ハア。

しかも、たかがリハビリだったのに……。

「ンで、なんでオマエまでこっちの世界にいるんだ。リーネ・ディートリッヒ」

「ボクは技術者なの。その機械が不調になった時、誰が修理すると思っ？」

「ンで、それで木下木葉がオマエをよこしたってワケか」

「そそっ！ だからボクの事は気にしないほうが得策なの！」

チツ……こんのクソガキ2号が。

まア、胸はそこで騒いでるクソガキ1号と違ってガキじゃねえけどな。

でもまあ、クソガキってことには何の変わりもねエ。それにしても、ちっとアレだなア……。

「オイ、オマエらここで待ってる」

「あれ？ 貴方どっか行っちゃうの？」

「どこいくの？ ボク達もついていった方がよさそうなの？」

「オマエら、男子トイレまでついてくるつもりか？」

「えっ!？」

「あ、ごめんさいなの……っ」

恥ずかしそうに俯きやがった2人のクソガキ。

「まったく、最初からそうして大人しくしてりゃいいんだよ……クソツタレが。」

「チツ」

オレは軽く舌打ちした後、そのまま数十メートル先にあるトイレに向かった。

それから数分後、用を済ませたオレはトイレを出て元の場所に戻った。

だが……どこを見ても制服着てるヤツか、私服のどっかの学校の連中ばかり。

肝心のクソガキ共はどこかに消えていたのだ。

「あんのクソガキ共……どこに消えやがった？」

だからこんな人の多い場所に反対だったんだ。

リハビリするにしてもしにくいし、逸れた場合見つけんのが面倒じゃねエか。

「まったく、あのクソガキ共。一体どこでなにして遊んでやがるんだ。」

しかもアイツらのほうが人数多いし、これじゃあオレが迷子みたいじゃねえか。

「まったく……そもそも、こつちは脳味噌シエイク状態なんだ。」

撃たれてからまだ一週間経ったばかり。本来ならまだ病室で寝てなきやいけねえつてのによ。

まあ、今更そんな事を気にしたって仕方ねえな。

それよりあのクソガキを探しに行かねえと。とりあえずは情報収集って所か？

この辺にいるヤツの誰かに訊いてみるとすつかア……。

「限定版のフィギュアを飾った出店があるだ！？」　これはもう僕

が行くしかない！」

「いや、なんだか面白い事になってきたねえ」

「お前ら待てよっ！ とりあえずフィギュアの詳細つてのを教えてくれ！」

その時、ダツ、と勢いよくオレの目の前を駆けて行く三人の男達。一人は眼鏡をかけたオタクっぽい野郎。もう一人はやたら筋肉質な爽やかな野郎。

そしてもう一人は見覚えがある。いや 忘れもしねえ。

中肉中背の体格。髪は黒く寝癖のようなアホ毛が一本、伸びていた。制服は着崩されてあまり真面目そうには見えねえ。

そんな外見の男 間違いないねえ、アイツはあの時オレをぶん殴った

「あの 野郎オ……ッ！」

杖を持つ手に力を入れる。ギュギュと締め付けられる音が響いた。俺は右手に入れられるだけの力を入れていたのだ。

さらに思いつきり歯を食いしばり、激しくあの野郎のことを睨み付ける。

だが、あの野郎は全く気付いていねえ。しかもあの野郎とは別のヤツがオレに近付いてきた。

「なんだテメエ？ この永淵晃様になにガン飛ばしてくれてんだ、アア？」

「オラア！ 喧嘩売ってんだろ、なんとか言えやもやし野郎！」



「…………チツ」

なんであるの野郎じゃねえんだよ…………。  
こんな坊主のラインアート野郎なんざ、全く眼中にねエってのによ  
…………ふざけんじゃねえよ。

「まったく、藤島に復讐してやろうと思ったのによ…………気分悪い、こ  
いつボコってから行こうか」

「そうつすね。このもやしにも永渕さんの恐ろしさ…………たつぷり叩  
きこんでやりましょうや」

ハア…………面倒癖エ。

永渕って野郎と角刈りのクソ野郎、コイツらは人の実力がわかつち  
やったりしねえのか？

まア、こんな連中にわかるような頭があるわけねエか。

それにしてもどうする。こんな連中相手に能力使っても仕方がねえ。  
超能力を使えは変換機コイケンの魔力なんて、たったの15分でなくなつち  
まうんだ。

この15分はあの野郎にとっておく。こんなクソバカ相手に時間を  
無駄に使いたくねえ。

しかし、丸腰で戦うのは危険だ。仕方ねえ、酸素でも奪って1秒で  
気絶させてやるか。

「ウオオオ　　が、はあっ！」

なんだア…………いきなり永渕の野郎がぶっ倒れやがった。

その背後には竹刀を持った一人の少女。

輝くような銀髪に紅い瞳。小さい事には変わらないが、ミネットの  
クソガキよりは背は高そうだ。

「まったく……あなたは一体こんな所でなに考えてんのよ？」

「て、テメエ！」

「ッ！」

突如少女に殴りかかる角刈り野郎。一方、竹刀を構えた少女は咄嗟に行動に移る。

だが少女は竹刀を振りまわさず、その先端を角刈り野郎の鳩尾に突き刺した。

呼吸困難にでも陥ったのか。それともよっぼどの威力だったのか。角刈りはそのまま地面へ平伏しやがった。

「たく……弱エ、これでオレに喧嘩を売るつもりだったのか。」

「いってて……伊吹ちゃん、中々いい攻撃くれるじゃねえかよ……ッ」

「あなた、一体こんな所に何しに来たのよ？」

「文化祭を滅茶苦茶にして……テメエらに復讐しようとしたんだよ。そして、伊吹ちゃんを俺のものに」

「ふんッ！」

「ぐ、はあっ！」

少女の不意打ちに永渕は反応できず、首筋を打たれた永渕は床に倒れ込んだ。

それでもまだ、意識だけはあるようだ。

「い、ぶ……きィ……ッ」

「ふん、そう何度もあんなんかにやられないわよ」

「くそ……ッ」

そのまま永淵は気を失ったらしく、全身の力が抜けたようにぐったりとしていた。

つたく、この少女と永淵。一体どういふ事情なんだ？

まあ知った所でオレにどうしろって話だがなア。

「まったく……あの、大丈夫ですか？」

「あア？ ……問題ねェ」

そうだ。コイツにミネツト達の事を訊こうか。

丁度いいタイミングで現れた事だしな。

コイツなら ひよっとするとあのクソガキ共を目撃していたかもしれねェ。

第111話 文化祭三日目、そして……（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

暮葉「ところで、あそこで早川が戦っていたらどうなっていたのでしょうか?」

圭介「さあ? 永澗が強いと言っても不良の中での話だし、瞬殺だったんじゃない?」

暮葉「伊吹さんにもやられましたけどね」

圭介「不意打ちだったし、それに伊吹は実力隠れ気味だけど実際強いからな」

暮葉「でしたら、もしけーすけ様と会っていたら!？」

圭介「お前わかってて言ってるだろ……多分激戦で文化祭が崩壊するぞ」

暮葉「とにかくけーすけ様っ、今回は早川と伊吹さんに感謝ですな!」

圭介「永澗と戦う必要はなくなったからな。けど伊吹に無視されるし……うっ」

大吾「次回！ 圭介に迫るSSの正体とは？ そして早川悠にも戦いが迫っていた」！

圭介「なに熱血展開にしようとしてんの！？ つかてめえ、美味しい所盗るなよ！」

## 第112話 2人に迫る危機(?)

まったくアイツらは……この人ごみの中どこに消えやがったんだ？俺こと藤島圭介は、大吾達と一緒に限定版フィギュアを求めて外に出たが……。

あまりにすごい人ごみのせいか、大吾と重原をロストしてしまったのだ。

アイツら無駄に歩くの速いし、ちくしょう一体どこに消えたんだよでもなあ、この人ごみを掻き分けて探すのも面倒だ。

とりあえず何処にいるかメールで確認とってみようかな。

「……ん？」

その時、俺は何者かに袖を引っ張られたような気がした。

まあ犯人は考えるまでもない。この感じは昨日もたっぷり感じた。

「なんだあ白藤か。こんなところで何してんだ？」

【来てほしい。とつても話がしたい】

白藤は左手で携帯に文字を打ち込み、画面に映ったその文字を俺に見せつけてきた。

この特殊な会話方法、なんとかならないんだろうか？

ネクロマンサーもビックリだぜ。しかも携帯だから紙はいらないし。なんて地球にやさしい無口キャラなんだろう、白藤……。

「は、話？ ここじゃダメなのか？」

【とつても大事な話。出来れば二人きりがいい】

「ふふふふ、二人きりですとおお!？」

コクリと、相変わらずの無表情で頷く白藤。

待て、白藤から二人きりで話をしたいと言われた。

言われたんだが……これってもしかして、やっぱりそういう意味な  
んでございますか？

確かに昨日から白藤は、やたら俺にベタベタくっ付いてはいたが…  
…。

俺、いつのまに白藤にまでフラグを立ててたんだ!？

【……ダメ?】

画面に書かれたその文字……うう、無表情でダメって言われるのも  
中々の破壊力。

まずいな。これはもう乗るしかないな。いや、神がそうしろって言  
っている気がする!

何故俺はそう思ってしまったんだろうか。俺はその理由について考  
える事にした。

って、考えるまでもないよな。告白イベントだとわかっていながら、  
それでも期待して行こうとしている俺……そうだよ答えは簡単じゃ  
ねえか。

俺、多分白藤が好きなんだ!

理由なんてよくわからねえ。でもきつとそうなんだろう。

思えば一目惚れだったのかもしれない。だって白藤……見た目超俺  
の好みドストライクだもん。

えっ、一目惚れはナシだって? いやいやそんな事はないだろう。

一目惚れだって立派に惚れてるって事じゃないか。

ふ、ふふ……そう考えると告白が楽しみになってきた。  
俺、告白されたら白藤と付き合う。いや、それが無いならこっちは告白する！

「よ、よし白藤！ 早速行こうじゃないカ！」

俺の言葉に白藤はコクリと頷く。よっしゃキターーーー！

このまま白藤ルート突入だ。待ってる、ラブリーマイエンジェル早苗たん ツ！

それから数分後、俺達は人目のない校舎の裏側に來ていた。  
フフフ……遂にこの時が來たぜ。

白藤からの告白イベント。あるいは俺による白藤への告白イベント。いかん、想像しただけでニヤニヤしてきた。だが、一人でニヤニヤしてはただの変態だ。

ここは我慢しよう。己の感情を押し殺し……う、ぐ……中々ハードだ。

だが、このイベントが成功すれば俺は 晴れてリア充に！

「白藤、その〜用って一体なんなんだ？」

「……………」

白藤は無言。フフフ、これはひょっとして照れているのかな？

やっぱりここは男である俺がリードすべきか。

そうだな、折角の告白イベントなんだ。これは男のほうから言っ  
てやったほうがいいのかな。

「俺もその……丁度言いたい事があるんだよな」



「……………」

「だから、もし白藤が言いづらんならその…………俺から言ってもいいか？」

【だめ】

画面に表示されたその一言……………ってオイ。

ダメなのかよおおおおおおおおおおお！

ひょっとして白藤のヤツ 自分から想いを告げたいのか！？  
なんという子。無口だけど白藤スバラシすぎるっ！

「……………ッ」

今、白藤が必死に携帯に文字を打ちこんでいる。

これはまさか 告白のセリフを書き込んでいるのであろうか？

やべえ興奮してきた！と、とりあえず白藤と恋人になったらなにようか。

まずはデートっすよね。手を繋いでテキストに街中回って夜にホテルへGO

だああああっ！アホか俺は、最後のやつは欲望に忠実すぎるだろっ！と、とにかく。この後のことはちゃんと考えておかないとな。

うんうん。俺は多分これから白藤の恋人に

「……………んっ」

「お、どれどれ？」

白藤が俺に携帯の画面を見せてきた。

さてさて 白藤が必死に考えた告白のセリフとは

？

【「めんなさい」】

はい？

ゴメン ナ サ イ……ですと？

それってどういう っ て考えなくてもわかるよね。

そうか、俺は白藤に振られちまったのか……っ て待てよオイ。

そもそもなにもしていないのにごめんなさいって、ホントにどういう意味なんだ？

なんかその、恋愛とは全く関係がない気が っ と思った。

「っ、ふ っ！」

刹那、何故か俺の腹部に鉄球がめり込んでいたのだ。

ゴキゴキと嫌な響きがするほどの勢いで突っ込まれた鉄球は、そのまま俺を何メートルも後方へとぶっ飛ばしてしまった。

「しら、ふじ……っ！」

口の中の苦い味を感じつつも、歯を食いしばり白藤の事を見る。

そこには もう一個、鉄球を浮かす白藤の姿があった。

同時刻、早川悠は……。

「オマエ、このガキを見なかったか？」

オレは携帯電話に保存されていた、ミネットの画像を少女 国宗  
伊吹ってヤツに見せてみた。

オレと国宗は校内にあるベンチに座っており、丁度国宗がオレの隣に座っていた。

国宗は写真を見ると、思いつきり何かを考えているような表情になるが、決して答えは言わない。

その理由は簡単だ。何故なら国宗は

「ごめんなさい。この子見たことがないわ」

「そオカ、ならこっちのガキはどうだ？」

今度はリーネの画像を国宗に見せてやった。

だが、反応はミネットの画像の時と全く同じである。

「うーん、この子もわからないわ」

「クソツタレ……あんのクソガキ共、どこで遊んでやがるんだ？」

「あんだ、その二人のお兄さんか何かなの？」

「あん　？　なんだろオナ……まア、保護者みたいなモンだ」

知らねえし、そもそも保護なんかしてるつもりはねえけど。

だが、そう言うておくのが一番無難だろう。

なんせ国宗は女だ。ここでロリコン野郎だと思われたら、間違いなく面倒な事になっちまう。

……チッ、これだからクソガキの扱いは面倒だ。

「そう、あんたいい人ね……っ」

「あア、迷子捜しのどこがいい事だ？」

「いいことじゃない。私なんかと比べたらさ」

なんなんだコイツは……妙に寂しげな顔しやがって。

それにどう考えたって、コイツのほうがいいヤツじゃねえか。

オレのどこが善人なんだ。オレは何十人もの特異点をブツ殺したヤツだぜエ？

そんなヤツが今更、善人なんかになれるワケがねエだろ。

「オマエのどこが悪いヤツなんだ？」

「はあ……言っただほうがいいのかな？」

「さっきのクソ野郎を代わりにぶっ倒してくれたお礼だ。話くれエは聞いてやる」

「……私さ、幼馴染がいるのよ。ソイツとは昔から仲がよくて、ずっと昔から一緒で……」

「はン 要するにオマエ、ソイツの事が好きって事かア？」

「……っ！？ ち、違っ……くはないかもしれないけど……で、でもやっぱ違っわよー！」

ハア……コイツはどうやらミネットとは逆のタイプらしい。

そんな感情なんてこれっぽちもわからねえ、そんなオレにさえ気持ちかわかるコイツの態度。

言ってる事と態度が全然違エ。コイツは全く素直じゃねエ。

「ンで、その幼馴染に関しての悩みって何だア？」

「最近その……会話ができないのよっ。わ、私のせいなんだけどさ……ちよっとした事があって以来、ずっと話ができなくて……」

「……………」

「なんかよくわからないけど、その……目とか合わせられなくて……」

「ふん。だったら簡単な事だ、ソイツに声でもかければいいだろ？」

オレはごくあたりまえな 普通すぎる答えを国宗に言っつてやった。国宗は完熟トマトのように顔を赤らめ、必死に顔を横に振りやがる。

「む、無理無理っ！ 今更遅いわよっ！ それにその……アイツも多分、もう私の事が……っ」

「オマエにそんな事がわかんのか？ ソイツは違つかもしれねエだろ」

「そ、そんなこと言われても……っ」

「第一、ソイツの事を一番理解してんのはオマエじゃねエのか？」

「……………えっ？」

「オマエはソイツの幼馴染なんだろ？ 一番理解してて当然じゃねエのかよ？」

最も、生まれてこの方そういうのがいねえオレには、イマイチよく理解が出来ねえがな。

だが恐らくそうだろう。幼馴染ってエのは昔っから一緒に、切っても切れねえ縁で。

要するに 互いに家族以外じゃ一番長い付き合いって事だ。

「それはそうだけど……っ」

「ソイツはどんなヤツだ？ そんな簡単にオマエを切り捨てるヤツかア？」

「ち、違う……と思うけど……でもっ」

「違うと思うなら これからもそう思っとけ。ンで、今日でもソイツと話をすりゃいいだろ？」

オレが言い終わると、国宗はしばらく無言で考え込んでいた。

その表情はとても真剣で。でも今にも折れてしまいそうなど、とても弱々しかった。

だが、遂に国宗は

「……わかった。今日……話しかけてみるっ」

「そオかい……そんなじゃ、オレはそろそろクソガキ搜索を再開すつかア」

そう言つてオレは立ち上がり、ただひたすら前を見ていた。

そう言えばここは人通りが少ない。なるほど、だからコイツも本音を言えたのかもしれない。

コイツもそうだし、木下木葉の研究所を襲ったオッサンもそうだが

……色々悩んでるなア。

人ってのはやっぱり、誰にだって悩みがあるモンってかア。

中にはそれでコイツのように 今にも折れちまいそうなヤツだっ  
ていやがる。

悩み……ソイツは人を変えちまう何かがある。

人を変える悩み……ンじゃア、オレはどうなんだろうか

「は、早川悠……なんで貴方がここにいるのよっ!」

「……あッ ?」

右を振り向くと、長い黒髪の少女とピンクのガキがそこには居やが  
った。

2人ともどこかで見ることがあるツラだ。いや、忘れるハズがねエ  
よなア。

「もきゅ! ? さ、西園寺さんお知り合いなのですかっ! ?」

「い、嫌ってくらい知ってるわよ……なに、貴女も知り合いなのか  
しらっ。」

「な、仲間の仇なのです っ!」

「もしかして……貴女は特異点ってヤツかしら?」

「もきゅ? そ、それじゃあ西園寺さんは……ふえ、ど、どついつ  
ことなのですか! ?」

「事情は後で説明する。だから貴女の事情も後で聞くことにするわ」

「りよ、了解なのですっ！」

オレは二人のことを嫌ってくれエ知っている。

一人は西園寺雪乃。あの野郎……佐井学園の生徒だったハズだが、なんでここに居やがるんだ？

もう一人は名前は知らんが、オレと戦ったアルファ隊のそこそこ強いガキだ。

あのガキもこの生徒だったのか。チツ、これまた面倒な連中に遭遇しちまった。

2人は戦意丸出しだ。要するにオレと戦うつもりらしい。

勝てねエってわかってんのに……全く、あのおチビコンビは。

「なによこれ？ く、暮葉……どういことなのよ？」

「い、伊吹さん逃げてください！」

「えっ？ なんで？」

「いいから早く逃げて欲しいのです！ その人は 連続殺人犯なのですっ！」

「えっ！？ も、もしかしてそれって……あんたや圭介絡みの問題の事？」

「大体そんな感じなのです。それより危険なので早く逃げてくださいつ！」

国宗は後退りはして距離をとったものの、決してこの場から逃げようとはしなかった。

あの野郎、あの様子だとちょっとは何かの事情を知っているらしい。



つと言つことは、ここで事情でも把握するつもりなのか。  
まあ国宗のことはともかく、目の前の2人をどうにかしねえとな。

「早川悠……どうして貴方が文化祭に来ているのかしら？」

「目的はなんなのですか！？ とにかく……早くここから立ち去って欲しいのです！」

ハッ、よっぽどオレを恨んでやがるらしいな。

まあ当然と言えば当然だ。オレのやった事を考えればそんなのは当たり前。

今更 オレのそんな汚点を綺麗サツパリ流すことは出来ねえ。

つたく、学園を辞める為とは言え……あの件のせいでオレは永遠の悪となった。

最も……その前から学園の指示で汚れ仕事をしていたがなア。

そんな汚れ仕事をさせる学園から逃げ出す為にやった事が また  
汚れ仕事であった。

つたく、なんなんですかアオレの人生ってヤツは？

「オマエらには関係のねえ事だ。悪イが構っている時間はねエ」

コイツらの相手よりも あの遊んでやがるミネット達を探さねえ  
と。

「何をしようとしているかはわからないけど……また汚れ仕事のよ  
うねっ」

「させないのです……これ以上、貴方の行為で誰かを不幸には絶対に  
させないのですっ！」

ハア……全く、コイツらはどうやらオレと戦うつもりらしい。勘弁しやがれよ。こっちは能力を15分しか使えねエんだ。

確かにコイツらは簡単に倒せる相手のハズだ。

だが　アイツらの思いこみのせいで起る戦いで、無駄に超能力を使いたくはねエんだ。

増してやここは学校。あまりド派手に戦えばオレ達の行為がバレちまう。

そうなると流石にまずい。超能力が公になったら　それこそオレの生存にも関わる問題だ。

……　チツ、仕方ねえなア……　戦いの回避は無理そうだ。だったらやることは一つ。

「お片付けだ　　2人まとめて3分で終わらせてやる」

## 第112話 2人に迫る危機(?) (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「なんか、俺が本来の主人公なのに俺のほうが出番少ない……」

凧紗「しかも、藤島はボコられて終わりなのに……なんだろう、早川はカッコいい終わり方だったな」

圭介「ちくしょう、俺が真主人公なのに何この扱い!？」

暮葉「けーすけ様が勝手に一目惚れなんかするからなのです……」  
ボソッ

伊吹「自業自得よ、ばか圭介……っ」ボソッ

圭介「なんか、御尤もな事を言われた気がする……」

## 第113話 仲間だから

ぐ、くそ。なんで俺は白藤に攻撃されたんだ？

ていうかコレ、どう考えても普通の攻撃じゃない。

白藤は鉄球を投げつけてきた……らしいが、あの細腕でこんな鉄球を投げられるとは思えない。

そもそも、この鉄球は一体どこから持ってきたものなんだ？

ていうか白藤って一体何者なんだよ

！

「白藤……お前一体誰なんだ！ 普通の人間じゃねえのは今のでわかったぞ！」

すると白藤はこんなときであるにも関わらず、携帯に文字を打ち込みそれを俺に見せてきたのだ。

やれやれ、こんな時まで会話手段が携帯とは……白藤、果たして彼女は喋れるのか？

って、そんなことより携帯の画面を見ないと。そこに彼女の言いたい事が書かれているんだ。

### 【魔術師】

画面に表示されているその一言。そう、その一言が重要なのだ。

魔術師。確かに彼女の画面にはそう表示されていた。

魔術師と名乗り、なおかつ俺を襲う存在。

それはつまり サヴィエト亡命政府の魔法使いということである。つと、言うことは白藤の正体は

「お前……まさかサヴィエトの魔法使いなのか!？」

白藤はコクリと首を縦に振る。

マジかよ……うう、こりゃかなり胸が痛い失恋だよつ。

白藤がサヴィエトの魔法使いかよ……ああもう、どうすればいいんだ畜生！

とにかく 学校から一旦出よう。

こんな所で暴れられちゃあ下手すりゃ周りに被害が出る。

「へッ、悪いな！ 生憎俺もそう簡単にサヴィエトに捕まったりはしねえんだよ！」

そう言い放ち、俺は学校の外に向かって全力疾走を始める。

とにかく走れ。そして人目のない所まで行くんだ。

そうすれば 周りを気にせず白藤と話をすることができるハズだ。

ひたすら逃げる俺。当然、白藤は俺を追ってくる……ハズである。

しかし後方を確認すると誰もいない。白藤のヤツ……追い掛けてこないのか？

そんなことを考えているうちに、俺はいつのまにか学校の外の道路を走っていたのだ。

とりあえずどうしよう。その工事現場にでも入ってみるか。

まだ建設中のビル。鉄骨だけの状態のビルの下に俺は入りこむ。

白藤は……来てないな。やっぱりアイツ追い掛けてこないんじゃないや

「う、はア ツ！？」

その時 こめかみに激しい衝撃を感じた。

痛い。オマケに頭がグラグラする。視界も脳が揺さぶられたせいかクラクラしている。

いや、一瞬だが若干ぼやけたような気もするぞ。

この感じはまさか 白藤の攻撃か！

「ッ！」

「……………」

衝動的に振り返ると、そこには相変わらず無表情の白藤が佇んでいた。

とても、暴力を振るうとは思えない少女の姿。

しかし実際は魔法を容赦なく放つ サヴィエトの魔法使いである。え〜っと。とりあえず人目のない所まで逃げたはいいが……この後どうすればいい？

ちつくしよう。暮葉のヤツ……こんな時にどこで何してやがるんだよ！

「なんで……なんでてめえはこんな事をするんだよ！」

「……………」

「俺を捕えて何の得がある！？ 確かに俺はアレクサンドルの子孫つぼくて、てめえらにとっては迷惑な存在なのかもしれねえ。けど、俺はてめえらを止めるような力なんてどこにもねえんだ！ そんな無害なヤツを襲って一体てめえらの何の特になるってんだよ！」

【わからない。でも命令されて動いているだけ】

白藤が携帯に打ち込んだその一言。俺はその一言で思わずカッとなってしまう。

「ぶざけんじゃねえよ……てめえはサヴィエトの言いなりかよ」

「……………」

無言の白藤を俺はじっと見つめる。

いや、さっきよりも厳しく睨みつけるように　俺は白藤の事を真っ直ぐ見ていた。

「よくわかりもしねえで、人の事を意図的に傷つけようとしてんじやねえよ!」

【ごめんなさい。でも命令には逆らえない。逆らったら私が殺される】

「さ、逆らったら殺される…………?」

【サヴィエトで裏切りは許されない。たとえ、無理やり入れられた者でも】

「無理やり?　もしかしてお前…………無理やり魔法使いにされたのか?」

再びうん、と頷く白藤。

そうか…………そうだよな。白藤が自らオカルトの道に走るとは思えねえ。

でも、無理やりだったら反抗すればいいじゃねえかよ。

「お前には力があるじゃねえか。その力があればサヴィエトと違って戦えるじゃねえか」

【無理、あなたは幹部の力をわかっていない】

「それでもだ。そんな理由があるからって、お前は俺を殺したいのか？」

【殺さない。身柄を拘束するだけ】

拘束って言われてもね、普通の人間さんは嫌な予感しかしないんだよ。

第一、ドMでもないのに拘束されて喜べるわけがねえ。

それに　そんな事になったら青山さんに悪いだろ。

俺はこの後、青山さんと一緒に写真撮影という、超忙しい仕事をしなくちゃいけないんだ。

だから　サヴィエトの魔法使いに捕まるわけにはいかねえ！

「絶対に捕まらない。お前のこともその場所から救い出す」

【無理、運命には逆らえない】

「だったら逆らえるような　そんな状況を作ってやる！」

いつ命を落とすかわからない。

そんな危ない場所に白藤コイツをいさせたくない。

白藤コイツをその場所から救ってやりたい。

その気持ちだけが俺の脳や心を支配していた。

全く……失恋はちっと痛かったけどさ、それでも白藤は同じクラスの仲間じゃねえか。

その事実だけで十分だ。クラスメイトってだけで俺にとっては十分すぎる。

それだけでもう　助ける理由は出来ているんだから！

【私は上に殺されたくない。殺されたくないから圭介に抵抗するよ



？】

け、圭介って下の名前で……って、今はそんなことを気にしている場合ではない。

やっぱり白藤は怖がっているようだ。怖いから上の言う通りに動く。そうすれば　自分は殺されずに助かるかもしれないから。

だからこそ俺の救いの手を拒み、上の命令を果たすために抵抗をする。

「いいぜ、だったらその抵抗を　打ち破ってやる！」

そして白藤に近づき、その場所から解放してやる　　！

「……ッ！」

白藤が両手を前に突き出すと、掌の前方に突然鉄球が現れた。

どつという魔法かはサッパリわからねえ。

こつという時に魔法の専門家が不在だからな。

全く暮葉のヤツ。お前がいないせいか、あの魔法が何なのかサッパリわからんぞ！

まあ……あくまで俺の推測だが、あの魔法はおそらく

「……ッッッ！」

白藤の鉄球は作り出したもの

つと言うよりはどつかからか呼び出し、瞬時に己の手元に持ってきた。まさにそんな感じである。もしかしてあの魔法、瞬間移動テレポルトの一種か？さらに白藤は何らかの力で鉄球を加速させ、まるで砲弾のようにソレを勢いよく放ったのだ。

そんなものを避けられるはずもなく　　俺は鉄球を腹にマトモに喰ら

ってしまった。

ゴキゴキ、と嫌な音が響き、口の中に再び苦い味が広がってゆく。

「はっ！」

白藤からの第二撃。今度は複数のものが向かって飛んでくる。

その全ては鉄球という訳ではなく、中には刃物や金属バットまでもが混じっていた。

オイオイ 明らかに命中したら死ぬものまであるぞ。

白藤のヤツ……もしかして、俺の身体が丈夫だって知ってるのか？ どう考えても彼女の攻撃は、それが前提でやっているとしたか思えない。

だって普通の人に放つ攻撃にしては あまりにも殺傷力が高すぎる！

「う！ ぐっ！ く、そ う、あぁっ！」

「……………」

辛うじて白藤の攻撃を避けていく俺。

地面に寝そべって転がったり、ゴキブリの用に這ったり……。

もう、攻撃を避ける為の手段は選ばなかった。

どれほど惨めな姿であろうと、攻撃は避けたほうがいいに決まっている。

「ぐ、くそ……………ッ！ これじゃキリがねえ！」

「……………」

白藤の攻撃を散々避けまくった拳句の一言。

どうしよう、ホントにこのままだと際限のない消耗戦だぞ。

とにかくさっさと倒さないと 遅れたり行けなかったりしたら、青山さんに悪いじゃねえか！

送れない為には戦いをさっさと終わらせるしかない。でも、どうやって？

……やれやれ、いちいち考えるのが面倒になった。こうなったら手段は一つしかねえ

「正面突破あるのみ ！」

「……っ？」

白藤は一瞬、とても驚いた表情を見せた……気がした。

正面突破という選択が予想外だったのだろう。

だが、予想の斜め上に行くことをしなければ、戦いに勝つことは絶対にできない！

「う、オオオオオオオオオツ！」

雄叫びを上げながら、必死に白藤へと迫る俺。

だが そんな俺を白藤は受け入れようとしなない。

サヴィエト上層部が怖い為に命令に従い、白藤は俺に向かって再び魔法を使ってきた。

今度は30個はあるであろう鉄球だ。ってかまた鉄球かよ本日何回目だよ！

「……ツツツ！」

「オ、オオオオオオオツ！」

俺は鉄球を一つずつ避けていく。最も、俺の反射神経なんて多少他人よりいい程度。

そんな程度で全てを避けれるハズもなく、当然鉄球が被弾することもあった。

ゴン！という鈍い音に激しい衝撃。

当然被弾すれば被弾箇所が痛むが、そんなものは走っているうちにすぐに消えていった。

俺はとにかく突き進み、白藤へと徐々に迫っていく。

そして 最後の一球。

「ッ！」

しっかりと握った左拳を振るった。利き手ではない左手。

それは、自分でもわかるくらい威力が落ちていた。

キレもなければスピードもない。左拳では右拳と比べてやはり見劣りする速度しか出ない。

それでも この鉄球を弾くには十分であった。

狙い通り、俺は最後の一球に拳を打ち込む。

すると、鉄球は僅かに軌道を逸らし、俺の顔面ギリギリ真横を通り過ぎていった。

左拳は鉄球の軌道を逸らし、自分の顔面を守る為に放ったものだ  
！

「う、おおおおおおおっ！」

「ッ！」

今度は全ての力を注いだ右拳を 目の前の白藤の顔面へ！

「……………ッ？」

……放つことは無く、彼女の顔面ギリギリで拳は停止している。

「……心配するな。ちゃんと寸止めしたから」

【……私の、負け】

白藤はポケットから携帯を取り出し、文字を打ち込んでそれを俺に見せてきた。

そこには確かに 降参を意味する分が書かれていた。

その分を見た瞬間、俺は微かに表情を和らげ彼女を見つめる。

「降参したか？」

【うん】

「もう白藤は俺を襲ったりしないか？」

【……わからない。上が怖い】

「そうか……大丈夫だ。お前を守るやつならいっばいいるぞ？」

「……？」

いまいちよくわからない、という顔を白藤はしている。

そつだな……とりあえず、あんまり問題にならない程度に教えておこう。

一応白藤もサヴィエト亡命政府の人間だ。詳しい事を教えるのは危険だろう。

だから、教えるにしてもかなり大雑把に教えるだけだ。

「お、俺の友達強いヤツが多いからな。うん、魔法使いなんてイチコロだろっ!」

「……………」

「それにほら、俺だって白藤に勝ったろ？ 多少の魔法使いならなんとかしてみせる」

「……………」

「だから大丈夫だ。白藤のことはみんなで守る」

「なにも白藤一人で悩む必要なんかないんだ。」

「何故なら 仲間がそこにいっぱいいるからである。」

【……………頼ってもいい?】

「ああ。俺から仲間にもちゃんと事情は説明する。だから最初の一步としてさ 友達になろうぜ」

【……………ありがとう】

「ありがとう。」

「今の俺にはその一言で十分だった。」

「それを聞けるだけで 十分俺は幸せに思えた。」

「やっぱり、こっぴつのも悪くはないよな。まあ、流石に戦いには疲れただけさ。」

「それでもやっぱり幸せだ。ありがとう、本当にいい言葉である。」

そして、この日から白藤は俺達の仲間になった。

### 第113話 仲間だから(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

大吾「なんか最後無理やりシメたな」

重原「まあ毎回の事じゃないかい？」

圭介「ああ疲れた……っ」

大吾「お疲れさんっ」

重原「圭介もよく戦うキャラだよな」

圭介「うっせ黙れ! てめえら俺を置いてフィギュア鑑賞に行きやがって……こっちは鉄球打ち込まれるは、いろいろ大変だったんだぞ!?!」

大吾「あっ! あそこの休憩コーナーにけ おんの原作がつ!?!」

重原「おお、それは行かないといけないね!」

圭介「おいコラッ! お前ら勝手に逃げるな!」



## 第114話 最強の超能力者

相手は2人。一人は氷やら念力を使う超能力者。もう一人はオレと同じ風系統の能力を使う……正確に言えば魔法使  
いってヤツだ。

西園寺の奴はあまり警戒する必要はねえだろう。問題はあつちのピンクのチビだ。あの野郎は確か、オレの弱点を知っているハズだ。

なら話は早エ……最初に倒すのはあのピンクのチビのほうだ。制限時間は15分。何らかの不測のトラブルが発生する可能性を考えれば、あまりコイツらとの戦闘に時間を掛けたくはない。能力使用は最低限で済ます必要がある。

「それでは開戦なのですっ！」

「今度は貴方を……倒す」

ピンクのチビは背中に隠していた刀を抜き、西園寺は巨大な氷柱を自分の左右に作り出す。

西園寺はオレと同じ5本指の一人。アイツは吹雪ブリザードサイコ念力という能力を使い、なんでも水蒸気などの僅かな水分から氷や雪を発生させ、念力によってそれらを自在に操れるらしい。

オレも左手で変換機のスイッチを押した。電子音と共に何か復活したような気がする。

何の問題もなく演算能力が回復した。オレに迫ってくるのは砲弾並の氷柱。ピンクの少女の速度もそれに負けぬほど速かった。

足の下から強烈な風を吹かせ、足元から砂埃を立たせ、ロケットのように一気に飛び上がる。

瞬時にしてオレは上空20m、あの2人を十分に見下せる位置に到達した。

「ぎゃっははっ！」

虐殺的な笑い声を上げる。

オレはそのまま風の力を利用して2人の所まで、ロケット推進の戦闘機のように、素早く一直線に突き進んでみせた。

「……ッ！」

西園寺は能力を使い、あくまで推測だが50cmはあるであろう氷の装甲作り出す。

それでオレの攻撃を防ぐ、あるいは防げなくとも逃げる為の時間を稼ぐつもりなのだろう。

だがなア、そんなことはとつくの昔に予想済みだ。

オレは急激に進路を右に変更、数十メートル先にあった建物を足場とし、その壁を蹴るように再び暴風によって前方に突き進んだ。あまりに強すぎる風の力は校舎の壁を粉碎し、まるで何かが激しく激突したかのような円形の穴を開けてしまった。まア、オレがやったとは思われねえだろう。

普通の人間にはこんな事をする力がねエからなア。

「あっははぎゃはあはアッ！」

「西園寺さん左ですっ！」

「っ!？」

チッ、オレの突撃ナツクルも西園寺に寸前に避けられちまいやがっ

た。

流石は五本指ってかア。反射神経はそこそこいいみたいじゃねえか。つたく、オレの馬鹿っちゃあ馬鹿だよなあ。

3分で片付けるって言ったのに、不得意な近接戦闘を自ら挑んじまっただんだモンなア。

「やっぱり速いわね貴方……っ！」

「相変わらずの笑い声なのですっ！」

オレはその言葉を聞くと、一旦変換機のスイッチを切った。

こういう何もしねえ時は、魔力節約の為に能力使用モードを切っておくんだ。

そうでもしねえと、15分って時間はあつと言う間に経ってしまう。オレはすぐに戦闘不能になる。そうなれば、確実にあの2人に殺されるだろう。

オレはこの場で死ぬわけにはいかねえ。死ねばあのクソガキ共を探すことだってできねえ。

何よりオレは　とりあえずクソガキ共の居場所を守らなきゃいけないんだよ。

「チツ、オマエらも相変わらず思考回路が単純じゃねえか。ちつたア人様がほんの僅かでも変わったとかって思ったりしねえのかア？」

「ええ、思わないわ……貴方の人格で変われるとは思えないわ！」

「拙者は変わろうが変わらないが関係ありません。貴方は拙者の仲間の仇なのですっ！」

「……ハア、哀れだなアオマエら。それって本気で言ってるのかア

？ 確かにオレはそのピンクの仲間をブツ殺したし、今更どオに  
かなるようなモンだとも思ってたねエ。オレが豹変することもねエ」  
睨みを利かせながらオレは語り続ける。

西園寺もピンクも黙っては聞かず、今にもオレを攻撃しそうな態勢  
で聞いていた。

そんな中、オレは「だがな」と言葉を切って、

「オレにはオレの道があんだよ。オマエらにそれを邪魔する権利な  
んてねエだろオがよ……あア!？」

叫んだ後、オレはもう一度スイッチを入れ、ドン!とこの足で大地  
を激しく踏みつけた。

その勢いのせい、まるで地震でもあったかのような振動が発生す  
る。

当然、オレの能力によるものだ。地面に放射状の亀裂が走りまわる。  
衝撃は数十メートル先の校舎にまで届き、ギシギシと音を建てた校  
舎から破片が転がり、こちら辺一帯全ての窓ガラスが無残にも砕け  
散り、無数の破片がオレの吹かした風によって、くるくると宙で回  
りながら浮いていた。

「もきゅ!? な、なんなのですかこれは……ッ!？」

「う、あ そんな、ここまですごい事を ……!？」

彼女達は驚きを隠せていない。いや、驚きを隠せていねえのは彼女  
達だけではない。

校舎にいた全ての人間が叫び、喚き、そしてガキンちょは泣き声を  
上げていた。

だが これで彼女達が降参するとは思えない。

だからオレは　もう一度足踏みを行う。足元で発生した僅かな風を操作し、それを風速169mのF6クラスの巨大竜巻レベルにまで成長させる。

あらゆるものを破壊し尽くすF6の竜巻。現実じゃあ観測された事がないらしいそれは、周囲のあらゆるものを吸い込みつつ、一直線に彼女達の所へと突き進む。

「も、きゅ　っ！」

「ま、まずいわ　　ッ！」

流石に殺すのはまずいか……。

そう思ったオレはギリギリの所で竜巻を能力で掻き消し、代わりにオレがこの足で進みだす。

ガラスの破片やベンチの残骸、その他あらゆる物の残骸の雨が降り注ぐ。

オレは残骸に触れた。だが、傷一つ付けずに地獄を突破してみせる。通常、高速移動中に暴風の膜を張り巡らす事はできない。

だが　普通に移動しながらなら造作もない事だ。増してや彼女達も降り注ぐ残骸から身を守るので精一杯で、オレに反撃する余裕などは全くないのだ。

だからオレは杖を付き、破片を膜で反射しつつ彼女達に近付く事ができたのだ。

「あはぎやはは！　あぎやはっ！」

気付けばオレは彼女達の目前　たったの2mという至近距離に近づいていた。

この状況で彼女達が冷静に判断し、冷静に行動する事など不可能に近い。

西園寺は咄嗟に氷の装甲を作り、ピンクのヤツは刀を構えて防御態勢に入る。

だが 西園寺の装甲など全く気にもせず、ただ握り締めた右拳を素早く放ってみせた。

風力で加速させ、直撃の寸前に張り巡らす膜によって己の拳を守り そして放たれる一撃。

結果は言うまでもなく、装甲が粉碎されるだけである。

「オマエらにオレの道を塞ぐ事はできねエ！ 大人しくママの膝元にでも帰りやがれエ！」

叫び、両腕でダブルリアットを仕掛けようとした。

少女達はただ本能的に身を丸め、自分自身を守ろうとする。

さアて……死なねえように手加減しておかねえとなア

「う、オ！？」

しかし、腕が当たる寸前にオレは動きを止めてしまった。

いや、正確には止められたというのが正しいだろう。

突然俺は 何者かに襟を掴まれてしまったのだ。

「待って悠！ 木下先輩を倒さないでっ！」

「ゆーちゃんダメなの！ これ以上暴れたらボク達異端者が公になっちゃうー！」

なんだこのクソガキ共。消えたと思ったら突然俺らの間に割って入ってきやがった。

つーかりーネの野郎、ゆーちゃんってナメてんのかア？

「もきゅ!? え……み、ミネットさん!? どうしてここに居るのですか!?!」

「なに、この人達は知り合いなのかしら?」

「おい、オマエらどこで遊んでたんだ? オマエら探してたらコイツらに絡まれたんだけど?」

「リーネさんと2人で演劇見てたんだよ!」

「そうなの。ロミオとジュリエットだったかな……面白かったの!」

「チツ……ああ!?!」

オレはクソガキ2人を睨みつける。

「つたく、散々探してオチがこれとは……ふざけんじゃねえぞ。まあいい。これでクソガキが見つかったんだからな。」

「ミネットさん。あの、早川悠とどういう関係なのですか……?」

「木下先輩! 悠はもう学園と関係がありません。汚れ仕事なんかもやってません。例え仇だとしても悠はもうカタギなんです。だからこれ以上の破壊を防ぐためにも 悠に喧嘩を売らないでください!」

「もきゅ? が、学園とは関係がない?」

「早川悠。一体どういふことなのかしら?」

西園寺が腕を組み、露骨に不機嫌そうな表情を見せながら訊いてき

た。

「まったく。人に物を訪ねる時の態度知らねエのかコイツは。」

「オマエ見たいに学園を辞めたに決まってるだろオガ」

「そ、それじゃあどうして……貴方はどうしてその事を最初に言わなかったのかしら？」

「あん　？　聞く耳持たなかったのはどっちだ？　大体喧嘩を売ったのはオマエらだろオガ」

「まったく……面倒くせエ。説明する気も失せるぜこの三下が。」

「とにかく木下先輩もそこのお姉さんも、今は悠になにもしないで欲しいです」

「もきゅ、で……ですけどっ」

「そうよ。だってその人は……」

「……チツ、行くぞ」

ピンクのチビと西園寺の言葉の後、オレは2人にそう言い放つ。

そしてオレは後ろを向き、杖をついてゆっくりと歩き出した。

もうリハビリは十分だろう。第一ダルい、さっさと帰ってゴロゴロでもしたいモンだ。

それに　西園寺とピンクはオレの顔を見ねエほづが、ずっと幸せだろう。

「ちょっと待ちなさい！　早川悠、貴方の目的は……？」



オレは西園寺のその問いに、

「ハッ、目的はもう果たした……これ以上用はねエ」

それだけを言い放ち、再び足を動かし前へと歩き始める。

オレの背後には「待ってよ悠！」などと、ミネツトやリーネが騒がしく追い掛けてきやがる。

うるせエなア……誰を探していたせいでコイツらと遭遇し、こんな戦闘になったと思ってるんだ？

まあいいやどうでも。能力使用モードは11分と半分くらいしか持たない。

こんな状況で無駄に超能力は使いたくねえな……クソツタレ。

「もきゅ……ど、どうということなのでしょう？」

「わからないわね……早川悠が学園を辞めたって……っ」

背後から、ピンクのチビと西園寺、

「さ、サツパリ状況がわからない……なんなのこれ？」

そして国宗の声が聞こえた　　ような気がした。

## 第114話 最強の超能力者（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

あかり「なんかカオスなことになってる!？」

千早「ほんとだね……その、校舎壊れちゃってるね」

あかり「こ、これで文化祭が中止になったらあたい達の出番は!？」

千早「わ、わからないよそんなの……っ!」

あかり「このままだとあたい達……文化祭編で出番がないんじゃない?」

浅間部長「まさにボクの妹、アツカリくん化だね!」

あかり「うるさい! バカ兄貴くたばれよな!」

浅間部長「ぐ、はあ!？」

## 第115話 仲直り

その後、俺は白藤と一緒に学校に戻ってきた。さてさて、今から文化祭を楽しむとしようか。

今日に限って暮葉を見かけねえし、伊吹とは相変わらず気まずくて話辛い。

野郎共は見つからんし、小坂は多分暮葉と一緒に文化祭を回ろうし、明智や生駒は今忙しいハズだ。

だったらいっそ、白藤と一緒に文化祭を回ろう。

なんとたつて白藤は友達だからな。友達として最初の遊びは文化祭を回る事だ

！

「……………」

「……………」

しかし、俺と白藤は学校に戻ってから……………うん、思わず絶句してしまっただ。

確かに人は多いものの他校生徒が全くおらず、それどころか警察車両の車列が停車していた。

さらに、なんとなく校舎が壊れているような気もするぜ。

「……………な、なんすかコレ？」

「あつ！ いたいた圭介だっ！」

「せ、先輩……………っ！」

いつも通りのあかりと、カメラを掲げた青山さんが俺の所に駆け付

けてきた。

2人とも何故か俺の顔を見るや、安堵の表情を見せてきたのだ。

「あかりに青山さん？」

「よかつたあ〜！ 圭介が無事であたいは安心だぞっ！」

「先輩……その、生きていて本当によかつたです……っ」

「あのさ2人とも。俺達がない間に何があつたの？」

「じ、実はな」

口下手な青山さんではなく、お喋り大好きで口先が立派なあかりが説明を始めた。

そこで俺と白藤は驚くべき事実を知つたのだ。

何やら激しい揺れを感じ、巨大な竜巻が初芝高校の奥のほうに発生し、もう文化祭の会場や校舎そのものが滅茶苦茶になってしまったらしいのだ。

幸い死者は出なかつたものの、初芝の学生や一般人の負傷者は大勢いたらしいのだ。

そんな大事件が発生した結果

「ぶ、文化祭が中止 ですよ？」

「は、はい……その、先輩と回れなくて残念ですけど……っ」

「被害があまりに多すぎて文化祭所じゃないんだ。それくらいわかれよな！」

「う、ウソだ……俺、まだロクにエンジョイしてなかったのに……  
ああもう、なんたる不幸！」

写真部の活動だってまだしていないし、第一白藤と文化祭を回ると  
いう予定が……。

ていうか折角3日もかけて準備したのに　苦勞して設営した文化  
祭会場が！

もうなんなのコレ。女装させられるし、大いなる誤解から暮葉と伊  
吹に暴行されたし、白藤と戦う羽目になっちまったし、そしてトド  
メに全ての苦勞が水の泡って……さ、最悪の文化祭じゃ！

「俺の苦勞返せバカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオツ！」

「せ、先輩……し、しっかりしてください……っ！」

「落ち付けよな圭介っ！　明日は臨時休校でその翌日から夏休みな  
んだぞ？　ほ、ほら。得したと思えば幸せに感じるだろっ！？」

【圭介、泣いちゃダメ】

「うああああああああ！　ちくしょう色々と不運すぎるぞクソッ  
タレエエエツ！」

全ての苦勞が水の泡となり、泣き叫んだ後の俺は　もう、放心状  
態であった。

その後、通常より一日早く一学期が終了。俺と暮葉と葵の三人で仲  
良く下校中であった。

俺が中心に立って右に暮葉、左に葵が並んで歩いている。

時々周囲の「リア充死ね」的な視線が痛い、残念ながら俺はリア充ではない。

右にいる暮葉は俺の友達であり、左にいる葵は単なる妹。

そう　俺には恋人という存在がないのである。

白藤に対する恋心も、あんな騒動のせいかいつの間にか消えているし……なんたる悲劇。

「はあ……」

「お兄ちゃん元気出そうよ。明日から夏休みなんだよ」

「そうですね。ほら、けーすけ様が大好きなお休みなのですよ！？」

「うつせ黙れ！　こちら折角の努力が水の泡になって色々アレな状態なんです！　ああもう、女装とか誤解とか魔ほ……げぶんげぶん、どこぞのヤツに喧嘩売られたりとか！　なんなんですか今年の俺のトンデモ日常は！？」

「うわあ、葵の知らない所でお兄ちゃんすっごい苦労してるね……」

「けーすけ様も色々大変なのですわっ」

うるせえ、そもそも誤解で俺をシバいたのはアンタじゃん。

そういえばサヴェイエトの魔法使いとの戦い。暮葉に一応報告したほうがいいのかな？

でもなあ、白藤は友達だし……もう害はないっばいから別にいいや。そんなことよりも、今の俺にはとつても気になる事があるんだ。

「ところで何で学校があんな事になったんだ？」

「それが原因不明なんだよ？」

「えっ？ げ、原因不明？」

「うん。人災か天災かすらもわからないらしいよ？」

なんだそのワケのわからん理由。

つて、わからないからワケのわからん理由になってるんだ。

それにしても、どんな事になったらあんな事態に……。

まさか……暮葉が魔法使いか何かと戦ったとか……？

ハハッ、流石にそれはないか。

仮にそうだとしたら相手はどんなヤツだよ。

こんな滅茶苦茶な状況に出来るヤツだぜ、絶対普通じゃねえよ……。

「……………」

その時、三人の間について沈黙が走ってしまった。

まあ口々に話をしない俺のせいだが、やっぱり3人もいて沈黙状態だと気まずいもんだ。

へこみたいことはへこみたいが、やっぱりいつまでもコレじゃダメ  
つすよね。

仕方ない。そろそろ元気を出して話をしながら楽しく

「う、あ つー？」

「え……お兄ちゃん？」

「けーすけ様っ!？」

その時、何故か俺は胸倉を掴まれ引っ張られ　　気付けば暮葉達と離れていたのだ。

あまりにもいきなりすぎるこの事態。

俺はよくわからないまま、何者かによって胸倉を引っ張られ続ける。

「おっしやあ圭介ゲットだわ！　わはははーっ！」

「ちょ、ため、苦しいッ！　ってお前は　！？」

俺を引っ張るソイツの正体がわかった時には　　もう俺は近所の公園にご案内されていた。

そして　ボロ雑巾のようになった俺は、公園のベンチで首筋をいじっていた。

最初に引っ張られた時の影響か、ちょっと首筋に違和感があるんだが……。

ああ、ちつくしょう。いきなり引っ張るくらいなら一言説明しろよ。

「い、つつ……っ」

首筋を押さえ、ゴキゴキと首を動かし続けていると、

「あ、圭介っ。よかったわ…元気そうでっ」

「あのなあ……引っ張ってきたのはどこのどいつだよっ！」

俺はいきなり俺を引っ張り、公園に案内しやがった犯人　　伊吹に向かってそう言い放つ。



「……やっぱり、思い切って行動するものね。これくらい大胆になるとむしろ話せるわね……っ」

「あ？ な、何言ってるんだ？」

伊吹が何か呟いているが、あまりにも小声すぎるせいで全く聞きとれない。

言っておくが俺は耳だけはいいほうだ。小学生の頃はそりや地獄耳とまで言われた事がある。

伊吹のさっきの呟きは、そんな俺でさえ聞きとれない　とんでもなく小さな声であった。

「ふえ……っ！？　な、なにも言ってるんかないわよっ！」

「どうしたんだ？　顔赤いぞ？」

「だ、だからその……なんでもない！　なんでもないから心配する必要ないわよ！」

ホントに大丈夫なんだろうか。伊吹の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

コイツ……もしかして熱でもあるんじゃないだろうか？

いやいやそれは考えにくい。だってあれだけ元気に走っていたじゃねえか。

熱があつたらあんなに走れないだろ。じゃあ、なんで伊吹の顔が赤いんだよ？

「はあ……それで何の用なんだ？」

「え、えつと……それはその……っつっ」

「……あ？」

何故そこで俯いて黙っちゃうんだろっか。そんなに言いづらい事を  
言いに来たのか？

と思った。

「い、ごめんなさい……っ」

「え？」

刹那、俺の目の前には深々と頭を下げる伊吹の姿。

言われた「ごめんなさい」という一言……俺は謝られたのか？

え、でもなんで。伊吹って俺になにかやったっけか？

むしろ伊吹になんかやったのは俺。だから伊吹と今まで気まずい状  
態になっていて……え？

「と、とりあえず頭上げろよ。お前らしくねえぞ？」

「……圭介、あんた怒ってないの？」

「な、なんでだよ？」

「私、その……今まで圭介のこと無視してたのよ？ 圭介と視線す  
ら合わせなかったのよ？」

「……………」

ひよ、ひよっとして伊吹……そのことをずっと気にしていたっての

か？

それで伊吹から謝って　　ああ、元はと言えばまた俺の軽率な言葉のせいだったのに。

ホント……俺ってば最低だよ。それでまた伊吹をここまで傷つけたんだ。

「お、怒るわけないだろ？　むしろその……俺のほうこそごめん！」

「っ！　な、なんであんたが謝んのよ……っ？」

「元々こうなつたのは俺が軽率な事を言ったせいだ。ほんと、ごめん！」

「……はあ、あんたこそ顔上げなさいよ」

その言葉で俺はさっきの伊吹と同じく、顔を上げて伊吹の顔を見つめる。

「……ッ！　あ、あんまりジロジロ見んなばか圭介っ！」

「す、すまん」

伊吹は恥ずかしそうに腕を組み、右を向いて視線を逸らしてしまつた。

えぐっと……いきなりどうしたんだ。

視線が合うくらいいつもあつた事なのに……。

「別に気にしてなんかいないわよ……わ、私が勝手にあんたの事を……その、あんたのことがっ」

「い、伊吹？」

彼女がその素直じゃない口から、何かを言いかけた、

「~~~~ツ！」

その時、伊吹の足が俺の横顔にめり込んできやがった。

右足による凄まじい廻し蹴り。華麗な一撃に俺は 吹っ飛ばされて地面に転がってしまった。

「ふお、ぐお……にやにすんれすか……っ」

「なんでもないわよっ！ とにかくその……もうあなたの事無視しないからっ！」

「え？」

「……ッ！」

そう言い残し、伊吹は逃げるように公園から出て行ってしまった。しかもちらつと見えた彼女の横顔。それはまるで、赤信号のように真っ赤に染まっていた。

ちくしょうすげえ一撃だ。結構効いたぜ今の……普通の人なら気絶モンだ。

まあ伊吹も、俺は大丈夫だってわかっててやったんだろっが……それでもなんなんだよ一体。

でももう俺の事は無視しないみたいだし……いいかの、コレで？

……こうして、波乱の文化祭は終わり ついに学生待望、夏休みが訪れた。

## 第115話 仲直り（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

作者「どうも、作者です！ またまた更新が遅れてもうしわけございません！」

圭介「全く何回目だよ！ 最近ほぼ毎日だろ！」

作者「すみません。いや、その〜最近疲労度が半端なくてですね、小説を書いていたら気付けば机の上で寝ていたりとか、全く記憶にないのにベットのの上にいたりとか……とにかくボロボロなんです」

伊吹「ちょ、あんた寝なさいよ!?!」

作者「いや、でも一日2度更新は続けたいと思いますので！ 今後ともよろしくお願いします！」

圭介「そのうちコイツ、睡眠不足で死ぬんじゃないか？」

## 第116話 / Let's Go Akihabara

今日は日曜日。本来明日は一日だけ学校があり、文化祭などの後片付けを行う予定……だった。

しかし、その必要はなくなってしまったのだ。

理由は簡単。原因不明の謎の何かによって校舎が破壊され、早急に修理せねば夏休み明けに間に合わないのだという。その為、早速学校の修理工事が行われる事になったので、学生たちは普段よりも一日……いや、今日は日曜日だし二日くらい多い夏休みを過ごせる事になった。

まあ、素直に喜ぶべきことだよね……うん、一日学校が潰れて夏休みが二日増えたんだし。

しかし夏休みが増えたからと言っても、俺の日常に何か変化があるわけではない。

「フォロワー増えねえ……」

大吾達とは夏コミ行ったり、そのうちカラオケやら何やらに行く予定があったりするんだが……。

こういふどうでもいい日に遊びたいとはお互い思わないし。

かと言ってねえ、女子を遊びに誘っても嫌な予感しかないしさ。

つと言っ訳で現在俺がやれる事は　そう、ネットサーフィンくらいしかないのだ。

「くそつ、大吾の垢はフォロワー7000超えてるつてのに。重原だつて5000だぞ？　なんで俺は450ちよつと超えた所で止まってるんだよっ！」

……つて、もちろん自分のせいではないんだけどね。

はあ、もっと面白い事つぶやかんと、いつまで経ってもフォロワー増えねえぞ。

「……………はあ」

どうしよう。ツイッターとかエロゲーくらいしかやる事がねえ…………。前年もそうだったが、今年もつまらん夏休みになるのかな。

ああ、きつとそうなるに違いない。所詮人生なんて急に変わらないものなんだからな。

「よし！ 天気もいいし、気晴らしに買い物にでも出かけようかな〜！」

それは思いつきであった。買い物…………そう、買い物だ。

これほど手っ取り早い暇潰しは無い。しかも買い物に行くたってただの買い物じゃないぞ？

今から秋葉原に行くんだ。アキバのア メイトで色々買ってやる。幸い俺にはお金がある。

ここ数ヶ月、魔法使いやら超能力者やら白陵の不良と戦ったり、仲のよかった幼馴染と気まずい関係になったり、その他部活やら突っ掛かってくる人達やらで…………お金を使う機会がなかったんだ。

一ヶ月5000円のお小遣い。4月から溜まりに溜まって出費はたつたの3000円。

17000円の収入+貯金の53000円。ふ…………フッフ、8万円。バイトもしていないのに8万円も溜まってるぞ！

「こ、こころで1万くらい使ったって問題ねえよな。うん、お金を使うことは社会にはいい事じゃねえかよ！」

よし、じゃあ早速秋葉原にレッツGOしようじゃねえか。

というわけで階段を降り、リビングを確認するとそこには親父とお袋、そして暮葉と葵がいる。

親父とお袋は今日まで休みで、明日から再び仕事で家を出るんだとか。

大変そうだよなあ……暮葉と葵は俺と同じく暇人のようだ。

だが、アイツらを連れていったら絶対面倒事に発展しちまうだろう。

「もきゅ？　けーすけ様っ、どこかお出かけされるのですか!？」

げっ、バレてしまった……まあ仕方ない、テキトーに誤魔化しておこう。

「だ、大吾とかとイベント行くだよ！　田村ゆ　りのな！」

「お兄ちゃん声優のイベントに興味あったっけ？」

「……と、とにかく行くの！　大吾がどうしても言うからな！」

「お兄ちゃん。田村ゆ　りのイベント、今日から一ヶ月後の話だよ？」

「……………」

しまった、忘れてたよ。葵もどっちかと言うとオタクな趣味持つてるって事をな。

しかも葵は結構声優が好きだったりで、そういうイベントは男女問わずに把握しているらしい。

ちくしょうミスった。もつと別のもので誤魔化しとけばよかった。

俺の妹がこんなにオタクなわけがない……うっっ。



「けーすけ様、結局どちらに行かれるのですか？」

「デートだったら葵が絶対に許さないよ！」

「……ふ、フフフ……とにかく大吾達と遊びに行くのは事実だ。ではさらばあああああっ！」

逃げる。

そう、それがこの場における最善の選択であろう。

俺はダッシュで玄関に向かい、孫 空もビビるような速度で靴を履き替え、ドアを突き破るような勢いで家の外へと飛び出した。

「もきゅ！？ け、けーすけ様っ！」

「お兄ちゃんが逃げたっ！」

「あああら、圭介さん元気が有り余ってるわねえ」

「うむ、やっぱり若いつて素晴らしいなあ」

案の定ヤツらは追ってこない。よかった、やっぱり逃げるという選択は正しかった。

フフフ……ハツハハハ！……家に帰るまでに言い訳考えねえとな。

それからしばらく、JR古宇坂から何十分だろうか。

蘇我駅から京葉線に乗り換え八丁堀まで行き、そこから日比谷線に乗り換え……。

ついに念願の秋葉原に到着したのであった。長かったぜ……普通列車の旅。

相変わらず秋葉原は賑わっているなあ。

電化製品を買いに来た老若男女関係ナシな人達、俺と同じ目的で来たアレな兄ちゃん達。

とにかく、秋葉原は色々で大勢の人々で溢れていた。

「つか、こんな所で知り合いに遭遇したりしねえよな？」

秋葉原で知り合いと遭遇＝恥をかくフラグなのは間違いないし。

だって、ねえ？秋葉原だよ秋葉原。

俺みたいなのがここに用がある＝絶対二次元モノ目当てって思われるじゃないか。

まあ実際そうなんだけどさ……しかし、一人秋葉原つても寂しいモンだよなあ。

「なあちよつとそこに兄ちゃん？」

さてと、メイトはどこだったっけなあ。

まあメイトじゃなくてもいいけどね。

この辺は色々いっぱいあるし、エロゲーだって普段はこの辺で買ってるしな。

そっこのほうの店を見たって別に変わりはない。

「オメーだよオメー！ その一本寝癖のアホ毛野郎っ！」

「無視してんじゃねえよ！」

「……あん？」

うげえ声が聞こえたので、振り返ると今風ヤンキーな2人組がニヤニヤと俺を見ている。

茶髪のロンゲに白いホストスーツの男と、もう一人はオールバックにサングラスに黒いヤンキージャージの男だ……はあ、なんでこんな連中が秋葉原に？

「ねえねえその兄ちゃんさ、俺らに金貸してくれねえ？」

「そーそーっ。ちっとパチンコで使いすぎちまってさあ、だから貸してくれよお」

「まっ、借りたらもう返さねえけどさ」

「ぎゃっははははは！ お前まじパネエな鬼すぎんだろ！ つーわけだからさ、兄ちゃん金貸してくれたらアブネーからさっさと帰りな？ ってか帰れ」

アホだ、相手にするのも面倒な程のアホが目の前にいる。

恰好は今風だがやる事は古風なモンだ。

やれやれ、今時こんな連中がいるんだなあ。

つてか警察さんは何やってんですか。

露骨にカツアゲされてるんだから、さっさと助けに来てくださいっての。

でもねえ、そんな都合よく警察さんが近くにいるとは思えないし。

やれやれ、こりゃ仕方ないな。

「はあ……鬱陶しいなあ」

「あ？ 今なんか言ったか？」

「別に？ とりあえずその路地で話でもしないか？」

「はあ！？ なにこいつ、喧嘩売っちゃってるわけ？」

「うわあ〜マジかよ。俺らに喧嘩売るとか100年早くね？」

「マジ早えよなあ！ お前もう死んだな、病院送りで済むといい方かもなあ」

ホントにうぜえ……やっぱり相手にすんのも嫌だなコイツら。でもなあ、こんなのにかかされるのも嫌だし……まっ、超法規的措置だな。

あんまり暮葉達に心配はかけたくないが、多分コイツらは危険の内には入らないだろう・

俺はため息をつきつつ、2人の背中を押して秋葉原の路地裏に入った。そして

ガシ！ボカ！

……狭き路地裏での一戦。結果は 俺の圧勝であった。

「…………弱っ…………」

大通りに出て俺はそう呟いた。アイツらとの戦いの素直な感想である。

なんだかその……可哀想になるくらい弱かった。

永渕みたいな強いヤツは嫌だし、魔法使いや超能力者はもっと面倒だけど……。

でも、あんまり弱い連中と喧嘩するのはもっと面倒くさい。

「とりあえず、気を取り直してメイトにでも行くかあ」

「けーすけ様っ！」

「は？」

「やっと追いつきました……けーすけ様っ、こんな所にいたのですねっ！」

「くくく、暮葉っ!?!」

振り返ると、何故か葵のお下がりの私服を着た暮葉が仁王立ちをしていた。

「けーすけ様！ 大吾さん達と遊ぶというのは……やっぱり嘘だったのですね！」

何故か笑顔の暮葉。嘘つき相手に何故笑顔なのか、そこがわからない。

いや、そろどころか何もかも全てがわからん。

「待て、サツパリわからん。なんでお前がここにいる？」

「怪しいので追いつけてきたのです！」

「ストーカーかよ!?!」

「お・に・い・ちゃ・んっ！」

「ッ!?!」

声が聞こえた瞬間、背筋が凍る。

どこからどう聞いても、お兄ちゃんLoveな小序の声。

小刻みに震えつつ恐る恐る振り返ると、背後で葵が恐ろしい笑みを浮かべていたのだ。

意味わからん。まさか葵も暮葉と一緒にストーカーしてきたのか？

「葵を置いていくなんてひどいよ！ お兄ちゃんだけお出かけなんてずるいよ！ 葵だってお兄ちゃんとラブラブデートしたかったのに！」

「あ、葵？ あのー、周りに注目されてるんですが……？」

「けーすけ様。お一人なんて寂しいでしょうし、拙者達もけーすけ様に同行するのです！」

お、俺の計画が……メイトに行った後、エロゲーを見に行くという俺の素晴らしい計画がっ！

ああもう 不良に絡まれるはストーカーされるわ！

夏休み初日。初っ端からもう、滅茶苦茶な事になる予感しかしなかった……。

だが こんな事はさらなる騒動の序章に過ぎなかった。

## 第116話 / Let's Go Akihabara (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ああ、嫌な予感しかしねえ……」

重原「いいじゃないかい。木下さんと葵ちゃんとの3Pも夢じゃないよ?」

圭介「そういう問題じゃねえよ！ 暮葉はともかく、葵の存在がもう嫌な予感しかしないんだよ!」

大吾「フフフ、圭介。ヨスガっちゃったら僕の親戚がいる鳥取に逃げるがいいさ」

圭介「妹との駆け落ちエンドなんて嫌だぞ俺っ!」

重原「っと、というのがツンデレシスコン兄貴、藤島圭介の意見でした」

圭介「ツンデレじゃねえしシスコンでもねえよ!」

## 第117話 / Akihabara date

夏休み初日、俺は一人秋葉原を満喫しようとしていた。だが、そう思っていた矢先に可愛い乱入者が現れたのだ。

木下暮葉と藤島葵。前者は俺を守る為に異世界からやってきたという魔法少女。

後者はお兄ちゃんLoveな俺の実の妹だ。

暮葉は見た目が幼く子供っぽい性格だが、戦闘力は神。ねーちゃんとも戦えそうなほどに高い。

葵はただの人間だが、もう俺に対する愛情が異常レベルで……正直、身の危険を感じます。

もちろん身の危険に晒されているのは葵ではなく、俺である。

しかも身の危険の意味とは生命の危機の事ではなく、貞操の危機という意味だ。

「えへへっ、お兄ちゃんの二の腕さいこお〜だよっ」

「っ!?! あああ、葵さんっ! ベタバタしすぎなのです! けーすけ様から離れてくださいっ!」

「暮葉の言う通りだぞ。ちょっとは離れるよ……」

「やだ! クーにゃんはどうして葵がお兄ちゃんに近づくと機嫌が悪いの? もしかしてお兄ちゃんの事がだいたいだーい好きなの?」

「もきゅ!? ち、違いますっ! けーすけ様はただの友達なのですっ!」



「へえー？　じゃあ葵がお兄ちゃんをいただきますしてもいいんだねっ！」

「そ、それは絶対にダメなのです！」

「へえ〜？　クーにゃん、ハッキリしないと葵は問答無用でお兄ちゃんをゲットしちゃうぞ！」

なんの会話をしていることやら……でも、これでわかったことだろう。

葵はリアルに俺を狙っているのだ。それはもう、発情期に突入した肉食獣のようにな。

実際、俺は葵に夜這いされた事がある。

未遂で済んだからよかつたが、もし未遂じゃなかったら……間違はなく駆け落ちEND確定だ。

そんなヨスガ的な展開望んじやいねえぜ。

俺は妹は好きだが……そんな展開は二次元だけで十分だぜ！

「あ、けーすけ様！　そういえばそろそろお昼の時間ですよ？」

「そういえば飯食ってねえな……よし、んじゃあそこの店でも入るか！」

突然、暮葉が昼食を食べようという話を振ってきた。

確かにまだ飯は食ってねえし、そろそろ腹も減ってきた頃だ。

俺は暮葉の案に乗り、早速とあるビルの4階にある飲食店へ向かう事にした。

「ちっ、葵はお兄ちゃんとホテルに行きたいのに……っ」

背後から恐ろしい言葉が聞こえた気がしたが……まあ、気にしないほうが幸せだろう。

こうして俺たち3人は秋葉原にある、とある飲食店に入店したのだが

その店はただの店ではなかった。普通の店にはないものが沢山あったんだ。

だって 知らずに入ったその店は

「おかえりなさいませ、ご主人様っ」

「……………」

俺、暮葉、葵の三人は思わず絶句してしまった。

目の前に展開する数名のブリティッシュなメイドさん達。

店にいる人の殆どが、見た目だけでオタクと分かるような人達。

そう 俺たちは間違えてメイド喫茶に入ってしまったのだ。

別にメイド喫茶が嫌ってわけじゃない。むしろ俺、メイドさんとかは大好きである。

だがな……メイド喫茶ってそこのファミレスより高いんだよ！

なんですか、おにぎり2個で400円って……詐欺か何かですかっ！

「ご主人様、こちらへどうぞっ」

「……………」

俺たちはメイドさんに誘導され、店内でも割と端のほうの席に座らされた。

そして、メニューを見て再び絶望するのだった。

すげえ。やっぱりメイド喫茶って値段高え……。

「はぁ………」

「け、けーすけ様っ。拙者達だっってお金は持つてるのですよ?」

「そうそう! 割り勘なんだからお兄ちゃんは安心していいんだよ  
!」

「……お前ら、ホントにいいヤツだな」

いい友達といい妹を持ったものだ、俺。

これでヤンデレの素質があったりブラコンだったりしなけりゃ、二人とも完璧なんだけどな。

「ご主人様、呼び方のオーダーはありますか?」

その時、一人のメイドが笑顔を浮かべて俺の席までやってきた。  
呼び方のオーダーねえ……うっん。

こういうの、どっかで見たとある気がするんだが。まあ気にしない  
ほうが幸せだろう。

「なんですかそれ?」

「私どもにどう呼ばれたいか、いろいろ選べるんですよ」

そっかあ。それじゃあお兄ちゃんとかなんとか様は却下だな。

暮葉や葵とキヤラが被るし。

そっちなあ……お兄ちゃんもなんとか様もNGなら……。

「ホントになんでもいいんですね？」

「ええ、もちろんですよ」

「それじゃあ……俺の事を“にいに”と呼んでもらおうかあ？」

「えっ？」

「そして、君の一人称は今日から“みゃー”にしてもらおうか？」

「ええっ？」

「さらに 今日から君は笑う時！ 必ず“にしししし”と笑いなさい！」

それが俺の 理想の妹像だ！

このメイドさんは、ご主人様<sup>オレ</sup>の言う事をなんでも聞くと言った。だったら読んでもらおうじゃないか。にいになってなあ。

なりきって貰おうじゃないか。俺の嫁 美也になあっ！  
つと、己の欲望に素直になっていた、

「お兄ちゃんっ！」

「いい加減にするのですけーすけ様っ！」

刹那、2人の少女の握られた拳が俺の顔面を狙う。

突き刺さる拳。それと同時に感じる激しい痛み。

そのあまりの痛みと、いきなりすぎる攻撃に俺は思わず、

「ぎゃああああっ！」

鬼もビビるような断末魔を上げてしまった。

「欲望丸出しなのですよけーすけ様っ！　メイドさんが困ってるじゃないですかっ！」

「葵はお兄ちゃんの妹なんだよ？　言ってくれば葵がそのキャラを演じるのにつ！」

「とにかく！　けーすけ様は一度深く反省するべきなのですっ！」

「す、しゅびみやしえんでひいたあ……………」

それにしても、葵の拳はともかく暮葉の拳が痛え。

暮葉のヤツ。思いつきりぶん殴りやがったな。

しかもアイツ、俺の身体が頑丈だって知ってやがるから……………はあ、とにかく不幸だ。

一方、メイドさんは俺たちを見守りつつ苦笑いを浮かべていた。

その後、メイド喫茶を出た俺たちは当初の予定通り、ア　メイトへ向かう事にした。

でも、当初の予定よりは物が買えないぞ。

なんとってメイド喫茶で使っちゃったからな。ちくしょう、やつぱメイド喫茶って高えよ。

「お兄ちゃん大丈夫？　大量出血した時の顔してるよ？」

「ああ……………ホントに血に近いものを大量に吐いたからな」

お金と言つ名の血を大量にな……フッフ。

「すみませんけーすけ様。拙者が普通のお店を選んでいれば……」

「気にすんな。腹は膨れたんだからさ……」

「もきゆう。ホントにごめんなさいなのです……っ」

「だから落ち込むなって。それに飯は上手かったしメイドさんも見れたんだからいいだろ？」

あ、いけね。メイドさんを見て嬉しいのは多分俺だけだな。

でも腹が膨れたのは事実だし、それにあのメイド喫茶の飯は意外と美味しかった。

サービスと飯の上手さを考えれば、あの高額も許せるかもしれない。

「お兄ちゃんは妹萌えでメイド萌えと……」

「こらそこっ！ いらん事メモってんじゃねえ！」

「ぶーっ、いいじゃん。お兄ちゃん攻略の為に必要な情報なんだよ？」

「女の子が攻略なんて、超エロゲチックな事言っただけじゃありませんっ！」

まったく俺の妹は誰に似たんだか……完璧エロゲ脳であった。

つか葵のヤツ、まさかエロゲやってんじゃねえだろっな？

実の妹がエロゲをプレイ……兄貴としては泣ける話だぞ。

かくいう俺もエロゲをプレイしていて、人の事なんて言える立場

じゃないんだけどね。

「けーすけ様と葵さん……やっぱり兄妹なのですねっ」

「……く、暮葉さん？ 一応聞くけど、兄妹ってどついつ所が？」

「もきゅ？ 兄妹揃ってHENTAIな所なのです！」

「失礼な！？ 俺は変態じゃない。仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だ！」

「葵は変態じゃないもん！ 健全な子だもん！」

「……やっぱり兄妹なのですね」

ハッ、しまった………ついいつものノリで叫んじゃった………ッ！  
しかも葵とほぼ同時に似たような事をな。

ちくしょう、やっぱり俺と葵は兄妹なのかああああああっ！

「おおおおおおおお！」

その時、突然前方の人ごみから歓声が起こった。

秋葉原じゃコスプレした人が集団で踊ったり、コスプレレディースが現れたりしている。

だけど今回は何かが違う。音楽も全く聞こえないし、バイクのコー  
ルも全く聞こえない。

ダンスでもなければレディースでもない。じゃあ、一体これは何の騒ぎなんだ？

「ちっきの子すくねっ」

「うんうん、あの巨乳ポニテの子すごいよ！ あの白金の不良に勝つちまつたんだもん！」

俺たちとすれ違った野郎2人が、そんなような会話を交わしていた。白金？ 一体どオこの不良校だよ……っーか。

「けーすけ様、今のつてもしかして？」

「うん……」

巨乳でポニテールで、その上ヤンキーなんて目じゃないくらい強く……。

ま、まさか……嫌な予感しかしないのは何故だろう？

とりあえず確認する必要があるな。

俺は人ごみの中に謝りつつ割って入り、人ごみの最前列に出てみる。暮葉と葵も俺の後を追ってきた。それを確認した上でもう一度前方を見してみる。

「いででで！ ちょ、ぎ、ギブギブう〜！」

「や、山田あ〜生きろあ〜！」

「む、無理無理死ぬって！ てかもう降参ッス勘弁してください〜」

……はあ、やっぱりかよ。

「っ、こんな街中で喧嘩してるよお兄ちゃん？」

「もきゅ？ しかもあのお方は」



黒髪ポニーテールでその上巨乳の女の子が、学ランのヤンキー2人組と喧嘩をしていた。

山田というモヒカンのヤンキーに、キャメルクラッチを仕掛ける少女。

既にヤンキー2人は顔面蒼白であった。

見ていてヤンキーが可哀想になってきた。

仕方ねえ……あのヤンキー2人を助ける為に喧嘩を止めるとするか。

第117話 / Akihabara date (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

葵「やった! 今回は葵の出番が多いよ!!」

暮葉「久々に拙者の出番も多かったような気がするのですっ!」

圭介「俺は相変わらず不憫な扱いを受けてる気が……」

伊吹「……」

大吾「……」

重原「……」

小坂「……」

あかり「……」

千早「……」

凧紗「……」

純奈「……」

今回名前すら出なかった人達。

小坂「圭くんはまだ恵まれてるほうだよね?」

## 第118話 なにやってんの？

「明智……もうその辺で勘弁してやれよ」

「え？ ふ、藤島……あれ、木下に藤島の妹まで？ な、なんでここに？」

黒髪ポニーテールでその上巨乳の女の子　その正体はやっぱり明智凧紗であった。

どこぞのヤンキーをフルボッコにしていたのは、彼女なのであった。しかしどういふ事だ。なんで明智が秋葉原で不良とストリートファイトしてんだ？

どう考えても明智……秋葉原とは無縁な感じなのに。生駒ならわかるが、明智が秋葉原って色々な意味でありえねえだろ……。

「夏休みだから遊びに来たんだよ」

「そ、そうか。そういえばもう夏休みだったな」

「学校が壊れたせいだな。んで、お前はなんで不良と戦ってるんだよ？」

「話せば長くなるが……」

「葵は長い話は嫌いだよ！」

「お前に言っただけよ！」

突然突っ込んできた葵に、俺はツッコミを返してみせた。  
全く……一応わりと真剣な場面っぽいし、葵も空気を読んで少しは黙ろっぜ。

そのうちKYなんて言われても知らねえぞ？

「でも、明智殿はどうしてこんな所で不良達と戦っていたのですか？」

「うう、だから色々と深い理由が」

明智は微妙に俺らから視線を逸らし、冷や汗をかきながらそう呟く。そんなある時。ふと振り返ると、学ランの怖そうな集団が近づいてくるのが見えた。

紺色の学ランはどう見ても標準型ではなく、いわゆる変形学生服。短ランだのボンタンだの。一昔前の不良が好んで着用していたタイプの学ランだ。

そんなのを着用した不良達がゾロゾロと、俺たちに近付いてきた。

「狩野さん、菅原さん、宇部さんアイツっすよ！ 山田やったの！」

一人はゴリラのようにゴツく、イカつい顔をした長ランの男。

すげえ……あんな番長みたいなヤツ未だにいるんだ。

もう一人は坊主頭のドカン野郎。さらにもう一人はリーゼントの短ラン野郎。

その他大勢の古風なツツパリ達。

なんなんだコイツら……映画の撮影ってわけじゃなさそうだが、どこの田舎ヤンキーだよ。

「お前か。うちのモンをやってくれたのは？」

「ん？ やっぱりおかしいぞ……こいつらアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAじゃないのか？」

もしもし。明智さん、何を仰っているのでしょうか？

そもそも貴方、なんでこんなヤンキー共と戦ってるんでしょうか？

「なんだそれ？ 俺たちは白金高校だ。チームなんてもんはやってねえ」

「……しまった、誤解でやってしまったぞ」

話がサツパリわからんが、一つだけ分かった事がある。

明智のヤツ……どうやら誤解で白金の不良をやっつけたらしい。

そもそも白金ってどこの学校だよ。まあどうでもいい話だが。

「ふざけんじゃねえぞ teme エー！」

「もう許さねえ。フルボツコ確定だコラア！」

「誤解でも俺たち白金に喧嘩を売った事には変わりねえ……全力で相手させてもらうぞ？」

なんか、すつげえ面倒な事になっちまってる気がするけど……どうすりゃいいの？

残念ながら俺の力ではどうにもできない。

相手が一人ならねじ伏せられるかもしれないが、いくらなんでもこの人数は無理である。

だとすると、ここは逃げるのが最善であろう。

しかし明智に逃げる気はナシ。相手も絶対に明智を逃す気はないだろう。

ああもう！なんで夏休み初日から面倒事に巻き込まれるんだよ！  
ちくしょう……こういつ時に頼りになるのは一人だけだぜ。

「なあ暮葉。なんとかならないのか、これ？」

「拙者の風の魔法を使えばその……逃げられない事はないですよ？」

「待て。それによってどれくらいの被害が」

「もきゆう！？　けーすけ様、全つ然信用してないのですね！？」

「いやだって！　お前の魔法が高度1万までぶっ飛ばされた事があるし！？」

「あ、あれはたまたまなのです！　ちよつとして失敗なのです！」

「まあそんな失敗はともかく、お前……こんな大勢いる中で魔法使うのか？　しかも葵だっているんだぞ？　葵は確かに家族だけどさ、俺たちの事情なんて一切知らないんだぞ？」

その葵に今の話がバレてないか、ちよつと気になったが心配する必要はなかった。

葵は少し離れた所ではかゝんとしている。つまり、俺たちの話を理解出来ていないと言う事だ。

よかったあゝ。葵は頭はいいが、時々アホの子だからな。  
そのおかげで助かったような気がするぜ……。

「もきゆう……ですけどっ」

「はあ……仕方ねえ。明智を連れてダツシュで逃げるか」

「あ、け……けーすけ様っ!？」

そつと決めた俺はさつそく明智に近寄り、不意に彼女の左手を握る。明智は「えっ?」と一瞬驚くが、その驚いた瞬間　俺は彼女の手を引き全力疾走を始める。

「ふぁ!?!　ちょ、ふ……藤島……っ!?!」

「暮葉!　葵!　走れ!　一旦ここから逃げるぞ!」

「りよ、了解なのです!」

「ああ待つてよお兄ちゃんっ!」

少しだけ振り返り、暮葉と葵がちゃんとして来ている事を確認する。

よかった。2人は俺の全力疾走にちゃんとついて来ている。

まあ当然と言えば当然だが……暮葉も葵も身体能力は高いし、特に暮葉はチートレベルだ。

俺が手を引いているこの明智だつて、黒木を一撃で倒すほどの達人である。

とにかく　三人ともしっかりついて来ている。

「待てコラァ!」

「逃がさねえぞクソ野郎オ!」

まあ……知らない連中まで俺の後を追っているが……。とにかくよかつたぜ、このまま逃げれば俺たちの勝ちだな。

このまま 誰も殴らずに全てを解決できればいいな。

……こうして楽しい夏休み一日目は、早くも波乱の一日となってしまった。

そして俺はヤンキー共から逃げながら、ずっとある事を考えていた。

結局、明智は何の為にヤンキーと戦っていたのだろうか。

そして、アキハ・ミッドナイト・アーミーAMAって一体何なんだろう？

俺の中でその疑問は次第に深まっていった



## 第118話 なにやってんの？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「今回短くね？」

伊吹「確かに短いわね……」

暮葉「不良から逃げて終わりだったですね」

千早「その、なんで今回……こんなに短いんでしょうか……？」

大吾「ヒント：作者がこれを執筆していた時間は午前4時15分ごろ。学校に行く為に家から出る時間は7時30分。流石に仮眠くらいはとりたかつたらしいぜ？」

あかり「……寝ろよなっ」

## 第119話 卑怯な男

散々不良から逃げ回る事20分。

俺たちは今、秋葉原のとある路地裏に入っていた。

流石にあの白金だったかな。そんな名前の学校の不良達はもう追ってこない。

ふう……なんとか振り切る事に成功したぜ。

全く我ながら素晴らしいと思うよ。誰も殴らずに騒動を解決したんだからな。

「もきゆう、もう皆さん追ってこないみたいなのですっ」

「はあ、はあ……ああ疲れたあ」

「疲れたよお〜お兄ちゃん！」

「藤島、逃げる必要なんてなかったんじゃないか？」

「うつせ黙れ！ 明智、風紀委員が喧嘩なんて問題起こしてどつするんだよっ！」

全く止めに入っただけでもありがたく思え。

もしこのままアレが続いていたら、多分明智は警察沙汰になっていただろう。

ところが、今の俺のツッコミに対する明智の回答は 予想の遙か斜め上を行っていた。

「だから私……その風紀委員の仕事をしていたんだぞ？」

「は？」

ふ、風紀委員の仕事が不良との喧嘩って……なんですかその某学園都市ラノベみたいなの！？

風紀委員ふうきいいんじゃなくて風紀委員ジャッジメントじゃねえか！

「明智殿っ。風紀委員って一体どんな仕事なのですか？」

「そーですよ！ 風紀委員なのに校外活動じゃないですか！」

暮葉と葵も同じ疑問を抱いていたのか、俺が思っていた事を明智に向かって言い放つ。

ところが不思議な事に明智。全くギャグですなんていう顔をしないのだ。

最初は風紀委員の仕事「不良との喧嘩なんて、ギャグだろうと思ったのに……どうも違うらしい。

やがて明智はスウーっと、静かに息を吐き

「わかった。みんなにわかりやすいように説明するぞっ」

……こうして、明智がこんな所で戦っている理由を聞いた。

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
A M A。

それは秋葉原一帯を根城にするカラーギャングのチームである。

かつてはカラーギャングの中でも、まだそれなりの節度や誇りを持ったチームだったらしいが、最近はそのらのギャングと変わらん状態らしい。

武装は当たり前。大人数で一人の弱者を取り囲み、ボコボコにするのも当たり前。

最近じゃあ観光客がボコボコにされ、メイドさんが時々レイプされているんだとか。

ひよっとして……今日俺に絡んできたあのバカ2人組。アイツらもアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAなのかな？

んで、警察がいきなり大事を起こすなんてありえない事だ。

そこで 各校の腕自慢委員が集まり【連合】を結成。

頼りない大人達に代わり、現在特に危険なアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAを解体し、秋葉原に平和を取り戻そうとしているんだとか。

「って、各校の腕自慢ってところは……他校の生徒もいんのかよ!？」

「流石に私一人じゃ相手にできないからな」

「で、でも明智先輩っ！ それってやっぱり犯罪じゃ……?」

「大丈夫だ。ちゃんと許可を取って行動しているぞ?」

「許可って……一体誰の許可で動いてんだよ?」

その時、明智の目が不気味に輝き、

「知りたいか?」

ひいひいひいひいっ!こ、怖えええええっ!

その不気味な笑顔が超怖い。

俺たち三人は明智の笑みを見て、思わず後ろへ3歩ほど後退りをしてしまった。

「……いえ、結構なのですっ」

そして暮葉が明智の問いに対し、ごく当たり前の返事を返したのだ。当然だ……なんかその。知っちゃいけない事のような気がするぞ。とにかく、ここは何も聞かずに黙っておいた方が得策だろう。

「んで、さっきの白金だっけ？ アイツらは関係ないのか？」

「うん、あれは私のミスだぞ。 アキバ・ミッドナイト・アーミー A M A にあんな露骨なツツパリはいなかったはずだ」

「そ、そうっすか……」

明智さん……随分とまあ詳しいんですね。きつと長い事この仕事をやってたんでしょね。

「それでは明智殿。この人達は関係者……なのですか？」

「あ？」

暮葉が刀を取る為か、密かに背中に手を持っていく。

葵も少し怯えた様子だ。やがて明智の表情も真剣なものに変わり……俺もようやく気がついた。

どつらや俺たちは いつのまに大勢の不良に取り囲まれていたのだ。

しかもそのうち2人はどこかで見たことが……。

ああ思い出した。今朝俺がぶっ飛ばしたアホ2人組やん。

あの茶髪ロングとオールバックは間違いないな。

「よおそのくせ毛野郎！ さっきはよくもやってくれたじゃねえかよ？」

「もきゅ？　けーすけ様、このお方たちと知り合いなのですか？」

「ええ？　誰だったっけコイツら？」

「本当なのか藤島？」

「いや、マジで知らねえぞ？」

「お兄ちゃんは東京に知り合いなんていないよね？」

本当は知っているが、ここで知っているだなんて答えてみる？

俺まで不良扱いされる可能性がある。ここはひとつ……知らんぷりという必殺技を！

あと葵。残念ながら東京に知り合いはいるぞ。

そういえば、東の丘学園の連中は元気にしてるかなあ？

まあ大丈夫だろう。どーせ晁は今頃ハーレム構築しているに違いない。

ちくしょうハーレム羨ましい……だが、今はそれどころじゃねえよな。

「ふっざけんじゃねえよテメエ！　今朝会ったばっかだろオ！？」

「散々ボッコボコにしてその態度かよ？　もう許さねえ。お前

殺して女はレイプするわ！」

すると俺が今朝ぶっ飛ばした2人を含む、10人の男達は服の中から何かを取りだす。

それはナイフだのスタンガンだの特殊警棒だの……様々な武器であった。

それだけではない。木刀や金属バット、鉄パイプを持っている連中

までいやがる。

ちくしょう……10人全員が武装してやがるな。

「みんな下がっていてくれ。ここは私に任せ」

「明智一人に任せられるかよ。火種撒いたのは俺だし、俺も責任取って手伝うよ」

「拙者も戦闘なら得意なのです……っ！」

「あ、葵は下がって観戦してようかな……？」

そうだな。葵はブラコンである事を除けば、どこをどう見ても普通の女の子だ。

戦闘は普通じゃない俺たち三人でやればいい。つたく、夏休み初日からホント面倒な事に巻き込まれたよ……。あゝあ、秋葉原なんか来るんじゃないかな……ちくしょう。

「よしテメエら行くぞ！ コイツらをブツ殺　ぶ、はあっ!？」

……え、なに？

突然、茶髪ロングのホスト風野郎が倒れてしまった。

それも自ら倒れたわけではなく、何者かによって無理やり倒されたという感じだ。

ふと見てみると、ホスト風の男の上には一人の男が乗っかっていた。男は学ランを着ていた。しかし学ランの色は黒なので、白金の生徒ではないようである。

若干着崩された学ランに、ツンツンとした黒髪……え〜つと、上さん？

……ではなさそうだけど。いきなり現れたコイツ……何者？

「ぐっふふふ……おまたせ」

「うあ！？ て、テメエ何者だ！？」

「みんなのヒーローひだかきょうすけ日高恭介様だっ」

日高さん、その自己紹介はウケ狙いっすか？  
なんというか……いつまで茶髪ロングの上に乗っかっているんだろ  
うか？

人の上に乗りながら、ズルそんな笑みを浮かべて残り9人を見回し  
ている。

コイツ、ある意味すごいかもしれねえ……っ。

「日高？ 聞いたことあるぞ……？」

「アイツが財閥に喧嘩売ったって噂の……」

「下藤野の若虎……！？」

「テメエ……いつまでもソイツに乗っかってんじゃねえ！」

「おーっ！ 悪イ悪イ！」

全然反省してない気がするが、まあ相手はアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAだし、どうでもい  
いか。

それにあの日高って人。まあ変な人だけど……そこまで悪人じゃな  
い気がする。

うん、アレは一言で言っと ただの馬鹿だな。



「な、ナメられてね俺ら？」

「おいテメエ！俺らがアキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAだつてわかつて喧嘩売ってんのか！？」

「別に喧嘩は売ってねえけどさあ？女の子が絡まれてんだぜ？だからからついつい衝動的に飛び出しちゃったのよ。ほら、よくある事じゃねえか？」

つまり、俺単独だつたら日高さんは助けなかつたつて事ね……はあ。コイツもアレですか。黒木並に女の子が好きなタイプですか。まあ確かに明智はスタイル抜群だし、暮葉はロリ可愛いし、葵は美乳の持ち主。

そして何より三人ともかなり可愛い顔の持ち主だからな。思わず助けてなくなってしまう気持ちはわからないでもないぜ。ていうか、男なら困っている人を助けるのは当然だろう。

「な、なんてふざけた野郎だ……っ」

「テメエ！」

その時、アキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAの一人。

ゴリラのような男が前に跳躍し、日高恭介という男を狙って大振りの拳を放ちやがった。危ない！と思った俺と暮葉は、衝動的にその場へ飛び出しそうになった。

しかし、何故か明智が腕を伸ばし、俺らが飛びだそうとするのを阻止してきたのだ。

「あ、明智！？」

「もきゅ!? な、なんでなのですか!？」

「大丈夫だ。彼、【連合】の一員だから」

「もきゅ?」

「ま、マジで?」

日高恭介……まさか、あの人が明智と同じ組織の人間だったのか? というかさ、アイツ明智の知り合いだったのかよ!

その日高恭介は現在、ゴリラの大振りパンチを次々と避けていた。それもかなり余裕そうである。あ、アイツ……ふざけた人格の癖に結構な達人じゃないか?

だがその時。一瞬の油断からか、日高の腹部のゴリラの膝が突き刺さってしまった。

一瞬日高は怯む。しかし、たったの一撃でダウンするような そんなヤワなヤツではなかった。

「痛えだろオが……ボケエ!」

刹那、日高が左手に持っていた鞆でゴリラを殴りつける。

今明らかにガコンという金属音が響いた。

も、もしかして日高……あの鞆に何か細工とかしてるのか?

鞆でアップーされたゴリラは背中から地面に落ち、そのままピクリとも動かない。

完璧に気絶していたのだ。やっぱりあの鞆オカシイ、鞆で普通気絶するかよっ!

「や、野郎オ　ぐ、ア!？」

今度はオールバックが殴りかかるが、またしても日高の鞆が炸裂した。  
しかし今度は殴りつけるとか、そういう普通の攻撃ではなかった。  
なんと……日高の鞆からグローブのようなものが飛び出し、それは  
確実にオールバックの野郎の股間を捉えていた。股間を強打したオ  
ールバック野郎は涙目になり、遂に倒れてしまった。

「あの人……ひ、卑怯だけど強いよっ!？」

確かに葵の言う通りだ。日高恭介……卑怯だけである意味強い……。

「テメエ……卑怯じゃねえか！」

「卑怯？　グッフッフ……いい言葉を教えてやるうか？」

「アア？」

「卑怯はな……俺の専売特許なんだよゴルア　ッ！」

叫びながら日高は　一瞬。1秒もしないうちに不良の懐ら入り、  
顎に強烈な一撃を打ち込んだ。

向かってきた不良にも蹴りや右ストレートなど放ち、殆ど一撃で不  
良達を倒していく。

そして、最後に残ったアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAの構成員は

「ひ、ひい……日高一派のトップってこのレベルかよ……ッ!？」

「いい事教えてやるうか？　俺のダチにはなあ……もっと強えヤツ  
がいるんだからな？」

「て、テメエだけじゃ……ねえのかよッ!？」

「さて、と……お前は覚悟出来たのか？」

「ひ、いい……うあああああああぁぁぁぁぁっ!」

遂に最後の一人は日高恭介という一人の男にビビり、敵前逃亡を  
てしまったのである。

「た、ただの人間にしては凄腕前なのです……っ」

「あの馬鹿が負けるわけがないと思ったが……やっぱり圧勝したか」

「す、すごい……っ」

暮葉と葵は驚き、明智は当然の結果を見たような顔をしていた。

俺？俺はモチロン……あまりの凄さに絶句している。

とりあえず、一言だけ言える事があるぜ。

日高恭介……そんなに強いなら卑怯な真似する必要はないか？

……まっ、どうでもいいか。とりあえず誰も怪我をしなくてよかつ  
よ。

## 第119話 卑怯な男（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「まうた他作品キャラご登場かよっ！」

重原「まあまあ。他作品と言っても他の作者様の小説のキャラじゃないんだから」

圭介「いや、そう言う問題じゃないっしょ！ ていうかこの秋葉原編は一体何がしたいんだ？ 大体A M A ってアレか、スキルア武装無能力者集団かよっ！？」

黒木「そのうち、第三の主人公はまじひでも出るんじゃない？」

千早「とにかく、今回わたし達の出番……なさそうだね？」

あかり「うう、あたいだって活躍したいのに！」

伊吹「私、圭介の幼馴染なのに番が……っ」

## 第120話 妹がブラコンすぎる件

秋葉原・某所喫茶店。

つてか、さつき飯を食ったばっかなのにまた喫茶店か。

まあいいけどさ。今度はメイド喫茶じゃなくて普通の喫茶店だし、出費も少なくていいぜ。

俺たちは明智に案内され、ここまで来たのだが……え〜っとなんだ？  
なんで日高さんまで一緒なんでせうか？

「んで、結局明智と日高さんはどういう関係なんだ？」

「だから【連合】の一員だって言ってるだろう？」

「もきゅ？ 日高さんもどこかの学校の腕自慢という事なのですか？」

「腕自慢？ 俺は世界一強いんだぜ？ だあーっはははは！」

「……………」

ダメだ俺、この人のノリにはついていけないかもしれない。  
そして俺は 初めて真性の馬鹿を見たような気がするよ。  
日高恭介。コイツは強いけどただの馬鹿だ。

「ま、まあこれでも日高は強い方だぞ？」

「まあ……先程の戦いを見ていればわかるのですっ」

「やべ！ 今日帰ったら花 ろ見る為に昼寝しねえと。でも深月や

深雪の相手もしなきゃいけねえし、つかルナの餌買って帰らねえと怒られるよな。畜生折角の日曜めっちゃ忙しいじゃねえかよ」

確かにお忙しそうでございます。ていうか日高さんアニメ見るんだ。花　ろは俺も見てるぜ。当然、伊藤　な恵の声を聞く為にな！

俺、実はあの声大好きなんだ。佐　さんとかエ　シイとかもう色々最高だろっ。

そういえば日高さんの髪型とかファッション。絶対某説教ウニ男意識してるよな……。

うん、シャツの色は違うが、学ランの着方や髪型がどことなく似ている気がするぜ。

もしかすると俺、日高さんとはうまい酒が飲めるかも　　っていけね、俺未成年だった。

「お兄ちゃん、葵……全然目立ってないよ？」

「心配すんな。俺も今日は全然目立ってないから」

ちよつとメタな話をするが、俺……一応主人公だよな？

今回主人公らしい事を全くしていませんが……。

なんか、おいしい所を全部日高さんに持っていかれた気がするんだ。

「ねえお兄ちゃん……」

「ん、どうしたんだ？」

そういえば葵のヤツ、今日は随分と大人しいもんだな。

いつもなら一番騒がしい存在なのに、今日に限ってはどこぞのお嬢様のように静かである。

いや……まるでおしっこを我慢する子供か？股の間に両手を挟め、

妙にモジモジしている。

葵のヤツ一体どうしちまったんだろう……ちょっと心配だぞ？

「お兄ちゃん……といれっ」

「って、ホントに我慢してたのかよ!？」

まさかの予想大当たり。葵……そこまでお子様だったとは……ッ!

「お兄ちゃん、トイレどこ？」

「そ、そこにあつたような気がするぞ？」

「うん、一緒に来て……っ」

「一人で行けよ!？」

「やだ、怖い……っ」

「お前、俺と一緒にトイレに行つて既成事実作りただけだろ!？」

「……………」

「なんでそこで黙るんだよっ! やっぱそうですかいっ!？」

やっぱり葵は所詮葵であつた。テンションを低くして兄を心配させ、心配した兄を誘惑して一緒にトイレに行き、そこでヨスガつて既成事実を作っちゃおうとしていたのだ。

魂胆丸見えだぞちくしょう。俺がそんな手に引っ掛かると思ったのか？



長年葵からセクハラを受け続けてきたんだ。いい加減これくらい見抜けるようにはなったわい。

「~~~~つ、とにかく一緒に来るのっ!」

「ヘッ? おおおおおおわあああああつ!?!」

「ん、藤島が叫んでるぞ?」

「けーすけ様! どちらに行かれるのですか!?!」

「助けて暮」

「お兄ちゃんはお腹の調子が悪いから、今からトイレに行くんだよっ!」

葵のバカヤロオオオオオオオオオオオオオオ!

とうとう俺の変態妹が強硬手段に出やがった。

単純に考えて俺のほうが葵より力が強いし、抵抗しようと思えば簡単に出来るハズだ。

でも……抵抗できないんだよね。

こんな人目の多い所で女子と戦ってみる。きっと俺が悪い方向で話が進むに違いない。

それが現代 女尊男卑の世の中の現実である。

そして、俺は無理やり妹に女子トイレに連れてこられてしまった。

「おい葵……なんでよりによって女子トイレなんだよ?」

「にししっ、お兄ちゃんが簡単に逃げられないように……ネツ？」

「ネツ？　じゃねえよ！　ホントに逃げられねえじゃねえか！」

逃げたら人生が終了するだろう。なんでって、おいおい聞かなくてもわかるだろ？

ここは女子トイレ。そして俺は紛れもなく　である……ああ、死ぬ。こっから出たら社会的に死にまうぞ、俺エ……。

「葵ね、ず〜っとお兄ちゃんところなるの……待ってたんだよ？」

「そうか。残念ながら俺は1秒たりともそうは思わなかったぞ」

「うそつき。葵と結婚するんだ〜って言ってたよ？」

「それいつの話だよ……っ〜かてめえ、なに人のズボンに手えかけてんですか？」

トイレのクソ狭い個室。この密室に俺と葵は2人きり。

葵は床にしゃがみ込み、上目遣いで俺の事をじっと見つめている。一方その華奢で柔らかそうな両手は俺のズボンのベルトを掴んでいた。

「お兄ちゃんがやってるゲーム。口取りシーンとか多かったよ？」

「てめえ、いらんことばっか研究してんじゃねえ！」

しかも口取りっておまつ、なんで古語なんでせうか！？

意味わかる人いんのかよ。いや、わからなくても困るような気もするけどさ……。

一番の問題はだな……なんで葵がそんな隠語知ってんだよっ！

「お兄ちゃんの性癖だもん。妹が理解していて当然だよ？ 世の中の常識だよ？」

「それが常識なのはお前だけだろ」

「えへへへそうかも」

そう言いながら葵は俺のベルトに手をかけ、ゆっくりとそれを取っていく。

ベルトを取られたせいか、随分ズボンが緩くなったような気がした。そりゃそうだ。なんとたつてベルトが無くなっちゃったんだからな。今、ちよつとでも歩けば俺のズボンは脱げるであろつ。

いや 歩かなくてもズボンは脱げる。それも自然にはなく人為的にな。

「おい葵……っ」

「なあ〜にお兄ちゃんっ？ 葵の手を握ってちゃ脱がせられないよ？」

「いやいやいやちよつと待て！ 脱がすつて時点でおかしいだろ！」

「なんで？ 脱がなきゃお兄ちゃんの大好きな口取りできないよ？」

「アホかお前っ！ それ以前に俺らの関係考えやがれっ！」

「え？ お兄ちゃんはお兄ちゃんて葵のお嫁さんだよな？」

「……ダメだコイツ、早くなんとかしないと」

これがまあ義理の妹なら許すかもしれんが、なんたつて葵は実の妹である。

許されるはずがない。いや、それ以前に俺にその気がない！

それなのに……なんでこれなんてエロゲ的なイベントが発生してんだよ。

ていうか俺の脳内BGM自重しろ。なんか、脳内でリ　バスのあのシーンのBGMが……。

ちなみにあのシーンが何かは、この状況から考えて言わなくてもわかるだろ？

そして、とうとう俺はズボンが脱がされ、葵は俺のトランクスにまで手を伸ばしてきた。

「き、緊張するよ……お兄ちゃんの見ると久々だよっ」

「その前に見るな！　っーかこっから先は禁止だっ！」

あたりまえである。これ以上は流石にマズいだろ……。

ていうか葵のヤツガチなのか。ガチで本番突入するつもりなのか？

「そ、それじゃあ……行くねっ」

「行くなああああああああっ！」

俺は今、自分が出せる最大の力を出し、穿いているトランクスをが　つちりと握る。

絶対に脱がさせてたまるか……これ以上の関係になつてたまるか！

「ち、力抜いてよっ！」

「抜いたら色々終わる気がするから嫌だっ！」

「だいじょーぶだよ！ い、痛いのは葵のほうだからっ！」

「そっという問題じゃねえよ！」

「っ！か地味に下ネタ言っでんじゃねえよ。

この変態め、やっぱり葵は俺以上の変態だ。

誰か助けてくれ……逃げたら逃げたでここは女子トイレだし、逃げなかつたら葵に食われる。

前者も嫌だけど後者も嫌だ。ちくしょう、俺はどうすりゃいいんですか！

ていうかどうしようもない。だからお願いします誰か助けてくださいっ！

「きゃああああっ！」

「オラア大人しくしろっ！」

な、なんだ……外が妙に騒がしい。

まるで何者かが店に襲撃してきたみたいな……ていうか、本当に襲撃されたんじゃないか？

「アキバ・ミッドナイト・アーミー テメエら……A M Aか!？」

この声……間違いない、日高さんの声だ。

日高さんは確かにアキバ・ミッドナイト・アーミーA M Aと言っていた。

と、言う事はヤツら 俺らがいるこの喫茶店に！

クソツタレ、何が目的で来たんだよ……とにかく行くしかないな。  
俺は素早くズボンを穿く。もう犯罪者扱いされる覚悟はできた。  
とりあえずさっさと女子トイレから出よう

！

「お、お兄ちゃんっ!？」

「ごめん葵！ 今それどころじゃねえんだ！」

「ちょ、あ……葵とお兄ちゃんの合体は!？」

うるせえ合体なんてナシだっ！

まったく、今日はなんだってこんなに騒動が起こりやがるんだ……。  
でもまあ、アキバ・ミッドナイト・アーミー A M Aのおかげで俺は助かった。

葵とアレな関係にならずに済んだ 助かった！

そんな事を考えながら葵を放置し、俺は飛びだすように女子トイレから脱出した。

## 第120話 妹がブラコンすぎる件（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1lg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「なんなんだよ今回。限りなくアウトに近いアウトだろ！」

小坂「いやあく限界に挑戦だよ。もちろん警告がきたら修正するに  
よ」

圭介「なんすかその一昔前のアニメにありがちな語尾!？」

小坂「気分気分　それにしても圭くんよく耐えられたね」

圭介「そりゃあ妹相手に興奮できるヤツとしたら、そいつは深夜アニメのみ過ぎか妹に変な幻想を抱いてるヤツだろ？」

小坂「へえ〜？　じゃあ葵ちゃんが伊吹だったら圭くんどうなってたかな？」

伊吹「ちよっ!？　ああああ亜紀っ、なに言ってるのよっ!」

圭介「い、伊吹相手にそんなのねえよっ!」

小坂「ふ〜ん、2人ともまんざらでもなさそう……まあどうでもいいや!」

## 第121話 妙に詳しい謎の男

「な、なんだこれ？」

俺と葵が女子トイレから出た時には、既に店内はどこぞの世紀末並に荒れ果てていた。

テーブルや椅子はひっくり返り、大勢の不良達が地面に寝そべっている。

不良達の怪我は二種類。殴られた跡か何かに吹き飛ばされて激突したような跡。

現場で立っているのは日高さんと暮葉のみ。

ああ、もうなんとなくだけど……犯人がわかつちやったような気がします。

「あつ、けーすけ様に葵さん！」

「2人ともどこで何やってたんだ？」

「お兄ちゃんとエツ　　つつっ！」

「いやあ〜葵が男子トイレに入ってきてさ、もう色々と面倒なことが起きてたんだよ」

「男子トイレに入る妹って……それなんてエロゲ？」

「葵さんっ、男子トイレに入っちゃダメなのですよ？」

「ぶう〜……葵悪くないもん……っ」



ふう〜、これでトイレでのあの騒動は葵のせいになったモンだ。

トイレであんなエロゲ的な事があつたなんて、死んでも言えねえよ……。

暮葉からのお仕置きが怖いし、何より日高さんは絶対そついうネタがあるといじるタイプだ。

イジられるのはゴメンですぜ。俺はイジられるよりイじるほうが好きだからな。

やれやれ……葵が俺を女子トイレに連れ込まなけりやあんな事には……。

つていうか今トイレの話をしている場合じゃないな。

俺たちがトイレで揉めている間、この店で一体何があつたつてんだよ。

なんでこんなに店内が荒れてるんだ。そして明智のヤツは一体どこに？

「それにしても明智殿……全然帰ってきませんねっ」

「残りの連中片付けるのに手間取つてんだろ？ 結構な人数だったからなあ」

結構な人数がいやがつたつて……。

やっぱリアルか。AMAが襲撃してきたのか？

……つて、一人で悩むよりは話を聞いたほうが早いよな。

「なあ、さっきの騒ぎはなんだつたんだ？」

「AMAの連中の仕業に決まってるだろ？」

「じゃ、じゃあ明智は今そいつらの残党と戦つてるつて事か？」

「はい！ 明智殿はこれ以上被害を大きくしたいとのことで、この近くの路地裏まで行って残りの敵と戦うそうなのですっ！」

「そ、そうなのか……」

暮葉も日高さんも随分とまあ楽観的だよなあ。

まあ確かに、あの明智がそこらの不良に負けるとは思えない。

黒木には毎日圧勝し、イザなれば超能力を使える彼女。

そんな彼女が、そこらの不良との喧嘩で負けるはずがないだろう。

だけどなあ…… なんなんだろう、この妙な胸騒ぎは？

「……………」

みんながどうせ明智の勝利だと楽観的になっている中、俺は一人荒れた玄関を見つめていた。

同時刻、明智は路地裏で激戦を展開していた。

先程、喫茶店にアキバ・ミッドナイト・アーミーAM Aの連中が襲撃を掛けてきた。

なんでも私達【連合】の動きを、奴らはある程度把握しているようなんだ。

私らの行動がバレている。そこで、一気に私らを潰そうと総攻撃を仕掛けてきた。

大体今回の襲撃はそんな理由で行われたものだろう。

連中の襲撃によって店内は大混乱だ。既に店内は滅茶苦茶……しばらく営業できないだろう。

それでも私は アレ以上の被害を店に受けてほしくなかったんだ。だから私はこんな路地裏まであえて逃げたんだ。あえて逃げてそこ

で連中を撃退する。  
既に私の作戦は殆ど成功していた。連中の大半を仕留める事に成功したのだ。

「……全く、数ばかりで大したことがないぞ……………」

確かにアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAはすごい数だ。

だが、数が多いという理由で絶対的に強いとは限らない。  
戦術も戦略も最悪だ。連中はやはりいいところ　路地裏の不良程度  
の実力でしかない。

「ようやく現れたな……………貴様は明智凧紗か」

不意に、私の耳に冷たく低い男の声が入りこんできた。

私は咄嗟に振り返る。するとそこには　ゴリラのような巨体な男  
が佇んでいた。

大柄だが肥満とは正反対の蔵つい筋肉を持つ、眉毛は剃ったのか  
一本もない。

その上左目付近には深い傷跡があり、男が歴戦の兵士である事を物  
語っていた。

しかし……………今までこんなヤツはいなかった。それに私の名前を知っ  
ている？

「お前は一体何者だ。アキバ・ミッドナイト・アーミーAMAなのか？」

「中々の名推理だった。俺はアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAのアタマだ」

「ついでに名前を名乗ってもらえないか。私のことを知っているん  
だろう？　だとすれば知り合いかもしれないし、名前を聞けば思い  
出せるかもしれないぞ」

「……鷺尾有資だ。先に言っておくが貴様とは初対面だ」

「だったら何故私の名前を知っている？ どのルートから私の情報を得たんだ？」

「生憎……俺もそれをよくは理解していない」

理解していないだと……どういふことだ、鷺尾が指示をしているのではないのか？

しかし、鷺尾は何故か疑いようのない表情を浮かべていたのだ。

ということは……本人もよくわかっていない？

そんな事を疑問に思っていると、鷺尾は重く閉ざされたシャッターのような口を動かし、

「情報が的確に伝わっていたのは数日前までだ。ここ数日は全くの音信不通……奴らめ、俺らを利用してどうするつもりなんだ」

「利用？ お前……それはどういふことだ？」

「生憎とこつから先は機密事項だ。だが、貴様に教えられることならいくつがあるぞ」

「な、なんだ？」

「俺らの行動目的だ。秋葉原で暴れていたのも 全ては貴様らを誘き寄せる為だ」

誘き寄せる為に暴れていたとは、なるほど……私らは鷺尾の思惑に、まんまと乗ってしまったという

わけか。

「私らを誘き寄せてどうするつもりだった？」

「詳しい事は知らん。だが、藤島圭介ふじま けいすけという何者かは知らんが……その者を如何なる手段を使ってでも拘束し、身柄を引き渡せという依頼だ。」

「依頼だと？」

「ああ、アキバ・ミッドナイト・アーミー A M A への依頼だ」

藤島圭介……多分言うまでもなくあの変態のことだろう。

ふ、藤島がどうして……どうして藤島の名が鷲尾の口から出てくるんだ？

「しかし面倒なことになった……まさか、この俺が貴様のような超能力者と戦わなければならないとは……」

「お、お前……私が超能力者だって何故……ッ!？」

「これも不明なルートからの情報だ……やれやれ、厄介な相手だな」

「……ふ、ふふ。その不明なルートというのが気になるな……いいだろう。無理やりでもお前にそのルートが何なのかを聞いてやろうか」

「やれるものならやるがいい、こちらだって何の対策も立てずに貴様らに喧嘩は売らん」

少し笑みを浮かべながら鷺尾がそう言い放つ。

瞬間　鷺尾が信じられない速度で移動し、気付けば私の目前にまで迫っていた。

私は驚愕のあまりに目を見開く。信じられない、ただの不良が出せる速度ではない。

轟！と、全てを破壊し尽くすような拳が風を切り、砲弾の如く飛来してくる。

私は反射的に身体を逸らし、鷺尾の一撃を間一髪が回避。

その後、鷺尾から距離を取るべく　後方へ2〜3歩ほど跳躍した。跳躍と言っても一歩3m。今の跳躍で鷺尾から9m程の距離をとる事に成功したのだ。

「お前……本当にただの不良か？」

「魔術オカルトは一切信じていなかったが……なるほど、確かに効果はあるみたいだ」

足尾の奴、魔術オカルトが一体どうしたろうか。

それってアレだよな。木下が得意としているヤツのことだよな。どういふ事だ……鷺尾はそっち方面の関係者ということなのか？

「何者だ……お前っ！」

「名乗ったハズだ。鷺尾有資、アキハ・ミッドナイト・アーミー A M A のアタマだ」

私を知りたいのはそんなことではない。

そんなことではないのに……この男、他には何も語ろうとしない。ますます怪しいぞ。こうなったら……力づくでも情報を聞きだしてやるっ。

「ふっ、悪く思わないで欲しいぞ。今からお前を倒させてもらう！」

「やれるものならやるがいい。ただし……こちらだって貴様のようなバケモノが相手なら　それなりに本気を出させてもらうつもりか」

それが、戦闘開始の合図であった……。

謎の男である鷲尾有資、必ず倒してお前の秘密を暴いてやる。

それに　藤島の名が出ている以上負けるわけにはいかない。

あいつらが、どういう理由で藤島を狙っているかはわからない。

それでも……藤島を狙っているという事は事実らしいんだ。

だから私は　藤島を守る為にも負ける事はできない……ッ！

## 第121話 妙に詳しい謎の男（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

圭介「突然ですが疲労で死にそうです……」

伊吹「まったく、あんたはいつもそうよねっ」

圭介「ああもう……ダメだ。もうすぐテストなのにこの疲労はマズい……っ」

伊吹「……あれ？」

圭介「今にもぶっ倒れそうだ。どうしよう、でも小説は書かなきゃ」

伊吹「それあんたの話じゃないでしょ！ これを書いている人の話でしょ！」

圭介「……次回、果たして鷺尾の正体は……!?」



## 第122話 不良集団

喫茶店を出た俺たちは暮葉の能力　魔力感知を頼りに明智を追いかけてみた。

辿りついた先は秋葉原のとある路地裏。

荒れたアスファルトに散乱したゴミの数々。壁には不良が描いたと思われるアートたち。

いかにもって雰囲気だな……ここがアキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAの根城なのか？

「暮葉、ホントにここに明智がいるのか？」

「間違いないのです。明智殿の微弱な魔力と……その、変な魔力を感じるのです」

「変な魔力？」

「はい。人ではなくて物に籠められたような……」

魔力って物にまであんのか……って、元々物に魔力があるわけないよな。

きつと魔法使いが後から魔力を付け足したのだろう。

しかし、それってどういう事なんだ。アキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAってただの不良集団なんだろう？

魔力とは普通全然関係ないよな。にも拘わらず変な魔力を感じるって……。

「それってもしかして、サヴィエトの連中が絡んでいる可能性があるのか？」

「十分それも考えられるのです」

「マジでございますか……」

だとしたらまずいよな。サヴィエトの連中に俺のことがバレたら……。

まあその時はその時、とりあえず魔法使いを倒せばいいんだ。

問題はその後のことである。如何に日常的に襲ってくるであろう魔法使いから身を守るか……。

「なあ、気になるんだけどさっきからお前ら、一体何の話をしてんだよ？」

やばっ、そういえば日高さんは部外者だったな。

あんまりこの件に関わらせるわけには……いや、絶対に関わらせたくないぜ。

なんたって日高さんは一般人だ。魔法だなんて言われても信じる人じゃないだろう。

だったら……この件は絶対に言っちゃダメだ。

俺や暮葉が平穏な日常を過ごす為にも 絶対に！

「ああ、なんつーか……ゲームの話だよ！ なっ、暮葉？」

「もきゅ？ ……あ、は、はい！ ゲームの話なのですよ！」

「ゲーム！？ そ、それ神ゲーなのか！？」

「まあ難易度は高いけど、そこそこ面白いゲームかと……」

「マジか！ よし、この件が終わったら俺に教えてくれっ！」

「お、おう」

困ったな……まあいい、俺が持っているRPGをテキストに紹介しておこう。

日高さんは馬鹿である。多分それで納得してくれるハズだ。

それにしてもえらく静かだな。なんつーか、まるで戦いが起こっている感じでは　　と思った、

「　　ッ！」

その時であった。

頭上が激しい打撃音が聞こえ、それと同時に黒い影が上から落下してきたのだ。

影は華麗に着地して空を見上げる。その影の正体とは

「あ、明智ー！」

俺がその影　　明智凧紗に声を掛けると彼女は振り返ってきた。

「んっ？　ふ、藤島？　木下に日高まで？」

「けーすけ様が明智殿のこと御心配な様子で、それで拙者達は明智殿を追ってきたのです！」

「う、うるせえっ！」

「つーか、まだ仕事終わってねえのか？」

「生憎、一筋縄ではいかない相手だからな」

明智が一筋縄ではいかないと言う相手……そのバケモノは一体何者だよ？

あの明智が手こずるんだ。おそろくただの人間じゃねえだろう。ちくしょう、やっぱりサヴィエト関係のヤツらか？

そう俺が推測していた時　もう一人の影が上から舞い降りる。

その影は明智とは違って大柄で、まるでゴリラのように巨大な男であつた。

ゴリラ野郎は黒髪短髪だが眉毛は全剃りで、なんとも言えぬ冷徹な雰囲気きふきが漂ただよっていた。

「やはり手加減を知らぬヤツだな……明智あき風かぜ紗さ」

「ふん、お前こそ随分と常識離れした不良じゃないか……鷲尾すずお有あ資し」

どうやら、あのゴリラと明智は先程まで戦っていたらしい。

なるほど……あのゴリラはA.M.Aアキバ・ミッドナイト・アーミーのボスか幹部あたりか？

あれだけ強そうな見た目をしているんだ。

現に明智を追い詰めているし、相当の実力者なんだろう。

けど　明智と戦っているってことは、一応俺らの敵あたいってことにもなるんだよな。

「只ならぬ気配……なのですっ」

「……………ッ」

暮葉と日高さんも敵味方識別でゴリラを敵と見なし、ゴリラとの戦闘いくさに備えて身構みかまえた。

日高さんは右手をポケットに入れ、暮葉は背中から一期一振を取り出した。

おそらく暮葉は刀を鞘から抜かず、打撃用の武器として使うつもりなんだろう。

けど、日高さんはポケットに手を入れてどうするつもりなんだ？  
って、なんとなく予想できたぞ。多分卑怯な事でもするつもりなんだろう……卑怯者だしな。

「木下暮葉……藤高の日高、もう一人の貴様は何者だ？」

「あ？ 俺の名前は」

「待てっ！ 名乗るな！」

「えっ？」

なんで明智は俺が名乗ろうとした瞬間 必死になってそれを止めやがったんだ？

別に名前くらい名乗ったって何の問題も

「……そうか、明智がそこまで必死に止める存在……貴様が藤島圭介というヤツだな」

「しまった……っ！」

いまいち状況が飲み込めないが、とりあえずなんであのゴリラは俺の名前を知ってたんだ？

それに暮葉や日高さんの事まで……ホントにあのゴリラ何者なんだよ。

絶対普通じゃない。見た目もそうだが中身や行動もそうだな。見ていてわかったぜ。

「なあ明智。あの野郎はなんで俺のことを知ってたんだよ？」

「詳しい事はわからない。でも、裏のルートで私達の事は知っているみたいだ」

「裏のルート？」

「うん。それでアイツの目的は」

「藤島圭介。貴様の身柄を拘束させてもらう」

明智がゴリラの行動目的を説明しようとして　その時だ。

ゴリラが敵を確実に撃破するミサイルの如く、冷徹な鋭い表情で突撃を仕掛けてきた。

しかも信じられない事に　そのスピードは常人の域を遥かに超えていたのだ。

日高さんが「あぶねえ！」と、暮葉が「けーすけ様っ！」と、背後で砲声のように叫ぶ。

その叫び声が耳に入ったと同時に　俺はゴリラの攻撃を反射的に回避する。

左方向に走り幅跳びのように跳躍、アスファルトでぐるぐる身体を転がし立ち上がる。

「……オ　ッ！」

「うわっ!？」

体勢を立て直した時には既に、ゴリラ野郎は目前に迫っていたのだ。今度は左へ跳躍し、辛うじて今の一撃を避けてみせた。

今度は地面に転がる事なく、なんとか立ったままの姿勢を保てた。



鉄板入りの鞆とはまあなんと卑怯な。でも、その砕け散った鉄板入りの鞆は俺を救った。  
日高さんは咄嗟に飛び込み、鞆を突き出しそれを俺を守る盾代わりに使用したのだ。  
結果、鉄板入りの鞆は粉々に粉碎されたが、その代わり俺が殴られることはなかった。

「えいつ！」

暮葉の可愛らしい叫び声。しかしやっている事は非常に攻撃敵だ。刀を鞘に入れたままの状態で振りまわす暮葉。それでゴリラ野郎の首筋を狙うつもりだったらしい。だが、ゴリラ野郎はガシッと刀を鷲掴みし、そこから暮葉との力比べが始まった。

「ん、きゅ　っ！　この力にその運動性能……貴方、魔法<sup>マジック</sup>衣服を着ているんですね？」

「確か連中もその名を言っていたな。確かに……俺はオカルト用品を着ている。最初は半信半疑であったが……まあ、貴様らのようなバケモノと互角に戦えるあたり、中々いいブツだったようだな」

「貴方の言う連中は一体何者なのですか？」

「さあ。この俺も詳しくは知らない連中だ」

「では、貴方の目的は一体なんなのですか？」

「連中の依頼だ。秋葉<sup>あきば</sup>原で暴れ貴様らを誘き寄せ　その藤島圭介の身柄を拘束する事だ」



「ッ！」

拘束？

ちくしょう、あの野郎一体俺の身柄なんかを捉えて　　って待てよ？俺を拘束するって依頼を出した、その連中<sup>レ</sup>ってまさか……。

いや、それを考えるのは後にしよう。とにかくアイツを止めねえと！

ゴリラの右腕が一回り大きく膨らみ、刀を握る力と引っ張る力が数倍に膨れ上がったらしい。

暮葉も一期一振を軽々と振りまわし、一撃で相手を仕留めるなどかなりの腕力の持ち主だ。

だけど暮葉は小柄な女の子。そこに限界が存在しているのである。

いくら暮葉が鍛えているとは言え、その細腕から出せる力には限度があるらしい。

対してゴリラ野郎はよくわからねえが、何らかの力で筋力を強化しているらしいのだ。

本来なら暮葉のほうが圧倒的に強いのだろう。

だが、強化されたゴリラ野郎は暮葉以上の腕力を誇っていた。

「木下　　！　　う、ああッ！」

その時、ピンチの暮葉を助けるように　　明智が火の玉をゴリラの手首に向かって放った。

右手首を火傷する事、ここで右手を離して暮葉を逃す事。

当然のようにゴリラは後者を選び、右手を刀から瞬時に離して素早く左方へ跳躍した。

しかしゴリラは不運な男であった……跳躍したその先には日高さんが居た。

その事に気付いたゴリラは衝動的に振り返るが、

「な……っ!?」

「ふんッ!」

「ぐ、が　　ッ!?」

瞬間、日高さんの右拳が勢い良くゴリラ野郎の顔面に突き刺さった。正にその一撃が反撃開始の合図。

大きく後ろへ仰け反ったゴリラは、己の脚力で体勢を立て直そうとする。

……けど、そんな事なんてさせるわけねえだろ!

「う、オオオオオオオオオオオッ!」

「　　けーすけ様!」

全力疾走をする俺。途中から俺に並んで走り始めて暮葉。

俺達は体勢を完全には立て直していない、あのゴリラに思い切り体当たりを仕掛けた。

暮葉の体重は40kgもあるか微妙だ。

それでも俺の体重と加われれば　　多分100kg近くにはなるはずである。

弾丸のように体当たりでもすれば、激しい衝撃を与えるには十分だ。俺と暮葉の2人と走った勢いの重圧は、ゴリラ野郎を確かに後ろへ吹っ飛ばした。

凄まじい勢いで地面に叩きつけられたゴリラ野郎。それであの野郎の意識は途切れたようだ。

「ふう……… やっちやいましたね、けーすけ様っ!」

「ああ、ナイスな連携プレイだったな」

俺と暮葉はお互い見つめ合い、巨体に乗ったまま勝利の余韻に浸っていた。

それから数十分後。

秋葉原の大通には数両の警察車両が車列を組んでいた。

手錠を掛けられた不良達が続々と、警官達に連れられ護送車へと乗せられていく。

どうやらあの後、明智が通報したようである。

今回の一件でアキバ・ミッドナイト・アーミーAMMの構成員の大半が逮捕されたようだ。

不良達の列の中には当然 一際デカいあの男の姿もあった。

「あの、ちょっと聞きたい事があるのですが……よろしいでしょうか？」

「ん……勝てば官軍、負ければ賊軍。煮るなり焼くなり好きにすればいい」

暮葉が呼び止めた男はアキバ・ミッドナイト・アーミーAMMのリーダー、鷲尾有資。

「つか鷲尾のヤツ潔いな……中々硬派なヤツじゃねえかよ。」

「その服はどんな人達から貰ったのですか？」

「正確には取引だ。藤島圭介を必ず捕える事と引き換えに、この特殊な衣服を俺は受け取ったのだ。それも名前も団体名の名乗らぬ連中からな……」

「もう一つ、なんでそんな取引に乗っちゃったのですか？」

「依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する。それが俺達アキバ・ミッドナイト Aの信条だ」

「最後にもう一つ。貴方は魔法使いとかではないのですよね？」

「そのようなオカルトに興味はない。今回は特別だ……」

それだけ言い残し、鷲尾は警察に連行され護送車に乗せられた。その光景を見ている俺達。ふと気がつく俺の左右に明智と日高さんが佇んでいた。

「魔法とかオカルトとか一体なんなんだよ？」

「えっ？ ゲームの話じゃねえの？」

「ゲームかぁ。まあいいや、俺そろそろ帰ろうかな？ 深月と深雪も心配してるだろうし」

そんな事を呟きながら、日高さんは手を振りこの場から立ち去ってしまった。

結局……あの人何しに来たんだろうか。  
まあ鷲尾を倒すのには役立ったし、全く無意味な登場ではなかったよな。

「んで、明智はこれからどうするんだ？」

「私はこれから後始末をするぞ。一応仕事だからな……っ」

「そつかあ。お前も夏休みなのに大変だよなあ」

「うん、出来れば遊びたいのにな……っ」

明智はこの所全く遊べていない状況らしい。

勉強も忙しいのだろうし、こうした裏の仕事も忙しいんだろう。

けどなあ明智だって年頃の女の子だし、俺としても少し気を抜いて遊んで欲しいな。

「明智、夏休みのどっかで皆で遊ばないか？」

「……えっ？ けど、いいのか？」

「いいも何も俺ら友達だろ？ 高2の夏だし遊べるうちに遊んどっ  
うぜ」

「うん、ありがとな藤島っ。その、そろそろ仕事に行かないと……」

微かに見せた微笑み、やっぱり明智も笑うと可愛いぜ。

出来ればこのまま話をしていたい。でも、やるべき事が山積してるらしいしなあ。

仕方ないよな。それに遊ぶ機会ならいつでもあると思うし。

「わかった、またな明智」

「うん。藤島もいい夏休みを過ごすんだぞっ」

「おう」

こうして、明智も後始末の為に俺達の前から一旦立ち去った。

だが明智と入れ替わるように、今度は暮葉が歩み寄ってきた。

「けーすけ様、その……ちょっとお話があるのです」

「話ってアレか？ さっきの鷲尾の背後にいるヤツの事？」

「はいっ。あの、どうも今回の件はサヴィエトの関与が疑われるのですが……っ」

「それなら俺も薄々思ってたよ」

「その件に関してなのですが、どうも敵は拙者達の情報を裏ルートで得ているようなのです」

「裏ルート？」

「そういえば鷲尾にしたって随分とまあ、俺らの事情に詳しくかったよな。」

「それがサヴィエトの連中に聞いた事だとすれば……。」

「もしかして、俺らの近くに」

「一応アルファ隊でも調べてみるのです！ なんだかその、けーすけ様の居場所も知られた可能性がありますし、その……拙者や明智殿の事まで知っているとこの事は」

「やっぱり、俺らのすぐ近くに連中のスパイがいるって事か？」

「可能性は大きいのですっ」

スパイ。

敵対勢力の情報を得るため、合法違法を問わずに諜報活動をする連中の事である。

まさか……俺らのすぐ近くにサヴィエトのスパイが？

もしいるとしたら誰だよ。詳しい情報を得られるという事は相当近くにいますよ？

もしかすると ソイツは俺らの友達になっっているかも……ってなに考えてんだよ俺は。

だからってよ、友達を疑っていい理由にはならねえだろ。

「ちつくしょう、夏休み初日からコレですかっ！」

「で、でもケーすけ様は安心していてください！ スパイの特定などは全部アルファ隊（アルファ）でやっておきますから！」

「た、頼っていいのか……？」

「ケーすけ様？ 拙者はケーすけ様をお守りする為にここにいるのですよ？ だいじょーぶですっ！ 拙者はこれでもプロなのですよ？ もっと頼ったっていいんですからね！」

「 そうだな。今回は友達（おまえ）を頼るよ」

「はい！ 任せて欲しいのですっ！」

そう言いながら、暮葉は満面の笑みを浮かべてくれた。

けど、やっぱりコイツに任せっきりにするのはよくないよな。

俺もコイツをサポートできるくらい 強い野郎にならなくちゃな。

どんな魔法使いが来ようとも負けねえよな、そんな野郎に

それにしても、連中のスパイって一体誰なんだろうか？

……そういえば、スパイとかよりももっと重要な事を忘れてるよ

うな　　？

その頃、忘れ去られた妹<sup>シスター</sup>さんは……。

「君かわういーねえっ!」

「ハアハア、やべエよ二次元並の可愛さだYO!？」

「ねえねえ写メ盗らせてくださいよっ!」

「お兄ちゃん達どこ!? キモイ男に絡まれてるよっ、助けてお兄  
ちやああああああんっ!」

藤島葵、御愁傷様である。



## 第122話 木良集団（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「どうも！ 作者のテストが終了したので今日から更新再開！」

伊吹「今までで一番長い休載だったわね」

圭介「まあ……それは仕方ねえとして、今日はいくつか報告があるんだ」

暮葉「もきゅ？ 報告ですか？」

圭介「まず第一に短編について。散々掲載するとか言いつつ結局一つも投稿していない短編ですが、今月中には5本全部投稿したいなと思います！」

明智「全く、一ヶ月遅れで掲載とは……計画性が全くないな」

圭介「……つ、次にちよつとした報告。なんと休載中にPVが10万を突破しました」

あかり「おお！ やったじゃないか！」

圭介「読者の皆様本当にありがとうございます！ つで、最後の報告……つというか次回予告でもあるのですが、今回は特別回【人気投票結果発表】を行いたいと思います！」

千早「その……31日まで募集していたアレですよ？」

雪乃「あら、いよいよ発表なのね」

圭介「その他諸連絡は活動報告にて追々する予定です！ 以上、報告終了！」

暮葉「えっと……こ、これからもよろしくお願いします！」

**特別回：人気投票結果発表！（前書き）**

どうも、作者です！

今回は人気投票の結果発表！

なお、今回の話は本編とは全く関係がありません！

あと、駄文かついつもより長くてすみません！

## 特別回：人気投票結果発表！

「んで、一体なんの集まりなんだよコレ？」

初芝高校体育館。

そこにテーブルとパイプ椅子が並べられ、何やらいつもの連中や敵対している連中まで勢揃い。

つていうか敵同士を一か所に集めるってどうなの？

もう既にグラウンドで一戦あつたんだよね……。

「折角の全員集合なのに、どうして貴方はいつつも喧嘩しちゃうの！？」

「あん？ ムカつくクソ野郎がいるからに決まってるだろオが。なあ格下ア？」

「テメエこの久我劉生ナメてんじゃねえぞ、もう一戦やるか最強？」

「おーおおいツラになりやがったなア三下ア。愉快に素敵に殺してやるかア？」

「はっ、おもしれえな……テメエは殺し決定だな」

「ちょっと！ 2人とも喧嘩はダメなんだよ！」

今にも体育館で死闘を始めそうな早川と金髪イケメン野郎。

それを止めるツインテの女子であるが……暮葉も早川とは敵同士じゃなかったっけ？

他にも永渕達が黒木らと殴り合いそうになるし、俺もアナスタシア

あたりに喧嘩を売られ……。  
もう、人も会場もボロボロです。  
とりあえず、俺らをここに集めた張本人に直接理由を訊くでしょう。  
……っと、思ったのだが。

「てめえ……なんなんだよそのコスプレは？」

俺は思わず彼に突っ込んでしまった。

俺たちをここに召集した人物。その正体は暁美ほらのコスプレをした西園寺雪乃であった。

「あら、藤島君の大好きなほむほむよ？」

「なっ！？　なんで俺がほむほむ好きだってわかったんだよ……？」

「藤島君はほむまど派だって木下さんが言っていたわ」

「暮葉の野郎う……さてはま　マジ見やがったなっ！」

だからって西園寺にほむほむのコスプレ着せるなよ。

確かに西園寺は黒髪ロングだし、コスプレすればそこそこ雰囲気はほむほむに似るけど……。

待てよ、そういえば今日暮葉を見てねえぞ。暮葉のヤツはどこで何を？

待て、暮葉の髪の色って確か桃色で、まどかの髪の色も確か似たような色で……ま、まさか？

「けーすけ様あーっ！」

「あ？　げっ、予想通りかよっ!？」

髪は元々だから仕方ないとして、あの魔法少女のような服は間違いないねえ……あの野郎っ！

「どうですかコレ、結構高かったのですよ！」

「ああ、お似合いじゃねえの？ って、お前ら揃ってなんなんだよ！」

「あら、貴方はコスプレが嫌いかしら？」

「ひどいのです！ 折角本気になって選んだのに！」

「そういう問題じゃねえ！ オイ西園寺、結局ここに全員集めたのは何の為だよ！？」

俺はそれだけでいいから知りたいんだよ。

伊吹も明智も小坂も野郎共も写真部のみんなも……。

つーかここにいるヤツ全員困惑してんだよ！  
さアて答えてもらおうか西園寺……こんなに大勢を体育館に収容し  
やがった理由を　！

「あら、人気投票の結果発表よ」

「へ？ け、結果発表？」

「そう……ネットに掲載も考えたんだけど、面倒くさいわよね？」

「待て、面倒くさいのはお前だろ？ 絶対HP作るのが面倒だった  
だけだろ？」

「失礼ね。現代人は何でも機械に頼り過ぎよ」

「そういう問題じゃねえだろ！　つーか直接全員集めるほうが大変だろ！？」

「あら、そういうえばそうかしら？」

わざとらしくニヤニヤ笑ってやがる……コイツ、さてはカオスな状況作って遊んでるな。

でもって本来の目的忘れてるだろ。結果発表なのに中々発表しねえし。

しかも、この時点で文字数1300超えてるんだぞ。ったく……いい加減に発表しろっ！

「けーすけ様、イライラしちゃダメなのですよ？　ほら、煮干し食べてカルシウムを」

「うつせ黙れ！　いいからさっさと結果発表せんかいつ！」

「相変わらず短気ね……貴方絶対早漏でしょ？」

「こんな大勢いる中で下ネタ言ってるじゃねえ！」

「けーすけ様、そろそろうつてなんですか？」

「聞かなくていい！　そして知らなくていいんだ暮葉！」

「ちなみに、誤解されないうちに言っておくけど私は処女よ？」

「そんな事誰も聞いてねえよ！」

コイツら俺を弄って遊んでやがるぞ。

しかも、こうしている間に文字数はついに1500……いや、1600を超えてしまった。

あと半分で3000文字じゃねえか。いい加減に始めるよ、読者も多分飽き始めているぞ？

っと思っていたその時、パンと言う柏手を打つ音が体育館中に響いた。

それはステージのほうから聞こえた。

体育館にいた連中はその音を合図に、一斉にステージのほうに顔を向けた。

「いい加減にしる。中々始まらないし読者もそろそろ飽きている頃だ。早急に人気投票の結果発表をしたほうがいいと思うぞ」

おお勇ましい……明智が壇上で堂々と説教をしているぜ。

ありがとう明智。お前のおかげで少しは話が進みそうだよ。

ったく……正体された明智が活躍して、主催者の西園寺が何もしないってどうなんだよ？

でも明智の行動のおかげか、西園寺もいい加減本来の目的を思い出したようだ。

西園寺は慌ててステージに登り、明智からマイクを取って深呼吸をしていた。

……ったく、最初からそうやって仕事しろよな。

「失礼、大分本題とは関係ない話になっていたわね。それではこれより人気投票の結果を」

「一位は最強のオレに決まってるだろオが三下ア」



「ふざけんなよ早川……テメエは殺し決定だな」

「に、人気投票ならミネットも負けないかも」

「拙者が一応メインヒロインなのですよ!? だから拙者が一位なのです!」

「なっ!? め、メインは私よ私! 別にばか圭介の為に一位になりたいってわけじゃないけど……えと、とにかく私が真正正銘のヒロインなの!」

「そんなのやるまでもない! あたいが一位なのは決定事項だろ!」

「い、一位はわたしです……そして、先輩の恋人ポジションを」

【私が一位、他の追随は許さない】

ダメだこりゃ……早川&金髪だけならまだしも、暮葉や伊吹達まで暴走してやがるぞ?

「いい加減に黙れ! 順位の発表ができないだろうが!」

しかしざわめいていた会場は、明智の一喝によって一瞬にして静まり返った。

流石明智、やっぱりアンタがいないと物語は進まないぜ。

メタ発言をすると明智は確か、連載当初はそこそこ人気のあるキャラだったハズ……。

案外一位は明智だったり……って、そんなのわからねえよな。

俺だって順位は知らないんだ。下手したら俺……ビリだったりして？

「それでは結果発表を始めるわ。この順位は9月1日午後5時ごろに集計したものよ。まずは10位からの発表ね」

西園寺がマイクと紙を持ってそう告げる。

おそらくあの紙は順位表、俺たちの名前が記載されているものなんだろう。

西園寺はそれを読むように言葉を続ける。

「第10位。10票で浅間あかり、青山千早、白藤早苗、明智光昭の同列ランクインよ」

「え、あたい10位なのか？」

「……そんな、えと……白藤先輩は登場が遅かったから仕方ないとして……わたしまで10位？」

【私は納得、ここから舞い上がる予定】

「ちょ、こんなの不正だっ！ あたいは主催者の西園寺先輩にクレームつけるからなっ！」

どうやら、白藤と寝ている明智光昭以外、この結果に納得できないようである。

いやいや10位だぞ。今回きつと10位以内にすらランクインできなかつたキャラも多いハズ。

それで文句を言うのは贅沢な気が……。

あと明智の爺さん起きろよ……折角出番のあるチャンスだったのに。

「フフ、これは厳正な投票による結果よ？」

「……な、納得……できないですよ」

「そーだそーだ！ 白藤と千早はともかく、なんでこんな爺さんとあたいが同じ順位なんだよ！」

「それが現実よ？ 現実を見なさい……ふふふ」

西園寺の冷徹な笑いに恐怖し、青山さんは後退りをしてしまった。あかりは強情にもまだ食いつこうとするが……まあ、いつまで持つ事やら。

「う、ぐ……とにかく、あたいはこんなの認めな う、わっ!？」

その時、突如体育館に乱入してきた黒服の集団に、あかりは両腕を掴まれてしまった。

そしてそのまま、強制退場させられるように、あかりは黒服達に連れていかれてしまったのだ。

えぐっと、その……まあ色々突っ込みたい事はあるんだ。

けど、ここは素直に西園寺に突っ込んででもいいんだらうか？

いや、突っ込まなければ俺の気が済まないぜ。

「お、オイ西園寺！ 今あかりを連れ去った集団はなんだよ!？」

「青山家の執事達よ。ちょっと青山さんに無理を言っただけ……彼らは暴動処理兼クレーム処理課として仕事をしてもらっているわ」

「く、クレーム処理って……」

「……すみません、先輩。その……圧力かけられちゃいまして……」

「青山さん、西園寺の圧力には勝てねえよ……」

ひどい現実だ！

西園寺の圧力つてのがどんなものかは知らんが、いや知りたくもない。

けど合法的なものとは思えねえな。うん、きっと知らないほうが幸せな方法であろう。

それよりさつさと人気投票を進めて、地獄から解放してもらったほうがいいな。

「続いて第9位。12票でこの私、西園寺雪乃がランクインよ」

「って、てめえ自身じゃねえかよ！」

「あら、藤島君何か御不満かしら？ 登場が遅かった割には十分な快挙だと思うわよ？」

「……なあ西園寺、この投票つてやらせじゃねえよな？」

「違うわ。読者の皆様による厳正な投票よ」

「……………」

もう突っ込む事すら面倒になってきた……もういいや、先に進ませよう。

このままだと永遠にこの話が続きそうだ。

「第8位は14票で小坂亜紀よ」

「とおっ！」

西園寺が小坂の名前を読んだ瞬間、小坂がロケット推進の航空機の如く壇上に登ってきた。

ぐは、おっぱいすげえ……じゃなくて、どうしたんだよ小坂のヤツ！ そりゃ8位にランクインして嬉しいのはわかるが、いくらなんでもテンション高すぎだろ！

「あたしのような脇役が8位……？ 嬉しい、嬉しいよ……けど贅沢を言うとなんで1位じゃないのかな？ 巨乳キヤラは問答無用で人気が出る法則は一体どこに きゃあっ！ ちょ、なに離してっ！」

壇上で西園寺からマイクを奪い、ひたすら持論を語っていた小坂。しかし、結果発表の進行を妨害したせい、小坂はクレーム処理課の連中に連れ去られた。

小坂……哀れ。いや、全然哀れじゃねえかも。

8位なんだぜ？ 贅沢言わずにそこで納得しとけよ……。

「はいはい、じゃあ次は7位。16票で明智凧紗よ」

「7位か……まあ私はギャーギャー騒がないから心配するな。この順位に納得するでしょう」

あれ、意外と明智の順位が低かったな。

つーか、あかりや青山さんの順位も意外と低かったよな。

一位上位には誰かランクインしてんだ？

ちよっど……というかかなり気になる所だぜ。

あと素直に現実を受け止め退く明智　　なんか、ちょっとカッコよ  
かったぜ！

「続いて6位。17票で……えつと金、髪リーゼントの名前。なん  
だったからしら？」

「オイ！　船木健太だこの野郎っ！」

「それにしても現実不思議よね。なんでこんな脇役のダサイリーゼ  
ントがランクイン　」

「コラアテメエ！　リーゼントナメてんじゃねえぞ！？　ツツパリ  
の定番はリーゼントだ。その他の髪型？　ハツ、気合い入ってねえ  
んだよ！　今時のチャラチャラした髪型よりもリーゼントのほうが  
数千倍は気合い入ってんだ！」

「……はあ。クレーム処理課、出番よ？」

「　つまり言うとな、リーゼントは最高の髪で　　ってうわ、  
なんだテメエら何しやがるブツ殺すぞコ……あぎゃああ！　ちよ、  
痛い！　痛いってば馬鹿野郎！　やめ、うああ畜生覚えてろっ！」

あゝあ、本日三人目の犠牲者だよ。

つーか船木さん、すっかりただのネタキャラになっちまったな。  
なんというかその……折角いい順位になったのにあまりにも不憫す  
ぎる……。

「さて、変なリーゼントが消えた所で第5位を発表するわ」

ひでえ……西園寺は船木を変なリーゼント扱いしてるよ。

船木健太。一応俺が永渕に勝つキツカケを作った、悪人だけいいヤツキャラだったのに。

「第5位、18票で早川悠よ」

ここで本作の第二の主人公的なヤツがランクイン。

まさかの元々敵キャラだったヤツだよ。

体育館の奥から不自然にまで白く、白く、白い、狂ったソイツが杖をつき歩いてきた。

ここで西園寺が早川に近付き、マイクを彼の口元まで持っていく。

「一応貴方にも聞いておくわ。第5位になった感想をどうぞ」

「第5位だア？ ふざけんじゃねエよ……最強のオレがなんで第1位じゃねエンだよオ！」

おいおいちょっと待て早川！確かに最強だけど何か違う！

第1位つてもろアレだよ。あのロリコンベクトル野郎の事だよね！？

「一応言っておくけど、男性キャラでは貴方が一番人気だったのよ」  
「？」

あ、この西園寺の言葉で全てを確信した。

どうやら俺は10位以下らしい。

という事は、早川の上にランクインしている人々は全員、可愛らしい女の子って事ですね。

しかし、早川はやっぱりこの結果に納得がいかないらしく、

「ぶっざけんじゃねエぞオ！ 読者の三下がアアアア！」

「ちよ、貴方がキレたら青山家の執事どころじゃ解決できないわよっ」

「あぎやはははっ！ あっはぎやはははっ！」

早川は首筋のスイッチを押した。すると、まるで復活したかのように超能力を使い始めたのだ。体育館内に暴風が吹き荒れ、テーブルとパイプ椅子が全て宙に浮かぶ。

それだけではない。ガラスと言うガラスが全て割れ、気がつけば体育館の扉も破壊されていた。

一応青山家の執事が止めに入ろうとするが、結局彼らはただの人間。体術以外に能力があるわけでもなく、結局超能力者の早川悠の前では無力同然。

パンチやキックは早川の暴風の膜で反射され、執事が撃った銃さえも彼は反射していた。

弾かれた銃弾が四方八方に弾かれ、早川を撃つハズの銃弾が俺達を襲っていやがる。

ちよっと待て。ヤツを止める!!俺達が危険じゃねえかよ!

「……仕方ねえ。オイ西園寺……気に食わねえけど俺と手え組んで早川を止めるぞ」

「久我……ふふ、仕方ないわね。ヤツを止めない事には結果発表もできないわ」

「仕方ないですね。拙者も協力するのです!」

「はわわわっ！ ちよ、ミネットが止めるよっ!」



こうして戦える者は全員、暴走した早川悠との戦いに身を投じたのだ。

しばらくお待ちください

結局早川は俺の右ストレートで気絶し、そのまんま保健室に運ばれたのであった。

神様、どうか早川が保健室で暴走しませんように。

「それでは気を取り直して、人気投票結果発表の続きをするわ」

ポロポロになりながらも、マイクを持って司会を行う西園寺。ようやく結果発表再開である。

早川め、散々会場を荒らしてくれたせいで疲れたぜ。

戦闘の後は会場の復元作業。そのせいでもう夕方になっちまったじやねえかよ。

やっぱり、ネットに結果を掲載したほうが安全だったんじゃないか？

「第4位は22票で藤島葵よ」

「えっ！？ あ、葵が4位！？ う、嬉しいな……ありがとうみんな！」

あれ、葵が4位という結果に満足しているぞ？  
ちよっと待て……こんなの葵じゃねえぞ。

ここは一つ、兄が妹の本当の気持ち確かめてやるとしよう。

「葵、本音はどうなんだ？」

俺は葵に尋ねると、葵は半眼になって、

「葵が4位？　ありえないよ！　こんなの不正に決まってるよ！　葵は1位になってお兄ちゃんと結ばれる運命なんだよ！？　それなのに4位って……これじゃお兄ちゃんと結婚できないじゃん！」

やっぱり……これでこそ我が残念な妹だよ。

っていうか、別に人気投票で葵が1位になってもさ、俺達実の兄妹なんだから結婚は無理だろ。

葵はその後黒いオーラを放ちつつ、ぶつぶつと文句を言っているが……。

まあ、ここは放置しておいたほうがいいだろう。

下手に三国干渉的な事をやると、多分会場が再び炎上しちまうハズだ。

やっぱり葵は放置プレイすべきだな。

「さて、いよいよ上位3名の発表……と行きたい所だけど、ここで惜しくも10位以内にランクインできなかったながら、作者が印象に残ったキャラを紹介していくわ」

西園寺が今までのように、調子よさそうにそう言い放った。

へえ、そんなマイナーなキャラ紹介する必要あんの？

ふとそう思ったが……ちょっと待て、俺10位以内にランクインしてないっばいじゃん。

うっ……実際の所、俺に誰か投票してくれたんだらうっか？

「まずは1票だけ藤島圭子ってのがいるわ」

「は？ け、圭子って……おい俺じゃねえか！」

誰だよ女装した俺に投票したの！？

「僕は納得できないぞ！ あの全校の男子が憧れた圭子ちゃんがたつたの1票！？」

「俺もおかしいと思うね。どうして圭子ちゃんがたつた一票なんだろう？」

圭子ちゃんの順位が低い事に腹を立てる大吾と重原。

「てめえら、いい加減に圭子〃俺だと気付けよ……」

結局、俺はいつまでコイツらの中で圭子ちゃんなんだろう？  
まあそんな事は放っておこう。コイツらに変な幻想を抱かせておくのも面白いかもしれない。

とりあえず、今は圭子ちゃん〃女の子だと思わせておこう。

「それじゃあ次発表するわ。7票の永淵晃よ」

永淵？

ああ、あのガチ悪役に投票した人っているんだ。

まあ確かに、この作品始まって以来の外道キャラだったけど……。

「俺がたつたの7票！？ ざけんじゃねぞコラア！ こうなったらテメエらに思い知らせてやる……白陵高校の恐ろしさを っとなにしやがんだっ！ 離せテメエ！ 俺は伊吹ちゃんとやてえんだよー！」

その外道も今やこの有様。

永洩は小坂や船木同様、青山家の執事に連れていかれてしまった。

永洩……アンタ強かったよな。

でもこうして見るとやっぱり……早川には及ばないんだな。

「それじゃあもう一人紹介するわ。6票で藤島圭介……そう、藤島君よ?」

げえ、俺永洩より下なのかよ……まあ仕方ねえか。

俺なんて多分ありふれた主人公キャラだし、これと言って特徴もないからな。

そんなテンプレ主人公に6票も集まったんだ。これでも奮闘したほうだろう。

「まあ……なんつーか。俺なんか投票してくれてありがとな」

「ついでに、これは感想欄に書き込まれた事よ。藤島君、貴方の上条 麻な性格は読書に飽きられてるわよ?」

「へ? ちょ、待って……それって俺が知らない子みたいじゃ」

「事実だから仕方ないわよ。悔しかったら新しい事でも始めればいいんじゃないかしら?」

「う、ウソだ……俺が知らない子だなんてウソだアアアアアアアアアアアアッ!」

「……次、行ってもいいかしら?」

……おっといけない。俺とした事が取り乱してしまったぜ。

どんな時でも冷静でいられる者こそ、真の変態と言う名の紳士なのだ。とにかく冷静になろう。変態紳士を名乗る為にも、スムーズにこの企画を進める為にも。

スーハースーハ……ふう、大分落ちついたぜ。

「それでは第3位を発表するわ。29票で木下暮葉よ」

「もきゅ!? せ、拙者ですか!?!」

「ええ、間違いなく貴女が三位よ」

「え、にゅふふつ。一位じゃなかったですけど……ありがとうございます!」

やっぱり暮葉は素直でいい子であった。

これまでの奴らとは違い、自分の順位に不満を覚えて大暴れする事はなかった。

「まあ貴女はメイン的な扱いだから、そこそこ人気があるのは当然だと思うわ?」

「いや待てよ西園寺。メインヒロインが人気ねえ作品って結構あるんだぞ? それを考えたらやっぱり暮葉はかなり奮闘したと思っぜ?」

「その、ありがとうなのです!」

暮葉はニコツと満面の笑みを浮かべた。

何かかズッキューンと胸にくるような感覚。

ああ、まるで天使や……危なく俺も萌え死ぬ所であった。

「それじゃあ次へ進むわ。第2位の発表よ」

いよいよ第2位か……少なくとも男キャラで一番人気は早川悠。女の子キャラである事には間違いないが、さて……一体誰であろうか？

「第2位。43票でミネット・ローランよ」

「ええええええええ！？ み、ミネットが！？ ホントにミネットが2位なの！？」

ミネット　　って名前らしい、小柄な女の子が驚いた表情を見せた。顔を左右に向け、あたふたした動きを見せていた。やがて、彼女は西園寺に迫って、

「ホントなんだよね！？ ホントにミネットが2位なんだよね！？」

「間違いないわ。厳正な投票の結果よ……貴女は胸を張れる順位に見事輝いたのよ」

「しかも3位の拙者とは随分差があるのです……でも、それだけミネットさんが人気だったって事なのですよ！」

「し、信じられないよ……だってミネットは登場遅かったんだよ？ 他の人達よりもずっと遅い登場だったのに……」

そう言った後、ミネットはハッと笑顔を浮かべて、

「ど、読者の皆様！ えっと……投票してくれて本当にありがとう

！ ミネット、すつごく嬉しいんだよ！」

ミネットはぺこりと一礼をした。

しかし、この素晴らしい霧囲気をぶち壊す　一人の男がステージに上がってきやがった。

ソイツは金髪長身のイケメンであり、残念ながら初芝高校の制服を着ていやがる。

彼は西園寺から強引にマイクを奪うと、

「10位の僕の妹のあかり、3位の木下君。そして2位のミネット・ローラン君……この三人に共通する事、それは三人ともロリな体型であるという事。そう　きっとこの小説の読者にはロリコンが多いと言う事だ！」

彼　妹とは大差をつけられ10位外だったあかりの兄、浅間英樹は熱くそう演説していた。

え〜と……なんつーか、アイツなに言っただやがるんだ？

「貴方は確か……この高校で最も評判の悪い残念なイケメンさんかしら？」

「つーか部長なに言っただよ！」

「だってそうじゃないか！　三人ともロリだよロリ!?　特に木下君とミネット君は大人気、これはもう読者にロリコンが多い決定的な証拠ではないか！」

「いくらためえがロリコンだからって、その指摘は流石に読者に失礼すぎるだろ！」

「いや！ ロリコンである事は誇るべき事だよ！ そう……【魔法少女に会っちゃった場合】の読者を増やす為には、戦闘シーンなんかよりも……ロリっ娘の登場のほうが効果的！」

「そんなんで読者が増えるわけねえだろ！」

「確実に増える！ 事実、あるゆる作品でロリキャラは結構人気なのだ！ そう、ロリこそ至高の属性だ！ yesロリータNoタチ！ ロリロリロリロリロオオロイイイイイイイイタアア　ぐふっ！」

あまりにも騒がしかった為、俺は浅間部長の鳩尾をぶん殴ってやった。

喧嘩慣れしていない彼は、俺のような素人の一撃でも簡単に沈める事が出来た。

彼が気絶した瞬間、会場はとても静かに……浅間部長がいかにかにウザいかよくわかつたぜ。

浅間部長はその後、青山家の執事によってどこかに運ばれたようである。

まあ、当然の始末であろう……さて、そろそろ結果発表に戻るとしよう。

西園寺が気を取り直したようにマイクを持ち、再び司会としての仕事を始める。

「……それでは、数々のキャラクターを追い抜き、見事1位に輝いた人を発表するわ」

会場に緊張が走り、体育館内にいた人々が固唾かたずを呑む。

所詮はラジオだが、ドラムロールが通常よりも長く鳴る。

俺も思わず力が入り、気がつけば両手の拳をガツチリと握り締めて



いた。  
一方、西園寺もマイクを握り締め、大きく息を吸って腹に力を入れて

「第1位、66票で国宗伊吹。藤島君のツンデレ……いや、ツツパリかしら？とにかく幼馴染ポジションのキャラクターが堂々の1位ランクイン！」

瞬間、会場内わあああああ！と歓声が沸き上がる。

「わ、私が1位……？」

呆然とした声を上げた伊吹。

その姿は普段のツツパリ伊吹ちゃんのものではなく、正真正銘一人の女の子の姿であった。

「おめでとう、心から祝福するわ」

西園寺が伊吹に近づき、多分心からそう思っている事を伊吹に言った。

俺もおめでとうくらいは言おうかな。

というか、伊吹が一位なら俺もすっげえ嬉しいよ。

「おめでとう伊吹。やっぱりお前はすごいな！」

「それじゃあ第1位の国宗さんには是非、感想を言ってもらおうと思  
うわ」

伊吹は顔を紅葉のように真っ赤に染めて、かなりおろおろしていた。しかし我に帰ったようにハツとし、俺達から視線を逸らすように俯

いてしまった。

だが、それでも彼女の瞳は大変潤っており、顔もかなり赤く染まっている事がまるわかりである。

「う、嬉しくなんかないわよ……？　で、でも一応ありがとうって言っておく……っ」

そして、強がっているような一言。

まあ予想通りの言葉である。コイツは全く素直なヤツじゃないからな。

きつと、内心は騒いで踊りたくなるほど嬉しいに違いない。

俺の幼馴染　国宗伊吹とはそういう人なのだ。

ハハッ、なんだか見ていて可愛いな。よし、ちょっとからかってやろうかな？

「はにやつ！？」

俺は伊吹の頭に優しく手を置き、それをゆっくりと動かし彼女の頭を撫でてやった。

伊吹は絶対赤面癖だよな。そう思うくらい彼女の顔は真っ赤になっていたのだ。

一見、ただ恥ずかしそうにしている風にしか見えない伊吹。

だけど、その表情はどこか嬉しそうでもあったので、

「嬉しいのか？」

「ば、ぱか圭介……っ！　べ、別に嬉しいとか……そんな事は全く……っ」

「答えてくれ。俺はお前の気持ちを確かめたい、伊吹の事をもっと

知りたいんだ」

「ええっ!? け、圭介っ!? え、えと……あのっ」

「うん、だから 結婚しよう!」

「……えっ!?」

さくでここで伊吹の拳が飛んでくるハズだ。

あの流れからのまさかのプロポーズ。こんな馬鹿な方法失敗するに決まっているだろう。

だからこそからかっているって事だ。

そもそも、伊吹に結婚しようって言っても、彼女がそれを受け入れる事だなんて

「い、いいわよ……? どーせ圭介なんて彼女出来ないもんね!

仕方ないから私がお嫁さんになってあげるわよっ! で、でも……

その、その前にちゃんと恋人として付き合いなさいよね……っ!」

「……えっ? ハッ!？」

予想外すぎる伊吹の回答……思わず呆然としていた矢先 背後から凄まじい殺意を感じる。

ふと振り向くと そこには会場内に居た野郎共が、まるで獲物を確実に仕留める目で見ていた。

「藤島テメエ! 俺の伊吹ちゃんを落としてんじゃねえよ!」

「いくら幼馴染同士だからって、流石に今のはボクもムカついたでえっ?」

「リア充死ね！ 爆発しろ！」

やべえ……黒木に赤佐に大林がキレてる。

いや、アイツらだけじゃねえ 大吾と重原を除く殆どの男がキレてやがるぞ！？

しかし 命を狙われている俺に救いの手が、

「ほら圭介！ 殺されないうちのその……ま、まず家に行くわよ！  
りよ、料理くらい御馳走してやるんだから……っ！」

「えっ？ ちょ、伊吹さん何故に手を！？」

「は、にや……ああ、あたりまえでしょ！ あんたと私は恋人なんだから！」

「ちょ、待て！ なんか違う！ 予想と展開が180度くらい違うぞ！？」

どうしてこうなった！

俺に対する好感度がマイナスなハズの伊吹が、なんで俺の冗談を真剣に受け止めちまったんだ？

そしてなんで、俺だけが野郎共に命を狙われているんだ？

ああ、きつとコレはアレだ……うん、アレでしかない！

「ああもう！ 不幸だあああああああああああああああああああああ  
あああっ！」

伊吹に引っ張られながら俺は思わず、そんな説教ウニ男的な事を叫んでしまった。

「……はあ、もう收拾つかないわ。ちなみに今後の話だけど、1位に輝いたキャラの1話完結ストーリーを描くわ。今回の場合は国宗さんのショートストーリーね。多分今月中に投稿すると思うので読者の皆様、期待してくれるととても嬉しいわ。それと、全キャラの順位は後々活動報告にて掲載するので、今回未登場だったキャラの順位もわかるから必見モノだと思うわ。それじゃあ今回はここで終わるけど……」

「う、うそ……さっきの告白が冗談って……ば、ばか圭介死ねえっ!」

「だああああっ! ふ、不幸だあああああっ!」

「……これ、今日中に帰れるのかしら?」

皆様、ご愛読ありがとうございます! 今後も頑張りますのでよろしくお願ひします!

特別回：人気投票結果発表！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

・後書きトークコーナー

圭介「……不幸だ」

伊吹「自業自得よ」

暮葉「確かにけーすけ様、アレは自業自得なのですよ？」

圭介「伊吹だけならまだしも、まさか野郎共にまで殴られるとは……不幸だ」

暮葉「それにしても伊吹さんのショートストーリーですか、どんな話でしょうね？」

伊吹「えっ？ そ、その……大した話ではないと思うわよ？」

暮葉「そうなのですか？ でも拙者は楽しみなのですよ！」

伊吹「あ、ありがとう……っ」

圭介「てめえら！ 俺は無視ですかスルーですか！？」

伊吹「ん？ け、圭介……あんたまだいたの？」

圭介「うわあああああああああああああつ！」

## 第123話 行かないカ？

夏休みもかれこれ一週間が経過し、そろそろ7月も終わろうとしている頃。

俺は相変わらず、ぐーだら引きこもりライフを満喫していた。

別に好きで引きこもっているわけではない。暮葉に言われて俺は引きこもっているのだ。

それは夏休み初日。

大量出費しちゃったし、葵に強姦されかけ不良にも絡まれ、終いには大事に巻き込まれ……。

もう、不幸としか言いようのない一日であった。

しかも、どうやら俺達の周囲にサヴィエトのスパイがいるらしく、その調査の為に暮葉が今アルファ隊と頑張<sup>なま</sup>っている所だが、その件で俺は……。

「まさか暮葉に外出を規制されるとは……」

そう、外出禁止令である。

敵は常に俺達を監視している可能性がある。

だから、大胆かと単独での行動は控えるべし　　つと暮葉から言われてしまったのだ。

従って俺は……よっぽど重要な事でもない限り、外出ができなくなってしまうのだ。

うう……外出する事さえ制限かけられるとは。やっぱ今年の夏は口クでもねえぜ。

「ああもう！　なんか無性に外出たいよっ！」

でも外には出れない現実……はあ、なんたる悲劇なんだろう。

ああ……せめて買い物くらいには行きたいぜ

けどなあ、買い物に行くって言って秋葉原に行った結果が 外出  
禁止令発令だもんな。

俺、もしかして呪われてんのかな……？

『 』

「うわっ!？」

び、ビツクリしたあゝ。

携帯って不意に鳴ると本当にビツクリするよな。実は結構心臓に悪いんじゃないのか？

まあそんな事はともかく、電話らしいからさっさと出ないとな。

って……なんだ浅間部長か。浅間部長から電話をかけてくるとは珍しいな。

一体何の用だろう。まあロクな用じゃねえとは思うが……。

そんなしょうもない事を考えつつ、俺はボタンを押して電話に出た。

「はいもしもし、藤島ですけど」

『 いやあゝ突然悪いね藤島君！ もしかして今絶賛自家発電中だった？ 』

うわあ……朝っぱらからきわどい下ネタだ。

いくら変態の俺でも流石にこれはキツイ。

「部長、いたずら電話なら切りますよ？」

『 ちよ、冗談だから電話は切っちゃダメ! 』



「はあ……んで、一体何の用なんですか？」

『うん、今日エロ同人誌を読みながら藤島君に電話をしたのは他にもない、合宿のお知らせだよ』

浅間部長はやっぱり最低の変態野郎である。

フツー読みながらもそれを態々言うヤツがいるか？

フーか、それ以前にエロ同人誌読みながら電話するなよ。

まあこんな事を気にしても仕方ない。浅間部長が残念なのはいつもの事だからな。

とにかく、エロ同人つてのはまあ……気になるけどスルーしておく。

「合宿？」

『そつだよ合宿だよ海だよ水着だよ！』

「よし、出来れば手短に説明してください」

『夏休み、合宿、青山家別荘』

うん、結局合宿で何をしたいのかサツパリわからない。

「……とりあえず、夏休みに青山家の別荘で合宿するってのはわかりましたよ」

『それで十分じゃないか？』

「十分じゃねえよ！ なんでいきなり合宿なんですか！？ しかも青山家の別荘って一体どういう事なのですか！？」

『いやあ、他の部活は夏休みに合宿を行っているし、我が写真部も合宿くらいやったほうがいいのでは？　っとボクは思ったわけだよ。青山君の家の別荘は青山君に無理を言っつて、あくまで合法的に3日間だけ借りれる事になったんだよ』

つまり他の部に負けているのが悔しいから、合宿の必要がない部活で合宿をする？

なんてひどい理由なんだ。結局活動内容は語られなかったし、これは遊ぶだけになりそんな予感。

しかも、あくまで合法的に借りたつて……その合法的<sup>くわくはく</sup>つて言葉が怖いよ。

きつと浅間部長と青山さんは、暴力団と警察の裏取引も真つ青な事をやつたに違いない。

だつて相手はあの青山家だぞ？

それ程ブラックな事でもしない限り、「はい別荘解放します」なんて展開になるハズがねえ。

「……そ、それで……合宿つて強制参加？」

『強制はしないさ。ただ、参加しない部員の個人情報流出してもボクは責任を』

「待てコラッ！　個人情報流出つてなんだよ！？　なんでそうなるんだよ!？」

『いや、青山家とはそういう契約で……』

「どんな契約だよ!！」

恐ろしい契約してんじゃねえよ！

これならキュウベえと契約して、魔法少女になっちゃったほうがまだマシだぜ。

絶対に参加せざるを得なくなる契約……そうか、わかったぞ。

これはきつと青山さんのせいだ。

青山さんが夏休みに俺と会う為に仕組んだ　　って、こんな事考えるのはよそう。

流星に今の想像は青山さんに失礼だ。青山さんがそんなヤクザみたいな事をするハズがない。

いや、絶対にそうだと信じたい　　！

『まあとにかく、自分の身を守る為にも、今回の合宿には参加したほうがいいと思うんだ』

「自分の身を守るって……部長、それただの脅しじゃないっすか？」

『心配しなくてもいいさ。ボクだって脅されている側だ……プッ』

「ウソつけ！　最後笑ってたじゃねえか！」

バレバレなんだよ浅間部長。そもそも、その契約が本物なのかすら怪しいわ。

でもなあ……もし本物だったり怖いし、やっぱり身を守る為に参加すべきなのか？

だけど合宿って事は当然、外に出ないと行けないんだよな。

アレ、ひょっとして俺……参加できないんじゃないじゃねえか？

『まあとにかく藤島君は参加する方向で。日程は8月4日から3日間、それじゃあ木下君と葵君にもこの事を連絡しておいてくれたまえ。では……』

「えっ？ あ、ちょっと部長！？ 部長オオ！」

ブツツ、という音が響く……うう、あんのクソ部長逃げるように電話を切りやがった。

……え〜っと、どうすりゃいいのこれ？

身の安全の為に参加したほうがいいんだろうが、外出禁止令発令中だしなあ。

まあ、一応暮葉と葵にこの事を伝えておくか。

あんまり期待はできねえけどさ。とにかく連絡だけでもしておこう。

っと、言うわけでみんなで揃って夕飯を食べてる時に、俺は合宿の話を2人に振ったが、

「写真部の合宿？ って事は千早やあかりも来るんだよね！？」

「行き先は青山家の別荘だし、誘ってきたのは部長だから多分2人も来るぞ」

「やった！ 葵は絶対行くよっ！」

葵が合宿に行きたがるのは予想していた事だ。

なんたつて友達が2人も来るのだ。浅間部長の存在さえ我慢すれば、友達と遊べるいい機会だ。

問題は暮葉である。暮葉自身は行くとしても、俺だけ行けない可能性が……。

暮葉曰く今こそヤバイ時なのだ。

サウイェト連中に身柄を狙われている俺を、そう簡単に外出させてくれるハズがない。

それでも俺は 個人情報を守る為にダメ元で暮葉に訊いてみる。

「暮葉はどうだ？ みんな行くみたいだぜ？」

「もきゅ、そうですねえ……拙者も行きたいのです！」

「そ、そうか。けど俺が行っても平気なのか？」

「もきゅ？ 何を言っているんですか？」

あははは、やつぱりダメかあ～ですよねえ。

だって俺、連中サウイエトに狙われているんだもん。

もし合宿先に魔法使いが現れ、俺を巡って戦闘になったらそれは大変な事態だ。

下手すりゃ俺達が普通じゃないって、葵や写真部の部員達にバレてしまっぜ。

そうなると日常生活に支障が……やっぱ、迷惑になるかもしれない俺は行けないのか

「拙者がいるんですから平気なのです！」

「へ？」

「だから、けーすけ様も一緒に行きましょう！」

「マジ！？ お、俺も行っていいのか？」

「当たり前なのですっ！」

「そうだよ、お兄ちゃんだって写真部の部員なんだよ？」

「おお……か、神よ……っ！」

感激のあまりに目から汗が出てきてしまった。

外出禁止令が発令され、かなり退屈になるかと思われた今年の夏休み。

だが そんな退屈な夏休みももうすぐ終わり。遂に夏休みにビッグな予定が出来たんだ！

丁度いいぜ…… 本当、外出できなくて身体が腐りそうだったんだ。

浅間部長がいるのと、後は変な脅しがあったのがちよつと嫌だけど

…… まあいい。

折角みんなが集まるんだ。それに合宿つつつても何か遊びっぽい感じだ。

だから みんなで行ってエンジョイしようじゃねえか！

生涯。

生涯、俺はこの合宿に行くこと決めた事を悔やむだろう。

なぜならこの後、またとんでもない騒動が起こってしまったんだから

第123話 行かないカ？（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「青山さん」

千早「は、はい……？」

圭介「俺、部長に参加しないと個人情報流出するぞって脅されたんだが……」

千早「えへへ……っ」

圭介「やっぱり貴女の仕業だったんですね！？ そうなんですね！？」

千早「ごめんなさい先輩っ、その……わたし、どうしても先輩と一緒に……」

圭介「青山さん……」

千早「先輩……その、合宿楽しみましょっね……っ」

圭介「おう、まずは青山さんを警察に引き渡してから」

千早「っっっ！ はわっ、だ、ダメです……電話から手を離してください先輩っ！」

第124話 合宿一日目 出発編

それから、俺はずっと室内でぐーだら生活を満喫していた。

満喫、と言うよりは監禁されていたと言うほうが正しいだろう。ただ、それを自分で言うとは悲しくなるんだ。だからまあ、とりあえずは暇人ライフを満喫していた事にしておきたい。そう思いこんでいたい……。

けど、そんな暇人ライフを送っていたらあつと言う間に数日が経過し、今日は8月4日。そう 今日から俺達は写真部の合宿に出席するのである。

「よ、よし！ 忘れ物とかねえよな？ 着替えも洗面道具も念の為にカメラも持った。あとパスポートは持ったかお前ら？」

「けーすけ様……その、合宿先は青山さんの家の別荘なのですよね？」

「え？ そうだけど？」

「お兄ちゃん部長さんから聞いてなかったの？ 千早の別荘は国内だよ」

「……エッ!？」

暮葉と葵がジト目でそう言うと、俺は素で大声を上げて驚いてしまった。

あれ、青山さんの別荘って国内だったっけ？

普通ラノベじゃああいうお嬢様の別荘って、サイパンとかパラオとか海外の南の島にあるモンじゃないっすか？ とにかくこんなの



絶対おかしいよ。折角あるかもないかもわからなかったパスポートを、頑張って家中探してようやく見つけたのに……。  
つか、俺って外国行った事あったんだな。全然記憶にないんだけど、なんで俺のパスポートがあっただらう？  
まあいいか。気にしたら多分負けだらう。

「けーすけ様、ホントに海外旅行に行くつもりだったのですね」

「服までアロハシャツに短パンだしね」

「こ、これはその！ ほら、海辺らしいし暑いじゃないの！？ なっ？」

「……けーすけ様、ウケ狙いなのですか？」

「その恰好、なんかチンピラみたいだよ？」

サングラスにハワイ直送のハイビスカス柄アロハシャツ。黒色の短パンという、超ハワイアンな服装はうちの女の子達には大変不評であった。

「っーかチンピラって……アロハシャツ日常的に着ている人に謝れ！ 確かにまあ、チンピラのお兄ちゃん達もアロハシャツ、よく着ている所を時々目撃はするけどさ……」。

「ええいもうつつせえ！ とにかく、俺が着替えたら早く待ち合わせ場所に行くぞ！」

「国内ですから普通の恰好にしてくださいねー！」

「間違ってもほむほむの服着ちゃダメだよ！」

着るかつ！　そもそも俺、ほむほむのコスチュームなんて持ってねえし！

結局、朝の準備からこの通り滅茶苦茶であった。はあ……まあ、朝が滅茶苦茶になったのは殆ど俺のせいではある。だけどこれからもっと濃いメンバーと合流するんだ。

こりゃあもう先が思いやられるぜ……どうなるんだよ今回の合宿。

その後家を出て待ち合わせ場所に向かおうと　　したのだが。

玄関の扉を開けた瞬間だ。重そうな鞆をアスファルトに置き、気の強そうな鋭い視線を向けてくる一人の少女が、俺達三人の前に立ち塞がるように仁王立ちしていた。

「もきゅ？　あれ伊吹さんじゃないですか？」

「あつ、ほんとだっ！」

「……なにやってんだ伊吹？」

「べ、別に？　あんたについて行くこうとしたわけじゃないわよ……」

……なんつー分かりやすい反応。

そう言えば昨日だったか、俺は伊吹と久しぶりに電話をしたんだ。んで、明日から合宿だって確かコイツにも言ったはずだ。

コイツ……ひよつとして羨ましかったのか？　自分もみんなについて行きたかったのか？

「はあ……んで、結局お前も一緒に行きたいんだろ？」

「なっ……だ、ダメなの？」

「別にあの部長の人格からして、1人や2人増えたってなんとも思わねえだろえけど、でもいいの？ お前確か剣道部だろ？ そっちのほうで用事とかねえのかよ？」

「それなら全然大丈夫よ。もう許可取ったから……って、違うわよ！ 別について行きたかったからじゃ っ」

素直な気持ちで全力で押し殺そうとしているが、まあ分かりやすい事この上なし。

伊吹って下手な推理ゲーより分かりやすいよな。まあ伊吹らしいっっちゃ伊吹らしいけど。

「はいはい。んでっ、暮葉と葵はどうだ？」

「拙者は別にいいですよっ！」

「葵も！ 人数は多いほうが楽しいよ」

「って言ってるけど、伊吹はどうするんだ？」

まあ暮葉と葵が伊吹を拒むわけがない。それはわかりきっていた事だ。

要するにこれは本人の気持ちの問題なんだ。だから俺は再度伊吹に確認をとってみる。

「……し、仕方ないわね。あんたがどうしてもって言うなら行ってやるわよー！」

「へいへい。んじゃあそろそろ行くぞ」

こうしてRPG風に言うと、伊吹が俺らのパーティーに加わったのである。青山さんの別荘が海外じゃなくて国内だったり、突然伊吹が乱入したり……なんか、朝から予想外の出来事ばかりだな。何事もなく無事に合宿が終わればいいが。いや、終わってくださいお願いします。

それから歩く事数十分、ここは青山家の近くにある公園前。

俺達写真部の面々はここで待ち合わせをしていた。

待ち合わせの時刻は大体午前8時前後。つまり今から10分後の話なのだが……うわっ、もう公園に浅間兄妹と青山さんがいるよ。まあよくある展開だが……つか、待ち合わせ時刻より前から待っているってデートかよオイ……。

「おはようございます」

俺がそう挨拶をすると、残りの三人も続くように挨拶を行った。向こうも俺らの声に気付いたようで、

「おお！ ようやく着たかあっ！」

「まったく、エロ兄貴のせいであたら1時間も待たされた……っ」

浅間部長が元気よく挨拶をする傍ら、あかりは不満そうにぶつくさ呟いていた。風の音とかでよくは聞こえないものの、ちらっと聞こえた声によると、どうやらあかり達は1時間も前から待っていたらしい。なんとというか……やっぱりデート気分かよ。しかも浅間部

長のせいって……アンタ、女子2人を立たせたまま1時間も待たせるって最低だと思っぞ。

決して俺達は悪くないハズだ。だって俺達時間通りに来たんだもん。別に悪くはないハズだ。

「……えへへっ、先輩おはようございます……っ！」

「ん？ おう、青山さんおはよう」

不満そうなあかりを見ていたその時だ。青山さんが隙だらけだった俺に話をかけてきた。

後輩にこのように挨拶をされる　むふふ、なんてスバラシイッ！  
だが、一つ警戒しなければならぬ事がある。そう、青山さんは  
　　っ　と警戒していたその時！

「……先輩っ！　だあ……い好きっ」

むぎううううううううううと。

何を間違っただんでしょうか。朝っぱらから青山さんは満面の笑みを浮かべ、大胆にも俺の身体に抱きついてきた。しかも胸のあたりに顔を埋まらせ、ぐりぐりと抉るように顔を左右に動かしていた。すげえ……子供に懐かれる親並に好かれてるぞ俺。

っっていうかやべえ、服越しに感じる女の子の柔らかな感触。鼻にしっかりと入ってくる、女の子のとっても甘くていい匂い……。ぐふっ、これやべえよ萌え死ぬって、俺の股間がマスタースパークになるってッ！

もう頭の中は真っ白。顔が妙に熱くて……多分、俺の顔は真っ赤であろう。そして何よりこの堪らない感触。アカン……このままだと、確実に俺の理性が吹っ切れて股間が暴走しちまうっ！

っと思っていた

「ちえすとおおおっ！」

「ぐ、はびやるあゝっ!?!」

刹那、ゴン！　つという鈍い音と共に感じた鈍い痛み。

ぐにやぐにやと視界が揺らぎ、フラフラと足取りも悪くなっていくのが……あれ、わからん。普通の状態だとすぐわかる事さえわからない。どうやら今の一撃で、俺は一時的に思考力を失ったらしい。んでっ、結局何があったかと言つと、

「あああああんたっ！　朝っぱらからなにやってんのよっ！」

どうやら伊吹が竹刀を華麗に振り下ろし、俺の後頭部にそれを激しく打ち込んだようである。

いてえ……竹刀つつつても後頭部に当てたら危険だぞ？

まあ伊吹は実力者だ。多分加減はしていると思うし、俺だって普通の人間よりは遙かに丈夫だから……まあ、これくらいの衝撃ならなんともないんだけど。

「く、国宗……先輩？　えと、先輩とのスキンシップです……っ」

「もきゅ!?　け、けーすけ様とスキンシップ!?」

「千早っ！　圭介と千早は恋人じゃないだろ!?!」

「……で、でもスキンシップって今時は当たり前前って」

「そっ、そんなわけないでしょ!」

「そうですね！ そんなに簡単にしているいいものじゃないですよ！  
一見いい事を言っているように聞こえるが、暮葉だって日常的に抱きついてくるじゃん……。」

「と、とにかくだ！ 神がそれを認めてもあたい達は認めないからなっ！」

「そーだよ！ お兄ちゃんは葵のものなんだよっ！？」

女子全員に説教をされている青山さん。なんかその……ちよつと可哀想に見えてきた。

そりゃ確かに、人前で頻繁に抱きつかれたら困るんだけど……アイツらなんでだ？ そこまで厳しく言うほどの事でもないと思うんだが……？

「藤島君、修羅場だね」

「はあ……」

「つで、君は結局誰ルートに突入したいんだい？」

「誰ルートも何も、別に俺はそんなフラグ立ててませんよ……っ」

「相変わらず鈍いね君はあ。まあいい、折角君の幼馴染も来ている事だ。今回の合宿を利用して誰かと距離を縮めたらどうだい？」

「距離ねえ……」

って言われても、恋愛感情がないのに迫られて……。

俺はまあ、そんな事より無事に合宿が終わる事。そして 合宿  
中にラッキースケベがある事を祈っておくよ。

……ってか部長、伊吹が来る事に関しては文句ないんだね。まあ  
予想はしていたけど。

……こうしてメンバーが揃い、数分後に俺達は目的地へ向けて出  
発したのだった。



第124話 合宿一日目 出発編（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「う、ぐ……」

小坂「どーしたの圭くん？ とうとう死に時？」

圭介「死に時……まんざらじゃねえかもな」

小坂「えっ？ じよ、冗談のつもりだったのに……大丈夫？」

圭介「ああ、すつげえ腹が痛いんだ。俺……死ぬのかな？」

小坂「……ぷっ、にやははははっ！」

圭介「笑いごとじゃねえよ！」

小坂「ごめんごめん！ けど、お腹痛い程度じゃ死にはしないよ？」

圭介「いや死ぬだろ！？ 腹痛で死んだ人って多分いるだろ！？」

小坂「腹痛で死んじゃったら、あたし含めて全国の女の子はもう生きてないじゃん？」

圭介「下ネタかよっ！」

小坂「ごめんごめん」

圭介「……なあ小坂、生理痛ってそんなに痛いのか？」

小坂「圭くん、それを女の子に聞くんってデリカシーないと思うよ」

圭介「……サーセンでした」

第125話 合宿一日目 到着編

「はっ!？」

「あっ、けーすけ様起きました?」

「う、ぐ……どこなんだよここは……?」

「もきゅ? もう目的地につきましたよ?」

うっ……すっかり気絶しちまったよ。ちくしょう……ここ数時間の記憶がねえ。すべては浅間部長の運転があまりにも荒すぎたせいだろう。

……あの後、青山家から借りたというグランドハイエースに乗せられ、青山家の別荘へ向かうべく国道だの高速だの峠道だの、とにかく色々な道を走ったのである。

もちろん、ただ道を走るだけで気絶なんかするハズがない。そんなんで人々に気絶されたら、車なんてとっくの昔に発禁を食らっているだろう。

問題は人ではなく浅間部長の運転だ。国道や高速を走っているうちには確かに快適だったよ。

だが、峠道に入った後の事。それは突然の出来ごとであった。狂ったように速く、リアに輝くRのエンブレムが大変眩しい R - 32スカイランGT-Rが俺らを追い抜いていったのだ。

その瞬間からである 兄妹揃って狂い始めたのは。

「いやあ〜久々にいいドライブだったね」

「ぶっちぎりだったな兄貴っ!」

「なにがブッチギリだったなだよてめえら！ 頭文字Gみてえな事してんじゃねえよ！」

……そう、浅間部長とあかりはR32に抜かされた瞬間、闘争心を燃やして某兄貴の公道最速理論の完成形にも近いような走りをし、ブッチギリでR32に勝利したのである。

しかも、R32はガードレールに突き刺さってしまい……多分あれは板金7万円コースだろ。

「でもボクすごいじゃないか。ハイエースでドリフトしたんだよ？」

「すごいけど褒める気ねえよ！ てめえのせいで俺と青山さんは気絶するし、葵は窓に頭打って怪我しちゃうし、伊吹に至っては車酔いで再起不能状態じゃねえかよ！」

浅間部長の暴走運転は散々な結果を生んだ。

暮葉は平気だったっぽいけど、俺と一緒に気絶した青山さんは未だに気絶中。

伊吹も吐き気が激しいようで、現在その茂みに隠れて……まあ詳しくは言わないでおくよ。

「けど、おかげで到着予定時刻より数十分早く到着したんだ。ほら、予定よりも長く遊べるではないか！」

「そうだぞ圭介！ 折角海辺の立派な別荘に来たんだ。細かいことは気にしないで遊べよなっ！」

「……俺、間違った事は言っていないよね？ 普通は公道で暴走しちゃダメだよな？」

しかも、結局遊べる時間は同じだと思うんだ。確かに、浅間部長の暴走運転は予定よりも早く目的地に到着するという結果を生んだけど、肝心の遊ぶ人がボロボロじゃあ何の意味もねえ。気絶だの怪我だの車酔いだのでボロボロな俺達の遊ぶ時間は、結局変わらないどころかむしろ減ったような気がするのだ。だってもう……かれこれ30分以上は皆体調不良を訴えているのだ。きつと、この状況はあと何十分かは続くぞ？　そして遊ぶ時間が刻一刻と減っていく……。

「け、けーすけ様……その、怒ってないで家のお掃除しましょうよ！　やることやってから遊んだほうがいいと思いますし、拙者達が働いている間に皆さん復活すると思いますよ？」

「そ、そうか……つーか暮葉はなんともねえのか？」

「もきゅ？　拙者は全然なんでもないのでですよ？」

「お前、やっぱり強い子だな……っ」

「けーすけ様も気絶こそしてましたけど、今はピンピンしてるじゃないですかっ！」

「はあ、不幸だ……」

とりあえず暮葉の提案通り、伊吹達を休ませている間に仕事をしちまうか。

「部長とあかりも手伝えよ？」

「えっ!? あ、あたかも働くのか!？」

「そんな、ここは青山君の別荘でボクらの別荘では」

「その別荘に世話になるんだからつべこべ言うなよ! つーか、こんな力オスな騒動になったのは部長のせいなんですから、責任取ってちゃんと働いてください!」

「そ、そんな ツ!? ふ、不幸だ……っ」

うつるせえ! 不幸は俺のセリフだよコンチクショー!

その後、俺達4人は面倒な別荘の掃除を行った。一方先程まで休んでいた伊吹達も、流石に昼ごろになると体調が回復してきたようである。まずは伊吹の車酔いが治り、次に青山さんが深い眠りからお姫様のように目覚め、一番最後に現れた葵も本調子に戻ってきたようである。

よかったよかった……って全然よくねえよ。

結局体調が良くなっても疲れている事には変わりねえ。俺達は彼女達に配慮し、彼女達に仕事をさせず4人で働き続けたが……まあ、当然人手不足で当初の予定よりも遅れ、結果的に遊ぶ時間も取れずにお昼ご飯の時間になってしまったのだ。

不幸だ……ちくしょう浅間部長め。ちつとも時間短縮になってねえじゃないか。

やっぱり安全第一。公道ではスピードを落とし、安全に運転をするべきだな。

「はあ……初っ端からすげえ疲れたっ」

「ごめんねお兄ちゃん」

「その、先輩……わたし達が休んでいる間にお仕事をさせて……本  
当に申し訳ございませんっ」

「別にいいよ。こうなったのもあの部長のせいなんだから」

俺はできるだけ優しい口調で2人を慰める。

2人は何もしていないし全く悪くない。何度も言うがこんな事になつたのは、浅間部長の運転があまりにも荒かったせいである。

「あれ？ そういえばクーにゃんは？」

「暮葉ならさつきあかりや部長一緒に買い物に行ったぞ？ アイツ、部長の運転平気らしいから昼飯の買い物に付き合っつてさ」

「ふえ、そうなの？」

「木下先輩にもその……ちゃんと謝ろうと思ってたんですけど……  
っ」

「んー、その必要はねえんじゃないか？」

俺が何気なくそう言うと、2人はえっ？ と言う感じで俺の事を見してきた。

ぐは……っ、2人の上目遣いに思わず死ぬかと思っただぜ。

け、けど男の意地で絶対2人には言えねえ……とにかく今は話を  
続けねえと！

「暮葉も2人に怒ってなんかねえよ。何度も言うけどこうなつたのは部長のせいだから」

「お兄ちゃん……うん、ありがとっ！」

「えへへ……先輩。やっぱり先輩がカッコいいです……」

先程まで表情が曇っていた2人に、ようやく笑顔が戻ってきたようだ。

特に青山さんのセリフ。ちくしょう、青山さんは俺を殺す気かよ……っ！

思わずドキッとした挙句、顔まで微妙に熱いじゃねえか。

「き、気にするな……っ」

あまりの気恥しさに耐える事が出来ず、俺は2人に背を向けてしまった。

背中を向けたまま黙りこむ俺。ただ、手だけは前髪をいじる為に動いていた。

一応照れ隠しのつもりである。まあ隠れているかは微妙だけど……あれ、そういえば伊吹のヤツはどこにいるんだ？ 今気付いたけどアイツ、起きて一回現れて以降見てねえぞ？

多分外には出てないと思うが……伊吹のヤツ、一体どこで何してんだろう？

その頃、伊吹は

「圭介……ムカつく……っ！ デレデレしてんじゃないわ……っ！」



第125話 合宿一日目 到着編（後書き）

後書きトークコーナー！

凧紗「今回短くないか？」

圭介「いや、色々時間の都合で……」

凧紗「執筆時間がなかったと言うのか？」

圭介「はあ、まあ……っーか珍しいな」

凧紗「ん、なにがだ？」

圭介「いや、今回明智の出番なさそうなのに……お前今回は出番がないとか言わないんだな？」

凧紗「まあな、今回は騒がない理由があるんだ」

圭介「理由？ なんだよそれっ」

凧紗「まあそのうち藤島にも分かる事だろうっ」

圭介「そ、そのうちって……まあどうでもいいや」

凧紗「藤島……お前つくづくひどいヤツだな」

## 第126話 海水浴しなイカ？

お昼にみんなでラーメンを食べた。何故ラーメンかと言うと、青山さんの別荘がある地域はラーメンが美味しい事で有名ならしい。昼食がラーメンになったのはその為である。

立派な西洋風の建物のベランダで食べ、そこから眺める大海原。澄んだ空気と程良く吹きつけてくる風。そして 7人で談笑をしながら食べるラーメンは最高に美味しく感じたのだ。やっぱり外で大勢で食べるのっていいよなあ。

まあ飯の話は一旦置いて、現在俺達は下の浜に遊びに来ていた……のだが、

「夏の海ってスバラシイ！ そう思わないかい藤島君!？」

「部長、普通こういう合宿イベントで来る砂浜って、貸し切りとかじゃないんですか？」

「何を言っているんだね藤島君？ ここは観光の街 六角町だ。観光客がいて当たり前だろう」

辺りを見回すと、少年少女やその保護者。水着のギャルや彼氏と思われる男だらけ。

そう この砂浜は結構有名な海水浴場なのだ。

「なんでこういう時だけ現実見るんですか、部長は……」

「当たり前だ。ボクはこれでも空想と現実を区別しているのだよ」

……これほど説得力のない言葉がどこにある事やら。もし浅間部長が捕まって警察に二次元との関連性を迫られたとしても、こんなに説得力がねえんじゃすぐに牢屋行きだな。なんつーか……浅間部長は普段の行いが悪すぎるせいかな、すごくいい事を言っても全然信じられねえ。

やっぱり日頃の行いって大事なんだね。

「お兄ちゃん！」

「皆さんお待ちでしたのですっ！」

その時、聞きなれた2人の元気な声が耳に入ってきた。

俺と浅間部長は衝動的に振り向いた。そこには樂園が広がっていたのだ。<sup>パライス</sup>

「お兄ちゃんお待ちせ！　どうかな……葵の水着？」

天真爛漫な笑みを浮かべ、葵が俺に迫ってくる。

葵は真っ赤なビキニを来ていた。発展途上とは言え中々素晴らしきボディーライン……その、特におっぱいが俺好みの大きさだ。大きすぎず小さすぎずの美乳。その素晴らしき乳にはきつと夢と希望が詰まっているのだろう。さらに程良く肉のついた細く綺麗な脚……うむ、足フェチには堪らん。

「おう、似合ってるんじゃないか？」

「そ、そう？　ありがとうお兄ちゃんっ」

褒める時は褒めて叱る時は叱る。それが藤島圭介流【妹】の扱い方である。

一方、浅間部長は「ボクは？」という顔で葵を見ているが、葵は部長を軽くスルー。

どうやら、葵は部長の事など眼中にないようだな。

「せ、先輩……その、えと……っ」

「あたいらはどーだっ！」

次に俺に感想を求めてきたのは青山さんとあかり。

青山さんは赤と白の縞々タンクトップスカート。ぶはっ、青山さんって控えめな感じだけど……脱ぐと結構すごいモンだな。葵にも匹敵する程良いラインである。胸も文句ナシの美乳だ。

もう一人のあかりはシヨーパーンタイプの水着である。可愛い事は確かだが……まあ、体型といい水着のセンスといい、これは完全に小学生である。まあ似合っている事には変わりないな。

「2人とも結構似合ってると思うぞ？」

「よっしゃ！ やったな千早！」

「えへへ……先輩に褒められた……っ」

2人とも俺に褒められて嬉しそうだ。嬉しそうだからこそ、これ以上褒めるのは教育と俺の人生の為にむしろはかないな。2人は俺に好意を抱いている。その事については夏休みに入る前から気付いているし、告白もきちんと断ったハズである。

だけど2人は諦めてくれなかった。未だに俺を彼氏にしようと狙っているのだ。

しかし俺は彼女達に対して好意はあっても恋愛感情はない。そんな半端な気持ちで付き合うのは失礼なことだと思っている俺は、彼

女達の愛を受け入れないようにしている……んだけどねえ？

「けーすけ様っ！ 拙者達はとうでしようかつ？」

今度は暮葉の声がしたので、暮葉の水着姿を見てやる為に振り向いてみた。

当然そこには暮葉がいたが、もう一人。不機嫌そうに睨んでくる伊吹も一緒にいた。

暮葉はレモンイエロー色のスカートワンピース水着。これがピンク色の水着なら、俺の嫁ことアズにゃんが着ていたのと同じタイプの水着である。

暮葉は元々可愛い容姿なので似合ってはいるんだが……まあ、なると言うかアレだな。あかりにも負けなくらいロリロリして、まるで小学生の妹がいる気分である。

対する伊吹は……アレ？

「暮葉、すっげえ似合ってると思うぞ？」

「もきゅ！？ ホントなのですか!？」

「こんな事で嘘言っでどうするんだよ。本当に似合ってるぞ？」

「あ、ありがとうございます！」

「……あんだ、私にはなんつにも言わないのねっ」

まずは暮葉を褒めたがその途中、ツツパリ伊吹ちゃんが不満を漏らしてきた。

伊吹ねえ……確かに水着はとっても似合ってるよ。

ロリっぼくて小柄な体躯ながらも、女の子らしい体つきではある

と思うよ？

「ただどねえ伊吹さん、貴女のその水着は……。」

「ごめん伊吹。けど似合ってると思うぞ？」

「……っ、そ……それって馬鹿にしてんのかしらっ？」

「いやいやマジだって！ やっぱ伊吹にはスク水が一番」

「っと言いかけた刹那。伊吹は身を引きつつ、右足をゆっくりと引いていった。」

「なにをするのかな？ なんて平和な事を思ったのは一瞬だけだ。」

「に、二回死ねっ！」

「どこかで聞いた事のあるセリフを放ち 伊吹は勢いよく右足を上げてきた。」

「上段廻し蹴り。」

「一瞬で感じた恐怖と上げられた足を見て、反射的に身を引こうとした俺の首筋に、強烈な上段廻し蹴りが突き刺さってきた。」

「ぐ、はっ!？」

「どうにか体勢を立て直す なんてことが、ド素人の俺に出来るはずもなく、喰らった蹴りの威力に俺の身体は肌にも右方向へぶっ飛んだ。」

「け、けーすけ様っ!？」

「はわわ……せ、先輩……っ?」

「今の蹴り。く、首筋にクリーンヒットしてたよ!？」

「おい！ だいじょーぶか圭介っ!？」

4人の女子が俺を心配してか、砂浜に倒れる俺に駆け寄ってきてくれた。

4人とも心配そうな目で俺を見つめるが……実は意外と大した事がなかったり。確かに伊吹の上段廻し蹴りは最高に強烈だった。おそらく俺がそこらの不良か何かだったら、今の蹴りで確実に気を失っていただろう。それほど強烈な蹴りだったんだが……俺の日常を思い出してみよう。

ある時は明智の飛び廻し蹴りをこめかみに喰らい、ある時は永洲の破壊的な右ストレートを顔面にモロに喰らい、ある時は早川がぶっ飛ばした残骸に身を打たれ、またある時は白藤が放つ鉄球を凄まじい勢いで全身に喰らった。

半年でこれだけダメージを受けても、無事に生きているわたくし藤島圭介。

そう、伊吹の加減した蹴り程度じゃあもう、ダメージにすらならないのである。

「だ、大丈夫だ。身体は超元気ですたい……つか伊吹！ いきなりなにするんれしゅかつ!？」

「うっさい！ 無視すんなスク水褒めんばか圭介っ!」

「なんで!？ 無視はしてねえし、スク水姿を褒めて何が悪いんだよっ!」

「全てが悪いわよ！ どーせ圭介は私の事……子供みたいでかわい

いとか……ごによごによ」

なんだ？ 段々声が小さくなっていったせいか、最後のほうは全く聞きとれなかったぞ？

けどとりあえず、子供みたいって所までは聞きとれた。

コイツ……もしかして自分の体型がコンプレックスなのか？

「んー、気にする必要はないんじゃないか？」

「な、なによ………どういう意味よ」

「スク水だって立派な水着だよ。むしろ、だがそれがいいって人だっているんだぜ？」

「……………」

伊吹は複雑そうな表情を浮かべ、少し俯いていた。

「つかコイツ他に水着が………って、あつたらスク水なんて着てこないか。そういえば伊吹が水遊びだなんて珍しいもんな。伊吹は俺がああ事故以降………つまり、俺が水恐怖症になつから全く水遊びをしなくなつてしまったのだ。多分俺に配慮しているんだとは思うが………」

とにかく、ずっと水遊びを避けていたせいで、彼女は今の身体に合う水着を持っていない。

持っていたとしてもスク水だけなのだ。でも俺はスク水好きだけどなあ………むしろ、スク水こそ一番その人の魅力を表す素晴らしい水着だと思っている。

あとは体型の事だな。伊吹は小柄で思春期で止まつちまつたような感じだ。

まあ、一応高校生はまだ思春期の後期らしいが。でも女の子だか



ら気にはするよな、やっぱりここは俺が伊吹の不安を取り除いてやるわ。

見せてやるぜ……エロゲーで鍛えた体型にコンプレックスを持つ人の慰め方を　　ッ！

「あと……男の俺が言うのもアレだけどさ。身長とか胸の大きさを人それぞれだろ？　むしろそれがお前の個性になったりするんじゃないのか？」

「ちょ！　べ、別に身体の事なんて気にしてないわよっ！」

「じゃあ、さっきの子供みたいでかわいいからなんとかって……あれはなんだったんだ？」

「……っ、す、スク水の事よ……っ」

そう答えた伊吹は恥ずかしそうに視線を逸らし、顔も紅葉のように赤く染まっていた。どうやら凶星みたいだな……ホント、伊吹ってわかりやすい子だよな。

「ま、まあそう気にするなっ！　世の中もつと小柄な人だっているんだ。伊吹だって十分お姉さんに見えると思うぜ？」

「……それ、ウソじゃないわよね？」

「ウソなんて言うかよ、だからもう元気出してくれよ。お前が不機嫌だと俺、なんつーか……とにかく胸も痛えし嫌なんだよ」

「……はあ。し、仕方ないわね……っ！　あんたが可哀想だから許してあげる……」

「えっ？」

なんだ……俺は許されたのか？ 伊吹がいつもの伊吹に戻ったよ  
うだ。明るくて、ツンツンしていて突っぱねたいいつもの伊吹に。

「け、圭介……っ」

「ん？」

「その……ありがとう……っ」

しかも伊吹は普段俺には絶対に言わない　　ありがとうの一言を  
言ってきた。その時伊吹が見せたなんととも言えぬ表情。それはまる  
で、恋でもしている女の子のように可愛かった。

そういえば重原曰く、伊吹には好きなヤツがいるらしい。

ずっと気になっていたんだよなあ……結局伊吹の好きなヤツって  
誰なんだ？ 伊吹に好かれるヤツって何か羨ましいというか、幼馴染  
染の俺としてはムカつくというか。

とにかく、一度でいいからソイツのツラを拝んでみたいぜ。

「おい、らぶらぶで幸せは時間は終わったか圭介？」

「そうですね。けーすけ様、もうお喋りは終わったのですか？」

びくっ！ 俺の背筋に冷たい何かが走る。直感的にヤバいと感じ  
る。俺は恐ろしい何かの片鱗を感じながら、恐る恐る顔を後ろへ向  
けると 指の間接を鳴らすあかりと紫色のオーラを放つ暮葉の姿  
があった。

「え、え〜っと……お二人は何をそんなに怒ってるんでせうか？」

「とぼけちゃうのですねけーすけ様？」

「圭介、アンタはあたい達の事を馬鹿にした」

「えっ、ちよつと待て。俺がいつお前らの事を馬鹿にしたんだ？」

「伊吹さんよりも小柄な人がいるって言いましたよね？」

「それって……地味にあたい達の事を言ってるよな！？」

ええええええええええ〜！ ま、まさか俺こんな事で2人に怒られてるんですか！？」

そうか、忘れていたぜ。コイツらは年齢は同じだが外見はロリキヤラだ。そしてコイツらも自分の体型にコンプレックスを抱いている。

つまり、俺が伊吹を慰める為に言った言葉で傷ついてしまったのだ。

「く、暮葉さんにあかりさん？ アレを言ったのには色々深い理由わけがあります……」

「拙者達を傷つけたけーすけ様にはお仕置きなのです！」

「圭介、アンタは確か水恐怖症だったよな？」

「えっ？ ちよつと待て、それ誰に聞い」

あかりが何故俺が水恐怖症である事を知っているか、それを問お

うとしたが……その、後ろで葵が申し訳なさそうな顔をしてるんだよね。

わかったぞ……アイツだな！ 葵が俺の弱点をばらしたんだな！  
しかも、隣にいる青山さんの何とも言えぬマジ反応。青山さんも俺の弱点知ってるのかよ！ ちくしょう葵め後でこっ酷く叱ってやるからな！

けど、その前に暮葉とあかりから逃げなければ！

「木下先輩！ 圭介を追い詰めるぞ！」

「了解なのです！」

「うわあああああ〜っ！」

お、追ってきた！ 2人がダークな笑みを浮かべながら追ってきた！

俺はそんな恐ろしい2人から逃げるべく、我を忘れて全力疾走をする。が、その時俺の足に恐怖のような感触を得る。恐る恐る下を見ると……。

海水。

そう、俺の足は海水に浸かっていた。前を見るとそこには無限に広い大海原。じわじわと身体が震えて感情も高ぶり、冷や汗も額からダラダラと流れ始めて、

「ひ、ひいやああああっ！ み、水じゃんコレ海水じゃん！  
こ、怖えよ誰か助けてくれええええええええええええ〜っ！」

「冗談だと思ってたけど、圭介ってホントに水恐怖症なんだな……」

「にゅふふ、けーすけ様！　そこでしばらく生き地獄を味わうがいいのです」

誰かたしゆけてくらしやあいつ！　ホント水だけは勘弁して欲しいんです！　これだけは怖くてもう達打ちできないんですよ。いやホントマジっす、誰か助けてええええええええええええつ！

……その後、しばらく俺はギャラリィに笑われ、水に恐怖し生き地獄を味わったのである。

ちくしょう……不幸だ不幸です不幸すぎます。

合宿一日目の昼にしてこの調子。もう、ホントに先が思いやられます……。

「……ところでボク、一応部長なのに完全に忘れられてないかい……ぐすっ」

第126話 海水浴しないか？（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「ハア……」

圭介「どうしたんだよ黒木」

黒木「お前……羨ましいよな」

圭介「なんでだよ。俺今回散々な目に遭ったんだぞ？ 伊吹に蹴られるわ暮葉とあかりに海に追いやられ、あんな人前で取り乱しちまうわ……はぁ」

黒木「いや！ 幸せだろ！」

圭介「どこがだよ!？」

黒木「俺、伊吹ちゃんに蹴られたいんだよ！」

圭介「……ドMの変態かよ、救いようねえな……」

第127話 違います！俺たちナンパなんかじゃないです！

さて、相変わらず海で遊んでいる俺達。女子陣は海で泳いだりビーチバレーをやったり、果てはスイカ割りに挑戦していた。一方俺と浅間部長は2人で寂しく浜辺を歩いていた。

なんでかって？俺が水恐怖症だからだよ……浅間部長はこれでも俺に気を使って、一緒に陸上でいてくれてんだよ。まあ一緒にいるのが浅間部長なせいかちつとも嬉しくねえが。しかも浅間部長はやっぱり真性の馬鹿でその上変態であり、考えている事も本当に口でもない事であった。

「しかし、中々女子だけつてのがないよね」

「部長、やっぱりナンパはまずいと思うんですが……」

「いいじゃないかい！ナンパ素晴らしいじゃないかい！」

「いやいやいや！ただのチャラ男だろっ！」

もはや黒木や赤佐レベル。しかもナンパって多くの地域で条例で規制されてるらしいぜ？

下手すりゃナンパで犯罪者扱いかもしれねえ……つか、最近のガードの堅い女の子ホイホイついて来るのだろうか？やっぱりナンパって成功率は超低いんじゃないや……。

「君かわういゝねえ？」

「俺らさ今チヨ一暇なんだケドオ、よかったら一緒に遊ばねえ？」

「帰りはおくつてやつからよお！ まっ、いつ帰れるかわからねえけどな」

「ぎゃっははははははー！」

あゝあ、見ちまったよ不快なものを……。

小麦色に焼けた金髪髭面グラサンの男と、茶髪のツンツンヘアーの男が、一人の女の子にしつこく絡んでいやがる。ナンパだ、どう見てもアレは浅間部長がやるうとしていた事だ。夏の海でナンパと言えば定番のイベントではあるが、やられる側としては迷惑以外の何者でもない。

しかもねえ……フツのイケメンにナンパされるならともかく、アイツらっでどう見てもただのヤンキーさんじゃねえかよ。下心丸見えな上に危なっかしいなあ……。

「ふ、フフフ……」

「どっしたんですか部長？」

「藤島君、あの子を助けに行こう！」

「顔も見えてないのによく言いますね。つか、危ないんじゃないですか？」

「大丈夫！ イザという時は君に任せる！ 藤島君、結構喧嘩強いんでしょ？」

……サイテーだ。ここにサイテーの男がいやがる。

自分の愛する部活の大切な部員を、自分が逃げる為の時間稼ぎに使おうとしている、サイテーの下衆野郎がここにいるぞ？ つーか、



なんで喧嘩する前提なんだよ。

「……言っとくけど、停学になったら嫌なんでやりませんからね」

「ううう……けど、ここでボクらが女の子を助けたらフラグが立つよ！？」

「立たねえよ！　ここは現実リアルですよ！？」

「いや、立つ！　ボクの予想では50%の確率で立つ！」

「高いんだか低いんだかわかんないけど、まず現実リアルじゃそんなフラグ立たねえから！」

「よし、そうと決まれば行くよ藤島君っ！」

「えっ？　ちょ、待てバカ部長っ！」

ああもう仕方ねえな。いいですよわかりましたよ、やればいいんでしょやれば。とりあえず女の子助けてカッコつけてやりますよ。まあ、どうせここは現実リアル世界。浅間部長の妄想のようなハッピーなフラグは立たないだろう。

けど、男は基本的に馬鹿である。そこに女の子が絡んでいたらこの足を止める事ができない。

結局俺は部長について行った。部長はどこに隠していたのやら……サングラスを取り出しキメるようにそれをかけた。ああ……やだなこの人の後ろについて行くの……。でもこうなったら仕方ねえよな。俺も少し本気モードになるとしますか。

「よおオ久しぶりだな teme エ！」

「うぐつ！ な、なんだ teme ！」

「ひ・さ・し・ぶ・り・だ・なア！」

不良の一人、金髪髭面グラサンの男に浅間部長は近寄り、激しく腕を肩に回した。

うわあ……普段と口調が違うよ。これが浅間部長の本気、素晴らしい演技力である。

馴れ馴れしい事この上ナシ。しかもなかなか迫力があるし……不良がビビってる。

こりゃあ俺も負けてられませんな。俺も海パンのポケットに手を突っ込み、目つきを鋭くメンチを切りながらも一人の不良、茶髪のツンツンヘアの男に接近した。

「こんな所で会うなんて奇遇だなあオイ！」

俺達が女の子の前でしつこく2人の不良に絡む。当然俺らの存在は浮いている。周囲からの注目度は悪い意味で抜群である。柄の悪い人が柄の悪い人に絡むこの光景を見てか、一般人の誰かか「警察呼んだほうがいいんじゃない？」と言っている。

まずいぞ……警察呼ばれたら俺の学生生活が終了するぜ。停学はマジで勘弁、そんなものを食らったら今後の進路にも関わるだろう。一度でも警察沙汰になったら多分、どこの会社でも働かさせてくれないハズだ。

ええい！ もうこうなったら、警察かライフセーバーのマッチョな兄さんが来る前に、さっさと不良共を追っ払って女の子を助けよう。

「テメエら一体何様　ふ、ぐつ！」

「一般の方に迷惑だろ？　その裏に行くぞこの野郎オ！」

何か文句でも言おうとした不良の口を、浅間部長がその手で強引に塞ぎ、強気な様子でかなりストレートに啖呵を切った。浅間部長……ホントにいいのかそれで？

もしマジで殴り合いになったら、浅間部長みたいなヒョロヒョロは即ノックアウトだぞ。

かといって、こんなヤツらと殴り合うのは面倒すぎる……。

「お、おいタケヤン……もう行くべ？　コイツらオカシイぞ？」

「ふ、ぐあ　ぷはあつ、お……おう。ちくしょうテメエら次に会ったらぶち殺すからな！」

茶髪のツンツン野郎に言われ、浅間部長から解放された金髪のグラサン。

彼は負け犬の遠吠えとして思えないセリフを吐き、森の中からテイーガーが現れ、ビビッて逃げ出す連合軍兵士の如く彼らは逃げていった。

……なんだろう。初めて言葉だけで荒事が終わった気がする。

浅間部長すげえ……現役ヤンキーを退かすその啖呵。もう……いっその事写真部じゃなくて演劇部に入ればよかったのに……。まあとにかく騒動は終わった。さあ、後は女の子に話しかけてって……あれ？

「やあ、大丈夫だったかい？　危ない所だったねえ」

「く、クソ介……？　それにクソ介の部活の部長……？」

「……えっ？ い、生駒！？」

これはなんとという不幸。俺達が助けた女の子は生駒純奈。俺のことを嫌う明智LOVEなガチレズのニヤ厨のオタク少女であった。彼女はワンピース水着を着ていた。やっぱり生駒は健康的でスタイルがいいですなあ。

……でもなんで？ なんで生駒が六角の砂浜にいるんだ？  
そして、その生駒はよからぬ事を思いついたように、嫌らしくニヤつと笑みを浮かべ、

「ナギちゃ〜〜ん！ 不良に絡まれたよ助けて〜〜っ！」

はああああああ！？

い、生駒のヤツなんて事を叫んでんだ。まさか明智にSOSをするなんて……そんな、反則じゃねえかよ勝ち目が0じゃねえかよ！  
っーか、明智まで海に来てんのかよ！？

「私の友達に 手を出すなっ！」

生駒のSOSコールを聞きつけ、黒いビキニというせくしいで、その……ポリウーーム満点のお胸と殺傷力の高い抜群のスタイルのせいか、妙にアダルトな匂いにする明智が飛んできやがった。

別に比喻表現ではない。本当に明智は空を飛んでいた

「ぐ、はあ っ!？」

「ぐ、部長っ！」

そして明智は綺麗に孤を描く右足を、浅間部長のこめかみに打ち

込んだ。

間違いなえ……アレは俺が明智と戦った時に喰らった、ローリングソバットだ。

俺でさえ脳震盪を起こした一撃。ド素人な上にひ弱な浅間部長が耐えられるわけもなく、明智の蹴りを食らった浅間部長は一撃で気絶してしまった。

って安心してられねえ、次に狙われるのは俺じゃねえかよ！

「次は貴様だ。覚悟しろ下衆野郎 正義の鉄拳を喰らえ」

なにカッコいい事言ってるんだ！ 明智め、戦隊モノのみ過ぎじゃねえのか！？

明智の体重を乗せた右ストレートが、俺の顔面目がけてぶっ飛んでくる。

……冗談じゃない。そんな一撃死んでも食らいたくねえ。俺は反射的に右方向へ跳躍する事によって明智の右拳をギリギリ回避する。ゴロゴロと砂浜の上を転がり、細かく熱い砂や転がる石や貝殻などで身体を痛めつつも、次の攻撃に備えて立ちあがり身構えた。

予想通り 明智は空中での胴回し回転蹴りを仕掛けたきたが、前に明智と戦った時の記憶や俺の直感で予想はできていた。その為俺は明智の攻撃に反応する事が出来たのだ。

右足を捉え、俺は咄嗟に顔面を守るように左腕を上げる。こめかみを狙った一撃は、鈍い音を立てて俺の右腕に直撃する。ミシミシと言う嫌な音が響き、思わず顔を歪ませてしまう痛みを感じた。

……まあ、こめかみに直撃よりはマシだな。

「……ッ！ できる……ッ！」

「できるじゃねえ！ 俺だよ俺、藤島圭介だよ！」

「…………えっ？ あっ…………ふ、藤島！？」

ふう…………ようやく明智は俺に気付いたようだ。

やれやれ…………まさか、もう戦うことはないだろうと思っていた相手と、こんな形で再戦する羽目になるとは…………何というか不幸としか言いようがないね。

…………さて、戦いが終わった所で事情を訊くでしょう。

なんでここに生駒と2人ているかをな…………ッ！

第127話 違います！俺たちナンパなんかじゃないです！（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「いやあ、見事に命中したな」

浅間部長「……………」

伊吹「ダメね、まだ気絶してるわ」

暮葉「相当重傷だったのですね」

千早「…………このまま気絶してればいいのにつ」

あかり「…………そのまま死ねよな」

葵「2人とも！心の声が漏れてるよ!?!」

## 第128話 何かの片鱗

「ホントにすみまなかった、藤島！」

「いや、わかればいいんだよ……」

その後、明智は生駒の頭を無理やり抑えて俺に頭を下げてきた。

浅間部長は未だに絶賛気絶中であるが明智は彼にも謝りたいようで、大変申し訳なさそうな表情をしていた。

……まあ、今回は明智は悪くないしな。悪いのは明智にSOSコールをした生駒、あんな事を叫びやがったせいで俺たちは攻撃を受けたんだ。浅間部長も無様に気絶する事になったんだ。

おのれ生駒……イタズラでも度が過ぎるぞ。今回は流石の俺も少しムツとききましたよ。

「その、そっちのヤツは大丈夫なのか？」

「ああ、部長はひ弱だけど丈夫だから多分大丈夫だよ」

「ほ、ホントか？」

「妹に毎日シバかれてるっばいしな。多分大丈夫だろ？」

「そ、そうか……けどホントにすまなかった」

「だからお前は悪くないって！ そんなに気を落とすなよ」

どうして騙されたヤツがここまで落ち込んでいて、明智を騙した



真犯人は腕を後ろに組んですましているんだよ。しかも自分は全く悪くありませんと言わんばかりに、口を尖らせて俺たちから目を逸らしているし……あの野郎、全く反省していねえな。

「すみにゃん。すみにゃんがあんな事を言うからこうなったんだ、その態度はないだろう」

明智も生駒の態度にお怒りの様子。

いいぞ、もつと怒ってやれ。つーか拳骨しても俺は文句言わねえよ。

「ぶーっ、不良に絡まれていたのは事実だもん」

「それでもだ。藤島達はすみにゃんを助けてくれたんだろう？ それを不良扱いして私に攻撃させるなんて……下衆にも程があるだろ」

「うう……ごめんなさいクッ……圭ちゃん」

コイツ今クソ介って言いかけたぞ。そしてなんだよ圭ちゃんって？ そう言えば生駒は俺のことを最初はそう読んでいた気がするな。コイツ……猫かぶってやがる。普段は俺のことをクソ介呼ばわりする癖にいきなり圭ちゃんだって？ ありえねえだろ……しかも生駒がこんな素直に謝るハズがねえ。

「すみにゃん。あっちの人にも起きたらちゃんと謝るんだぞ」

「はあ〜い……っ」

今回は浅間部長も一応被害者だしな。まあ……ちゃんと謝っつけよ。

アレでも心は結構ピュアなんだ。見知らぬ女の子に蹴られたんだぜ？ 多分浅間部長は絶賛片想い中の子に「キモイ」って言われるくらい、心に深い傷を負ったハズである。

「……………あ、先輩いたよ……………っ？」

「あっ、ついでにバカ兄貴が死んでるっ！」

「お兄ちゃんっ！」

「けーすけ様っ！」

おっ、どうやら女子陣がここに来たらしい。というか、あの様子だと女子陣は俺たちのことを探していたみたいだな。でも……………浅間部長の事を心配しているのがあかりだけって、浅間部長ってホントに嫌われ者な上に不憫な人……………っ。

「ちよつとあんた。いきなり浅間先輩と一緒に消えたけど、こんな所で何やってんのよ？」

「いやあ〜その、伊吹さん？ 色々と面倒な事が起こっちゃいましたねえ……………アハハっ」

「アハハじゃないわよ！ みんな心配してたのよ？」

「え？ 心配してたって……………伊吹もか？」

「……………っ？ べ、別に私は心配なんか……………あんたはどーせ無事だろっしっ！」

ひどいやひどいや。伊吹はホントに俺のことを心配してねえんだ……うっ。

でも、ツツパリ回答が返ってくる事くらい、訊いてみる前からわかってたけどさ。でもこうしてストレートに言われるとすっげえ傷つくよね……はあ。

「なんだ、藤島は団体さんだったのか？」

「もきゅ？ あっ！ 明智殿に生駒さん！？」

明智の声に反応し、ようやく明智達の存在に気がついた暮葉は、何故ここに明智達がいるのかと言わんばかりに驚いていた。そりゃ驚くよね……最初見た時俺だって驚きましたよ。

「ありえ、木下じゃん？ それに何でクソ介の部活のメンバーが揃ってるの？」

「拙者達、写真部の合宿でこちらに来ているのです！」

「合宿？ ねえナギちゃん、普通写真部って合宿とかする部活なの？」

「うっん……常識的に考えたら、合宿するような部活ではないぞ……」

ですよねえ……まあ、合宿と言っても浅間部長の思いつきで、実質中身はただ海辺の行楽地<sup>リゾート</sup>で遊ぶだけだもんね。全然写真部らしい活動はしていないし、実際俺はおるか浅間部長や青山さんでさえ、本格的な写真撮影用のカメラは持ってきていない。

一応一夏の思い出を撮る為、小型のデジカメは用意してあるが…

…まあ、写真部らしい活動をしていない事には変わらない。

「……その、えっと……合宿と言っても遊びみたいなものなんです……っ」

「そうそう！　そこで倒れている兄貴の提案なんです！」

青山さんが身体を小刻みに震わせながら、勇気を振り絞って明智達に事情を説明した。

よく頑張ったな青山さん。あと……あかりのヤツ敬語喋れるじゃねえかよ。普段敬語で話す所なんて見たことがなかったせいか、あかりの敬語は凄く新鮮に聞こえるよ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんっ、結局ここでなにがあったの？」

「葵……気にしないほうがいいと思う。なあ明智？」

「えっ？　あ、うん！　葵は深く考えなくてもいいんだっ」

「ええ〜？　なにがあったかごく気になるよ！」

「とにかく、気にする必要はないんだ。私と藤島達の間にはなにもなかったんだ」

明智、その言い訳はかなり苦しいと思うんだ。現行犯逮捕されたのに「俺は何も盗んじやいねえ！」と叫ぶ、下着ドロがする言い訳以上に苦しいと思う。

そんな明智の言い訳に葵どころか、暮葉や伊吹まで疑いの目で俺たちを見ている。

……はあ、仕方ねえ。いつまでもこんな話を長々と続けるわけに

もいかんし、ここは俺が助け舟を出してやるとしようか。

「言っとくけどホントに明智の言う通りだぜ？ 浅間部長はナンパしたら女の子に殴られただけなんだ」

「……けーすけ様、それホントの話なのですか？」

「ホントだって。なあ生駒？」

「あ、うん……」

よっしゃありがとう。話を合わせてくれた事だけは感謝するぜ、生駒！

まあ、実際浅間部長はナンパしようとしていたし、生駒を助けようとした動機も、女の子と仲良くなりたいたいからと言う不純なものだ……俺が言った事も強ち間違いではないハズだ。

けど、それだけで疑いが晴れるわけないし……そうだ、こうなったら別な話題を振ってこの現状を忘れさせる作戦で行こう。そうと決まれば早速、明智達にここへ来た理由を尋ねるか。

「そつえば、なんで明智はこんな所にいるんだ？」

「ああ、六角にはすみにゃんの実家があつてな、夏休みを利用して遊びに来ていたんだ」

「実家？ 生駒って元々六角に住んでたのか？」

「うん！ 高校入学と同時に古宇坂に引っ越したんだけどね、そこで出会ったお友達1号がナギちゃんなの！ 私は思わずナギちゃんのクールさに、内に秘めた可愛さに……そのつ、ずきゅんって胸

を撃たれて惚れちゃったんだよ！ 私はもうナギちゃんしか見られないゾッコン」

なんてこつたい……暴走した生駒が明智への愛を語り始めた。

これはしばらくうるさいぞ。きつと小一時間は語り続けるだろう。

「なあ明智、どすりやいいんだこれ？」

「すみにゃんのことだ。気が済むまで語り続けたら大人しくなるだろう」

「つまり放置しとけて事か？」

「うん、それが最善の策だと思っぞ」

やっぱり放置プレイが一番かあ……まあ確か、こんなのに構っていたら時間の無駄だよな。

無駄に疲れそうだし。ここは明智の案に乗っておくでしょう。

それにしても意外だなあ。生駒が他所の街出身だったとは……まあ、出身地なんて人それぞれだから別に気にする事でもないよな。

「それと藤島」

「ん、なんだ？」

「気を付ける」

「はあ？ お、おい！」

明智はそれだけ言うと、生駒の所へ行き無理やり彼女を取り押さ

えた。おいおい、放置しておくって言った言いだしっぺが、初っ端から放置していねえじゃないかよ。

けど、そんな事よりも……気を付けろって一体どういう事なんだ？  
なんか、すっげえ嫌な予感がするんだが……ちくしょう、いきなりなんなんだよ明智のヤツ？

## 第128話 何かの片鱗（後書き）

・後書きトークコーナー！

ミネット「どうも！ 最近全然出番がないミネットだよ！」

悠「……チツ」

ミネット「今回もミネット達の出番なさそうだけど、一体いつになったら出番回ってくるのかな！？ すっごく心配なんだよ！」

悠「おいクソガキ……うっせエぞ」

ミネット「ひどい！ 貴方は出番がないという危機的状況を何とも思わないの！？」

悠「あーはいはい、そりゃ深刻なこったア……」

ミネット「とにかく……出番がなくて不安なんだよ……っ」

悠「そのうち回ってくるんだろ。だから黙っとけクソガキ」

ミネット「ぶうっっ」



## 第129話 男だつて叫びたい時は叫びますよ！

散々下の砂浜で遊びまくっていた俺たちが別荘に戻ったのは、時刻はまもなく5時になるうとしていた頃であった。別荘に戻った俺たち、家事スキルが最高100だとすれば、たったの10しかない俺の代わりに、浅間部長が腕によりを掛けて夕食の準備を進めていた。

ちなみに、今日の晩御飯はカレーだ。浅間家のカレーは辛いらしいが……期待しておこう。

これでも俺は辛いカレーが大好きなのだ。

「よし、後はしばらく放置しておけば大丈夫だな」

「部長は良く煮込むほうなんですか？」

「まあね、それより藤島君……我々の目的を達成する時が来たぞ」

「あ？ なに言ってますか部長？」

部長がやたらと真剣に言う。コイツ……絶対よからぬ事を考えてやがる。あの部長が無駄に真剣な顔をするなんて、ロクでもない事を考える時だけだぜ。

「フッフ……藤島君、女子は今みんなでお風呂に入っている」

「は？ ま、まさか部長……」

「そのまさかだよ！ ボク達はこれから決死の覚悟で」

「待て！ 犯罪だろ！？」

「何を言っているんだい君は？ ボク達がこれから行うものは聖戦である。聖戦を行うことは罪ではない。そもそも君は聖戦の意味を理解しているのかね？」

「神聖かつ正義の為の戦争だろ？」

まあ、あくまで宗教的な意味での事だし、それが正しいとは到底思えねえけど。

今回の場合もそうである。どうせ浅間部長にとつての聖戦なんて、世間から見れば立派な犯罪にしか見えないだろうぜ？

「そう……正義の戦い つまりこれからボク達にお風呂に突撃を仕掛けるのだ！」

「てめえ……やっぱただの犯罪だろ？」

「ボクらの聖戦に法もクソもあるか！ 己の信じる道を突き進む事こそ正しい事なのだ！」

「一見立派な事言ってるように見えますけど、やろうとしている事は最低ですよ！？」

「大丈夫だ！ イザと言う時は藤島君。君を盾に」

「ふっざけんな！ 俺はやらねえからな、勝手に一人でやってる！」

「チツ、仕方ないね……こうなったらボク一人で聖戦に赴くさ。後で後悔しても知らないよ」

後悔なんかしないさ。むしろ後悔するのは部長のほうだと思っただよね。だつてねえ……お風呂覗きなんてサイテーじゃないですか。そんなのを女の子達が許すと思いますか？ とにかく俺はこういう犯罪じみた事には手を出さないの。そりゃあまあ……女の子の裸は見たいよ？

暮葉とあかりという禁断の果実。伊吹の思春期止まりな貴重な身体。青山さんと葵のよく育ちましたね的な素晴らしい身体……ぐは、想像しただけで鼻血が出そうだ。

しかし！ だからと言って見ていいわけじゃねえ。

うん、ヤバい事には手を出さないほうがいい。ここは我慢して一人でのんびりしていよう。

それに……少し考え事だつてしたいしな。

『気を付ける』

……なんだつたんだろう。あの明智の警告は……？

未だに意味がわからない。一体俺は何に気を付ければいいんだ。

俺をことを狙っているヤツが近くにいて意味なのか？ でもねえ……サヴィエトじゃあるまいし。そもそも明智はサヴィエトのことなんて知らないハズだ。だからそんな警告をしてくるハズが……いや、待てよ？

そう言えば秋葉原に行った時に暮葉と何を話したっけ？

『やっぱり、俺らのすぐ近くに連中のスパイがいるって事か？』

スパイ……それに対する暮葉の回答は、可能性は高い……だつたかな？

つまり、友達のうち誰かが連中のスパイで……って、何言ってるんだよ俺は。だからって友達を疑っていい理由にはならねえだろ。少

なくともここにいるヤツらが、連中のスパイだとは思えない。

いや、思いたくもない。第一スパイなんてホントに近くにいるのかよ？

……でも、じゃあ今日の明智の言葉は一体なんだったんだ。明智はどうして俺にあんな警告をしてきたんだろうか？ 何か理由があるハズだ……でないと普通は冗談でもあんな事は言わないだろ。

「キヤーツ！」

あ？ なんだ、風呂のほうから悲鳴が……ってわかりきってる事か。

「ここ……この馬鹿！ へ、変態っ！」

「早く死ねよなバカ兄貴！ 瞬く間に now now now！」

「天神無双木下流“天下統一”！」

今、浴室では浅間部長 vs 女子陣が死闘を繰り広げている。戦況は女子有利、あかりは多分浅間部長を殴りまくっており、暮葉は何やら必殺技を繰り出しているようだ。

後は伊吹かな？ アイツも何気に暴力的だし……多分黙っていないハズだ。

そして、次の瞬間、

「ふべらっ！」

ボロ雑巾のようなくちゃぐちゃになつた浅間部長が、風呂場から吹っ飛んできた。

あゝあ……まあ、予想通りだよ。この状況で男が女に勝てるわけ

がない。

「我が一生に……い、一辺の悔い……なし……ぶはっ」

「あゝあ、死んじまったよこの部長……」

まあいいや、浅間部長はヒョロい結構丈夫ではある。明智のあの蹴りを喰らってもとりあえずは生きていたし、多分放っておいてもそのうち復活するだろう。

……とりあえず俺は男の寝室に戻り、そこに置いてあった鞆の中からラノベを取り、女子が上がってくるまでそれを読んでいる事にした。まあ、ラノベはいい暇潰しになるよね。

何よりESだし……はあ、これはブヒれるね。

「いい湯だったなあ！ あたい広い風呂に入ったの久しぶりだっ！」

「……えへへ、楽しかったね……っ」

「千早の別荘ってお風呂大きいよね！」

それから数十分後、女子達が風呂から上がってきたようだ。

一年生三人組はかなり上機嫌の様子だ。どうやら、浅間部長乱入のことなんてあまり気にしていないようである。まあ、気にしたら負けってのもあるかもしれないが。

「圭介、風呂いいわよ？」

「おっ」

伊吹が濡れた髪をタオルで吹きながら、俺に入ってもいいと言ってきた。はあ……お風呂上りの女の子ってホントにいいですよ。見ているだけで幸せな気分ですよ。

さて、浅間部長はまだ気絶しているようだし……仕方ねえ、カレの準備はあかりに任せるとして俺は風呂に入るとしますか。もちろん一人で……。

……そういえば、暮葉はどこ行ったんだらうな？ まあいいや、部屋にでもいるんだらう。

その後、俺はいったん寝室に行って着替えを用意してかに、着ていた服をすべて洗濯機に叩きこんでやった。つーか、洗濯機があるなんて……流石青山家の別荘である。

ガラスのドアを開けて中に入ると、うわぁ〜お。確かに風呂は広い、これなら数人で入っても全く問題はないだらう。下手すりゃ、宿泊で行く青年の家の風呂より広いんじゃないか？

「もきゅ！？ け、けーすけ……さま？」

「え、この声って暮葉……のわああああああつ！？」

不意に暮葉の声がしたので、思わずキョロキョロと首を左右に動かすと……なんと、湯船にバスタオル一枚で立ち尽くす暮葉の姿があった。

ちよつと待てコラッ。なんで古典的ラブコメ展開が発生してるんでせうか？

一体いつこんなフラグを立てたんだ！？

「うおおおおいっ！ なにやってんだお前！？ 伊吹達と一緒に上がったんじゃないのか！？」

「すみません！ その……拙者長風呂なのですが、みんなと一緒に

上がったらやっぱり物足りなくて……けーすけ様、ホントに申し訳ないのです!」

「いやあ、まあ……確かに暮葉は長風呂だったな。」

毎日我が家の風呂に暮葉を入れてるんだ。それくらい理解はしていただき。」

「けどねえ、伊吹は皆上がったって言うてたし……これはいくらなんでも不意打ちすぎだろ!」

「あの一、暮葉さん? まさかとは思いますが……そ、そのタオルの下は?」

「お、お風呂ですから当然全裸ですっ!」

「ぐはっ! う、ぐぐ……っ」

「あつぶねえええっ! 予想通りだけどやっぱり衝撃的や、思わず鼻血を噴く所だった。」

「やべえ……なんなんですかこのハッピーなイベント? っていうか願い通りだよ、まさかのラッキースケベが来ちゃったよ。けど、いざラッキースケベが起こるとその……アカン。理性を保つという作業が滅茶苦茶苦痛に感じる! どないしよう、襲ったらやっぱり負けですよね?」

「あとけーすけ様……そのっ」

「ハイ?」

「……し、下……っ」

「下？」

こちらから目を逸らして、小さな声で呟いてきた暮葉。

オイオイオイ……これは何の変態プレイだよ？ このままだと、お兄さんの短距離弾道ミサイルが暴走しちまいそうですよ。

っていつか、暮葉の下ってどういう意味なんだ。下に何かあったっけ……？

そう思いながら、俺は視線を下に向けると　そこでやっと言葉の意味を理解したのだ。

当然誰もいない想定で風呂に入った為、タオルなんてものを巻いているわけがない。

つまり……俺は母親の中から生まれてきた時と同じ姿なワケで……。

真っ裸の男のアレを年頃の女の子に恥ずかしそうに、でも地味にガン見されている……。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああっ！」

もちろん叫びました。裸をオッサンに見られた女の子のように、腹の底から叫びました。

俺……男なのになんで叫んでるんだろ？　まあいいや、とりあえず叫んどけ……。



第129話 男だつて叫びたい時は叫びますよ！（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「しかし、なあ？」

凧紗「どうしたんだ、藤島？」

圭介「この後書きもかれこれ何百回もやってるけど、そろそろネタ切れ気味なんだよな……」

凧紗「それは深刻だな……っ」

圭介「なあ明智、どうすりゃいいと思う」

凧紗「大丈夫。そういう時の為がいい言葉を知っているんだ」

圭介「おお、ホントか!？」

凧紗「うん、きつと藤島の力になれる」

圭介「頼む！ それを聞かせてくれ！」

凧紗「諦めんなよ！ 諦めんなよ、お前!! どうしてそこでやめるんだ、そこで!! もう少し頑張ってみろよ！ ダメダメダメ！ 諦めたら！ 周りのこと考えよ、応援してる人たちのこと思ってみろって！ あともうちよつとのところなんだから！」

圭介「ただのM岡S造じゃねえかよ!！」

## 第130話 初めて……なんだっ

わたくし藤島圭介は未だに彼女がいない、童貞を守る純粋な少年だ。そんな純粹で初心な俺にとって今の状況がどれほどヤバい事か……そう、俺は今女の子と2人で入浴中なのだ。コソコソとピサの斜塔と化したアレを隠すべく、必死に前かがみになって身体を洗う。彼女の視線に注意しつつ大事な所を隠し、ゆっくりと見えないように湯船に浸かる。

それは彼女も同じ。ずっと湯船に浸かっているのが辛いのか、彼女は度々湯船から上がってその辺をうろろろしているが、その度に見ないようにと目を瞑り……なにこれ、精神的に疲れるぞ？

ホントは見たいのに見ちゃダメって……ああくそ！ でも見たら絶対に理性を保てない！

このままだとガチでR18な展開になっちまうよ。どうしよう、流石にお風呂で本番やっちゃいましたなんて事になって、それがみんなにバレたら……俺は破滅だ！

そんな風に、考え事をしていた気を抜いていた 瞬間。

「……ひゃうっ！」

背後から可愛らしい悲鳴が聞こえた。

背中に感じる温かく、柔らかくて小さい何か……胸ではないのは確かだ。するとこれは暮葉の背中か何かだろう。いや、この感触は背中に違いない。

「あの〜暮葉さん？ 上がるうとは思わなかったんでせうか？」

「もきゅう……えと、けーすけ様とは前に一度入りましたので……多分大丈夫なのですっ！」

お前が大丈夫でも俺が大丈夫じゃねえよ！

マジでこのままだと理性がぶっ飛びそうだよ……耐える事がキツイ。クソツ、なんとなくだが一緒に入浴するエロゲー主人公の気持ちがあわかつたぜ。これは確かに辛いわ……耐える事がな。

ああ、なんか俺の邪心が「襲え！」って言ってる。

そして良心は「そつと触れ」って言ってる……って待て、なんでどっちもエロイルートに突入するような選択肢なんだよ？

「あの、けーすけ様っ！」

「お、おう！ な、なんだ……？」

「隣……行ってもいいでしょうか？」

「とととと、隣イ！？」

オイオイオイ！ 全裸の女の子が俺の隣に来るですと？

これはアレか、誘ってるんですか？ って違うだろ落ちつけ俺。いくらなんでも隣に女の子が来るってだけで取り乱しすぎだろ。これじゃいつか恋人が出来た時「あんた童貞？」って、女の子に超バカにされちまうじゃねえかよ。実際童貞なんだけどさ……なんかバカにされると傷つくじゃん？

とにかく落ちつけエ俺。ここは紳士の対応をするんだ……ッ！

「もきゅ……ダメでしょうか？」

「い、いいですともっ！ ハイ、勿論いいですよ！」

……って、どこが紳士の対応だよ。ただ変態的な笑み浮かべて喜

んでるだけだろ。

これじゃあ俺が変態みたいじゃないか。えっ、変態だつて？ 気のせいだ、俺は仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だよ。決してただの変態じゃねえぞ？

「それじゃあその……失礼するのですっ」

「お、おう」

ばしゃばしゃとお湯を掻き分け、暮葉がゆっくりと俺の隣に座った。幸い湯煙や湯の色のおかげで大事な所は見えないものの……やっぱり、ねえ？ 暮葉は女の子ですけど？ それだけで十分俺の息子が反応しちまうんですが。どないすりゃいいんだらうか？

「けーすけ様……夕焼け、綺麗ですね」

「え？ おお、そういえばそうだな」

よく見ると、この広い浴室には大きな窓があった。別荘自体高い所にあるので、多分浅間部長でも覗く事はできないだろうが、そのおかげで大海原と夕焼けが堪能できるのだ。  
なるほど、確かにいい長めである。

「にゅふふ、なんだか初めてな気がしますっ」

「なにがだ？ 風呂なら今回で二度目だろ？」

「もきゅ！ ち、違いますよ！ けーすけ様は相変わらず変態なのですねっ！」

「じゃあなんだよっ!？」

あと変態は仕方ねえだろ。だって……男の子諸君ならわかってくれるハズだ。男、特に思春期の男子とは可哀想な生き物なんだよ。

「もう、旅行に決まってるのです」

「旅行？」

「みんなで楽しく遊んで、気楽に騒いで……そんな旅行は初めてなのですっ」

「子供の頃とかに行かなかったのか？」

「……………」

あ、いけね……そうだよな。家庭の事情ってのは人それぞれだ。振り返ってみれば俺も旅行に行った記憶なんて全然ないな。あつたとしても、それは宿泊研修か修学旅行のみ。しかも中学の時の修学旅行は友達がいなかったせいかな、ホントクソも面白くなかったなあ…………。

それどころか、ムカついて他校の生徒をぶっ飛ばし、さらに嫌われたような記憶が…………。

ああ、やっぱり中学時代は暗黒時代だったな。それに比べりゃ今はすごく幸せかも…………。

「け、けーすけ様まで暗くならないでください！ 別にシリアスな事情があつたわけではないですよ？」

「そ、そうなのか？」

「ただお父様は軍人でお母様も忙しくて、お姉様も研究に没頭して  
いて……」

そう言う暮葉の表情は、笑ってはいながらもどこか寂しげであっ  
た。

ひよっとしてこいつ……家庭じゃ孤独だったのか？ 両親はいつ  
も仕事、姉は趣味とも言える研究に熱中していて、結局誰も自分に  
構ってくれなくて……。

なんだろう。すごく失礼かもしれないけど、親近感が湧いてきた  
かもしれない。暮葉も一時期は孤独で寂しくって、長年それが続い  
て傷ついて……。

ハッ、なんだよ……俺の中学ン時と同じじゃねえか。

ただ、俺と違うのはそれが自分の家である事。そして暮葉には全  
く非がない事だ。

「暮葉……」

「もきゅ！？ だ、だからけーすけ様、そんな落ち込まないでくだ  
さいっ！ そんなに深刻な事でもないのですから、えと……けーす  
け様？」

「……そうだな、悪かった」

なにやってんだろう俺……これじゃあ、暮葉に心配かけてるみた  
いじゃないか。

ったく、俺は男だろうが、もうちょっと元気出せってんだよ。

「……もきゅ、けーすけ様は色々心配し過ぎなのです」

「そうか？ 心配するのは普通じゃねえか？」

「けーすけ様の場合は度が過ぎてるのです」

「……ごめん」

暮葉の指摘に、俺はただ謝る事しか出来なかった。

心配性、俺ってそこまでひどいのか？ そりゃあまあ、伊吹にはよく言われるけど……やっぱり俺って異常なまでの心配性なんだろうか？

しかも、暮葉に指摘されたのはそこだけではなかった。

「……その、すぐ謝る癖も治したほうがいいのですよ？」

「えっ？」

「けーすけ様って、自分が悪くない事でも謝るじゃないですか？ そっじゃなくても自分を責め過ぎです……あと、すぐ謝る人って信用されないらしいのですよ……？」

……なんか、前にも同じ事を言われた気がする。確か伊吹だったかな。っていつか伊吹から毎度同じ内容の説教をされている気がする。

すぐ謝る癖かあ……確かに、謝って物事から逃げる人っているし、信用されるわけないよな。

「……はあ、同じ事を伊吹にも言われたけどさ……俺ってやっぱりダメ人間なのかな？」

「そ、そんなことはありません！ いい加減にしてくださいっ！」

……あれ？ 暮葉……ひょっとして怒ってんのか？

妙に声のトーンが高いし、何よりこの真剣かつムツとした表情。やっぱり怒ってる、暮葉はさっきからマイナス思考な俺に対して怒っている。

暮葉はばしゃんと音を立て立ちあがる。更に説教を続けるように、

「どうしてけーすけ様はいつも自虐的なのですか！？ そんなに自分を責めて何の得になるのですか！？ そんなの……ただけーすけ様が辛いだけなのですよ？」

っと、最後に複雑な表情を浮かべて俯き、暮葉は俺に言ったのだ。その……言葉に胸を撃たれたのは事実だ。

だがそれ以上に……暮葉さん、その……全てが丸見えなんですけど？ 発展途上と言うかある時期で成長が止まってるような、そんな暮葉の身体の全てがしっかり俺の目に映っていた。

いかん。このままだとマジで俺が暴走しそうなんだが……と、とりあえず！

「く、暮葉……全部……見えてるぞ……っ？」

「……もきゅ？ 〜〜〜〜っ！」

ようやく自分の状態に気付いた暮葉は、恥ずかしそうに耳まで顔を真っ赤にし、慌てた様子で湯船に身体を埋めた。ふう……助かった、あと少しで暮葉を襲う所だった。

危ない危ない。ガチで犯罪者になる所だったぜ……。

しかし相変わらず鼓動は早く、かぁっと全身が熱くて……その、アレも元気で、とにかく俺の興奮は全然収まらなかった。思考力もだんだん無くなってきた……どうしよう？



「……けーすけ様のほか、へたれ、エッチ……」

「……っ！」

今の言葉で顔が極限まで熱くなるのを感じた。そして、同時に何かが吹っ切れた気もした。

限界。

そう、限界だ。もう我慢の限界、これが男の宿命である。いくら頑張った所で、やっぱり女の子に弱い可哀想な生き物なのである。俺を抑制するものはもう何もない。ただ本能のままに動く狼になった俺は、この手を伸ばして暮葉を抱き寄せた。暮葉は小柄で華奢で……乱暴に扱ったら壊れそうである。

せめて優しく……出来る限り優しくしねえと。

「もきゅ!? け、けーすけ様っ!?!」

「ごめん、暮葉……っ! 嫌なら俺を蹴って逃げてくれっ!」

暮葉を心配するセリフを吐く事だけが、今の俺に唯一できる彼女を守る為の行動であった。

そして俺は何も考えず、自分の顔を暮葉のあどけない顔に近づける。このまま唇を重ねようとしたのだが……あれ、なんでだよ? なんで暮葉は抵抗しようとしなんだ。それどころか、まるで俺が今からしようとしている事を待ってる……様に俺には見えた。

暮葉は小刻みに震え、赤くなりながらも目を瞑り、口を少しだけ突き出していた。

おいマジですか……これってその、受け入れてくれるって事……だよな?

この反応は間違いなくそうだよ。それ以外に何かあるか? とに

かく、暮葉が俺を受け入れようとしている事には変わりない。よし……ここはエロゲーで得た知識を頼りに　！

「いやあくすつかり気絶しちゃったよ！　藤島君まだ入ってるかい？」

その瞬間、扉が開く嫌な音と共に　この世で一番空気の読めない男が入ってきた。

「もきゅ　っ!？」

「おわあああああっ!？」

俺は慌てて暮葉を自分の背後に回し、暮葉を隠そうとした。

俺の方が身体は大きい。暮葉が湯船に埋まっててくれれば多分隠れるハズだ。

背中に暮葉の身体が……いや、暮葉の髪の毛の感触も……うう、耐えるのが辛い。

「どうしたんだい藤島君？　顔が真っ赤だが？」

「な、なんでもない。それにしても大胆ですね部長……っ」

「何を言ってるんだい、男同士ではないか？　それとも君は自分のモノに自信がないのかい？」

「ありますよ！　一応自分では立派だとは思ってますよ!？」

「まあとにかく、男同士で隠す必要などないじゃないか」

「そ、そうっすね……」

ああ、浅間部長すっげえ解放的だ……自己防衛本能が働いて視界にモザイクが……うげっ。

でもなんでかな。やっぱり見たくもないものを見たせいか、さっきまでの興奮が次第に鎮まってきたような気がした。いや、確実に鎮まってきている……ある意味ではGJだぜ浅間部長。

でも空気読めなさすぎだろ。もし浅間部長が現れなかったら、今頃俺は暮葉と……。

「そつだ藤島君。折角だからボクとナニの比べ合いを」

「だが断る！ 気色悪いからさっさとあっち行け！」

暮葉の為にもあっち行ってください、マジでお願いします！

「なんだい？ まあいい、ボクは身体でも洗うよ」

「……ふう」

浅間部長がシャワーに向かった事を確認し、俺は暮葉にそつと声を掛け、

「おい……今のうちに風呂から上がれ」

「は、はいっ！ その……ありがとうございます、けーすけ様っ」

「お礼はいいから早くっ！ 浅間部長にバレたらヤバいだろ……っ  
！」

ヒソヒソと暮葉と会話をした。神様、どうか浅間部長に聞こえて  
ませんように。

その後、暮葉は無事に風呂から上がり、俺もしばらくして風呂か  
ら上がった。

あゝあ……なんだろう。風呂で疲れを癒そうと思ったのに、何か  
余計に疲れた気がする。

しかも暮葉とはその……若干気まずいし、はあ……。

第130話 初めて……なんだっ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回危なくね？ そろそろ警告喰らうんじゃないね？」

大吾「だ、大丈夫だ！ か、こん原作は全年齢対象でももつとヤバかった気がする。流石は最強の寸止め作品って感じだったね」

重原「うん、この作品はヨスガってないから平気さ」

圭介「てめえら安心しすぎだろ！ 大体今回タイトル時点でアウトじゃねえか！」

大吾「深読みのし過ぎじゃないか？ 初めては初めてだろ？」

重原「そうそう。木下さんが旅行するのが初めてって意味でしょ？ それ以外になにか意味があるのかい？」

大吾「やゝい！ 圭介の変態いゝ！」

圭介「う、ぐ……久々にコイツらシバきたいと思った……っ！」

### 第131話 襲撃者

風呂から上がった後、俺たちは全員で晩御飯を食べた。浅間家のカレーは確かに俺の口にも合うほど辛くておいしかったが、甘党の伊吹には辛い一品であった。

「けけけ、圭介っ！ み、水っ！ 水ーっ！」

「ちょ、水より牛乳のほうがいいって！ 青山さん牛乳を頼むっ！」

「……え、えと……その、牛乳牛乳……っ！」

「千早！ 牛乳が一番上の所に入ってるから落ちつけよな！」

「やつふありキャラーはあみゃいのがいいわよっ！」

「お姉ちゃん、呂律回ってないよ？」

青山さんにもあかりにも、そして葵にまで心配されている伊吹。なんたるカオスな光景、伊吹は本当に辛そうであった。

伊吹、まだ辛い物苦手だったんだな。伊吹が超甘党で辛い物苦手なのは知っていたが、まさかこの歳になっても全然変わっていないとは。ある意味可愛い特徴かもしれない。あと……さっきから俺と暮葉が妙に気まずくて一言も会話してません。

そりゃあね、お風呂であんな事があれば普通は気まずいよ。目があつたら俺か暮葉のどちらかが絶対恥ずかしそうに目を逸らすし、はあ……合宿中に元の関係に戻るべか？

……いや、無理かもしれないな。だって俺は風呂で暮葉にあんなことを。

「どうしたんだい藤島君？ 風呂の時から思っていたが様子が変わな

「なんでもないっすよ部長。つーか放っておいて欲しいっす」

「やっぱり何かあったんじゃないかい？」

「な、なにもありませんよっ！」

大体浅間部長のせいだろうが。折角いい雰囲気だったのに……それを、あんな変なタイミングで現れて雰囲気ぶち壊しやがって。雰囲気ブレイカーにも程があるだろ。

はあ、どうしよう。絶対あの一件で暮葉に嫌われたよ……もうダメかもしれない。

やっぱり女の子に嫌われるって、精神的にキツいっすよね……なんとというか、暮葉に嫌われたと思うと胸が妙に痛むんだよ。なんだろう、部長に嫌われたって多分こっちはならないだろうに。

それから数時間後、色々屋内で遊びまくって……そろそろ就寝の時間である。

みんなで寝室がある2階まで行き、当然男女で部屋が別れており、その前で男性陣と女性陣は当然のように明日の朝までの別れを告げたのである。

「それじゃあおやみーお兄ちゃん！ ついでに部長さん」

「ボクはついでのかい！？」

やっぱり葵は浅間部長のことなど、ミジンコ程度にしか思っていないようだ。浅間部長のことなんてついででしかないらしい。

「せ、先輩……その、先輩にならわたし……夜這いされてもいいですよ?」

「しねえよ! さっさと寝る変態淑女!」

「兄貴は来るなよ! 圭介は……多分許すっ」

「多分って何だよ! 間違っても過ちは犯さねえよ!」

もう暮葉のように嫌われるのはゴメンだ。同じ過ちは二度も繰り返さん。せめて他の人達には嫌われぬよう気をつけないと……はあ、結局暮葉とはあれから一言も喋っていない。

なんかその、恥ずかしいと言うか……気まずい。

「ねえ、あんたと暮葉何かあったの?」

どうやら伊吹は俺と暮葉の妙な距離に気付いたらしく、さり気なく俺の隣に並び、俺と暮葉を心配するような言葉をかけてきた。何かあったって……そりゃあ色々ありましたけど、どう考えても俺が全面的に悪い事だろうし。増してや伊吹は永渕に無理やりやられそうになった過去があるからな。

そんな事をしたと聞けば、彼女も俺を絶対に許さねえだろう……。なんか逃げるみたいで嫌だけど、無駄な争いを避ける為にも言わない方が賢明だな。

「別に……なんでもねえよっ」



「そう？ さっきまで仲良しだった気がするけど、なんかあんた達だけ空気重いわよ？」

「き、気のせいだろ？ とにかく俺疲れたし……もう寝るな」

「えっ？ う、うん……おやすみっ」

「おう、おやすみ……」

なんなんだろうなあ……俺、ホントに最低の下衆野郎だな。結局、俺は逃げるように彼女達の前から立ち去って、自分のベッドに横たわった。そのまま右腕を額に乗つけて考え事をする。

この先俺はどうすればいいのか。暮葉に一体どのツラ下げて顔出せばいいのか……。

そんなの当然、謝ればいい話なんだけど……謝って許してくれるだろうか。だって俺がアイツにやろうとしていた事はその……まあアレだ。責任重大な事として……だって、ねえ？

けど、このまま逃げっぱなしはやっぱダメだよな。たとえ許されないにしても、謝っておいたほうがいいに決まっている。よし、明日勇気を振り絞って謝るとしよう。

明日もどうせ遊ぶんだし……その為には 今日のもう寝よう！

……

……

……

それから30分、なんだ……なぜなんだろうか？

「全く眠れねえ……っ」

浅間部長のいびきはうるさいし、虫の鳴き声もかなりのボリュームである。そして何より頭の中でついつい暮葉のことを考えてしまい、そのせいか全く眠れないんだよね……どうしよう？

このまま眠れなかったら、明日辛いんじゃないだろうか？

いや、絶対辛いよね……とにかく、さっさと寝よう　と思うと眠れない。ちくしょうこうなったら奥の手を使うしかない。ちよつと気晴らしに外でも散歩するか……。

「はぁ……」

わたくし、藤島圭介は青山さんの別荘を抜けだし、夜の六角を歩いていた。しかし流石に田舎だけあって夜空は綺麗である。これは心癒されるな……なんつーか、今までであった散々な出来事を全て忘れられそうな気分である……って、流石に忘れたらダメだよな。

つーか、こんな散歩で眠くなるんだろうか。夜の涼しい空気に虫の鳴き声、いかにも平和な空気である田舎町の夜景を眺めてたら、むしろ目が覚めちゃうんじゃないだろうか？

……なんて事を考えた、まさにその時であった。シャーっと言う、まるで刀か何かを抜くような音が俺の耳に入ってきた。その音を聞いて思わず緊張が走った。

「!？」

刹那、ぱんつと。

不自然な音を立てて、俺が右手に持っていた缶ジューズが吹き飛んだ。反射的に缶ジューズに何か当たる寸前に手を離し、それが

幸いしたのか、手首を痛めるといふ事もなかった。

俺は両手に力を入れ、きよろきよろと周囲を見回しながら、

「くそ……誰だっ！」

「はっ、中々鋭い反射神経の持ち主だな……藤島圭介とやら？」

「っ！」

振り向くと、そこには笑みを浮かべた20代後半くらいの男が立っていた。男は長身で細身ではあるが筋肉質で力は強そうだ。その上、暮葉の一期一振よりも長そうな日本刀を右手に持っていた。

服は着流し、それもデザインは新撰組のものに似ていた。

なんなんだアイツ？　つか、なんで俺の事を攻撃しやがったんだよ。

「てめえ……一体何者なんだよ！」

「お前さんは何度も俺らに襲われてるって話だよな？　だったら、事情くらいは知っててもいいと思うんだよなあ？」

「……っ！　てめえ……サヴィエトか！」

「一応そんな名前の組織だったか？　まあ、俺は所詮お雇い兵士でしかないんだがなあ？」

「お雇い兵士だと？」

「連中の思想は俺も気に食わねえ。けど、俺たち魔術師ってのはこの世界じゃ弾圧される存在だ。そんな存在に仕事をくれるってんな

ら……話は別なのよな」

「どういう事だよ……つまり、コイツは思想が合わねえのに、わけのわからねえ組織の為に働いているってことなのか？ そんなのってアリなのかよ……。」

「……てめえはあの連中の理不尽さを知ってたんだろ？ それを知ってるんだっいたらその刀を引いてくれないか？ 俺は出来ればてめえ見たいなヤツとは戦いたくない」

「それは俺も同じ事よ。丸腰の学生さんを刀で襲うなんて……武士としては情けなさすぎる。けどなあ……こっちにも色々事情ってモンがあんのよ。お前さんを襲って身柄を引き渡さねえと、俺は今月無給で生活費もロクにないのよなあ？ 悪いけど……お前さんのほうこそ刀を振る前に降参してくれねえか？」

「それはできねえ……俺には居場所があるんだよ。そこからいなくなるワケにもいかねえし、第一てめえらみたいな怪しい連中にホイホイついて行く気もねえ！」

すると、男は暗闇の中輝く日本刀を振りまわし、やがていつでも俺を切り裂けるようにと、彼は刀をガツチリと構え鋭く俺を睨みつけてきた。

やべえ……怖え、ありや確実にプロの目だぞ？

素人じゃねえ……体格からしても絶対に勝ち目は無い。戦闘のプロな上に魔法使いつて事は当然魔法を使えるって事だよな？ だったら……圧倒的に俺は不利だぞ？

「そうかい……仕方ない、お前さんは今からこの近藤政信（こたて まさのぶ）の敵だ」

……けど、俺にはみんながいる。居場所もちゃんとある。今は合宿中で若干暮葉とは気まずい事はあったけど、それでも仲間である事には変わりねえ。その仲間たちを裏切れることはしたくない。何より、ここでコイツに捕まったら　それだけで暮葉を裏切る事になるじゃねえかよ。

「ナメてんじゃえねよ……てめえ！」

「いい目だな？　しゃあないなあやるってんなら……一瞬で仕事を終わらせてやるよ！」

言葉と同時に　近藤という謎の無事は飛びかかってきた。

第131話 襲撃者（後書き）

・後書きトークコーナー

圭介「また俺襲われたのかよ!？」

雪乃「貴方、よく襲われるわねえ?」

早苗【しかも、今度は剣使い】

雪乃「あら、丸腰の貴方にはキツイ相手じゃないかしら?」

圭介「うう……ま、まあなんとかするさ! ノリで!」

雪乃「なんとかなるのかしら?」

早苗【さあ?】

## 第132話 近藤政信

言葉と同時に 近藤という謎の無事は飛びかかってきた。

ゴッ！ という爆音を俺は聞いたが、次の瞬間、16mという鉄道車両1両分はあつた距離を1秒もしないうちに詰めてきたのだ。反射的に俺は両腕を頭の上に持っていていき、身を守ろうとはたものの……相手が持っているのは日本刀だ。その程度の防御で身を守るハズがない。

……なら、やることは一つしかねえだろ。

俺は僅かに前へ突撃を始める。すると、近藤は怪訝そうな顔を浮かべた。普通、こういった状況で素人が取る行動はガードするか、無意味に逃げ回る事だけだ。それが、俺の場合はあえて捨て身の突撃をし始めたのである。その理由が近藤にはわからなかったのだらう。

「ふっ！」

だが、それでも近藤はプロの武士であつた。僅かに吐息を吐くと、何事もなかったかのように日本刀を振り下ろし、確実に敵を仕留めようとした。

風を切る凄まじい音。一瞬それにビビって動きが止まりそうになったが……ここで止まれば死は確実であろう。死なぬにしても大怪我は絶対するハズだ。だから 今度こそ。俺は今度こそ自分の身を守る為に右へ思いつきり跳躍したのだ。

「……ッ！」

とりあえず斬撃をかわす事はできた。しかし着地の瞬間にバランスを崩し、今にも転びそうなほどに不安定な姿勢になってしまった。

それを見た近藤はニヤリと笑い、今度は薙ぎ払うようにその長く大きな刀を振りまわしてきた。下手にバランスを直していたら斬られる……ならっ！

「う、あ　ッ！」

「　あん？」

あえてバランスを崩し、俺はアスファルトに倒れ込んでやった。刃はギリギリ俺に当たらず背中を掠めて振り抜いた。よかつた……辛うじて斬られずに済んだ。

……なんて安心していている場合じゃねえ。ハッ、と気付いて上を見ると、近藤は既に次の動作に移って俺を仕留めようとしていたのだ。魔法か何かを使ったのか知らないが、近藤は人間の跳躍力を遥かに超えるほど高い所までジャンプしていた。真上から刀を串刺しにするつもりか……？

……馬鹿野郎かアイツ。サヴィエトがお前に課した任務は俺を捕まえる事。そんな事したらいくら俺でも死んじまうじゃねえかよ。俺だって身体は丈夫でも一応は人間である。万が一アレが脳にでも刺さったら死ぬのは当然のことである。

ちくしょう……どうしてこういう時に限って身体が動かないんだよ……ッ！

動けよ……俺の身体ア　ッ！

「……ッ！」

俺は僅かに右へ身体を転がした。本当に僅かな距離だ……それで、近藤の日本刀を避けるには十分すぎる行動であった。俺はゴロゴロと転がり、1mほど転がった所で起きあがる。

近藤の刀は勢いよく、アスファルトに突き刺さっていたが、それ



が問題だ。刃がアスファルトに刺さってしまつて抜けない様子である。俺の瞳には刀を抜こうと必死に力を入れる、一人の男の情けない姿が映っていた。これはハッキリ言つて……神様が俺にくれた僅かなチャンスかもしれない。

「う、オオオオオオオオオオオ！」

俺は叫んで、拳を握つて、ひたすら前を突き進んで近藤の懐に飛び込んだ。

拳を振るう　　が、その瞬間だ。近藤は刀を抜くことに成功したようだ。だけど拳をかわせるタイミングじゃねえ。今から攻撃する事も不可能だ。だから俺は　　わかりきつたように安心し、この拳をクソ野郎の顔面目がけて放つた　　のだが、

その時。フツ、と近藤の姿が消えたのだ。

「……ッ!?　くそっ、どこに　　!?!」

キョロキョロと敵の姿を探すが、見当たらない　　と思つたまさにその時であつた。既に近藤は20m近く離れた所におり、その近藤は何故か、俺から離れているのに刀を振り下ろしたのだ。

なにやつてんだよ……っとは思つたが、その意味を理解したのはこの直後である。

振り下ろされた刀が地面に接触した　　刹那、その斬撃は地面を伝つて俺の所まで一直線に伸びてきたのである。真つ二つに引き裂かれたアスファルトが抉れて、何故か銀色に輝いている。

咄嗟に俺は亀裂を避け、もう一度近藤を見つめる。一体なんだつたんだ?　どう考えてもアレは物理法則を無視しまくつてんだろ……普通じゃねえ。つて事はアレなのか?　アイツは魔法使いつて言つていたくらいだから、アレは魔法によるものなのか?

「ほお？ 素人さんにしちゃあ……結構やるなあ？」

「……っ」

近藤が挑発するように刀を頭上で廻し、笑いながら俺に語りかけてきた。

「痛い目見ないように一撃で沈めようと思ったんだけど……なんか、お前さん無駄に反射神経いいしそれ無理かもしれないなあ？ 悪いけど、痛い目見てもお兄さんを恨むんじゃねえよ？」

どうする……俺？ 相手は身体能力が高い上に魔法使いだ……勝ち目は殆どねえぞ？

いつそのこと別荘まで逃げるか？ そこには暮葉がいる、暮葉ならあの野郎とも対等に戦えるかもしれないけど……今はみんな寝ている時間だ。こんな事の為にみんなを起こしたくはない。

だったらやっぱり一人で解決するべきだろう。それに……俺の身体なら 多少攻撃を喰らったって何の問題もないハズだ。なら手段は一つしかねえだろ ツ！

「ナメてんじゃねえぞ……くそつたれええええええっ！」

一気に前へ跳躍し、その勢いでダッシュする俺。そう 俺がとった行動とは、何も考えずに近藤に近づく事であった。近づいてどうするかまでは考えていない。だけど、この場で一番重要なのは戦いの主導権を握る事である。

バルジの戦いのドイツ軍と同じだ。いくら非力でも主導権さえ握っちゃうえば 強大な相手とも少しはマトモに戦えるハズである。それでドイツ軍は一時的な大反撃に成功したのだ。最も、いつまで

主導権を握ってられるかはわからないが……やってみる価値はあるハズだ。

拳を握って突撃。近藤は刀を構えて待ち構えるが……さっきだつて一瞬、アイツを殴るチャンスはあったんだ。もう一度そのチャンスを探すんだ。そして 今度こそ確実にアイツを殴れ！

……しかし、俺のこの作戦は失敗した。その理由は近藤のせいではなく、

「ちょっと……なにようっさいわね……っ」

何故か、そこにパジャマ姿の伊吹が佇んでいたのだ。

そういえばここは別荘から遠くは無い……というか、別荘からまだ30mも離れていない。

なるほど。俺たちの戦いの轟音で伊吹は目覚めたのか。

だからって様子を見にくるかよ普通。伊吹は普通に何事も無いように俺に近付くが、それがどれほど危険な事か、彼女はまだ理解していないようだ。どうやら彼女は寝ぼけているらしい。

髪も寝癖でボサボサであり、何よりジト目が寝起きの不機嫌さを示していた。

「……っ！ 来るな、伊吹！」

「えっ？ きゃっ！」

俺は衝動的に伊吹を抱きしめ、そのまま左方向へと跳躍した。何故なら近藤がまた刀をアスファルトへ振り下ろし、再び亀裂が凄まじい勢いで迫ってきたからである。

「……えっ？ ちょ、なに……圭介？」

「いいからお前は黙ってる。そこでじつとしていてくれ」

「えっ？ ちょ……その、私まだ心の準備が……って何言わせんのよばか圭介っ！」

「いいから！ 事情は後で説明するから、頼むからお前はそこで大人しくしていてくれ！」

そう叫んだ後、俺は再び近藤のことを睨みつけた。

相変わらず近藤は余裕そうな笑みを浮かべている。クソッ、これがプロの余裕ってヤツか？

「大変だなあお前さん。女を守りながら戦う……か、お前さんのような素人さんにそんな高度な事が出来んのかい？」

「うるせえ……やるしかねえだろ！」

「ほお？ なら仕方ねえな……だったら女を守ってみるよ勇者様っ」

ちくしょう、完全に主導権を近藤に握られた。このままじゃ絶対に勝てない っと思っていたまさにその時であった。いきなり俺の背後がオレンジ色に輝き、そして焼けるような熱を感じた。

この感じ……まさかと思って、俺は咄嗟に後ろへ振り向いた。

そこには 2 mにも及ぶ炎剣えんけんを超能力で作り出した、明智凧紗の姿があった  
！

「明智！？」

「説明は後、藤島 そいつを倒すぞ！」

「えっ？ お、おう！」

どうなってるんだ？ なんかまるで、アイツが俺を襲っている理由を知ってるみたいだな。

明智……どういう事なんだよ。って、それを知りたいやまず近藤に勝たねえとな。

「ちっ、いつかの超能力者<sup>クソアム</sup>か。確かにアンタの能力はすごいが……その程度で引き下がるわけがねえのよな！」

……なんて叫んでいるけど、近藤は内心かなりビビっている。そして その明智に対する恐怖はちゃんと外面にも出ていたのだ。近藤は叫ぶ事だけに熱中し、身構える事を忘れていたのだ。

隙だ。滅多に見せる事のない隙である。今がまさに攻撃のチャンスだ。だから俺は一気に駆けだして近藤との距離を詰めたのだ。近藤がハッ、と気付いた時には俺はもう、近藤の目の前に立っていた。後はこの拳を放つだけ だったのだが、

「……ッ!？」

ウソだろ？ また消え

「ぐ、はあっ!？」

気付けば近藤は俺の真横にいた。そして近藤は開いていた左手で俺の鳩尾を殴った。

その衝撃に一瞬、俺の呼吸は止まった。まずい このままだと斬られる！

「藤島！ う、ああああああっ!！」

その時、明智がこっちに向かってきたのだ。ただ走っているだけではない、2 mにも及ぶ超能力で作り出した大きな炎剣を右手から伸ばし、狩人のような鋭い目つきで近藤を睨みつけていた。

轟々と響く燃える轟音。それだけでも常人にとっては既に恐怖である。

「藤島圭介はさほどの脅威ではない……懸念すべきはあの女のみ……なら！」

近藤は何かを呟いている。何を言っているのかハッキリはわからない……が、俺にもハッキリわかった事があった。どうやら彼は明智を恐れている。

だからこそ、近藤は明智を優先的に攻撃しようとした。それが完璧とも思えた彼の 近藤政信の唯一のミスであった。どうやにコイツ、俺がさっきの鳩尾攻撃でしばらく動けないと思ったらしい。だけど……俺がその程度で怯みはしても、本当にしばらくの間は動けなくなると思うか？

答えは No に決まってる！

近藤が刀を構え、何らかの呪文を唱えている この隙に俺は拳を握り締めた。

そのまま勢いで低くなっていた姿勢を上げ、俺の拳が近藤の顔面に力強く突き刺さった。

「が、は ! な……バ、かな……普通ならさっきの一撃で!?!」

そう 普通ならさっきの鳩尾で伸びている。

「ただどな……俺の身体はちつとばつか普通じゃないんだよ！  
さて……んじゃあそろそろ、フィニッシュと行くか。俺は前へ跳  
躍し、途中で明智と並んでとにかく近藤の懐へと飛び込んだ。俺と  
明智は近藤にタックルを仕掛けたのである。  
衝撃によって近藤は大きく後ろに吹っ飛び、凄まじい勢いで近藤  
は地面に叩きつけられた。」

「う、ぐ……く、この……っ！」

それでも近藤は気絶しなかった。刀を杖代わりにして立ちあがる  
うとする近藤。

「アッ！」

だが、近藤は立ちあがる前に気絶した。誰かに攻撃されたよう  
である。

近藤の意識を奪う攻撃を放ったのは、明智でなければ当然俺でも  
ない。

そう、近藤を完全に沈めた者は、

「まったく、なんなのよ一体……っ！」

国宗伊吹。

そう、そこで戦いを見ていた伊吹だ。彼女はしなやかに竹刀を振  
りまわし、近藤の後頭部に激しくそれを打ち込んだのである。

竹刀と言っても、思いつきり叩かれれば骨にヒビは入るだろう。  
それだけの威力があればボロボロの相手を気絶させる事くらい、造  
作もない事なのだ。

「……ふう、やったな藤島」

「あ、ああ……とりあえずは勝ったな」

……はあ、しかし疲れたあ……なんだか疲れて眠くなってきたし、案外近藤との戦いは安眠という意味では無駄ではなかったかもしれない。

それにしても気になるな。まさかここでサヴィエトのヤツに襲われるとは……。

それになんで明智がこの事を？ 相手も明智のことを知っているみたいだし、一体何が起こっているんだろうか？ それを明智から詳しく聞く必要があるそうだな。

あとは……。

「……………」

伊吹にはなんて説明すればいいのやら……はあ。



### 第132話 近藤政信（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「ぷひゆるるるっ！　ね、寝起きの伊吹ちゃんカワユス！　ぷひゅ〜！」

圭介「ちょ、なんだコイツきめえっ！」

黒木「いいないいなア〜！　俺も寝起きの伊吹ちゃん拝みたいお！」

圭介「い、いいから落ちつけ黒木！　悪い意味で注目浴びてるぞ！」

黒木「ぷひゅ〜ぷるる、ぷひゅあ〜ブヒイイイ！」

圭介「もしもーし！？　おーい、現実に戻ってこーいっ！」

黒木「ハアハア、伊吹たん……ぶ、ブヒイイイイイイイイイイ  
！」

圭介「……最近、黒木が伊吹に対してのみご覧の有様なんだが？」

赤佐「仕方ないやろ。放っておいたほうがええで？」

圭介「そ、そうですか……っ」

### 第133話 友情ってスバラシイ!

夜の砂浜、当然こんな時間帯に砂浜にいる者など誰もおらず、実質この砂浜は俺たちの貸し切り状態であったが、だからと言って楽しい空気というわけではなかった。

周囲を警戒する明智に竹刀を持った伊吹。そして、俺たちに捉えられ縄で縛られた近藤。

どう見ても、僕ら遊んでもハイな状況とは言えない。戦いが終わって捕えた捕虜をこれからじつくり尋問するかのような、そんな空気が辺りに漂っていた。

「他には曲者はいないみたいだな」

「っで、結局明智と近藤はどういう関係なんだよ?」

俺は明智に一番気になっていた事を聞いた。すると明智はこっちを向いて、

「関係とか、そんな深いものではないぞ? 私はその男に襲われたんだ」

「おっ!? 襲われた!？」

明智さあ〜んそれってどういう意味でしょうか? ボコボコにされたって意味か、それとも性的な意味で襲われてハアハアな感じでしょうか? うぐぐ………気になる、すっげえ気になるぞ。

「圭介……あんだ、またしょうもない事考えてるでしょ?」

「か、考えてねえよ！」

「顔に出てる。やっぱ藤島は変態だな」

「う、うるせえ！ 俺は変態じゃない、変態と言つ名の紳士だ！」

「結局変態じゃない……」

「変態だな……」

女の子2人にジト目で見られるプレイ……ちくしょう、ドMに目覚めていれば、冷たい視線で見られる事自体がご褒美に感じられるのに。なんて惜しい男なんだ、Mじゃないから嬉しくないぞ。

それより早く話を進めろよ。俺が変態とかそんなわかりきってる事はどうでもいい、それより明智がどうして近藤に襲われたのか。その理由を知りたいんだよ。

「それで、結局何があつたのよ？」

「う、ああ藤島のせいで本題を忘れてた。ありがとうな伊吹」

「俺のせいだよ！」

「2、3日前くらいの話だったかな？ たまたま買い物帰りだったんだ」

しかもスルーしやがったし、淡々と理由を語ってやがるし。

なんてヤツなんだ明智凧……お前、色々な意味で恐ろしいヤツだよ！

そこまで高度なスルースキル。東京都民ですら持ってねえと思う

ぞ？

「私は自宅に向かって歩いていったんだけど、その途中であの男に襲われてな、やむなく超能力を使って応戦したんだが……結局逃げられてな。まさかこんな所で再び遭遇するとは思わなかったぞっ」

「……っていうか凧紗、あんた超能力者だったの？」

「で、出来れば秘密にして欲しいぞ……っ、というか伊吹は信じるのか？」

「ま、まあ……わけのわからない事には何回も巻き込まれてるし、一応は信じてやるわよっ」

流石伊吹、俺たちの事情を知っているだけはあるな。

アツサリ超能力を信じるとは、某自称超能力者もビックリだと思っぞ。

っっていう事はアレですか。もしかして天使とか悪魔がいたとしても、伊吹ちゃんはアツサリ信じちゃうんでしょうか。もしそうだとしたらある意味すごいぞ？

「んで、それで何で俺に気を付けろって言ったんだよ？ やっぱり近藤のことに関係してるのか？」

「まあ……だって、近藤は藤島を誘き寄せる為に私を襲ったって……っ」

「明智にまで手え出すって……コイツ武士としての誇りあるんだろっか？」

なんて事を絶賛気絶中の近藤に言ってみるが、当然近藤は気絶中なので、俺が近藤の文句を言っても近藤はうんともすんとも言わなかった。ですよねー、気絶中なんだから、むしろいきなり目覚めて襲われるほうが怖いっすよ。

そんな不意打ち的な事があつたら、ロンメルを相手に戦う英国紳士の気分になるぜ？

「それはともかく、藤島……お前一体どんな事件に巻き込まれてるんだ？」

「えっ？ ど、どんな事件って……？」

「秋葉原の時もそうだったろ？ あの不良は藤島の名前を言っていたぞ」

「あ、アイツはその……まあ初対面だけど違うようなで……？」

「藤島、言ってくれ……友達を心配させるな……っ」

「……………」

すみません。今の心配そうな表情がその……たまらなく可愛かったです。やっぱり明智って普段はカッコいい系だけど、たまに見せる仕草とかは完璧女の子だよなあ。

それも、とびっきり可愛い女の子である。明智のことは見て思わず、照れか何かは知らないが顔が熱くなってしまった。多分俺の顔は今、結構赤くなっていることだろう。だってねえ……明智が可愛かったんだから仕方ないじゃん？ 男は基本的に女の子に弱い生き物なのだ。

「わ、わかった……説明するからその……顔近えよっ」

「えっ？　くっ！　ご、ごめん藤島……っ」

完全に負けた。明智の美貌に完全に敗北しました……まあ、仕方ないよね？

けどなんでだろう。たかがそれだけなのに、その……伊吹が不機嫌そうなんだが。

まあ、今は伊吹は後回しでいい。とりあえず事情を説明するとしてどうか。

その間に伊吹の機嫌が戻りますように……。

……っと、言うわけで俺は明智に全てを説明した。

俺の正体や暮葉達の行動目的。サヴィエトという敵対勢力の存在と、そのサヴィエトの目的や魔法使いという連中が多数存在するという事実。そして、俺らが戦ってきた今までの相手の事。

その全てを、何の偽りもなく明智に説明したのだ。

明智は呆気にとられた表情を浮かべていた。まあ……それが普通の反応であろう。

「そんな事に巻き込まれているのか……藤島は……っ」

「あんた……私の知らない所でそんな危険な目に遭っていたの!？」

「まあ……一応全部事実だよ」

驚いているのは明智だけではない。伊吹もこれまでに潜り抜けた数々の危険を聞き、かなり不安そうな表情を浮かべていた。そりゃそうだ、伊吹にだって全てを教えたくはない。伊吹に余計な心

配をかけたくなかったと言つのもあるが、伊吹の性格的に下手すりゃ介入してくれかもしれない。

伊吹を危険に晒したくは無かった。だから、事情を知ってるのに関わらず、俺はあえて伊吹には何も説明せずに日常を営んできたのだ。

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだ……そういう事なら私、この超能力チカラで藤島を守ろうとしていたのに……！」

「わ、私もそうよ！ その……別にあなたの為じゃないけど……っ、周りでそんな事が起こってるのは何か嫌だし……それに、私だって一応暮葉達の事情は知ってるのよ？」

「ごめん……迷惑とかかけたくなかったから」

「迷惑なんかじゃないぞ。私達はその……友達だからなっ」

友達って言葉が照れくさかったのか、明智の顔はほんのり赤く染まっていた。

けど友達っていうまでに、少しだけ間があったような気がするが……気のせいだよな？

き、気のせいだと信じたい。奴隷とか言われたらフツーに泣きますよ俺。

「わ、私だって圭介の……お、幼馴染よ！」

伊吹も幼馴染って言葉が照れくさかったのか、少し俯いて顔を赤らめていた。

けど、伊吹まで幼馴染って言うまでに、少しだけ間があったような気がするぞ。ひょっとしてコイツも何か違う事を言おうとしたん

じゃないか？ 例えば奴隷とか奴隷……って、なんで奴隷ばかりなんだよ！ そもそも俺は日本国民である以上、一応基本的人権は保障されてるハズだぞ。

まあ、とりあえずはお礼を言うべきなのか？ うん、言うておう。なんか言わなきゃいけないような気がするよ。

「2人とも……サンキューな」

「そ、そんな……お礼を言われるほどの事は言っていないぞ？」

「そうよっ、心配するのは当然よっ」

ああ……なんていい子たちなんだろう。俺は不思議といい気分になっていた。

なんてことのない、ただの当たり前な心配だったのかもしれない。それでも、俺が2人に想われてるんだなと感じるには、十分すぎる言葉であった。

やっぱり友情っていいよな……持つべきものは友とかく聞くけどさ、ひよっとしてこういう事を言ってるのかもしれないな。

「みなさんっ！」

ん、こ……このソプラノボイスの明るい声。

間違いない。振り返ると 伊吹同様パジャマ姿のまま別荘を飛び出してきた暮葉がいた。

だけど、何故か俺は暮葉を直視できなかった。だって……ねえ？別に意識しなくてもお風呂の時のことを思い出しちまって、恥ずかしさと申し訳なさで思わず目を逸らしてしまう。

何故か、顔がかあくっとなつてしまふ。それは暮葉も同じらしく、俺と目が合うと暮葉も恥ずかしそうに俺から目を逸らしてし



まった。

ああもつ……これじゃあ話すどころか、面と向かうことさえ難しいじゃねえかよ……。

「木下じゃないか。そういえば藤島達と一緒にだったな」

「あら暮葉？ あんたも起きたの？」

「あれだけの騒がしかったら普通起きますよ！ みんなを説得するの大変だったのですからね！」

「そうか……木下、すまなかった」

「いえいえ、いいですよ！ それより何があったのですか？」

「実は」

明智が事情を説明しようとした……まさにその時、

「なあ……お前さん達。悪いけどコイツを解いてくれねえか？」

「……ッ！？」

一瞬にして空気が凍る。少し野太い若い……と言えるが微妙な年頃の男の声。

目を覚ました近藤政信が、俺たちを睨みつけながら、そんな事を願ってきやがったのだ。

あの野郎……一体どういつつもりなんだ？

### 第133話 友情ってスバラシイ！（後書き）

・後書きトークコーナー

重原「ねえ、ぶっちゃけ近藤って建　さんだよね」

圭介「おいコラッ！　みんなそう思ってるかもだけど口に出すよな  
！」

大吾「いや、だってねえ？　まあ作者の禁　好きは相変わらずとい  
う事だろ？」

圭介「それより俺、明智と伊吹にどう想われてるのか気になるんだ  
けど……」

重原「そんなの決まってるじゃないかい？」

大吾「そーだ！　答えは一つしかないじゃないカ！」

圭介「ウソだ……ど、奴隷だなんてウソだアアア！」

大吾「……鈍感だな」

重原「鈍感だね……」

## 第134話 襲撃者からの警告

場の空気が凍った。理由は単純だ、さっきまで気絶していたハズの近藤が、突然目を覚まして縄を解いて欲しいと頼んできたからである。

当然明智や伊吹もはあ？ っと、眉をひそめた。俺だってそうだが近藤がどういう目的で解放を求めているかは知らないが、それでもアイツとはさっきまで戦っていたんだ。いつ攻撃してくるかかわからないようなヤツを解放するなんて、そんな馬鹿げたことが出来るわけがない。

「馬鹿かお前？ そんな危なっかしいことが出来るわけ」

「藤島圭介。俺はなあ、金さえあればどっちの味方にもつくのよ？」

「てめえ……それって武士としてどうなんだよ？」

「確かになあ、だが……ちっとばっか生活に困ってるのは事実だ。だから俺は頼まれた仕事をするだけなのよ。大体サヴィエトに協力したっていくら働いても給料は同じだし、相手の思想も俺としては気に入らねえのよ」

金で動くって……アンタはどこぞの傭兵かよ。金でコロコロ忠誠を誓う相手を変えるような野郎なんて、ますます信用できないだろうが。仮に金を払ってこっちの味方になっただとしても、サヴィエトがより高額報酬を提示してきたら、コイツはそっちに行くってわけだよな？

まあ、サヴィエトの思想的に考えて、そんな事はまずないとは思

うけど……。

だけどなあ……やっぱりこんなヤツは信用できない。

「なあ、その超能力者」

「ん、私か？」

近藤のヤツは今度は明智に話をかけた。まあ……なんとなく想像はつく。このメンバーの中で一番金を持っていそうな人は明智である。青山さんは今別荘で寝ているし、そもそも近藤は青山さんのことまでは知らないだろう。

「俺と契約してくれんかな？ 無理言ってんのはわかってるつもりだが、契約さえすれば俺はアンタに忠誠を誓うつもりよ。アンタの命令次第で藤島圭介を守るか攻撃するかも決まるんだ。どうだ、悪い話じゃねえとは思うんだがな」

「どづいつつもりなんだ？」

「俺にはなあ息子がいるんだが、病弱でしょっちゅう入院してんよ。その息子を救う為に俺は魔術ってヤツを覚えたんだけど……それがまずかったのか、バレた瞬間口止めの代わりに職を失ってジリ貧生活になっちまったのよ。入院費とかも払わなきゃいけないし、息子は病弱でまだ幼いが一応将来の事もあるだろう？ その為に俺は金が欲しいのよ」

「じゃ、じゃあ、あんたはお金の為にサヴィエトに身を売ったの？」

明智と交渉するため、自らの事情を説明する近藤に伊吹がそう突っ込んだ。確かに俺も伊吹と全く同じ事を考えていた。確かに職を

失うのは大変だ。子供の夢を叶えてあげたいという、親の気持ちもわからないことはないけど……だけどなあ。

「おいおい剣道のお嬢ちゃんよ。身を売ったつてのは聞き捨てならないなあ？　ただ、俺たち魔術師が飯食つてく為にはそこしか働く場所がなかったのよ。昔から魔女狩りだとかで魔術師は弾圧されいたんだがな、今日じゃあ科学も発展して完全に魔術は無かったものにされた。従つて社会は魔術師に冷たいものなのよ。そんな状況で俺たちが働ける唯一の職場　サヴィエトつてのにはなんつーかなあ、僅かに希望つてのを持ったのよ」

希望を持つてそこに就職したのかよ。つで、就職した結果がこれつてわけか。大体事情はわかったけどーつ問題があるぞ。コイツの言つてる事はホントの事なんだろうか？　出来る事なら俺だつて信じてやりたいし、それが事実なら究極に苦しい生活を送つてるんだろうが……。

あんな事があつた後だ。ひよつとすると近藤はウソをついているかもしれない。

人間、ウソなんて結構簡単につけるもの。俺だつてウソのおかげで、修羅場を脱出した事ならいくらでもあるんですけど。増してや近藤はプロだ、その手のウソなんて簡単に思いつけるだろう。

そう思っていたのは俺だけではなかったらしく

「明智殿、耳を貸してはダメなのです。彼は言葉を武器にしているのですよ？」

「そんなことはわかつてる。私もこんな話を信じるつもりはないぞ」

「おいそこのアホ毛ちゃん？　お前さん、確かアルファ隊つて異世

界の特殊部隊の一員なんだよな？」

「もきゅ？ ……なんで拙者がその一員だって知っているのですか？」

「まあいい……信用を得る為にも話してやるよ。お前さん達の所にはスパイがいるって話だ」

「す、スパイ……なのですか？」

スパイって秋葉原でも暮葉と話したよな。それで俺が外出禁止になつて。まさかホントにスパイがいるってのかよ。だけど、そんなスパイが一体どこにいるんだ？

「おう、お前さん達も薄々気付いてはいただろう？ でなかったら、俺もこんな簡単にお前さん達を発見する事なんてできなかったのよ」

「……一つ聞きたいのですが、スパイは一体どこにいるのですか？」

「さあな？ ただ、わかつてる事は2人いたハズなんだが……片方とは最近連絡がつかないのよ。もう片方は相変わらず情報を送ってきているらしいけどな。まあ俺もサヴィエトでは下っ端だ。そこまです詳しい事情は知らねえのよ」

片方とはおそらく、白藤のことを言っているんだろう。白藤はクラスメイトになりましたサヴィエトの魔法使いだった。それで俺と戦い、結局アイツはサヴィエトとは縁を切ったようである。

それでも、一時期はサヴィエトの魔法使いとして活躍していたんだ。だから近藤の言う2人のスパイのうち、片方は白藤のことで間違いないだろう。けど……もう一人は誰なんだ？ そのもう一人の

スパイつてのも俺たちの身近にいる人物なのか？

近藤は本当に下っ端のようで、全部を知っているわけじゃなさそうだし……。

「了解なのです……あともう一つ聞きたいのですが？」

「あー、まだ質問があんのか？ まあいいけどよ」

「今回は……今回けーすけ様を襲いに来たのは貴方だけなのですか？」

「いんや、俺の他に……確かイタリア人のジジイだったかな？ この世界じゃ結構大物の魔術師が今度の作戦の陣頭指揮をやってんのよ」

「大物……ですか？」

暮葉はその言葉に反応したようだ。まあ、俺もだけど……。つーか、ホントにこの世界にも魔法使っているんだな。二次元の特権だと思っただけ……リアル現実恐るべし。

「詳しい事は知らねえが、今回の場合はソイツが俺の上司よ。言っとくけどヤツと戦うなら覚悟しといたほうがいいと思うのよ。ヤツアマデーオ・ベルサーニは近代西洋儀式魔術を極めてやがるからな」

アマデーオ・ベルサーニ。それが今回のボスキャラのようだ。つか近代西洋儀式魔術って俺の無駄知識が正しいならば、ホントにただの儀式の為の魔法なんだろう？

そんなんで戦えるのか？ しかも、それこそ怪しい存在だぜ。近

代西洋儀式魔術ってホントに存在するものなんだろうか？ まあ、暮葉や近藤だっているし、全くないとは言えないが……。  
……なんて事を考えていたその時、明智が一步前に出て、

「なあ近藤、お前の言ってる事は全部本当の事なのか？」

「抵抗できない状態で嘘言っつて、何の得になると思うんだ？ 拷問されるのはゴメンなのよな、だからさっさと真実を言っちまうのが俺なのよ」

「……信じていいんだな？」

「あ、明智殿！ そんな簡単に信じたらダメなのです！」

「そ、そうよ！ 私にはよくわからないけど……でも、嘘ついてるかもしれないのよ!？」

「残念だけど嘘はついてねえのよな。近々、必ずアマデーオはお前さん達の前に現れるだろう。その時俺の言葉を信じなかった事を……後悔すりゃいいのよ」

近藤は口元を歪ませ、怪しい予言者のように笑っていた。

「……とりあえず、貴方の身柄は拘束するのです」

「フツ、好きにするがいいさ……だが、これだけは約束した欲しい。俺の家族に金を渡して欲しい……なんならお前さんの所の諜報機関を使って、俺の素性を探ったっていい。とにかく……俺の事はどうでもいいから家族だけは救ってほしいのよ」



近藤のその言葉に、迷いやためらいはない。まるで、ただ必死に我が子の事を想う。父親のような顔を近藤はしていたのだ。こんなヤツでも、我が子を想う気持ちは他人と変わらないらしい。そんな近藤の表情を見て、暮葉は目を瞑り、

「……了解なのです。ご家族の事は調べ次第、生活に困らないだけの額は支給するよう、上と掛け合ってみるのです」

「悪いな……こんな悪人の頼みを聞いてもらってよ。それでも……子供は心配なのよな……っ」

言いながら近藤は夜空を見上げ、寂しげに微笑んでいる……ように俺には見えた。

やがて暮葉が連絡をつけたのか、アルファ隊の魔法使い達が駆け付け、縄で縛られた近藤をどこかに連行していった。そういえばいつも思ってるんだけど、アルファ隊に捕まった魔法使いってこの後どうなっちゃうんだろうか？　なんか気になるなあ……でも、ロクな末路は辿らないだろう。

興味はあるが聞くのも怖いし、その疑問は心の中にしまっておくとしてしよう。

その後の話をしよう。もう夜も遅いのでみんな帰って寝る事になったが……。

「それじゃあ藤島、私はそろそろ戻るな」

「おう、おやすみ明智」

「うん……その、私も魔法使いと戦う。藤島の力になりたい」

「お前がそう言ってくれるとマジで心強いよ……サンキューな」

「れ、礼なんて別にいらんぞ、友達だからな……っ」

明智は少し照れながら、背を向けて自分の寢床に戻っていった…

…。

っていうか、明智や生駒はどこに泊ってるんだろうか？

気になるけど……まあいいや、今度会ったらそれを聞くとしようか。

「圭介、私もそろそろ寝るわね」

「おやすみ、伊吹」

「おやすみ……言っとくけど、今度何かに巻き込まれたら私にもちやんと言いなさいよ？」

「わかってるよ。もうお前には何も黙らねえから」

「そ、それならいいわっ。それじゃおやすみっ！」

伊吹も相変わらずだなあ……まっ、あの不器用さが伊吹らしいっ  
ちや伊吹らしいが。

それで夜の砂浜に残されたのは、俺と暮葉だけだが……なんか、  
気まずい。そりゃあお風呂であんな事があつたんだし、気まずいの  
は当然なんだけど……どうしよう？

何か会話すべきだよな。っていうか、その前にお風呂での事を謝  
るべきだよな。考えてみれば今が謝る絶好のチャンスじゃないか。  
とにかく、こんな空気が何時までも続くのはダメだ。早く仲直りし

ていつも通りの関係に戻りたい。

戻れないにしても……それでも暮葉は友達だ。

友達じゃないにしても、悪い事をしたんだから謝らないとダメだ。だから俺は、

「暮葉！」

「……っ！」

びくん、と小さく震えた暮葉。ゆつくりとこちらを向いた暮葉の顔は……やっぱり恥ずかしさからか耳まで真っ赤に染まっていた。えーっと……俺も恥ずかしいんだが、この後どうしよう？

って、謝ればいいだけの話だろ。ここまで上がる必要なんてないだろ。いくら恥ずかしいからって真面目な場面でコレはダメだろう。いい加減俺も落ちつけてんだよ……！

とにかく呼吸を整え、気持ちを落ち着かせてから俺は、

「今日はその、ごめん！」

謝る方法はいくらでもあるが、その中でも究極のものが日本には存在する。

土下座。

そう、土下座だ。本来恭儉の意を示したり、深い謝罪や請願の意を表す場合に行く、日本古来の礼式の一つである。今でもたまにテレビで見かける……が、自己保身のために使う人もいるらしい。

俺も暮葉にそう思われているかもしれない。それでも俺は 暮葉に心から謝る為に土下座をしているのである。たとえ自己保身のためだと思われても、後悔なんかは絶対にしない。

「……けーすけ様、とりあえず立ってくださいっ」

暮葉に言われて、俺はいいのかと思いつつも立ちあがった。  
……あれ、なんかデジャブを感じるぞ？ 相手は暮葉じゃなかった気がするが、似たような事がつい最近あったような気がする……  
気のせいだろうか？

「く、暮葉……怒ってないのか？」

「もきゅ？ その……けーすけ様、何か拙者を怒らせる事したのですかっ？」

「え？ じゃ、じゃあなんで……？」

「そ、それはその……えっと……っ」

「暮葉？」

「~~~~っ！ 伊吹さんの言う通りですっ、けーすけ様はばかけーすけ様ですっ」

ちよつと拗ねたように、林檎のように赤くなった暮葉は俺の事をそう呼んだ。

「ば、馬鹿って……ちよ、結構傷つくんだけど？ いや、確かにね俺バカですよ？ 成績だって赤点ギリギリだし元々初芝に入れる頭もなかったよ？ バカなのは自分でも認めるけど、それをストレートに言われると妙に虚しくなるんですよ。」

「いや、マジで馬鹿でごめんなさい！ 前の期末に英語31点で……めんなさい……」

「そういう意味の馬鹿じゃないですよ……やっぱりけーすけ様は馬鹿です……っ」

「え？ ち、違うの？ じゃあ化学が38点だった事に対してか？」

「はあ……」

「ええっ！？ ちょ、呆れられた!？」

それも違っつてことは……じゃあ俺、言わなくてもいい事言っっちゃったワケ？

俺の恥ずかしすぎるテストの点数が、暮葉にバレちゃったってわけか。

ちくしょう！ こんな点数誰にも言いたくなかったのに！

「もきゅ、仕方ないですね……」

「暮葉？」

瞳を閉じた暮葉が、そつと俺に歩み寄ってきた。その距離僅か10cm。女の子がこんなに近くにいるというだけで、ドキドキするには十分であった。おまけに、こんなタイミングで俺は風呂であった事を思い出してしまった。う、ぐ……心臓がバクバク言っちゃがる。

やべえ……ちょっとでも気を抜いたら、暮葉を抱きしめてしまっそうである。

けど、そんな事したらまたさっきみたいに ええいくそつ、我慢しやがれ俺！

「けーすけ様……っ」

「お、おう……なん　っ!？」

それは　あまりにも突然の出来事だった。

あまりにも唐突すぎるだろ。

だって、何の前振りもナシだったんだぜ？

それなのにいきなり抱きつかれ、何故か暮葉の唇が　俺の唇と重なっていたのだ。

「　っ!？」

突然、口を塞がれた俺。別にこれがファーストキスというわけではない。前に事故で明智にキスされた事があった。だけどなんだろう？　その時とはまるで違う何かを俺は感じていた。

だけど、それが何なのかはわからない。そもそも考える事もできない。突然の出来事に頭の中は真っ白になっていた。唇の柔らかい感触。それと、女の子の甘い匂い、そして突然暮葉にキスをされたという事実には支配され、俺は完全に思考力を失ってしまった。

やがて唇が離れると、俺は自然と右手で自分の唇を触っていた。

……気のせいではない。まだ唇にキスの感触が残っている。そこでようやく　正気に戻ったように俺の脳が再び動き出した……よくな気がした。

「おっ、おおおおおまえっ！　なななな何するんだよいきなりっ!？」

ダメだこりゃ……あまりのことに、全然呂律が回っていなかった。全然落ちつけない。それどころか、鼓動は早くなるばかりであった。

「せ、拙者だって初めてなのです！　くくくっ！　で、でも！　これですべてチャラなのです！」

そう言つと、暮葉は恥ずかしさから、走って逃げるように俺の前から去つて行つた。

ちや、チャラつて……一体どういう意味だつたんだ？　それじゃまるで、風呂でし損ねたキスを今したみたいなき感じになつちゃうじやねえか。

もしかして暮葉のヤツ、俺とキスしたかつた……のか？

いやいや待ておかしいだろ。これじゃ暮葉が俺の事が好きみたいじゃねえかよ。そりゃいくらなんでもおかしいだろ。そうだ、今時は友達同士でもキスをする時代。きつとそうだ、さっきのキスに特別な意味なんてないハズだ。

……だけど、もしもの話だ。

もしも、暮葉が俺に気でもあるのだとしたら、俺は　。

「……………っ」

くそっ、考えただけでもドキドキするんだが……どうしちゃったんだよ？

俺はその後もしばらく、夜の砂浜で一人月明りに照らされつつ、一人佇んでいた……。

## 第134話 襲撃者からの警告（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「話が全然進まねえ……」

伊吹「ど、どういう意味よそれ？」

圭介「いや、話数だけ増えてって話自体が進まないというか……」

伊吹「余計なシーン書かなきゃいいんじゃないの？」

圭介「ちくしょう、テンポ悪い言われたらどうしよう！」

伊吹「ちよ、泣かないでよ！　っていうかそれあんたの悩みじゃないわよね！？　絶対この小説のキャラの悩みじゃないわよね！？」

圭介「うあああああああああ！」

伊吹「……誰かこの人なんとかして……っ」



## 第135話 渡る世間は変態ばかり

翌日の朝の事である。折角明智達もいるのだからというわけで、俺たちは青山さんの別荘に明智達を呼んで室内で遊んでいたのだが、早速力オスな光景が目の前に広がっていた。

「ナギちゃん~~~~んっ！」

「うあっ！ ちょ、す……すみにゃん……！？」

実を言うと別荘に呼んだのは明智のみ。生駒が加わると面倒だと思みんなが思ったので、生駒には伝えていなかったハズ……なのだが、何故か生駒は明智をストーカーしていたのだ。その為生駒は明智がここにいると知っており、明智が別荘に入ってから僅か10秒後にはご覧の有様である。

生駒は明智に抱きつき、ふにと笑いながら明智にすりすりしていた。当然明智は迷惑そうにしており助けてやるっかななんて思ったが……スマン、生駒の暴走は俺たちじゃ止めれないわ。

「ナギちゃん私を放置プレイだなんてひどいよ！ あ、でもむしろ放置されてハアハアするのも捨てがたいかも！ いや、でもこの全てを包み込む胸が恋しいから放置は嫌だよ！」

それってただ明智のおっぱいが好きなだけじゃねえか。いや、確かに明智のおっぱいは大きくて素晴らしい感触だとは思いますが。

「ちょ、ちょっと離れるすみにゃん……みんなが見てるっ」

「いいんだよ関係ないんだよ！ 私とナギちゃんの世界に他人なん

て関係ないんだよ！ 特にクソ介なんて一番関係ないし早く死んだほうがいいと思うんだよ！」

今すつげえ事言われた気がするんですけど！？  
ちくしょう、やっぱり俺生駒だけは大きっ嫌いだ！

「さあナギちゃん！ 朝だし天気もいいので早速ベッドinしましょうー！」

「な、なんでだ？ もう朝だろ？」

「わかってないな、ナギちゃんは。いいよ私がナギちゃんをじっくり調教して ふ、にやぎゃっ！」

あまりにもしつこすぎる生駒に、明智も我慢の限界に達したようだ。明智は生駒の右肩を掴んだと思いきや、そのまま必殺技を仕掛けた。

一本背負投。

そう、柔道の投技である。しかも凄まじいキレであった……流石明智、あの黒木を一瞬で沈めるほどの武術の達人ではあるが、柔道の技まであそこまで完璧に使いこなすとは……。

明智、やっぱり恐ろしい女の子である。しかしそれ以上に気味が悪いのは生駒であった。

「はあ、はあ……な、ナギちゃんに投げられた……ナギちゃんに痛めつけられたっ、ふは……気持ちいいよう。も、もっとお願いしましゅ……っ」

「DMかてめえは！」

あまりの気持ち悪さに、思わず俺はそう突っ込んでしまった。生駒は相変わらず変態的な笑みを浮かべて、ヒクヒクと身体を震わせていた。

流石の変態代表浅間部長も、この生駒には引き気味であった。

「……あ、あの……先輩はSですか？ それともMですか？」

「青山さん……一応聞くけどそれ何の為の質問なんだ？」

「圭介はドSよドS。圭介ほどいじめるのが好きな人はいないと思うわ？」

「誰がいじめっ子だよ！ 伊吹にだけは言われたくねえよ！」

「じゃ、じゃあ先輩……その、わたしのことは……滅茶苦茶にいじめてもいいですよっ？」

「青山さんも少し黙ろうか。この変態淑女が！」

ダメだこりゃ。朝っぱらからカオスな事になってきている。そもその原因は生駒が明智に抱きついたり、DMな姿を見せたのが悪いんだ。

そのせいで、余計なヤツまで話に乗ってきちゃったじゃねえかよ。

「ちなみにボクはDMだ！」

「このエロ兄貴！ あんたの性癖なんか聞いてないんだからなっ！」

「ぐはっ！ はあはあはあはあ、はあ〜あっかり〜んっ！ あっかり〜んの攻撃がボクの鳩尾にiiiiiiii顔面にiiiiiiii！ も、

もつと！ もつとこの気持ち悪いブタ野郎に最近空気があつかり〜  
んの拳を力毛お〜んっ！」

「誰が空気だよこの浅間ブヒデ樹！ あと、あたいは空気じゃない  
んだからなっ！」

浅間部長はどうしようもないDMだな……っか、色々ネタが混  
ざりすぎだろ。とりあえず浅間部長が某ド変態ライトノベルと、主  
人公空気漫画を読んでいる事はわかったよ。

あかりも不憫だぜ。名前が被ってるだけで浅間部長にネタにされ  
るんだからな。

だけど密かに思う事があるんだ。あの兄妹、実は仲いいんじゃない  
いか？

あのSMプレイ……なんかその、息がピッタリな気がするんだが  
……。

「全く、DMの変態が2人。発情期に突入中の後輩とDSの後輩。  
ブラコンの妹にエロゲオタの変態に……木下の友達の変態ばかりだ  
な」

「あはは、言われてみるとそうかもなのです……っ」

「オイコラ明智！ 誰がエロゲオタの変態だっ！」

「そうだよ！ お兄ちゃんは妹に欲情する変態さんだけど、葵は純  
粋にお兄ちゃんを愛しているだけだから変態じゃないよっ！」

嘘つけ、俺は知ってるんだからな、葵が兄妹系のエロゲーを所持  
している事を。とにかく葵はブラコンの危ないド変態である。言っ  
とくが、俺は兄妹系のエロゲーではなく、そのゲームに妹ルートが

あるだけで、別に特定ジャンルのエロゲーは持ってないぞ？

強いて持っているとするればそう、後輩キャラが沢山でるエロゲーなら持つてるぜ。

……すみません。どうせ俺も変態です、ホントごめんなさい。

「ぶ、ブイイイイイイイ！ あ、あっかりくん！ あっかりくんっ！」

「アツカリくん言うなブヒデ樹！」

「はあ、はあ……な、なぎ……ちゃん……んはっ」

「……えへへ。わ、わたしも先輩にいじめられて……えへへっ」

「クーにゃんも明智先輩もわかってないんだよ？ そもそもブラコンって言うのはね」

しかし、こうして室内を見ていると素直に思うよ……ひどい現実だ！

マトモなのは暮葉と明智と伊吹だけだよ。

いや、考えようによっちゃあ三人ともマトモじゃないぞ。明智は超能力者だし、伊吹はツンツン突っぱね〓ツツパリ伊吹ちゃんだし、暮葉はその……っ。

その時、ふと昨日の夜の事が脳裏に浮かんだ。

月明りに照らされた砂浜。そこに2人っきりの俺と暮葉。暮葉が抱きついてきたと思ったら 俺は暮葉に唇を奪われて……。

「……っ」

「ん、どしたの圭介？ 熱でもあんの？」

「えっ？」

「なんか、顔真っ赤よ？」

昨日の事を思い出していたら、伊吹に心配されてしまった。

多分、心配されるほど赤くなっていたんだろう。だってねえ……  
あんな不意打ちで女の子にキスなんかされたら、誰だってドキドキはするだろ。

「な、なんでもねえ……っ」

「ホントに大丈夫なの？ 昨日あんな事があつたから、どっか悪くしたんじゃないの？」

「大丈夫だって。怪我もしてねえし、風邪もひいてねえよ」

「……っ、なら……いいけど……っ」

伊吹がここまで俺を心配するなんて。昨日に引き続き珍しいな。妙に心配性な伊吹といい、不意打ちキスをしてきた暮葉といい……不思議な事が次々と起こっていく気がする。

伊吹はどうして突然俺を心配なんて？ 暮葉の昨日のキスは一体……？

俺はこのカオスな状況の中、ずっと2人の変化に思い悩んでいた。

それから数時間 俺たちはポーカーだの麻雀だの、午前中は家の中で遊んだり楽しく話をしたりして、そこそこ楽しく有意義に過

ごしていた。やがて、昼になると暮葉と一年生グループが買い物に出かけ、浅間部長と生駒は未だにポーカーやブリッジで対決をしていた。

あの2人……一体いつになったら決着つくんだ？

博打が強いと言う浅間部長と生駒　確かに山本五十六もビツクリなほど強かった。

モナコやラスベガスに行っても、フツーにやっていけそうな実力であった。でも、2人ともどうしようもない変態って……まさに残念なイケメンと残念な美少女だな。

俺は買物にもついて行かず、2人の対決も観戦せず　ただ、ベランダから太平洋をずっと眺めていた。はあ……海は広いし、かもめは気楽そうでいいよなあ。

「藤島……っ」

不意に背後から声を掛けられる。

このハスキーボイスは間違いない。そこにいたのは、一つに結ばれた長い黒髪の少女。

「あ、明智……？」

「さっきから思っていたんだが、一体どうしたんだ？　悩みごとでもあるのか？」

……ひょっとして、明智はさっきから俺の事を見ていたのか？

こんな事を言うんだから多分そうだろう。今朝からずっと暮葉と伊吹の事を考えていた俺を、明智はずっと見ていたんだ。

「いや、悩みはあるっちゃあるけど、大したことじゃねえよ」

「そうなのか？」

「おう！ 男はそんな簡単に悩まんものなんだぜ」

「……それって、自分が軽いつて言ってるようなもんじゃないか？」

「ぐはっ！ 違う違います違うんです！」

「そ、そうか……まあ別にそれはどうでもいいんだ。いくら軽くても藤島は藤島だしな」

……うわぁ、今さりげなく馬鹿にされた気がするぞ。

俺ってそんなにチャラく見えるのか？

確かに、今着ている黒いTシャツには厨二病的な模様が入っている。それに、今日のジーパンは微妙にダメージ加工もしてあるし、これで髪が金髪でメッシュや盛り髪だったらチャラくは見えそうだけども、そう言うのって中身だろ。俺ってそんなに軽くて女癖悪いか……？

「でも、もしホントに悩みがあるなら相談するんだぞ」

「明智、いいのか？」

「当たり前だぞつ。私と藤島は友達……だからなっ」

「……そっか、そうだよな。ありがとうな明智」

「うん、気にするな。友達なんだから相談に乗るのは当たり前だぞ。それじゃあ私はそろそろ下に戻るな」



「おう」

背を向け、明智は屋内へと戻っていった。

仲間想いでクールでお姉さんっぽくて……明智はいつも通りだったなあ。

「ただど暮葉と伊吹は……うん、今日も何か違和感を感じるなあ。なんでだろう？」

「……まあ、悩んだって仕方がないか。とりあえずは一旦中に戻ろう。」

第135話 渡る世間は変態ばかり（後書き）

・後書きトークコーナー！

全員「\アツカリ\ン！」

あかり「ん、なんだよ？ あたいに何か用か？」

浅間部長「ダメダメ！ そこは【は〜い！】って元気よく登場しないと……」

あかり「またそれか！ いい加減にしろよなブヒデ樹！」

浅間部長「ぶ、ブヒイイイイ！ も、もつと打つてえええええっ  
！」

圭介「お前らいい加減にしろよ……」

葵「あつかりんは愛されてるね！」

## 第136話 砂浜のカレオン船

もしもの話をしよう。もしも、海で遊んでいたらいきなり 海が盛り上がりつつ海中から巨大な木造の船が現れたら、どういう反応をするだろうか？

普通はそんなファンタジーな事なんてありえないと思うか、何言っただ？ 潜水艦だって一応は船じゃないかよ、潜航できるじゃないか？ と思うことだろう。

だが、そんな常識を覆すように もし本当に木造帆船が浮上してきたとしたら？

普通は驚いたり腰を抜かしたりするだろう。俺たちも例外ではなかった。

「な、なんなのよこれ!？」

「ふ、船が浮上してきやがったぞ!？」

「す、すみじゃん! は、浜つてあの船が沈むほど深かったっけ!？」

「いや、ここは浅瀬だぞ……っ、漁船でも座礁するところなのに……っ!」

「……間違いない、これは 魔法なのです!」

砂浜で遊んでいたら突然、でっかい船が浮上してきたのだ。

船は帆船。それは昔の戦争で各国が運用したカレオン船だ。側面には何十という数の大砲が並べられており、何故かイタリアの国旗が掲げられていた。意味不明である。そもそも、帆船が浮上してく

れ時点でありえないってのに、こんな浅瀬じゃ明智の言う通り普通は座礁するだろ。

それなのにこの船は……一体どうなってやがるんだ？

そもそもどうしてこんな事になったのか……それは時間を遡る事2時間前。

「よし、今日も海で遊ぶぞーっ！」

「わーい！ 二日連続で海だよ！」

「あ……ま、待ってよあかり、葵……っ！」

午後、やる事のなかった俺たちは結局 夕方まで海で遊ぶ事にしたのだ。

昨日に引き続き、そこら中に水着のギャルがいっぱい……ふふふ、いい眺めだぜ。

やっぱり男にとっては天国ですなあ。夏の海ほど見ていいものはない。まあ海に来ている女の子なんて大抵はリア充だけだ……それに、俺は浅間部長みたいにナンパはしないぞ。こっ見えても俺は普通の恋愛がしたいのだ。だから、ナンパから始まる恋愛は浅間部長に任せておくよ。

「サイッター！」

「ぐはっ！ な、殴られた……はあはあ、だけどそれがイイ……ッ！」

まあ、浅間部長は言動が変態じみてる上にDMだ……ナンパで彼女GETは無理だろう。

ていうか、浅間部長がナンパに成功したら 多分世界が崩壊すると思うんだ。

「ふわあああっ！ な、ナギちゃんのおっぱいに顔を挟めるの最高おーっ！」

「いい加減にしろっ！ か、海底に沈めるぞっ！」

「か、海底に沈める……？ なにそれ、すっごく興奮するよ！？」

「き、気持ち悪いぞ……っ！ 最近すみゃんが気持ち悪いぞっ！」

コイツらは相変わらずだ……っというか気のせいかな。生駒の変態が出会った頃よりずっとひどくなっている気がするの？ うん、気のせいだ。気のせいだと信じたいぜ。

それにしても……た、確かに明智の胸はすごい。あの破壊的なボリウム、そして以前服の上からは揉んだが素晴らしい弾力。完璧だ、明智の胸は最高のおっぱいである。

「ちえすとーっ！」

「ついでに拙者もっ！」

「ぐ、は っ！？」

不意に衝撃が身体を襲う。

2人の蹴りである。

暮葉と伊吹の飛び蹴りが俺の背中に突き刺さり、俺を後ろからぶっ飛ばしていた。

「こらあてめえらっ！ 今の俺じゃなかったら気絶してたぞ!？」

前に倒れかけた身体を立て直しながら、俺は叫んだ。

よかったよかった、幸い大した威力ではなかった。どうやら彼女達は手を抜いていたらしい。

…… って全然よくねえよ。そもそも俺はなんで蹴られたんだ？

「うっさいわね！ スキンシップよスキンシップ」

「そうですよ！ 変態のけーすけ様には少しお灸をすえる必要があったのです」

「今お灸って言ったろ!？ 何のお灸だよ!？」

「……ばか圭介、変態っ」

「けーすけ様……そんなに大きいのが好きなのですねっ」

「な、何言ってるんだお前ら？ とりあえず落ちつけ、なっ？」

そうは言ってみたが、結局ジト目の2人に睨まれてしまった……。

やっぱりコイツら合宿に来てから様子がおかしい！ 今までこんな事はなかった。確かに2人の胸は大きくはないけど、2人とも今まで特に思い悩んではいなかっただろ？

それがいきなりどうしたんだ。なんでいきなり気にするようになったんだ？

考えてもわからん……と、とりあえずここで貧乳とか思ったら殺される。あえてその話題に触れないように接して、これ以上暴行されないルートに突入しなければ！

「落ちつけ2人ともっ！俺は別に明智を見ていたわけじゃない。あの海に何かあるなうなんて事を考えていたんだよ」

「……」

「……」

「ホントだって！ そんな腐った魚を見るような目で見るとよな!？」

「……けーすけ様、冗談にしては下手すぎるのです」

「まったく、あんたはもう少し上手い嘘つけないわけ？」

「あ、バレちゃいました……?」

「バレバレよばか圭介……っ」

「バレバレなのです……」

うぐぐ……ちくしょう、どうしてこういう時に限って口下手なんだよ。誤魔化して回避ルートに突入するどころか、余計2人に変な目で見られるようになったじゃねえか。

あゝあ。ホントに海から何かが出てくればよかったなあ。例えばお宝とか、昔沈没した海賊船とそれに乗っていた海賊たちの骸骨とか。

そんなファンタジーな事が起これば、今の作戦も上手くいっていただろうに……。

……と、考えていた まさにその時。

「う、わ つー?」

突然、大地が揺れ始め、波が荒々しく波しぶきを飛び散らす。

轟々とうめき声を上げる大地。それは地震のものとも違う揺れ方であった。

「ただ、それ以外になにがあるんだ？ それ以外に何も思い浮かばなかった俺たちは。」

「な、なによ！？ 地震！？」

「す、すみじゃんっ！」

「抱きつくなっ！ それより……万が一の事を考えて高台に逃げろっ！」

明智が冷静に常識的な判断をする。流石は明智、この状況でも落ちついていられるとは……伊達に風紀委員やってないな。とにかく、もしもの事も考えて早く逃げたほうがいいな。揺れの規模から考えて多分大丈夫だとは思いますが、それでも万が一という事もある。

全員と合流して さっさと砂浜か逃げよう。

と思っていた、まさにその時であった。

「きゃああああああああっ！」

人々の悲鳴が聞こえる。だが、それをかき消す勢いの轟音も響いた。

その原因は巨大な水柱であった。まるで悪夢でも見ているかのような光景、舞い上がった水は次第に下へ落ちて行き、やがて水柱の中から巨大な物体が見え始めた。

「……っ！」



俺……いや、周囲にいた人々すべてが、その物体を見て思わず絶句してしまった。

海底から飛び出してきたものは、一隻の帆船であった。大航海時代に大海原を渡っていたような木造で、四本のマストがついた古めかしい船。しかも、側面には数十という大砲が並べられていた。スペインの無敵艦隊アルマタにでも所属していそうな、そんな雰囲気のカレオン船である。

ただし、掲げられている旗は 何故かイタリアの国旗であった。

「ウソだろ？ 船が……浮上してきやがった？」

「藤島！ あれはなんだ……？ お前、少しは詳しい方なんだろ？」

そう、俺はこう見えても軍オタってほどではないが、少しだけこういう兵器とかに関する知識を持っていたりするのだ。理由は簡単、ラノベ読んでたらたまに出てくるんだよね。

「多分ガレオン船だよ。昔ヨーロッパ各国で使われた軍艦だ」

「す、すみじゃん！ は、浜ってあの船が沈むほど深かったっけ！？」

「いや、ここは浅瀬だぞ……っ、漁船でも座礁するところなのに……っ！」

「そもそも帆船に潜航能力はねえよ」

明智の回答を補足するように、俺はそう付け加えた。あの形で潜れるわけないだろ、仮に海中に潜るとしたらそれは 敵艦に撃沈

された時くらいであろう。

しかも一度潜ったら最後。帆船じゃ二度と浮上する事はできないハズだ。

それなのに……これは一体どういう事なんだよ。

「……っ！」

「ん？ どうした暮葉？」

「間違いないのです……けーすけ様、この不可解な現象は魔法によるものなのです！」

「魔法？ 魔法でこんな事が出来んのか？」

「詳しい事はまだわからないのですが、物体を具現化する魔法は確かに存在するのです」

なるほど……確かに魔法によるものだったら、あらゆる法則を無視したような現象が起こったとしても納得できるな。そもそも、魔法による現象を深く追求するのも馬鹿馬鹿しい。

だけど、なんでこんな事が起きたんだ。一体誰が何の為にこんな魔法を？」

……まさかとは思うが、このふざけた光景も。

「まさか……サヴィエト!？」

「可能性は高いのです。そもそもけーすけ様がいる場所でこんな事が起こるなんて 怪しいにもほどがあるのですよ！」

やっぱり連中の仕業なのか？ じゃあ、近藤ってヤツが言ってい

た事も本当なのか？

なんて名前だったっけ……確かアマデオ・ベルサーニ。イタリア出身の地球じゃかなり大物の魔法使い　らしいが。ホントにそいつが来やがったってのかよ。

「ねえちよつとっ」

「ん、なんだ伊吹？」

「さつきから思ってたんだけど……葵ちゃん達やあなたの部活の部長さんはどこに行ったのよ？」

「えっ？　そ、そういえばさつきから見てねえぞ？」

「ねえ、もしかしてあの船の中に……」

伊吹が心配そうにそう言うが……とりあえず落ちつけ、そして思いつくまで海にきた時葵達のはしゃぎながら海に入って行ったのは覚えていて。一方の浅間部長は、確か砂浜でナンパしていたぶん殴られていたような気がするんだ。それ以降葵達と浅間部長の事はよく見てはいなかった。

だけど、葵達はずっと海で遊んでいたはずである。

じゃあやっぱり葵達は船の浮上に巻き込まれて

「……っ！」

「ちよつと待ちなさいよ！」

衝動的に船のほうへ駆けだそうとした俺の右手を　伊吹がぎゅつと握ってきた。

その手にはやたらと力が入っている。男の俺でも振り解くのが難しいほどに。

「あんだ、行ってどうすんのよ？」

「決まってるんだろ！ あの中に葵達がいるかもしれねえ、確認しにいくなだよ！」

こんなクソやばい状況の中、妹を全く心配しない兄貴がどこにいる？

妹だけじゃない。大切な後輩2人も行方不明状態なんだ。もし船の中にいたら やる事はひとつしかねえだろ。大切な妹と後輩を

あの場から助け出す……！

「だけど藤島。得体の知れない船に侵入するのは危険だぞ？」

「そうですね！ もしサヴィエトだったら……けーすけ様の身が危険なのです！」

「クソ介。私はこれっぽちも状況がわからないけど、行くのはやめたほうがいいと思うよ？」

全員揃って俺を止めようとする。危険なのは百も承知だ。俺が連中に拘束される可能性だって十分あるだろう。だけど、仲間がもしあそこにいるとしたら 放っておけるわけがない。だから俺は この足を止める事なんてできない。

「それでも俺は行く。葵達を見捨てる事なんてできるかよ」

「……わかった、じゃあ私も行くぞっ」

「拙者も　けーすけ様や明智殿を護衛するのです！」

「し、仕方ないわね……昨日約束したもんね、私も一緒に行ってるわよ！」

明智は指の間接を鳴らし、暮葉と伊吹もどこから持ってきたのやら……一期一振それぞれのぶきと竹刀を持ち、あの船へ共に突撃すると言ってきた。三人とも本気だ。本気の眼差しを俺にぶつけ続けている。それだけではない、三人から出ているオーラからも本気を感じられた。三人の表情に迷いや躊躇いはない。まったく……これじゃあ三人の願いを断れないじゃないか。  
それになんだかありがたいな……正直言つて、あんなの一人でなんとかなると思えないし。

「わかった、三人ともサンキューな」

「よし、そうと決まれば行くわよ」

「すみにゃんはどうするんだ？」

「わ、私は行かないよ！？　危険な事は嫌だよっ！」

「　それでは皆さん、行きましょう！」

暮葉が最後にそう言い終えると、生駒を除いた俺たちは、突如現れたあのガレオン船へ侵入すべく突撃を仕掛けた。

## 第136話 砂浜のカレオン船（後書き）

・後書きトークコーナー！

作者「どうもです、今日は更新遅れて申し訳ございません！ 実は先日体育でやらかして捻挫しちゃいました……嫌だつて言っていたのですけど、結局病院に行ってきたので執筆時間がありませんでした！ ホント申し訳ございません」

暮葉「けーすけ様みたいに丈夫じゃないのね」

伊吹「いや、現実世界であんなに丈夫だったら気味悪いでしょ？」

凧紗「つていうか、バスケで捻挫って……作者は能力ナシの早川並にもやしなのか？」

作者「ほ、ほつといてくだせえ……っ！」

圭介「誰が気色悪いんだよ！？ 悪かったな身体が丈夫で！」

第137話 サンティシマ・マードレ(前書き)

どうも、作者です！

あれ、おかしいな。0時に時間設定してたはずなのに……？  
更新遅れて申し訳ございませんでした！

## 第137話 サンティシマ・マードレ

帆船への侵入は比較的簡単であった。暮葉が魔法で空を飛び乗船すると、船上にあったロープをこっちに降ろしてくれたので、ロープを伝って残りの俺たち三人は帆船に乗り込んだ。

すげえな……アニメや映画で見たまんまだぜ。まさか、保存用でもない木造帆船に乗る事が出来るとは思ひもしなかったぜ。けどどういう事なんだ？俺たち以外に誰もいない。こんなにデカイ船に俺たちだけ……あまりにも不自然すぎるぞ？

「誰もいねえな」

「な、なんなのよこれ……映画のセットじゃないわよね？」

「流石に無理があるぞ。だけど人の気配が全くないのは不気味だな……」

武術の達人 明智でさえ人の気配を感じれない。

つまり、ここには誰もいないという事である。見張りすらいなくて……ホントにこれはサヴィエトの仕業なんだろうか。アイツらなら大戦力で一気に押してきそうな気がするのに。

「油断は禁物なのです。魔法に常識を求めてはダメなのですっ」

「それくらいわかってるけど、それにしただって誰もいないのは不自然じゃねえか？」

こんな大船なら、そこそこの人数がいなけりゃ動かせるはずがない。そもそもガレオン船は昔の軍艦である。今の海軍は態々人を使



わなくとも、自動的に装填はできる。そもそも、現代の海軍は相手が砲で十分な不審船でもない限り、砲撃戦なんて行わずにVLSからミサイルをぶっ放すだろう。

だがガレオン船は違う。

この木造帆船に、ミサイルなんてハイテクなものが搭載されているわけがない。辛うじて複数の大砲が舷側に搭載されている程度である。そもそも大航海時代の艦船に、自動装填装置なんて立派なものがあるわけないのだ。

だから、大砲を撃つためには人の力がどうしても必要である。

それなのに、どういうわけか 砲兵の姿さえ確認できなかった。

「……っ！ 気を付けろ、誰か来るぞ……っ！」

「……っ！？」

その時、明智が何者かの気配を感じたようだ。明智に続いて暮葉や伊吹も反応し、最後に俺も背筋が凍るような気配を感じた。その途端、ジャラジャラという不快な物音と、コツコツという不気味な足音が耳に入ってきた。船内からだ、あの船内への入り口から音が聞こえてくる。

扉は閉められておらず、中には灯りが無いせいか、真っ暗で中身が何も見えない。

それがむしろ不気味だ。迫ってくる者の姿さえ見えない。だが、それも音が聞こえてきた最初の数十秒のみの不安であった。相手がわからないという不安はすぐに 不気味な服装の相手に対する不安に変わっていった。

何故ならヤツが アマデーオ・ベルサーニと思われる老人が現れたからだ。

「ようこそ……サンティシマ・マードレ号へ」

老人は2m近い長身の男であった。重そうな聖職者の法衣を身にまとい、首からは白銀に輝く十字架を提げていた。右手には紫色の金属製の杖、左手には厚く古びた本を持っている。

そんな不気味な老人が不敵な笑みを浮かべ　　渋く、鋭い声で語り掛けてきた。

「あなた、何者よ！」

甲高いアニメ声で叫んだのは　　伊吹であった。

伊吹は目の前の不審者を威嚇するように叫び、そして竹刀を構えて睨みつけた。

老人は伊吹の事を見たが、その表情に変化はない　　相変わらず、不敵な笑みを浮かべて右手に持つ杖を親指で、ゆっくりとさすっていた。

「そう気張るでない娘よ。本番は力を抜かないと……相当痛く苦しいモンらしいぞ」

「……っ！　あ、あなたなに言ってるのよ！」

言葉の意味を理解したのか、伊吹は顔を耳まで赤くし、甲高い声で叫んだ。あのジジイ登場していきなり下ネタを言うとは……もしかしてただのエロジジイなのか？

「ほほう？　もしかしてその様子だと処女ヴァージンなのか」

「ふ、藤島以上の変態だぞ……っ」

「明智、俺があそこまでオープンに見えんのかよ？」

「それで、結局貴方は何者なのですか？」

今度は暮葉が確認の為に、目の前にいるエロ老人にそう訊いた。恐らく、あの老人がアマデーオ・ベルサーニだと思われるがまだ確証はない。最初からそうだと決めつけるのは失礼だ。だからこそ暮葉は確認を取ろうとしたのだ。最も、確認を取る必要はなかったのかもしれないが。

「人の名を聞く時はまず、自分から名乗ると教わらなかったのか？ならばこのアマデーオ・ベルサーニがお主らの礼儀を教えようか？」

「てめえがアマデーオ・ベルサーニか。ならてめえの目的は俺を捕える事なんだろう？」

「その通りだ目標<sup>ターゲット</sup>。私の目的は、藤島圭介　貴様という若造を捕えて上に身柄を引き渡す事だ」

アマデーオは右腕に持つ杖を力強く握り、左手を揺さぶって古本を開いた。

魔法書<sup>グリモワール</sup>のような本は、中身こそよくは見えないが、焦げ茶色の表紙には霞んだ金色の見慣れない文字が記されていた。よくはわからないが、おそらくあれはラテン語。かつては広く使われた言葉で、今なお専門用語などではよく使われる言葉だ。

まあ……おバカの俺にはわからないけどね。

「魔法日記120頁。記された記録を具現化　再現せよ」

アマデーオが意味不明な言葉で、呪文のような事を言っている。

あくまで推測だがあれはラテン語であろう。あの本にラテン語が書かれていると言う事は、アマデーオはあの本をラテン語で読んでいるということになる。ラテン語喋れるって……今じゃイタリア人でも少ないと思うぞ？

アマデーオは意味不明なラテン語を言い終える。

すると、ドバァ！と水面が大きく爆発した。水を割る轟音、水柱はガレオン船のマストを超える凄まじい高さにまで昇った。高さだけではない、太さもガスタンク二つ分ほどはあるだろう。

「う、ぐ……っ！くそっ、今度はなんだ……！」

水飛沫が豪雨のように降り注ぐ。目を開けている事すら辛いほどの勢いだ。そんな水飛沫もやがては降り終え、視界が戻ったがそこには信じられない光景が広がっていた。

一回仰げば街を吹き飛ばしそうな、それほど巨大な純白の翼を生やし、金色に輝く輪を頭上に持つスカート一枚の筋肉質の男が、神々しく輝き宙に浮いていたのだ。

「ちよ、なんなのよ……これっ！」

「どういうことだ？あの巨大な翼の男は誰なんだ？」

一般人の伊吹と超能力者の明智には、もはやアレは理解不能であった。

というか、俺もサッパリわからないんだが……なんなんだアレ？  
一体あの男は何者なんだよ。とりあえず人間じゃない事は確かだろうが。

「しよ、召喚魔法……ですかっ？」

俺たちが驚きのあまり、言葉を失っている中　　暮葉は確認するようにそう呟いた。

その呟きが聞こえたのか、アマデーオはニヤリと笑い、

「その通り。聖書正典にはミカエル、ガブリエル、ラファエルと言った天使の名前が登場する……アレはその中でもガブリエルという存在。近代西洋儀式魔術では西の方角、青色、水の元素の象徴。まあ……あくまでガブリエルの力の一部を召喚したに過ぎないが、それでも天使の力は偉大だ。人間……いや、本気を出せば日本程度なら10分で水没するだろう」

「てめえ……そんな危険なモン召喚してんじゃねえ！」

「安心するがいい……貴様ら若造が抵抗しないのなら何もせん。仮に天使の力を使う事になっても　私のサンティシマ・マードレ号が壊れては困るんでな。本気は出させないぞ……フッフッフ」

これがアマデーオ・ベルサーニ。近代西洋儀式魔術の使い手か。確かにとんでもねえ魔法使いじゃねえかよ。下手すりゃ世界を変えちまうような　そんな実力の持ち主だな。

だけど何故だ。こないかにもキリスト教徒な爺さんが、なんだ宗教そのものを否定するような組織サウイェトの一員として戦っているんだ？

「冗談じゃない。藤島は絶対に渡さない、私はお前に降伏などしない」

「私も……悪いけど、あんたみたいなムカつくヤツ相手に　引き下がる理由なんてないわ」

「拙者も引く気なんてありません。けーすけ様を絶対に護ってみせ

「るのです！」

「俺もだ。てめえなんか捕まつてたまるかよ。それと、俺達は葵や部長がこの船にいるのか調べなくちゃならねえ。それを邪魔するってんなら てめえをぶん殴つてでも先に進んでやる！」

俺達全員の全力の叫び。アマデーオは全ての叫びを聞くと、ため息をつき金属製の大きな杖を天を仰ぐように持ち上げた。杖の先端が光っている。おそらく日光でも反射しているのだろう。

杖を持ち上げたアマデーオは、笑みを浮かべたまま、

「殺せ、ガブリエル」

つと、その天使に命令しやがった。すると、ガブリエルの目が光り 同時にアマデーオは船内へ戻って行った……。

「ま、待て う、ぐっ！」

俺はアマデーオを追おうとしたが、瞬間 何かが目の前で爆発した。

正確に言うと爆発ではなく、何かが甲板に落下してきたのだ。まるで、砲弾のように落下してきたなにかのせいで船内の埃が舞い上がり、埃が風に流されると、大きな穴が木造の甲板に開いていた。

「藤島！」

「ちよ、圭介っ！」

「く、そ……俺は大丈夫だけど、今のは……？」

見上げると、ガブリエルの周囲には文字通り　水玉が二つほど浮いていた。

遠いので小さく見えるが、おそらく1mはあるだろう。46cm砲弾を二つ合わせた以上の大きさの水玉が、さっき俺を狙って甲板に穴を開けたのだ。

ちくしょう、こんなの喰らったらいくら俺でも死ぬぞ？

「……けーすけ様、ここは拙者に任せてお二人と共に先に行くのです」

「お、おい暮葉？」

「ちょ、あんたはどうすんのよ!？」

「伊吹の言う通りだ。てめえ一人で勝てる相手じゃねえだろ」

「勝てるなんて思ってないのです……でも、ガブリエルと真正面から戦えるのは拙者だけなのです。それより皆さんはアマデーオを追って欲しいのです！」

「だけどガブリエルは天使だぞ？」

確かにアマデーオはあれでも力の一部だと言っていたが、それでも日本をたつた10分で壊滅させる程の実力の持ち主だ。暮葉一人じゃ危ないに決まってる。

「だったら全員で戦ったほうがマシだ。勝てる可能性は低いが……それでも、暮葉一人に戦わせるよりは遥かにマシなはずだ。」

「悔しいが木下の言う通りだぞ。私の能力じゃガブリエルとは相性が悪い……2人と、ここは木下の腕前を信じるしかないぞ」

……だけど、そんな俺の考えを否定する一言を　明智は言った。そういえば、明智は発火能力者だったような気がする。確かに水タ  
イプのガブリエルとは相性が悪いな。

それに考えてみれば、相手は空飛んでるじゃねえかよ。俺や伊吹  
じゃ射程距離圏外で攻撃なんて絶対にできないだろうし、精々ガブ  
リエルの攻撃を避けるのが限度だろう。

そして暮葉は確か危なっかしいが　魔法で空を飛べたハズだ。

「……わかった、暮葉……死ぬなよっ」

「圭介、ちよつといいの？　暮葉を一人であんなヤツと　」

「じゃあ俺達に攻撃手段があんのかよ？」

「そ、それはその……ないわねっ」

「お前は知ってると思うけど、アイツはあれでも風系統の魔法使い  
だ。ガブリエルと唯一戦えそうな力を持ってんだ。だから今は暮葉  
を信じるしかねえよ」

「わ、わかったわよ……！」

よし、伊吹も渋々だが受け入れてくれた。

あとは暮葉を信じて　俺達は船内に突き進むだけだ！

「木下……頼んだぞっ。藤島、伊吹、突っ込むぞ！」

「おう！」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよっ！」



こうして俺と伊吹と明智は、サンティシマ・マードレ号の内部へと突き進んだ。ガブリエルを足止めすると言う暮葉を残して。頼むぜ暮葉……絶対アマデーオをぶっ飛ばして帰るからよ。それから死ぬんじゃないぞ 絶対に……！

第137話 サンティシマ・マードレ（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「あたい、全然出番がないけど言わせてくれ……これ勝てるのか？」

千早「さあ……？ 相手は天使と変態老人……だよな？」

葵「だいじょーぶだよ！ お兄ちゃんは覚醒すると髪が金色になって逆立って、戦闘力だって50倍にまで膨れ上がるんだから！」

あかり「おお、強いな！」

千早「す、すごいです……先輩っ」

葵「特にスーパーお兄ちゃん3はすごいよ？ 眉毛が無くなるし髪伸びるし……魔 ブウにだって勝てるんだから！」

あかり「すごいな圭介っ！」

千早「お、男の中の男ですね……先輩……っ！」

圭介「おいコラ、勝手に俺をサ ヤ人にしてんじゃねえ！」

## 第138話 召喚天使【ガブリエル】

拙者 木下暮葉は一期一振を構え、アマデーオによって召喚された天使 ガブリエルと30mほどの距離を空けて対峙しています。それでもガブリエルは大きく見えます。ガブリエルの本体自体は大した大きさではありませんが、ガブリエルの背中から伸びる純白の翼が巨大なのです。

拙者は幸いこの世界の宗教は信じていません。それどころか、拙者はこの世界の宗教に関しては全くの無知なのです。なので、この世界の天使を攻撃する事に、大した躊躇いはないのですが……。やっぱり気が引けるのです。たとえ未知の宗教のもでも 天使は天使なのです。

増してやこの異常なまでの魔力。果たして、拙者で5分も持つでしょうか。ガブリエルと戦って皆さんの期待に答える事ができるのでしょうか。

「死ね<sup>mors</sup>」

ボソリと、人外の声でガブリエルは呟いた。何語なのでしょうか……ロジーナで聞く言葉ともこの世界で聞く言葉とも違う、拙者が全く知らない言語なのです。

ただなんとなく意味はわかります。ものすごい殺意を感じるのです……きっと、あの意味不明な言葉は拙者を殺す的な意味なのでしょう。

ガブリエルはそう呟いた瞬間、純白の翼をさらに大きく開いて、自身の周囲に海水から巨大な水玉を作っていました。その数は50近いような気がします……もしかして、アレをすべて拙者にぶつけるつもりなのでしょうか？

轟音を立てて生成されていく水玉。あれでも力のほんの一部なの

でしょうね、それなのに震えるような凄まじい魔力を感じるのです。これが　天使の力なのですね。

「それでも、拙者は生きなければならぬのです」

けーすけ様達の期待に答える為にも。皆さんを悲しませない為にも……拙者はこの戦いで生き残らなければならないのです。たとえガブリエルが相手でも　。

「拙者、姓は木下<sup>きのした</sup>、名は暮葉<sup>くれは</sup>という者なのです。アルファ隊に10人もいない特隊員の一人として、けーすけ様を守る者として　異界の天使に反抗します！」

それが殺し合いの始まりでした。

ガブリエルは迷うことはおろか、表情一つ変えずに水玉を一発放ってきた。

それはまるで、敵の戦艦を撃沈する為に放たれた一発の砲弾。船を沈めるなというアマデーオの命令を本当に聞いているのか、疑いなくなってしまうほどの超高速。それでも、ガブリエルにとっては十分手を抜いた結果なのでしょうね……しかし、この程度で降参するほど拙者も甘くは無いのです。

巨大な海水の水玉が目前に迫った　、

「　ッ！」

刹那、水玉は弾けるように小さな滴と化し、バラバラと甲板に飛び散りました。

ガブリエルとピタリと動きを止める。拙者はそれを睨み付け、ゆつくりと、しかし鋭い呼吸でガブリエルを威嚇しました。

一期一振。

これが必要ならば拙者は今頃水圧に負け、絨毯のようになっていたでしょう。しかし一期一振を激しく振り下ろしたことにより、拙者は無理やり衝撃波を生み出しました。春頃に明智光秀と戦った時と全く同じ戦法なのです。

衝撃波で対象を切り裂き、自分の身を守る　それが拙者の護身方法なのです。

「驚かれたのですか？」

拙者は問うように、ガブリエルにそう語り掛けました。ガブリエルはそれでも　表情を全く変えずに冷徹な目で拙者を見下していました。

そんなガブリエルを見上げ、次の攻撃に備えて刀を構えながら拙者は、

「貴方は確かに天使なのです。それは拙者も認めます……しかし、天使だからと言って貴方は拙者のこと過小評価していませんか？」

ガブリエルを挑発するように、そう言い放つてやったのです。それでもガブリエルは微動だにしない。ただ翼を微かに動かし、生成された水玉を拙者に向かって射出するだけでした。今度は二発、確実に拙者を押しつぶそうと水玉が襲ってきました。

しかし、拙者は全く動じないのです。二つの水玉の動きをしつかり捉え　。

薙ぎ払うような一撃で一発目を。下から突くような一撃を二発目に叩きこみ、拙者は二つの巨大な水玉を消滅させてやりました。

「……」

爽やかな夏の海風が吹きつけて、とっっても気持ちがいいのです。

まったく、折角水着も着ているのですから出来れば戦闘ではなく、ずっと皆さんと遊んでいたかったです。

でも、贅沢を言っている場合ではないですよ。拙者が天使を止めなければ、誰がああ暴走し掛けた天使を止めると言うのですか。

だから 拙者は出来るだけ涼しい顔を作って、

「確かに天使の力は偉大なのです。それに、普通の人間なら天使そのものと戦う事を拒むハズなのです……しかし、拙者にそのような躊躇いはありません！」

言い終わると、ガブリエルは更に水玉を放ってきた。今度は4発ガブリエルは拙者だけではなくサンティシマ・マードレ号を攻撃する為に、4発の水玉をバラバラに放ってきたようなのです。

まずいのです。船内にはけーすけ様達がいるのです。皆さんを守る為には一発でもサンティシマ・マードレ号に当ててはいけません。水玉からサンティシマ・マードレ号を守らなければ！

拙者は一発目を切り裂くと、右方向に走って二発目を。さらに走って、三発目と四発目を拙者の一閃でいとも簡単に切り裂いていくよかったです……船体は無傷なのです。

それを確認した上で、拙者は続けるようにガブリエルに、

「何故だかわかりますか？ 拙者は異世界人なのです！ つまり

この世界の宗教とか神様とか天使とか、そういうものはサッパリわからないですし、信仰心も全くないのです！ 拙者の刀は神の為に振るうものではなく、拙者の信じるものや守りたいと思う人の為に振るうもの。そう、いくら異界の天使様でも拙者の仲間に出すのなら 容赦なく拙者は貴方を刀の錆にしてやるのです！」

自分の気持ちを真正面から、どこまでも素直にぶつけてやりました。

その後を訪れた静寂。拙者はその間に呼吸を整え、体勢を立て直す。そしてガブリエルが次にどのような動きをするか、それを調べように見上げ、ガブリエルの事を見ていました。

そして 静寂の中の睨み合いの後、

拙者とガブリエルの殺し合いは 真の意味で始まりました。

ドウ！ という、ガブリエルが翼を振り仰ぐ轟音。

同時に1m近い複数の水玉が、無差別に降り注いできました。拙者はその水玉を一個一個確実に切り裂いていきましたが……まずい、数も多いスピードも速い。このまま、全ての水玉を叩き斬る事は至難の業なのです。

やむを得ないです……おそらく、ガブリエルは船を沈めはしないでしょう。召喚者であるアマデオにそう命令されている以上、ガブリエルはその命令には逆らえません。所詮、今のガブリエルはアマデオの召喚獣であり、忠実な僕なのです。

「う、く つ！」

それにしてもなんと数なのでしょう。全てを迎撃できない、何発かは外して船体に命中してしまいました。ですけど、やはりアマデオの命令は有効なのです。

甲板には複数の穴が開いたものの、致命傷とはなっていないようです。やはりガブリエルはアマデオによって力を抑制され、本来の力を出し切れていないのです。しかし、そんな状態のガブリエルにさえ拙者は防戦一方。恐るべしなのです、天使の力は……！

「 なっ!？」

その時、ガブリエルは一本の水柱を放ってきた。破壊光線のように

な水柱は、渦を巻いて音速に近い速度で、サンティシマ・マードレ号に接近してきました。まずい……もし、あれがサンティシマ・マードレ号に命中すれば、間違いなく粉々になってしまうのです。

ガブリエルは力の加減に失敗したのでしょうか。とにかく、戦艦のような鋼鉄の城ならともかく木造のガレオン船では、あの攻撃には耐えられないのです。

拙者は刀を立てて、全身に力を入れて歯を食いしばり 破壊的な水柱を身に受けました。

しかし、水柱は拙者を押しつぶし、船を撃破する事はありません。

一期一振の刃が渦を巻く一撃を真つ二つに切り裂き、衝撃を小さく抑える事によって船への衝撃を最小限にとどめたのです。ですけど……身体への負荷が……っ！

「も、きゅっ!？」

耐えきれず、遂に拙者は後ろに何メートルも吹き飛ばされた。

……それでも、守れたのです……どうやら、今で水柱は最後。拙者はこの船をあの破壊的な一撃から守りきったのです。ですけど安心はまだできません。先程の一撃を放った天使は かなりの余力を残した状態で未だ存在しているのですから。

全身に痛みが襲いかかる中、拙者は我慢して立ち上がり 再び刀を構える。

「はぁ、はぁ……っ！」

ゆっくりと呼吸を整え、上空にいるガブリエルを睨み付けました。ガブリエルはさっきの一撃で水を使い果たしたのか、海水を吸収し、1mは確実にある巨大な水玉を何個も作っていました。水玉生成中の今は大きな隙……のハズなのですが、ここで拙者が魔法を使



つて空を飛び、ガブリエルに近付いたとしても……果たして攻撃が通用するのでしょうか？

あれほどの相手に　拙者の未熟な魔法が通用するのでしょうか？

「……っ！　ま、まずいのです　っ！」

変な考え事をしている中、ガブリエルは複数の水玉を完成させてしまい、まるで敵の要塞に集中砲火を浴びせるように　大量の水玉を一斉に放ってきました。

拙者は再びそれを、斬れるものは斬ってやりました。無理なものは船体に命中し、甲板に穴を開けていきました。延々と続くガブリエルが攻撃し、拙者がそれを防ぐ戦闘……そこで拙者はようやく気がつくことができました。ガブリエルは　拙者の自滅を狙っているのです。

もしこのまま戦いが続けば、間違いなく拙者はスタミナ切れで倒れるのです。

ガブリエルの狙いはそれなのです。だから、拙者を一撃で殺さずに遊んでいるのです。

完璧にナメられてるのです……でも、それならむしろ都合がいいのです。

何故なら拙者が倒れない限り　ガブリエルはけーすけ様達を攻撃できないのですから！

「……ッ！　遅いのですっ！」

周りの水玉よりも少々大きい、特大の水玉を拙者は叩き斬りました。

斬っただけで衝撃が全身に伝わり、拙者は吹っ飛ばされそうになりました……が、どうにか着地に成功しました。危なかったのですが、どうしましょっ？

穴の数が増えてきました。次第に足場が無くなってきたのです。それなのに、ガブリエルとは際限のない消耗戦に突入しました。まずい、本当にこのままだとガブリエルの思惑通り、拙者はスタミナ切れで自滅してしまうのです。

もし仲間がいれば　とも思いました。

でも、改めて思えばけーすけ様達を先に行かせたのは正解なのです。けーすけ様達ではおそらく防御さえ出来ず、ガブリエルの攻撃で即死していたかもしれません。

別にけーすけ様達が弱いとか、そういう低次元な問題ではありません。ただ、けーすけ様達の戦い方ではガブリエルとは相性が悪いのです。攻撃が届かないし、身を守る手段さえもない。だから拙者はけーすけ様達をここから遠ざけたのです。

それともう一つ。どのみち拙者にガブリエルは倒せません。ですが、一つだけガブリエルの暴走を止める方法があるのです。それは　召喚者を叩く事。アマデーオさえ倒せば、アマデーオの召喚獣であるガブリエルは消滅するハズなのです。

「う、ああ　っ！」

拙者はガブリエルの攻撃を刀で切り裂き、自分と船とけーすけ様達を守りながら思いました。

助けてください、と。

ガブリエルは召喚者さえ叩けば消えます。

皆さん……アマデーオを倒してください　そうすれば誰も死な

ずに済むのです！

そう願いながら、死ぬかもしれない戦いを　拙者は続けました。

第138話 召喚天使【ガブリエル】（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「あ、あんた……すごい強かったのねっ」

暮葉「そ、それほどでもないですよっ！」

圭介「実は弱いんじゃない？ 説が流れるほど実力が隠れ気味だったのにな」

暮葉「けーすけ様……今すっごい失礼な事言いましたよねっ？」

圭介「き、気のせいだっ！ つーか、絶対ガブリエルのほうが強そうなのになんで早川には勝てなかったんだよ？」

暮葉「もきゅ！？ そ、それは仕方ないのです！ 早川は攻撃を反射するのですよ？ 卑怯です反則なのです男じゃないのです！」

その頃、東京の病院では

早川「つくしよん！」

ミネツト「へえ、貴方のくしゃみって可愛いね！ やっぱり貴方って女の子だね？」

早川「くだらねえ事言ってるじゃないエぞクソガキ……まったく、誰だオレの悪口言ったクソ野郎はア？」

## 第139話 船の水兵

外からすごい轟音が聞こえる……どうやら暮葉はあの天使と戦い始めたらしい。ああもう心配すぎてしょうがねえよ。大丈夫かな暮葉のヤツ……とにかく今は暮葉を信じるしかないな。

頼むから死ぬなよ。折角の合宿で誰かが死ぬなんて、俺は絶対に嫌だからな。

それで船内に突入した俺達は、コツコツと足音を立て船内を歩いていた。それでも誰ひとりとして俺達を襲ってはこない。本当にアマデオ以外は誰もいねえのか？

「どうすんのよ圭介。葵ちゃん達を探す？ それともあの変態をやっちゃおう？」

「あのジジイを倒すに決まってるんだろ。敵がいる中で下手に行動するのは危険だ」

「それについては私も藤島と同じ意見だぞ。あの老人……ただ者ではないが、三人で奇襲を仕掛ければアツサリ倒せるハズだぞっ」

奇襲　つまり不意打ちだ。確かに不意打ちを仕掛ければ、相手の実力がどれほど高かろうが俺達のほうが有利になるだろう。不意打ちでさっさとあのジジイを倒し、葵達を探して急いで葵達を船から降ろした後は　天使と戦う暮葉を助ける。

最後まで上手く行くかはわからんが、とにかくその作戦でいこう。

「よし、そうと決まればさっさとジジイを探そうぜ」

「それにしても寒いわねっ、今夏なのに……っ」

「うん、私も流石に水着だけじゃ肌寒く感じるぞ……っ」

うぐぐ……2人の言う通り、確かに船の中は結構寒いぞ。

水着しか着ていないせいもあるんだろうが。うう寒っ、やっぱさつさとジジイを探して葵達と暮葉を助けて、それから暑い砂浜に戻って遊ぼう。

それにしてもこのガレオン船も魔法の賜物か。すごいもんだな……これがこの世界でもトップレベルの魔法使いの実力かよ。天使まで召喚しやがるし。

俺達3人がかりでも倒せるんだろうか。ちょっと不安になってきた、

「っ！」

通路の角に差し掛かった所で思考を打ち切る。俺は咄嗟に伊吹の手を引つ張って、かなり強引に俺の胸元に引き寄せた。伊吹は小さく悲鳴をあげ、その後1秒もしない間に　バスッ！　何か嫌な音が響き、俺達の目の前を小さな何かが通り抜ける。瞬間、異音と共に木造の壁に風穴が開いた。

「な、なによ……っ！」

「しーっ！　とにかく黙れ伊吹っ」

警告するように伊吹にそう言うと、明智が俺達の一步前に出て、壁に張り付くと彼女は恐る恐る顔だけ出した。どうやら視界に何かを捉えたらしく、明智は瞬時にこちらを向いて、

「水兵だ。銃を持った奴が何十人もいるぞっ」

「マジかよっ！」

「ちょ、銃持ってるって……どうやって戦うのよ！」

困ったなあ。まだ試した事はないけど、刃物でちゃんと切れるんだ。いくら俺の身体が丈夫つつつても銃弾には耐えられないだろう。貫通して下手すりゃ即死つてのがオチだな。

いや、もしかしたら耐えられるかもしれないけど……きっと痛いんだろうな。仮に耐えられたとしてもしばらくは動けないかもしれない。蹲っている間に集中的に攻撃されたら、それこそホントに何発目かで銃弾が身体を貫き、死んでしまうかもしれない。

しかも足音が段々近づいてきている。こうして悩んでいる間にも、サントイシマ・マードレの乗組員達は俺達を殺しにくるだろう。ちくしょう、何かいい手段はねえのかよ……って、

「ふんっ！」

おいおいおい、明智のヤツいきなり何やってんだよ！

突然明智が飛び出し、銃を持っている水兵たちに向かって 火

の玉を放った。

パイロキネシス  
発火能力。

掌の中で爆発が発生し、作り出された炎弾は、轟音と熱と火の粉を撒き散らして木造帆船の廊下を突き進んだ。水兵服を身にまとった男達に当てないよう放ったのか、炎弾は男達に命中する寸前に床に着弾。眩い閃光と耳に響く轟音を撒き散らして爆発した。

直撃こそしなかったものの、爆発の衝撃波だけで何人かがひっくり返る。

それだけではない。熱風によって重度の火傷を負った者もいた。

「う、ぐ……な……なにが　が、はっ！」

明智は水兵の腹部を踏みつけて意識を奪いつつ、残りの銃を構える男達の所に自ら飛び出していった。

「明智！」

「凧紗っ！」

俺と伊吹はそう叫んだが、決して明智には近づかない……いや、近づけなかった。

彼女に近づくという事は、水兵にも近づくという事。それはつまり　自分の命を自分で危険に晒すようなものであった。俺も伊吹もその事が頭に浮かび、明智に近づく事を躊躇ったのだ。

一方、超能力というチートじみた力を持つ明智は、その場から俺らに声をかけてきた。

「先に行け」

「な、なんでだよ！　お前が戦うんなら俺だって　」

「いいから藤島、伊吹を連れて先に行け！　ここは私が引き受ける、だから2人は先に言っておアマデーオを倒してほしいぞ。それから妹や後輩をしつかり助けてこい！」

俺は反論しようと思ったが、ふと冷静になって考えてみた。

ここで俺や伊吹が飛び出して役に立てるのか？

相手は銃で武装している。超能力を使えば遠距離攻撃も可能な明智と違い、俺や伊吹は飛び道具もなければ何の能力も持たない一般人。即ち白兵戦しかできないのだ。

ちくしょう……結局役に立てねえのかよ！

「先に行かせてもらおうよ。あんたや私じゃ攻撃する前に撃たれておしまいよ」

「くそっ……！ わかったよ、必ずジジイを倒して葵達も助ける！  
てめえも死ぬなよ！」

叫んでから、俺は伊吹の手を引っ張って走りだす。そんな俺達を逃がすまいと、水兵たちが発砲してきたが、恐怖して足を止めるよりは走り続けたほうが安全だ。俺は銃撃にビビりながらも足を止めずに走り続けた。とにかく走る俺達の後方で、再び爆発音が響いてきた。

どうやら、水兵達と明智の戦いが再開されたらしい。

「もっと気合い入れてかかってこないと……お前ら全員焼死するからな！」

最後に聞こえた明智の言葉は、そんな感じの気合いを入れる為の叫び声だった。

とにかくありがとうな明智。それに外で戦っている暮葉も。

2人の努力は絶対無駄にしねえ。絶対に目的を果たして帰ってきてやる　ッ！

その頃、サンティシマ・マードレ号の砲室。

ボク　浅間英樹と妹、そして後輩達は気がつけば、木造帆船の中にいたんだ。



わけもわからず脱出しようとは思ったけど、命綱すら見つからず、飛び降りるにはあまりにも高過ぎたため、あかりや葵君の提案で船内探索を行う事にした。

それにしても不気味な雰囲気だね。青山君も完全に怯えていて、先程からずっとあかりにしがみついているではないか。しかし……これがまたイイね。怖がる青山君はハアハアモノだよ。

全く羨ましいね藤島君は。ここにいる可愛い子猫ちゃん3人全員に あれだけ強い好意を寄せられているんだからね。全く……出来る事ならボクと変わって欲しいくらいだよ。

「おっ宝おっ宝」

「うっ……あたいわくわくしてきたぞっ！」

「あ、葵とあかりはその……怖くないの……っ？」

「うん、全然怖くないよっ？」

「だって化け物とかがいんのはゲームの話だろ？ 誰かいたってあたい達は兄貴を盾にして逃げればいいんだからなっ！」

「ひどい！ ボクを盾になんてひどいよあかりっ！」

「そっだよあかり、流石にひどいと思うよ？」

おお、なんて優しいんだ葵君は。流石はブラコン、ボクだって藤島君と同じお兄ちゃんキャラなんだからね。いくら他人の兄とは言え、お兄ちゃんキャラには優しいんだね。

はあ……今まで妹は血縁ブラッディが大切だと思っていたが、妹分見たいな存在っていうのも悪くはないものだね。いや、ボクの場合……自分

の妹よりもいいかもしれない！

「だって、部長さんは貧弱だから 盾にもならないよっ！」

ぐはっ！ ひ、ひどい……なんてひどい事を言っただ葵君！

「……あ、葵……流石秀才だね……っ！」

「確かに、あたいの兄貴は超貧弱だな！」

「みんなしてひどいよ！ ボクはそこまで貧弱じゃないよ！」

ボクは抗議するように言い放ったが、何故だか三人はジト目でボクを見てきた。

えっ？ えっ？ ボク何かおかしい事言ったかい？ そんなにボクって貧弱で使い物にならないお荷物キャラなのかい？

「それじゃあ兄貴、何か危機が訪れたらあたい達を守れよな！」

「そつだよ！ そこで部長さんが頼れる男の人だって、証明しちゃうってください！」

「……うん、証拠があれば……わたしも信じますよ……っ？」

「うぐ、証拠かぁ……まあいい、本当に危機が訪れたらボクが君達を守って」

つと、ボクが彼女達に向かって調子よく言っている時 背後から足音が聞こえた。

コツコツと、音を立ててそれは迫ってくる。ボクだけに聞こえた

幻聴　でもない、あかり達にも足音は聞こえていたようだ。びくんと反応した彼女達は、ボクと同じタイミングで身体ごと後ろに向くよう移動した。すると、闇の中から　重々しい法衣を身にまとった老人が現れたのだ。

「侵入者は目標ターゲットのみではなかったか……」

「なんだいこの老人は……まるで厨二病アニメに出てくる聖職者のようだ。」

重々しい法衣にキラキラと輝く十字架。紫色の怪しい金属製の杖。左手に持っているのは古びた分厚い本である。いかにも……オカルトやっていますって雰囲気だね。でもまあ、流石にここは現実世界なので変な能力は使わないだろうね。

「ふん、何者だい君は？」

「年上に対する礼儀を知らんのか、最近の若者は？」

「無論知っているさ。ただ　君のような不審者に警戒するのは当然の事だろう？」

「決まった……出来ればキリッと効果音が欲しかったね。」

とにかく、今は決まったよ。表情もセリフも完璧だった。これならきつと　初対面の女の子ならボクに惚れている事だろう。

「うわあ、兄貴がカッコつけてるぞ？」

「強がりなんだよ、部長さんは」

「……目立ちたいんですね……部長っ」

「こらそこっ！ 折角ボクカッコよかったのに空気が台無しだよっ！」

「悪いが馬鹿騒ぎなら外でやってくれんか？ このアマデオ・ヘルサーニ。若造と遊んでいる時間はこれっぽちもないのだよ」

随分とまあ威勢のいい老人だね。その上怪しいし……しかも外国人だって？

突然現れた大きな船に、突然現れた謎の老人……何が起こっているんだい。ボク達は今度はどんな騒動に巻き込まれてしまったんだい？

「そうしたいのも山々だけど……生憎、ロープすらないからボクら船から降りれないんだよね」

「そうかそうか。まあ……今更お主らを逃がしはしないがな」

「どういう意味だい？」

「私のこの姿は一般人には見せられないのだよ」

そう言つと、アマデオと名乗る老人は本を開き、杖を天に上げる。

「魔法日記169頁。記された記録を具現化 再現せよ」

ブワツとボクらの頭上に突然、縄が現れ それはボクらを瞬時に縛り付けた。黙っているだけでも痛いほど、強く縛られた硬く太いロープ。

「う、く……っ！」

やられたね、こんな頑丈なロープを自力で解くなんてまず不可能だろう。ボクは踏ん張れるだけ踏ん張ったが、ロープはビクともしなかった。

「な、なんだ！？ このロープどころから　！？」

「う、あ……っ！ お兄ちゃんになら縛られてもよかったのに！」

「あ……葵っ、冗談……言ってる場合じゃないよ……っ！」

女の子達も当然ロープを解けなかった。

くそっ、この爺さん一体何者なんだ。一体どうやってボクらを縛り付けた。さつき爺さんは一言意味不明な言葉を喋ったが、結局あれはなんだっただ！

「おいジジイ！ あたいらに一体何したんだよっ！」

「理解が追いつかんか小娘よ？ それが一般人の反応だ、心配するでない」

「一つ君に聞くよ。ボクらをこれからどうするつもりだい？」

「折角捕えたのだ。ここで殺すのは勿体ない。折角だから大部屋に案内してやるう　最高の魔術演劇マジックショーを堪能してもらおうではないか……フッフッフ」

ボクらは縄で縛られて全く抵抗できない。その状態であの老人は、勝手にボクらには何かわからない大事を引き起こそうとしていた。これからボク達はどうなるのだろうか。それを知るのはあの老人のみのようである。まずいね……非常にまずい事に巻き込まれた気がするよ。

藤島君達はどこで何をやっているのだろうか。無事なのだろうか？ この大きな帆船から逃げる事ができたのだろうか……いや、彼の性格からして逃げはしないだろう。

必ずボク達を助けに来るハズだ。でも、助けに来るのだとしたら。

気を付けて欲しい。この老人は 普通じゃない。

## 第139話 船の水兵（後書き）

・後書きトークコーナー！

浅間部長「足りないね……」

圭介「何がっすか？」

浅間部長「最近シリアスな話が続いてるじゃないかい」

圭介「合宿編もクライマックスに近いですからね」

浅間部長「うん、それでだ。最近この作品には コメディ&日常分が足りない！」

圭介「ええ？ でも仕方ないですよ、展開的に」

浅間部長「いいや！ シリアスな話ではボクが活躍できないじゃないかい！」

圭介「今回活躍してたじゃないですか!？」

浅間部長「けどすぐやられたじゃないかい！ やっぱり日常回で女の子に囲まれてウハウハな話がボクはいいよ！」

暮葉「どのみちそういう話でも、部長さんは活躍できないと思うのです……っ」

## 第140話 魔法日記

暮葉は外で、明智は船内で敵と戦う仲、俺は伊吹と2人でこの足を進めていた。

サンティシマ・マードレ号の乗組員の数自体は少ないようで、どうやら連中は明智一人に足止めされているようである。従って、現在俺と伊吹を狙う奴は一人もいない。抵抗する者がいないから俺達は足を止める必要がなかった。

それでも不気味だな……さっきあれだけの水兵がいたのに、このあたりには一人も水兵がいないだなんて……何か罠でもあるのか？ いや、そんなわけでもなさそうだ。

さつきから随分歩いているが、罠など一切なかった……。

それが作戦なのか、それともアマデーオが油断しているのか、俺達にはわからない。

「圭介！ こっちこっち！」

「ん、どうした伊吹？」

伊吹に呼ばれて、俺は小走りで伊吹に近寄った。伊吹が指差す通路の先には、怪しげな木造の大きな扉が閉まっていた。うん、怪しいね……とんでもなく怪しいと思う。

「でかい扉だな……大きい部屋でもあるんだろうか？」

「そんなのわかんないわよっ、でも調べてみる価値はあると思うわっ」

「……なあ、一つだけ聞かせてくれ」



「なによこんな時に……っ！」

「今回の相手はお前にとって初めて魔法使いだ。それも一筋縄じやいきそうにないヤツだ。俺は出来ればお前にソイツと戦ってほしくない。それを言われても　お前は戦うか？」

俺は確認するかのように、伊吹の瞳を見つめながら言った。すると、伊吹の顔がほんの少しだけ赤くなつたような気がするが、同時に伊吹はいつもの強気な表情になり、

「あたりまえでしょ。今更引き下がれないわ……それに私はあるの幼馴染よ。あんた一人を置いて逃げるだなんて　絶対に出来ない……ッ！」

決意に満ちた表情で、伊吹は俺に向かってそう叫んだ。  
それが伊吹の覚悟であった。

伊吹に逃げる気はない。足を止める気はない。竹刀を下げる気だつてない。あるのは襲いかかってくる魔法使いから　その竹刀で俺を守ろうとする気持ちだけのようだ。

いや、俺だけではない。伊吹は仲間たち全員を守る気だ。  
覚悟を決めた伊吹は強い。それは別に剣道の実力がすごいというわけではなく、精神的に物凄く強いという意味だ。そう、精神的に　誰よりも。

こんなに強い伊吹なら大丈夫だろう。そう思った俺は右手を伊吹の右肩に置き、

「行くぞ　アマデーオをぶっ倒しに」

俺がそう言うと、伊吹はコクリと首を縦に振った。

それが、俺達にとっての真の意味での開戦であった。  
俺と伊吹は10秒以内に扉の前に辿りつき、俺は扉の取っ手を握る。大きな扉は木造と言えどもかなりの重量であり、男の俺でも苦労してようやく開けられる程であった。  
こうして開けられた大きな扉。その先で 魔法使いが不気味な笑みを浮かべていた。

「ようこそ……藤島圭介と処女ちゃんか」

「な……っ、誰が処女ちゃんよっ！」

「ふふふ、子供扱いされたくないのなら、その処女を誰かに捧げればいだろう。例えばその藤島圭介とかなっ」

おいこのエロジジイなに言ってるんだ！

つまりアレか。このジジイは俺に伊吹とやれって言ってるのか。

アホだ、いくらなんでも恋人でもない人にそれを言うとは、アホ以外の何者でもないぜ。

ほら、伊吹だってお怒りで あれ？

「け、圭介は恋人じゃなくて幼馴染よっ……だから……そんなの捧げるわけ……っ！」

あのくもしもし伊吹さん？ なんで赤くなりながらもじもじしてるんだ。絶対それ誤解される反応だと思うんですが。ほら、あのエロジジイだって笑ってやがるじゃねえか。

「ふん、まんざらでもないのか？」

「ち、違うわよっ！ ああもう、こんのスケベ二回死ねっ！」

あ、やっぱり怒ったか。ですよねえ、こんな話をされて怒らないわけがない。だって伊吹は下ネタ耐性はあるのだが、別にそういう話が好きなわけじゃない。増してや俺と伊吹だ。ツツパリ伊吹ちゃん俺とやりたいわけがないじゃん。

俺はまあ……伊吹がいいって言うなら……ってダメだろ馬鹿か俺は！

そんな事になった瞬間　幼馴染からセ　レにジヨブチェンジ。色々と危ない関係になっちまうじゃねえかよ。それは健全なお付き合いをしたい俺としては、ちよつと気が引ける関係だぞ。

「ところで2人に問おう。私は先程侵入者を4名拘束したのだが……アレはお主らの知り合いかあ？」

アレ？　アレってなんだよ　と思いつつ、俺はアマデオの後ろを見る。アマデオの背後には確かに縄で縛られた男女4人がいた……ってオイ。ちよつと待て……アイツら　！

「あ、葵！？　青山さんにあかり！？」

「ついでにあんたの部の部長までいるわよっ！」

縄で縛られた葵達は瞳を閉じ、ピクリとも動かない。

。　気絶……してるんだよな？　もし気絶や寝ている以外だったら

思わず全身に力が入る。わなわなと身体が震え、ギシギシと歯も食いしばっていた。

「てめえ……葵達になにしゃがった！」

「案ずるな。うるさいから仮死状態にただけだ。今起こしてやる  
うか？」

アマデーオはあの紫色の杖を天に上げ、

「魔法日記P169頁。先の手順を逆に行い、記録を再現せよ！」

っと叫ぶと、目を閉じていた四人が目覚め始めた。死んでなくて  
よかったけど、アマデーオのヤツは一体どんな魔法を使いやがった  
んだ。

魔法日記ってなんだ？ 記録を再現するってどういう意味だよ。

あの紫色に輝く不気味な杖と分厚い本の正体は一体 何なんだよ？

「ん、みゆ……はっ！ お、お兄ちゃん！？」

「……先輩……っ！」

「んみや……どういうことなんだ？ 国宗先輩まで一緒だ？」

「ん、んん……あれ、ボクらは？」

目覚めた当人達もよくわかっていないらしい。そりゃあそうだ、  
少なくとも葵達よりは魔法によく触れている俺でさえ アマデー  
オが使う魔法は意味がわからん。  
召喚も出来る。人を眠らせる事もできる……アレはどういう魔法  
なんだよ。

こつ言つ時に専門家がいれば っと思っただけど、その専門家は  
外で戦闘中だ。

「懐疑の念を抱いているようだな。藤島圭介、それに処女ちゃんヴァージンよ」

「だ、だから処女ちゃんはやめなさいよっ！ ホントに最低の変態ね！」

「伊吹、とりあえず抑えとけ。話が進まねえよ」

「というかエロジジイ。処女ちゃんって、今回合宿に来ている女子全員が処女ちゃんだと思っただが……まっ、そんなツツコミしてもしょうがねえよな。」

俺がくだらない事を考えていると、アマデーオは長つたらしい言葉が続ける。

「魔術とは常に己の理想を追求するものだ。私の魔術は理想を追い求める事に特化した 究極の儀式魔術なのだよ」

「究極だと？」

「私は理想を追求する為に魔術を覚えた。近代西洋儀式魔術には魔法日記というアイテムがある。これは何をするものか……素人の若造にはわかるまい」

「だつたらなんだよ、何に使っただよ！」

「なあに、これまでの訓練や儀式の内容、状況、感想などを記録するだけのつまらんモンさ。たったそれだけのモンで何が出来ると思う？ 最も、これ以上君に教えたって私に得はない……だからこれ以上は説明しないがな」

儀式を……記録？

そんなものを記録して一体どうするんだ。一体何の得になるんだ。

記録したって別にすごい魔法が使えるわけじゃないんだろ。だって魔法日記で意味のないアイテムじゃ……まさか！

「まさか……てめえ、魔法日記それに記録した事を再現してんのか!？」

「その通りだよ！ 中々鋭い若造だ……どうだ、上層部に引き渡す前に私の下で修業をしないか？ お主はひよつとすると魔術師の才能があるかもしれん！」

「……便利な魔法を使えるんなら悪くねえ話かもな。だけど お断りだ」

「私もよ。圭介を魔術師なんかにはさせない。あんたなんかの弟子には 絶対させない！」

「どうやら伊吹は気持ちは同じのようだな。俺も あの野郎の弟子にはなりたくない。」

「そもそも、魔法使い自体になりたくない。今の俺が弱いのは分かっている。だからって魔法なんてワケの分からないモノには頼りたくない。突き進むんなら 拳で突き進んでやる。」

「拳じゃねえと出来ない事が一つあるかなら。アマデーオみたいなクソ野郎を 思いつきりぶん殴れないじゃねえか！」

「そうか、残念だ……なら私のみで理想を追求しよう。この魔法ロイタスクの杖ンドを介し お主らの為に地獄を再現してやる！」

「そんなモン再現させるかよ クソツタレがああああああああ  
あっ！」

「逆にあんたに見せてやるわよ 挫折って名前の地獄を！」

アマデオの理想を跡形もなくぶち殺すべく  
俺と伊吹はアマ  
デオに飛びかかった。

## 第140話 魔法日記（後書き）

・後書きトークコーナー！

早川「作アアア者くウウウウウン！　なんでオレの出番がねエンだよ、アア！？」

作者「いや、仕方ないじゃん。この展開で早川登場って無理あるじゃん？」

早川「オレはミネットも助けたし、第二の主人公という座にもついた。後は本来の主人公に勝利するだけなんだよ。わかってんのかあア！？」

ガブリエル「……………」

早川「なんだオマエ？　おもしれエ……………ブツ殺す！」

ガブリエル「…………ツ」

早川「ああ？　なんだこの破壊光線的な水柱？　こんなモン暴風の膜で反射して　な、反射しきれねエ！？　コイツ、オレの処理能力を超える威力で！？　……………チツ、おもしれエクソツタレ。遊んでやるよ三下ア！」

作者「ちよつとアクセラ……………げふんげふん！　早川がうるさいので、しばらくガブリエルと遊んでてもらいましょう」

ミネット「次回！　アマデーオとの決戦だよ！」



## 第141話 アマデーオ・ベルサーニ

「おおっ！」

俺は叫び、アマデーオの元へと突っ走る。

考えなんてない。ただとにかく、伊吹と一緒にアマデーオに突っ込んだ。間合いを詰めてこの拳を叩きこんでやろうと思った。ただそれだけの単純な戦法。しかし、その単純さだけでも十分アマデーオを叩きのめす事で出来るハズであった。だが、

「魔法日記P201頁。儀式の結果を見つめ直し、ここに再現せよ！」

アマデーオは魔法日記に記された、訓練やら儀式の内容や結果を読む。一見するとそれだけがヤツは魔法の杖を介し、その記録を再現する事が出来るのだ。

あの魔法日記にどんな事が書かれているかは不明だ。一つだけ言える事は、そこに俺らの特になる事は一切書かれていないという事だ。

アマデーオの魔法はアマデーオの理想を追及するんだろ？ だったら、俺達にとってプラスとなる事が書かれているハズがない。そしてその当たり前の予想は 見事に的中したのだ。

アマデーオが魔法の杖を振りまわし、杖の先がガツンと言う音を立てて軽くぶつかった、瞬間 気付けば俺は床に倒れていた。

何があったかサツパリわからない。ただ、全身が押し潰されるように重い。黙って呼吸をする事そのものが苦痛に感じる。血液から骨の髄まで、何もかもが重くなった気分だ。

「う、あ……っ！」

「け、圭介！？ ……あ、あんた。圭介になにしたのよっ！」

「15倍の重力に耐えられるとは……流石、報告に受けていた通りの頑丈さだぞ、藤島圭介」

じゅ、じゅう……ごばい？

ふざけてんのかよ。戦闘機のパイロットだって9Gがいい所だ。なに何も鍛えていない俺に15倍の重力って……っ！か、魔法日記にはこんな事が書かれているのか。

アマデーオは長い人生の間に　　こういう儀式を行ったっての  
よ！

「ふ、ざけんじゃないわよ　このっ！」

激昂した伊吹がアマデーオに飛びかかった。右手でしっかりと握った竹刀で、アマデーオの面を打とうと伊吹は彼の懐に飛び込む。

伊吹の動きは速かった。

これが剣道の試合なら　　彼女は確実に一本を取っていただろう。

「魔法日記P260頁。女となるその結果をここに再現せよ！」

しかし、アマデーオは伊吹に面を打たれる前に　　反応する。

叫ぶアマデーオに響く金属音。アマデーオは先程と同じく杖を突いた。アマデーオが叫んでからそのような動作を見せるという事は、何らかの儀式を再現したということだ。実際そのせいで俺は15倍の重力に押し潰され、こうして平伏しているのだ。

気絶しまえば楽なのかもしれない……けど、俺の身体は丈夫である。たとえ15倍の重力が襲ってこようが、苦しいだけで気絶さえもできないのだ。

まさに生き地獄。ちくしょう、アマデオに地獄を作らせてしまった……。

「ん、あ、い、あああ……っ！」

伊吹も丁度同じような状況になっていた。アマデオの儀式再現によって。

目に涙を溜めて、ギリギリと歯を食いしばりながら、伊吹は蹲っていた。

俺は腕と首に力を入れ、やっとの思いで首を上げると、

「て……てめえ……今度はなにをしゃがった……っ！」

「錯覚だよ。初体験の女の子とは痛いらしいな。私はその痛みを彼女に与えたのだ」

「……てめえっ」

「そう怒らんでもいいだろう。何も本当に処女を奪ったわけではない。先程も言ったが単なる錯覚だよ」

単なる錯覚だとしても、その痛みって半端じゃないんだろ。やっぱりダメだ、そんな事を魔法で再現しやがるなんて　アマデオの野郎イカれてやがる！

本当なら今すぐにでも伊吹を助けたい。

ふと、アナスタシアってヤツと戦った時の事を思い出す。アイツはゴーレムを率いて暴れまくっていたのだが、召喚者であるアナスタシアを倒した瞬間　ゴーレムは跡形もなく消滅した。

あくまで素人の推測だけど、魔法って術者がやられれば無効化されるんじゃない？

だとしたら、伊吹を助ける方法は一つだけだ。この拳で　アマデーオのクソ野郎を殴り倒せば全ての魔法は無効化される。

伊吹が痛みから解放される。アマデーオが召喚したガブリエルも消える。結果的にそれは外にいる暮葉を救う事にもなる。

「さてと、私は面倒くさい事は嫌いだ……さつさと藤島圭介を回収するか」

だけど、それを達成する為には　身体に15Gがかかっている状態で、あのアマデーオと戦わなければならない。ハッキリ言ってそれは不可能だ。

15Gの中を普通に動けるヤツなんて、おそらくこの世にはいないだろう。ド　ゴンボールじゃねえんだから、そう簡単にはこの状況で動く事は出来ない。けどな　俺だって何も考えていないわけじゃないんだぞ。

あるんだよ　15Gの中でも動けるかもしれない方法が。

だけど、その為には女の子の協力が必要だ。ふと周囲を見ると……この大部屋にいるのは伊吹と葵とあかりと青山さんである。伊吹はご覧の有様、これでは何もできないだろう。

かと言ってねえ。残りの三人は縄で縛られているし……どうすりゃいいんだよ。

いや待て　アマデーオのヤツ、足までは縄で縛っていないじゃないか。つまり手を使う事が出来ないだけで、ここまで歩いてくる事はできるんじゃないか？

「ああん？　なんだその思わせぶりな表情は？　藤島圭介……何を企んでいるかは知らんが、貴様がここから逆転する事は不可能だ。素直に諦めて拘束される　この童貞野郎が」

あとはアレだ、条件に合う子を三人の中から選ぶだけだ。

その条件とは……足が速くて、俺の事が好きで、俺になら どのな要求をされたって構わないと言える素直な子である。

青山さんは俺の事は好きみたいだし、確かに俺の要求は何でも受け入れそうだ。しかし青山さんは運動が苦手である。ここまで走ってくる間に アマデーオに捕まっちゃうぞ。

続いてあかり。あかりは足は速いし俺の事は好きみたいだ。けど あかりは何かとプライドが高いからなあ……あかりじゃ俺の要求を受け入れてはくれない ！

残るは……げえ、葵かよ。でも待てよ？ 葵って条件にピッタリな子じゃないか？

葵は頭も避ければ運動神経も抜群で、お兄ちゃんLOVEで、その上自分から一線を越えようとするブラコンのド変態だ。葵なら

俺の要求を喜んで受け入れてくれるかもしれない……！

一か八か……全てを俺の妹に賭けてみるか ！

「う、ぐ……っ！、あ……葵っ！」

「……っ！ お、お兄ちゃん!？」

「来てくれ……頼むっ！」

「う、うん ！」

葵は縄で身体を縛られている為、安定ながらも小走りでごっちに 来てくれた。

アマデーオは邪険な顔で葵を見るが、手出しをしようとはしない。自分を無視して素通りした上に、葵は魔法も何も使えない一般人だ。脅威度は限りなく低いとでも彼は思ったんだろう。助かった……葵が俺の所に来てくれた。

「来たよお兄ちゃん！　だ、大丈夫……動けないの？」

「いろいろあつてな。それより葵、頼みがあるんだ……っ」

「頼み？　うん！　葵に出来る事ならなんでもするよ！」

この状況下でなんて明るい返事をするんだ。それだけでも勇気が沸いてくるよ。

後は　葵を信じるしかないな。

しかし、相手は実の妹だしな……なんかその、こんな事を言うのって変だよな。

なんつーかすっげえ恥ずかしいな……けど、言わせてもらっぜ。

「わかった……それじゃあ俺と　キスしてくれ！」

「　っ！？」

……言ってしまった。

爆弾発言を　そのせいで場の空気が凍りついてしまった。

アマデーオはピクピクと眉を動かし、伊吹やあかりは啞然とし、青山さんはシヨックを受けたような顔をしていた。いや　ホント皆さんすみません。

けど、アマデーオを倒す為にも必要なんですよ　ハイ！

「ふえ……え、えと……お兄ちゃん？」

すっかり紅潮してしまった葵。頼む　いつもの勢いでガバツとお願いします！

「葵！　明日は必ずお前と遊んでやる。だから頼む　してくれ！」

「な……なに言っただよ圭介！ ダメに決まっただる！」

「そ……そうですね先輩……っ！ 葵もその……先輩としちゃダメ……っ！」

「け、圭介……あんた、妹になんて頼みをっ！」

大顰蹙だ。まあ当然と言えば当然だが……でも仕方ないだろ？  
アマデーオを倒す為には アレしか方法が思い浮かばなかったんだ。

「わ、わかったよ……お兄ちゃんっ」

「……っ」

ごくっ……ついに決意した葵が、ゆっくりと瞳を閉じて顔を近づけてくる。あかりや伊吹の叫び声が入ってきたが……まあ今は気にしないでおこご。後でどうにかすればいい。

とにかく俺は 葵とのキスに集中する事にした。

俺も葵に合わせて瞳を閉じ、唇を少しだけ前に突き出してやった。同時に キスとは全く関係ない事を脳内で念じる。念じなければ何の意味もない。

そして遂に。

「！」

俺と葵の唇が重なった。

葵の桜色の唇は、明智や暮葉とはまた違った感触。柔らかく、甘い、桃のように香りに葵の匂いが混じったキスは 実の兄の俺で

も興奮するものであった。そして興奮と同時に 別な何かが入み上げてくるような気がした。守りたい。

目の前の家族を守りたい。幼馴染や後輩達を守りたい。別な場所で戦っている友達も守ってあげたい 何よりこの日常を守りたい。そんな想いと、葵とのキスによる興奮や、込み上げてくる何かと重なり……。

「おおおおおおおおおっ！ 気が高まる……溢れるっ！」

遂に俺は覚醒する。

リミッターが解除され、全ての力が解放された。

その状態で俺は立ち上がる。おお、普段と大して変わらない。流石は解放モード、15Gなんてやっぱ目じゃねえな。最後の賭けに出て正解だったぜ。予想外の結果に、アマデオも眉間にしわを寄せて驚いていた。

「どついう事だ？ 何故貴様は 15Gもかかっているのに動けるのだ!？」

「残念だったなあ。てめえが葵を攻撃してりゃあ、俺がゾンビのように復活する事もなかったのになあ？」

「う、ぐ……ナメやがって！ 魔法日記P35頁、魔法陣を描き火柱を立てさせる魔術を 再現せよ！」

「ッ！」

アマデオが叫ぶと、丁度俺の真下から突き刺すような火柱が3本ほど、まるでベトコンがし掛けた罠のように突然出現した。



普通、そんな罨を避けねはしないだろう。こんな罨でも人は殺せる。事実、そんな程度の罨に米兵は引つ掛かり、結構な数が犠牲になったのだ。

普通の人間ならそれで死んでしまうが 俺は平気だったりする。脚に力を入れ、勢いよく跳躍した。リミッターが解除された俺が本気を出せば 10mくらいまでなら普通に飛べたりする。素早く10mも跳躍した俺は 火柱を華麗に避けた。

「魔法日記395頁！ 絨毯爆撃、逃げ場のないその攻撃を 再現せよ！」

今度は絨毯爆撃。

絨毯爆撃とは、多数の無誘導爆弾を用いて地域一帯を爆撃することを指す。第二次世界大戦中に大型戦略爆撃機を持つ連合軍が得意とした、結構エグくて残酷な戦い方だ。

っと言っても所詮は魔法だ。別に本物の爆弾が使われるわけではない。そんなものを船内で使えば船ごと吹っ飛んでしまうからだ。実際に降ってきたのは重そうな鉄球である。鉄球と言えども脳天に当たれば普通の人間は死んでしまうだろう。だが そもそも俺には鉄球が当たらなかつた。

ボクサーのようなフットワークを使い、軽く跳躍をしながら鉄球を避けていった。

そうしているうちに アマデーオとの距離は5mにまで近づいていた。

「魔法日記181頁！ 主の敵と認められる者を 十字架で圧殺せよ！」

首から提げていた十字架を強引に取ると、十字架はアマデーオの頭上に浮き、一人の人間と同じ大きさにまで膨張する。

「これがてめえの 限界だっ！」

俺は十字架に向かって左拳を放つ。リミッター解除モードとは言え、やはり普段使っている右手と比べれば、左拳は明らかに威力が落ちていた。右拳に比べれば見劣りする速度である。

それでも そんな程度の拳でも！

「ッ！」

俺の左拳は十字架を僅かに突き、十字架の角がアマデオの顎に突き刺さる。

真上に跳ね上がるアマデオ。そんな状態で、彼は熱く叫んでいた。

「う、ぐあ！ ち くしょう、チクシヨオオオオオオオオオオ！  
私に……魔術師の私にはサヴィエトにも居場所がないのかア！  
結局弾圧される身なのかアアアアアアアッ！」

何を叫んでいるんだかわからない……が、一つだけわかる事があった。このジジイも結局魔法使いとしての居場所が欲しかっただけだ。ただそれだけだ。それだけの理由でサヴィエトに協力していたんだ。たったそれだけの為に宗教の敵である組織に 協力していたんだ。

つたく、ふざけんじゃねえよこの野郎……っ！

そんな事の為に……力を変な事に使ってんじゃねえ このクソ野郎！

「 おおおおオオオああああッ！」

俺は咆哮と共に 全力を籠めた一撃を放った。  
もちろん、副砲の左拳ではなく 主砲の右拳を。

「ぶるわあああああああああああつ！」

バゴン！ という強烈な打撃音。

ガードも出来ずに殴られたアマデーオは 2、3回真上に跳ね  
て、ようやくその身体が止まったのは何メートルも先の地点であっ  
た。

……終わった。馬鹿みたいに強い魔法使いに 俺達は勝ったん  
だ……っ！

第141話 アマデーオ・ベルサーニ（後書き）

・後書きトークコーナー！

凧紗「相変わらず藤島の解放モードはチートだな」

圭介「そうでもねえぞ？ 15Gだと流石に動きが鈍かったし」

凧紗「アレとマトモに戦えるヤツ……いるんだろうか？」

圭介「さあ？ ラスポスあたりなら戦えるんじゃないかね？」

暮葉「けーすけ様……完全に調子に乗っているのですっ」

## 第142話 気付いてしまった事、

拙者 木下暮葉はまだガブリエルと戦っていました。

無数の水玉を放ってくるガブリエル、その全ての迎撃は難しいのです。拙者は今の一撃を真つ二つに切り裂いたのですが、次の一撃への反応が遅れてしまい、やむを得ず拙者はガブリエルが放った巨大水玉を避けました。先程まで拙者がいた場所に、大きな穴がぱっくりと開いていました。

まずいのです……これ以上サンティシマ・マードレ号にダメージがあると……いくらガブリエルのアレが手加減したとはいえ、いい加減この船に限界が訪れてしまうのです。

沈めてはダメなのです……っ！ まだ、この中にけーすけ様達が……っ！  
……と思った その時でした。

「……っ！」

突然、ガブリエルの動きが止まりました。

本体も、純白の羽も、作り出された水玉も。その全てが動きを止め、まるで死人のように空中で固まっているのです。一体どうしたのでしょうか……と思った さらに次の瞬間。

バリリン！ ガラスの割れるような音が響くと、全身にヒビの入ったガブリエルは次第に破片となって崩れ落ちていったのです。水玉も空中で形を崩し、そのまま海へと落下しました。

ガブリエルが消えた……つまり けーすけ様達がアマデーオを倒したという事。

召喚者の意識が途絶えた為、魔法が無効化されたのだと思います。拙者は刀を甲板に落とし、力尽きるようにその場にへたり込んでしまいました。

「ありがとうございます……けーすけ様っ」

何故か。

けーすけ様だけが活躍したわけではないのに、何故か最初にけーすけ様の姿が脳裏に浮かんでしまいました。何故なのでしょうね……これじゃ、他の方達に失礼なのです……。

でも、どんなに頑張っても 結局最初に思い浮かぶのはけーすけ様。

最近の拙者……ずっと変なのです。そもそも自分で自分がわかりません。なんで昨日けーすけ様とキスをしてしまったのかさえ、拙者はわからないのです。

あの時はけーすけ様にされそうになって、結局それはなかったのですが……何故か最後までしてくれなかったのが不満で結局……。

「はぁ……っ」

結局、拙者は何がしたかったのでしょうか……？  
どうしてけーすけ様とキスを……っ。

「……っ！」

かあつと顔が熱くなる。 あれ、なんで……なのでしょう？

拙者……やっぱり、けーすけ様のことが好きなのでしょう……？  
でもでも、違いますよね。恥ずかしい事を思い出したから……ですよね。

「……わからないのですよっ」

恋なんてした事がありません。多分……今もしていないと思うの

ですけど……。

あれ？ よくわからないのです。自分のことがわかりませんっ。そもそも拙者はけーすけ様のことをどう想っているのでしょうか。拙者は……どうしたいのでしょうか……？

「木下？」

「もきゅー！？ ふにゃ、は……なんだ、明智殿でしたかっ」

いきなり声をかけられたからビックリしたのです。気付けば背後に明智殿がいました。

し、心臓に悪いのです……人が考え事をしている時にっ。

真剣に悩んでいる時に……でも、明智殿は悪くないのです。中途半端な気持ちのまま悩み続けている拙者が 最も悪い存在なのです。

「あの天使は倒したのかっ？」

「はい……その、けーすけ様達がアマデオを倒したみたいなので。アマデオが死んだか気絶したかはわからないのですが……倒れたのと同時に天使は姿を消したのですっ」

「そっか。連中を片付けて、木下の力になりたいって来たんだが……どうやら一足遅かったようだな」

「何はともあれ、今回の騒動の主犯は倒されたのですっ。今日はその……色々後始末とかしなきゃいけないのですが、明日は拙者も皆さんと遊べるのですっ！」

「……そうだな。明日こそは皆で遊ぼう」

「はい！」

……でも、拙者は元氣よく遊べるかわからないのです。

こんなに元氣のいい事を言っても 全然気分は晴れないのです。拙者はずっとあやふやな気持ちに悩んでいるのです。いくら考えても……やっぱりわかりません。

「……ん？ 木下、どうかしたのか？」

「もきゆう？」

「いつもの元氣がないぞ？」

「そ、そうですか？ 後始末が面倒くさいな〜って思っているだけなのです！」

「ふうん。いつも真面目な木下がか？」

「もきゆう……っ」

以外に鋭いのです……明智殿。

確かに拙者、何事にも面倒くさいとかって文句を付けた事はありません。それはきつといい事なんだとは思いますが、こういう場面だと全く武器にならないのです……っ。

「木下、悩みがあるなら言って欲しいぞ。私達だって 友達なんだからな」

「もきゆう、友達……うん、友達ですよね！」



「そつだぞ。まあ……木下の悩みは何となくわかるが……どうせ藤島の事だろっ?」

「け、けーすけ様の事なんかじゃ! ないの……ですけど……っ」

「素直に認めたほうが楽だぞ? お前が藤島の事を見ているのはみんな知っているんだ」

「みみみみんなですかっ!?!」

「おっ? やっぱり藤島絡みかぁ……予想通りの展開だぞっ」

「もきゅう……」

拙者つてそんなに顔に出やすいのかな?

そこまでバレバレになっちゃうくらい、すぐ表情に現れちゃうのでしょうか?

そ、そんな事ないですよっ! 明智殿がたまたま鋭かっただけなのです。それで明智殿が拙者の事をみんなに言っただけ……だと思いでいのですっ。

……何故なのでしょう。急に恥ずかしくなってきたのです……みんなから見ても、拙者はいつもけーすけ様の事を見ている? でもなんで? けーすけ様をずって見ている理由は……?

うっ、自分でもわからない。わかりたくてもわからないのです……っ。

「まあ……なんだ? 助言出来る事は少ないが……とりあえず木下、藤島をどう思っているんだ?」

「どどど、どどどって!？」

「木下を見ていればわかる。きっとそんな悩みなんだろう？」

「……っ」

もきゆう……そんなところまでお見通しなのですか。なんか明智殿が怖いのですっ。

どうしてそんなトコまでわかつちやうのでしょうか。やっぱり拙者、考えている事が表情に出ちゃっているのでしょうか？

「それでどうなんだ？ 大丈夫だ、私は口は堅い方だぞ」

確かに明智殿はお口どころか、考えまで固いような気がするのです……明智殿になら言っても大丈夫なのでしょう。いや、この際打ち明けたほうが楽なのでしょうか？ それに明智殿は拙者よりはそういう事に強そうですし。いっその事……明智殿に話してみるので。

「えと……拙者、どうしたらいいのかわからないのです」

「わからない？」

「けーすけ様の事だっって好きと言えば好きなのです。でも……どういいう好きなのか……っ」

「ふ〜ん、つまり……木下は藤島の事が好きなんだな」

「っ!？」

何故かまた、顔がかあつと熱くなってしまいました。

……あれ？　なんでまた……ドキツと胸を突かれるような感覚もありましたっ。

うう……余計意味がわからないのです。

「まあ、あくまで私の予想だけど……でも木下は迷っていたぞ」

「ま、迷っていたって……？」

「うん、即答でも出来ればそうは思わない。だけど木下は“好き”の意味がわからず迷っていた。それって、家族とは友達に向ける好きとは違う……って事じゃないのか？」

「……………」

家族や友達、もちろん好きです。それを言ったらお姉様の事は尊敬していますし、明智殿や他の皆さんだって好きなのです。そんな事はわかっています。

だけど、けーすけ様に対する好きだけ　意味がわからないのです。

「……………」

……あれ？

こ、これってその……もしかして、けーすけ様の事を……。なんて言えばいいのでしょうか。特別に見てるって事なのでしょう。か…………っ？

“家族や友達として好き”には、他の皆さんは当てはまるのに……何故か、けーすけ様はその枠に収まりきらないのです。もっと仲良くなりたい、ずっと一緒にいたい。

「……っ！」

理由が わかりました。

けーすけ様に対する気持ち。拙者が悩み続けていた理由 わか  
っちゃいました……っ。

気付いた瞬間 何故か鼓動が速くなっていく。かぁと顔も熱  
くなっていく。

もきゆう、こんなの……クラスの人に言ったら笑われるのです。  
拙者はとても単純な事に気づきませんでした……今更それに気付い  
たのです……っ。

だけど……気付けたのです。それだけでも 幸せな気がします  
っ。もちろん、それ以上を望む気持ちのほうが強いですけどね……  
…えへへ、明智殿に相談して正解だったのです。

おかげでもやもやの正体に 気付きました！

「にゅふふ。明智殿、ありがとうございます」

「えっ？ わ、私……まだ木下の答えを聞いていないぞ？」

「さあ？ 内緒なのですっ」

「な、なんだ？ なんで楽しそうなんだ？」

「さっ！ そんな事よりけーすけ様達の所に行きましょう！ この  
船だってアマデーオの魔法で作り出されたものなのです。そう長い  
時間は持たないと思いますし、早く皆さんを連れて下船しましよ  
う！」

そう言って 拙者は船の中へ向かって走りだしました。

「あ、木下！ おいてくなっ！」

にゆふふ、今の拙者はちよつとだけ気分がいいのです。けーすけ様に会って今まで出来なかった分のお話をしたいのですつ。とにかく今拙者は　けーすけ様と一緒にいたいのですつ。

けーすけ様は護衛対象です。でも、上から何も言われていないですし、そういう仲になっちゃってもいい……ですよ？

と、とにかく負けないのです。伊吹さんや千早さんには絶対に負けないのです　！

けーすけ様……今頃なにしているのでしょうか？

とにかく　拙者はけーすけ様に会いたい。会いたくて仕方がないので。

拙者は少しだけ軽やかに歩き、ただずつと　けーすけ様の事を考えていました。

……なのですが、船内にある大部屋に行くと　そこは、

「い、いてえっ！　ちょ、あつかり〜ん痛いよっ！　伊吹も竹刀振り回すなっ！　あと青山さん視線が怖いよオーラが黒いよっ！？」

「うっう、うっさいわね！　これは立派なお仕置きよ、このシスコンっ……」

「罰だからなっ！　あたいを裏切った罰なんだからなっ！」

「先輩……ひどいです。わたしがいるのに……葵とあんな事を……ひどいです、先輩……っ！　そんな先輩にはお仕置き、今夜恥ずか

しい写真撮っちゃいますから……っ!」

え、え〜っど……途中から来た拙者にはサツパリわかりません。誰か教えて欲しいのです。この状況は一体なんなのでしょうか？と〜っても力オスな事になっている気がするのです。修羅場……でしょうか？

「ふにやあ……えへへ、私……今日からお兄ちゃんの恋人……へへっ」

「違うからな葵！ 圭介は葵のものじゃないからなっ!」

「そうだよ……せ、先輩は……わたしのものです……っ!」

「と、とにかく……アレよアレ！ 兄妹なんて認めないわよっ! そんな事になるくらいなら私が圭介と て……ッ!? ば……ばか圭介ええええええっ!」

「ぐはあっ! お、俺が悪いの!? 今叩かれた理由がわからん!」

「あんたのせいなんだからっ! あんたが小さい頃からアレなのが悪いんだからっ!」

「そ、そうですね……先輩、わたしというものがありながら……浮気するのが悪いんです……っ!」

「〜っ! と、とにかく反省しろよなっ!」

「だああちくしょう! 俺は誰のものでもねえ! ああもう痛いし怖いし……不幸だあああああああああああっ!」

すごいのです……。

何が起きているのやらなのですが、すごい事になっています。後から来た明智殿も凄まじい光景を前に啞然としていました。拙者も凄すぎてその……けーすけ様と話すどころか、言葉が全く出てこないのです。一体、何をどうやったらこんな状況が生まれるのでしょうか？

謎なのです……そして、けーすけ様の部屋にあったバ　テスを思い出したのですっ。

アレも確か　ひよんな事でカオスな状況になる話、多いですよ  
ね？

なるほど。今のけーすけ様は観察処分者同然なのですねっ。

「どうする……木下？」

「とりあえず止めましょっ！　船が消滅するのも時間の問題ですし……っ」

……その後、拙者と明智殿は苦労の末　ようやく事態を収拾させる事に成功しました。

なんでもけーすけ様、リミッターを解除する為に葵さんとキスをしたそうなのです。

うむむ、納得なのです……聞いた瞬間拙者も拳に力が入りました。やっぱりけーすけ様はけーすけ様なのです。おバカなシスコンなのです……っ！

でも、それで戦いが終わったのですから　今回は特別に許すのですっ。

結局、後始末に時間もかかってロクに遊べず、拙者にとって

の合宿はこの日で終わってしまいました……折角の夏休みの思い出が台無しなのです……もきう。

でも夏休みはまだまだ続くのです。一回はけーすけ様とお出かけしたいのです。

でもでも、いつ出かけましょう……結局、拙者はその後も数日迷っていました。

「あー！ ぼ、ボク完全に忘れられてるよね！？ ボク完全に空気がよね！？」



第142話 気付いてしまった事、(後書き)

・後書きトークコーナー！

あかり「にゃっはははは！ やった！ 兄貴よりあたいのほつが出番あるぞっ！」

浅間部長「何故だっ！ 何故あかりって名前の妹よりボクのほつが空気なんだ！」

あかり「あたいだって一応ヒロイン格だからな！ 兄貴とは違うんだよっ！」

浅間部長「それを言ったらボクだって部長だい！ 他の男とは違うのだよ！」

あかり「とにかく、今回はあたいほつが出番多かったんだからな！」

浅間部長「うぐぐ………今に見てる、きつといつかボクが主役になるさー！」

圭介「すっげえ醜い争い………」

暮葉「そ、そうですね……っ」

### 第143話 本物の戦争、オタクの戦争

地球のどこか。氷の女王　アリーナ・ウラジミールヴナ・レニナは、質素な軍服の中年男性と話をしていた。彼の名前はニキータ・ヴァシレフスキー。サヴィエト亡命政府の元帥で元々はサヴィエト赤軍の軍人であった。アリーナに忠誠を誓う忠実な部下である。

アリーナは相変わらず冷徹な笑みを浮かべている。

氷の女王に相応しい　シベリアのように冷たい堂々たる姿であった。

「へえ……つまり、アマデオ・ベルサーニまでやられたというわけですね？」

「はい」

「所詮、神様なんてくだらないものを信じる魔術結社崩れの魔術師。藤島圭介ターゲットに敗れる程度の小者だったというわけですね……ふふふっ」

「同志アリーナ、次はどう動きますか？　貴女の出方で作戦を変えなければなりません」

「そうね……もう一人のスパイとあと　そろそろ赤の軍神を送りだそうかしら？」

「も、もうアレを使うのですか？」

「ええ、明日までにスパイが藤島圭介ターゲットを捕獲できなかった場合　8月17日に“風剣ふうけんのシルフ”を送ります。この際……ついでに古

宇坂という街を占領しましょう。あの土地を私達の拠点とするのですよ……ふふふっ」

「……では、ワシは古宇坂攻略作戦の内容でも考えますか」

ヴァシレフスキーは一礼し、アリーナがいる大部屋から立ち去った。

アリーナは一人、ウォツカを飲みながら冷徹な笑みを浮かべていた。

彼女の命令は一週間以内に実行される。

藤島圭介の拘束と エリート魔術師とその部下による、古宇坂市への総攻撃が……。

その頃、8月11日、圭介の部屋……。

はぁ……なんでこうなっちゃったんだろう？

それは8月11日 合宿から帰ってきて数日。暮葉からの外出規制により、相変わらず引きこもりな夏休みを満喫していたのだが……。

「　　」

現在、俺の部屋には青山さんがいる。その時点でもうおかしいと思うが、青山さんは人の部屋の本棚にあったラノベを、ルンルン気分で読んでいたのだ。青山さんってオタだっけ？ まあそれ以前の話だとは思っけどさ。そもそもなんで青山さんが俺の部屋にいるのか。

それには色々深い事情があるのだ……そう、全てはアマデーオ

との戦いが終わった後。

伊吹、あかり、青山さんにシバかれていた俺はあの後、今回の事態を誤魔化すべく暮葉と一緒に苦勞をした結果　あかりと葵、そして浅間部長の洗脳には成功した。

洗脳と言っても、ただテキストな事を言っただけだが。まあ、なんにしても俺達の事が3人にはバレずに済んだのだ。

ところが合宿後、街中で俺は青山さんに捕まっしてしまい　、

『……先輩、先輩って怪しいですよね』

そう　アマデオとの戦いで完全に怪しまれてしまったのだ。

正直ビビったよ、どうしようかと思っただけど……青山さんは優しかった。なんと彼女は詳しい事情を効かないって言ったのである。

まあ……もちろん条件付きではあったが。

んで、その条件というのは　、

「青山さん、いつまでここに居るつもりなんだ？」

「あはは、やですね先輩……わたし達恋人じゃないですかっ？」

「ちげーよ！　いや、形はそうだけど違いますよっ！」

「……先輩、深く追求しちゃってもいいのですか？」

「すみませんっ！　俺は真正銘青山さんの彼氏ですよ！」

「えへへ……せんぱい大好きですっ」

そう、深く追求をしないと云う代わりに　何故か俺は青山さんの彼氏になってしまった。

つまり、俺達は付き合い始めたという事である。なんてこつたい俺、別に青山さんに対して恋愛感情を抱いちゃいないのに。まあ、これを選んだのは俺だから仕方がないが。もちろん青山さんの要求を受け入れたのにはちゃんと理由がある。

青山さんに事情を説明すると言う事は、彼女も伊吹達みたいに、俺達の世界に足を踏み入れるかもしれないと言う事だ。

魔法使いだのサヴィエトだの。あんな危険な事にか弱い青山さんを巻きこみたくはない。

青山さんと付き合うというのは、まさに苦肉の策なのである。だけれどねえ、恋愛感情もない相手と付き合うつて……何をすればいいのやらって感じである。

ちなみに、俺と青山さんが付き合っている事は、暮葉や葵にはまだバレていない

当然伊吹やその他友達にもである。つーか、バレたらイジられそうだし、伊吹や葵あたりにバレたらお仕置きされそうで怖いよ……。女の子と付き合うつて大変だなあ。しかも恋愛感情がないっていうね……。

でもまあ、彼女が出来た事については嬉しいよ。何気に毎日楽しいからな。

「……あの、先輩……っ」

「ああ、なんだ？」

「あ、あの……明日は暇でしょうか？」

「暇っちゃあ暇だけど？」

「……そ、それじゃあ、デートいきましょっつー！」

青山さんが瞳をキラキラと輝かせ、俺の袖をぎゅっと握ってからおねだりしてきた。

ぐは……こりゃ可愛い。青山さんって可愛い方だし。形だけでも青山さんが彼女な俺ってやっぱりリア充なのだろうか。とにかく、今の仕草で一度死にそうになっちまったよ。

「え〜っと、デートだった?」

「はいっ! その……わたし達まだ一度も行ってませんよね……?」

「そうだなあ。恋人なんだからデートくらいは行ったほうがいいよなあ」

「い、行きましよう……っ! そ、それからその……わたし、先輩にならいつされてもいいですよ……?」

「ま、まあ……当日の俺の気分次第な」

え〜っと、青山さんってこんな変態キャラだったっけ? いや、最近の青山さんは葵並にアレなキャラになってきた気がする。青山さん……恋をして変わっちゃったのか。恋が人を変えるって話は本当だったんだね……お兄ちゃんちよつとシヨックですよ。

神様、どうか明日俺がその気になりませんように。どうか、青山さんの大切なアレを奪っちゃうような展開になりませんように。

「えへへ……先輩とデートっ」

「そんなに楽しみか?」

「はいっ! だって……先輩と一緒にいれるんですからっ」

青山さんは乗り気つと。

まあ、デートくらいならしたっていいだろう。

というか、デートすらしないカップルって……そいつは多分、遠距離恋愛をしているか喧嘩中の険悪カップルくらいであろう。何よりいま青山さんを下手に怒らせると、彼女を危険に巻き込むかもしれない事を言わされる羽目になる。それだけは絶対に避けたい。

青山さんを守る為にも、それだけは絶対に　　言っではいけない。

「けど、デートつつつても何処に行けばいいんだ？」

「え、それは……そのっ」

「うーん、どこか行きたい所とかある？」

「は、はい……先輩の行きたい所に行きたいです……っ！」

「……」

う、ぐ……これは困った回答だ。

俺の行きたい所？　明日は8月12日だし、出来る事なら夏コミに行きたいんだ。

だけどねえ。夏コミってオタクの祭典じゃん？　いや、俺もオタクだよ。胸を張ってオタクと言えるくらいアニメも見てるし、エロゲーだって大量に所持している。けどな、夏コミデートって人間としてどうなんだろう？　中にはそれを実行するツワモノもいるらしいが……。

だけど流石に最低だと思っんだ。でもなあ、ま　マジの同人誌欲しいし……。

いやいや、でもコミケは戦場である。果たして、戦場に可愛い可

愛いラブリーマイエンジェル千早たんを連れてっていいの？ いやダメだろ常識的に考えて。

だけどコミケ行きてえし……ああもう！ こうなったらダメ元で誘ってみよう！

「あのさ、青山さん」

「は、はいっ」

「コミケ……って知ってるか？」

「はいっ、え〜っと……同人誌即売会ですよね……？」

おお、流石は青山さん。オタクでブラコンな残念妹が友達で、部長が残念イケメン系キモオタで俺もオタクと周囲はオタだらけ、その上、最近ラノベまで読み始めただけあって知っていたか。

「そうそう、俺それに行きたいんだが……やっぱりデートにそれはダメだよな！」

「いいですよ……？」

「……へ？」

「先輩……そこに行きたいんですよっ？ その、わたしも興味ありますし……っ」

「い、いいの！？」

「……はいっ！先輩、連れてってください……っ！」



マジかよ！ コミケデートOKってどんな彼女だよ！？

青山さんってすげえ、オタク男子に優しい彼女だな。コミケに行けると聞いて、だんだん俺もテンションが上がってきましたの事よ。とにかくありがとう青山さん……っ！

よし、明日の予定は青山さんとコミケデート。そしてま マギ同人誌の入手。

戦争だ。

彼女を楽しませつつ、俺は戦争を行わなければならない。くそっ、なんて厳しい条件下で同人誌争奪戦に参加しなきゃいけないんだ。しかし、そこで本気を出さずに男と言えるか？

戦うぞ……青山さんを楽しませる為に。ま マギ同人誌入手の為に！

……はあ、今思ったけど俺 ある意味最低だな……。

第143話 本物の戦争、オタクの戦争（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「デートでコミケはねえわ」

赤佐「サイテーやな藤島」

圭介「うつせ黙れ！ 青山さんがOK出したんだからいいだろ！」

黒木「普通ホテル直行じゃね？」

赤佐「黒やんもサイテーやな」

圭介「俺より最低じゃねえか？」

赤佐「やっぱデートはエベレスト登山やる！？」

黒木「……コイツは一生彼女出来ねえだろっな」

圭介「……そうかもな」

## 第144話 有明大戦争

諸君、私はコミケが好きだ。諸君、私はコミケが好きだ。諸君、私はコミケが好きだ。

夏コミが好きだ冬コミが好きだかつての春コミも好きだ……なんて、某少佐的な事はどうでもいいとして……今日は8月12日。つまり俺達にとっては決戦の日である。

朝は早起き、当然朝飯なんて家出は食べない。駅のキオスクで十分だ。服装は見た目はカツコいいながら動きやすいものを選び、同人誌を入れる為に大きい鞆を持っていく。ふ、悪いが今回の俺はまマジ同人誌の為に 本気を出しちまうぜ。

「……あれえ？ けーすけ様……出かけるのですかっ」

「ああ！ 俺ら、戦場さ行くだ！」

「もきゅ！？ せ、戦場！？ といつかけーすけ様 ！」

「悪いっ！ 今日は超急ぎの用があるから！ 話は帰ってきたらちやんと聞いてやるから！」

「あつ！ けーすけ様っ！ はあ……今日、けーすけ様と遊ぼうと思っただのに……」

暮葉が何かを呟いているが、全力疾走中の俺には聞きとる事が出来なかった。

とりあえずごめんよ暮葉。帰ってきたら愚痴はいくらでも聞け。あと、ついでに暮葉の為に一冊同人誌を買ってやるのかな。暮葉は確か青エウ好きだったはずだ。これも全部……葵がオタな趣味を

吹き込みやがったせいだがな。あの純粹な暮葉が葵の手で何時の間  
に……ちくしょう！

まあ、それを言ったら俺の彼女だって、俺や葵の影響を受け  
ついに今日、

「よお、青山さんっ」

「……っ？ あっ！ 先輩……っ！」

青山さんが俺を視界に捉えた瞬間 満面の笑みを浮かべ、嬉し  
そうに飛び込んできた。

俺の胸板には青山さんの顔。すりすりと押し付けられるように顔を左  
右に振り、同時に青山さんの甘いいい香りが鼻に入ってきた。さ、  
最高でございます……ごちそうさまでした！ ふう……。

「ぶ、はあ ! えへへ……先輩分補充完了。これで……一時間  
くらいは平気ですっ」

「一時間かよっ！ 燃費悪いなオイ」

「当然ですっ。それほどわたしにとって先輩分は重要なんですよ…  
…っ」

「ったく、コミケはマジで戦場なんだぞ？ あと、俺らみたいなリ  
ア充が行く所でもないし、下手すりゃ襲われっかもしれないんだか  
らな」

「大丈夫です。そういう時は……えと、フェアバーン・システムで  
したっけ？ あかりに教わりました……っ！」

「……………」

あかりの奴、青山さんになんてモノを教えてやがったん。フェアバーン・システムってやつぱり第二次世界大戦中に連合軍が採用した、近接戦闘用の格闘術の事だよな？ 確かに、青山さんでも出来そうな単純な技ばっかだけど……………」

そもそも、青山さんが戦うのが間違いだと思うんだ。そもそも、オタクの祭典だし喧嘩上等な人なんて殆どいないだろう。

仮にいたとしても、青山さんのフェアバーン・システムは不安だ。だから俺の素人喧嘩術で相手と戦ってやろうじゃないか。まあ、何度も言うが俺らが行く場所はコミケ会場。そんな荒くれ者が行くような場所ではないだろう。ハハハ、多分大丈夫、

……………」

「君かわうーねえ？」

「ねえねえ、そんな男放っておいてさあ、俺らと遊びに行かねえ？」

全然大丈夫じゃねえじゃん……………」

それは東京都にある新木場駅での事。俺と青山さんはコミケ会場へ向かうべく、京葉線からりんかい線に乗り換えようとしていた。だが……………アホだ。アホに絡まれてしまった。これは多分青山さんがあまりにも可愛いから、アホが嫉妬でもしたんだろう。はあ……………相手にすんのも面倒くさい。

「せ、先輩……………っ！ さささ、下がって……………くださいっ！」

うお！ 青山さんが構えてる。あかりから教わったフェアバーン・システムを、コイツらで試そうとしているのだろう。だけど……………や

つぱり不安だ。青山さん弱そうなんだもん。相手の不良のあまりの可愛さに爆笑してるじゃねえかよ。仕方ない やつぱりここは俺の素人喧嘩術で、

「はいはいお二人とも。まあなんだ？ そのトイレで話そうじゃないか？」

「あ？ なんだテメエ？」

「俺らテメエに用ないんだけど？ 殺されなくなかったら帰ってくれね？」

「いいからいいから！ ほら、さっさと行きましょう。ねっ？」

「はあ！？ なんだコイツ生意気じゃねえ？」

「ちょくムカついた！ テメエぜってえー生きて帰さねえ！」

はあ……面倒くさい。コイツらのせいで遅れたらどうすんのよ。コミケは徹夜NGだから早朝にならべなかつたら、ま マギ同人誌入手は絶望的なんだぞ？

つと言っわけで、さっさと騒動を終わらせる為に 俺が不良と戦った。結果は別に報告するほどの事でもないだろう。街のヤンキー2人程度で苦労はしないですよ。魔法使いに襲われたりとデンジャラスな日常を過ごしているんだ。そんな事もあって 俺はいつの間にか強くなっていた。

「ぐ、はあ ! う、そ……三発しか……喰らってないのに……？」

「ひ、ひい！ ば……バケモノだあ……っ！ あの、これで勘弁してくださいえーっ！」

不良の一人は俺に財布を渡し、床に倒れていたもう一人を引きずって逃げてしまった。

……えーつと、とりあえずこの財布どうしよう？ やっぱり、人の財布はちゃんと届けないとダメですよねえ。はあ……結局この騒動のせいで、飛び込み乗車をする羽目になった。

しかも今は夏ですよ？ 黙っていても汗ばむこの季節に、走ってぎゅうぎゅう詰め電車に飛び込んだのである。暑い上に汗だくな事この上ナシである。

はあ……朝っぱらからこれとは、今年のコミケは先が思いやられるよ。

それから数十分後、俺と青山さんは遂に 東京国際展示場へ足を踏み込んだ。

もう始発電車で来たんだけど……なんなんだこの人ごみは？ ひよつとしてコイツら徹夜組じゃねえだろうな。ルールを守った結果がこれだよ、ちくしょう徹夜組多すぎる。果たして無事にま マギ同人誌を手に入れる事が出来るんだろうか。

「す、すごい人数……ですなっ」

「始発列車に乗ってこれかあ……やっぱり上級者はすげえな」

「その……あれですよ、暇人……なんですよね？」

「まあ、ここに来るって事は殆ど暇人なんじゃないのか？」

俺だつて正直暇人だからな。外出規制がかけられてロクに外出が出来ん……そんな日常が続いていい加減引きこもり生活にも飽きていた頃だ。そんな時にコミケに来たんだ、当然たとえ猛暑でも人が多くても俺のテンションは最高に高かった。

……だけど、ま マギ入手できるべか？ 流石に人数多すぎだろ……。

っと思っていたその時、ピンポンパンポン。このありがちな音は間違いなくアレだ。

『おまたせいたしました』

開戦。

そう 今、まさに戦争が始まったのである。

拍手の音で放送の音が掻き消されているが、まあ関係ない……そんな事より、2011年有明大戦争は今まさに始まった！

「青山さん」

「は、はい……っ」

「ここはマジで危険だ。迷子になるかもしれない……だから俺から離れるなっ！」

「……っ！ は、はい……っ」

借りた猫のように静かになり、顔もすっかり紅潮していた。そんな状態の青山さんは静かに俯いてしまった。え……俺、何か恥ずかしいセリフ言っただけ？

ってかそんな話はどうでもいい。それより、早く飛びこまねえとま マギが！



……その後も、俺は青山さんの手を引きつつ、人ごみを移動し狙っているサークルの場所へ迅速かつ慎重に向かった。彼女連れだが……それでも辛うじて到着はしたが。

「せ、先輩……大変です、あれ……っ！」

「……っ！ さ、最後の一冊!？」

ウソだろ。今年のコミケはレベルが高え……ッ！

俺は始発組だったんだぞ。それなのにもうま マギねえのかよ。な は完売ならぬま か完売が現実のものになっちまうのか。ちくしょう、なら最後を飾るのは俺だ。たとえ死んでもこの一冊は誰にだって譲らねえぞ !

「……ッ!？」

同時に 触れやがった？

一冊の本に2人の手が同時に触れた。これはまずい。いや、ある程度は予想していたがまさか本当にこんな事になっちまうとは。だが、この程度で諦めるほど 俺は甘くなんかねえ!

「ここは俺も譲れないね……途中でリタイアした友達の為にもね  
」

「……いいぜ、てめえがまだま マギ同人誌を狙うってなら ま  
ずはそのふざけた幻想をぶち殺す!」

「 あれ、圭介?」

「……えっ、お……お前まさか重原?」

意外な場所……でもないか。去年はコイツや大吾と一緒に来たしな。

俺と同時に同人誌を手に触れたのは 重原広敏その人であった。偶然の遭遇である。コイツら……今年もコミケに来ていたのか！

## 第144話 有明大戦争（後書き）

・後書きトークコーナー

伊吹「まゝた私ら出番のなさそうな話が始まったわね」

凧紗「そうだな……っ、コミケっておもしろいのか？」

伊吹「圭介は暑いし、人が多いし、徹夜組がうざいとか言ってたわよ？」

凧紗「な、なにが面白いんだろう……？」

伊吹「圭介の世界は私もあんまりわかんないわよ……っ」

その頃。

葵「でねでね！ 今年は葵二日目を狙おうと思つんですよー！」

純奈「私は3日目まで全部行くよ！ 百合百合な同人誌いっぱい買  
うんだ！」

世の中、よくわからない。

## 第145話 友達と彼女、どっちを優先すべき？

「はあ！？ サークル参加！？」

8月12日の東京国際展示場。ここでは夏コミが開催され、俺は青山さんと2人でこの戦場までやってきたのだ。しかし、俺らは始発組だったにも関わらず、ま マギ同人誌は既に最後の一冊となっていたんだ。全く、予想以上に徹夜組が多くてビビったよ。

なんとしても同人誌を手に入れるべく、迅速かつ慎重に行動した結果 俺達はついに最後の一冊に手を触れる事が出来た。しかし、俺は誰かと同時にその一冊に触れたのだ。最後の一冊を賭けた戦いが始まる と思いきや、同時に最後の一冊に手を触れたのは、我が友の重原広敏であった。

どうやら重原は大吾と一緒に来たらしく、その大吾は家現在トイレ中らしいが……。

「そうなんだよねえ。大吾ってアレでもサークルの一員らしいから。俺は大吾の手伝い&ま マギ同人誌入手の為に頑張ってたんだよ」

「だ、大吾がサークルの一員ねえ……」

以外過ぎる事実だな。マジで言ってるのかよ、あの大吾がサークルに入ってたって？

そう言えば、アイツとは最近連絡が取れなかったな。唯一大吾と連絡がついた日なんて「僕は今聖戦の為に忙しいんでね！ ごめんね圭介、それじゃあいい夏休みを満喫してね！」と、なにやらわけのわからん事を口にしていた。アイツ……あの言葉は夏コミ参加の為だったのか。

「ん？ けど、お前はお手伝いとして誘われたんだろ？」

「まあね」

「俺もお前らの友達で、同じ趣味を持つ同志なハズなんだけど……  
なんでお前だけ？」

「ああ、それ俺と大吾の配慮」

「えっ？ ちょっと待てこら、どついう事なんだよ？」

すると、重原は突然俺と青山さんを指差してきた。

「だって圭介はリア充だからねえ。圭介争奪戦を面白くする為にも、  
圭介を誘うのは悪いかな？なんて思ったんだよ」

「はあ！？ ふっざけんな！ 非リア充の俺は室内で腐ってたんだ  
ぞちくしょう！」

「あれ、そうなの？」

なにこの素で驚いているマジ反応。俺って一体重原や大吾からは、  
どんな目で見られちゃってんだろつか。まさか、ホントにリア充だ  
とでも思ってたんの？

今は形だけリア充なのは確かだけどさ……あ、そういえば青山さ  
んは？

「……せ、先輩……わたし達の関係は嘘……だったんですかっ？」

しまった、これはまずい。非常にまずい事が発生したぞ。さっき

の俺の非リア充宣言のせいかな青山さんが……か、悲しんでいやがる。ていうか青山さん、リア充の意味知ってたんだ。このままだと青山さんに深い事情を追究されてしまう。なんとしてでもそれを避けなければ！

「ちょ、待て青山さん！ これはそのアレだ……すまん、今は話を合わせてくれ！」

「……えっ？ は、はい……っ」

どうしよう。一応頷いてはくれたけど、青山さんがすっげえ悲しそうだ……そこまで俺の事が好きだったなんて。もしかして、今まで邪険に扱い過ぎたかな。いやいや、だけど本気で好き合っているカップルではないし、色々な意味で過ちは犯したくない。だからまあ、これでいいとは思ってたが……ああもうどうしよう、恋愛って難しすぎるぞ。

「ところで圭介、その子って圭介の部活の後輩さんだよな？」

「ああ、そうだよ」

「……あ、あの……先輩のお友達の重原先輩……ですよな？」

「おお、俺の名前覚えていてくれたんだね」

「はい、先輩が話してくれましたので……っ」

直接話す事ってのは少ないが、一応お互い顔は知っている。それが青山さんと重原のなんとも微妙な関係である。っで、青山さんには何度かコイツの話をした事がある。だからだろう、青山さんが重

原の名前を覚えていたのは。

重原は唯一人に話せる友達だからな。大吾はちよつと……アレだな。完全二次元派つてのを隠さないと引かれるヤツであろう。

それでもアイツ、何故か付き合いはいいからか、そこそこ男女問わずに人気らしいが。

……あの完全二次元派が人気とは、最初知った時は烏龍茶吹いたぜ。

「はは、そうだったんだ。僕は重原広敏、改めてよろしくね」

「は、はい……！ 青山千早です……その……け、圭介先輩とお付き（ry）」

俺は全てを言おうとした青山さんの口を塞いだ。言わせてたまるか、重原なんか知られたら絶対にいじられるだろうが。青山さんはふがふがと手の中で暴れている。

でも……そんなの関係ねえ。とりあえず重原専用の紹介をしてやるつ。

「まあ、なんだ？ 仲のいい後輩ってヤツだ」

「へえ〜？ 仲のいい後輩ねえ……実は付き合ってるんじゃないのかい？」

「……っ！ 付き合っちゃいねえぞ？」

「その割にはさっきまで、随分といちゃらぶしていたような気がするけどね」

「してねえって。それよりお前、大吾の所手伝わなくてもいいのか

「？」

「あ、そうだったね。サークルの人に無理言っただけだしてきたからね、そろそろ俺も戻った方がいいのかな？」

「ああ……あつ、そうだ重原。ホントにま マギ貰っちゃっていいのか？」

俺は重原に最終確認的な事をしてみる。そう さっきの同人誌あの後重原と話し合った結果、なんと同人誌は俺のものになったのだ。だが重原はそれが欲しいが為にサークルの人に無理を言い、ここまでやって来たんだ。その努力を水の泡に……流石にそれはちよつと可哀想な気がするぞ。やっぱりここは友達として 譲ってやるべきなんじゃ？

……と思つたが、重原はニツコリと爽やかな笑顔を浮かべて、  
「いいんだよ。大吾に乗せられて圭介を夏コミに誘わなかったし、圭介が暇している事にも気付かないでね……」

「別にそれはいいんだけどよ、つーかお前は全然悪くないだろ？」

悪いのは大吾。まあ、別に怒っちゃいけないけどさ……。でもねえ、勝手にリア充って決めつるなよ。まあ、今は形だけでもそうだし、文句を言える立場じゃないって事も自覚はしているけど……。

「いいんだって。実は俺らの所もま マギ売ってたんだよね。俺はサークルを手伝って、そつちのほうは持っているんだ」

「マジ!?!」



「それも欲しかったんだけどねえ、そのうちお互い持ってる同人誌を貸し合う……って話でどうだい？」

「ち、ちなみにお前らの所の同人誌は……？」

「ここが始発組でギリギリだったんだ。多分、向こうも完売していると思うよ」

ですよねえ……はあ、ま マギどんだけ人気なんだよ。な はの ビックリだ、まさかここまでま マギが人気だったとは。全くわけがわからないよ。

「じゃあ、学校始まったら貸し合おうぜ」

「そうだね。よし、男の約束だよ」

「ああ、約束だ」

ガシッ、と俺と重原は腕を組んだ。

ぐっふふふ……やっぱり持つべきものは友達だな。交渉成立である。こうして俺は当初の予定よりも充実した結果を得る事に成功。今年の有明大戦争は友軍のおかげで 大勝利だ。

「それじゃ、俺はそろそろホントに行くね」

「おう、重原もサークルのほう頑張れよ！」

こうして 俺は大切な友と別れを告げたのだ。

ふう……終わった。さて、後はテキストにコミケ会場を回るとし

よう。目的は達成されたんだから後はお遊びタイムだけ。青山さんも興味があるって言っていたし、去年大吾達と来た時もドタバタだったからなあ。今年はじっくり会場を回るとしよう。

それから数十分後。俺達は話しあいながら外に来ていた。

理由は簡単。青山さんがトイレに行きたいからである。だが、夏コミとトイレと言うのは非常に混雑しているものだ。なので、用を足すまでに時間がかかってしまうのだが、青山さんがそこまで長時間我慢できるわけがない。そこで俺は外の仮設トイレに目を付けたんだ。

去年の大吾情報なんだが、10時を過ぎると仮設トイレは比較的空くらい。その話を信じて実際に言ってみただが……正解だったな。確かに中のトイレよりは人が少ない。

「よかったな青山さん。思ったたよりも人が少ないぞ」

「……そうですねっ」

「あ、青山さん……？ まだ怒ってるんでせう？」

「……先輩、わたしのこと……ただの後輩って……っ」

「ちょ！ だからアレは違うんですよ！ 色々と事情があったんだよー」

「素直に恋人って……言えば良かったじゃないですかっ」

「それだと後ほど俺の身に危険が……っ」

そう言うわけにもいかないのが現実。アイツらにバレたら大変だ。すぐに暮葉達にも情報が届いて俺は下手したら 葵あたりにシバかれるかもしれない。

絶対に嫌なんだよ。ちょっとした事で制裁を受けるのが！

「うう……せ、先輩。その……話は後にしてその……行つてきます  
っ」

「え？ お、おう。気を付けろよ？」

青山さんは相当近いようで、少し身体を震わせていた。よかつたあ外来て、中のトイレだったら青山さんは漏らしていたかもしれない。

ただどうしようかな。早速自己保身のためにとつた行動が、青山さんのご機嫌をかなり損ねてしまったよ。青山さんがトイレから戻ってきたら、ちゃんと事情を説明しねえとな。

「あ、圭介じゃないかい」

「ん？」

不意に横から声をかけられた。

男の声だな。誰かと思つて左を向くと 爽やかだが大柄な男が佇んでいた。

「やあ」

「あれ、重原じゃねえか？」

そこに立っていたのは我が友

重原広敏であった。

さつき約束をして別れた、現在サークルお手伝い中のヤツである。ただ何故？ 重原はサークルの手伝いに戻ったハズなのに。

「トイレで会うだなんて、これまた奇遇だね」

「ああ、ただとお前……サークルの仕事は？」

「大吾の次は俺だよ。俺もトイレがしなくなっただけ。時間帯的にこのトイレが好んでいるだろうからこっちに来たんだ。今済ませて帰ろうとした所だよ」

「そっかあ」

「あ、そうだ。圭介……ちょっと話があるんだけどいいかな？」

「えっ、話？」

なんなんだ、こんな時に？

「つい、かまらずに展開だぞ。これって青山さんの機嫌を更に損ねるフラグでは？」

「うん、ちょっと来てくれるかな？」

「いや、だけど青山さんが……」

「大丈夫。彼女には俺がメールで伝えておくから」

「えっ！？ 何時の間にメアド交換したのか！？」

「まあね、だから大丈夫だよ。すっごい大事な話だから……お願い

「！」

あの重原が素直に頭を下げるだなんて……よっぽど大事な話らしいな。だけど青山さんの事もあるから俺はつかつに動けんし。困ったな……どうすりゃいいんだろ。

っと、俺が悩んでいたその時 重原が俺の右手を取って、

「うわっ！ ちょ、重原！」

「ごめん圭介！ ちゃんと彼女さんには事情をメールで伝えておくから！」

「俺の意志は無視ですか！？ スルーですか！？」

あ、あれ？ コイツってこんな無理やりなヤツだったっけ？

まあいいや……それより一体なんの話なんだよ。

一体俺は重原からどんな話をされるんだ？

第145話 友達と彼女、どっちを優先すべき？（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「はぁ……ちくしょう、指いてえ」

伊吹「どうしたのよ圭介？」

圭介「格ゲーやり過ぎたんだ。俺の体質でも治りきらねえ……」

伊吹「い、一体どれだけ長い時間プレイしてたのよ!?!」

圭介「いや、軽く5〜6時間？ しかも強いヤツばかり相手にしてな」

伊吹「し、真性の馬鹿だわ……っ!」

第146話 ……あれ？

「はぁ……………」

わたし 青山千早はお手洗いから出て、先輩に抱きつこうと思っただけ……………いない。

先輩、どこにいつちゃったのかな。やっぱり先輩はわたしの事……………でも、完全に嫌っているって素振りは見せないし。中途半端ですよ……………先輩っ。先輩はいじわるです。わたしの心を揺さぶるだけ揺さぶらせて、いつもいつもわたしにカッコいい姿を見せて……………わたしは先輩がずっと好きです。中学の頃から片想いしていました。そして今 やつとわたしはただの先輩後輩の関係ではなく、彼氏彼女の関係になれた。だけど、先輩はわたしがお手洗いに行っている間に消えてしまった。もちろんメールも一件もありません。

「……………先輩っ、どこ……………ですか？」

先輩……………。

大好きな先輩……………。

もしかして……………嫌われちゃったのかな？

……………そう、ですよね……………わたしは殆ど無理やり先輩の彼女になった。先輩の数少ない弱みを握れて嬉しくって……………でも、冷静になつて考えてみればわたし……………最低だよな。

だけど、そんなわたしに今まで怒りもしなかった先輩。優しすぎですよ……………だからこういう事があると余計に悲しいです。好きに……………させないでくださいよっ。

わたしはこれからどうすれば……………。

「う、ぐぁ……………っ!」

「…………え…………っ?」

突然、左下から男の人のうめき声が聞こえた。とつても苦しそうな声だった。咄嗟にわたしは首を動かし下を向くと、顔を見た事がある人が 苦しそうな表情を浮かべていた。

「…………え、えと…………重原先輩…………ですよね?」

「き、君は確か青山さん…………早く、圭介を連れて逃げてくれ…………っ!」

どうして? なんで重原先輩がこんなにボロボロなの?

先輩はいないし、重原先輩はボロボロだし、しかも逃げてつて…もしかして、またなにか大変な事が起こったの? わからないよ……………どういう事なのかさっぱりわからない。

でも、とりあえずその…………せ、先輩の名前を出しましたし、先輩の事を教えないとっ。

「あ、あの…………その…………先輩ならわたしがお手洗いに行っている間に…………」

「い、いなくなったのかい…………?」

「はい…………っ」

「ちくしょう…………まさか、もうヤツにやられたのかもしれない。行かなければ…………っ!」

「あ…………っ! し、重原先輩…………っ!」



重原先輩は傷だらけの体を引きずって、走ってこの場から立ち去ってしまった。

「ヤツってなんなのでしょうか。そもそも、重原先輩はどうしてあんなにひどい怪我をしているのでしょうか？ 先輩がやられたってどういう意味……？」

「もしかし、先輩はわたしを置いて帰ったのではなく、無理やり連れ去られた……？」

「……とにかく、重原先輩について行こう。何かわかるかもしれないよ。」

その頃、人気のない会場裏。

俺 藤島圭介は無理やり重原に引つ張られ、人気のない場所まで来てしまった。何が入っているのかまではわからないが、壁際にはダンボールが山積みされている。誰も乗っていないトラックが3台ほど並んで駐車してある。どうやら……ここは会場の裏らしいな。

「ったく、いつもに増してほんつとに無理やりだな」

「ごめんね圭介。どうしても話しておかなければならない話だからね」

「わあったよ付き合うよ。けど、青山さんに悪いから手短かに頼むぞ」

「大丈夫だよ。抵抗がなければすぐに済むから」

「はあ？」

抵抗って、何の話をしているんだコイツ？

言っとくが、俺は化学苦手だからな。だけど重原は化学得意だった気がするし、一体なんでこんな場所で化学の話をするんだよ。しかも、それが青山さんに聞かれたくない話なのか？

「……んで、結局お前の話ってなんなんだ？」

「おつといけない。話を忘れる所だったよ……あれ？ あの子青山さんじゃないかい？」

「えっ？」

青山さん？ ひょっとして青山さん、俺らの後を追ってきたっのか？

でもトイレをしていた割には速過ぎだし。まあ、今の状況を簡単に説明すると俺は青山さんを心配させているわけだ。突然俺がトイレから離れる姿を見て、彼女は不安に思ったのかもしれない。

俺は青山さんの姿を確認するべく、後ろを向いてみると、

「が、はあー！」

突然、かなり強い衝撃を受けた。

ちくしょう……なんだ？ 一体何が起こった……肺の中の空気が一気に排出され、叫ぶ事も呼吸する事もできねえ。おまけに背中が滅茶苦茶痛え、主に内面が痛えよ……ひょっとして、俺は背中のご真ん中あたりをぶん殴られたのか？

俺は苦しそくに胸部を押さえ、重原がいる後ろを振り向いた。

確かにそこには重原がいたが いつもの重原ではない。何故か拳を構え、目も鋭く口元が奇妙に歪んでいた。まるで 重原だけ

ど重原じゃないみたいだ。

「しげ……はら……っ！」

「チツ、この大男の力を持つてしても一撃では無理か。よく観察していたとは言えこの耐久力には流石の俺もビックリだよ」

よく観察……？

どういう事だ、よく観察って……まるで俺の事を見張っているみたいじゃねえか。

重原とそんなにしょっちゅう一緒にいたか、俺？

「あれだけ丈夫なら接近戦を仕掛けるのは危険か。なら　っ！」

すると、重原はポケットの中から二つの木製の棒を取り出した。それはバチ、太鼓を叩く為に使う道具である。小学生の頃、よく授業中にふざけて音楽室にある太鼓を叩いていたが、まさにその時手に持っていたのと同じバチを、重原は両手にしっかりと握っていた。一体……何をするつもりだ。いきなり殴りつけてきて……アレで俺を叩くつもりか？

「Father Son Holy spirit Amen」  
「御父と御子と精霊の御名によりてアーメン」

重原が発した意味不明な言葉。少なくとも日本語でも中国語でもない。英語のような気がするが英語赤点ギリギリの俺に、そんなものが上手く聞きとれるわけがない。結局、重原が何を言っていたのかはサッパリわからなかった。

重原はバチを頭上で叩く。

その動作自体に変なものはなく、意味もわからず呆然としていた

「ッ！」

瞬間、白く輝く鋭い何かは弓矢のように飛んできた。反射的に俺はそれを避けたが、謎の白い物体は俺の後ろにあったトラックに命中し、胸にも響く轟音が鳴り響いた。トラックは運転席の部分が完全に破壊されており、自走も不可能な状態になっていた。

金属片やタイヤなど、衝撃でぶっ飛んだトラックの残骸が降りかかる。それに当たるだけでも重傷は確実であろう。俺は身体を振ったり時には跳躍したりなど、あらゆる手段を使ってトラックの残骸を避けてやった。もちろん避けられないものもあったが、それについては両腕で顔面を守った。

避けられない物は大体小さな破片であったため、それで十分防げたのだ。それから残骸が飛んで来なくなった事を確認し、俺は再び重原を見つめる。

「ふん、中々面白いじゃないかい圭介。並の動体視力じゃ避けられないスピードで鉄を射出したハズだったんだけどね。どうやら……場数を踏んで想像以上に喧嘩慣れしてしまったようだね」

「て、鉄……？」

鉄をぶっ飛ばしただと？　じゃあ、さっきの白く輝いていた物体は鉄だったのか？

けどなんで鉄があったんだよ。重原は太鼓のバチしか持っていないだろ。じゃああのトラックを破壊した鉄はどっから　　と考え事をしていたその時。

……俺は気付いてしまった。

今の鉄は隠していたものではない。あのバチを叩いた後にいきなり現れたんだ。ひよっとするとあの鉄は作り出したものなのかもし

れない。鉄を飛ばす時もそう。冷静に考えてみれば鉄をあんな高速で投げ飛ばせるヤツなんかいない。いくら重原が武術の達人だとしても、限度があるだろ。

だとしたら答えは簡単　アレは魔法だ。重原は魔法を使っってきたやつだ。

俺を攻撃するのに魔法を使う奴……ちくしょう、重原はアレなのかよ。

「今のは魔法か？　つーことはてめえ……まさかサヴィエトの!？」

「よく気付いたね。そうだよ。俺、スパイやってたんだけど何か文句でも？」

「スパイ……重原が……アイツらの？」

「直接君には恨みもないし、何かと君と話すのは楽しかった。ここで友達としての関係が終わるのは残念だけど……俺も上には逆らえないし、悪いけどここで狩られてくれないかな？」

言い終わると、重原は再びバチを叩き合わせた。

「まずい。」

さっきの攻撃が来る。俺は攻撃を避ける為に衝動的に走りだし……と、言うより得体の知れない魔法への恐怖心から、思わずこの場から逃げ出してしまった。まったく、これなら白藤みたいに鉄球ぶっ飛ばしてくるほうがまだマシだ。重原の攻撃はホントに意味がわからねえ。

アレは一体どういう魔法なんだよ。こ、こついう時は……そうだ、魔法に関する知識で頼れそうなヤツは暮葉しかない。暮葉なら何かヒントをくれるかもしれない。

直感的にそう思った俺は走りながら携帯電話を掴んだ。いつ、あ

の鉄に背中を刺されるかという状況は無駄にプレッシャーを感じる。  
指が勝手に震えやがる……胸も張り裂けそうだ。

怖い。

単純に飛び道具が怖い。だってトラック壊れるんだぜ？ あんな  
の喰らったら俺の場合死にはしなくても重傷は確定だろう。

それでも俺は、あの魔法使いに勝つヒントを得るべく　　暮葉に  
電話を掛けたのだった。

第146話……あれ？（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「これ、もうコミケ関係ないんじゃない？」

黒木「確かに……」

大吾「大体なんでオタクネタで僕の出番がないの！？ 作者ア！  
僕の事ちゃんと覚えてんのか！？」

黒木「心配すんな。俺なんて最近全然登場してねえよ……」

赤佐「まあ、まだ後書きで出番があるだけマシやな」

大林「僕……後書きでも滅多に出番ないんだけど」

大吾「僕は学校始まるまで出番がないのかあああああつ！」

## 第147話 黒魔術

8月21日、東京国際展示場。本来なら青山さんと2人でコミケデート。今頃夏コミを2人でエンジョイしている……ハズなんだが、何故か俺は魔法使いから逃げていた。しかも、その魔法使いつてのが俺の友達の重原であった。重原のヤツ……今まで俺らを騙していたのかよ。

そう思うと腹が立ってくるが、今はそれどころではない。そんなことより、暮葉に連絡して一発逆転のヒントを教えてもらわねえと。震える手でボタンを押し、どうにか電話を掛ける事には成功した。

『はいもしもし！ けーすけ様ですか！？ 今どちらに 』

「暮葉！ そっちは無事か うわっ！」

暮葉も魔法使いに襲われている可能性があるのですが、俺は無事を確認しようとするが、途中で重原の攻撃を受けて思わず転びそうになっってしまった。なんとか態勢は立て直したものの、後ろを見る青いプラスチック製のごみ箱は、文字通り木端微塵になっていた。

『けーすけ様……まさか、追われているのですか！？ 』

「そうだよ、今逃げるコマンド選択して逃走中だよ！」

『だ、大丈夫なのですか！？ 場所は！？ 』

「場所つて、古宇坂から東京まで時間がかかるだろ！」

『で、ですけど……っ 』



「俺の心配はいいから！ それより一発逆転のヒントをくださいお願いします！」

『わ、わかりました！ その、相手は誰ですか！？』

一瞬、俺は相手の情報を暮葉に伝えるのを躊躇った。

だってアイツは重原だぜ。今までずっと友達だったんだ。今は間違いない敵だけど、だからってそれを暮葉に伝えるのは いや、言わなきゃダメだよな。

真実は伝えるモンだ。それにこのまま重原を野放しにするのは  
まずい！

「相手は重原だ！」

『し、重原さんですか！？』

「アイツ成りすましのスパイだったんだよ！ んで、バチを叩いたら鉄が飛んできて……もう何が何だかさッパリわからねえよ！」

『……た、多分それはレムリアのほうじゃなくて、こっちの世界の魔法なのです』

「ああ！？ こっちの世界の！？ アマデーオと同じ近代西洋なんとかってヤツか！？」

『それとは違います！ 多分、重原さんが使う魔法はブードゥー教の魔法なのです！』

「ぶ、ぶーどうー教？ よくわかんねえけど聞いた事はあるよ。確

かにこつちの世界の宗教だ。けどお前……こつちの世界の事なんてわかるのか!？」

暮葉は確かに魔法に関する知識は豊富だ。一応魔法少女だからなだが、こつちの世界の魔法となると話は別である。いくら異世界の魔法に詳しくても　こつちの魔法や宗教には疎いハズだ。

ちくしょう、こりゃあ期待できないかもしれない。でも、知らないとしたら……なんで暮葉は重原の使う魔法がブードゥー教のものだつてわかつたんだ？

『以前はサツパリだったのですが、アマデオの一件でこちらの世界の知識もカバーしたほうがいいのかなって思ったのです。本隊から資料を取り寄せたので、少しは力になれると思うのです!』

「だ、だつたら教えてくれ!　その魔法って一体どういうヤツなんだ　うおわっ!？」

またしても、重原が放った鉄が何かに命中した。今度は電柱、一部が粉々にされたコンクリートの電柱は、樵に伐採された樹木のように倒れてしまった。千切れた電線からはバチバチと火花がド派手に飛び散っていた。これ……下手したら停電になるんじゃないか？

『だ、大丈夫ですかけーすけ様っ!？』

「俺は大丈夫だから!　ちゃんとお土産買って帰るから教えてくださいっ!」

『は、はいっ!　えっと、多分重原さんの使う魔法はロアの力を借りた魔法なのです』

「ろ、ロア!？」

『え〜っと……た、多分精霊の事なのです！ それでえ〜っと鉄の精霊は』

暮葉、絶対資料を読みながら喋っているだろ……言葉に出ているぞ。きつと暮葉は今頃焦りながらページをめくっているに違いない。その姿を想像すると……おお、可愛い。アセアセと本を慌てて開く女の子って、何か知らんが可愛くてグツとくるよね。

まあ、今はそんな事を考えている場合ではないが。

『あ、いました！ オグン<sup>Ogoun</sup>という、火、鉄、政治、戦争を司る神様がブードゥー教にはいるらしいのです!』

「じゃ、じゃあ重原がぶつ飛ばしてくる鉄って!？」

『多分、オグンの力を借りて応用したものだと思います。太鼓のバチは儀式のために必要な道具らしいのです』

「そ、そうか!」

とりあえず、重原がどういう魔法を使うのかはわかったが……これ、一発逆転のヒントにはなっていないんじゃないか？ まあ、でも相手の魔法の情報があるだけマシか。

『オグンは鉄以外にも、火を司っています！ 炎系の魔法を使ってくる可能性もあるので注意してください!』

「お、おう！ それで俺はどうすりゃいいんだ!？」

『難しいとは思つのですが、バチさえ失えば重原さんは多分、魔法を使えなくなると思つのです』

「そつからは俺の実力次第つて事か？」

『はい！ でも……重原さんは確か武道家で』

「な、なんとかなるだろ？ 俺の体質を忘れたのかよ。重原の攻撃くらい何発でも耐えてやる！」

『無茶なのですけーすけ様っ！ 五分五分の殴り合いに持ち込むには、まず重原さんの魔法を封じなきゃいけない』

聞いている暇もないので、俺は携帯電話の電源を切った。ありがとう暮葉、おかげで重原との戦い方が少しだけわかったような気がするよ。

勝てるかどうかはわからんが……やれるだけやってやる。生憎、こんな所で捕まって暮葉や青山さんを泣かせる気はねえんだ。何が何でも重原に勝って帰ってやる！

……それにしてもブードゥー教つて。サヴィエトの思想は宗教否定だろ？ それなのにアマデオといい重原といい、なんで宗教絡んでる魔法を使ってくるんだろ。もしかして、この世界の場合は魔法自体が元々宗教に絡むようなモンなのか？

つたく、俺の馬鹿な頭じゃサツパリわからねえ……ッ！

「……げっ！ 行き止まりかよ……ッ！」

目の前には海。気付けば俺達は東京国際展示場を出ていたようで、展示場のすぐ近くにある港のような所に来ていた。車が並んでいたり、船が繫留されてはいるものの、人の気配は殆どないので暴れて

も問題はないだろう。だが、考えようによっちゃあ助けは来ないって事だよな……。

……ええい。魔法使いと戦った。ただでさえ最近魔法使いのせいで、わけのわからん事件が起こっていて、実はオカルトって実在するのではと言われてんだ。これ以上、そんなものを世間に広めるわけにはいかない。だから　警察とかの助けなんかはいらねえ！

「残念だったね……もう逃げ場はないよ？」

「くそっ……」

どうする、何か武器になるようなものはないか？　一応ここは港だ、それなりに使えそうなものはあると言えばあるが……正直、飛び道具には無力そんなものばかりである。

だからって拳一つで突撃すんのは危険だろう。ちくしょう、どうすりゃいいんだ？

「圭介！」

「あ？」

なんだ、重原……の声を聞いたけど、重原のヤツが叫ぶわけがないよな。重原は今もバチを構えて俺を攻撃しようとしているんだ。そんなヤツが俺の名前を呼び、叫ぶはずがない。

じゃあ今の声は　。

「圭介っ！　こっちだ！」

「なんだ……えっ？　う、そ……なんだこれ……っ？　どういう事だよ！？」

あまりにもしつこいので振り向くと、そこには　ボロボロの重原が佇んでいた。

重原が2人つてどういう事だ？

しかも片方はボロボロじゃねえか。なんでアイツはあんなに傷ついているんだ？

「チツ！」

……つと、その時。

片方の重原がバチを叩き合わせ、ボロボロの重原に向かって鉄を放った。

びゅん！　と、鉄が風を切りボロボロの重原を狙う。ボロボロの重原はかなりギリギリの所でその攻撃を回避した。しかし、その際にバランスを崩したのか、薄汚い地面に倒れ込んでしまった。

片方の　魔法使いの重原は不敵な笑みを浮かべ、倒れた重原に接近してゆく。

「もうお目覚めになったのかい本物？」  
オリジナル

「お、本物？」  
オリジナル

どういう意味だよ、オリジナルってさ……。

「圭介、よく聞け！　そこにいる俺は俺じゃない！　信じてもらえないかもしれないが、そいつはいきなり俺の身体から出てきた偽物だよ！」

「な　ッ！　に、偽物！？」

「圭介、早く逃げるんだ！ 俺の偽物は変な力を が、はっ！」

本物……と思われる重原の胸に、偽物と思われる重原が強烈な踵落としを仕掛けた。本物と思われる重原は激痛のあまり蹲り、さらに肺をやられた為か咳き込んでいた。

「あーあ、こんな事になるなら、やっぱり本物を殺しておくべきだったかな」

「……てめえ、何者だ！ なんで重原の姿をしてんだよ！」

「まあいい ラウル・ゲリエというのが本名、ハイチから遙々きたんだ……藤島圭介、君に直接恨みは無いがここで潰れてくれないかい！」

言い終わると、偽重原（確定）は再び太鼓のバチを叩き合わせる。俺は偽重原がそのような動作を見せた時点で、反射的に右へ跳躍した。微かに左頬に風を感じた。多分、クナイのような鉄は俺の顔のすぐ横を通り過ぎたのだろう。

偽重原は当然第二撃を放とうとする が、

「ふああっ！」

「な、この オリジナル ！ 離せ本物！ 素性が割れた以上、君に用などもうない！」

「嫌だね……これ以上、皆に迷惑を掛けるな偽物……ッ！」

突然立ち上がった本物の重原は、偽重原にリストロックを掛けた。流石格闘家、身体だけは重原で力は強いものの、中身はただの魔法

使い。格闘技なんて習っているはずがない。本物の格闘家である重原と比べれば、実力は一目瞭然である。

「チツ、やはり……最初の段階で人格も俺に設定しておくべきだったか。いや、それだと本物のキャラがわからなかったし……クソッ！ いい加減離れる本物！」

「俺には何を言っているかはわからない。だけど、圭介を狙うのならば武道家として、そして圭介の友達として 見逃すわけにはいかない！」

本物と偽物の戦い。リストロックで手を封じ、バチを打てない状態の今……確かに本物のほうが有利ではあるのだが……けどどうなんだ？

本物は俺が知らない所で散々やられたんだろ？ 疲れてるだろうし……だったら、武道家としての強さはそんなに長い時間発揮できないんじゃないか？

「フッ！」

「が、ああっ！」

そんな危惧をしていた刹那 偽物は本物の足首に蹴りをいれやがった。

ゴガツ！ という強烈な音。それは本物にとっても耐えがたい一撃だ。本物の重原は蹴られた左足首を押さえ、苦しそうに蹲っていた。それにしても本物の重原……あれだけの達人がさっきの一撃であそこまで痛がるはずがない。まさか 重原のヤツ足を怪我していたのか！



「重原っ！」

俺がそう叫んだ瞬間 偽重原は本物の重原の顎に蹴りを入れる。耳を塞ぎたくなる衝撃音と共に顎を蹴られた重原は、一旦宙を舞った後背中から地面へと落ちてしまった。

顎への蹴りで脳を揺さぶられ、落下による背中への強打で悶え苦しむ友達の姿。

それを見ていた俺は 自然と身体が震え、身体に力が入り、自分自身を抑える何かか吹っ切れたような気がした。

「てんめえ……ッ！ ふっざけんじゃねえよ！」

「やれやれ…… 今日中に捕えないと俺の地位がガタ落ちだよ。こうなったら、一旦退散して別な人の身体でも複製しようかな」

「……複製だと？ どういう事だ」

「俺は単純な宗教魔術の他に 人の中に入ってその人を操ったり、あるいは中身はその人のままで、その人が得る情報のみを得る事……まっ、簡単に言えば幽霊のように取り憑かれる魔術を使えるんだよ。今回は君のスパイという都合上、君の友達に取り憑いただけさ」

幽霊みたいに……取り憑く？

まったく……魔法使いってのはドイツもコイツも、一体なに考えてやがるんだ。

やっぱり普通じゃねえ。色々といかれてやがるんじゃねえか？

「いいのかよ、そんなにベラベラ喋りやがって……」

「どのみち……バレル事だからね。仮にバレたとしても 本物が

偽物かを見破る能力は君にはない」

「そうだな……だったらなおさらめえを逃がしはしねえ。誰かに取り憑こうだなんて　そんなふざけた事は絶対にさせねえよ！」

「そうかい……残念だね。折角、君が自由の身でいられる時間を延長してやろうと思ったのに……じゃあ、悪いけどここで倒れて素直に捕まってくれるかな？」

「　ッ！」

そう言うと、再び偽重原はバチを叩き合わせる。今度は今までみたいに一個ではなく、あらゆる方向から複数の鋭い鉄が飛来してきた。前に行くにしても左右に行くにしても、これじゃあどこに逃げたつてあの鉄に当たってしまう。待て、後ろは？

そう思って首を後ろに反らすと　唯一後方だけが安全地帯だと確認できた。ただし俺のすぐ後ろには東京湾の海がある。そこにあえて飛び込むヤツはいない。

俺だって飛び込みたくはない。泳げないし、そもそも水が怖いよ。じゃあ、俺は一体どこに逃げればいいんだよ。このままじゃ串刺し確定だ　。

「　ア、ア　　ッ！」

突然。

突然、偽重原がバランスを崩しよろめいた。同時に、俺を狙っていた鉄の大群は、力を失ったかのようにバラバラと、重力に任せて地面に落下していった。

再び偽重原を見ると、偽重原は何かの衝撃でバチを地面に落とすたようだ。木製のバチがコロコロと地面を転がっていた。一体どう

いう事だ、何が起こったってんだ？

「お、オリジナル本物……ッ！」

「へ、へへ……後、任せたよ……圭介っ」

重原にそんな事を言われた時点で　ようやく何が起こったか理解が出来た。

どうやら、重原は偽重原の背中にコンクリートブロックを投げつけたらしい。激しく背中に激突したブロックによって、偽重原はバランスを崩してしまったようだ。だから、大切そうに持っていたバチを偽重原は手放してしまったのだ。そのせいか、ヤツの魔法の無効化されたのかもしれない。

ラッキーだ。バチさえ持っていないけりゃ　こっちのモンだ！

「オオオ！」

俺は拳を振り上げ、咆哮と共に偽重原の懐へ飛び込む。

偽重原はバチを拾おうとしていたのだ。確かに勝てるどうかかわからない、素手の殴り合いなんかを仕掛けるよりは、一撃必殺の魔法を使ったほうが楽だし確実だ。

誰だっけそう思うだろう。俺だっけ偽重原の立場ならそう思うぞ。だが、そんな動作を見せた僅かな隙こそ　偽重原の一番大きな失敗であった。

俺の接近に気付き、立ち上がって拳を構えた時には　すでに手遅れ。

「ッ！」

俺の拳は偽重原の顔面を捉えていた。

鈍い衝撃音が炸裂し、殴り飛ばされた偽重原はその脚力をもって、辛うじて地面に倒れずバランスを立て直した。偽重原の戦意はまだ消えてはいなかった。

第147話 黒魔術（後書き）

・後書きトークコーナー！

重原「次回決着っばいね」

圭介「つーか……長えよ！ 多くの読者がそう思ってると思うよ！」

重原「戦闘に3話も使う（予定）とか、早川以来だもんね」

圭介「しかも相手は重原だけ？ もったいなさすぎるだろ！」

重原「……それ、地味に俺の事馬鹿にしているよね？」

## 第148話 攻略宣言

ラウル・ゲリエ。これが重原に化けていたという、ハイチ出身のサヴィエト所属の怪しげな魔法を使う偽重原の本名だ。ヤツの目的はただ一つ。俺の身柄を拘束する事。同時にそれはサヴィエトという組織全体の目的でもあった。

俺は偽重原を殴り飛ばし、ヤツが怯んでいる隙にバチを東京湾に捨ててやった。これで偽重原は魔法を使えないハズである。

行ける……いくら重原の身体を使っていたとしても、魔法使いは喧嘩ド素人だ。力技でねじ伏せられなければ俺でも 素手で十分勝てる相手だ。

「全く……君は人をイライラさせるのが好きみたいだねっ」

「ふざけんな。イライラしてんのはこっちなんだ。人の友達を好きにだけ利用しやがって……折角の夏休みをこんな滅茶苦茶にしゃがって」

「俺だって、好きで君を襲ったわけじゃない。ただ、俺の所属する組織は君を狙っている」

「……んで、お前はこれからどうするんだよ？ バチは海に捨てた。こここの海は濁ってるっばいし、潜っても回収できるとは思えねえ。てめえはもう魔法を使えねえんだ」

「関係ないね！ 確かに儀式用の道具を捨てられたのは痛いよ。だが、俺は重原広敏という武道家の身体を持っている……つまり、君のような素人が相手なら素手の殴り合いでもこちらが有利なのだ。そんな単純な事も理解できないのかい？」

「ハッ、お前自分で分かってねえのかよ。自分の本当の実力をよ？」

「分かってるさ……これは重原広敏の身体。鍛えられた肉体を俺は持っている……少なくとも、路地裏ストリートファイター程度には負けないと思うけどね」

自信過剰。

偽重原は自信過剰であった。重原の肉体を手にしたからって、自分が以前の自分よりも強くなったと完全に思いこんでいる。確かに重原の身体能力は高いが、中身がシヨボかったら意味がない。

「分かったよ……じゃあ教えてやる　てめえの実力を！」

俺は偽重原に身の程を教える為に　偽重原と全力で戦う事にした。あゝあ、偽重原と戦い初めてから一体何十分経った事だろう。今頃、青山さんは怒っているか泣いているんだろう。

自分の身が危険に晒されているとは言え、流石に悪い事をしちまったな。後で青山さんにちゃんと謝っておかないとな。

……というわけで、青山さんに会う為にまずはコイツを　！

「が、アアアアアッ！」

偽重原の顔面を捉え、右ストレートを放ったが、偽重原は後ろへ2〜3歩後退した。

右ストレートは空振りに終わる。まずい　このままじゃ偽重原に、

「が、はあっ！」

そう思っていた瞬間、鈍い痛みを腹のあたりに感じた。  
膝蹴り。

偽重原の膝が射抜くように腹へめり込み、俺の腹に激痛を与えた。体質上、この程度の衝撃なら痛いだけでどうって事はないが、痛みで一瞬怯んでしまった。その隙に偽重原は拳を振り下ろす。

「あ がっ！」

瞬間、後頭部に強烈な衝撃。

腹を蹴られ、蹲って姿勢が低くなっていた俺。そのせいか、どうやら俺の頭は偽重原が攻撃するには丁度いい位置にあっただらしい。後頭部に拳を喰らった俺はバランスを崩し、そのまんま必殺の一撃を打ち込まれたボクサーのように、固く薄汚れた地面に顎から落ちてしまった。

後頭部、そして顎を打った事により脳が揺さぶられる。普通なら病院送り いや、死んだっておかしくは無いほどの衝撃を俺は受けた。ちくしょう、偽重原は俺の体質を知ってやがる。

俺を捕えるのが偽重原の目的だ。もし知らなかったら こんな激しい攻撃はしないハズだ。

「うぐっ！」

偽重原は倒れる俺の髪を掴み 無理やり俺を起こしやがった。  
痛い。

髪を引っ張るって結構痛いんだぞ。しかも痛みはずっと続くし…  
…丈夫な俺にとっても地味に耐えがたい攻撃なのである。偽重原は俺の髪を引っ張り、俺を自分の顔の位置まで持ち上げた。

覗き込むように偽重原が俺の事を見てきやがる。口元が歪んで目も少し笑っていた。



「フフフツ、もう少し楽しませる藤島圭介。君にはもう少し付き合ってももらわないとさ……割に合わないんだよ！」

偽重原は俺の髪から右手を離し、同時に胸倉を左手で掴んだ。

そして次の瞬間　離された右手が握られぐしゃりと。鈍くグロテスクな音を響かせ俺の顔面に突き刺さっていた。く、そ　鼻　つ　柱を殴られた……ッ！

ドロドロと、何か鉄臭いものが鼻から流れている気がする。今ので鼻血が出たようだ。

「ぐ　ッ！　て、てめえ……っ」

「まだ終わりじゃないよ！」

続いて二発のヘッドバット。

一発目は血が流れる鼻に、二発目は眉間に命中する。ミシミシと眉間の骨を砕く寸前のような嫌な振動が伝わる。痛みに顔を歪める俺を、偽重原は　投げ捨てるかのように突き飛ばした。

突き飛ばされた俺は、たまたま背後にあった建物に背中と後頭部を打ちつける。あまりにも激しい衝撃に肺から空気が排出され、脳も揺さぶられてぐにやぐにやであった。

それでも……俺は倒れない。この程度　俺にとっては大したことはない。

「あああああああああ……！」

一気に俺を沈めるつもり偽重原は、思いっきり突っ込んできた。壁に張り付いている俺に拳を打ち込もうとしている。だが、その時には既に　俺の身体からは痛みが消えていた。

寸前の所で俺は左へ身を反らし、偽重原の拳を避けてやった。ゴ

オン！ という轟音は偽重原の拳が建物を突いた打撃音だ。  
当然のように偽重原はうめき声を上げ、左手で右手を覆い痛がっていた。

その際に 俺は偽重原の背後へ回り込んで、

「おらあああああああああ！！」

ワシツと偽重原の後頭部を右手で掴み、思いっきり偽重原の顔を押しだす。すると、偽重原の顔面は鈍い音を立てて建物の壁へと激突した。

そのままグリグリと右腕に力を入れ、偽重原の顔を壁に押し付ける。俺に出せる最も強い力を右腕に入れて 偽重原の頭部を圧迫し続けた。

……やがて、偽重原から力が抜ける。手を離してみたらぐったりと、重原は崩れ落ちた。

正常に呼吸はしているし、いびきをかいているわけでも痙攣しているわけでもない、本当にぐったりと倒れているだけのようだ。よかった、命に別条はなさそうだな。

「はあ、はあ、はあ……っ」

ああやつべえ疲れた……相手が気絶して気が抜けると、一気に疲れが出てきた。

やっぱり喧嘩つてのは面倒くさい。とりあえず、今回は重原本人ではなく、魔法が使えなかったら喧嘩ド素人の弱者でしかないヤツでよかったよ。

「お……おまわりさん……あそこです！」

不意に青山さんの声が耳に入ってきた。まさかと思ったので、本

物の重原と同じタイミングで振り向いてみると……建物の角からちよこんと顔を出し、俺らの事を見ている青山さんがいたのだ。

青山さん、ひよつとして……俺達の事を見ていたのか？

……ん、そういえば青山さん何か言っていたな。一体なんて言うていたんだ。

「なんだ、不良の喧嘩か？」

「まったくこの時期になったら……コラァー貴様らああ！」

「まずい……あの青い制服のお二人は……警察。」

そう、我らの味方にして時に敵となる警察だ。まずい、警察官のご登場。被害者である俺と重原の身も危険という事である。何故なら 現代日本は喧嘩両成敗だからだ。

このままだと俺らまで犯罪者。いや、その前に停学か最悪退学にされちまう！

「やばっ！ お、おい重原立てるか！？」

「だ、大丈夫だよこれくらい……っ」

「よし！ 撤収しますよおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおっ！」

「ま、待て貴様らあああああああっ！」

当然警察官二人のうち、一人は俺達を追ってきたが……いちいち構ってられるか。ああもう青山さんったらなんで警察呼んだんだよ。一番まずい連中呼びやがったなちくしょう！

と、とりあえず。俺と重原はこれだけひどい目に遭ってるんだ。だから叫んでもいいよね？

「ええい、ちくしょう！ 不幸だあああああああああああ  
ああっ！」

「こ、今回は俺も不幸だね！ 折角の夏コミが台無しだよっ！」

こうして、俺と重原は逃げまくった。

追ってくる警察官から逃げて逃げて、逃げまくったのである。  
そんなこんなで数分後。俺達はどうか警察を振り切り、建物の裏で呼吸を整えていた。

だが、安心してた矢先 今度は今朝新木場駅でぶっ飛ばしたヤンキー2人が、仲間を10人くらい連れて来て俺らに絡んできたのだ。当然、俺も重原もそんな大人数を相手にする体力が残っていないわけがない。そもそも、これ以上暴れたら本当に警察にマークされてしまうだろう。

だから 俺達は今度はヤンキー12人から逃げたのだ。それから数十キロ、やっとの思いでヤンキー12人を振りきったが……いつの間にか知らない街に辿りついてしまったのだ。

「どこだよここ！ ああ……交通費もねえし、なんたる悲劇……っ  
！」

「け、圭介……とりあえず道でも聞こうよ」

「そっつすね……っ」

結局、俺達が家に帰れたのは6時過ぎであった。

当然暮葉にも心配され、葵にもお説教をされてしまった……っ、

疲れた。もう嫌、秋葉原といい夏コミといい、東京に行った思い出にいいものがねえ……。

俺……市街から出たら不幸な目に遭遇する、そんな呪いでもかけられてるのかな……？

とにかく……不幸だ。

それから数時間後、夜10時頃。俺はPCでエロゲーをプレイしていた。今回プレイしているエロゲーは「いろとりどりのセイ」だ。7月に発売されたばかりのゲームで、まあ俺の好きなエロゲーメーカーの一つである、フェバリットより発売の新作だ。

ちなみに俺は今作では連ちゃん押しだが……何故だ、何故攻略キヤラじゃねえんだ！

どうして俺の好きなキャラは毎回毎回、攻略できねえんだよ。アレか、どうしても攻略しなかったらFDファンディスク買えっていう、エロゲーマーのよくある戦略か！

ちくしょう……まあいいや、東峰つ さもお気に入りでからな。

まあ、もしFDファンディスク売らんだつたら、当然有り金叩いて買いますぜ。

……つと、妄想に浸っていたその時 携帯電話が振動し始めた。電話みたいだな、携帯電話を開いて確認すると、電話をかけてきたのは青山さんだった。

なんだろうこんな時間に？ とりあえず、ボタンを押して電話に出よう。

『あ、先輩……よかったあ起きてました……っ』

「大丈夫、これでも結構夜深しなほうだから」

『ダメですよ、ちゃんと寝ないと……身体に悪いです』

「ごめん、これからは出来るだけ早く寝るよ」

まあ……深夜アニメの為に寝れないってのが現実だが。そんな事を青山さんに言えるわけがないしねえ……無駄に心配をかけるわけにはいかないよな。

『そうですよ……今日はその……お疲れでしょうからっ』

「大丈夫、そんなに疲れてもいないぞ」

『……あの、先輩……お怪我とかはありませんか？』

「怪我？ 怪我はしてないぜ？」

『よ……よかったあ』

青山さんはホツとしているようだ。電話越しでも何となくわかるよ。まあ、実際は鼻っ柱を殴られた時に鼻血が出たが……でも、もう痛くもなんともないし、鼻血も止まっている。

それに散々殴られたような気がするが、今となっちゃあどこに痛くは無い。

ホント、自分の体質にはいつも感謝だよ。怪我だってすぐ治るしな。

この体質がなかった 魔法使いと戦っても瞬殺されてただろう。

「……………」

『……………』

「……………」

……あれ、なんででしょうかこの沈黙は？

すっごく気まずい……会話が途切れてしまった。最初の頃は会話が途切れるって、よくある事だったんだけどなあ。やっぱり、青山さんは一応俺の彼女だ。会話が途切れると不安に思うぞ。

そんな事を考えていた、

『……………あの、先輩っ』

その時、青山さんが沈黙を破った。

とつても決意に満ちた声で　俺の事を呼んでいた。

『先輩はその……………わたしの事、好きじゃないですよね？』

「いきなりなに言うんだよ。好きじゃなかったら遊びに行かないだろ？」

『いえ、そういう意味じゃなくて……………その、恋人としてって意味です……………っ』

ああ、そういう意味での質問だったか。てっきり友達としての意味だと思ったよ。青山さんと絶交だなんて絶対に嫌だからな。好きじゃないって言葉は結構胸に響いたぞ。

だけど……………どうなんだろう。俺は青山さんの事が好きなんだろうか？

好きと言えば好きだ。けどなあ……………やっぱりいくら考えて、その好きという気持ちは友達としての好きという意味……………なのか？

特別ドキドキするわけでもないし、一日中青山さんの事を考えているわけでもない。

一応失恋経験3回……いや、白藤も含めたら4回だな。それだけ経験していいや、好きって気持ちが大体どんなものか わかつてはいるつもりだ。

『……先輩、ごめんなさい』

「えっ？ 青山さん……何もしていないのに、謝る必要なんてあるのか？」

『いえ、しましたよ……先輩に迷惑をかけました』

「め、迷惑って……」

『先輩、わたしの事……好きでもないのに無理やり振り回して、ごめんなさいっ』

「青山さん……」

好きという意味が女として好きだという事は、いくら俺でも分かる事であった。

青山さん……俺と付き合える事が嬉しかったのか、幸せそうであった。でも、青山さんは無理やり自分と付き合い合わせた事を悪く思っていたのか。それを反省していたのか……。

……なんでかな。ここまで謝られると逆に俺が悪いみたいだ。また俺が中途半端な気持ちでいたせいで青山さんを傷つけた。そんな気がしてたまらない。

「……確かに、条件を呑むって形での変な付き合い方だったよ。でもさ、別にそこまでそれを反省する必要はないんじゃないか？」



『…………?』

「むしろ、振り回していたのは俺のほうだろ？ 散々な事に巻き込まんじまってさ…………そっちのほうが悪いような気がする」

『そん、な…………やめてください先輩っ、先輩がそんな…………優しい事を言うからわたしは…………っ』

「知ってるか？ 俺、単純だからそう言う事しか言えないんだよ」

『…………!』

すると、再び無言の沈黙が訪れた。今のセリフはやっぱりまずかったか？

うん、自分でもキモい事言ったなって思ってたよ。まあいいや、どうせ俺は電話をしながらエロゲーをプレイしている、変態の最低キモ男だしな…………。

『…………えへへ、先輩には…………やっぱり勝てませんっ』

「えっ?」

『なんでもありませんよっ』

なんだ?

青山さんの機嫌が戻ったような気がするが…………俺の気のせいだろうか?

『…………あの、先輩…………一回わたし達…………別れませんか?』

「え……な、なんで……？」

突然、青山さんの口から衝撃的な言葉が出てきた。

別れる？

つまりアレか……今から恋人をやめましょうという、そういう意味の別れか？

……けど、青山さん……なんでだよ。まあ、確かに俺はいい男じゃないし、今回彼女の事を無視して喧嘩している姿を見て、幻滅したのかもしれない。仕方ねえ……のかな？

青山さんの事、そういう意味では好きでも嫌いでもない。そういう風に俺は思っ**て**はいたんだけどなあ……イザ別れを切りだされると、結構胸にグサツと刺さるもんだ。

しかし、

『だ、大丈夫ですっ！ 別にその……先輩の事が嫌いになっ**た**わけじゃないです。むしろ……先輩の事は大好きですっ！』

うおっ！ なんてストレートな告白なんだ……今のは軽くドキツとしてしまった。

だけど……じゃあなんで？ 好きなら別れる必要がないだろ。俺だって……まあ付き合ってしまった以上は仕方がない。中途半端な気持ち中途半端じゃなくすべく。青山さんのことを全力で好きになる**う**と努力はするよ。それなのに青山さん……。

「え、な……なんで？」

『やっぱり……わたし、普通の方法で先輩の恋人になりたいです』

「普通の方法？」

『はい……今更言うのもなんですが、わたし……先輩とは脅迫じみた方法でこの関係になりましたよね……？』

まあ確かに、殆ど脅迫みたいなものだったかもしれない。  
俺はおうつと小さく返事をすると、青山さんは話を続ける。

『でも、こんな方法で付き合っても……やっぱり幸せにはなれないと思うんです。だからその……一回関係をリセットして 今度は真正面から先輩を落としてみせます……っ！』

熱く語る青山さん。これは……アレだな。

攻略宣言。

俺をマトモな方法で攻略しようとして、青山さんは決意したのだ。その堂々たる声は電話越しでも熱意が伝わるものであった。

本気だ……青山さん、本気で言っている。きっと本人も辛いんだろう。どんな理由があっても好きな人と別れる事には変わりない。失恋と同じようなものかもしれない。

それでも 彼女は決意を改めない。

彼女は真正面から攻めて俺を恋に落とし、最高のリア充になろうとしていた。その気持ちを挫く権利など俺にあるわけがない。それに俺だってアレだよ。中途半端なまま付き合い続けるのはやはり失礼だと思うんだ。

「……わかった、そうしよう」

『……はいっ！ その……覚悟しててくださいね……先輩っ！』

「おう、言っとくけど 俺の攻略は難しいぞ？」

『だいじょーぶです……っ！ わたし……落とし神さまになってみ』

ますからっ！』

落とし神って……青山さん、一体誰から漫画を借りたんだ？

つか、青山さんその漫画読んでたんだな。

……関係が終わり、そこから再び青山さんは再出発をする。そんな中、夜は更けて雲間からはお月様が顔を覗かせていた。

……あっ、暮葉にお土産買うの忘れてた。

どうしよう……まあ、何も言われてないから別にいいや。

## 第148話 攻略宣言（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「よっしゃ！ 千早が別れたぞ！」

葵「やったあああああああああぁぁぁぁぁっ！」

凧紗「ふ、藤島……ざまあだぞっ！」

伊吹「そ、そうよっ！ 脅されたくらいで付き合っからよっ！」

圭介「お前らひどくね？ 別れを言わうってひどくね？」

白藤【私も嬉しい】

圭介「てめえもかよ！」

重原「圭介、ホントに鈍感だねえ……みんなが別れを祝う理由は、ねえ？」

大吾「まっ、そんな事はさておき……次回から新編突入だぜ！」

## 第149話 夏休み明け

8月17日。8月もこの時期になると、学校が始まる所は始まるらしい。このオレ 早川悠も車内から登校中の学生の姿を見物していた。ただ、膝の上にクソみてエに重いヤツを乗せて。

「今日から学校の人もいるんだね！ ミネットももう一度学校に行ってみたいな〜って、きゃあ！」

とりあえず、クソガキがウザかったので、オレはミネットの後ろ襟を掴んで放り投げた。

「たく、ようやく身体が軽くなったってモンだ。それにしても不便だ。能力が使いえねえんじや態々腕使う必要があるしなア。まア、全く使いえねえわけじゃないが、使う為にはこのクソガキの協力も残念ながら必要なのだ。たく……世界でも頂点に立つと言われたオレは、一体どこに消えたんだ？」

「ひどいよ貴方！ いきなり突き飛ばすだなんて……軽くシヨックだったんだよ！」

「うっせエぞクソガキ。さつきから人の膝の上でベラベラ喋りやがって……オマエ、人が能力使いえねえ事をいい事に遊んでねえか？」

「そんなことないよ！ ミネットは貴方の事をずっと心配していたんだよ！」

「だったら、退院早々人様に乗っかってんじやねエ。オマエが重くて辛いんだっつーの」

「ひどい！ ミネットはデブじゃないよ！」

「そういう事じゃねえ、オマエ……オレの身体よく見てみるっつーの。歩けねえ身障者には辛いんだっつーの」

ありゃあ確か、一ヶ月くらい前の事だったか。オレは何を思っつまったのか、このクソガキを助ける為に奔走しちまったのだ。その結果ガキは救われたが、オレは超能力を失っちまった。

今はこの補聴器型、いやチョーカーか？ その魔力エネルギー変換機を使い、15分限定で無理やり能力を使えるようにはなったんだが……まっ、こんなの気休め程度にしかならねエだろ。

15分は短い。ダラダラ戦っていたらすぐ経っちまう程度の時間だ。

こんな短い時間で何が出来るっつてんだ？

「あーちよっと、あんまり騒がれるとボク事故っちやうかもなの。だから黙っててくれると嬉しいの」

……と、クソガキと戯れていると、運転席からオレ達を説教する声が聞こえた。

どうやらオレとミネットの騒ぎ声は、運転手にとっては安全運転妨害ボイスにしか聞こえていねえようである。んで、その運転手についての話なんだが……どオなっつてんだ一体？

運転手の姿をしてみる。

ソイツの肌は純白。黄色いリボンで結んだ茶色のツイントールは、程良く綺麗に手入れされていていやがった。若干ツラは子供っぽさが残っているが、何故か胸だけはミネットと正反対だ。

まっ、性格的にクソガキである事には変わりねエ。

「……リーネ・ディートリッヒ。なんでオマエが車を運転してるん

だ」

「ふっふー！　ボクは技術者なの。技術者が運転していたらオカシイの？」

「そういう問題じゃねえ。オマエ……異世界人だろ。無免だったらブチ殺すぞ」

「大丈夫なの。木下さんに頼んでボク、偽装免許証を作ってもらったの」

「結局無免かよクソガキ2号……捕まったら承知しねエぞ」

「大丈夫なの！　ボク、運転は得意中の得意なの。それより悠ちゃん」

「誰が悠ちゃんだ……張り倒すぞ」

「ティヒヒ、今の悠ちゃんには超能力は使えないんじゃないの？」

「生憎全く使えねエわけじゃねえんだよ。オマエらがヘンテコな機械を作ってくれたおかげで、コイツで魔力を脳波に変換すりゃあ、一時的に元の演算能力の半分は戻るんだっつーの」

「いいの？　悠ちゃん元の演算能力が高すぎるせいで15分限定なの。しかも魔力を補充する為には恥ずかしい事をしなきゃだよ？」

「……チッ」

やっぱりリーネもクソガキだ。クソガキ2号と命名しておいて正



解だぜ。一方クソガキ1号は病院で誰かから貰ったという、PNPでゲームをプレイしていた。まったく、静かに出来るんじゃないかねえかよこのクソカギ。ずっとゲームして遊んでやがれ。

はあ……クソツタレ、やっぱり改めて考えると不便だ。好きな時に能力も使えねえ、やっぱあの時怪我したのは失敗だったか。いや、そうでもしなけりゃこのガキは助からなかった。結局オレは非情になりきれねえクソアマ野郎だったのか？

……チツ、くっだらねえ……こんな程度の事で悩んでんじゃないかねえぞ。

「ねえ悠ちゃん。佐井学園つと所やめちゃうの？」

不意にリーネが話を掛けてきた。しかも話題はそれか……チツ、わかりきった事を。

「まアな……汚れ仕事に携わるのは、もうゴメンだからな」

「大丈夫なの？ 学園側は悠ちゃんを手放したくないんだよね？」

「心配すんな。ロクに超能力チカラも使えなくなったオレは、学園にとっちゃあお荷物同然だろオからな……手放しても損にはならねエだろ」

「それじゃあ、今日からミネットちゃんのマンションで三人暮らしなの」

何嬉しそうに目を輝かせてんだこのクソガキ2号。つーか危ねエよガキが、ちゃんと前見て運転しろってんだよ。一瞬対向車線にはみ出て、対向車がクラクション鳴らしてたじゃねえか。

どこが運転得意なんだよ。こっちは不安にしか思えねえだろ。

「ミネットもリーネさんや悠と暮らせるの、楽しみだよっ！」

「ハア……退屈な日常が始まりそうだ」

学園から離れて普通の暮らしが出来るのは、そりゃありがたい事だ。だが、今まで血みどろの世界に生きてきたオレにとっちゃあ、ただの日常ってのはおそろくつまんモノだろう。

だが、さっさと平和な日常に慣れねえと、この社会じゃ生きてけねえ。まっ、学園のクソ共が何もしなけりゃあ、普通に過ごせてそのうち日常にも慣れるだろう。

そう思いながら、オレは車窓の外へ目を向けた……ホント、日常は退屈そうだ。

その頃、初芝高校の廊下では。

夏休みが明けた。俺こと藤島圭介にとっての夏は終わった。

思えば夏休みにはロクな思い出がない。秋葉原に行けば妹にレイプされかけ、その上変な不良集団との戦いに巻き込まれた。合宿では暮葉とすこし気まじくなり、しかも近藤だのアマデーオだけサヴィエトの魔法使いと戦った。その後のコミケじゃあ、重原に化けた魔法使いと一戦を交え……。

結局、夏休み中はお出かけすると、必ず俺は災難な目に遭っていたのだ。しかも一瞬青山さんという彼女が出来たものの、青山さんの決意によって別れてしまい……まっ、結局俺は相変わらずの非リア充な日常を過ごしているわけだ。

そんな中、夏休み明け最初の学校。俺は廊下に出て窓から古宇坂の町並みを眺めていた。

「あ……リア充になりてえ……」

思い出せば、青山さんと付き合っている間はそこそこ楽しかった。そう、相手の事は友達としてなら普通に好きだし、そんな程度の好感度を持つているだけでも　リア充生活は楽しかった。

それを思い出すと、本気で俺はリア充になりたいと思ったのだ。

しかし　そんな本音を漏らしてしまった直後。

何故か左右から拳が飛んできて、俺の頬は正拳突き犠牲となつてしまった。

「ぐはっ！　あたた……いきなりにゃんれすかアンタ達いつ！」

ちくしょう痛えっ、本気でぶん殴りやがった野郎共。

俺はいきなり殴りつけてきた2人の姿を見る。一人は黒髪のツンツン頭に眼鏡というシュールな外見をしている少年。もう一人は大柄で筋肉質ながら、爽やかな雰囲気放つイケメン野郎だ。

右に大吾、左に重原。くそ、いきなりコイツら何なんだよ。

「いやあ〜圭介ごめんごめん！　リア充がそんな事を言つとムカついちゃうんだよな！」

「そうそう、俺も大吾と同じ意見だよ。まあ、これはモテない男子による鉄拳制裁かな？」

「だからって殴るかよ普通っ！　つーか大吾、てめえ完全二次元派じゃなかったのか!？」

「確かに僕は現実リアルなんてどうでもいい。だが、それでもリア充はムカつくんだ！」

「結局現実リアルに未練タラタラじゃねえか！ あと、重原はモテるだろ！」

「ハハツ、モテたらとっくに彼女はいるよ。そもそも俺、あんまり恋愛に興味ないんだ」

「じゃあモテない男子による鉄拳制裁とか言うなよ！ ちくしょう理不尽だ。なんで恋愛なんてどうでもいい奴らに殴られたんだ俺はあああつ！」

怒りとショックで自分を抑えきれず、俺は髪を掻き毟り絶叫していた。

「はろはろ〜野郎共諸君 あれ〜圭くんが暴れちゃってるぞお？」

「けーすけ様っ！ ど、どうかしたのですか!？」

そんな時、2人の少女が俺達の前に姿を現す。

一人は暮葉だ。半袖の夏服に身を包んだ暮葉は、まるで高校生の制服を小学生が無理やり着ているような感じであった。つまり、暮葉は相変わらずロリロリしているという事だ。

まったく、小学生は最高だぜ……って言う事を言うロリコン諸君も、暮葉の姿を見たら余程の重傷者でもない限り、おそらく99.7%の確率で一目惚れする事であろう。

あ、先に言っとくけど俺はロリコンじゃないからな。

んで、もう一人暮葉の右に立っているのは、アンダーテールで巨乳の小坂だった。

ニヤニヤといやらしく笑う小坂。コイツ……カオスな状況を楽しんでやがる！

「ああ、僕らはリア充に正義の鉄拳を放ったんだ」

「そうそう。そしたら圭介がいじけちゃってね」

「そうだよ！ 俺は理不尽に殴られたんだよ！ 助けてくれ2人と  
もっ！」

「……けーすけ様、自業自得だと思うのです」

「うーん……圭くんだからなあ、失礼な事言ったら怒る人はいつば  
いかも？」

「ぐ、はっ！」

ひ、ひどいや……俺に味方は一人もないのかよ。

ちくしょう！ 夏休みは散々な目に遭ったんだぞ。暮葉と一緒に  
入浴したり一時期青山さんと付き合ったり、それなりにハッピーな  
イベントは確かにあったよ。でも、結局暮葉とは何もなし青山さ  
んとは別れたし、その上俺が行く所で必ずサヴィエト絡みのトラブ  
ルが発生していた。

くそ……なんて不憫な夏休みを過ごしたんだ、俺。

……神様、どうか夏休み明けからは普通の日常が過ごせますよう  
に。

第149話 夏休み明け（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「夏休み編で一回も出番がなかったけど……」

小坂「ついにあたしらの出番キタね！」

大吾「全く、重原でさえ出番があったのに……僕らはっ」

小坂「ま、まあまあ！ 学校始まったんだからあたしらだって出番あるって」

大吾「畜生！ こうなったら、今日から僕はギャルゲー三昧だああああっ！」

小坂「やっぱり大吾は大吾だ、相変わらずキモいなあ……っ」

## 第150話 意外……でもない事実

8月17日。今日は夏休み明け初日なわけで、授業などは午前中で終了。つまり放課後はいつもと違って遊び放題と言っわけである。幸い今年は暮葉による外出規制の為、外に出る機会も例年と比べると少なかった上に、暮葉が教えてくれたおかげで夏休みの宿題は終わっていた。

だから、野原先生に呼び出されて説教……なんて事にはならなかったのである。

「このクソガキ！」

「ぐ、はあっ！」

「黒やあああん死んじゃダメやあ〜っ！」

「おーっと、黒木君吹っ飛んだー！」

三馬鹿は相変わらずだな……どうやら黒木は宿題を忘れたらしい。しかし、たかがそれくらいで生徒をぶん殴る教師って、今時野原先生くらいなんだろうなあ。

さて、じゃあ俺は暮葉と伊吹と一緒に下校するとしてま、

「はいはい！ 女子会するから暮葉っ！ あと伊吹付き合っ！」

「ちょ、亜紀！？」

「あ、亜紀さん女子会ってなんですか！？」

「ん？ 女子同士で話してお酒飲む事だけど？」

「わ、私ら未成年よっ」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ジュース用意しといたから。と、いうわけで早速あたしん家へGO！」

「ああ、ちよつと亜紀さんっ！」

「わ、わかつたわよ！ 付き合うから背中押さないでよっ！」

あらら〜2人は小坂に拉致られてしまったぞ。女子会ねえ……つまり、ガールズトークってヤツをしに行くわけか。ガールズトークつつつたらやつぱ恋バナだろうか。恋バナ……そういえばあの3人って彼氏とかいるんだろうか？

まあ暮葉にはいないと思うけど。アイツとは毎日一緒にいるし、恋人がいるような行動なんて見せた事がないな。第一、アルファ隊の仕事もあるんだから付き合うのはまずいのかもな。

伊吹は……うん、モテそうだけど……アイツ、男に興味なさそうだしなあ。伊吹の場合は永渕の件で男自体が恐怖みたいな存在になってるのかもしれないし。小坂は……恋人とかいそうな雰囲気だけど実際どうなんだろう。以外とああいうタイプって経験なかったりして。

エロゲーではよくある事だ。

「はあ……野郎共もいねえか」

仕方ねえ……一人寂しく帰るとしますか。大吾も重原もいつもの事ながら、俺が暇な時に限って姿を見せないんだから。そう思いながら、教室を出て一人寂しく廊下を歩いた。校内にはまだ立ち話を



している生徒達や、これから部活という生徒達が残っている。

あとは……まあ、俺のような暇人くらいか。それにしてもどうしようか。やっぱりいつも誰かが一緒だと、イザ一人になった時に結構寂しいような気がする。けどなあ、わざわざ一年の所に行くつてもどようかとは思うし。第一、一年の3人はみんな問題児じゃねえか。

それにその……今、青山さんと会うのは若干気まずいしな。いや、青山さんはむしろ俺の再攻略に夢中になっているのかもしれないが、俺が気まずく思っているのだ。

やっぱねえ、一応形だけでも一時は恋人だったんだし……はあ。

「あら、そこにいるのは藤島君じゃない？」

久しぶりに聞く声だなあ。そう思いながら首を後ろに反らすと、現代の女子高生の平均より若干小柄な体躯を持つ、長い黒髪を持つ女の子の姿が瞳に映った。

あー、そういえばコイツもウチの生徒だったっけ。確か微妙な時期に転校してきたよな。

「あー、え〜っと……西園寺だっけ？」

「随分ひどい反応ね。文化祭の時にいっぱい話したじゃない？」

「文化祭以外で話した記憶がねえぞ」

「それでも、忘れるってひどいと思うわ」

「心配すんな、ちゃんとお前の事は覚えてるって」

俺は左手で肩を揉み、首を傾げて首筋を伸ばしながらそう呟いた。

西園寺雪乃、忘れるはずがないだろう。コイツと俺は街中で出会ったんだ。それも超デンジヤラスな場面でな。

少なくとも、外見を忘れる事はないだろう。名前は……うーん、忘れるかもしれん。

「でも、考えてみれば貴方とは文化祭以来じゃないかしら？」

「つか文化が夏休み前最後の日になっちまったからなあ」

「……っ、まあ……あの日は大変だったわね」

「ん、どうしたんだ？」

一瞬、西園寺の表情が曇ったような気がした。それだけではない、あれだけハッキリ物を言う西園寺の言葉が、この時だけ詰まっていたように聞こえたのだ。

「なんでもないわ。それよりあの日貴方は大丈夫だったの？」

「……ま、まあ……大変だったけど身体は平気だ」

やべ、俺まで言葉が詰まっちゃったよ。思い出してみれば、俺も文化祭三日目は散々な一日だったような気がするよ。白藤と戦う羽目になるわ校舎が壊れちまうわ。まっ、あの時校舎がぶっ壊れてくれたおかげなのか、若干古臭かった初芝の校舎も一部だけ真新しくなったのだが。

「……貴方こそ、何か大変な事でもあったのかしら？」

「ああ？ どうしてそう思うんだよ」

「何か一瞬言葉が詰まってたわよ」

「気のせいだろ？　ところで俺、そろそろ帰ろうと思うんだけど

」

「そう、それじゃあ帰りに何処か寄らないかしら？」

西園寺が笑いながら、地味にすごいお誘いをしてきやがった。学校帰りに女の子と2人で何処かに行くつて、思いつきりリア充がやる事じゃねえか。もしかして西園寺は俺の事が好き……なわけあると思う方が馬鹿だろう。そんなフラグを立てた覚えは皆無だ。

まあでも、西園寺がサヴィエトの魔法使いつて事はないだろうし確か出会った時に佐井学園の制服を着ていたハズだ。襲われる心配はない……と思う。誘いに乗っても問題はなさそうだ。

「暇っちゃあ暇だし、昼は家族も用事あるみたいだからなあ。そんなじゃ、どっかで昼飯でも食いに行くか？」

「ええ、出来れば安い所を希望するわ」

「それは心配すんな。俺だつて金に余裕があるわけじゃないからな」

まあ貯金はまだまだあるんだけどな。その貯金は欲しいゲームの為に使いたいし、食費にあんまり金を掛けたくないつてのが、一般庶民の学生というものである。

そうだなあ……よし、古宇坂駅前の安いファミレスにしよう。平日だし、あそこならかなりの安価でお昼ご飯が食べられると思うし。そうと決まれば早速ファミレスに行くと思いますか。

ファミリーレストラン【ゲスト】

全国に展開する、おそらく誰でも知っているであろうファミレスで、安価でそこそこのものが食べられるので、我々学生としては非常にありがたいお店なのである。最も、駅前店は若干初芝から離れているせいか、初芝の生徒は中々見かけないのだが……一つ気になる事があるんだ。

「あら……貴女もしかして？」

「おい……なんでお前がここにいるんだ、明智いつ！」

どういうわけか、明智がレジに立っていたのだ。

当然【ゲスト】の制服を着用し、明智と立派に記された名札を胸に付け、冗談のじよの字もない真剣な表情を浮かべて。待て……おかしいだろ。普通のヤツならバイトなんだろうが、明智って一応明智家のお嬢様じゃねえかよ。そんな彼女がバイトをする必要ってあるだろうか？

そつだ。きつと明智は別な理由で【ゲスト】の店員に

「なにつて、当然バイトに決まっているだろう？」

やっぱりバイトかよ！

あたり前すぎる明智の答えに、むしろ腰を抜かしそうになっちゃまったぜ……だけどなんで明智のようなお嬢様が、こんな超庶民的なお店でバイトをしているんだろう？

どうやら西園寺も同じような思っていたらしく、俺よりも先に口を開いて、

「貴女ってお金持ちだったわよね。どうしてバイトをしているのかしら？」

「なんでって……もうすぐあの日だからな。それに向けてちょっと……」

どうしたんだろう明智のヤツ。珍しく顔が少しだけ紅潮していた。あの日ってそんなに恥ずかしい事をする日なのか。ん、恥ずかしいあの日……もしかしてコイツ？

「明智、お前彼氏でもいんのか？」

「違う！ そんなものはいないぞ……っ」

「じゃああの日ってなんだよ？」

「……お、お前に言えるかっ」

「ええっ！？ お、俺には言えねえって……」

なに、なんなんだよ。そんな事を言われるとすっげえ気になるじゃん。第一あの日って何月何日のことなんだろう。8月か、それも9月か。いや、9月は前期期末テストがあるし、その上体育祭と言う大イベントが控えているのだ。

明智は風紀委員だし、その時期に遊んでいる余裕なんてないだろう。じゃ、じゃあやっぱり8月中の話なんだろうか。ちくしょう気になる！ 明智に彼氏がいるのかも気になるが、8月に一体なんのイベントがあるのか……それもすっげえ気になるぞ！

「それより藤島、どうして雪乃が一緒なんだ？ そもそも西園寺は

どうしてうちの制服を……？」

「あら、貴女知らなかったのかしら？ 私は転校してきたのよ」

「て、転校？」

「そう、いい加減あの学園が嫌になってね……初芝には貴女もいるって噂もあったからね」

「そ、そうか……知らなかったぞっ」

「貴女の連絡先を知っていれば、真っ先に教えていたのだけどねえ」

「なんだ、明智と西園寺がやたらと親しそうに話をしているぞ。ひよっとして、コイツら知り合いだったりするんだろうか。8月のイベントも気になるが、俺じゃあ聞けそうにないし、せめて2人の関係だけでも聞いておくとするか。」

「お前ら、随分親しそうだけど知り合いなのか？」

「ああ、雪乃は私の去年のクラスメイトだったんだ」

「そうよ、まあ……アドレスは持っていなかったけど、そこそこ話はしていたわよ？」

「そういうわけかあ」

「そういえば、明智も去年までは佐井学園に通っていたんだっけ？ しかも超能力者の明智と同じクラスに在籍していたって事は……やっぱ、西園寺も超能力者だったりするんだらうか？」

「それより2人と。私はバイト中なんだ、その……なんで2人でいるのかは後で聞くとして、とりあえず空いている席にでも……っ」

「お、いけね。悪かったなバイトの邪魔して」

「いや、いいんだ。2人と話せて私も楽しかったぞっ」

「それじゃあ明日学校で会いましょう？ 私も久々に凧紗と話がしたいわ」

「うん、また明日な2人と」

「……こうして、西園寺と明智が知り合いだったという新情報を手し、俺と西園寺はとりあえず空いている禁煙席に座ったのであった。」

第150話 意外……でもない事実（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「大ピンチだぞっ！」

葵「なにになに!?!」

千早「こ、このままだと……一年グループの出番がっ」

あかり「あたいらの出番がないかもしれないぞ」

葵「うそっ!?! 学年が違っただけでお兄ちゃん達とはこれだけ差があるの!?!」

千早「せ、せんぱい……っ」

あかり「というわけで作者、あたいらも登場させないと処刑決定だからなっ!」



## 第151話 好きなヤツと修業

「へえ、そんじゃ2人は友達だったのか」

「そうよ、凧紗は佐井学園あっちでも面倒見のいい人だったわ」

「つまり今とあんまり変わってねえっつー事か」

ファミレス【グスト】に入った俺達は、偶然にもバイトをしていた明智と遭遇。その後西園寺から佐井学園時代の明智の事を聞いていた。

「どうやら、明智は昔からキャラが変わっていないようである。よかった、家が家だけに落ち込んでいたらどうしようかと思っただよ。けど、前からあの調子らしいし……よかったよかった。」

「藤島君はどうなの？ 貴女……女たらしって噂を前に聞いたわよ」

「誰から聞いたんだよ……俺は彼女なんていた事ないですよ」

まあ、実際は夏休みに青山さんが彼女だったが……それを言うとホントに女たらしでしたって思われるかもしれない。どうせ西園寺にバレる可能性なんてないだろうし、別にそれくらいの嘘なら何の問題もないだろう。しかし……誰だよ、俺が女たらしだって噂流してヤツは。

「ふん、それじゃあ木下さんや幼馴染の子とはなんでもないのでしょっ」

「べ、別にそういう関係ではねえよっ」

「あら、照れてるの？ ひょっとして2人のうちどっちかの事が好きなのかしら？」

「違うわい！」

た、多分違うとは思ってた。うん、違うとは思ってた。とにかく、今の俺に好きでたまらないって言う人はいない……と思うんだ。思うんだけど……最近どうしたんだか。俺の心の中で何かが渦巻いているような気がする。それが何かは知らんが……ハッキリ決めないとダメだとは思ってた。

一体それが何かは本当にわからん。ただ、一つだけハッキリと言える事がある。

サヴィエトの事ではない。

それだけはハッキリと言える。確かに、サヴィエトとは決着を付けないと、俺の身が今後も危険に晒され続ける。それくらいは分かっているハズなのに……。

俺は今 サヴィエトとは別の事で頭を悩ませている。

一体俺は……何の事で……？

「……藤島君、貴方好きな人でもいるのかしら？」

「いねえよ……」

「ふん……木下さん以外ではって意味かしら？」

「ぶっ！」

俺は思わず、たまたま飲んでいた水を吹いてしまった。

「まったく……意味わからん。俺はちゃんといないって答えたハズな

のに、いきなり西園寺がそんな事を言ってきたのだ。俺が暮葉を……ね、ねえよ。

そもそも、なんで暮葉なんだよ……俺はロリコンじゃねえ……と思うけど。

「あら、もしかして凶星だったかしら？」

「てめえ……今の反応のどこが凶星に見えたんだよ」

「だって、一瞬楽しそうだったわよ」

「ふっざけんな！　つか、なんで暮葉なんだよ！」

「同じクラスでしょ？　しかも、いここで住んでる家も同じらしいじゃない」

暮葉のヤツ、住まいまで言いやがったな……後でお説教だな。それにしても俺が暮葉の事を好きだなんて冗談じゃねえぞ。確かに暮葉は可愛いし、愛でたくなるような子だぞ。

だが、アイツの事を本気で好きだと思っただ事はない……ハズだ。

「確かにそうだけど……」

「じゃあ、やっぱり好きなのかしら？」

「そんなわけねえだろ……」

「サウエイト」  
「だけど……連中から俺を守ってくれるのは結構ありがたい。それに、なんだかんだ言っただけで暮葉には世話になっている。」

料理を作ってもらったり、俺の相談に乗ってくれたり……数える

とキリがない。

あと、アイツと話をするのは楽しい。自然と話が弾むんだ。最近  
は……夏休み中は暇だったからずっと話をしていただけ、時間を忘  
れて深夜まで話していた事があったなあ。

初めてだ、誰かと話をしていて深夜アニメを見逃してしまったの  
は。だけど、後悔をした記憶なんて全然ないんだよな。変だなあ…  
…葵のせいで見逃した時は怒ったのに。

……だけど、だからって好きとは限らねえだろ……っ。

「……まあ、これ以上は問わないわ」

「お、おう」

俺が……暮葉を……ってねえよ、そんなもんあるわけないだろ。

第一、俺が暮葉と釣り合うわけがないだろ。アイツは俺より強いし  
真面目だし、結局俺の方が情けないだろ。そんなヤツに好かれたっ  
て暮葉は嬉しくないだろう……。

あれ、何かがおかしい。俺、暮葉が好きって前提で話をしてない  
か？

ありえないだろ、あつてたまるか。これ以上の迷惑はかけたくな  
い。アイツは俺を守る為に日本に派遣されて来たんだ。それだけで  
も俺は暮葉に迷惑を掛けている。俺の存在そのものが暮葉にとつて  
は迷惑なのかもしれないのに……。

……やっぱ、強くなるしかねえな。これ以上アイツに迷惑をかけ  
てくれない。アイツが戦わなくても笑って過ごせるような、幸せな日  
常を作ってあげたい。

だったらやる事は一つ　俺が強くなるしかない！

と、言うわけでやって西園寺と別れた後、俺は単身道場へ向かった。

黒崎道場。

重原の家と対立していると言う、古宇坂に二つある道場だ。重原の家とは違って黒崎は空手の使い手らしく、有名な選手を輩出した事もあるらしい。いきなり殴り込みつて、無謀なチャレンジだつて事くらいはわかってている……だけど、今更立ち止まる事は出来ねえ。

「頼もう！」

そう叫ぶと、門が開けられゴツいオッサンが現れた。うげえ……直感だけど、多分このオッサンが黒崎さんなんだろうな。半端じゃなく強そうだ。だが……強くなるには実戦あるのみ。

「なんだ小僧？ まさか、ド素人の癖に道場破りか？」

「ああそうだ、殴り込みだよ！ 文句あるか？」

「ふん……いいだろう。一瞬で素人とプロの違いを教えてやる……」

上等じゃねえか……こつちだつて素人だけど、てめえらと違ってなあ……素手で戦わない連中との戦闘経験だけは豊富なんだよ。そいつを生かせば 少しは差が埋まるハズだ。

……その後、黒崎のオッサンに道場の中へと案内された。早速道着に着替え、俺は闘志を燃やして決戦の舞台へと立った。相手は黒崎のオッサン……ではなく、眼光の鋭い坊主頭の男だ。

若いな……俺と同じ年ぐらいだろうか。

「克哉、プロとアマの差を見せてやれ」

「へっ、見てな親父い……ド素人ぐらい軽く捻ってやんぜ」

なんで、黒崎のオッサンの息子かぁ……それでもプロらしいな。やっぱり手を抜くのは自殺行為だろう。姑息な手は通用しないだろうし、最初から全力で飛ばすしかねえ。

今のうちに、右腕の筋力を100%に引き上げておこう……メリメリと、嫌な音が響く上に次第に腕も痛くなってくるが……ここは我慢だ。これが通用しなけりゃ黒崎の息子には勝てねえ。

「始め！」

審判を務めるのは黒崎の弟子の男だ。

叫びながら、黒崎の弟子は右腕を大きく振った。すると黒崎の息子は、俺が先制攻撃を仕掛けるつもりがないと気付いた瞬間、

「でえおりゃあああああああああ！」

雄叫びを上げ、凄まじい速さで間合いを詰めてくる。

正直、この目で捉えるのがやっとであった。強い、アイツは間違いないくプロだ。今まで戦ってきたどこの不良よりも確実に強い。しかし、黒崎の息子の拳が目前に迫った……瞬間。キツ、と俺はこの目を凝らし、全神経を集中させ　ギリギリの所で黒崎息子の拳を避けてみせた。

「　　ッ!?」

首を傾げただけであった。黒崎息子の拳が左頬の横を通り、微かな風を頬に感じた。

ヤツは驚いている。俺が攻撃を避けた事自体がありえなかったのだろう。とにかく今の黒崎息子は骨抜き同然　隙だらけであった。

やるとすれば今がチャンスである。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

俺は叫ぶ。飛び込むように黒崎息子の懐に潜り、その拳を限界まで固く握り締め。

狙い 黒崎息子の胸を睨みつけて、

「ッ！」

ゴン！ という鈍い音が響いた。

これは空手だ。顔面を狙うのはNGだ。なので俺が突いたのは胸の中心点。

黒崎息子は、場外へ投げ出された挙句、壁に背中を打ち付けてしまった。

試合の結果は 態々説明するまでもない。

「しょ……勝負アリ……ッ！」

「えええええっ!?!」

「か、克哉あ！」

道場内の弟子達は一斉に驚きの声を上げる。黒崎のオッサンは息子を心配し、小走りで駆け付け黒崎息子の様子を見ていた。やばい……驚きたいのはこっちだよ。黒崎息子って本人もオッサンも言っていたけどプロなんだろ？ つまり……俺、プロに勝っちゃったって事か？

なんで勝っちゃったんだろ。うん……黒崎息子は確かに強かった。強くなかったらあんなに素早い動きは無理だろう。なのに、

素人の拳一発でぶっ飛びやがった。

おかしいな。いくら一撃必殺の筋力100%とは言え、相手はプロ。一撃で倒せてしまうのってやっぱりおかしいよな。それとも俺知らない間に強くなったのか？

なんか、普通に戦っても勝てたような気がしてきた……。

数十分後、俺は着替えて道場を出た。出ようとしたら、黒崎のオツサンに「弟子にならないか？」と言う、猛烈なラブコールを貰ったんだが……正直、面倒なので断っておいた。

それに、この程度じゃ強くなれん事もわかったし……はあ。

マジでどうすりゃいいんだろう……格闘家相手に圧勝ちだった。これって普通の方法じゃ絶対に強くなれないってワケだよな。俺……何時の間に強くなってたんだな。

そりゃそうだ。あの重原の身体を持つ魔法使いにだって勝った。あの時は勝手に身体は重原でも中身が素人だから、所詮は大したことの無い相手だと思っていた。けど、冷静に考えてみると喧嘩じゃ体格差や筋力って結構重要だよな。仮に中身は素人でも、身体は鍛えられた達人の身体。

冷静に考えてみれば……ただの高校生が勝てる相手ではない。

それでも、俺はあの魔法使いに勝ってしまった。重原は武道をやっているし、もっと上手い戦い方をするだろうからさらに強敵なんだろう。だけど、今の俺なら重原にも勝てるかもしれない。

「……はあ」

それでも……いくら武道家並の力を持っていたとしても。魔法使い相手じゃいつも俺はボコボコにされていた。アナスタシアや偽重原とは素手でギリギリ互角。



近藤やアマデーオに至っては、一人じゃ絶対に勝てなかった。弱い。

俺はまだ弱い。人間としては強いかもしれないが……魔法使い相手にしたのはただの雑魚だ。

この程度じゃまだ……暮葉に迷惑を掛けるレベルじゃねえか。だけど、並の武道家じゃあちっとも練習相手にならねえし、一体俺はどうやって修業をすればいいんだ。

これ以上、どうやって強くなればいいんだよ……！

「あー！ すっごい珍しい場所で圭介発見っ！」

不意に、嬉しそうな声が入ってきた。

俺が後ろを振り返ると、初芝高校女子夏服を着用している、ロリロリしていても高校生には見えない少女が、どだだだーっ！と高速接近している最中だった。

浅間あかり。

輝くような橙色のツインテールに、高校生には見えない小柄な体躯を持つ少女。ツンツンとした赤い目は愛と夢と希望に満ちており、まるで勇者のご登場のようであった。

「あ、あかり……？」

コイツ、こんな所で一体なにをやっているんだろうか？

## 第151話 好きなヤツと修業（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ここで予告！ なんとこの作品のエロゲーを某社で開発中です」

大吾「な、なに!？」

圭介「攻略ヒロインはメイン6人+サブ3人の大ボリューム。みさんや青葉りごさん、安 深音さんなど人気声優沢山出演！」

大吾「ちょ、待てっ！ それアニメ声優じゃねえだろ!？」

圭介「エロゲーだからな。あ、ちなみにOPは榊 ゆいさんな」

大吾「つで、絵師とシナリオライターは!？」

圭介「絵師はむりこぶ、シナリオライターは作者だぜ」

大吾「作者……つてのが不安だが、つーか、OPが榊 さんで絵師がむりこぶつて、もしかして作者はゆずクラスタか？ 出演声優もゆず出演経験アリだし」

圭介「しかも、初回限定版を買いと設定資料集やイラスト、さらに全キャラテレカなどもついてくるぜ！」

大吾「そ、それで!？ 値段は!？」

圭介「通常版は9240円（税込）で初回限定版は……なんと！  
あれだけ付録がついていても12040円！」

大吾「うおっ！ こ、これは……初回限定版を買うべきだなっ！」

圭介「そ、それじゃあ俺も早速これを予約しに」

大吾「ぼ、僕も予約予約」

暮葉「しちゃダメです変態さん達っ！」

伊吹「ば、ばか圭介えええええええええええええええええっ！」

圭介「ぎゃああああああああっ！」

大吾「うぎゃああああああああっ！」

ちなみにエロゲー化は当然企画すらありません、常識的に考えて無理です。

## 第152話 食生活

「よ、よく食うな……お前」

「ふごおふがあふごおふえっ！」

「とりあえず、飲み込んでから喋れよ……」

それは黒崎道場へ殴り込みをかけて、アツサリ勝利してしまった後の事。俺は道場付近で偶然にもあかりとバツタリ出会ってしまった。この元気な女の子に嬉しそうな声をかけられ、引くにも引けなかった俺は仕方なく、古宇坂駅前付近にあるマックにあかりを連れてきたのだが……。

なんだ、このカオスな状況。他のお客さんの注目の的になってるよ俺達。ガツガツと色々なものを食べているあかりは、女の子……と言うよりは、少年漫画の大食いキャラであった。

「ぶ、はあっ！ いやぁーうまいうまい！ こんなうまい飯は久々だなあっ！」

「お前普段何食ってんだよ」

「ん？ 野菜炒めだろ？」

「うまそうじゃねえかよ」

「圭介が想像しているような立派なもんじゃなくって、あたいらが普段食ってるのは特売キャベツ98円だけだ。しかも少量ずつ毎日だからなっ！」

「……他には？」

「お金がある時はカレーを食べるなっ」

「ほら！ 結構マトモなもの食ってるじゃねえか」

「圭介が想像しているような立派なモンじゃないからなっ。当然具なんて入ってない！」

「かけそばならぬかけカレー！？」

「あとはパンの耳をちよつとずつか？ アレ油で揚げて砂糖をかけるとうまいんだよなあ！」

「それ飯なの！？ ちゃんと栄養取れるのかよ！？」

なんとなくわかったよ。あかりがマツクのハンバーガー程度で、こんなにうまそうにガツガツと食べる理由が……コイツ、普段口クな飯食ってないんだな。もしかして、あかりが幼児体型なのって栄養不足のせいだったりするんだろうか。

可能性は十分ありえる。キャベツのみ野菜炒めが数日。カレーは具なし。主食のパンに至っては耳をちよつとずつ油で揚げるだけ。こんな飯でバランスのいい栄養を取れるハズがない。

そりゃあ身体だって成長しませんよ。長身イケメンの浅間部長は奇跡だな。

だけどこれから先、流石に成長は無理かもしれないが、こんな食生活を続けていたらそのうち栄養失調にでもなるんじゃないか？ 不安だ……浅間家の現実がひどすぎる。

そつえば、合宿の時もカレーとか嬉しそうに食っていたな。っ

て事は、兄妹揃って料理がうまいのって自炊しているからなのか。それも、なるべく安い飯になるように……。

「だからマツクとかあたいにとっては聖地だ！　こんなうまい飯……あたい、もう死んでもいいくらいだよ！」

「そこまで行っちゃうのかよ。どんだけ普段ひどい飯食ってたんだよ！」

マツクが聖地に思えるほどの食生活を送っているとは……本気で心配だ。あかりだけじゃなくて浅間部長の健康も心配だ。一応兄姉の事は、あかりと一緒にものを食べてるんだろ。だったらあかりがさつき挙げた悲惨な飯の数々を、毎日食べているって事だよな？

……初めて浅間部長が可哀想に思えてきた。それ以上にあかりが可哀想だけど。

友達がここまでひどい食生活を送っていたとは……これは、アレかな。一度でいいからマトモなご飯を恵んであげたほうがいいのかな？

「なあ、あかり……」

「んみや？　どーしたんだよ圭介」

「よかつたら今度焼きそばでも御馳走してやろうか？」

「や、焼きそばってアレか！？　あの超豪華料理の焼きそばなんだよな！？」

「あ、ああ。多分お前の考えているもので合ってると思う」

「おお！ 焼きそばを食べられるだなんて あたいもう死んでもいいっ！」

「待て！ 死ぬな！ 焼きそばくらいで死ぬなああああああ  
ああああっ！」

この時俺は確信した。あかりは母親が退院した後も 相当厳しい生活を送っていると。

アフリカの難民と比べれば、そりゃあ裕福な暮らしをしているかもしれないが……現代日本の水準からするとひどすぎるぞ、浅間家。一日に必要なカロリーすら足りてなさそうだ。山籠り中の重原でさえ動物を狩って生活していたらしいのに……つか、動物狩猟って密猟じゃねえのか？

まあいいや……重原の山籠りの話をすると、24時間は必要だから黙っとこう。

それから数十分後、マツクを出た俺達は特に用事はなかったが、なんとなくぶらりと古宇坂の街を歩いてた。かれこれ10年以上はこの街に住んでいるけど、あんまり変わらないな。

精々商店が無くなっていたり、結構大きなスーパーが出来たくらいだ。基本的な景観は俺が小学生だった頃と全く変わっていない。まっ、10年で変わる街なんて殆どないだろうが。

それにしても、流石に駅前に来ると人が多いモンだなあ。

これだけ多いと、バツタリ知り合いに会ってイベントもありそうだが、そんなイベントは出来れば起きて欲しくないものだ。だって今、俺はあかりと2人で歩いていんだもん。知り合いにカップルだと思われるのは何か嫌な感じである。

……っていうか、あかりって確か俺に告白してきたよな。

その割には今日は普通だが……もう俺のことを諦めたんだろうか。

だとしたら都合がいい。あかりとはいつも通り　友達として遊べるようになるからな。

「あ、圭介っ！」

「あん？」

あかりが楽しそうに小走りで行った先は　古宇坂で一番大きなゲーセンの前である。

「ゲーセン？」

「なあ圭介っ！　ここでちょっと遊ぼっ！」

「遊ぶって……お前お金あるのか？」

「ふっふー、あたいは資金管理大ベテラン様だ！　これくらい大丈夫なんだからなっ！」

「そうか。その大ベテラン様に一つだけ言いたい事があるぜ」

「んみや、なーに圭介？」

「ゲーセンで遊ぶ金を食費に使えよっ！」

「ええ〜？　あたいだって遊びたいんだよ……な、圭介！　一回でいいから格ゲーやろうよ格ゲー！」

格ゲーねえ……確か、このゲーセンの場合一回1000円だったよな。けど、あかりにとって100円って結構な出費じゃないか？



やっぱりここは、あかりの健康（食生活的な意味で）の為に、ゲーセンは諦めて静かな公園お散歩コースのほうがいいんじゃないか？

だけど……なんだこの訴えの眼差しは。僅かに赤く染まった顔にうるうるとした上目遣いは我々男子にとっては、核爆弾以上に強力な兵器である。やめろおおおおっ！ これ以上そんな風に俺を見ないでくれ。引く事が出来なくなっちまうじゃねえか！

「……だめ？」

……くはっ。

今の一撃で死んだ……俺はもう、我慢の限界だ。これ以上は耐えられない。全く俺もまだまだ修行不足だな。この程度のおねだりで死んでしまうとは……。

「わかった……一回だ、一回だけだからな」

あかりの食費の為に、浅間家の厳しい家計を考えた結果 1  
00円ゲーム一回。

これがギリギリの妥協点である。  
それ以上は浅間家にとってもマイナスだろうし。それに、あかりだって遊びたい年頃だから少しくらいならOKだろうと思った結果が 100円ゲーム一回である。

こうして俺とあかりはゲーセンに入ったわけで、早速 格ゲー席に座ったのである。

【AQUAPAZA】というものを御存知だろうか。う われるものとか、ToHeart2などのゲームのキャラで、なんと格闘が出来ちゃうゲームである。当然、俺は大好きな小 愛佳ちゃんを使ってやるぜ。あかりは……ハ オロか。上等だ、愛佳ちゃんの強さを思い知らせてやる。

いや、愛佳ちゃんの強さじゃない　ゲーセンファイターの俺の  
実力をな！

「うおおおおおおおおお！　ユニバアアアアアアアアアアア  
アアアス！」

俺は叫んだ。ボタンを連打した。必殺技を正確に打ち込んだ。勝  
てる……この調子だとあかりはゲームド素人だ。この調子で行けば  
俺の勝利は確実だ！

第152話 食生活（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「おお、圭介が珍しく本気を出した！」

重原「圭介はホントに格ゲー強いからねえ」

圭介「ふふふ……ゲームで俺に勝てるヤツは いない！」

大吾「強気だな」

重原「これで負けたら恥だ、」

圭介「まあ見てろ。お前らが束になっても勝てなかった俺が  
ア  
ツサリ勝利するから！」

大吾「け、圭介すげえ調子に乗ってるな……」

重原「だけど、事実だから言い返せない悲しい現実……」

## 第153話 決着

「……」

あなたは神を信じますか？ 俺は信じません。だって神様は姿が見えないし、俺らに何も与えてくれないんだもの。これを言ったら宗教家には怒られるだろう。だけど、俺個人の意見としては神様は絶対にいないはずだ。もし神様がいたとしたら 敗北と言う言葉はないんだから。

つまり、俺は何が言いたいのかということ……。  
負けた。

格ゲーでド素人に負けた。信じたくないんだけどね、現実だから仕方がない。まさかあれだけ動きの鈍かったあかりが、途中から16連打の高林名人もビックリな腕前になるとは……。トホホ。

「わっははははは！ 何が四丁目の撃破王だっ！ 弱いな圭介！」  
デルタフォース

「うあああああああっ！ い、言うなっ！ 弱いとか言わないでええええええっ！」

なんでだよちくしょう。それでも俺……。大吾や重原には負けた事がなかったのに。

一回別な格ゲーでランキング1位のヤツと戦った時、苦戦はしたが、それでもなんとか勝てたって言うのに……。なんでド素人のあかりに負けたんだよ！

日本格ゲー界現チャンピオンの俺が……。し、素人のあかりに負けるだなんてっ！

「まあまあまあ！ あたいに負けただけまだありがたいと思えよな

！ あたいのエロ兄貴に負けるよりは100倍マシだろっ！」

そう言われてもねえ……あかりは一応女の子だし、しかも格ゲード素人だし。やっぱり多少は経験のある浅間部長に負けるほうが、シヨックは少ない気がするんだよね。でも、あかりの機嫌を損ねたらもう一銭させられそうだし……。

約束は約束だ、100円ゲーム一戦限定。今回は素直に負けを認めてやる、だから頼みますから第二ラウンドはやめてくれ。

「きゃ〜キスプリ撮っちゃった！」

「マジ僕、みずっちの事ちょ〜愛してっから！」

不意に耳に入ったどこぞのバカップルの騒ぎ声。うるせえな……まあ、ゲーセン自体がうるさい店なんだけど、この騒音の中よく声が響くよ。っーかどこのリア充だ？

振り返ると、四角い箱の中からカップルが……って、

「お、大林イ!?!」

「……は？ げえ!?! ふ、藤島……っ」

おいおいおい、どういう事なんだよコレは。なんであのサッカー少年大林君が、あんなロリ顔の彼女を連れて歩いてるんだよ。しかもキスプリってなんだよオイ。たまにアイドルのキスプリが流出して問題になるけど、やっぱりその事言っただよな。

つまり大林は隣にいる女の子と キスプリを撮ったって事か！

「てめえ……彼女いたのかよっ！」

「う、ぐ……ふ、藤島だつて人の事言えないだろ！ 誰だよその隣の子は!？」

「あ、あたいは別に圭介の彼女なんかじゃ……彼女なんか……じゃ……っ」

「あの、あかりさん？ どうして赤くなってるんでせう？」

あかりはかあ、と頬を紅潮させていた。

そこで赤くなるなよ。余計大林に誤解されちまうじゃねえか。つか大林、その言い草だけ隣の子が彼女って認めてるんだな。ちくしょう大林はリア充だったのかよ！

……こりゃあ、黒木達に報告だな。あゝあ可哀想に……きつと大林は明日、見るも無残な屍と化していることだろう。嫉妬した黒木と赤佐の手によってな。

「よし藤島、協定を結ぼう」

「あ？ きよ、協定？」

「僕達は何も見なかった。僕達に彼女がいるのはクラスのみんなには内緒だ、よろしい？」

「お、おう……」

あかりは彼女じゃないんだけどね。まあ、ゲーセンにいる時点でアレだし、変な誤解を生んで俺がシバかれない為にも、この協定に署名しておいた方が身のためだろう。

署名と言っても、署名用紙なんてものはないけどな。

「それじゃあさらばだ藤島。さつ、次行こうかあゝみずつち」

「うん！ ねえねえ勇太あゝ今の人達友達？」

「片方はそうだけでもう片方は知らない、アイツ藤島って言うんだけど多分アイツの彼女じゃない？」

「可愛い子だったねゝ！ 乗り替えたらダメだよ？」

「ははっ！ 僕はみずつち一筋だぜえゝ」

なんちゅーラブラブカップルだ。見ていて腹が立つてくるほどラブラブだ。一生イチャラブしてやがれこのリア充め。つーか、完全に大林にあかりが彼女だと思われたんだが、どうしよ？

肝心のあかりは黙りこんだままだし……なんだか気まずい空気だ。と、とりあえず……今の空気はあまりにも気まずすぎる。なんかと、この空気を明るくするルートへ持っていかなければ。

「よし、もう一戦ゲームでもやるか！ 100円くらい俺が出してやるよっ！」

「……なあ、圭介っ」

「な、なんだよ？」

今まで一番騒がしかったあかりが、不自然なまでに静かな今の状況……なんだろう、不気味で仕方がないや。一体あかりのヤツどうしちまったんだ？

ひょっとして、さっきの誤解を気にしてるのか？

そりゃあまあ、俺も大林に誤解されてヤバいなとは思っているが

……何もここまで気にする必要はないと思うんだ。それともあかり、まさかまだ俺の事が……いや、流石にないだろ。だって今日のあかりはいつも通りだったじゃないか。

もう吹っ切れたんじゃない……のか？

「こんな所で言うのもなんだけど……あたい、圭介が好きだっ」

「……っ！」

あかりは胸に手を当て、俺を見上げていた。すっかり顔は紅潮しており、どこか色っぽいうるっとした瞳になっていた。いかん……これは誰がどう見ても恋する年頃の少女。

「コイツ、俺の事を全く諦めていねえ……」。

やんちゃ少年系少女だったあかりは、すっかり女の子と化していた。しかも、少しずつ俺に近付いて来ているような気がする。ちょっとずつ、不器用に歩み寄ってきている。

正直俺は困っていた。胸はときどき鼓動が早まり、かぁっと顔も熱くなる。

「だけど、それと恋心は別である。」

エロいシーンに遭遇したって似たような反応はするぞ。だから別に……俺はあかりが好きってわけではない……と思う。

「あたい、前にも告白したよな？」

「あ、ああ、夏休みの前だっけか」

「まだあたい、圭介からの返事を聞いていない……」

いや、だってアンタ逃げたじゃん。とつても恥ずかしそうな顔をして。その後ろ姿が完全恋する乙女で何とも言えぬ感じだったけど。



「かコレ、ホントにあかりなのか？」

あかりにしては……か、可愛すぎるだろオイっ。

「だから……ここで聞かせるよなっ。圭介はあたいの事どう想ってるのか……っ」

言葉はやや乱暴ながら、彼女は本気の様子だ。

冗談を飛ばす場面でない事くらい、俺でも容易に理解ができた。

彼女は 本気で俺の事が好きみたいである。だから勇気を振り絞って告白したんだろう。

問題は……俺の気持ちだ。実を言うと、俺はこの所ずっと悩んでいるんだ。それは俺自身がどう思っているかについてだ。わからないんだよ。最近俺の中で渦巻いている何かが……。それがわからない以上、俺は誰にも何とも言えない。だから。

「……少し、考えさせてくれないか？」

「か、考えるって……保留かよっ！」

「曖昧な答えなのは分かってるって。だけどよ……お前に返事をする前に、俺は決着をつけなきゃいけないんだ」

自分の気持ち な。

「決着？ 決着って何にだよ？」

「今は言えねえけど、返事をする時にちゃんと説明はする」

俺の言葉にあかりは黙りこむ。がやがや、という喧騒の中で彼女は迷っていた。

保留されて逃げられるかもしれない。おそらく、彼女はそう思っているのだろう。

それも手の一つだけど……そんなサイテーな事、俺はやりたくない。

あかりは、そんな俺の気持ちに気づいたように顔を上げ、

「……わかった。その代わりに、さっさと決着つけるよなっ」

一瞬しよんぼりしていたあかりの顔が、一気に太陽のように眩しくなった。

なんでだよ、なんでこんな明るい顔が出来るんだよ。もしかしたら、あかりの気持ちに伝えてやれないかもしれないのに。

だけど……あかりの言う通りだな。さっさと決着をつけなきゃいけない。

その結果はどうあれ、何事も気持ちが一番だ。

その気持ちに決着を付けずには 何も言える事はない。

「必ずつける、だからもう少しだけ待っていてくれ」

これが今の俺に唯一言える事 　あかりと交わした唯一の約束であつた。

## 第153話 決着（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回は読者のみなさんの性癖を診断するぜ、以下の選択肢から好きなキャラを選んでくれ！」

かなりいい加減な診断です+下ネタ注意。

- ・木下暮葉
- ・国宗伊吹
- ・明智凧紗
- ・浅間あかり
- ・青山千早
- ・藤島葵
- ・小坂亜紀
- ・西園寺雪乃
- ・白藤早苗
- ・ミネット・ローラン

結果は

・木下暮葉を選んだあなた。

あなたはズバリロリコンです。尽くしてくれるタイプが好きみたいですね。

自分の欲望を素直に満たしてくれる、そんなプレイを望んでいない

でしょうか？

・ 国宗伊吹を選んだあなた。

もしかして言う事を聞かない子猫みたいな女の子が好きでしょうか？  
ツンツンしていながら、一度デレるとにやんにやん……そのギャツ  
プが堪らなく好きなんでしょう。そんな貴方はズバリ、おへそをペ  
ロペロしたいと思っています。

・ 明智凧紗を選んだあなた。

ズバリ足フェチです。誰がなんと言おうと足フェチです。確かに彼  
女は大きなおっぱいの持ち主ですが、何より素晴らしいのは足だと  
思います。

よって、画面の前のあなたはきつと足フェチでしょう。

・ 浅間あかりを選んだあなた。

ズバリあなたはロリコンですね。そんなもってツインテール萌えで  
しょう。

ほっぺたをぶにぶにしたいと思っていますでしょうか？

・ 青山千早を選んだあなた

ひよっとして、貴方は純粋な心の持ち主かもしれません。  
この中で一番マトモな性癖の持ち主かもしれません。

・ 藤島葵を選んだあなた。

あなたはおそらくスコンです。近親相姦モノがお好きなのでしょう

う。

でも、現実でやっちゃダメですよ。エロゲーで我慢しましょう。

・小坂亜紀を選んだあなた。

あなたはおっぱい星人です。おっぱいを愛し、おっぱいの為に死ぬおっぱいの為に生まれてきた。そんな感じのお方ではないでしょうか？

ちなみに、あなたは巨乳派でしょう。

・西園寺雪乃を選んだあなた。

ズバリ貴方はDMです。虐められたいと思っていませんか？叩かれたり罵られたり冷たい視線で見られると、ついハアハアしちゃいませんか？

ある意味一番害のない性癖ですが、その性癖を公の場で発動すると当然キモがられますので、時と場所を選んで発動させましょう。

・白藤早苗を選んだあなた。

あなたは力で人を支配したいと思っていませんか？  
大人しい子を支配して、いじめて……あなたはDSかもしれません。しかし決して悪い事ではないです。ただ、度が過ぎると犯罪ですの  
で気をつけましょう。

・ミニット・ローランを選んだあなた。

ロリコンです。まだ間に合います……警察に行きましょう。  
決して世の中の幼女を襲わないでください。

大吾「……なんだよこれ、ロクな結果がねえ」

重原「ちなみに作者も圭介も心理学なんて知らないんだよね」

黒木「じゃあアウト気味な診断作るなよ！」

## 第154話 新たな生活

古宇坂市内にあるとあるマンション。ここがクソガキの住処だと言う場所で、このオレ早川悠が今日から過ごす場所である。あのクソガキの部屋は8階、いちいちエレベーターに乗らねえとマンションから出る事も入る事も出来ねえのか。まったく、身障者にはキツイ家だ……クソツタレ。

「広くて綺麗なの！ ミネットちゃん、アルファ隊って結構お金を無駄に使ってるの？」

「わからないよ。ただ本隊がミネットに隠れ家として、ここを提供してきただけなんだよっ」

「どっちにしても……オマエ一人で住むには贅沢すぎんだろオ……」

「ひどい、これからはミネットと貴方とリーネさんの三人暮らしなんだよ！ しかも貴方は一回この家上がった事があるよね？」

「どうでもいいっつーの……それにしても、こんな所に住んでいて大丈夫なんだからオカ。」

佐井学園にしてもサヴィエトにしても。襲撃する時は結構大胆だ。襲ってくる時はビルごとぶっ飛ばそうとするに違いねエ。8階って結構高い所にあるからって、安心は出来ねえぞ。

いくらオレでも、建物ごと吹き飛ばされちまえば、守りようがねエっつーの。まあコイツらはそんなリスクなんて、クソも考えていねエみたいだな。氣イ抜きすぎだクソバカ。オレを匿うつてのは佐井学園にもサヴィエトにも狙われるって事だ。コイツらはソレを分かってンのか？

「さーさーっ！ 昨日お掃除したから綺麗なハズだよっ。そのソファーにでも腰かけてゆっくり って貴方！ リーネさんもいるのに一人でソファー占領しちゃダメだよ！」

オレはこの部屋に来て最初に、白くて綺麗なソファーに寝っ転がったが、そんな行動にクソガキが怒ってきやがった。

「ま、まあまあミネットちゃん。悠ちゃんもお疲れなの、少し休ませてあげようっ？」

「だ、だけどっ」

「それよりボク達はお買い物に行こうなの」

リーネ……クソガキ2号は少しは人に優しいみたいだな。まった

く……クソガキ1号もリーネを見習ってもう少し優しくしゃがれ。

こっちは杖つかねえと歩けねエんだっっの。

……ハア、ちっとだけ寝るか……早起きして眠いし、クソガキ共が出かけて静かな今のうちに睡眠を取っておこう。それにしても……

…このソファー寝心地がいいな。

……それから数時間後。

不意にオレは目を覚ました。別に悪い夢を見たわけではねエ。元々、オレは夢なんて見ねエ人だから悪夢なんてモンはありえねエ。

オレが目覚めたのは自然的なモノだ。そんなどうでもいい事を脳内で整理しながら、オレは左手を首筋のチョーカーへと持っていった。……っといけねエ、なにオレは能力使用モードに変更しようとし



てんだ。たとえウツカリだとしても敵がない時にそれをやるのはマズイ。

不便な身体が……魔力エネルギー変換機を使っても、15分しか超能力者に戻れねエ。

こんな身体でこれから先、どうしろってんだ……15分以内に敵を駆逐できるか？

とにかく15分でどう戦うか、そういう作戦を練っておくべきだろう。オレをブラックリストに登録したサヴェイェトはもちろん、佐井学園のこのまま黙っちゃいねエハズだ。どっちが先に攻撃を仕掛けてくるかは知らねエが……連中の攻撃は必ず来る。

それがオレを殺す為か、オレを理由する為かは知らねエがな……。

「さて、と……どうすっかなア……」

「いやあああああああああああ……」

あア……クソガキの叫び声じゃねエか。佐井学園かサヴェイェト、どっちかは知らねエがもう襲撃者が来やがったってのか。クソツタレ……こっちはまだ考えている途中だつてのに。

まア仕方ねえ。たとえ15分限定とは言え、その間のオレは超能力者。しかもこの世界でも最強って呼ばれる存在だった。そんなオレに帰れるんだ。最強のオレなら、クソ野郎の一人くらい蹴散らすのは余裕ってヤツだろう。

面白エ……ゴミ掃除だ。10秒でクソ野郎の居場所を血だまりに変えてやる。

オレは変換機のスイッチを押し、能力使用モードに入れた。電子音と同時に頭に何とも言えぬ違和感を覚え、頭の回転も良くなったような気がした。

杖は……能力使用モードなら風の力を使って歩けるし、本来はいらねえ。それでも戦闘の後すぐスイッチを切る事を考えれば、持つ

ていったほうが楽であろう。

オレは静かに歩み始め、クソガキ共の居場所を探す。

「ひゃうー！」

「おおおお、落ちついて欲しいのミネットちゃん！」

風呂場か、あの白い浴室が真っ赤に染まるかもなア……まあ関係ねエ。クソ野郎を潰さねえと日常を営めねエからな。それにしてもミネットで対処が出来ねエヤツか。だとすると、相手は相当の使い手であると見た。佐井学園の超能力者かサヴィエトの魔法使い。

どっちかは知らねえが……まア、ぶち殺しは確定だア。

オレは風呂場へ繋がる扉を開けた。さて どのクソ野郎だ……。

「……っ」

「……は、あわ……っ」

「あん …？」

なんだコレは……クソ野郎はいねエ。

いるのは素っ裸のクソガキ2人だ。ミネットはホントにクソガキだが……リーネは顔と身長さえ見なけりゃ少しは救いがあるかもしれないねエ。主に胸のあたりがな。

「きゃっっっっ！」

「ゆゆゆゆ、悠ちゃんっ!?!」

「ど、堂々とした覗きだよっ！ 悠のばか、えっち、すけべっ！」

「なにピンクい事言っつてやがるんだクソガキ……さっきの悲鳴はなんだ？」

「え、えと……さっきの悲鳴はミネットがナメクジに驚いただけなの　ふ、ごおっ!？」

「はわわわっ！　り、リーネさんそんな事は言わなくてもいいんだよっ！」

ミネットは慌ててリーネの口を塞ぎ、恥ずかしそうに抗議をしていやる。

しかも丸見えだ。恥ずかし思い出暴露と、自分の素っ裸をオレに見られるの、コイツらはどっちが恥ずかしいんだか。っーかナメクジに驚いていただけかよ。紛らわしいんだっつーの。

おかげで無駄に魔力を消費した。後でミネットに補充してもらわねエとな。

それにしても、一般人つてのはこんな日常を送ってんのか？　一人暮らしならともかく女と一緒に過ごすつてのは、無駄に神経を使わねえとダメなモンなのか……面倒かもしれねエ。

まっ……とりあえずは戻るか。

## 第154話 新たな生活（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「へっくち！」

圭介「可愛いくしゃみだな」

伊吹「う、うっさいわね！ 風邪気味なのよっ！」

圭介「夏風邪かよ（現実では秋ですが、作中ではまだ夏です）」

伊吹「わ、悪い……？ あんたはどつなのよ？」

圭介「俺は風邪なんかひかねえよ」

暮葉「拙者聞いた事があります。馬鹿は風邪をひかないらしいのです！」

葵「お兄ちゃん馬鹿だったんだ!？」

伊吹「た、確かに圭介は馬鹿ね……っ」

圭介「なにそのひどい結論!？」

## 第155話 クソガキ探し

数十分後の話。折角だからクソガキ共が上がった後、オレも気分転換の為にシャワーを浴びる事にしたのだが……それはオレがシャワーから上がった後の話だ。リビングへ行くと、リーネが黒々しい怪しげな機械をいじっている。それだけで随分奇怪な光景だが……何か足りねエ。

いつも騒いでいる、一番うるさいヤツが居ねエ気がする。

オレがシャワーを浴びている間に何処に消えたんだ、あのクソガキは。

「おい、リーネ」

「ん、何なの？ ひょっとしてこの機械が気になるの？」

「ソイツの説明は後で聞いてやろう。その前にミネットはどこに消えた？」

「これは新型蓄積機って言う機械なの。これを小型化出来れば悠ちゃんの制限時間が」

「人の話ガン無視してンじゃねエぞコラア！」

「まあ、悠ちゃん心配性なの。ミネットちゃんは多分遊びに行ったハズなの」

「……ど言う事だ」

「ミネットちゃんには近所に友達がいるらしいの」

「……チツ」

友達かア……その前にあのクソガキ、ちゃんと理解してんのか？  
オレ達は狙われている身なんだよ。ンで、あのクソガキがオレ達を狙っているクソ野郎をシバく組織の一員だつて事を。つたく……  
呑気なクソガキだ。こっちはいつ裏世界のクソ共に襲撃されるかビクビクしている所なんだよ。変換機コイッが無けりゃ自己保身も出来ねエしな。

……制限時間は残り13分。チツ、さつき2分無駄遣いしたからな。まア、相手がただの雑魚なら10分以内で片付けられるだろう。そうと決まればやる事は一つだア。

オレはリーネに背を向け、杖について玄関へと向かった。

「あれ、もしかして探しに行くの？」

「……」

「悠ちゃん本当に心配性なの。でも止めはしないの、噂だと風剣フウケンのシルフが動き始めたらしいの」

「風剣のシルフ……なんだそりゃ？」

「ボクもミネットちゃんから聞いた程度なの。でも、すつごく強い魔法使いらしいの」

つまり、クソガキはとんでもねエ輩が襲撃してくるヤツと分かってて、にも関わらず友達つてのと遊びに行つたつてワケか。その友達を巻きこんだらどうするんだ……？

それに、あのクソガキの能力じゃあ強いヤツと戦わせるのは、あ

のクソガキの寿命を縮める結果になるかもしれない。やっぱりあのガキは連れ戻すべきか……？

そう思ったオレはリーネに特に何も伝えず、背を向けてマンションを後にした。

その後、オレはクソガキを探すべく、不便な身体に鞭を打って市内を歩いていった。

三丁目付近にある児童公園。ここにいるかと思っただが……流石にいないか。いくらミネットが見た目も中身もガキだからって、流石に公園で遊ぶほど幼くはなかったか。チツ、単純なクソガキだと思っただけで甘く見ていた。中々探すのが難しいじゃねエかよ……クソツタレ。

……つと、なんだ。ポケットの中から振動が身体に伝わる。携帯電話か……おそらくリーネのヤツがオレに電話でもかけてきたのだろう。

仕方ねえ……出る気はしねエが、一応相手にしてやるかア。

『よかつたなの！ ボク、出てくれないと思ってたの』

「……なんの用だア？」

『よく考えたら、ボク魔力を探る事が出来たの』

「そういう事は最初に言えクソガキ2号……要するに、オレは無駄に歩いたって事かア？」

『そうでもないの。その近くに初芝高校があるハズなの』

「……オレが前にブツ壊した所か？」

『そ、そういう事になるのかな……？ その近くにミネットちゃん  
はいるハズなの』

「ふうん……っで、オレはそっちに向かえばいいんだな」

『そういう事なの！』

そういう事かア……まつ、あのクソガキが同じ所にいるとは思え  
ねえが、それでも初芝高校に行ってみる価値はあるだろう。待てよ  
……ミネットのクソガキはアルファ隊。ンで、初芝高校には木下っ  
てアルファ隊のチビが居たよな。

もしクソガキと遊んでいるのがあのチビだったら、また戦う必要  
があんのか？

「冗談じゃねエ……こっちは切羽詰まってんだ。

あんなチビ構ってる余裕なんざ一切ねエンだよ。

『……ねえ悠ちゃん。悠ちゃんはどうして……その、他人に冷たい  
の？』

「……あ？」

『いや、正確には悠ちゃん。あえて他人を拒んでいる気がするの』

「……オマエがオレに説教くれんのかア？」

『ボクは悠ちゃんが心配なの。悠ちゃんだって人間なの、それなの  
に……』



「普通の人間じゃねエよ、普通の人間にも戻れねエ……」

一言をすらすらと言い終えると、ふとオレは昔の事を思い出した。まだ、背丈もミニネットより低かった頃の時かア。オレが学園の前身特科会に引き取られるキツカケとなった……。

オレはその日以来、何事にも興味を無くした。あえて興味を無くした。

フン、今更……くだらねエっつーの……。

『……悠ちゃん言葉はどこか寂しそうな』

「寂しい？ オレの汚エ言葉のどこにそんな要素が含まれてんだ？」

『そう、言葉は汚いの。だから誰かを求めているみたいに聞こえる』

「……どオ言う事だ？」

『弱音を吐いて構って欲しい人がいるって、よく聞く話なの。悠ちゃんの場合はそれと似たようなものなのかな』

……チツ、そんな事……一番分かってんのは自分自身なんだよ。だから今更なんだ。あのクソガキ2号に指摘された所で、今更どうなるんだ？

何か変わる事でもあんのかよ。ねエだろ……マイナスの方向には変わるかもだがなア。

『悠ちゃん……もう少し、笑顔になろうなの』

「……そいつは無理だ。今更笑って何になる？ そもそも、笑った

瞬間クソ共が潰しに掛かるかもしれねエ。オマエやミネットがクソ共に殺されるかもしれねエんだ」

『それでも悠ちゃんにはボクにはない……笑顔を守る力があるの』

「……フン」

何が笑顔を守る力だ……オレの能力はそんな素晴らしい力じゃねエ。ただ、可愛い容姿を持った女さえ肉塊に変え、あらゆる物体を破壊し尽くす……オレの能力はそういう力だ。

そんな血塗れの力で、笑顔を守る事なんざ出来るわけがねエ。力を使えば、笑顔じゃなくて血の涙が増えるだけだろう。第一、そんな大層な力があれば特異点狩りなんてしてねエよ。

もしも、この能力で特異点狩りをやめさせたなら……。

もしも、この能力で学園を潰す事が出来たなら……。

もしも、この能力で何かを守る事が出来るのなら……。

……考えただけでもくだらねエ……不可能なんだっつーの。そんなものは、ヒーローが出てくる夢物語でしか実現不可能なんだ。オレはただの殺人鬼だア、出来るハズがねエ……。

「くっくだらねエ、手遅れだっつーの……」

『手遅れじゃないの』

「オマエらも不幸なモンだ……末期ガン患者並のどうしようもないヤツを、態々自分達の住処に抱え込んだんだからな」

『そんな事は絶対はないの。悠ちゃんはまだやり直しが効く段階なの』

「その言い草……オマエのオレの母さんかア？」

『失敬な！？　ボクはまだギリギリ15歳なの！』

要するに……年下に説教されたってワケか、クソツタレが。

そう思ったオレは咄嗟に電話を切り、空を眺めた。さつきまで快晴だった空は、いつの間にか雲のせいで灰色に染まっていた。嫌な天気だ……雨でも降ってきそうだな。

……さて、そろそろクソガキの事でも探しに行くか。

とりあえず、クソガキがいるって話の初芝高校へ向かって歩き始める。

そこでまた、随分と昔の事を思い出した。

場所は東京の銀座のあたりだ。まだ黒いランドセルを背負っていた頃、既に超能力に目覚めていたがその事は周囲に黙っていた。世の中は……そういうモノに冷たいと、当時のオレは子供ながら理解していたからだ。だが……親に連れられて遊んでいたあの日、オレは不良に絡まれた。

怖かった。

喧嘩なんてした事のねエオレは、いきなりド派手な奴らに絡まれた。金を出せだのぶん殴るだの殺すだのという怒号。ガキがデカいやツらから、それを聞いて怖がらないハズがない。

オレは逃げようとしたが、捕まって殴られそうになってしまった。だから　オレは超能力を人に向かつて使った。不良は死んだ……自分の能力がそこまで強いとは思わなかったのだ。

その後、周囲の大人達や警察だの自衛隊だの……全てがオレに襲い掛かり、オレの前で壊滅してしまった……それはオレの力のせいだ。こうしてオレは行き場を無くした。同時に、他人との接触は世界の滅びに繋がるとも思った。子供ながらに嫌だったんだらう……。

こうしてオレは、あえて一人でいる事を望んだ。

当然、騒動の原因かつ一人のオレに居場所はなくなった。そんな

孤独なオレに 居場所を提供したのが学園の前身で、その研究を受けて超能力に磨きがかかった。

だが、その果てにあったモノは血も涙もない、殺戮の世界。

「くっだらねエ……」

「何がくだらないのよ？」

「……あ？」

不意に耳に声が入ってきた。独り言を聞かれたか……しかしなんだ、どこかで聞き覚えのある声のような気がした。なので振り返ってみると、

「あ、あんた……あの時の!？」

そこにいたのは 制服姿の国宗伊吹ってヤツだった。

第155話 クソガキ探し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「セロリだ」

大吾「セロリだな」

重原「セロリだね」

伊吹「せ、セロリってなによ？」

圭介「過去までセロリだったな」

大吾「性格はセロリだったけどな」

重原「どこまでセロリ化するんだが」

伊吹「だ、だからセロリって何よ？」

圭介「そついえばセロリも心配性だよな」

大吾「セロリはロリコンだもん」

重原「こっちもセロリ並にロリコン+心配性だね」

伊吹「だからセロリってなんなのよっ!？」

## 第156話 言えはいいだる

児童公園。

オレはクソガキを探すためだけに、こんな場所へ来たのだが……  
チツ、まさか国宗のヤツと遭遇するとは予想外だった。現在、オレは公園のペンキ塗りたてのベンチに座っていた。若干シンナー臭いベンチに国宗と2人で座っていたのだ。

「……ガキ探してんだから、あんまりオレを足止めしてんじやねエよクソアマ。」

「っで、結局あんたは暮葉達とどういう関係だったわけ？ いきなり漫画もビックリな戦闘始めちゃうわけだし、何か事情でもあんのよね？」

「……フン、オマエにそれを知る権利はねエ……」

「な、なによ！ こっちは結構心配してるのよ!？」

「裏世界に手エ出すと……ロクな事にならねエぞ」

「う、裏世界って……」

「……ッ」

国宗は一応一般人だ。前にコイツの前で戦った事でさえ本当はま  
ずい事だ。チビと西園寺との戦いでオレは とんでもないモノを  
一般人に見せつけてしまった。

幸い、それが超能力者の能力ちかひによる破壊だとは思われていない。  
それだけでも少しは救いがあるのかもしれないが、これ以上国宗を

こつちの世界に引き込むわけにはいかねエ。

あんなクソツタレた世界に　ド素人の一般人を巻きこむわけにはいかねエ。

もし巻き込もうとするヤツがいるのなら……っといけねエ。本当はこんな事を考えている場合じゃねエンだった。さつさとあのクソガキを探さねえと。そういえば国宗は初芝生徒、あのクソガキがいる場所も初芝らしい。この女が何かを知っている可能性があるかもしれないねエ。

「オマエ、こんな顔のヤツを学校の近くで見なかったか？」

オレはポケットから携帯電話を取り出し、ミネットの画像を国宗に見せた。確かコイツは前にもこのガキの画像を見た事があったはずだ。そのせいか写真を見た瞬間、国宗は一瞬ぴくんと身体を震わせ口を僅かに開けた。どうやら……覚えているようだな。

「この子って、前にも探していた子よね？」

「ああ……今丁度探している所だ」

「前から思ってたけど、あんたとその子ってどういう関係なの？  
兄妹にしては全然似てないけど……」

「話すのは面倒臭エ……色々事情があつてコイツと暮らす事になつてんだ……クソツタレ」

「つまり、あんたが面倒を見ているって感じなの？」

「まア……間違つてはいねエな」

ホントに世話の焼けるクソガキだ。人がこうして探しているっていうのに、全くどこにも居やしねエじゃねエかよ。こっちは通常モードじゃ歩くのも辛インだっつーの。

「その子ってどんな子なの？」

「あア？ クソうるせエしすぐ迷子になるし弱エし……保護すのが面倒なヤツだ」

「……なんか、圭介にちよつと寝てるかも……っ」

「あ？」

「いや、なんでもないわっ！」

「待て……圭介って言うのはどういうヤツだ？」

圭介……どこかで聞き覚えのある名前だ。

あれは7月。この街の南部あたりにある工業地帯での出来事。オレは木下暮葉をブツ殺そうとしていたんだが、その時一般人が乱入してきやがった。その一般人は弱い、超能力も魔法も使わず銃どころか刃物さえ持っていない、丸腰のただの学生だった。

いいぜ……だったら俺がめえを勇気づけてやるよ。この拳でな！

あたり前だろ。友達の為に頑張る事の何が悪いってんだよ。

もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎オ！

にも拘わらず……オレはソイツに完膚無きまでにボコボコにされた。



何回攻撃しても倒れねエ、死にたくなくなるような絶望を与えても諦めねエ。何かを守る為に戦うヒーローのような男だった。ただど……確かソイツの名前は。

「……あんた、圭介の知り合いなの？」

「今の段階じゃわからねエ……可能性はあるかもしれねエ」

木下もあの男を圭介と呼んでいた。そしてコイツは木下の知り合いだ。その圭介ってヤツについて何か知っているかもしれねエ。出来る事ならソイツに会いたい。会って……リベンジしてやる。とにかくオレはあの一回の敗北が許せねエ……超能力者がただの学生に、ただの喧嘩で負けただなんて恥以外の何者でもねエ。だから今度はオレのプライドの為に……もう一度あの野郎と。

「……はあ、圭介の知り合いってホントに愉快な人が多いわね……」

「そういうオマエは、その圭介ってヤツの何なんだ？」

「わたしは別にアイツとはただの……お、幼馴染よっ」

なんで幼馴染って所がハッキリ言えてねエンだよ……しかも微妙に赤いし、オレはそういうのは経験ねエし、そもそもする気もねエからわからんが……ひよっとしてこの女。

「オマエ……ソイツの事が好きなのか？」

「は、わ、ああ……っ！ いいいきなりなに言っただけだよアンタ！ あ、あんな馬鹿でオタクで変態で八方美人でいつも一人で勝手に

に消えて、その上お節介で時々カッコよくて一緒にいて楽しくて  
「

「途中から長所になってンぞ……」

「きゃうう！？ な、なんでアンタにまで分かるのよ……っ」

「オマエ、表情に出てンだよ」

「う、うそ！？」

「自覚ねエのかよ……」

どんな幸せ者だよこの女。つーかこんだけ表情豊かなのに、相手の野郎とはまだ付き合っちゃいねエみたいだな。これに気付かねエとか……圭介ってクソバカはどんな鈍感野郎なんだ。

「うう……なんでアイツは気付かないのよ……っ」

チツ……オレが恋愛相談なんざ、柄でもねエのに……。

この女は相当本気で悩んでるようだ。サッパリわかんねエが、と  
りあえず一般論でも語っとけばなんとかなるだろう。

仕方ねエ……恋愛相談なんてくだらねエモンするのは、今日だけ  
だ。

「そりゃあ、オマエ次第じゃねエの？」

「……えっ？」

「相手がどんな野郎かは知らねエ……けど、そう言う鈍感な野郎に

は素直に言えばいいだろ」

「な、何をよ……っ」

「常識的に考えて告白ってヤツかア……？」

「っ！？」

オレが指摘した瞬間　ほんっ、と赤くなった国宗が借りてきた猫のように静かになった。

なんだ……告白ってそんなに恥ずかしいモンかア？

オレにはわからん……経験ってモンがねエし。まっ、超能力を暴走させずに正確に扱うよりは簡単なモンだとは思うが。

「ストレートに言ってやれ、それが一番の近道だとは思うがなア」

「……無理よ、さっき女子会言ってかつただけどライバル多いし、それに私は……っ」

ライバルが多いって、どんだけモテてんだよその男。オレが能力で竜巻でも起こしてソイツをぶっ飛ばしてやるうかア？　聞いているだけでムカつく野郎かもしれねエ。

まアとりあえずわかったわ。コイツがソイツを攻略する方法が。

「気にすんじゃないよ……」

「……？」

「ライバルだア？　そんなの関係ねエ、オマエはそいつの幼馴染だ

る？ だったらオマエは他のヤツよりソイツの事を理解してンじゃねエのか？」

「……っ」

「それだけで立派な武器になンだろ。別に仲悪いわけじゃねェンだろ？」

「それは……多分っ」

「だったらポジティブになれ、オマエなら何かをやって成功する可能性があると思っ」

オレとは違ってなア……まっ、今更羨ましがっても仕方がねエ。

オレはオレ、コイツはコイツだ。オレは光の道に戻る事は多分できねエ……オレは一生今の中途半端な位置にいるしかねェんだ。それと比べりゃコイツは 光に満ちている。

「……あんだ、話に聞いていたのとは全然違っ、いい人かもね」

「あ？」

「なんでもない、こっちのことよっ」

「……チツ、そんじゃ……オレはそろそろクソガキ探しに戻るが？」

「そ、そうね。そういえばあんだ人探し中だったのよね……ごめん」

「気にすんな……じゃあな……」

オレは国宗に背を向け、初芝高校へ向けて再び歩き始めた。後ろから、国宗が「ありがとう」って叫びかけたきたような気がするが……正直それはどうでもいい。あの女と関わるって事は多分もうねエだろうからなア。しかし恋愛ねエ……そんな事で悩むヤツを初めてみた気がする。

まア所詮、オレには関係ない次元の話だ。

それから数十分後、杖をつき苦勞した結果　ようやく初芝高校に到着した。オレがブツ壊した所は綺麗に修復されており、周りの壁と比べると、不自然なくらい真新しい所があった。もうちょっと上手く修理できなかったのかよ……。

まアいい、そんな事よりあのガキは　？

「葵お姉ちゃん！　千早お姉ちゃんこっちこっち！」

「にやはは！　待て待てミネット〜っ！」

「はあ、ちょ……ま、待ってよミネットちゃん……っ」

いたいた愉快地遊んでやがる……アレが友達か。大人しそうなヤツが一人に、もう一人ミネットそっくりのうるさそうなヤツが一人ハッ、まああのクソガキにピッタリな連中だ。

楽しそうに遊んでいる所悪イかもしれねエが……これも安全の為だ。

「ミネットオ！」

叫ぶと、三人が一斉にこちらを向いた。そのうちの一人　ミネ

ツトは笑顔を浮かべ、

「あ、悠っ!」

楽しそうに駆け出し、オレの目の前まで走つてきやがった。

「まったく……散々人を歩かせておいて、自分は随分楽しそうだな。

「まア、別に友達と遊んでたってんなら文句は言えねエが。いや、一つだけ言う事があるな。」

「もしかしてミネツトの事を探しに来たの……って、なんで不機嫌そうに拳を握り締めてるのっ!？」

「オマエ……あのガキ共と何してたんだア？」

「ガキじゃないよ! 葵お姉ちゃんも千早お姉ちゃんも貴方と歳は近いんだよっ!」

「オレの質問無視してンじゃねエ、何してたんだア？」

「ん〜っと、遊んでもらってたんだよっ!」

「まア当然の回答である。けどなんだ……散々探してオチがこれだと、ちつとばっか腹が立つというか何というか……まっ、少しくソガキをビビらせておくが。」

「オレは一気に口を開き、睨みつけるようにクソガキを見て、

「あアツ!？」

「……って全然ビビンねエし……ダメだこりゃ、このクソガキに成長の余地はねエかもな。」

まア、結局クソガキは無事だった。その事実さえあれば別に問題はねエだろう。

だが……… 今後は油断が出来ねエな。いつ連中が襲ってくる事か……。

「あの人ミネットのお兄ちゃんか何かかな？　すごいイケメンだねっ！」

「さ、さあ……… で、でも先輩のほうがカッコいいと思います……っ！」

「葵もお兄ちゃんが一番だもん！」

なに言ってるんだイツら……… まアいい、そろそろクソガキを連れて帰るか。

色々面倒臭エなア……… クソツタレ。

第156話 言えはいだる(後書き)

・後書きトークコーナー！

圭介「うあああああああああああああああ！」

暮葉「どうしたのですかけーすけ様っ!？」

圭介「お、終わる……」

暮葉「なにがですかっ？」

圭介「今期アニメが終わっちゃうよおおおおおおおおおっ  
！」

暮葉「……」

葵「お兄ちゃん、もうすぐ秋アニメが始まるよ?」

圭介「おおっ！　そういえばもうそんな季節か！　秋は見るもんが  
いっぱい困るぜ！　アニメのおかげで一年退屈しないぜ！」

暮葉「……けーすけ様、病院に連れてったほうがいいのでしょうか  
？」

葵「お兄ちゃんはアレでノーマルだから平気だと思っよ」



第157話 武装集団（前書き）

どうもです、更新遅れて申し訳ございません！

## 第157話 武装集団

もう日も暮れ始めた頃、ようやく拙者 木下暮葉は解放されました。

先程までずっと、亜紀さんや伊吹さん、それにクラスメートの浦上さんや横井さんなどと一緒に女子会に参加していたのですが……。

「もきゅっ……」

バレちゃいました……亜紀さん達にバレちゃったのです。

女子会とはその名の通り、女子だけの集まりなのです。女子同士なら男子がいると話辛い事も話せるというわけで、よくこの国の女の子がやっているらしいのですが……。

まさか、あそこまで吐かされるとは思わなかったのですっ。

ひどいのですっ、応援してくれるのは嬉しいのですが、その変わり亜紀さんや浦上さん達に散々いじられたのです……うっ、あんまりなのですっ。

……でも、伊吹さんはただ一人……落ち込んでいたような気がしますっ。

なんででしょうか、やっぱり伊吹さんも拙者と同じで。

「ちょっとよろしいですか、とリーリヤは貴女を止めます」

ふと、拙者に語り掛けるような声が聞こえました。

振り返ると プラトックと呼ばれるロジーナの民族衣装を身にまとった、背の高い金髪の美人な人が立っていました。ジャラジャラと飾りのついた杖を右手に持ち、八端十字架のペンダントを首から提げているその人の胸の部分には、アルファ隊の紋章が描かれたバッジがついています。

この人は……間違いないのです　！

「り、リーリヤ隊長！？　なのですか……？」

リーリヤ・コステイリナ。

アルファ隊の隊長であり、同時にアルファ隊最強と呼ばれる魔法使いなのです。多分レムリア全体で見ても10本指に入る実力者だと思います。隊長はそれ程凄い魔法使いなのです。

「はい、貴女に警告があります、とリーリヤは言ってみます」

「警告……ですか？」

「風剣のシルフが動き出した、というのは御存知だと思います、とリーリヤは推測します」

「はい、その事なら……けーすけ様を守る為に、いつでも戦闘準備はできているのです！」

「いい心がけです、とリーリヤは貴女を称賛します。しかし、別件で貴女にも協力して欲しい事があるので、とリーリヤは頭を下げて頼みこんでみます」

「頼みごと……なのですか？」

隊長が拙者なんかに頼みごとって……一体、なにがあったのでしよう。

リーリヤ隊長は基本自分で何でもやっちゃうタイプなのです。なので、そんな隊長が拙者に直接頼みごとをしてくるのは、珍しい上に嫌な予感しかしないのです。

もちろん拙者は隊長の事は大好きです。でも……そうじゃなくて、何か隊長も頭を悩ませる嫌な事が起こったとか……そんな感じの嫌な予感なのです。

「はい、とリーリヤは返答してみます」

う、ぐ……この全てを包み込む安らかな笑顔、やっぱり何か大事そうなのです……。

拙者は一体、隊長様になにを頼まれちゃうのでしょうか……っ。そう恐れていた矢先、隊長は言葉を続けて、

「実はこの街に不審な集団が侵入しました、とリーリヤは状況報告します」

っつと説明しました。

不審な集団……なんとなく思い当たる節があるのです。

「あの、それって風剣のシルフと共に古宇坂を攻略しようとする、サヴィエトの別働部隊の事ではないのでしょうか？」

「いいえ、その不審集団は魔法使いでもありません。130人程度の武装勢力です。その上サヴィエトとの関与は一切ないと思われます、とリーリヤは補足説明します」

「そ、それじゃあその集団は一体……？」

「以前、隊員を狙っていた人物と関係のある集団……という報告があります、とリーリヤは事実を告げてみます」

「もきゅ？ 拙者達を狙う……って、まさか!？」

「はい、貴女もその人物とは交戦した事があると思います、とリーリヤは推測します」

早川悠……アルファ隊の隊員を無差別に殺害し、最近では拙者の後輩と何らかの関係を持つ最凶最悪の超能力者。あの人と関係のある組織って……確かに無視できない集団なのです。

下手をすれば、また他の隊員が殺されて……結果的にけーすけ様に迷惑を。

「わかりました！ 早急に調べてみるのです！」

「はい、ですがいきなり攻撃を仕掛けるのはやめてください。まだ、こちらに害があるかもわからない段階なので、無闇な戦いを避けるべきだと思います。調べた結果、害があると判断した場合に仲間と襲撃して欲しい……と、リーリヤは頼みこんでみます」

「了解なのですっ！」

もきゆう……帰ったらけーすけ様と遊ぼうと思っていたのに、本日は帰りが遅くなっちゃうかもしれないのです。でももし、この隙に風剣のシルフがけーすけ様を襲ったら……。

……頑張つて、早く仕事を終わらせましょう。そしてけーすけ様の傍に急ぐのですっ。

待っててください、けーすけ様　っ！

その頃、古宇坂市南部では……。

クソガキを見つけた後、このオレ　早川悠は個人的に買物をしてきた。オレが欲しかったものはおかかってヤツだ。オレはおにぎりが好きだ。腹も減ったし、晩御飯まで凌ぐにはおにぎり一個が丁度いいだろうと思っただの。フン……やっぱおにぎりはうまい。しかし、リーネのヤツ……ちゃんとクソガキの面倒を見ているだろうか。一緒に家を抜けだしたりしてねエだろうな。もし抜けだしていたらオレは今日、何の為にクソガキを探したんだ？

そしてオレは、一人で食うわけでもないのに……なんでおにぎりを3個も買った？

クソツタレ……いつからオレは、無意識にクソガキ共を受け入れるようになった。

いつからオレは……。

「……っ」

……本当にこれでいいのか。オレは幾人殺した人間だと思っている。どれほどの汚エ仕事をやってきたと思っている。そんなクソ野郎が……こんな光の世界にいていいのか？

結局、オレはなんでここにいるんだ。いるべき場所ではない場所に……どうしてオレは何事もなく暮らしているんだ。どうしてアイツらはこのオレを受け入れたんだ。

いつからオレは　。

……と、ここでオレは思考を停止した。

ゴン！！　と、何かがガードレールを突き破ってきた。

全ての終わりを告げるような轟音、だが　同時に変換機に手を伸ばした。

左手の人差し指で触れているのは、魔力エネルギー変換機の制御スイッチ。これを一度押せばオレは超能力者に戻る事が出来る。

そう、暴風の膜であらゆる攻撃を防げる本来のオレに。

「あア？」

振り返ると、真つ黒なワンボックスカーのフロント部分が消滅していた。交通事故で正面衝突でもしたかのように、車両のフロント部分が潰れていたのである。ガラスは割れ、タイヤも前輪が無様に外れてしまい、その上衝突の衝撃で車は横転していた。

装甲車……ってワケではなさそうだ。そもそもこの車、誰かの物かすら怪しい。

ナンバープレートも不自然だ。ひよつとして偽ナンバープレートか。よく見ればドアの鍵穴も無理やりこじ開けたような跡があった。つまり この車は盗難車か。

盗難車の中には素顔さえ分からない、特殊部隊のような服を着た男が2名。サヴィエトの魔法使いがこんな恰好をしているとは思えねエし、車なんてモンを使うとも思えねエ。サヴィエトの魔法使いではないのは確実だろう。なら、それ以外でオレを狙う組織と言え

「やっぱり来やがったか……何の用だ？ オレを始末しに来たか？  
それともオレを連れ戻して利用でもしたくなつたのかア？」

「ひい……あ、う……ああ……っ」

「愉快にビビっちまいやがって……さっきの轢き殺す気はどこに消えたア？ まっ、今のでオマエらは完全にオレを怒らせたがなア。」

「っワケで ブチ、殺す」

言い終わると、オレは右手を車の中へと伸ばした。既にガラスはない、腕を車内に侵入させるのは簡単であった。車内を手を伸ばし

たオレは、ひとまず運転席の男の顔を掴んだ。

ぐしゃり、と言う嫌な音。口の部分が変形し、布が不自然に染みしてきた。おそらく今ので顎か何かが潰れたのだらう。まあこの程度では人は死なねエ……痛いだけだ。

「あははぎゃあえひゃあうへはぎやははアハははぎやはははッ！」

顎を潰した男を、今度は建物に向かって放り投げてやった。投げ飛ばされた男は建物のガラスを突き破り、その後床にでも落ちたらしい。あゝあ、あの様子だとガラスが刺さったかもな。

後で救急車でも呼んでやるかア……せめてもの情けだ。

ところで……まだ中にクソ野郎がいたな。もう一人は助手席でビびってやがる。

面白エ……ぎやは、こういうのを見ると 余計に虐めたくなる。

「あアン ふふ、ぎゃあはははっ！ あア楽しい！ ウへへ、やべエよオオッ！」

車が不自然に振動する。

理由は、オレが無理やり車内の部品を取っ払い、外へ放り投げているからだ。そういう部品はオレが車内に入るには邪魔くさいだろ。まったく……本当に楽しいイ。

「ひい!？」

「最高にトンじまったよ……クソ野郎オ！」

「う、うあああああああああああああああああああああ！」

男は咄嗟に拳銃を取り出し、2発ほど発砲してきやがった……が、



銃弾はオレの身体に触れる事さえなかった。そう、少なくともオレの身体にはな。放たれた二発の銃弾は、一旦はオレに風穴を開けようと向かってきた。ただ、その二発はオレに触れる前に暴風の膜に触れたのだ。

膜に触れた銃弾は、そのまま勢いよく男の肩と足に突き刺さる。ハッ、畜生こんな所でブツ殺しはしねエよ。病院送りで助かるレベルの怪我で済ませてやるっつーの。

オレはうめき声を上げ苦しがる男の首を掴み、今度は車道側に投げた。

続いてどうなったか確認をすべく、オレはバリバリと天井を突き破り、上半身だけを外に出して周囲を見回す。さっき自分の銃弾で自滅した男の周りには 数代の車両が停車していた。

その車の周りにも、同じような服を着ている連中が、銃口をこちらに向けている。

どうやら……佐井学園も本気でオレをどうにかするつもりらしいな。

「ああ ？ はア……こんな雑魚虐めても面白くねエぞ」

さてさて、どうすっかなア。一人ずつ大サービスで相手するって手もあるが、それはオレが面倒臭エし時間もかけたくはない。オレはたったの15分しか超能力者でいれないのだ。しかもオレは今日一回能力を使ってしまった為、戦闘開始時点で制限時間は13分程度であった。

あんまり時間をかけていると、すぐにオレは力を失う。力を失えば、こんな雑魚にだって風穴だらけのゴミクズにされてしまうだろう。

なら 短期決戦で行くべきだな。

「あひゃッー！」

オレは拳を車の天井に振り下ろす。その動作自体には何の意味もない、ただ雰囲気を作る為に行った無駄な動きである。しかし、拳がオレがブツ壊した車の天井に触れた、瞬間。

車はドツ！ という轟音を上げ、たちまち大爆発を起こしたのだ。オレがやったのは分子運動の抑制・活性化だ。それでガソリンに火でもついたのだろう。

爆風と熱波が周囲へ飛び散り、周りの車や銃を構える連中を巻きこむ。突然の衝撃と熱で火傷を負った者や大怪我を負った者、果ては恐怖で逃走しようとするヤツも現れる始末だ。

オレはそんなヤツらを見回し、素晴らしい笑みを浮かべて、

「あひゃぎゃはあひゃはははっ！ 今から素晴らしい祭りでも開催してやるよオ！」

血みどろの祭りをなァ……ぎゃは、この程度なら何の問題もねえ。もう少し遊んでいたって魔力が枯渇してハイ戦闘不能って事はねエだろう。とにかく……久しぶりに楽しい。楽し過ぎてホントに頭がどうになつちやいそうだよオイ。あはは、すげエストレス解消になるっつーの。

……と、その時。

「あーあー派手にやりやがってえ」

数十メートル先にもう一台、今度は白のワンボックスカーが停車した。ガララと開けられた車体中間部分のドアから、一人の男が降り立つ。男は何かをぶつぶつ呟いている。

……フツ、しかも白衣のあの男。

「こりゃあ始末書書かされるかもなあ……まっ、あの男さえ潰せば

問題ねえか」

あ、は！ なにやってんだよあの野郎オ……った、一仕事増えたな。

いいぜ、お次はあのクソ野郎を始末してやるっじゃねエか。

第157話 武装集団（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ホイイイ原くウウウウウウウウー！」

葵「いきなりどうしたのお兄ちゃん？」

伊吹「しばらく出番がなかったからいかれちゃったんじゃないの？」

圭介「違うわ！俺は今回の感想を言ったただけだ！」

暮葉「かわいそうなのです……けーすけ様っ」

圭介「く、暮葉まで俺を変人扱いするなよっ」

凧紗「うん、藤島は変人ではない。ただの変態だ」

圭介「うああああああああああああああああっ！」

## 第158話 マッドサイエンティスト

突然オレを襲ってきやがった変な連中。特殊部隊のように顔すら隠す、そんなファッションに身を包んだクソ野郎共をオレは始末していた。だが、数十メートル先に別の白い車が現れ、中から柄の悪そうな白衣の男が降りてきた。オレはソイツに見覚えがある。

あア……忌々しい思い出しかねエがな。確かにあのクソ野郎の世話になった事はある。

そう、あの野郎の名前は確か……。

オレはそれを思い出しつつ、杖について男のほうへ近づいてみる。やっぱりな、あの憎たらしい極悪面に妙に真新しい白衣。あの場違いな科学者で間違いはねエ。

「ぎゃはあはひゃアハはははッ！ 三原くんよオ、こんな大群率いてゴクローさん。ソで、オマエの目的って何なんだよオ？ オマエ程度がオレを連れ戻そうだなんて思っちゃいねエよなア？」

三原寅彦

特科会時代からの知り合い、まアどうしようもない不良科学者だ。しかし、超能力の研究に携わっている上に俺の研究もしていたんだ。見た目の割には頭はいい……いや、いってレベルで済まされはしねエだろう。おそらく、日本でもトップクラスの頭脳を持つ男だ。……だが所詮は科学者。ひ弱なモヤシがオレをどう止めるつもりだ？

「俺としてもテメエにだけは会いたくなかったんだけどなあ……まっ、学園長直々の命令だから仕方ねえんだよ。なんでもテメエが潰していた連中に、何らかの利用価値があるかもしれねえんだ、と。俺もソイツは大いに思うぜ。なんで潰して歩いていたんだが……」

「オレが潰した……？　ハッ、今更学園が特異点をどう扱うつもりだア？」

「なア早川悠。手を組もうぜ？　今ならその変換機、何かは知らねえがこつちで研究して今より性能アップしてやるよ。テメエが嫌なら待遇も前より良くしてやる。だからさあ……その変わり特異点を狩って生きた状態で俺らに渡してくれねえか？」

今から手エ組んでミネットを渡せつて事が……なるほど、やつぱり学園はオレを連れ戻して利用するつもりだったか。聞くところ悪い話には聞こえねえ……だがな。

「お断りだア」

「あ？　なんでだ早川悠。悪い話じゃねえと思うけどな」

「オレがオマエらの味方をする理由なんざ、とつくの昔に消えちまつたんだよ。つかよオ、そんな仕事ならオマエらだけでやればいいじゃねえか。神様もビビる血の雨を降らせる演出がオマエらを待ち受けてるだろうからよオ。オマエの極悪面もそこで整形すりゃあ科学者らしいオタク顔になるかもなア？」

第一、アイツらが関わっている時点で　コイツらはオレの敵だ。

あのクソガキがコイツらの手に渡つたら、一体どんな事になるか……おそらく皮膚はべりべり剥がされ顔も破壊されるかもしれないエ。いや、下手すりゃ命が危険かもなア。オレはこの狂気の科学者がどマッドサイエンティストんな研究をするのか、どんな実験をするのかよく知っている。

だからこそ余計にミネットを渡せねえ……たとえ三原を肉塊に変えてもだ。

「あークソツ、なんだかなあ……相変わらずム力つく性格のガキだ。学園を飛び出しても何一つ変わっちゃいねえなテムエ」

すると、三原はガチャガチャと拳を構えている。

なんだ……あの銀色のグローブ。三原の事だ、どうせくだらねエ機械だろう。あの男がしょうもない機械を開発するのが好きだからなア。

三原はくすくすと笑みを浮かべ、

「俺さ、実はテムエの事が嫌いなんだよな。ガキの癖に威張るし強くもねえのに強がるし。そんなテムエの姿がム力ついて仕方ねえんだよ。今回の交渉だって嫌々だったんだよなア……」

と、一回言葉を切った三原は唇の端を歪め、目を大きく開き、

「じゃあテムエを始末してから特異点を頂くか。テムエがいなくても超能力者くらい沢山いるしな……っーわけであればよクソガキ。テムエの人生はこれで終了だ　！」

なんと三原は駆け出し、右拳を振り上げてきやがった。なんだコイツ……ひよつとしてオレをぶん殴るつもりなのか？　ぎゃは、おいおい科学者さん冗談はやめてくれよ。コイツ、オレの事を忘れちゃったんじゃないやねエだろうなア。オレに触れた瞬間　多分ヤツの首は折れちゃうだろう。

さて、と　どう料理してやろうか？

「　ッ！？」

あ？

い、痛エ……なんだ……何が起こった、とりあえず落ちついて考えろ。オレの顔面に何か突き刺さったような気がした。鈍い痛み  
の後の鋭い痛み……皮膚でもやられたか。

クソツタレ、どういう事だ。オレは確かに暴風の膜を張り巡らせた。今のオレならどんな攻撃を喰らおうが、問答無用で弾き返しちまうハズだろ。

それなのに何故　あの野郎の拳がオレに突き刺さりやがった？

「そんな顔するなよ。一体何年俺はテメエと一緒にいたか……わか  
つてんのかあー？」

響いたのは鈍い金属音。三原の拳が再びオレの顔面を捉えたのだ。またしても、暴風の膜が効果を発揮しなかった。脳を揺さぶられる一撃でバランスを崩し、オレは路上に倒れ込んだ。

杖が手から離れる。おにぎりの入ったコンビニの袋も地面に落ち、中からおにぎりがバラバラと飛び散ってしまった。

意識が揺らぎ目もぼやける中、オレは必死に見上げる。

三原はだるそうに手を腰に当て、一歩ずつ近づいてきた。

その調子で三原は右足でおにぎりを一個、踏みつぶしやがった……  
クソ野郎。

「特異点の世話はこっちでするからさあ、テメエはここで腐っててくれねえか？　ハツ、いくらクズのテメエでも死んで腐って自然に戻れば、それなりに貢献するだろうしさ」

相変わらずムカつくクソ野郎だ……三原ア。

さっきの拳がどういう原理で、オレの暴風の膜を破ったかは知らねエ。だが、オレは軍隊が相手でも負けはしねエ超能力者だ。そして三原は結局ただの引きこもりだ。いくら暴風の膜がヤツに通用しないと言っても、こっちには遠距離攻撃の手段がまだいっぱいある



んだよ。

オレがこんなクソ野郎に負けるハズがねエ……このクソ野郎がオレに勝てるハズがねエ。

最終的にはオレが勝つ。クソガキをコイツに手渡すわけにもいかねエ。

あのクソガキに　　これ以上の負担をかけるわけにはいかねエ。

「……ナメてんじゃ、ねエぞ……この、三下がああアアアああアあああつ……！」

轟！ 周囲の建物のガラスが割れ、樹木や看板なども空高くに吹っ飛んだ。

オレの能力は大気操作<sup>エアオペレーション</sup>。その名の通り、大気そのものを丸々操作できると言う使い勝手のいい強力な能力だ。それは当然　　大気の流れであつてもだ。

オレを中心として竜巻が発生した。その風速は169メートル。このレベルの竜巻は非公式の発生報告のみしか存在せず、現実には実証されていないレベルだ。だが、オレにかかれば実証されていないレベルの嵐を起こすのも容易いことだ。

並のミサイル以上の威力を持つ竜巻は、徐々に三原に迫って行く。逃げ場はない。直接竜巻に触れなくとも、その周囲は暴風が吹き荒れ、普通の人間ならマトモに歩く事さえできないからだ。ぎゃは……いいぜ、そのまま三原を殺せ　　！

「……はい残念賞」

だが、三原が首から提げていた怪しげな笛を吹いた瞬間  
竜巻は完全に消滅した。

「ッー!?」

信じられぬエ事態が発生した。ちつくしょう……どういう事なんだ。元々の大気の流れやその計算を間違ったか……いや、いくら弱体化したとは言え、その程度の計算ミスはありえねエ。

だとすると、やはり三原が首から提げている　あの笛のせいか？

「まったく……一般人に迷惑だろ？　一体誰がこの街を修理すると思ってるんだ」

と、三原が言い放った瞬間。

こめかみに激しい衝撃を感じた。鈍い音に鈍い痛み。三原は白衣の中に自分の背丈の半分ほどの鉄パイプを隠し持っていた。オレは吹き飛ばされ、ガードレールに背中を強打する。

朦朧とする意識の中、三原が鉄パイプを捨てるシーンを目撃。

そんな事はどうでもいいが……何故だ。何故あのクソ野郎にこんな力が……？

まさか……あのクソ野郎オ……ッ！

「オマエ……どういう、能力を……ッ」

「あ？　ハッハハハハ！　あー違うってえ〜これは超能力じゃねえよ。大体、なんでこの俺がそんなキモいもの覚えなきゃならねんだ？　別にさあ、あんなの使わなくなつてテメエ一人と戦うのは余裕なんですよーハイ。いやあ〜最高に気分がいい、最強と謳われたテメエがゴミクス同然だしな」

三原の挑発は気にするな……それより考えるんだ。超能力を使つてないとして、あの男はどうやってオレの暴風の膜を破ってきたか。あの笛が本当にオレの能力をかき消しやがったのか。

あのグローブ、機械か機械じゃねエかわからないが……オレの暴

風の膜を突き破った原因の一つかもしれない。まずはアレを破壊しよう。だが、それでも三原にはあの笛がある。引き千切るってのも手ではあるが、それだと三原自身は無事だ。

三原の事だ、それ以外にもオレを苦しめる策を講じているハズだろう。なら、笛を使われないようにヤツの身体から酸素を奪っちまえば。

「おオアッ！」

足の裏に風の力を働かせ、オレは地面からロケットのように飛び上がった。そのまま右腕をがむしゃらに振りまわす。カチン、と指先がグローブへ触れた。風の力を一転に集中させ、オレは左右のグローブをバラバラに砕いてやった。普通なら不可能な一撃だがオレには簡単な仕事だ。

よし、暴風の膜を突き破る手を封じてやった。後は三原をブチ殺すのみ。

オレは左手を伸ばし、口のあたりでも掴むようにぐわつと手を大きく開く。

「はは、テメエをボコっていたのはグローブじゃねえ……はい残念っ！」

三原は言いながらくると周り、オレの腕を華麗に避ける。三原がオレに見せた顔は文字通り笑顔であった。それも狂った笑みである。

狂気に満ちた笑みを浮かべる三原は、左拳をオレの腹へ叩きこむ。何故か 暴風の膜が作用する事はなかった。

「いい加減ゴミ処理場にも行けってんだよ、この産業廃棄物がアッ！」

今度はアツパーカット。

丁度くの字に曲がった身体に、下から拳が叩きこまれたのだ。突き上げられたオレの身体が面白いように飛んでいき、やがて仰向けの状態でアスファルトに落下する。

吐き気がする。視界もぐにゃぐにゃ、口の中は血の味しかしねエ……。

三原は全くダメージを受けてねエってのに……クソツタレ。

「暴風の膜つつつてもよ。要はただの風じゃねえか……」

な、なに言つてやがんだこのクソ野郎……拳どころか、爆弾が降つてこようが一切ダメージを受けない鉄壁のガードだぞ。ただの風で扱えるような、そんな代物じゃねエってのに……。

「テメエはただ風の薄い膜を張り、それをテメエとは反対に吹かせているだけ、さらに膜として存在するには循環が必要だろ。なら話は簡単だよお、風が膜の裏に戻る僅かな隙を突けばいいんだ」

なんだア……その無茶苦茶な理論は。

確かにオレは膜を存在させる為、風を循環させている。だからつてなア……こんな科学者にその一点を突く事が出来るのかよ。

「こつちはテメエの考える事全て把握済みだあ。テメエがいくら策を講じようがそれは予想の範囲内ってワケなんだよ。さっきの不意打ちだつてそうだア……テメエは無駄に頭を使うタイプだ。単純に俺を攻撃してりゃ、今頃オレは肉塊になっていたかもしねえのに……ハア、勿体ねえなクソガキよお？」

クソツタレ……だが、今の三原は油断している。もうオレは動け

ねエとでも思っているのかもしれないねエぜ……だったら手は一つ。暴風の不意打ちをかましてやれば、

「がアアッ！」

オレは暴風を起こそうとした。ぎゃは、さよなら三原ア……オマエの人生も今日で終わりにしてやるっつーの　　と思った。

しかし、三原は咄嗟に笛を銜えてソレを吹く。

やはり笛の音で強制的に能力が無効化された。チツ、オレの読み通りかよ……。

「ああこの笛か？　コイツは特殊な音波で思考を妨害する笛だ。能力を使う為には複雑な計算が必要なのは、どんなカス能力者でも同じ事だ。つまり……ソイツが乱れちまえば何らかのバグが発生する。そういう事なんだよ……俺はテメエの思考を妨害したってわけだ」

と、言い終えた瞬間　　三原の右足がオレの顔面に突き刺さってきた。まるで、噴火した火山から放たれた火山弾のように降ってくる三原の足。踏みつけられる度に、普通の神経をしているヤツなら聞きたくもないような鈍く、グロテスクな音が響いた。

揺らぐ視界に血飛沫が映る……多分、オレの血だろう。クソ……ひよっとして神経が麻痺でもしてきたのか、痛みすら感じなくなってきたが……。

何秒経ったか、あるいは何分経ったかすらわからない。三原はようやく蹴りをやめた。

よく見ると、三原の顔にも血が確認できた。三原の血じゃねエ……絶対オレの血だ。

「いやあーテメエも体型の割にはタフなモンだ。中々死なねえな……」  
…ったく、モヤシはモヤシらしく早く死んでくれねえと、こっちの

ストレスがたまるっつーの」

「く、そ……たれッ」

「まつ、死ぬ前にいい事を教えてやる。ほら、寝返ってあっちを見てみる」

三原が顔を向けたほうへ寝返り、顔だけを向けて見ると……その先に 数台の盗難車と数人の軍服姿の男達。そして 血塗れのミネットが男達に捕まっていた。

力が入っていない。意識がねエみたいだ……しかもどういう事なんだよ。身体のあらゆる所から血が滲み出ているじゃねエか。何で……あのガキが半殺し状態に……ッ？

「残念だけど、テメエが守りたかったモノはあのザマだ。つか、アッして生きてるんだろうか？ まあいい……アレが死んだところで特異点はまだ沢山いるんだ。次はアレだなア……アイツが死んでいたら木下暮葉ってヤツを狙ってみるか」

じゃあ何だ、あのガキの存在は別にどうでもいいって事か。特異点さえ捕まれば誰でも構わねエって事なのか。あのガキが死んだ所でどうとも思わねエのか。

ハッ……なんだかなア、あの学園はやっぱり狂っている。オレもそうだ、あの学園にいる間はなる気もなかったのに、いつの間にか血も涙もねエ人間になっていた。どう考えても、あの学園は存在自体が間違っているモンだ。

クソツタレ……そんな学園に殺されていた連中が、今度は学園の実験動物モルモットにされるつてのか……ふざけんじゃねエぞ。

おそらく……ミネットはまだ生きている。僅かだが動いている気がする、つまりミネットはまだ呼吸をしているという事だ。だが、

あの車に乗せられたら 本当に命が危ねエ。絶対にさせてたまる  
かってんだよ……あのクソガキやその仲間を、関係ねエ事に巻き込  
むンじゃねエよ !

「……ミネットオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオツ！」

僅かに残された力を振り絞り、オレは拳をアスファルトに叩きつ  
けた。すると、凄まじい勢いで暴風がミネットのほうへ伸び、その  
風はミネットを空高く突き上げた。

……ここで限界が訪れた。

「じ、ばあ ツー！」

身体の中から込み上げてきた赤黒い血の塊を、ついに体内から吐  
きだした。実を言えばさつきから吐くのを我慢していたのだ。力を  
失ったオレはぐったり倒れ込んでしまった。クソ、呼吸するだけで  
も苦しいじゃねエかよ……動く事も能力を使う事も出来ねエ。

魔力はまだ枯渇してねエつてのに……意識が朦朧としていて、そ  
の上痛みも激しくて能力を使う為の計算がクソも出来ねエ……ッ！

「あーあーあー、面倒臭エ事してくれるなあテメエ。つたく、一体  
誰がアレを回収すると思っただよ。つか、やっぱテメエは相変わ  
らずだ。何を考えてんのか知らねえが……今の不意打ちを俺に向け  
りゃあ俺は死んでいたかもしれねえのによ。全くテメエの思考は相  
変わらず単純だ」

うるせエ……オマエなんかよりよっぽど重要なんだよ、あのクソ  
ガキは……。

三原はオレに背を向け、後ろの軍服野郎と何か会話をしていやが

る。

「どうします?」

「ああ、そうだな、テメエらの班はあのガキを捕える。残りは全員俺の下に残れ。ちつとこのガキが暴れまくったせいで難しくなったが、一応証拠隠滅はしておかねえとな。全く面倒な作業だ」

「了解しました。では、自分らは本命を捕まえてきます」

「オーケーオーケー、ハハ……相変わらず有能な部下だ。それに比べてこのガキは……」

言いながら、三原はオレの事を見下すように睨みつけてきた。

チツ……そのセリフはオレのセリフだ。部下は有能かもしれねエが、結局オマエはただ命名して不貞腐れているだけの、腐れ親父じやねエか。だが……オレはこの腐れ親父に負けた。

思い出ただけでも腹が立つ……だが、今のオレにはどうしようもねエ……。

「無駄に仕事ばっか増やしやがって。テメエは会社じゃすぐ解雇モんだろうな」

「黙れエ……クソツタレ、オマエもいつかは　オレのように……  
っ」

地獄に落ち……ぐっ、そ……息苦しい、喋る事すら難しい。

「最後まで言えなかった感じだが……まっ、テメエの存在価値からして、今程度の長さが言葉として丁度いい感じだな。さて、じゃあ



殺すけど 文句ナシな？」

三原が俺を殺そうと近づいてくる。足で頭を踏み潰すつもりか、三原は丸腰だ。

しかし丸腰の三原が今は凶器だ。この状態じゃ一切抵抗はできねエ……今のオレは食われるだけのただの豚野郎だ。クソ……リーネはどうした、銃でも持って来ねエのか？

いや、リーネは確かミネットと一緒にいたハズ。生死すらわからねエ。じゃあオレをボコボコにして特異点を救ったあの男は？

もう一度特異点を救わねエのか、ついでにオレを助けたりしねエ……いや、あの野郎は基本的に丸腰だし、武装して三原達の前には無力だ。それにミネットの存在を知らねエだろうし、そこにオレが関わっていると知れば 助けるのをやめるだろう。

オレはヤツにとつての敵であり、オレもヤツを目標としていた。ヤツさえ倒せば再び最強として君臨出来たハズだからだ。実際はただの科学者相手にこのザマだがなア……。

まっ、それはどうでもいいとして……いくらあの野郎が善人でも、敵を助けるような馬鹿な真似はしねエだろう。所詮現実には現実……空想のように救いがあるわけがねエんだ。

それでも願ってやる……オレはどうなってもいい。死んでも構わねエ、一生馬鹿にして拷問されても文句は言わねエ……誰か、誰でもいい……ミネットを守ってくれ。

「 ようやく見つけたのです不審者っ！」

その声で、三原は動きを止めた。三原は首を動かし後ろを向いた。オレも揺らぐ視界で三原の後ろを見る。人だ、人がいやがる。小柄で小動物のような体躯の日本刀を提げた少女だ。何処かで見た事がある……思い出せ、確かアイツの名前は。

第158話 ムツドサイエンティスト（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「……名前までそれっぽいな」

大吾「また出たよ作者の一種の病気が」

重原「ところで早川も背中からアレが……」

圭介「出るのか？」

大吾「出ないだろ」

重原「いや、出るかもね」

圭介「結局どっちだよ！ つーか黒翼って逆に俺が欲しい能力だよ  
！」

大吾「無理じゃね？」

重原「無理だね。圭介の戦闘スタイルは肉弾戦って決定事項だしさ」

圭介「……ひでえ」

## 第159話 非常事態

「まったく暮葉のヤツ、一体どこに行きやがったんだ？」

俺こと藤島圭介はあの後、さつさと家に帰ったはいいのだが……  
葵が帰ってきた後も暮葉は帰ってこなかった。ひよつとするとアル  
ファ隊の仕事があるのかもしれないが、それでも暮葉がいないと寂  
しくて仕方がねえし、何より 晩御飯が葵の暗黒物質ダークマターになつちま  
うじゃねえか。

味はいいとして、あんな見た目の悪いもの絶対に食いたくない。  
やっぱ、暮葉がつくる見た目も味も抜群の料理が食べたい。暮葉と  
何かお喋りでもしたい。

とにかく、そんな事を考えていた俺は必死に暮葉を探していた。  
だけどなあ……闇雲に探して見つかるわけがねえよな。だって暮  
葉だけ暮葉、もしアルファ隊の仕事だとしたら集場所は異世界か  
もしれない。小坂の家にまだいるとしたら、俺は小坂の家がどこに  
あるかなんて知らねえぞ。携帯電話は繋がらねえし……ホントに何  
処にいるんだよ暮葉のヤツ。

とにかく早く連れて帰らねえと、晩御飯が暗黒物質ダークマターに !

「……あれ？」

なんか知らねえけど、随分と風が強くなってきたな……。

さつきは雨が降っていたっぽいし、暮葉のヤツ傘持ってるかな。  
なんだかこの分だと嵐がきそうな感じだな。でもおかしいぞ、天気  
予報では一雨降ったら晴れるって……。

まあ、所詮は天気予報だ。あんなの外れる確率のほうが高いだろ  
う。だけど勢い余って制服のまま出てきちまったし、風が強くてち  
よっと肌寒い感じもするな。まあでも……鬱さで茹だるよりは動き

やすくマシかもしれないな。

……しっかし、今日は随分と人が少ないな。いや、全くいないじやねえか。

不気味だなあ。強風に人の気配ナシって……しかも季節はまだ夏、ホラー映画かよ。

「あーちよつと君、君、その君！」

その時、俺は何者かに呼び止められた。

振り返ると、そこには2人の警察官が厳しい視線を向けていた。ちよつと待て、俺は警察様に睨まれる悪い事をいつしたんだよ。まさか……コミケの時、俺は警察から逃げたけど俺は警察に顔を覚えられていて、ようやく喧嘩をしていた犯人を見つけたって感じか？ やばい……停学だ。このまま警察に捕まったら停学……いや、退学かもしれないぞ。

とりあえず面倒事は起こすな。あくまで紳士的に接するんだ……。

「は、はい」

「君ダメじゃないか。今は国民保護法に基づき警報発令中だ。場所を教えて護衛もつけるから早く避難場所へ行きなさい」

「警報？ 何かあつたんですか？」

「ああ君、テレビでもラジオでもいいから情報は収集しておきなさい。とにかく今、国籍不明の輩がこの街で暴れまくってるんだ。混乱に乗じて別な輩も来ているみたいだし、とにかく非常事態なんだ」

暮葉がいなくて、警察が出動するほどの非常事態……確信したぜ。どうやら古宇坂市に魔法使いが侵入して暴れているらしい。その魔

法使いがとんでもないバケモノで、だから警報を発令させて住民を逃がしたってわけか。だけど魔法使い関係ってんなら 逃げるわけにはいかねえな。

「ああ！ ちよつと君！」

「すみません、近くの家に妹がいるんです。妹を連れてから避難場所へ行きますんで！」

なーんて言うのは嘘、とりあえず葵にはメールで気を付けると送っておこう。それじゃあ俺は魔法使いを探すとするか。暮葉だけに無理はさせねえ 俺も少しは役に立ちたい。守られるだけのお荷物じゃ嫌なんだよ。俺はほんの少しでも 暮葉の支えになりたいんだ。

だけど魔法使いってどこにいるんだよ。俺には魔力を感知できねえしなあ、とにかく何かで情報を集めて、被害に遭った地域に行って魔法使いを探そう。

と、思ったその時。

「お、わあっ？」

小さな何かと衝突した。それは冷たく濡れた少女であった。水玉模様のワンピースを着用したツインテールの……え〜つと、この感じは外国人か。しかもやたらと傷だらけだ。

とにかく、今は危険な状況らしいし……この子を避難所に届けたほうがいいのか？

「え〜つと……君は？」

「助けて……」

少女は俺にしがみつき、弱々しい声で助けを求めてきた。  
少女はまだ何かを言いたげである。俺はそれを聞こうと少女の顔を見て黙っていた。

そして、少女も俺を見上げて、

「圭介様、無理を言っているのはわかっているけど……お願い、あの人を助けてっ！」

「け、圭介様って……お前、ひよっとして……？」

その呼び方にピンと来た。普段、うちの居候にそう呼ばれているからだ。

「はい、ミニットはアルファ隊の一員だよ……っ」

「アルファ隊……暮葉の仲間かつ」

それは意外な出会いであった。

偶然出会った少女はアルファ隊の一員　暮葉の仲間であった。

だけどアルファ隊の魔法使いが、こんなにボロボロになっているとは……やっぱり相手はバケモノ魔法使いのようだな。ちくしょう、やっぱり暮葉だけを戦わせるわけにはいかねえな。

丁度その頃、古宇坂市役所4階の市長室。

古宇坂市長

まさむねかんすけ 正宗勲介が椅子から転げ落ちる。続くように女が

激しく机を踏みつけ、女にビビる市長を見下していた。

女は西洋風の鎧を着た金髪碧目の少女で、黄金に輝く柄を持つ大剣を持っていた。

「なな、何者だ……貴女はっ」

正宗市長はビビりながらも彼女に問う。すると、彼女は大剣を指で触り、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべて、

「アンタが古宇坂市の市長ってワケエ？ きやはは！ ホントにこの国の人間って何の力もないのねえ。アンタからは一切魔力も感じられないし、オマケに太ってて弱そうだわあ」

「そんな事は関係ない。そんな事より君はどここの誰なんだ……っ」

「赤の軍神……って言っても理解できないわよねえ？ カッコ良く言うならば私は侵略者ってトコかなア？」

「侵略者……だと？」

「そおそお、悪いケドオこの街しばらく私に貸してくれないカナ？」

「君が……突然このあたりを攻撃し始めた」

「そおーそおー私が指揮官。別働部隊もあるわよオ？」

言いながら、女は正宗市長の顎に指先を当て、顔を近づけた。レベルの高い容姿を持つ女に迫られる正宗市長。普通ならそれだけで興奮できる……のだが、この場合は全く出来なかった。

なんせ目の前の女は自分の街を破壊し、その上自分の命すら危うい状況だからだ。

正宗市長は腰を抜かしながらも、歯を食いしばり、鋭い目つきで女を睨んでいた。

「抵抗してもムダよオ？ アンタ、ひよっとして私に勝てると思っ  
てんのオ？」

「……思わない。私自身は運動不足だし、君に勝てるとは思って  
ない……だが」

その時、外から不自然な物音が響いてきた。それに気付いた女は、  
正宗市長から離れて市長室の窓から駐車場を見下ろした。約200  
台の車を駐車できる駐車場には、かなりの数の迷彩柄の服を着た屈  
強な男達の他に、見飽きた警察の人々やその車両。

さらに、屈強な男達が乗ってきたと思われる複数の装甲車が集結  
していた。

この場面では警察よりも目立っている男達 それは陸上自衛隊  
である。

恐らく戦況を聞いた正宗市長が、県知事にでも頼んで自衛隊を出  
動させたのだろう。

治安出動してきた自衛隊は敵の情報を知っているようで、相手が  
どこかの軍隊でも多少は戦えそうな程の装備を持ってきていた。

警察のほうも普通の警察ではなく、特殊急襲部隊SATと呼ばれる、ハ  
イジャックや重要施設占拠など、重大テロ事件への対処を主な任務  
とする特殊部隊であった。

それでも、彼らは歩兵戦闘を想定した装備しか持っていないよう  
だ。

そんな彼らを見下ろす女は

「流石に、散々治安維持の為に出てきた警察をブツ殺せば……いず  
れはこうなるわけね」



「ふ、フフフ……案ずるな。君が攻撃しなければ彼らも攻撃はしない……降参しろ」

正宗市長は笑っていた。あれだけの大戦力が集まれば、いくらこのバケモノみたいに強い女でも降参するだろうと思ったからだ。しかし、現実とはそこまで甘いものではない。

「へえ〜？ 中々面白い事してくれるわねエアータ……ッ！」

「ぐ、おあ……ッ！」

女は正宗市長の腹を踏みつけた。汚物を吐きだした正宗市長はそのまま気絶する。

正宗市長が気絶したのを確認した女は、何を思ったのか窓から飛び降りる。建物の4階から落下すれば普通は無事なわけがない……が、どういうわけか女はふわり、とアツサリ着地した。

彼女を持ち上げ、減速させるような風が下から吹いたように……。

「貴様、市長はどうした!？」

SATの隊員の一人が、メガホンで女にそう呼びかけた。

その言葉を聞き、狂ったような笑みを浮かべた女は、

「はん、市長なら中でおねんね。死んじやないだろうから安心しなさい」

「……ッ！」

自衛隊、SATの男達が一斉に銃口を女に向ける。

火花が散るような睨み合い。気迫は両方とも負けていない。  
ただ、女は自衛隊やS A Tを威嚇するように、

「さあて……アンタ達随分本格的に武装してるけど……この風剣の  
シルフを楽しませてくれんのかしらア!？」

言い放った瞬間 戦いの火蓋は切って落とされた。

第159話 非常事態（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「やったあああああああ！」

伊吹「な、なに喜んでんのよ？」

圭介「俺、久々に出番が来たよ……っ！」

伊吹「……」

圭介「主人公なのに久々に登場したぜ。つたく、この作品は誰かが活躍すると必ず誰かが空気になるよな。主人公なのに空気になるとは思わなかったぜ」

千早「わたし……今回ずっと空気です……っ」

葵「葵も全然活躍してないよっ！」

## 第160話 三原中隊（カンパニー）

「ようやく見つけたのです不審者っ！」

オレはここで死ぬハズだった。三原に殺されるハズであつた……しかし、三原の動きは突然現れた少女の声によって封じられた。その結果、オレの寿命は僅かに伸びたようである。だけどこんな展開望んじやいなかったぜ。最悪だ……なんであんなチビが来やがったんだ。

確かあの女の名前は木下暮葉。実力自体は高エようだが……結局オレの敵だ。

しかも三原の狙う特異点の一人でもある。要するに……あのチビのご登場はオレにとつては障害が増えただけに過ぎない。

クソツタレ……まだ魔力は枯渇してねエな。能力自体は使えそうだ。最も、全身に刻まれた傷のせいで激しく痛む身体が言う事を聞けばの話だが……。

「おいおい……ありゃあひよつとして木下暮葉じゃねえか？」

「標的の一人ですね。捕えますか？」

「そうだなア……アレを捕えなくても何れさっきのガキが捕まるだろうが……まっ、研究材料が2人に増えるだけだ。ついでに捕まえておけ」

チツ、三原の野郎オ……余計な事をしやがるつもりか。あのチビは強いし、放っておいても自分の身イくらい自分で守りそうな気がする。だが……万が一だ。万が一、あのチビが三原達に負けて捕えられたとしよう。あのチビはオレの敵ではあるが、それでもミネツ

トの戦友だ。

要するに……あのチビが無事じゃなければ ミネットは何らかの行動を起こす。

その行動とは何か、考えるまでもねエだろう。それともう一つ、ミネットは三原の別働部隊に追われているらしい。このままだと、確実にミネットは三原達に捕まるだろう。

つまりアレか……気に食わねエチビも含め、オレは2人を助ける必要があるのか。

チツ……あのチビまで助けるのは本当に気に食わねエ。だがいい機会だ。このままやられっ放しってンじゃ収まりがつかねエ。こちらで少しビビってもらおうか ミイ原ア！

「木下は相手ごわい……という報告がございますが？」

「あー心配すんな。いくらアレが手ごわいっつっても、数と武器の前じゃあ無力だろ」

とりあえず、三原達の殲滅は後回しだ……やっても勝てる見込みがない。もつと作戦を練ってから慎重に殺していくべきだろう。なら今やる事は一つ とりあえず生き延びるか。

その為には逃げるしかねエ。ついでに木下ってチビも連れてなア……。

今後の行動方針が決まった所で、オレは目を見開き、右足に力を入れ始めた。

「あ？」

オレの僅かな動きに三原が反応した。いや、驚いていやがる。おそらくこの野郎はオレがまだ生きている事に驚いているんだろう。そりゃそうかもなア……今のオレは、放っておいても死にそうなほ

どボロボロだったからな。だが残念だったな三イ原……流石にそこまで華奢じゃねエンだよ。

「おおおおオアあぁッ！」

大地が揺れる程のポリウムで絶叫し、爪先を地面に押し付け、勢いよく飛び出す拍子にオレは風の操作を行った。荒い強風が吹き荒れ、三原の髪や白衣が不自然に靡いた。一方、能力を使って飛び出したオレは瞬間的に一台の盗難車へ飛び乗る。

車両中間部のドアは元々開いていた。なので乗車は比較的簡単であった。問題は運転席に座っていた運転手をどう手中に収めるかだ。ハッ、いい事考えたぜ。

オレは右手で手刀を構え、その手刀をずぶり、と、男の身体に押し込んでやった。

「ッ！」

生々しい感触を手に感じる。ハッ、相当奥まで刺さりやがったな……。

シート越しに背中を刺したのだが、流石と云うか……能力で加速させ、また能力で手を守りながら放った一撃は、シートなんてものをいとも簡単に貫通し、男の背中に突き刺さっていた。

気持ち悪いのも嫌だし、オレはゆっくりと右手を抜いた。

すると……シート越しからドロドロと、背中から鉄臭い液体が流れてきやがった。

「いいか、オレの言う事をよく聞け。オマエはもうすぐ死ぬ」

「……ッ」

「助かりたければ車を運転しろ。そうすりゃ命は助けてやる」

「……ッッ！」

男は僅かな時間で決断した。

そうだ……いい判断だ。男はいきなりアクセルを踏み、華麗なハンドル捌きで不安定ながらもUターンをさせながら、無事に車を発車させるといふ荒技をやったのけた。ぎゃは、クソム力つくほどいい腕してンじゃねエかよ。コイツが運転手なら　なんとかかなりそうだ。

しかも丁度いいコースを進んでやがる。丁度、車は木下の真横を通りそうであった。

だがその時　カンコンと、車両後部から物音が響いてきた。それはこの車に何発もの銃弾が撃ち込まれている証。それでも車は走り続けていた、丈夫な車で助かったア……。

あとは木下の回収だ。オレは邪魔くさい右側のドアをぶっ飛ばし、限界まで右手を伸ばして木下の二の腕をガシリ、と力強く握った。

オレの腕力ではこんな小せエヤツですら、引き上げる事は出来ねエ。だったら、風を操作して木下を車内に放り込んでしまえばいい。

「もきゅうつつ！？」

風の中で宙を舞う木下を、オレは無理やり車内へ釣り上げる。

木下はワケのわからねエ悲鳴を漏らした。

よし、木下救出成功。後は運転手に行き先を教えるだけだ。オレは木下に男の傷が見えねえように身体を位置を調節し、耳元に口を近づけて、

「いいか、古宇坂駅の近くにマンションがある。そこまでオレを運べ……後は近所の病院にでも転がりこめばオマエは助かる」

と、運転手に囁いた。  
運転手はゴクリと唾を飲み、静かに頷いた。

その頃、三原達三原中隊は。  
カンパニー

「あーあーあー面倒臭エなホントに。おいアレだアレを持ってこい  
！」

「し、しかし運転手は」

「関係ねえな。脱走兵にはキツイお灸を添える必要がある……それ  
より早く持ってこい！」

「は、はい！」

たつく……優秀かと思えば手際の悪い部下だ。  
俺こと三原寅彦はムカつく野郎を逃してしまった。特異点を2人  
も逃した上に、殺すべき対象まで逃げちまったじゃねえか。あーム  
カつく、心底ムカつく事が起こりまくりやがったよ。  
ただどまあ……早川悠の悪運の良さもこれまでだ。

「チツ、遅えよテメエ！」

「ぐ、あ あっ！」

あー手際が悪いムカつく。つーワケで俺はアレを持ってきた部下



を殴り飛ばし、強引にソレを奪い取った。部下に持って来させたア  
レとは　いわゆるパンツァーシュレックというヤツだ。

コイツはかつてドイツ国防軍が使用した、対戦車ロケット擲弾発  
射器で、裏ルートで現存するヤツを入手して量産したものだ。しば  
らく使つてなかつたせいか、埃だらけだが……まあ所詮は使い捨て  
の一撃必殺兵器。こんな汚れを気にしていたって何も始まらねえ。  
それよりさっさと撃たねえと、コイツの射程は201メートルし  
かねえんだ。

安全装置を解除し、後付けの照準器を除き組んだ。

俺達から逃げようとする車が照準器に映り込んだ。やれやれ……  
早川悠もやっぱり経験不足なガキンちよだな。車に乗った状態で全  
てを防げるワケがねえ、風の操作も出来ねえ。

「じゃ、天国や地獄があるか……その目で見て確かめるんだな」

そう言い、俺は引き金を絞ろうとした……その時だった。

何故か、照準器に怪しげな黒い何かが映り込んだ。

なんだ……とりあえず、一度照準器から目を離れた。すると  
僅か数十メートル先に長い黒髪を持つ少女が佇んでいたのだ。

俺はその女に見覚えがある。確かこの女の名前は　。

「西園寺……雪乃」

「あら、貴方は誰なのかしら？　私の家の近所で随分暴れているみ  
ただけれど？」

「……チッ」

まったく……邪魔しやがって。おかげで早川悠を取り逃がしちまっ  
たぞ。まあ、とりあえず早川悠の代わりにあのクソアマを殺してお

くか。西園寺も学園を裏切ったヤツだからな。

と言うわけで、俺は西園寺を狙って引き金を引き、パンツァーシユレックでロケット弾をぶっ放してやった。ロケット弾は西園寺に直撃、赤い炎と黒い煙が西園寺を前方を包んだ。あらゆるものを破壊し焼き尽くす一撃。元々戦車を攻撃する為に開発されたヤツを人間に撃ち込んだ。

そんなものを喰らった人間がどうなるか　　言うまでもない。

だが……煙が消えると人影が見えた。

その人影は西園寺。しなやかな黒髪が風に靡いており、どこにも傷はついていない。

無傷だと……チツ、まさか西園寺のヤツ。

「ひょっとして学園の関係者かしら？　だとしたら貴方馬鹿ね……学園の関係者なら私がどんな能力を使うか知っているハズよ」

「知ってるさ、テメエの事なら嫌ってほどにな……どうせ、テメエの事だから氷で装甲でも作って身を守ったんだろう。パンツァーシユレックに耐えられる程の装甲を瞬間的に作る……チツ、相変わらずテメエの能力は嫌なモンだ。早川悠の能力より嫌いかもしれねえな」

「そういう事よ。貴方達がどういう目的で動いているかは知らないわ。だけど……さっきの車には私の敵も乗っていたけど、一緒に私の友達も乗っていたのよね。だから　それを攻撃する貴方達を見過ごすわけにはいかないわ」

敵つてのはおそらく早川悠。俺の記憶が正しければ、西園寺雪乃は学園をやめる前に早川悠と戦ってボッコボコにされたハズだ。今でも西園寺雪乃は早川悠を敵だと思っているのだろう。

友達つてのは木下暮葉か。やれやれ……この街は面白いモンだ。

知らねえ間に知ってる奴らが独自の交友関係を築いているんだもんな。全くくだらねえ事をやってやがるぜ。じゃあ、俺はその関係をぶち壊す極悪人って所だな。

極悪人……まっ、少なくとも俺は善ではない。俺にピッタリのいい響きかもなあ。

とりあえず、笛を使えばヤツの能力を封じられるだろうが……あくまで、俺の対抗策は早川悠専用のものなのだ。あまり他の超能力者に有効だとは思えねえ。

ここは一旦、身を引いておくのが正しい判断だ。

さっさと特異点を探す必要もある、早川悠を見つけてブツ殺す必要もある。

「……殺せ。テメエら10人で西園寺雪乃を足止めしろ。その間に俺は本隊と別荘へ移動する」

そう命ずると、カチャッと部下達は銃口を西園寺に向けた。

俺はパンツァーシュレックを投げ捨て、白いワンボックスカーに乗ろうとした……が。

完全に乗り込む前に、背後から西園寺に声をかけられた。

「貴方、逃げるのかしら？」

「どうしてもこの戦いたいのなら、鬼ごっこでテメエが鬼になって俺を見つければいい」

それだけ言い残し、俺は車に乗り込んだ。

ドアを閉めると、運転手は一言も漏らさずに車を進めた。全く……この運転手は使えねえクソ共と違って優秀な部下だな。さて……コイツは少しまずいかもしれないな。

10人で西園寺を足止め出来るとは思えねえ。俺らは西園寺の敵

になった。いつから西園寺も俺ら別荘に襲撃してくる事だろう。今から対西園寺戦に備えて準備をするしかない。だがその前に学園から課された任務を遂行し、完璧に達成しねえとな。

それとついでに 早川悠の息の根を止めてやる。

第160話 三原中隊（カンパニー）（後書き）

・後書きトークコーナー！

野原「俺は三原が嫌いだ」

一方藤島「なんでだア野オ原くん？」

野原「三原は俺とキャラが被ってんだよ！俺の出番奪ってんじやねえぞ！」

一方藤島「それを言ったらオレだって早川が嫌いだア！キャラ被ってんじやねえぞ三下がア！」

野原「俺のほうが三原より登場早かったんだ。わかってんのか、ア！？」

一方藤島「オレも早川より早かったんだよ、このクソ野郎がア！」

葵「どっちにしても、ただのパク（ry）」

暮葉「葵さん、それを言ったらおしまいなのですよ」

伊吹「もうこれただの自虐ネタよね？何も面白くない自虐ネタだよね？」

## 第161話 最悪の生還方法

俺はミネット・ローランという少女と出会った。

彼女は暮葉と同じアルファ隊所属の異世界人で、水系統の魔法使いらしい。なんでも俺とは早川悠との戦いの時に会っているらしい。そっぴやあの時大量の水が降ってきたよな。もしかしてあの水はこの子の魔法によるものだったんだろうか。

ミネットは市内のマンションで3人暮らしだったらしいが、突然室内に怪しげな連中が押し掛けて襲われたらしい。気がつけば何処かの路上、そこにいたのは自分を襲った人達と、白衣を着た怖そうな雰囲気を持つ中年の男。そして ミネットと同じ部屋に暮らす知り合いであった。

早速俺はミネットに案内され、その現場に向かったのだが……。

「あれ？ あの人も白衣の男もいない、もうみんな行っちゃったのかな……？」

「ちよ、ちよつと待て……」

焦げ臭い匂いに無数の残骸。横転した死亡事故を起こしたように潰れた黒い車。意識を失って倒れている男達。ガラスが割れた建物の数々。そして、道路には生々しい血が付着していた。

何があつたんだよ……これ、全部魔法使いの仕業か？

俺は壮絶な光景に一瞬言葉を失ったが、それでも頑張つてミネットに聞こうとした。

なんせ、彼女が俺の知る唯一の目撃者らしいからな。

「ん、なにになに？」

「これって……魔法使いがやったのか？」

「多分違うよ。ミネット達を襲ってきた人達に魔力はなかった。多分相手は魔法使いじゃないと思うんだよ」

「魔法使いじゃ……ない？ それじゃあ一体誰が？」

「多分あの人。精一杯抵抗したんだと思うんだよ」

「抵抗って……何者だよお前の知り合いは？ もしかして同じアルファ隊の隊員か？」

「違うよ。あの人は魔法使いじゃなくて超能力者なんだよ」

「ちょ、超能力者って……佐井学園の人間か何かか？」

「うん、元々はね……」

元々佐井学園の人間だったって事は……まさか、ミネットが言っている、ここで倒れていた知り合いってのは明智か西園寺なんじゃ……？

思い出せ、確か明智は立派な日本屋敷に住んでいたはずだ。マンションなんかとは縁のない超お嬢様だったはず。だけど俺は西園寺の家は知らない。

まさか……西園寺が魔法使いではない、謎の奴らに襲われて……ッ！

「ちくしょ　ッ!？」

衝動的に走りだしそうになった俺を、いきなりミネットが俺を引

っ張ってきた。

俺とミネットは横転した車に隠れるように、静かに座りこんでいた。

……待て、なんで隠れるんだよ？

「どうしたんだよ？」

「来たよ、ミネット達を襲った人達が」

「……よし、任せろ」

相手が魔法使いじゃねえんなら楽勝だ。魔法っていう、喰らえば下手すりゃ死ぬような一撃を放って来ないんだからな。ちよっくら俺が言つてぶん殴つてやる。

そんな軽い気持ちで俺は 顔だけを出して連中の姿を確認する。

「げえっ、銃持つてるじゃねえか……っ」

数十メートル先で停車している数台のワンボックスカー。中からぞろぞろと、自衛隊でもこの軍隊のものでもない戦闘服に身を包んだ、屈強な男達が降りてきやがった。その手には自動小銃アサルトライフルが握られている。多分、アレはソ連のAK-47ってヤツだろう。

安価かつ高威力で耐久性も高く操作や整備が簡単。よくゲリラやテロ組織が好んで使う為か人類史上最も人を殺した兵器……とも呼ばれている。

ちくしょう、素手が精々鉄パイプ程度だと思って甘く見ていた。

そういえば、寝ている奴らの近くにも銃が落ちているぞ。ああもう、もっと早くに気付いていればこんなに怖く感じる事もなかっただろうに。

どうしよう……撃たれた事はないけど、俺の身体……銃弾に耐え



られるだろうか？

しかも連中が持っているのはカラシニコフ自動小銃。おそらく、俺に向かつて飛んでくる銃弾は一発ではないだろう。耐えられるかもしれないけど、耐えられる自信がねえ……。

「ど、どうするの？ ミネットは逃げる事を推奨するんだよ」

「くっそ……武器持つてるなんて卑怯じゃねえかよっ」

どうする。俺の近くに男が2人、気を失って倒れている。

その近くにはAK-47二挺がアスファルトに落ちていた。さらに、男の身には拳銃やら手榴弾が装備されていた。なるほど……こっちにも少しは武器があるわけだ。なら、ミネットを逃がすくらいの時間は稼げるかもしれない。

俺は確かにただの学生だ。ド素人だし、戦争なんかとは一切関係のないヤツだ。

だけど 生憎こういうのに関する知識はある。実際に使った事はないから、上手く扱えるかどうかは別として、銃や手榴弾の扱い方程度なら知っている。

これさえあれば 抵抗出来るかもしれない。

「ミネット、危険だからその影に隠れていてくれ」

「えっ？ で、でも圭介様は……？」

「大丈夫、アイツらとは何とか戦えそうだ……っ」

本当は怖い。

小便を漏らしてしまいそうなほど怖い、足もガクガクと震えている。全身から嫌な汗だつて噴き出ているよ。だけど……逃げるにし

たつて、アイツらに背を向けるのは危険だ。だつたらここに武器を使つて、アイツらと頑張つて戦うしかねえだろ。

自信はねえけど……なんとかしてみせる　！

「ちよ、ちよつと！　ダメだよ圭介様、数と武器には勝てないんだよっ！？」

「いいから下がつてろ、ここは俺に任せてくれ！」

その時、一斉に黒づくめの男達がこちらを見てきた。銃を構え、徐々に嫌な足音を立ててこちらに歩み寄ってくる。まずいな……俺らの事がバレたかもしれねえ。

こうなつた以上、余計に引き下がれねえな。とりあえず、俺は右手を伸ばしてカラシニコフ自動小銃を手に取る。これが安全装置……らしいけど、もう解除されているな。

これが引き金。弾は……まあ多分残っているだろう。幸い、気絶している男は替えの弾も持っているようだ。イザとなれば気絶男から弾を貰えばいいだろう。

よし　戦うぞ。

俺は勢いよく飛び出した。男達は姿を現した俺に反応するが先制攻撃を仕掛けたのは俺のほうであつた。

「　、　」

タタタタタ……ッ！

男達が引き金を引く前に、俺が引き金を引いて発砲した。銃弾は、生々しい音を立てて男達の体内へ侵入する。ド素人の俺の腕前では外れる弾の方が多かったが、それでも数人の黒づくめ達が血飛沫撒き散らして地面に倒れ込んでいった。

う、ぐ……なんか、すげえ罪悪感を感じる。俺……今人を殺して

る…………んだよな？

俺はもう悪人だ、この手は汚れちまった……………だけど、殺らなきゃ俺らが死ぬ……！

ミネツトも助からない。ミネツトが助けたい人物を助けられない。こんな事は間違っているのはわかっている……………俺が犯罪者に成り下がった事も自覚済みだ。

だけでももう………攻撃する前から覚悟はできていただろ。

覚悟の上で戦っているんだ………！

「……………ぐっ！ 弾切れッ!?」

予想外に速かった……………クソっ、こうなったら二挺目のAK-47を………。

……………と思ったまさにその時。

「……………ッ！」

俺は咄嗟に身を引つ込めた。

何故なら、弾切れの間に態勢を立て直した黒ずくめ達が、俺を殺すべく、その手に持つ銃を放ち無数の銃弾を撒き散らしてきたからだ。車は横転している……………多分だけど、7・62mm弾に横転した車を貫くほどの威力は無い。かなり頑丈な盾がこっちにはある。

この盾を上手く利用して戦えば……………ッ！

「くそつたれええええええええええええええええつ！」

俺は銃と顔だけを出し、男達に向かって再び発砲を始めた。今はもう……………ただ自棄になって弾を撃つだけであつた……………。

……それから数十分後、戦闘は終わった。

銃を撃ち合い、時々手榴弾を投げつけ、最後は拳銃を使ってまで応戦し……辛うじて俺とミネットは生き延びる事に成功した。

それにしても……。

「一体、何の奇跡が起こったんだろうな……」

「わからないよ。でも……応急処置は完了だよ。後は病院へ送ればみんな助かると思う」

本当……奇跡だ。あれだけの事があって、なんと俺が撃ったヤツらは全員生きていた。

辛うじて生きていたんだ……中には今にも死にそうなヤツもいかが、そういつたヤツらはミネットの回復魔法のおかげで一命を取り留めた。一応、救急車は呼んだ。病院で治療を受ければコイツらの命は助かるらしい。よかった……俺、まだ人殺しじゃ……ねえみただ。

「……っ」

「だ、大丈夫……圭介様？」

「……悪い、もう大丈夫だ」

そうは言うけど……ちくしょう、下手すりゃ今のでコイツらは死んでいた。いくら人殺しにならなかつたとは言え、俺がやったのは立派な殺人未遂じゃねえか。

もう俺はダメかもしれない。誰も幸せに出来ない……人殺し予備軍のクス野郎だ。

「……あ、あまり思いつめなくてもいいと思うんだよ？ し、仕方ないよ……相手だってミネット達を殺す気だったんだよ？ 抵抗しなかったら……ミネット達が殺されて」

「お前はアルファ隊の一員で、こういうのに慣れてるからそんな事が言えるんだろ！」

「圭介様……っ」

「……ごめん。そうだよな……やらなきゃ俺達がやられてた……」

ホント……どうかしているぜ、俺。

結局俺はどうしたかったんだ。人殺しはしたくない、銃も向けたくない。だけどミネットを助けたかったのは事実。助ける為には生きる必要がある。生きる為には戦わなきゃいけない。コイツらと対等に戦う為には武器が必要だ。だけど武器を使えば人は死ぬ、ひどく傷つく。

ちつくしょう……やっぱり俺は、ヒーローとは程遠い人間だよ。

「あの人は」

「……ん？」

「あの人は、無事なのかな……？」

あの人は 多分それは西園寺の事だろう。

確証はない、そもそも西園寺が超能力者なのかすら怪しい。ただ、俺の知る限りで佐井学園に通っていた過去を持つ人物は2人、明智と西園寺だ。

明智はそもそもお嬢様で、ミネット達とマンションで暮らしてい

た事はないはずだ。

「だけど西園寺は……？ アイツの家の事はサツパリわからない。だとすると、ミネツトの言うあの人は、西園寺の事なのかもしれない。西園寺は本当に超能力者なのかもしれない。」

それに、その人がたとえ西園寺じゃなくても、俺はソイツを助けてたい。

助けてミネツトの笑顔を取り戻してやりたい。早くこんな騒動を終わらせて、暮葉の所に行って暮葉の事も助けてやりたい。

その思いを胸に、俺は真剣な表情を作って、

「絶対にソイツを助けてみせる」

「……え？」

「お前だってソイツに死なれたくないだろ？ だったら助けるしかねえだろ」

「う、うんっ」

「よし、行くぞ。ソイツを助ける為に今できる事をしよう」

地面に倒れるコイツらは……まあ、救急隊員に任せるとしよう。

それよりも、俺達には今やるべき事があるんだ。

第161話 最悪の生還方法 (後書き)

・後書きトークコーナー！

生駒「クソ介がとうとう銃を撃った」

凧紗「藤島の戦闘スタイルは素手なのに、ガツカリだぞっ」

生駒「まったく、これだからクソ介はっ！」

凧紗「まあ、あの状況だったら作者も撃ってるかもしれないぞっ」

生駒「とにかくクソ介は殺人未遂の凶悪犯だ！ 早く逮捕されるよな！」

圭介「もうなんともいつてくれ……っ」

大吾「小説内での話で散々言われる圭介カワイソス」

重原「みんな、無法地帯で殺されそうにでもならない限り銃は撃っちゃダメだよ！」

黒木「そもそもそんなもん持ってねえよっ！ それより出番くれ出番！」

## 第162話 もう一人の思い

しっかし、今日はやたらと風が強エな……オレの能力のせいとは思えねエ。オレが散々ボコボコにされた程度で、能力が暴走するとは思えねエ。この風は自然のものなのか……それとも三原のクソ野郎による演出なのか。ちったア気になるなア……この街で一体、何が起こつてやがるんだ？

……ふとオレは隣を見る。荒れた椅子には木下が不機嫌そうに座っていた。そんな木下とオレは偶然にも 目と目が合ってしまった。

木下の表情はさらに曇った。さらに、露骨に嫌そうな態度で木下は、

「それで、なんで貴方がここにいますか？ 早川悠」

つと言ってきたのだ……つたく、それを言いてエのはこっちだつーの。

だからオレはお返しをするように、木下にこつ言つてやった。

「オマエこそなんであの場に来やがった」

「拙者はアルファ隊の仕事なのです。あの人達が拙者の仲間を狙っているとわかったので」

「……チッ」

しっかし……この車はどう見ても盗難車だ。警察が追ってきたつておかしくはねエのに今日は一体どうしたつてんだ。警察車両を一切見かけねエな……三原の仕業、とは思えねエ。流石の三原や学園



も国家そのものを操作する事は出来ねエだろうからな。

もつと別の原因があるのかもしれねエが……チツ、考えても分からねエな。ちなみに今のオレは変換機を通常モードに戻している。理由は簡単、節約の為だ。

フルで戦うとしたら、残り4分も残ってねエだろう……チツ、三原との戦闘で随分と無駄に魔力を消費しちまった。どこかで魔力を補充してもらわねエといけね。だが、肝心のミネットがここにいないじゃ魔力の補充が不可能だ。

クソツタレ……これから先、どう三原達と戦っていくか考える必要がある。

「早川悠、一応情報収集の為に聞いておくのです」

「何だア木下ア……」

「貴方とあの不審者集団はどういう関係なのですか？ 共謀者……なのですか？」

「オマエの目はどオなってる。アレのどこがオレの味方に見えるんだ？」

「もきゅ？ で、でもあの人たちは学園の関係者なのですよね？」

「科学者だア……オレらが使う超能力の研究をしているな」

「……どうして拙者達を潰していた貴方が、同じ学園の人達に狙われているのですか？」

「ふん……説明した所で、オマエが信じるとは思えねエ……オマエ、今すぐ帰れ」

「そ、それはダメなのです！ 決戦前にあの人達を潰さないと拙者達の身も危険なのです！」

「三原のクソ野郎はオレが潰す。オマエは決戦ってヤツでもしてきやがれエ」

「もきゆう、で、ですけど……っ」

「これはオレと三原の潰し合いだ。特異点は関係ねエ……だから三原はオレ一人で潰す」

これはもう決定事項なんだ。オレは三原を一人で潰す、特異点は巻き込まねエ。闇の世界でくたばるのはオレと三原だけで十分だア。そこにミネツトだろうが木下のチビだろうが。関係ねエヤツを潰し合いには参加させねエ、巻き込ませもしねエ。

「おかしいのです……こんなの、拙者の知ってる貴方じゃないのです」

「勘違いすんじゃねエ……オレの敵が三原なだけだ、深い意味は微塵もねエ」

「分かっているのです。拙者も貴方が嫌いなのです」

これでコイツがオレについてくる事はなくなった。思う存分一人で三原達相手に暴れられる状況を作れた。後はオレ次第だ、クソ……制限時間4分じゃ三原達をぶち殺せねエ。

早急に対策を講じる必要があるな。

……と、気がつけばもうマンションの前か。

「このあたりで止めるオ」

オレの命令で重傷を負った運転手は、静かに車を止めた……ぎゃは、丁度マンションの入り口の前じゃねエか。いい位置に止めてくれたなコイツは。

サービスだア、コイツは特別に病院に行かせてやる。精々生き地獄を味わうがいい。

オレはまず車内で杖代わりを探し始める。杖は三原との戦いで失った、さっきの戦場跡に行けばまだあるかもしれないエが、今更取りに行く気はしねエ、それにまだ三原がいたら、そこでオレも運転手も木下も全滅だア。だったら何か代用品を探すしかなさそうだ。

車内で代用できそうなのは……この散弾銃か。知らねエ型だ……アメリカ製でもイタリヤ製でもロシア製でもなさそうだ。コイツは学園で開発されたwikiにも乗ってねエようなヤツだな。

全長は1メートルを超えるくらい、鉄製銃床は伸縮可能……ハッ、丁度いい代物だ。

オレは散弾銃を持ち、木下と一緒に車から降り、その後オレだけ車内へ顔を覗かせ、

「オマエはこのまま病院へ行けエ……15分以内に行けばオマエは助かる」

「うう……か、解放して……くれんのか？」

「ああ？ ひよつとして殺して欲しかったかア？」

「ひ、い　！？」

男を軽く脅すと、荒々しく盗難車は夜の古宇坂へと消えて行った。

チツ……まあ、精々病院で痛がれエ。それであの男は多分助かる。別に殺しておいてもよかったがア木下もいるしな。今日のオレは特別紳士モードだア。

さて……それじゃありーネの無事でも確認しに行くか。つかアイツ……三原達に襲撃されて生きてンだろオな……。

「……オマエも行け」

「早川悠、最後に問うのです……貴方は何をするつもりなのですか？」

「三原を潰すのはオレだ。オマエは気にせず決戦とやらをしてこい。つつつてンだ」

「……わかったのです。拙者は行かせてもらいます！」

「……チツ」

やっと鬱陶しいのが消えやがった……これで思う存分暴れられるってモンだ。それじゃあさっさと家に戻るとするか。まずはリーネの生死を確認しねエといけねエな。

生きていた場合は状況報告。死んでいたら……まアその時はその時だ。

オレはそんな事を考えながら、ロックを解除してミネットの部屋へと向かった……。

そして、オレはマンションの8階 ミネットの部屋に入った。

室内は散々に荒らされていた。ドアには弾痕、さらに無理やり開けられた跡。台から落ちたテレビにも弾痕があり、テーブルは脚が

一本折れて傾いていた。カーテンは破られ、窓ガラスは全てが割られて床には破片が散乱していた。それだけじゃねエ、色々小物も散乱していて危険な状態だ。

そして荒された部屋の中に　リーネが倒れ込んでいた。

リーネに触れると……温かい。怪我をして出血はしているが、呼吸も安定しており命に別条はなさそうであった。どうするか……とりあえず、リーネのヤツを起こしてみるか。

「生きてンだろオリネ。さっさと起きろオ……同居人が帰ったぞ」

「……つつ、あれ……悠ちゃん……なの？　ひどい怪我……なの、どうしたの……？」

「オレの怪我を気にする暇があったら、さっさと何があったか説明しろっつーの」

「襲われた……なの、変な……銃を持った黒い人達に……っ」

「チツ、予想通りの展開だ……三原のクソ野郎オ」

しかもリーネは元々何の関係もねエヤツだ……あのクソ共、このロリ巨乳までふざけた事に巻き込みやがって。こりゃあ本格的にブチ殺し確定だなア。

魔力の補充は……諦めるか。仕方ねエ、4分は三原の為に温存しておこう。

残りの雑魚共は極力バレず能力を使わず、一人一人確実に殺していくか。

そう決めたオレは散弾銃を杖代わりに立ちあがり、リーネに背を向けた、

「悠ちゃん……どっ、いくの……？」

刹那、ボロボロのリーネに呼び止められてしまった。

チツ……こつちには時間がねェんだ。さっさと三原を殺さねェと、色々と取り返しのつかねェ事になっちまう。だから今はこんなガキに構っている暇なんて、

「ミネットちゃんが……連れ去られたの、悠ちゃん……ミネットちゃんを……っ」

「……生憎制限時間は残り4分。オレもクソガキも生きて帰れる保障はねェ」

「……だ、つたら……ボクとキス、して……」

「あッ？」

その言葉に思わず反応し、オレはリーネのほうへ振り返ってしまった。リーネは何故か嬉しそうに瞳を閉じて口元を歪ませ、その顔は僅かに紅潮していた。

このクソガキ2号……自分で何言ってるのか分かってんのかア。

「ボクにも魔力、あるから……全部は無理でも、5分程度なら補充……できそうなの……」

5分プラスしたって9分程度……4分と変わらねェ気もするが……まア、最初から4分で三原達に挑むよりはマシか。少しは楽に戦えるかもしれねェ。

……だけどこのクソガキはいいのか。魔力を補充するってのはつまり。

「オマエの覚悟は出来てんのかア？」

「覚悟なんていいの……お願い……ミネットちゃんを、助けて……なのっ」

「……チツ、クソガキ2号が」

後悔したって知らねエからな……オレは腰を降ろし、瞳を瞑って。

「！」

頭を降ろして唇を近づけると　オレの唇とリーネの唇が触れ合った。

リーネの唇はミネットと比較すると……って、比較すんのってどうかと思うが、ミネットのそれより柔らかくて。吸い込まれるように……やっぱりミネットよりは大人だな。

これで男がいねエらしい。全く信じられねエ話だが……どうせリーネの事だ。木下木葉と共にずっと研究所に籠っていたんだろ。それなら男がいなくても納得のいく話だ。つーかオレも人の事言えねエ立場だし、そもそもそう言う事にあまり興味もねエ。

オレが興味を持てば　下手すりゃ誰かを傷つける結果になる。

「……確かに、制限時間が9分に増えた」

ぶ、は　と、オレは唇をリーネの唇から話した。リーネの言う通りだ、制限時間が4分から9分に延長された。これで多少能力が使えるようになった。

それでもたったの9分。節約しねエとすぐに魔力は枯渇しちまうだろ。

「悠、ちゃん……必ず帰ってきてね……っ」

「善処しとく」

「……それ、ダメ政治家の……セリフなの」

「チツ、オマエは黙って安静にしてろ。何なら救急車を呼んでやる  
オカ？」

「平気……なの。ボクは貧弱だけど……肉体再生の魔法を使えるの  
……っ」

「そオカ……クソ野郎には気をつけるンだな」

今のオレにはリーネをどうこう出来ねエ。下手すりゃリーネも同じ異世界人だ。また三原のクソ野郎に襲われるかもしれねエ。リーネも危険な状況下に置かれている。リーネもミネツトも危険度は同じくらいかもしれねエ。ならどうやって2人を救うか……正解はたつたの一つ。

早急に三原を　ブチ殺す事だ。



第162話 / もう一人の思い (後書き)

後書きトークコーナー！

大吾「リア充死ね！」

重原「リア充死ね！」

黒木「リア充死ね！」

赤佐「リア充死ね！」

圭介「リア充死ね！」

全員「圭介死ね！」

圭介「な、なんでっ!？」

リア充だから……だと本人は自覚していないようである。

## 第163話、ほんの僅かな恩返し

ここは古宇坂市の自衛隊基地付近。

私　白藤早苗は自衛隊基地付近の畑に足を踏み入れていた。その理由は簡単、北部からとつても怪しい魔術師達が侵入してきたから。それはきつと……私もかつていた、サヴィエトという組織に所属する魔術師だと思う。あの人たちの目的はただ一つ　私の圭介ともたちを拘束すること。

圭介は私の初めての友達。一度裏切つたのに私を受け入れてくれた、強くて優しく心が広いとつてもいい人。しかも圭介は私を守ってくれた……サヴィエトに怯える私を、あの悪魔のような場所から私を救いだしてくれた。

私は一度は圭介の敵だつたのに……圭介に助けられて。多分、どれだけのお金をあげようがどれだけお礼を言おうが、すべての恩を返す事はできない。

それでも、ほんの僅かだとしても　圭介に恩返しをしたい。

「……っ」

携帯電話を開いて現在時刻を確認する。時刻は9時20分……もう、普通なら家に帰って晩御飯を食べ終え、お風呂にでも入っている時間だ。だけど……今日の私は帰れない。

現在、風剣のシルフの他にサヴィエトの別働部隊が日本国内に侵入。古宇坂市の北にある袖川浦市から侵入した別働部隊は機動隊と交戦。損耗50%に達した機動隊は後退したらしい。私はもうサヴィエトの人間ではないけど、でも、元々スパイをやっていた身。だから情報収集は得意中の得意。

合法的な手段から非合法的な手段まで、様々な手段で情報を収集する。それが、私が昔やっていたスパイ活動というもの。それにしてもサ

ヴィエト……もう赤の軍神を使うだなんて。

話くらいには聞いていた。まさか……警察や自衛隊を簡単に退ける実力を持つなんて……。

でも……だからこそ私は戦う必要がある。私もあの人たちと同じ同じ魔術師。私程度の魔術師では風剣のシルフを止める事は不可能かもしれないけど、その別働部隊の殲滅程度なら。

【ガ、グ、ギア、アアア　　ッ】

不気味な笑い声が田園地帯に広がる。人外の声だ……映画に出てくるモンスターののように声にノイズが混じっている。風剣のシルフは裏ルートで入手した情報によれば、外見上はごく普通の人間の女性で風剣の名を持つだけに、大剣と風の魔術を利用した戦法をするだけだ……100メートルほど先にぼんやりと、私の目に映る白い影は男だ。大剣なんてものは持っていないし、そもそも本当にただの人なのかすら怪しい存在。

それに……ここで使われている術式は風の術式じゃない。

「　、　」

嫌な予感がした瞬間、私が立っていた場所から先端が尖った、鉄製の黒柱のようなものが一気に飛び出してきた。しつこく突き出てくる鉄の杭を、バックステップで回避していく。こうして攻撃を避けていきながら、私は推測を行っていた。

一旦攻撃が来なくなり、田園地帯が再び静かでのどかな風景……。

「……っ」

……には戻らなかった。

眼前には無数の先端が鋭い杭が飛び出し、処刑場のような残酷な

光景が広がっている。

鉄は錬金術によって錬成された即席の杭。その杭を遙か彼方の輝く星　恒星の光を観測し風剣のシルフとの戦闘で傷つき、動きが鈍った人々を串刺しにしていく……と。これは、錬金術に占星術という古代バビロニアで行われた大規模天体観測術式を足した魔術ね。本来攻撃用の魔術でないものを、錬金術と組み合わせる事によって、不特定多数の人間を串刺しにする残酷な魔術に変えてしまったなんて……相手は中々のプロかな。

私の予想では、処刑場を作るだけが相手の攻撃手段ではない。おそらく、他にも鉄製の杭を星の力を利用して無差別に降らすとか。

「……ッ！」

たとえばこのように。

今度は頭上から無数の鉄製の杭が落下してきた。瞬間的な天体観測、強度の高い鉄の錬成と観測結果による星と地上の座標指定、指定した場所への爆撃。これは、どう考えてもバックステップだけで避けられるとは思えない。仕方ない……私も魔術を使おうかな。

鉄製の杭爆撃から身を守る適当な手段として……やっぱりアレかな。私はその物がそこにあつたと覚えていたものを思い出し、脳内でとあるイメージを働かせた。

瞬間。

10メートルほどの高さの場所に、一台の大型トラックが現れた。宙を舞う大型トラックに次々と鉄製の杭が突き刺さっていくが、私はそんなシーンをいちいち楽しみはせず、出来る限り大型トラックから離れようとした。

やがて、20mは走った地点で背中に轟！　という轟音と衝撃が叩きつけられる。

爆風と熱波により、私の身体は何メートルも吹き飛ばされ、たまに近くにあつた農機具を収容している木造の小屋に激突。バリバ

りと木造の壁を破壊し、最終的に私の身体は倉庫内にあった大きな農機具に激突してしまった。

「う、あっ！」

あまりの衝撃に、普段は出さない声を勢いよく出してしまった。農機具に背中を強打し、その衝撃で肺の中から空気が排出される。呼吸することすらままならない状態になってしまった。

でも、このまま何もしなかったら繊細な術式の前に、私は串刺しにされてしまう。

それに、直撃しなかったよりはマシ……私は胸を左手で押さえ、ゆっくりと農機具に掴まりながら立ち上がった。手を離せば倒れてしまうそうだ。全身に鈍い痛みも走っている。圭介はきつと私がこういう事をしていると知れば、鬼のような形相になって怒るに違いない。

でも 私にはやめられない理由がある。

【キャ、シャ、アアア……ッ！】

私は瞬間移動テレポートという特殊な魔術を扱える。これは、異世界から来たという魔術師に習ったものなので、少なくともこの世界の魔術ではないと思う。

脳に記憶したものがその場所にあるとすれば、何でも自分の手元に呼び出す事が出来る便利な魔術なのだけど……欠点は一つ。同じモノが長い時間同じ場所にあるとは思えない。つまり他人の物を瞬間移動させようとすると、瞬間移動魔術自体は働いても何もこちらに転送されない。

だから、私はその欠点を補うため ある程度の武器を一定の場所に固め、決して他人にバレないような場所に隠して来てから戦場に立っている。

この場合は……錬金術は魔術師によるものとして、天体観測術式はどう考えても個人で扱えるものとは思えない。それなのに相手が一人と言う事は、どこかに魔術を働かせている核 すなわち中心点が存在しているはず。

その中心点を探して破壊すれば 私にも勝ち目がある！

「、」

私はとある場所に隠していた武器 携帯対戦車擲弾発射器を呼び出した。

以前、何処かのゲリラ組織が盗み出した安価で簡単で高威力なこの兵器。ソレを構えて安全装置を解除し、スコープ型の照準器を除きこんだ。

狙いは鉄製の杭によって作られた処刑場。全てを破壊する事は出来なくとも……相手の魔術師の視界を一時的に削ぐ事なら出来るはず。

「……、」

無造作に引き金を引くと、対戦車ロケット弾が発車された。一本の噴射煙を描いたロケット弾が処刑場に突き刺さる。ゴア！ という大地を揺るがす轟音が炸裂した。畑の土が汚く飛び散った上に衝撃で直撃しなかった鉄製の杭も、次々とドミノ倒しのように倒れていった。

炸裂したロケット弾によって生み出されたのは、まさに灼熱の地獄世界。元々戦車を破壊する為に開発された兵器だけに、その威力は100点を付けたくなるほどに抜群だった。

さて、魔術師はきつと怯んでいる。今のうち魔術の中心核を探そう。

私は今度はトランポリンを眼前に瞬間移動させ、そこに勢いよく

飛び乗った。その上で跳躍を繰り返していくと、普段の数倍もの跳躍力を得る事に成功。

一番飛び上がった所で私は 自らを瞬間移動させた。

私の魔術は物の転送の他に、半径80メートル以内なら自分も指定座標まで瞬間移動が出来ると言う中途半端な力を持つ。移動するには遅すぎるし、小刻みに動くには範囲が広すぎる。

本当に中途半端な力……。

それでも、この状況では大いに役に立つ能力だよ。

一度ロケット弾で破壊したとは言え、まだ半分以上が残っている処刑場。さらに地上から対空砲火のように私を串刺しにしようと、無数の鉄製の杭が私を目掛けて飛んでくる。

空中で僅かに身を振りながら、私は鉄製の杭を回避してゆく。そして 何十本もの杭の中に黄金に輝く不自然な杭を発見。

きっとアレが中心核、アレを破壊すれば 天体観測術式は消滅する！

「ッ！！」

中心核を破壊するのに必要なモノ 250kg爆弾を転送させた。

私よりも重たい爆弾は私よりも早く、中心核へと落下してゆく。そして、爆弾が鉄製の杭に触れた瞬間 ピカッ！ と言う閃光を放ち、轟音と爆風が炸裂しあらゆる物を吹き飛ばし、破壊していった。

そんな破壊と絶望しかない空間で。

圭介、これで……恩返しできたかな？

……そんなことを思っていた私の意識は  
ここで途切れてしま  
った。



第163話、ほんの僅かな恩返し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「おお、やっぱり白藤はやれば出来るんじゃないか！」

白藤【……どう？】

圭介「すごいすごい、あんな無理ゲー臭するヤツに勝つなんて」

白藤【……撫でて？】

圭介「よしよし」

白藤【……好き、圭介】ワシヤワシヤ

暮葉「なんなのでしょう……白藤さんを無性に殺したいのです！」

伊吹「偶然ね、私もよー！」

## 第164話 破壊の嵐

黒づくめの武装集団との戦闘後、俺とミネットはとりあえず、ミネットの言うその人と同じ同居人の無事を確認すべく、古宇坂駅付近にあるマンションへと向かっていた。しかし、その途中で市役所のほうから物凄い爆音が轟いたので、一旦コースを外れて市役所のほうへと向かった。

古宇坂市の市役所はそこそこ大きい。6階建ての白い近代的な建造物に、約200台もの車を収容できる駐車場。さらに2階建ての第2庁舎までもが存在する。

そんな立派な市役所だった……ハズだ。しかし俺とミネットが市役所を訪れた時には見るも無残な姿に変貌していた。

「な、これ……全部さっきの黒づくめ達が……？」

「それは多分ないかも。あの人達の装備でこの人達に勝てるとは思えないんだよ」

ミネットの言うこの人達とは、倒れている自衛隊や警察の人々であった。不自然に静かな自衛官に警察の特殊部隊か何かの人々。破壊された警察車両や自衛隊のトラック、装甲車。そして俺が最初に見た市役所の建物も全てのガラスが割られ、オマケに玄関部分は大胆に破壊されていた。

「すみません！ 大丈夫ですか!？」

俺は倒れている一人の自衛官に声を掛け、顔を覗き込んでみる。目立った外傷はなく呼吸も一応してはいる。意識だけがないようだ……にしても不自然なやられ方だな。なんでトラックや装甲車は粉

々に破壊されているのに、どの人も目立った外傷ナシで生きているんだ。

気だけを失っている。やっぱりさっきの黒づくめ達以外にも、古宇坂に侵入したヤツつてのがいるんじゃないか？

それもこんな事が出来るんだ。ソイツは普通のヤツじゃなくて魔法使い。

ちくしょう、黒づくめ達も厄介な相手だけど、魔法使いはそれ以上に厄介だ。なんとって対人戦での戦闘力は魔法使いの方が圧倒的に上だからな。

しかも今度の相手は何人が知らねえが、警察や自衛隊を壊滅させるようなバケモノ。

つまり暮葉は、この人達を倒したバケモノを倒す為に……。

「ハツア〜イ！ 凄まじい光景に言葉も出ないのかな？」

突然響いた謎の声。

甲高さからおそらくは女のもの。俺はその声が何処から聞こえたものかを知る為、キョロキョロと左右に顔を振り、万が一の事を考えて空も見上げていた。

「圭介様！ あっちだよ！」

「……ッ！」

俺はミネットに言われた方法 後ろを向いた。

奇妙な女がいた。

服装は、胸部と腰周りを覆うブリガンダイン風の鎧に見える。それは中世の戦乱を駆けていた軽装兵のようでもあった。しなやかな金色の髪を左右におさげにし、縦ロールにしている。背丈もそれほど高くは無いのでいい所育ちのお嬢様のようなであった。

容姿はヒロインになれそうなほどに可愛らしい。それなのに……  
女の子の手には不似合いすぎる大剣が握られていた。  
刃は白銀色に輝いており、通常地味なハズの柄まで黄金に輝いて  
いた。

「……っ」

あんなのに攻撃されたら痛いじゃ済まされない。身体は真っ二つ  
になるか、切れ味が悪いとしても肋骨や背骨が完全に逝ってしまう  
だろう。

「……まだ銃を持っていないだけマシだ。剣を持っているく  
らいなら……過去に経験があるから何かなるかもしれない。」

「誰だよ……てめえはっ」

「赤の軍神　風剣のシルフ」

「風剣のシルフ……？　貴女が噂のシルフなんだね」

「そおーよそちらのお子様は御存知だったかな？」

「てめえ……サヴィエトか！」

「やっと目標発見ね……っーわけでさっさと捕まりな藤島圭介！」

女が大剣を構えた、全てを潰すような大剣を。

俺を捕まえるって……冗談じゃねえぞ。ふざけんな、あんなので  
攻撃されたら捕まる前に死んじまうっーの。そもそも連中が俺を  
捕えるのにここまでする理由って、一体なんなんだよ。

それにあのシルフってヤツ……油断は出来ねえぞ。もしこのシル

フが、自衛隊や警察を壊滅させた張本人だつて言つんなら、攻撃を当てる前に瞬殺されてしまつかもしれねえ。たつたり一人で治安維持や日本の国防を担う人達と、真正面から戦つて勝つような女……。クソツ、今そんな事考えるなよ……。怖くなるだけじゃねえか。

「大丈夫よ怖がらなくても。一撃で気絶させてやるからさあ……。オラア！」

シルフは両手で柄を握り、力を振り絞つて持っていた大剣を無造作に振つた。

横殴りの一撃だったが、目標である俺とは5メートル以上も離れている上に、振つた先にも何もないので大剣は当然空振り。今の動作に意味があるとは思えなかった。ただ、あれだけ重たいモノを無意味に振り回しただけで、体力を無駄に使つちまうような無駄に動きにしか見えなかった。

しかし、

「が、あツ!?!」

瞬間。

腹部に感じた鈍い痛み。そして胃の中込み上げてくる吐き気。何かが俺の腹部へ叩きこまれたようである。ソレは殴られたような感触に近い気がした。しかし、その一撃の威力と言つのがやたらと強烈なモノで、こうして立ち続けている事そのものが辛い。

立っているのが限界であつた……。

「へえ」流石は噂の身体。今のを喰らつて意識を失わないんだねえ」

「く、そ……ッ！」

「圭介様っ！　今は風の魔法の一種だよっ！」

俺を心配したのか、シルフが放った攻撃の正体を証ながら、ミネツトが駆け寄ってきた。

ミネツトは一応アルファ隊らしく、水系統の魔法を使えるらしいが……ダメだ、こんな小さな女の子をあんな危険なヤツと戦わせるワケにはいかない。

「来るな、ミネツト！」

叫んだ瞬間、シルフがさらに大剣を振り、ミネツト曰く風の魔法の一種という、サッカーボールと同じくらいの大きさの渦巻く何かを放ってきた。

破壊の嵐は俺……ではなく、ミネツトを目掛けて放たれた。おそらく、シルフは俺を捕まえるのに邪魔であるミネツトを始末しようとしたのだろう。

俺は咄嗟にミネツトを押し倒し、今の一撃をギリギリで回避してみせる。背中に僅かに渦巻く塊から僅かに漏れている風を感じた。

咄嗟にソレを見るべく左を向くと、ソレは無傷だったパトカーに命中し、パトカーの運転席のドアに大きな穴が開いてしまった。

俺はさっき、パトカーをブツ壊せるような攻撃を喰らって……耐えたのか。

一見シヨボい攻撃だけど、威力は凄まじいぞアレ。それにしても流石は俺の身体……。

あんなのに耐えちまったんだ。俺って本当に人外かもしれない。俺はミネツトを守るように立ち上がり、シルフの事を睨んだ。

「小さい子供を守りながら戦うって、アンタ中々やんのね」

「見ただろ、俺はてめえらについて行くつもりはねえ。さっさと諦めて帰ってくれ」

「私も一般人の生活をぶち壊すのは趣味じゃないし、そうしてもいいんだケドオ……」

「……ッ！」

言いながらシルフが大剣をゆっくり振り上げたので、俺は反射的に身構える。

「そういうワケにもいかないのが仕事なのよねえーっ！」

俺が身構えたのは正しい判断であった。

予想通り、シルフは狂気じみた風に笑いながら、大剣を一気に振り下ろし、それに伴って破壊の嵐が渦巻き始めた。野球ボール並の速度で迫ってくる塊。俺はソレに　左拳を叩きこんだ。

メリメリと、拳が嫌な音を立てたものの、風の塊はその衝撃で碎け散ったようだ。

「身体が丈夫だとそんな事も出来んのね？　アンタ本当に楽しいわあっ！」

ちくしょう……左拳が痛え。拳が潰れるかと思った……やっぱ避けるべきだな。しかもシルフのヤツはまだ本気を出していない。アレが本気なら　自衛隊に勝てるハズがない。おそらくシルフはまだ実力を秘めている。俺を殺さないように本気を出していない。

最大限に手を抜き、極力俺を傷つけず一撃で沈めようとしている。どうする……そもそも一人で勝てるか微妙だぞ。ミネットは戦力になるか不明、出来る事ならこの子を戦わせたくない。そうだ……

暮葉だ、暮葉を呼ぼう。俺はアイツにだって出来れば戦って欲しくないんだけど、それでも暮葉はアルファ隊に10人もいない特隊員。何より暮葉はコイツを追っているんじゃないか？

だとしたら……よし、決めた。

「ミネット、行ってくれ！」

「え、で、でも……っ」

「お前もアルファ隊なら暮葉を知っているだろ。ソイツを呼んできてくれ！」

「き、木下先輩をつ？」

「頼む！ 助けを呼んできてくれ！」

と、叫んだその時。そんな事をさせるかと言う勢いでシルフが大剣を振り、渦巻く破壊の嵐を巻き起こした。塊が俺とミネットを捉えて一直線に突き進む。

どうしよう、何かいい物は……と、探していたその時、あるモノが目に入る。  
盾。

おそらく警察のものである。俺はたまたま視界に入った盾を咄嗟に掴み、それをぐわんっと思いつきり投げつけてやった。盾と風の塊が触れ合った瞬間 両方とも粉々に砕け散った。

しかしその衝撃のせいなのか、暴風が巻き起こり俺達2人を吹き飛ばす。俺は背中を地面に強く叩きつけてしまい、数秒は痛みで立ち上がれなかった。

それでもミネットの無事を確認すべく、俺はシルフよりも先にミネットの方を向く。



ミネットは痛みながらも立ち上がり、小さな足で暗闇に消えていった……って、アイツ携帯電話落として拾わずに行っちゃった。イザと言う時に誰かと連絡取れないんじゃない……仕方ねえから後で俺が回収して、後で会ったら返してあげよう。

「アンタ、あの子に助けを呼びに行ってもらったの？」

「どうかな？　どっちにしても今は俺とてめえの2人っきりだ」

「そうかい……じゃ、その助っ人が泣くような光景を作ってやるわよっ！」

「そんな事はさせねえ。この場でてめえをぶっ倒して」

「う、ばあっ！　ゲッホ！　ごぼっ！」

「……え？」

「ごぼあ、と言う水つばい音が響いた。恐る恐る下を見てみると、アスファルトに鮮血の水たまりがあった。水たまりにぼちゃぼちゃと、真っ赤な血の塊が水滴のように落ちている。その水滴が何処から降ってきたものかを確認する為、俺は視線をゆっくり上へ向けていく。

血の塊は　シルフの口から吐かれたものであった。

いきなり吐血しやがって一体何だ。コイツ……もしかして持病でも持ってるのか？

……だとしたら幸運だ。コイツには悪いが勝つチャンスだぜ、さっさとコイツを倒して警察に引き渡す前に病院送りにしてやるよ。

「こ、これは……ッ！　特定の魔力を持つ者を圧迫する……」

「ハッ、今すぐ病院送りにしてやるよ！」

「く、がアアアああアああッ！」

俺は大地に足を踏みつけて前へ跳躍し、シルフをぶん殴ってやるうと思つた……まさにその時の出来事である。突然シルフが大剣を大きく振りまわし、風速60メートルは超えているであろう局地的な嵐を巻き起こしたのだ。あらゆるものを破壊し尽くす、猛烈な台風並の暴風。

俺はソレに耐えられず、吹っ飛ばされてしまった。

しかし、咄嗟に標識か何かのガシツと掴まつた。これで遠くへは飛ばされない……。

「原因を調べなきゃ、テメエのような小物は後回しだっ！」

シルフはそんな事を叫びながら、風の中へ消えていった。

やがて嵐は収まつた……シルフの姿は既になく、残っているのは俺と、破壊された車両と気を失っている自衛官や警察の特殊部隊の人々のみであつた。

風剣のシルフ……結局、アイツはなんだつたんだ……？

## 第164話 破壊の嵐（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「結局アイツ、強いのか弱いのかよくわからないキャラだったわね」

千早「で、でも……まだ本気は出してないみたい……ですよ？」

凧紗「微妙な所だな。まあ藤島の事だからなんとかなるんじゃないか？」

伊吹「圭介だしね」

千早「先輩……ですからねっ」

圭介「なんだよ俺だからって!？」

## 第165話 血の海

オレこと早川悠はミネットやリーネを襲いやがった三原、そしてその三原が率いていると言う三原中隊をブツ潰す為、まずは三原中隊のほうを潰す事にした。

ここは古宇坂市内にある私立高校の校舎。この時間の校舎には基本、用務員のオツチャンすらいらないらしい。そこに付け込んで連中は学校を、夜間限定の秘密基地として利用している。オレは体育館側の扉から校内へ侵入し、一通り校内の視察を行った。

どうやら、体育館に20人、校舎内には確認しただけで5人の連中がいた。やっぱりオレの読み通りここをアジトにしていたか。さて、どう潰しにかかるのか……？

とりあえず一人は生かしておこう。三原のクソ野郎の居場所が知りたい。元々それを知る為に少ない魔力を消費してまで、ここにいる全員を相手にしようとしていたんだからなア。さっさと1人を除いて片付けて、三原のクソ野郎の居場所を知ったら……ぎゃは、楽しみだなア。

さて……能力を節約しながらどう殺していくか……。

「本当なの？」

「ああ、誰かが目撃したらしい。ここに早川が侵入した」

「だ、大丈夫なのかしら……？」

「心配すんな。今のアイツの能力は時間制限付きだ。もうタイムオーバーだろ」

「お、恐れる事はない……のね？」

「ああ、見つけたら蜂の巣にしてやるっ」

さっさと行動しねエはまずいかもしれないな。既に連中、オレが校舎に侵入した事に気付いているらしい。出来れば能力は使いたくない。コイツは……三原との戦いに温存したい。

まずは……体育館で待機している大人数だ。連中を殺しにかかるか。

オレはその為だけに 知らない学校の体育館へと向かった。

それから数十分後、オレは女子更衣室から体育館の様子を覗っていた。体育館への侵入ルートは三つほどあり、一つは校舎の中から入るルート。もう一つは直接体育館に入るルート。最後に体育館裏から入るルートが存在している。

オレはその中の最も警備が手薄かつ、直接体育館に入るわけではない裏ルートから侵入し、階段を上って女子更衣室へと移動した。

変態紳士どもオ……夜なら女子更衣室の侵入は割と簡単だ。最も、女子の衣服なんてモノは一切ねエがな……とにかく、ここからカーテンを開けて見下ろす体育館の絶景は最高だ。

連中がぼんやりと、懐中電灯か何かを付けているお陰で……連中の姿が丸見えだ。

「……ハッ、いい事思いついたぜエ……地獄を見せてやるオか？」

オレは女子更衣室の窓を開け、散弾銃の銃口をクソ野郎共に向けてる。照準器を除きこんで照準をクソ野郎の一人 女と思われるヤツに合わせた。

そしてオレは笑いながら 引き金を引いた。一発の銃弾は女の後頭部を貫く。暗くて詳しい状況はわからねエが、ぐちゃり、と生

々しい音が炸裂した。

それからややしばらくし、同じクソ野郎共の悲鳴が聞こえてきた。ぎゃ、は……騒いじまって面白エ。メンタル弱エ癖に戦闘員になるなよクソ野郎共オ。

さて、次の行動に移るか。オレは次の標的　今度は男に金具を投げつけた。女子のいたずらで取れたどこかの部品だろう。女子更衣室にあった金具である。

オレの腕力では強くは投げれねエ。だが……それでいい。カッン、と緊張しているヤツの肩に当てるだけで十分なんだよ。

「ぎゃああああああああああああああああああああっ！」

大地が揺らぐほどの叫び声をあげた男。

次の瞬間。

複数の銃声と叫び声、そして女子更衣室にまで鉄の臭いが充満してきた。

2005

騒動が収まった後、オレは下に降りて状況の確認を行った。

ひでエモンだ……死体はグチャグチャ。中には顔が原型をとどめていねエやつ、手足が吹き飛んでもがき苦しんでいるヤツもいた。まだ生きてるヤツもいる見てエだな……。

「う、あ……お前……早川ア……」

そんなうめき声も聞こえるが、オレはその声をスルーしてやった。どうせ、ここまでボロボロになっちまえば、病院に送ったって間に合わねエだろう。そもそもコイツらを助ける気など、オレにはこれっぽちもねエしなア。あるのは殲滅すると言っ気持ちのみ……。

三原中隊……さつき病院へ逃がしたヤツはどうでもいいとして、  
その他は生かさねエ。

全員ぶち殺して地獄に送る……あのガキを助ける為なら、全てを  
捨てて戦ってやる。

……さて、あとは校舎の5人だな。その残りのクソ共を始末して  
行くとするかア。

さらに15分後、オレは校舎内を静かに歩いてた。聞こえるの  
は僅かな靴音、そして杖代わりに使っている銃が床をつく音のみ。  
それが、連中にとっては恐ろしく聞こえるのかもなア。

既にオレは15分の間に、3人のクソ野郎を殺した。

残り2人、1人は三原のクソ野郎の居場所を知る為に生かすとし  
て……どうやってその1人をオレに従わせようか。絶対オレに服従  
させる方法……そうだ、いい方法を思いついた。

……ぎゃは、丁度カツカツと靴音が聞こえ始めた。ソイツに犠牲  
になってもらおう。

オレは教室に入り、ソイツが来るのを待っていた。ここは家庭科  
室……なら、家庭科室らしい殺し方をしてやろうかア。

……来た来た、じゃあ人間料理……始めるとしますかア。

まずは動けなくする。その辺で売ってる肉だつて最初は動物、今  
回もそれと同じだ。

だから、オレはソイツの姿が見えた時　引き金を引いた。

「じ、はっ……」

相手は女か……被弾箇所は横腹。撃たれた女は倒れ込み、持って  
いたサブマシンガンも激痛で持っていられなくなったようで、手放  
してしまったようだ。

馬鹿な女だ。戦場で武器を手放すとは……オレはその女の頭に銃口を突き付ける。

「な、何の真似よ……早川悠……っ」

「何の真似エ？ ハッ……殺し屋ごっこだア」

引き金を引いた。

発砲音と同時に生々しい嫌な音が炸裂する。ベチャベチャベチャ、と、勢いよくオレの顔に汚らわしい何かが飛んできやがった。その中の一つ、口元についたモノをペロリと舐める。

どろりと濃厚……頭の中に詰まってるモンの味だな。

「オマエの味噌うめエな……さて、次のエモノはどこだア？」

この死体なら十分齧しに使える。

……それから5分ほど経過して、カツカツという足音が聞こえ始めた。ぎゃは、どうやら最後の一人が来やがったようだ。地獄のような光景が広がっていると知らずによオ。最後の一人もサブマシンガンを構えており、性別は……体格的に男だな。まアそんな事はどうでもいい。

その時、さっきまで順調だった男の動きがピタリと止まった。

その理由は言うまでもない……。

オレは動きの止まった男の背後へ回り、男の背中に銃口を突き付ける。

「オマエは今からオレのパシリだア……言う事聞かねエと、背中撃つて家庭科室にある包丁でオマエの肉を切刻む」

「ひいつ!?!?」



男は悲鳴を上げ、サブマシンガンを床に落とし、携帯していた手榴弾や拳銃を捨てる。

やがて男は、荒々しい呼吸でゆっくりと手を上げる。

ぎゃは、制圧完了って所だなア……捕虜も一人捕えたしよオ。段々、オレに有利な方向で話が進んできやがったな。さてエ……三原の居場所を聞き出すとするかア。

第165話 血の海（後書き）

後書きトークコーナー！

暮葉「うわあ……」

伊吹「……」

凧紗「……」

千早「……っ」

葵「……っ」

あかり「千早、無理すんなよなっ！」

圭介「えっ！？ みんなのこの反応なにっ！？」

ちよい「グロくてごめんなさい。

## 第166話 殺人鬼と少女の決意

オレは再び古宇坂駅前に戻ってきた。その後、オレは三原の居場所を聞き出し、用無しになった捕虜をブツ殺してやった。その後は地獄のシヨアの再開。三原中隊の連中がカンパニいる場所を捜し出しては連中を殺しまくり、既に90人以上のクソ野郎共を肉塊に変えた。

血の雨が古宇坂中に降り注いだ。にも拘らず、何故オレは警察にマークされない。

これだけ街中で散々暴れまくれば、ニュースになっただって不思議じゃねエ。警察が犯人探しをやり始めたって不思議じゃねエ。なのに、そう言った動きが全く見られねエ。

どういう事だ……そう言えば街がやたら静かだ。もっと人がいるかと思っただが、どういうわけか今日の古宇坂には人っ子一人居やしねエ……。

ま、その方が連中を殺しやすいがな。

「、」

オレはとある居酒屋の扉に凭れかかっていた。雨が再び降り始め、大きな雨粒がオレの身体を叩いてきやがる。そんな中、オレは随分と懐かしい気分浸っていた。

久しぶりに人を殺した。

ぐちゃぐちゃに、めっちゃぐちゃに、泣き叫ぶ人の声を聞いても何とも思わず、ただひたすら助けを求める連中を殺しまくった。そこに少しの優しさもなく、甘さもなく、あるのは殺意という残酷な感情のみであった。それ以外の感情は戦う前に捨ててきた。

つまりオレは戻ったのだ。ミネットと出会う前のオレに。

「……チッ」

オレはもう光の道には帰れねエ……トコトン闇に走るしか道は残ってねエ。下手すりゃ闇に走る道すら残ってねエ、死という道しか残されていねエかもしれない。だが……もしオレに死の道しか残ってねエとするなら、そこに三原のクソ野郎も巻き込んでやる。

ここでオレは、首筋の魔力エネルギー変換機に手を触れた。残り4分。いや、4分も残ってねエかもしれない。ちよつと能力を使えばすぐに魔力は枯渇する。

90人を殺すのに能力を使い過ぎた。ここから先は無駄に能力は使えねエ。

出来れば三原中隊全員を殺したかったが、そういうワケにもいかねエな。三原を潰せば三原中隊は自然崩壊するかもしれない。なんせ、あのクソ野郎は恐怖と力のみで隊員どもを押さえつけているらしいのだ。その恐怖が消えれば隊員は自由。

つまり……自由を望む隊員は自然と部隊から離れるワケだ。ならば次に潰すのは三原本人。いや待て……その前にやるべき事が一つ残っている。

そこに行けば、残りのクソ野郎共がいるかもしれない。そこにいないヤツは、三原本人のボディガードをしているのだろう。

つまり 次に行く場所で大半を叩き潰せるかもしれないねエのだ。

「……もう何もいらねエ。血があればいい……ッ」

そう呟きながら、散弾銃を杖代わりにしてよろよろと立ちあがった。オレはもう“最強”の超能力者に戻ったのだ。今更引き返しても一般人には戻れねエ。

なら、全てを捨ててでも三原をブツ殺す。一人で騒動を解決してみせる。

あのガキだけでも……闇の中から連れ出す……ッ！

私　西園寺雪乃は古宇坂総合病院と言う大きな病院にいた。その理由は、別に誰かのお見舞いというわけではなく、ここに侵入した10人に警告をする為。さっき私はその侵入者の仲間の人からお話を聞いたのだけど、どうもこの騒動には早川悠が関わっているらしいわ。

そして、その早川悠は次々と侵入者たちを殺害しているらしい。私に彼を止める権利もなければ実力もないのだけど、出来れば死体の数を増やしたくないわね。

と、言うわけで私は警告の為　病院内へ入ったのだけど……。

「貴様、何者だ？」

「まさか……西園寺雪乃か？」

手厚い歓迎ね……私が現れた瞬間、黒ずくめの侵入者達は銃を向けてきた。人に銃を向けるだなんて失礼じゃないかしら。まあそれはどうでもいいとして、早く警告をしましょう。

「警戒しないでいいわ。私は貴方達に敵意はない、今回は警告しに来ただけよ」

「なんだと……？」

「手短に言うわね。三原って言ったかしらあの男？　あの人の下を離れて今すぐ逃げたほうがいいわ。今なら私が貴方達を護衛するわよ？」

「……どういう意味だ？」

「あら、理解できなかったかしら？ 貴方達の命が危ないのよ。早川悠が貴方達の仲間を沢山殺したわ。次の標的は多分貴方達よ。ただの殺人鬼と化した彼に甘さも優しさもない。会えば見逃してはくれないわ。死体の原型が留まっていれば運がいい方かもしれないわよ」

「ふざけるな……それを三原さんが許すわけがないだろ」

「つまり……逃げる気はないのね？」

「当然だ。俺達はいくまで任務を遂行するのみ、敵前逃亡などするハズがない」

あら残念、折角命を助けてあげようと思ったのに。私の敵 早川悠の敵がいなくて驚く顔を見たかったのに……本当に残念だわ。

だけど、あまり時間をかけてられないわね。  
いくら彼が身障者だからと言っても、そろそろここに来ているハズ。あまり長居していると私まで肉塊にされてしまうわ。今の早川悠が手加減するとは思えないし。

「ぎゃあああああああああ！」

ほら、ね？

今の叫び声。おそらく、早川悠が黒ずくめの侵入者の一人を殺したのね。このままだと私まで本当に殺されてしまうわ。だけど、この人達に逃げる気はないみたいだから、仕方ないわよね。

「いいい、今の声……ッ」

「そう、今のが現実よ。貴方達　早川悠に会ったら最期だから気をつけなさいね」

それだけ言い残し、私は静かに一階の受付ロビーから立ち去った。だってこのまま居続けたら本当に私まで殺されるんだもの。あの人は……もう知らないわ。

だけど祈ってはおくわ……あの人が早川悠に会いませんように。三原に操作されているだけの人が早川悠に殺されませんように。ま、そんな事を思っても、別に私はあの人の味方をする気はないけどね。

……さて、そろそろ私は家に帰ろうかしら。警報発令中だし夜も遅いしね。

ここは古宇坂市の南　沼山市にある小学校の体育館。私　国宗伊吹や亜紀に葵ちゃんなど殆どの知り合いがここに避難していた。なんでも、古宇坂市が何者かに攻撃されているらしい。警察どころか、ラジオによると自衛隊まで出動しているらしい。一体誰なのよ……自衛隊が出動するほどの相手って。そして私を不機嫌にさせる理由はもう一つあった。

葵ちゃんに亜紀、凧紗や純奈。圭介や暮葉が所属している写真部のメンバーも、みんなこの避難所に逃げているのに……肝心の圭介や暮葉がここにはいない。

あの2人、一体どこにいのよ。どうして姿が見えないのよ……。  
……ばか圭介、ばか暮葉……本当に馬鹿だわ。

「お兄ちゃんにクーにゃん……どこ行っただらう？」

「先輩……無事なんでしょうか？」

「け、圭介も木下先輩も多分無事だ！……と思う」

「あかり……っ！いつもの勢い……ないよ……？」

「そっだよっ！いつも見たいにハッキリ言ってくれないと不安になるよっ！」

「だって、今夜になって圭介と連絡つかないんだからな……っ」

葵ちゃんや後輩達も圭介や暮葉を心配している。

「圭くんに暮葉もどこに消えたのかなあ？」

「クソ介もう死んだんじゃないの？」

「すみじゃん！不謹慎だぞっ」

亜紀に凧紗、純奈は微妙だけど……それでもみんな2人の事を心配している。一般人にだって犠牲者がいるらしいんだもん。そんな状況下で2人の姿が見えない上に、電話を掛けても出ないしメールをしても帰ってこない。普通、心配しちゃうに決まってるでしょ。だけど変ね。一番助かりそうな2人なのに、どうしてこの場面でいないのよ。まさかまたあの2人変な事に巻き込まれてんじゃ……ありえるわねっ。

騒動が起こるのはいつもあの2人の周りだから。きっと今回も、あの2人はとんでもない事に巻き込まれてんのかもしれない。また魔法使って奴らに狙われているのかもしれない。



そう思うと、居ても立ってもいられなくなってきた。

「、」

私は限界を迎えた。

もうこの足は止まらない。何が何でもあの2人を探すわ。圭介と暮葉がどんな大事件に巻き込まれているかは知らないけど、このまま黙っていられるわけがないわ。私も2人を探して2人に加勢して騒動を解決してやるわよ。

……っと思っていたその時、ガシツと私の左手が誰かに握られた。

「伊吹、どこに行くんだ？」

「凧紗？ 夜景を眺めるだけよ。べ、別にアイツらなんか心配じゃ

」

「心配なんだな……」

「……べ、別に」

どうすんのよ。凧紗って結構手ごわい相手よ。しかも超能力者だし、あの時は炎しか使っていなかったけど、実は心を読むくらいの能力は使えるんじゃないかしら？

そう思っていた……その時。

「伊吹、私も一緒に行くぞ」

「……えっ？」

「私も伊吹と同じ考えだ。このまま藤島や木下を放ってはおけない

ぞ」

「あ、あんたまで……いいの？」

「心配するな。自分の身を守る力があるのはお互い様だろっ」

そう微笑みかける凧紗。

そうよね……私には剣道、凧紗には超能力がある。それさえあれば、多少の相手となら戦う事だって出来るハズよ。それに、やっぱり一人よりも誰かがいると心強いわ。

何より私も凧紗も 考えている事は一緒よ！

「……仕方ないわねっ、行くわよ！」

「うん、急ごうっ！」

こうして、私と凧紗は避難場所である小学校の体育館を飛び出した。

飛び出して、あえて危険な古宇坂に戻ろうとしたのだ。

ただ、大切な人達を見つける為に……。

## 第166話 殺人鬼と少女の決意（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「よっしゃあ出番あったぞ！」

葵「葵も出番があったよ！」

千早「わ、わたしも……」『8・17編』で二度目の出番です……っ

純奈「なんで私今回こんなに出番ないの？」

大吾「僕も活躍したい！」

重原「俺だってもう少し目立ちたいよ」

圭介「たった一度の出番でキャラが大喜びするこの小説って一体何！？」

## 第167話 気付いてしまったもの

ちくしょう、どこに行つたんだよ。

風剣のシルフもミネットの居場所もわからねえ。俺 藤島圭介はその2人を探し求めて古宇坂中を走り回っていた。右手に握り締めているものはミネットが持っていた携帯電話。可愛い柄をしている携帯電話の持ち主は、暮葉に助けを求めに行つたつきり帰つてこない。

その暮葉とも連絡がつかない。やばいぞ……今回の攻撃は大規模だ。暮葉どころか伊吹や葵達にもメールを送れない。回線が混雑しているか、あるいは切断されたか……。

どっちにしても好ましい状況ではねえな。とにかく早くミネットを探そう。暮葉とも合流して風剣のシルフを倒さねえと、古宇坂は何時まで経つても危機的状況から抜け出せれない。

もし暮葉と合流できなかつたとしても……俺一人でシルフをぶつ倒す。

……と、その時。ミネットの携帯電話が振動を始めた。電話……らしい。もしかして何時の間に回線が復活したのか、それとも元々切断なんてされていなかった。ただこんな状況だから回線が混雑していただけなのか。とにかく電話がかかってきた……悠って誰だよ。まあ、ミネットの知り合いなんだろう。とにかく……一応出してみるか。

「もしもし?」

『……チツ、誰だオマエ……ッ』

あれ、この声どこかで聞いた事があるような……まあいい。それよりこの人はミネットが心配で電話を掛けてきたんだろう。早く状

況の説明をしなければ。

「あなた、よくわからねえかもしれないけど話を聞いてくれ！ あの子が危険なんだ！」

『ど言う事だ……オマエは何者だ？』

「俺はたまたまミニネットと同行していた一般人だけど……すまねえ、途中であの子を一人にしちまった」

『そか……気にすんな。オレもあのガキを一人にした。だからオマエはその携帯を捨てる』

いきなり過ぎる相手の言葉に、思わず胸に何か刺さる感覚に陥る。あまりにも冷たく言い放たれたその一言に、自然と心が痛んでしまう。自分の無力さを突きつけられたような気がした。

「……それで退くような人じゃねえんだよ。俺は！」

「なんでだよ!？」

「あのガキは追われている身だ」

「もしかして……黒づくめの連中か？」

『オマエも知ってるのか？ なら早く避難所に逃げる事だ。連中は数も少なくなつたし、それにいくら連中でも騒ぎなんでも起こしたくねエだろう』

この言い草……もしかしてコイツのあの黒づくめ達の事を知っているのか。コイツもあの黒づくめ達と戦っていたのか？ 何処かで

聞き覚えのあるような声だし……。

電話の向こうのこの人は一体……って、今はそんな事より、

「なに言ってるんだ、俺も手伝うに決まってるだろ！」

『この問題はオレとクソ野郎共の問題だ。一般人が手エ出す場面じやねエ』

「だけど……」

『それに、ガキの居場所は何とか掴めそうなんだ。あのガキの逃走能力からしてもう三原に掴まっていると思うんだ』

三原？

もしかして、ソイツが犯人なのか？

ミニット達を襲いやがった、魔法使いではない第二勢力。その第二勢力を率いるボスの名前が三原ってヤツなのか。三原とシルフ……くそつ、どっちを先に倒せばいいんだよ。

いや、まあ……危険度で言ったら圧倒的にシルフのほうが上なんだが。

相手の人の実力はわからないが、ミニットの事はこの人に任せて……いいのか？

「……わかった。古宇坂には今、ソイツら以外にも襲撃者が沢山来ている」

『何者だア……？』

「一人で警察や自衛隊を壊滅させるようなヤツだ。俺はその魔法使いを止めてみせる」

『……チツ、死にたがりには警告しねエ。オマエのやりたい通りにやりやがれ』

「悪い……アンタと協力が出来なくて」

『構わねエ……それよりオマエ、どっかで　いや、やっぱなんでもねエ』

なんだ、今コイツは何を言おうとしたんだ？

まあいいや、それより早くシルフを追おう。

早くしなければ　本当に手遅れになる。

「悪いな、死ぬなよ」

『互いになア』

相手の男が言い終わると、電話を切ってミネットの携帯をポケットに入れた。とりあえずミネットの事は電話の相手の人に任せるとしよう。あの言い草だと、相手の人は多分俺なんかよりもずっとプロっぽい人だし、ミネットを想う気持ちも本物に見えた。

下手に素人が介入するより、その手の人に任せたほうが結果は確実だ。それより俺は早くシルフを探し出してぶっ倒さねえと。警察や自衛隊じゃおそらく勝ち目はない。いや、自衛隊が一気に大戦力を送りこめば勝ち目はあるだろうが、日本政府や国民がそれを許すとは思えない。

この国は争いごとに関して　あまりにも厳し過ぎる。

だったらやっぱ　関係者である俺がシルフを倒すしかない。

「けーすけ様っ！」

「えっ？ この声」

このソプラノの高くて明るい声。聞き慣れた楽しげな声。聞いているだけで、自然と心が満たされるような声。間違いない、暮葉だ。暮葉がここに来たんだ。

「暮葉！」

振り返ると、やっぱり声の主は暮葉であった。暮葉は初芝高校の制服姿で片手には一期一振が固く握られていた。暮葉のヤツ……一度も家に戻らなかったから制服のままじゃん。まあそう言う俺だつて一度家に帰ったクセに、

まくだ学ランのスボンにカッターシャツと言う、初芝夏の男の制服を着たままだが。

実は一回家に帰って着替えようと思っていただけ。だけど、昨日の夜全部洗濯しちまって洗濯物が完全に乾いていなかったのだ。午後から曇って雨も降ってきたしな……とにかく、若干湿っているのが嫌だったので、俺は着替えずしばらく制服で過ごしていたのである。

まさか、こんな時間になっても制服を着ているだなんて……はあ。

「けーすけ様……どうしてまだこの街にいるのですか？」

「お前こそ今まで何してたんだよ。避難所……なわけねえよな？」

「仕事なのです！ 今、この街にサヴィエトの魔法使いが多数侵入していたのですっ」

「た、多数？ 襲撃してきた魔法使いって、まさかシルフだけじゃ



ねえのかよ!」

「シルフ……けーすけ様、もしかして風剣のシルフに会っちゃったのですか?」

「襲われたんだよ。そこでお前の仲間だって言う女の子とも逸れちゃった」

「その子なら多分大丈夫だと思うのです。それよりけーすけ様は早く逃げて」

「逃げるなんて真似はしねえよ!」

……最低だ、俺。

折角暮葉は俺を心配して言ってくれたのに、逃げる気がなかった俺は、我を忘れて叫んだ拳句暮葉の襟首を掴み、強引に引き寄せってしまった。

ホント……最低だ。ははっ、今度こそ本当に嫌われたかも……。でも、言っている事は本当の事。俺は逃げる気なんてなかった……だから、

「お前ばっかり戦う必要なんてねえんだよ。それに問題はお前やアルファ隊、そしたサヴィエトだけのモノじゃねえ。標的にされている俺だって、十分関係しているじゃねえか。だったら俺も戦う。黙って捕まるのを待つくらいなら俺は戦う。それを止めようとしてんじゃねえよ!」

「で、でも拙者は　けーすけ様に……か、かかわって欲しくなくて……っ」

えっ？　と思つて、俺は暮葉を優しく少しだけ引き離れた。  
泣いている……のか？

元々雨のせいですぶ濡れの暮葉であつたが、不自然に瞳から何か  
が流れている……ような気がするんだけど……それは雨粒なのか、  
それとも涙なのか……？

「せつしやは……けーすけ様に……つく、死んじゃ……嫌なのです  
っ」

いや、後者だろう。暮葉の声が掠れてきたような気がする。じゃ  
あ、暮葉は……。

……最低だ。

俺つて本当に最低だ。散々心配させた拳句、怒鳴りつけて女の子  
を泣かすつて……。

ああもう……ホントに最低だ。暮葉は今までこんなヤツを心配し  
ていたのか。こんなヤツの為に魔法使いを沢山倒してきたのか。こ  
んなヤツの為に泣いているのか……。

なんだろう……ハハツ、熱くなりすぎてたのかな。勢い余つてブ  
レーキが効かなくなっていたんだらうかな。とにかくもう少し  
冷静になつたほうがいいよな。

「ごめん、暮葉」

ほん、と、暮葉の頭に優しく手を置いて、撫でてやった。

わしゃわしゃと、撫でる度に暮葉の髪の毛のいい感触。そして甘く、  
気を付けないと引き込まれてしまいそんな女の子の匂いが、全身に  
伝わってきた。暮葉は目に涙を溜めながら、うるつると上目遣いで  
俺を見上げてきた。う、ぐ、え……何これ、呼吸が止まりそうなく  
らいドクドキしてるんだが。

「けーすけ様……死んだり捕まったり……しない、ですよ……っ？」

「絶対死なない、捕まったりもしない。約束するから……お前にも約束して欲しい」

「……っ？」

「お前も一人で戦場に飛び込むな。俺だって……お前が死ぬんじゃないかって、すごい心配してんだからさ……」

言うのに物凄く緊張した言葉。

「ただと言っちゃった……なんだこれ、体育館のステージで全校生徒に向けて、スピーチするより恥ずかしかったかもしれないねえ。おまけになんなんだよ俺……心拍数が妙に上がって、なんだか顔も熱くなってきたような気がして……クソッ、これじゃまるでアレじゃねえか。」

「薄々そうかもしれないと思っていたけど……まさか、ソレは本当なのか？」

「ねえ……けーすけ様っ」

ぐいつ、と暮葉がしがみつき、力の入っていない手で俺の袖を握ってきた。暮葉の顔が俺の胸に埋まってきた。暮葉の身体が俺の身体に密着している。柔らかい……しかも、男からは絶対にしない極上のいい匂い。俺が……そんな匂いに反応しないわけがない。

「お、おう」

「その、これからは……っ」

「お前とは……友達だろつ。楽しい時だけじゃねえ、辛い時も一緒だ」

友達つて言うのに何故か抵抗があった。友達じゃ嫌なのかよ……暮葉とは。それなのに俺は暮葉の事が嫌いじゃない。むしろ……。

……はあ、なんだよ。結局ソレかよ。

散々悩んでいた俺が馬鹿だった。こんなに簡単な答えに気付かなかっただなんて。

気付いてしまった……やっぱりそうだったんだな。

それだけに　この状況は何となく嬉しいかもしれない。

……しかし、そんな幸せをぶち壊すかのように、

「　　ッ！」

一発小さな何かが、暮葉の太股を貫いた。

第167話 気付いてしまったもの（後書き）

今回は諸事情（これ投稿したのが登校寸前）により、後書きトークコーナーはお休みです。申し訳ございません！

## 第168話 それぞれの遭遇

暮葉が撃たれた。

突然の銃声と共に、暮葉の太股に銃弾が当たったらしい。倒れている暮葉の足からドロドロと赤い血が流れている。暮葉は傷口を手で触れ、出血を抑えようとしていたが、当然そんな所に触れて痛くないわけがない。暮葉は苦しそうに呻き声を発していた。

あまりにも痛々しい光景。ちつくしょう……どっから銃弾が飛んできたんだよ。

「クソツ、出てこい！ 暮葉を撃つたのは誰だよ！」

叫ぶと、建物の影から銃を構えた黒づくめの集団が現れた。あれは……まさか、さっき俺と戦った三原って名前の人の部下か何かか。ミネットの事を狙っていた連中だ。だけど、標的はミネットのハズなのに何で俺達を攻撃……そうか、俺がいるからアイツらは攻撃してきたんだ。

俺も連中のリストに登録されているってわけだ。そのせいで暮葉が……ッ！

「おい、なにやってる。女は標的じゃないだろ？」

「しかし我々の姿は見られた……まだ生きている、殺すべきだろ」

「しかし、女のほうは……」

「三原さんがそれを許すわけがないだろ。ここは戦場だ、躊躇うな！」

男達が会話をし終えた直後 前列の5人が一斉に射撃を開始。  
アサルトライフル  
自動小銃から放たれた無数の銃弾が目にも留まらぬ凄まじいスピードで迫ってくる。

まずい、これ以上撃たれたら暮葉は本当に死ぬ。

だったら

「う、があ ツ！」

俺は死を覚悟する。暮葉を守るように仁王立ちしをした。そして、こちらに飛んできた銃弾全てをこの身で受け止めたのである。暮葉を死なせない為に 俺が盾になってのだ。

俺に当たった銃弾がバラバラと、次々とアサルトに落下してゆく。意外な事に俺は全ての銃弾を弾いていた。痛みは半端じゃねえけど……それでも、俺は銃弾を弾いていた。まるで歩兵に銃撃されている装甲車のように。

「はあ……はあ……はあ……」

連中は銃弾が尽きたのか、それとも無駄だと思ったのか、突然銃撃を中止した。ただ一つだけわかる事は アイツらみんな怖がっている。

無数の銃弾を身に浴び、何発被弾したかさえ分からない。それでも、俺は倒れるどころか風穴が開いたり身体の一部が吹き飛ぶ事もなく、義経を守る弁慶のように立ち続けていた。

既に身体はボロボロ。服に穴が開いているのは勿論の事、被弾の影響が僅かに皮膚が銃弾に抉り取られたらしく、傷口から鮮血が流れ出していた。真っ白だったカッターシャツも、流れ出す血液のせいで一部が真っ赤に染まっている。だけどよかった……意外と軽傷で済んだぞ。

「ど、どうなってんだ……アイツ、ちゃんと弾当たってたよな？」

「なんでピンピンしてんだよ……バケモノかよっ！」

「7・62mm弾が当たって無事なわけ……クソツ、お前アレ持っ  
てこい！」

「はい！」

黒づくめの一人が、たまたま近くにいたもう一人に何か指示をした。アレが何かはわからねえけどアイツら……俺に銃が効かないからって、何か秘密兵器を出すつもりだぞ。

ソ連製の銃でやや出血する程度の軽傷。だけど……だからってさ、それ以上の武器に耐えられる保証はねえぞ。

重機関銃かグレネードか知らねえが、そんなモノを持って来られ  
たらおしまいだ。

「け、けーすけ……様っ」

「俺は大丈夫だ。お前は喋るな、今は無駄に体力を使うな！」

「だ、大丈夫……ですっ、風の力を利用した回復術式を組み上げま  
した」

「か、回復術式？ それって魔法か？」

「はい……回復が遅いのですが、明日になれば傷跡も目立たなく……  
ッ！」

「やっぱり無理して喋るな！ せめて傷の回復を待て！」



風を利用した回復魔法って意味不明だけど、とりあえずFFに出  
てくる“いやしの風”と同じモンだと思えばいいのか？

とにかく、今はその魔法の効果に期待するしかない。そして  
どんな手段を使ってもアイツらを食いとめて、暮葉を運んで戦線  
を離脱しねえと 本当に大ピンチだぞ。

くそっ、だけどどうすりゃいいんだよ。今は睨み合いが続いてい  
るが、下手に動けば連中が攻撃してくる事は間違いないだろう。

「アレ持つてきました！」

「よし、これで 殺す！」

「ッ！？」

アレというヤツを一目見て、思わず呼吸が止まってしまった。

RPG-7。

冷戦中にソ連が開発した携帯式対戦車擲弾発射器だ。対戦車兵器  
かよ……いくら馬鹿みたいに身体が丈夫な俺でも、流石に戦車より  
防御力が高い自信なんてねえぞ。このままじゃ、運が良かったとし  
ても腹に穴が開く。運が悪けりゃ上半身がぶっ飛んでしまう。

どっちに好んでも俺は死ぬかもしれない。

「へへ、くたばれコラアアア！」

RPG-7を受け取った黒ずくめが叫んだ瞬間 ロケット弾が  
放たれた。そんなものが目に見えるわけがない。増してやアレは対  
戦車兵器である。終わった……俺の人生は多分、ここで上半身がぶ  
っ飛ばされるか、腹か胸に穴が開くかのどっちかで終わる、と思っ  
たが。

轟！ とロケット弾が爆発を起こした。

俺は死んでいない。だが、炎も煙もあるのでロケット弾は何かに命中したらしい。だけどロケット弾は確かに俺を捉えていたのに、一体何に命中したってんだろうか。さらに次の瞬間、RPG-7を持った黒ずくめの男の前に影が舞い降りて、その影は着地の寸前に華麗に一回転をする。

打撃音の直後、影が着地したと同時に 黒ずくめの一人が地面に倒れ込んだ。

その他の黒ずくめ達は咄嗟に銃口を影に向け、引き金を引こうとした……が、立ちあがった影は右腕を大きく振るい 激しく燃え盛る灼熱の弾を黒ずくめ達に放った。

着弾と同時に発生した、空間を切り裂くような爆発。

爆風と熱波で黒ずくめ達は吹っ飛び、後列の黒ずくめ達はやや後退りしていた。

俺は一瞬で前列の黒ずくめ達を駆逐した影を見る。やたらと強い影の正体は、

「あ、明智!？」

「ここは私が引き受けた。だから藤島は木下を連れて逃げて欲しいぞ」

「だけど」

「いいから! 暮葉は私がおぶってくからさっさと逃げるわよ!」

今度は明智とは対照的に高い声が聞こえた。咄嗟に暮葉のほうを見ると、アスファルトに横たわっていた暮葉を背負っている人の姿

がある。

負傷した暮葉を背負っていたのは間違いない。伊吹であった。

「ば、馬鹿野郎っ！　なんでお前までこんな戦場とこにいるんだよ！」

背後で明智と黒ずくめが戦っているのか、銃声と爆音が轟く中で、俺は心配になって伊吹に向かってそう叫んでいた。超能力が使える明智ならまだしも、伊吹は基本一般人だろ。確かに剣道の腕前は素晴らしいものだけど、それだけで銃を持った黒ずくめ達と戦えるはずがない。

伊吹が来たって　殺されるだけじゃねえかよ。

しかし、そんな事を言ったにも拘わらず　伊吹の瞳は希望に満ちていて、

「あんた達を助けに来たに決まってるでしょ！　ほら行くわよばか圭介っ！」

「い、痛っ！　痛いのです伊吹さんっ！」

「ちょっと我慢なさい！　今すぐ病院まであんたを運ぶからっ！」

言いながら伊吹はいきなり走り始めた。俺は「おい！」と叫びかけながら、その背中を走って追いかけ始めたのである。時々黒ずくめ達と戦う明智の姿を確認しながら……。

明智と黒ずくめ達の戦闘は一方的であった。明智は　余裕そうであった。

それから数分経って、俺と暮葉を背負う伊吹は古宇坂の街を走り続けていた。伊吹曰くどうやら俺達は病院へ向かっているらしい。

救急車なんて呼んでもこないであろう今、被弾した暮葉を病院に運び込もうとしているのである。

しかし、しばらく走り続けていたその時、

「い、伊吹さん……拙者は大丈夫なのですっ」

「な、何言ってるのよ、あんた撃たれたんでしょ？」

「大丈夫なのです……即席の回復術式が効いてきて少し楽になってきたのです」

暮葉のその言葉に、伊吹は眉間にしわを寄せた。

無理もない。伊吹は暮葉が普通じゃないとは知っていても、流石に回復魔法まで使えるとは思っていなかったのだから。

「かいふくじゅつしき……？」

「ああ、コイツは風が何かの力で傷を癒せるらしいんだ」

「そ、そうなの!？」

「はい、その……明日になればほぼ完治出来るのです。ですからその、傷口を洗って出血さえ止めてくれれば明日には完全復活なのです」

その言葉が嘘は本当かは知らないが、暮葉は真剣な顔でそう答えている。おそらく暮葉が回復魔法を使えるというのは事実なんだろう。

こんな状況だ。病院に行っても病院そのものがやっていない可能性がある。だから今はその魔法の効果に期待するしかないだろう。

「なあ伊吹、その薬局で包帯でも盗んで応急処置してくれないか？」

「は、はあ？　なに言ってるのよ……どう考えても病院に行ったほうが」

「じゃあ、この状況で病院やっけると思ってるのかよ!？」

「そ、それは……」

「信じるしかねえだろ……回復魔法の効果を。魔法使いとしての暮葉を」

それに今なら信じられるかもしれない。あれほど苦しがつていた暮葉も、今では大人しくなって大分楽そうにしている気がする。衰弱してぐったりしているわけではなく、本当に傷が治ってきたのか痛みが引いて、楽になったような顔をしていた。

暮葉の回復魔法はどうやら　本物らしい。

「わ、わかったわ……それであんたはどうすんのよ？」

「俺は風剣のシルフってヤツを止めに行く」

「そ、それこそダメなのです！　けーすけ様、下手したら死んじゃいますよ!」

俺の言葉に暮葉が反応し、俺の行動を止めようと必死に叫んでいた。風剣のシルフとは一度会っているから何となくわかってるよ、アイツが危険なヤツだって。しかも俺と会った時はまだ本気を出し

ていなかったつばいし、だから心配してくれるのは本当にありがたい。

でも、それだけで立ち止まる理由にはならない。

俺は戦場に行かなければならないんだ。

「死なねえよ！ 大体、お前がそんな状態の今、誰がアイツを止めるんだよ！」

「な、仲間のアルファ隊の人が……っ」

「その味方が来る保証あんのかよ。それに俺は一度ヤツと会っている。俺はヤツを力をなんとなく知っているんだ。その上でヤツの所に行くっつってんだよ」

そう、俺はヤツの力を知っている。

その上での決意なんだ。死ぬかもしれない覚悟は既に出来ている。問題は今、ソイツを止められるヤツが俺しかいねえって事なんだ。

「……わかりました、けーすけ様の頑丈さに賭けてみるのです」

「ああ、アイツの事は俺に任せてくれ」

「あんた！ 何が何だかサツパリだけど死ぬんじゃないわよ！」

「絶対死なねえ！ だからてめえらも死ぬんじゃないぞ！」

今の俺にはそれしか言えない。とにかく、さっさと騒動を終わらせよう。明日から普通の高校生活に戻るかは知らねえけど、出来れば戻ってみんなと楽しくやっていきたい。

暮葉とも……もうちょっと仲良くなりた……かな。まあ、それを実現する為にはさっさと風剣のシルフってヤツを倒さなきゃな。だけど俺には魔力感知なんてできねえし、アイツが何処で誰を襲っているかなんてサツパリわからねえ。

「　っ?」

その時、轟々という爆音が炸裂した。

……この音、海浜公園のほうから聞こえてきたぞ。しかも、その海浜公園のほうを見てみると眩い閃光で夜空が照らされていた。

……あそこかな。とりあえず行ってみよう　あそこにヤツがいるかもしれねえ!

……それから数十分後、俺はようやく爆心地に到着した。ちくしように……ずっと走っていた上に怪我もしているせいか、大分疲れてきたけど……まだまだ休めねえな。何故なら、爆心地には倒れ込んだ自衛隊の人達を踏みつける　風剣のシルフの姿があったからだ。

「あゝら?　アンタあまさか殺されにきちゃったわけ?」

「てめえ……その人から足を退けるよ!」

「私を苦しめる元凶を調べていたんだけど、どうやらコイツらじゃなさそうね」

「ぶざけんじゃねえよ。いいから足を退けるっつってんだよ!」

すると、シルフはようやく足を退けた　瞬間、足で自衛官を蹴

り飛ばし、夜の東京湾の奥底に沈めやがったのだ。

「てめえ！」

自衛官を助けようと、俺は衝動的に飛び出しそうになったが。その行動はシルフによって阻止されてしまった。

シルフが俺の前に立ちふさがったのである。

コイツ……平然と人をブツ殺しやがった。それで笑ってやがる……ッ！

「はっは！ あんた、自分の身の心配をしたほうがいいんじゃないの？」

「うるせえよ……血も涙もねえヤツにだけは言われたくねえ」

「ハッ！ 折角アンタは後回しにしようと思ったのに。態々殺されるに来るとは……」

言いながら、シルフは背中に背負っていた大剣を握り、それを振り回す。ガチャガチャという金属音と風を切り裂く音が響き渡り、シルフは高級そうな大剣を構えて、

「いいわあ！ じゃあアンタからぶっ殺してあげるわよ！」

「そう簡単に死んでたまるかよ……今からお前をぶっ倒す。てめえの目論みはたった今ここでぶち壊してやる！」

こうして俺と風剣のシルフは遭遇し、向き合ったのだ。

さて……みんなの為に、暮葉のためにも 精々死なねえように頑張らねえとな！



ここは古宇坂北部、市境にある使われなくなったオフィス。

こここの8階に俺　三原寅彦は5人の部下を率いて、外を眺めていた。こんな地方都市には初めて来たモンだが、案外東京より騒がしいモンだな。なんでも俺達以外のクソ野郎共が街の中で騒いでいるらしいのだ。全くどこのクソ野郎なんだか……ま、それは好都合な話だ。

これだけ混乱していると、俺達の行動はばれ辛い。つまりだな……警察に大した睨まれる事もなく作戦を遂行出来るってワケだ。特異点もしつかり捕獲したしなあ。

「ミネット・ローラン。コイツが最強の超能力者を生み出す鍵になるかもしれない」

呟きながら、俺は捕えた特異点が寝ている台へと近づいた。東京の研究施設に戻るつてのも手の一つであったが、その途中に襲撃されちゃあお終いだ。なら話は簡単でよお、実験セットを仲間に持つてきてもらうとして、この廃墟で実験を行えばいい。

なあに、バレたりはしねえだろう。このあたりは人口が少ないんだよ。その上今は警報発令中との事で殆どの市民は市外だ。いるのは精々治安維持の為に出勤した警察や自衛隊程度。その主戦力も今や市内南部に動いているらしいしなあ。

「ハハツ！　何から何まで思い通りだあ！　見てなあ学園長。ここで俺が実験に成功すりゃあ早川なんざ目じゃねえ魔道能力者の完成だ。科学と魔法の融合……ハツハハハ！　いいなソレ俺も小せえ頃そついうの夢に思っていたよ！　それが現実のモンになるんだからなあ！　なあてめえら……あ？」

なんだ、俺の部下が全員窓の外を眺めて唾然としてやがる。そんなに外でおかしいモンでもあるってのかよ。まあいい、そんなに面白いモノなら俺も見てやろうじゃねえか。……しかし、それは全く面白くねえ 邪魔くさいだけのものであつた。

ガツシヤアアアツ！ 空を飛んできた早川悠が 窓を蹴り破つてきやがつた。

あの野郎オ……どうしてここがわかつたんだ。だが、それだけだ。確かに邪魔くさいヤツが来た事には変わりねえが、所詮早川は早川だ。俺以外には倒せねえが……俺からしてみればこのクソガキも所詮はガキんちょ同然。軽く捻つてやれば無問題だ。

そんな早川は窓の近くにいたヤツの一人を蹴り飛ばし、豪快に床に着地した。

ゆっくりと起きあがり、その赤い瞳で俺を捉えると、

「三イイ原くウウウウウウン！！」

狂った笑みを浮かべ、持っていた散弾銃の引き金を引きやがつた。まずいな……俺は咄嗟に目の前にいたヤツの背中を叩き ソイツに犠牲になつてもらつた。

被弾したヤツは血飛沫を噴き、そのままゆっくり床へ倒れていく。そんな中、俺はふざけた笑顔を見せる早川悠に対して、

「おゝら、どこ目え付けてんだテメエ？ 銃弾撒き散らしてんじやねえぞ！」

ガチャ、と俺の部下は銃口を早川に向ける。しかし早川は動じず、

風の操作でぐわんつと一気に部下に接近し、手榴弾のピンを全て抜き、そのまま腹を蹴りやがった。巻き込まれた2人を道連れに三人は大胆に爆発しやがった。ったく……使えねえ盾だ。

最後の一人はそんな早川にビビったのか、特異点を左腕に抱えて、

「ひ、ひい！」

だが、そんなクソ野郎の些細な抵抗など無意味であった。銃を構えていたソイツや早川悠にぶん殴られたのである。それも早川悠が持っていた散弾銃でな。

ソイツの生死はどうでもいいが、いいのかあ早川悠。今の攻撃でテメエが今まで愛用してきた散弾銃がぶっ壊れちまったぞ。カッコよく特異点をお姫様抱っこしやがって……そんな余裕がテメエにあると思ったら大間違いだぜ。ったくム力つくから挑発してやるお  
か。

「ぎゃっはははは！ カッコいい〜ヒーロ早川ちゃんのご登場だなあ！」

早川は俺の言葉など気にもせず、特異点を台に置いた後、鬼のような怖い顔を浮かべて俺のほうを向いてきやがった。チッ、面白くねえ……折角ネタ飛ばしたんだから反応しろよ。

唯一の反応が殺意って、ただこっちがム力つくだけだっつーの。

「さアて、スクラップの時間だぜエ！ クソ野郎がアあああッ！」

さて、と……じゃあ目の前の早川悠<sup>バカ</sup>を殺す作業に入るとするかあ。

## 第168話 それぞれの遭遇（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「おい作者」

作者「はい？」

圭介「正直に言え、今回　くううううん！　つてのがやりたかっただけだろ」

作者「いやあ〜最近起きてられなくて、更新遅れ気味でごめんなさ  
」

圭介「話題変えるなよっ！？　正直に答えろ！」

作者「そついえばすきやきってさ　」

圭介「作者アアアア！」

色々ごめんなさい。

## 第169話 実験

制限時間は残り60秒。

クソツ、雑魚共を片付けるのに能力を使い過ぎた。まあいい……60秒もあれば油断しなけりゃ余裕で殺せる。問題はここが屋内だつて事と、そこにミネットがいるつて事だ。こんな状況じゃ大技は使えねエだろう。使ったとしても笛で発動を強制停止させられんのが関の山。

なら三原に近付いて、オレの右手でヤツの口元を掴んで、そのまま能力で酸素でも弄つてヤツを酸欠状態してやる。酸素濃度を6%未満にしてやれば人間は簡単に死ぬ。

とにかく、三原を殺せば全ては終わる。あの野郎さえ殺してしまえば……。

だからオレは三原を殺す。とにかくあの野郎を殺す事だけを考える。どうせオレはもう光の道に帰る事は出来ねエ。今更引き返す事なんて出来ねエ。

なら三原と一緒に堕ちてやるよ……地獄でも大地獄でも何処にでもなア！

「……ッ！」

ダツ！ と、オレは一瞬で三原の懐に飛び込んだ。風の操作で加速し、風の力でオレの身体を前へ動かしたのである。ぐわつと五本の指を開き、三原の顔を掴もうとした。指一本でも三原に触れる事で出来たならオレの勝ちだ。皮膚さえ触れば酸素濃度を操作出来る。

地味な戦い方だが、それでも十分三原を殺せる……だが。

三原は首を振っただけで一撃を軽く避けやがった。

凄まじい勢いで突き出したオレの右手が空振りする。瞬間、三原

のクロスカウンターがオレの顔面に突き刺さりやがった。暴風の膜の僅かな弱点を突き、風が循環する僅かな一点を突く三原の左拳は容赦なくオレの鼻っ柱に激突する。

「ア……ッ！」

流石に拳一発で意識を失うことはない。三原はそこまで強くはない。所詮は地下ですつと研究をしていた引きこもりだからだ。怖いのは三原が使う不思議な術だ。オレへの対抗策は腕力は低くとも素早い三原にピッタリで、一発に重みはないながら確実にオレにダメージを与えている。

鼻への一撃でぶっ飛ばされたオレは、三原の数メートルで着地。そのまま走って五本に開いた指を突き出して、再びソレで三原の顔面を掴もうとする。

だが、その一撃も軽々と避けられた。

三原は軽く後ろへ身を退けただけだった。たったそれだけ。でも、オレの渾身の一撃は軽々と避けられてしまったのだ。

「相変わらず進歩のねえクソガキだな、テメエはよお！」

三原の叫び声と共に、ゴンと言う激しい衝撃がオレに伝わってきた。脳が揺さぶられて一瞬能力が暴走するかと思った。クソッ、腕力のねえ三原にしては力の入った一撃であった。

それでもオレは倒れなかった。辛うじて着地に成功し、そのまま立ち続けたのだ。

「おくらどうしたあ早川悠？ テメエの助けたいガキンちよはここにいんぜ？ 俺を殺してみるよ、そうすりゃあの特異点は助かるんだろ？」

「クソツタレエ……ッ！」

余裕そうなツラしやがって……そのツラ潰したくなってきやがったぜ。そう思ったオレは再び一瞬で間合いを詰めて、三原のクソ野郎を鷲掴みしようと手を振った。

それでも オレの手は触れる事さえなかった。

オレが攻撃すれば三原は必ず避け、逆にオレは三原の攻撃を避けられない。頼りの暴風の膜は三原には全く通用しねエ。オレは何回でも左右の手を振りまくったが、一瞬たりともオレの手が三原の顔面に触れる事はなかった。三原はちょこまかと攻撃を避けまくるのだ。

クソツタレが……あと20秒で魔力が枯渇する。魔力エネルギー変換機のご加護がなけりゃあ能力を使うどころか、この足で立つ事さえできなくなっちまう。

クソ……三原ごときで立ち止まってる場合じゃねえ。このままじゃ……ミネットを助ける事なんざできやしねエぞ……クソツタレエ！

「遅えんだよおテメエ！」

「ぐ が、アあ……ッ！」

三原が叫んだ瞬間、高く上がった三原の足がオレの首筋に激突する。コイツ、こんな大振りな技でも暴風の膜を潜り抜ける事であるのかよ。今ので首が折れそうになった。衝撃で吹き飛ばされたオレは凄まじい勢いで、ミネットが寝ている事務机に激突したのだ。

さつきから連続で喰らっていた攻撃。そしてトドメの一撃。

オレの身体はもうボロボロだ。黙っているだけで血が体内から込み上げてくる。今にも鮮血を吐きだしちまいそうだ。だが……まだ諦めるわけにはいかねエ。オレの目の前に、まだクツソム力つく不良中年が嫌なツラを見せてやがるんだからなア。

オレは事務机に手を乗っけ、己の腕力を使ってふらふらと立ち上がる。

「三原ア……ブチ…殺すッ！」

「殺れるモンなら殺ってみる。最も、テメエの実力で可能ならな」

ふざけんじゃねえよ……今更学園がなんで特異点を求めるんだ。

散々厄介だと思ってブツ殺しまくっていた特異点を。危険じゃないと判断されて放置していた特異点を。どうして今更捕まえて何かに利用しようとしてやがんだよ。これ以上特異点が地獄を見る必要があんのかよ。

もうあのガキ、そして特異点を不幸にはさせねエ。これ以上、闇の世界の為に犠牲になる事なんざ神が許してもオレが許さねエ。オレが人の事を言えねエってのは分かってる。だけど今はそんな事を気にしている場合じゃねエ。

大切なのは気持ちってモンだろ……今のオレはあのガキを守りたい。

そう思ってたよ。

だから、その為には三原は邪魔だ　悪イがオレと一緒に地獄へ来てもらおうぜエ！

「が、ア　ア　ッ！」

風の操作を行い、オレは飛び上がった。正面がダメなら上からだ。上から三原を襲えば三原は当然オレの攻撃を避ける。そこに僅かな隙が生まれるはずだ。なら、その隙を突いて一瞬でもいいから三原の皮膚に触れるんだ。それで三原を殺せる。

成功率は20%くらい……だが、賭けるしかねエよ。今更どうしろってんだ、残りの魔力残量から多分この一撃がラストチャンスだ。





クソツタレ、情けねエ……オレは超能力がなかったら戦うどころか、自分の力で歩く事さえ出来ねエのかよ。以前のオレならまだ戦えたかもしれねエ。そこに最初に蹴り飛ばした、黒ずくめの三原中隊カンバの隊員が寝ている。ソイツの武器は無傷だ。

以前のオレならその武器を手にし、多少は走れたから三原と戦えたかもしれねエ。

だが、今の……身障者のオレには無理だ。杖がなければ歩けない。頭がぼんやりしていて小難しい事を考えるのが以前より苦手になっている。

こんな状態じゃあ……戦うどころか日常生活すら送れねえ。クソツタレ、他の奴らは超能力を使わなくなつて戦えるのに。俺をぶん殴つた圭介アイツは能力を一度も使つてねエ。

そもそもそんなモノを使えない。ただの一般人だった。

あんなヤツでもオレを倒せたつてのに……その一方でオレは……ッ。

「ほら小僧よく見てろ！ 今からテメエが守りたがっていた特異点を解剖してやる。生きたまま手始めに頭蓋骨でも切り裂いて脳でも見物するかあ。魔法使いの脳つてのがどうなつてるか前々から興味あつたんだよなあ……」

ふざ……ケンじゃ……ねエ……ぞ、クソ野郎オが……。

ソイツは実験動物モルモットじゃねエ……ンだよ。

近づくな。そのガキに汚エ手で触れてンじゃねエよ……このスクラップ野郎オ。

一瞬消えかけていた戦意。しかし、三原の発言で再び燃えてきたような気がした。

そして……拳に次第に力が入り 次第に理性がなくなっていくような気がした。

## 第170話 風剣のシルフ

「あはっ！」

夜の海浜公園。大剣を持った風剣のシルフが真正面から突っ込んできた。動きは俊敏だが決して目に見えない程速いわけではない。俺は向かってくるシルフに合わせて、握った右拳を叩きこもうと一気に走り始めた。拳がシルフに命中する　　と思った。

瞬間、突然目の前からシルフが消えた。  
ヒュッ、と拳が空しく空振りする。右にも左にもいなければ、一瞬で背後に回り込んだわけでもないらしい。そこでふと、俺は上を見た。

シルフは空にいた。それも5メートルも一気に飛び上がったようである。彼女にそこまで凄い身体能力があるとは思えないし、おそらくは風の魔法の一種なんだろう。そして、シルフは着地しようと落下してきたが、そこで　　シルフの右足が俺の顔面に突き刺さった。

「あう……ッ！」

5メートルの飛び蹴りは強烈だ。鼻の骨が砕けるかと思ったほどである。衝撃で殆ど無理やり地面に押し倒された俺は、なんとか痛みを我慢して起きあがる。が……その時、既にシルフは大剣を振りまわし次の攻撃に移っていた。彼女は大きく振り回した大剣を地面にグサリと突き刺す。

瞬間、局地的な暴風が発生した。

凶器と化した風が容赦なく俺に吹きつけてくる。立ち上がった俺は、凄まじい暴風の前に再び押し倒されそうになるが、ズルズルと後ろへ押されながらも、必死に立ち続ける。

「ふっ！」

俺が強風で動けない事を確認したのか、シルフはがむしゃらに大剣を振った。

放たれた3発の風の砲弾。

パトカーさえ簡単に破壊する砲弾を喰らえば、俺の場合は死にはしないが、それでもかなりのダメージを受けるだろう。このまま暴風に耐えてはいつまで経っても形成は不利。そう思った俺は咄嗟に右へ跳躍し、まずは一発面を回避。

しかし、そのせいで風に飛ばされた拳銃　二発の砲弾が俺のすぐ近くに着弾した。

「う、あ　ッ！」

地面に倒れた俺に細かく砕かれ、鋭利な石が容赦なく襲い掛かってくる。ズシャッと飛んできた石の中の何個かが俺の皮膚を切刻んだ。切り傷からは真っ赤な血が流れ出す。

しかし同時に　シルフも口から血の塊を吐きだしていた。

「げっほ！　ごほ、げほ！　クソ、かなり出力が低下している……攻撃に威力がない！」

「……はっ、随分弱ってるみてえだな」

「何処の誰か知らないけど、嫌な術式を組み上げたモンだわ。特定の魔力を持つ者を圧迫する魔女殺し……チツ、ホントにどこの誰が組み上げたのよ！」

確かに、どこの誰がそんなものを組み上げたんだろうか。しかし、

その魔法のおかげでシルフはかなり弱っている。だから俺でもギリギリ戦えている。何処の誰かは知らないが、間接的に俺を助けてくれて本当にありがとう。その魔法を組み上げた努力は 決して無駄にしない！

「お、おオアああああつ！」

今度は俺がシルフの懐に飛び込もうとした。シルフも俺に合わせ、体格に合っていない大剣を持って間合いを詰めてきた。再び俺とシルフが接近する。俺は再び拳を握って、ソレをシルフの顔面に叩きつけようとしたが、またしてもシルフは飛び上がった拳を回避する。咄嗟に俺は上を見ると、シルフはそれほど高くは飛び上がっていない。すぐに俺の背後へ着地すると、大剣を大きく振り回した。決してそれで俺を斬るわけではなく、振られた大剣から突然大きな竜巻が生まれ、俺の身体を何メートルも高く突き上げる。

吹き飛ばされた俺は着地なんて出来るはずもなく、子供に投げつけられたおもちゃのように近くにあった建物の壁に激突。ズルズルと、3メートルほど下にあつた地面に落ちていった。

「ホントそういうのは嫌いだわ！ いつもいつも私ばかりこんな目に遭わせて、私をこんな風に変えやがって、これだから現実つてのは嫌いなものよ！」

何を言っているのは訳がわからない一方的な罵声。すると、大剣を振りまわしたシルフが風の鈍器を作り出し、大剣を振ってソレを激しく投げつけてきやがった。咄嗟にゴロゴロと、身を転がす事によつてその一撃を回避した。が……ふと後ろを見ると、建物には大きな穴が開いていた。

こりゃあまずい……あんなの喰らってたら、俺でも病院送りになるかもしれない。

「く、そお……っ」

「ホンツトしつこいわねアンタ。いい加減うざくなってきたんですけどお？」

「うるせえ……てめえみてえな外道女に、負けるかつつってんだよ」

「ふん、私をこんな風にしたのは誰だと思ってんのよ？」

「そんなモン知るかよ。だからって無差別に攻撃してんじゃねえよ！」

「あゝら？ 私はこれでも標的は選んで攻撃してるわ。その軍服の人達も、私の前に立ちふさがったから攻撃したのよ。自分の身を守る為に戦う事の何が悪いワケエ！？」

シルフは大剣を振りまわし、それを地面へ叩きつけようとした……が、刃が地面に突き刺さる寸前でシルフの動きが停止した。シルフは左を向いて、何かに釘付けになっていたのだ。

俺も恐る恐るシルフと同じ方向を見る。

そこには、何処かの民族衣装に身を包んだ、背の高い金髪の女の子が佇んでいた。

なんだアレ、十字架っぽいけど……なんか変な形だな。それよりアイツは何者だ？

「間に合いました、とリーリヤは状況報告します」

「リーリヤ？ はっ、アンタがアルファ隊ってヤツの隊長ってワケねえ」

シルフが言ったその言葉。隊長？ アルファ隊の隊長って事は…  
…あの人、暮葉の上司さんって事になるのか。だけど、隊長さん自  
らが戦場に来るって……一体何の用なんだろうか？

「風剣のシルフ、気分はどうですか？ とリーリヤは問います」

「気分？ そうか……アンタなのね、変な術式を組み上げた術者は  
「！」

「いかにも、とリーリヤは答えます」

「チツ、イおかげでこんなガキ一人さえ、満足に押さえつけられな  
いじゃない！」

「満足な状態でも、藤島様を倒す事は不可能……とリーリヤは推測  
してみます」

どこかで似たような感じのを聞いた事があるな、リーリヤって人  
の口調。まあそれはどうでもいい話んだけど、シルフを弱らせて  
いたのはあの人だったんだな。そうか、通りで急にシルフが弱体化  
したと思ったよ。お陰でなんとかシルフと戦えている、なんともあ  
りがたい。

「いちいち癪に障るわね……この野郎オがあアアああっ！」

風剣のシルフは大剣を振りまわし、リーリヤに向かって風の砲弾  
を放つ。

その数なんと5発。それも目で追うのがやっとの速度。速い上に  
強力、そんな5発の風の砲弾が容赦なくリーリヤに襲い掛かる。

が、リーリヤは手に持っていた飾りだらけの杖を振りまわす。カキン、という音が炸裂したと同時に風の砲弾は砕け散った。同じ事を何度も繰り返し、5発の砲弾は完全に消滅する。

「な、ば……うそ……っ?」

あまりの荒技に シルフは口と目を大きく開けていた。

それだけではない。僅かに身が震えているような気もする。怖がっている……シルフは突然現れた謎の強者 リーリヤを恐れているやがる。

そのリーリヤは表情一つ変えず、冷たい視線でシルフの事を睨み続けている。

「一つ警告しておきます。リーリヤは正教会から聖人として認定されました。その実力は一般の魔法使いを遥かに上回る事を……忘れて欲しいのです、とリーリヤは貴方に警告します」

聖人って…… ホントにいたんだ。二次元だけの話だと思っていたけど。それにしてもあのシルフが赤ん坊扱いとは、アルファ隊の隊長……恐るべし。

しかし、圧倒的な力を見せつけられてもシルフは戦意を失わず、むしろ、

「……ナメられたモンね。腹が立つわ!」

むしろ戦意が高揚していた。

大剣を構え、今にもリーリヤに斬りかかりそうな勢いだ。

それでもリーリヤは余裕なのか、一言も喋らず表情すらも変えていない。ただ、じっとシルフの事を生ゴミを見る目で見ていたのだ。このまま行けばシルフはリーリヤに倒される。それでこの騒動は



終わるだろう、だけど本当にそれでいいんだろうか。少なくともその方法だと　俺の怒りは収まらねえ。

散々この世界の人を痛めつけたんだ。だったら、やっぱりシルフはこの世界の人間が倒すべきだと思っただ。そして、この世界の人間で戦えるのは　この場には俺一人。

だから、俺は咄嗟にシルフの前に立ち塞がり、

「あ？　アンタ何のつもりよ？」

「何のつもりよじゃねえよ。勝手に目標変えてんじゃねえ、てめえの相手は俺だ！」

「雑魚に構ってる余裕なんてないわ！　アンタは後回しだからそこ退きなさい！」

「だったら、その雑魚を一瞬で倒してみろよ。てめえの力なら簡単なんだろう？」

「……そうよ、簡単よ！　アンタみたいな雑魚余裕なんでとケドオ！？」

「だったら、この人と戦う前に俺と戦え。こっちもいい加減ストレス溜まってんだよ！」

俺がこの世界の代表として　風剣のシルフをぶっ倒す。

大体暮葉と約束したじゃねえか。俺がシルフをぶっ倒すって。その約束を……俺は守って暮葉の所に帰りたいんだ。だからシルフだけはリーリヤに譲れない。

シルフを倒すのは　俺だ！

「命知らずのおバカさん。いいわあ、じゃアンタから殺してあげるわよっ！」

「馬鹿はお互い様だろ……今からお前をぶっ倒す。殴られる覚悟で  
もしとけよ！」

こうして 本当の戦いは始まったのである。

第170話 風剣のシルフ（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「実はシルフって小物なんじゃね？」

重原「ありえるね。段々ボロが出てきた気がするよ」

大吾「僕でも倒せたりして！」

重原「大吾に倒せるなら俺だって余裕だね」

圭介「てめえらいくらなんでも馬鹿にし過ぎだろ」

シルフは単独で軍隊を壊滅させる事ができます。

## 番外話 切ない片想い（前書き）

どうも、今回は人気投票で1位に輝いた伊吹の番外話です！  
9月中に投稿すると言ったときながら10月になってしまった挙句、  
本編は絶賛戦闘中なのに空気の読めないタイミングでの投稿になっ  
て申し訳ないです。

## 番外話 切ない片想い

私には男の子の幼馴染がいる。

幼稚園の時に家が隣になって、ソイツの妹と3人で一緒に遊んでくれたり、悩みなんかもしょっちゅう聞いてくれた。馬鹿で変態だけど優しくてたまにカッコよくて、何故か頼れる……。

そんな、幼稚園も小学校も　今の中学校も一緒に腐れ縁が私にはいる。

だけど、一見人気のありそうな人柄のソイツは　何故か浮いた存在になっていた。

それは私のせいでもあるんだけど。そう、私なんかの為にアイツは友達を失った。私をあんな奴らから助けようとするから、皆から怖がられ次第に孤独になっていった。アイツが私や亜紀と友達である事を除いては一人ぼっちなのも、小さい頃みたいに私を助けようとしたから……。

「はあ……」

ソイツ　藤島圭介はため息をつきながら、鞆を持って自分の席から立ち上がる。何故かその時だけクラス中が静まり返った。

圭介はクラスでは……番長をぶっ飛ばした不良扱いになっている。アイツもアイツで誤解を解く為に努力すればいいのに、アイツはいつもいつも……。

「なによあんだ、帰るの？」

私は不機嫌そうに彼　圭介に訊いた。私も最低よ……わかってんよ、全部私が悪くてコイツが悪くない事くらい。私が人に手厳しく接するのは、自分の身を守る為だって事くらい。だけど仲のよ

かったコイツに当たる事はないのに……でも、今更昔に戻る事も出来ない。

ホント……私は最低だ。そんな最低な私に対して圭介は、

「いいだろ別に。出席日数足りてんだから……学校面白くねえんだよ」

投げやりな感じでそう答えた。真面目に過ごせば誤解は解けたかもしれない。だけど圭介はあの一件以来ずっとこんな感じで、何事にもやる気を出さず、その上だるいと言って学校を早退したら近所の不良と喧嘩をしたり……。

いつの間にか、圭介は不良のような事をやっていた……。

「……ふん、勝手にすればいいじゃない」

「そんじゃお先に行かせてもらうよ。ノートよろしくな」

「あんたの為にとるノートなんかないわよ」

「へいへい、それじゃもうホントに行くからな」

そう言って、圭介は鞆を持って教室から堂々と出て行ってしまった。まだ、二時間目と三時間目の間だと言つのに……ホント、圭介はいつからあんな風に……。

って、私も人の事言えない立場よね……変わったのは私も一緒。以前の自分に戻れなくなってしまったのは私もアイツも同じ。そして……アイツが変わってしまったのも私のせい。私が変わってしまったのは自業自得。ホント、私って最低だわ……。

「うっひゃー！ 今日もヤンキー藤島怖え〜っ！」

「しかも、幼馴染の国宗さん放置とかひでえよなあ」

「なんであんな奴がクラス一緒なのかしら」

「ホントホント、授業はサボるは喧嘩はするわ……最低男ね」

「つか、国宗も国宗だ。あんなのに構う必要ねえのに優しすぎるだろ……」

ホント……最低だわ。聞いててイライラするわ……最低なのは私よ。そんな事情も知らずに勝手にアイツの悪口言っんじゃないわよ。……と、私が一人イライラしていた

「おっす伊吹っ！」

その時、肩にぽんつと手を置かれ、元気そうな声で名前を呼ばれた。

振り返ると、私を呼んだのは親友の小坂亜紀だった。

「あ、亜紀っ」

「あれー圭くんは？ 今朝はいたんだけどなあ」

「……アイツならさっき帰ったわよ」

「ふーん、大好きな幼馴染がなくて寂しい伊吹ちゃんであつたっ」

「……ッ!? ばばば、ばかあっ！ ないない、寂しくなんかない

！ あんなヤツ居ても居なくても全然変わらないからっ！」

いきなり何言いだすのよ亜紀、別に私は圭介なんて……その、そうよ。単なる腐れ縁だから居ないとちよ〜とだけ寂しく感じるだけよ……って、あれ？

……ダメダメ、私は強くならなきゃいけない。今までの弱い私は捨てなきゃいけない。だから……そんな事を言っちゃいけない。

「冗談冗談　でもそこまで必死に否定されると、本当にそうだと  
言ってるように聞こえるよ」

「ないから！　絶対そんなことないからっ！」

「にはは、じゃあそういう事にしておこっか」

「どついう意味よっ！　亜紀のばかっ！」

「はいはい、それじゃあ学校終わったら圭くんの家に行くとしよう  
か？」

「な、ば　っ！？　なに……言ってるのよっ？」

いいい、いきなり何なのよ亜紀はっ！　いつもいつも……そんなにその、私の圭介のことでいじってこ面白いの？　別に私はそんなんじゃないのに……そういうのはいらぬのに。

強い子になる為には　捨てなきゃいけないのに。  
今更素直になれないのに……。

「はいはいとりあえず決定ねっ。今日の圭くん特別不機嫌そうだったから、伊吹の顔でも見たら少しは元気出るんじゃないかな？」



「で、でも……っ」

「いいじゃん。それともあたし一人で行こうかな？ ついでに圭くん襲って彼氏にし」

「い、1分だけよっ！」

「あははは……やっぱり伊吹は圭くんが好きなのであった」

「だ、だから違っつ！」

ダメダメだわ……亜紀には絶対に勝てないわ。なんでだろう、亜紀……人のことからかうの絶対好きでしょ。人をいじるの上手すぎるよ。つい本音がぼろって出そうに……。

って何言ってるのよ。言葉にしている事が本音、それ以外には何も無いから……っ。

それから午前・午後の授業を終え、放課後になり部活に励む人は励み、これから用事がある人や特にやる事のない人は次々と下校していく。私だつてあの一件以降、剣道をやり始めたんだけど今日は稽古の予定がない。結局、私も亜紀と一緒に圭介の家に行くことになった。

圭介の家は私の家の隣だけど……入るのは久々かな。そういえば、圭介はともかく葵ちゃんは元気にしているかな。毎朝会ってるけどさ……葵ちゃんも幼馴染だから心配だわ。

「いってえ……くっその野郎オ。なんで何回殴っても倒れねえんだよ」

「噂は本当だったみてえだな……」

「畜生、次会ったら必ずブツ殺す！」

その時、怖そうな人達と私達はすれ違った。怖そうな人達は傷だらけ。何回殴つても倒れない強いヤツつてまさか、アイツら圭介と……ばか圭介、また性懲りもなく喧嘩ばかりして。

そんなんだからクラスで浮くのよ。何時まで経つても誤解されたままなのよ。

「あつははは……今の人達、圭くんの話でもしてるのかな？」

「……知らない、あんな喧嘩ばかりしてるヤツのことなんかっ」

「でも、何だかんだ言つて圭くんの事が心配なんですよ？」

「……別にっ」

そんな会話を繰り返しながら、気付いた時には既に藤島家の前にいた。そこそこ立派な一軒家でこうしてみると、圭介の家も結構お金があるんだな〜って思う。両親共働きな上に、2人も忙しいらしくて結構重役らしいし、圭介の部屋が半ば痛部屋化しているのも納得できるわ。

それにしても、アイツ……もう家にいるのかな？

亜紀は私が一步前に踏み出す前に、圭介の家のインターホーンを鳴らした。誰も出ない上に物音すら聞こえてこない。もしかして誰もいないのかしら？

「ありゃ、圭くんも葵ちゃんもいないみたいだなあ」

「……っ」

「伊吹、愛しの王子様が居なくて寂しい？」

「だから違うわよっ！」

ホントに違う……違うって。

私は別に圭介なんか心配じゃ……別に心配ってわけじゃ……。

どうして……なのよ。なんで普通にしている、強いキャラを演じていないのに。どうして私以外のみんなは普通に暮らしてられんよ。

なんで私はいつもいつも……はあ。

結局圭介の家に入る事が出来なかった私達はその後、亜紀を私の家に入れてしばらく女2人でお話をしていた。意外な事に亜紀に彼氏がいた……らしい。最も3日で別れた上に、キスもそれ以上のこともしないで別れたらしい。先輩な上に必死だったせいか、告白を断れなかったらしいけど……。

亜紀、それってホントに付き合った事になるの？

「……はあ」

お風呂上り。私はパジャマに着替えて一人、ベッドの上に座り込んでいた。

私には話せる家族がない。

お母さんは小さい頃に逮捕されて、それ以降消息不明。お父さんはお仕事。そして私には圭介みたいに兄弟というヤツがない一人っ子。だから私は……家ではいつも一人。でも、家の中に一人とい

うのも意外と気楽なものよ。だって……人目を気にする必要がないんだから。

「……………」

私はベッドの横の棚の上に、時計と一緒に置いている写真入れを手取る。中には小学生の頃の私と圭介と葵ちゃん、そして私の父さんと圭介の両親が映っている写真があった。写真は私と圭介が中心に写っていて、他の人達はその周りに立っているという感じだ。圭介……。

この頃の圭介は幸せそう。毎日が楽しくって……私も楽しかった。だけど……今の圭介はこの頃の圭介とは真逆の存在。いつも退屈そうで辛そうで……。

「ごめんなさい……」。

私が弱かったから。あの場で永渕達に拉致されたから。本当にごめんなさい……あなたの人生を狂わせちゃって本当に……っ。

「ごめん、圭介……………」

やっぱり私……弱いままなのかな。必死で強くなろうと思ったのに。強くなるうと思っただから自分のキャラを変えて、もう引き返せなくなっちゃったのに……。

結局、私の根本は変わっていない。

私は弱いまま。だから……今もこうして些細な事で涙を流している。強い人なら泣かない程度の事で涙を流してしまっている。

ダメよね……私、一人の時にこんなんじゃない……。

「……………」

アイツ……ひよっとしたら、私と会わなかったほうが幸せだった

のかな？ 私さえいなければ今だってアイツは輝いていたのかな？  
でも、そう考えるとズキズキと胸が痛む。ぶわっと、また涙が溢  
れそうになる。

嫌だ……。

アイツから離れたくない。見放されたくない……アイツを幸せに  
したい。もう一度アイツの笑顔が見たい、アイツが輝いている姿が  
見たい。

それなのに私は、いつもアイツを突き放すような事を言っちゃっ  
てる。そもそも、アイツがあんな風になっちゃったのは私が弱いか  
ら。

ほんと……私って最低ね。自分のせいなのに自分の為に我がまま  
言ってる……。

本当に……ごめんなさい……っ。

……。

「……はあ」

……なんだろう、随分懐かしい事を思い出していた気がするわ。

あれは中3の頃だったかしら……どうしてあんな事を思い出  
していたんだろう？

今日は8月16日、明日から学校が始まる。

私はあの日と同じく パジャマ姿でベッドに座り込んでいた。  
そんな状態で私はまた圭介の事をずっと考えていた。

高校に入ってからそんな感じなんだけど、今年の圭介は生き生き  
している。まるで昔の圭介に戻ったみたいに元気で、輝いている……  
私の瞳にはそんな風に映っている。だけど、私と圭介が元に戻る

ような事は決してなかった。

私は相変わらずだし、圭介は……なんだか、暮葉が来てからかな。確かに今まで通りに優しくして時々カッコいいんだけど……なんでだろう。段々　圭介が遠くなつていく気がする。

その理由ってやつぱり　。

「アイツ、暮葉の事……好きなのかしら……っ？」

最近になつて何となく、アイツが暮葉の事が好きなんじゃないかって、そんなような事を思うようになってしまった。確かに今、暮葉が一番アイツに近い女だと思う。

住んでいる家は一緒だし。私が知らない間に　圭介と一緒に行動している。

私が詳しく知らない世界に　2人で足を踏み入れている。

なんか……気に入らない。まるで……圭介が奪われたみたいで。圭介っ、あなたは私を置いてどこに行くつもりなのよ……。

口では言っていないけど、物凄く恥ずかしいけど、いつも逆の事を言ってるけど……。

……でも、もう抑えられない。

だから私は　頑張ってみる事にする。

少しだけ変わろうと努力をしてみる。

間違いなくアイツの気持ちは暮葉に傾いている。

もうチャンス逃しているかもしれない……でも、それでも諦めたくはない。暮葉にアイツを奪われたくない。久々にぎゅってしてもらいたい　っ。

すぐには無理だと思う。まだ私はソレが弱い人のする事だと思っているから。ソレをする事によって自分が弱くなると思っているから。

そもそも 私はアイツに正直になれないから……っ。

でも……暮葉に負けたくない。

奪われたくない……これ以上、何も失いたくない……っ。

これから先 ずっとずっと隣で笑っていたい。

決意は固まった。その決意を胸に抱き、やがて夜は更け、新しい  
日が訪れた……。

番外話 切ない片想い（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「全く藤島はありえねえ」

大吾「ん、なんでだ？」

黒木「伊吹ちゃんが幼馴染だったら 俺は即効攻略するのに！」

大吾「フツ……甘いな」

黒木「な、なにがだよ？」

大吾「国宗は幼馴染として設定が甘い」

黒木「……は？ 何言ってるんだお前？」

大吾「まず、幼馴染は主人公をあだ名で呼ぶモンだろ！ それから主人公にお弁当を作るイベントが国宗にはないじゃないか！」

黒木「……コイツの頭はマジでゲーム脳だな」

大吾「そしてやっぱり 幼馴染はツンデレよりヤンデレだよねっ  
！」

黒木「結局コイツは何が言いたいんだ！？」

ちなみに作者はツンデレもヤンデレも好きです。



## 第171話 キレた能力者

俺 三原寅彦は特異点が寝ている事務机の中から、錆びかけた箱を取り出す。

この中に魔法使いと超能力者を融合させた最強の存在 魔道能力者を作り出す鍵となる実験用の道具が入っている。

ついに幼い頃からの夢、最強の存在がここに生まれるんだ。そして……俺の学園内での地位も今以上に向上する。何れは……あのクサレ学園長から学園そのものを奪い取る。そして、生み出した最強の魔道能力者達を利用し、世界を俺の思い通りに変えてやる。

圧倒的な力を持ち、逆らおうとする事そのものが馬鹿馬鹿しく思える、そんな歴史上の誰もが作る事の出来なかった巨大な政府。誰もが争う事を諦めるのだから、全ては俺の思い通りかつ争いなど怒るはずもないある意味平和な世界。

この計画の遂行には、やはり早川悠では力不足だ。俺に負ける程度じゃな。しかも今の早川悠は自分の足で立つ事さえ難しい、泣き叫んでも何かを出来るわけではない。

「ハッ、その魔力変換機つてのが切れれば、動けねえ社会のゴミクズつてか」

まあ、早川悠らしい無様な姿だな……まあ、コイツを今すぐ殺すのはやめだ。今から特異点に実験をするから、それでコイツがどんな反応をするのか楽しみだ。それと……もし最強の魔道能力者が生まれた時に 誰がソイツの対戦相手になるんだ？

それは当然 現時点で最強の名を持つ男。

そう……早川悠だ。久我って選択肢もあつたが……アイツは役不足かもしれない。

魔道能力者vs早川悠……もし実現して、魔道能力者が早川悠を

殺せば……俺の今までの苦勞が報われるってワケだ。いやいや楽しみだ……本当にそうなら樂園が完成する。<sup>パラダイス</sup>

「？」

その時、一瞬だけ俺の思考が止まった。

ありえねえ……少しだけそう思ってしまった。

無理もないかもしれない。俺は早川悠がどんな状態か知っている。別に、あの野郎のすぐ傍にいたからではなく、あの野郎が入院している最中に何度もスパイを送ったからだ。それである野郎の現状や首筋の変換機の事も大体は知っている。知っているからこそありえないと思っただのだ。

ミシリ、と。

事務机に手を掛け、鬼のような形相を浮かべる早川悠が再び立ち上がったのだ。

「なんだ、どういう事だ一体？ あのクソ野郎が再び立ち上がるはずがない」

今の早川悠は、超能力を使う為に必要な演算能力を失っている。しかも、歩行機能に障害があるようで杖をつかなくては歩けない。そうか……机を杖代わりしているのか。だが、それを杖代わりにした所で何になると言うんだ。

机は杖代わりにならない。要するに、あの野郎はあそこから動けない。ハハッ、とんだ馬鹿野郎だな早川悠は。それでなんとかなると思っただけだ……。

まあ、あのまま武器でも出されちゃ困るし、何よりうぜえからな……。けどあの野郎を魔道能力者との対戦実験に使ってみたいし、ぶん殴って完全に気絶させてやろうか。

あーあーあーあー手間取らせやがって……そういうのホントムカ

つくわあ。

「ふざ、っけんじゃねえぞ、この身障者があアあああッ！」

俺は本気で早川悠をぶん殴ろうとした。今までのような精密な操作は必要ない。今の早川悠は能力を使えないんだから、当然暴風の膜を張り巡らせる事など出来るはずがない。そう、今の早川悠は体力のないもやし高校生レベル。体重を乗せて殴ればアッサリ沈むはずである。

だが……。

「 なっ!?!? 」

拳が早川悠の顔面に直撃する寸前に、俺は早川悠に右手首を掴まれた。

ありえねえ……どうなっただコイツの身体は。細いし力なんてなさそう……なのに手首を握るその力は予想を遥かに上回っている。何故だ、簡単に振り解く事が出来ねえ。

こうして俺が苦勞している間に、早川悠がもう片方の手で俺の髪を触ってきた。気持ちの悪い野郎だクソツタレ、頭を叩くにはあまりにも威力が弱過ぎる。何しやがる気だ、さわさわと来る感触があまりにも気色悪過ぎる。この野郎、こうなったら残った左拳でぶん殴って、

「う、ごアあああああッ!?!? 」

ブチブチ、メリメリ、と嫌な音が連続で響き、あまりの痛み思わず絶叫する。やられた場所を押さえてみると、激しく痛みを感じると同時に あるべきモノの感触がなかった。

再び俺は早川悠を見てみると、そのあるべきものを早川悠か持つ

ていた。

あの野郎オ……俺の髪を根こそぎ抜き取りやがった。しかも……クソツ、皮膚と肉ごと分捕りやがったなあ野郎。今度から俺はスキンヘッドにしなきゃいけねえのかよ……チツ。

「この……クソガキ！」

ムカついた……本気でムカついたぞ。やっぱコイツはブツ殺す。魔道能力者との対戦実験の被験者は久我で別にいい。早川悠だつて久我を瞬殺出来ねえだろう。なら、その魔道能力者が久我を瞬殺出来れば実験は成功だ。そうと決まればこのガキを殺す　バラバラにしてやる！

だが……そう決意した瞬間、早川悠がふらふらとして足取りで歩いてくる。見ていて危なっかしい歩き方をする早川悠は　全体重を乗せて俺に抱きつき押し倒しやがった。

辛うじて後頭部は守ったが……まずい。このまま完全にマウントを取られたら　。

「く、そガキ！」

咄嗟に早川悠にフックを打ち込み、ごろごろと転がる事によって脱出。クソ、今ので早川悠が気絶するとは思えねえ。何か武器は……あつた、早川悠が潰した俺の部下が持っていた拳銃。

ハハツ、今の早川悠に暴風の膜は作り出せない、反射は不可能だ……なら、一発でも銃弾を撃ち込んでやれば早川悠は死ぬってわけだ。ざまあみる……そのムカつくツラに風穴を　、

「う、おあつ！？　テメエ！」

ズルズルと早川悠に引き寄せられる。拳銃を手に取ろうとした瞬

間、早川悠に足首を掴まれた俺はそのまま引きずられてしまった。結果、俺は拳銃に手が届かない位置に動かされたのだ。

とりあえず俺は、この足で早川悠の顔面を蹴る事にした。何発も何発も、鈍い打撃音と時々ミスッと響く嫌な音が炸裂する。それでも早川悠は俺から離れない。離れようとしな。自分に受けるダメージなど関係ないと言わんばかりに、何度攻撃を受けても早川悠は決して離れない。

何故だ……今まで俺は早川悠を圧倒していた。それが今はどうした、何故早川悠ではなく俺が地面を這っているんだ。そうか……早川悠が能力を使えねえって事は、俺がコイツを倒す為に態々考案した対抗策も無効ってワケか。畜生ここに来てボロが出やがった……。

俺は早川悠には強いが それ以外には強くはない。

一般人と同レベルと化した早川悠、増してやコイツはキレてやがる。怒りとアドレナリンが爆発した早川悠に俺の理論は一切通用しない。キレた馬鹿と殴り合いをしているようなモンだ。

こうなったら……ただ攻撃するだけではダメだ。余計に早川悠を怒らせる。

なら……早川悠が怒る意味を奪っちゃえば。その為には何をすれば。

ミニットを殺す……いやダメだ。余計にコイツを怒らせる。クソッ、何かねえのか？

「ごんの短気野郎がっ！」

ああもうイライラする。そう思って放った一撃が 奇跡的に早川悠をぶっ飛ばした。

俺も相当イライラしていた。そのイライラが強烈な一撃を早川悠に与えたのである。

足首を掴んでいた手が離れ、顔面血だらけの早川悠は埃だらけの床に落ちる。周囲に杖代わり出来るモノは一切ない。この位置に

来れば早川悠は起きる事が出来ない。八八、神ってモンがもしも本当に存在するものだとしたら、その神は俺の味方をしたってワケだな。

まっ、科学者の俺にしてみりゃあ……神ほどくだらねえモンはねえと思うがな。

「八八、ざまあみるクソガキ！ 能力が使えねえんじゃ仕方ねえかもれねえが……感情に任せた強さなんて所詮その程度なんだよ！悔しかったら煮干し食ってカルシウムとって少し冷静になってみるよ。所詮最近のすぐキレル若者なんざ この程度ってワケなんだよお！ あっはぎやはひやははっ！」

言いながら、俺は床で寝ている早川悠の腹に蹴りを打ち込んでいく。何発も何発も内臓が破裂しそうな勢いで蹴り続けた。これが裏社会ってモンだ。加減も容赦も情けも救いもねえ。ただ強者が弱者を喰らい弱者はそれに従うか 死あるのみ。

今の早川悠は間違いなく弱者だ。まさに 喰われるだけの豚状態。

そして強者の俺は早川悠をブツ殺そうとしている。そう……早川悠、テメエに残された唯一の選択肢ってのは“死”のみなんだよ。

「はあ、はあ、はあ……ほおくら、そろそろあの世へ行く時間だ。首の骨へし折ってやつから10秒間で覚悟でもしとけ、八八ハッ！」

勝った……俺は結局早川悠がキレた所で結果は変わらねえ。

初めからこの戦いは俺の勝ちだったんだ。早川悠に勝ち目なんざ0だ……ハッ、全く世間から厄介払いされた拳句、コイツを受け入れた俺達にも嫌われ、最後はこのザマか。哀れなクソガキだがテメエらしいっちゃテメエらしいな。精々あの世じゃ幸せになりやがれよ。

最も、テメエは地獄行きかもしれないねえがな……さて、そろそろブツ殺すでしょう。

「ふう、リーネに助けを求められたから来たけど、今は修羅場かな？ とにかく到着かな」

不意に声が聞こえた。俺と死にかけて早川悠は声のした方に首を向ける。

そこに。

桃色ブロンドの長い髪を持つ、白衣を着た小柄な少女が立っていた……。

## 第171話 キレた能力者（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「早川の所に折角来た助っ人があんなに弱そうで、勝ち目あんのかコレ？」

赤佐「まあ科学者同士っぽいし、なんとかなるんじゃないか？」

大林「キレた早川も能力ナシの割には意外と強いしね」

圭介「完全に外野のコイツらが本編について議論している事に違和感を感じるんだが」

大吾「最近後書きトークコーナーもネタ不足で、それしかやる事がないんだよ」

重原「何かいい企画でも考えないといけないね」

圭介「そうですね……」



## 第172話、風剣（ウインドソード）

「う、おオアああああああっ！」

アルファ隊の隊長、リーリヤが見守る中。俺は夜の海浜公園を駆ける。全力で走ってシルフの懐へと突っ込む。一気に戦意が沸いてきたせいか、気のせいかもしれないけど……でも、さっきよりも軽々と動けるようになった気がする。

シルフを倒して騒動を終わらせる。暮葉を守ってみせる。アルファ隊の力を借りなくなっただけでシルフは倒せる。いや、この世界の間がシルフを倒さなきゃいけないんだ。

その想いが この足をさらに加速させていった。

「クソッ！」

リーリヤの魔女殺しの魔法により、かなり弱っていたシルフ。一気に間合いを詰められるとシルフは慌てた様子で大剣を振りまわし、2発の風の塊が放たれた。俺は2発の風の塊をジグザグに走る事によって回避し、一気にシルフの懐深くに潜り込む。

右腕を下から突き上げ、シルフの腹部にボディーブローを打ち込もうとした。

「ッ！」

しかし、シルフは風の魔法が何かで5メートル以上も飛び上がり、軽々とした軽々しく俺の背後に着地をすると、横から殴るように大剣が振り回される。

咄嗟に振り向き、攻撃に気付いた俺は身を屈めてこれを避ける。

轟音が頭上から聞こえた。シルフの大剣が風を切る音である。だ

が、俺を叩き斬ろうとした大剣は空振りしてしまった。

今のシルフは隙だらけだ。

そんなシルフに横腹に俺は 固く突き立てた肘を打ち込んでやった。

「げ、はあッ！」

鈍い音が炸裂すると、衝撃でシルフは後退りする。さらに、濡れた地面に足を滑らせて地面に転がってしまった。寝ているシルフに対し、俺は飛び上がって腹を踏みつけようとしたが、それより先にシルフは両手に握った大剣を振り回す。俺は慌てて後ろへ2、3歩後退りする。

その後、大剣を構えるシルフと拳を握る俺は 何十秒も睨み合った。

睨み合いの中、俺はこう思っていた。

風剣のシルフ……確かに強いけど、勝てない相手ってわけじゃねえ……。

これは いける。

「アハハ、素人にしちゃ攻撃力が高いのね……接近戦じゃ私が不利ってわけね」

「そんな重たい物持ってるから、動きが鈍くなっちゃまってんじゃねえのか？」

「私の風剣はウインドソード魔術発動に絶対必要な、魔道書のようなモンよ。風の術式を組んで多少は動かしやすくもしているし、アンタが考えているほどの強い力はいらないのよ」

「だから風剣のシルフって名前なのか……だけど、結局てめえの動

きは魔法に頼ってるだけで大したことはねえよ」

「チツ、言ってるコラア！」

構えた大剣を一気に振り下ろし、シルフは巨大な風の塊を作り出す。それを確認すると同時に俺は拳を固く握り、勢い良く前に駆ける。シルフによって作り出された風の塊から、台風並の暴風が放たれ暴風が容赦なく俺の身体に吹きつけてくる。

それでも　俺は進み続けた。

身体が壊れる覚悟で全身の筋力をMAXまで引き上げ、ビリビリと来る激痛に耐えながら吹き荒れる風の中を突き進んだのだ。

「この世界の人間の力　てめえに思い知らせてやるっ！」

「赤の軍神を　ナメてんじゃねえぞおおおおおおお！」

シルフはさらに大剣を振りまわし、激しい暴風を起こし始めた。

全くワンパターンな攻撃だ。最初の一撃をマトモに喰らえばお終いだが、しばらく耐えて戦っていれば案外大した事がない。シルフの攻撃は単純馬鹿並にワンパターンなのだ。威力こそ高いが同じ組み合わせがずっと続けば　いい加減こっちも慣れてくるモンだ。

しかも、シルフはリーリヤの魔法によって弱体化している。本来のシルフなら、今以上に凄まじい力を放ってくるんだろうが、今の彼女は俺でも耐えられる程度の攻撃しか放ってこない。

つまり彼女は　相当弱体化している。

「いい加減気絶しろってんだよ！　こんの素人があああああああああ  
ああっ！」

キレているせいか、シルフの口調がさっき以上に汚くなっていた。

だが、叫ぶと同時にシルフは今まで以上に大剣を大きく振り回し、  
今まで以上に強烈な暴風を放ってきた。

それは暴風を超える颯風であった。全てを破壊し尽くす颯風は、  
周囲にあるあらゆる物を破壊しながら突き進んで来る。

「ぐわっ！ く、くそ……これは　まずいつ！」

前に早川が起こした竜巻よりやべえ……シルフのヤツ、まだ……  
こんな事をする力が残っていたのかよ。これが赤の軍神の力か  
よ……ちくしょう、完全にナメていた。

やっぱりさっきまでのシルフは　決して本気ではなかったんだ。  
颯風が激しく身体にぶつかると、もうダメだ……。

……と、思ったその時。  
突然颯風が砕け散り、数百もの尖った空気の錐となって飛んで来  
る。そのうちの何個かは俺の身体に僅かれ触れ、皮膚を素早く切り  
裂いた。

「く、あぁッ！」

痛みで思わず悲鳴を上げ、右腕で左腕を押さえ込む。ゆっくり右  
手を離し、掌をこの目で確認すると真っ赤な血がべったり付着して  
いた。今度は左腕を直接確認すると、空気の錐によって生まれた傷  
跡から鮮血が流れ出ている。

ちくしょう痛え……けど、今のは何があったんだ？

どう考えてもシルフの技とは思えない。何故直接颯風が来なかつ  
た。どうしていきなり颯風が砕け散ったんだ。それで攻撃の威力が  
弱まった。そんな威力の弱まる選択をシルフがするはずねえだろう  
に……なんでいきなり？

「藤島様、左手をご覧になってください……とリーリヤは言ってみ

ます」

「左……？　つて、あ、アレは……ッ！」

リーリヤの言葉を受けて、俺は首を左に向けるの瞳に映ったのは  
隊列を組み、銃を構えている自衛官達の姿であった。あの人達  
……さっきまで倒れていたのに、どうして？

「あの人達は藤島様の戦いぶりに感動しています、とリーリヤは状  
況を報告します」

「それじゃあ……あの人達はっ」

「はい、藤島様を助けるべく、傷だらけの身体を引きずって立ちあ  
がったのです……とリーリヤは彼らが戦う理由を説明します」

「た、隊員さん達は……っ」

俺はもう一度、シルフに銃口を向けている自衛隊の人達に目を向  
ける。シルフとの戦いで身体は既にボロボロ、すぐに病院へ行かな  
ければならない者も、中にはいるかもしれない。それでも彼らは俺  
なんかを助ける為に立ち上がり　シルフに銃を向けているのだ。

「この……死にぞこないの腐れ兵隊め……っ！」

やがて砂埃が風に流され、シルフの姿が現れる。シルフは額に血  
管を浮かべ、お怒りの様子で自衛官達を睨みつけていた。シルフか  
ら数メートルは離れているのに、大剣を握る彼女の手に一段と力が  
入っているのがわかる。アイツは相当自衛隊に怒っているようだ。

そんなシルフに構わず、銃口を向ける自衛官達。

俺は彼らを一瞬見た後、再び血塗れになったシルフのほうを向く。

「アンタといいその死にぞこないの兵隊どもといい、ホント……現実世界の人間ってのはムカつくモンだわね！」

「なんだと……？」

「だから私は現実が嫌いなのよ！ 挫折と絶望しかない、こんな現実が――！」

「……どういう意味だよ？」

俺がそう問うと、シルフは血に溢れた口からペツ、と血の塊を吐き捨て、掌で唇を拭いながらその理由を喋り始める。

「裏切られたのよ。先生にも友達にも 親にもね」

「なに？」

「友達がいじめを受けていてね、私はその友達を助けたのよ。それがどう？ 学校側は私ばかりを悪者扱い、親も先生も聞く耳を持たないで友達には裏切られ……」

「お、お前……っ」

なんだよそれ……俺と同じじゃねえかよ。コイツ、俺と同じ事やって、友達は救えたけど周囲からは突き離されたんだ。だけど、コイツはそんな現実には耐える事が出来なくて。

「どうさ、赤の軍神の一人がこんな理由で戦ってんのよ？ 腹抱え

て笑いたくなるでしょ？ でもね、私はそこまでしてでも現実をぶち壊したい。こんな現実なら必要する価値はない。だから、私がこの力で現実を壊して作り直す。誰もが笑って過ごせる挫折のない世界を作り出すのよ！」

風剣のシルフ……お前は。

一歩間違っていたら、俺もシルフみたいになっていたのか。

なんて笑えねえ話なんだよ。コイツ……まるで俺を見ているみたいだ。だけど俺と違う所はコイツは現実に耐える事が出来なかった。耐えられなかったから非行に走った。それで、自分の嫌いな現実を魔法でブツ壊そうとした。その為にサヴィエトに入ったってのか……。

だけど、いくら俺に似ているからって 彼女のやる事に納得は出来なかった。

「ふっざけんな。だからって全てを破壊する必要はあんのかよ」

「あるわよ！ こんな世界 一度ブツ壊して作り直したほうがいいのよ！ そのほうが、私みたいに現実が嫌な人も幸せに過ごせる世の中になるのよ！」

「じゃあ、その世界をつくる為に誰かが不幸になっていいと思ってるのかよ、てめえは！」

なに？ とシルフは眉をひそめる。

僅かなシルフの反応を確認すると、俺はさらに言葉を続けた。

「お前の気持ちは俺にだってわかる。俺だって信じていた人達に裏切られたよ。お前のように誰かを救った結果、俺一人が恨まれるようになってしまったよ。今だって多分、当時のことを知ってるヤツの

一部は俺を恐れているよ。けど、お前のように全てを壊すような事はしなかった！　なんでわかるかよ？　確かに全てを壊して思い通りの世界を作れば、俺もあの時楽になれたかもしれない、てめえだって幸せになれたかもしれないねえ。だけど、その世界をつくる為にどれだけのヤツが不幸になると思ってたんだ！　結局、何かを壊して作る世界なんて　誰かが不幸にならなきゃ作れねえんだ！」

その言葉でシルフはわなわなと身体を震わせる。  
そして、溜まっていたモノを一気に爆発させるように、

「黙れえっ！　それでもアンタには味方がいるでしょ……私ほどの地獄は味わってないでしょ！」

激昂のあまり、叫びながら大剣を振りまわした。

これまでのように計算して放たれたわけでもない、単なる風の塊を、俺は身体を僅かに振るだけで軽々と避けてやった。感情的な一撃は俺を粉碎する事は出来なかった。

攻撃を避けた俺はそのままシルフを直視し、言葉を続ける。

「確かにそうかもしれないねえ。だけど、それでも俺は誰かの犠牲によって生まれる楽園なんぞ望んじやいねえ。そんな楽園を作る作るくらいなら　まだ我慢していたほうがマシなんだよ！」

「うるさい！　私は……あんたじゃないのよ！　あんたみたいに全てを諦め、それで我慢しながら過ごせるようなヤツじゃないのよ！」

「諦めてなんかいねえよ！」

「ウソよ！　何かをするわけでもない、何もしない、結局アンタは諦めてんのよ！」



「違う！ 諦めてなんかいねえよ！ 諦めていたらお前の前に立ち塞がるかよ。誰か守る為に立ちあがったりすんのかよ。サヴィエトに抵抗したりすんのかよ!?」

「……っ！」

シルフは今にも涙がこぼれ出しそうな目を見開き、1歩ずつ後退りをしていく。その姿はあまりにも弱々しく、とても赤の軍神の一人とは思えない。普通の女の子であった。

段々と遠のいて行く少女に、俺は一步ずつ、力強く迫っていく。

「結局、お前は救って欲しいだけなんだ。寂しくて嫌なだけなんだ」

「う、うるさい……うるさいうるさいうるさい！ 知ったような口聞くんじゃないわよ！ 所詮アンタは私から見れば充実しているヤツなのよ！ そんなヤツに慰めの言葉を貰ったって 何にもならないわよ!」

「お前……」

「とにかく私はこんな現実が嫌いよ！ だから全てをぶち壊してやるわ。アンタの信じる腐った世界も叩き潰す！ そして 誰もが幸せになれる世界を新たに創ってやるのよっ！」

シルフは再び大剣を握り締め、それを構える。俺も拳を握り締めた。リーリヤの魔女殺しによって相当弱体化している上、今まで我慢していた弱みを外に出してしまった。彼女は弱い、おそらく一発でもぶん殴ってしまえば彼女は折れてしまうだろう。

だが、彼女が放つ一撃も強烈だ。

そう　勝負は次の一撃で決まる！

「「！」「」

俺は勢いよく前に向かって走りだした。

シルフはそんな俺を叩き潰すべく、大剣を振りまわし颯風くふうを創り出す。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！」

シルフが叫ぶ。

「ぐ、おオあああああああああああああああああああああ  
！」

俺も叫びながら前身し続ける。

無謀にも、俺はシルフを創り出した颯風くふうへ突き進んだ。全身の骨  
が砕けそうなほど激痛を全身に感じたが、それでも構わず進み続け  
た。

どちらが先に折れるかの勝負　先に折れたのはシルフのほうで  
あった。

「援護射撃だ！　あの少年を援護しろ！」

「射撃用意！　射つ！」

一斉に放たれた無数の鉄の雨が、シルフに降り注ぐ。シルフは自  
分の身を守る為に颯風くふうを放つのを止め、自分の周りに竜巻を発生さ  
せた。

それで銃弾を吹き飛ばすつもりなのだろう。確かに、自衛官達が放った銃弾はシルフの魔法によって全弾吹き飛ばされ、シルフに風穴が開く事はなかった。おそらく自衛官も、こうなる事をわかっていて撃つたのだろう。彼らの目的はシルフ殺害ではない　隙を作る事だ。

「今だア少年！　行けええええええええええええ！」

自衛官の一人　隊長と思われる人物が壮絶な叫び声を上げる。確かに彼らのおかげで隙は出来た。その上、リーリヤの魔女殺しの魔法が、かなり効いているようでシルフはゴバア、と血の塊を口から吐き出していた。そしてもう貧血と疲れで、彼女に大剣を振りまわすだけの体力は　もう残されていない。

ガラン、と大剣を地面に落としたシルフは、驚いた表情で俺の事を見てきた。

「今から少しだけ教えてやる。まだまだこの世界には希望が満ちているってことを　」

言いながら、シルフの懐深くに飛び込んだ俺。

拳を限界まで固く握りしめ、シルフの顔を睨みつけて、

「だからその前に　もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎オ！」

ゴン！　と拳がシルフの頬に突き刺さった。

ぐるりと、彼女の身体が数メートルほど宙を舞い、夜の海浜公園を転がった。やがて動きの止まったシルフはピクピクと、起きあがるうとするが……そのままガクリと気を失う。

「ハア、ハア、ハア……っ」

俺は息を切らしながら、気を失ったシルフの事をずっと見ている。ガラガラと、その横で自衛官達が武器を地面に落としていく。リリヤも、少しだけ微笑み俺達の事を温かく見守っている。

終わった……勝ったんだ、この世界の人間おれたちの勝ちだ……ッ！

第172話・風剣（ウインドソード）（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回はちょっとした報告！」

伊吹「なによ、またくだらないエロゲの話でもすんの？」

圭介「違う違う。活動報告でも報告したけど「作者による馬鹿なキヤラ紹介」の紹介キヤラを追加したんだ。あと、キヤラが増えたから味方キヤラと敵キヤラを分割したんだ」

伊吹「う、ウソ……」

圭介「嘘じゃねえよ、ホントの話だよ」

伊吹「け、圭介が……マトモな話をしたわ!？」

圭介「驚く所そこかよ！ 本編で大活躍したのにこっちでは相変わらず扱いひでえな！」

## 第173話 新たなる力

ウチ 木下木葉は、ボロボロになって床に倒れている早川悠と、彼を蹴飛ばしているウチの同業者っぽい男を交互に見ていた。リーネの報告は正しかったのかな。確かに、このままだと同業者に早川悠は殺されてしまいそうだ。そして、ミネットちゃんの命もおそらくこのままでは。

「ああ？」

同業者の男がウチのほうを向いてきた。

悪そうな顔……かな。

血も涙もないような雰囲気、金髪の鋭い眼光の白衣の男は、ウチのことを見ながらもずっと早川悠の事を蹴り続けていた。顔、首筋、腹など至る所を蹴られ、早川悠は血の塊を吐く。出来れば第一に早川悠を助けてあげたいけど、生憎ウチに戦闘能力は殆どない。

白衣の中に拳銃を隠してあるが、この近距離だとあまり効果はないかな。さて、ウチはここからどんな行動をするべきかな？

「なんだテメエ？ 学者気取りのクソガキか？」

「残念、ウチは正真正銘の学者かな」

「チツ、そんな事はどうでもいいが……こっちは仕事だ。最も、その仕事を見ちまったテメエに生きる死資格なんてねえんだけどな」

指の関節を鳴らしながら、ウチの同業者はゆっくり歩み寄ってきた。どうする、ウチは白衣のポケットに手をつ込み、右手で拳銃をしっかりと握っていた。本当にどうする、今すぐ拳銃を抜いて男

に発砲すべきなのかな。

とにかく、今の状況はあまり好ましくない。早急に打破したほうがいいかな。

「おいテメエ！ まさか拳銃チャカ隠してんじゃねえだろうな！？」

まずい……あの男にバレたかな？

……と、手の内を読まれてまずいと思っていたその時 救いはウチを見捨てなかった。

バン！ と事務机を叩き、強引に立ちあがった早川悠が、

「おおおうあッ！」

勢いで飛びかかり、白衣の同業者にしがみ付く。離せ離せと同業者は喚くが、早川悠は決してその手を離そうとはしなかった。彼も必死なのかな……ミネトちゃんを守る為に。見た所彼は魔力を切らしているようで、戦闘力は殆ど皆無の状態なのに……それでも必死に戦っている。

ウチも黙っていられないかな。今のうちにミネトちゃんを助しよう。

ウチは小走りで、ミネトちゃんが寝ている事務机に近寄った。ミネトちゃんちゃんは静かに瞳を閉ざしている。小さく呼吸をしている、相当……衰弱しているのかな？

下手に動かすのはまずいかな。まあ、でもこれも予想の範囲内。一応ウチだつて医療の研究をしている学者さん、対策は既に練つてある。科学と魔法を融合させた治療プログラムはもう組んである。今のミネトちゃんちゃんは危険な状態かな。意識を完全に失い、昏睡状態。だけどそれも予想の範囲内だから、ウチの治療プログラムを使えば危機から脱する事が可能かな。

さて……今から治療の開始かな。一応この治療には彼女の力も必

要かな。

「リーネ、ミネットちゃんはやっぱり昏睡状態だったかな」

『木葉さん、こっちは既に準備完了なの』

ウチは白衣から携帯電話を取り出し、リーネに電話を掛けた。ウチが開発した治療プログラムは結構単純なもの。元々脳死の人の為に開発したものだけど、それを応用すれば、もっと軽度な昏睡状態のミネットちゃんなら 脳死の人を救うよりも簡単かな。

あとはウチが、背後で早川悠と戦う同業者に 殺されなければいい話。

「それじゃあこっちはこっちで準備を始めるかな」

『お願いなの、ミネットちゃんと悠ちゃんを助けて』

「わかってる。その期待に答え、新たな技術で人々を助るのが学者の務めかな」

言いながら、ウチは白衣の中から補聴器を取り出し、ミネットちゃんに装着する。

もちろんただの補聴器ではない。魔術的效果によってあらゆる音声を、脳に直接送りだす信号に変換する特殊な補聴器かな。開発に大体2年くらいはかかった気がするかな。だけど、この補聴器単品では何の効果も発揮しない。そこで ウチの治療プログラムの出番かな。

補聴器から伸びている一本の線を、ウチが持っている小型の特殊受信機に接続する。

これで準備は完了したかな。



「リーネ、こちらの準備も完了かな」

『了解なの。今から音声ファイルを再生、受信機のほうは大丈夫なの？』

「問題ないかな。ちゃんとそちらの音声を受信しているかな」

『了解なの。それじゃあ木葉さん、音声ファイルに会わせて』

「“歌”は最も伝わりやすい手段。しかしウチ、歌うのは中等部の合唱コンクール以来かな……でも、それで人が救われるのなら頑張るしかないかな」

治療対象は昏睡状態。

それは外部からどんな刺激を受けても、脊髓反射以外の反応がない状態。でもそれはあくまで“歌”からの刺激。なら内部から、脳に直接刺激を与えればいいのかな。ウチの治療プログラムは脳に直接適切な単語を並べた歌を聞かせるもの。

確かに、プログラムと言えるほどデジタルなものではない。むしろ、機械を殆ど使わない原始的なアナログ方式の治療法。

それでも、昏睡状態から目覚めさせるにはこの方法が一番かな。

怪しげ女が部屋に侵入し、特異点に何かをしている。

さつさと止めなければ。俺 三原寅彦は多少焦っていた。だが、あんな小娘はすぐに止められんだろが、その前に目の前をウザい

ヤツを叩き潰す必要がある。早川悠、コイツは既に能力を使うだけの演算能力を失い、理性も失っていると言うのに 何度も立ちあがってきやがる。

それが目障りだ。クソうぜえ……ムカつくつたらありやしない。

「なんだこの野郎オ！」

俺は血だらけになった早川悠の顔面を殴り飛ばす。後ろにあった事務机に、殴られた時の衝撃でぶっ飛ばされた早川悠は背中を打ちつけた。さらに俺は右足を大きく振り上げ、激痛で事務机に凭れかかるようにぐったりしている早川悠の顎に、思いつき靴の先端を打ち込んでやった。

メリメリと、下顎に靴がめり込んでいく。

「いい加減しつこいつつてんだよ！」

そしてトドメを刺すように、大きく振り回した右拳を早川悠の顔面に叩きこむ。

完全に動く力を失っている早川悠は、そのままぐったり地面に倒れ、さつきまでのように勢いよく立ち上がるうとはしなかった。ハハ……ざまあみろ、いよいよ力尽きたか。

そう思うと面白くなってきやがったぜ……ハハ、笑いが込み上げてくる。

「ふ、ふふふふ……はあっハハハハははははははははははははッ！」

あー面白エ！ まっ、結局テメエはその程度だったんだよ。たった一人で巨大な悪と戦って勝つヒーローなんざ、この現実世界には存在しねえんだよ。結局テメエも他の人と同じ、何かを信じて戦って失敗したゴミクズ野郎って事さ。

ホントにざまあみろだぜ。さて、じゃあ息の根を止めたらあの小娘を殺して、

「……………あ？」

なんだ……………この聞いた事のねえ音色は。優しさを感じる……………チツ、コイツはとつくの昔にゴミ箱にでも捨てたモンだな。受信機からメロディーが流れ、歌を小娘が歌っている。日本語とは違う意味不明な言葉だった。ロシア語に近い感じだが……………何語なんだこれは？

そして早川悠は一体なんなんだ。歌に合わせて口を動かしてやる……………コイツ、キレて理性なんてとつくの昔に失っているのに、その感情とは全く反対の歌を……………何故口ずさむ。

「み、はら……………」

「……………っ？」

久々にマトモな言葉を口からこぼす。

まさか冷静さを取り戻した……………いや、そんなハズがねえ。だとしたら、もっとクールな表情で俺を睨んでくるハズだ。だけど、今の早川悠は怒りに身を任せる猛獣。冷静さなんてモンはカラケも残っていないねえ暴走野郎である。だけど動きが不自然だ、キレたヤツのモンとは思えねえ。

それに何故だ。何故　アイツが杖ナシで立ち上がる事が出来るんだ？

ゆっくりと、フラフラしながら立ち上がった早川悠。

「三イイイ原アアあああああああああああああああああああああああああああああああ………」

俺の名前を叫び、完全に立ち上がった早川悠。

どうなっている……ありえない事が起こりまくっている。早川悠、  
テメエはなんでその足で立ち上がる事が出来たんだ？

あの女の歌のせいなのか？

クソッ、そうだとしたら女から始末しておくべきだった。

……だが、こうなつちまつた以上 仕方ねえよな。

「面白エ……テメエがその気なら 殴り殺してやるわクソガキが  
あああああああつ！」

「オオオオウああああアああッ！」

俺と早川悠が駆けだしたのは、ほぼ同時であった。

だが 先手を撃つたのは俺だ。

早川よりも速く懐に潜り込んだ俺は、早川悠の顔面に右拳を叩き  
こむ。ズドン！ という激しい打撃音が炸裂する。ぐらん、と早川  
悠の身体が揺らいた。

……が、それでも早川悠の動きは止まらない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオあああああああああ  
あああああああ！」

聞いてて痛くなるような叫び声を上げ、なんと 早川悠は今の  
を堪えた。

失ったハズの脚力で踏ん張り、埃だらけの床に立ち続けたのだ。  
多くの血を見てきた真っ赤な瞳で俺を厳しく捉えた早川悠は、痛み  
を気にせず、カウンターをぶつ放してきやつたのだ。

ガゴン！ と言う轟音が響き渡る。脳を揺さぶられる顎への一撃。  
それは説明するまでもなく、早川悠の全力の一撃であった。だが  
……所詮能力のない早川悠は極細のもやしっ子に過ぎねえ。そんな

細腕から放たれる攻撃など 知れたモンだ。

「おおおおオオオエらあアアあああああああああッ！」

死ねや小僧！ と言わんばかりに叫びながら、拳を一気に顔面へ叩きこんだ。早川悠の端整で細い顔がメリメリゴリゴリと、嫌な音を立てて歪んでいく。痛いんだろうか、早川悠は血だらけの顔を必死に押さえていた。そんな早川悠の脇腹を 俺は何度も蹴り続けた。

何度も何度も、時々何かが碎ける音が聞こえた。赤い液体が周囲に飛び散る。俺の顔面にもソレは飛んできて、生々しい感触を感じた。

俺は口の周りについたソレを、いやらしく舌で舐めた……鉄の味がしたな。

「さて……殺すか。ほくら悔しかったら暴風の膜でも張ってみろオ！」

俺は後退りをしながら、白衣の中からパイナップル型の物体を、1個取り出す。

それは、俺の部下が持っていた装備品の一つ 手榴弾だ。

対人用殺傷兵器……フフ、はは……今のテメエに避けられるかよ。能力を使って爆発から逃れる事が出来るかよ。悔しかったらやってみろ……コイツで終わりだ！

そう思いながらピンを抜いた。そして 手榴弾を早川悠へと投げつける。

コン、と額に当たった手榴弾は僅かに跳ねる……すると。

凄まじい爆発音が炸裂し、破片を撒き散らす。

手榴弾が爆発したのだ。



「……ッ！」

刹那、粉塵が不自然に周囲へ吹き飛んだ。

そして生きているハズのねえ 早川悠が佇んでいたのだ。

真っ白で細い中性的な身体。傷だらけながらも整った顔。鋭い真つ赤な瞳。赤と黒の縞々模様の服に首にあるチョーカー。間違いない……けど何故だ、どうやったヤツは生き延びた。まさか超能力が復活しただなんて事はねえだろうな。

いや、ねえな。だってアイツにあんなことが出来るわけ……ッ！

「どうなっただよテメエ……その真つ黒な翼は一体なんなんだア  
ああ!？」

早川悠の背中から 墨よりも、そして闇よりも黒く染まった翼  
が伸びていた。

待て、考えるんだ俺。アイツは大气そのものを操る超能力者。そ  
うだ、きつとアレは風の操作か何かで生み出した翼なんだ。翼だが  
待て、ヤツに関するデータにあんなモンは存在しない。かと言って  
ヤツが成長したとは思えない。むしろ弱体化したハズだ。

じゃあ一体……あの翼は何なんだ。噴射に近いが……翼は翼だ。  
だが、どうもアレは風の操作とは違うつばい。じゃあ何の力なんだ  
よアレは？

「、」

その時、不意に近づいてきた早川悠に俺は捕まった。ぐわん、と  
伸びてきた右腕に顔を鷲掴みされてしまったのだ。クソ、油断した  
……だけど酸素の操作は行わない。普通なら、俺の皮膚に一瞬でも  
触れた早川は酸素濃度を操作し、俺を酸欠状態にしようとするハズ  
だ。

だけど今回それが無い。

ありえねえ……コイツの思考パターンから考えて、絶対にあねえねえ行動だ。

この野郎……一体何の力で。新ネタか……だがこれは風の操作ではない。その応用つてわけでもなさそうだ。コイツ 何を考えた新たな能力を発現させたんだ。

まさか……魔道能力者。早川悠はその片鱗を持つ最初の存在だったのか？

首にある変換機。そこに蓄積された魔力によって変換された脳波を受け、その影響でコイツは自然と魔道能力者に進化していたのか？

早川悠 テメエの身体は非科学にも対応しているのか……？

「テムエ、その翼……気付いてんのかよ……化け物がア……ッ！」

本当に化け物だ、俺とした事が見失っていた。

態々特異点を解剖しなくなつて 実験材料はここに存在していた……ッ！

「ッ！」

あまりにすごい言葉で聞きとれなかった。声にノイズが走り、この世のものとは思えない人外の言語で早川悠は叫んでいた。そしてその直後 背中の黒い翼が爆発する。

掌が不自然に黒くなる。その瞬間 俺は何らかの力よって吹き飛ばされた。説明不能の新たな力である。

凄まじい噴射に吹き飛ばされた俺は、恐るべきスピードで窓ガラスを突き破り……。

……。



⋮  
○

### 第173話 新たなる力（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「こうして早川は完全にセロリと化した」

伊吹「なにめでたしめでたしって感じの雰囲気になってんのよ！」

圭介「まさか……黒い翼まで来るとはっ」

暮葉「でも、結局あれは何の力だったのですか？」

圭介「さあ？ まあA Mじゃあないでしょ」

明智「とにかく、アイツはまた一段と化け物になったわけだな」

圭介「これで再戦なんて話があったら……俺死ぬんじゃない？」

あかり「そもそもこのパク（ry）インスパイアだらけ小説は何時まで続くんだよ」

千早「わたしの出番……増やしてくださいっ」

## 第174話 赤の軍神

俺は自衛隊の衛生要員に手当てを受けていた。ちよつと切り傷があるくらいだし、この程度ならすぐに完治するんだけどなあ……まあいいか。

海浜公園での戦闘では、陸上自衛隊に戦死1名、負傷者23名。多分、戦死した人はシルフに海へ蹴飛ばされたあの人だろう。ちくしょう……結局助ける事が出来なかった。それに、今回の騒動全体で見たら死傷者の数はさらに増えるだろう。

幸い、一般市民の大半は市外に退避している。一般人の犠牲者は恐らく少ない。

それでも犠牲者はいるんだろうな……。

風剣のシルフ。友達の為に孤立し、そんな現実には絶望したこの女は……これから先どんな扱いを受けるんだろうか。単独で都市機能を停止させ、警察や自衛隊を撃破。さらに、街や市民に多くの損害を齎もたらしたんだ。このまま野放しして事はないだろう。

最悪、死刑にされちまうのかもな。

それでも俺はシルフを助けたい。事情を知っている者とし、似た者同士として……。

「藤島様」

「……ん、リーリヤか」

「ご心配なさらずに。風剣のシルフは我々のほうで回収します、とリーリヤは今後の方針を告げます」

「……わかった、けど一つだけ頼みがある」

「はい、なんででしょうか？ と、リーリヤは問います」

「確かにアイツは沢山の人を殺した。街だつてブツ壊した悪人だけど……さ、即刻死刑にするとかじゃなくて　ちゃんとした形で罪を償ってほしいんだ」

「それはつまり？」

「重罰でもいい。でも、とにかくアイツを殺さないでくれ」

その言葉にリーリヤは黙りこむ。やっぱりダメか……シルフは、どう足掻いたつて近いうちに処刑されてしまう運命なのか。とにかく、ここでシルフを見殺しにするのは後味が悪い。

なんと少しでも助けたい。しつかり罪を償って　もう一度やり直して欲しい。

現実に壊されたシルフに　救いを与えてやりたい。

「……わかりました。全てこちらの一存で決定できる事ではないですが、善処はしてみます……と、リーリヤは貴方と約束してみます」

「頼むぜ、暮葉の上司さん」

絶対には言えないが、それでもシルフが生きれる可能性が生まれた。これで、シルフが深く反省してやり直してくれればいい。もしまた道を間違つたら、その時はその時。シルフを逃した責任は俺にあるんだから、その時も俺が戦えばいい。

今度は誰も巻き込まない、俺とシルフのタイムマン勝負だ。

……その時、

突然、シルフの攻撃で崩れかけた建物が爆発を起こす。

黒煙と粉塵で周囲が覆われる。

「ぐっ！」

「……っ」

破片から目を守るように、俺は咄嗟に両手を上げた。リーリヤも、そして自衛隊の隊員さん達もチラッと確認すれば、同じような行動を取っている。

「待て、あの女は？」

「いないだと？」

そして、2人の自衛官はある事に気付いた。今の爆発の後、さっきまで捕らわれていたハズのシルフが居なくなっていたのだ。まさか、今の爆発はシルフのせい？

いや、それはないな。シルフは風の魔法の使い手。第一、俺はアイツを派手にぶん殴ってアイツも完全に気を失っていた。目を覚ましたとしても、動ける体力はもう残っていねえ。つまり今の爆発はシルフの魔法じゃねえ。もっと違う　第三者が現れたんだ。

やがて、空気中の粉塵は風と雨で次第に消えていく。

そして読み通り　第三者と思われるシルフを抱えた男が、残骸の中に立っていた。

「誰だッ！」

思わず俺はそう叫ぶ。

あの肌の白さは白人……かな、茶髪の筋肉質な男であった。しかも、大柄で筋肉質な割には爽やかな雰囲気、日本人離れはしてる

が重原に近い雰囲気を放っていた。いや、重原とも微妙に違つかもしれないな。なんせあの男……俺達には絶対に出せない、渋い雰囲気も放つてやがる。

若々しく見えるが、やや年老いた中年のオッサンのようである。爽やかでイケメンな上に渋い……か。

女受けしそうだけど、そんな事を考えている場合ではないな。

「私はこの子の回収に来た者だ。そちらに回収されれば、間違いないシルフは処刑されるだろうからな。命が消えてしまふ前はこちらで回収する事にしたのだ」

「そんな事はどうでもいい。それより名前を名乗れつつってんだよ」

「邪炎じやえんのサラマンダー。シルフと同じく、赤の軍神の一人だ」

「てめえ……」

その名を聞いた瞬間　俺は拳を握った。

コイツがシルフの仲間だったのはわかった。そして、同じ赤の軍神である事も。その実力は未知数だけど、シルフと同等の力を持っているとしたら　かなりまずい。

俺も疲れている。ここにいる自衛官達も疲れている。リーリヤは……わからないし期待できる実力かも不明である。ちくしょう……万事休すか？

……だが、邪炎のサラマンダーと名乗る男は静かに微笑み、

「心配ご無用。今回はこれで退くつもりだ」

「……なんでだよ。てめえらの目標ターゲットならここにいるんだぞ？」

「こちらにも色々事情はあるのだ」

「そうかよ……まあ色々言いたい事はあるけど、何よりもまずシルフを離せよ！」

「断る、この子は仲間だ。敵に身柄を引き渡す真似は出来ない」

言いながら、サラマンダーは背を向け立ち去ろうとする。

おい待てよ……シルフをどこへ持っていくつもりだ。

あの野郎は どこに逃げるつもりなんだよ。

「おい待て！ てめえにはまだ山ほど文句が残ってんだよ！」

「……ふん、一つだけ警告しておく。私はただの魔術師ではない。そのアルファ隊の隊長と同じ 聖人だ」

「せ、聖人……？」

「教会に認定された神に近い存在だ。ちなみに、私は神を否定するサヴィエトの事は嫌いだ」

「なんでだよ……じゃあなんで、てめえはその地位にいるんだよっ！」

「その話はまた今度 貴様に用事がある時にしようではないか？」

言いながら、邪炎のサラマンダーを中心に再び爆発が発生した。

爆風と熱波が俺達に容赦なく襲い掛かってくる。そして、やっと目を開けたと思いきや そこにはもう2人の姿はなかった。

邪炎のサラマンダー。

何者だったんだ……アイツ。サヴィエトとは逆の思想を持つてるつてのに、なんであの男はサヴィエトの、しかも赤の軍神なんて所に身を置いてるんだ？

次第に疑問が深まっていく。聖人……チツ、どこぞのねーちゃんかよ。

いや、アレはゴツい男だからアツ　アさんか？　だけど炎タイプっぽいし……。

とにかく、何かこの先　　まずい事が置きそうだ。

雨は嫌いだ。

水は炎を消してしまうものだからな。最も、私の出力からしてみれば、この程度の雨など大したことはないのだがな。私　　邪炎のサラマンダーはシルフを抱え、古宇坂市を脱出した。

最も、早急に日本国内から脱出しなければ、すぐに追手は来るだろうが。その追手と言うのが先程の聖人リーリヤか、あるいはこの国の治安維持組織かは知らぬ。後者は余裕だ、だが前者とあればこの私とて少しは手こずりそうである。

やれやれ……と、その時。ポケットの中に振動を感じる。

携帯電話……ふん、硬質（こうしつ）のノームであるか。

「ノームか」

『いかにも、硬質のノームとはこの私の事ですよ。そちらの仕事は終わりましたか？』

相変わらず……耳に障る声を持つ男だ。



私はこの男があまり好きになれない。私がこんな世界に墮ちる前の、神聖なる教会に所属していた頃からの同僚だが、その時からノームに対する気持ちは変わっていない。

外道で騎士道精神から外れた　ただのム力つく嫌味親父だ。

「たつた今、風剣のシルフを回収し、市内から脱出した所だ」

『それにしても情けないですねえ。赤の軍神たる者が別働部隊の支援もありながら、高々地方都市一個さえ落とせないとは……全く歴史に残る大敗北ですよ』

「アルファ隊と例の裏切り者が活躍したらしい。あれだけの人数がいた別働部隊は7割が壊滅した。貴様の方こそ敵の戦力を甘く見過ぎではないか？」

『それでも、別働部隊の雑魚はともかくシルフは赤の軍神の一員です。標的に敗れるようでは、その資格を持つ価値があるか疑いたくなりますねえ』

「街全体に特殊な術式が働いていた。いくらシルフとて、その術式に圧迫された状態では全力を出し切れなかったのだらう。事実、彼女の本気はこの程度ではない」

『ふん……しかし、貴方は随分負け犬の肩を持つのですねえ……  
邪炎のサラマンダー』

全く……赤の軍神はどいつもこいつも、自分本位な連中ばかりだ。騎士である私からしてみれば最悪な連中だ。それにシルフの肩を持つのは当然の事。私はこの子の真実を、つまりこの子の辛き過去を聞かされた人間の一人なのだ。だから私だけでも　この子の味方

でいるつもりだ。

そんな事は……一度も口にはしていないのだがな。

口にできるわけがない。彼女の過去は 他人が語れるほど軽いものではないのだ。

「貴様の方こそ冷酷さは相変わらずだな……硬質のノーム」

『まあいいでしょう……さて、そろそろ戻ってきなさい邪炎のサラマンドー』

「面倒くさいな……なんなら私が今から引き返し、標的も回収してやってもよいが？」

『命令違反ですよ。帰還命令は聖波せいはのウンディーネの命令でもありません』

「レニナの命令であれば、即刻引き返すのだが……ヤツの命令か」

『いけませんよおサラマンドー。そのような台詞を聞けばウンディーネは怒るでしょう』

「……ふん、まあいい。失言であったな」

『そうですね、それではさっさと引き返してください。上も今回の失敗を受けて相当お怒りのようですからねえ。こちらも、一応お咎めが最小限になるよう努力はしていますよ』

「了解した、今から帰還する」

返答すると、私は電話を切ってポケットの中にしまい込んだ。

気がつけば、私は古宇坂市のほうを向いていた。アルファ隊に隊長の聖人、そして風剣のシルフの攻撃を喰らってもなお立ち上がり続け、その事情に胸を痛めたあの標的。その標的の少年に感銘を受け立ち上がった自衛隊という、日本の国防組織……。

その三つが重なり、この風剣のシルフを完膚無きまでに叩きのめした。

「硬質のノームよ……古宇坂、そして日本は　貴様が思っているほど甘くはない」

これは一大事である。魔術世界における歴史に残る……大事件だ。敵を甘く見るな。私は直感で感じた……敵は想像以上に手ごわい連中であると。

全く……レニナのヤツは、とんでもない輩を狙ったモンだ。

藤島圭介……あの男の力は、一体　。

自衛隊基地近くの田園地帯……だった場所。大きな爆発と火災が発生し、畑だった場所は焦げ臭い焦土と化した。さらに中心点には爆発の影響で、クレーターまで出来ていた。私　白藤早苗はこのクレーターの中で倒れていた。

鼓膜が吹っ飛ぶかと思ったよ……身体もバラバラになるかと思った。でも、直撃の寸前に瞬間移動テレポートしたお陰で、死だけは回避できたよ……。

「……っ」

痛い……手を見ると血がべっとりついている。あはは……明日、

学校に行つて圭介の顔を見る事が出来ないかもしれない。

でも……よかつたのかな？

侵入者は撃退した。これで……少しは恩返しになつたのかな？

でも……っ。

「……っ！ けほっ！ ごほっ！」

咳き込み、血の塊を吐きながらのろのろと立ち上がった。それが限界……ダメージが大きすぎて歩くことが出来ない。もう少し……休んでからのほうがよかつたかな。

でも、とにかく早く圭介に教えないと 赤の軍神が本格的に動き始めたって……っ。

## 第174話 赤の軍神（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「さて、そろそろ秋アニメの季節だな」

大吾「fate/zero最強だろ！」

重原「大吾は厨二病だからねえ」

圭介「は？ C3はいいパンツアニメだったろ！」

重原「圭介は典型的萌豚だからねえ。どうせISでブヒってたんでしょ？」

大吾「広ちゃんはどうかんだよ！」

圭介「そうだ、てめえさつきから文句しか言ってるねえじゃないか」

重原「俺は全ジャンル見るよ」

圭介「なにそれすごい」

大吾「ある意味神だな」

## 第175話 新たに手を組む者達

「ふう、ミネットちゃんはこれで平気かな？」

ウチ 木下木葉はミネットちゃんの救出に成功した。今はただ気絶しているだけ、昏睡状態という危険な所からは抜け出せたみたいかな。だけど、しばらくは安静にしておくべきかな。

後は早川悠、この人を救わなきゃ。今、早川悠は事務机に寄りかかっている。どうやら完全に気を失っているようだ。その上鼻や口、頭からも血が流れている。これは……ちょっとどころじゃないくらい危険な状態かな。早く救急車を呼びたいけど……困ったかな。

ウチの携帯がさっきの通話で切れてしまった。ウチ一生の不覚かな。充電くらいはしておくべきだったかもしれない。でも、下のフロアに電話があったハズ。回線が生きていれば、そこにある電話で救急車を呼ぶ事が出来るかもしれない。

「君はよく頑張ったよ。最後に使った能力だけは不思議だったけど……それでも、君はミネットちゃんを守り抜く事が出来たんだから」

言いながら、ウチは早川悠の頭を撫でていた。

こうして見ると寝顔は可愛らしい。人の寝顔ほど素直なものはないかな。

こうして撫でてみると、まるで弟が出来た気分になる。

「もう少しだけ待ってて欲しいかな。君も必ず救う。今から救急車を呼ぶから」

流石に今回、怪我を治す治療プログラムは持ってきていない。こればかりはこの世界のお医者様に見てもらった方が確実かな。だから

らもうちょっと待ってて欲しいかな。

その前に倒れないでね……。

ウチは早川悠やミネットちゃんに背を向け、オフィスから飛び出してた。電話がある下の階に行つて救急車を呼ぶために。

……く、そ……結局、どうなつちまつたんだ……？

世界が暗い。体中が痛エ……頭がぼんやりしてやがる。部屋は静かだ、さっきまで木下木葉の声が聞こえていた気がするが、結局三原のクソ野郎はどうなった。

このオレ 早川悠は三原のクソ野郎に勝つたのか。でも思い出せねエ……仮に勝つたんだとしたらオレはどうやって戦つた。超能力も使えねエ、歩くこともままならねエオレが、どうやってあのすばしっこいクソ野郎と……しかも三原の姿がない。死体すらない気がする。

あの野郎オ……どこに消えたつてんだア？

「……あ……あ……？」

今にも再び眠つちまいそうなほど、意識がぼんやりとしている中、木下木葉のものとは思えねエ新たな足音が聞こえてくる。複数……チツ、どこかの集団が来た見てエだ。

まさか、三原か……クソ、この状態じゃ戦えねエぞ。

「貴方が早川悠でしょうか。少々、お話してもよろしいですか？」

飛んできた声は妙に落ち着きのある男の声であった。三原じゃねえエ、声して聞いてねエからわからねエが、三原よりも若い感じに

聞こえるな。誰だア……知らねエ声だ。まさか学園から送られてきた新手のクソ野郎じゃねエだろうな？

男の姿はよく見えないが、周りには顔さえも隠した兵隊が銃を構えている。要は特殊部隊に守られるようなヤツ、相当高い地位にいる野郎ってワケか。

「……何の用だ、オマエは何者だ？」

「ヴィンペル隊……と言っても貴方には意味がわからないでしょう。我が国のアルファ隊が魔法少女による特殊部隊だとすれば、ヴィンペル隊は男の魔法使いの部隊ですね。任務は近頃はアルファ隊と同じ事が多めですが、本来は魔動力施設防護です」

つまり……この世界の連中じゃねえ、ミネツト達の世界の連中か。しかもアルファ隊の仲間のヴィンペル隊と来た。名前だけはミネツトから聞いた事がある。人員こそアルファ隊の上をゆくが所詮は後方の施設防衛が任務。装備や隊員の質はアルファ隊に劣っているらしい。

最も、ミネツトから聞いた話でしかねエがな。

けど何故　そんな特殊部隊のヤツがオレの所に来やがったんだ。

「何の用だ……オレとヴィンペル隊に接点なんてあったかア？」

「殆どありません。貴方の事もお話程度にしか聞いておりませんよ」

「は　ん　まアいい、話くらいは聞いてやるオカ」

「聞いていたよりも紳士的なお方で助かります、それでは本題に移りますね。早川悠、我々と行動を共にする気はございませんか？」



行動を共にする……このオレが異世界人 特異点とか。

例外的にミネットやリーネというガキとは行動を共にし、木下木葉って異世界人の科学者には変換機の事で世話になった。

だが、それだけでアイツら以外のヤツと、行動を共にする理由にはならねエ。

「……ど言う事だ」

「今回の騒動では佐井学園の有力部隊が動き、貴方や我々の仲間を襲撃しました」

「三原のクソ野郎か」

「ええ、その三原という男の手によって、我々の仲間にも重傷を負った者もいます。それに、彼らは貴方が一度目的を阻止した程度で思いとどまるとは思えません」

「そりゃあな、あの学園に情けも容赦もねエ。やる事は最後までやるだろうさ」

これでもオレは少し前まで学園で、散々汚工仕事をやってきた身だ。だから、あの学園の内部の事情はコイツらよりは詳しい自信がある。

オレが暴れた程度じゃ あの学園は絶対に止まらねエ。

「ええ、学園は貴方の敵でもあれば我々の敵でもあります。それだけではありません、サヴィエトと言う組織の行動が最近活発になってきています。アルファ隊とヴィンペル隊の二隊のみでは、両方の問題を片づける事は不可能です」

「軍はどオした。オマエらの国にもあるンだろ？」

「まだ、正式に戦争をやっているわけではありません。増してやここは我々からしてみれば異世界です。おおっぴらにこちらの正規軍を送りこむ行為は、少々常識に欠けると思っているですよ」

「そオかい……ンで、結局オマエは何が言いたいんだ？」

「貴方の力はそのまます軍事方面に利用可能です。現在、我々は過去に罪を犯したものの、戦力になる者を集めて新たな部隊“ザスローン”を創設しようと考えています」

オレは過去に罪を犯した……と言う所で反応する。

罪人……チツ、それってオレの事じゃねエかよ。

「へエ……で、丁度いい罪人がここにいたと？」

「貴方は我々の仲間を数十名ほど殺害しました。ここだけの話、一時はサヴィエトの魔法使いよりも貴方をどう倒すかの話で、当時襲われていたアルファ隊やその仲間の我々ヴィンペル隊。そして我々の上にある連邦特殊情報総局は盛り上がっていましたよ」

「そりゃあどうも、随分と有名人だった見てエだなオレはア……」

「はい、結局貴方も罪人です。しかし罪を償うことは可能です。命の危険を晒してでも平和を取り戻す事が出来れば 貴方の罪は償われると思いますよ」

そんなんで償えるなら悩みはしねエよ……とは思ったが、悪イ話じゃねエな。要するに罪人を集めて新部隊を創設し、それで学園や

サヴィエトと戦おうってわけだろ。こんな形と言ってもついでに学園を潰せるってんなら、確かに丁度いい話かもしれねえな。

まっ、同時に気に入らねえ話でもあるが。

こんなヤツらの下につくことが気に入らねえ……。

「一つだけ教える。その新部隊を創設したらオレらは何をすればいいんだ？」

「色々やってもらう予定ですが、大きな仕事としては佐井学園の解体。そして我々と共にサヴィエト亡命政府を崩壊に追い込み、アリナ・ウラジミール・ロヴナ・レニナらの身柄を拘束する事です」

「なるほど、戦いの原因を根元から潰すってかア」

「それで、どうしますか？」

どのみち、散々人を殺しまくったオレはもう　光の道に戻ることは出来ねえ。

それでもオレには守りたいモンがある。

だが、光という場所からそれを守る事、いや……居る事さえ許さねえ。オレが唯一存在出来るような場所と言え、今誘いを受けている闇の世界。闇の世界は血も涙もねえが、だからと言って何かを守ってはいけないという決まりはねえ。

なら俺の進むべき一つ　闇の世界から光の世界を守ることだ。

「好きにしるオ……」

「わかりました。それでは貴方を新入りとして迎える事にしますよ

」

これでいいんだ……。

どんな形だろうと、ミネットを守ることが出来るなら　これで別に……。

こうして、オレはもう一度闇の世界に戻ったのだ。それも、ミネット達と出会う前に暮らしていた所よりも深い闇の世界にな……。

悲しいなア、一度光を知ってからこの世界に入るのは……。まあいい。そんな甘ったれた事を考えている暇があるなら　学園をどオ潰すかを考えたほうがよさそうだ。

雨が深々と降り続け、私の能力によって生まれた炎も気がつけば鎮火していた。

私　明智風紗は黒ずくめの男達と戦っていた。藤島と木下を守る為にな。大胆に超能力を使って戦っちゃったけど、まあ多分大丈夫だろう。この黒ずくめ達はおそらく、佐井学園で暗躍していた連中に違いない。私が超能力を使っても驚かなかつたし……十中八九そうなんだろう。

それにしても、どうして佐井学園の組織が動き出したんだ。それが何故、藤島や木下を狙って攻撃していたんだろうか。

私は濡れたアスファルトに倒れる黒ずくめ達を見る。

うっん……謎だな。結局この者達は何の為に動いていたんだ？

「あら風紗、丁度いい所で発見したわ」

ん、この声……不意に誰かが話を掛けてきたが、この声は間違いない。

「雪乃……？　こ、こんな所でなにして　」

「貴女を探していたのよ。私もずっとこの街にいたのよ？」

「そ、そうなのか？　だから避難所で見かけなかったんだっ」

「そう言うこと。それでね凧紗、ちょっとお話があるんだけど……  
いい？」

「うん、構わないぞ」

「ありがとう。それじゃあ早速話をするわね」

倒れている黒ずくめの人達を見ても驚かず、何時もの調子で話を続ける雪乃。確かに雪乃も元々佐井学園の生徒で、1年の頃は私のクラスメイトだった。

多少の事では驚かないのもわかるけど……それにしたって無反応すぎるぞ。どうして雪乃はこの人達を見ても驚いたりしないのだろう？

　　だけど次の瞬間、

「一緒に佐井学園と戦わない？」

そんな疑問を吹き飛ばすほどの　　凄い事を雪乃は口にした。  
学園と戦うって……私達があの佐井学園と？

　　流石にぶっ飛び過ぎているぞ、あの学園と真正面から戦おうだな  
んて……っ。

「確かに、私もあの学園に対していい印象は抱いていないけど……  
でも」

「大丈夫よ。最大の敵　早川悠も今や学園の敵だわ」

「ど、どういう事なんだ。雪乃っ」

「言葉のままよ。この黒ずくめの人達は佐井学園の暗部組織の人達よ。そして、この人達は早川悠と戦っていた。どういう事か説明しなくてもわかるわよね？」

「本当……なのか？　あの男が学園の敵に回ったってっ」

「おそろくね。でも、これで学園側の戦力は大幅に低下したわ。今なら私達が手を組めば学園を叩き潰すことが出来るかもしれないわよ？」

確かに雪乃は強い。五本指、と呼ばれる、佐井学園に在籍する生徒の中でも特に強い超能力者の中でも3番目の実力を誇る。それで彼女　西園寺雪乃の強さだぞ。

だけど、それに比べて私は単なる発火能力者パイロキネシスト。雪乃のように特別強い能力を持つていわけじゃない平凡な超能力者。

それに敵にはまだ　実力第2位の超能力者がいる。

さらに　第4、第5、それ以外に彼らには及ばないながら、強い能力を扱える強者どもが学園には沢山いるんだぞ。私と雪乃が手を組んだって勝ち目なんか……。

「本当に……大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。確かに正面勝負でこちらに勝ち目はないわ。でも、作戦を練って一つずつ確実に敵を倒していけばそれは可能かもしれないわよ。それに私が作るうとしていいる反学園組織“フレンド”のメ

ンバーは、現時点でも私だけじゃないのよ？」

「……？」

と、その時。

街灯さえ灯っていない道路の真ん中、暗闇から一人の少女が現れる。ゆつくりと歩く少女はどういうわけか、半袖夏仕様の初芝の制服を着用している。まさか……初芝の生徒なのか？

やがて少女は雪乃と並んだ。

化粧がいらぬ程に整った顔。肩まで届く紫色のしなやかな髪。その両サイドに赤いリボンが結ばれた活発そうな雰囲気を持つ少女だ。

……待て、この子もしかして。

「あ、朱実……？」

「えっ、ウソ！ ホントに凧紗じゃん！？」

雪乃の隣に並んだこの子は木山朱実<sup>きやまあけみ</sup>。確か1年の頃、つまり私がまだ佐井学園にいた時のクラスメイトだ。それと確か、雪乃の幼馴染でルームメイトだった気もするぞ。

だけど……どうして朱実が初芝の制服を？

「紹介……しなくてもわかるわよね？」

「あたりまえだろ。それより朱実、その制服……」

「転校してきたんだよん だって雪乃が心配だったしね！」

「……って事は、それじゃあフレンドのもう一人のメンバーって」

「そう、朱実よ。朱実は戦闘には不向きだけど、朱実の偏差電オフザープホリック換は敵の大まかなスペックを知れる便利な能力だね。おまけに朱実は武器にも詳しいのよ」

「いやあ、父が軍オタだったから自然に知識がついちやっただよ  
ねー」

朱実オフザープホリックは偏差電換という、対象物を分析し、数値で観測する事が出来る能力の持ち主。

対象物を分析する能力だから、人の戦闘能力や武器の性能、それどころか気象観測もある程度まで行えるらしい。私の能力より使えるかもしれないぞ……でも、あくまで朱実オフザープホリックの偏差電換は対象物を観測するだけで、決して力が向上するわけではない。

朱実は戦闘タイプじゃない。

朱実は強制されるのが嫌だから、雪乃に強制されたわけじゃなさそうだけど、だからってこんな危険な世界に足を踏み入れて欲しくないぞ。相手は生半可な気持ちじゃ勝てない相手だ。

「朱実、どうしてフレンドの一員になっただ？」

「どうしてって……うん、雪乃を助けたかったから？」

「雪乃を……？」

「うん、学園さえ潰せばあたしらは自由の身だしね！」

自由の身……確かにそうだ。あの学園が消えてなくなれば、誰も学園のくだらない計画の犠牲になる事はない。今日だって、木下が撃たれる事もなかったんだ。



早川悠だつて学園さえなければ、あそこまで外道にはならなかったハズ。この黒づくめ達も学園がなかったら、今頃普通の人として日常を営んでいたかもしれない。

あの狂った学園さえなければ、藤島が襲われる事も……っ。

「もちろん無理にとは言わないわ。友達を危険な目に遭わせたくないのは私も一緒よ……なんなら、私は一人で戦う覚悟だつて出来ているわ」

「それはダメ！ あたしもあんたの力になるの！」

雪乃も朱実もやる気満々だ。自分の身を守る為に、友達を守る為に。これ以上、学園の行動による犠牲を増やさない為に。

それなら……私だつて、藤島を学園から守りたい。

木下の仇を討つてやりたい。この黒づくめ達に襲われた藤島達を守りたい。

覚悟は決まったぞ。決心した、私には 守りたい人がいる。

「……わかったぞ、私も戦う」

「凧紗……」

「凧紗、本気！？」

「うん、このはは2人を放つてはおけない。それに私にだって……な？」

あえて詳しい事は言わなかった。

だって……なんか、その……恥ずかしかったからっ。

「……わかったわ」

「雪乃、これでメンバーは3人になったね！」

「そうね、でも3人じゃ勝ち目がないわ。だから今から  
仲間探しをしましょう?。」

「……こうして、私と雪乃と朱実。佐井学園の現実を知る3人が集まり、フレンドという反学園組織を立ち上げたのだった。

それは学園を潰す為　大切な友達を守る為に……。」

## 第175話 新たに手を組む者達（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「やっと話が進んできた」

大吾「もう本編だけで175話。番外話も全部カンウトしたら184話だよ」

重原「正直長過ぎだよねえ」

圭介「ホントすみません。でもまだ終わる気配がありません……っ」

大吾「赤の軍神にサヴィエトそのもの、佐井学園とか問題は山積してるしな」

重原「果たして何話まで続くんだろうねえ？」

圭介「知らねえけど、ようやく8・17編もお終いだな」

大吾「長かったあ……」

## 第176話 穏やかな日常

8月22日、月曜日。

先日のシルフラが暴れた一連の騒動は、8・17事件と命名され、日本の歴史に残る大事件として記録されたのである。俺こと藤島圭介もあの後色々忙しかったんだ。取り逃がしたとは言えシルフの暴走を止めた功績は警察に評価され、なんと俺は警察協力章を受賞した。

しかし、それと同時に色々と事情聴取を受けたりで、結局騒動の影響で翌日は臨時休校となってその翌日、19日も事情聴取の為に学校を欠席。

土日も殆ど休めず、そして今日……ようやくいつもの生活に戻る事が出来たのだ。

「ふわぁ……けーすけ様ぁ、眠そうですねっ」

「お前も人の事言えねえくらい眠そうだな……」

「あんた達昨日ちゃんと寝たの？ というか、ここ数日ずっと連絡つかなかったわよ」

「お兄ちゃんとクーにゃんはあの事件の後、忙しかったみたいだけど何やってたの？」

「俺も暮葉も犯人に遭遇してたから、警察とかから事情聴取を受けてたんだ」

「もきゅー!? そ、そうですね! だからしばらく忙しかったのですっ!」

っと、言っても5割ほどは嘘になる。

暮葉はあの日、太股を撃たれたが大事には至らなかった。その場で組んだ、回復術式というヤツが効果を発揮したらしく、翌日には被弾した後さえ残っていなかった。

しかしその後、暮葉は今回の騒動の始末書執筆に明け暮れ、同時に今回の残業もしなければいけなかった為、俺と同様ここ数日はめちゃくちゃ忙しかったと言うわけである。その為俺達2人はここ数日プライベートな時間が少なく……と言うより睡眠も殆ど取っていないのだ。

まあでも、暮葉が残業してましたーなんて、伊吹はともかく葵には言えないよね。

「ホント？ 暮葉はともかく、あんたはまぐたアニメかゲームじゃないの？」

「違うわっ！ ここ数日ホントに忙しかったんだよ！」

「そうだよな、お兄ちゃんここ数日ずっとお出かけしてたもんね。きつと禁断の兄妹愛がバレて近親相姦と言う事が問題になったんだよー！」

「うわっ！ あ、あれほど葵ちゃんに手を出さなって言ったのに！ ばか圭介っ、変態！」

「けーすけ様！ 近親相姦は最低だと思っのですっ！」

「違うわ馬鹿共！ ああもっ、お前ら朝っぱらからしつこい！ いい加減にしるー！」

けど、こういう日常が戻って来ただよな……。  
よかった、こうしてコイツらとくだらない話をして、一緒に笑って……やっぱり平和ってモンは伸び伸び出来ていいもんだなあ。  
それから数十分後、学校に到着し、1年の葵と別れた後に教室へ向かった俺達。久々に登校してきた暮葉を女子達は温かく迎え、俺の所にも。

「は、ぐうあわっ!?!」

突然、両サイドから飛んできた拳が俺の頬を捉えた。俺を殴ったのは、三馬鹿の黒木と赤佐の得に馬鹿な2人組であった。ちくしよ  
う……なんていきなり殴られたんだ!

「いきにやりにやしゅんれすひゃっ!?!」

「ニュース見たぞテメエ! なに勝手にヒーローになっちゃってんだよ!」

「でも、犯人逃がしちまったあたりが実に藤島らしい、アホなミスやったなあ」

「つーかシルフが何だか知らねえけど! 俺が戦えばよかったぜ!」

「そうやな黒やん! そうすれば、今頃伊吹ちゃんも黒やんにメロメロやったでえ?」

「なんで藤島の前でしか大事件が起きねえんだよ! なんで俺出番がねえんだよおおお!」

そう、コイツらの言う通り 俺の顔はニュースで全国に流れて

しまったのだ。

単身犯人と戦い、事件を終息に導いた高校生として。そのせいだろう。黒木と赤佐は大活躍した俺に嫉妬しているようである。だからって思いつき顔面ぶん殴る事ねえだろうに……地味に痛え。やっぱりこの2人強いじゃねえかよ。でもシルフと戦ったらボロ負けしそうな気がする。コイツらじゃあの風に耐えられるか微妙だぞ……？

「よかったですねけーすけ様。すっかり有名人なのです！」

「僕も毎日ネット確認してるぜ。圭介のヤツ、今時の日本人にしては骨があるって高評価だったな」

「そうだねえ、リアル上さんとまで言われてるらしいよね」

誰が上さんじゃ、好きで戦ってんじゃねえんだよこっちは。だって向こうが俺や暮葉達を狙って襲ってくるんだから、自分の身を守る為にも仲間を守る為にも仕方ないじゃん。

全く……赤の軍神って何人いるんだろう。

というか、サヴィエトとアルファ隊の戦いついていつ終わるんだろうか。戦いが終わらないと皆で伸び伸び過ごせないじゃないか……って、あれ？

そついえば……。

「……っ」

「久々に学校に来てくれて喜ぶ圭くんの嫁でしたっ」

「なっ！？ ば、そそそそんなわけないでしょ！ 大体嫁って何よ嫁って！」

「さあ、あたしは何も言っていないけど？」

「……別に、圭介が来たって嬉しくなんかいいわよ」

ツツパリ伊吹はいつも通りだけど、今日の2年4組には何か足りない。そう、携帯電話に文字を打ち込んで他人と話をするという大変ユニークな会話をするお方がいないのだ。

どうしたんだろう。いちいち覚えている俺も気持ち悪いかも知れないが、アイツは少なくともこのクラスになってから休んだことは無かった。いや、噂だと去年も皆勤賞。一日も休まず成績も優秀だったらしいのに……今まで皆勤賞だった人がいないと、やっぱり心配になるなあ。

とりあえず、確認だけでもしておこう。

黒木と赤佐はまだ暴走状態だし、大林は……チツ、あいつサボりかよ。時々あのチビ坊主学校サボるから困ったもんだ。

伊吹と小坂は仲良さそうに話してるし、ここは暮葉が大吾達に聞いてみよう。

「なあ、白藤は今日どうしたんだ？」

「もきゅ？ そういえば今日は一度も見ていないのですっ」

「ああ、白藤さんなら怪我で入院らしいよ？」

「入院？ 重原……ソースあんのかよ？」

「ソースかい？ いつも通り大吾情報だし、間違いはないと思うよ？」



「フッフ……僕の情報網をナメない事だな！」

またおまえか！

情報収集能力相変わらず高えなオイ。多分CIAもビックリだろうな。大吾は情報収集能力の高さに定評のあるヤツだ。しかもコイツ、毎回かなり正確な情報を掴んでくるのだ。コイツの情報網って一体どうなってるんだ？

高 涼介だってここまで情報収集できるか微妙だぞ。

「しっかし入院って……大丈夫なのかアイツ？」

「心配しなくても平気だぜ圭介。僕が昨日入手した情報によると退院は今日だ」

「てめえは何でそこまで知ってるんだよ!？」

「僕は歩く情報本部だ！知らない事など何も無い！」

真っ先にプライバシー侵害で罪に問われそうな渾名だな。しかも情報本部って、随分とまあ微妙なチョイスだな。ここはカツコつくてCAIって言ったほうがよかつたんじゃないか？

「でもよかつたのです！大吾さんがそのことを知っている理由はともかく、白藤さん今日で退院らしいのですよ？」

「ああ、重傷じゃないっばいしな」

いつ入院したのかまでは知らないが、8月17日以降彼女を見ていないし、多分17日から今日までの5日間だろう。仮に17日に入院したとしてもたつたの5日。どうやら、白藤は怪我と言っても

そこまでひどい怪我を負ったわけではなさそうである。

よかったよかった……だけど、やっぱり心配である事には変わらない。

学校が終わったら会いに行つてやろうかなあ。

でもアイツと親しく話せるのは俺だけだし……だからと言って、俺だけで行くのもなんだか恥ずかしい気もするな。よし、家に帰るついでだ。暮葉と葵を連れていくとしよう。

白藤は特殊な子だけど、暮葉も葵も不思議っ子だ。

多分、変人同士で仲良くなれるだろう……。

よし、放課後の予定は決まりだな。白藤のヤツ 元気にしてる  
だろうか？

第176話 穏やかな日常（後書き）

・後書きトークコーナー！

凧紗「相変わらず藤島達のクラスは賑やかだなあ」

雪乃「そうね、羨ましいわ」

圭介「お前たちのクラスはどうなんだよ？」

凧紗「まあ、賑やかと言えば賑やかだぞ？」

雪乃「私のクラスもよ？ 賑やかな事は賑やかだわ」

圭介「じゃあ別にいいじゃない」

純奈「ナギちゃああああああああん！」

凧紗「うわっ！ こら、離れるすみにゃん！」

朱実「ゆっきつのん！」

雪乃「ッ！？ ああああ朱実っ！ スカートめくりは自重して欲しいわっ！」

朱実「ごめん つい学園にいた時のノリでやっちゃった」

圭介「お前ら、俺以上に苦労してるんだな……っ！」

## 第177話 ザスローン

8月22日早朝。

つつても……こんな所じゃ朝か夜かは分からねエ。ただ、頼りになるのは所々に設置されているデジタル式の時計のみだ。

このオレ、早川悠はヴィンペル隊が建設会社に依頼して作らせたという、灰色の分厚いコンクリートに囲まれた巨大な地下空間で訓練を行っていた。

そう、的に正確に銃弾を中てる 射撃訓練だ。

今のオレは残念なことに、超能力の使用に制限がかかっている。その為、制限時間内なら以前のよう思いっきり暴れられるが、それを過ぎればただの身障者。戦うどころか、杖がなければ満足に歩くことすらできない弱者となるのだ。

そんな状態では戦えない。だが、この世界には情けも容赦もない。だから、オレは通常モードでもある程度戦えるようにならなくては、この先すぐに死んでしまおうだろう。

その為の訓練だア……。

「コイツは反動がでか過ぎてしっくりこねエ……次はコイツだ」

トカレフTT-33を目の前に台に投げ捨てると、今度は別の銃を左手に持つ。イタリアのベレッタM92っていう、今でも軍や警察で使われているヤツだ。しかも、コイツはマガジン・キャッチが左右差し替え可能らしい。右手が杖で塞がっている今のオレには優しい拳銃かもなア。

「どうだい早川、俺の目から見たらまだまだ修行不足みたいだけど？」

突然声が聞こえた。

オレは特に振りかえらず、そのまま返事をする事にした。  
何故なら、ソイツが誰だかわかったからなア。

「ラウル・ゲリエ……何の用だア？」

「出来れば、素顔は故郷以外で晒したくなかったんだけどね」

ラウル・ゲリエ……元サヴィエトの魔法使って話だったな。

変装が得意な中米出身のブードゥー教信者で、素顔は確かそこそこ端整な容姿を持つ色黒な男だったハズだ。見なくてもわかる、ここに来た時に一度姿を目撃したからな。

「言つとくが、オレに化けた所で余計に命を狙われるだけだぞ」

「それくらいわかってるよ。所で武器は決まったかい？ 君も今日が初陣だよ」

「悪イが、銃はオレの肌に合ってるねエみたいだなア」

オレは一度持ったベレッタM92を台に置き、身体ごと後ろに向ける。やっぱりそこには色黒の上はTシャツ、下はジーパンというシンプルな服装の爽やか野郎が佇んでいた。

「仕方ないよ、君の能力は制限時間付きだからね」

「侮辱してんのかア？」

「そう聞こえたなら謝罪はするよ」

「チツ……まっ、オマエの言う通りだ。今は変換機コイツに頼れねエ」

「何故だい？ 確か“ザスローン”の技術部の報告によると、君のソレは30分に延長されたのだろうか？」

「知ったような口聞くんじゃねエよ……コイツは機械だ。機械を壊すのは簡単だ」

「なるほど、つまり壊れたらお終い……と言っわけかい？」

「それで終わったらオレは戦力外だ。話にならねエだろ」

やれやれ……ラウルのヤツも嫌な性格してやがる。同じ部隊にいる者として、オレの情報も少しは知っているハズだつてのに……チツ、ここも周りは敵だらけだ。所詮、ラウルも他のメンバーも利害が一致しているだけだ。ちょっと裏を返せば全員危険な連中、全て敵に回る可能性もある。

最もオレも同じだがなア……。

コイツらが使えねエンなら容赦なく切り落とす。もし、ミネットヤリーネ達を狙うつてんなら容赦なく愉快な肉塊に変えてやる。

オレはアイツらさえ 守る事が出来れば他の全てを失ってもいいんだ。

「ハハ、まあそれは置いといて……そろそろ仕事の説明をしてもいいかい？」

「何だ、オレの初仕事つてのはア？」

「街の不良退治だよ」

「ああ？ チツ、サヴィエトや佐井学園を敵に回して戦う組織が、街のゴロツキを掃除するたアね……こりゃ驚きだア。で、何でオレ達からしてみれば無害そうなゴミを掃除するんだ？」

「有害だからだよ、俺達が不良を潰そうとしているのは？」

なにイ……？

チツ、オレ達は映画に出てくる嫌な教頭役かよ。それってアレだ、その不良共を救おうとする熱血教師に社会的に殺される展開じゃねエのか？

「フーか、何で頭もなければ力もねエ、そんな不良共が有害なんだ？ 常識的に考えてみる。確かに一般人にとっちゃあ奴らは脅威だ。」

「だが、全員武器や何らかの力を持つザスローンからしてみれば、殆ど無害にしか見えねエだろ。」

「……ど言う意味だ？」

「古宇坂市には複数の不良集団が存在しているが、その中でも最大一派である白陵高校の不良達が最近、サヴィエトらしい組織と関わりを持っているらしいね。武器の提供を受けているらしいよ。」

「は〜ン……で、ソイツらの狙いは何だ？」

「アレクサンドルの子孫拘束。俺も一時はソイツを狙った……まっ、負けたけどね。」

「そんな強いヤツなら、放置してても大丈夫じゃねエのか？」

「確かにそうかもしれないが、人は誰でも数と武器の前には弱いんだよ。」

それはオレ達超能力者にも言える事だな。オレにはあまり関係ねエが、他の超能力者は1対1での勝負なら確かに強いモンだ。だが複数が相手で、かつ武器を持っているとしたら……ソイツは間違いなくその超能力者を襲撃した連中の勝利だろう。

超能力者は無敵じゃねエンだよ。

基本的には他の人間と同じ 数と武器の前には無力なのだ。

「要するに、ソイツをオレらが支援するってワケだな」  
バックアップ

「その通りだね。個人的には気に入らないが……ま、仕事だから仕方ない。特に連中に対する忠誠心があつたわけでもないし、別にどうでもいい話だよ」

「ソで、標的ターゲットは誰だ？ 不良集団全員か？」

「現在白陵高校は船木健太の転校により、永淵派による一党独裁状態が続いているんだ。今回その永淵派のリーダーである、永淵晃の生首を切り落とすよ」

「永淵晃ねエ……」

どこかで聞いた名前だな……まあいい、ソイツが今回の標的ってわけか。後で顔写真でも見せてもらおうとしようか。

今回の任務……アレクサンドルってヤツの子孫拘束を阻止するべく、サヴィエトに雇われた不良共の頭の首を切り落とす。簡単な仕事だ……簡単すぎるぜこの程度オ。

「彼はその子孫を大変憎んでいるようだ。だから、サヴィエトと手を結んだんだろうね」



「報復の為に身を売り払ったってかア、笑えねエ話だな」

そのアレクサンドルの子孫ってヤツが何者か知らねエし、興味もねエが……ソイツはサヴィエトと言い永渕ってクソ野郎といい、よほど多くの人間に恨まれてるんだな。それってソイツにも責任があるんじゃないのか……って、オレがそんな事を考えても仕方ねエな。仕事は仕事だ。乗り気じゃねエが……相手はサヴィエト。やらなきや ガキ共を守れねエ。

それから数十分後、最低限の装備をしたオレはすぐに現場へ急行した。

どうやら現地へは自動車で移動するらしいが……オイオイ、ちょっと待て。この黒くて荷台が金ぴかしているこの特殊な車は……、

「ラウル・ゲリエ。何で霊柩車なんだよ？」

オレは不機嫌そうに、電話でラウルに質問してみる。

まだ死んでねエのに霊柩車になんか乗りたくねエぞ、オレは。

『永渕晃の死体を運ぶからだよ。一応永渕晃は日本人だし、近藤さんの提案で死体の処理は日本式のほうがいいって事になったんだよ。俺としては祖国のやり方がよかつたんだけどね』

「死体を運ぶからって霊柩車とは、しかもコイツら葬儀屋じゃねエだろ？」

オレは隣で車を運転している男を見ながら、思った事をそのまま

ラウルに告げた。

オレの隣で霊柩車を運転している男は中年だ。

だが……どう考えてもカタギには見えねエ。なんなんだよ……ピンク色のふざけたスーツにスキンヘッドで顔面に傷があつて、その上怪しげなサングラスまで付けてやがる。

こんな露骨な暴力団員、むしろ怪しまれるんじゃないかねエのか？

『その通り、今回は高田組と言う暴力団の方々に協力してもらっているよ』

「どう考えても最近話題の暴排条例に引っ掛かるんじゃないかねエか、コレ？」

『大丈夫、俺らも十分反社会的な組織の一員さ』

そオだな……下手すりゃヤクザよりヤバいかもなアオレらは。なんせ、これからオレらは殺しの為に武器や能力を使いまくるワケだ。やれやれ……佐井学園に戻った気分だ。結局オレに来る仕事は全部汚れ仕事だ。

「チツ……」

『それじゃ、俺はそろそろ仕事があるんで切るね』

「勝手にしろオ」

『一応、武運長久を祈るよ』

「くくく……」

こうしてラウルからの電話は切れた。

「まったく、好きな事を散々言いまくりやがって。次の仕事ねエ……ま、どうせあの複製変装野郎の事だから汚エ仕事なんだろう。」

「そんな事を考えていたその時、組員が運転していた霊柩車はゆっくり停車する。」

窓から周囲を眺めると、どうやらここは市内にある廃工場らしい。永淵達のテリトリーか。つーか、不良の根城が廃工場とはありがちな……。

「そんじゃ、後で回収に来るから白い兄ちゃん、気を付けてくださいえ」

「オマエらは戦わねエのか？ どオセ武器とか持ってンだろオ？」

「俺らが高校生をバラすのはマズいだろ？ だからアンタ、代わりに頑張ってくれな」

どっちも一般人からしてみれば、全く同じようにしか映らねエだろ。ザスローンもヤクザも非合法的な活動を行う所じゃ、全く同じようなモンじゃねエか。

ただ、ヤクザにはそれなりの仁義がある。

オレらはその仁義ってヤツすらねエ ただの無法者の殺し屋。

それがヤクザとオレ達の 唯一の違いってヤツだろう。

黒く、黄金に輝く霊柩車から降りたオレは、杖をつき工場内へと足を踏み入れる。

随分とまア汚エな……閉鎖してから何年放置してたんだろうか。

こんな場所を閉鎖してからいつまで経っても解体しねエから、永淵達不良がたまり場に変えちまうんだぞ。この廃工場はそこそこ広い上に死角も多い。不良がたまり場に使うには丁度いい場所だ。

「ふん……懐かしい空気だア」

こういう所は不良以外にも 馬鹿共がよく根城にする。  
佐井学園時代、オレはこういった所を根城にするクソ野郎共を  
何十何百とブツ殺す任務を繰り返して来た。それだけに、  
こういう場所は懐かしいなア……悪い意味でな。

「さて」

そろそろ行くか……と思った所で携帯電話が鳴った。  
画面には近藤政信と表示されている。

コイツもガスローンの一員 現代に生きる武士を自称する男だ。

「近藤か、何の用だア？」

『ちょっとお前さんに伝えておきたい事があってなあ』

古臭い喋り方で近藤はそう言ってくる。流石武士、言葉使いも古  
風なこつたア。

「……何だ？」

『なあに簡単な事よ、今回の作戦。今、俺達の紅一点 アナスタ  
シア・アベルツェフが奇襲をし掛けた所だ』

アナスタシアという、ガスローン唯一の女隊員ってヤツの名前を  
聞いた瞬間、

突然、鼓膜が破れるような轟音が轟いた。

僅かに砂埃が不自然に宙を舞い、どこかへ飛んでいく。

チツ……あの女、また泥人形でも作ってんのか？

「あの女は拠点攻略と言うより、拠点防衛の方が向いてんじゃないのか？」

『それは俺も思ったんだけどなあ、ゴーレムってのはインパクトが強いだよ。不良さんをビビらせんには俺の刀やラウルの魔術より、ずっと効果があるって事よ』

「でっ、それで混乱した連中をオレが一気に潰せばいいのか？」

『その通りよ。まっ、俺達は永淵晃の首さえ切り落とせばいいのよなあ。出来る事ならそれ以外は生かしておいて欲しいもんよ』

「チツ」

オレはそこで電話を切った。

永淵以外は生かしておけてねエ……そりゃあまあ、サヴィエトと関わっている事実を知ってるのは永淵くらい。下っ端の不良がそれを知る術はない。だからってなあ……まあいい、要するに永淵以外を殺さず任務を遂行すりゃあいいってワケだなア。

面白エ……久々にゴロツキ退治だ。

オレはそう思いながら笑みを浮かべ、変換機のスイッチをonにする。瞬間、懐かしい超能力者の感覚が戻ってくる。戻った、負傷する前のオレの状態に。

「永淵晃、コイツを殺せばいいんだな？」

オレは静かにポケットから写真を取り出す。

悪人面な上にラインアート入りの坊主頭……いかにもってヤツだな。

まあとにかく、コイツ以外は殺すな……。

「さてと、そんじゃあ……オレも仕事を始めるとしますかア」

コイツ　　永渕だけを肉塊に変えるんだ。

## 第177話 ザスローン（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「うわあ、懐かしい連中がいっぱいだ……」

暮葉「作者は今までの敵キャラを使い捨てにしたくなかったらしいのですよ」

圭介「だからって……ねえ？」

暮葉「そしてその為に犠牲になる永瀏さん、ある意味可哀想なんです」

圭介「っていうか、永瀏って攻撃手段が殴る蹴るしかないじゃん。どうやって早川と戦うんだ？」

暮葉「さあ、次回以降になればわかると思うのですっ！」

圭介「お前、地味に宣伝してるだろ？」

## 第178話 永泐晃

チツ……やっぱ不良は不良だ。

弱いつて言葉がお似合いだった。オレは連中をものの数分で黙らせたのだ。酸素濃度を操作して酸欠状態してしてやっただけ。それで黙ったヤツらに拳銃を打ち込み、その足に風穴を開けて動けなくしてやったのだ。たったそれだけで 殆どの不良は無力な怪我人と化したのである。

超能力は殆ど使っていない。

三原との戦いで少しは学習したんだよ……これでも。それに、この程度の相手にそんな長時間能力を使う必要なんざねェんだ。一瞬、ちよつとだけ使ってやれば それで十分だ。

「さてさて、永泐晃はどこだア？ 今まで潰してきた連中の中にいたか、それともアナスタシアのヤツがブツ殺したか……つまんねェなア」

と、一応敵が残っていないかの確認を行う為、オレは工場内を歩いていたが、

「ハッ、なんだよ。俺達に喧嘩売ってきた奴は一人じゃねえのか」

不意に、そんな声が耳に入ってきた。

どこかで聞き覚えのある声……そういえば、一度初芝高校に行った時、こんな声の野郎と揉め事を起こした気がする。その時はソイツ、国宗って女にボコられて……。

まさかとは思つが、永泐晃ってあの女にやられたクソ野郎じゃねエよな？

あ？ と振り返ると、やっぱりな 永泐晃は国宗にボコられた



男だった。

「テメエ、前に初芝で会ったよな？ ム力つくもやし野郎がよお」

「するとオマエが永淵晃か。国宗にボコられた子犬ちゃんが何吠えてんだア？」

「チツ、あん時は油断したんだよ。それに見ろ、オマエの仲間ならこの通りだぜ？」

永淵晃の右手を見ると、ぐったり力が抜けているアナスタシアが掴まれていた。

「どオ言う事だ……泥人形使いのアナスタシアが不良に負けたア、現実には小説より奇なりって言葉がピッタリの事態が発生してるぞ。」

永淵の野郎オ……単なる不良が、どうやってあのゴーレムを破りやがった？

「どオやって殺した？」

「まだ死んじやいねえよ。後で俺の食い物になってもらう予定だからなあ」

「とんだマセガキみてエだなオマエ。つか、あのゴーレムはどオした？」

「最初はビビったぜえ？ けど、この女をぶん殴ったらゴーレムは消滅したぜ」

なるほど、ゴーレムを叩かずアナスタシアを叩いたか。確かに、力のねエ奴が取る行動としては最も適切だ。永淵の野郎もいい判断

をしやがる。

という事は、アナスタシアは油断したってワケか……馬鹿女が、ゴレムがいるからって安心してるところからこうなるんだ。いくら相手が雑魚の不良でも、警戒はしとけっつーんだよ。

「ハッ、オマエ面白エなア？　けど、オレはその面白いヤツを今から殺す」

「何言ってるんだもやし野郎。俺を殺すなんざ馬鹿げた真似が出来ると思ってるのか？」

「おめでてエヤツだ……これじゃあ、殺される理由さえ理解してねエだろっな」

「テメエ……完全にナメてるな！　殺すぞコラア！？」

「オレを殺す……か。随分粋がってんなクソ野郎オ」

「うつせえんだよもやし。オラア、やれるモンならやってみろってんだよ！」

あーハイハイうるせエうるせエ………そんなじゃ、期待通りにしてやるか。一瞬でぎゃーぎゃー喚いている目の前のクソ野郎をブツ殺す。

オマエはもう　ミンチ確定だ。

「チッ！」

オレは変換機のスイッチをonにした、これで超能力が使える。アナスタシアが永淵の野郎の手元にある以上、あまり派手な技を使えばあの女も巻き込む結果になる。別に、オレはアナスタシアが死

のうが関係ねエが……殺せば確実にペナルティがあるだろう。

だったらついでだ　アナスタシアも助けてやろう。  
風の操作を実行。

一步、力強く足踏みすると、足の裏から吹き上げるような風が発生し、ロケットのような推進力で一気に永渕との間合いを詰める。  
ぐわん、と五本の指を大きく開き、永渕の顔面を鷲掴みしようとする。

木下や圭介あのやいには能力発動中、暴風の膜を使えねエって弱点を見破られ、特に後者には隙を突かれぶん殴られたが……この野郎にそこまでの頭はねエだろう。

増してや、この速度に対処できる不良は　いねエハズだ。  
しかし、

「オラア！」

永渕は右手でアナスタシアを放り投げて来た。

慌ててオレは前身を中止し、左足をダン、と地面に突きつけ、風の操作で今度は一瞬で10メートル以上の高さまで上昇する。アナスタシアを避ける事が出来た。永渕の野郎も、流石にこの高さまでジャンプ出来る程の身体能力は持ってねエだろう。

「チツ、バケモノかよ……あの女といい、まあいい……ッ！」

ここで僅かに気になる事がある。なんだ……あの永渕の余裕そうな表情。どう考えても今の状況を理解しているとは思えない、勝者の表情である。あの野郎オ……まさか、このオレと自分自身の実力を分かってねエのか？

しかし、そう思って笑みを浮かべていた　、

「　　ッ！」

刹那、永淵は悪あがきをするようにジャンプをするが、跳躍力がありえない。普通ならびょんと跳ねる程度で終わる。それが一般人の跳躍力で、鍛えたって変わるモンじゃねエ。

ところが永淵は違った。

一度跳躍すれば10メートル以上。オレと同じ高さまで飛び上がり、オレが驚いている隙を突くように不敵な笑みを浮かべ、永淵は固く握った拳を振りかざしてくる。

「オマエ……ッ！」

オレは咄嗟に暴風の膜を張り巡らし、永淵の一撃を防いでやった。普通なら弾き返された衝撃でそのまま地面に叩きつけられるハズだが、永淵は何事もなかったかのように着地する。

どオ言う事だこれは……あの動き、そこらの不良のレベルを遥かに超えている。

「ンだア、この運動性能はア？」

「魔法衣服マジッククロースだったかな。奴らも便利な道具をくれたモンだ」

あの野郎、服の裏に特殊なモンを巻いてやがるな。その名前が魔法衣服マジッククロース、名前から推測するに魔法の力で運動性能を向上させる特殊な衣服だろう。

チッ、サヴィエトめ。くだらねエモンを永淵に供与しやがって。アナスタシアのバカは油断しているところを、卑怯なアイテムで強化された永淵に隙を突かれたワケだ。これならアスリート並に鍛えているって自慢していたこの女を、アツサリ沈められるワケだ。

そっか……そっちがその気なら、オレも手エ抜く理由がなくなつた。

オレは風の操作を行い、ゆつくりと地上に降りる。  
視線の先には永瀧晃 装備品で強くなったつもりクソ野郎の  
姿のみ。

「そオかい……そりゃ油断している女を倒せたワケだ」

「テメエも今すぐ沈めてやんよ。俺はテメエに勝たなきゃいけない  
……勝つて藤島に復讐して伊吹ちゃんを手に入れなきゃいけない  
だよ！」

永瀧は腰の周囲に装着したヒップホルスターから拳銃を出し、その  
黒光りする殺人用の道具の銃口をオレに向けてきやがった。

オレは特に何もせず、黙って永瀧を睨み続ける。

ホルスターに収容してある拳銃さえ抜かない。常識的に考えれば、  
銃を向けられても黙っている今のオレはただの馬鹿か、余程自信の  
あるヤツにしか見えないだろう。

前者か後者か、オレにとっては何の関係もねエが……。  
少なくとも、

「それに前の借りも返さねえとな！ だからさっさと死ねや、この  
もやし野郎があああ！」

永瀧の銃から弾丸が放たれた。それでも 前者になる気だけは  
しなかった。

「な、あ……があ……っ」

永瀧が放った一撃で勝負は決した。

勝敗は接戦の試合を見るより明白だろう。

オレは何もしなかった。ホルスターにしまっただけある拳銃を抜かず、

かと言って事前に回避したり永瀏に飛びかかりもしていない。弾丸を避けると言う荒技は流石に不可能だ。永瀏が放った一発の銃弾は間違いなく命中した。

命中した弾丸は柔らかい肉を突き破り、鮮血が服にまで染みている。9mmの弾丸は脇腹の肉を食いちぎり、弾は貫通して真つ赤な穴が開いている。

赤い液体はボタボタと、荒れた地面に落ちて染みてゆく。

「う、そ……だろ？」

絶望を感じているような声を漏れる。

やがて口の中にまで血が広がっていく、ダラリと涎のように赤い液体が口から流れ出す。

「　　なんで、銃弾が跳ね返ってきたんだよ？」

その台詞を聞いてニヤリと、獲物を仕留めて喜ぶ猛獣のような笑みをオレは浮かべた。

薄く薄く薄く、血に飢えたような笑顔を浮かべて、

「オマエも敵の情報を事前に調べておくべきだったな。いや、調べなくてもさつき拳を反射されて時点で気付くべきだったなア？」

「どういうことだ……まさかお前　何らかの力で反射を？」

そんな馬鹿なという顔で、オレの真相に迫ろうとしている永瀏。全く、オレの本質に迫ろうとするのが遅すぎるんだよ。流石は脳味噌が足りてねエクソ野郎って所か。

まァいい、最後に特別にご披露してやるつか　オレの超能力チカラを。

「さアって、と」

オレはその場に杖を置き、腰に両手を当てて再び永淵を見直す。恐怖と絶望のあまり後退りをしてゆく永淵晃を、今一度厳しく睨みつけてやった。

「ただの不良と超能力者の違い　今から徹底的に教育してやるオカア？」

脅すように言っていると、永淵は慌てて拳銃を構える。やれやれ、さっき弾丸を反射してやったつてのに学習能力がねエヤツだ。きつと手が使えるからそんな行動を取るんだらう。なら永淵の右手を封じてやればいいんだ。手が潰れて使い物にならなくなったら　少しは頭を使うようになるだらう。

「遅っせエンだよオ！」

オレは足元にある小石を蹴飛ばしてやった。それだけだった。

にも拘わらず、爆発的な速さで小石は飛んでいった。それこそ、拳銃から放たれた弾丸のように目で追えない速度である。

蹴りはオマケだ、本質は風の操作である。

蹴飛ばして浮いた小石　風の操作で加速させぶっ飛ばしたのである。

「ぐアあああああああああああああああああああ！」

ぐちゃり、と嫌な音が炸裂する。

小石は永淵の手の甲を貫通した。ザクロの用に引き裂かれた右手を、押さえようと身を丸めてしまったが、その程度の攻撃で永淵が

死ぬわけがない。

死なねエから　オレは次の攻撃を仕掛ける。

「さっきまでの威勢はどうしたんだ三下ア？　もっと楽しませろよ  
コラア！」

ダツ、とオレは陸上の選手のように駆け出す。それも常識的な速度ではなく、風の操作で加速することによって、獲物を狩ろうとするチーター並の速度でオレは駆けていた。

一瞬で間合いを詰め、血に染まった永淵の服を鷲掴みし、とりあえず近くにあつた廃倉庫の壁へ思いつき叩きつけた。

衝撃で壁がへこみ、ダメージを受けた永淵が鮮血を吐き散らす。立ち上がろうとするが、ダメージが大きすぎて立ち上がれないようである。

ハッ、これで終わりだな……。

「なア、気になるんだけどよオ……死ぬ間際ってどんな気分なんだ？」

「く、そ……藤島に勝つ前に……こんなもやしに……っ！」

「ハッ、オマエいいヤツだなア。ただの不良なら普通、必死こいて命乞いするだろうに」

「当たり前だ。俺は死なねえ……藤島に勝つまでは、伊吹ちゃんとやるまでは……」

「だが残念だア、その理由が気に入らねエ」

その言葉を聞き、永淵が残った左手で拳銃を構えた。ハハ、学習



能力がねエのかオレに殺されるのが嫌だから、せめて自殺でもしようとしてんのか。

どっちにしてもコイツは死ぬ運命だが……殺す前に一つだけ言うておこう。

「オマエの言葉でオレは 余計にオマエを殺したくなった」

「くそ、テメエ……何者だよ」

「何者？ そオだな……殺し屋だ」

言った瞬間 ドン！ と言う銃声が周囲を振るわせた。

オレの暴風の膜は銃弾に対して鉄壁だ。跳ね返った銃弾は永瀧へ直撃し、文字通り弾丸が胸に刻まれ無様な姿を晒す結果となった。

胸部から血を流し、ぐったりとしている永瀧。弾丸は心臓を撃ち抜いたようだ。

シヨックで即死か、仮に生きてたとしても数秒か数分以内にくたばるだろう。

「……」

終わった……文字通り血塗れな結果で仕事は終了した。

オレの初仕事はこれで完了だ……。

チツ、これからずっとこの世界での仕事か……オレも闇に堕ちたモンだ。

第178話 永淵晃（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「アナスタシア……アンタの扱いのひどさには泣けてくるぜ」

あかり「えっ？　なんでだ？」

圭介「あかり、お前出番くれとか言っていたけど、アナスタシアに比べたらお前は幸せだよ」

あかり「だからなんでだよ？」

圭介「出番早々気絶状態。永淵に武器として使われた拳銃、しかもセリフ無し」

あかり「……」

圭介「だからあかり、余計で無駄な高望みはしないほうがいいぞ。世の中にはもっと不幸な人がいるんだから」

あかり「……うん！」

葵「納得しちゃダメだよ！？　お兄ちゃんの話きに毒されちゃダメだよ！」

千早「出番……くださいっ」

## 第179話 / 死闘の一方で

早川と永渕が死闘を繰り広げていたその頃、圭介達は……。

「when she was a university student, she would often travel abroad. これを……藤島、日本語に訳しなさい」

えっ、ちよつと待てサツパリわからん……英語ダメダメなんだよ俺。

現在、2時間目の英語の時間。どうしようか、絶体絶命のピンチである。今、英語教師である細木先生ほそきが俺に当ててきやがったのである。くだいようだが、俺は英語というものが大の苦手科目であり、毎回赤点ギリギリ……いや、去年は赤点取ってたような気がするんだ。

それくらい英語が苦手だつてのに……ねえ？

そんな俺が日本語訳なんて出来るわけないじゃん。だけど、一応頑張ってみよう。

暮葉にいい所を見せて 俺が知的である事を教えてやる！

sheは彼女、studentは学生。んで、確かworldつてのが世界だったような気がする。それから予想してそれっぽい文に翻訳すれば完璧だ。

……よし、翻訳出来たぞ きつとこの文は……ッ！

「彼女は腐ったミカンじゃねえ、世界の学生だ！」

決まった……完璧だ。ここまで完璧な翻訳は人生初めてである。アルベルト・アインシュタインが一般相対性理論を発表したのと、同じくらい凄いことを言ったような気がするよ。

しかし、何故か周囲は黙りこむ。

と言うか、細木先生は呆れたような表情を浮かべ、

「藤島、君はちゃんと中学に行つてたのか？」

「失敬な！？ 一応初芝に入られだけの学力はありましたよっ！？」

「……はあ、藤島が期末で赤点回避できるか心配だ」

ちくしょう、細木先生に軽くスルーされた。だから嫌だったんだよ、英語で当てられて答えるなんて俺にとっちゃ自殺行為だよ。一人で革命を起こすくらい無謀だったんだよ。

大体今更気付いたけど、ミカンって英語でオレンジじゃねえかさっきの文にはどこにもオレンジって書いてなかったし……はあ。ため息をつきながら、俺はゆっくりと座った。

「あたしって、ほんとバカ」

「圭介、もしかしてさ かちゃんのつもりかい？」

俺の独り言に、重原がツツコミを入れてきた。

どうやら俺がいない間に席替えがあったらしい。俺と重原と大吾、野郎三人は仲良く揃って窓側の席になり、俺が最も窓に近く、重原は隣で大吾は重原の前に座っている。

暮葉と席が遠くなったのは悲しいが……でも、大吾や重原が近くにいれば、それなりに面白い会話も飛び交い、なんだか時間が前より早くなつたような気がする。

「うぐ、そんな簡単に元ネタが分かるとは……流石重原」

「まあね、俺はさ kachan派だし」

「なっ!? ば、ほ……ほ ほむが一番だろっ!?」

「心配すんなよ圭介。独りぼっちは、寂しいもんな……いいよ、一緒にいてやるよ……圭介……」

「気持ち悪いわ大吾オツ！ つーかてめえはまさかの杏子派かよっ!?」

「いや、僕はマ さん派だ。あの太股はたまらないね！」

どっちにしても大吾は変態だった。まあ、二次元限定だけど。大吾は二次元には欲情出来るが三次元には全く興味ナシ、日頃から「三次は惨事」と言っているくらいだしな。三次元に対する失望と二次元に対する愛情は多分、俺には理解できないレベルに達しているだろう。

俺はまあ二次元は超大好きなんだけど……今は、ねえ？

そう思いながら、ふと俺は暮葉のほうを見てしまった。ちくしよ暮葉……どうして徐々に学校だつてのに席遠くなっちまったんだよ。何か知らねえけど寂しいじゃないか！

「お前ら授業中だぞ！ オタク談義は休み時間にしなさい！」

「……す、すいませんでした……っ……っ……」

クスクスとクラスメイトの笑い声が聞こえる中、俺たち三人は細木に謝罪をする。

ところで細木よ、なんで今のがオタク談義ってわかったんだ？

まさか細木、教師の癖に結構アニメとか見る人なんじゃ……まあ

いいや、ぶつちやけ細木がどんな趣味を持っていようがどうでもいい。そもそも細木に興味がないからな。

「ところでさ、僕最近肩こりひどいんだけど、どうすりゃいいと思っ？」

「そんなの、身体を動かして解せばいいんじゃないかい？」

「それで肩こりが治るのはお前だけだろ広ちゃん！ 圭介はどう思っ？」

「どうってそうだなあ。俺は揉んでもらってるけど？」

「ふふ、どうせ圭介は妹に揉んでもらってるんだよ」

「やっぱり圭介はリア充だな。まあ所詮妹と言えども現実の産物だが！」

なに言ってるんだコイツら……つか、別に俺と葵は家族なんだし、危ない行為をしているわけじゃないんだから別にいいだろ。肩揉みしてくれるくらい懐かれると考えるとすれば、兄としては「キモイ」と罵られるよりは遥かに気分がいいと思うぞ。

まあ、うちの妹はそれ以上の事をしようとするから、困ったもんなんだけどな……。

「つか、お前ら身内とかいねえのかよ？」

「そんなものはとっくの昔に捨てた！ 僕は悲惨な現実の家族を切り離れたのだ！」

大吾は相変わらずのダメ人間っぷりである。早くなんとかしないと……いや、もう現代医学でも太刀打ちできないかもな。きつと医者も黙って首を横に振ることだろう。

「それはそれで救いようねえぞ……重原はどうなんだよ？」

「俺の家は道場だよ？ そんなに優しい親なんていないさ」

「ですよー」

予想通りのあまり、思わず棒読みになってしまった。

そうだ、重原の実家は道場だった。さぞ厳しい家庭なんだろう。家族の仲がいい家庭もあれば悪い家庭もあるが、そうやって見ると俺って家族仲いい方だったのか……。

日常が滅茶苦茶すぎて全然自覚がなかった……ごめんなさい。

「圭介の妹だつてきつとそのうち圭介離れするんだ……現実なんてそんなもんさっ！」

「なに泣きながら叫んでるんだよお前……っ」

「やっぱ姉も妹も母親も二次元に限る！ 劣化する上に歳とる度に性格も悪くなる現実はクソだ！ だから僕は画面の中の家族を一生愛する事にするよ！」

「お前なあ……」

大吾は二次元への失望を吐きだすように叫んでいる。馬鹿だ、馬鹿がいる。そりゃあ兄と妹なんだからそのうち離れる運命にあるだろう。というかそれが自然だと思うんだ。例外的にうちの妹がそれを

望まないだけであつて、俺はそれを結構心配しているんだよ。

だつてこのままじゃ葵……絶対彼氏とか出来ないだろ。

お兄ちゃん心配だぞ。将来俺なしで一人立ちできるか不安だぜ。

「けど、やっぱり圭介の家は俺から見ても羨ましいよ」

「そうか？」

「俺の家なんて食事中はほぼ無言だよ。喋る暇があるなら精神統一しろとかだね」

「随分とまあ特殊な家庭だな。道場だからってレベルを遥かに超えてる気がするぞ」

「まっ、それは両親の前だけの話だけだね。姉や弟とは結構話すよ」

「結局てめえも家族とは仲良しなんじゃねえか！」

ちくしょう騙された。みんな家庭の事で色々悩んでるんだなつて思つたのに、重原のヤツ親がアレなだけでその他とは仲がいいんじゃないか！

「コリアお前ら！ 今は授業中だぞ、心温まる話は後にしなさい！」

「……すいません……っ」「」

しかも家族の話を授業中にするモンだから、細木に説教されたじやねえか。そもそもなんで家族の話になつてるんだよ。最初は確か肩揉みの話をしていた気がするぞ。肩揉みの話からいつの間にか家族の話になつていて……結局、誰が最初に肩揉みの話をしたかが重



要だな。

俺の記憶では確か大吾。そう　コイツのせいで俺たちは細木に怒鳴られたのである。

全くいらん話を振るモンだから……結局、その後は静かに授業を受けていたが、クラスメイトの皆さんが俺ら三人を見ながらクスクス笑っていたのは、ここだけの話である。

ああ、それより青空が眩しいなあ……。

そして平和だなあ、こんな一日が長く続けばいいんだけど……。ていうか、ロクにアニメも見れない日常は嫌だから続けてくださいお願いします！

俺はサッパリわからない授業を放置し、青空を眺めながらずっと考え事をしていた。

第179話 / 死闘の一方で（後書き）

後書きトークコーナー！

雪乃「前回と比べたら随分温度差があるわね」

凧紗「私達の日常と、早川の日常には随分差があるんだな」

千早「……先輩、あの……平和だなあは事件フラグですよ……っ？」

圭介「ふ、ふふ……俺はフラグクラッシャーだぜ？ そんなハズあるか！」

大吾「一級フラグ建築士の間違いじゃねえのか？」

重原「俺もそう思う」

## 第180話 初恋

4時間目、この日の体育は体育教師が健康上の理由で欠席のため、みんなでテキストにサッカーをやる事になったのだが、まあ力オスなこと力オスなこと。

「ぐへえ……やる気でない」

「あたしも、今日は動きたくない」

グラウンドに大吾と小坂が寝っ転がっている。どうやらコイツら、身体を動かすことそのものが面倒くさいらしく、さっきから一度も起きあがるうとしないのである。

もちろん、面倒くさがっているのはコイツらだけではなく、殆どのクラスメイトがやる気ありませんと言わんばかりに地面に座り込み、休み時間と違ってしまっほどのポリウムで、日常会話やら恋バナなどを繰り広げていた。

これはひどい、小学校の体育でさえもっとしっかりしていると思っぞぞ？

まあ、そんな文句を言う俺も……ぶっちゃけ面倒くさいから、隣のクラスにいる去年のクラスメイトと馬鹿騒ぎをしているところであるが。

ちなみに体育は2クラス合同で行われ、俺ら4組は3組と合同で体育を行う。

普段は男女で別れているが、この日はもうそんなことなどお構いなし。男子も女子もお互いの国境線を越え、仲のいい異性の友達やら恋人やらが楽しげに騒いでいた。

「皆さんやる気なさすぎなのですっ！」

「ホント、4組って自習になるといつもこんな感じだわ……っ」

「3組もだぞ、私とすみにゃん以外は毎回こんな感じだ」

「無気力な若者が増えてるってまさにこの事だね、ナギちゃん！」

叫ぶ暮葉と生駒、呆気にとられた顔をしている伊吹と明智。

へいへいいいですよーだ、どーせ俺らは無気力な若者ですたい。

でも、俺らのことをまとめてそう呼ぶのは間違っていると思うんだ。武道家の重原は極めて真剣にやっているぞ。

まあ、サッカーじゃなくて瞑想しているんだけどね。流石は武道家、ピクリとも動かないし気配も完全に殺している。そんな重原が何時まで持つか、現在俺は他のクラスの野郎共と賭けをしているところである。絶対負けられないぜ……この勝負、ボール片付けを賭けた聖戦なのだから。

ちなみに、俺は片付けの時間になるまで、重原が動かないことに賭けている。

「……ふう、水でも飲みに行こうかな？」

「なっ!？」

ば、バカな……重原がいきなり瞑想を中止し、水を飲みに行きやがった。そりゃあ重原だって人間なんだから、喉が渴くのは当然の事である。だからって……ちくしょう、重原が片付け前に瞑想を中止したと言う事は、賭けは俺の負けという意味ではないか。

クスクスと、必死に笑いを堪える周りの野郎共。

うっ……堪えるなよ。どうせ俺は敗者だ、笑えばいいじゃないカ!

「だあーっははは残念藤島あつ！俺らの勝利だぜよ！」

「うげえ……」

「広敏は超人じゃないんでえ？そりゃ水だつて飲みたくなるよ！」

「くそーっ！ボールの片づけは俺の仕事かよっ！」

「まっ、そういうわけで頑張ってくれぜよ藤島」

「それじゃあうちら水を飲みに行ってくるから、あとはよろしくな」

結局アイツらも水が飲みたいだけじゃねえかよ。

あゝあ……なんで俺、賭け事弱いんだろつか。脱衣麻雀はそれなりに強いのに、こういう現実の賭け事にはめっぼう弱い俺。ゲームで強くて現実で弱かったら意味ねえよ……こんなことになるんだつたら最初から賭けなきゃよかったよ。

ちなみにアイツら、語尾に「〜ぜよ」とか付けるほうが島原で、広島弁で喋る方が藤咲という名前である。まあ、超どうでもいいことなのだが。

「は〜い、そろそろ時間なので片付け初めてくださ〜い」

突然、俺たちに指示してきたのは、体育教師の代わりである長瀬先生だ。多分30歳前後の長瀬先生の指示をする姿は、まるで小学校の先生ようであった。

要するに、俺たちは小学生レベルかよ……初芝は一応進学校だぜ？流石にこの扱いはひどいだろ……。

そうは思いつつも、一応相手は教師なので口答えが出来なかった俺は、やれやれとため息をつきなが体育館倉庫へと向かう。片付け

るものはボールだけとは言え、やっぱり体育館倉庫まで行ってグラウンドに帰ってくる事そのものが面倒くさい。

片付けを賭けた事をさらに後悔した瞬間であった。

「はぁ……不幸だっ」

そんな事を呟きながらも、俺は体育館倉庫の中に入る。

ボールは確かこの籠かごに入れるんだったか。そうだよな、籠かごの中には大量のサッカーボールが無雑作に入れられていた。

間違えないようにしないと。籠かごは複数並んであり、サッカーボールとバスケットボールとバレーボール、そして野球ボールとで別れている。確認せずに入れると、バスケットボールの籠かごにサッカーボールを入れるという、アホなミスを犯しかねない。

俺はそこまでドジじゃないぜ。なので、慎重に籠かごを見極め、俺は正しい籠かごにボールを投げつけてやった。バイン、と一度だけボールが籠かごの中で跳ねる。

一瞬ボールが籠かごから出てしまうのでは？ と、焦っただけが……大丈夫だったようだ。

ボールは籠かごの中でピタリ、と動きを止めた。

「おお、ナイスシュートだったわっ」

背後から、元気な声が聞こえてきた。

この声は 伊吹か。

首を後ろに向けると、サッカーボールを抱えた伊吹が佇んでいた。なんだぁ……コイツも片付け役だったのか。

「シュートって、手で投げただけだぞ？」

「そりゃサッカーなら反則だけど、バスケだったら今のでチームの

メンバー大喜びよ？」

「そっかあ。つまり、もっ んやひ たが大喜びするんだな！」

俺が叫んだ瞬間、伊吹は次第に呆気にとられた表情を浮かばせて、

「ねえ、あなたの脳内ってアニメ以外には何かないの？」

という、キツい一言を言ってきたのである。

伊吹ちゃん……そりゃ俺には禁句ですよ。確かに日柄一日中妄想してるけどさ、その妄想の内容がアニメ関係ばかりというわけではないんだぞ。

……まあ、それを証明する証拠もないんだけどね。

「へいへい、呆れる伊吹たん萌えー」

「う、うっさいわね！ 萌えって何よ萌えって!?!」

「怒るなよ、褒めるつもりで言ったんだぞ？」

「ほ、ほめ……別に、あなたに褒められたって何とも思わないけど……でも！ もう少しマシな褒め方があるでしょ!?!」

相変わらずアップダウンの激しい子である。ほのかに顔を紅潮させた伊吹は、俺に萌えよりもマシな褒め方を求めてきた。これは面白くなってきた。

そういえば久しぶりだな。こうやって伊吹をいじって遊ぶのも。久々に伊吹をからかってみるとやっぱり面白いな。反応がいちいち可愛くて面白いぜ。

俺は伊吹の反応を楽しもうと、心を躍らせながら伊吹を褒める言

葉を考える。

よし　これなんてどうだろうか？

「伊吹」

「な、なによ……？」

カツ、と俺は真剣な表情を作って　。

「最近綺麗になったよな」

「……っ！？　ん、んなわけあるかあっ！　もうちょっと上手く言いなさいよねっ」

「いや、お世辞じゃねえぞ。最近のお前、ホントに女の子な気がするよ」

「……っ」

そう言っただげると、伊吹はほんのり頬を紅潮させ、ぼんやりとしていた。

これはやっぱり　確信したぞ。

伊吹、お前ってヤツは……　本当に仕方がないな　。

「伊吹、お前　好きな人でも出来たのか？」

「っ！？　い、いない！　そんなのいないわよ！」

ああ……この慌てて否定する姿。ギャルゲーのヒロインと同じである。どうやら伊吹にも好きな人が出来たらしい。あれ、でも伊吹



の初恋は今も続いているって、誰だったかなあ。誰かが言っていたような気がするけど……その初恋の人とはどうなったんだろっか？

「まさか……もう付き合ってたのか!？」

「いないって言ってるでしょ！ 話聞きなさいよばか圭介っ！」

「そうか、そういえば初恋の人はどうなったんだ？」

「誰から聞いたのよっ!？」

「そんな反応をするってことは、いたんだな……初恋の人っ」

「ッ!？」

よっしゃいい展開になってきた。エロゲーで身につけた、女子の本音を知る為に話術は現実においても有効のようだ。まさか、伊吹がここまで思い通りの反応をしてくれるとは。

まったく、伊吹は最高だぜ !

「よし、言おうか」

「な、なにをよ……っ?」

「初恋の人だよ」

「い、言わないわよっ!」

言わないわよ……か。

こんなセリフを吐いたのだ。俺が知らない間に伊吹も恋をしてい

た どうやら、それは本当のことであるらしい。しかし気になるなあ、伊吹の初恋の人って誰だろう？

「大丈夫、俺はこれでも口は堅いほうだぞ？」

「うう……否定できないのが辛いわっ」

「さあ、女は度胸！ なんでも試してみるもんさ！」

「それを言うなら男は度胸でしょっ!？」

「まあまあ、恋愛相談なら任せなさい！」

「……ええ、いや……っ」

失恋4回（白藤含む）、今の所好きな人が一人いる俺。確かに、経験豊富かと言えばそれは嘘になるだろうし、しかも未だにチエリボーイである。

「だけど、それでも伊吹よりは恋愛経験があると思うんだ。」

「うん、少しは相談に乗れるハズである。」

「まあ……本当の目的は伊吹の好きな人を知る事なんだけどな。」

「そいつと俺が知り合いかもしれないだろ？ 大丈夫、絶対お前が幸せになるルートを選んでやるから」

「……あ、あんた……よ……?」

「……え？」

「っ！ な、なんでもない！ 今のは取り消しよ取り消し！」

「…………え？ お、おい 伊吹！？」

俺が呆気にとられた声を漏らすと、耳まで顔を真っ赤にした伊吹が、恥ずかしそうに大声を上げた後にそのまま、俺を残して体育館倉庫から立ち去ってしまった。

……………あれ？

## 第181話 価電子の数

6時間目、化学。

わけのわからない計算式が、黒板にズラリと白い文字で書かれている。アレがどういう意味なのかはサツパリわからないが、そんなことはもうどうでもいい。

それより、今日の体育館倉庫でのこと……一体何が起きたのだらうか？

一応おさらいしておこう。確か、ボールを片付けていた俺と伊吹は、体育館倉庫で2人つきりというエロゲ的なシチュエーションの中で、初恋がどうのこうのという話をしていた……と思う。

それで、やっぱり伊吹には初恋の人がいたらしい。それが既に過去のものか、あるいは今も続いているものかはわからないが……で、しつこく迫った結果 遂に伊吹は初恋の人を教えてくれたが……。

『……………あ、あなた……………よ……………？』

……………あなた？

それはおいしい食べ物なのか？ それとも新しいギャグなのか？ だけど確かに俺は聞いたんだ。伊吹が口から漏らした“あなた”という言葉。

常識的に考えてみよう。あなたと言うのはあなたが変形したもので、江戸時代には既に使われていた言葉らしい。その意味は人が人を呼ぶ二人称代名詞であり、昔の人はもちろん、今でも関西系の子やツンデレ系の子 いや、普通の人でも使う言葉である。

つまりだな……………あの場に居たのは俺と伊吹だけ。あんたって言ったのは伊吹で、おそらくそのあんたって人は俺で……………ん？

それじゃあ、アイツの初恋の人って ？

「では藤島、Liの価電子数はいくつだ？」

「え、は、はは、はいっ？」

化学の西村めえ……なんてタイミングで当てやがるんだ。俺は今、超真剣に幼馴染との事で悩んでいたのに。大体、Liってなんだよ。ISというブヒれるヤツなら知ってるけど。

うーん……わからん。そもそもLiって何の略なんだ？ Liって【リ】って読むと思うからリウマチかりボルバーかな。よくわからんが……多分その辺の事を言ってるんだろ。

価電子数の意味はわかる。要は電子殻の周りをまわっている電子だろ。

Liの価電子数かあ……うーん、もういいや、好きな数字を並べちまえ！

「Li、Li……多分、にせんはっぴやくにじゅうはち？」

「何をいついてるかね藤島？ そもそもLiが何か分かっているかね？」

「え……多分、リトルバ ターズエクスタシー？」

あれ、なんでみんな笑ってるの？

暮葉まで笑ってるし、西村先生完全に呆れてやがるし……どういうことなの？

あれ、もしかして俺……滅茶苦茶変なこと言った？

「はあ……いいか藤島、Liはリチウム。ちなみに価電子の数は1だ」

「なん……だと……ッ!?」

知らなかったでござる !

まさか、Liがリチウムって意味だったとは……全く、これだから化学は嫌いだ。

はないの理科ちゃんなら好きだけどな。でも、化学は難しいから嫌いだ。俺の知ってる科学は全部アニメとかゲームとか、あとラノベ経由の知識限定だぜ。

どうだ参ったか……ふ、ごめんなさい。頭が悪くて申し訳ございません……ッ!

「では木下、Naの価電子数は?」

お、西村のヤツ暮葉に当てやがった。フッフ……だが残念、暮葉は俺の味方だ。暮葉は魔法に関する知識は豊富だが、流石に化学の話には疎いだろう。

某学園都市が舞台ならノベじゃあ、魔法を使う連中は化学に疎かつたしな。きつとリアル魔法使いの暮葉も化学には疎いハズで。

「1なのです!」

「その通りです」

ンな 馬鹿な、暮葉が正解しただと?

そういえば……暮葉のヤツ、チラツと中間テストの結果を見ただと、異世界人だから歴史系はやっぱり半分以下だったものの、理数系の点数は高かった気がするな。

くそつ、暮葉は理系 いや、文系教科がダメなのはここが異世界だからだ。魔法とか向こうの世界の歴史には詳しいみたいだし、

もしかして 暮葉はあらゆるジャンルに詳しいのでは？

「負けた……身体能力でも勝てなければ頭の良さでも負けたよ……ッ！」

「圭介、やっぱり悔しいかい？」

「うっせ黙れ重原っ！ 別に悔しくなんかないやい！」

「仕方ないんじゃない？ 木下の化学の点数は今まで一番だった国宗の上を行くらしいぞ」

「うげ……マジな話なのか、大吾？」

「歩くCIAの僕をナメるなよっ！？」

前は歩く情報本部って言ってなかったっけ？

大吾もアレだよなあ、コロコロと渾名が変わる男だぜ。

しかも今度はCIAかよ、まさか大吾のヤツ……金髪の鼻が高い白人の友達（CAIのスパイ）がいるんじゃないかねえのか？

うん、大吾の情報収集能力は異常だし、居ても不思議じゃねえぞ……。

なんて便利で怖い友達なんだ、長宗我部大吾……。

「あっははは、野郎共は相変わらずだねえ」

「……た、ただのバカよ。特にばか圭介が……っ」

「そうですね……確かにけーすけ様はおバカなのです！」

おいコラ女子共、聞こえていないつもりかもしれないが……聞こ

えてるぞ？

特に暮葉のはよおしく聞こえましたよ。だって一際声が大きいんだもん。伊吹の声も周りが静かだから俺にも聞こえたし。ちくしよ……2人そろって俺の事を馬鹿にしやがってっ。

……けど、暮葉と伊吹。

地味に馬鹿にされたって、何故か2人を悪くは言えないな。暮葉は……まあ、楽しくて可愛くて一緒にいたいと思えて。結局、俺は暮葉の事をそういう風に思っている。

そして伊吹は 気になるなあ。

やっぱり、アイツの言う“あんた”って俺なんだろうか。

アイツの初恋の人は 俺なんだろうか？

アイツの初恋はもう終わったのか、それとも まだ続いているんだろうか？

……俺はその後西村の話など聞かず、ずっとその事を考えていた。

それから数十分後、6時間目の授業は終了し いよいよ待望の放課後である。

今日は暮葉と葵でも連れて、白藤に会いに行こうと思っていたが……まず、俺は暮葉を誘おうと思ったんだが、何やら暮葉は忙しそうに誰かと電話をしていた。妙に真剣だな……まさかアルファ隊の人と電話してるのか？

「了解なのです、お任せくださいっ！」

小首を傾げながら、満面の笑みを浮かべる暮葉 言葉を切ると、一緒に電話も切ってポケットの中に携帯電話をしまう。通話を終えた事を確認し、俺は暮葉に近づいてゆく。



「暮葉、もしかして今のつてアルファ隊か？」

「もきゅ？ はい……その、また魔法使いが侵入してきたそうなのですっ」

「またかよ、最近多いなあ」

「もきゅう……きつと連中がけーすけ様の居場所を掴んだからなのです」

やっぱりそれが原因か。今でこそ違うが当時は白藤がそうだったし、重原に取り憑いていたあの魔法使いもそうだけど、身近な所にスパイが居たのはやっぱり痛かったなあ。

そのせいで俺の居場所が連中にはばれてしまい、近頃 特に風剣のシルフが襲撃してきた前後あたりから、古宇坂に侵入してくる魔法使いの数が一気に増えた気がする。

魔法使いが増えると、それを倒すためにアルファ隊が出動する。つまり、魔法使いが攻めてくると暮葉も忙しくなるわけだ。

「そっかあ……なあ、俺も一緒に行ったほうがいいか？」

「今回は大丈夫そうなのです。新設された部隊も作戦行動を開始したらしいですし、それに侵入してきた魔法使いは一人だけなのです」

「けど、シルフみたいに強い魔法使いだったら」

「平気なのです、今回侵入してきたのはただの魔法使い 赤の軍神は現在国内にはいないらしいのです！」

だったら、大丈夫そうだな。

それに毎回俺が戦いに行つて、暮葉を心配させているみたいだし……元々暮葉は俺を守る為に派遣されてきたんだ。少しは暮葉を頼つてあげなきゃ、暮葉本人にも失礼だろう。

「わかった、晩御飯までには帰つてくるんだぞ」

「はい！ けーすけ様も、最近この辺の不良の一部がサヴィエトと関わりを持って、けーすけ様を狙っているらしいので気を付けてくださいな！」

「すらつと恐ろしい事言うなお前……不良つて……っ」

それじゃわしおあつすけ驚尾有資の時と同じじゃないか。

不良がサヴィエトと関係を持つねえ………なんでだろう。もちろん、お金目当てつてもあるのかもしれないけど、一番の理由は やつぱり騙しやすいのだろうか？

まあ、そんな事はどうでもいい。それより 俺は暮葉のほうが心配だな。

「それでは、ぱぱつと片付けて捕まえてくるのですっ」

「おう、無理するなよ！」

俺の叫び声に見送られるように、暮葉は全速力で廊下を走つてゆく。廊下は走つちゃダメつて風紀委員が説教しそうだけど、あの暮葉に追いつける風紀委員はいないだろうなあ。

追いつけそうなのヤツは一人いるけど……。

そついえば明智つてバイト始めたような気がするけど、結局なんでなんだろう？

明智が言うあの日って一体……？

まあ、考えた所で俺にはわからねえよ……だけど、あの時の表情からして、多分男関係の何かだとは思うんだ。明智に彼氏……うん、どうなんだろう？

居そうと言えば居そうんだけど、逆にいなさそうないメージもあるし。結局、明智に彼氏がいるのかわからない。そもそもあの日と言つのが男関係なのかさえ怪しい。

……まっ、やっぱ考えてもわからん事だ。

それより今日は暮葉はいないし、伊吹も部活のようで、しかも若干気まずい……。

小坂や野郎共は既に帰宅、明智は多分バイト。生駒は絶対に嫌だ。よし、葵を呼びに行くついで。折角だから青山さんやあかりに会いに行こうかな？

それに決着もついたんだ　そろそろあかりに返事をしねえとな。

第181話 価値電子の数（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回はこのコーナーがなくて申し訳ございません！」

伊吹「こんな駄コーナー、読んでくれる人がいるかも怪しいけどね」

圭介「コラ伊吹！ そういうことは言わないの！」

伊吹「なんでよ？ 事実かもしれないわよ？」

圭介「そうかもしれないけど、楽しみにしている人だっているかもしれないんだぞ？」

伊吹「そんなのいないわよっ」

圭介「いるって、多分いるよ」

伊吹「そんなのいるわけないわよっ」

圭介「いや、いる！ 1人はいるハズだ！」

凧紗「藤島……すごい低次元な争いだぞっ」

## 第182話 スケベしようや

「お兄ちゃん……スケベしようや」

「……………」

ここは初芝高校。当然だ、これから学校に帰ろうと思っていたのだから。

問題は 何故俺が音楽室に閉じ込められているのだろうか。  
そして、何故 湯子俺は妹にマウントポジションを取られ、しかも性的な意味で言葉攻めされているのだろうか。そして何故 葵は兄貴相手に発情しているのだろうか？

「……………どうしてこうなったっ!？」

葵に主導権を握られた俺は、最後の抵抗として大きな声で叫びみた。が、考えてみれば音楽室って防音壁なんだよね。俺の悲痛の叫び声は葵と、壁に飾られた有名な音楽家の皆さん（写真）の人達にしか聞こえてないんだよね。

どうしよう、俺はこれからどうなってしまふのだろうか……？

事の始まりはつい数十分前。俺は葵を迎えに行くために、1年の教室が並ぶ場所をうろついていたのだが、その途中で俺は青山さんとあかりとバツタリ出会う。

「……………っ! せ、せんぱい……………っ!」

「おつす圭介っ！」

「よっ、お前らは相変わらず元気そうだな」

軽く挨拶を交わした俺たち。それでも8月17日以来の久々の再会。あの事件以降色々忙しかった俺は、学校も欠席して……と言っより家にすら居なかったのだ。

メールはともかく、電話をしている時間もなかった。その為、この2人と話するのはあの日以来今日が初めてなのだ。

でもよかったあ。心配していたんだけど……2人はとっても元気そうさ。

「先輩も……ご無事でよかったです……っ」

「心配したんだからな！ 全く……電話の一本はよこせよなっ」

「ああ……ごめん、ここ数日色々忙しかったんだよ」

「あはは……大体事情は葵から聞いてますよ……？」

「ニュースでもやってたしな！ 圭介はもう完全にヒーローだな！」

「ヒーローって、マスコミも随分大げさに扱うモンだなあ」

俺はただ、守りたいものがあつたから風剣のシルフと戦っただけだ。別に世界を救ったり世界から戦争を消してみせたりと、これと言っ誇れるような事は何もしていないのに。

まあいいか……ヒーロー扱いされるのも、決して悪い感じじゃないからな。ぶつちやけ誰がヒーローでも構わないんだけど、今だけはそう呼ばれておこっ。

……実はお店行ったら値引きしてくれて、結構助かってるんだよな。

「いえいえ、先輩はヒーローですよ……わたしの王子様ですっ」

「千早、その発言は痛すぎるだろっ！」

「あ、あかりだってその……流石はあたいの旦那様っ！ って言うてたじゃん……っ？」

「んみや！？ そ、そんな事言った覚えなんてないんだからなっ！」

青山さんのあかりの真似が地味に上手かった。声こそ全然違ったけど、やんちゃな感じとか結構あかりにそっくりだったぜ。

「つかあかり、お前は俺の事を旦那様だと思っていたのか。旦那様……クソ、どういうわけがくぎゅボイスで脳内再生される。これもきつと、釘 病のせいなんだろう。」

あかりの声はくぎゅとは全然違うのになあ……俺も末期患者なんだな。

……ん？ そっいえば あかりの次に元気なヤツの姿が見えないな。

「あれ、葵はどこ行ったんだ？」

「えと……葵、ですか……？」

「おう。ちょっと帰りに知り合いの所に寄ってこっと思っただけ、葵も一緒に連れていこうかなって思っただけ……どこ行ったんだアイツ？」

「葵なら確か、模試がなんだかって言ってたよな？」

「うん……多分職員室だと思います……っ」

模試ですかあ……流石は俺の妹、頭の出来は兄貴の1000倍はいいですな。俺なんて就職か進学かすら決まってるのに、模試を受けるって事は葵は進学するんだな。進学かあ……確かに葵はまだ1年生ながら、学校でも三本指に入る学力を持つ天才少女だ。その上運動神経も抜群……兄貴の俺とは出来の違う優秀な子なのだ。

ぶつちやけ俺もテスト勉強をするとき、友達よりも葵を頼っている。だって葵は高3レベルの問題をスラスラ解けるヤツなんだもん。多分、葵から見たら高2の問題なんて、算数における九九より簡単なんだろうぜ。

ちくしょう羨ましい……なんでだ？俺って血のつながった葵の兄だよな。じゃあなんで葵は頭が良くて、俺は観察処分者並のおバカなんだろうか？

……まあ、考えたって仕方がねえし……とりあえず葵は職員室にいるんだよな。

「職員室かあ……わかった、ありがとうな！」

「いえいえ、あの……先輩」

「ん？」

「明日は」

「明日は部活来いよなっ！」



部活かぁ……そういえば合宿以来、写真部の活動で揃った事はないよな。結局8月17日以降も部活の集まりなんてモンもなかったし、写真部か……久々だな。

浅間部長は相変わらず変態やってるんだろうか？

「おう、ちゃんと暮葉も連れてくるからな。それじゃまた明日なっ」

「明日！ 絶対来いよなっ！」

「……………あかりに……………セリフ奪われた……………っ」

青山さん、大丈夫だよ。少なくとも一時期はあかりより目立っていたよ。それにあかりって名前が名前だけにそのうち 空気になっちゃうかもしれないぜ？

……………げふんげふん、アツカリくんは不憫な子。

さて、葵の居場所も聞いた事だし さっさと職員室に行くところですか。

「……………」

職員室。

俺にとっては、最も縁のない学校の一室であろう。なんせ、俺というおバカな男には教師と言う存在が恐怖にしか思えないからな。職員室には教師が沢山いるんだぜ？ 宿題やらテストやら説教やらと負の雨を散々降らしまくる、あの恐ろしき教師が大量に 。

ああ、考えてだけで嫌な汗が噴き出てきやがったぜ。

教師……………なんて恐ろしい存在なんだ。

つか、一応職員室の中はドアの窓から確認できるんだけど、葵の

ヤツいないな……もう模試に関する用を終えて、あかり達の所に戻  
つちまつたんだらうか？

「それなら俺も、あかり達の所に行ったほうがいいのか？」

よくわかんねえけど……職員室にいないんだし、アイツのことだ。  
友達を放置して一人で帰宅するってことはないだろう。多分、用事  
が終わったら友達の前に戻るはずである。

よし、じゃあ早速あかり達の所に戻って、

「う、あ！」

突然、俺は右手を誰かに握られ。強く引っ張られ、無理やり走ら  
された。

それは、あまりにも突然かつ一瞬の出来事である。何者かの不意  
打ちに、俺は何故こんな事が起こっているのか、誰の仕業なのかさ  
え分からぬまま、引っ張られ続けていた。

ちくしょう誰だ。せめて犯人ぐらいは特定しないと……って、オ  
イ。

「にやははは！ お兄ちゃんゲットだぜ！」

「俺はポ、モンじゃねえ！ つか葵、なんのつもりなんですか！？」

「お兄ちゃん、今から葵と一緒に音楽室に行こう？」

「なんでだよ！？」

「葵は音楽室に用があるんだよ？」

「だからって、俺が付き合わなきゃいけない理由がわからねえ！」

なんで俺は妹に強制連行されているんだろうか。

どうして行き先が音楽室なんだろうか。

この時はまだ あんな展開になるだなんて思いもしなかったんだ。きっと、音楽室に笛やら教科書を忘れたから、一緒に取りにいかうって健全な話だと思っていたんだ。

だけど 現実はその、甘いモンじゃなかったんだよ……。

「お兄ちゃん……スケベしようや」

「……………」

「……………どうしてこうなったっ!？」

こうして、現在に至るといわけだ……。

葵が俺を音楽室へ連れ込んだのは、俺と学校であんなことをする為だったのだ。確かに音楽室は一階だが、楽器と言う死角も多い。その上ここは防音壁なので、その窓さえ開けなければ音が外に漏れる事はないのである。

なるほど……人を監禁するのにもってこいな場所ってわけだ。

だけどなあ……おかしいだろ。なんでエッチなイベントが発生してんだよ、俺は葵に対してそんなフラグを立てた覚えは皆無だぞ。

そもそも立てる気すら起きなかったのに……何故？

「えへへ……秋葉原で出来なかった分、今しちゃうね？」

「待て葵早まるな。俺とお前は兄妹だぞ？」

「愛に兄も妹も関係ないと思うよ！」

いや、それでも現実の近親相姦はダメだと思うんだ。近親相姦なんてエロゲーだけで十分足りてるんだよ、ヨスガでやってればいいんだよ。

現実の普通の兄貴はそんな事、望まないんだぜ？

しかも愛ってねえ……俺は別に葵の事は愛してないぞ。家族としてって意味なら、もしかすると当てはまるかもしれないけどさ……。

「葵、今ならまだ間に合う。とりあえず服を脱ぐのをやめい！」

「大丈夫だよ？ お兄ちゃん裸ワイシャツ好きだもんね。ちゃんとブラを取ったらまた着るよ？」

いやいや、そういう問題じゃねえから……。

葵はマウントを取りながら、どういうわけか制服の上を脱いでいたのだ。ブラウスを脱いだ事により露わになった葵の肌。運動神経が特異なだけに引き締まっているが、筋肉質と言っよりは柔らかいような感じである。きつと触れたらぶにぶにと、うぐ……妄想やめい俺。

相手は妹だぞ。だから ハイパー兵器が反応したらおかしいはずなんだ。

「っ……お兄ちゃん、びくびくしてる……」

「だからやめんかい！ 俺の理性が少しでもあるうちにやめてくださいお願いしますー！」

やっぱり俺は男なんです……ええ、つまり言うただな。いくら相手が妹でも限界を超えたら野獣と化するわけなんだよ。だから理性があるうちにやめてくれ。

近親相姦というタブーを超えないうちに 勘弁してくれえっ！  
……と、心の中で叫んでいた。

「 ツ！？ 」

その時、突如響いた砕ける音に 俺と葵は思わず窓側へ首を向ける。

窓からはどういいうわけか 武器を持った数人の男達が侵入してきやがった……。

第182話 スケベしようや(後書き)

・後書きトークコーナー！

圭介「また懲りずにエロシーンかよ!？」

伊吹「ばか圭介……最っ低」

凧紗「近親相姦とは……いくら藤島が変態でも許せるレベルじゃないぞ……っ」

圭介「おいコラ、どう考えても被害者は俺だろ！」

黒木「知ってるか。男が強姦されても、女は男が女にした時ほどの重罪にはならないらしいぞ?。」

赤佐「ひどい世の中や!。」

### 第183話 藤島はどっちだ？

俺が葵に襲われかけていたその時、謎の武装集団が音楽室の窓を突き破り、銀行強盗のように堂々と校内に侵入してきやがった。男達はどこからどう見てもヤンキーと言っ風貌で、全員木刀や金属バットなどの武器を持っている。さらに、数人で俺と葵を囲みやがった。

武装している上に包囲され……迂闊に動くのは危険だな。いくらヤンキーとは言っても数が揃えばそれなりに強敵だ。しかも武器持ってるからな……俺はともかく、木刀や金属バットの一撃に葵が耐えられるとは思えない。葵の為にも 慎重に対応しなければ。

1、2、3、4、5、6……クソ、武器持ってるヤツが6人もいるぞ。

だけどなんだ？ この6人……優位に立っているのに落ちつきがねえな。全員これから初舞台ですという俳優並にそわそわしている。どうということなんだ……？

「お、おい……どっちが藤島だと思っ？」

「知らねえよ！ クソ、俺らは名字しか知らねえ……藤島が男か女かわからねえよ！」

ちょっと待て、コイツら俺らの名字を知っているのか？

まさか……暮葉が言っていた サヴィエトと関わっている不良なのか？

ハッ、残念だったな……コイツら、どっちが狙っている藤島か知らねえらしい。

サヴィエトも馬鹿だぜ。ちゃんと標的ターゲットを教ええないからこうなるんだ。

「てめえら何者だよ、何しに来たんだよ！」

「ど、どうするよ……？ てか、この2人が藤島って名字かすら怪しいぞ」

「けど、手ぶらで帰ったら浜島の命が危ないだろ？」

「クソツ！ こうなったら男を潰して女を狩るぞ！」

コイツらがどういう経緯で襲撃してきたかは知らねえが、その叫び声で確信した。

今、狙われているのは葵だ。ヤツらは葵を標的と勘違いしているようだ。確かに葵は俺の血のつながった妹だから、アレクサンドルの子孫という意味では正しいけど……でも、連中が狙っているのは葵じゃなくて俺だ。だからこの場は勘違い 勘違いで葵は狙われている。

「うあああああああああああああああああああああつ！」

その時、4人の不良が一齐に飛びかかってきた。

ちくしょう、いきなり4人かよ。同時に相手するのはかなり面倒だ。かといって音楽室にある楽器を武器にするわけにもいかない。

助けを呼びたい所だけど……。

防音された音楽室で叫んだところで、誰も助けに来ないだろう。だったら仕方ない、葵を傷つけるわけにはいかない 俺一人で頑張るしかねえみたいだな。

「ち、くしょおおおおおおおおお！」



半ばヤケクソになりながら、俺は武器を持つ4人の暴漢の懐へ飛び込む。どうせ俺の体質的に殴られたって大したダメージにはならない。それを知っての上の突撃は　まさに恐れを知らぬ屈強な戦士のような……気がした。

「おらあアッ！」

不良の一人がバットを振り下ろし、ガコン！　と言う衝撃が俺の肩を襲う。激しい勢いで金属の塊を叩き込まれ、激痛のせいで俺はガクン、と動きを止めてしまう。

けど　俺は倒れない。

慣れてるんだよ……殴られることにはな。一瞬脱力した俺の身体に、身体の奥底から湧いてくるような明確な力が籠る。

そして、

「が、ア……ッ！」

勢いよく身体を起こし、右腕を大きく振り上げる。俺は凄まじい勢いで握った拳を不良の下顎へと叩き込んだのだ。ゴンッ！　と、骨と骨が衝突しあう音が炸裂すると、振るった拳の餌食となった不良は文字通り　殴り飛ばされたのであった。

「て、テメエ！」

「こらああアアああアッ！」

一人を殴り飛ばせば、仲間の不良がキレて殴りかかってくる。不良との戦いつてのは必ずこういう展開になるから嫌なモンだ。とにかく、コイツらは一人で戦おうとしないのだ。タイマンを張る骨のある不良など　21世紀の世の中には殆ど存在しないだろう。

群れれば強い。そう信じている不良は 必ず集団で行動する。  
過去の経験上、不良との戦いの大半は1対多であった。全く……  
魔法使いや超能力者はさらに厄介な存在だけども、ヤンキーさん達  
も面倒くさい相手だ！

「きやつ！？ お、お兄ちゃんっ！」

「ッ！？ 葵！」

しまった 4人ばかり相手にしていたせいで、残りの2人を  
忘れていた。不良に両腕を掴まれた葵は、そのまま2人組に連れ去  
られてしまった。ヤツらは自分で割った窓から、飛び出すように校  
舎から逃げていったのである。

「おっしや！ ターゲット 標的確保！」

「ぐっ！ クソ……初芝はお坊ちゃん校じゃねえのかよ!？」

「なんで初芝のお坊ちゃんが、こんな喧嘩慣れしてやがるんだよク  
ソが！」

確かに俺は初芝のお坊ちゃんかもしれない。でも……だからって、  
初芝の生徒が全員優秀なわけではない。俺は初芝の生徒でも出  
来の悪い ストリートファイター 路地裏喧嘩高校生なんだよ。

だからって、コイツらみたいにグレてるわけじゃないが……まあ  
悪い子だよな。

とにかく、普通の人間と一緒にしてもらっちゃ困るんだよ。ただ  
荒事に慣れているだけじゃなくて 特異体質の持ち主でもあるん  
だからな。

「馬鹿野郎！ そんなのに構ってんじゃねえ　ずらかるぞテメエら！」

「ま、待ってくれ！」

一人の呼びかけによつて、不良達は喧嘩をやめて一斉に逃走を開始する。葵を連れ去ったあの2人組のように、俺と戦っていた4人が勢いよく、窓から校舎の外へと飛び出していく。

「　　ッ！　　待て、てめえら！」

アイツらを逃がすわけにはいかない　俺も後を追おうと窓から飛び出すが、

「うるせえ、テメエは寝てやがれッ！」

「　　ア、が……ッ!？」

刹那、不良の一人が着ている服の裏側から、スプレー缶のようなものを取り出す。

スプレー缶からシューっと、白い何かが噴射された。それを顔に浴びた瞬間、目と鼻や口の中にまで焼けるような激しい痛みを感じ、石にでも躓き転んでしまった。

転んだ時にも痛みは感じたか、今は顔中の痛みのほうが深刻である。さらに涙や鼻水が富まなくなってきた、しかもゲホゴホと咳も激しくなってきた。

ちくしょう……アイツら　　催涙スプレー使いやがったな。

「あ、おい……っ」

やべえ……直接殴られたダメージは大したことはないが、催涙スプレーは効いた。

本当なら今すぐにでもヤツらを追って、葵を助け出したいのに……俺は、催涙スプレーのせいで動くことができず、ただ、潰された目で前を見ようと必死になっていた。

「……ん？ あら、藤島君？」

視界が潰され、苦しんでいるその時 不意に誰かに声を掛けられた。

この声、女の子……だよな。それもどこかで聞き覚えのある声と口調だ。優しそうだけど意地悪そうでもあるこの感じ……もしかして。

「あ、く……さ、さいおん……じ？」

「そうよ、それよりどうしたの？ 随分苦しそうだけど大丈夫？」

まさか、このタイミングで第三者に見つかってしまつとは……ちくしょう、これで西園寺に余計な心配をかける結果になつちまつたじゃねえか。

だけど、この状況で誤魔化せるとは思えないし……だから、せめて今の症状とここで何があったかくらいは説明したかった。しかし、思いの外催涙スプレーの威力は強力で、結局俺はその後も数十分ほど身悶えしていた……。

西園寺が俺を発見してから数十分後、ようやく催涙スプレーの効果も薄れ、若干ヒリヒリするような気はするものの、視界も回復し

満足に動けるようにはなつた。それで、予想通り俺が倒れている現場を目撃した西園寺は、あの場所で何があったのか、事情を聞きだそうとしてくる。

どのみち、誤魔化せるような話ではないだろう。それに、ここで西園寺を巻きこみたくないとか言つて誤魔化したとしても、今回のこの騒動……一人で解決できるかは微妙だ。

不良との戦闘はともかく 肝心の葵を拉致つた不良達の居場所がわからないのだ。

西園寺が知っているとは思えないが、それでも話しておくべきだろうと思ひ、俺はここであつた出来事を西園寺に説明した。ただし、葵に強姦されかけた事は言わなかつたけどな。

「ねえ藤島君、その人達に特徴とかなかつたかしら？」

「特徴かあ」

そう言われて、俺は葵を連れ去つた連中の特徴を思い出す。特徴つて言われても、普通に私服姿のただのヤンキーにしか見えなかつたけど……。

それこそ白陵にいる連中とは違う、今時の不良の姿である。だから、どいつもこいつも派手で特徴なんてモンは……あ。

「そついえば、アイツらみんなクソ暑いつてのに、ライダージャケットを着ていたな」

黒い革製のライダージャケット。よくあるデザインだったけど……不思議なことにアイツらの上半身は全員、同じ柄のライダージャケットなのであつた。

「……やっぱり、そいつらはK・M・Pだわ」

「け、K・M・P？」

なんだそれ……白陵じゃねえのか。

西園寺の口から放たれたソイツらの名は、聞いた事のないチーム名であった。

第184話 / K・M・P

初仕事の後……いや、性格にはまだ初仕事の途中だ。オレ 早川悠は、その初仕事の後始末をアナスタシアと2人で行っていた。死体の処理、血液の採取、証拠の隠滅……チツ、人員が少なエからって、何もオレ達がこんな仕事をする事はねエだろうに。やれやれ、ザスローンってのは人使いの荒い組織だ。能力を使わねエで仕事ってのも結構しんどい……クソツタレ。

「おゝいもやしの兄ちゃん。無理しねーでアタシに任せときなさいよお」

「チツ、早々に永淵にのされたヤツが偉そうにしてんじゃねエよ」

「っ！ あ、アレは油断しただけよ！ あんのクソ野郎オ……まさか魔法衣服マジッククロース着てるとは思わなかった」

「ふん……死ぬまで言ってる」

さて、んじゃあ帰るとするか。確かオレや死体を回収する車が、ラウルのクソ野郎によるともうそろそろ来るらしいが……付き合ってられねエ。

それに、あの野郎も言っていたハズだ。この変換機は魔力を注入しねエと、全く使い物にならねエただのガラクタである。アルファ隊でもヴィンペル隊でもない、そういった正式な特殊部隊とは全くの別物である、この闇の組織にいる以上 知人との接触は好ましくない。

上からも説明を受けているし、そんな事はわかっているが……。オレの場合、魔力補充という意味でなら、クソガキとの接触も可

能である。

頻繁には会いに行けねエだろうが……まっ、会えるだけまだマシってモンだ。

「あら？ アンタどっか行くわけえ？」

「収集車にはオマエ一人で伸び伸び乗ってるオ、オレは勝手に帰る」

「もやしの兄ちゃん、アンタ用事でもあんのかあ？」

「魔力補充だ。能力使った分の魔力を補充してくる」

「そっかあ。まっ、何にしてもアンタはガスローンで一番の実力者なんだから、さっさと変換機ソケットを満タンにして帰ってきなよ」

「クソ野郎に殺さなきゃなア……」

言いながらアナスタシアに背を向け、廃工場を後にする。さアて、こんなふざけた臭いのする場所から出て、さっさとクソガキの所にも行くとするか。

8月17日……あの日以来、オレはミネット達に会っていねエ。

その日から今まで、能力を使う機会がなかったからである。今では魔力補充以外の目的でのクソガキ達との接触は、上からの命令で認められないことになっている。

それにこの仕事を続けていく以上、いずれは死ぬかもしれないねエしなア……案外今回会いに行くのが最後だったりするかもな。

さて、行くか……確かアイツのマンションはこっちだったハズだ。



それから数時間、既に時刻は4時近く。マンションに行ってみれば……誰もいねエ。

クソツタレ、あのクソガキ共は一体どこに消えたんだ。

まさか……いや、襲撃された痕跡はねエ。そもそも、そんな事があつたんだつたら真つ先に上から連絡が来るはずだ。すると、あのクソガキ共……外出中つてことか。チツ、人が折角生存報告しに来てやったつてのに、どこに消えやがったんだ……？

「……………」

携帯電話をポケットから取り出す。

ミネット・ローラン。

あのクソガキの名前だ。ここにいない上に居場所もわからねエ……なら、あのガキに直接電話をするのが一番いい方法だろう。

そんなわけで、アドレス帳に登録されているミネットの通話ボタンを押す。

電話に耳を当てると、コール音も無しにいきなり繋がった。

ミネットのヤツ……電話に出るのがこんなに早かったか？

『早川悠、何か用件ですか？』

違う……コイツはミネットじゃねエ、そもそもこれは男の声だ。

口調も敬語なんてモンを知らなエミネットが使うようなモンじゃねエ。

かといって、リーネのものとも、同じザスローンにいる誰のものとも違う。

オレは　コイツのことを知っている。

クソツタレ、割り込まれたか……。

「悪趣味な野郎だ。ふざけやがって、どういっつもりだ？」

『貴方はそちらの世界ではもちろん、こちらの世界でも非公式な部隊の一員なのです。その存在は一般人にも軍にも、そしてアルファ隊やヴェインペル隊にも存在を知られてはいけない影の存在なのですよ。にも拘らず 貴方はアルファ隊の隊員に電話をしようとしたね?』

「だから割り込んだってワケか……嫌なヤツだ」

相手のヤツの声、間違いなエ オレを闇の世界に勧誘した顔も知らねエアイツだ。

『何か御不満でもありますか?』

「チツ、一つだけ言わせる。オレがこれから電話をしようとした相手は、変換機に必要な魔力の唯一の供給源なんだ。ソイツの居場所を確認すンのもNGか?」

『残念ですが、その用事の場合でも接触は最低限にしていたきたいものです』

「そオカよ……じゃあいいや、もうオマエと話す事は何もねエ」

『そうですね、残念です。残業をちょっと頼みたかったのですけどね』

「残業だとオ?」

『ラウル・ゲリエ、及び近藤政信が早朝襲撃した K・M・Pに関する件です』

「あ？」

アイツらもオレらが仕事の中に、別な仕事をしていたってのか。ンで、そのふざけた名前のチームっぽい何かは一体何なんだろうか。

どう考えてもサヴィエトのものとは思えねエし、学園のもでもねエ。あまりにもネーミングセンスがなさすぎるだろ……まアいい。

「K・M・Pって何だ？ まさか、永淵と似たようなモンじゃねエだろうな？」

『ご察しの通りです。K・M・Pとは“古宇坂・ミッドナイト・パワー”の略。古宇坂市を中心に活動するヤンキー達のチームです』

不良共のチームねえ……やっぱり永淵と似たようなクソ野郎か。しかも、永淵は一応学生だったらしいけど、チームのメンバーはわからねエな。

若いつてだけで、実際は無職だったりするからなア……。

『彼らは先程初芝高校を襲撃、藤島葵様の身柄を拘束しました』

「襲撃だと？ ンで、その藤島葵ってのは誰だ？」

『我々の護衛対象の妹さんですよ。彼女は確かにあの一族の人間ですが、血は兄ほど濃くはないですし、ただの一般人なので、連中のリストには登録されていないハズなのですけどね』

つまり、名前も知らねエアレクサンドルの子孫の妹ってわけか。

その妹の名字が藤島ってことは子孫の名字も藤島か？

藤島ねエ……聞いた事ねエな、結局ソイツは何者なんだ？

「まアどつちにしても、コイツはアレだな……。」

「ふん、襲撃されたのはオマエらがだらしねエからじゃねエのか？」

『一応その兄妹は、アルファ隊の特隊員が住み込みで護衛しているハズですが、彼女は現在別件でその兄妹を守るべく、サヴィエトの魔法使いと交戦中です』

「ソイツらを守ろうとした結果、ソイツらと離れて襲撃されたってか……笑えねエ話だ」

『アルファ隊もヴィンペル隊も、その他の特殊部隊も全力を挙げているのだがね。どうも最近はサヴィエトの活動が活発です。対佐井学園戦に備える必要もあります。我々の国はまだサヴィエト政権時代の痛手を引きずったままです。予算も人員も足りません、一切の余裕はないのですよ』

「……で、オレにどうしろってんだ？」

『藤島葵様の救出をお願いしたいのですが』

「救出ねエ……もうバラされてんじゃねエのか？」

K・M・Pがどれほどの腕前かは知らねえが、藤島葵ってのは一般人らしい。一般人が力のあるヤツに抵抗するのは難しいだろう。一般人の女の力じゃあ……もう殺されてるかもなア。

しかし、電話の男の回答は 意外なモンであった。

『ご心配なく、彼らの目的はあくまで拘束し、サヴィエトに身柄を引き渡すことです。それに我々が派遣した諜報員によりますと、現

在藤島葵様は隙を見て逃走を図っているとのことです』

「なら、諜報員に救出させればいいだろ」

『残念ながら、派遣した諜報員が持っているのは拳銃一丁です。数で勝るK・M・Pには数人殺したとしても、おそらく勝てないでしょうね。藤島葵様も近所にあった誠和大学に逃げ込みましたが、残念ながら現在大学は夏休み期間中。最低限の人員以外はおりません。おそらく、彼女の逃走能力では持ってあと数十分つてところでしょう』

誠和大学。

確か、古宇坂市で唯一の大学だったな。しかも小規模な大学で、法学部とその中に3コースがあるのみだったような気がする。まあ藤島葵つてのが大学に逃げ込んだのは正解だな。いくら小規模とは言え大学は広いし、隠れる場所も沢山あるハズだ。

だけど大学もなア……確かに大学の夏休みつてのは始まるのが遅い分、終わるのも秋に入ってからだったような気がする。

それに電話の男の言う通り　ソイツの逃走能力には限度があるだろう。

『お仕事頼めますかね。報酬は現金とミネット・ローラン様に関する情報提供です』

「クソガキの居場所が知りたけりゃあ、仕事を片付けろってかア？」

『言葉を換えればそうですね』

「チツ、嫌な上司様だア……とりあず一つだけ約束しろ」

『なんででしょうか？』

「あのガキの居場所だ。仕事を片付けたら必ず教える。でないとおマエを肉塊に変える」

『恐ろしい脅しですね。約束はしますよ、ただ 貴方に私は殺せないでしょう』

「あ？」

『ふふふ……それでは、手際よく頼みますよ 早川悠』

ここで電話は切れた。

なんだあのクソ野郎……オレにオマエは殺せねエだと。

ふん、馬鹿な男だ。人間ってのは弱い存在だ。オレが酸素濃度を操作すれば、アツサリあの世に逝っちまうくらいに弱い生き物なんだ。あのクソ野郎だって同じ人間……なら、このオレが酸素濃度を操作すりゃああの世に送れるってわけだア。

だからオレを怒らすなよオ……無駄な血イ見る事になるぞ。

「……………」

能力使用モードは残り25分、魔力残量は十分だ。これなら、永測達のような不良連中を潰すのに苦労はしねエだろう。

だが、極力能力は使わねエ……単なるヤンキーのような雑魚相手に、能力を使いまくるようではまだまだオレも半人前だ。

能力を使うとすれば移動と戦闘の補助、防御の為に暴風の膜を張り巡らすのみ。

それ以外では使わねエ。

これから先、能力が使えない時で戦闘を行う可能性もゼロではな

い。なら、今のうちに能力を極力使わない戦い方を学んでおく必要がある。

武器は……拳銃一丁と50発の弾丸。

相手は銃を持っていないだろうし、おそらくこれだけあれば十分だ……と、

「ッ！」

その時、誰かがオレの目の前を通り過ぎる。

近くにある階段を飛び降りるように下り、誰かと通話をしながら走る少年。ソイツは黒くて寝癖のような髪がピンと立っている頭。少しか細い気もするが、やや筋肉質な気もする体格。

握られた拳。あの顔、あの雰囲気、カッターシャツに学ランのボトム。あの少年は成和大学のほうに向かっているようである。何をしに行くか……そうか、藤島葵は。

「あ、の 野郎オ！」

アイツはオレの前に立ち塞がり 特異点を救ったヒーロー。

なるほど、藤島葵は アイツの妹だったのか。

ということはアイツの名字は藤島。名前は確か木下のおチビちゃん曰く、圭介って名前だったような気がする。

藤島圭介 やつと見つけた、フルネームも判明した。

「……ッ！」

無意識に変換機のスイッチに手を伸ばしたオレ。

そこでようやく気付く。馬鹿かオレは……藤島圭介へのリベンジ、25分も魔力が残っていればそれは可能なことかもしれない。けど、今はそんなことをしている場合ではない。藤島葵ってヤツを救

われない限り　オレはミネットの居場所を掴むことが出来ない。  
無理に首を振り、藤島圭介のことを忘れ、意識を切り替えようとする。

「藤島葵、コイツを救えばいいんだな？」

なら救ってやるよ、たとえソイツが藤島圭介の妹だとしても、ソイツはただの一般人でありオレらの事情には関係ねエ。  
そこに一般人が入るべきではないんだ。

「フツ、救ってやるよ……最も救いから遠い方法でなア」

何もかも……血みどろに救ってやればいいんだよ。

それがこのオレ　早川悠のやり方ってモンだ。

俺は今、葵と電話をしながら誠和大学という所へ向かっていた。  
西園寺の話によると、K・M・Pってのはこのあたりで活動するチームらしい。

だけど気になる事が一つだけあるんだ。そのチーム、今まで敵対するチームとの抗争はやってても一般人を襲う真似はしなかったらしい。でも、なんでだろうか。それなりの節度を誇りを持っていたチームがどうして　サヴィエトなんかと手を組んだんだよ。

それで、西園寺からヤツらのアジトを聞いて、そこに向かっていたのだが……。

「葵！　まだ大学にいるか！？」



『う、うん！ 今ね、大学の講義室に隠れてるよ』

「そうか。いいか、物音立てないでそこに隠れてる。今助けに行くからな！」

『う、うん！』

俺は途中で進路を変更、誠和大学へ向かうことにした。理由は簡単、どうやら葵は隙を見て逃走を図ったようで、とりあえず清和大学に逃げ込んだらしい。

でも、8月のこの時期と言えば 大学は夏休みの最中である。部活をやっている人も、おそらくは大会やら何やらで学校にはいない。大学に籠って研究を続ける教授も当てにはならない。葵によると、警備員の姿も普段よりは少なかったらしい。

そして葵の話によると ヤツらは既に大学に侵入しているそうだ。

『お兄ちゃん、クーにゃんやお姉ちゃんは？』

「暮葉は用事、伊吹も部活だ」

『で、でもお兄ちゃん一人じゃ危険だよ！？』

「大丈夫、お前のことは必ず助けるから！」

『お、お兄ちゃ 』

そこで俺は電話を切った。

確かに暮葉は仕事だし、伊吹は部活中。特に今回の件は暮葉はまあいいとして、伊吹だけは絶対に巻き込みたくない。アイツにと

って不良とは　トラウマのような存在だからだ。  
でも、決して俺一人と言うわけではない。今回は　西園寺もいるんだからな。

アイツが突破口を開いてくれるらしい、その隙に俺は大学に侵入する。大学に侵入すれば後は俺と不良達の戦いだ。

思い出してみれば、K・M・Pの連中とは何度か路地裏でやり合った事がある。

チームの名前は知らなくても、なんとなく服装に見覚えがあったからだ。

だが　それは俺が永淵を倒したという噂が広まったからである。だから、今回のように自分からK・M・Pに挑むのは初めてである。

「ちくしょう、葵　無事でいてくれ！」

そう叫びながら、俺は誠和大学正門を突破する。警備員はいない、いや、正しくはいるけど使い物にならない状態であった。何故か大学にいる警備員は。意識を失った状態で倒れている。

これが不良の仕業か、それとも西園寺が突破口を開いたからなのかは知らない。

けど、今はそんな事を気にしている場合でもない。だから俺は突き進む。ガラスが全部砕かれた正面入り口から　誠和大学内部へと侵入した。

第184話 / K・M・P（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「あんたつてやつぱシスコンよね」

暮葉「あ、それは確かに言えてるのです！」

圭介「なんでだよ!？」

亜紀「妹を助ける為に血相変えて大学に行く姿が完全にススコンだった!」

圭介「いやいや、家族なんだから普通助けるだろ？」

あかり「あたいは別に思わないぞっ！ うん、エロ兄貴相手ならな!」

圭介「ひでえ妹だっ！」

千早「……先輩、あかりはツンデレなんですよ……っ」

あかり「ち、違っつ！ あんな兄貴なくなっつて寂しくないんだからな!」

葵「葵はお兄ちゃんがいないと寂しくて死んじゃうよ!」

圭介「葵、てめえは少し兄離れしろ……」

## 第185話 流血大学

「まだ見つかんねえのかよ……おい！ 藤島ってヤツはまだ見つからねえのか！？」

拳を壁に叩き付け、俺

はまじまじのままに 浜島雅人は苛立っていた。

クソツ、いきなり意味不明な連中に脅され、藤島ってヤツを襲おうと思つたら、いきなり変なヤツにチームリーダーを殺されて、それでも俺らは意味不明な連中な連中に脅され、結局俺がチームリーダーになつて藤島を襲つて……。

しかも、その計画さえ失敗に終わろうとしていた。なんと、藤島ってヤツは隙を見てこの大学に逃げ込んでしまったのだ。

大学に襲撃してからも失敗が続いた。警備員が動き始め、襲撃者である俺たちを押さえこもつと活動を始めたのだ。しかも藤島ってヤツは見つからねえまま。

大体、なんで藤島って名字と、男と女が写った写真しかねえんだよ。これだけじゃこの2人のどっちが藤島かわからねえだろ。

「クソツ！ なんなんだよサヴィエトつて……一体俺らに何の恨みがある。なんで俺らの信条と逆の事をさせようとするんだ。なんでその後俺らのリーダーが殺されたんだよ！」

もうわけがわからねえ……わかんねえよ。

でも、一つだけ言える事がある。

俺は無理やりK・M・Pのリーダーに仕立て上げられた。と、いうことは……俺も先代リーダーのように殺されるかもしれねえ。

嫌だ……殺されたくねえ。アイツがどこの誰に殺されたか知らねえけどよ、俺はまだ死にたくなんかねえんだよ。だから、生きれるためだったり 意地でも藤島ってヤツを捕える。

それで生き残れるんなら 俺はどんなことでも……八八、やつてやるよ！

「え……い、いやっ！」

お、女の叫び声……八八ッ、ついにやったか。やっと藤島を見つけたか。藤島が見つかったことは俺は 生き残れるかもしれない。

喜びに溢れ、テンションを上げた俺は、ポケットから無線機を取り出した。

「<sup>「コイツ</sup>今から無線機で仲間連絡だ。」

「<sup>ターゲット</sup>浜島だ！ 標的発見。俺たちでソイツを捕まえるから、お前たちは警備員追っ払って車の用意を」

『ぐわっ！ て、テメエなにしゃがッ』

え……な、なんだよ……これ。やる気のない返事が返ってくると思ったのに、どうしてヤツらの叫び声が聞こえた。なんで銃声が響いてやがるんだよ。

ありえねえ……警察、なわけがねえ。警察はすぐには発砲しない。あんなヘタレ、逃げようと思えばいくらでも逃げられるんだ。じゃあ誰だよ……向こうで銃を撃ったヤツは？

『はアイクソ野郎共』

なんだ……この声。

警察……じゃねえよな、言葉使いは俺たち並に汚い。それだけじゃない、狂気と殺意と血に飢えた雰囲気を持つ恐ろしい声。コイツ ただ者じゃねえぞ……ッ！

『なア、あの世ってどオなってると思う？ オレにはわからねエなア……だからさア、オマエらK・M・Pが確認してきたくれねエか？ つーワケで、天国か地獄かどっちか知らねエけど、あの世への片道チケットをプレゼントしやるから、感謝して死にやがれっつーの！ あぎやはははっ！』

く、狂ってる……コイツ、頭が完全にイカれてやがる。

マトモなヤツの発想じゃない。無線に出た謎の男は完全に頭がイッている。常識なんて通用しないくらいに狂ってやがる。やばい……コイツは本気でヤバいぞ。早く、早く藤島って女を捕まえて大学から逃げ出さねえと 俺たち皆殺しにされちまう。

う、ああ……は、早く、早く仕事を終わらせねえと……ッ！

俺 藤島圭介は大学の廊下を静かに歩いていた。例えるなら、市街地でテロリストと戦う米陸軍のような感じで、俺は壁に背中を張りつけ、武器を構えていた。

現在、俺が手にしている武器は、丁度いいサイズにカットされた鉄パイプ。不意打ちで殴り倒した不良が持っていたのを、俺が鹵獲したものである。俺は鉄パイプを鹵獲した後、隠れては敵が近付けば鉄パイプを振りまわすという動作を繰り返し、今までに4人ほどの不良を倒してきた。

いくら不良とはいえ、正面から戦うのは面倒である。だからこそ、卑怯かもしれないが隠れながら戦う戦法をとったのである。こつちのほうが、確実に倒せるからな……。

「……っ！」

その時、廊下の奥のほうから物騒な物音が響く。

銃声。

凄まじい音が激しく炸裂し、今頃誰かが血を流している事だろう。しかしなんだ、どうして銃声が聞こえるんだろうか。まさか……K・M・Pってのは銃まで持っているのか？

まずいな……もしそうだとしたら、鉄パイプじゃ太刀打ちできない。でも、俺の身体なら1発や2発程度なら問題ないハズだ。

俺なら 多少は喰らっても平気だ。

「さて、大講義室は……ここかつ」

大講義室に通じる大きな扉。そのノブに、俺は手を伸ばした。

ゆっくりと、ノブを回して扉を開けると、カチリという金属音が響く。おそらく扉の金具が動いたんだろう。開ける際に物音が響くのは仕方のない事だ。

でも、幸いなことに相手には聞こえていないようである。僅かに扉を開け、扉と壁の間から大講義室の中を確認できる。俺は隙間を覗き込み、薄暗い大講義室の中を確認する。

武器を持った不良達が5人。その不良に囲まれるように、葵が座り込んでいた。

全員、武器を持っている。

木刀や金属バット、鉄パイプにただの棒切れなど、種類は沢山だが……どれもこれも俺が持っているのと同じ、近接戦闘用の単純な武器ばかりだな。これなら俺でも戦えそうだけど……さっきの銃声のこともあるしな、もしかしたらアイツらも 銃を持っているかもしれない。

幸い、大講義室は机で死角が多い。

なら、ヤツらにとっての死角から 奇襲を仕掛けて短時間で沈めてやる。

そう決めた俺は 静かに大講義室に入ったのだが、

「お、お兄ちゃん！」

「あ？」

ひえええ、あ……アホか俺の妹は！

どうしてそこで叫ぶんだよ、折角奇襲を仕掛けられそうだったのに。おかげで不良の皆さんがゾロゾロと、不自然に開いた扉を見ながら近づいてきたじゃねえか。

俺は咄嗟に机の下に隠れたけど……こりゃあ、見つかるのは時間の問題だ。

相手はまだ俺を目撃していない、俺に気付いていない。

つまり まだ不意打ちのチャンスはある。

「ッ！」

そのチャンスを 俺は逃さなかった。

咄嗟に机から飛び出して、鉄パイプでボサボサとした茶髪の男を殴り飛ばした。こめかみに鉄パイプが直撃し、ゴア！ という鈍い音が炸裂する。男は一撃で気絶したようだ。

1人撃破。

すぐ目の前にもう一人 剃り込みの男が立っていたが、

「おおアあッ！」

先手必勝。

鉄パイプで鳩尾を突き、怯んだ隙に鉄パイプを左腕だけで持つ。

そして、自由になった右拳を限界まで握り締め、思いつきり振り上げてやった。



ゴッ！ という打撃音が顎に炸裂すると共に、剃り込みの男は大きくぶつ飛んだ。

2人撃破、今の所順調である……が、

「う、動くな！ 動くと女を……さ、刺すぞコラア！」

「……ッ！ て、てめえ……っ！」

俺が残りの3人に近付くと、そのうちの一人が葵にギラギラと輝く何かを突き付ける。

それは、良く研がれたナイフだ。

首筋に刃先を当てられ、葵の首筋から僅かに鮮血が流れ出す。

寸止めではなく、少しだけ刃を葵に刺しているのだ……クソ、あの野郎。

「ど、どうだ迂闊に動けないだろ？ い、今から俺の言うこと聞いて あ、がアッ!？」

その時、葵を押さえつけ、首筋にナイフを突き付けていた男が倒れる。

突然響いた銃声と共に。

一度瞬きし、もう一度男の姿を確認してみる。頭がない……ぐちゃり、鮮血の中にまとまったピンクのような、クリーム色のぬちゃぬちゃした物体が、壊れかけの容器からはみ出ている。

「……ッ！ う、あ……ッ」

それを見て、胃の中から何かが入り上げてくる。葵は吐きこそはしなかったが、ひたすら悲鳴を上げている。大講義室中に葵の叫び声が響いていた。



「あ、お……お兄ちゃんっ！」

俺は葵の華奢で美しい腕を掴み、大会議室から脱出する為に走りだす。ただ、誰かが撃っている拳銃の餌食ならない事を祈りながら。

「ぎゃあっはひゃはあはっ！ 最ッ高に楽しいねエクソ野郎オ！愉快にケツ振って逃げてンじゃねエぞコラア……ハッ、オマエも今すぐ銃殺にしてやるっっーのオ！ あっぎゃははは！」

その時、どこかで聞き覚えのある、狂ったような笑い声が耳に入った。

どうやらこの声の主が拳銃をぶっ放し、不良達を殺してきたらしい。そして、葵を連れて逃げようとする俺も 不良の一人だと思っっているようだ。

「ふざけんじゃねえよてめえ！ 何者か知らねえけど、人殺しなんてふざけた真似しやがって！ 今すぐ警察呼んでやるから大人しくしてやがれ、このクソ野郎が！」

……とは言いつつも、拳銃持つてる相手と戦えるわけがない。

なので、俺はさっさと葵を連れて逃げる事にした。第一、あんな危なっかしいヤツ、相手にしたくもないし関わりたくもない。それにこれ以上、あの空間を葵には見せたくない。下手すりゃ葵の精神が崩壊してしまうかもしれない。そうなる前に 地獄から脱出しなれば！

「オラア！ テメエ仕返しだコラア あ、ぎゃああっ！」

「不意打ちなんて100年早エンだよ雑魚！ 精々床でも這ってる

ってんだよオ！」

今のうちに、アイシらが戦っているうちに  
ここから逃げない  
よ。

第185話 流血大学 (後書き)

・後書きトークコーナー！

圭介「はい来たよ浜面 上っばいのが」

大吾「っーか、色々とエグいな今回……」

重原「絶対テレビだと深夜枠だねコレ」

圭介「さて、普通の俺とセロリモドキとヘタレヤンキーが揃ったわけだが……」

大吾「圭介が普通？」

重原「圭介は相 歩と上 当麻を足して2で割ったようなキャラだよね」

大吾「ほぼ不死身かつ変態で、その上熱血漢で説教男だからな」

圭介「俺……他の2人と比べたら普通だよな？」

作者的には怖がりな浜島が一番普通だと思います。

## 第186話 浜島雅人

俺と葵は廊下を歩き、時々倒れる不良達の姿を見ながら、どうにか脱出に成功。現在誠和大学の広い敷地内をさ迷い、どうやら図書館の近くに来たらしい。

え〜っと……正門はどこだったかな。追手は多分すぐに来るだろう。捕まってしまう前に大学から逃げ出さないと、今度は俺も葵と一緒に捕まってしまうぞ。

いや、その前に　あの殺人鬼に殺されるかもしれない。

「お、お兄ちゃん……っ」

言いながら、葵が俺の二の腕にしがみ付いてくる。

甘えると言うよりは、抱きつくことによって恐怖を和らげている……と言う感じだ。

「大丈夫だ、俺たちは助からから　必ずここから逃げれるから」

「う、うん……でも、さっきの……っ」

「大丈夫、俺が……俺がいるから、だからお前は大丈夫だ」

俺は開いている右手で、葵の頭を撫でてやった。

本当はどうすればいいのかわからない。あの悲惨な状況を見て、おそらく精神的にも参っているだろう葵に、なんて言葉をかけてやればいいのか　俺にはわからない。

今はただ葵を元気づけようと、葵を慰めようとする事しかできない。

今の弱い俺には　それしか妹にしてやれない。

「お兄ちゃん……やっぱり、お兄ちゃんってすごいよね」

「それはないだろ。俺は……何もできないただの馬鹿男だぞ？」

「それでもだよ、すごいよ……お兄ちゃんは。だって……すごい冷静だったもん」

冷静、か……葵にはそう見えたのかもしいけど、それは途中までだ。本当は小便漏らしそうなくらい怖かった……本気で死ぬかと思った。不良を壊れた身体を見た時、嫌な汗が噴き出て葵と一緒に叫びたくなつた。本当に強いヤツなら　そこで動揺しないハズである。

結局……俺は変わっていない。

まだ弱いまま、これじゃあみんなを　暮葉を守ることができない。

「冷静……か、それはねえよ。俺も葵と同じだ」

だから　俺は正直に葵の言葉を否定する。

「そ、そんなことないよ！　お兄ちゃんカッコよかったよ？　一人で葵を助けに来てくれる姿が正義のヒーローだったよ」

「正義のヒーローが、暴力なんて振るうと思うのか？　誰かを殺せると思うのか？」

「こ、殺すって……お兄ちゃん、あの不良の人を殺したのはお兄ちゃんじゃないんだよ？」

「アイツは、俺がさっさと倒していれば死ぬことはなかった。お前を人質に取られる前に倒してしまえば命を失わなかった。けどアイツは殺されたよ……俺が弱かったから、俺に倒される前に 殺人鬼に殺されちゃったよ」

「お兄ちゃん……」

結局、俺が殺したのと変わりはない。

倒れていれば あの殺人鬼が拳銃を撃つこともない。そう、あの不良達が殺されたりもしなかったかもしれないんだ。だけど……結果はその反対、アイツらは殺された。いや、俺が殺してしまったのかもしれない。俺が弱かったからアイツらは……。

「お兄ちゃんは悪くないよ……だからお兄ちゃん、自分だけは責めちゃダメだよ……っ」

「……悪い」

ハハ、結局……俺って何も変わってねえや。

暮葉や伊吹に言われた事を 葵にまで言われちゃったよ。なんにも変わってねえ……相変わらず、俺は弱いままだった。

「……お兄ちゃん、これからどうする？」

「そつだな……これから」

本当なら警察に通報すべきなんだろうが……今回のこの騒動、K・M・Pが俺や葵を狙っているという事は、背後にサヴィエトがいるかもしれない。一応今回のことは、携帯電話で電話でもして暮葉に伝えておこう。今回の後始末は アルファ隊にやらせたほうが



いい。

そうだよな……やるべき事は山積している。

くよくよしている場合じゃない。強くなる為には 前を向いて  
進まなきゃな。

「とりあえず、安全地帯まで行こう。話はそれからだ」

「あ、安全地帯?」

「大学の近くは住宅街だろ? その辺に明智の家があるはずだ。明智はもちろん、その爺さんとも知り合いだし、明智家のみんななら俺たちを庇ってくれるだろう」

「う、うん。じゃあ、明智先輩の家に逃げようっ」

よし、行くぞ、と俺は葵の手を引き、大学正門を探して歩き始める。

だが。

「止まれ」

俺たちの進路を遮るように、一人の男が立ち塞がっている。アレ……アイツ、どこかで覚えのある男だな。茶髪のボサボサ頭に、作業ズボンにスカジャンの男だ。おそらく、こめかみを殴られた後にすぐ目を覚ましたのだろう。鉄パイプで殴ったのに……案外、タフなヤツなのかもしれない。

「テメエ……何者だよ。突然現れて俺らを襲いやがって……そうい

えば、テメエは後ろの女と一緒に写っていた男じゃねえか。テメエ……その女とどういう関係なんだよ？」

「俺と葵？ 俺と葵は ただの兄妹けいまいだよ」

「兄妹……？ ハハツ、なんだよそれ……ってことはアレか、つまり俺たちは初めから標的ターゲットを誤っていた。本来捕まえるべき存在はテメエだったんだ」

「捕まえる存在……だと？」

「俺もわからねえけどさ……頼まれたんだよ。全く、それで先代リーダーは殺されるし、今回仲間を沢山殺されたし……クソ、笑えねえよ」

「その言い草 てめえがK・M・Pのアタマか？」

「ああそうだよ……この浜島雅人こそ、今のK・M・Pのリーダーだ。全く場違いだよ……俺がリーダーって。でも仕方ねえんだ、もうアイツはいない。そして俺がリーダーである以上 俺も殺されるかもしれねえ」

「なんだコイツ……ホントにK・M・Pのリーダーなんだろうか？ 妙に弱々しい。なんというか……物凄く何かを恐れている気がする。おそらく、浜島って男が恐れているのは死だろう。誰かに殺されるかもしれないらしいし、それが怖いんだろう。」

「殺されるだど？」

「何だよその確認は。わかってんだろ……あの殺人鬼、テメエの差

し金なんだろ？　八八ッ、最悪な兄貴だよなあ……妹を助けるのに殺し屋雇うって……」

「ふざけんなよ。俺はあんなヤツを雇った覚えは無い、雇う金もない、雇う気もねえ。俺はただ兄として葵コイシを助けに来ただけだ」

「つまりアレか……テメエはあの殺人鬼と関係ねえと。ソイツの兄つつーことはテメエの名字も藤島で、俺たちの標的ターゲットというわけと……」

言つと、浜島と名乗った男がはは、と小さく笑う。

ゴソゴソと、笑いながら右手を後ろに回し、伸縮式の警棒を取り出す。おそらく、ズボンのベルトにでも挟んでいたのだろう。浜島は取りだした警棒を大きく振り回し、

「テメエさえ捕まえれば　俺は生き残れるってわけだ！」

叫ぶと、浜島が一気にこちらへ駆けてくる。

「お、お兄ちゃ　ッ」

「下がってる！」

俺は葵を突き飛ばし、不良達を倒すために持っていた鉄パイプを構える。しかし、葵に構っていたせいでワントンポ遅れた俺の耳に、風を切る嫌な音が響く。

既に浜島は警棒を振りまわし、俺にそれを叩きこもうとしていた。

「ッー！」

咄嗟に顔を守るように鉄パイプを構える。瞬間、金属と金属が衝突しあい、鈍い音を立てて振動が骨にまで伝わってくる。衝撃で鉄パイプを持つ手首を痛み、思わず顔を歪ませる。しかも情けないことに今ので鉄パイプを地面に落としてしまい、ガラゴロンと金属の棒が地面を転がった。

今更取っても遅いと判断した俺は、拾わず浜島の胸倉を掴もうとした……が、

「正しい判断だ」

ぐわん、と突き出した俺の右手に、浜島の警棒が振り下ろされた。ミシミシと言う嫌な振動が手首に伝わってくる。今の一撃で崩れ落ち、顔を歪ませていた俺。

そこに 何かが飛んでくるのが見えた。

「じつ、あー！」

膝。

突き立てられた膝が俺の腹部を刺激し、腹部に破裂するような痛みを覚えた。

さらにゴア！ という衝撃が首筋に襲い掛かる。おそらく、浜島の固く握られた拳が俺の首筋に振り下ろされ、碎けるような一撃を喰らってしまったのだろう。

次の攻撃が来る と思ったが、中々攻撃が来ない。

どうやら浜島は、今ので俺を無力化できたと思っているようだ。

「サッパリわけわかんねえけど……とりあえずアレだな。コイツさえ捕まえちまえば、俺らに拉致を指示してきた連中も納得する。それで匿ってもらえる、殺人鬼に殺されないかもしれねえ……はは、はははは、はははははははは！」

勝利を確信したようなその言葉……だけど、馬鹿だよなコイツ。どうやら、本当にサヴィエトから何も教えてもらっていないらしい。俺がアレクサンドルってヤツの血を引いているって事も、俺が特異体質であるということも。

それからな、今の言葉　ちよつとムカついたぞ。

「もう一度　言ってみろてめえ！」

腹の底から思いつきり叫んだ俺は、低い姿勢から一気に立ち上がるように、自分の頭を浜島の顎に思いつきり叩きつけてやった。

ヘッドアッパー。

揺さぶるような一撃に、浜島は耐えられず後退りをしてしまう……が、手が届かなくなる前に左腕を伸ばして、俺は浜島の胸倉を掴んだ。

ぐわん、と一気に浜島を引き寄せ　鼻っ柱に握った右の拳を叩き込んだ。

一旦宙に浮いた浜島の身体が、一気に地面へ叩きつけられる。浜島は血だらけ、鼻から大量の血を流している。今の一撃で鼻の骨でも折れたのだろうか？

「あッ、があああアあッ！」

そんな痛みでもがいている浜島に、俺は言葉を吐き捨てる。

「ふざけんな、誰だって普通は死にたくねえだろうさ。だけど、いくら自分が生き残る為だからって、そんな事をしていいと思ってるのかよ!？」

「仕方ねえだろ！　俺たちみたいなゴロツキに救いなんてねえんだ

よ！ あそこで白旗上げてたつて殺人鬼に殺されていた、いや  
その前に依頼主に殺されていたかもしれねえ。だからって俺たちみ  
たいな悪人が警察に助けを求められるかよ！ 大人に助けを求めら  
れるかよ！ どうせ悪ガキの自業自得って切り離されるだろうぜ？  
だからなあ……俺たちには任務を遂行すること以外に 生き残  
れる選択肢は残されていねえんだよ！」

「生き残れる選択肢？ そんなもん あるに決まってるんだろ！」

熱くなつて叫ぶと、浜島が眉をひめる。

その姿を確認した後、俺は浜島に叫び続けた。

「すべての人がためえらを見離すと思つたら大間違いだ。確かにて  
めえらは悪者かもしれねえけど、それでも殺人の被害者だつたんなら、  
全員が見捨てる事はねえだろ。たとえ世論から激しい批判を受  
けても、周りのヤツらはためえらを庇うハズだ」

「黙れ！ そういうことを言えるのは……テメエが何も知らねえか  
らだろ！ ありえねえ、たとえ俺たちが被害に遭つても、所詮は路  
地裏の落ちこぼれなんだよ！ このせじゃ俺たちに生きる資格なん  
てねえようなモンなんだ。だから 俺たちは自分で自分の身を守  
る以外に、生きる手段がねえんだよ！ 何も知らねえ癖に俺たちを  
馬鹿にしてんじゃねえよおおおおおおおッ！」

警棒を構え直し、浜島が叫びながらこちらへ突っ込んできた。

結局、この男は弱い。

リーダーやっっているのが奇跡なくらい 弱い男だった。

もう怖くない。化けの皮が剥がれたコイツは、この程度の人間だ。

「ためえらに生きる資格がねえつてのは間違っている」

呟きながら、俺は固く拳を握り締める。葵が後ろで戦いを止めようと叫んでも、浜島が警棒を振りまわしてきても、気にせず俺は集中し 己の拳を限界まで握り締めた。

「教えてやるよ……だから、もう一度やり直してきやがれ このクソ野郎が！」

同時に、二つの鈍い音が響き渡った。

俺の顔面には警棒、浜島の顔面には俺の拳が突き刺さっている。互いに大きなダメージを受けてグラグラと、血を流しながらバランスを崩す。

しかし、倒れたのは一人だ。

俺は 決して倒れる事は無かった。

それから数分後、俺と葵の前に西園寺と暮葉が現れた。暮葉は仕事帰りに、俺らが襲撃されていると言う通報を聞き、大急ぎで駆け付けてきたらしい。一方、西園寺は仲間と共に、誠和大学にいる警備員と戦い、ついでに不良も何人が倒していたようである。

しかも、浜島の身柄は私たちで拘束するらしい。

警備員と不良を倒し、浜島を拘束して……西園寺、お前とお前の仲間は何者なんだ？

「……よしっ、けーすけ様！ これで大丈夫だと思いますっ」

「いいよ暮葉、俺の体質知ってるだろ？ こんな怪我すぐ治るから」

「だ〜めです。ちゃんと手当てしないと黴菌が入っちゃうのですよ？」

俺は浜島に警棒でぶん殴られ、額から大量に血を流していた。だからか、暮葉は俺を見るや慌てて歩み寄ってきて、いきなり消毒して包帯を頭に巻いてくれたのである。

消毒と包帯、何故持っていたかが気になるが……まあいいや。

ぶっちゃけ 暮葉に手当てされるの、すごい嬉しいんだよな…

…。

「むう……っ」

「あらあら、仲いいわねあの2人っ」

「不満だよ！ 葵だってちょっと怪我したのに、お兄ちゃん全然手当てしてくれないよっ」

「大丈夫よ、私がちゃんと絆創膏貼ったもの。大した怪我じゃなくてよかったわね」

「うう…… 葵お兄ちゃんに手当てされたかったよ！」

なに言っただあのブラコン・マイ・シスター…… まっ、いいか。アイツの首の怪我也軽い切り傷だったみたいだし、本人も若干気になる程度の痛みしかないらしいからな。よかった、散々なこともいっぱいあったけど、何より葵が助かってよかったよ……。

「もきゅっ…… けーすけ様っ」

「っ、お……おうっ」

暮葉が枕でも抱くかのように、俺の頭に両手を回し、優しく抱き



しめてきた。

あどけない顔が俺の顔と並び、柔らかな頬が触れ合う。それだけでも、一般男子高校生としては興奮モノなのに、増してやこの……汗の混じった甘酸っぱい香り。なにより、俺の背中に覆いかぶさるように抱きついていているんだから、背中にはマシユマロのような柔らかい感触を感じる。

うう……やばい、胸って小さくても　柔らかいものなんだな……ッ！

「今回は本当に申し訳ないのです……」

「い、いいよそんなの……お前に責任なんてないって」

「にゃふふ……けーすけ様、やっぱり優しくて、広いお方なのです……っ」

「……ふっ」

心配性なんだか単純なんだか、でも……やっぱり可愛いよな。

西園寺と葵が見ているけど、別にもうどうでもいいや。

出来る事なら　しばらくこのままでもいいな……。

「ふん」

オレ　早川悠は狭い道を歩いていた。既に夕暮れ、チツ……時間間を食い過ぎた、それにしてもあの時のあの怒鳴り声は一体……。

ふざけんじゃねえよてめえ！ 何者か知らねえけど、人殺しなんてふざけた真似しやがって！ 今すぐ警察呼んでやるから大人しくしてやがれ、このクソ野郎が！

最初はK・M・Pのクソ野郎だと思ったが、どうも違うっぽいな。あの言い草、どうやらアイツは第三者のようだ。まさかあの野郎…  
…藤島葵を連れ去ったあの野郎。

オレの目的 藤島圭介だったんじゃないのか？

そうだな… それ以外には考えられねえ。不良共を倒すのに時間を食ったが、それでも藤島葵ってヤツは生きていた。おそらく、藤島圭介が妹を救ったんだろう。

まっ、どオでもいいか… そう思い、オレは路地裏から出ようとした。その時。

そこでオレは声をかけられた。

「いやいや、俺たちの不手際で残業やってたらしいけど……」

「その顔だと、どうやら成功したらしいな。流石、最強の超能力者って所だよなあ」

「アンタって案外すごいわ。もやしだからってナメたもんじゃねえわね」

目の前に現れたのはラウルと近藤、その後ろにアナスタシアの姿もあった。

なんだコレ、まさかザスローン全員集合かア？

どオやら、残業を終えたオレを出迎えに来たようだ。

「このオレに何か用か？」

「大したようじゃねえのよ。ただ、お前さんと酒でも飲もうと思っ  
てなあ」

「チツ、オレは本来高校生だぞ……?」

「なあゝに気にしない方がいいわ。初仕事が終わったんでしょ？  
その打ち上げをやるのよ」

「今まで散々こき使ってきてサヴィエトへの反抗が、今回初めて出  
来たからね。俺も近藤もアナスタシアも、内心喜んでるんだよね」

「そオかい……オマエらは仲良しこよしってワケかア」

オレは狎れ合うつもりはねエンだけどな……ただ、オレは守られ  
ばいい。こんなクソツタレた世界からでも、あのクソガキを守る  
ンなら それだけで十分だ。

まつ、これがコイツらのやり方だつてンなら 少しは合わせて  
おくか。

同業者同士仲が悪いンじゃ、今後の作戦にも影響するだろオから  
な……。

チツ、オレの柄に合わねエ……。

「まつ、結束力つてのは結構重要なモンなのよな。俺達が少ない人  
数で戦力になる為には ソイツ最も大事つてことなのよな」

「そういうわけ、だからアタシらは繋がり<sup>、</sup>を重視する」

「だから手を結ぼう、早川悠。君だつて守りたいものがあるんだろ  
う?」

「……ふん」

それがオレの答えであった。

サヴィエトと佐井学園、この二つは必ずブツ潰す。その為には手段を選ばない、たとえコイツらの重視する繋がりを無視し、コイツらをブツ殺してでも　オレはその二つを潰し、全てを捨ててもあのクソガキの命を守る。これ以上　あのクソガキに血ってヤツを見せるわけにはいかねエ。

だから終わらせる。

何もかも、あのガキが関わらなくても、オレが全てを解決する……。

「ふん……上等じゃねエか」

## 第186話 浜島雅人（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「……………」

浅間部長「うわー藤島君のテンション低、とヒデキ10032号は突っ込みます」

浅間部長「何故でしょうね、とヒデキ10039号は疑問を抱きます」

浅間部長「おそらく登録件数減少が原因では？ とヒデキ13577号は推測します」

浅間部長「なるほど、確かに精神的に辛いですね、とヒデキ19090号は同情します」

浅間部長「でも自業自得じゃないの？ ってヒデキはヒデキは言うてみたり！」

千早「……………で、先輩……………なんで元気がないんでしょうか……………?」

圭介「兄貴達ブラザーズが大量繁殖したせいだよ……………おえっ」

あかり「あたかも気持ち悪いぞ……………っ」

## 第187話 期末考査2日前

8月27日土曜日、早朝。

この日は俺の生誕17周年記念の前日であり、そして期末考査。つまり、我ら学生にとっては脅威でしかないテスト2日前なのである。ここで俺の学生生活を振り返ってみると、食べて遊んで寝てサグイエトの魔法使いと戦つての繰り返し……その為、実質殆どテスト勉強をしていないのだ。

いつも通り葵に先生頼めばいいかもしれないが、そんな気分じゃないしな。最近の葵は特に変態なもんだから、密室に2人きりになつたらいつ襲われる事やら。

何より、妹に勉強を教えてもらっている姿を 暮葉には見られたくない。

というわけで、俺は現在朝っぱらから部屋で猛勉強中なのである。だが。

「だあああ！ ちくしょうわからねえっ！」

なんだよ英文の意味わからねえよ、こんなのどうやって翻訳するんだよ。あと数学だつてサツパリ意味不明だし、化学もホントに悲惨だ。国語も漢字は読めるが書けないし、その他の教科もどこか抜けていたりでイマイチわからないのである。

クソッ、まずい……なんとかしないと、このままじゃ期末は赤字だ。

「だいじょーぶですっ！ 拙者はけーすけ様がおバカでも全然構いませんっ！」

「そうかそうか、暮葉、お前つてホントいいヤツ って、オイ

!？」

ちょっと待て、どうして隣に暮葉がいるんだろうか。しかも、俺の左肩に凭れかかって満足そうな表情を浮かべている。

いやいや、そりゃあね。嬉しい事は嬉しいけど……問題はそこではない。

「もきゅ？　どうかされましたか？」

「どうしたもこうしたもあるか！　お前、なんで俺の隣にいるんだよっ！？」

「だって！　ここのところけーすけ様、ずっと拙者達と別行動だったじゃないですかっ」

「そ、それは……」

まあ、いろいろあるんだよ。例えば伊吹と気まずいとか、だってねえ？　結局あの体育館倉庫での外事は何だったんだろうか。あの時はあまりにも突然言われたせいか、伊吹に何も言葉を返してあげることが出来なかったけど、もしかしなくてもあれ……告白、だよな……？

いや、でも、初恋の相手が俺ってだけだろ。そうだ、そういうことだよな。幼稚園から小学校にかけては俺の事が好きだったのかもしれない。なんとなく、そんな感じもしていたし。

だけど、初恋が何時までも続くとは限らない。そりゃあ……確かに、ギャルゲーの幼馴染キャラは小さいころからずっと、主人公の事を想ってヤンデレ化する事もあるが、俺達が今生きているこの世界は現実という残酷なものだ。

いくら伊吹が幼馴染だからって、ずっと幼馴染の事が好きとは限

らない。

「だけど……何故だろうか。ここの所ずっと伊吹に見られている気がする……。」

「にゅふふ、けーすけ様のためにも、深いことは問いませんから心配しないで欲しいのですっ」

「お、おう。そうしてくれると助かるけど……。」

「はいっ」

ニコツと、眩しくて瞬きしてしまうような笑みを浮かべ、暮葉は更に体を寄せてくる。

俺の肩に体重を傾け、暮葉は目を細める。ああ……暮葉のヤツ、幸せそうだ。そう思っている俺も幸せだと思っっているけど、なにこれ……物凄くドキドキする。

8月も末とは言え、気温は昼間になると30度を超える。朝でも暑いくらいで、俺も暮葉も半袖の服を着ていた。華奢で柔らかな腕と俺の腕が直に触れて、彼女の体温が伝わってくる。

髪の毛の甘い匂いが鼻をくすぐる。  
まるで恋人みたいなことになっているが……俺達、まだそこまで行ってないんだよ。

「だけどダメだ。このままでは俺も　自分を抑えられなくなるかもしれない。」

「にゅふふ、幸せです……。」

ああ、幸せだな……って、だから俺達まだそういう関係じゃないでしょ。これ以上は流石に自重しておかないと、俺が色々な意味で暴走特急になっちまうだろ。



つか、その前に勉強しないと 期末が恐ろしい結果になっちゃうかもしれない。

「暮葉、雰囲気ぶち壊すようで悪いんだけどさ」

「もきゅ？ なんでしょうか？」

「俺、今勉強してたからさ……」

「……っ」

あれだけ幸せそうだった暮葉の表情も、今では完全に曇ってしまった。悲しそうに、少しでも押ししてしまえば泣きかねない程に。

馬鹿だ俺……そうだよな、こんな事を言ったら普通 こうなるよな。

「もきゅ……そうですよね、ごめんなさい……っ」

暮葉は俺の肩から頭を離すと、どこか寂しげな感じで謝ってくる。その瞬間、俺はとんでもない罪悪感に苛まれる。

暮葉は悪くねえのに……っ。

「いや、俺の方こそごめん」

「そ、そんなことないですよ！ 拙者こそ、テストが近いのに何やってるんでしょうね……」

そうは言われても、やっぱり俺は彼女を放つてはおけなかった。

弱々しく、震える唇で呟いたさっきの言葉。暮葉……やっぱり、俺の勘違いじゃない……のか？

日頃からスキシップを行ってきたり、合宿の夜にキスされたり……それから、風呂場で初めてをやってしまいそうになった時、俺のことを拒まなかったり……。

全部勘違いだっと思って思ったんだけど、違う……のか？

暮葉は俺のことが。

……ああもう、アホくさ。

なにが勉強だよ。そりゃあ勉強は大事だけど……もういい、一夜漬けて頑張るよ。なんだか暮葉のことを放っておけなくなってきた。だから今日は、今日くらいは。

「暮葉」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれたからか、暮葉はきよとした顔をしている。いきなり呼んだから驚かせちゃったのかな。ちょっとだけ悪い事をしてしまったかもしれない。

「今から遊びにでも行くか？」

「……え？ で、でも……勉強は大丈夫なのですか？」

「俺は大丈夫だよ。日常で本気を出さず、本番で本気を出す男だからな」

「で、ですけど……っ」

「無理にとは言わねえぞ？ お前だって勉強のこともあるからな」

「ッ！ だ、大丈夫ですっ！ 行きましょーうけーすけ様、

遊びに行きましょうよ!」

相変わらず単純というか、子供というか……まっ、そこが暮葉の可愛い所。とにかく元氣を取り戻してくれてよかったよ。後はどこに行くかだよな。

残念ながら咄嗟に思いついた事だし、ノープランなんだよな。普通、こういうのって男のほうがりードするモンだろうから、何処に行くかくらいは考えないと。

うーん……安価で学生が楽しめて、そんないい場所がこの辺にあったかな?

いや待て、俺の趣味と暮葉の趣味が一致しないこともある。その事を考えたらやっぱ、本人の行きたい所にするべきだよな。

「よし、暮葉。どっか行きたい場所とかあるか?」

「もきゅ? 行きたい場所……うーん、けーすけ様の行きたい場所ですよ?」

「えっ? いいのか、行きたい場所とかないのか?」

「はいっ、特にないのです! だから拙者はけーすけ様の行きたい場所で構いませんよ!」

ここまで元氣よく言われると、流石に無理に行きたい場所を聞けないな。

どうしよう。女の子の友達と2人で行って、楽しい所ってどこなんだろうか。

っーかコレ、単純に言えばデート……だよな?

デートって何処に行けばいいんだよ。暮葉は……映画とか興味なさそうだし、服を買ってあげたら喜ぶんだろうが、生憎今月はエロ

ゲーの買い過ぎで財政難なんだ。高校生の癖にエロゲーの買い過ぎで財政難つてのも、ある意味おバカでサイテーだと自覚はしてるんだけど……。

つついっ買っちゃうんだよなあ。

あ……そうだ！

「暮葉、千葉にでも行かないか？」

「もきゅ？ 千葉ですか？」

「おう、割と近場だけど大都市だし、遊ぶ所も結構あると思う」

「大都市……都会、もしかして東京みたいな感じでしようかつ？」

「東京ほどじゃねえけど、それでも古宇坂よりはずっと街だぜ？」

「お、面白そうなのです！ 行ってみたいのです！」

暮葉はロジーナでも田舎のほうの出身らしく、古宇坂ですら街だと思えるらしい。

初めて東京に行った時なんて、目を輝かせていたからなあ……まっ、千葉も東京ほど大きい街ってわけではないが、それでも人口も100万近くの人が住んでいる大きな街だ。

きつと、暮葉にとっても新鮮な場所であろう。

それに 千葉にもア メイトやと のあなもあるしな！

「拙者！ 準備してきますねーっ！」

「おう、俺も今から着替えるな」

さて、すっかりリードしないとな。

これでも県民。そしてア　メイトに行くために、よく千葉には行く俺。一応あの辺の地理は頭に入っているからな。道に迷わない為にも、暮葉を楽しませる為にも　男を見せてやる。

第187話 期末考査2日前(後書き)

・後書きトークコーナー!

伊吹「ところでさ、作者って道民よね?」

作者「まあ、はい」

伊吹「じゃあなんで地元舞台にしないのよ?」

作者「だって、地元は処女作と次回作で舞台にしちまったし、本州のほづが色々あって便利なんですよ」

伊吹「それ、同じ道民に聞かれたら怒られないの?」

作者「う〜ん……ただ、一つだけ言える事があります」

伊吹「えっ、なによ?」

作者「北海道アニメ少な過ぎだろ! A - Xとニコニコから目エ離せないじゃないですか畜生!」

純奈「作者は道央なだけまだマシだよ。道東はもっと(r y」

圭介「なんで生駒が知ってんだよ。お前まさか!?」

純奈「そんなわけないんだべ!?」

圭介「生駒、もしかして道東出身?」

飯はうまい、けどアニメ難民です……（涙）  
でも地元は大事にしようね！

## 第188話 それぞれの日常

私、国宗伊吹はテスト前活動禁止令が発令しているので部活もなく、今日は間近に迫るテストで悲惨な成績を残さないよう、テストに備えて勉強をしていようと思っていた。

でも、部活がなくても、ついいつも時間に起きちゃうのよね。時刻はまだ7時、折角部活がないんだからもう少し寝ていたいわ。せめて8時くらいまで、今日はゆっくりしたい。でも一度目が覚めてしまうと中々眠れない、私はそういうタイプの人間だった。

仕方ない、朝ごはんでも食べようかしら？

「あつ……」

しまった、パンもご飯もないわ……。

そういえばご飯は昨日切らしちゃったわね。新しく炊くのも面倒くさいし、やっぱりコンビニでパンかお弁当でも買っちゃおうかしら？

その方が楽ね。じゃ、着替えたらコンビニに行こう。

というわけで、私はパジャマから私服に着替え、靴を履いて外に出る。服は最近亜紀と一緒に態々千葉の洋服店で買った、何かの文字入りの白いTシャツとシヨーパーン。

亜紀は、「圭くんはロリ好きっぽいから、ロリっぽいファッションが一番だぁ！」なんて言っていたし、私もばか圭介は間違いなくロリコンだと思うけど……。

でもアイツ、わかんないのよ……アイツの好みが。

「はぁ……」



しかもここ数日、アイツとマトモに話どころか、顔すら合わせていないし……。

やっぱりあんな事言ったのは失敗だったのかな？

で、でも……私にしては頑張ったのよ。あと一歩だったのよ……でもその先、さらに先へ進む勇気がない。仮に言おうとしても、何か反対のこと言っちゃうのよね。

意味わかんない……なんでなのよっ。

そんな事を思いつつ、ため息をつきながら私は外に出る……あれ？

「けーすけ様っ！ 早く来ないと置いてっちゃいますよっ？」

「ちょ、歩くの速えよお前っ！ つーか走るなっ！」

「にやはっ！ こっちですよー！」

「たく……ああいう所は子供だよなあ」

私は衝撃の瞬間を見てしまった。

「なっ、が……ッ!？」

えっ、ちょ、なによアレ……なんでアイツら2人で元気そうにはしゃいでんのよ。

しかもあんの2人と。なにちゃっかりお洒落しちゃってんのよ。圭介はダメージ加工を施したジーパンに、文字入りの黒いTシャツ、さらに十字架のアクセサリーって……思いっきり街中にいるチャラ男ファッションじゃないのっ！

暮葉もなにニートソ履いてんのよ。しかも小柄だからか妙に合ってるし。

大体アイツら　　なんであんなに仲良しなのよ!?

「う、があああムカつくう！　リア充は死ねえっ！」

自棄になつて、私は自分の頭を掻き毟っていた。

ああ……しかもリア充つて、普通の人はこんなこと言わないわよね。どうしよう、また意味不明な圭介語が伝染しちゃったわ。ああもう、これも全部あのリア充ばか圭介のせいよっ！

そもそも、なんでアイツら2人つきりでお出かけしてんのよ。アイツも暮葉も、葵ちゃんつて可愛い妹はどうちゃったのよ？

葵ちゃん放置でお出かけて……何かあるわね。

そう思った私は　　ぎゅ、と右拳を固く握って、

「……見てなさい圭介、地獄の果てまで追つてやるわよ！」

青空に向かって叫び、そう天に誓ったのだった……。

あたい　　浅間あかりには、ずっと待っているものがある。

それはこの世で最も温かく、胸が破裂しそうな言葉だ。

8月17日のあの別れから　　あたいはずっとその言葉を待っている。  
待っているんだけど……。

「圭介のヤツ、いつ返事してくんだよ……っ」

あたいは今日のバイトに行く前に、リビングで携帯電話をいじりながら、ずっつと圭介のことを考えている。イライラしたり、ドキ

ドキしたりと、あたいの心は忙しいな。

圭介からの返事……答えなんてわからない。もしかしたら、圭介はあたいの望まない言葉を放ってくれかもしれないけど……それで

も あたいは前向きでいたい。  
だから、あたいは温かく、ドキドキするほうだけを考えていた。  
もしも、圭介の恋人になれば

「あっかり〜んっ！」

その時、背筋が凍るほど聞きたくない声が聞こえ、振り返ると

「にゃあああああっ!?!」

「う、ちゅうつうつうっ!」

あたいは咄嗟に左へ跳躍し、変態突撃兵の攻撃を避ける。うう、き……キモい、いきなり唇を尖らせて突撃してくる兄貴が どの世界にいるんだよっ!

「な、ば エロ兄貴っ! なにするんだよ、やめろよなっ!」

「いやあ〜、携帯をいじってる妹の仕草に萌えて ムラムラしちゃったんだよね」

「サイテーだぞ! このハートキャッチエロキュアっ!」

「まあまあそうおっしやらず、ボクに妹分を補充させてくれないかい?」

キラッ、とあたいのエロ兄貴はウィンクをしてきやがった。兄貴はイケメンだ、それだけはあたいも認めている。なに知らない人が見れば、今ので恋に落ちちゃうかもしれない。

でも、あたいは妹だから知ってるんだ。

このエロ兄貴の 真の姿を。

「嫌だっ！ あたいは兄貴の食い物じゃないんだからなっ！」

「まあまあそうおっしやらず。ましる色の桜乃は妹キャラながら、兄を夜這いしたんだぞ？」

「そんなのゲームだけだろっ！ あたいはそんな事しないんだからなっ！」

「とにかく、兄をご奉仕しない妹なんて妹じゃないね！ きりん氏は例外だね！」

「なにいつてるかわかんねーからなっ！ 早くゴキブリじぶんのへやホイホイに戻れよな！」

あたいはお腹と喉が破裂しそうな勢いで叫んだ。だけど、あたいのエロ兄貴がこの程度で退く常識人なら苦労はしないよ。どうやらあたいのトゲのある言葉は兄貴の脳内で、DM的な快楽に勝手に変換されてしまっらしい。兄貴はハアハアと、目を細め、顔を赤らめ変態のような笑みを浮かべる。

「えへ、えへ、えへへ……キモチイイでしゅもつとボクを罵ってあつかり〜んっ！」

「い、嫌だああアあッ！」

本当に気持ち悪くなってきたあたいは、泣きそうになりながらリビングを飛び出す。

もう　今日はバイト終わるまで家に帰らないっ！

はぁ……兄貴と圭介。同じ男のハズなのに……どうしてここまで違うんだろう？

葵が羨ましい。あたい　圭介の妹になりたかった。

「ミネット・ローラン、ただいま参りました」

ミネットは8月17日、何者かに捕えられ　気がつけば病院のベッドの上にあった。

よくわからないけど……一緒にあの人もいなくなっていた。

今までリーネさんと一緒に、ミネットはあの人の事を探していたんだけど……今日はアルファ隊の上層部から召集され、早朝の今はアルファ隊日本支部へ赴いているんだよ。

長野と言う場所にある、なんて事のない地下道。その最深部の一室に　アルファ隊の隊長を務める聖人の姿があった。民族衣装を身に纏ったその人は椅子に座り、微笑んでいる。

「よく来てくれました、とリーリヤは貴女を歓迎します」

「あの、今日はどんな御用でしょうか？」

ミネットだって一応敬語は話せる人だもん。今回の相手は目上の人、あの人やリーネさんと話をする時とは違い、リーリヤ隊長には敬語で喋る。

一応、アルファ隊にだって上下関係はあるんだよ。

「赤の軍神”が本格的に動き始めました……と、リーリヤは状況報告をします」

「赤の軍神……あの、風剣のシルフはどうなったのでしょうか……？」

「彼女は重傷を負っています。しばらくは動けないでしょう、とリーリヤは推測します」

「残りは3人……ですよね？」

「邪炎のサラマンダー、硬質のノーム、聖波のウンディーネ。その中でも現在、硬質のノームの動きが活発なようです、とリーリヤは状況を報告します」

硬質のノーム。

ミネットも詳しい事はわからないけど、土属性の天才魔法使いらしいんだよ。

そもそも、赤の軍神は精霊……の力を持つ者の中でも、選ばれた天性の才能を持つ魔法使いのみがなる事の出来る 才能の役職。

精霊の力を持つ者でさえ、普通の魔法使いの実力を超えている。硬質のノームも他の土属性の魔法使いと比べれば、圧倒的に強力な存在だよ。土に対して相性が良かったって、おそらく勝つことは難しいであろう相手。ミネットの水の魔法でさえ 硬質のノームには通用しないかもしれない。

「硬質のノーム……なにをするつもりなんでしょうか」

「現在彼はポルトガルのセトゥーバルで、大規模術式を組み上げています、とリーリヤは現実を伝えます」

「大規模……術式？」

「都市攻略の為の大規模魔法を発動させる為の術式。まあ、ノームの属性を考えればどんな術式を組んでいるか、すぐにわかると思います……と、リーリヤは言います」

「硬質のノーム……土、大地……大地………ッ！？　じ、地震！？」

「そう、彼は地震で東京圏を攻撃。首都圏を叩く事で日本に壊滅的なダメージを与え、一気に日本という一国家を叩いてサヴィエトは領土を獲得するつもりです、とリーリヤはノームの行動目的を推測します」

地震であの人やリーネさん。木下先輩に圭介様、そしてミネツトの住む日本を……。

ひどいけど、それ以前に硬質のノーム………すごすぎるよ。魔法で地震を起こすだなんて夢物語のレベルだよ。ただでさえ日本は大変な時期なのに………そこで首都を叩かれたら大変だよ。

「と、止めないとっ！」

「はい、もちろん術式が組み終わる前に対処するつもりです、とリーリヤは今後の方針を伝えます」

「でも、どうすればいいのでしょうか………？」

「簡単です。術式完成前にノームを倒す必要があります。その為には木下さんの力も借りる必要があります。そこで貴女に頼みがあります、とリーリヤは本題を語ろうとします」

「は、はい。なんでしょうか？」

「近頃、藤島様の同級生達が結成したフレンドという組織と接触し、今回の事を教えて欲しいのです。戦力不足の中、彼女達は藤島様の味方として 素晴らしい戦力になると思います。そして彼女達を説得後、木下暮葉と合流し、調布飛行場に向かってください。ロジーナ製の超音速魔動旅客機を用意しておきますので、とリーリヤは計画を説明します」

はわわ、ミネット重大任務課されたよ？

で、でも……これが出来なかつたらあの人を守れない。いつまで経っても、一人前の隊員になることは出来ない。何年経っても弱いミネットのまま。

頑張らなきゃ……頑張って作戦を成功させなきゃ。

「わかりました！ ミネット、頑張りますっ！」

大変な仕事だけど 頑張らなきゃ。



第188話 それぞれの日常（後書き）

・後書きトークコーナー！

浅間部長「いやあ、あつかりくんは可愛いネ！」

あかり「うえ、気持ち悪いエロ兄貴！」

浅間部長「あつかりくんハアハア！」

あかり「うわっ！ 近寄るな、ハレンチだ！」

浅間部長「まあそうおっしゃらず、先程の続きを」

あかり「嫌だ！ 呪うぞ！」

圭介「あかり……お前さ見たのか？」

## 第189話 早朝の街遊び

千葉市。

人口約96万の都市で、県庁所在地であり政令指定都市もある。幕張新都心や大規模な住宅団地がある都会だが、一部地域には自然も多く残されているらしい。

……と言つのがWikiの情報。

いやあ、便利だね。態々学校の地理の時間で習わなくても、図書館で分厚い本を探してページを捲らなくても、現代社会にはネットと言うモノがあるからな。全く便利だ、調べ物も趣味もゲームもお宝画像収集も全部ネットで出来るからな。

俺、この時代に生まれてよかったぜ。

「けーすけ様、何か感動する事でもあったのですか？」

「えっ？ まあな、俺は今 珍しく現実に感動しているんだ」

「け、けーすけ様が現実につ！？ 大丈夫ですか！？ 病院行きますかっ！？」

「精神的に逝っちゃった人扱いすんなよ！ 現実に感動するのってわりとマトモだろうが！」

「もきゅ！？ そういえばそうなのです……っ」

暮葉、お前もこの世界に来てから洗脳されちまったんだな。可哀想に、もし任務が終わって国に帰ったら苦労するんだらうなあ。

ロジーナって場所には行ったことはないけど、多分俺らの常識は通用しないだろう。

……そういえば、暮葉って任務が終わったら 本家に帰っちゃ  
うんだろつか？

「 様、けーすけ様っ！」

「 えっ？ 」

想像したくもなかった事を考えてしまった。そのせいなんだろう  
か、嫌な事を考えていた数秒間は誰の声も耳に入ってこなかった。

「 どうしたのですか？ 完璧上の空でしたよ？ 」

「 悪い、つで、なんだって？ 」

「 けーすけ様、お腹が空きましたっ 」

「 そういえば朝飯食ってないもんなぁ 」

葵にバレないためにも、俺達は家で朝ごはんを食べていないので  
ある。超がつくほどどうでもいい情報んだけど、葵の鼻って犬並  
なんだよな……。

だから、料理を作るのは危険なのだ。しかし、葵対策の為の朝飯  
抜きだったが、確かに暮葉の言う通り腹減ったなぁ……。

暮葉でさえ腹ペコなのに、高校生男子に朝食抜きはもっとキツイ  
よ。

「 よし、じゃあ色々回る前に飯でも食つか 」

「 はいー！ 」

現在時刻は8時25分。まだレストランは開いていないだろうし、そもそも朝ごはんだからレストランってほどでもないよな……どっか手頃な店開いてないかな？

「そういえば駅ビルにマックあったよな……そこでいいか？」

「はい、拙者はけーすけ様の食べたいもので構いませんよ」

暮葉、なんていい子なんだ……マックは経済的にも優しいからありがたいよ。確か今月は150円で極光鶏肉オ罗拉チキンとか言う、厨二なメニューがあつたハズだ。

それとポテト、あとシェイクがあればいいかな。結構なポリユームだろう。

と、言うわけで俺と暮葉はマクドメルド駅ビル店へ移動する。

朝から込んでるなあ……流石マック。まあ朝飯としても手頃なんだろう。サラリーマンから今日は暇な学生カップルまで、色々な人が店内でハンバーガーなどを食べていた。

俺達も食べたいものを注文し、それを受け取り席に座る。安っぽい朝飯だが、たまには外で朝飯を食べるってのも悪くはないかもしれない。

「おお、安い割にはうまいなこのチキン」

「もきゅ……ポテトは薄味なんですっ」

「まあ、マックだとそんなモンだろ？」

別にまずいってわけじゃないし、むしろうまいほうだろう。それに、安価ですぐに食べられるんだから文句を付けたってしょうがない

い。  
「こんな朝早くに営業しているだけでも、ありがたいと思っておく  
う。」

「それにしても珍しいのです。けーすけ様が遊びに誘うだなんて……」

「そうか？ 普段の生活見てたらわかるだろ、俺は遊び好きなんだ  
よ」

「……そう言うと、けーすけ様が軽い人に見えるのです」

「言っとくけど、冗談で付き合ったりはしねえぞ」

「もきゅ、わかってますよ。けーすけ様はその辺だけしっかりし  
てますもんね」

「あのなあ、それ以外はダメダメ見たいな言い方するなよ」

「もきゅ……だってけーすけ様……ゲームでは浮気ばっかりじゃな  
いですかっ」

「あれは攻略したから次のヒロインを攻略しているだけ！ エロ……  
…じゃなかった、ギャルゲーってのはそういうモンなんです！ あ  
と、二次元に複数嫁がいるのは俺だけじゃないんですよっ！」

なんてダメ人間なんだ俺ら。朝っぱらから何の話してんだよ……  
オタク丸出しの一般人が引くような話しかしてねえぞ。いや、現に  
近くの席に座っているギャルに引かれてるし。絶対あのぎすぎすし  
た感じは「うわ、オタクキモイ」って思ってる顔だ。

ちくしょう、変な偏見持ちやがって。

まあいい……いちいち気にしてたら生きてけないしな。

「けーすけ様っ！」

「ああ？」

人が語っている途中、暮葉が止めるように俺のことを呼んできた。そして、

「シェイク、おかわり飲みたいのですっ！」

天真爛漫な表情を浮かべる暮葉が、おねだりをしてきたのだ。

ちよつと待て、シェイクおかわりって……しかも、Sサイズなら100円で済むが暮葉は絶対それじゃ満足しない。Mサイズを買ってあげないと頬を膨らますだろう。Mサイズのシェイクはこの店だと230円もするんだぞ。500mlの四ツ矢サイダーより高いじやねえかよ。

考えただけで頭痛くなってきた……。

「不幸だ……っ」

俺は右手を額に当て、かの有名な考える人のポーズを取り、小さく呟いた。

まあ、結局Mサイズシェイク買ったよ。暮葉の可愛さに免じて大サービスだ。

その後、俺達は駅の近くにある洋服店に行き、服でも見ようかな〜と思ったが……考えてみればまだ9時代であり、まだ開いていない店もあるようだ。

10時開店の店って多いからなあ……それまでなにしていようか、

と議論した所、とりあえず中央公園に行くことにした。

デート……なのかなこれ。まあとにかく、デートで公園は定番である。

この公園の中央には人工池があり、それがそれっぽい雰囲気をつけている。まるでカップルにデートでもしなさいこの野郎、と言っているかのようである。

まあ、どこにでもある公園なのだが、

「こんな街中にも緑ってあるのですねっ」

暮葉はどつやらご満悦のようである。どつやら、彼女は都会の中心に 緑が広がっていることに驚いているようだ。

でも、日本人の俺からしてみれば、そんなに珍しいことでもない。

「そりゃああるだろ。東京にだっていっぱいあると思っぞ」

「もきゅー!? と、東京にもあるのですかっ!?!」

「ああ、多分この公園より大きいんじゃないかな」

「ほ、あ……………わ……………」

すっかり感嘆し、暮葉は目を丸くしていた。

まあ……………わからないけど、多分嘘は言っていないハズだ。多分だけど、ここよりも日比谷公園のほうが広いだろうし、何より東京には皇居があるからな。

俺にとっては慣れた街であっても、暮葉にとっては珍しいことだらけであった。

「いないわね……っ」

私　国宗伊吹は仲良しな圭介と暮葉と追跡し、千葉まで来てしまったんだけど……千葉駅の混雑でアイツらを見失ってしまったわ。アイツら、どこに行きやがったのかしら？

覚悟しなさいよ圭介……私から逃げられないわよ。誓ったんだからね、アンタのことを地獄の果てまで追い回すって。とにかく、アンタと暮葉の関係　調べさせてもらうわ！

とりあえずまだ10時前……圭介達が行きそうなお店はまだ開いてないわね。多分そう遠くには行ってないと思うけど、もしかして中央公園かしら？

ありえるわね……あそこ綺麗な人工池があるから、デートにはもってこいかも。

そもそも、なんであの2人がデートしてんのよ……っ。  
ばか、圭介のばか……。

「……あれ？」

今、私の数十メートル前の交差点に、見覚えのある人達の姿があった。

間違いない、わよね……？　あの背が高くて忌々しいくらい胸が大きくて、ちよっとクールでカッコいい系のあの人……風紗だよな？　もう一人の明るい髪色のロングヘアの子、あの人は確かうちのクラス……。

それからもう一人のあの……コスプレしている人は知らないけど、風紗達……どうして血相変えて走っていたのかしら？

「あっちは確か中央公園……？」



気になる……圭介と暮葉の関係も気になるけど、凧紗達のことも気になるわ。それに元々中央公園に行くつもりだった。凧紗達の後を追ってみようかしら……ッ。

第189話 早朝の街遊び（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「国宗のアレ、完全にストーカーだよな」

伊吹「す、ストーカーじゃないわよっ！ 私はただ、その……っ」

重原「大好きな圭介を盗られたくない、圭介の貞操を守りたかったのかい？」

伊吹「ち、ちがうわよっ！ た、ただアイツが暮葉に変な事をしな  
いか心配だっただけよ。それ以外に意味なんて……な、ないんだか  
らっ！」

大吾「ツンデレ乙」

重原「ツンデレ乙だね」

## 第190話 中央公園にて

早朝、暮葉と2人で古宇坂を抜けだし、千葉まで遊びに来ていた俺達。しかし、あまりにも時間が早過ぎた為、俺達が行く店の大半はまだ閉まっていたのだ。しかし、中央公園で暮葉と色々な話で盛り上がっていた俺は、ふと腕時計を見て時刻を確認する。

しかし時刻は10時丁度、多くのお店が閉業を始める時間になった。

「お、そろそろ10時だな」

「けーすけ様っ！ そろそろ色々お店が開く頃なのですっ」

「そうだな、どっか行きたい所とかないか？」

「もきゅう……あっ！ 拙者、ア メイトに行ってみたいのですっ  
！」

ア メイトとは、これまた意外な場所だな。確かに異世界人の目から見たら、あれだけアニメや漫画関係のグッズが揃っている店は、超がつくほど珍しく映るのだろう。

「ただどなあ……俺はそこで嬉しい、というか一番楽しめそうなんだけござ。」

「ア メイト？ 服とかじゃなくていいのか？」

「はいっ、お洋服は亜紀さん達と何度も見に行ってますので」

「ああ、なるほど……」

最近暮葉の私服が増えたような……と、時々自分の洗濯物を洗濯機に放り込む時、なんとなくそう感じていたんだけど……そういうわけだったんだな。

ちよつと安心したよ。暮葉も普通にこの国の生活に馴染んで、ちゃんと友達も作って遊びに行っているんだな。よかつたよかつた、毎日は楽しいほうがいいよね。

「でもア メイトか、ああいうお店に行く機会はないですよっ」

「そりゃあ伊吹も小坂も、アニメとかには興味ないしなあ」

むしろ、あれが普通の女子高生の姿なんだろうけどさ。

まあ、暮葉は残念ながら俺と葵に囲まれて生活しているんだ。気付けば、暮葉も相当そういうものが好きになってた。完全に俺と葵の趣味が伝染してしまったんだろう。

それだけに、欲しいものはあるのだが、一人で行くのは恥ずかしい。かと言って伊吹や小坂はそういうものに興味がないから、誘って連れていくこともできない。

コイツもコイツなりに 悩みを持ってたんだな。

「だから、えと……けーすけ様、お願いします！ 拙者をア メイトに連れてってください！」

顔が赤い、暮葉も相当恥ずかしいんだろう……だ、だけど暮葉……。

声がかすぎるだろ……お犬様のお散歩をしていたオッサンや主婦が、暮葉の大声かつ恥ずかしい言葉に反応して、俺らに注目してんじゃねえか。

でもなあ……暮葉を説教したって始まらないし、ここは紳士的に

対応しよう。

「わかったよ。じゃ、とりあえずア　メイトに行くとしようか」

「もきゅ！　ありがとうございます、けーすけ様っ！」

「お……あわッ!？」

暮葉はにぱあ、と、太陽のような笑みを浮かべ、俺の胸に飛び込んでくる。気持ち良さそうにすりすりと、俺の胸板に顔を埋めて、首を横に振っていた。

幸せそうで何よりだ。そう思ってるんだけど　アカン、これは俺も気持ちいい。優しく抱きついてきた暮葉だが、それがもうね……説明しなくてもわかるでしょ。

女の子。

そう、女の子の感触だ。苺のように甘く、マシユマロのように柔らかく、欲望的な意味で男の闘争本能を駆り立てる　そんな女の子のある意味危ない感触だ。

もう勘弁してくれ！

俺はね、ラノベに出てくる主人公のような耐性なんてない、一般男子だよ。要するに我慢の限界が訪れるのもヤツらより早いわけだな、このまま暮葉に甘えられると……うん、まずい。

思えばチャンスかもしれないが、朝っぱらからってのもどうかと思っ。

やっぱ　告白とか、そういうのをするなら夕方でしょ。

「暮葉、そろそろ行かないか？」

「……っ？　ッ！　もきゅ、そうですねっ」

俺の言葉で何かに気付いて恥ずかしくなったのか、暮葉が俺からパツと離れる。

そして、俺達がア　メイトに向かって歩き始めた、まさに一歩前で、ピクン、と暮葉が顔を上げて、

「この気配、この魔力……っ」

突然、暮葉が叫んだ。

「けーすけ様っ！　伏せてくださいっ！」

「おわっ！？」

俺は突然押し倒され、暮葉にマウントを取られてしまった。えっ、なんで……なんかものすごくエロい展開になっている気がするぞ。俺の真上に乗っかる暮葉。これって……つまり、この体位は騎乗位であって、このまま暮葉が　ってなに考えてんだ俺は！

違うだろ。暮葉の表情を見る、なんか真剣だぞ。暮葉がここまで真剣で、かつ俺を突き飛ばすように押し倒したってことは……。

その時、

カチン、と不自然な金属音が響いた。

その瞬間

「き、ゆ　ッ！」

「う、あ　ッ！」

シユパン、と金属が切り裂かれる音と、直後に爆発音のようなものが炸裂。爆風のような凄まじい風と砂埃が俺達を襲う。

やがて爆風が収まり、自然の風で砂埃が流されていくと、俺と暮葉は爆音が轟いた所を見る為に上を向いた。どうやら、今のは何かが公園内の街灯を切り裂いた音のようだ。スパン、と夜になれば灯がともる街灯が、真つ二つに切断されていたのだ。

一般の人達も見ている中でのこの騒動。

この時 俺は確信した。

「まさか……魔法使いか？」

「そのようですつ。折角いい気分でしたのに……奴らもしつこいのですねっ」

全くだ。俺も暮葉も今 最高に機嫌が悪いぞ。

何故なら 折角のデートっぽい何かを妨害されたからだ。

「暮葉、奴らの場所がわかるか？」

「えっと……あつ！ けーすけ様後ろっ！」

「……あ？」

暮葉に言われて振り向いた時には 既に遅かった。

接続棍棒フレイルと言う、柄の先に鎖などで打撃部を接合した武器を持つ、夏なのに灰色のコートを着ている変な男が突っ込んでくる。

男は接続棍棒フレイルを振りまわし、穀物と呼ばれる打撃部分が飛んでくる。ピュウっと言う嫌らしい風を切る音を立てながら。

「が、あ……ッ！」

こめかみに穀物を打ち込まれ、ぐらん、と視界が揺らいだ。フラ

フラだ、頭もクラクラとしていた視界もぐにやぐにやである。そのせいか、バランスを崩した俺は倒れ込んでしまった。う、ぐ……強烈だったみたいだ。気を抜けば気絶してしまいそうだ。

「……くっ！ 曲者、くせものけーすけ様は渡さないので……っ！」

視界が回復してきた。ざっと周囲を確認、一般人の数が多いな……一本、俺を襲ったコートの男のほかにも、槍や剣を持った貧乏くさい雰囲気の人達が現れ、3人が暮葉を囲んでいた。

武器を持っているのが3人……まずいな。人も多いし、こんな街中だ。いつ警察が来るかわかってもんじやないから、暮葉も一期一振を振り回せないでいるようだ。

クッソ……早くなんとかしねえと と、思った、

「あ、ぐあッ！」

その時、誰かが飛びかかり 剣を持っている男が地面に落ちた。倒れた男の手からガランゴロンと剣が放れる。どうやら、今の一撃で気絶したようだ。

さらに もう一人の槍を持つ男も、

「ッ！」

鉄球が男の後頭部を襲う。

ゴン！ という鈍い衝撃が響いて男は倒れた。今ので後頭部を強打した男は、気を失ってしまったようである。あらま……白目剥いてるぞ。

しかも、男の持っていた槍が俺の近くに落ちてきた。

さて、あとは一人だな……フレイル接続棍棒を持つコートの男。コイツさ



えぶつ飛ばしてしまえばこの騒動は終わる。

この調子だと、突然乱入してきた人達が暮葉が片付けてしまいうだけど……でも、俺はアイツに<sup>フレイル</sup>接続棍棒で殴られたんだ。このままじゃ 気分が悪いよな。

「こんの 大馬鹿野郎ッ！」

俺は近くに落ちていた槍を投げつけ、注意を槍に向けさせた。男は俺が投げつけた槍を避けるので精一杯だった様子だ。辛うじて槍を避け、ヒヤヒヤと冷や汗を流しているようである。

つまり 男は隙だらけ。

飛ぶように起きあがった俺は、その隙を突くように 瞬間的に 男の懐に潜り込み、

「お、るあアあっ！」

男の顔面に固く握った右の拳を撃ち込んだ。低い姿勢から殴打したことにより、下から突き上げるような衝撃が走ったようだ。男の身体が浮き上がり、頭も大分揺さぶられたようである。

男の手から <sup>フレイル</sup>接続棍棒が放れた。

「あ、ぎっ……！」

うめき声を上げ、口から血を流しながら俺を睨む男に、俺はさらに拳を叩きこむ。

「さっきのお返しだ、このクソ野郎っ！」

叫びながら突っ込み、

ゴン！ という鈍い打撃音が炸裂する。

全体重を乗せた一撃は容赦なく、男の鼻の真ん中に食い込み、今度こそそのまま地面に叩きつけてやった。さっきの甘い一撃とは違うんだよ……。

背中から落ちた男は、ぴくぴくしているだけで動かない。俺はホツとした……が、まだ脅威は去っていない。

「けーすけ様っ！」

「暮葉！ 狙撃のほうは！？」

俺は暮葉に問うか、暮葉の口を開けない。

代わりに 後ろから数人の声が聞こえてきた。

「大丈夫、そっちはミネットがやっておいたよ！」

「多分、もう敵はいないハズだぞ」

【心配しないで。4人全員、みんなの力で倒したよ】

「……えっ？」

振り返ると、ここにはいないハズの人達が 勢揃いしていたのだ。

「あ、明智……白藤っ？」

「それにミネットさんまで……もきゅ、ど……どっになってるのでしようかっ？」

確かに暮葉の言う通り、どうなってるんだらうこれ？

なんで、明智達が人の危機を救うヒーローのように 颯爽と登場したんだろうか。

しかも明智に白藤にミネットの組み合わせと来た。なに、このありえない3人組は……？

「さて、藤島 今から調布に行くぞ」

「えっ？ ちょ、待て明智！ どういうことなんだよ!？」

なんでいきなり羽田なんだよ。調布ってやっぱりアレだよ、東京の調布だよな？

でも調布って……何しに行くんだよ。調布に何かすごい場所とかあったかな。

「あ、明智殿！ どういうことなんですか!？」

「詳しい事は調布までの移動時間中に説明するんだよ!」

【だから2人とも一緒に来て、お願い】

「な、なんでえっ!？」

やっぱりわからん!

何故だ、そもそも明智と白藤とミネットが一緒にいること自体信じられんが、それ以上にどうして俺達は調布に行かなきゃいけないんだよ。

魔法使いにも襲撃されるし……わけわからん。

え〜っと、楽しい街遊びは一体どうなっちまうんだ……？

第190話 中央公園にて（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ラーメンはやっぱ味噌だよな！」

黒木「ふん！ 味噌とかニワカだろ、やっぱとんこつだぜ！」

赤佐「みんなわかってないなあ、同じ豚骨でも豚骨醤油が最強や」

大林「なんだよ、塩ラーメンが結局一番だろ？」

大吾「馬鹿野郎！ 結局醤油が一番人気なんだよ！」

圭介「いや、味噌ラーメン最強だから！」

黒木「豚骨だ！」

赤佐「だから豚骨醤油って何度もゆーてるやろっ！」

大林「塩ラーメンナメるなよっ！」

大吾「醤油が一番！ 異論は認めねえよ！」

伊吹「男って……ホントに馬鹿ねっ」

暮葉「拙者はそばのほつが好きなのですっ」

ちなみに作者は味噌ラーメン派。

## 第191話 調布飛行場

明智達に無理やり連れられ、俺達は現在鉄道で調布に向かっていた。果たして、調布市には何があるのやら……っ！か、明智達の目的って一体なんなんだ。

あと、どうして明智と白藤とミネットと一緒に行動してんだよ？ 一度沸いた疑問は、膨らんでいくばかりであった。

「はあ？ これから調布の飛行場に行く!？」

「うん、単純に言っとさういう事……だよな、ミネット?」

明智に話を聞く限り、俺達はこれから調布にある飛行場へ行くらしい。調布飛行場って詳しくは知らないけど、確かすごい小さな空港があるだけだった気がするぞ。

なんでよりによって調布なんか……?」

「そうだよ。これから硬質のノームをみんなで退治しに行くんだよ」

「退治って、鬼退治みたいなノリかよ……んで、その硬質のノームって何なんだよ?」

まあ、ミネットも一応アルファ隊の隊員らしいし、多分魔法使いだとは思っけど……。

けどなんか引っ掛かるんだよな。いや、硬質のノームって奴は知らないが、似たような名前を何回も聞いた事があるような……っ！

「赤の軍神の一人なのです」

「赤の軍神？ ホントか暮葉？」

「はい、確か土の精霊の力を持っている天才魔法使いです」

「硬質のノームは今、遠くで大規模震災術式を組んでいるんだよ」

「聞いたことがありますのですっ。確か大規模な儀式場を必要とする代わりに、一国家を崩壊に追い込みかねない大地震を起こす大魔法なのですっ」

精霊の力だの大規模震災術式だの儀式場だの……もう、一般人の俺には理解不能だ。

「だけど、これだけはわかった。その術式が完成したら 古宇坂、いや、日本という一国家が消滅するかもしれない……らしい。」

「あれ、でもおかしいな。サヴィエトの目的は俺を捕える事なのに……。」

「ちょっと待て、なんで俺を捕まえる為に国ごと潰すつもりなんだよ、連中は？」

「圭介様拘束の先にある目標を果たす為かも。要は世界征服、レムリア 特にロジーナに対する総攻撃を仕掛ける為には、沢山の兵隊が必要なんだよ。だから、サヴィエトは日本を占領して領土を獲得し、日本の国民を含む全てを利用するつもりって、ミネットの部隊の隊長が言ってたんだよ」

ミネットの部隊の隊長って……要はアルファ隊の隊長 リーリヤさんじゃねえかよ。

まあそれはともかく、知らない間に随分大事になってるんだな……

…この戦い。

いつの間にか、俺の周囲や古宇坂だけでなく 世界を巻きこむ事態に発展している。

コイツはちよつと深刻だぞ……下手すりゃ第三次世界大戦かもしれないぞ。

サヴィエトが日本を占領し さらに力をつけたら……な。

「じゃあ、ミネットはソイツを阻止する為に行動してるんだな」

「うん！ 久々の大きいお仕事なんだよ！」

「そ、それじゃあ明智殿と白藤さんは？ お二人はどうしてミネットさんと一緒に行動しているのですか？」

ミネットが無い胸をえっへん、と張っている。

その横で、暮葉は俺も気になることを明智と白藤に質問した。

「私達はこの子に協力を仰がれたただけだぞ」

【しかも、私達と凧紗は仲間】

「えっ？ つまりどういう事なんだよ？」

第一、明智と白藤には全く接点がないだろ。そりゃあ2人とも、普通の人間には使えない特殊な能力を持っているが、だからって2人が接触する機会なんてあったか？

まあ、世の中なにながあるかはわからないモンだ。事實は小説よりも奇なり、きつと2人が接触するようなイベントが、俺の知らない間に発生していたんだろう。それで、たまたまウマが合ったから友達になったのかもしれない。よかつたな白藤……俺以外にも友達が

出来て。

……と、思っていたけど、そんな安易なものでもないらしい。

「だから、私達はフレンドと言う組織の仲間なんだ」

「ふ、ふれんど……ですかっ？」

「しかも友達じゃなくて組織かよ！」

「今の所メンバーは私も含めて5人。1人を除けばみんな何らかの特殊能力を持っているぞ」

これなんて某学園都市の暗部組織？

これで男1人、女4人だったらただのアイテムじゃないかよ。いや、実際フレンドの男女比なんてどれくらいだか知らないし、そもそもフレンドの存在自体 今日初めて知ったよ。

「で、それってどういう組織なんだよ？」

「元々は打倒佐井学園の為に雪乃が作った組織だぞ」

「ゆ、雪乃って、まさかあの西園寺か!？」

「もきゅ!？ 雪乃さんが創設者なのですか!？」

「そうだぞ。だから今回は専門外の仕事なんだけど……そこで、ある程度事情を知っている私と白藤が派遣されたんだ。雪乃含む残りの3人は今も対佐井学園戦に向けて準備中だぞ」

そうか、ようやくわかったよ。西園寺が言っていた私たち。その



正体はフレンドっていう組織の仲間　つまり明智達だったんだ。それにしても、対佐井学園……か。考えてみれば俺と暮葉も佐井学園とは無関係じゃないんだよな。

佐井学園が行っていた特異点潰し。その特異点潰しの阻止に協力した俺。

確かにあれ以降、超能力者の襲撃はなくなったが……それでも、佐井学園は暮葉達を狙って何かを企んでいるかもしれない。

下手をすれば俺も　連中のリストに登録されているかもしれない。

「……あ、あの、拙者も協力しましょうか？」

「ん、大丈夫だ。確かに戦力不足感はあるけど……木下は木下の役目があるだろ？」

「そうだよ木下先輩っ。ミネット達はアルファ隊なんだよ」

「にははは、そうでしたね……っ」

協力したくても出来ない暮葉であった。でも、協力したほうがいいよな……友達が自分から危険な戦場へ身を投じようとしている。かと言って、何もしなけりゃしないで危険だ。佐井学園は何かを企んで次の作戦を始めてしまうかもしれない。

だから、その前に学園ごと倒してしまっつてわけだな。でも、それをたつたの5人で……危険すぎるだろ。

「だったら俺がお前らに協りよ　」

「大丈夫、それより藤島は色んな人達に狙われているんだ。大人しくして欲しいぞ」

【私も、これ以上圭介に負担をかけたくない】

「お前ら……」

なんでだよ……5人でやるよりは、多分マシだと思つのに……。でも、考えてみれば相手は佐井学園。超能力者だけが敵とも言えない。8月17日に古宇坂を襲ったあの黒ずくめ達のような、特殊部隊が佐井学園にはあるかもしれない。

もしも銃を使う相手がいたら 俺は力になれない。  
クソツ、結局役立たずかよ……俺。

『まもなく調布、調布、折口左側』

どうやら、俺達が乗っている列車は調布に到着したようだ。ここから調布飛行場へ向かうのか。調布飛行場……結局何しに行くんだろう。

まさか 硬質のノームは調布で術式を組んでいるのか？

それから数十分後、俺達5人は調布飛行場の土を踏んだ。  
調布飛行場。

元々旧日本軍が飛行場として使用していた所を、戦後アメリカが占領し、その後返還されて現在では小さな島へ行く便が来るのみの小さな都営コミューター空港である。

「小さいとは聞いていたけど、実際に来てみると結構立派だな……」

腐っても空港。調布飛行場は滑走路こそ短いけど、それでも立派な空港である。建物も滑走路もよく整備されており、比較的小さな航

空機が複数並んでいる。

伊豆大島行きの旅客機が、離陸する姿も見られた。

「あの、明智殿。もしかして……飛行場ってことは飛行機に乗るのですかっ？」

「そうだぞ。今回は国外に出るんだ」

「もきゅ！？ こ、国外ですか！？」

おいおいお、国外って……ありえだろ。

ここが羽田や成田なら、まだ国外ってのも納得できるかもしれないけどさ。

「明智、調布って国内線しかねえんじゃないのか？」

「そうだけど、今回はミネットが特別に手配してくれたんだぞ」

「うん、あれだよっ！」

ミネットが元気よく指差した方向に、一機の不自然な航空機が駐機している。垂直尾翼には不自然に塗装を塗り潰したような日の丸が描かれており、形状もまるでコンコルドである。見た目は小さなコンコルドという感じだけど……なんなんだコレ。

小型のジェット機なんだろうけど、あんな機種この世に存在してたか？

「もきゅ！？ あ、あれは 超音速魔動旅客機じゃないですかっ！？」

「ん、知ってんのか暮葉？」

「はい、ロジーナ製の航空機なのです。確か時速7000キロは出るとかで……」

「な、7000!?!?」

時速7000キロも出るだなんて、どう考えてもスペックおかしいだろ。そんなに出したら中の人大変じゃねえか。それ以前に機体が見つつかよ。第一、ジェット機じゃないのかよ。

異世界恐るべし……SR-71を超える火葬戦記級の航空機、あったんですね……。

「改めて聞くと凄まじい速度だぞ……っ」

【これが科学と魔法が融合した結果、速い速い】

白藤、それは褒めてるのか？ それともかなり馬鹿にしているのか？

まあとにかく、馬鹿みたいな航空機だとはわかったよ。

問題は　これで何処に行くかだよな？

「なあミネット、国外つてどこの国に行くんだ？」

「ポルトガルだよ。この世界の国のことは多分、圭介様のほうが詳しいと思うんだよ？」

「わ、what's?」

「だから、ポルトガルだよ？　首都はリスボン、サッカーで有名な

国かも」

「うげっ！ よりによってイベリア半島の端の国かよ！？ 遠すぎだろ！ 2日後にテストあるのに何泊何日の旅行だよ！？ つーかパスポート持ってねえよ俺！」

「大丈夫だよ！ 超音速魔動旅客機なら多分1時間半くらいで到着するから、短時間で硬質のノームを倒せばテストには間に合うかもあとパスポートはいらんのだよ。海外旅行じゃないし、第一ミネツト達の行動が公になつたら国際非難間違いなしかも」

「なるほど、そういうわけかあ」

つて、関心してる場合じゃねえよ。

1時間半の地獄のフライトで行けるポルトガル、しかもパスポートも無し。万が一硬質のノームを倒せなかったら、死ぬかテストを受けられないかの二択のみ。

あれ、俺達 とんでもない事件に巻き込まれていないか？

そりゃあね、タダでポルトガルに行けるのは嬉しいかもしれないけど……魔法使いと戦う為にテスト前に行くポルトガルなんか嫌じゃ。

せめてテストが終わってから行きたいよ、ポルトガル旅行は……ッ！

「と、いうわけでミネツトはここらへんで失礼するんだよっ」

「えっ！？ お、お前は行かないのかよっ！？

「木下先輩がない分、ミネツトは日本で頑張るんだよっ！」

「なんだそれ！？ 事情を知らない俺らに押し付けてお前は安全席で御見物かよ！？ ちくしょう、なんていい御身分なんだ！ なんて俺らだけで渡航せにゃならんのだっ！？」

「まあまあ、仕方ないですよけーすけ様っ。早く硬質のノームを倒して、ポルトガル旅行を楽しみましょうよ」

「く、暮葉お前っ、ア メイトはいいのかよ！？」

「拙者、ア メイトよりも海外旅行のほうが貴重だと思つのですっ！」

どうしてそこら辺だけ考え方が一般人なんだ、暮葉は。

い、嫌だ……俺行きたくないっ！ テスト前なのに外国になんか行きたくない！

「せ、せめて ポルトガル旅行はテスト終了後にしてくれええええええええええッ！」

こうして俺は、行きたくもないのに 何故か日本を出る事になつてしまった……。

アイツらを追跡し始めてから何時間経過したのかしら。今、私は何故か 調布にある飛行場に駐機中の飛行機の影から、アイツらの様子を窺っていた。

事の始まりは中央公園で凧紗達を発見したあたり。私は凧紗達を

追跡し、中央公園で圭介達も見つけたんだけど……何故か、圭介達は変な人達と戦っていたわ。それで、その後凧紗達と合流した圭介達を追っていたら 何故かここにたどり着いた。

どういうわけ？ みんな飛行場でなにをするつもりなのかしら？

まさか、飛行機に乗ったりしないわよね……？

「もしもし？ ああ………えっ、そろそろフライト？ 了解した………おう………おう、わかった。今行くからな、それじゃまた後で」

不意に誰かの声が耳に入る。

声の主はたまたま近くにいた、客室乗務員の男性。誰かと電話しているようなね、会話の内容からして多分同業者との電話だと思っわ。

あっ！ あの人の、携帯電話をポケットにしまった瞬間 圭介達のほうへ向かったわ。

しかも、改めて圭介達を見ると、なによ みんな搭乗中じゃない。

やっぱり圭介達は飛行機でどこかに行くのかしら。それで、圭介達に乗る飛行機の客室乗務員があの人なのかしら。気になるわね………ていうか、この後どうしよう？

「……っ」

背中、しかも服の裏側に私は竹刀を隠し持っているわ。毎日携帯しているけど、どうやらコイツを使う時が来たようね。本当はいけない事だっわわかってんだけど………でも、仕方ないわ。

決めたもの。圭介 アンタのことを地獄の果てまで追いかけるって。

だったら私も飛行機に乗るしかないわ。その飛行機に乗る為には私が男の人の代わりに客室乗務員になればいいのよ。

その為には 悪いけど犠牲になってもらうわよ。

「ッ！」

私は服の中から竹刀を取り、しっかりと柄<sup>つか</sup>を握る。狙いを定めて、私は駐機中の飛行機の影から飛び出し、男を追うように前へ跳躍する。両手で固く握った竹刀を振り上げ、さらに走って男の人に接近してゆく。そして 隙だらけの後頭部を打突した。

「ぐ、ああ……て、めえ……ッ」

後頭部への一撃で気を失い、力を失った男は地面にゆっくり倒れる。真正面から地面に落ちた男はそのまま動かなくなった。やったわ……計画通りよ。

私、相当悪い事してるわね……でも、圭介達が気になるのよ。アイツら 今度はどんなトラブルに巻き込まれてるのかしら？ それを知る為、そして万が一の場合は圭介達に力を貸す為、何より……圭介と暮葉の関係を調べるために 私はあの飛行機に乗るわ。

ちよつとこの人の服を借りて、客室乗務員としてね。



第191話 調布飛行場（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「なにこの国宗、ちょっと怖いっ」

重原「そうだね。圭介の為にストーカーしてるもんね」

伊吹「なっ！？ す、ストーカーじゃないわよ！」

大吾「では被告人、どう弁解しますか？」

伊吹「あ、アレはアレよっ！ えっと……そう、浮気チエックよ！」

重原「国宗さん、圭介と付き合ってたっけ？」

伊吹「っ！？ ち、違う！ 付き合っていないし好きじゃないわよっ  
！」

大吾「はいはい、んで、結論 恋する乙女ほど怖い存在はない」

重原「そうだね、ストーカーは立派な犯罪だしね」

伊吹「だから ストーカーじゃないわよっ！」

## 第192話 ポルトガル共和国

西ヨーロッパのイベリア半島に位置する国家、ポルトガル共和国。ユーラシア大陸最西端の国家であり、大航海時代に大きく栄え、ヨーロッパでは最初に日本や中国といった、東アジアと接触を持った国家である。

今でこそ当時と比べれば衰退してしまったものの、数々の世界遺産を残し、特に最近ではサッカーなどで人々を盛り上げている国だ。つで、なんで紹介をしているかというと……来てしまったからだ。ポルトガルに。

「暮葉、ここ……どこだよ？」

「え〜っと……り、リスボンらしいのです」

「この国の首都じゃねえか……くそ、ホントに来てしまった」

ここはポルトガルの首都、リスボン。

なんで首都にいるかというと、首都リスボンにはポルテラ空港という、リスボン市域の北部にある大きな空港があるからだ。ここは市街地に近く、交通の便も大変よろしい。なので、とりあえず俺達はリスボン市街地へ向かい、お昼にポルトガル料理を食べる事にしたのだ。

それにしても……。

「ポルトガルって汚いイメージがあったけど、古宇坂の路地裏より綺麗な」

「藤島……それはポルトガルに対する偏見だぞ」

【風紗、大丈夫。リスボンは誰だって居れば居る程魅力的に感じる街、らしい】

「白藤さん、詳しいのですねっ！」

【滞在先のことは大体把握してる。わからないことがあつたら聞いてもいい】

「ホントですか！？　じゃあじゃあ、ポルトガルで一番美味しい甘い食べ物はい」

暮葉にとつても初めてなんだろう、日本以外の国に行くつてのは。つーか、俺も国外に足を踏み入れるのは初めてで、英語も全然話せないから結構緊張してるんだが……でも、暮葉に比べりゃこの緊張も大したことはないのだろう。それと同時に　知りたい事も沢山あるハズだ。

ところでふと思つただけが……声は出さず、携帯に文字を打つ白藤の会話方法。

誰も変だとは思わないのか？

それとも、思つていても口に出さないいい子なのかな？

まあ……気にしてもしょうがない事ではあるよな。これも白藤の個性であろう。

「んで、明智。なんでアツサリ超音速魔動旅客機が空港に着陸出来たのかも気になるけど、それより飯つてどこで食べるんだよ。オススメのレストランでも知ってるのか？」

「うん、私は知らないけどな。でも、白藤が美味しい所を知っているらしいんだ」

「へえ、白藤って旅行か何かでポルトガル行ったことあるのか？」

【ない】

うわっ、随分アツサリした回答だなこりゃ……まあでも、白藤は元々サヴィエトの一員でスパイ活動をしていたくらいだ。情報収集は得意中の得意なものだろう。

「う、ご飯……楽しみなのですっ！」

「お前は食い物しか脳にないのかよ」

「し、失敬な！？　けーすけ様だってどーせ外国人さんのことしか脳にないですよね！？」

「それこそ失礼だろ！　俺の脳内年中ピンク色だと思ったら大間違いだ！」

「もきゅ？　違うのですか？」

「あれ、藤島は変態のハズだろ？」

【圭介、エツチな人だって聞いているのに】

「お前らな……」

なにこの反応、なんだか目から汗が出てきそうだし……うう。

俺、そんなに変態に見えるのかな？

いや、認めるけど……ストレートに女子3人から言われるのはや

っぱキツイ。でも外国人のお姉さんに興味があるのは間違いじゃないしな。うん、ぶっちゃけ悪くない。ロリロリしていない分お姉さんな感じが半端ねえぜ……これはこれで男心を<sup>くすぐ</sup>撥るな。くそっ、外国思ったよりいい所じゃないか。

「藤島、お前やっぱり女のこと考えてるだろ？」

「やっぱりけーすけ様はHENTAIですっ！」

【洋モノもイケるんですね】

「ちちちち、違うわっ！　っーか白藤その文はやめい！　なんかイヤらしいわー！」

【それほどでも／＼】

「褒めてねえよ！　しかもなんだよ『／＼』って！　照れてるつもりかよっ！」

【私なりのテレ表現】

「ちくしょう……下手なSSかよ。もっとう人間的な反応をくださいっ！」

俺と白藤はこの後もしばらく、おバカな話で盛り上がっていた。

うん、白藤は声を出さない　携帯に文字を打って会話をする不思議な子だけど、それでも彼女と会話をしていることには変わりない。いやいや、楽しいもんである。

「もきゅっ、いつも人間的な反応してますのに……ッ」

「藤島は馬鹿だぞ……っ」

ん、後ろで何かを呟いている2人が。しかも不機嫌そうだな……どうしたんだ？

しかし明智よ……折角だから路面電車乗らないか？

なんかもう、坂道が多くて疲れてきたよ。リスボンって坂道多いんだね……。

それから数十分が経過、坂道を何度も上り下りし……ついに到着した。

今日のお昼ご飯を食べるレストランに。

「テーブルクロスに立派な椅子……ゴージャスなのです！」

「お、おい……妙に立派じゃねえか？」

「当然だぞ。その……奮発したからなっ」

【どう、すごい？】

「いや、すごい何の以前に……金は？」

「大丈夫、ミネットだったか？ あの子が予約したらしいぞっ」

「おお！ ミネットさんグッズヨブなのです！」

【ミネットはいい子いい子】

「あ、アイツ……何者なんだ？」

いや、どう考えたってミネット一人にそんな財力あるとは思えないし、これはきつとアルファ隊が最高級のレストランを用意したんだな。まさか……俺がアレだから？ 一応アレクサンドルの子孫だから気を使ったりするのだろうか？

俺は別に庶民の食い物でも、ポルトガルのものは十分新鮮に思えるのに……。

まあでも、お金の事を気にしなくて済むのなら折角の機会だ。たらふく食べてやろう。ポルトガルの高級料理とやらを。

「League uma visita, a ordem? habitual?」

その時、店員さんが何かを言ってきた。

うげ、英語じゃない……これポルトガル語か？

ちくしょう、英語すら話せないおバカに俺には理解不能の意味不明です。つーか日本人の大半は意味不明だろう。せ、せめて……せめえ英語で喋ってくれえーっ！

「みんなは何を食べたい？」

「えっ？ 明智殿、どういうことなのですか？」

「えっ、ちょ……もしかしてお前言葉分かるの!？」

「ポルトガル語くらい常識だろ？ とりあえず、私が通訳になるから注文を言ってくれ」

「……………」

じよ、常識……なのか、ポルトガル語って？

まあ確かに、昔ポルトガルという国が強かっただけに、今でもブラジルではポルトガル語が公用語だったりするし、意外とポルトガル語を話す人って多いのかもしれない。

「じゃ、じゃあ俺マオン・デ・ヴァッかってヤツで」

「拙者はバカリヤウ・ア・ブラシュというヤツでお願いします！」

【私はアンコウのリゾット】

こうして聞くと、ポルトガル料理ってカオスだな……。いや、でも食ってみれば上手いハズ。

魚料理って時点で、日本人の国にも合いそうだからな。

「わかった。Arroz de Tamboril, vida da chavinha, canja」

「Com o anterior de sejo sabe r se eu for certo?」

「Sim」

「S?bado para cima diretamente; esperar durante algum tempo」

俺にとっては理解不能な会話を終えると、店員さんは静かに去っていく。

こうして見ると改めて思ったよ。明智、浅間部長の顔の100倍カッコいい……。



でも一つだけ気になるぜ……なんでポルトガル語で地元の人と話せるんだよ？

「すごいのです明智殿！ へらへらでしたねっ！」

【流石、フレンド最高の頭脳派】

「そ、それほどでもないぞ……普通だぞ普通……っ」

とは言いつつ、明智は頬をほんのり赤らめている。はは、コイツ照れてるな。だけど実際明智がすごかったのは事実だ。まさか、ただの高校生が英語以外の言葉をペラペラ喋るとは。流石は俺らの頭脳明智風紗。俺とは頭の出来が細胞レベルで違うモンだぜ。

でも、一つだけ気になる事があるな……。

明智、結局最低土日はポルトガルに滞在、それ以上に伸びる可能性もあるが、確か明智はファミレスが何処かでバイトをしていたはずだ。バイトのほうは大丈夫なんだろうか？

そして明日は俺の生誕17周年記念日であり、同時に明智とつてのあの日だ。俺は明智の言うあの日が何か、今だに知らないのだ。

明智が言うあの日って、一体どういうものなんだろうか？

そんな事を気にしながら 俺はこの後テーブルに置かれた昼飯を堪能していた。

うん、学食の1500倍はうまいな ポルトガル料理。

## 第192話 ポルトガル共和国（後書き）

後書きトークコーナー！

黒木「ここでぶつちやけた話をするぜえ！」

圭介「な、なんだよ？」

黒木「いいか？ まず明智と店員のポルトガル語だ」

圭介「ああ、アレか。明智のヤツ妙にペラペラだったよな」

黒木「そうなんだけど、実はアレ デタラメなんだ」

圭介「……は？」

黒木「いや、だから言葉のまま デタラメなんだよ」

圭介「えっ？ あれポルトガル語じゃないの!？」

黒木「そうなんだけどよ……英語の成績3の作者がポルトガル語理解できると思うのか？」

圭介「む、無理だな……」

黒木「そう、そこで グーグルの翻訳機能を使っただ！」

圭介「なに!？」

黒木「つまり 翻訳サイトの翻訳なんてデタラメ以外の何者でもないのだ！」

圭介「な、なんだってー!？」

黒木「と、いうわけで読者の皆様。作中のポルトガル語はデタラメだぜ？」

赤佐「実際にポルトガル人に言っても、理解できないかもしれないでえ？」

圭介「し、知らなかったでございる……っ!」

舞台がポルトガルなのに、ポルトガル語わからなくてごめんなさいorz

## 第192話 追跡者への……

「み、道に迷ったわね……」

私 国宗伊吹は、圭介達を追ってこんな所にまで来たのはいいなんだけど、どうやら坂道が多く迷路のような街で、私は道に迷ってしまったみたいだ。

どこなのよ……ここは。人の数はそれほどでもない気がするけど、とにかく路面電車と坂道が多くて日本じゃないみたいね。一体ここはどここの国なのかしら。そもそも私、どうして圭介達を追っていたら国外に来ちゃったのかしら。アイツら……一体国外に何の用があるのかしら？

「途中まではいたのに……っ」

そう 途中までは圭介達の姿が確認できていた。

でも今は違う。沢山の人がいた空港で圭介達を見失ってしまった。そのせいで、私は一人圭介達を探すために街中をさ迷っているのだ。でも、どこまで行っても狭い路地に坂道坂道坂道……いい加減疲れたわね。ホントにここは路面電車に坂道ばかりだわ。

雰囲氣的にヨーロッパみたいだけど……ホント、どこの国なのかしらね？

「おやおや……おもしろいものを発見しましたねー」

「ッ！」

いきなり私は声をかけられた。

妙に違和感のある日本語……なによ、現地のナンパ？

もしかして、私のような日本人が物珍しいのかしら。はあ……ほんっと、日本に居ても知らない国に居ても同じね。どうして私っていつもこんな人達に声をかけられるのかしら？

とにかく鬱陶しいので、私は追っ払おうと後ろを振り向いた。しかし 誰もいない。

「……………あれ？」

「こつちですよーこつち」

「……………ッ！」

スーパーヒーローのつもり？ と一瞬思った。だって……………声をかけてきた人が、狭い路地に立ち並ぶ一軒の建物の屋上に 腕を組んで佇んでいたのだから。

「だ、誰よあんた……………？」

「いけませんねえお嬢ちゃん。貴女は確か 藤島圭介の幼馴染なんですよー？」

「ッー！」

あの人……………なんで圭介のことを、なんで私のことを知ってるのよ？ オマケに随分奇抜なファッションね……………着ているものは修道服っぽいけど、どうして修道服の色が黄緑色なのかしら。明るい上にファッションセンスゼロね……………あのおじさんさん。しかも外国人にしては背が低いように見えるし、そこだけは親近感が沸くかもしれない。

するとその時 修道服のおじさんが建物から飛び降りてきた。

「ッ！」

一瞬、ひやっとした。

人が建物から飛び降りた、いくら高層ビルではないとは言え、この高さから人が落ちれば十分死ぬかもしれない。だから私は思わず唾を飲んだ。しかし。

轟！ と突然、レールが敷かれた地面が盛り上がった。

道路から一本の柱が伸びている。それに繋がるように、轟！ という轟音を轟かせながら柱が何本も伸びてくる。気付けばそれは階段のようになっていた。

修道服のおじさんは、軽々としたステップで道路の階段を降りてくる。

変……よね。普通じゃありえない光景が目の前で起っている。ありえない……合宿の時に乗った帆船で体験した時と同じくらいありえない事が起こっているわ。

もしかしてこの人 魔法使い？

「日本の国で大人しくしていてくれればよかったのに……まあ、仮に日本に居ても、古宇坂市は強い揺れと津波で破壊し尽くされるでしょうがねー」

「な、何者よ……あんたっ」

「そう警戒しなくてもいいですよ。別に私は日本人に対して敵意を持っていないわけではございません。でもただあ、そういう命令なので、命令に従って魔術を行使しているだけに過ぎませんよー」

「あんた……サヴィエトなの？」

「ふんふん、基本的に部外者だと聞いていたのですがねー。これは参りましたねー、お嬢ちゃん意外と私達の事を知っているんですねー」

「なによあんた、まさか アイツ 圭介が狙いなの？」

私がそう問うと、修道服のおじさんは右手を振りまわし、

「そうですね……それもありますが、もっと大きな目標がありますよ」

まるで、交番に貼ってある指名手配の人の顔写真のような、邪悪に満ちた笑みを浮かべて意味あり気なことを語った。

なによ……もっと大きな目標って？

「大きな目標ってなに、答えなさいよ」

「少なくとも、お嬢ちゃんにそれを答えるメリットは なにもありませんねー」

「ふ……ふざけんじゃないわよ！ 人の事痛めつけて、あんた何がおもしろいのよ！？」

「それにしても……お嬢ちゃんがここにいると言うことは、ターゲット 標的もここにいますかねー」

修道服のおじさんは楽しそうに笑った。

にっこりと。

でも……楽しそうにそんな事を言う修道服のおじさんに 私は ムカついた。

「……っ！ 言つと思つ？ そんなこと……敵になんか言わないわよ」

「そうですかーいるんですねー」

なに勝手に話を進めてんのよ。確かに圭介達は今この国にいるらしいけど……でも、そんなことがバレたら大変よね。圭介達がコイツに襲われるわ。

だから 何が何でもコイツを止めないと。

「残念だけど、アイツはここにはいないわよ？」

「へえー、では……お嬢ちゃんは何故、客室乗務員の恰好をしているのですかねー」

「……っ！」

「つまり 大好きな幼馴染を追跡してきたのではないですかねー？」

「ち、違うっ！ あんなヤツ別に……好きでもなんでも……っ！」

「ふふふ、最近の若い子は面白いですね。中々好きな人に素直になれない……聞いたことがありますねー。確か……ツンデレってヤツでしたかねー？」

「わ、たしは……ツンデレじゃないわよっ！」



なんなのよこの人、挑発してるつもりなの？  
いい加減にしないと　竹刀でしばらく魔法使いなくしちゃうわ  
よ。

「なるほどそうですねーそれはいい。日本と潰すと一緒に回収する  
つもりでしたので……手間が増えたと言えば増えましたねー。でも  
最近は何式を組む作業ばかりでしたし、いい加減飽き飽きして  
いた所ですねー。そうですねー……これは、中々の暇潰しになりそ  
うですねー」

言い終わると、修道服のおじさんはゆっくりと歩き、私に近寄っ  
てきた。なんだか怖くなってきた私は背中に手を伸ばし、服の中か  
ら竹刀を取り出す。

竹刀を構え、修道服のおじさんを睨みつけた。

「おやおや面白いですねえ、まさか私と戦うつもりですかねー？」

「これ以上近寄ってみなさい。あんたを攻撃するわよ……あんたに  
アイツを襲わせないわよ」

「これはこれは手厳しい。ですがご安心ください　今の私は貴女  
に用があるんですねー」

咄嗟に、修道服のおじさんは右腕を横に伸ばす。  
白く細い右腕。

その老人になりかけたおじさんの細腕には、灰色の何かがまとわ  
りついている。その何かはどうやら地面から吸い上げられているも  
のらしく、次第に腕の周りの何かが増えていく。

なんなのよアレ……もしかして、

「す、砂……？」

「その通り　砂ですよ」

磁石の用に修道服のおじさんに引き寄せられた砂は、緩やかに動きに反し、突かれる槍のような速度で私の身体を貫こうと伸びてきた。

ドッ！　という、空気を切り裂く轟音が炸裂する。

「……ッ！」

私は反射的に砂の槍を避け、もう一度修道服のおじさんを睨んでみる。

余裕。

おじさんの顔には、余裕の一色があるのみ。  
ナメてるわね……あのおじさん、魔法が使えるからって私をナメてるわね。

「なるほど、素人にしては中々いい動きです。以前ポルトガルの警察と交戦した時は、誰もその槍を避けれず身体に大穴が開きましたけどねー」

「ふざけんじやないわよ……こんの外道おじさんっ！」

私は修道服のおじさんとの間合いを詰めようと、一気に大地を蹴って飛びかかる。

間合いは一瞬で詰めた。修道服のおじさんとの距離はすぐに縮まり、修道服のおじさんも若干驚いているような表情を見せる。

しかし、驚きの表情はすぐに笑みに代わり、

「攻めは素晴らしい。でも　華奢ですぐ折れてしまいそうですね」

「……ッ！」

修道服のおじさん目を細めると、両腕を大きく開いた。両腕が開かれた瞬間、修道服のおじさんが立っている目の前の地面が避け、大きな岩石の塊が宙に浮く。

信じられない光景に、私は思わず目を見開く。その時、岩石の塊が動き始め、砲弾のような凄まじい速度で私に迫ってきた。

「ッ！」

間一髪、ギリギリで避けることが出来た。

と、思った　次の瞬間。

「残念ですねー」

修道服のおじさんの声が耳に入ってきたと同時に、ゴッ！　と、衝撃がお腹を襲った。

「あ、ぐあ……ッ！」

鈍い痛みを感じ、思わず身体を屈めてしまう。

揺れる意識の中、道路をよく見てみると　砕け散った岩石が落ちて  
ちている。

それに当たっちゃったのかな……私は？

「最後に自己紹介だけ、しておきますかねー」

「……っ」

薄れる意識の中、修道服のおじさんは一言だけ告げた。

「私の名前は硬質のノーム 赤の軍神の一人ですよ」

硬質のノームという、不思議な名前を。

## 第193話 硬質のノーム

高級レストランでたらふくタダ飯を食べた後、俺達はテージョ川の対岸、バレイロ駅というサド線の駅へ行こうとしていた。どうやら、サド線に乗ればセトウーバルまで行けるらしいのだ。

あーあ、折角いい所だなあって思ったのに、目的が赤の軍神退治だとは……もう一度来るかどうかはわからないし、多分こないと思うけど、次に来るとしたら普通の旅行としてがいいな。

正直に言おう。今回は色々な意味でハードスケジュールすぎるだろ……。

「んん〜！ おいしかったのです！」

「確かに味はよかったなあ」

【同意】

「言つとくけどお前ら、今回は旅行じゃないんだぞ？」

へいへい釘を刺されなくてもわかってますよー明智さん。今回は仕事、赤の軍神の一人である硬質のノームを倒すために、態々日本から大陸最西端の国に来たんだからな。

それにしても硬質のノームねえ……一体どんなヤツなんだろうか。まっ、赤の軍神ってくらいだ。少なくともシルフと同じか、アレ以上に歪んだ性格の持ち主であるに違いない。俺の経験上 サヴイエト所属でマトモだったヤツはいない。

「わ、わかっているのです！」

【大丈夫、目的を忘れているのは多分圭介だけ】

「俺もしっかり覚えてるよ！」

「まったくコイツらはいつも……俺だけお馬鹿&変態扱いだもんな。まあ、お馬鹿で変態なのは自分でもわかってるけど、俺一人だけって……差別だ、こんなの差別だよ。」

「もきゅ？」

「ん？ 木下、どうしたんだ？」

「いえ、あの人がみはなんでしようか……？」

「あ？」

暮葉に言われて、俺達は右を向く。その先には路面電車の線路がありながら、ギリギリ車と列車が通れるほどの広さしかない、狭い路地が伸びている……のだが、

何故か。

どういうわけか、普段は人の集まらない路地に大勢の人々が集まっている。まるで海外の大物件俳優が来日する時の空港のようだな……。

しかもなんだアレ？

不気味に地面が盛り上がり、柱のようになっている所がある。

「な……あれ、どうなってんだよ……おいつ」

「派手に盛り上がってるな、トーテンポールみたいだぞ」

【どう考えても魔術】

「ですね、それも大地をあそこまで操れるのですから　かなりの  
使い手なのです」

「木下、もしかしてそいつ」

「間違いない　硬質のノームなのです」

「って、いきなりボス格の仕業かよ。やれやれ、RPGじゃないんだから。ていうかその硬質のノームはここで何をやらかしたんだろうか。ここまで大胆に魔法を使うってことは、誰かと戦っていたか儀式場のつもりかのどちらかだろう。」

「後者は……ありえないよな。」

「そもそも儀式場はセトウバルで作ってるって話だ。リスボンでは目立つしな、だから俺の予想では前者だと思っけど……硬質のノーム、そいつは一体誰と戦ってたんだ？」

「とりあえず俺、現場でも見てくるわ」

「あっ！　けーすけ様っ！」

「すみません、ちょっと失礼します」

「まあ、まずは現場検証からだよな。俺は現場を見に行く為に人ごみを掻き分け、大地が柱のように尖っている地点を目指す。やがて人ごみを抜けると、改めて惨状目の当たりにする。」

「ひどいな……レールはぐにやぐにや、道路も碎けてしばらく通行不可能。いや、そもそもここまでド派手に石柱が出来てしまったら、二度と道路として利用されないかもしれないな。」

と、そんな事を考えていた　その時。

「……ッ！」

俺の瞳に、信じられないものが映った。  
衝動的にそれを回収する為に前に跳躍し、それを右手で回収する。

「これ……うちの学校の？」

赤を基調とした少しだけ汚れた手帳。

生徒手帳。

初芝高校の生徒なら、誰でも持っているハズの手帳である。

「もきゆう、けーすけ様いきなりどうしたの　あれ？　これって  
……」

「間違いない、うちの学校の生徒手帳だぞ」

「だよなあ……」

生徒手帳と言っても、単に学生証を入れるだけのカバーなんだけ  
どな。あとは数ページだけ初芝の校則が記されているページがある  
のみ。実にシンプルな生徒手帳である。

しかし、一体誰の生徒手帳なんだろうか？

そう思いながら、俺は誰かの生徒手帳を開いたのだが、

「う、そ……だろ？」

生徒手帳の中に挿まれている学生証。

そこに記された名前と見覚えのある顔写真を見て、俺は言葉を失



った。

身分証明書、2年4組10番。氏名：国宗伊吹。

セトウーバルのサン・ジュリアン教会。ここで私は例の術式を組んでいます。

いやいや、まさか 藤島圭介の幼馴染がポルトガルにいたとは思いませんでした。

ですが、これはむしろ私 硬質のノームにとって、かなり都合な事ですねー。なんせあの無駄に頑丈と噂の男を、誘き寄せるいい材料になりますからねー。

邪炎のサラマンダーなんかは、正面突破を得意とするらしいですが……世の中、あらゆる戦いを勝ち抜く上で重要なものは、彼が持っている筋肉ではなく、私がつけている頭脳です。いくら力があっても頭が悪くて使い勝手が悪ければ どんな強者だって弱者となります。

逆に考えましょう。仮に非力でも、頭さえよければ強者となりえるのです。

この素晴らしい方程式に気付いた者こそ 真の勝者になる者なのですなー。

「しかし、やつぱりお酒はフランスのシードルですねー。そうは思いませんか、邪炎のサラマンダー？」

「私はウィスキー派だ」

やれやれ、大柄な白人男性 邪炎のサラマンダー。

この人は相変わらず冷たいお方ですねー。

私と酒を飲むことはありませんし、赤の軍神になる前は神聖教の

同僚でしたのに、大変事務的な会話しか交わそうとしませんでしたからねー。この人、私が嫌いなんでしょうかねー。まあ正直私も邪炎のサラマンダーは、得意なタイプではありませんけどねー。

私の意見に　いつも反対してきますからねー。

「そうですか、まあいいでしょう……お酒はいろいろな種類がありますからねー」

「ふん。で、何故貴様は民間人を巻き込んだのだ」

「民間人を巻き込んだとはひどい言われようですねー。邪炎のサラマンダー？　藤島圭介の幼馴染を一般人とお考えなんですか？」

「当然だ、彼女は何の力も持たない。藤島圭介と我々の事情を知っている、かといって我々にとって害になるわけではない」

「そうですか。ですが、その考えは間違いだと私は思うのですがねー？」

私がそう言うと、邪炎のサラマンダーの眉が僅かに動いた。

「何故だ？」

「事情を知っているから、いいえ　彼の仲間だからですよ」

それだけの理由があれば十分　国宗伊吹も我々の敵。  
そして藤島圭介拘束のために　我々が利用すべき道具となるのです。  
アイテム

「……貴様」

「おや、いいのですかなー邪災のサラマンダー？ このサン・ジュリアン教会は歴史的建造物。増してや信者20億、我々の世界で言う神聖教と同等の規模を誇るキリスト教の施設です。しかも、私はこの施設に日本攻略の為の術式を組んでいる最中です。貴方がここで暴れて、施設も儀式場も破壊されてしまったら……どうなるかわかってますよねー？」

それは当然、レニナにはこつ酷く叱られるでしょうねー。いや、それどころかキリスト教という強大な宗教を敵に回すことになるでしょう。

噂では、キリスト教も魔法使いを抱えているらしいですからねー。まあ、我々赤の軍神が倒せないってわけではないでしょうが……そうなったら、色々と面倒ですから宗教との戦争は避けたいですねー。

「……ふん、相変わらず貴様は嫌な奴だな」

「それはお互い様でしょう。まっ、今回貴方には下がっててもらいたいですねー」

「そうか、なら遠慮なく下がるが 後悔はするなよ」

「はて、どういう意味でしょうか？」

「貴様の大震災術式がどれ程のモンか、一応我が身を犠牲にして味わった事はあるが……その程度で 神国日本が滅びると思わないことだ」

「ほほう、その言い方……貴方はいつから日本人になったのですか

「？」

「残念だが、私はレムリアの島国　ウエセックスの出身である」

「そうでしたねー、ちなみに私はルテティア人ですよ」

「そういえば、この世界の文献に目を通した所、同じ名前の地名がありましたね。」

「ひょっとして　レムリアはこの世界のパラレルワールドなので  
は？」

「……という、馬鹿な妄想もいつかはしましたねー。」

「海と陸の国……ふん、出身国まで敵同士か」

「そのようですねー……ま、赤の軍神に身を置く以上　我々は一  
応仲間ですよ」

「最も、私はサヴィエトの総有主義なんてモンに興味はないがな」

「それは私も一緒です。結局　我々は神を信じる者ですからねー」

「……では、私はこれで引き下がるが　馬鹿な事をするではない  
ぞ」

「ええ、心がけてますよ……フフフッ」

「この組織に、この地位に身を置いているのは　全て個人の目的  
を達成する為。」

「シルフやサラマンダーの目的は知りませんが……そうですね、私  
の目的ですか。」

私の目的は　おや？

「外が騒がしいですねー」

地元の警察でしょうかねー。

やれやれ、もう少し　未開の土地で術式を組むべきでしたかな？

警察もしつこいものです……いいでしょう、再び蹴散らしてあげますよ。

フフフ……少しだけ、少しだけ暇潰しをしますかねー。

## 第193話 硬質のノーム（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ここで作者に質問！ 小説書いてる暇あるの？」

作者「いや、まああるっちゃありますけど……」

圭介「そういう意味じゃなくて、アンタ来年受験生だろ」

作者「いや、まあ……うん、ドンマイです」

圭介「ダメだこりゃ……絶対大学落ちるな」

作者「でも、この小説書いてると意外と勉強になりますよ」

圭介「ウソつけ！ 何の勉強になるんだよ！？ オタ知識か！？」

作者「少なくとも地理と世界史の勉強には？ うん、多分」

圭介「ねーよっ！ 真面目に勉強しろ作者ア！」

## 第194話 セトウバー近郊

サド線。

俺達はそんな名前の路線を走る、セトウバー行き列車に乗っていた。リスボンの路地で襲われたという日本人は伊吹らしい。そしておそらくその犯人は硬質のノーム。硬質のノームはセトウバーの何処かに身を潜めているらしいのだ。

だから、俺達は早急にそこへ向かい ノームを倒して伊吹を助ける必要があるのだ。

「まったく、アイツは……なんでアイツまでポルトガルにいるんだよ」

「藤島、気持ちはわかるが、今は行動するほうが先決だぞ」

「そうですね、伊吹さんの命が危ないかもしれないのですっ」

そうだな。伊吹がどうしてポルトガルにいるのか、それも気になるが……それを聞く為にはまず伊吹を助けないといけないよな。

それに許せねえよ。たとえ伊吹をポルトガルで発見したとしても、アイツは元々俺らの事情には関係ない一般人じゃねえか。そんな伊吹を狙って襲いやがって……。

何の為に？

何が目的で？

どういう理由で伊吹を……？

「いいぜ硬質のノーム。これがてめえのやり方だっつてんなら……」

言いながら、俺は拳を車内の手すりに叩き込む。

ゴン！ という鈍い音が炸裂し、衝撃が骨にまで伝わってとても

痛い。

それでも　俺は真つすぐに手すりを睨みながら、

「その幻想を、欠片も残さずぶち殺してやる！」

「ふ、藤島が本気になったぞ……っ」

「とうかけーすけ様、完全になりきってるのです……」

仕方ねーじゃないか、色々と気合いが入るんだから。というわけで、俺は今後も気合いを入れる為に色々とモノマネをするかもしれないぜ。

【みんな、もうすぐ着くよ】

「いよいよセトウーバルか……」

あと一駅で目的地　セトウーバルってわけか。

硬質のノームがセトウーバルの何処にいるかは知らねえが、流石に緊張するな。まあ何処にしようが俺達の目的は変わらない。

硬質のノーム。お前のくだらない計画は　必ずここで折ってやるよ。

そして、その決意と同時に衝撃が走る。衝撃は電車のブレーキによるものではない。

ゴッ！と。

唐突に電車の壁を引き裂いた攻撃は、俺達が乗っていた車両を爆破した。

突然の異変に、今度こそ電車は急ブレーキをかける。



乗客たちは大声を上げ、電車内を転がる。

俺達は吹っ飛ばされる寸前で手すりに捕まり、なんとか衝撃に耐えてみせた。やがて破壊された電車はピタリと、完全に動きを止める。だが、眼前に広がるのは目を覆うばかりの惨状。無様に破壊された電車に、攻撃の余波を受けて怪我をした人々。

そして、攻撃が直撃して命を失った人々も……。

「ぐっ！ 暮葉！ 明智！ 白藤！」

俺は叫んだが、彼女達は無事なようである。

破壊された車内に立ち込める埃が風に流され、彼女達が姿を現す。よかつた、服は汚れているみたいだけど、目立った怪我はしていないようだ。

だが……安心していても 第二撃の岩の砲弾が飛んできた。

「この……ッ！」

第二撃は直撃せず、二次災害をもたらすことはなかった。

何処からか放たれた岩の砲弾。暮葉は咄嗟に一期一振を背中から取り出し、それを迎撃するかのように鞘から刀を抜き、何メートルも跳躍した暮葉は岩の塊を叩き斬った。

閃光が走る。

暮葉の放った斬撃は、電車を破壊し尽くす大岩を粉々に砕いたのだ。

「暮葉！」

「平気なのです！ それより二次災害が心配なのです、皆さん電車から離れてください！」

言われた俺達は、破壊された電車から飛び降り、出来るだけ離れようとする。確かに暮葉の言う通りである。あの攻撃はどうも俺達を狙っているものらしい。おそらく、俺達が車内にいるだけで乗客を巻きこんでしまうだろう。

そうなるくらいなら　いつそ外に出て戦ってやる。

「2人とも！　大丈夫か！？」

「私は無傷だぞ」

【私も、携帯の画面に少しヒビが入っただけ】

よかった……白藤の携帯電話も殆ど無事でよかった。白藤の場合、携帯電話がなかったらマトモに会話も出来ないからな。とりあえず全員の無事は確認できた。

後は　攻撃してきたヤツを探すだけだな。

「暮葉！　近くで魔力とかは感じてないか！？」

「はい、物凄く大きな反応が迫っているのです……っ」

あの暮葉が大きな反応と言っただなんて……相手は相当の達人なんだろう。

しかも岩を投げつけてくるときた。まさかとは思うが……。と、思っていた……そこへ、

「おやおや、アルファ隊の特隊員がいるとは予想外でしたねー」

声は上から聞こえた。

近くに建っていた一軒家の屋根の上。

まるで最初からそこで待ち構えていたような人物は、黄緑色の修道服を着ている白人にしては痩せこけた、お爺さんになりかけの中年の親父であった。不思議な男である。地面から吸い上げられた砂が男の右腕の周りを公転している。

アレって……魔法か？

そう疑問に思っていた瞬間であった。

腕の周りを公転していた砂が集まると、鋭い槍に変形した。男によつて作られた砂の槍は空気を切り裂き、激しい音を轟かせながら俺達を襲う。

「……ッ！」

その時、白藤が俺達の先頭に立った。

「白藤！」

「危ない、下がれっ！」

俺と明智は白藤に叫びかけるが、白藤はそれに応じようとしな。その代わり、白藤は右腕を大きく振り回した。その動作自体には何の意味もない。一発逆転の秘策というわけでもない。

しかし、盾にはなつた。

白藤が右腕を大きく振るつた瞬間、数多の金属の塊が空中に現れた。行き先を塞ぐように現れた金属の塊に、鉄砲玉のように突き進む砂の槍が激突する。

砂の槍と金属の塊はその拍子に粉々に碎け散った。比喩ではない。本当にその二つは粉々に碎け散って破片を周囲に撒き散らしていたのだ。

「ぐ……ッ！」

無数の金属片が雨のように降り注ぐが、奇跡的に身体に傷がつかなかった。どうやら俺達は金属片に当たらなかつたらしい。それは偶然か、それとも白藤の操作によるものかはわからない。でも、なんとか助かったようである。

「おやおや意外ですねー、まさか……例の裏切り者までいらっしやるとはねー」

裏切り者？

それって白藤……ということはコイツ　やっぱり？

「……サヴィエトの魔法使いですね」

俺が言いたかったことを先に暮葉が口にする。

言葉を耳に入れた男は、にやりと不気味な笑みを浮かべて、

「正解……ですが、どうせなら赤の軍神と呼んで欲しかったですねー」

「もきゅ？　赤の軍神……まさか貴方がっ！」

「私の名前は、硬質のノーム」

「やっぱり……土属性の精霊の力を掌る、日本攻略の為に術式を組んでいる人なのですね」

「不思議ですねー。ポルトガルは日本から離れているハズなのに、そんな情報がもう皆さんの耳に入っているとは……いやいや、情報

社会というのは実に恐ろしい存在ですよ」

あの男が硬質のノーム……って事は、伊吹を襲ったのもあの野郎  
ってわけか。

そうだと分かるとムカつくよな……あの野郎、よくも伊吹を襲い  
やがったな。

「てめえ、伊吹は何処だよ？」

「伊吹？」

「とぼけてんじゃねえ、てめえが伊吹を襲ったんだろ？」

「なるほど、貴方の幼馴染ですか。彼女は貴方を誘き寄せる為に利  
用させてもらいましたよ。いやいや中々可愛い幼馴染でしたよ。羨  
ましいですねー藤島圭介」

この言い草は間違いないな。リスボンの路地の岩の柱といい、生  
徒手帳だけを残して姿を消した伊吹といい、全部この野郎の仕業な  
んだな。

確かに、伊吹がポルトガルにいたのは意外だったよ。来ている理  
由も気になるが、その前にこの野郎は伊吹を、大切な幼馴染を俺を  
誘き寄せる餌として利用しやがった。

その為だけに襲いやがった……。

「て、めえ 何様だあアああッ！」

バギンと、全身が怒りに反応するように熱く感じる……よつな気  
がした。

俺の身体を支える二本の脚が、頭で考えるよりも早く動く。一般

高校生レベルの重みの身体が弾丸のように、硬質のノームを打ち砕かんと向かう。五本の指を粉々に砕くように、固く、どこまでも固く握り締め、眼前のクソ野郎をぶん殴ろうと前進し始めた。

振り上げた拳が、硬質のノームの顔面を捉える。  
しかし、

「いけませんねー」

硬質のノームとの間合いを5メートルまで詰めた　瞬間、

下から丸太のような土の塊が突き上げ、ゴツ！　という衝撃が脳に伝わった。

「あ、が……ッ！？」

顎が痛い。いや、それ以上に意識が朦朧としている。視界もぐにやぐにやで、今の一瞬の間に何が起こったか、理解しきれない。俺は気付いた時にはもう倒れていた。地面に、生きる力を失った野生動物のように地面を這っていたのだ。

そこでようやく何が起きたか理解できたのだ。

大地で作られた丸太。

それが俺の顎に突き刺さり　アッパーを喰らったかのようにぶっ飛ばされたのだ。

「けーすけ様っ！」

「藤島！」

俺の名を叫ぶ暮葉と明智。白藤の声は聞こえないが、携帯に字を打ち込んだか、心の中では叫んでいるのかもしれない。さらに、彼女達の声に続くように、

「今時のキレやすい若者には　冷静さがたりませんねー」

硬質のノームがそう呟いたのだ。

ハハッ、確かに……冷静さなんて俺にはねえな。冷静になったところで、格段に強くなるわけでもないからなあ。ぶっちゃけ言っと俺は熱くなっているほうがやり易いんだ。

だからてめえに反論するぜ、と言わんばかりに　俺はゆっくりと立ち上がる。

威圧的に硬質のノームを睨みつけて、

「言い返してやるよ。てめえには　熱が足りねえな」

「ほむほむ、調子よく吠えてくれますねー若造が。全く、貴方はサラマンダーのお馬鹿さんに似ていて少しイライラしますよ」

「だったら、もっとてめえをイライラさせてやるよ！」

要はコイツをぶん殴る。

それで大規模震災術式は完成せずに済む。伊吹を助けることが出来る。サヴィエトの計画を台無しにする事が出来る。俺の怒りを静める事が出来る。

「硬質のノーム。術式が完成する前に　貴方を必ず倒すのです！」

「覚悟しておくんだな。日本人はお前が思っているほど甘くはないんだぞ」

【私も、今度こそ上に反抗する】

俺の言葉に続くように、彼女達も開戦前にそう呟いた。

「どいつもこいつも……仕方ないですね。まあ暇潰しには持ってこいですし、藤島圭介も捕えられるから一石二鳥というヤツですねー」

ノームは、首から提げた十字架のようなアクセサリーに触れて、  
楽しげに笑った。

にっこりと。

「そんな訳で、思い上がった若造に神罰を与えましょう」

ちゃりん、と十字架のようなアクセサリーを弾いた、瞬間 戦  
いは始まった。



## 第195話 線路脇の戦い

破壊された列車と、ポルトガルの大地を背景に、彼はそれらをさらに破壊しようと、ケラケラと不敵な笑みを浮かべながら動いている。

硬質のノームが右腕を振った。

左から右へ。

一瞬の動作であったが、その動きに続くように砂嵐が発生した。

空中で渦巻く破壊の砂が津波のようにこちらへ押し寄せてくる。木々を薙ぎ払い、あらゆるものを破壊してゆく。

「下がってください！」

全員を退かせると、暮葉は一期一振を薙ぎ払うように振り回す。彼女は破壊の渦を迎撃する為だけに苦手な魔法を使った。2回だけプスンと、不調な感じでカスみたいな魔法が出たが、数秒が経過した後に凄まじい嵐が巻き起こる。風速80メートルはあるであろう竜巻が発生したのだ。

暮葉の竜巻は、硬質のノームの砂嵐を相殺する。

火花を散らすように激突した破壊の塊同士は、やがて互いに弾け合い、周囲に砂と地上に落ちているゴミを吹き飛ばし、それに俺達は巻き込まれてしまう。

「……ん……………ッ！」

「白藤っ！」

白藤が俺と明智を守るように仁王立ちをすると、さっきと同じように、突然俺達の眼前に盾になるように鉄板のようなものが現れる。

おそらく、白藤が魔法で瞬間移動させたもの。硬質のノームに破壊された列車の残骸の一部であろう。

残骸は吹き荒れる嵐の中、砂とゴミから俺達を守りきった。

「中々の連携プレイですねー。チームワークもここまでくれば、雑魚でも私の攻撃に耐えられるというわけですねー」

ニヤリと笑いながら、硬質のノームは砂の槍を放つ。  
真っ直ぐ、暮葉の腹を突き刺そうと。

その動きに合わせ、今度は明智が暮葉の前に立つ。砂の槍は構わず、標的を暮葉から明智に変えたのみで突進し続ける。標的となった明智は五本の指を開いて、自身の“発火能力”バイロキネシスによってサッカーボールと同程度の火の玉を生成し、それを砂の槍に向けて放つ。

輝くようなオレンジ色の炎弾えんだんは、罪人を串刺しにする砂の槍を打ち消した。

「……ッ！」

自分の攻撃を相殺され、そっちに注意が向かっていた硬質のノームの懐に、俺は隙を突いて突撃する兵隊のように突っ込んだ。

「ふん」

硬質のノームが右腕を振り上げ、無数の岩石の丸太が地面から突き出される。俺は再び顎を突こうとする岩石の丸太を避けていく。丸太の動きを先読みし、安全圏を探しながら、ジグザグに走る事によって一度も打撃を喰らわず、岩石の地雷原を突破した。

そのまま右腕を大きく振り、拳を顔面に叩きこもうとした……が、

「製造する、岩石を装甲に」

ゴツ！ という鈍い音が響く。  
しかし、それは硬質のノームをぶん殴った音ではない。バリバリと、大地をを裂きながら盛り上がってきた分厚い岩石の板に、全力で放った俺の拳が激突した音が響いたのだ。

「ぐ、ああッ！」

拳に碎けるような痛みを感じる。

手首が痛い。一瞬、骨が折れたと思った。

この体質のことだし、多分骨は折れていないだろう。痛みもすぐに消えるはずだ。しかし硬質のノームは俺の体質を知っている。だからこそ 油断というものを見せなかった。

魔法か何かで岩石の装甲を地中に沈めると、今度は右の指をバツと開いた。手のひらに地上の小石が集まり、小石が不気味な音を立てて合体していく。やがて小石は一つの塊となり、硬質のノームの右手には2メートルを超える大きな石剣せっけんが握られる。

「……………ッ！」

「見くびらないください、私は貴方の事を知ってるんですよ」

落ちついた声で呟き、笑ったその時 硬質のノームは石剣せっけんを振り下ろした。

「が、は……………ッ！」

後頭部を殴打される。石製の剣に切れ味なんてものは殆どなく、身体を刃物で刻まれたという感覚はゼロであった。しかし、ノームの石剣せっけんは鈍器としての意味を持つ武器。

激しく脳を揺さぶられた俺は、フラフラしながら大地をさ迷う。

「いい加減に　するのです!」

俺を傷つけられたからか、激昂した暮葉が斬りかかる。跳躍した暮葉は、一瞬で10メートルは離れた場所から、硬質のノームの僅か1メートル手前にまで迫った。

叩き斬るように一期一振を振り下ろす。硬質のノームは慌てて石剣を構え、一期一振から身を守ろうとガードの態勢に入った。

鏢迫り合い。

硬い金属が硬い岩石を打つ。

人間を一刀両断する日本刀の斬撃を受けても、石剣は傷一つつかない。

驚きのあまり、暮葉が目と口を大きく一本で、ノームは表情を崩さない。

あるのは余裕のみ。

「大地よ怒れ　怒りを表すのだ」

硬質のノームが再び告げると、大地が嫌らしく揺れ始めた。

「もきゅ　ッ!？」

「く、そ……地震!？」

俺は突然起こった現象の名前を叫ぶ。その叫びに硬質のノームが反応する。眉を僅かにピクンと動かして、口元を歪ませ黄ばんだ歯を見せつける。

「いいえ、実は地割れなんですよね」

意外な回答に、思わず頭の上にハテナが浮かんだような気分になる。

瞬間、

轟！ と、爆発的な騒音が周囲に響き渡ると同時に 大地が大きく裂け始めた。

「きゃ、あ……っ！」

「あ、アあッ！」

大地が避けて大きな溝が出来る。まるで大陸移動の始まりのようだ。俺と暮葉は突然の事態に対処することが出来ず、重力に従って裂け目の底へと落下していく。

もうダメだ と思った、その時。

「……ん、んっ！」

いきなり俺達2人を助けるように現れ、ソイツはいきなり俺の肩に手を置いた。横目で彼女の隣にいる暮葉を見ると、暮葉の横にも彼女の左手が置かれていた。

そして次の瞬間、

気付いた時には既に ケツのあたりに硬い感触を覚える。

恐る恐る視線を下に向けてみると、そこには緑色の草。遠くを見ていると、緑色の草原が眼前に広がっていた。ただし、硬質のノーマの犠牲になった場所は、はげ山のように禿げていたが。

「けーすけ様っ！ ご無事ですか!？」

「あ、ああ……今のは、白藤か？」

暮葉との会話の後、俺は顔を上げて命の恩人　白藤のほうを向いた。

【2人とも、大丈夫？】

携帯電話の小さな画面に表示されているその一言。一言はとても簡単であったが、何故だかそれを見ているだけで心が温まる。ただの文字なのに……不思議な感じであった。

「はい、拙者は全然平気なのです！」

「俺もだ。身体は殆ど無傷だぜ」

【よかった、でも……】

その一文を見た後、俺も暮葉も白藤と同じ方向に首を動かす。そこには、発火能力パイロキネシスという力によって、2メートルの炎剣えんけんを作り出した明智の姿があった。

炎剣えんけんは左右の手から二つ　つまり二刀流である。

「波ああアアああああ！」

叫びと共に、明智は低い姿勢から突きあげるように、硬質のノームを狙う。下から燃え盛る剣を突きあげ串刺しにし、硬質のノームを火刑かけいにする作戦のようだ。素早く、ノームの懐深くに潜り込む明智に対し、硬質のノームは軽々としたステップで後ろへ退く。退くだけ。たったそれだけの動作で、振り回される炎剣えんけんを回避したのだ。

代わりに、硬質のノームが右手に握る石剣せっけんの先端が、明智の脳を

揺さぶる為だけに突き上げられた。石剣せっけんが顎あごに突き刺さる。

ゴギッ！ という鈍く、生々しい音が炸裂。

明智の身体が後ろへ仰のけ反り、抵抗もなく地面に沈む。左右から伸びていた炎剣えんけんがガスを失ったかのように消滅。

倒れた明智は拳を突いて、立ち上がるうとするが、

「う、ああアアあああッ！」

明智の腹を貫くような、岩石の柱が地面から伸びてきた。

実際に身体を貫くことはなかったにしろ、衝撃は抜群。腹部にハンマーを叩きこまれたような衝撃を受けた明智は、そのまま何も抵抗が出来ず、ドサツと地面に落ちてしまった。

10メートル以上はあつたであろう、高さから 固い地面に。

「この……っ！」

それでも明智は丈夫であつたからか、痛みを堪えてすぐに立ち上がったが、その隙に硬質のノームは後退し、俺達から10メートルほどの距離をとつた。

俺と暮葉、そして白藤は走って明智の横に並ぶ。

「大丈夫ですか明智殿!？」

「う、うん。まだまだこの程度 大したダメージではないぞ」

流石明智…… 攻撃力も高けりや身体も丈夫だ。

でも明智も女の子だし、出来ればこれ以上のダメージを受けて欲しくないな……。

だけど、硬質のノームがそれを許す相手だとは思えないし、何よりあの野郎……。

「くそっ！ 四人がかりでこれかよ、これが 赤の軍神……ッ！」  
今更だけど思い知ったよ……赤の軍神、いや 硬質のノーム。  
コイツ……滅茶苦茶って言葉が10個ついても足りないくらい強い  
じゃねえか……ッ！

「噂の頑丈な体は本物のようですが……なんだか期待外れですね！  
皆さん、相当の実力者だと聞いていたはずですが、この程度とは……  
まあ、暇潰しには丁度いい腕前なんですけどね！」

「てめえ……ナメてんじゃねえぞ！」

と言う虚勢を張ってはみたものの、実際4対1でも俺達のほうが  
不利だ。硬質のノームはたったり一人で、しかも相手は全員普通の  
人間じゃないのに、それでも優勢に戦っていた。

風剣のシルフはギリギリ一人で戦えたけど、コイツは違う……いや、  
風剣のシルフだってリーリヤの魔法で弱っていたんだ。だから  
一人で戦えた、もしかしたらアイツも この硬質のノームと同等  
の実力を持っていたかもしれぬ。とにかく 赤の軍神ってのは  
化け物級だ。

クソみたいに強い……本物の化け物だ。

「……ん？」

その時、硬質のノームが声を漏らし、顔を上げて空を見上げた。  
俺達もそれに釣られるように空を見る。そういえば轟音が響いて  
いるな。まるで何機もジェット機が全速力で飛んでいるような、そ  
んな轟音である。そして、ジェット機が編隊飛行をしている決定的  
な証拠として、飛行機雲が横に何列も並んでいたのだ。



行き先は……わからないが、この先って確かセトウバルだよな？  
まさか あれって、

「なるほど、いよいよその手を使ってきましたか」

硬質のノームが面白そうに呟く。

面白そうだ。笑ってやがる……だけど、同時に額に汗が浮かんで  
いるのが見えた。

まるで追い詰められ、恐怖して冷や汗が出ているような、

「ポルトガル空軍の出番ですか……なるほど、この国は歴史的建造  
物を破壊する覚悟を決めた……わけみたいですねー。そういえば先  
程教会前で交戦したのは、警察ではなく陸軍でしたし、その報復攻  
撃でしょうかねー？」

この様子だと……硬質のノームは軍隊と戦ったってのか？

流石といふかなんと言うか……強すぎるだろ。

そういえば、風剣のシルフも自衛隊を圧倒していたし……このレ  
ベルまでくると、軍隊よりも魔法使いのほうが強いつてわけなのか。  
硬質のノームはまだ、言葉を続けている。

「しかし、まずいですねー。もしかすると陸海空共同作戦の可能性  
もありますし、教会の守備にあたっていているのは普通の魔術師 あ  
と少しで藤島圭介を拘束できそうでしたが、まあ後回しでもいいで  
しょう。今は サン・ジュリアン教会の防衛が最優先ですねえ」

硬質のノームはそう言いながら、俺達になど目すら向けずに、た  
だの金属の塊と化した鉄道車両を飛び越えて、線路を走ってセトウ  
バル方面へ駆けて行ってしまった。

「もきゅ!? に、逃げちゃいましたよ!？」

「ま、待て!」

俺と暮葉は叫ぶが、明智が俺達2人の手を握る。

白藤もその隣に並び、何やら真剣な表情で俺達2人を見てくる。

「後を追うぞ! 伊吹も教会にいる可能性がある、早く行かないと伊吹も肉塊だぞ!」

【それに警察も来た。事情聴取を受ける前に立ち去らないと時間がかかる】

壊れた車内で苦しむ人がいるつてのに、見捨てていくのも気分が悪い…… だけど明智や白藤の言う通りである。このままここにいれば、警察に捕まってしまうかもしれないし、もし伊吹が硬質のノーマルが言う教会にいるのだとしたら 空軍機の攻撃に巻き込まれるかもしれない。

空軍機に追いつけるわけがねえけど、それでも早く行かねえと伊吹が !

【みんな、私に触れて。瞬間移動は80メートルずつだけと、多分車に乗るより速いハズ】

白藤は携帯電話にそんな文字を打ち込み、俺達にそれを見せる。なるほど、確かに白藤の瞬間移動はとても優秀だ。危うく死にかけた俺と暮葉を救ったのも、白藤のこの魔法だ。

瞬間移動。これなら 確かに車や鉄道よりも早く目的地へ行ける。

「頼んだぞ　白藤！」

俺の叫びに、白藤はうん、と首を縦に振る。

瞬間、

白藤の魔法による瞬間移動が始まり、俺達は80メートルという距離のみ、空間を移動して光よりも早く移動する。頼む、教会にいないでくれ。生きていてくれ　伊吹！

## 第196話 掃討作戦

現在、スペイン南部上空。超音速魔動爆撃機

スパーチェリ  
救世主の機内。

魔力を燃料とし、魔動エンジンで推進する大型6発戦略爆撃機だ。今、オレはヴィンペル隊が引つ張ってきたというこの兵器に乗り込み、とある作戦に参加しようとしていた。

超能力者のセトウバル戦域への投入。

「全く……上も変な作戦を考え、ザスローンもよくそれを引き受けたなア」

最強の超能力者と謳われていたこのオレは、杖をついて爆撃機に乗り込み、通常爆弾倉という爆弾を搭載するスペースに立っている。ここにいるのは、オレと数名の要員のみ。

数名の要員と言うのも不思議なモンで、整備兵兼落下傘兵というヤツだ。

「どうですか、気分はいかがでしょう？」

「……最悪だア」

オレは要員の一人に声を掛けられると、面倒くさそうにそう答える。だって、実際に面倒臭エンだから仕方ねエだろ。それにオレはコイツらと狎れ合う気はない。

「僕もヴィンペル隊に入隊してから、今回のような任務は初めてですが……いや、訓練で慣れているハズなのに、超音速爆撃機の威力は凄まじいですね」

「はン 乗ってて気分が悪くなる。全く……誰だア？ あつちの世界の技術はこつちの世界と技術と、大差がねエってほざいたクソ野郎オは？」

「は、ははは。本当、誰でしょうね……？ 快適……とは程遠いですよね？」

要員は苦笑いしていた。全くその通り、快適とは程遠いな……爆撃機は時速7000km/hを超える超音速で飛行し、僅か一時間半で日本とポルトガルを結ぶ、この世界の技術では殆ど不可能に近い事を可能にした化け物だ。

その分、身体に掛かるGはとんでもねエモンで、馬鹿みたいな感じがするがなア。

と、その時だった。

機内に設置された無線から声が流れる。どオやら……ご報告のよオだな。

『現在、スペイン空軍による追撃を受けております。これより一気にポルトガル領空へ侵入します。機内各員は衝撃に備えてください』

どオやら爆撃機は、この世界の常識レベルの速度で飛行していたらしい。そのせいで領空侵犯を対処すべく飛び上がった、スペイン軍の戦闘機に追いつかれてしまったようだ。

まア恐れる事はねエだろう。  
スパシーチェリ  
救世主なら振り切れる。

「チツ！」

轟！ と魔動エンジンが唸り、凄まじいGがオレや要員達を襲う。この対策に設置されて手すりにオレや要員達は掴まり、何とか衝撃

に耐えようとする。

「まったく、座ってシートベルトを装着する時間くらいくれっての。まあ、そんな作業をオレ達にさせている程の余裕がねエンだろう。そんな状況になっちまうくらい　スペイン軍機が接近してきたってワケかア。」

『現在時速5250km/h、スペイン軍機との差は約3100km/h』

速度的にスペインはミラージュ戦闘機を投入してきたか……まあ、確かにスペインが保有する戦闘機の中では、他のユーロファイターやF16よりも足は速いな。

「だがなア　この世界の常識はオレらに通用しねエ。」

『スペイン軍機を振り切りました。減速、ポルトガル領空への侵入へ成功。まもなく“セトウーバルの血雨<sup>けつう</sup>作戦”を開始します』

「さてさて……そろそろ始めるとしますかア。」

「お仕事だア。」

オレを含め、僅か14人がポルトガルの都市“セトウーバル”に降下。その後、ポルトガル軍によるセトウーバル攻撃を潜り抜け、サン・ジュリアン教会を破壊。硬質のノームという赤の軍神の一人の男を確実に抹殺し、大規模震災術式発動を食いとめる。

「これが今回オレに課された任務。そしてあのガキを守る　数少ない方法の一つだ。」

「落下傘の準備は完璧だろオナ？」

「はっ、装備も完璧であります」

「んじゃあ、行くとしますかア　戦場って場所になア？」

こうして“セトウバルの血雨<sup>けつう</sup>作戦”は始まった。

何もかも、血みどろにする事によって　日本とクソガキを救う作戦がなア。

ふう……なんとか間に合いました。瞬間移動系の魔術師は希少な存在ですが、偶然にも私の配下にソレが居たことはまさに幸運。おかげで私は　攻撃が始まる前に教会へ到着しました。

私　硬質のノームは、サン・ジュリアン教会で敵を待ち続けている。血と炎と悲しみと憎悪だけを残す　軍隊と言う計画の邪魔になる存在を。

「おやおや……来てしまったようですねー」

私を空を見上げました。今日は快晴、雲一つない清々しい青空が広がってますが、そんな美しい青空を汚すように　ポルトガルの空軍機が編隊を組んで飛行しています。

いいえ、それだけではないようですねー。

先程、配下の魔術師を斥候に向かわせた所、陸上には戦車12両を含む。ポルトガル陸軍の2個大隊が教会に迫っており、セトウバル湾にも海軍の艦隊が待機しているようです。

どうやら　本格的に私を潰すつもりらしいですねえ。

「おやおや、なってませんねえ……たかが人間一人を潰す為に、軍が総力を挙げて教会を破壊しに来るとは。果たして　彼らは本当に神の子を信じているのでしょうかねー？」

まあ所詮、私は異世界の異教徒です。

彼らのことを考えたところで、こちらには何のメリットもないの  
ですがねー。そんな事よりももうそろそろ　　ちよっとした戦争が  
始まりそうですねー。

「儀式場を破壊されては困りますし、暇潰しの為にも　　敵軍を迎  
撃しますかねー」

言いながら、私は天を突くように右手を上げ、五本の指を大きく  
広げる。轟！　とサン・ジュリアン教会の前の路地に亀裂が走り、  
巨大な土の塊が浮かびあがる。

狙いは　　敵戦闘機。

詳細は不明ですが、おそらく空対地ミサイルを搭載しているの  
でしょう。なら、ミサイルを撃ち込まれる前に迎撃するのみ。私は数  
多もの岩の地対空ミサイルを放つ。岩のミサイルが音速を超える速  
度で急上昇し、中に乗る人間の魔力を感知し、敵機に迫った。

次の瞬間、

ピカッ！　と、幾つもの閃光が走った。

「まずは3機撃墜、おやおや……あと2機で私も撃墜王ですねー」

岩のミサイルの難点はただ一つ。どんな微弱な魔力でも感知でき  
る反面、それ以外のものは一切感知する事が出来ないので、無人機  
に対しては無効なのです。

「まあ、ポルトガルは無人機なんて持っていないでしょうねー」

そう思った私は余裕を感じ、喜びから笑顔を浮かべた。

にっこりと。



しかし、その笑顔を崩そうと　ポルトガルの戦闘機がミサイルを放つ。

空対地ミサイルだ。3機から放たれたミサイルが、教会を木端微塵に破壊し、この私を肉塊へ変えてやるうと緩やかに降下してくる。戦闘機はそのまま上昇したが……まあ、この程度の攻撃なら私の魔術で対処可能でしょう。今やるべき事は一つ　ミサイルの迎撃ですわね！。

「これなんて、どうでしょうかねー？」

さっきのように岩のミサイルを、敵のミサイルと同じ数だけ作り出し、発射台からロケットを射出するように岩のミサイルを放った。命中精度は95%、ミサイル同士が激突し、空中で爆発が起これると金属片と粉々になった小石が降ってくる。

「おっと、そちらだって逃がしはしませんよ」

「ミサイルは悪ですが、それを放ってきた軍隊と言つのも悪ですわね！。

そういうわけで、私はまた同じ手順で岩の地对空ミサイルを作った。その数3発、ロケットのように空へ放たれた岩の塊は、ポルトガル空軍の戦闘機に直撃。

全弾、コクピットに命中したので……まあ、誰も生きていないでしょうね！。

「まあ所詮　この世界の科学技術ではこの辺が精一杯でしょうね！」

さて、もうすぐ陸軍の総攻撃が始まりますかね。まあ、空軍による対地支援攻撃は完全に失敗してしまいましたし、十分に戦力を削

いでいない状態で、敵が攻めてくるかは微妙ですが。

「とにかく　大規模震災術式発動の為に、意地でも儀式場となる教会は守りますからねー」

軍隊ごときが、赤の軍神に及ぶことは絶対にありません。おそらく、核兵器を使わない限りは絶対に不可能でしょう。それだけ私と軍隊には決定的な差があるのですよ。

最も、この世界の人間に核兵器を使う勇氣があるとは思えません  
が！。

まあ　いい暇つぶしにはなりますねー。

あたい　浅間あかりは現在バイト中。正確に言うとバイト中な  
んだけど、休憩が入って仲良くお昼ご飯を食べているところだった。  
そう　とっても仲良くな。

「はむ、ほむ……うんっ、ひょうふおおいひい……っ！」

「千早……全部飲みこんでから喋るよな」

千早ってこんなキャラだったっけ？

まあいいや。あたいが言う仲良しのバイト仲間と言うのは、新たに古宇坂のマックでバイトを初めた千早のことだ。千早の家はお金持ちだし、千早自身人見知りか激しいから、バイトに向いてないどころかバイトをする必要もない気がするけど……でも、本人曰く社会勉強らしいんだ。

働いて、ついでに人間的にも成長して……千早、立派すぎてあた

い泣きそうだぞ。

でもなあ。バイトの理由が社会勉強ってあたり、やっぱり千早ってお金持ちだよなあ。

「……そ、そういうば……あかり、明日は先輩の誕生日……だよね？」

「えっ？ おお！ そういえばそうだったな！」

葵から聞いていたんだけど、どうやら明日は圭介の誕生日らしい。千早は圭介に振られちゃったからこの先進展があるか微妙だけど、あたいはまだ明確な返事をもらっていない。

つまり まだチャンスがある。

「につしし。あたい、圭介にすごいものをプレゼントするからな！」

「な、なに……？ すごいものって……？」

「あたいと一夜を過ごす権利だっ！」

「だ、ダメだよ……っ！ それはその……最後の手段だよ……っ？」

そう言うつと、千早は頬を赤くしながら全力であたいのプレゼントを否定する。

ちえっ、冗談だったのに。でも、冗談抜きで圭介喜びそうだよな……変態だし。

「あっはは！ 「冗談に決まってるだろ！ あたいの身体は安くないんだからな！」

「……あかり、もしかしてビッチ？」

「あたいは純潔だっ」

ひどい疑いだぞ千早……そういう千早だって、圭介のせいかもしれないけど、最近以前に増して下ネタ連発するようになった。全く……圭介は本当にウイルスみたいだっ。

あたい達の心を弄んで、その上変態まで感染して……うう、全部圭介のせいだっ！

「はあ……そういえば、先輩……どこに行ったんだろっ？」

「さあ？ 葵が家にいないって言ってたんだろ？」

「うん……先輩……っ」

ち、千早が泣きそうだっ！

まさか、圭介が家にいないだけでこうなるとは……ヤンデレの素質アリだな、千早。

「ちょ！ な、泣くなよな！？ どーせ圭介は男友達と遊びに行っただけだからっ！」

「ほんと……？ ぐすっ、でも……先輩モテますし……っ」

うああああ、千早が悲しみのあまり 敬語モードに入っちゃってる。

千早は目上の人以外でも、極端に落ち込むと敬語モードに突入しちゃっ子なのだ。

「お、落ちつけよな！ 圭介はモテても、圭介はヘタレだから心配ご無用だっ！」

「ぐすつ、えつぐ……ほんと？」

「う、うん！ あたいの目をナメるなよっ！」

ホントはわからないけど……でも、多分合ってるだろ。あれだけ変態なのに、一向に恋人が出来る気配がないってことは、圭介は女相手にはヘタレなタイプなんだよ。

それにしても……千早、一応あたいの恋敵なのに。なんであたい、千早の恋愛相談に乗ってるんだ？

『ここでポルトガル情勢について情報が入りましたので、最新の情報をお伝えします』

「ん？」

「り、臨時……ニュースだねっ」

普段はお昼のワイドショーやってる時間なのに、今日だけは違う。アナウンサーの人が深刻そうな顔をして、画面の前のいる人々へ視線を向けている。

その背後に映像が映っており、なんだか……戦場みたいになっていた。

『これまでに、警察や憲兵によるテロリスト掃討作戦が行われてきましたが、悉く失敗に終わっています。そこで今回、ポルトガル政府は軍の派遣を決定。テロリストが潜むセトウバル市内へ軍主力を送りこみ、本格的なテロリスト掃討作戦が開始されました』

アナウンサーの人は冷静だ。やがて映像が切り替わり、セトウバルという……多分ポルトガルの何処かにある街の映像が映し出される。そこは戦場以外の何者でもない。

『こちらの映像は、先程送られてきたセトウバル市内の様子です。戦闘機がサン・ジュリアン教会を攻撃しましたが、撃墜されました』

アナウンサーの言葉の通り。戦闘機が建物に向けてミサイルを撃つたが、教会からもミサイルのような何かが放たれ、次々と戦闘機が撃墜されていく。

その後も映像が流れ、国連安保理もどうやら軍事介入する決議を始めたらしい。

ポルトガルの政府も、それを求めている……らしい。

「今年は……大きな事件が多いね……っ」

「う、うんっ」

前にも古宇坂が襲われたよな。確かあの時は一日で鎮圧されたけど……それにしてもテロリストなのに正規軍をあんなに圧倒するなんて……。

もしかして、今暴れているテロリストは、前に古宇坂を襲ったヤツの……仲間？

ああもう、あたいには全然わからないっ。

それより圭介。今頃、圭介はなにしてるんだろう……。

## 第197話 市街戦

ようやくセトウバルに到着したが、そこはただの戦場。ポルトガルの軍隊が何者かと交戦している様子だ。どうやら、硬質のノームには手下がいるらしく、その手下の魔法使いがポルトガル軍と戦っているらしい。戦況はわからないけど……まずいな、流れ弾に当たるかもしれないぞ。

民間人の姿は見られない。

おそらく、とつくの昔に民間人は避難したのだろう。

ここにいるのは、硬質のノーム率いる魔法使い集団と、ポルトガルの軍人、そして硬質のノームを追ってきた俺達だけのようだ。

「くそっ！ 派手にやりやがって！」

「仕方ないぞ藤島、ここは日本じゃないんだ。敵に対して武力を使用するのは当然だぞ」

そんな事はわかってるし、日本が甘い事もわかってんだけど……俺はな、割と平和な日本の地方都市で生まれ育った羊みたいなモンなんだ。こんなガチ戦場は初めてなんだよ。

「つーか、そもそも何で軍隊が動き出したんだよ!？」

「ポルトガルでは以前から、さっきの男の一派が活動していたとミネットから聞いているぞ。警察や憲兵との戦闘もあったらしいが、殆どがあの男の前にやられていたらしいぞ。だから今回は」

「一掃作戦が始まったというわけなのですか!？」

「うん　　この国も本気を出したみたいだぞっ」

ポルトガル

大航海時代を征したポルトガルが本気を出した。

全く笑えねえ冗談だぞ。相手はサヴィエトなんだ、出来ることなら俺らを除くこの世界の人間には関わって欲しくない。これ以上関わっちゃいけないんだ。

「撃ちやがれ！　　クサレテロリストども　　をぶち殺してしまいやがれ！」

A t t i r e

a s s a s s i n e

u m t e r r o

r i s

いきなり、右方向から男の叫び声が聞こえた。

ポルトガル語。

まさかと思い、右を向いていると　　戦闘服を身に纏ったポルトガル軍兵士が、こちらにアサルトカービンの銃口を向けていた。兵士達は俺達を魔法使いだと……いや、あの人達、ポルトガル語で聞き取りにくかったけど、何となくだが……テロリストって言うていたような？

どういう事なんだ？

魔法使いはもしかして　　世間ではテロリストとして扱われているのか？

「藤島！　伏せろっ！」

「ッ！」

明智が叫んだ刹那　ポルトガル軍兵士が一斉に射撃を開始。耳を裂くような凄まじい音と同時に鉄の暴風が吹き荒れ、セトウーバルの市街地に血の雨を降らせようとする……が、俺達に風穴は開かなかった。



「白藤さん!」

「白藤っ!」

俺達が助かったのは 白藤のおかげであった。

何処からともなく白藤は、装甲車を瞬間移動させてきたのである。おそらく、ここから80メートル以内に停車していた車両の位置を、俺達が気付かない間に記憶していたんだろう。そのおかげで装甲車の瞬間移動が可能になり、俺達を鉄の暴風の猛威から救ってくれたんだな。助かった……金属音が響き渡り、装甲車は銃弾を弾き返している。

RPGか戦車でも持ってこられたらお終いだ……銃弾相手ならこれで十分だな。

「皆さん! こっちなのです!」

暮葉に呼ばれたので、そちらをしてみる。彼女は建物の影に隠れて、手招きしながらこっちに来いと叫んでいた。要は 逃げ道を見つけたってことか?

「暮葉!」

「行くぞ藤島っ、ポルトガル軍と戦う大義名分がない以上 構っている余裕はない」

【私も同じ意見。一旦退いて教会まで行こう?】

「……わかった、行こう」

それに戦っても勝てそうじゃないしな。軍もいよいよ本気を出し

たよつで、けたたましい音を立てながら戦車が路地を曲がってきた。砲口が装甲車を捉えている。おそらく、テロリストに装甲車を鹵獲されたと思いこんだ軍は、装甲車ごと破壊する作戦に出たのだろう。

「クソツタレ、俺達はテロリストじゃねえよ！」

そうは叫んでみたものの、その悲痛の叫びは相手に通用することは無かった。それは相手に日本語が通用しないからか、あるいはテロリストに人権は無いと思っっているからか？

まあいい、とにかく逃げよう。戦車も来たんじゃないし勝ち目がないし、何より俺達はポルトガル軍と戦いに来たんじゃない。ポルトガル軍と戦う理由もない。そもそも、俺らの敵もポルトガルにとっての敵も同じ。共通の敵がいるじゃねえか。

共通の敵がいるつてのに　なんで対立しなきゃいけないんだよ。

「　　うわっ！」

狭い路地に入り込み、建物の影に隠れた、瞬間、

鼓膜を突き破るような爆音が轟く。ポルトガル軍の戦車が砲撃を開始、放たれた砲弾は俺達が盾に使っていた装甲車に命中したようである。装甲車の運命は……説明するまでもない。

「流石戦車……旧式のM48っぽいけど、アレでも並の魔法使いよりは強いよな……」

「けーすけ様っ！　立ち止まっていたらまた連中に見つかるのです。進みましょう」

「……そうだな」

今はとにかく前進あるのみだろう。硬質のノームさえ倒してしまえば、ポルトガル軍の作戦行動もそのうち終了するだろうし、それで今回の騒動は終わるハズだ。

俺達は目的地である教会に向かって、荒れるセトウーバルの市街地を歩き始める。

街は戦場だ。

民間人がいない今、この街には情けも容赦もない。破壊と殺戮、そして 敵を殲滅するという双方の思惑がぶつかり合うのみである。銃声や爆音、男達の雄叫びが響き渡っている。

「まだ銃声が聞こえる……一方的な制圧ではないみたいだぞ」

「サヴィエトもまだ抵抗を続けているみたいなのですよ、明智殿」

「あの男の手下が多数いるんだな。全く、私も情報不足で何が何だかサツパリだぞ」

「確かにそうですが……でも、正規軍を相手に正面から戦えるということは、ノームもかなり優秀な魔法使いを配下に置いているみたいなのです」

【多分、教会は一瞬の要塞になっている。要塞の前には多数の魔法使いによる防衛戦を築いている。突破はかなり困難だと思う】

3人が敵の状況を予想しているが、どうやら一筋縄ではいかないみたいだな。サヴィエト側も本気で日本という一国家を滅ぼし、自分たちの領土が欲しいんだろう。

俺の身柄も拘束出来るし、一石二鳥だ。

だけど……それだけ相手が本気だとしても、俺らが作戦を変更す

る必要はない。

「要はノームを倒せばいいんだろ？ だったら俺に任せてくれ」

「けーすけ様。もしかして……また一人で戦うつもりなのですか？」

暮葉が心配半分、呆れ半分の感じで言ってきた。

まあ予想通りの反応だ。それに対し、俺は暮葉に歩み寄り、

「一人じゃねえよ」

言いながら、暮葉の左肩に右手をぼんつと置いた。

「暮葉は、いや みんなは突破口を開いてくれ。隙を見て教会に侵入して伊吹を助け出す。硬質のノームはその後倒せばいいんだ」

何も一人であの野郎と戦うだなんて考えていない。仮に一人で戦ったとして、勝てる可能性なんて10%もあるか微妙だしな。雑魚は雑魚なりに集まって考えるんだよ。どれだけ弱く立って4人も集まったら、少しはあの化け物と戦えるようになるだろう。

「なあ、頼めるか？ アイツを倒すために 協力してくれ」

俺は改めて明智と白藤、そして暮葉にお願いをしてみた。

答えは一言だった。

「けーすけ様、言われなくても拙者はけーすけ様の味方なのです」

「そつだそ。その……私たちは友達だからなっ」

【うん、友達を助けるのはあたりまえ】

お前ら……と、俺は素晴らし過ぎる友情を目の当たりに、少しだけ感動してしまった。

暮葉も明智も白藤も 最高の友達だ。

おかげで、少し消えかけていた戦意も再び湧いてきた……ッ！

「それじゃあ、さっさと面倒くさいことは終わらせて 日本に帰ろう」

「はいっ！」

「明日はあの日だからな。私も藤島と全く同じ意見だぞ」

【帰ってテストに備えたい】

赤の軍神との戦いに軍隊が介入し、いよいよ戦いが本格化する。

そんな中、より一層団結力を高めた俺たちは 絶対に勝利することを決意した。

第197話 市街戦（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「なんか、このコーナーも久々な気がする」

伊吹「じ、時間がなかったのよ！ 書いている時間がっ！」

圭介「何気にネタ考えるのは時間かかるからな」

暮葉「ただの言い訳乙なのですっ」

圭介「それにしても伊吹、お前何やってんだ？ 全然出てこないぞ？」

伊吹「なっ！？ つ、捕まってるのよこっちは！」

圭介「あ、そういえばそうだったな」

伊吹「忘れんなー！ ばか圭介っ！」

亜紀「俺の嫁に忘れられてショックな伊吹ちゃんでしたー」

伊吹「誰が俺の嫁よ！ 圭介は嫁じゃないわよっ！」

正しくは旦那様……？

## 第198話 サン・ジュリアン教会

セトウーバルの街並みが次々と崩されていく。

そんな中、俺達はなんとかサン・ジュリアン教会の手に到着。

残り数百メートルで大規模震災術式発動の為の儀式場と化した、サン・ジュリアン教会に辿りついた。しかし、教会を前に数多の魔法使いが退陣を整え、俺達を迎撃する為に武器を構えていた。

連中の武器はポルトガル軍のように、近代的な銃や火砲ではない。杖や槍、斧に剣など現代戦をするには非効率極まりない代物ばかりだ。

だが、連中は魔法を使える。

それがあれば 現代軍隊と対等に戦えるのだ。

「凄まじい数なのです……」

「ざっと数えて2個小隊分はいるぞっ」

「なんちゅー数だよ…… 3人だけでなんとかなるレベルかよ？」

3人とも特殊な能力を持っているから、平気だろうと思っていたんだが…… 実際に防衛線の前まで来てみると、そんな軽い気持ちは一瞬で何処かに消し飛んでしまった。

まずい…… 敵の数が半端じゃない。どう考えても3人じゃ対処しきれない。

だが、

「大丈夫なのです。敵か何人いようと結果は変わりませんよ」

言いながら、暮葉が一期一振を静かに構える。

「そう、集団ヒステリーと友情なら　友情のほうが強いに決まってるぞ」

明智も微笑みながら、ファイティングポーズをとる。

【大丈夫、突破口は必ず開く。圭介は心配しないで、隙を突いて教会に飛び込んで】

白藤も携帯電話の画面を見せながら、静かに構えた。

ハハ……なんだよ。圧倒的に数が足りなくなたって、なんとかなるに決まってる。

サウイエトてめえらとは違うんだよ。エネルギーの源ってヤツがな。

「よし、行くぞ！」

明智が叫んだ瞬間、2人の魔法使いと1人の超能力者が前方へ激しく跳躍し、隊を組んで待ち構えていた敵へ奇襲を仕掛ける。敵は3人の姿を目視するまで、3人の存在には気付かず、彼女達の奇襲攻撃を直に受けてしまう。明智のローリング・ソバット、暮葉の斬撃が首筋に決まった。

白藤は明智や暮葉が倒した魔法使いが持っていた、武器を瞬間移動させ、剣なら突き刺すように敵兵へ投げつけ、杖などの鈍器は頭蓋骨を砕くように上から叩きつける。

「The enemy has attacked. It intercepts！」

かなり鈍った、辛うじて俺にも理解できる英語で、敵の魔法使いは味方へ敵襲を知らせて混乱を静めようとする。それでも混乱は収



まるどころか、徐々に広がっていく。  
感情に任せて魔法を放つヤツもいるが、そんな攻撃なんて暮葉達には通用しない。

「ふっ！ は　　ア！　　風紀を乱すな　　道を開ける！」

自慢の体術と発火能力バイロキネシスを掛けあわせた明智の戦法は、敵の魔法使いが5人がかりで彼女を襲ったとしても、返り討ちにされてしまうほどに凄まじく、有効であった。

さらに暮葉が風の魔法で強風を吹かせ、魔法使い達の行動に制限を加える。その隙を突くように白藤が付近の残骸や、倒された魔法使いが持っていた武器を瞬間移動テレポートする。

瞬間、

敵の魔法使いの一隊が崩壊し　　教会への細い通路が確保された。

「今です！　行ってください　　けーすけ様！」

暮葉が叫んだ。それは突撃の合図でもあった。  
その合図が耳に入ると同時に、

「お、アアああああああああああああああああああああ！」

咆哮と共に　　敵部隊の裂け目を駆け走った。

俺の事を止める為、または俺を拘束する為に、敵の魔法使いの手が伸びてくる。無数の手に後ろ襟を掴まれるかと思っただが、彼らの手は届かない。暮葉達が攻撃を続けたことにより、敵の魔法使いは自分の身を守る以外の余計な事が出来なくなった。

ありがとう、と感謝をしつつ、彼女達が敵を食い止めている中俺は走り続ける。

決戦場所、サン・ジュリアン教会を目指して　　。

落下傘による降下が成功し、オレはサン・フェリペ城から市街地を眺めていた。

「ハハツ、血に飢えてんなア……中世から変わらねエモンだぜ」

このオレ　早川悠は、セトウーバルの血雨作戦けつうに参加する事になった。その作戦行動Aである降下は成功に終わり、現在作戦行動B　市街地への突入の準備を進めていた。

一緒に降下してきた要員は装備を固める。黒ずくめの戦闘服は、何処かの特殊部隊を思わせる雰囲気をつけていたが……そういや、ヴィンペル隊は特殊部隊だったなア。

ンじゃあ、オレも拳銃くらいは持っていくか。

「早川さん、あの……拳銃だけでよろしいのですか？」

「構わねエ……むしろ拳銃以外は扱えねエ」

魔力エネルギー変換機のスイッチがOFF。つまり通常モードのオレは、歩行障害のせいで杖なしでは自力で歩く事も出来ない。ただのガラクタ同然のゴミ人間である。

従ってどんな時も杖が必要なワケだ。

右手は杖で塞がっている。この状況で自動小銃使えってのが無理な注文だ。

「救世主スハシーチェリより報告。ポルトガル陸軍は市街地から、サン・ジュリアンのボカージユ広場周辺全域に展開中。海軍は依然湾内にて待機、

空軍の支援は20分前を最後に今の所ないようです」

要員の一人、通信兵がポルトガル軍の動向を知らせてくる。はん、どオやらポルトガルも必死になって敵を殲滅しようとしているな。だがなア、ソイツはオレらの仕事だア。

この世界の軍隊が、面倒臭エことに介入してンじゃねエよ。

「これより作戦行動B、セトウーバル突入を開始します」

「早川さん、準備はよろしいですか？」

「ああ、今日でも明日でも何時でも構わねエ」

「頼りにしてますよ 最強の超能力者」

「ふん……頼れる実力なんて持ってねエよ」

そろそろ作戦行動Bの始まりだ。ポルトガル軍に殺されるか、硬質のノームってクソ野郎かその部下に殺されるか。あるいはオレが両方を殲滅するか。どオなるか知らねエが、  
とりあえず サウイェト 連中を木端微塵に打ち砕く。

サン・ジュリアン教会の中は意外に広がった。

内部は聖ジュリアンの生涯を描いたアズレージョで飾られ、思っていたよりも高い天井を見上げれば豪華なシャンデリア。礼拝堂の奥にも、大きな絵と豪華な装飾が屋内を輝かせている。

マヌエル様式の教会は、確かに歴史的価値のありそうなもの……

なのだが、綺麗な内装を台無しにするかのように　礼拝堂の壁には無数の文字が落書きされていた。

何の文字だ、コレ？

「なんだよ……これ、アルファベットっぽいけど……？」

「それは古ラテン語よ」

「っ!？」

声が聞こえたので、俺は慌てて振り向いたが……硬質ノームではないようだ。そもそも今のはどう聞いても女の子の声だし、その声は聞き覚えのある感じだ。

視線の先には銀髪で、赤く染まった瞳を持つ　小柄な女の子が縄で縛られていた。

「い、伊吹!？」

やっぱり、どう見たってアイツは伊吹だよな……ちくしょう、サン・ジュリアン教会の内部に伊吹が監禁されていたとは。予想通りの展開じゃねえかよ……。

「連中の1人が教えてくれたわ。言っとくけど、私は解説は出来な  
いわよ?」  
サウリエト

なんで……だよてめえ、どうして　そんなに元気なんだ。

なんで、何事もなかったような顔してんだよ。

なんだって　そんな風に平気でいれるんだよ。

「……………ん、でたよ……………」

「な、なによ……どうしたのよあんた？」

俺はイライラしていた。なんとなく、今の今までずっとイライラしていた。何に対してイライラしていたかは知らねえけど……その一言で　何か吹っ切れたような気がした。

「なんでこんな所にいるんだよ……てめえッ！」

礼拝堂に俺の怒声が響き渡る。多分、俺には見えないけど犬歯も剥き出しだ。縛られた拉致被害者を鋭く睨みつけ、感情を爆発させた俺に、伊吹の動きが凍りついた。恐怖、いや、取り返しのつかない失敗をしたように両目を見開いて、唇は何かを呟こうと小刻みに動いている。

「だ、だって……その、あんたが暮葉と2人で……あ、遊びに行くから。あんたが、こんな所に来ちゃうから……その、わ……私は……」

徐々に弱々しく口ごもって行く伊吹。泣きだしそうに、紅い瞳の潤いも増していく。

小さくなっていくような気がした。もう、彼女は虚勢さえ張れない。

伊吹は、さっきまで普通だったのに。ただ、俺の怒声を聞いただけで……

「ふ、ざけんな……ざけた真似してんじゃねえよ、てめえ！」

ブチリ、という音が聞こえた……ような気がした。

怒声が更に礼拝堂内に響く。伊吹が弱々しく震え始める。

「俺と暮葉が2人つきりで？ 友達が2人で歩いて何か変かよ！ てめえの都合で外国まで追いかけてんじゃねえ。変な事件に巻き込まれてんじゃねえよ！ 追いかけて来たのは大目に見るとして、ふざけたことに巻き込まれやがって……心配することちの身にもなりやがれ！」

叫ぶと、伊吹は見上げて俺を見つめる。  
顔を赤くしたまま、泣きそうな瞳で彼女は叫ぶ。

「う、うっさいわね！ 悪かったわね！ で、でも……あの緑色の人はあんたを狙って……だからっ」

「人に責任押し付けてんじゃねえ！」

「ち、違っ！ 私はただそれがムカついたから」

「だけど、そもそもソイツと関わる事事態が間違いじゃねえのかよ？ 結局てめえが何の為にノームと戦ったか知らねえけど、無謀な挑戦してんじゃねえよ！ 襲われたってんなら逃げる。逃げ切れなくても人ごみの中に紛れるとか、ちったあ頭使えよ。てめえは俺みたいないな馬鹿じゃねえだろ！ とにかく俺だけじゃねえ……暮葉や明智、それから白藤を。てめえの勝手に心配させてんじゃねえ！」

俺の叫びの後、伊吹は俺の顔を見つめ……紅い瞳に、ぶわっと涙があふれた。

「う、めんなさい……ごめんなさい！ うめんなさい！ わたし……わたし……馬鹿で、ごめん……なさい……」

伊吹が必死に謝っている。大粒の涙を流しながら、嗚咽の声を上げ続けていた。

珍しい……。

伊吹がこんな、こんなに素直に謝って　しかも涙を流すだなんて……何時以来だ？

「　たく、お前ってヤツは」

俺はごそごそと、伊吹を縛り付けている縄を解いてやった。苦労はしたけど、そこまできつく縛っているわけではないみたいだ。少し筋肉に力を入れたら簡単に解けたぞ。

伊吹さえ逃げなければそれでいい、と連中は思っていたんだな。縄を解いた後、晴れて自由の身となった伊吹の小さな体を　俺は抱きしめてやった。

左手を背中に手を回し、空いた右手で銀色の頭をそつと撫でる。

「俺も馬鹿だから……俺もお前を不安にさせた。そのことは悪いと思ってるよ……」

「……え？」

「だけど、それでストーカーされて喜ぶ人間なんて普通はいねえぞ？　それから、本当……心配だけはさせるんじゃないやねえよ。お前の身に何かあったら暮葉達が悲しむんだよ。俺だって……お前に死なれたら俺も死にたくなるよ」

え、と伊吹は声を漏らす。

俺の言葉に偽りはない。

リスボンの路地でコイツの生徒手帳を拾った時、胸が張り裂けそうになった。もしもコイツが硬質のノームに殺されていたら。もし

も、永淵の時と同じような悲劇が繰り返されていたら。

もしも、手遅れで コイツが滅茶苦茶にされていたら。

本当に、二重の意味で爆発したよ。伊吹を守れなかった悔しさ…

…そして、

硬質のノームに対する 激しい怒り。

「……………ばか、ばか圭介……………本当にばかつ！」

言いながら、伊吹は俺の胸に顔をうずめてきた。服が湿った気がする……………伊吹はまだ赤い瞳から大粒の涙を流しているようだ。胸に埋まった伊吹が泣き、そして叫ぶ。

「あんた……………甘いよ。なんで優しいのよ……………もつと怒りなさいよ。じゃないと、私……………また変なこと言っちゃつかももしれないでしょ……………！ いつまで経っても、何年経っても……………圭介（こへい）から離れられないじゃない……………ッ！」

「離れるって……………どこから離れるんだ？」

「え、えっと……………あ、あのさ、その……………っ」

真っ赤な顔であたふたする伊吹。

なんだコイツ……………やっぱり何か隠してるんじゃないのか？

「なあ伊吹。お前……………何か隠してるだろ？」

「え、ええっ！？ 別に、あんたなんかはその……………隠すような事なんて……………っ」

「嘘は言うなよ。正直に言ってくれ……………何言われたって気にしない



から」

「え……き、気にしないのはちょっと……って、違う！ なにもないわよ！」

相変わらず素直じゃないっつーか……いつものツッパリ伊吹ちゃんに戻ったな。まあ言いたい事は殆ど言い終わったし、いつまでも泣かれてちゃ俺も辛いよ。だからまあ……いつもの元気な伊吹に戻ってくれたのはいいんだけど……伊吹、結局何を隠しているんだ？

「頼む、正直に言ってくれ。例え残酷なモンだったとしても 俺はお前を受け入れるから」

「あの、えと……あ……ん、と………っ」

気のせい……じゃない、よな？

なんだ、この伊吹は……耳まで真っ赤にして照れやがって。これって……やっぱ、デレモードと捉えてもいいんだよな。そういえばこの前、体育館倉庫で告白っぽいのもされたし。えっ、まさかあのツッパリ伊吹ちゃんが 本当にデレ期に突入した？

いや、冗談とかではなく、マジな話だ。

だって、この反応……あまりにも分かりやすすぎるし。小刻みに動く唇も、何を言いたいのか何となく予想出来るような……お、おいおいマジか。マジなのかこの展開……ッ？

でも、もし本当だとしても、俺は 。

「わ、わわわ、わけわかんない……あんな理由が。いつまでもあった理由が……気付いてたのに……あなたが一番だって、言っちゃえば楽だったのに……それでも言わなかった。いつも逆のことを言っていたけど……で、でも私は……私があんたが、圭介のこ

とが　　ッ

伊吹が今まで隠していた事を告げようとした　　まさにその時。

ゴバ！と。

轟音と共に、礼拝堂の中に土埃が立ち込めた。

「ッ!？」

俺は伊吹から離れて、咄嗟に立ち上がり　　慌てて礼拝堂の入り口付近を覗んだ。

思わず目と口を大きく開いてしまった。人影が、誰かが入口付近にいる。土埃の中に不気味な人影が見えたのだ。男のようだが……この地域の人間にしては小柄な気もする。最初はポルトガル軍の兵士が突入してきたかと思ったが、そうでもないようだ。

持っている武器。銃ならその可能性もあったが、男は違う。人影は2メートルにも及ぶ長さの剣を右手に持っており、あからさまな敵意を俺に向けている。

やがて土埃が流れ去ると、人影はハッキリとした人の姿となった。俺はソイツの名前を知っている。

「硬質の……ノーム!？」

「こいつは……藤島圭介よ、計算外のことをしてくれませぬー」

落ち付きのある声から、どこか苛立ちを感じさせる。怒っている……冷静で嫌味な雰囲気を持つ硬質のノームが　　滅茶苦茶怒っている。

「まさか、と思って軍隊との戦闘を切りあげたのは正解でした。本当、まさかですよ……あの防衛線を突破して、教会内に侵入してい

るとは……いちいち癪に障りますねー」

「てめえこそ……街中にこんな儀式場を作りやがって。てめえのせいでこの街はすっかり戦場だ！」

「ふーん、それがどうか。関係ないでしょう？」

その言葉にまた 俺は力チンときた。

「てめえ、人の命を何だと思ってるやがる！」

「私は新たなる宗教の始祖となり、神となり、愚民共を信者として私の言うことを神の声とし、無理やり従わせてやることを目的としているんですよ。大規模震災術式も殆ど 見せしめみたいなものですかねー。神である私を信じない者には 天罰が下るというヤツですかねー？」

「ふざけんなよ……じゃあなんで、てめえは宗教否定派のサヴィエトにいるんだよっ！」

「赤の軍神にいる理由はその目的を達成する為に、魔術師の信者を増やす為にその地位を利用していただけなんですよ。まあ結論、利用して私は神になる。人の命は大事ですよ？ ただ 私の教え以外のものを信じる者は人ではありません。しかし、死ぬことによつて罪は償われます。それが出来ない者は本当に行き場がないってわけなんですな。わかりましたか、極東のお猿さん？」

アマデーオや風剣のシルフはまだ許せた。アイツらには行き場がなかった。行き場がないからこそサヴィエトでしか存在出来なかった。だからアイツらは ただ命令に従っていた。

でも、そんな裏があるんなら　俺はアイツらを許す事が出来る。だけど……コイツだけは許せねえ。自分の勝手すぎる事情で、狭い価値観を正しいことにして世界を作り変えよう……だって？

「ふ、ざけんな　そんなことさせると思ってたのか？」

「おや、まさか貴方一人で戦うつもりですか？　ナメられたもんですねー、貴方の喧嘩の腕がポルトガル軍よりも優秀だと言えるのですか？」

言いながら、硬質のノームは薄く笑いながら石剣せうけんを構え、

「とはいえ、貴方は暴れたいみたいです……ですが、儀式場を破壊したくはないのでねえ……まあ一瞬で終わらせますので、精々悪あがきをしやがってくださいねー」

遂に赤の軍神の一人　硬質のノームが牙を剥いた。

いよいよ始まる……色々な物をブツ壊そうとする　クソ野郎との決戦が……ッ！

第198話 サン・ジュリアン教会（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「それぞれの戦いは、さらに激しさを増す。国家レベルの問題にまで発展した今回の騒動。果たして、俺は硬質のノームに勝てるのか？ そして、暮葉達は？ セトウバルに舞い降りた早川<sup>アイツ</sup>悠は？ 次回、総力戦」

伊吹「な、なに次回予告風のことしちゃってんのよ！」

圭介「だって……ねえ？」

大吾「ああ、そろそろマジでネタが……」

亜紀「そんな……これが終わったらあたし達の出番は！？」

千早「そうですね……先輩、その……頑張つて続けましょう？」

圭介「お、おう。いよいよネタがなくなったら今回みたいに次回予告するよ」

## 第199話 総力戦

装飾に彩られながら、落書きに汚されたサン・ジュリアン教会の外から、耳を塞ぎたくなるような轟音が何度も何度も響いてくる。どうやら、外ではまだ戦闘が続いているらしい。暮葉達が優勢なのかサヴィエトが優勢なのかは別として、まだ……激しい戦闘が行われているようだ。

そんな中、俺は伊吹を庇うように立ち上がり、右拳を握って硬質のノームを睨み付ける。

距離は大体7メートル。

施設を壊したくないらしいから、おそらく相手は本気を出さないだろうが……それでも自由自在に砂を操れるらしいから、不意に砂の攻撃が飛んで来ないかに注意しないと。

それからあの石剣<sup>せっけん</sup>。切れ味はゼロだが、打撃力は完璧な代物だ。ハッ、1人で勝てるかな……ちよつとでも油断したら本当に埋葬されちまうな。

「最後に確認するけどよ、ホントにやるつもりかよ？」

「ええそうですよ。というか、貴方が売ってきた喧嘩ではありませんか？」

「ハッ、そうかよ……ッ！」

その答えを聞いて、俺は床を蹴って前を駆けた。

硬質のノームは、先程まで舞っていた土埃を真横に伸ばした左腕の周囲に集め、やがてそれは砂の槍となってこちらに放たれた。

俺は砂の槍を避けるため、嗟に右へ跳躍し、礼拝堂の椅子の影に隠れた……が、

「詰めが甘いのが難点ですねー」

ドア！ という轟音と共に、通り過ぎたハズの砂の槍が突然形を崩し、俺の頭上である天井のあたりで再び砂の槍となり、狙撃をするかのように砂の槍が落下してきたのだ。

「ッ!?!」

まずいとは思っても、身体が反応してくれない。砂の槍が早過ぎるのか、頭でわかっていても身体がついていかなかった。まずいこのままだと本当に串刺しだ。

しかし、

「ちよ、しっかりしなさいよ!」

「う、あッ!?!」

砂の槍が僅か手前まで迫ったところで、突然伊吹がタツクルを仕掛けてくる。ドン、という身体と身体がぶつかり合う鈍い音と共に、俺は何メートルも彼女に突き飛ばされた。

さらにその後、

砂の槍が床に直撃したのか、砂の槍が床を破壊してさらなる土埃が発生し、また破壊と同時に全てを薙ぎ倒すような衝撃波が発生。俺も伊吹もそれに耐える事が出来ず、いきなり吹きつけてきた衝撃波によって吹き飛ばされてしまった。俺と伊吹はまた、何メートルも投げ飛ばされる。

「い、てえ……っ」

「う、きゆう。圭介……大丈夫？」

「俺は平気だ。ありがとうな……」

気付いた時には伊吹がマウントポジションをとっていた。どうやら、伊吹はただ俺にタツクルしてしがみ付いていたわけではなく、俺を助ける為にタツクルしてきたらしい。

抱きついているのも同じだ。せめて、後頭部は守ろうととった行動のようだ。

「ッ！」

轟！ という音を聞いて、俺と伊吹は音の聞こえたほうを見る。

音が発生したのは硬質のノームが立っている場所ではなく、砂の槍の爆心地。先程の攻撃で穴が開いた床のあたりだ。

作り出されたのは砂の塊。

砂が渦を巻いて一か所に集まり、不気味に空中に浮いている。

「な、なんだ あれ？」

なんだかよくわからないが、俺は砂の渦を見て驚いていた。

と、完全に注意を砂の渦に奪われていた……その時、

砂が 大爆発を起こした。

「ぐああ、があああアアアあああッ！」

「あ、あああああああッ！」

容赦なく俺達を襲ってくる無数の砂。皮膚に触れただけで皮膚を傷つけ、目さえも開けられない状況の中、爆発を起こした砂によっ



て皮膚を傷つけられていく。

やがて、砂は爆風に流されて視界も回復するが……クソッ、体中痛えな。右腕や左腕をこの目で確認してみると、無数の小さな傷が出来ていて、そこから真っ赤な血が滲み出ている。

って……待てよ。俺でこんなダメージを負ってるんだから……伊吹は？

「伊吹！ あ……………ッ！」

まさか……と思って、名前を叫びながら彼女のほうを見ると、血塗れになってぐったり倒れている彼女の姿がある。まだ辛うじて意識があるらしく、活力のない瞳で俺の事を見ている。

呼吸も弱々しい。クソ、やっぱり……伊吹は普通の人間だし、重傷だった。

「て、んめえ……………ッ！」

「ふふふ、仲間想いでよろしいですねー。それとも、貴方は彼女が好きなのですか？」

「ふっざけんな！ 好きとか嫌いとかは関係ねえ。お前は誰を傷つけたと思ってるんだ！」

「誰って、貴方の仲間 人間の出来損ないが重傷を負っただけでしょう？」

その言葉を聞いて、さらに何かが頭の中で切れたような感じがした。

ブチッ、と。

もう 俺を抑えるものは何もない。

「この野郎……てめえは友達を、大切な幼馴染を傷つけられても何とも思わねえのか！」

「私に友達はいませんよ。いるのは 神のように崇める信者と下僕のみです」

言いながら、硬質のノームは左手を頭上へ上げる。

頭上で開かれた五本の指の上に、砂の槍に破壊された床の破片が集まってゆく。

「それより貴方は 自分の身の心配をしたほうがいいですよお？」

硬質のノームの左手から閃光が放たれた瞬間、その現象は発生する。破片は硬質のノームの手のひらに集まり、バレーボール程の大きさの塊になった。

その塊が 爆発を起こしたのである。

ある意味砂よりもたちが悪い。破片が大きい分 ダメージも大きいんだ。

「ぐ、あ、がアあぁッ！」

ゴンゴンと、銃弾を撃ち込まれるような強い刺激が全身を襲う。何度も、破片となった塊が容赦なく襲いかかり、俺の身体に傷を増やしていくのであった。

「しかし……本当にがっかりですよ」

「……？」

攻撃を終えたところで、突然硬質のノームがそう呟く。  
「がっかり……だと？」

「チツ、少し強いくらいで調子に乗りやがって……まだ決着はついてねえんだよ。」

「アレクサンドルの子孫……と聞いていましたから、苦戦を覚悟していたんですがねえ……案外、その子孫はまだ完成されていない未熟なケツの青いひよっこでしたよ」

「なんだと……？」

「まあ、その子は幼馴染ということに拘束させてもらいましたが……それ以上、キスだのセツクスだのをできる関係ではなさそうですねー？」

「本来の……力？」

「本来の力って……一体どういうことなんだ？  
まさかアレか。俺がキスをしたら強くなるっていうアレが本来の力なのか？」

「そういえば、暮葉も似たようなことを言っていたよな……。」

「おやおや、知らないとは言わせませんよ？ あのアレクサンドルは神に匹敵する強さを誇っていました。その正体は……まあ語っても仕方ないでしょう。特に無神論者の君にはねえ？」

「なんだよ……なんだつつつてんだよ！」

アレクサンドルの正体というところで俺は反応し、それが滅茶苦茶気になった。俺の御先祖様の正体が何なのか……子孫の俺もかな

り興味がある。

そして、その正体を　硬質のノームは知っているようだ。

「まあまあ怒らないでくださいよ。別に貴方の御先祖様は大したモンではありません。ただ、世界中の魔術師が束になっても勝てない……そんなような人でしたがねー？　逆に貴方は感謝すべきなのです。そんなお強い御先祖様がいたからこそ　貴方は今こうして生きている。そして恨みもしなければいけないですねー。そんな強い御先祖様だったから　貴方が生まれて今、こうして襲われているのです」

結局俺の本来の力についても、アレクサンドルの正体も明かさなのか。結局子孫の俺には何が何だかサッパリわからねえ。物凄い秘密があることくらいしかわからねえ。だけど、そんな無知な俺でも疑問に思うことくらいは出来る。

ふざけんよ、と硬質のノームに叫びたいところだが、そんな余裕は残されていない。

今はいかにアイツを倒すか。

それをじっくり考える必要がある。硬質のノームの弱点は何か、隙はあるのか、どこか常人よりも脆いところがないのか。とにかく、俺はアイツの弱点についていろいろな事を考えた。

そういえば……地割れだの岩を作るだの、さっきみたいに大胆な技を使わないな。

もしかしてコイツ　、

「ふん、正体を語る気がねえんならもういい……関係ねえよ」

「そうですかぁ……まっ、語った所で貴方は理解できないでしょうからねー」

「ああ、理解出来ねえだろうな。だから馬鹿な俺でもできる事をやってやるぜ」

「へえ、なにをするつもりなんですかねー？ まさか、木登りでもするんですか？」

「ああ、今から てめえをぶん殴る！」

それが唯一今の俺に出来そうなこと。それを実行する為に 俺は駆け始めた。

俺の動きに反応して、硬質のノームは右手に持つ石剣せうけんを構える。石剣を右手だけで大きく振り回してみせると、今度はそれを激しく床へ叩きつける。それだけ、たったそれだけの動作で礼拝堂の床は大きく砕かれて、無数の破片がこちらに迫ってくる。

そのタイミングに合わせ、俺は大きく前に飛び出した。防御も回避もせず、自ら危険な場所へ足を踏み込んだのである。石剣せうけんに砕かれ、飛翔する破片に当たりながら。

「おおオオああああッ！」

激痛を伴い、顔を歪ませても突き進んだ。ただ、前へ突進し続けたのだ。迷いも躊躇いも考えも何もないけど、前に進めば何かがあると信じ 馬鹿正直に進み続けたのである。

「自害はいけませんねー！」

硬質のノームが左手を突き出す。

瞬間、

背中にゴガン！ という鈍く、激しい衝撃が伝わってきた。肺から空気が抜け、一瞬呼吸困難状態に陥った上に、足元がフラフラし

て倒れてしまいそうになった。だけど……気合いと根性だけで立ち上がるのと全身に力を入れ、キツ、と硬質のノームを睨み付ける。そして文字通り、俺は気合いと根性だけで立ち上がった。呼吸も口々に出来ないくせに目の前のクソ野郎をぶん殴ろうと　　ひたすら前へ進み続けたのだ。

一歩、また一歩。一歩ずつ、確実に間合いは詰まってゆく。

「チツ、いい加減鬱陶しいですよ……神聖教でも異端とされる正教会の子孫が。つまり　　殆ど異教のクソ猿と同じ意味なんだよオオオオオ！」

ついに本気出してキレやがったな。あの敬語がどこかに消えた。本来の、荒々しい言葉が表に出てきやがったぜ。硬質のノームもよつぽどムカついてるんだな。俺が中々倒れないからか？

だからだろう。だからアイツは　　限界に達してキレ始めたんだ。

「おおおオアああアアあああッ！」

ようやく肺も復活してきたところで、俺は再び雄叫びを上げながら前へ駆ける。拳を振り上げて硬質のノームを睨み付け、顔面に照準を定める。

その動きに合わせて、硬質のノームは右手で石剣せっけんを振りまわして、左手で土埃を操って再び無数の砂が腕の周囲を循環する。

やがて硬質のノームは左手を突き出し　　砂の槍を放ってきた。

「　　ッ！」

ズドン！　と、砂の槍が直撃する。

直撃の瞬間、砂の槍は形を失って元の土埃に戻るが、受けたダメージは甚大だ。その衝撃に口から血の塊を吐いてしまった。真っ赤

な血が宙を舞う。くの字に曲がった俺の身体。着用していた服も腹の部分が大きく破けており、赤黒い血がボタボタと礼拝堂の床に落ちている。

俺の足元は完全に血だまりと化していた。

「な……」

息を呑む音。

それは俺の音ではない。そう　砂の槍を放った硬質のノームの口だ。

無理もない。

最大の威力で砂の槍を放ったのに、俺は腹に重傷を負っただけで済んだのだから。

「な、ぜ……なぜ貴方は生きていますか？」

「あ？」

「戦車さえ……戦車さえ行動不能に陥る今の一撃で　何故貴様はア！？」

そうか、今の一撃……戦車を行動不能に陥れる程の威力があったんだな。なるほど通りで滅茶苦茶痛いわけだし、丈夫なハズの俺がこれだけ大量に血を流すわけだ。

おかげでフラフラだぜ……クソ、次第に視界もぼやけてきやがった。血が、血が段々足りなくなっていくように感じる。それでも、腹からはドクドクと、赤黒い血が流れ出している。

内臓が痛え、破裂したかのようだ……まあ、多分破裂はしていないと思うが。

骨もヤバい……砕けたように痛え。

俺はこんなにボロボロだ……でも、

ノームの全てを賭けた一撃でも　俺は倒れなかった。

「教えてやるよクソ野郎……」

静かに言い、拳を固く握り締める。

硬質のノームの眉がピクン、と動いた。

「俺は　てめえが思っている以上に頑丈なんだよ」

いくら赤の軍神だからって。どんなにすごい魔法を使えたって……俺は俺、トラックに轢かれてもピンピンしているヤツが、魔法なんて人の扱うもので死に切れるわけがねえだろ。

「全く……不便な身体だ。特に喧嘩が強くなるわけでもねえし、テストの点数が上がるわけでもねえ……身体が頑丈でも痛いだけだよ。だけどな……一つだけいい事があるよ」

「あ、ああ……」

「何度でも立ち上げられる。何回でも　目の前のクソ野郎をぶん殴れる！」

力を籠めて放った一言。それに反応した硬質のノームは、

「う、ほ……ほざいてるんじゃないですよ！　若造のクソ猿が、調子に乗るなあああッ！」

怒りを爆発させ、硬質のノームは完全にキレてしまったようだ。



言葉も普段の敬語とは程遠いくらいに汚くなっており、額にも短気な人のように血管が浮かび上がっていた。

とうとう崩壊したんだ　硬質のノームという人物が。

「こつなつたら術式は後で組み直す！　教会も吹っ飛ばす覚悟で

」

ついに禁断の決断を下した……まさにその瞬間

、  
ブチギレ状態の彼の背後で　バン！　と、礼拝堂の扉が開けられた。彼は俺に注意しながら後ろを振り向き、恐る恐る扉のほうを確認した。

礼拝堂に突入してきたのは、俺の俺の仲間たち。

木下暮葉、明智凧紗、白藤早苗……そして　何故かポルトガル

軍の兵士も、彼女達と並んで銃口を硬質のノームへ向けていたのだ。

暮葉達ら……いつのまにポルトガル軍を味方に……？

ハハ……何か知らねえけど、最高の展開じゃねえかよ。

「ま、さか　配下の魔術師共は……？」

「全部、拙者達がやつつけちゃったのです」

震えながら質問する硬質のノームに、暮葉がニコツと、笑顔で恐ろしい事を答えた。

「すげえ……3人で。いや、軍と協力してホントに全員倒しちまったのか？」

「心配するな、全員急所は外してある。お前の部下は病院送りで済むハズだろう」

と、冷静に部下たちの容体を報告する明智。

これはこれでひどい気がするが……その余裕さが、硬質のノームに火をつける。

「こ、殺す……殺す殺す殺してやります！　まずはその死に損ない　藤島ア！」

その叫びを聞いて、俺は構える。

ポルトガル軍兵士や白藤、暮葉も武器を構えた……が、空気を読んだのか、明智が一步前に出てから腕を伸ばし、彼らに手を出さないように命じた。

サンキュー明智……決着は　必ず俺がつけてやる。

「おおおオオオああああああッ！」

冷静さを失った硬質のノームは、両手で石剣せうけんを握り締め、それを振り上げてこちらに向かつて全力疾走してきた。馬鹿野郎……魔法使いのくせに、体力ない癖に……態々自分が不利な近接戦闘を挑んでくるとは。硬質のノームも追い詰められて、正常な判断が出来ないんだな。

くたばれ、と彼は叫びながら石剣せうけんを振り回す。

薙ぎ払うように。俺の首筋へ打ち込もうと　しかし、

「ッ！」

反射的に左腕を伸ばす。その瞬間　俺は左手で石剣せうけんを受け止めた。

「ば、か………ッ!？」

驚愕する硬質のノーム。

石剣を受け止めたことにより、ビリビリと伝わってくる、左手への痛み。

だが そんなものは気にしない。

右拳を砕く勢いで握り締め、恐怖と驚愕に彩られたノームの顔面を捉えて、

「これがてめえの 限界だああアああッ！」

ゴガン！ という壮絶な激突音。

硬質のノームの身体が床に投げ出され、激しく背中を床に叩きつける。

あまりの衝撃に歯が数本飛び散り、背中を叩きつけたと同時にちの塊を吐きだし、そのまま動きを止めてしまった。どうやら、硬質のノームは気を失ってしまったらしい。

「はあ、はあ……げっほ！ ゴホ、はあ……はあ……っ」

戦いは終わった。

最初はダメかと思った。

だけど俺の拳は、国際レベルの騒動を起こそうとしていた馬鹿を沈めたんだ。

「う……ッ！」

あ、れ……？

なんだ、何か……思っていたよりダメージが大きかったのだろうか。視界が……何だかぼやけてきたような……あ、頭がふわふわ……あ、れ……っ？

「あっ！ けーすけ様っ！」

「藤島！」

「オイ少年！ シツカリシロ！」

床冷え……暮葉や明智、それから……ポルトガル兵のカトコトの日本語が聞こえる。

俺の意識は 大体この辺で途切れていた。

## 第199話 総力戦（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「確かに最終決戦だったけど……」

重原「早川の出番なくね？」

圭介「き、気にするな……ほら、よくあるだろ？ ゲームの宣伝PVと内容が全然違うことって」

大吾「うわ、逃げた」

重原「逃げたね」

圭介「いいだろ別に！ 少しくらい逃げたっていいじゃないか！」

大吾「さて、今回は今回のまとめだな」

重原「波乱の2日間編と言いつつ、1日目が異常に長かったね……」

## 第200話 白い人影

私……今まで気絶してたの？

どうやら私 国宗伊吹は今まで気絶していたようで、圭介の叫び声で目覚めたらしい。

その圭介は……えっ、ちょ……なんで圭介が血だらけなのに。なんで……あんなに丈夫な圭介が血だらけの状態で気絶してんのよ？ しかも圭介の周りには暮葉や凧紗に白藤。あと、どうして軍服を着た人達が圭介の周りに集ってんのよ？

「ひどい怪我だぞ……っ」

【出血が多い】

「けーすけ様！ しっかりしてください、けーすけ様っ！」

「コレハ……スグニ病院へ搬送シマシヨウ」

「トリアエズ急処置ヲ施シマシヨウ。早くシナイト少年ノ命ニ関ワ  
ル」

なによこれ……一体どうなったのよ？

しかも暮葉達は私に気づいてないのかしら？

……そういえば私、暮葉達の死角になる所にいるわね。そりゃ気付かれないわ……そう思っただけは無事を知らせる為に、暮葉達の前まで行こうと立ち上がった。その時、

ガタ、と。

不自然な物音が礼拝堂の中に響き渡り、暮葉達は扉のほうを向いた。

えっ……なによ。もしかして……また何か起こったの……？

「こ、硬質のノーム！」

えっ、と私は驚いた。だってアイツ……圭介が倒したんでしょ？  
そう思いながら私は礼拝堂の椅子の影に隠れ、暮葉達の様子を窺った。よくよく見ると暮葉達の奥には一人の男が床に転がっている。黄緑色の修道服に、痩せこけた初老の男性。違いなくソイツは私や圭介を襲ったサヴィエトの魔法使い。名前は確か……硬質のノームだっただかしら？

僅かに腕が動いている。でも、力が入らないのかしら。起きあがりはしなかった。

「く、くく……藤島圭介。確かに脅威的な男ですねー……戦えば我々、いや、どんな者でも相性が悪い男でしょう。ここまでタフなお方は正直……初めてですねえ……ッ」

床に転がったままの硬質のノームは、忌々しげに圭介のことを語っている。余程体力を消耗しているのだろうか、硬質のノームの唇が震えている。

ここからじゃ、遠いせいでよくわからないけど……目も虚ろな気がするわ。

「硬質のノーム。まさか、まだ戦うつもりなのですか？」

「ええそうですよ……残念ながら、今回の作戦は失敗ですが……私  
はこれしきの事で諦めるほど潔い男ではないのですよ……ところで、  
知りたくないですか？」

「もきゅ、なにを……ですか？」

「彼 藤島圭介の御先祖様についてですよ」

圭介の……御先祖様？

確か日本人じゃなかったって話は、前に暮葉から聞いた気がするけど……。

「アレクサンドル様がどうかされたのですか？」

「これは藤島圭介の正体にも繋がりますよ。考えてみてください。何故、アレクサンドル皇太子は皇族で唯一生き永らえたのでしょうか？ 何故、彼は強大な力を持っていたのでしょうか？ そして何故 その力が藤島圭介にのみ、受け継がれているのでしょうか……？」

ちょ、サツパリ意味がわからないわよ。なによそれ、確かに圭介は変人だけど、あの言い方だと圭介が人間じゃないみたいじゃない。失礼よ、いくらなんでも圭介に失礼だわ。

アイツはいくら丈夫でも人間よ。私の幼馴染よ……こんなに勝手な私を、必要以上に咎めないで助けてくれた優しく、甘すぎる……唯一本音を言った相手なのよ……？

私は別にアイツが人外でも構わない。アイツは何であろうとアイツだから……。

でも、だからって アイツに失礼なことだけは言わないでよっ。

「なに、簡単な事です。アレクサンドル、そして……藤島圭介の正体は」

私は……いや、ここにいる人全員が、その答えを聞くことは出来なかった。



ゴツ！ という、莫大な轟音と共に。

いきなり礼拝堂が吹き飛んだからだ。真っ白い閃光が周囲を包み込み、床に横たわる硬質のノームや圭介、暮葉達まで吹き荒れる暴風に流され、何処かにふっ飛ばされてしまった。

私も足が床から離れる。咄嗟に礼拝堂の椅子を掴んで持ち堪えようとすけど、それも失敗に思った結局吹き飛ばされてしまった。そもそも、礼拝堂自体が吹き飛んでいるのよ。椅子掴まったところで椅子も一緒にふっ飛ばされてしまうに決まってんじゃない。

激しい暴風の煽りを受けて、私達は風に運命を任せて飛ばされる。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

床に叩きつけられて、あまりの激痛に絶叫してしまった。なによ…… 一体、いきなりすぎて意味わかんないわよ。何が起こったのよ…… どうして私たちふっ飛ばされちゃったのよ？

他にも悲鳴が聞こえるわ…… 多分、暮葉や凧紗達だと思う。男の声は…… 圭介は気絶しているから多分軍人さん。それが 僅かに意識を取り戻していた硬質のノーム。

「ッー！」

そういえば 圭介は？

アイツは多分…… というか絶対、今の爆発的な暴風に巻き込まれたわよね？

無事なの？

アイツは…… 教会はもう瓦礫と化しているけど、アイツは無事なの？

暮葉は？

凧紗は？

白藤は？

さっきの軍人たちは？

「圭介！ ばか圭介……圭介エエエえええええええッ！」

激しい痛みと、暴風のせいで立ち上がれないまま、私はアイツの名前を叫んだ。叫び声がアイツに届いているかはわからない。いや、多分届いていないわ……アイツ、どこよ。サン・ジユリアン教会は完全に瓦礫の山と化しちゃったけど、アイツも暮葉達も……一体どこに消えたのよ？

探さないと。みんなを探さないと……そんな衝動に駆られて、全身に感じる激しい痛みを堪えて瓦礫を手すり代わりに、私はなんとか立ち上がった。

どこまでも、延々と続く瓦礫の山……うっ、みんな……どこよ、どこにいろのよ？

「はア……クソツタレ、こりゃあちつとばつかやり過ぎたかもしれねエなア？」

突然声が聞こえた。どこかで聞いたことがある……気がするけど、その声を聞いたその時から背筋が凍って、次第に全身が震えてきた。嫌な汗も噴き出してくる。

吹き荒れる暴風の中、一番高い瓦礫の山に立つ人影。杖を持っている、白く、狂ったような雰囲気を持つ人影。どこかで見たような気もするけど……あ、アイツは……何者なの？

「早川さん。これでは死体の確認も困難ですよ」

「うつせエなア……まさかここまで脆い年代物だとは、クソも思っ  
てなかったんだよ」

白い人影の前に黒い2つの人影が現れる。銃を持っているみたい  
ね……あの2人は軍人でしかも白い人影の仲間なの……？  
一体……何がどうなってんのよ？

「しかし、流石は最強の超能力者。我が部隊の魔法使いの誰よりも  
素晴らしいです」

超能力者？

魔法使い？

アイツら……暮葉の仲間、いや……仲間なわけがないわ。もし暮  
葉の仲間だとしたら突然教会ごと吹き飛ばすわけがない。中に暮葉  
がいるかもしれないし、巻き添えを喰らったら……。  
とにかくアイツら……普通じゃないわよ。狂ってるわよ……アイ  
ツら……ッ。

「ふん……お世辞言ってる暇あったら仕事しろオ仕事」

「はっ、とりあえず死体を探しましょうか」

「標的は確か、緑っぽい服を着ているらしいなア？ 服の切れはし  
でもいい、とにかく噂のクソ野郎の遺品と思われるものか、クソ野  
郎の身体のパーツが落ちていたら回収しろ」

「了解！」

「チッ、本当に面倒臭エ……上は何でオレを派遣しやがったんだア  
？ ったく、拠点攻略はアナスタシアのクソアマにやらせろっての。

アイツの魔法の方が今回の作戦には向いてンだろ。オレの能力は破壊と殲滅以外に殆ど使い道がねエンだつっの」

動けない……怖い、あの人達が誰だかわからないけど……怖いっ。  
結局、あの人達とは一度も目が合わなかったし、会って話す事もなかったけど、それでも私の全身を恐怖が包み込んでいた。

勝てない、殺される。

本能的にそう思った。多分それは正しいわ……今の人達。どう考えてもお友達になりましようって雰囲気じゃなかったし、何より超能力とか魔法とか、普通じゃない事を言っている……。

結局、私はあの人達が居なくなるまで 怯えながら瓦礫に身を隠していた。

「う、ここまで逃げれば……多分っ」

私 硬質のノームは、辛うじてサン・ジュリアン教会を脱出。  
現在、私はサンファイリペ城というセトウーバル西郊にある、かつて英国対策に建築された城にいる。そこから、セトウーバルの市街地を見下ろしていました。しかし……今回は私の完敗ですね。

まさか、彼らがあそこまでやる人間だとは思いませんでした。意外な結末ですが、だからと言って諦める理由にはなりませんねー。

藤島圭介のデータも集まった事ですし、今度は念入りに作戦を立てて、それから今度はここよりもっと目立たないアフリカで 大規模震災術式発動の為の儀式場を作りましょう。

それまで、私を倒した平和を守ったと 勘違いしててください

いね。

「ノーム」

「ああ、サラマンダーですか」

背後から足音が聞こえてきたと思いましたが……サラマンダーでしたか。いつのまに彼もセトウーバルに来ていたんですねー。折角ですから、私と藤島圭介との戦いに介入し、サン・ジュリアン教会防衛を手伝って欲しかったのですが……まあいいでしょう。

この筋肉馬鹿は何でも破壊する男です。介入しても意味はなかったでしょう。

「随分な失態だな。貴様ともあろう者が　シルフと同じ失敗をするとはな」

「そうですねえ。ですが、これだけは言わせてもらえないでしょうか？」

「何か？」

「藤島圭介……アレは想像以上にできる男ですよ」

「ほう」

おやおや、思っていたより関心が薄いですねー。要は相手は強いと言う意味。これほどサラマンダーが好きそうなネタはないと思うのですが……まあ、いいでしょう。

「出来るからこそ、次はより完璧な作戦でいきますよ」

「どういつ作戦だ？」

「次はアフリカで術式を組みます。仮に彼らが攻めてきたとしても、今度は負けないでしょう……一応、藤島圭介やその他の戦闘データは集まりましたからねー」

藤島圭介の腕力、強度、敏捷性、性格……全てのデータが揃いました。その他のアルファ隊の隊員や裏切り者の真の実力。そしてあの魔術とも違う力を使う女のデータも。

フッフ、これだけ集まれば 次に私が負けることはないでしょう。

「そうか、中々壮大な作戦であるな」

「そうだサラマンダー。貴方も次の作戦に参加しますか？」

「……何故だ」

「なあと簡単なことです。私の魔術の特性は、今回みたいに大勢の敵を相手にするのは向いていないのですよ。ですから、聖人の貴方が戦列に加わってくれば 勝率は大幅にアップしますよ」

「……そうだな、私も腕が鈍ってきたところだ。ウォーミングアップでもしたい所だ」

「流石はウエセックスの騎士様。戦意が高くてよろしいことです」

「そうだな……ではウォーミングアップをしようか。貴様でな」

は？ と一瞬思ったが、それを口にする前に 筋肉馬鹿の腕が  
動きました。

轟！ と言う凄まじい音が聞こえた。

詳しい事はわかりませんが……、

その瞬間、何かかが弾けたような気がしました。

「お……あ……？」

な……にが？

苦し……い、呼吸がマトモに出来ない……一体、今の一瞬で何が  
起きましたか。そういえば全身に違和感を感じます。なんと  
……激痛と共に、一部の感覚がない気が……。

いや、ですが……時々感覚が残っているような、不思議な感じが  
します。

一体……何が、起きたんでしょうか……？

「タフなヤツだ。胸から下と左腕を失いながら……まだ息をしてい  
る」

そ、そういうわけ……だったんですか。おのれ……邪炎のサラマ  
ンダー。どうやら私は肉体の殆どを失ってしまったようです。フ  
フ、面白い……どうせ私は助からないでしょうが、このまま私だけ  
死ぬのはどうも気に入らない。ムカつきましたよ……報復してやり  
ます。

まずは延命処置。岩石で傷を塞いで……ッ！

「ん？ 岩石で切断面を塞いで止血するとは……まだ魔術を使う元  
気があるのだな」

「え、ええ……これ、で……数分は、生きれる……でしょうね……？」

「すぐに死んだほうが楽だろう。何故貴様はそこまでして延命処置を行った？」

「なあに……簡単なことです。何故……貴方は、私を……？」

ふん、とサラマンダーは目を瞑った。

「私は貴様が嫌いだ。貴様のやり方、貴様が神になろうという計画。全てが気に入らん……だから私は良識ある者として貴様を肅清した。傷つくのは我々兵隊のみでいい。貴様のように、民間人すら傷つけるクズは嫌いだ。貴様はいつも言っているだろう……死んで罪を償うがいい」

ふ、フフフ……随分とくだらない理由で私を殺してくれましたね。最低です、同じ神を信じている者としてあるまじき行為ですよ。彼は……私の計画では、私の宗教でも幹部格に仕立て上げようと思っただけに残念です。そして、私を殺した事は神罰に値します。ですから……彼も、当然　死んで罪を償うべきなのです。

私は残った右腕に、全身に残っている全ての力を注いで動かす。指を五本に開いた手のひらをサラマンダーに向け、私自身も余裕の笑みを作って浮かべました……。

「ほう、この状況で戦うつもりか？」

「ふ、ふふ……私は……神です。その私を殺す行為は神罰……です。から、貴方も罪を償い……この私と共に　死にやがればいいのです」



言いながら、私は右腕の周りに砂を集め、循環させてゆく。藤島圭介に向けて放った一撃は儀式場の破壊を防ぐために、パワーをセーブしたから、あの程度の威力しかなかったのです。

ですが、今回は違います。

残った魔力、私から半径20メートル以内にある砂を全て集め、戦車どころか500ミリの装甲を持つ戦艦さえ一撃で撃沈させられる。それくらいの威力はあるであろう砂の槍を、あの化け物聖人邪炎のサラマンダーに放ってやるのです。そうすれば ヤツも致命傷を負うでしょう。

「元気だな、病院に行けば助かっていたのではないか？」

「どうせ……腸や胃……などは失ってますし、死にますよ……ですが、私……は、貴方を許せないのです……死ぬ、一緒に……道連れにして、やります……よ……ッ」

言いながら、私は全力を籠めた砂の槍を放ってやりました。しかし、これだけのことをしていると言うのに、何故か邪炎のサラマンダーから余裕が消えません……何故？

「一つだけ忠告しておこう」

と、一言を置いてからサラマンダーは右手を広げる。

「貴様の實力では傷一つつけられないだろう。藤島圭介は私が回収し、日本という国は私が占領する。貴様は 地獄に逝って罪を償え」

次の瞬間、サラマンダーを中心に眩い閃光が発生し、あれほどの

砂の槍を……掻き消しながら閃光は私を襲ってきました。カッ、と  
……僅かな時間で。声を発する暇もなく、

……。

## 第200話 白い人影（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「寒いなあ！」

暮葉「けーすけ様、まだ8月なのですよ？」

圭介「馬鹿！ 現実じゃ10月18日なの！」

暮葉「でも、仮にそうだとしても古宇坂は秋晴れなのですよ？」

圭介「いや、凍えるような寒さだけ……もう雪降るな」

暮葉「古宇坂は滅多に雪降らないのですよ？」

圭介「いや、降るよ……滅茶苦茶降ってササラ電車が……っ」

暮葉「けーすけ様、どこの地域の話なのですか、それ？」

番外話 世界・国家・街・施設（前書き）

どうも、作戦参謀です！

波乱の二日間、一日目が終了してキリがいいので、色々設定も増えたことなので、序章から今までに出てきた設定をまとめて見ました！大いにネタバレを含みますので、初見の読者様は先に本編をお読みいただくことをオススメします。

今回は世界・国・町・施設です！

なお、増えたら随時追加していく予定です。

## 番外話 世界・国家・街・施設

### 世界

#### この世界

日本やアメリカなどという国家が存在し、圭介達が暮らしている、一般的に【世界】と呼ばれている現実世界のこと。科学技術が発達している反面、世界的に経済危機に瀕している。

魔法などはあまり信じられていないが、【魔術師】と呼ばれる、魔術（魔法）を操る人達が僅かながら存在している。また、一部の機関は超能力を開発出来る程の技術力を持っている。

だが基本はオカルトに冷たく、それらを扱える人の人数も圧倒的に少ない。

仮に使えたとしても、特に日本などでは社会的に追放される可能性がある。

#### レムリア

異世界、暮葉やミネットが暮らしている。その実態は不明であるが、圭介やノームは【パラレルワールド】であると推測しており、【この世界】で言うロシアに相当する国家や、アメリカに相当する国家やキリスト教に相当する宗教が存在するなど、【この世界】との共通点が多い。

魔法が当たり前のよう存在しており、暮葉曰く学校でも授業で習うらしい。

生活水準は【こっちの世界】と大差はないらしいものの、科学と魔法を融合させた独自の技術が発達しており、軍事技術など、最先端技術は【こっちの世界】を遥かに超えている。

最近になって、木下木葉らが科学と魔法を融合させた医療を確立

しつらしい。

## この世界の国家

### 日本国

極東の島国、圭介達の祖国。一時期は経済大国と呼ばれ、現在でも自動車産業や精密機器などを生産しており、世界でも重要な位置にあり、数々の国際的役割も果たしており、日本を目標とする発展途上国の数も多い。しかし、戦争や軍備自体を禁止する憲法が存在しており、国民の約半数や政府が弱腰な為に有事になっても、警察や自衛隊が満足に動けず、結果事態がより深刻化する事がある。

その為、世界各国から【平和ボケした国】と称されている。

大半の国民は魔法や超能力の存在を知らず、信じられていない。しかし、佐井学園など先進的な科学技術を駆使し、闇に隠れて超能力の研究を行う組織は存在している。

### ポルトガル共和国

ヨーロッパのイベリア半島に位置する、ユーラシア大陸最西端の共和制国家。

大航海時代は海を征した国家だが、現在では衰退し経済的にもピンチである。それでもサッカーなどで人々を盛り上げる熱い国家。8月27日、硬質のノームによって、セトウーバルの街が戦場と化する騒動が発生し、ポルトガル軍もかなりの損害を被った様子。

### スペイン国

イベリア半島に位置する立憲君主国。物語の舞台になったわけ

はないが、領空侵犯を堂々とした超音速魔動爆撃機為に対処すべく、空軍が戦闘機をスクランブル発進させた。

## レムリアの国家

### ロジーナ連邦

暮葉の出身国。異世界の国で、【この世界】で言うとロシアに当たる国家。かつては革命でサヴィエトとなり、サヴィエト時代はドメリカと競っていたらしいが、サヴィエト崩壊後はサヴィエトが残した財政危機に頭を悩ませているらしい。

軍事力と魔法技術に長けた国家で、軍事的には超音速で飛行する爆撃機、さらに数多の精鋭特殊部隊や優秀な魔法使いを数多く擁している。魔法技術分野においても、木下木葉などの科学者が研究に研究を重ね、多大な功績を残している。神聖教の宗派の一つ、正教会が存在している。

現在、国家レベルでサヴィエトの計画を阻止しようと動いているらしい。

### ドメリカ合衆国

異世界の国で、【この世界】で言うとアメリカに当たる国家。軍事、経済などあるゆる分野に長けている国家で、かつてはサヴィエトと競って冷戦と呼ばれる対立を長年続けていた。

詳細は不明だが、多分アメリカ同様一人勝ち状態であると思われる。

## ウエセックス

異世界の国で、【この世界】で言うといギリスに当たる国家。詳細は不明だが島国であり、邪炎のサラマンダーの出身国であり、大陸のルテティアとは長きに渡って対立しているらしい。

## ルテティア

異世界の国で、【この世界】で言うところフランスに当たる国家。詳細は不明だが、硬質のノームの出身国であり、ウエセックスとは対立中。

## 日本の都市

### 古宇坂市こゆうが

一応東京圏にある日本の地方都市。人口は約13万人。圭介達が済んでいる街で、また暮葉らアルファ隊が圭介護衛の為に数多く滞在する街でもあり、故にサヴェイエトの魔法使い、暮葉達異世界人を狙う佐井学園が侵入し、市内で大きな事件を起こす事が多い。

8月17日には、風剣のシルフに市の大半を制圧される大事件が発生した。

北部は田園地帯が広がり、古宇坂駅を中心に市街地が広がり、市の南部は真新しい住宅街に工業地帯が続いているようである。

正確な場所は不明だが、多分房総半島のどこかにある。

## 東京

日本の首都。作中で登場したのは秋葉原や江東区の有明、【Freedom/Story】とのコラボを行った際には下町が登場し



た。

ちなみに秋葉原はA M Aの根城アキバ・ミッドナイト・アーミーでもあった。

また、秘密裏に超能力の開発を行う佐井学園も、都内に存在している。

#### 調布市

東京都にある街。調布飛行場へ行くために圭介達が訪れた。

#### 千葉市

日本の都市。千葉県の県庁所在地であり、政令指定都市でもある。人口は90万を超えており、圭介達にとっては一番身近な都会である。その為古宇坂の学生はしょっちゅう遊びに訪れるらしい。

#### 沼山市

古宇坂の南に存在する地方都市。8・17事件の時には、この街の体育館が古宇坂市民の避難場所として開放された。

#### 六角町

海辺にある小さな町。行楽地らしく、海水浴場は大勢の人で賑わっている。

千早の家の別荘があるほか、アマデーオが帆船を作り出して大騒ぎになった事がある。

## ポルトガルの都市

### リスボン

ポルトガルの首都。テージョ川の河口に位置する湾口都市で、圭介達がポルトガルへ来た際に最初に訪れた都市でもある。坂道が多く、圭介はそんな地形に悲鳴を上げていた。市内には路面電車があちこちに走っている。また、一部の路地は非常に狭く、建物の雰囲気も古めかしい。

硬質のノームの手により、路面電車が一部運行不可能状態にされてしまった。

### セトウーバル

リスボン都市圏の最南端に位置する、ポルトガル第4の都市。工業が盛んだが、市街地を外れば手つかずの自然が残っており、サン・フィリペ城やサン・ジュリアン教会など、歴史的な建造物も数多く残されているので、観光拠点としても発展している。

しかし8月27日、硬質のノームらを一層する為に軍隊が派遣され、さらにヴァインペル隊とザスローンの介入もあり、街は壊滅状態に陥った。

また、サン・ジュリアン教会も瓦礫の山と化してしまった。

## 古宇坂市の施設

### 県立初芝高等学校

古宇坂市内にある県立高校。

通称【初高】らしいが、この通称で呼ばれる機会は少ない。市内

でも伝統のある高校で偏差値もそこそこ高い進学校であるが、圭介や黒木など例外的に馬鹿も在籍している。

制服は男子が学ラン、女子は少しピンクっぽいブレザーにチエック柄のスカート。

圭介曰く、制服の可愛さで女子の生徒数を稼いでいるらしい。

#### 県立白陵高等学校

古宇坂市でも、明智家の近くにある筋金入りの不良校。

かつては太田高校と言う名前だったらしいが、ネット上で【バカ田高校】や、学校がある太田地区も【バカ田地区】と呼ばれるようになる。住民も大変迷惑だったようで、校名を変更しろという署名を集めて提出、その後今の校名になり、制服もブレザーとなった。

それでも太田高校時代の学ランを着てくる人がいる。

かつては番長を永渕が、NO2を船木が行っていた……が、永渕は殺害され、船木はどこかに転校したらしいので、不良校としての戦力は低下していると思われる。

付近の廃工場をテリトリーとして利用しているらしい。

#### 市役所

古宇坂市の市役所。6階建ての本庁舎に、2階建ての第2庁舎。

さらに200台駐車できる大きな駐車場がある。8月17日、風剣のシルフによって制圧されてしまった。

#### 工業地帯

古宇坂港南岸から、隣の街に掛けて存在する大きな工業地帯で、数多くの工場が集まって毎日かなりの数の船が出入りしている。

## 海浜緑地公園

古宇坂港にある海浜公園。夜に來るといい景色を見れる。圭介があかりに告白された場所であり、風剣のシルフと圭介が戦った場所でもある。

8月17日の戦闘で、公園の一部が破壊されてしまった。

## 廃オフィス

古宇坂市の北部にある廃オフィス。一時は三原の拠点として利用された。

## 古宇坂総合病院

市街地にある大きな病院。

8・17事件で三原中隊の一部が病院に侵入したが、大半が早川に殺された。

## 誠和大学

古宇坂市で唯一の大学。小規模な大学で、法学部しかないらしい。K・M・Pが葵拉致の為に襲撃をし、圭介と浜島が殴り合った場所でもある。

## 訓練施設。

ヴァインペル隊が建設会社に頼んで作らせた、地下に広がる大規模訓練城。

ここで早川など、ザスローンのメンバーやヴァインペル隊の隊員が、射撃訓練などの実戦を想定した訓練を行っているらしい。また、ザ

スローンの秘密基地としても利用されているらしい。

## 千葉の施設

### 中央公園

千葉市内にある公園。公園の真ん中に人口池がある。  
ここで圭介達とサヴィエトの魔法使いの戦いがあった。

## 東京・調布の施設

### 私立佐井学園

最近開校した学校。

表向きは進学校だが、開発科では超能力者の育成が行われている謎の多い学園。

多くの生徒は普通の学校生活を営んでいるが、実は学生に汚れ仕事をさせたり、三原のような狂った科学者がいて、特殊部隊を擁している非法な学園。

故に事情を知る一部の者からは反感を買っており、今の所早川、凧紗、朱実、そして西園寺などの超能力者が学園を離反している。

アルファ隊やヴェインペル隊でも問題とされており、打倒佐井学園の為に、早川悠をメンバーに入れたザスローンが結成された。

## 東の丘学園

【Freedom/Story】とのコラボで登場した高等学校。東京のどこかにある学園。圭介が迷い込んだことがある。色々特殊な学園らしく、故に時々事件の舞台になることもあるらしい。

東京国際展示場

有明にある大規模な展示場。

夏コミの会場であり、圭介や大吾などのオタクにとっては聖地のような場所。

調布飛行場

調布市にある飛行場。規模はそれほど大きいわけではなく、滑走路も短くて、精々南の島へ行く便が日に数本飛んでいるだけだが、作中では超音速魔動旅客機の滑走路として利用された。

沼山の施設

沼山市にある小学校

沼山市にあるとある小学校。

8・17事件の時、避難所の一部として開放された。

六角町の施設

青山家の別荘

その名の通り、青山家の別荘。  
そこそこ大きいらしい、お風呂も大きく、そのお風呂ではとある  
事件が……。

#### 海水浴場。

六角町にある海水浴場で、圭介曰くそこそ有名な行楽地らしい。  
故にお客さんも多いが、アマデーオが作った帆船が現れ一時大騒  
ぎになった。

#### セトウーバルの施設

##### サン・ジュリアン教会

セトウーバルのボカージュ広場にある教会。大変古い教会で、教  
会の扉や柱などにマヌエル様式の特徴が見られる。硬質のノームに  
よって儀式場にされてしまい、圭介達との戦闘や早川の攻撃によっ  
て瓦礫の山になってしまった。

##### サン・フィリペ城

市街地から西に離れた所にある、イギリス軍の攻撃から守るため  
に建設された城。

見晴らしがいいので、早川達の降下地点として利用された。また、  
サラマンダーがノームを肅清した場所もこの城であった。

#### ロジーナの施設

## 木下木葉の研究所

ロジーナの森林地帯に聳え立つ、コンクリート建築の建物。ミネツト曰く、ロジーナが誇る研究所とのことで、確かに研究所の規模は大きい。

屋内は典型的な研究所だが、木葉の生活スペースのみ西洋風の立派な部屋になっている。

木葉はここで魔法と科学を融合させた、最先端医療の研究を行っている。



番外話 世界・国家・街・施設（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回は魔法や超能力に関する設定集だぜ」

伊吹「あんたってホント厨二病よね」

圭介「おいおい、俺は厨二じゃないぞ。厨二病はこんなのを執筆している作者だろ」

大吾「でも、圭介は瑠璃ちゃんこと黒猫氏と話が合いそうだな。厨二だし」

重原「いや、圭介は萌え豚だからむしろきりりん氏のほうが……」

圭介「お前ら何の話してんだ？」

番外話 魔法・超能力・その他の能力（前書き）

魔法・超能力・その他の能力も、追加があれば、随時追加していく  
予定です！

## 番外話 魔法・超能力・その他の能力

### 魔法（魔術）の基礎

#### 魔法（魔術）

常人には不可能な手法や結果を、呪文や儀式によって発生させる力、技術、理論。

魔法と魔術、二種類の言い方があるが、特に決まっているわけではない。ただ組織によっては魔法とすることを推奨したり、魔術と言うことを推奨する所もある。

故に、魔法という呼び方を推奨する組織に属する暮葉やミネツト、またその影響を受けている圭介や伊吹は魔法と呼んでおり、魔術という呼び方を推奨する組織の間は魔術と呼ぶ。ただしこれも結構いい加減なものであり、個人レベルになると個人の趣味で言い方が変わる。

一口に魔法と言っても様々な種類がある。【こっちの世界】の場合、近代西洋儀式魔術や錬金術に宗教魔術などが。【レムリア】にも【こっちの世界】と同様のものや、【こっちの世界】における魔法の常識を覆すような魔法も存在している。

発動には魔力も関係するが、暮葉曰く魔法の強度は【理想の具現化】であり、要するに魔力のほうにも想像力が重要というわけである。

特に制約がない、自由度の高い能力だが、大規模な魔法を発動させるには、何らかの儀式場が必要である為、魔法に関する知識に疎い素人には多分、そこまですごい魔法は扱えない。

さらに術者が倒されると、魔法自体が無効化されてしまうという特性がある。

【レムリア】で魔法は当たり前のものであり、義務教育で魔法を学ぶらしく、科学と魔法が融合して新技術が発達しているが、【こ

つちの世界】では架空の存在、迷信と認知されている。

また、【こっちの世界】では、魔法を使えるだけで迫害される可能性もある。

魔法使い（魔法少女、魔術師とも）

魔法を行使する者。魔術師とも呼ばれ、さらに術者の年齢が低いかつ女子の場合は【魔法少女】とも呼ばれる。典型的な魔法少女はミネットだが、暮葉も一応魔法少女の部類に入る。

使用する魔法は人によって様々。つまりは我流の者もいれば、所属している組織や宗教に因むものや神話に因むものなど、多種多様である。

【レムリア】では当然の存在だが、【こっちの世界】では、空想の産物という認識で世の中に広まっている為、その存在が公になるだけで迫害されたり、興味本位で魔法使いを捕まえようとする者が現れるため、【こっちの世界】の魔術師は、基本無闇に自分の正体を明かそうとはしない。

魔力

魔法を扱うのに必要な力、あるいは普通に蔓延している自然的エネルギー。

自然に存在するものであり、人間にも誰でも基本的に宿っているものである。例えば【こっちの世界】の街の不良なども、基本的には微弱ながらも魔力を持っている。

何にでも応用の効く力であり、最近【レムリア】では魔力を利用し、それに科学技術をプラスして様々な高性能製品を生み出している。さらに魔力は魔法を使う際に、魔力エネルギーが変換される性質を持っている。

魔力エネルギーは何にでも変換可能であり、この特性を生かして

木下木葉は、魔力から脳波に変換する【魔力エネルギー変換機】を開発。早川悠の能力使用に役立つている。

ちなみに魔力が枯渇すると、当然魔法が使えなくなってしまう。ただし、魔力は余程の事でもない限りは自然回復するものなので、たとえ戦闘で魔力を使い果たしてしまっただとしても、一定時間が経過すれば元に戻るようである。

## 術式

魔法の方式、呪文のようなものである。

## 儀式場

魔法は即席で放つ事も可能だが、魔法が大規模だったり精密だった場合、発動はするのに魔法使い個人の力では困難を極めるので、発動を補助するものの一つとして儀式場がある。

正しい位置に呪文やカード、必要な物を等を並べる事によって、儀式場は完成し効果を発揮するのだが、儀式場の構築には大変な手間がかり、その上豊富な知識も必要である。その為並の魔法使いや素人には絶対作れないものである。

### ・大規模震災術式

儀式場を必要とする魔法の一つ。文字を描き、指定した場所に大地震を起こす魔法。

二次災害として、海岸沿いの場合は津波を引き起こす。島国である日本にとっては脅威としか言いようのない大変な魔法である。

魔道書のようなモン（仮称）

魔道書のようなモンとは、風剣のシルフによる仮称である。

魔法発動を補助するものの一つであり、効果は儀式場ほどではないにしろ、即席の魔法よりは精密な魔法を使えるようになる。詳しい詳細は不明だが、シルフの風剣ウインドソードを見る限り、どうやら道具に術式を組みこんで魔道書と同じ効果を発揮するものらしい。

#### 近代西洋儀式魔術

19世紀に秘密結社が確立させた、その名の通り近代西洋で生まれた儀式用魔術。

ガバラ、占星術、タロット、ギリシア・ローマ・エジプトの神話など、様々なものを統合したシンボリズムと形而上学を枠組みとして、位階制とイニシエーション儀礼、および儀式と瞑想の技法を用いた霊的修練の体系を構築している……らしい。

作中ではアマデオが使用。

#### 召喚魔法

その名の通り、何らかの存在者を召喚する魔法。

作中ではアナスタシアがゴーレムを。アマデオがガブリエルを召喚した。

#### 精霊

古来より人類が持っている、命や神や霊や魂などを表すときの言葉の一つ。

ブードゥー教ではロアとも言われ、魔法の発動にも重要な役割を持っている。

また、赤の軍神は四精霊エレメンタルの力を持っている。

## 聖人

教会から認定された、の人物の模範となるような人物のこと。あるいは、神に近い力を持つていたり神の力の一部を行使できる者のこと。詳しい詳細は不明だが、その実力は一般の魔法使いを遙かに超えているらしい。作中で判明している聖人は、リーリヤとサラマンドアの2名のみ。

## 天使

言葉の通り、神の使いのことである。

アマデーオは魔法で天使の一人、ガブリエルを召喚した。

不完全な状態でも、10分で日本を水没させられるほどの凄まじい力を持っている。

## 超能力

### 超能力

通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力。世間では、科学的に説明できない超自然的な力と言われているが、佐井学園は科学でこれの発現に成功、以降、その目的を果たすために超能力者を育成し続けている。超能力者の育成には、科学的に脳を刺激するのが効果的らしい。

魔法と超能力ではある意味共通が多く、超能力も使用者の【理想】が重要となる部分が多いのであるが、魔法と違う点は魔力を必要としない事。魔法以上に頭を使う事であろう。

魔力を必要としない分、能力処理の為に多大な計算能力が必要であり、その為高位の超能力者ほど脳の演算能力が高いということになる。

主に佐井学園の開発科というところで研究されているか、佐井学園の前進である特科会時代から既に研究が始まっていた。基本的に能力開発を受けた者のみが超能力者になれるが、明智凧紗や早川悠のように元々超能力を持つ人間も稀に存在する。

一心超能力の強度はランク付けされているが、現時点では詳しい事は不明。

### 超能力者

超能力を扱う者のこと。佐井学園の生徒が中心だが、それ以外にもごく自然に超能力が発現した超能力者も存在している。彼らは通常の人間よりも演算能力が高い。

多分理系の人間が殆どであろう。

### 能力開発

その名の通り、超能力を開発すること。

脳に刺激を与える……とのことだが、実際の開発内容の詳細は殆ど不明。

### 五本指

佐井学園に在籍する超能力者の中でも、特に凄い能力を持つ5人のこと。

現時点で判明している五本指は、早川悠、久我劉生、西園寺雪乃の三人である。

雪乃や凧紗曰く、五本指の殆どは人格が狂ってる人らしい。



## 魔道能力者

三原寅彦が提唱したと思われる、最強の超能力者のこと。  
要は科学と魔法の融合。魔法使いの概念と超能力者の概念を足したものだ。

三原はミネットを被験者とし、これを作り出そうとするが結局未実現。

しかし、早川悠の【黒い翼】がその片鱗に触れるものなのでは？  
と、三原は推測していたが解明される前に三原は死亡してしまう。  
結局夢の産物なのかもしれないが、早川悠という存在もあるので案外期待できるかもしれない、微妙な存在である。

## パイロキネシス 発火能力

その名の通り、炎を生み出し操作する能力。凧紗が使う能力でもある。

凧紗のレベルでは、精々サッカーボール程度の炎弾を作り出したり、かめはめ波のように炎を放ってやったり、2メートルの炎剣を作るのが精一杯。

## エアオペレーション 大気操作

大気系の能力。その名の通り、大気そのものを自由自在に操るもので、気圧や酸素濃度を操作したり暴風を巻き起こしたり、大気中の分子運動の操作、可燃性ガスの収集、爆破。さらに暴風の膜というものを張り巡らせ、どんな攻撃も反射してしまうなど、殆どチートのような能力だ

最強の超能力者と呼ばれている、早川悠が使う能力である。

フリザードサイコ  
吹雪念力

水蒸気など水分から氷や雪を発生させ、念力によってそれらを自在に操る能力。大気中に僅かでも水分が存在していれば、それらを瞬間的に冷やす事によって、氷などを発生させられる。

氷はミリレベルから槍のように鋭利な塊、さらには直系60mの巨大な塊まで生成可能。それらを念力によって目視可能な範囲まで吹っ飛ばす事ができる。速度は氷の大きさにもよるが最大速度は9mm程で325m/s。ほどで拳銃並。

60mの塊でも40kmの速度を誇る。その他水蒸気などから雪を生成して吹雪を吹かせたりする事も可能。念力を使えば氷以外のものも吹っ飛ばす事が可能。最大200tのものを動かす事ができるので、戦車なども余裕で持ち上げたり砲弾のように放つ事ができる。

その他氷は盾にする事もでき、銃弾程度なら余裕で防げる。

実は二種の能力を扱える、大変珍しいタイプの能力で、今の所二種類の超能力を扱う事が出来るのは西園寺雪乃のみ。通常超能力は制約上、二つの能力は使えないものなので、ある意味彼女は魔道能力者に近い存在かもしれない。

オブザープホリック  
偏差電換

対象物を分析して「数値」で観測することができる。

スカウターのような能力で、相手の戦闘力や勝率が大体わかるらしい。しかし、あくまで使用者が行うのは予想であり、決して万能な能力というわけではない。

木山朱実がこの能力を使う……らしい。

サイクロンブレード  
旋風烈剣

大気中の分子運動を活性化させ、空気による斬撃を可能とする能力。

簡単に言えば、見えない空気ですきた刃を作り出すことができる。オーソドックスに剣術を繰り返したり、衝撃波のように飛ばすし遠距離攻撃したりと、戦闘について色々と応用が利く。

物理的に何でも切る事が出来る。明智光雄（光秀）がこの能力を使用した。

#### ウェーブハウンド 波動操作

この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る能力。他の能力の代用的な技も使えて応用力は極めて高く、使い方次第では破壊力も抜群。

しかし高度な演算を必要とする為、非効率で実際に使える効果が制限される。

能力的には素晴らしいが、その欠点のせいで悠よりもランクが下に設定されている。

第2位の久我劉生が使う能力で、雪乃をギリギリまで追い詰めた。

#### その他の能力

##### 解放（リミッター解除とも）

アレクサンドル皇太子、及び藤島圭介に宿っている能力。

その名の通り、潜在能力を一気に解放し、脅威的な戦闘力を発揮する力。暮葉曰く自然的な魔法でもなければ、科学的に発現された超能力でもない、全く異種の能力らしい。詳しい詳細は今だに不明であるものの、現時点では【解放】の為には【条件】を満たす必要がある事がわかっている。

圭介の場合、その条件は念じながら女の子とキスをする事らしい。硬質のノームはこの能力の正体やアレクサンドルや圭介の正体を知っていたらしいが、結局正体は明かされなかった。暮葉曰くアレクサンドルは強力すぎる力のせいで、日常生活に支障を来していたらしい。

その為、彼が意図的に力を封じ込めたのが、この能力の始まりらしい。圭介の身体が丈夫なことや、回復力の高さは完全に力を封じ込められないかららしい。

上 さんの幻 殺し並に謎の多い能力である。

### 黒い翼

早川悠が三原との戦いで、突然背中から生やした謎の黒い翼。

翼と言うよりは噴射に近い。三原は最初、風の操作の一種かと思っただが、それもどうやら違うようで結局、三原ほどの頭を持つ男でも説明不能の新たな力であった。魔法とは絶対に違うであろうかと言って超能力でもなさそうで、とにかく現時点では誰にも説明できないだろう。

三原は魔道能力者へ進化したのでは？ と死に際に疑問に思っていたが、そもそも彼が魔道能力者に進化したかさえも不明で、微妙なラインである。

当の本人は、そんな能力を使った覚えはないらしい。

番外話 魔法・超能力・その他の能力（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「今回は……うん、相変わらずパクリのオンパレード（ry）」

浅間部長「まあ、そう言わないでくださいよ。それより……ボクの出番は？」

圭介「お前が出てくると18禁になりかねないから、ありませんよ」

浅間部長「と、とうとう後輩にお前呼ばわり！？」

圭介「さて、今回は今までに登場した道具一覧だぜ！」

浅間部長「ええ！？ スルー！？ ボクのことスルー！？」

番外話 道具一覧(前書き)

随時追加します。

## 番外話 道具一覧

ついでにやぶ  
一期一振

暮葉が愛用している刀。

その歴史は古く、朝倉氏や毛利氏、そして豊臣家に伝えられる。豊臣家崩壊後は豊臣国松がレムリアへ刀を持っていき、以後豊臣は木下を名乗り今は暮葉に伝わっている。

鞘に入れた状態でも十分に武器になる。それほど大きい刀ではないので、暮葉はいつも背中の服の裏に隠し持っているらしい。

北方 project のエロ同人誌

浅間部長が圭介を釣る為に用いたエロ同人誌。

内容はロリ物で、タイトルは【みよんなとれーにんぐ】らしい。

魔法のステッキ

ミネットが持っている、ハート形のステッキ。

効果は不明で、そもそも武器になるかも微妙な代物である。

黒曜石のナイフ

アナスタシアが武器として利用していた黒曜石で作られたナイフ。特に魔術的な効果があるわけでもなく、単に武器として利用していたらしい。

ロフストランドクラッチ

元々は医療用の杖の一種だが、通常モードの早川が歩く際に使用しているもの。

大変現代的なデザインで、これについて歩く早川の姿はモロ一方さんである。

#### 魔力エネルギー変換機

木下木葉が開発したチョーカー型医療機器。

高次脳機能障害を持つ人の、日常生活を補助する為に開発されたもので、バッテリーの中に蓄積された魔力を脳波に変換し、不足する演算能力を補うことで一時的に、装着者の能力を負傷前の状態に戻すことが可能である。脳に障害を持つ者を、ある程度復活させる夢のような医療機器だ。

作中では早川悠が脳を負傷後、これを装着している……が、彼の場合は最高位の超能力者なせいで必要以上に演算能力が高い為、当初は最高出力でも使用時間が15分に限られていた。

その後、ザスローンの技術部によって30分に延長されたい。なお、魔力補充にはパートナーとキスをする必要がある。

#### スリングショット

セルゲイ・ベレゾフスキーが武器として使用していたもの。

見た目は普通のスリングショットだが、セルゲイから放たれた弾は以上に速く、詳細は不明だがこの武器には魔術的な意味があるのかもしれない。

#### サントイシマ・マードレ

アマデオが魔法で生み出したガレオン船。

圭介達とアマデオ、ガブリエルとの決戦の舞台になった。

ぶっちゃんけ道具かどうかは微妙だが、魔法で作り出された道具と



してここに記載する。

## 魔法日記

アマデオが持っている、古くて分厚いグリモワール魔法書のような本。

一見、焦げ茶色の表紙に霞んだ金色の文字が記され、中には延々とラテン語が書かれている古本にすぎないのだが、実はアマデオが今までに行ってきた訓練や儀式の内容、状況、感想などを記録している呪文集のようなもの。ここに記録された事を、アマデオは再現する事が出来る。

## ロクタスワンド 魔法の杖

アマデオが持っている、紫色に輝く不気味な古い杖。

シルフの言う【魔道書のようなモン】の一種らしく、アマデオ曰く、この杖には魔力を介して魔法を発動させるという効果があるらしい。

## バチ

なんてことのない、太鼓を叩く為のバチである。しかしブードゥー教では太鼓のバチは儀式の為に必要な道具であるらしく、ラウル・ゲリエは魔法を使うのにバチを利用していた。

これも【魔道書のようなモン】の一種であるらしい。

## マジッククロース 魔法衣服

服の中に着る下着のようなものらしい。その効果は高く、これを着ているだけでその人の身体能力を何十倍にも上げる事が出来る。作中では鷲尾と永瀧が着用していた。

### 新型蓄積機

リーネが開発している機械。

どうやら、魔力エネルギー変換機の使用時間を伸ばす為の機械らしい。

小型化に成功すれば、早川の能力使用モードの時間が延長されるようだ。

### 三原の笛

正式名称不明。三原寅彦が早川との戦いに用いた笛。

特殊な音波で思考を妨害し、超能力者の計算式を崩壊させる効果がある。

三原は早川との戦いでこれを使い、早川の能力使用を許さなかった。

### パンツァーシュレック

元々はナチス・ドイツ時代の対戦車ロケット擲弾発射器であった。作中では三原が使用。三原曰く裏ルートから入手し、量産しているらしい。

### AK - 47

ロシアのカラシニコフが設計した、歩兵用アサルトライフル。

カンパニー三原中隊の兵隊など、結構あちこちで利用されている。つまり、入手しやすい強力な武器なのである。

佐井学園製の散弾銃

佐井学園で開発された散弾銃。

全長は1メートルを超え、鉄製銃床は伸縮可能。

早川はこれを杖代わりに使用し、さらに三原中隊戦闘にも使用した。

実験セット

詳細は不明だが、三原曰く「魔道能力者誕生の為に必要」な実験セットらしい。

ウインドソード

風剣

風剣のシルフが所持している大剣。

白銀に輝く刃と、妙に金びかな柄が特徴的な派手な剣。実は【魔道書のようなモン】でシルフ曰く魔法の発動には必要不可欠な存在らしい。風の術式を組んでいるらしく、本来の重量を感じさせずに振り回せるので、女のシルフでも軽々と振り回す事ができる。

木下木葉の補聴器

木下木葉が持っていた補聴器。

木葉曰くただの補聴器ではなく、術的效果によってあらゆる音声を、脳に直接送りだす信号に変換する特殊品らしい。開発するのに2年ほどかかったようである。

特殊受信機

小型の受信機。これで特殊な音声ファイルを受信することができるようだ。

### 超音速魔動旅客機

ロジーナ製の最新型航空機。

圭介曰く、形状は「コンコルドを小さくしたもの」であるが、性能は遙かに上で、なんと時速7000キロを超える速度で飛行する事が出来るらしい。

魔動エンジンを搭載しているため、当然燃料にも魔力が使われている。

日本からポルトガルまで、1時間ちよつとで行ける。

スハシーチェリ  
救世主

ロジーナ製の、魔動エンジンで推進する大型6発戦略爆撃機。

ザスローンとヴィンペル隊の特殊作戦に投入され、早川がセトウバルルへ行くために利用したようであるが、早川曰く乗り心地は最低らしい。

スペイン軍のミラージユ戦闘機を振りきれするなど、凄まじい速度で飛行が可能。

せっけん  
石剣

硬質のノームが魔法で作製した石製の剣。

切れ味は殆どゼロであるものの、非常に高い打撃力を誇っており、暮葉の一期一振を受けても傷一つかかなかった。しかし圭介には通用せず、結局硬質のノームは倒されてしまった。

番外話 道具一覧（後書き）

後書きトークコーナー！

あかり「相変わらずひどい設定集だな！」

千早「う、うん……厨二だね、ただのオナニーだね」

圭介「こら青山さん！ 女の子がはしたない言葉使っじゃありません！」

千早「じゃ、じゃあ……自家発電？」

圭介「そういう意味じゃないよ、青山さん？」

千早「え、えっ？ じ、じゃあ……マスターパーク？」

圭介「それ違う！ 言葉は似てるけど意味も何もかも全然違う！」

あかり「千早……完全に変態だなっ」

葵「千早が変態なのはお兄ちゃんの前だけだから、多分大丈夫だよ？」

番外話 組織・出来事など（前書き）

随時追加します！

## 番外話 / 組織・出来事など

### ロジーナ連邦の組織

#### アルファ隊

連邦特殊情報総局の特殊部隊。

ロジーナ政府がサヴィエト亡命政府を打倒、関係者の拘束を決定後、それらの計画を秘密裏に進める為に、精鋭の魔法使いばかりを集めて結成された精鋭部隊である。しかし……実際は暮葉やミネツトのように、どこか抜けた人が所属していたりと、本当に精鋭かは微妙な所である。

主な任務はサヴィエト関係者拘束と単純な戦闘、藤島圭介の護衛である。

今の所名前が判明している隊員は、暮葉にミネツト、隊長のリーリヤのみ。

詳しい隊員数は不明だが、そこそこの数はいるらしい。また、グインペル隊の人間の証言によれば隊員は女の子ばかりであり、魔法少女の宝庫でもある。

それなのに最前線で戦っている為、予算や装備は常に優遇されている……らしい。

#### ・特隊員

アルファ隊でも、特に戦闘能力の高い隊員の事を示す隠語。

10人もいないらしく、その中の一人が暮葉というわけである。

#### グインペル隊

アルファ隊と同じく、連邦特殊情報総局の特殊部隊。

主な任務は魔動力施設防護だが、最近ではアルファ隊と同じ任務を

こなす事が多い。

隊員の証言によれば、アルファ隊と比べて装備は古いらしい。また、アルファ隊が魔法少女による特殊部隊なら、こちらは普通に男の兵隊が数多く揃っている部隊とのこと。今の所作中で目立った活動はしていないものの、ザスローンのサポート役にはなっている様子。

## ザスローン

連邦特殊情報総局が新たに創設した特殊部隊……とは違う暗部組織。

アルファ隊やヴィンペル隊のみでは対処できない問題を片づける為、過去に罪を犯した者ばかりを集めて結成された。現在の主なメンバーは早川、アナスタシア、近藤、ラウルの4人。

色々汚い仕事を引き受けたりはするが、最終的な目標は佐井学園の解体。サヴィエト亡命政府の崩壊やアリーナ・ウラジミロヴナ・レニナらの身柄拘束である。

隊員は早川を除き、チームワークを優先する為に隊員同士の繋がり重要視している。

## 連邦特殊情報総局

情報収集、スパイ活動、シギント、偵察衛星・特殊部隊の運用を行う、ロジーナ連邦が誇る諜報機関である。正式に戦争が始まっていないので、正規軍に代わってサヴィエトを攻撃、亡命政府を崩壊へ追い込もうと日夜活動を続けている……らしいが、本編には名前以外未登場である。



## サヴィエト亡命政府

### サヴィエト亡命政府

20年前の蜂起で失脚したアリーナ・ウラジミールヴナ・レニナが、自身の野望を達成する為に樹立させた政府組織。ロジーナの現政権打倒を主な目標としており、その為に【こっちの世界】に渡ってきて赤軍を創設、行き場のない魔法使いを集めたり、また魔法使いを育てたりしている。

当初は政治思想が一致する魔法使いばかりが集まっていると思われるのだが、近藤やアマデーオのように何かしらの事情があり、仕方なく所属している魔法使いも数多い様子。

また、ロジーナ皇太子アレクサンドルの子孫、藤島圭介の身柄拘束を目論んでいる。

詳しい理由は不明だが、アリーナの側近リリアはその理由を知っているらしい。

世界中から行き場のない魔法使いを募集している為、中にはアマデーオのような暮葉でも手を焼くような魔法使いもいる。また、暗部組織【赤の軍神】という強力な戦力も持っている。

### ・赤の軍神

サヴィエトの暗部組織。冷徹なヴァシレフスキー元帥でさえ、固唾を飲むほどの禁断の組織であるらしく、所属メンバーは1人で正規軍を相手に出来る上、人格も歪んでいる。赤の軍神のメンバーは何かしらの精霊の力を持っており、現在のメンバーは四精霊エレメンタルの力を持っている。

現メンバーは以下。

【風剣のシルフ】：風の精霊、シルフの力を持つ者。

【邪炎のサラマンダー】：火の精霊、サラマンダーの力を持つ者。

【硬質のノーム】：地の精霊、ノームの力を持つ者。

【聖波のウンディーネ】：水の精霊、ウンディーネの力を持つ者（名前のみ登場）。

#### 武装集団・暗部組織

##### フレンド

西園寺雪乃が明智凧、木山朱実らと共に結成した反学園組織。後に白藤早苗が正式な所属メンバーになり、さらにもう一人男性メンバーがいるらしいが……今の所名前も姿も不明。

佐井学園と戦う為に創設された組織であり、メンバーは1名の男性を除き、超能力や魔法といった何らかの特殊能力を持っている。現在の所、佐井学園との決戦に備える一方、硬質のノームを撃退する為の戦いに参加。圭介や暮葉と協力し、数多くの敵戦力の無効化に成功する。

ちなみに組織名の由来は【友達】である。  
構成員は全員、守りたい友達がいるようだ。

##### アキバ・ミッドナイト・アーミー A M A

鷺尾有資がアタマをやっていた、秋葉原を根城とする不良集団。鷺尾が依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する」という信条で行動している為、チームはそれに従い行動する。

その為には善人にも悪人にもなる為、人によっては評価がバラバラである。

作中ではサヴィエトからの依頼を受け、ヒーローじみた行動をする圭介を誘き寄せる為だけに秋葉原で悪事を働いていた。

なお、圭介達との戦闘後、鷺尾が逮捕されたので組織は崩壊した

らしい。

K・M・P

正式名称は古宇坂・ミッドナイト・パワー。古宇坂市を根城とする不良チーム。

元々はカタギには手を出さないなど、ある程度の節度と誇りがあったものの、サヴェイトに脅された挙句、ザスローンに先代チームリーダーを殺された後、やむを得ず藤島圭介の身柄を拘束する為に悪事を働く。しかし、手渡された資料が少なかった為、彼らは葵を拉致してしまった。

さらに早川に構成員の大半を殺害され、残りも逮捕されたり、圭介やフレンド構成員にボコられたりと災難続きで、見ていて可哀想になってくる人達ばかりである。

先代チームリーダーが殺害された後、浜島雅人がチームリーダーとなり、嫌々チームを引っ張って拉致作戦を進めていたが、圭介との殴り合いに敗北後はフレンドに身柄を拘束される。

前述の通り、構成員の大半は戦死したか捕まった為、チームは壊滅状態である。

## 佐井学園関係

カンバード  
三原中隊

三原寅彦が率いる、佐井学園直属の暗部組織。

三原曰くクズばかりを集めているらしいが、総合的な戦闘能力は高い。早急に敵を見つけ重武装を持って殺すのが得意な反面、予想外の事態には弱い。そこがまあ……正規軍やアルファ隊などのような特殊部隊とは違う、所詮は素人の武装集団というところである

う。

8・17事件で特異点回収の為に出勤するが、早川悠に潰されてしまった。

#### 特科会

佐井学園の前進組織。

超能力の研究を行っていたらしいが、やはりどうしようもない組織だったらしい。

三原もこの一員だったらしく、早川悠の能力開発を担当していたらしい。ここで三原が早川悠の担当だった為に、早川悠は後の8・17事件で三原に苦戦するのであった。

#### 作中の出来事など

##### 特異点潰し

佐井学園によって行われていた、特異点（レムリア人）を脅威とし、特異点と呼ばれる人々を次々と殺害していった一連の騒ぎのこと。

主に早川悠が特異点を殺害していったが、作戦行動中圭介との戦闘が発生。何度攻撃しても倒れない圭介と、アルファ隊の総力を挙げた総攻撃の前に早川悠は敗北。

その後、特異点が殺される事が無くなったので、作戦は中止されたと思われる。

#### 8・17事件

8月17日、風剣のシルフとその補助を行う別動部隊。そして、三原寅彦率いる三原中隊が古宇坂市に侵入して大暴れした、一連の騒動のこと。

この事件では市役所がシルフに占領され、出動した警察や自衛隊はほぼ壊滅。一方三原達は一時は早川を追い詰めるが、その後部隊の人間が次々と潰されていき、三原本人も激闘の末、早川の新たな能力によって殺害される。シルフも結局は圭介との決戦に敗れた。事件自体は1日で解決したものの、街に大きな爪痕を残したり、邪炎のサラマンダーの登場など事態はより深刻化してしまった。

## 流血大学

誠和大学の惨状のこと。藤島葵を追いかけたK・M・Pの構成員が、次々と早川悠に殺害されてキャンパス内が血塗れになったことから、こう呼ばれるようになったらしい。

## セトウーバルにおけるテロリスト掃討作戦

ポルトガルがテロリスト（硬質のノーム率いる魔術師軍団）制圧の為、陸海空軍の大戦力をセトウーバルに送り込み、そこで発生した戦闘のこと。軍と魔法使いの戦闘はほぼ互角で、一時は戦線が膠着していたらしいが、圭介達の到着や早川悠の活躍で、戦況はポルトガル軍が有利に。

最終的にはポルトガル軍がサン・ジュリアン教会を包囲し、圭介が硬質のノームを撃破して早川悠が教会ごと破壊した為、市街戦は一応ポルトガル側の勝利で終わった。

なお、万が一状況が改善されなかった場合、セトウーバル戦域にNATO軍の主力が介入する予定だったらしい。

## セトウーバルの血雨<sup>けつう</sup>作戦

ザスローンとヴィンペル隊の共同作戦。超能力者の早川悠を含めた14人を、セトウーバルに降下させてポルトガル軍の攻撃を潜り抜け、サン・ジュリアン教会を破壊。硬質のノームを殺害することによって大規模震災術式発動を食いとめるという作戦であった。

作戦は見事に成功を収めたものの、圭介達も作戦行動に巻き込まれてしまった。

番外話 組織・出来事など（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「今回は最後、その他のどーでもいいような設定集だぜ」

暮葉「ある意味一番平和な話かもなのですっ」

伊吹「ど、どという設定集よ……？」

圭介「えっ？ 例えばツツパリ伊吹ちゃんとか、そんな感じの平和な話だ」

伊吹「だ、だから誰がツツパリよ！」

圭介「と、言うわけで次回が終わったら本編に戻りますので。読者の皆様色々脱線して申し訳ございません！ もうしばらくの我慢ですー！」

暮葉「……けーすけ様って、後書きでは弱腰キャラですよね？」

伊吹「確かに。謝るかツツコミを入れるかのどっちかしかしてないわよね」

番外話 その他のどうでもいい単語集(前書き)

随時追加していきます！



## 番外話 その他のどうでもいい単語集

いんどろいど

圭介の部屋にいっぱいあるアイギユアのシリーズ。詳細は不明だが、可愛らしくデフォルメされたデザインが人気らしい。元ネタは【ね どろいど】。

### 暗黒物質<sup>ダークマター</sup>

葵が作ったカオスな料理のこと。決して宇宙にあると言われていた物質でも、学園都市第2位の工場長が扱う超能力でもない。

味はおいしいが、見た目のせいで暮葉にとってはトラウマになっている。また、圭介は慣れてはいるものの、出来れば食べたくないと思っっているようだ。

ツツパリ伊吹ちゃん

圭介が伊吹をからかう時によく言う言葉。

言葉の由来はツンツン突っぱね伊吹ちゃん<sup>II</sup>略してツツパリ伊吹ちゃんらしい。

……が、全然略になっていないのはここだけの話。

これを伊吹に言うとき怒って噛みついてくるので、注意が必要……  
かもしれない。

マックスバリュエ

市内にあるスーパー、紫色の建物らしい。

ちなみにこの物語は実在の人物、団体、地名などとは一切関係ございません。

紫チャールハン事件

葵の料理が暮葉にとってトラウマになった事件。

紫色のお米に、ダイオウグソクムシが乗っかっていたのがショックだったらしい。

以後、暮葉が藤島家の食卓を支えるようになったようだ。

三馬鹿

黒木仁、赤佐直人、大林勇太の三人のこと。初芝でも馬鹿な問題児3人組で、しょっちゅう凧紗と戦っては破れている。

三馬鹿構成員のうち、黒木と赤佐は元ヤン。大林は元スポーツ少年である。

ちなみに、圭介からはヘタレ元ヤン集団と評されている。最近全然出番がないのはここだけの話。

現実女じあるおたな

大吾が最も嫌うもの。要は現実世界にいる女子のことを言う。理不尽かつ不条理で、パラメーターも平凡……らしいが、そんなことないよね？

風紀委員

決して風紀委員シヤツジメンではない。風紀委員ふうきいいんである。

校内の風紀、及び治安を守る学生による組織。

しかし、初芝高校の風紀委員は若干特殊で、なんでも風紀委員に所属する学生の大半は何らかの武道に通じているらしい。特に凧紗は武道どころか、超能力まで使える怪物である。

ヨスガる

とあるアニメから生まれた語句。

実の妹とあゝんな関係になった場合、こつ呼ばれるらしい。要は妹とやる〓ヨスガる。

作中では葵が圭介との肉体関係を迫り、ヨスガる寸前になった事が2回もあった。

とらゴンボール

国民的な漫画・アニメらしい。

詳しい詳細は不明だが、とんでもないスピードで戦う漫画らしい。

とらゴンクエスト

ゲームのタイトル、またはそのシリーズ名。

圭介曰く、国民的RPGらしい。ちなみに作者、元ネタは3しかやった事がない。

フジマレータ

一方藤島

圭介が野原先生と戦う時になるモード。

このモードの時の圭介は人格が一方さん化する。

エロ兄貴

あかりが自分の兄のことを言う時、必ずこんなことを言っている。

ゲームのタイトル、シリーズモノらしい。

ピンクブリッジの死闘とかが、このゲームでは有名らしい。  
ちなみに作者、元ネタは4〜10まではプレイしました。

房総丘陵トレイルラン大会

房総丘陵で行われるトレイルランの大会、賞金は10前円。

これを獲得するため、またあかりの為に圭介は大会に参加、なんと優秀したらしい。

暴力魔

圭介のことを言う。中学時代に永淵を殴ったからこう呼ばれるようになったらしい。

本人もそのことを認めてはいるものの、それを広めた永淵が許せない様子。

はがない状態。

【僕は友達が少ない】的な状態のこと。決してあのラノベとは関係（ry

特異点

佐井学園が異世界人をこう呼ぶ。何かと佐井学園は特異点を狙っている。

連中

色々な意味で使われる言葉だが、本作ではサヴィエトの意味で使われる事が多い。

モザイク  
自己防衛本能

圭介が見たくもないものに、視界にモザイクをかけるというもの。作中では、浅間部長の股間にモザイクがかけられた。

リアルー 通行

早川悠があまりにも一方さんそっくりな為、圭介が彼の事をこう呼んでいた。

クソガキ

ミニネットのこと。早川悠がよく彼女のことをこう呼ぶ。

クソガキ2号

リーネのこと。早川悠がよく彼女のことをこう呼ぶ。

天神無双木下流“天下統一”

暮葉の必殺技。凄まじい斬撃で敵を一撃で仕留めるという技……らしいが、いくら強力な技と言えどもゴーレムのように、再生能力を持つ者が相手だと一撃では倒せないようである。

でも、普通の魔法使いに放てば間違はなく一撃必殺であろう。

藤島流秘奥義……馬鹿の相手はしない

圭介の必殺技。その内容はただ相手に逃げるのみ……結構シヤバい。

初芝レスリング部の怪物

ジャンボ鶴屋のこと。とにかく強い、「オー！」と叫ぶのが好きらしい。

右方の船木

船木健太の渾名。圭介曰くN O 2が右方を名乗るなどのこと。

前方の船木

上記を受けて、圭介が提案した健太の渾名。右方と比べると大分格下になっている。

有明大戦争

コミケにおける、グッズやら同人誌やらの争奪戦のこと。ただの買い物だが、その凄まじい熱気と男達の姿が戦場の兵士を思わせ、いつしかこう呼ばれるようになった……らしい。

二次元世界に生きる聖職者

大吾のこと、もはや彼は現実を捨て二次元で聖職者になっちゃったらしい。

落とし神

大吾が憧れる者。ギャルゲーの神とも呼ばれているが……その正体は？

……はい、版權キャラなので言えませぬorz

番外話 その他のどうでもいい単語集（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ふう、やっとこのくだらないコーナーも終了したか」

暮葉「次回からは波乱の二日間編 二日目編なのです！」

あかり「あ、あたい達の出番だな……っ」

千早「わ、わたしも……出番あるかな？」

凧紗「私も活躍するぞっ？」

純「俺と」

勝政「俺も活躍するからヨロシクな！」

圭介「アンタら誰っ!?!」

詳細は次回以降の本編にて！



## 第201話 テスト前日の早朝

ここはロシアのシベリアにある都市、イルクーツク。イルクーツクの郊外、アンガラ川のすぐ近くに急遽築いたという神殿の庭に、サヴィエト亡命政府代表。氷の女王とも呼ばれているアリーナ・ウラジミールヴナ・レニナが、側近のリリアと一緒に歩いていた。リリアはアリーナにとって唯一の友人であり、最も信頼を置く側近である。

「好ましい状況ではありませんね」

まさに、極寒のシベリアで凍え死んでしまうかのような笑みを浮かべ、アリーナは誰に向けて言ったのか、青い空を見上げながらそう呟く。

その言葉にピクン、とリリアが反応する。

「う、うん。みんな苦戦しているみたいだね」

「邪炎のサラマンダー……硬質のノームを粛清したみたいですね。確かに、彼は神を信じる不屈き者で気に食わない存在でしたが、簡単に殺されると流石に困りますよ……戦力が低下しますからね」

氷の女王に憐れみなんてものはない。あるのは自分の野望と冷徹さのみだ。まだ良識のあるリリアにとっては身震いするような言葉であった。

「赤の軍神……こつも弱い存在でしたとは」

「そんなことないよ……みんな、必死に頑張ってるんだから……っ」

「そうですか、それがリリアの意見なんですね」

「……っ」

くだらない、と鼻で笑いながら、アリーナは神殿の中へゆっくり入ってゆく。その後ろ姿を思いつめた表情で見つめる、リリアの姿……これがサヴィエト亡命政府。

下手に感情を持つ者が所属すれば、かえって傷つく……そういう組織なのである。

一方アリーナは歩きながら考え事をしていた。風剣のシルフ、硬質のノーム。藤島圭介とその一派に次々と倒される赤の軍神。勝手な行動を始める邪炎のサラマンダー。そして出来れば戦線に投入はしたくない聖波のウンディーネ。

赤の軍神は本当に使える組織なのか、と……アリーナはその後も考え続けた。

### 圭介Side

8月28日早朝、俺は明日のテストに向けて猛勉強中であった。

それはもう、額に日の丸の鉢巻きを巻いて士気を高めるほどに本気モード。考えてみれば俺、散々テストが近いと言っておきながら殆どテスト勉強をした記憶が無い。うん、いくら思い出したって記憶がない。

例えば昨日、折角テスト勉強をしようかと思えば暮葉と遊びに行き、どついうわけかミネットと明智に拉致されてポルトガルへ。そこで硬質のノームという、赤の軍神の1人と戦い、その結果俺は重傷を負って気付いた時には日本にいたのだ。

全く……結局昨日のあの一件はなんだったんだろうか？

目が覚めたら暮葉や明智、白藤まで何かしら怪我していたし……。しかも、硬質のノームにやられた傷はもう殆ど癒えたし……。流石は俺の身体だ。

「つーか喉乾いたなあ」

8月も末と言っても、古宇坂の残暑は厳しいものだ。まだ早朝だつてのに半袖でも暑く感じるくらいですよ。扇風機は常に稼働しており、節電？ なにそれ美味しいの状態である。

全く、色々危機的状况なんだから……。少しは節電しろよな、俺。

「何か飲もうかなあ」

そうだ、それがいい。喉が渴いた時は素直に飲み物の飲むのがいい。と、言うわけで俺は飲み物を飲むために階段を降り、台所にある冷蔵庫を開けた。

ひんやりとしていた気持ちいい……。んだけど、どないしようか？

「何も入ってねえじゃん……」

そういえば最近、暮葉や葵がお茶やジュースをがぶ飲みしていた気がする。ちくしょうアイツら貴重な水分を無駄遣いしやがったな。節電と同時に節水しやがれ。じゃないと、俺みたいに水不足で苦しむ人が泣いちゃうぞ。下手したら死んで干物になっちゃうかもしれないぜ。

ま、まあ……。仕方ないよな暑いし。こうなったら買いに行くしかねえか。水道水で我慢すればいいって意見もあるだろうが、生憎このあたりの水道はまずい事に定評があるのだ。

そんな水道水を好き好んで飲むヤツはいない。それを我慢して飲

むくらいなら、まだ暑い中我慢して飲み物を買いにいったほうがマシである。

と、言うわけでコンビニへ行くべく、俺は玄関へと向かう。そこでまた一つ、大きな発見をしてしまったのだ。

「暮葉も葵もない!? クソ、アイツらどこ行きやがったんだ! ?」

サイズの小さな靴がない。探しても何処にもない。棚には……あるけど、それは俺や葵が昔履いていた靴であり、今はもう履けないものである。

「まったく……アイツらどこに行ったんだか。まあいいや、俺もこれから出かけるし、あんまり人の事は言えないかれしれないな。ただどアイツら……明日テストだろ。」

「せめて前の日くらいは勉強しようぜ。ていうかどうか……今日は葵に勉強を教えてもらう予定だったのに、葵に頼れない状況じゃねえか……はあ。」

「とりあえず、コンビニ行こう……。」

それから数分後、私服に着替えて外に出た俺は、近所のコンビニへ向かう為に、このクソ暑い中うちわを仰ぎながら歩いていた。うちわも最初は涼しいんだけど……腕は疲れるし、次第にあの新鮮な涼しさは感じられなくなり、いくら仰いでも暑く感じる……ああ、暑いなあ。

「ちょ、近づかないでよ!」

「1Jのアマア!」

「さっきからピーチク吠えやがってよお」

「テメエ、お高くとまってるじゃねえぞ！」

それは丁度コンビニの前であった。T字路を右折した所で声が響いてきたので、なんだと思っただけはコンビニのほうを向いた。コンビニの前で3人の男達に、女の子が1人囲まれている。

黒髪の左右で結んだツインテールで、どこかの学校の制服を着ている女の子。そして彼女を囲んでいるのは、イマドキなファッションにヤンキーさん達であった。

なんだアレ、ナンパか？

それに絡まれているあの女の子。アイツ、もしかして……？

「仕方ねえなあ……」

元々コンビニに用があつたんだし、絡まれている女の子にも見覚えがある。出来ればまだ完全には昨日の傷も癒えていないし、危険な事には介入したくないんだけど……まあ仕方ねえ。

ちよつとだけ 救いの手を差し伸べてやるか。

「いい加減にしてよ！ アンタ達に構ってる暇なんてないんだから！」

「なあコイツ。もしかして愛木みどりじゃねえ？」

「なっ、あ、あたしはっ!？」

「おっ？ そついえば似てるなあと思っただら……へえ？」

「テレビの清纯そうなキャラとは真逆だな。こりゃいいスキャンダルだぜえ？」

やっぱりアイツ……最近売れっ子のアイドル　愛木みどりだったか。一応愛木みどりってのは芸名であって、本名は愛木碧と、芸名は単に漢字を平仮名しただけだ。

アイツはまあ……人前だと猫被ってるけど、実はああいうヤツなんだよな。まあビッチってワケじゃないんだけど……性格がいわゆるイマドキの女の子なワケですよ。

えっ、どうしてそれを俺が知ってるって？

それにはまあ深い事情が……って、呑気なこと考えている場合じゃないな。早く助けてあげないと愛木のヤツ、ヤンキーさん達に拉致監禁されるかもしれないな。

そんなわけで、俺は禁断の一步を踏み出し

「おい、そのバカ共」

「……えっ？　あ……もしかして……やっぱり、センパイじゃん！」

センパイ。

急展開だが、つまり彼女との関係はそういうわけなのだ。

彼女、愛木碧は俺が暴力魔扱いされる前に転校した　俺の後輩だ。

「んだよテメエ？」

「その子嫌がってんだろ。離してやれ、てめえらはさっさと家に帰れよ」

「な、なんだテメエ……イキナリ現れて調子乗ってんなあ？」

「なんだあ？ 不良気取りのお馬鹿さんですかあ？」

「そつかそつかあ………そんなじゃ、本物の不良の恐ろしさ 思い知らせてやんよッ！」

突然、不良の1人が前に出てきたと思いきや、右腕を振るってくる。チツ、やっぱり案の定殴りかかってきたな。そのタイミングが予想よりも早かったが………まあ予想の範囲内だ。

かなり大振りの右拳。

この程度か………なら、少しビビらせておけばコイツらは勝手に逃げるだろう。そう判断した俺は相手の動きを見切って、相手の拳を手のひらで受け止める。

パシ！ と言う衝撃が手のひらに伝わる。流石に拳が当たると痛いモンだが、相手の拳は狙いが外れている上に、俺も荒事には多少慣れていたので 大した痛みは感じなかった。

「ッ!?」

「悪いけど………お前らよりは素人じゃねえんだよ！」

叫びながら、俺は五本の指を固く握り ソレを相手の顔面に叩き込んだ。拳は鼻っ柱に命中したようで、殴打を受けた不良は鼻から大量の血を流している。

それでも倒れない。その理由は簡単だ。拳を振るった瞬間 ズキツ、という痛みを腹部に感じたのだ。チツ、昨日の傷がまだ完全に癒えてないんだな。力があまり入らなかった。

全く………硬質のノーム。随分派手に傷つけてくれたぜ。

流石は戦車砲波の威力、普通の人なら弾け飛んでいたんだろうな。

「チツ、いつてえ………っ！」

「おい、大丈夫か？」

「クソツ！ あの野郎オ本格的に調子乗りやがって！」

やばい、3人一齐に襲いかかってきた。誤算だったな……本当なら最初の一撃で、あの鼻血野郎の意識を完全に奪う予定だったのに、これじゃあ1対3の乱闘が始まっちゃう。そうになると流石に今の俺には不利だよなあ……でも、戦わないと俺も愛木も危ないし。

しょうがない 3人くらいまとめて倒してやる。

「オ、ラアツ！」

不良の一人が放ってきた回し蹴りを、俺は後方へ跳躍する事によって避ける。どうやら相手は不良と見せかけて、実はズブの素人のようだ。まさか最初から大技を繰り出すなんて、そんなの相手に避けられて当たり前じゃねえかよ。コイツら本当は喧嘩した事ないんだろうな。

「 テメエ！」

2人目、3人目の攻撃も素人そのもの。大振りの拳、いきなりの大技。どうやらコイツらは駆け引きというものを知らないらしい。俺だって格闘技の経験はないし、ぶっちゃけ本気で格闘技をやっている人から見れば、ド素人レベルでしかないのに……まあいいか。相手が弱いのも面倒だけど、相手がノームみたいに強すぎるのも厄介だ。

何より今は怪我をしている。

そう、コイツらとでさえ満足に戦えない怪我をな。



「おおオああッ！」

「ぐ……ッ！」

一瞬の油断か、それとも相手の実力か。一発拳を貰ってしまった……威力は普通に素人が思いつきり殴った程度。痛いけど俺の体質上、怪我をするレベルではない。

だけど、これで相手は調子に乗るだろうな。一発入ったという事実が出来たんだから。

「オラアさっきの勢いはどうした、あん？」

「ほおら、もう一発俺を殴ってみるよ？」

「殴れねえのかよ？ ハッ、やっぱコイツシャバ憎だぜ？」

さて、どうしようか……逃げるって選択肢もあるけど、それは禁断のコマンドだ。

出来れば勝ってこの局面を打破したんだが……ちょっと難しいかもしれないな。

勝てない相手ってわけじゃないけど……テスト前だからなあ、出来れば暴れたくない。

何を、どうすればいいんだ

「おいテメエら、元隼鷹だろ？ シャバいなあ……一人のガキをいじめてんじゃねえぞ」

それはテノールの若い男の声。

不良の一人の肩に左手を置いたソイツは、金髪で端正な顔を持ちながら、浅間部長とは違って武闘派ぶとうはな雰囲気ぶくわいを放ち、薄い笑みを浮

かべながら佇んでいた。

微笑んだ男の顔を不良達は見ると、何故だか不良達の顔が青ざめて、

「お、おいマズイぞ。コイツ元桑園の……っ」

「あ、ああ……狂犬のダチ……だよな？」

「狂犬のダチ……だな。確かコイツも滅茶苦茶なヤツだったよな……」

「またそれが。いい加減、俺と俺のダチを不良扱いするのやめてくれねえか？」

不良達の言葉に呆れる金髪の男。

なんだ……サッパリ意味がわからないぞ？

でもまあ、よかったあ……何だか知らないが丸く収まったみたいだ。この男が現れ、金髪の男の噂をした後に不良達は静かに立ち去ってゆく。あの不良達と知り合いたいだが、一体俺を助けてくれたこの金髪の人は何者なんだろうか？

そして　なんで愛木が地元に戻ってきてるんだ？

8月28日、テスト前日の早朝。この日もなんだか　波乱の1日になる予感がした。

第201話 テスト前日の早朝（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「お、フラグ回収か」

圭介「何のフラグだよ？」

大吾「ほら、第34話の後書きで浅間あかりのキャラ紹介やったろ？ その時愛木みどりって名前があっただろ？」

圭介「えっ、あつたっけ？」

大吾「あつたよ。今回はその正体を明かす回みたいだぜ」

圭介「そうか？ テンプレすぎるクソ回だと俺は思うんだけど……」

多分この後色々つぶっ飛ぶと思います！

## 第202話 古宇坂のヒーロー

あの後、飲み物を買った後に自宅へ戻ったが……もう、勉強どころではなかった。

ここは我が家のリビング。相変わらず暮葉や葵の姿が見えないし、おそらくアイツらは俺の予想通り何処かへ出かけたのだろう。だが、この状況はアイツらには見せられない。むしろ、出かけてくれてありがとうございますとしか、言いようがない状況だよ。

何故なら、それは、

「センパイの家、久しぶりだなあ〜」

「おい愛木……いい加減膝枕をやめてくれ！」

「なんで？ 久しぶりなんだからいーじゃないですか、これくらい  
っ」

「うつせ黙れ！ 俺は明日からテストで勉強してねえし、一切の余裕ないんですよハイ！」

「だいじょーぶ！ あたしも芸能界入ってから全っ然してないから  
っ！」

「アイドルと普通の学生は違っただよバカ！ 頼むから勉強させてくださいお願いします！」

愛木みどり、本名は愛木碧……って、まあみどりを漢字にしただけだがな。愛木は現在売れっ子の清纯派アイドル……らしいのだが、素顔はこんな感じのイマドキな女の子だ。とは言っても何故か男っ

気がなくて、まあある意味では清纯かもしれない。いや、どちらかと言うと純潔か？

とにかく素の愛木はまあ、清纯派とは言えないタイプなのだ。それで、俺が永淵と揉める前に転校してしまったとは言え、愛木は俺の後輩であり 何故か俺には甘えてくるのだ。

「どうでもいいけど、お前ら付き合ってるのかよ？」

俺と愛木がラブラブに見えたのか、俺達を助けてくれた人がツツコミを入れてきた。

「いや、全然、全く、これっぽちも」

「愛木の言う通りですよ。俺達別に付き合ってるわけじゃないです」

うん、付き合っではないよ。別にお互い恋愛感情なんかないし。ただまあ、仲のいい兄貴と妹みたいな関係なのかもしれない。

当時俺は中1で、愛木は小6。学校も違うし、そもそも小学生と中学生だ。

「ただ、あたし達は色々深い友情で結ばれてるんですよ。ねーセインパイ？」

「ま、まあそういうわけになるな。と言うわけで、俺達別に付き合ってますよ」

「そ、そうなのか……意外だっ」

意外で悪かったな。まあでも、確かに愛木も俺にベタベタし過ぎだと思う。こんな所を暮葉や葵に見られたら……ああ、考えただけ

で恐ろしい。特に暮葉には見られたくないよ。愛木に甘えられている所を暮葉に見られたら、間違いなく暮葉ルート突入が困難になるぞ。

俺は今 暮葉攻略に全力を注いでるんだ。

日常で親密度をUP。サヴィエトが攻めてきたら共闘し、そしていつかは。

「……センパイ？ なんでニヤニヤしてんですか？」

「う、き……気のせいだ」

いかにいかん。つい本音が顔に出ちゃった……出来れば、暮葉が好きだつてことは誰にもバレたくないんだよな。特に愛木みたいなタイプの人には……絶対俺、いじられるじゃねえか。

さらに下手すりゃロリコン扱いだぜ？

「それにしても、希望のぞみのヤツどこに行きやがったんだ？」

「へ、の、希望？」

その時、俺達を助けてくれた金髪の人 日向勝政ひゅうがかつまささんが呟いた。希望のぞみってもしかしなくても人の名前だよな……もしかしてこの人、人探し中だったのか？

「ああ、俺大学生なんだけだよ……」

「え、マジで言ってるんですか!？」

「うそ!? 日向さん大学生だったんですか!？」

「お前ら純と同じくらいひでえヤツらだな！ これでも3流大学の学生だよ俺は！」

涙目で訴えてるぞ……なるほど、日向さんは大学生だったのか。外見がヤンキー風のイケメンだったから、てつきりそっち系のホストクラブの人かな？なんて思ってたよ。

日向さん……見た目によらず頭よかつたんだな。

「それで俺と同じ大学生で、最も違う大学に通ってるヤツなんだけども、橋立純はしたてじゅんって高校時代の友人がいるんだよ。ソイツ、彼女と一緒に東京の国立大に行ってるよ、ソイツに会いに行こうと希望して……まあ、俺の彼女なんだけども。その子と一緒にこっちに来てたんだけど……」

ちえ、日向さんもその友達もリア充かよ。もう爆発しちゃえこの野郎。

大学生ってのはリア充率が高いとは聞いたが、まさかここまでとは……クソ、俺だって早く暮葉とリア充したいよ。だけど、道は長そうだよなあ……。

「もしかして日向センパイは、その希望さんって人と逸れちゃったんですか？」

「そうなんだよ……お前結構鋭いな」

「これくらいすぐわかりますよ」

まあな、愛木は鋭いのが武器だからな。俺も何度本心を見破られたことか。

愛木に嘘は絶対通じない。それほど鋭いんだよ、愛木碧って女の

子は。

「ああ……希望、ヒーローをこの目で見たいとか言いながら、何処に行ったんだよ……うう、俺は寂しいぞチクシヨオー！」

「えっ、ヒーロー？」

「確かお前……藤島だっけか？ お前だっけ知ってるだろ？ お前と同じ名字のヒーローがこの街にいるって話をよ」

「ああ！ あたし知ってる！ そのヒーロー、センパイと同姓同名でビックリですよ！」

「おいおい、ちょっと待てよ。」

日向さんと愛木が言ってる、日向さんの彼女が探しているそのヒーローって……。

「へえ、そういえばお前藤島圭介って名前だったよな？」

「あたしもさあ、最初はセンパイかなって思ったんだけど、流石のセンパイもテロリストを単独で制圧できる超人なわけないかなって思ってた」

「まあそうだよな。でも、その藤島圭介ってのが古宇坂にいて、希望のヤツがその武勇伝に憧れちまってよあ、それで純に会う前にこんな所に……」

「やべえ……そのヒーローこそ藤島圭介って俺じゃん！」

「きつと日向さんも愛木も、そして希望さんって人もあの事を言ってるんだろっ。」



8・17事件で、俺がテロリストこと風剣のシルフを倒したあの事を。

「ありえ、センパイどーしたんですか？」

「お前顔色悪くね？ まさか熱中症じゃねよな？」

「い、いえ、別に？ 俺はなんでも……」

「じゃあどうしたんだよ？」

「なんか今日のセンパイ、あの時のセンパイらしくねーですよ？」

「言えねえ……俺がそのヒーロですだなんて、絶対に言えねえ。そもそも、この2人に言っても多分信じてもらえないだろうし。いや、でも希望さんって人は俺に会いたみたいだし。ひよっとしてここは俺がその藤島圭介だと名乗り出て、希望さんって人と会ったほうがいいのかな？」

「その方がさっさと問題が解決して     テスト勉強に打ち込めそうな気がする。」

「もついいや、面倒な事になりそうだが……言っちゃえ     俺が藤島圭介だって。」

「いやあその……ハハハ、俺がそのヒーロです、はい」

「……………」

「……………」

「予想通り2人は静まり返り……、」

「ちょ、センパイ！　いくらなんでも大嘘にも程がありますよっ！  
ぷ、クスクス！」

「そーだそーだ！　大体テメエ、さつき元隼鷹の連中にボコられて  
たじゃん！」

予想通り、2人は俺を馬鹿にするように笑いやがった。ちくしよ  
う何か悔しい……でもここまでは俺の予想通りだ。一応この後の作  
戦は考えてある。今はそれを　実行するのみ。

「アレは怪我のせいで本気を出せなかつたんだよ！　ほら、これを  
見てみなさい！」

言いながら、俺はガバツ、と勢いよく服を脱ぐ。俺の上半身が露  
わになるが、その肉体には白い何かがかかっている。丁度それが巻  
かれている部分が傷口。

そう、俺の腹に巻かれている白い何かとは　、

「この包帯、テロリストと戦って負った怪我だよ！」

まあ、8・17事件で負った怪我じゃないけど……でも別にいい  
よね。これはシルフと同じ赤の軍神の一人、硬質のノームとの戦い  
で負った傷だ。

シルフと同等のヤツと戦って怪我したんだし、別に間違いではな  
いよね。

さあて、どう反応する　愛木と日向さん？

「ぶぶっ！　せ、センパイ身体を張った演技ですねっ！」

「お前それ、不良にボコられて怪我しただけじゃねえのか!? ぶ、だあつはは!」

全然信じてもらえねえ……まあ、ある程度は予想していたけど。もう、こうなったらヤケクソで信じてもらうまで粘るしかねえな。

「じゃあ、どうすれば信じてもらえるんだよ!」

ヤケクソになって、俺は2人に叫びかけた。俺の必死かつ大きな声に2人は黙るが、完全に動きを止めた愛木と違い　もう1人は静かに立ち上がる。

ゆっくりと、しかし確実に闘志を燃やしながら。

「そうだな……」

立ち上がった一人の男　日向勝政は一言置いてから、

「俺とタイムマン張って勝てたら　少なくとも強いつて事は認めてやるよ」

指の関節をバキボキと鳴らしながら、日向勝政は俺へ挑戦状を突きつけてきた。

タイムマン。

それは1対1の喧嘩　本物の真剣勝負のことである。

「タイムマンか……」

「ああ、その怪我してる状態で俺に勝てたら　実力は本物だろうぜ?」

分かる……俺の経験上、なんとなく分かる程度だけど、この鋭い眼光、日向さんは　かなり強い。

「ちょ、日向センパイ？　喧嘩は流石に……」

「いいぜ、それで証明できるってんなら　相手になってやる」

「フツ、いい覚悟だなテメエ。だが覚悟しろ……俺は強えぞ？」

日向さんが薄い笑みを浮かべる。それだけでビリビリと伝わってくる威圧感。

コイツ、不良を言葉だけで退かせた時から思っていたけど……やっぱり只者じゃねえ。

日向さんは　ホンモノの強さを持っている。

「せ、センパイ！　映画の撮影じゃないんですよ？　だ、ダメですよ……センパイ怪我してるのに……っ」

「愛木、大丈夫だ……俺、これでも身体は丈夫だからな」

痛みは我慢すればいい。とりあえず今、武器として使えそうなのは己の身体。異常に身体が丈夫だっという体質を利用し、持久戦に持ち込めれば　。

「さて、藤島とやら……人目を気にしねえでいい所へ　案内してくれ」

「わかった……」

全く不幸なモンだ。テストまであと1日もないのに喧嘩とは

……でも、これで俺が藤島圭介である事を証明すれば 全ては解  
決するハズ。

そう、テスト勉強が出来るんだ。

だから、今は我慢して馬鹿に付き合おう。それが多分 正しい選  
択だと思っんだ。

こうして俺達は決戦の場へと向かった。人目の少ないあの場所へ。

## 第202話 古宇坂のヒーロー（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「なんか今回、喧嘩番長的な展開になっただけ？」

赤佐「てゆうか、日向勝政ってホンマに強いんか？」

黒木「馬鹿！ それ言ったらネタバレになるだろ！」

大林「それに、まだ愛木碧と藤島の詳しい事も不明だし、他にも色々イベントが控えてるから話はこれからだな」

黒木「そんなわけで続く！」

## 第203話 男の戦い

古宇坂中央霊園の前にある荒地。

ここは以前、俺と明智が決闘した場所でもある。霊園へのお参り客は少ないし、近所の工事現場も相変わらず工事が行われず、現場だけで放置され重機も既に撤去されている。ここなら殆ど人目を気にする事なく、思う存分に暴れられることだろう。

俺と日向さん、そして愛木はこの荒地へ足を踏み入れる。

そしてこの荒地で 俺と日向さんとの間で火花が飛び散った。

「なるほど、確かにここなら人目を気にしねえで済むな」

「まあな、ここは結構穴場なんですよ？」

「確かに、金属バットや腐りかけの木刀とか……血に飢えた狼の武器が落ちてるな」

「殴り合つにはいい場所ですよ、日向さん」

「ああ、ここなら文句はねえな」

そこで、俺は横目で体育座をしている愛木を見る。

それにしても愛木のヤツ、どうしてここまでついて来たんだろうか？

下手したら 血を見る事になるかもしれないってのに。

「言つときますけど、俺もズブの素人じゃないですからね。怪我してるからってナメてたら痛い目遭いますよ？」

「そつちこそ手エ抜くなよ。こつちだつて結構場数踏んでるんだからよっ。」

「だったらいいぜ。てめえの自信を今ここで　ぶち殺してやる！」

「ふ、上等だ……かかって来いやコラア！」

日向さんの叫び声が　開戦の合図であつた。

お互いの距離は約3メートル。ちよつと踏み込めばすぐに詰められる距離だ。今の俺はノームとの戦いで腹を怪我している。だからあまり無理は出来ない……そうだな、日向さんが強いと言つても普通の人間のレベルだ。なら　先手を打つて筋力100%パンチを打ち込んでやる……ッ！

「おおオオアああッ！」

ゴッ、と言う壮絶な足音は俺の足音。荒れた大地を思いつきり踏み込み、俺は3メートルという距離を僅かな時間で詰めてやった。一瞬で間合いを詰められた日向さんは一瞬、少しだけ驚いたような表情になるが、すぐにキツ、と先程の厳しい表情に戻る。

俺はそのカエルを睨み付けるような目のある顔面へ　右拳を打ち込もうと振るう。

だが、寸前で日向さんは首を振つた。それだけの動作であつたが、日向さんの僅かな動作が俺の心を大きく揺るがせる。恐ろしいまでに心を揺るがせる。

シュン、と拳が空振りした。

「……ッ！」

一秒にも満たない空白の時間で、俺は驚愕していた。



そして次の瞬間　突き刺すような拳が俺の傷口を突いた。

「あ、ぐっアアアあああッ！」

壮絶な痛みには俺は悲鳴を上げた。そりゃそうだ、傷口を殴られたら誰だった痛い。

いくら俺のような特異体質の持ち主でも　例外じゃねえんだよ。さらに、痛みで苦悶している隙を突くように　脳を揺さぶる一撃が顎に激突する。

視界がぐにやぐにやする中、宙に浮いている事だけは理解できた。

「くっ　てめえ……ッ！」

でも、俺の体はその程度の衝撃では壊れない。拳で壊れてしまうような　羨ましい体は持ってないんだよ……俺。そういうわけで、俺はまだ動ける。十分暴れられる余裕を持っている。

俺は前に進みながら、まずは日向さんを怯ませようと　ジャブを放とうとする。

だが、その瞬間だった……ズキッ、という痛みを腹部に感じた。

「ぐ……っ！」

ちくしょう……さっきの腹パンで少し傷口開いたかもしれない。いや、仮にそうじゃなかったってあんな衝撃を受ければ、傷口はただじゃ済まされないだろう。

痛みで動きが止まってしまった。その隙を突くかのように、再び拳が飛んでくる。

「がっ　ばっ、ア!？」

二発。

顔面に二発の殴打が加えられた。一発目で下顎を思いつきり突かれて、二発目は鼻っ柱を砕くような激しい痛みを感じた。衝撃で後ろへ吹き飛ばされるも、辛うじて倒れず持ち堪える。

やべえ……日向さん。ここまで強いとは思わなかった……。

「お、ア！」

「ぐ、ア ツ！」

気付けば日向さんは俺の寸前に立っており、殴打が繰り返された。バン、ゴン、と凄まじい打撃音が何度も繰り返され、その度に俺は鈍い激痛に苦しんでいた。

連続殴打の後、トドメを刺すかのような一撃が飛んでくる。

「あっ……がつ、ア！」

クソ、なんとか耐えたし痛みはすぐに消えるが……このままじゃまずいな。

「なるほど、滅茶苦茶タフなヤツだなテムエ」

「へっ、体が丈夫なのが唯一の自慢だからよ……っ」

「だけど、傷口が痛んで本気出せねえみたいだな。その程度じゃ一発も当てれねえぞ」

「そうかよ……言ってるコラア！」

俺は荒地を蹴り、もう一度駆け出す。

「何度でも言っただけでやるぞ teme!」

日向さんも同時に駆けだした。

互いに拳を振り上げ、互いに五本の指を固く握ったソレを叩きこもうとする。

だが 片方は顔面に突き刺さらない。

「う、が ア!？」

顔面を突いた拳は、俺を何メートルも後ろへ吹き飛ばす。体が大きく仰け反ったが、気合いと根性だけでどうにか耐えきって、俺は日向さんの胸へ飛びかかる。そのまま押し倒し、マウントポジションをとって殴りまくるといふ作戦だ。

だが、

「う、ふっ!」

突き上げるような膝蹴り。

ドス! と言う衝撃が傷口と内臓を刺激し、鋭い痛みと鈍い痛み、さらに中のモノが込み上げてくるような気持ちの悪い感触を感じた。こうして力を失った俺の肩を、日向さんはガシツと掴んで持ち上げるように体を投げる。放り投げられた俺は辛うじて着地し、バランスを保とうとするが、

そこで 全ての幻想を破壊するかのような、

「げ、ぐ はっ……ッ!？」

破壊的な拳が砲弾のように飛来し、顔面に炸裂する。ぐらん、と視界が揺らぎ、脳も揺さぶられたのか気を失いそうにもなった。

ち、くしょう……なんで……だよ。俺はシルフとノームを倒した男だろ。それなのにどうして日向さん相手に負けてるんだ。なんでこんな、一方的にボコられ続けてるんだよ。いくら怪我してるからってこれは一方的すぎるだろ。そこまで弱かったか、今までが偶然だったってのか？

ざ、けんなよ……。

日向さんの彼女の為の戦いだろ。俺の明日のテストを賭けた戦いだろ。ここで俺が藤島圭介である事を証明しなければ このふざけた騒動が終わらねえだろ。

だから、俺は……ッ！

「こんな、ところで……負けるわけには」

俺はぐらぐらに揺れる意識の中、奥歯を力強く噛み締める。  
強く。

失いかけた戦意を取り戻して、

「がッ……アあああああッ！」

咄嗟に動き、右腕の筋力を100%に設定する。メリメリと、筋肉が、骨が、右腕の肉が嫌な音を立てて、内部から凄まじい痛みを感じながらもそれに耐える。

日向さんは驚いていた。多分、反撃が来るとは思っていなかったのだろう。

「な、に……ッ!？」

そして今度こそ、確実に、  
両者の拳が交差する。

俺の魂を籠めた全力の一撃が、日向さんの顔面に直撃した。

日向さんの体は壮絶な勢いに乗って、ゴロゴロと荒地を真後ろへ転がっていった。

「はあ、はあ、はあ」

「せ、せん……ぱい……っ?」

愛木の力の入っていない声が耳に入る。声を聞いた後、今度は日向さんを見下ろす。

日向さんは顔面を抑えながら苦悶している。そのまま立ち上がるうとはしない。おそらく立ち上がる力さえ一撃で失ってしまったのだろう。

勝った。

俺は日向さんに 拳一本で勝つことが出来た。

「日向さん……あの、大丈夫ですか?」

「う、ぐあ……ハハッ、強えなテメエ。一撃で……ここまでダメー  
ジ受けるだなんてなっ」

鼻から大量の血を流し、痛みで顔を歪めながらも 日向さんは  
微笑んでいた。

「それじゃあ、日向さん」

「ハッ、テメエがテロリストをやったかは知らねえけどよ」

そこで一旦言葉を切ると、日向さんは思わせぶりな表情を浮かべながら青空を見上げ、

「認めてやるよ。強えつてことをよ」

こうして、俺は日向さんに藤島圭介であると認められた。

よかった……これで希望さんって人と会って、彼女を満足させる  
事が出来たら、

なにも気せずテスト勉強が出来るぜ。

## 第203話 男の戦い（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「キタアアアアアアアアアア！」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「っ、ついにきたよ……ついに！」

伊吹「だ、だからどうしたのよ？」

圭介「ゆ ソフト最新作発表だってよ！ 29日が待ち遠しいぜちくしょうー！」

伊吹「……ゆ、ゆず フト？」

圭介「ぶ くすは俺的に超良ゲーだったし、最新作も超期待だぜ！」

伊吹「……………」

暮葉「けーすけ様は相変わらずエロゲオタなのです…………っ」

ちなみに、ゆ ソフト最新作情報は実話です。

## 第204話 希望探し

「つたく、2人ともなにやってるんですかつ！」

「いや、その……まあ？」

「悪かった……」

俺と日向さんはさっきまで殴り合っていたが、その戦場で俺達は愛木からありがたいお説教を受けていた。愛木は俺達が殴り合っていた事に対して、大変ご立腹の様子である。まあ常識的に考えていきなり殴り合うのも変な話だし、やたらと心配性な愛木が怒るのも無理はない。

「もう……これに懲りて喧嘩はしないでくださいね」

「お、おう」

「善処するぜ……っ」

日向さん、それ何もしない政治家が逃げる時に言うセリフだぞ、まあ、そんなことはどうでもいいとして、愛木のお説教も随分長いモンだ。気付けばもう9時半じゃねえかよ。

結局、今までテスト勉強なんて殆どしていないし……明日のテスト大丈夫かな？

それから……なんだろう、何か大切なことを忘れてる気がするような……。

「はぁ……超イテエ。つーか希望探さねえと……早く東京行かねえ



と純達怒るぜ」

「そ、それだあああああああああっ!」

「あ? な、なんだ藤島?」

「せ、センパイどーしたんですか?」

突然の叫びに、日向さん愛木は驚いていた……というより若干引き気味であった。

まあ、常識的に考えたら普通はこんな反応だよね……?

「日向さん、俺の名前はなんですか?」

「あ、藤島圭介だろ? テメエがあHeroかどうかは知らねえが……テメエ強いよな」

「っで、日向さんの彼女さんはそのHero探してるんですよ?」

「お、おう。それで消えちゃったのは間違いねえけどよ……」

「だったら、俺をHeroって事にして、その人と俺と会わせてみたらどうですか?」

「なっ、テメエがHeroだって!?!」

俺がHeroのフリをして希望さんに会えばいいんだ。それで希望さんは満足し、日向さんも東京の知り合いに会いに行ける。そういう計算だし、事実シルフを倒したのは俺だ。

ある程度は体験談を語る事が出来るぞ。うん、ある程度はな。

「要は彼女さんが満足すればいいんですよ？ だったら俺をヒールって事にすれば、その人は満足するんじゃないですか？」

「……で、テメエ。意外と頭いいじゃねえかつ！」

「おおー、センパイ！ 今日のセンパイ何だか冴えてますよっ！」

ふ、フフフ……どうだ2人とも思い知ったか。智将藤島圭介とは俺のことだ。俺にかかれればちよつとした作戦くらい簡単に思いつくぜ。なんたって、俺の作戦力は辻政信よりは上だからな。

これでも日頃ゲームで鍛えてるんだぜ？

少なくとも 色々と迷走しまくっていた、あの作戦の神様よりは上なハズ！

はい、すみません……調子に乗ってごめんなさい。

「そ、それじゃあ日向さん。まずは日向さんの彼女を 探しに行きましょう」

「おうー！」

「センパイ、あたしもとりあえず超お供しますっ！」

なんですか超お供しますって。意味不明も程がある……ってか絹最愛かよ。

こうして、俺と日向さんといいでに愛木は、古宇坂市の何処かにはいるであろう、日向さんの彼女さんを探すために歩き始めたのだ。当てはないが、こう言う時に便利なヤツがいるんだ。

まずいソイツに会おう。会えばもしかしたら 希望さんを発見できるかもしれない。

典型的な日本屋敷に典型的な日本庭園。この無駄に立派かつ和風な家に、こんな時に頼れるソイツは済んでいる。木製の表札には明智という文字が堂々と記されている。

そう、明智風紗だ。

アイツはいろいろと人脈が広いし、アイツ自身が動かなくなったらって、アイツの仲間がきつと希望さん搜索を手伝ってくれるだろう。ある意味、警察なんかよりもずっと頼れる存在だ。

そんな明智に依頼をすべく、俺はインターホーンを押したのだが……。

「風紗ならおらんぞ？」

「ええ……ほ、ホントですか光昭さん？」

明智は出てこなかった。代わりに出てきたのは明智のお爺さんである、明智光昭という織田家や木下家との和解を達成した、超平和的かつ素晴らしい功績を持つスーパーお爺さんだ。

春頃の明智家の騒動以降、どうやら俺はこの爺さんに気に入られてしまったらしい。

今でも時々会ったらよく話す仲である。

「今日はなんじゃろうな、風紗はかなり張り切って出かけおったぞ」

「かなり張り切って……」

そういえば、今日は8月28日。俺の生誕17周年記念日でもあれば、明智にとっては俺も気になるあの日なんだよ……ちくしよ、結局あの日って何の日なんだよ。

今日家にいないのも、あの日に関係あることなのか？

「それにしてもなぜじゃろうなあ。いきなりバイトは始めるし……心配じゃのう」

「何か、意味不明な理由でバイトしていましたけど……」

「ほわっ！？ ま、まさか……風紗に彼氏が出来たのでは！？」

「えっ？ 光昭さん……やっぱりそう思いました？」

「あたりまえじゃ！ 乙女がここまで積極的に動く……これは男じゃ、間違いない！」

なんとという名推理なんだよ。いや、俺も薄々そうなんじゃないかと思ってたが、やっぱり明智に彼氏が出来たのかよ。そりゃアイツだって女子高生だし、彼氏作るのは変じゃねえけど。

でも、明智だぜ？

あの超お堅い明智が、彼氏なんてものを作るのだろうか。仮に作ったとしても、あのお堅い人と付き合う物好きな男は一体誰なのだろうか？

ま、まさか……もし明智と付き合っているとしたら、その男の目的は……！

「光昭さんまずいつすよ！ 仮に風紗に彼氏がいるとしたら……相手の男」

「ほ、ほい！？ ま、まさか……っ！？」

「多分 体目当てですよ」

「なあああぬういいいいいいッ!？」

誰もが思いつくであろうその理由に、光昭さんは怒りを露わに叫び声を上げる。

「許せん! ワシの孫を肉便器として扱おうとは……藤島君!」

「は、はい」

「ワシの孫の貞操を守るのは家族、そして友達の務め。頼めるかね……藤島君!」

「えっ、で……でも俺、テスト勉強しねえと……」

「そんなもの後回しでよい! 頼む、ワシの可愛い孫の 純潔を守ってくれえええっ!」

ダメだこの爺さん……かなり感情が高ぶってやがる。いや、そりゃあ俺だって体目当ての男と付き合うだなんて反対だ。だけど、付き合っちゃまった明智のせいでもあるし、なにより……俺はテスト勉強をしたんだよ。だから明智よりも正直 明日のテストのほうがいいんだ、今は!

明日のテストで失敗したら、担任の乙坂になんて文句を言われることやら。

野原先生になんて怒鳴られることやら。

そして暮葉や葵に なんて馬鹿にされることやら。

だが、この後いくら説得しても光昭さんの暴走が止まる事はなかった。なので、光昭さんの暴走を止める為にも俺は 仕方なく明智と彼氏を別れさせるといふ任務を引き受けたのだ。

はぁ……どうしてこんな事に。

そもそも、明智に彼氏がいるかどうか　まだわからないだろ？  
そんな事を考えながら、俺たち三人を明智家を離れ　別の場所  
へと向かっていた。

「すごい爺さんだったな……藤島」

「あたしも、見てるだけでなんだか疲れた気がしますっ」

「ああ……ホントに疲れたよ、主に精神的な意味でな」

「おい藤島。ホントに明智さんって人は頼れたのかよ、変なジジイ  
だったじゃねえか？」

「あの爺さんは頼れないですけど、娘のほうはすっごく頼れる人で  
すよ？」

「でも頼れる娘がいないんですよ？　次はどうするんですかセン  
パイ？」

「だ、大丈夫。次のヤツは多分信用してもいい　ハズだ」

そんなわけで次に俺達が向かった先は、明智家からさほど遠くな  
い場所にある、明智家に匹敵するほどの和風なお屋敷だ。そう、こ  
こは青山家　街一番の由緒正しい名家である。

青山さん自身は大した力じゃないが、この青山家の権力は絶大で  
ある。青山さんを賭けた騒動の話なんだけど、あれだけ敵対意  
識を燃やしていた青山家も何故だか最近、俺に対して友好的な態度  
をとるようになり、特にあの現当主の青山流。

あの人なんて「いつでも来なさい、我が娘の許婚よ！」だなんて  
言っていたし。

なに言ってるんだか……っか、いつから青山さんと許婚になったんだよ。俺の親父からはそういう話は聞いていないし、多分流さんの冗談だとは思うけど……。

もし冗談ではなく、親が勝手に許婚って決めていたら……。うん、これなんてら ま？

俺は緊張しながら青山家のインターホーンを押した……が、

「よおチェリーボーイ！ 今日なんだ、まさかお嬢様に用か？」

「げっ、岡本さん……」

インターホーンを押して出てきたのは、青山家の執事である岡本さんであった。

「そんな嫌な顔するなよ。もしかして、もうお嬢様とはヤツたのかい？」

「最低だよそのギャグ！ 俺もお嬢様もまだ純潔だっ！」

「なぐんだ、チツ……つまらないチェリーボーイだね」

「チェリーチェリーうっさいわ！ てめえはこそチェリーじゃねえのかよ!？」

「ど、ど、ど、ど、童貞ちゃうわ!」

その反応はやっぱりチェリーボーイじゃねえかよ。この嘘つきめが、そんな虚勢張るから人前で恥ずかしい思いをする羽目になるんだぞ。全く……この岡本さんとも一度は拳を交えたが、何故だか騒動後に仲良くなってしまう……以後、ご覧の調子なのである。

正直、岡本さんのノリにはついていけねえよ……。

「で、岡本さん……流さんは今日いないんですか？」

「なんだ、流様にご用だったか。まさかいいよ結婚を」

「違うわ！ ちょっと頼み事があるんだよ！」

「ふ〜ん……残念だが、流様は今とっても忙しい時期なんだ。元々の金融危機に加えて、さらに昨日のポルトガルでの騒動が原因でね。欧州は今大変で、その余波が日本にも届き始めているんだよ」

ポルトガルの騒動……か、もうこんな所にまで影響が出てるんだな。確かにあの騒動でポルトガルが受けた損害は凄まじい金額なんだろうが……。

それがさらに 欧州の金融危機を加速させちまったのかもかもしれない。

いや、仮に影響が出ているとしても、まだまだ序の口なんだろう。事件の影響というのは本格的に出てくるのはこれから先だ。今はまだ ほんの序の口に過ぎない。

くそつ、サヴィエトめ……早く倒さないとやっぱり大変だな。つーか、こここの所アイツらの攻撃が 無差別すぎるだろ。

「ん、どうしたチエリーボーイ。思いつめた表情なんてらしくないぞ？」

「えっ、いや……なんでもねえよ。それじゃあ他の人達は？」

「お母様もお婆様も、そしてお嬢様も現在不在だ。残念だったねチエリーボーイ」



「そうか……」

「ん、何か用事があったのだろうか？ 何なら僕ら執事が代行しても構わないが？」

「いや、いいよ。失礼したな……」

「そんなことはない。チエリーボーイが来ればお嬢様はお喜びになる。また来てくれな」

「おう」

青山さん一家までいないのか。それも流さんはお仕事、俺や暮葉とサヴィエトに関する事情に巻き込まれるように……くそっ、そう考えると滅茶苦茶迷惑をかけている気分になる。

もしかして、俺の存在が 世の中にとってはマイナスなのか？  
俺は……。

「センパイ、またまたどーしたんですか？」

「テメエ、さつきから元気なさ過ぎだろ？」

「えっ？ いや、なんでもないですから心配ご無用です」

ホントは色々と落ち込んでるんだけどな……ああもう、なんで俺アレクサンドルの子孫として生まれたんだよ。色々と面倒な事には巻き込まれるし……まさか俺、疫病神じゃねえよな？

もしそうだとしたら……俺の存在に価値って……。

「あ、勝政じゃんっ」

「へ……おあ！ の、希望っ！」

はっ、希望？

そう思った俯いていた顔を上げると 俺たちの目の前には女性が佇んでいた。ツインタールだがちよつと大人な雰囲気だな……アレが希望さん、ってことは歳上……だよな？  
ていうか、アレが希望さんだとしたら……随分アツサリ見つかったなオイ。

今までの苦労は一体なんだったんだよ！？

「希望お前……今までどこに行つてたんだよ」

「えっ、だから……うん、憧れのヒーローを探してたんだ！」

「やっぱりか……あのさ、言いたい事があるんだけどよ……」

「ん、なーに勝政？」

ぐわっ、くそっ、ムカつくうゝあのリア充、再会しても殆どお咎めなしかよ。しかも何人様の前で抱き合ってるんだよ、バカップルかつつーのド畜生。

はあ……俺もリア充してえ。暮葉とリア充したいよ……うっ。

「お前、藤島圭介探してるんだよな？」

「うん、あたしサイン欲しいんだ！」

「俺、その藤島圭介と一緒にいるんだけど……」

「えっ?」

「だからアレ、あそこにいるのが」

言いながら、日向さんは俺に人差し指を向けてくる。その動作に  
会わせて、日向さんの彼女である希望さんも首を動かし、その時俺  
と希望さんの視線が合ってしまった。

他人のモノなのに……中々可愛い顔をしている。そんな照れから、  
思わず視線を逸らしそうになってしまったが、それでも俺は我慢し  
て持ち堪え コクリと首を縦に振って一礼する。  
そしてその瞬間、希望さんは。

「きゃあああああ! ああ、貴方が藤島圭介さん!？」

「えっ? ああはい、そうなんですけど……」

「すごい、間近で見れるだなんて……あたし感激だあっ!」

希望さんは俺の手を握って、キラキラと光らせる瞳を持つ顔を近  
づけてくる。これじゃあまるでジャニーズのイケメンに迫る、ちょ  
っと行き過ぎなファンみたいじゃねえかよ。

えっと、この場合……どうすりゃいいの?

「あ、愛木! お前アイドルだろ!?! こういう場合どうすりゃい  
いんだよ!?!」

「えっ? うん……多分営業スマイル浮かべればいいと思います  
よ」

「そ、そか。え〜っと……どうも、藤島圭介です」

ニコツ、と俺は白い歯を見せ、吐き気がするような営業スマイルを浮かべた。

希望さんは相変わらず黄色い声を出すばかり。はあ……何かの握手会かよコレ？

ちなみに俺、OKB48の握手会なら行った事あります。

まあ……去年のクラスメイトである島原と藤咲の付き合いなんだけどね。

それから数分後、ようやく希望さんは満足してようで、構ってもらえず嫉妬をしていた日向さんの横に並んだ。それで日向さんも満足したのか、2人は腕を組んでいる。ちくしょう、どこからどう見てもラブラブラカップルだなオイ。本当に爆発して欲しいくらいにイチャイチャぶりだ。

「どうもありがとう！ おかげであたし 心おきなく古宇坂を去れるよ！」

「悪かったなお前ら。希望が迷惑かけてよ……」

「いやいや、そんな事ないですよ」

「うん、あたしもけっこう楽しかったですから」

「そっか……そんじゃ、俺達は東京に行かなきゃいけない」

「ああ……」

日向勝政と妙高希望。

不思議カップルだけど、まあ悪い人ではなかったよ……。そんな2人ともここでお別れ。2人は友達がいる東京へ行かなくてはならない。

「藤島、テメエは多分　もっとデカイ男になれるぜ？」

「えっ、そうですか？」

「純もテメエみてえなヤツだよ。妙に行動力があつて強いんだよな」

「あ、そういえば。藤島さんって橋立に似てるかもしれないわね！」

橋立純、かあ……。俺はソイツがどんなヤツかは知らないけど、自分……ソイツと比べたら俺なんて大したことがないヤツなんだろう。俺は別に強くない。

強かったら　自分の存在がマイナスだとか思ったりしねえよ……。

「それじゃあ、またなテメエら　どっかでまた会おうぜ？」

「おう」

2人は俺達に背中を向けて、イチヤイチャしながら次第に遠ざかってゆく。

やがて2人の姿は見えなくなった。よかった……。1つの騒動がこれで解決した。

後は愛木さえどうにかすれば　心おきなくテスト勉強が出来るぜ。

「センパイ、あの2人仲いいですねえ」

「そうだな」

2人ともかなり変な人だったけど、仲がいいのは何よりもいいことだよな。うん、リア充つてのがちょっとムカつく所だけど、これからも仲良くいて欲しいな〜とは思っぜ。

「ふふっ、今回もセンパイ、超かっこよかったです」

「そ、そんな事はねえだろ？ お世辞言ったって何も出ないからな」

「あたしの超素直な感想ですよ。あの時と同じです」

「あの時、かあ……………」

そういえば愛木と出会ったのは中学1年の頃。一緒だったのは僅かな期間なのに、こうして久々に会っても普通に話せる仲になれたんだよな。

そしてそれは、愛木がアイドルを目指す理由でもあった……………。  
確か、アレは入学したばっかの頃だったっけかな……………？

第204話 希望探し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「なんとか、あとは愛木をどうにかすれば勉強できそうだけ…」

凧紗「おい、藤島」

圭介「なんだ？」

凧紗「なんか私、今回ビッチ疑惑が浮上してないか？」

圭介「あ、そういえばそうだな」

凧紗「どうしてくれる！ それで作者に嫌われたら私 出番がなくなるだろ！」

圭介「え……ま、まさか明智、ホントにヤリンなのか!？」

凧紗「ち、違う！ 違あああうッ！」

果たして凧紗の彼氏疑惑の真相は？ 続く！

第205話 中学1年の春 前編

きっかけはある日、珍しくその日は一人で下校中であった。

珍しくというのも、当時の俺には友達が多かったのだ。まあ、その殆どは永渕との一件で離れてしまったが、あの頃の俺は……今の俺から見ればリア充だったと思う。

普通に友達作って、普通に日常を過ごして、普通に　好きな人もいて。

あれ、今とあまり変わらない気がするけど……気のせいだよな？  
そんなリア充生活を満喫していたその時。俺はたまたま寄り道をして、たまたま母校の小学校に近くを歩いていたのだ。卒業したのは2ヶ月前なのに、何故か懐かしく感じた母校。多分中学生になったからそんな気がしたのだろう。気がつけば　俺は母校の校舎を眺めていた。

中学の制服を着てたからまだしも、今だったら通報されるんだろうな……。

「まあ、今更どうでもいいよな……」

静かに呟いて、母校から立ち去ろうとして　まさにそのタイミングを狙うように、

「……………」

校門の前で佇んでいる一人の女の子を目撃したのだ。

不思議な女の子だった。

体格的に多分高学年くらいだとは思うが、ランドセルを背負うその子の服は、どういいうわけか泥まみれで、やや乾燥して唇も切れているように見える。切れ目からは血が流れ出ている。



「……っ」

「あ……っ」

さらに偶然なのか必然なのか、俺と女の子の視線が合ってしまった。当時、中1のガキだった俺でも可愛いと思えるような女の子。髪は黒く、ツインテールという髪型で、背は伊吹より若干低い感じでおそらく、小学生としては高い方なのかもしれない。

でも、女の子はボロボロだった。服も、体も、可愛い顔まで傷だらけだ。

不思議と俺の足は勝手に動き、次第に少女へ近づいていた。

そして、

「ど、どうしたんだ……おい？」

「……え？」

弱々しく声を漏らした女の子。

うっん……このまま放っておくわけにもいかないよな。よし、ここは……そうだな、まず怪我をしているみたいだし、俺は女の子に手当てをしてあげる事にした。

まあ、今だったら捕まるかもしれないけど……俺も昔は中1のガキんちよ。何より学ランを着ていたんだから周囲には、それほど歳の離れていない兄妹に見えたのかもしれない。

俺は女の子を家に連れ込み、とりあえず傷の手当てをしてあげた。当時小学生の葵は友達の家に行っているようで、この日は家にいなかった。まだ素直だった伊吹も今日は小坂達と用事があるらしい。多分、乱入者は現れないであろう。

「よし、後は大人しくしてれば怪我は治るだろ」

「……う、ぐっ、ありがとう……」とぞいます」

傷の手当てをしてくれたお礼を言う女の子は、何故だか瞳から水滴を零していた。

「いちいち泣くなよ、怪我人放っておけるわけないだろ？」

「で、でも……私は……っ」

「……ああもうめそめそすんなって！ そうだ、ゲームやろうぜゲーム！」

「……うえ？ げ、ゲーム……ですか？」

「おう、それで気分 晴らそうぜ！」

自分でもよくわかっていなかったけど、それで気分が晴ればいいなあ……そう思って俺は女の子にゲームを勧めた。既に微オタ化していた俺だが、一応普通のゲームも持っている。とりあえず引かないように、無難な格ゲーをプレイすることに。

しかし、女の子はゲームすらプレイした事がなかったらしい。なので、俺は一から女の子に操作方法などを伝授する。女の子は大変物覚えがよく、さらに時間が経過した時には

「うおっ！？ ま、負けた……？」

「……はああっ！ つはは、勝った……センパイに勝ちましたっ！」

「強くなつたなあ愛木。格ゲー得意だったのに……」

愛木碧と名乗る女の子に　完膚無きまでに叩きのめされてしまった。

まさか……何も知らなかった子が、短時間でここまで上達するのは……恐ろしい。

それからしばらく　夕方になるまで俺達は盛り上がっていた。だが、彼女は妹ではない。いつかは家に帰らなければならぬ。

「えへへ……今日はありがとうございます、センパイ」

「気にするなつて、またいつか遊ぼうな」

「……はいっ！」

我が家の玄関にて、帰り際の愛木は輝いていた。出会った時の愛木とは違う、まるであの愛木とは他人であるかのように輝いていた。そこで愛木は我が家から出て行き、家に帰ったが……結局どうして愛木が小学校の校門前で、傷だらけで佇んでいたのだろうか……。

その理由は結局、わからなかった……。

その理由がわかったのは、それから二日後のことであった。

俺は友達の家に遊びに行ったその帰りで、色々とどっぷりお疲れであった。その日は帰ったらさっさと寝て深夜アニメに備える予定だったのだが……。

「コイツまた泣いてねえ？」

「ホントだ、マジウケルー！」

なにやら不快な音声が耳に入り、ふと公園のほうを見ていると……チツ、まゝた近所の中学のスケバングループかと俺は思った。連中、何かと悪い噂が流れていて、なんでもうちの中学の永淵達と繋がりがあるとも言われていた。そんな不良少女達は今日は 小学生の女子まで率いている。

なんだ、舎弟みたいなモンか？

将来グループに入れる為に教育中といった感じだろう。不良少女たちと一緒にいるヤンキーなり掛けの女子小学生3人は、不良少女たちと一緒に何かを取り囲んでいるようだ。

なんだよ、カツアゲか？

「お、らあっ！」

「い、いたい！ いたいよ……っ」

「痛いよじゃねーだろ？ ほら、あたいの妹に今日のお友達料払えよ」

「う、ええ……ごめん、なさい……お金、ありません……っ」

「泣き顔チョーきもい！ 姉ちゃんに逆らったらアンタマジ死ぬよ？」

おいおい……ガラの悪い連中に絡まれてるあの子、二日前に俺と遊んだ……。

あ、愛木がどうしてアイツらに？

まさか、あの日愛木がボロボロだった理由ってのは……。

脳裏に浮かんだ一昨日の愛木の姿。俺は衝動的に足を踏み出し

「さつさと払えよ！　じゃねーと妹の言う通りテメエぶっ殺し  
ッ」

不良少女達の中でも、おそらくNo.1であろう眉毛全剃りの茶髪の少女。俺はその子が愛木をぶん殴ろうとした寸前に　手首を握り締めてやった。

突然の事態にその少女やそり取り巻き、そして愛木は啞然とする。

「な、なんだよテメエ！　離せよお！」

「別に離してやってもいいけど、てめえ……今何しようとしてたんだ？」

「テメエに関係ねえだろ！　なんだよ、テメエどこ中だよ！」

「そーだそーだ！　つーかあ、あたしの姉ちゃんから手離してよ」

「中学生の癖に介入するなよ！」

リーダー格の少女と、その妹と友達が一齐に怒声を放ってくる。鬱陶しい……中学生だから揉め事に介入するなって。じゃあ、逆に言い返して論破してやるよ。

「お前らの姉御はどうなんだよ？」

「テメエ！　あたいの妹と妹の友達に文句言ってるじゃねえ！　い  
いから離せよ！」

「いい加減間宮さんから手え離せよタコ！」

このスケバンのリーダー格、間宮さんって名前だったのか。どうでもいいけど……間宮さんを守ろうと仲間の不良少女の一人が、全体重を乗せた全力の一撃を放ってくる。

が、俺はソイツを寸前で避けてやった。

拳が直撃する寸前に間宮さんの手首から手を離し、ふつと後ろへ後退した。不良少女の小さな拳は俺を捉える事が出来ず、空振りに終わる。

ギリギリと、不良少女の歯が噛み締められる音が聞こえる。

「テメエ……あたいに喧嘩売ったな？ どこ中のなんてヤツだよっ！」

「お前に名乗る名前なんてねえし、俺は女の子とは殴り合いたくないんだが」

「ふ、ざけんな！ テメエぜってーブツ殺す！」

人聞きの悪い子だ。激昂した間宮さんが素早く駆け出し、拳を構えて迫ってくる。

仕方ない、殴るんじゃないかって 力技で押さえ込むとするか。特に、喧嘩の経験なんてないんだけど体は丈夫だからな。多少の無理なら どんつってことないぜ。

「お、あああッ！」

素早く放たれた右ストレート。俺はそれを避けた直後に右腕をしつかりと掴み、右腕を背中にして無理やり彼女の向きを変え、空いた左手で肩を掴んだ。

関節技である。これなら痛いだけで、女の子を殴らずに抵抗を無

くする事ができる。

「い、いてててててっ！　ちょ、離せテメエ！　離しや　いて、  
いてててっ！」

「暴れるなよ……抵抗すればするほど痛いぞ、こっぴつ技はなあ」

「間宮さん！」

「やべえよコイツ、間宮さんのストレートかわして関節技だよ？」

「わ、わかった……今回は引いてやるから間宮さん離せよ！」

しょうがねえなあ……あんまり女の子を痛めつけたくないし、俺の趣味でもない。というわけで俺は間宮さんから手を離し、彼女を解放して仲間の下へも戻してあげた。

「う、あ……くっそ、痛えっ」

「だいじょーぶっすか間宮さん！？」

「う、ぐ……お前ら今日は撤退だ。テメエ次会ったら覚えてろよ！」

負け犬の遠吠えという言葉はこっぴつことだな。不良少女たちは捨て台詞を吐き、一目散に公園から逃げ出してしまった。次会ったら覚えてるとか言っているが、多分もう会わないだろ。

というか、3年の永淵と関わりあるみたいだし、出来れば二度と会いたくない……。

当時の　永淵と関わる前の俺はそう思っていた。

「センパイ……っ」

「あ……愛木、お前……っ」

目の前に居るのは一昨日、輝いていた愛木ではなく 出会った  
時の愛木であった。

今にも涙腺崩壊しそうで、かつ傷だらけの彼女。

決定的な瞬間を目撃してしまった俺は もう彼女の事を放って  
おけなくなつたのだ。



第205話 中学1年の春 前編（後書き）

後書きトークコーナー！

純奈「クソ介がロリコンだってわかる回だったね」

凧紗「全くだ。藤島……まさか小学生に手を出そうとは」

圭介「あの、俺当時中1なんですけど？」

純奈「関係ないんだよ！」

凧紗「そうだ、藤島はロリコンだ」

圭介「信じてくれねえし……クソ、こうなったらぶっちゃけるしかねえな」

凧紗「ん、どうしたんだ藤島？」

圭介「まったく、小学生は最高だぜ！」

凧紗「……素で引いたぞっ」

純奈「おまわりさんこっちです！」

圭介「こんな反応するとは思ってたよ！」

圭介vsすばるんロリコン対戦。勝敗は……多分すばるん。

第206話 中学1年の春 後編

その後、俺は再び愛木を家へと連れて行き、怪我の手当てをしてあげた。彼女が怪我している理由がわかった以上 このまま放っておくわけにはいかない。

「よし、これで大丈夫なはずだ」

「あ、ありがとう……センパイ」

愛木は静かに謝ると、そのまま俺の様子を上目遣いで窺ってくる。これまた強烈、愛でたくなるような可愛さに、思わず照れから視線を逸らしてしまいそうになったが、ダメだよな。愛木を安心させるためにも出来るだけ、愛木のことを見てあげてあげべきか。

いや、かえってジロジロ見られると気分悪くするかもしれないし。全く、女の子というのは難しいものだけ……。

とにかく……さっきのことを話しておくべきだろうか。本人はあんな現実には、触れたくもないかもしれないけど、俺も事情を知っている以上愛木の力になりたい。

なにより 何時までも逃げるばかりじゃダメだと思うんだ。

「愛木、お前……さっきの奴らとは知り合いなのか？」

「え、は……はい、一応……」

「まあ……改めて説明しなくても大体わかるけどさ、どうしてあんな事になってたんだ？」

「……………」

俺の問いに、愛木はやっぱ黙りこんでしまった。

予想通りの反応といえばそうなんだけど……どうする、こうなったらラノベで鍛えた女の子を慰める話術を行使するか。馬鹿みたいな案だけど、これはわりと真剣に考えた結果だ。

「別に俺は責めてるわけじゃないよ、俺はな……その、お前が心配なだけなんだ」

「……ほんと、ですか……？ センパイは、醜いとか……思わないんですか？」

「逆に聞くけど、そう思わなきゃいけない理由ってあるのか？」

「そ、それは……っ」

「人が何を思うかは人それぞれだよ。俺は少なくとも、お前を醜いとは思わない」

むしろ色々とムカつくよ……あの間宮さんってスケバングループに。なんだってこんな可愛い子をあんな目に遭わすんだよ。愛木がこんなに傷つくまで責めやがって……。

でもなあ、もうアイツらとは会わないだろうし、アイツらにキレたった仕方がない。

流石の俺もそこまで子供ではない。馬鹿な真似は出来るだけしないようにする。

「センパイ……珍しい人ですね。今まで、そんな風に言ってくれた人は……っ」

「それでも、あの間宮たちが多数派だとしても、俺はお前が言う少数派を貫き通すよ」

「……ダメですよ、センパイ……絶対、迷惑掛けますから……」

「そんなことはない、俺がやりたいと思ってやってるんだ。迷惑なわけがないだろ？」

「あの人達……執念深いんですよ？ センパイまで……標的に……  
……っ」

小さな顔を膝にうずめてしまった。こんな状況で恥ずかしさはありえない。おそらく愛木は涙を隠そうと必死なのだろう。それにしても、愛木がここまで俺を心配していたとは……。

それだけで十分、嬉しい気がするよ だけど、

「大丈夫、俺はそう簡単にやられるヤワな奴じゃないからな」

「で……です、けど……」

「俺は愛木が心配なんだよ、放っておけないんだよ……だから、俺は愛木の味方をする」

「……えっ？」

「し、信じられないとか言うなよ？ これはもう……なんつーか、決定事項だからなっ」

俺だけはずっと味方でいてやるという、よくあるセリフを言ってみたかったが……なにこれ滅茶苦茶恥ずかしいぞ。ここまで顔が熱

くなるほど恥ずかしいセリフだったとは……。

「ありがとうございます、センパイ……」

「気にするなよ。当然だろ、俺と愛木は先輩後輩……んで、友達だからな」

最も、俺が勝手にそう思っていただけかもしれない。その時の、愛木を慰めるために選んだ言葉だったのかもしれない。それでも、友達という一言は愛木に希望を与えた。

小刻みに震えながら、愛木はゆっくり顔を上げて、

「本当……ですか？ センパイは……友達、なんですか……？」

「二回も家に来て、一緒に遊んで、今はお悩み相談して。友達以外の何だって言うんだ？」

「せん、ぱい……っ」

「み、見くびってんじゃねえぞ。そんなの当たり前じゃねえかよ」

「うう、え、ぐ……センパイ……ありがとうございます、っ」

遂に我慢の限界に達したのか、ダムが決壊するかのように涙を流し始めた愛木。今の俺に出来ることと言えば、精々気持ちを落ち着かせる為に、愛木の頭を撫でてあげるくらいだろう。

少しでも、それで気分を和らげて欲しい。

そう思いながら、俺は愛木の頭をわしゃわしゃと、優しく撫でてあげた。

「愛木、それとさ……お前も少しは強くなるうな？」

「え、う……っ、強く……ですか？」

「ああ、これくらいで折れてたら 絶対アイツらには勝てないぞ？」

「……無理、ですよ……私、強くなんて……っ」

強くなりたい弱者は最初は誰もがそう思う。強者じゃない俺が言うのもなんだけど、自分は弱いからこれは無理だとか、そういうネガティブなものは誰だって通る道だろう。だけど、本人がそんな風に思っているからこそ その本人には余裕が残されているんだ。まだ、自分でも気付いていない 凄まじい潜在能力が。

「なれるよ。別にジャイアント間々（まま）のように、屈強になれなんて言っていない。俺が言っているのは人並みには強くなるうぜってことだよ。体じゃなくて心のほうをな」

どんな弱者だって、その気になれば人並みに強くなることはできる。俺はその弱い子が人並みに強くなった例を知っている。幼稚園の頃から一緒だった 伊吹がそうだ。

孤独で、いつも泣いていた伊吹も、今では友達もいて元気な普通の女の子だ。

きっかけ。

そう、要はきっかけさえあれば 俺らは化けるが出来るハズだ。

「で、でも……強く言ったらきつと、あの人達……もっと痛い事してきますよ……っ？」

「大丈夫だ。むしろ、何も抵抗しないからアイツらは面白がるんだよ」

「で、でも……っ」

「本当はアイツらに、文句が山ほどあるんだろ？ だったらその文句を全部言えるようになればいい。自分の思っている事を 素直に何でも言えるようになればいいんだ」

そうするまでの一步を踏み出すのが大変だけど、強くなるにはそれしかない。弱者が強者になるのに近道なんてないんだ。でも、別に鬼のような修業をするわけではない。決して、愛木のことを責めまくるわけでもない。ただ 愛木が素直になればそれでいい。

それだけで十分、愛木は強くなれると思うんだ。  
実行するのは難しいかもしれないが、多分愛木なら大丈夫だと思う。

俺は愛木を信じるよ。

「す、素直……？」

「おう、なよなよしないでハッキリと、物事を言えればアイツらに勝てるって」

「……で、でも……私には………っ」

そうだよな、いきなりそうしろなんて無理に決まっている。それを理解した上で、彼女が強くなる為のとおきおきの修行方法がある。たった今思いついた とおきおきの方法がな。

「だったら、俺にアイツらの愚痴を言ってみろ」

「……えっ？　せ、センパイに……ですか？」

「俺になら元気よく言えるだろ？　だから、まず愛木は人に慣れようぜ？　その為なら俺、何時だって練習相手になってあげるからよ」

「うう……センパイ、本当に……本当に、それで………っ」

「俺は問題ないぜ、後は愛木次第。愛木は間宮達から解放されたいか？　もつと　大きな存在になりたくないか？」

俺の言葉の後、しばらく考え込んだ末　愛木は首を縦に振った。それが愛木の、強くなりたいたいという合図である。

約1時間後、決意した後の愛木はそれはそれは正直。俺の見込み通り、愛木は俺となら普通に話せるみたいで、間宮達に対する愚痴を沢山言ってくれた。それで本当に、愛木が間宮達にひどい目に遭わされていたんだな、という事を俺は知った。

でも、1時間に渡る愚痴で愛木は気分が晴れたらしい。最後のあたりでは、愛木に昨日のよう　眩しい笑顔が戻っていたのだ。

「あの、センパイ……今日はありがとうございました！」

「気にすんなよ。俺達友達なんだから　お悩み相談は24時間タダだぜ？」

「うん！　ありがとう　センパイ」

完全に元気を取り戻した、愛木碧という一人の弱かった少女。



この後、少女は見違えるほどに強くなった。

愛木をいじめていた間宮達と、間宮の妹やその友達で愛木のクラスメイトの、ヤンキーになりかけの女子集団は、ある日を境に愛木をいじめなくなつたようだ。理由は簡単、愛木が間宮達との口論に勝利したかららしい。その時素直に思つたよ……愛木、やれば出来るじゃんつてな。

結局愛木は、自分で思っているほど弱い生き物じゃなかつたんだ。もっと強いハズなのに、自分で本当の強さを押さえ込んでいた。だから愛木は馬鹿の標的にされてしまったのだらう。でも、目を覚ました愛木の輝きは日に日に増していった。

それから何ヶ月後かな。多分、永淵が伊吹を襲う一週間くらい前の話だ。突然愛木は父親の都合で転校することになってしまった。父親の転勤で、一家ごと引っ越しをするらしい。

「はあ、今日で愛木と会えるのも最後かあ」

「センパイ、そんなに寂しがらないでくださいよっ。そのうち絶対会いに行きますからっ!」

「その日が待ち遠しいぜ……」

「へえ、センパイって私が好きなんですか?」

「なんでそうなるんだよ?」

「じょーだんですよじょーだん! でも、センパイがどおーしてもつて言うなら、私センパイの彼女になつてもいいですよ?」

「うっせ! 余計な世話だつーの。そういうお前は俺の事が好き

なのかよ？」

「はい！先輩として、友達としては！」

ぐは、そういうオチかよ……ちくしょう、一瞬期待しちゃったじやねえかよ。その期待していた気持ちを返せ。今思い出せばあの時の俺、少しは愛木の事を意識していたのかもしれない。

思い切って告白すればよかったかもな……まあ、今はもういいんだけどよ。

「あ、そろそろ電車の時間です」

「おう、それじゃあ……まあ駅までは送ってくよ」

「だいじょーぶですよ。お父さんもお母さんもいますから、センパイに来られると恥ずかしいかもです」

「そ、そうか……じゃあ、ここでお別れか……っ」

「やっぱりセンパイ、私の事好きなんですか？　いつそ遠距離恋愛しちやいますっ？」

「だああもう、うっさいわ！　引っ越すんならさっさと引っ越せ！」

「はいはい。それじゃあ、冗談じゃなくて本当に引っ越しちゃいますねっ」

ホント、何かと調子の狂うヤツだったよな……失恋直後でもあったし。あれ、やっぱり俺って愛木の事好きだったのかな。ちくしょう、遠距離恋愛しておけばよかったかも。

まあ、遠距離って長続きしないって噂だが……。

「愛木、元気だな」

「はい、センパイのほうこそ　いつまでも元気でいてくださいな  
っ」

いつまでも元気……か。愛木から言われたその言葉、俺は守れて  
たんだろっか？

元気と言えば今は元気だけど、その一週間後から数年はねえ……  
まあ、助けたい人がいたからって殴り込みをし掛けた、俺も馬鹿だ  
っただけだよ……。

でもまあ、別にいいか。元気でいろっつて命令には概ね従えている  
と思うし。

「センパイ！」

10メートルほど走った後、愛木がいきなり振り返ってきて叫ん  
できた。

「センパイ、私達　ずっと友達ですよね？」

「そんなの答えは決まっつてんだろ　永遠に変わらねえよ」

「はい、センパイ　また会いましょうね！」

「おっ……」

こうして、愛木は古宇坂の街を去ったのだ。その背中最高に輝  
いていた。その輝きを保ったまま突き進んだのだろう、愛木はその

後芸能界デビューを果たした。

それだけではない。今ではOKB48に並ぶ人気を誇るアイドルになった。

性格も何だか、駅での別れの時より明るくなっている気がするし、なにより 愛木はまだ前進し続けているような気がする。まだまだ終わりではない、むしろこれからという感じだ。

俺を置いてどこまで行くんだか……。

でも、本当になっちまったよな……大きな存在に。

これが……俺と愛木の過去の話。愛木と仲良くなった理由である。

第206話 中学1年の春 後編（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「け、圭介が主人公してる！？」

千早「ほ、ほんとだ……わたし、あんな風に口説かれたことないのに……っ」

凧紗「私達、悪い夢を見ているのかもな」

伊吹「そうよ、私の圭介があんなにイケメンなわけないでしょ！」

暮葉「伊吹さんの同意なのです。けーすけ様はえっちすけっちわんたっちなのです！」

圭介「俺に対する評価が散々すぎる……っ」

## 第207話 返事

所変わって、とある住宅街にある公園。そういえばこの辺は浅間家の近所。あかりは前に愛木のファンだって言っていた気がするけど、もしここにあかりが現れたら喜ぶんだらうな。

俺はこの公園のベンチに座り、愛木と2人で盛り上がっていた。普段の日常、それぞれの人間関係でおもしろいことなど、正直しゅうもない話ばかりだけど、それがまたおもしろい。こうして駄弁るだけで不思議と楽しいんだよな。やっぱ、俺と愛木は仲のいい友達だぜ。

「へえ、それじゃあ芸能活動は上手くいってるんだな」

「はい！ みんな超いい人ばかりですよ、センパイのほうはどうですかっ？」

「俺？ 俺はまあ……普通の学生生活をぐーだら過ごしてるよ」

本当は普通とはかけ離れて、ドラマティックかつアクロバティックで、その上デンジャラスなハードすぎる日常を送っているんだけどね。でも、そんな事を愛木に言えるハズがない。サヴィエトやら魔法使いという存在が表に出たら、それこそ暮葉達のピンチでもあるんだからな。

「あつ！ いけない……そ、そろそろお仕事っ！？」

「あ？ 仕事ってお前、もしかして古宇坂に戻ってきたのって仕事の都合か？」

「はい……今日はこの辺でライブなんですよ。それでその、仕事の前にセンパイに会いに行こうかな？なんて思ってたら……」

「ああ、それで不良に絡まれていたのか？」

「センパイ、あの時はありがとうございます！」

「いや、気にするなよ。ていうかあの状況をなんとかしたのは日向さんだしさ」

俺はただボコられてただけな気がするけど……そういえば、なんだか腹の痛みが時間の経過と共に消えてきた気がする。流石は俺の身体、丈夫な上に回復力も尋常じゃないな。くそ、もう少し後で日向さんと戦っていれば、もう少しだけスマートに勝てたかもしれないかったのに……。

まあ、今更気にしたって仕方ないよな。

それに俺、今はテスト勉強しないと 明日のテストが本格的にヤバイ。

「いや、センパイがいなかったらあたし……とにかくありがとうございます……」

「お、おう。今度から気を付けるよな？」

「はい！」

なにもしていないんだけどなあ……まっ、お礼を言われるのは嫌な気分ではない。

少しだけ 役に立てた気分になれるからな。

「それじゃあセンパイ。あたし、そろそろ仕事に行きますねっ」

「おう、また古宇坂に戻ってきたら会おうぜ？」

「あっ、そうだ！ センパイ、アドレス交換しましょうよ！」

「そっかあ、お前携帯持ってたんだ。いいぜ、それじゃあパッと交換しようか」

こうしてお互いポケットから携帯電話を取り出し、赤外線通信でアドレスを交換。あの頃は俺も愛木も携帯なんて持っていなかったが、今は2人とも持っているんだ。折角だし、このまましばらく連絡も出来ないのは嫌だ。だから今のうちに 連絡先くらいは手に入れておこう。

こうして俺と愛木は互いに連絡先を知り、いつでもメールと電話が可能になった。

まあ、頻繁にはしないだろうが……なんだか嬉しい気分だな。

「これで遠くに行ってもだいじょーぶですねっ」

「そうだな、圏外に行かなきゃ何の問題もねえな」

「はい！ それじゃあセンパイ、そろそろ時間でホントにやばいので」

「おう、今度こそ元気でな。お前のアルバムとかちゃん買ってやるからな」

「はい！ またいつか」



愛木はこれから仕事だ。アイドルってのは本当に忙しいんだな。まあとにかく、愛木とお別れの挨拶をした後、愛木は俺に背を向け職場へ、

「ん、おー圭介じゃん……って、えええええっ!? み、みどりちゃん!?」

俺に挨拶をしたり驚いたり、感激したりと色々忙しい声が聞こえてきた。

小柄で明るい髪色のツインテールの少女。

浅間あかり。そう、俺の後輩にして 愛木みどりの大ファンな少女である。

「うーか、なんてタイミングで登場するんだよ。確かにここ浅間家の近所だけどよ……。」

「う、わっ!? あ、あの……貴女はっ?」

愛木のヤツも商売モード。

アイドルお得意の猫かぶりを始め、急に大人しい清纯系の少女に変貌する。

「あたい、浅間あかりです! あの、あたいみどりちゃんのファンなんです!」

「えっ? そ、そうなんですか? えへへ、ありがとうございますっ」

ぬぐわああああああ!

き、気持ち悪い……あかりも愛木も猫かぶってて気持ち悪いぞ。

まずあかり、お前はそんな敬語を使うようなキャラじゃない、もっ

とやんちゃで子供っぽいヤツだろ。

なんですか、その元気な後輩系キャラは!?

それから愛木。お前はそんな青山さんっぽいキャラじゃないだろ。いつもはもつとストリートかつ元気で、そう……あかりに近い女の子だろうが。

ああ……猫かぶりも程々にしといてくれえ。

「お、おい圭介っ!」

「なんだよあかり……」

「ななななんで圭介がみどりちゃんと一緒なんだ!? どこで知り合っただよ!?!」

ぐは、あかりに胸倉を掴まれてしまった。

あかりのヤツ、小柄な癖に力あるなあ……妙に苦しくて呼吸がし辛いぜ。

「知り合うも何も、俺と愛木はいわゆる先輩後輩なわけで……?」

「なんでもっと早くに言わなかったんだよ! みどりちゃんと知り合っただなんて……そういうことは早めに言えよなっ!」

「久々に会って連絡先今まで知らなかったんだよ! 仮に報告しても信じねえだろお前!」

全く、あかりの理不尽さは相変わらずだな。あかりらしいと言えばそうだけど、この理不尽なキャラを愛木はどう思うことやら。でも、テンションだけは愛木に近いしなあ。

案外、愛木とあかりはいい友達になるかもしれない。

「み、みどりちゃん！ その、あ、あたいに サインください！」

胸倉から手を離して愛木の下へ駆けて行ったと思ったら、いきなりかよ。好きなアイドルのサインが欲しい気持ちは分からないでもないが、あまりにも直球過ぎるだろ……それは。つか愛木もこれから仕事があるんだから、ごめんの一言も言ったらどうなんだ？

さつきから愛木はずっと 輝かしい営業スマイルを浮かべていた。

でも、視線で「センパイ、助けてください」と言われている気もしました……。

それから僅か2分後。営業スマイルを浮かべていた愛木は、凄まじい速筆で A i k i M i d o r i とサインを書きあげ、多くのファンが泣いて、土下座して欲しがるであろう、貴重な一枚をあかりはいとも簡単に手にする。そして、サインを書き終えた愛木はと言うと、

「それでは仕事があるので、これにて失礼しま〜〜す！」

と、大声で叫びながら、まるで牢獄から逃げ出すように走り去っていったのだ。

愛木……ごめんよ、俺の後輩が迷惑かけちゃった。仕事 時間  
間に合えよ。

「はああ、みどりちゃんのサイン……もうあたいたい死んでもいいやつ」

「どんだけ価値高いモンなんだよー！」

「ふん、オタクの圭介にはどーせわからないだろっ！」

「あのなあ、そのセリフはオタクに対する冒瀆だぞ？」

オタはオタなりに価値高いものがあるんだからな。例えば、ゆソフト新作が発表と聞いた時にはガチで幸せな気分になれたよ。まだ詳細は不明だが、既に購入決定だぜ。

だってねえ……こいち先生とむりん先生の絵、俺的には素晴らしいんですけど。

「……………」

あれ、おかしいな……急にあかりが静かになった気がする。

さっきまで愛木のサインを貰って、ガンプラ貰った少年のようにはしゃいでいたのに。

不思議だなあ……一体どうしたのだろうか？

「なあ、圭介……っ」

「お、おっ」

「……………んだ？」

「……………えっ？ 今なんつつつたんだ？」

声小さすぎて全然聞こえなかった。言っておくが俺の耳は悪くないぞ。これでも聴力検査では優秀な成績を残した地獄耳だ。単にあかりの声が小さ過ぎただけである。

「だ、だからっ！ 返事、いつしてくれるんだ……………？」

「返事？ ああ、そうか……まだだったよな」

既に8月も末だと言うのに、8月17日から俺はずっとあかりを待たせている。あかりが俺にしてきた告白に対する返事を、彼女はずっと待ち続けていた。色々と忙しかったし、部活であかりに会っても2人きりになる機会は中々訪れず、結局今日まで返事はしていない。

もう、答えは決まってるのにな……決心しているっていうのに。

「圭介……ど、どうなんだ？ 決着はついたのか？」

「ああ、とっくの昔にな」

「ええっ！？ だ、だったらさっさと返事しろよな！」

「仕方ねえだろ。ここの所色々忙しかったんだし……」

「忙しかった？ 圭介……アンタ、まさかまた面倒事に巻き込まれるのか？」

ギクツ、と一瞬、背筋が凍りついたような気がした。

あかりの指摘通り、面倒事に巻き込まれていたんだけど……言えねえ、ポルトガルで戦って重傷負いましただなんて、今のコイツには絶対に言えねえ。

「違う違う、色々用事があったんだよ」

「用事って……圭介はいつつもそれだな。あたいに内緒で二股かけるなよっ！」

「二股も何も、俺らそんな関係じゃないだろ？」

「こ、これからなるかもしれないだろ！ で、圭介……えと、どう……なん、だ……？」

期待半分、不安半分と言ったところだろうか。すっかり紅潮しているものの、どこか落ち付かない感じである。コイツ……振ったら泣くんじゃないだろうか？

いや、でもなあ……俺は正直な気持ちを伝えたい。  
これはちよつと困ったなあ……。

「……ごめん」

「……ッ」

一言。

たったの一言で、あかりの顔色が明らかに変わる。わかっていたというか、わざわざ予想なんてしなくても、これが当然の反応だろう。

惚れている状態でこんな事を言われて ショックを受けない人はいないはずだ。

「あかり？」

「……ふあ、な……なんだよっ」

虚勢を張ろうとしているが、既に遅い。

あかりは後退りをしながら、目に涙を浮かべている。

小さな体は小刻みに震え、今にも崩れ落ちてしまいそうであった。

「……これ、使うか？」

ポケットの中からシンプルなデザインの手ハンカチを取りだし、あかりへ差し出す。

「あああ、あたいは、な……泣いてないんだからな！」

「そんなこと言われても、お前……説得力が皆無だぞ？」

「う、うるさい！ 圭介のせいだ！ 圭介の……うう、けい、すけえ……っ」

「……………」

心に傷を負ったあかりは、その後もしばらく泣き続けていた。

昼も近い公園でいつまでも泣き続けるあかりに、どうしてやることもできなくて、

俺はただ、彼女のそばで佇んでいた。

## 第207話 返事（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回はちよつとした報告だぜ」

大吾「報告？ まさか、僕が主人公に!？」

圭介「ねーよ」

大吾「ですよー」

圭介「え〜つと、今回は【登場人物紹介】の敵キャラと味方キャラに、キャラを追加しました」

硬質のノーム「それはいい話ですねー、では私を1話に渡って紹介か  
ry」

邪炎のサラマンダー「黙れ、貴様は地獄にでも堕ちろ」

ノーム「ぎゃああああ！ に、二回も粛清されるなんて不幸ですねー！」

圭介「……なんなんだ、これ？」

大吾さあ？」

風剣のシルフ「後書きでは私らまでおちゃらけ集団なのねえ？」



## 第208話 あの日

8月28日の大体午後5時くらい。相変わらず暮葉と葵は家におらず、俺は一人で悶々と勉強に明け暮れている。ちくしょう……英語も数学も化学もサツパリわからん。

あの後 公園で泣き止み、ようやく落ち着きを取り戻したあたりを話し合いをし、結局今後もお友達ではいまいしょうという結論に達した。それはいいんだけどさ……なんつーか、別れ際のあの寂しそうな顔を思い出すと、俺も何だか罪悪感を感じてしまう。

なんでだろうなあ。素直な気持ちを伝えただけなのに……。  
俺は暮葉の事が好きなのになあ……。

まさか、あかりがあそこまで泣く子だったとは思わなかったぞ。

やつぱ、男という生き物は女という生き物の涙に弱く、この俺も例外ではない。あかりの涙ですっかり参ってしまった……。

はあ……朝から喧嘩したり、女の子振ったり、勉強したり……心身+頭脳が疲れた。

そんなことをぼんやり考えながら、数学の問題集を解いていると

携帯が振動した。

メールか、しかも赤佐からは珍しい……。

『ひゅーどろどろどろどろ おめでとう、今から君はハワイ旅行

や』

なんだこの怪しいかつ不吉な文脈……つーか赤佐、ふざけてるのか？

どろどろってなんだよ。ハワイ旅行ってなんだよ。意味が全然わからねえ……。

そして丁度その時、一階のほうから物音が聞こえてきた。

なんだ、暮葉達が帰って来たのかな？

「…………あれ？」

足音がこつちに近付いてきている気が…………お土産でも買ってきたのだろうか？

と、呑気な事を考えていた、

「ちえすとおー！」

「ナイス黒ちゃん！ よおし藤島喰らえ！ 身長180cmシヨルダー・タツクル！」

刹那、

扉が蹴飛ばされたように荒々しく開けられ、その上何かデカい人が突進してきて、

「ぐ、は…………ツ！？」

ドン！ という壮絶な音が炸裂し、気付いた時には俺は床に倒れていた。何が起こったかサッパリわからぬまま、突然現れた暴漢達の声が室内に響いている。

「いや、我ながらええ体当たりだったなあ」

「チョクト、テメエ呑気な事言ってる場合か！？ 藤島はタフだから復活するぞ！？」

「へいへい、そんじゃあ 体重68kg首筋エルボー！」

さらにズン！ という、首の骨を砕くような衝撃が伝わり、呼吸困難に陥る。何が体重68kg首筋エルボーだよと思ったが、これがまた滅茶苦茶な威力であった。ちくしょういてえ……しかも衝撃で意識が段々遠のいて行く気もしないでもない。

ていうか、この声って……あ、赤佐と……くろ……き……？

……。

うつ……なんだ、頭が妙にぼんやりとしているぜ。

ていうか、さっき俺の身に何が起こったんだろうか。あまりにも突然すぎて、とりあえず黒木と赤佐のせいだということはわかったが、結局何が何なのかはサッパリで……。

まあいい、アイツらに報復しよう。そうだな……恥ずかしい話でもしてやるか。

去年の宿泊研修でアイツらのナニのサイズ、案外小さかった事をバラすしよう。

そうと決まれば早速 あれ？

「ええッ！？ ちょ、縛られてるし……なにこれ怖っ！？」

どうして俺、縄で縛られ椅子に固定されているんだろうか。そして今気付いた、我が藤島家は大変現代的な家であり、和室は一室だけあるんだが……こんなに広い和室はなかったハズだ。

ていうか、どこなんだよここは。

ありえねえだろ……なんかその、立派な古い日本家屋みたいな感じだけど……？

「くそっ、縄抜けの術……って、そんなプロ級なこと俺に出来るわけねえし……っ」

どうする？

何故、俺が広い和室に監禁されているかもわからないが、とにかくピンチだ。早急にここを脱出しなければ、物凄く面倒な事に巻き込まれてしまいそうな気が……。

「ひいつ！？」

その時だった。緊迫感に包まれる和室の襖が　なんと勢いよく開けられたのだ。

不意打ちに悲鳴を上げる。まずい、ここは和室と見せかけて実は牢獄。まさか三馬鹿ってのはサヴィエトに雇われたおバカトリオだったのか？

仮にそうだとしたらまずいぞ。くそつ、こんな時に限って暮葉はいないし。ああ、もう暮葉でも誰でもいいから俺を助けてえ。

「うわぁ……アイツらホントに馬鹿でしょ。なんで圭介のこと縛ってんのよ……？」

心の中で助けを求めると同時に、和室に入ってきたヤツの姿が目に入ってくる。可愛い柄のＴシャツにベスト、白いスカートを穿いた銀髪の小柄で八重歯が特徴的な女の子である。

待てよ、コイツは誰がどう見たって……。

「い、伊吹？」

「捕獲はしろって言ったけど、何も手荒な真似しなくても……三馬鹿に頼んだ私が馬鹿だったわ」

意味分らんこと言ってるけど、やっぱりあれは三馬鹿の仕業だ

つたんだな。で、伊吹もその三馬鹿に関係あるってことは 俺の  
監禁を提案したのは伊吹なのか？

「……………てめえ、こいつはどういう意味なんでせうか？」

「わ、私のせいじゃないわよっ！ 三馬鹿よ、全部アイツらが悪い  
のっ…！」

「はあ……………それはわかったから、どうしてこうなったかを説明して  
くれよ…………っ」

「えっ？私の提案じゃないわよっ？ た、ただ今日はあの日だから  
……………」

「あの日ってなんだよ。明智も似たようなこと言ってたけど……………ひ  
よっとしてお前らグルなのか？」

明智が言うあの日ってのは前々から気になっていたけど、まさか  
伊吹にも関係あるとは予想外の展開だったな。ていうことは……………ア  
レ、明智の彼氏疑惑には関係ないのか？

いや、だが……………伊吹は明智と友達だし、明智に協力しているかも  
しれないからな。

「べ、別になんでもいいでしょ！ 察しないさいよばっかっ！」

しかも、明智とグル疑惑のある伊吹も明確な回答を控えている。  
これはますます怪しい。もう少し 調べる必要があるそうだな。

「……………でもいいけど、縄解いてくれよ……………キツくて苦しいよ」

「元よりそのつもりで来たのよ……?」

何故か恥ずかしそうに言いながら、伊吹は歩いてこちらに向かってくる。ふう、これで縄地獄から解放される。心おきなく家に戻って勉強が出来る。

「きゃ!」

えっ? と俺は声を漏らす。

畳だけの何もない所で伊吹が躓き、バランスを崩してこちらに倒れかけてきたのだ。

ちよつと待て、このままじゃ隕石【伊吹】が直撃コースじゃねえか?

しかし、縄で縛られている俺はロクに動くことも出来ず、

「ひゃあ!」

「うわっ!?!」

バランスの崩れた状態から体勢を立て直すことも出来ず、そのまま倒れかかってきた伊吹は咄嗟に俺にしがみ付いた。それは多分、最低限の防衛の為の行為だったんだろう。ところが、俺の体に支えられたとは言え、倒れる状態からではすぐに動きを止める事はできない。

伊吹はそのまま押し掛かってきて、少しの痛みと、唇に柔らかい感触を覚えた。

ようやく伊吹の動きも止まり、何が起きた? と、目を開けたその時、

俺はようやく 事の重大さに気付いたのである。

「…………ツ！」

えっ、ちょ…………あかんコレ、俺と伊吹の唇が触れ合っている。これって…………どう説明しようがアレ以外の何者でもないよね？

「ひゃあっ!？」

伊吹もようやく気付いたのか、甲高い悲鳴を上げながら素早く俺から離れた。

相変わらず椅子に縛られ、身動きの取れない俺との目が合う。時間が経つにつれ、伊吹の顔がみるみると赤くなっていき、ぷるぷると小刻みに震えていくのがわかる。

微妙に涙目でもある。まずい…………このままじゃ引つ搔かれるかもしれないっ。

「ご、ごめん伊吹っ！」

「いや、その…………あ、あんたのせいじゃないし…………べ、別に、謝らなくても…………っ」

すっかり真っ赤になってしまった伊吹は俯きながら、しかし、時々チラチラとこちらの様子を目で窺いながら言う。単に恥ずかしがっているような…………でも、ちょっと違うような。

いつもなら怒る癖に、今日の伊吹はちょっと変かもしれないぞ…………?

「ね、ねえ…………っ」

「お、おっ…………」

「気まずいなあ……ただでさえ、最近伊吹と気まずい状態が続いているのに、今の事故キスのせいで余計に溝が深くなったような。それこそ、マリアナ海溝よりも深い溝が……。」

「あんだ、さ……今日、何の日か本当に覚えてないの……？」

「今日？ 今日って……テスト前日だろ？」

「ち、違うわよ馬鹿っ！ 私が凧紗に言ったからその……こつこついう事になったのに……っ」

「お前が明智に？ って、何言っただよ」

「だ、だから……その、あんだの……っ」

「まだキスのことを引きずってるのだろうか。俺もドキドキしてるけど……あ、アレはどう考えたって事故じゃねえか。事故は事故、それこそその事故で変なスイッチが入っちゃったら、色々と取り返しのつかない事になりそうだけど。でも、事故は事故 気にしないほうがいい……と思う。」

「それなのに伊吹は未だに恥ずかしそうに、まるで俺を意識しているかのように……。」

「てか、絶対意識してる……よな？」

「むしろそれ以外には考えられない。この反応、仕草、あの潤った瞳……まさか、昨日教会で言い損ねたことって、まさか……マジで伊吹は俺の事を？」

「伊吹くまだ？」

「ひゃあうっ!?!？」



「うわああっ!?!」

と、その時 空気の読めない3人組が和室に乱入してきた。  
霧困気クラッシャー。突然すぎる事態に俺も伊吹も悲鳴を上げてしまった。

「うわっ、もしかしてあたしら邪魔だった?」

「しかも国宗と緊縛SMプレイとな!? 僕が貸したエロゲーの真似か!?!」

「まあ、とにかく圭介ってマニアック……というかDMだったんだね」

小坂、大吾、重原……てめえらなんてタイミングで登場しやがるんだ!

「あ、いや……違うのよ!? 圭介を縛ったのは私じゃないわよっ!」

「おい馬鹿野郎共っ! 勝手に俺の性癖決めつけてんじゃねえ!」

大体大吾も重原も俺の性癖知ってるだろ。エロ本貸し借りする仲間じゃねえかよ、だから俺にDM属性がない事知ってるハズなのに。ちくしょう、小坂にDMと思われたらおしまいだぞ。

小坂は地味にSっぽいし……うん、ばれたら駄犬呼ばわりされそうだ。伊吹は普段の行動に反してDMっぽいから何も無いとは思っけど……。

ていうか、誰にだって緊縛プレイが趣味だとは思われたくねえよ。

「それより国宗さんまだなのかい？」

「そうだよ、僕達の準備は完了。もうみんな待ちくたびれてるぜ？」

何の準備をしていたんだろう。というか、それ以前にもっと気になる事がある。

なんで大吾や重原、そして小坂までこの場にいるんだよ？

「伊吹、早く圭くんの縄解いてあげなよ」

「う、うん……い、言っとくけど圭介はロリコンよっ！ ドMじゃないわよっ！」

「うん、あたしらは知ってるから大丈夫だって」

ひでえ……ドMも嫌だけど、ロリコン呼ばわりされるのはもっと嫌だ。

それに頷く小坂も十分ひどいや。くそっ、俺ってそんなにロリコンなのか？

「あ、けーすけ様っ！ ……って、けーすけ様縛られてるのですっ！？」

「お兄ちゃん緊縛プレイが趣味だったの!？」

また新たな奴らが現れたし。今度は暮葉と葵かよ……どうなってるんだ？

しかも葵にまで緊縛プレイが趣味だと思われたし……もうやだ、死にたい。

それはそうと、伊吹が今縄を解いてくれた。おかげでようやく自由の身だぜ。

解放された俺の前に　暮葉と葵が歩み寄ってきた。

「それじゃあ、行きましようけーすけ様っ！」

「えっ？　い、行ってくつて何処にだよ？」

「お兄ちゃん鈍いなあ。会場に決まってるんだよ？」

はっ、会場？

どういう意味なんだよそれ。大吾や小坂達も微笑んでいるように見えるし。コイツらは俺の知らない所で何をやっていたんだ？

会場つてなんなんだ？

結局あの日つてなに？

疑問が次々と湧いてくる中、俺は暮葉と葵に手を引かれ　変な屋敷の中を案内された。

## 第208話 あの日（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「真剣議論、圭介はドMか!？」

圭介「いらねえ議論だなオイ!」

重原「いや、結構重要だよ?」

圭介「なんでだよ!？」

大吾「まあ、物語を振りかえれば圭介の性癖が分かるぜ」

重原「そうだね、そういえば圭介 殴られてばかりだよね?」

圭介「敵キャラが攻撃してくるんだから仕方ねえだろ!」

大吾「にも拘わらず、圭介は倒れない……つまり圭介はドM!」

重原「痛みにも快感を感じているからこそ、攻撃を喰らっても倒れないんだね」

圭介「違あああああああああああああああうっ!」

## 第209話 ハワイ旅行じゃないよ、会場だよ！

「なんだ、これ……？」

「おお藤島、昨日の怪我は平気なのか？」

大部屋に入った際の最初のセリフがそれであった。本当に驚いた……だって、まずこの不思議な屋敷は明智家で、明智家には白藤や三馬鹿を含む4組グループ。葵に青山さん、さらにさつき公園で別れたハズのあかりに、ついでに久々登場浅間部長などの写真部の面々。

それだけじゃない。生駒や西園寺までもが一室に集結していた。当然、明智家だけに明智の姿もあつたが……はて、なんなんだこれは？

「えっ！？ お兄ちゃん怪我したの!？」

「えっ？ ま、まあ……っーか、お前知ってるだろ？」

「うう……やっぱり、昨日の服についていたあの血はお兄ちゃんのだったんだ。ちょっと勿体ないことしたな……こんなことなら、血のついた部分だけ切り取ってから捨てればよかった……」

「怖えよっ!」

ダークな葵に思わず突っ込んでしまった。だって怖いんだもん……これが、噂のヤンデレという生き物か。っーか葵はヤンデレキアラじゃねえだろ……。

さて、この辺でもう一つ驚いた事を説明しよう。この大部屋の装

飾についてだ。何故か和風な大部屋には不似合いな西洋風の装飾の数々。

幼稚園のお誕生会かよ……シニールな光景だ。

「いやいや、藤島くんも相当なりア充だね」

「部長、どういう意味っすか？」

「いやあ、だつてねえ……？」

「そつだよ、クソ介の癖に私のナギちゃん奪うだなんて生意気だよっ！」

「いやいや意味分からん……つか、浅間部長と生駒ってこんな仲よかつたか？」

思い出してみれば夏休みの合宿。この2人はずっと博打打ってたし……類は友を呼ぶとはよく言うものだが、変態同士気でも合ったんだろうな。

「って、今はそんな事どうでもいいんだよ。それよりこれが何かを知りたいんだよ俺は。」

「とりあえず、ここは明智家だし……明智に聞くのが妥当なところだろう。」

「おい明智、これは一体どういふことなんだ？」

「どういふことって……藤島、今日はあの日だろ？」

「あの日ってなあ……そのあの日が何だかわからないんだよ」

伊吹も察しなさいよ馬鹿とか言っていたけど、全然わからないん

だよなあ……。

まあいい、それよりあの日が何なのか　お願いですから俺に詳細をくれ。

「あ、あの日ってというのは……つまりっ」

何故だか顔を赤らめて、恥ずかしそうに俯く明智。

まさか明智……本当に彼氏でも出来て、今日はそのお祝いをやるって言うのか？

「ただ彼氏が出来たからって、ここまで大がかりなパーティーやるか普通？」

「き、木下、雪乃。垂れ幕を頼むぞっ」

「りょーかいなのです！」

「そうね、そろそろ始めちゃいましょう」

確かに暮葉と西園寺がいる方を見ると、天井には垂れ幕がセットしてある。今から垂れ幕を下ろすようなのだが……何が書かれていることやら。

きつと、垂れ幕に書かれている文字こそ　今回の問題の答えなのだろう。

「うわっ、なんか緊張してきた……やっぱ彼氏が、明智の彼氏なのか？」

それとも浅間部長、医師から余命3年宣告受けました記念パーティーなのか？

「それじゃあ暮葉、下ろすわよ？」

「はいっ！」

そして遂に 謎の垂れ幕は下ろされた。  
妙にカラフルかつ寄せ書きだらけの垂れ幕に、一つ大きなメッセージが描かれている。

『圭介、HAPPY BIRTHDAY!!』

それを見た瞬間、思わず我が目を疑ってしまった。『圭介、FUCK YOU』ならまだ現実性があるかもしれないが、ハッピーバースデーって……俺、祝われているのか？

そういえば今日は8月28日。俺の生誕17周年記念日だった気がするが、まさか明智が言っていたあの日ってヤツも、今日暮葉と葵がいなかった理由も全部……、

と、その時。垂れ幕の前に2人の人影が現れた。

身長の高い筋肉質な男と、胸が大変豊かなアンダーテールの女の子。ちよ、待て……どうして小坂と重原と一緒に登場して、しかもアイツらギター持つてるんだよ？

さらに、ベースを持った明智。キーボードの前に佇む青山さん、いつの間にかセットされているドラムセットの前に座る、スティックを持ったあかり。

そして マイクを持つ暮葉の姿もあった。

なんだこれ……女子4人+男子1人。男女混合け おん部か？

「ワン、ツー、スリー、フォー！」

スティックを叩き合わせ、数を数えるあかり……まさかのあかりちゃん？

と、くだらない事を考えていたその直後 突然演奏が始まった



のである。

「Happy birthday to you, Happy birthday to you」

そこで演奏されたのは、ハッピーバースデートゥーユー。

しかもロックアレンジ版であり、これまた随分お金を賭けている感じだ。

も、もしかして……明智がバイトをしていた理由って……？

「Happy birthday, dear けーすけ様っ」

歌詞の中で俺の名前を言う所だけ、皆が俺の名前を呼んだのだが、やっぱりマイクを片手に持っている暮葉の音が一番室内に響く。けーすけ様だってよ、恥ずかしいな……おいつ。

でも嫌な気はしないな。

なんていうか、暮葉に祝われていると思うと……素直に嬉しい。

「Happy birthday to you」

ようやくよかったよ……お金持ちの明智がファミレスでバイトをしていた理由。暮葉と葵がテスト前日であるにも関わらず、勉強もしないで半日以上も家を空けていた理由。みんなテスト前で忙しいハズなのに、こんなところに集まっている理由。そして あの日の意味が……っ。

こういうこと……だったのかよっ。

なんだよ、それ……なんで俺なんかの為に、こんな大掛かりな事を……？

「けーすけ様っ！ お誕生日おめでとっございますっ！」

「そ、その……先輩、おめでとうです」

「おめでとうな、藤島っ」

暮葉も葵も明智も、他のみんなも俺を言わっている。

そう、俺なんかを……。

それはとっても嬉しいけど………だけだよ。

「お前ら、なんで……」

俺がそう問うと、まずは明智が微笑みながら葵のほうを向いて、

「ああ、藤島の妹が藤島の誕生日を覚えてくれたんだっ」

「そしたらね、葵たちでお兄ちゃんを祝おうって話になったんだよ」

「それに、けーすけ様は古宇坂を救ったヒーローなのです」

「あ、あと私らさ。あ、あんたに何度もその………世話になったでしょ?」

「はい、だから………みんなでバイトして、先輩の為に準備を進めてきました………っ」

「それに、あたいら友達だろ?」

【友達の誕生日、祝うのは普通だと思っ】

明智に続くように、みんなが俺に説明をしてくる。

「いかん、ガチで目から汗が出てきそうだ……っ。」

「クソ介の誕生日祝うのも複雑な気分だけど、私らが世話になったのも事実だしね」

「ああ、つたく……。テメエは気に入らねえけどよ、少しはスゲエしな」

「黒やんツンデレか？ まあ、そう言うわけで準備に協力したんや」

「文句言つなよ？ 藤島に文句言う権利はないんだからな」

「そうそう、だから貴方は黙って祝われてればいいと思うわ」

「祝われるほどみんなに慕われるようになったのは、藤島君自身のせいだしね」

生駒、三馬鹿、西園寺、ついでに浅間部長……。

「ちなみに僕、今日はお前の為に 新作エロゲー3本入手しといたぜ？」

「俺も、割とレアな同人誌3冊くらい入手したかな？」

「そういうわけで、これからもよくしくね 圭くん！」

大吾、重原、小坂……っ。

「なんだよお前ら……。どうしてここまで出来るんだよ。たかが俺だぞ、そりゃあ裏じゃ魔法使いと戦っていたりするけど、それを除けば何処にでもいるフツートの男。いや、それどころか多くの人を傷つ

けたクソ野郎なんだぞ。なのに……そんなクソ野郎を祝ってくれるだなんて。

お前ら、いい奴らすぎるだろ。

ホントに……心が広すぎるだろっ。

「お前ら……ありがとな……っ」

やべ、ガチで目から汗が出そうになってきた……とりあえず万が一に備えて、前髪で目を隠しておくでしょうか。俺が泣くなんて柄じゃねえし、っーか男は泣くモンじゃねえだろ。

だけど、いつ以来だろうな……こんなに嬉しく感じたのは。

ここまで感動したのも、ホント……超がつくほど久しぶりな気がするよ。

その後……俺は目から汗をなんとか堪え、誕生日会たるものを楽しんだのであった。

それから数時間後、もうすっかり空は暗くなっている。はあ、結局……テスト勉強なんてほんの数時間しかやっていないな。普通の学生なら十分かもしれないが、色々と事件に巻き込まれていたせいで殆ど勉強が出来ず、というか授業中も寝ていた俺からしてみれば足りなすぎるぜ。

「あ、藤島……っ」

立派な日本屋敷から出てきた、俺に声をかけてきた美しい黒髪の風紀委員。彼女は一人庭で夜空を眺めていた俺を気にしたのだろうか、俺を見かけると次第に接近してきた。

「よお、明智か」

「藤島、こんなところでどうしたんだ。中に戻らないのか？」

「ちょっと考え事をしていたんだ。もう少しだけ一人にしてくれるとありがたいな」

「そうか……」

「そうだ、そういえば今回のお誕生日会というヤツ。葵の発言が発端だが、会場の提供や資金稼ぎを行っていたのは主に明智なんだよな。」

「明智にはもう一度、改めてお礼を言ったほうがいいかもしれないな。」

「なあ、お前……今日の為にずっとバイトしていたんだろ？」

「えっ？ あ、ああ……そういうこと、かな？」

「ありがとう」

「……えっ！？ そ、そんな！ 急に改まって……例なら提案者の妹に言うて欲しいぞ」

「それもそうかもしれないけど、でも何だかんだで俺、お前に一番世話になってるからな」

色々楽しい日常を送れているのも。

永淵達をぶん殴ってもあまりお咎めがなかったのも、今回の誕生

日会も……みんな明智の努力があったからこそだ。それに、明智が居なかつたら勝てなかつた戦いもあつたわけだし。

明智には本当　世話になりっぱなしである。

「そうだな……いつかは恩返し、したいかな」

「ふ、藤島……っ」

「ん、どうした？」

俯いているせいなのだろうか、前髪で瞳が隠れている頬もほんのりと、微かに赤くなっているような気もするし、何より妙にもじもじしている。

明智にしては珍しいけど……ひょっとして、照れているのだろうか？

「お、恩返しなんて、別にいいんだぞ……？」

「そうか？　でも、俺らは友達だろ？　つか、そうじゃなくても借りを作りっぱなしってのもアレだからなあ。俺は出来れば借りを返したいよ」

どうやって恩返しをすればいいかなんてわからない。だけど、それでもいつかは全ての借りを返してやりたい。何年掛かってでもいつかは貸し借りナシの状態になりたいな。

と、そんな事を頭の中で考えていたその時。明智が静かに歩き始め、次第に俺との距離が縮まっていく。距離は僅か50センチ……ウソ、1メートルにも満たない場所に明智が……？

しかも、近距離から見る明智は頬を染め、瞳を潤ませている気がする。

「……ただの」

「ん？」

「ただの、友達じゃ……嫌だっ」

「……えっ？」

声は小さかったが、耳にハッキリと入ってきて、脳はその言葉の意味を理解する。

それって、どういう意味……なんだろう。好きだから友達でいるのが辛いのか、嫌いだから友達でいるのが辛いのか。どっちなんだろうか……前者は前者で少々困る事があるし、後者はあまりにも辛い現実過ぎて、多分俺の涙腺が崩壊するだろう。

だが、嫌いなヤツの為に 誕生日会なんて開くものなのだろうか？

ひょっとして、コイツは 。

「だ、だから……その、な？」

まさか 今の一瞬の勘違いじゃないのか？

だけど、もしそうだとしても……俺は 。

「私は、藤島と」

「ぐくり、と唾を飲む。

愛の告白か、絶交宣言か。

気になるところだが、この雰囲気から察するに多分……で、でも  
どうしようっ？

仮にそうだとしても、俺はアイツの事が……っ。

「ああああ明智先輩っ！」

「……ん、うわあっ!? あああ、ああ……やま?」

次の言葉が来ない……と、思いきや、青山さんが突然乱入してきやがった。青山さんの不意打ちに明智は珍しく、顔を耳まで真っ赤に染めて動揺している。

ていうか、俺もかなりドキツときた……心臓に悪いよ、青山さん。

「さ、させませんよ……その、せ、先輩は わたしのものです!」

「 ツ!?」

な、なに……言ってるんだ、あの人?

青山さん、まだ諦めてなかったのか……なんて諦めの悪い子なんだ。

あかりは親友ポジでOKって言うてくれたのに。

「ダメだよ千早! 千早がどれだけお兄ちゃんの事が好きだとしても お兄ちゃんは葵の所有物なんだよっ!」

「もはや物かよ俺っ!?!」

ひどい現実や……妹に所有物扱いされてしまうとは。

葵はブラコン×ヤンデレ!! 残虐的な妹ちゃんだったよ。

うっ、兄として何か悲しいよ。悲惨な現実を実感しちまった気がするぜ……。



「けーすけ様っ、なんだかもう……滅茶苦茶ですねっ」

と、突然俺の隣に並んできた、俺の嫁……げふんげふん！

我が藤島家に居候中の暮葉が、並ぶと同時に語り掛けてきた。

「そ、そうだな……」

「もきゅ、けーすけ様っ」

「へいへい」

急に顔を肩にすりすりと寄せてきて暮葉の頭を、優しく撫でてあげる。暮葉の甘えモードはいつものことなんだけど、それが何だか嬉しくて……。

ああ、告白すれば成功しそうだけど……あ、あと一歩が難しい。

告白つてある意味 サヴィエトの魔法使いと戦うよりも難易度高いよね。  
はあ……。

そんな事を考えながら、俺はその後もしばらく 甘える暮葉の頭を撫で続けていた。

「……っ、ばか圭介……圭介のばか……っ」

第209話 ハワイ旅行じゃないよ、会場だよ！（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「リア充は死ね！」

赤佐「リア充は死ね！」

大林「リア充は死ね！」

圭介「なんなんだよてめえら！？ つーか大林、てめえはリア充だろ！」

雪乃「ところで、ハッピーバースデーの歌って大丈夫なの？」

圭介「え、何が？」

雪乃「だって、歌詞載せたら小説削除するって、新ルールを最近なるう運営が制定したたって話よ？」

圭介「一応日本国内じゃ2007年で著作権切れらしいし、アメリカから文句言われない限り大丈夫じゃないか？ 多分……」

もしNGだったら削除しますんで、ゴメンなさい……orz

## 第210話、雑用係の新入りメンバー

全く、本当アイツらは人使いが荒いよな……いくら俺が悪人だからってよ、何も全員分の弁当を買わせる必要って。これじゃあ、まるで俺がパシリみたいじゃないかよ。

9月8日、3連休初日の土曜日。

今日もこの俺　浜島雅人はヤツらの部下として働かされ、というか仕事以外にも肩揉めだの飯買って来いだの……もう、殆ど奴隷というかパシリのような扱いだ。

はあ……一時は、嫌々だったとは言えK・M・Pのアタマをやっていた俺が、なんで俺は意味不明な暗部組織の雑用係をやっているんだろう。俺はあの日、誠和大学で藤島って野郎にぶん殴られて気絶し、そのまま5時間くらいは寝ていたらしい。

その後目が覚めた時、絶対警察に捕まったと思ったが……、

……、  
フレンド。

それが俺を拘束し、俺を奴隷のように扱う組織の名前である。構成員は雑用係の俺を含めて僅か5人程度だが、俺以外の4人が女の子って……男の俺には居づらい場所だ。

それでも、俺はそこで働かなくてはならない。一応給料は貰えるし、衣食住と誠和大学での犯罪行為は黙っててくれるらしいから、文句は言えねえけど。

でもよ、せめて……もう少し俺に自由をくれよ……。

それかせめて、俺に車を貸してくれよ……佐井学園って名前だったっけか。そんな名前の学校を潰すのがフレンドの目的。その為に自称スパイのそういう事に詳しい白藤や、実家の権力で裏社会とも取引可能な明智がいるんだ。車くらい　簡単に手に入るだろ畜生。俺、こうみえても車の運転には自信あるんだぜ。

単車はチームにいた頃、よく乗り回していたからなあ……。

ところで、話題を変えようと思うんだが、今日俺が5人分の弁当を持ち、フレンドの隠れ家である白藤家向かっている事には、ちゃんとした理由があるのだ。

その理由はフレンドのリーダーを務める、西園寺雪乃からの集合命令。

命令を受け、「ついでにお弁当が欲しいわ、お金渡すから全員分よろしくね」と、頼まれてしまったので、俺はコンビニで弁当を買って白藤家へ向かっているのだ。

だけどなあ……。

どうして急に集まる事になったんだ？

それは、俺達フレンドは立派な組織である。なので定期的に集まり、近況を報告したり今後の活動方針を伝える、定例会というものがある。だが、今回は定例会なんてものではない。久々に寝てようと思っていた今日、臨時の集会を行うというメールが届いたのだ。何か、まずい事でも起きちまったんだろうか？

「あ、そのボサボサ茶髪は浜島じゃん」

「……あ？」

とある十字路で、偶然出会ったかなりの美少女。肩まで届く紫色の髪に、明るく活気のあるその雰囲気には、おそらく多くの男子が惹かれてしまうだろう。

てか、俺もその……なんだ？

いや、何でもねえ……それよりこの子は。

「よお、木山じゃないか」

「おはよう浜島、あんた相変わらずダルそうだね」

「俺が真面目になるわけないだろ？ それより、お前も西園寺に呼ばれたのか？」

「そおだよ、雪乃ったら今日は珍しく真剣だったんだから」

「アイツが真剣ねえ……」

俺は西園寺雪乃という人物の素顔を知っている。成績優秀かつ運動神経抜群、そのうえ友達にも恵まれている。俺とは対象的なヤツである。

だが、決して真面目というわけではない。アイツは単に面白い事が好きだけで、意外とおちゃらけたヤツなのである。そんなヤツだからこそ、俺をこき使うだろうけどなあ。

ちなみに、今俺と話しているコイツは木山朱実。

西園寺の親友らしく、同じく、フレンドのメンバーだ。

「浜島、その弁当つてもしかして……」

「ああ、西園寺に頼まれたんだよ。5人分だから重いなのって……」

ああ、肩凝ってきた……弁当つつつても5人分。

やっぱり重い、単車でいいから動くものに乗りたい……。

「ねえ、よかつたら一つ持つ？」

「えっ？ 別にいいって、雑用係がテメエに頼るわけにもいかねえ

だろ……?」

「そうやって無理してると、いつか体壊すよ? ほら、一袋だけだから!」

木山は俺の左手から、弁当二個が入った袋を奪い取った。

「うわっ! お、おい……すまねえな、なんか」

「いいの、気にしない気にしない。あんただってフレンドの一員だからね」

木山はいいヤツだ……もちろん明智もキツいがいいヤツだし、白藤だつて無口な上に携帯電話の文字打って話す変なヤツだが、それでも色々と気を使ってくれるヤツではある。

問題は西園寺……畜生、俺を罪人だからってパシリやがって。ああ、西園寺も木山みたいなヤツだったら俺も少しは楽出来たかもしれないのに。

文句を脳内に浮かべながら、俺と木山は隠れ家こと白藤家へと向かったのだ……。

白藤家は不思議な家である。

コンクリート造りの四角く、シンプルなデザインの家で、内装もモダンで当たり障りがないシンプルなものだ。ところが、この地下には巨大な施設がある。

武器庫と訓練所。

汚れ仕事を働く俺達には、武器も訓練も欠かせないものである。武器庫にはこれまで仕入れた武器が隠されており……と言っても、今の所一番強力なのがRPG-7なのだが。

そして訓練所には、様々な筋トレ用の器具と、射撃場までその隣に存在している。

英国ご自慢のSASもビックリな 半ば軍事基地化しているのが白藤家なのだ。

「ゆっきの〜！ あ、風紗に早苗もいたんだね」

「ちわっす。って……全員集合みたいだな」

白藤家のリビングでは、西園寺に明智に家主の白藤など、フレンドのメンバーが早くもぐーだら朝のニュースを視聴していた。畜生、俺は苦労して弁当買ってきたってのによ。

【やあ、ようこそバーボンハウスへ、このタカナシ牛乳はサービスだから、まず飲んで落ち着いて欲しい】

「おはよう2人とも」

「あら、朱実おはよう。ついでに浜島もね？」

「俺はついにかよ！ テメエ、こっちは言われた通り弁当買ったんだぞ！？」

「あらホントだ、御苦労だったわ。とりあえず2人とも座っていいわよ」

「殆どスルーに近いじゃねえかよ！ クソ、やっぱり俺はこんな扱いかよっ！」

予想はしていたさ。だけど実際にされるとムカつくというか……

ああ、やっぱり西園寺雪乃ってヤツは名前通り、俺に対しては雪のように冷たい女だぜ。

まあ、「貴方は座っちゃダメよ?」とか言われるよりはマシだ。とりあえず、お言葉に甘えて座るとしよう。

どうせ、この女と争っても勝てる見込みがない。

なんだって……明智も白藤も西園寺も　ちよつと普通じゃないからな。

「つで、西園寺さんよ。俺達を呼んだ理由ってなんだよ?」

「そーだよ雪乃、もしかして何かあったの?」

「まあまあ、今から私と凧紗、それから早苗の三人で説明するわ」

全くだ、俺が納得できる説明で頼むぞ。

じゃないと俺、本当に毎日パシられてっからキレそうだ……。

「　そろそろ、学園への総攻撃を仕掛けたいのよ」

「ゆ、雪乃……いよいよ実行するの?」

「おい、そいつはマジな話なのか?　つか、やっぱり俺も戦うの…

…?」

「そうよ、あと浜島。貴方はフレンド唯一の男性メンバーなんだから　立派に戦ってもらおうよ?」

「ちよ、待て西園寺!　俺はテメエらみたいに超能力だの魔術だの。そんな便利能力持ってねえんだぞ!?　佐井学園って超能力者がいっぱいいるんだろ?　俺みてーなヤツが前線に立った所で、すぐに



殺されちまうだろ！」

そう、西園寺も明智も白藤も、あと一応木山の特殊な能力を持っているのだ。西園寺と明智と木山は超能力を、白藤は魔術というオカルトな物を扱えるのだ。それを知ったのは、俺がフレンドの雑用係になってからののだが、最初は信じられなかったけど……まあ、実演されちまったしよ。

信じざるを得なかったんだ。

そして、佐井学園は西園寺や明智、木山などの出身者曰く、秘密裏に超能力の開発を行っているらしくて、320人の超能力者が学園内に在籍しているらしい。

そのうち、暗部組織にいるのか白藤曰く30人程度。しかし30人でも超能力者。特にそのうち2人は西園寺に並ぶ。佐井学園の5本指に入る化け物らしいのだ。

対して、俺は単なる一般人。少しは喧嘩の強さに自信はあるけどよ……でもよ、超能力者と比べられたら差はハッキリしている。俺は訓練で。明智にさえ勝てなかったんだぞ？

そんな俺が、化け物たちと戦えって言われても……………。  
しかし、

「それなら大丈夫だぞ。前線に立つのは私と雪乃だ、白藤は自衛戦闘を行いつつの諜報活動。浜島は武装して木山のサポートに回ってくれ」

「ほ、ホントか明智？」

「うん、浜島は体が以上に頑丈だったりもしない、本当に普通の人だからな……死なれると困るし、無理をさせるわけにもいかないぞ」

「な、なんだ……よかったあ。てつきり前線に送り込まれるかと思

「つたぜ……っ」

「あら、私の代わりにAランク能力者と戦ってみるかしら？」

「か、勘弁してくれえっ！」

ホントに西園寺ってのは俺に対してはサディスト女王様だ。くそっ、ちなみにAランク能力者ってのは超能力者でも頂点と言われる存在。5人しかいないから5本指というらしいが……聞いた話だと超能力者ってのは、頂点のAランクから最下位のEランクまであるらしい。

Aランクは単独で軍隊と交戦出来るレベル、まあ西園寺クラスの能力者の事だ。

Bランクはエリート生、多分軍事方面でも活躍出来る実力の持ち主。

Cランクはやや強力、明智がこのレベルらしい。

Dランクは平均、特別すぐくもないらしい……木山がこのレベルらしい。

そしてEランクは落ちこぼれ。320人のうち60人がこれらしい。

まあ、全部聞いた話だけどさ……EやDならともかく、C以上とは戦いたくないな。

「雪乃、あんまり浜島をいじめちゃダメだよ？」

「そうだぞ、コイツは中身がアレだからな」

【いわゆる、ヘタレ？】

「誰かヘタレだ！ テメエら少しは人を擁護しろよ！」

「まっ、そんなことはともかく……今日の夜に襲撃を仕掛けるわ」  
うわ、俺のツッコミはスルーかよ。  
西園寺のヤツ、早速作戦会議本題に入りやがったぜ……ていうかよ。

「あ？　ンだよ、今からじゃねえのか？　明るいうちの方がいいだろ？」

「あら、佐井学園は私立高校よ？　土曜日は当然授業があるわ」

「うん、一般生徒を巻き込むわけにはいかないからな。私達の標的ターゲットはあくまで暗部に落ちた奴らだ」

こうやってしばらく付き合ってたけど、コイツら普通じゃないよな。明智なんて何処かの高校で風紀委員を務めているらしいが、今じゃ逆に風紀を乱すような汚れ仕事やってるぜ。

つか、学生が学校相手に戦争仕掛けるってのもよ、変な話だぜ……。

まっ、退学になって遊びまくってた俺よかマシだろうけどよ……。

「けどよ、仮にソイツらがなくても、暗部の手ごわいヤツらはいらんのだろ？」

「ええ、もちろんよ。だから私たちは比較的警備が手薄とされる、学園北部を突くわ」

手薄ねえ……コイツらがもう化け物じみた能力使えるし、俺の考える手薄とコイツらの考える手薄ってのは、まるで次元が違うもの

なんだろうなあ……。

「はあ、こりゃもう……警察に逮捕されたほうがマシだったかもなあ。」

「簡単に言うけどよ……そう易々と突破させてくれる連中なのか？」

「そつだよ雪乃、相手は佐井学園じゃん？」

「……少なくとも、北部に五本指は出てこないハズよ」

【五本指が所属する組織は『トレント』と『ワクチン』だけど、その二つは北部の守備に当たっていないハズ】

「つまり、早急に突破すれば衝突を避けられるわけだぞ」

超簡単に言ってるけど……ホントに大丈夫なのか？

不安要素しかないんだけど……ま、まあ……コイツらだって普通じゃないし、今は特にチートクラスの实力を持つ西園寺を頼るしかないか。

「そついうわけだから浜島、車を調達してきてほしいわ」

「は、はあ？ 俺が？」

「聞いた話によると、貴方は窃盗が得意らしいのよね？」

「ま、まあ……チームで使ってた四輪は盗難車だったしよ……」

「じゃ、窃盗よろしくね」

「マジかよ!？」

西園寺……テメエ絶対悪人だろ。

だけどなあ、コイツらには逆らえないしよ。

俺はため息をつきながら 仕方なく車を探しに白藤家を出るの  
であつた。

## 第211話 覚悟

9月8日、オレ 早川悠は久々にとある場所を訪れていた。

とある場所に存在する、一軒のマンションの八階の一室。この部屋は元々、あのクソガキが暮らしている場所で、何事もなければクソガキ2号とオレも一緒に過ごすハズだった場所だ。

だが、今は違う。

とある事情からオレは別な場所に住んでおり、ガキ共との接触は必要最低限とされ、精々魔力を供給してもらう為以外には殆ど会えない状況だ。

まア、会うたびに、

「ねえ、貴方はいつになったらここに帰ってくるの？」

「ミネットちゃんの言う通りなの。悠ちゃん、そろそろ一緒に暮らそうよ」

「何度も言ってるんだろオ。オレには仕事があるんだ」

「仕事？ 仕事って何の仕事？ すっごく気になるんだよ」

「悠ちゃん……もしかして、また喧嘩してるの？」

「……チツ、超平和的な仕事だア」

それは嘘だけだなア、まアこのクソガキ達の事だ。そんな100%のウソすらも見抜けねエだろオから問題ねエぜ。それより、ザスローンの上も面倒な規定を作りやがったからな。だからクソガキ共と面会できるのは、たったの1時間のみなんだよ。

なんでも、コイツらの保安上の理由だとかだが……。  
ま、それについてはオレも賛成だ。

オレがここにいる以上 佐井学園の醜いクソ暗部がここに襲撃  
してくるかもしれないエ。

「……もう行っちゃうの？」

静かに歩き始めると、ミネットがオレを呼びとめてきやがった。

「ああ、そろそろ出勤時間だ」

「……いつ、なの？ いつになったらミネット達 一緒に  
過ごせるの？」

「悠ちゃん……ボクも心配なの。また戻ってきてくれる？」

「……ふん、一応約束しておいてやるよ」

最も、オレが今度の戦いで生きて帰ればの話だがな。今回の戦  
いは……これまで以上に難易度が高いハードな戦いだからなア。能  
力に頼ったってアツサリ死ぬかもしれないエ。それくれエ難易度の高  
い仕事をこれから片付けに行くんだ。

だから、生きて帰れる保証つてのはゼロだが……。

せめて もう一度くらいはミネット達と再会してエな。

「絶対だよ！ 戻ってこなかったらお仕置きしちゃうかも！」

「ボクも悠ちゃんの魔力エネルギー変換、改造しちゃうかもなの」

そオだな、その脅しは怖エモンだ……じゃあ、精々変換機を改造

されねエよう、少しだけ血の雨を降らせてから戻ってきてやるよ。  
ま、血塗れになるのは敵かオレか　まだ分からねエけどなア。

それから数十分後、オレはタクシーを使って目的地の近くまで移動し、そこから目的の地まで徒歩で約3分ほど。コンクリートに囲まれた息苦しい地下空間へたどり着いた。

相変わらず、呼吸すのが嫌になる場所だ……。

居住空間はある程度生活感があるし、売店や病院だって存在している。だが、外が見えねエから時計を見ねエと時間が分からねエし、朝か夜かの感覚すら失ってくる気がする。全く、地下での生活するのは窮屈なモンだ。最近になって潜水艦の乗組員の気持ちがわかった気がする。

だが、オレはこの空間で　かれこれ20日ほど生活しているのだ。

「あら、アンタも来たのねえ？」

突如オレの前に立ち塞がった、どこかの民族衣装を身に纏った女。

「アナスタシア・アベルツェフ……全員集合って話だろオ？」

「まあ、そうだった気がするわねえ」

「ふん、さっさと行くぞ。ラウルの馬鹿が会議室で待ってやがる」

「それが先にここにいた人に吐くセリフかしら？　まあいいわ、さっさと仕事済ませちゃいましょう」

さっさと終わらせられる仕事なら苦勞しねエっつーの。

アナスタシアは知らねエのか、今回の一大作戦についてを？



それとも、知ってる上で相手をナメてやがンのかア？

まあいい、アナスタシアが死のうが 知ったこつちやねエからな……それより、さっさとラウルと近藤から作戦の詳細を聞き、オレがどう行動すべきか情報を集めねエとな。

説明を聞いた上で さらに確実な方法を見つけて実行する。

それがオレのやり方だ……。そんな事を考えながら、オレはコンクリートの空間に存在する不自然な扉を開ける。網膜認証システムって面倒なモンを採用しているらしい。その他指紋認証や血管認証のシステムなんてのも存在し、会議室に入るだけでも一苦労である。面倒くせエシステム開発しやがって……クソツタレ。

「来たみたいだな、超能力者に召喚魔術の達人がよお」

「2人とも、予定の時刻より10分早いね。社会人としては合格だよ」

会議室には先に、近藤政信とラウル・ゲリエが席に座っていた。相変わらず奇抜なファッションしてやがる……。2人とも。近藤は新撰組風の着流しと日本刀を持つサムライ気取りのクソ野郎だし、ラウルは色黒なラテン系の変人だ。

もつと 現代社会で違和感ねエ恰好は出来ねエのか？

「ラウル、 temeエ……アタシは20歳なんだけどお？」

「ふん……社会人つつても、ここは裏社会たるオが……」

「まあ、表社会でも裏社会でも礼儀は大事なのよ。お前さんだつて無礼な挨拶されつと、イラツと来ちまうだろ？ それと同じ、裏社会でも礼儀は大事なモンなのよなあ」

「お金の為にサヴィエトへ身を売った、良心パパには言われたくねえセリフだわね」

「アナスタシア……お前さんも人の事は言えねえんじゃないのか？」

全くだ、近藤もアナスタシアも同レベルだろオが。もちろん、こんなクソ暗部に堕ちたラウルやオレも同類だろオがな。それより、さっさと仕事の話をしろってんだよ。

テンポ悪インだよ。さっさとしねエと首斬るぞクソ野郎オ。

ラウルもそう思っていたのか、ゴホン、と咳き込み2人を黙らせると、

「悪いけど、談笑タイムは後にしてくれるかな？」

「おっと、いけねえいけねえ。そういやいよいよ戦争すんだっただよなあ？」

「そうね。アタシも久々に暴られるってワケよお」

「チツ、ザスローンってのはホントに狎れ合い集団だなア」

近藤の考えと、それに賛成するラウルとアナスタシアのせい、で、ザスローンってのはどうも繋がり<sup>ツギ</sup>を大事にする組織になっちまったらしい。

「まったく、だからって　オレに酒飲ますんじゃないよ。」

「酒は苦手なんだよ……クソツタレが。」

「それじゃあまあ、例の学園との戦争に関する最終チェックを行いたいんだけど……」

「ああ、ラウルさんよお。俺なら準備完了。いつでも戦場に赴けるのよな」

「アタシも、土さえあれば泥人形ゴレムは何時でも召喚できるわ」

「オレも問題はねエ……」

「そうかい、それじゃあ最終確認を行おう」

そう言うと、ラウルは会議室に設置されているスクリーンに、画像を映し出す。なんでもコイツはただの画像ではなく、衛星写真を地球儀のように観閲出来るソフトらしい。

こういうソフトは、普通に一般向けに配布されているのだが、ザスローンはコイツを重要な軍事基地も見えるように改造。おかげで各国の重要な軍事基地の場所が容易に分かる。どうやって軍事基地まで見えるように改造したかは知らねエが、どうせ汚エ技術を使っただろう。

「佐井学園には“トレント” “ワクチン” “徳川小隊”ブラトーン “念力同好会”の5つの組織が存在しているよ。まあ、詳細は不明だけどね」

「でも、要はアタシらと同じ小規模な非公式部隊でしょ？」

「しつつかし、敵の詳しい戦力がわからねえのに戦うって、上も危険なことを押しつけてくるのな」

とれも聞いたことのある組織だ。佐井学園つてのはアナスタシアの言う通り、多数の少数の人員を集めた非公式部隊が存在し、汚れ仕事を日夜続けていやがる。みんな、最初は学園長のクソ野郎に誘われて闇に堕ちるのだが、超能力者つてのは厨二病が多いらしい。

そういう闇の組織に興味を持ち、一部の者は簡単に闇の世界に身を潜める。そうして仕事をして行くうちに悪に目覚め、汚仕事を綺麗な事だと思ふようになった。

佐井学園の暗部にいるクソ野郎どもは、大抵そういうヤツだ。

チツ、ガキ共が……いい加減に気付いてんだクソが。

「で、俺達は今から北部を狙うよ。北部には」

「フラトーン 徳川小隊だろオ？」

「あら、アンタ知ってんの？」

「オレは元々あそこ佐井学園の学生だ。ンで、フラトーン 徳川小隊ってのは要は武装集団だ。超能力者は一人もいねエが、対能力者戦に特化してっから、まア不用心に近付くのは危険かもなア？」

最も、ソイツは下位能力者に限つての話だ。

暴風の膜で殆どの物を防げるオレには、それほど関係のある話ではねエよ。

「警告ご苦労。そのフラトーン 徳川小隊が学園北部を防衛しているらしいけど、俺らはフラトーン 徳川小隊を排除後、地下の武器庫の破壊へ向かうよ」

「敵戦力を削ぐってわけか、確かに戦において重要なことよな」

武器庫を破壊すれば、面倒臭工戦闘員どもは使い物にならなくなる。あとは、オレらの手で超能力者を叩き潰せはいい。出来る事なら、決着つけてやりてエしな。

あのクソ野郎と……ぎゃ、は。

「いいぜ、最ッ高に面白エ……さっさと学園潰しに行こうかオマエらア？」

オレはもう覚悟を決めた。

たとえどんなに血を流してでも　あの学園を叩き潰す。

あのガキを狙う連中は　誰であろうと皆殺しにする。

それがオレの覚悟ってヤツだア……オレはもう躊躇ったりしねエぞ。

「何度も打ち合わせを行ったからね。それじゃあ、そろそろ実行に移るよ」

「おう、いつでも誰かの為に戦ってやる。それが武士ってもんよな」

「上等だわ。久々に暴れてやるわぁ……滅茶苦茶にねえ」

他のヤツらの覚悟も決まったようだ。目指すは“打倒佐井学園”。コイツを無事に終わらせることが出来れば、あのガキ達を狙う危険な存在が一つ消えるわけだ。

その存在を消す為に、少しだけ立ちあがってやる。

覚悟してやがれ学園長　オマエのマヌケ面から泡吹かせてやるよオ。

## 第211話 覚悟（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ねえ、俺の出番なくね？」

暮葉「拙者の出番もないのです……」

早川「オマエらの出番は学園編ではゼロだ」

圭介&暮葉「えっ？」

凧紗「ウソじゃないぞ？ 実話だぞ？」

圭介「え、でも俺、主人公……」

暮葉「せ、拙者メインヒロイン……」

伊吹「この分だと私が出番までなさそうね」

あかり「右に同じく」

千早「出番、欲しいよ……っ」

## 第212話 緊急事態

「あゝあ、暇だなあ」

じゃなかつた、俺には仕事があるんだつたん。

俺こと浜島雅人は今夜の作戦に向け、まずテキトーな車を盗まなきゃいけない。盗難は得意中の得意なんだが、何処かい車はないのか？

やっぱ、フレンドの人員数を考えると5人乗り。しかもいい車選ばねえと……絶対あの西園寺つて女王は俺を怒鳴るんだろうな。はあ、俺はスポーツカーに乗りたいのに。そう、出来る事なら出力がセーブされている日本車よりも、ハイパワーな外車に乗ってみたいもんだぜ。

けどなあ、それ盗むと5人も乗れねえし……やっぱワゴン車か。ああ、乗りにえ……どっかにバイパーって大出力スポーツカーねえかな？

国内じゃ希少だし、ああ……乗りにえ。

「……あ？」

ポケットの中で携帯電話が振動している。

誰だよ、窃盗という難易度の高い作業中に電話をかけてきやがったのは。と、イライラしながら俺はポケットの中から携帯電話を取り出し、開いて画面を確認する。

なんだ……西園寺かよ。

「もしもし、こちら浜島。何か用かよ？」

『浜島、何でもいいから車は盗めたかしら……ッ？』

なんだ、妙に切羽詰まった感じだが……白藤家アジトで何かあったのか？  
まあいい。俺は俺の仕事をするのみ、コイツらに逆らうことは出  
来ねえ。

「いや、まだだ。どーせならテメエも名車のほづがいいだろうしよ」  
『そんなことはどうでもいいわ。それよりさっさと車を盗んで帰っ  
てきて』

「……どうしたんだよ、急に？」

『緊急事態よ、とにかく早く隠れ家に戻ってきて』

「ま、待て！ とりあえず何があったか言ってくれよ！」

一応アイツら化け物とは言え、女の子であることには変わらない。  
男として、女を心配するのは当然のことだと思う。もしアイツらが  
危険に晒されているとした、その時は鉄パイプでも持って戦い加勢  
してやるよ。使い物になるかは分からねえけどな。

『何者かが 佐井学園への攻撃を始めたわ』

「……あ？ おい、そいつはマジな話なのか？」

『本当よ。だから私たちも、予定よりも数時間早いけど 学園へ  
急行するわ』

まったく、どこの馬鹿が佐井学園を襲撃しやがったんだ。命知ら  
ずだな……まあ、そんなことよりさっさと車を盗んで、白藤家アジトに戻



るとしよう。

緊急事態らしいし、急いだ方が絶対いいに決まっている。  
よし、じゃあもう 何でもいいから車盗んでやるよ！

ラウル・ゲリエ Side

俺達、早川悠による佐井学園襲撃は成功。北部を守備する徳川小隊の前衛部隊の大半は早川悠によって一掃され、現在二手に分かれて敷地内を進行中だ。

俺は近藤政信と共に行動し、現在徳川小隊の兵隊と交戦中である。  
徳川小隊は対能力者戦に特化した武装集団で、装備も対能力者戦を想定したもので固めた能力者排除のエキスパート。それだけに、流石に俺ら魔術師でも手ごわく感じるよ。

おかしいね、相手は単なる特殊部隊程度なハズなのに。

「近藤、先に俺に行かせてよ」

「なんでよ？ ここは俺が正面突破し、お前さんは俺の後を」

「銃が相手なら刀より、俺の能力のほうが数段マシでしょ？」

いいながら、俺は自ら銃弾の豪雨の中へと飛び込む。

服のベルトに挿んでおいた太鼓を叩く為のバチを抜き取り、

「Father Son Holy spirit Amen  
御父と御子と精霊の御名によりてアーメン」

言いながら、バチを頭上へ持つていき　カン！　という甲高い音を発生させる。バチ同士を頭の上で接触させるという動作が意味不明だったようで、徳川フラットン小隊の兵士たちはただぼかんとしているだけであった。彼らはどうやら、魔術に関する知識は皆無らしい。それだけで十分だね。

ハッキリ言つて彼らは　藤島圭介よりも相手にしやすいよ。バチが接触した、彼らが啞然としていた　その直後。

「が、あああああああああああああああああああッ  
！」

男女数人の悲壮な叫び声が、学園の庭中に広がった。

白く輝く鋭い鉄矢が射出され、それが徳川フラットン小隊を直撃。鉄矢が何かに触れた瞬間に胸にも響く太鼓のような轟音が炸裂し、赤い液体が飛び散る瞬間を目に映った。

「おお、お前さん派手にやらかしたなあ」

「ね？　彼らは魔術に疎いんだ。だから　見かけの都合上、俺の魔術のほうに相手をビビらせることが出来るんだよ」

俺の魔術は出身地では結構信じられている、ブードゥー教を参考にした我流魔術。

ブードゥー教における精霊ロブの中でも、鉄の精霊ロブであるオグンオグンの力を儀式用のバチを用いて拝借させていただき、応用して自由自在に操るといもの。もちろん鉄以外にも火の力を使うことが出来るんだけど……俺は何だか鉄が好きなんだよね。

見た目も派手だし、火の魔術と合わせると鉄の魔術は装甲車でも破壊出来るからね。

「そおかい、そんじゃ 俺も刀を振りたいのよな！」

「ええ、相手は混乱しているし、今がチャンスだよ」

確かに俺の魔術は強力だけど、反面複数の目標を狙うことは出来ない。そう、だから近藤の力がどうしても必要なんだよ。彼、剣術の達人で魔術を使わなくても大人数相手に出来るし。

「ぐ、あアああッ！」

「おらおら、もっと速く動かねえと 刀の錆にするのも勿体ねえのよな！」

対能力者戦には特化していても、彼らは魔術師と戦うのは初めてである。そう、そこに弱点というものが存在する。この戦い 俺ら魔術師のほうがか遥かに有利なのだ。

さて、さっさと終わらせて アナスタシア達のほうを手伝いに行こう。

### アナスタシア・アベルツェフSide

佐井学園の敷地は広い。なんでも、巨大人工浮島全体が学園の敷地メガフロートで、多数の倉庫が存在しているわけだ。ここは車両を隠してある倉庫群の一角。

アタシは地面を右手で触っている。

あんまり……良質の土じゃねえな。

「……居た、侵入者発見！」

チツ、仕方ないみたいね……まあいい、アタシの身さえ守る事が出来ればそれでいい。

とりあえず、あんまりよろしい土じゃないけど 泥人形を作る

わよ。

「出てきな、クソツタレな泥人形！」

既に連中が来る前に、泥人形召喚用の術式は組んである。召喚と言っても泥人形という生き物を召喚するわけではなく、泥人形の魂を召喚するのよ。だって泥人形って生き物は所詮は神話の中の生物で、現実じゃもう死んでるモンなのよ。

だからあの世から泥人形の魂を召喚し、その魂が宿る身体を作つてあげるのがアタシの召喚魔術の秘密つてヤツよ。

そしてアタシは今 身体を作成している。

轟々と大地……って言つても、ここは浮島なだけだよ。眼前のアスファルトが大きく盛り上がつて泥人形の身体が形成されていく。

「うわあっ!」

「ば……化け物!？」

そーよ、化け物の召喚獣よ。

残念だったわね、コイツを倒すには爆弾を上手く頭に当てる意外にないわ。それがアタシ本隊を狙撃すれば、召喚魔術は無効化されてゴレムも崩壊するけど……。

ま、佐井学園の連中に魔術知識があるとは思えないし、精々踊ればいいと思うわ。

「さあて、愉快に踊ってちょうだいね……このアナスタシア・アベルツェフ様がテメエらを血祭りにあげてやんよオツ！」

「ッ！」

焦りからか、徳川フラトーン小隊が一齐に泥人形ゴレムへの射撃を開始。ふん、日本の警察って治安維持組織よりは有能みたいね。全弾ちゃんと命中しているし……。

けど、アタシのゴレムは　この程度でくたばるヤワな存在ではない。

無数の銃弾を身に受けても、泥人形ゴレムはピンピンしていやがる。銃撃で欠損した部分はアスファルトを吸収することによって補い、体が再生すると泥人形ゴレムは雄叫びした。

泥人形ゴレムが壊れないという不測の事態に、相手の兵士達は混乱する。

「言ったでしょ？　血祭りになんのは　テメエらなんだよオ！」

滅茶苦茶にしてあげようかな。

アンタらに直接恨みはないけど　目的のために死んでくれるとありがたいわ。

というわけで、死にたくなかったら全力で泥人形ゴレムを止めてね。

早川悠Side

カチッ、とオレは魔力エネルギー変換機のスイッチをoffにす

る。ここは倉庫群の一角にある1番倉庫という場所で、ここにはバスだのトラックだの装甲車のようなものなど、学園が保有する自動車が多数収容されている。言わば、大きな車庫のような場所だ。

倉庫内は既にサブマシンガン等で身を固めた、男達の死体で溢れている。血液で赤く染まった床が妙に生々しい。ちなみに、能力は30秒も使っていねエ。

節約に節約を重ねた結果だ。

ここで能力の無駄遣いは 絶対に出来ねエからな。

「失礼、手合わせを願っていたのだが」

新たな足音が聞こえると同時に、渋い、色っぽい機械のような声が聞こえた。

振り返って見てみると、スーツを着たサングラスの色黒男が立っている。殺し屋にしか見えねエ男であるが、ソイツに見覚えがある。確か名前は徳川<sup>とくがわいへのり</sup>家<sup>フクロン</sup>則<sup>ノリ</sup>。徳川小隊の隊長を務める本職が殺し屋で学園お気に入り<sup>お気に入り</sup>の殺しのプロだ。

確か、部下や学園長からそんな渾名で呼ばれていたはずだ。

徳川はスーツの右ポケットから箱を取り出す。おそらく煙草<sup>タバコ</sup>……だが、煙草にしては不自然な感じがするものだ。アレはおそらく電子煙草<sup>エレクトリックスモーク</sup>ってヤツだろう。

殺し屋が電子煙草<sup>エレクトリックスモーク</sup>とは、似合わねエ……。

「早川悠……お前が反乱分子だったか」

「相変わらずオマエは汚エ仕事してる見てエだな、徳川さんよオ」

「当然、襲撃者から生徒の安全を守るのが我々の仕事だ」

ふう、と徳川は電子煙草<sup>エレクトリックスモーク</sup>から煙を吐く。

煙草を吸いながら、オマケに殺し屋という立場の癖に　よく夢と希望に溢れたセリフ吐けるよなアあのクソ野郎オは。生徒を守る気なんてカケラもねエ癖に、調子のいいヤツだ。

「面白エなオマエ、反吐が出そうなくらい面白エぞ」

「さて……前置きはこころ辺にして、そろそろ一戦やらないか？」

「オマエ、分かってて言ってるのかア？」

「当然、学園に身を置く以上　お前の事はよく分かっているつもりだ」

なら一言だけ言えることがあるよ。要はコイツ、オレの事を知っている上で、オレに挑戦しようだななんて考えているわけだ。ソイツをなんて言うか　便利な二文字がこの世には存在する。

「馬鹿じゃねエの？　超能力を開発していねエ上に、精々銃撃と殺人的な体術仕掛ける以外に腦のねエヤツが、一体オレをどうやって倒すってんだア？」

「……ふつ、これでも徳川家康の子孫なのだがな。それが、土農工商にも入らない穢多<sup>えた</sup>、非人<sup>ひにん</sup>レベルのクソガキに、随分とナメられたものだな……あまり將軍様をナメるなよ？」

「將軍はオマエのご先祖だろオが。オマエはクサレ殺し屋だったの」

徳川家も墮ちたモンだ。こんな野郎オが子孫だったとはな。全く……徳川家康が可哀想に思えてくるじゃねエか。こんなクソ野郎を

子孫として残したくなかつたろうに。

と、その時。

徳川のクソ野郎が拳銃を取り出す。

ハッ、14年式拳銃たア骨董品持つてやがる……だが、徳川が銃撃なんて単調な戦い方をするハズがねエだろ。何より、オレに拳銃を撃つても跳ね返されるのがオチだ。

徳川がそこまで馬鹿なワケがねエ。それとも、本当にオレの能力を忘れたかア？

「そうか、では」

一言切ると、徳川は銃口をこちらに向けてきて、

「殺し屋は殺し屋らしく 早急に標的ターゲットを抹殺する」

バス！ と、銃弾の放たれる嫌な音が響く。オレはスイッチを押し、小さな電子音が鳴ったその直後に演算を実行、暴風の膜を全身に張り巡らせる。これでどんな攻撃も反射出来るが、何故か徳川の銃弾はオレの膜に触れない。旧式拳銃から放たれた弾は オレの横を通り過ぎたのだ。

な、に？ と思う。

何故 直接オレを撃たなかつたのだろうか？

と、考え事をしていて、

「終わりだ」

「ッ！？」

コイツ、オレの意識を銃弾に向けている隙に 懐に入り込みやがった。



だが常識的に考えて、この野郎がオレの暴風の膜を突破出来るとは思えない。拳が膜に触れれば手首を骨折し、徳川は戦闘不能状態になるだろう。

だから大した警戒もせず、オレは笑みを浮かべて立ち続けていたが、

ゴギイツ！ という衝撃的な音が炸裂した。

まずは意識が揺らぎ、何が何だか分からなくなりやがる……その後だった。顔面にビリビリという叫びたくなるような痛みを覚えたのは。

「反射が……効いてねエ……ッ!？」

痛みを感じる頬を右手で撫でながら、いつのまにかそんな事を呟いていた。

徳川はそうしている間にも、余裕の笑みを浮かべて接近してくる。

「三原寅彦は風が循環し、膜の裏に戻る僅かな一点を突き、お前の膜を破ったそうだ」

「まさか、オマエ……ッ!」

「そうだ、その再現を行った」

チツ、とオレは力強く舌打ちをする。

オレとしたことが、三原と徳川が知り合いだったことを忘れていた。そうだ、三原と徳川は互いに仕事の結果を報告し合う友人のようなものであった。

だから、三原が知っている情報をコイツは ある程度理解して

いるってワケだ。

チツ……クソツタレ、ふざけやがって。

「……ナメてンじゃねエぞ、三下がア！」

風の操作を行い、風力を利用したロケットダッシュを実行する。

ドン！ という爆発的な音と同時に凄まじい速度で前方へ突き進み、ぐわん、と五本の指を大きく開いた。

このまま顔面を鷲掴みにして、酸素濃度を操作して窒息死させるという作戦だ。徳川の顔面目がけて右腕を思いつきり伸ばす。

だが、徳川はオレの攻撃を必死に避ける。

「無駄だ非人、平伏せろ」

その直後再び拳が飛んでくる。突き上げられるような拳はオレの腹を捉え、直後。

ドン！ という太鼓を叩くような衝撃が走る。

込み上げてくるように吐き気に襲われ、オレは倒れ込みそうになるが、さらにそこへ徳川の鉄拳が下から突き上げられた。

右アッパー！

ゴオン！ と、脳を揺さぶる一撃が炸裂した。

一瞬、意識がどこかへ飛んだような感覚に襲われる。ぐにやぐにやだ、視界が揺らいで頭もガンガンして、顎と腹が強烈に痛エ……いや、先程殴られた顔面もクソ痛エ。

「室内でお前が出せる速度に限度がある。対して、俺は一時期フランス外人部隊で体を鍛え、格闘技は割と得意な方なのだ。お前の単調な攻め方は俺には全く通用しないぞ」

「……チツ！」

三原の時と全く同じだ。確かに、三原のあの技術を完璧に再現するとは……徳川の格闘センスは実にビックリものだが、だからってそれが完璧であるとは言えねエ。

それにオレの本気がこの程度だと、本気で思っただけじゃねエのかこのクソ野郎オは？

だとしたら心外だ。そういうわけで見せてやるよ　本物の戦い方をなア。

「……ッ！」

オレは拳銃を取り出し、その銃口を自分の体へ向ける。その瞬間、徳川が薄い笑みを浮かべた。

「自害するつもりか？」

「ハッ、そういう選択肢も悪くはねエだろ」

「まっ、反乱分子の罪は死ねば償えるものだ。俺は手を出さん、そのまま死ぬがいい」

「そオかい、そりゃどーも」

軽い調子で答えて、オレは拳銃を自分に向けて放つ。すると、放たれた銃弾は全身に張り巡らされている暴風の膜に接触し、跳ね返って徳川の額を狙って突き進む。徳川は、オレが自害と見せかけて銃弾を反射する作戦を見抜いていたのか、間一髪所で銃弾の軌道から外れた。

ニヤリ、と徳川が嫌な笑みを浮かべる。

まるで　オレをトコトン馬鹿にするかのように　。

「そんな事だろうと思っていた。まあ、残念だったな……銃弾の回避は比較的簡単だ。要は弾が放たれる寸前に己が動けばよい。よつて　今のお前は俺には勝てない。どう卑怯な手を使おうがな」

「……ハッ、そのセリフ　オレを潰してから吐けよクソ野郎オ」

「あ？」

徳川が小さな声を漏らした、瞬間　勝敗は決した。

どくどく、と徳川の胸から血液が溢れ出ているいる。ピユ、という肉を貫く生々しい音が響いたと同時に　徳川の胸に風穴が空いたのだ。

ぶるぶると体が震え、「あ、あ……あ」と小さな声を漏らし続ける。何かを喋りたげな感じであるものの、今の徳川にそれを喋る余裕はねエ。

「は、ふ……っ」

やがて徳川は息を吐き、バタンと倉庫の床に倒れ込む。

それでも徳川は必死にもがき続ける。

最も、痛みで無意識に苦悶しているだけかもしれねエが。

「最期を教えてやるオカ。オマエに風穴が開いた理由と、オマエの敗因を」

オレは床で胸を押さえ、苦悶する徳川を見下しながら言葉を続ける。

「まずはオマエに風穴が開いた理由か。オマエ、オレの能力忘れた

わけじゃねエよなア？ オレは大気そのものを操作できるから、風の操作なんで造作もねエンだよ。暴風の膜張る以外に風の精密操作が出来ねエと思つたら大間違いだ。その気になれば 初速を保つたまま風で銃弾を制御し、大幅に旋回させながらオマエを背後から狙撃する事も可能なんだ」

徳川はオレを見上げ、虚ろな目でオレを捉える。口からも血を流し、食いしばっている歯も既に真っ赤に染まっていた。それでも、オレの話を聞いているようだ。

「で、オマエの敗因は 。。。ただ殺すのが目的なヤツと、守るために殺すヤツの違いだ」

言葉を聞いた徳川は完全に力を失い、ぐったりと伸びてしまう。それは、徳川家則という男が真正正銘 単なる床の汚れと化した瞬間であった。

## 第212話 緊急事態（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「徳川小隊もうリタイアした！？」

大吾「早っ！」

重原「早川がちょっと苦戦した以外、随分アツサリな回だったね」

圭介「……つか、学園編って容赦なく銃弾が飛び交うんだな」

大吾「徳川家則、何の為の登場だったんだろうな」

重原「ま、後は作者が徳川ファンに殺されない事を祈るだけだよ」

## 第213話 学園襲撃

「あはは、随分派手なことになってるね」

ベージュ色の若干派手なドレスを身に纏った、長い茶髪の少女が言う。

佐井学園に襲撃者が現れた話はすぐに校内全体に伝わり、学園側は生徒の退避を決定。

こうして、一部を除く学生の退避が行われ、現在学園に残るのは暗部の者のみ。その暗部にある組織の一つである、“ワクチン”所属の沢那魅咲さわなみさきという少女も、戦場と化した学園に残った僅かな生徒の一人で、さらに彼女はAランク能力者の一人でもある。

そう、彼女こそ 五本指の序列第四位なのだ。

「結局、襲撃者の特定は出来たのかよ？」

そんな質問をしてきたのは、沢那の目の前に座っているアメカジ系ファッションの男。

彼の名前は志熊大志しくまたいし。硬派な名前の割には軟派な男である。

「さあ？ まあ、トレントが連中がもう迎撃に向かっちゃってるころでしょう」

敬語なのに何故か乱暴な、そんな話し方をする赤髪で三つ編みの眼鏡をかけた、旧日本陸軍の軍服姿のシニールな少女 白梅しらうめが、その真面目そうな見た目に反し、超がつくほどダルにそうに自分の予想をワクチンのメンバー全員に伝えた。

「結局、自分達の出番はないんですかね」

白いスーツ姿で丁寧な口調の優男

春日樹かすがいつきは疑問に思う。

この4人が“ワケチン”。

少数の人員で構成された、佐井学園の非公式部隊の一つである。彼らの主な業務はあらゆる、“暴走者”を止める事であり、過去にも暴走能力者と何度も交戦してきたらしい。そんな彼らは佐井学園に謎の組織が襲撃し、徳川フラトーン小隊が壊滅したと言う話を真つ先に聞く。本来なら、そんなクソ野郎はさっさと出陣してブツ潰したい所なのだが、

「まつ、侵入者は一人じゃないみたいだし、徳川潰した連中は“トレント”に任せない？」

沢那のその提案に、残りの全員が頷く。態々自分達が手を下す必要は無い、それより佐井学園にさらに侵入してきたという、新勢力しんせいりきの制圧の方が重要であろう。

沢那は立ち上がり、学園のとある教室の窓から荒々しい外を眺め始めた。

## 浜島雅人 Side

車で1時間以上はかかったが、ようやく佐井学園の北部に到着。北部は警備が手薄だと西園寺は言っていたが、だからと言って敵も無抵抗なわけがない。俺も力及ばずながら、木山の横で頼りがあるのかもわからない拳銃を構え、後方から西園寺と明智をサポートするつもりでいた。



「だけど、実際に佐井学園の入り口まで来てみると……。」

「お、おいおい……こりゃどういうことだよ!？」

俺は思わず大きな声で叫んでしまった。

入口には、大量の黒づくめ達が倒れていたからだ。ちよつと待てよ……銃を持った男が10人以上耐えられているってことは、西園寺の話はデマじゃなかったってわけかよ。

「派手にやられてしまったみたいだわ」

「うん、私も話程度になら聞いたことがあるぞ。徳川フラトーン小隊は対能力者戦に特化した部隊で、並の超能力者なら制圧されてしまうと思うのだが……中々の達人が襲撃したみたいだぞ」

【作戦、変更しないと】

「早苗の言う通りだよ。雪乃、ちよつと状況が変わり過ぎてるよ」

「そうね、朱実……それにしても、一体襲撃をし掛けたのは誰なのかしら?」

全くだ。武装集団を全滅させられる程の馬鹿だぜ、多分普通じゃねえよ、だけど逆に考えてみると都合かもしれないな。なんとつてよ、俺達の敵が既に一つ消えているわけなんだぜ?

「な、なあお前ら……これって好ましい状況じゃねえのか?」

「ん、浜島。どうしてだ?」

俺の発言に、最初に反応してきたのは明智だ。明智はクールだけどよ、この喋り方が俺にとっては恐怖以外の何者でもないぜ。見た目は西園寺とは対照的に素晴らしい体つきだが、放たれている威圧感、西園寺のものとは全く別物。流石は　どこかの高校のエリート学生だぜ。

俺はそんな彼女に少しビビりながらも、なんとか話を前に進めよう唾を飲む。

それが俺の　覚悟であった。

「だ、だってよ。学園を襲うつてことは志は同じなんだろう？　ほら、ソイツらが学園の組織を一つ消したつて事は、俺達の敵が少しだけ減ったつて話じゃねえかよっ」

「……浜島、相変わらずお前は馬鹿だぞ」

「えっ、な……なんでだよ明智。常識的に考えたらそうなの」

「常識がないのはお前のほうだぞ。襲撃者の志が私たちと同じだと思つのか？」

「えっ、いや……だってそうじゃん。学園襲つてんだしよ……」

「学園を襲つつにも様々な理由があるだろう。襲撃者の情報がない以上、私達と同じ考えを持っていると考えるのはあまりにも危険すぎる」

「そうね、こればかりは凧紗が正論ね」

【私も、全くの同感】

そんな所に気づくとは……やっぱりおバカな俺とは頭の出来が違うな。くそっ、戦闘でも役に立たないとしたら、こういう普通の場面でも役に立てねえのかよ……俺って存在は。

俺は　本当にチームを束ねていた男だったのか？

「あはは……浜島、ドンマイ」

「き、木山……？」

突然木山が俺の背後に回り込み、俺の左肩に手のひらを乗つけてきた。

女の子に突然触れられるという不意打ちに、思わずドキッと胸が高鳴る。

「あんたは新入りだし、唯一こういう世界を知らなかったんだからね。仕方ないよ、それが常人の判断だもん。だから　少しずつ慣れていけばいいと思うんだ」

「き、木山……　テメエ、ありがとうな……っ」

木山は俺なんかを気を使ってくれるのか……　ハハ、それだけでも幸せな気分だ。こんな真っ黒に染まった暗黒の世界でも　他人を思い遣る気持ちってのは完全には消えないんだな。

それに、そうだよ……。

俺はつい最近まで　ただの一般人だった男だ。

この世界に不慣れな方が自然じゃねえかよ。なにを悩んでいたんだよ畜生、木山の言う通りこれから慣れて行けばいいだけの話じゃねえか。

「あら、朱実ったらヘタレヤンキーが好みなのかしら？」

「ッ！？ ち、違っつて！ あんた達が虐めるから慰めてただけだよ！」

ぐはっ、木山…… テメエの今の発言が一番傷ついたかも。少しは、その……なんだ。少しは想われてるのかな？なんて思ってたのに……。

ハハ、だよなあ。所詮、俺の勘違いってヤツだよな……。でも、それだけなのに胸が痛エのは何故なんだ？

「ふ、ふん…… 恋愛なんてくだらないぞっ」

### 【同感】

「あら、貴女達だっって好きな人いるでしょ？」

「ッ！？ いいいいいいいっ！ いないぞっ！」

【い、いるわけない。いるわけないっ】

「ふふ、片想い中かつ2人は恋敵同士。面白い構図だわ」

さ、西園寺…… 鬼だ。そして超サディストだ…… この女に弱みを握られたら最期。明智や白藤のようにいじられてしまう可能性がある。

怖えな西園寺…… ある意味佐井学園の暗部より怖いんじゃない、

「ッ！？」

「う、あああッ！」

刹那、

激しい轟音が炸裂し、一瞬だったか衝撃波が目映ったような気がした。

まずい、襲撃だ。

このままじゃ衝撃波に殺される……そう俺はそう思っていたが、何故だかこんな不測の事態が発生していると言つのに、明智も白藤も木山も冷静である。クソ、なんなんだよ。どうしてコイツらは死ぬかもしれないこんな時に　冷静でいられるんだよ。

その答えは、この直後に俺も理解した。

フツ、と人影が俺の前に現れる。その人影は咄嗟に衝撃波に向けて手を突き出し、そこからどういいうわけか　冷気を放つ分厚い何かが作成された。

瞬間、

ドン！　という叩きつけるような音が炸裂。衝撃波のようであるが……それを受けてもフレンドのメンバーは俺を含め、全員が無傷であった。

「雪乃！」

木山が叫ぶ。

そっぴや、俺の前に現れた人影って、長い黒髪の小柄な少女で……そうか、西園寺が俺達の盾になったというわけか。でも、どうやって衝撃波から俺達を守ったんだ？

なにやら、眼前に俺達を守るような　分厚い氷があるような気がするんだが。

「ふふふ、もしかして攻撃を仕掛けた人は　私を存在を忘れていたのかしら？」

そつだ……思い出した。西園寺は学園でも5本の指に入る超能力者。その能力は氷と念力つてヤツらしいが、それを強大な力で操れば 氷で装甲を作り出せるってわけかよ。

「お、おい。テメエらみんな大丈夫か？ 西園寺が能力使ってくれたけどよ……？」

「雪乃が居て助かったぞ。私の発火能力じゃ、全く盾にならないしな」

【でも、今のはどこから？】

「朱実、敵の情報を解析してくれるかしら？」

「おっけー任せといて！」

西園寺に頼まれ、それを快く引き受けた木山は静かに瞳を閉じる。そついえば、木山も超能力者だつて前に聞いたな。確か木山は偏差電換フホリックと言う能力を持っていて、ソイツを使えば今の状況や敵の強さがある程度わかるらしい。木山は優れた超能力者らしいのだ。

瞳を閉じながら、黙っていたのが大体5秒くらい。

そろそろ次の攻撃が飛んできそうだが その時。

「対象物の検索、及び数値化を開始。対象物は生命体4、戦闘力はそれぞれバラバラ。敵戦力は4つの座標、分かりやすく東西南北に点在。最も強力な数値を持つ者は南。次に東、次に西、最も低い数値を持つ者は北部。次に勝率と生存率を計算 勝率は約50%。全員の生存率は40%」

機械のように放たれる声。

「すげえ……何処まで本当かは知らないけど、これが木山の持つ超能力。」

「これって 上手く使えば軍事利用できるんじゃないか？」

「まあ、俺は木山がそんな事に使われるのは 絶対に嫌なんだけどな。」

「ありがとう朱実」

「それにしても、勝率が低いぞ……っ」

【多分浜島がいる分、勝率が低下しているのかも】

「ひでえなオイ！」

「俺ってそこまで下に見られていたのか。いや、仮に木山がそう思っただけでも、木山の能力はあらゆる対象物を数値化出来るらしいし、数字が俺の弱さを証明したのかもしれない。」

「うっ、流石数字……良心のりの字もねえな。」

「まあいいわ、私は南部へ向かうわ。一番厄介そうみただからね」

「それじゃ、私は東へ向かうぞ」

【私は西へ……でも】

「みんなの表情が曇ってゆく。」

「ああ、わかってるよ……北部を攻めるヤツが超弱いことくらいな……だが、その程度で諦めるほど俺もへタレじゃねえんだよ。そりゃ逃げたいけど……女の子だけ置いて逃げられるかよ。」

「し、心配すんなよ。北にいるのは一番弱いんだろ？俺が殴り倒してやるって！」

「不安だけど、今は浜島の腕力を信じるしかないわね……朱実、浜島をサポートしてあげて」

「わかった、浜島　ちよっくら頑張ろう！」

「お、おう！」

勝てるかわからねえけど、これが初めての实战だ。

超能力者かあ……ま、まあ同じ人間であることには変わらない。

勝てねえってわけじゃないだろ　少し本気になってやるよ畜生

！



## 第213話 学園襲撃（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「ついに五本指の4人目が登場したわね」

圭介「一見、普通の女の子だけど……どんな能力を使うんだ？」

暮葉「もきゅ！ 実は作者もまだ考えていないらしいのです！」

圭介「……え？」

暮葉「でも、何個か候補はあるのらしいですよ？」

圭介「……とりあえず、主人公なのに順番がない俺って」

暮葉「それは拙者だって……作者に文句を言いたいのです！」

## 第214話 総合研究博物館

徳川家則は死んだ。コイツは三原のクソ野郎の真似をしゃがったが、所詮は猿。三原のような精密作業が単なる殺し屋に出来ると思ったら、ソイツは大きく間違っている。

アレは三原の頭がよかったからこそ、三原のセンスが長けていたからこそ。実現出来たこのオレの撃退方法の一つに過ぎない。

まっ、格闘センスは抜群だった。

少なくとも、オレを殴れただけ。どの特異点よりも優秀な成績を残しやがったよ。

と、その時。オレのポケットで携帯が震動する。

画面を開くと、そこにはラウル・ゲリエの名前が表示されていた。

「よオ、そつちの仕事も終わったってかア？」

『その様子だと、そちらの仕事も終了したみたいだね』

「ああ、今徳川小隊フラトーンのアタマを潰した所だ。オマエらはどオなんだ？」

『こちらフラトーンも、徳川小隊所属の人員全てを殺害したよ』

「要するに、佐井学園の主要な暗部組織が一つ。消えうせたってワケだな」

まア、当然の結果と言えばそうだな。オレが負けるわけがねエし、ラウル達は徳川小隊フラトーンの連中が知らねエ魔法使フラトーンいて生き物だ。生物つてのは知らない存在に弱いモンだ。徳川小隊がオレ達フラトーンに勝てねエのは戦いが始まった時から。決定事項だったんだよ。

「ンで、この後は予定通りか？」

『ええ、地下の武器庫を襲撃しよう』

「武器が無ければ、ゴミは動けねエからな」

『うん、そういうわけだから一旦集合しよう』

「集合場所は何処だ。それを今から教えろ……」

『俺達のほうから早川の所へ行くよ。魔力を追跡するほうが絶対早  
いだろうしね』

「そオかい、ソソじゃまア……一人で待っているとしますかア」

『うん、もうしばらく待っててね』

そこでプツン、とラウルからの電話は切れる。

さて、次は何処のクソ野郎が相手なんだろオか……久我のクソ馬鹿か、それとも第4位の雑魚女かは知らねエが、どっちにしてもオレと会えば　ミンチ確定だな。

そオ言えば……少し外が騒がしいが、どこのクソ野郎オが来やがったんだ？

まっ、どっちにしても　大した脅威ではねエだろオがな。それにしても暇だ、今のうちに徳川の死体でも調べておくとするか。

ひよっとしたら、何か資料を持っている可能性もある。

資料を持っているとしたら　ソイツは見逃せるモンじゃねエかな。

「面倒臭エ……」

呟いた後、オレは身を屈めて 徳川のスーツを漁り始めた。

### 明智凧紗 Side

あの爆発の後、朱実の偏差電換オフザープホリックを信じて、私達フレンドは4組み……と言っても手を組んでいるのは浜島と朱実のみだが、各々の敵を倒すために目的地へ向かった。

私が向かっている場所は爆心地の東部 総合研究博物館前の広場だ。

総合研究博物館は佐井学園に所属する研究者が、独自の研究結果を発表する為に設立された学園が運営する博物館で、中には超能力開発に関する情報も展示されている。当然、超能力に関する情報は極秘に近いものであり、博物館を利用できる者はIDを持つ一部の者のみだ。

ちなみに、以前は私もIDを持っていた……以前はな。

「なんだ、俺の相手は明智凧紗 Cランク能力者かよ」

何処からか声が聞こえてきた。なにやら上から声をかけられた感じだったので、私は視線を上へ向けてみると 総合研究博物館のバルコニーに一人の男が立っていた。

アメカジ系のファッションを着た、今風のチャライ雰囲気的茶髪男。しかし、その眼光にはは暴様な光があった。多分コイツは暗部組織の人間であろう。

と、すると……。

「お前、<sup>フラットン</sup>徳川小隊ではなさそうだな……どこの組織だ？」

「俺？ ああ、俺はワクチンって組織のメンバーだけど？」

「ワクチン……まさか、五本指が所属するって噂の……」

「よくご存じだねえお姉ちゃん。うちのリーダーがソレなんだけどさあ、いやあくお姉ちゃんほどおっぱい大きくないから つまらなないんだよねえ」

「やっぱり……見た目通りのチャラ男だぞ。藤島以上に変態の最低野郎だぞ。」

「それにしても、私の名前を知っているってことは……ふっ、私も……学園をやめてから何だかんだで学園に追跡されていたわけか。やっぱり この学園はどこかが狂っているぞ。」

「さて、そろそろ 名前を名乗ってもらおうか？」

「俺？ 俺は志熊大志って名前なんだけど。まあヨロシクね巨乳の姉ちゃん」

「生憎、私はお前の下ネタトークに付き合っているほど暇ではない。早急に始末させてもらうぞ」

「おやおや？ こりゃ古風なお堅いお姉ちゃんな事。アンタ絶対処女だよな？ ひゃー俺処女って大好きなんだよねー！ こりゃ俺が勝ったらお姉ちゃんの処女奪っちゃわないとね！」

「誰が、お前なんかに渡すか……ッ！」

その言葉を聞き、私が踏んだ一步が戦闘の開始を告げた。力強く地面を踏みつけ、常人の数倍はあるであろう跳躍力を生かして、私は殆ど瞬間的にバルコニーよりも上を跳躍した。態々超能力を使わなくともチャラ男程度、簡単に気絶させる事が出来る。

志熊から見て数十メートル上空。そこから私は志熊に向けて飛び蹴りを放つ。

「残念」

が、志熊が突然そんな一言を呟く。

人差し指をこちらに向けてくると、続けるように再び喋り始めた。

「単調な攻撃は 命取りなんだぜ？」

「<sup>あつ</sup>熱ッ！」

志熊が言い終えた瞬間、太股付近に焼けるような痛み……というよりも、本当に炎で焼かれて火傷を負ったような感覚に襲われる。不意打ちと、皮膚を焼かれたような苦しみに、空中で全身から力が抜けてしまい、飛び蹴りの体勢からただ重力に任せるのみとなってしまう。

その状態で勢いよく、私はバルコニーへ落下してゆく。

「が、うアアあああああああああああああああああああああ  
あッ！」

10メートルは超える高さから落下し、背中が床に激しく叩きつけられる。火傷の痛みと打撃による痛みのダブルパンチが、私を余

計に苦しませる。

私は痛みに耐え、苦悶に満ちながらも立ち上がるうとする……が、

「オラ、立つんじゃねえよ姉ちゃん！」

「う、があああああああああああああッ！」

再び皮膚が焼け爛れる様な耐えがたい苦痛。どれだけ叫ぼうが、どれだけ床の上でゴロゴロ暴れようが痛みは消えない。むしろ、余計激痛に襲われているような感覚に襲われる。だが、私は咄嗟に自分の太股を見た時、太股には不思議なことに、火傷をしたと思われる傷がないのだ。

精々、赤く変色した個所があるのみだが、火傷をしているという感じではない。

お風呂に入った時と全く同じ程度にしか　赤く変色していなかったのだ。

「俺は正常位派なんだよ。支配するのが好きだしさ……だから騎乗位にはなるなよ？」

「く……っ！」

どういうことなんだ、志熊の能力がいまいちわからない……が、私は確かに火傷をしたような感覚に襲われた。だから多分、あくまで予想だけど　あの志熊が有する能力は、

「お前、パイロキネシスト発火能力者か……ッ！」

「残念、確かに対象物を焼く能力だから、そう考えるのが常識だと思うけどよ　パイロキネシスコイツは発火能力じゃねえんだよな」

「ッ！」

その時、僅かに閃光のような物が瞳に映った。放たれたのは10本の閃光、私は殆ど反射的に身を屈めるが、そのおかげで10本もの凄まじい閃光を回避する事が出来た。

そして素早く起きあがり、志熊との距離を取ろうと後方へ跳躍する。

10メートルほど距離をとった所で私は立ち止まり、能力についての推測を行う。

志熊が放ったのは閃光だ。それは間違いない、炎ではなかった。太陽光の操作とはまた別物であると思われる。そもそも今日は曇り、日差しは殆どゼロだぞ。ということは、今の能力は太陽光の操作とは別物だろう。では他に何か、光るもので熱を持つ存在……。

ま、まさか……。

「お前……それは、まさか 電気操作系の能力か!？」

「そう、エレクトロエミット電磁放射<sup>エレクトロエミット</sup>って能力なんだけど、ミリ波の電磁波を対象物に放射して、誘導加熱で皮膚の表面温度の上昇を誘発させるんだよ。するとな、火傷したみたいな感覚に襲われるってわけさ。おかげでバイロキネシスよく発火能力者に間違われるけどな」

やっぱり……そういうことだったのか。つまりコイツは電気操作系の能力者で、この火傷のような感覚は電磁波を喰らって皮膚の表面温度が上昇したからか。中々凄い能力……バイロキネシスというか私の発火能力よりもランクが高いかもしれないな。

志熊のヤツ 多分、まだ本気を出していないハズだ。

それとも、その能力 本当に殺傷に至るレベルではないのか？



「さて、次は後頭部に放射して気絶させるか。気絶中にレイプすんのも中々興奮するしな」

問題は志熊が電磁波を、どの程度の精度で操れるかどうかだ。単に自分を中心として複数の電磁波を一直線に放射するだけか、放射した電磁波の軌道を途中で変更可能か。

それで勝てるかどうかが決まるが……多分、後者は無理だろう。単に電磁波を放射するだけならCランク能力者、及びBランク能力者でも可能なことだ。だが、電磁波の軌道変更は難しい上に莫大な演算能力も必要だろう。おそらく、それは五本指レベルでないと無理だ。

なら、志熊の攻撃は一度避ければ 追跡してくることはないはずだ。

「は、おら……まずは踊って後頭部を見せろ！」

電気を通さないものがあれば、志熊の電磁波を防ぐことができるが……待て、確かゴムは絶縁体だったはずだ。つまりゴム製品さえ探してしまえば ヤツの攻撃をある程度は防げる。

よし、この場は一旦戦線を離脱しよう。

パイロキネシス 発火能力……いや、並の能力者とは相性が悪すぎる。Aランククラスの高位の電撃使いでなければ対処は難しい。

ならどうするか、その手段を探しに 総合研究博物館へ行くんだ。

「ッ！」

私は咄嗟に跳躍し、総合研究博物館のバルコニーから飛び降りる。跳躍した時つま先に青白い閃光が見えたので、おそらく志熊の電磁波をギリギリで回避したのだろう。

「ハッ、待てよお姉ちゃん！ 俺の電磁放射からは逃げれねえぞ！」  
エレクトロエミッター

「どうかな、今に見ているがいい。」

私はかつて、総合研究博物館のIDを持っていた。何度も出入りしたし、だから博物館の中や展示物がある程度知っているんだ。この中には確かアレがあったはずだ。

エレクトロマスター  
電撃使い殺しの 必勝アイテムがな。

私はドアのガラスを突き破り、総合研究博物館の奥へと進み続けた。

第214話 総合研究博物館（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「電磁波避けるって……明智も化け物だよな」

早川「いい事教えてやるオか三下ア？ 電磁波ってフツーは見エねエんだぞ？」

圭介「えっ？ じゃあこの小説嘘になるじゃねえか」

早川「見えたら東京タワーの天井が眩しくて見えねエだろ」

圭介「じゃ、じゃあなんで明智には電磁波が見えたの？」

早川「可視光線の一種じゃねエの？ 通常の可視光線は殆ど人体に影響はねエんだけど、まアオレにも説明できねエわ」

圭介「だから志熊は強いと？」

早川「まアな、電気系統はオレの暴風の膜でも防げねエし」

圭介「じゃあ、お前御 美琴がいたら勝てないじゃん」

早川「そんな事はねエ……空気ってのは本来絶縁体だろオ？ ソイツの操作を行い、空気の膜さえ張つちまえば電撃に対し、暴風の膜と同じとは言えねエが、電撃から自分の身を守るって効果が得られるんだよ」

圭介「すげえ！ でも空気って絶縁体なのに何で雷落ちるの？」

早川「ソイツはなア、絶縁体つつつても完璧じゃなくてよオ、空気つつつても非常に高い電圧をかけると絶縁破壊って現象が起こるんだ。まア、雷が発生する原因の一つでもあるんだが（ry）」

暮葉「長すぎです！ このコーナーは早川先生の科学の授業じゃないのですよっ!?!」

！ 作者も科学音痴なので、詳しいことはグー ル先生でググってね

## 第215話 絶縁体を手せよ

総合研究博物館。

その内部構造は要塞にも匹敵するほど強固。入口のガラスはあくまで飾りで、博物館への本当の入り口は厚さ120センチの鋼鉄で出来ている。これほどの物を破壊するためには、おそらくレールガンほどの威力がなければ不可能だろう。なら、ここを突破する手段はたった一つ。

複製IDの使用だ。

私は博物館へ侵入する為の複製IDを所持している。それはこの戦いの数日前、白藤がとある学生からIDカードを盗み、その複製に成功したらしい。

これを使えば、ここの生徒のように博物館に出入る事が可能だ。

「……よし」

小さな電子音の後にガラガラと、耳に響く音を立てて鋼鉄の扉が開いてゆく。一応IDが変更されている可能性も考慮はしていたが、よかった……このカードで侵入することが出来る。

「おいおい、愉快地ケツ振って逃げてんじゃねえよ」

「……チッ！」

カツカツと足音を立てて、志熊が博物館の中に侵入してくる。志熊の姿を確認した瞬間に駆け出した私は、博物館の奥へと進んでゆく。

チッ、という何かが焼けるような音が聞こえた。

志熊のヤツ……やっぱり電磁波を放射してきたか。  
今の音がそれが博物館の壁に当たった音だ。さて、この場に長居  
は無用だな。

「ッ！」

「おい、逃げんなって言ってるだろお！」

私は博物館の奥へとひたすら進み続けた。志熊に姿を目撃されれば、咄嗟に進路を変更する事でヤツの電磁波を回避してゆく。屋内では派手に能力を使うことは出来ないだろう。見つければ右か左に逃げるだけの単調な行動だが、それでも電磁波から逃げる事は可能だ。

私は展示品の影に隠れ、潜入工作を行う工作人員のようにコソコソと移動する。丁度志熊の死角となるポイントのみを選び、回避ルートとしてそこを通る。

だけど、何処まで逃げてても志熊の足音は遠くならない。まずいぞ……このままではこの鬼ごっこが永遠に続く。長引けば長引くほど私のほうが不利になってしまう。

志熊大志……大した超能力者だぞ。

流石に、ここまで苦戦するとは思ってもいなかった。

まっ、私も所詮はCランク能力者。平均よりもやや強い程度の能力しか扱えない、A〜Eの中にも最も半端な超能力者だからな。それより上位の能力者に劣るのは当然だぞ。

だが……下位能力者が上位能力者に絶対勝てないという話は真っ赤な嘘だぞ。

「……あそこか」

静かに呟き、キッ、と前方を睨んだ。

確かあそこに勝利の鍵があったはずだ。アレさえ入手してしまえば、私は志熊という男に勝つことが出来る……が、それには一つ問題があるんだ。

「よおおっぱいちゃん。俺からは逃げられねえぜえ……？」

「ふん、同じ変態でも……お前のような下品な男は嫌いだぞ」

藤島とは大違いだ。藤島は変態でもいい男だから許せるんだ……でも、志熊大志という男は単なる変態にして下衆な男。私は同じ変態でも 志熊のような変態は大嫌いだ。

「はん、いいねそういうセリフ。マジ興奮すんだけど？」

「私は寒気がするぞ……お前の下衆さにな」

「反抗的な目つきがたまらねえ。コイツは支配してイかせるとおもしろえだろっな？」

さて、と……どうする……私？

志熊の電磁砲は威力こそ、セーブしているのか本当にそれが限度かは知らないが、殺傷力が殆どないので精々人を苦しめ気絶させる程度。だけど速射力はとても速い……おそらく、私が発火能力パイロキネシスを使ったところで発動前に攻撃されてしまうだろう。

志熊の攻撃を避けながら、どうやってアレを入手するか……。

「さあて、そろそろ焼けるような痛みを味わうか？」

「生憎、痛いのは嫌いだぞ」

「そおかい、だが破瓜の痛みつてのは俺の電磁砲よりヤベエらしいぞ？　今まで何人もの女が俺のハイパー兵器に痛がる様を見てきたからなあ？」

「……………チツ！」

どうする、なにを……………どうすれば？

どうやって隙を作る。隙さえあればアレの入手が出来るんだぞ。

「そおら、いくよおっ！」

志熊が両手を開いた刹那

「あ、がウウアああああああああああああああああああああああああッ！」

四方八方に電磁波が放射される。

全身をオーブンで焼かれているような気分になり、凄まじい激痛に耐えられず、それでも痛みを紛らわそうと私は叫び、ジタバタともがき続けた。そんな状態でもなお、私は志熊なんてヤツを見ないでアレを展示している場所を睨む。

アレさえ、アレさえ手に入れば　　ッ！

「う、く……………あ、あ……………っ」

「そろそろ、痛みで意識が遠のいてきたんじゃないかねえか？」

「……………くっ！」

犯される。



その恐怖とも屈辱とも受け取れる言葉が頭に浮かんだ。許せない……私の、私の処女はあんなヤツのものではない。そういうものは本当に好きな人に捧げるものだ。

その思いが私の体を動かし、脳では必死に計算を行う。

結果、私は遂に、

「うあああああああああああ！」

右の手のひらに灯った小さな炎。

それは野球ボール程度の大きさでしかなかったが、それでも炎は炎だ。普通の超能力者であればこれだけダメージを受け、痛みを感じている状態では能力の使用も行えない。痛みで集中力が切れれば計算が出来ず、能力が発動しないからだ。

でも、私の能力は違う。

マイクロキネシス発火能力というものは比較的、計算式が簡単に出来ている。

つまり かなりのダメージを受けても演算処理が可能なんだ。

「チツ！ このおっぱい星人……まだ、計算できる余裕があったのか？」

轟！ という音を立てながら、小さな炎弾えんだんが志熊の懐を狙う。私は炎弾が志熊へ向かって無事に飛んでいる事を確認すると、ポロポロの体に鞭を打って走りだす。

距離にして10メートル。アレを入れているガラスに拳を突く。

バギン！ という音と同時に、拳を突いたあたりを中心にガラスが崩れ落ちる。

そして、

ようやく私はアレ 水流系能力者が製造した超純水入りの容器を入手した。

「この おっぱいがあああああああああッ！」

志熊は立ってキレている。どうやって炎弾えんだんを防いだのやら……まあ、そんなことを考えている場合ではないぞ。苛立ちを隠せない志熊は電磁波を放とうとする。

だが、電磁波が私を捉える前に、

「ッ！」

私は超純水入りの容器を取り出す。正確にはただの容器ではなく、超純水で洗浄を行う為に消火器のように水を放出する、佐井学園製の強力な特殊容器だ。

水は本来絶縁性を持つものだが、不純物が含まれると絶縁性が失われ、導体になってしまう不思議なものだが、不純物のない超純水なら かなりの絶縁性を誇っている。

それを勢いよく放射してしまえば ヤツの電磁波は私に届かない。

さらに志熊は水圧に負け、声を漏らしながら後退りしてゆく。

「う、ぐあっ！」

志熊の苦しむ声が聞こえる。

やがて容器から水が無くなるが、その瞬間私は博物館の床を力強く蹴り上げる。水圧から解放された志熊が私に気付いた時には既に私は志熊の懐に潜り込んでいた。

「な、テメエ ！？」

「悪いな」

言いながら力強く踏み込み、その拳を岩石のように固く握り締め、倒すべき敵の下顎へ照準を合わせると、私は力いっぱいの一撃を下から突き上げた。

ゴン！ という凄まじい音が炸裂した。

志熊大志の体から力が抜け、背中からぐしゃり、と床に落下していった。顎に強烈な一撃を受けて脳を揺さぶられた上に、背中を強く打という肺殺しの副産物を受けた志熊。

力を失った彼はぐったりと、無様な姿を私に晒すのであった。そんな彼を見下ろしながら、

「生半可な信念では 私の戦意を挫くことなど出来ないぞ」

言いかけていたことを、ぐったりしている志熊に言い放ってやった。

さて、これで一人目の攻略に成功したか……他のみんなはどうしているのだろうか？

とりあえず 誰かと会合しよう。

第215話 絶縁体を手せよ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「たまには、頭を使って勝利するっていうのもいいよね」

伊吹「ホントね、馬鹿みたいに真正面から突き進む圭介より渋く見えるわ」

圭介「それじゃ俺が馬鹿みたいじゃねえか！」

伊吹「馬鹿じゃない？」

暮葉「馬鹿だと思っただけです」

早川「まっ、空気が絶縁体だっていう事すら知らねエヤツが、頭がいいとは思えねエけどなア？」

圭介「……ねえ、俺、泣いてもいいかな？」

## 第216話 それぞれの戦い

それぞれの目的を果たすため、一旦フレンドの仲間と離れた私  
白藤早苗は、現在は西部にある校舎側へ向かっていた。このあたりは校舎も近いことながら、付属機関の施設も多い……という話をフレンドのみんなから聞いた後、独自調査で大体の構造を理解した。私は元サヴィエトの諜報員。こういう仕事は得意中の得意。でも、今回は戦闘任務……ちょっと不利かな。一応、瞬間移動テレポートすることによって武器となりそうな物は持ってきているけど、銃弾と同じように制限がある。

太股に忍ばせている鉄矢は50本。鞆の中には100本以上。でも、激しい戦闘を行えばそれはすぐに尽きる。出来るだけ 弱い人と当たる事を祈ろう。

「貴女が私の敵ってわけですか？」

建物の影から現れたのは、やや丸い眼鏡をかけた赤い三つ編みの女だ。多分、同じ年くらいだとは思っけど、ファッションが奇抜……旧日本陸軍って、軍オタの人なのかな？

「なんで黙っちゃまってるんですか？」

「……………」

「ひょっとして、超内向的なそういう人種ってわけですか？」

その言葉に返事をすべて、私は右手で携帯電話に文字を打ち込んだ。

【違う、単に声を出すのが面倒くさいだけ】

「ぷっ、あっはは！ なんなんですかその理由？ 声帯こわれちま  
ってんじゃねえですか？」

【壊れていない、声帯は正常】

「貴女、指を動かすほうが面倒くさいと思うんですけど、どーなん  
ですか？」

【指は動かし慣れている。声を出すと喉が痛くなるのが嫌だ】

「こりゃ面白い子ですね。久々に虐めがいのありそうな感じですよ」

どういつつもりなんだろう。あの人……両腕を広げて、まるで早  
く攻撃してきなさいって言っているみたいだ。何を考えて、そんな  
無謀な行動に出るのか……理解に苦しむ。

だけど何があるかは 実際に試してみないとわからない。

「ッ！」

私は太股に軽く手を触れ、五本の指に鉄矢を挟める。目の前の女  
に座標を指定し、世界でも珍しい部類に入る魔術 瞬間移動テレポートを実  
行する。

鉄矢が一瞬で女を捉え、太股と肩にそれは突き刺さろうとした。

「やッ！」

しかしどういうわけか 鉄矢が跳ね返ってきた。

少女に直撃する寸前に反射された鉄矢は、私を捉えて飛来してく

る。唯一の救いは瞬間移動テレポートをしたわけではなく、単に何らかの力によって弾き返されただけであつたので、鉄矢が体に直撃する寸前に上半身だけを振り、どうにか鉄矢を回避してみせた。

どういうこと……攻撃が反射されたのは初めてな気がする。

「へエ、空間移動能力者とは珍しいねエ……アンタ面白エよ」

口調が……変わった？

どういうこと。相手も能力者だし、多少変な能力を使ってくるのは覚悟済み。でも、攻撃を跳ね返す上に口調まで変化するだなんて……そんな超能力、聞いたことがないよ。

とにかく、何かを投げつけるのは危険みたい……なら、近接戦闘を挑もう。

「ッ！」

「走るの遅エ……なア、アンタ引きこもりってかア？」

わかつている。私は魔術師、魔術にも色々の種類があるけど、それぞれの魔術には必ず代償というものが存在している。私の魔術の代償は動かなくても移動が出来るという代わりに、身体能力が犠牲になっている。動かなくても戦えるから、身体能力が必要ない。

だから私は瞬間移動テレポートを極めた代償として、体力を失った。

でも、もやしはもやしなりに、欠点を埋める策は講じているんだから。

「遅エ！」

「……ッ！」

女がボクシングのような構えから、左ジャブを放ってきた瞬間だ。  
私は自らの瞬間移動テレポートを実行して背後に回り込み、脇腹に引き戻され  
ていた手首を掴もうと、手を伸ばす。

手首を取って、瞬間移動テレポートで鉄矢を刺しこめば私の勝利。

「ぐ、う、あああああああああああ！」

なのに、悲鳴を上げたのは女ではなく 私だった。

女に触れる寸前、何かに接触したのを感じたその直後である。触れた直後、力が跳ね返ってくるような感覚がして、気付いた時には手首がおかしな方向に曲がっていたのだ。

「今で手首の骨折れちゃったんじゃないのか？　つか、声出せたんだなあ……」

「う、く……ッ！」

咄嗟に後方へ何度も跳躍し、女との距離を取った。

痛い……これは本当に、手首の骨が折れている……。

でも、どうして？

「アンタ、佐井学園の生徒じゃねエのか？　って事は天然の超能力者ナチュラルマテリアル天然素材か……それにしただって、知らねエわけねエと思うんだけどなあ　念動力テレキネシスってヤツを」

【テレキ……ネシス？】

聞いたことが無い……超能力の一種かな。

というか、相手は私を超能力者だと思っ込んでいるみたいだ。



「代表的な超能力の一種だ。特に私は 最強の超能力者の演算パターンを参考に開発された幻影防膜<sup>トリックアーミー</sup>つてのを使うから、防御に関しては鉄壁なんだよなア」

最強の超能力者……雪乃や凧紗から話程度には聞いたことがあるし、独自の調査でその存在が如何なるものかも知っている。確か名前は早川悠。待機そのものを操作し、どんな攻撃も風や空気の膜を張り巡らせる事によって反射する、最強の名に恥じない能力を持つ男だ。

差し詰め、<sup>テレキネシス</sup>念動力という不思議な力で暴風の膜を再現している……感じかな？

だとしたら、<sup>テレキネシス</sup>念動力の膜はほぼ鉄壁の防護。多くのアルファ隊所属の魔術師がその能力に敗れ、その鉄壁の膜を突き破る事は殆ど不可能。

あれ、でも早川は圭介に負けたらしいけど……どうして？  
鉄壁なはずの膜を 圭介はどうやって突破したの？

「生憎、攻撃性はゼロなんだが……その分、体術は得意だから、戦闘員としてはアンタよりは有能だよなア！」

軍服姿の女はボクサーのような構えから、徐々に間合いを詰めてくる。私は咄嗟に左手が太股へ動いたが、相手の能力を考えると、<sup>レポート</sup>今、瞬間移動を行うのは賢明ではない。

かといって、体術では勝ち目がない。どうする事も出来ず、後退りをする。

そして 全体重を乗せた女の体が飛んできた。

「あ、ぐあああああああああああああああああッ！」

グシャア！ という鈍い音が響き、私の肩と後ろに建つ建物の壁

に体を挟まれる。押し潰されるような衝撃と激痛、込み上げてくるような凄まじい吐き気。

体を支える足が脱力していく感じ。

軍服姿の女が静かに離れると、私は静かに崩れ落ちてしまった……。

「はい残念、まあ所詮空間移動能力者じゃ私には勝てねえんですよ」

私は<sup>まぶた</sup>瞼を閉じたまま、元の口調に戻った女の言葉を耳にする。同時に、いくつもの疑問が頭の中を飛び交っていた。そう、とっても不思議に思うことが沢山あるのだ。

まず、私は女に普通にタックルされた。それはいいとして、どうして女に触れる寸前にさっきのような力が働かなかったのか。

何故、女は私から攻撃させたのだろうか？

「まっ、トドメを刺したい所ですが……気絶しちゃってるみたいですよ、私は仲間の支援へ向かうとしましょうか。やれやれ、この白<sup>しろ</sup>梅<sup>ばい</sup>雫<sup>しずく</sup>の能力は便利なもんですよ」

ひょっとしてあの女……いや、白梅雫は攻撃と同時に防御が出来ない？

さらに飛躍して、常時膜を張り巡らせる事が出来ないんじゃない？  
圭介が、早川悠に勝利した理由はもしかして、そこにあるんじゃない？

「……………」

右手は……痛い、手首が骨折していて殆ど動かせない。でも、左手は動く。そもそも私の魔術は態々手に触れなくても座標さえ理解していればある地点への転送が可能。

ただ、鉄矢は自分が動きまわる都合上、自分の座標を把握する手

間を省く為、あえて手を動かし手動で座標を指定することで、瞬間<sup>テレ</sup>移動を行う。

脳での計算よりも、精度は若干落ちるけど……殆ど狙いに狂いはない。

攻撃は可能だ。

私は左手に鉄矢を三本挟み、殆ど賭けのような瞬間<sup>テレ</sup>移動を行った。

「う、ぐあっ！」

「……ッ！」

瞬間<sup>テレ</sup>移動した鉄矢は、反射もされずに白梅<sup>テレ</sup>に突き刺さった。

やっぱり、予想通り 常時膜を張り巡らせれるわけではないんだ。

「あ、あ……」

足に一本、腕にも一本、そして頭部に一本の鉄矢が刺さった白梅<sup>テレ</sup>は、そのまま力を失ってアスファルトの上に倒れ込んでしまった。脳にダメージを受けたとは思うけど……一応狙いは正確。

多分だけ……命に別条はないハズ。最も、何らかの障害は残りそうだけど……。

さて、早く他の仲間を助けにいかないと……。

「……ッ！」

だ、め……体が動かない、痛い……っ。

段々視界がぼやけてきて、頭もふわふわとしてきて そこから先の記憶はなかった。

浜島雅人Side

俺は北部、つまり俺らが侵入した地点を動きまわっている。日本庭園か……何の意味があるかは知らねえけど、多分誰かがそういう趣味を持っているというわけだろう。

俺は木山と一緒に、日本庭園の草陰に隠れつつ、コソコソと北部を移動する。

「木山、敵はどの辺だ？」

「対象物の検索、及び数値化を開始。対象物は生命体1、座標計算開始……終了、浜島に分かりやすく報告、距離は約20メートル北東」

「フーことは……この近く、あそこか」

俺と木山は再びコソコソと移動を開始、丁度茂みになっているところで、俺達が身を隠すには十分な場所だ。茂みの隙間からは、駐車場のような場所が広がっている。

少数の車と、白いスーツを着た男の姿が一人。

「アイツか……」

「アイツだね。丸腰……だけど注意して、ああいうヤツは多分銃を隠し持っているよ」

「心配すんなよ……喧嘩と同じだ」

喧嘩だって、相手の野郎が棒切れ隠し持つてるかもしれないしな。それが銃に変わったただけだってんなら喧嘩と大差はねえよ。問題は、どうやってあの野郎を制圧するかだ。

「なあ、お前の能力で相手の能力とかはわからないのか？」

「それは無理」

「そ、そうか……よし、こうなったら賭けるか」

「賭けるって浜島、あんた何するつもりなの？」

「まあ、見てろって……っ」

俺はベルトに挿んでいた、伸縮式の警棒を取り出し、右手で握り締めた。それを握った後に再び隙間を覗き込み、白スーツの優男の様子を窺う。男は俺達を探しているらしい。つまりさっきまでの俺達と同じ状況か……あの様子だと、俺達には気付いていないみたいだな。

俺に背中を向ける。いいな、背中だぞ。背中を向けやがれよ優男

……よし、今だ　行けよ俺！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

「……ッ！？」

俺は一気に茂みから飛び出し、警棒を振り上げる。だけど、叫び声を上げてしまったのが失敗だったんだろうか、男は俺に気づいたしまった。

まあいい、それでも構わず　俺は警棒を大きく振り回した。

「お、らアアッ！」

「ッ！」

大きく振り回した警棒を避けられてしまった……が、これは予想の範囲内。すぐさま俺は左手を伸ばして、優男の髪の毛をガシッと力強く掴んだ。

「あ、貴方……が、侵入　ッ」

「そつだよ……ハハッ、俺が侵入者だよ　オラァ！」

セリフに続けるように、自由を奪われた優男の鳩尾に膝を打ち込んでやった。鳩尾への膝蹴りは強烈だったらしく、激痛からか優男は身を屈めようとする。

だが、俺はそんな行動を許さない。すぐに髪を掴んでいた左手を胸倉に回し、今度は胸倉を力強く握り締める。そのまま、左腕の腕力に任せ、優男を引き寄せてる。

そのまま固く握った右手の拳を　力強く叩き込んでやった。

「あ……が、ふ……ッ」

ガードも何もできず、モロに顔面に殴打を受けた優男は気絶した。ああ、口から血を流して無様極まりない姿になってやがるな……まっ、俺達の目的を果たすためには仕方ねえ……か。

「浜島！」

「木山、お前の能力すげえな……本当にコイツ、大したことなかったぜ？」

「うん、でもあんたシャバいよ？」

「うう……ほ、ほっといてくれ。それより西園寺の所に行こうぜ？」

「えっ、雪乃？」

「ああ、アイツの対戦相手はヤバいやツなんだろ？」

「……そうだね、うん。浜島にしては冴えてるよ！」

うあああ……き、木山にまでひどい事を言われた気がする。

ちくしょう、唯一の天使だと思っていたのに……いや、小悪魔か？  
とにかく、今はちよつと傷ついたかもしれねえ……。

「は、はは……行くか」

「うん、行こう！」

こうして、俺と木山は西園寺を手助けしに行くことになった。

俺なんかが役に立てるか微妙だけど……頑張るしか、ないよな。

さっきみたいに カッコよく決めてやるよ。

## 第216話 それぞれの戦い（後書き）

特別コーナー！

【キャラクター・ステータス】

最新話時点でのキャラクターのステータスを紹介！

キャラクターNO001

・ふじしまけいすけ藤島圭介 ×10が最高、ナシは無能という意味。

通常モード。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ほぼナシ。

魔法（超能力）：ナシ、ただし魔法とも超能力とも言えない力アリ。

知力：

敏捷性：

地位：

総評：打たれ強い、かなり喧嘩慣れした高校生レベル。

リミッター解除後。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ほぼナシ。

魔法（超能力）：ナシ、ただし魔法とも超能力とも言えない力アリ。

知力：

敏捷性：

地位：



総評：割とチート、まだ誰も全力は見えていない。

## 第217話 学園の実体

侵入場所より南部、ここは医科学研究所付属の附属脳神経解析センター。私　西園寺雪乃はここにいるという、朱実曰く最も手ごわい敵を倒すためにやってきたけど……どこかしらね。

ここは一度だけ訪れた事があるわ。名前通り、脳の解析を行う研究施設らしいけど、その実態は一度訪れた程度では不明。ただ、噂では非人道的な実験が行われているらしい。全く、佐井学園というのはそういう物しかないのかしらね。

「職員は……退避したのかしら？」

一応、研究施設の大半は破壊して、職員の大半は氷漬けにしたけど……。

まだ、ここは綺麗に残ってるわね。

真っ白な照明に照らされた広い空間には、長い金網の階段と、複数のパソコンや培養機が並べられている。培養機の中を覗き込むと、改めて噂は本当だってわかったわ。それぞれ赤い培養機と白い培養機があるけれど、赤い培養機にはお腹を切り裂かれた全裸の少女達

が。  
白い培養機には、おそらく少女達から摘出された胎児が入っていた。

「胎児を被験体に行っているみたいだけど……どういう実験だったのかしら？」

おまけに、お腹を切り裂かれた母体も生きているわ。培養機に接続されているパソコンの画面を見る限り、未だに鼓動が動いている。超能力者特優の強い脳波も出ているわ。

それを確認しつつ、培養機の中身を一つ一つ確認していく……と、その時。

「なによこれ……この子は小学生じゃない」

あまりにもひどすぎる……そんな現実を伝える培養機が一つ、存在している。

実験の犠牲になった母体の中には 毛も生えていない小学生の女の子がいた。

この子……この歳で妊娠して、実験の犠牲に……確か、私の記憶が正しければ佐井学園に初等部も中等部もなかったはず。つまり

この子は外部の人間。

あまりの衝撃に、気付けば後退りをしていたが……その時、くしゃりと、私の左足が何かを踏みつけた。

「……紙？」

元々冊子か何かだったらしい紙を発見、表紙だけだけ何か書かれているわね。私は足元に落ちていたその紙を拾い、書かれていた文字を読む。

「AS計画……？」

意味不明な計画名を見た後、私は近くにあったパソコンの画面を覗き込む。なにやらID入力画面らしいけど……ここを通り抜ければ、このパソコン内に機密があるのかしら？

私は椅子に座り、パソコンを操作する。

それでも私は、そこそこクラッキングには自信がある。素早くキーを打ち、私の知る全ての手法をこのパソコンに試す。すると、3つ目の手法で不正侵入に成功した。

ナメない事ね、私は米大手企業の内部にだって不正侵入できるのだから……。

表示されたのは何やら、レポートのようなものみたいね。

レポート名は『AS計画概要』……冊子と同じね。

私は唾を飲み、覚悟を決めて レポートを読み始めた。

『Aランク能力者の量産、及びその先のSランク能力者の実現を果たす。Aランク能力者の量産は、素質ある母体に宿る子を、胎児の時から特殊環境で育成。約40%の確立でAランク能力者へと進化し、残りは肉体的、精神的負荷により死滅する見込み。また、子を製造した母体は将来、子の能力測定を行う為の被験体として保存。なお被験体は、コンピュータが叩き出した結果に基づき、内部外部を問わずに暗部組織が回収する』

本当に……この学園は根元から狂ってるわね。たかが、高位能力者と、概念しか存在しない空想上の能力者を生み出すためだけにこんなふざけた計画を進めていたのね。

さらに私は、Sランク能力者の製造法という項目に目を通す。

『Sランク能力者の製造法。プランA、魔道能力者たる者の製造の為、特異点の回収、及び特異点の脳を解析、可能性のある能力者に対し、特殊能力開発を実施。主要品の【エアオペレイション大気操作】は学園を離反した為、予備品の【ウェーブハウンド波動操作】を被験体とする』

これって、早川悠と序列第二位の事を言ってるのよね。いくら外道な人達とは言え、流石に物扱いされているのは可哀想だわ。どうやら、レポートには続きがあるらしい。

『しかし、プランAは主任の死亡により失敗。ただし、【エアオペレイション大気操作】が全く未知の能力を行使した記録があり、魔道能力者の片鱗を見せ

た可能性がある』

あの男が新しい能力に目覚めたって……どうということよ。というか、あの鬼畜白もやしは今頃何処で何をしているのかしら。学園を辞めたという本人の発現はレポートを見る限り、どうやら事実みただけだね……でも、あの男自身の話は最近聞かないわよ。

新能力の発現って……あの男、何処で何を……。

と、そんな事より、レポートにはまだまだ続きがあるみたいだわ。長いレポートね……でも、折角だから全部読んじやいましょう。

『プランB、感情能力者計画。、【エアオペレイション大気操作】の妹【ダークエネルギー暗黒活力】を被験体とし、培養機内の被験体【ダークエネルギー暗黒活力】に脳波受信機を装着。  
【エアオペレイション大気操作】の脳波から、【エアオペレイション大気操作】の負の感情のみを受信。負の感情で脳を刺激し続ける事により、負の感情に犯された強大な、感情能力者が3年で完成予定。こちらは現実性がプランAより高いため、引き続きプランBを実行予定』

レポートにはまだ続きがあるものの、私はそこでマウスから右手を話し、静かに立ち上がって画面を見続ける。こんなゲームを作れば、審査に引つ掛かって発禁になるような。それほどまでに狂気じみたレポートが目の前にある。嘘だと信じたい残酷な実話が目の前にある。

私はそんな現実を見て、頭の中で何かが吹っ切れたような感じがして……、

「ふざ、けるんじや　ないわ！」

ダン！ と、力強くデスクを叩く。今の衝撃で、デスクの上に乗っていた書類やパソコンの位置がずれてしまった。だけど、それでも怒りは収まらない。

こんな計画の為に、内部外部を問わずに犠牲になった人がいるの？  
こんな計画の為に、命が工業製品のように生み出され、利用されているというの？

こんな計画の為に、狂人だとしても利用されてしまう人がいるの？  
このな計画の為に、負の感情しか味わうことが出来ない人がいるの？

「完全にナメてるわね……許せない……ッ！」

こんな計画は間違っている。

ちよつとしたエリートを生むためだけに 多数の犠牲を必要とするだなんて……。

そんなの 間違っているに決まってるわ。

「計画を、止めないと……っ」

まだ、本人達にとっては手遅れかもしれないけど……それでも、  
今だったら、まだ救える命があるかもしれない。少なくとも、被験  
体にされた母体は救出出来るハズよ。佐井学園を潰すという目的を  
果たすと同時に 被験体にされた人々を救いたい。

でも、その前に お片付けの必要があるみたいね。

「あら、アンタはまさか……意外な再会ね ブリザードサイコ  
吹雪念力」

あの超能力者の始末と言う名の 。

## 第218話 氷と原子

医科学研究所附属脳神経解析。

あまりにも馬鹿げている計画が行われている事を知った私は、どんな手段を使つてもこの学園を潰してやろうと思つた。本当……馬鹿げているわよね。外部の人間まで巻き込み、多くの人々を狂わせた計画の数々……でも、それも今日でお終いにしてあげるわよ。私にはやるべき事が山積しているけど、まず最初にやらなきゃいけない事は。

「ブリザードサイコ吹雪念力……まさか、アンタが侵入者だったとはね」

「アトムハウンド貴女は……原子操作だったかしら？」

「その名で私を呼ばないで欲しいね。私にはさわなみさき沢那魅咲って名前があるんだけど？」

「なら、私にだって西園寺雪乃って名前があるわ」

アトムハウンド原子操作こと沢那魅咲。

確か、彼女もAランク能力者……つまり五本指の一人だった気がするわ。どこかのお嬢様って話でとにかく滅茶苦茶我がままな女よ。気に入らないものは全て排除する……それが彼女の信条。

「ふん、アンタを名前で呼ぶ価値なんてないと思うんだけど？」

「それはお互い様よ……アトムハウンド原子操作」

「チツ、その名で呼ぶなよ……氷結のクソ女が」

面白いわね……こういう我がままな子を挑発するのって。もう少し……もうちょっとだけ挑発して怒らせてあげようかしら。それはそれで面白いかもしれないし……なにより、体力温存の為にも出来る限り戦闘は避けたいからね。早く戦って、早く片付けて先へ進もう。

「あら、貴女に私をクソと呼ぶ資格があるかしら？ 格下」

格下、一番言われたくないセリフよね。

私は挑発の為に、あえてそれを沢那に向けて言ってあげると

「テメエ……すぐにその発言が出来る地位から 引きずり下ろしてやるよ！」

怒り狂った沢那はブチブチと引き裂くように笑っている。両手を大きく開き、その動きに合わせて私も身構えと、次の瞬間に第一撃が飛んできた。

ズバアッ！ という黄色く、先端の鋭い結晶。

無数に放たれた結晶は、見た目こそ綺麗ながら臭いは最悪。まるで、長期間放置していた卵の臭いを嗅いだような、ツンと来る刺激的な悪臭が漂っている。その上、綺麗で臭い結晶自体は凄まじい速度で飛来し、ロケット弾のように降り注いできた。

これが“アトムハウンド原子操作”。

沢那が有する能力で、原子核を構成する陽子や中性子などの核子の個数を操作し、原子そのものを作り変えてしまい、その原子から様々な物質を作り出す能力だ。

そして、この黄色い結晶はその能力で作られた 巨大な斜方硫



黄ね。

「ッ!？」

目で捉えるのがやつとの速度で飛来してきた斜方硫黄を、間一髪で回避する。チツ、と硫黄の一部をかすってしまったのか、破れた服の布切れや引き抜かれた髪の毛が視界に映る。

速い、砲弾並の速射力ね……と、その時。視界に一瞬だけ沢那の姿が見えて、

スドン! という、痛々しい音が炸裂する。

一瞬で確認出来た事は、沢那の膝が私の腹部に突き刺さっていたということ。ゴキゴキという嫌な音が聞こえて、口からも血の塊を吐いていた。

「あはは、3メートルはぶっ飛んだねえ……でも、意識があるってアンタ丈夫だね?」

「い、ぐ……げっほ! けほっ!」

蹴り一発で視界がぼやけるだなんて……ど、どんな蹴りだったのよ……?

「内臓潰れててもおかしくないと思うけど、まあいいわ……」

「はあ、はあ、はあ……」

乱れる呼吸を整え、左手で蹴られた部分を押さえつけ、右手で口の血を拭う。まだ腹部に破裂しそうなほどの痛みが残っているけど、それでも私は立ち上がった。

何時までも寝ていては 沢那に殺されるから。

「テメエも今からその培養機に突っ込んでやるよ！ 科学者も喜ぶだろうしなあ…… Aランク能力者の母体が入りゃ、将来的に Sランク能力者へのシフトも可能な赤ん坊も生まれそうだしよ！ そしたら私は大量の金を貰って…… あつぎやはは！ なにそれ大金持ちコースじゃん！」

「……そんな事、させないわよ」

「あ？ なに、テメエは私に負けて実験動物になる運命だろお？」

モルモット  
実験動物……ふざけるんじゃないわ。

「冗談も休み休み言っただけいいわね……」

「違う……もう誰も モルモット 実験動物扱いなんかさせない！」

「あーうるせーうるせーうるせえ！ 超ウゼエんだよコラア！」

叫び声の後、今度は硫黄 ではなく、透明色の不思議な液体が飛んできた。何の液体化は知らないけれど、おそらく沢那のことだから毒物ね。私は液体から身を守るために、ニヤニヤと笑いを浮かべながら能力を使い 氷の装甲を作り出してやった。

大気中に僅かでも水分があれば、それを操作する事によって氷を作り出す。

複雑怪奇な計算を瞬時に行い 劣化ウラン弾さえ通じない装甲を作ったのよ。

液体程度、どうってことないわね。

「さあーて問題」

攻撃を防がれたのにも関わらず、沢那は口が裂けそうな笑みを浮かべている。どんな矛でも貫くことの出来ない盾に攻撃を防がれたのに、あの余裕は一体どこから来るのかしら？

「その液体、ニトログリセリンって言うんだけど……それに衝撃を与えたら　ニトログリセリンはどんな反応をしちまうカナア!？」

「　　ッ!？」

瞬間、前方がピカッ!　と光ったような気がした。それは爆発。

氷に触れた瞬間、摩擦でも発生したのか　ニトログリセリンは爆発を起したのだ。

「ぐ、あああッ!」

爆発の直撃自体は、氷の装甲で防ぐ事が出来たものの、爆発によって吹き飛ばされた周囲の残骸が飛来し、凄まじい速度で私の左肩をかすったのだ。

それだけで。　　たってそれだけで、私の左肩は　　激しい痛みと血に塗れてしまった。

「う、く………えっ!？」

何を思ったのか、私は天井を見ようと首を動かす。顔を上げて天井を見上げると、白銀色に輝く無数の金属の塊が雨のように降下してきた。

先端は刃のように鋭く、まるでいつかの処刑道具のような金属の雨。流石に上空に氷の装甲を作るわけにもいかないのです、私は殆ど

反射的に走り始める。転びそうになりながらも、必死に金属の雨から逃げ延びようと、ペースも見た目も無視して走り続けたのだ。

ガン！ ゴン！ と、後ろから連続して金属音が響く。

「くっ！」

その時、私の手前僅か10センチの地点の床に 金属の杭が突き刺さった。

ふと上を見ると、上からも杭が降ってくる。私はそれを避ける為に右へ跳躍し、とにかく串刺しにならないように、必死になって逃げていた その時。

「オラオラクソビッチ！ 床にケツ振って逃げてんじゃねえ！」

「……ッ!？」

無数の杭が床に突き刺さった事により、埃が舞って視界が遮られている中、突然埃を吹き飛ばしながら青白い、不健康的な光の筋が私に向かって飛んできた。

咄嗟に計算を行い、能力で氷の装甲を製造する。

確かにそれで、青白い光の筋はせき止められた ハズだった。

「う、あああああああああああああああああああッ！」

ハズだったのに 焼けるような痛みが全身に襲いかかってきたのだ。

その一撃で力を失い、私は床に四つん這いになってしまった……。

「ハッ、なんだよ……無様だねえ ブリザードサイコ 吹雪念力……！」

動きを封じられた私の近くに、沢那が徐々に近寄ってくる。そんな中、私はさつき何にやられてしまったのかを考えていた。確か、アレは青白い光……喰らった時の感触はそう、感電に近いものだった気がするわね。まさか、沢那は電気みたいなものも操れるのかしら？

「あ、貴女……電気まで……？」

「原子つてのは正の電荷を帯びた原子核と、負の電荷を帯びた電子から構成されている。その意味がテメエにわかるカナア……？」

「……まさか、やっぱり」

「そうよ、電気も多少は操作できるってんだよ」

やっぱり……そういうことだったのね。それにしても流石は五本指ね、今の青白い光線は並の電撃エレクトロマスター使い以上の威力を誇っていたわ。格下……てのは取り消そうかしら。沢那魅咲……貴女は十分強いわよ。

「しっかし簡単だったね……」

「……何が、言いたいのかしら？」

「なあにが序列第3位だ！ ただのオタ受けしそうなクソロリじゃねえか！ テメエがその程度だったら張り合いがねえだろあが！ この分だと私が早川のクソ野郎を越すのは時間の問題だナア！」

でもね、貴女は一つだけ勘違いしているわよ。確かに貴女はとても強いし、今はどう見ても私の方が不利だけどさ……一つだけ、貴

女が完璧超人になれない理由があるのよ。

貴女がいつまでも 第4位という位置で止まっている理由がね。  
今からそれを教えてあげるわ。覚悟しなさい 原子操作。アトムハウンド

「さて、そろそろ殺す……いや、一応回収しておこうカナ？ 実験モル  
動物にはなりそうだし」

ゆっくり近づいてきた沢那は、私の首を右手だけで掴んだ。もし、この状態で沢那が能力を発動させたら、私を気絶させる事も 跡形もなく消し去ってしまう事も簡単でしょう。

それだけ強力な力が彼女にはある。でも、それだけに残念な欠点もあるわ。

「ま、確かに貴女は強いわね」

沢那の狂ったような笑みを瞳に映しながら、私は言う。

「貴女はそうやって、何件もの汚れ仕事を片付けてきた。そうやって組織の頭になれたのでしょうか？ いくら汚い事とは言え、実力で這い上がってきた事だけは評価に値するわよ」

「あ？」

「けどね、貴女だって完璧超人じゃないわ。その短気な性格、単調な攻撃パターン、何より冷静になれない所と余裕ぶる所が痛いわね」

つまり、と私は笑う。

「その余裕が 貴女の決定的な隙になのよ！」

ガシッ！ と、私は首を掴んでいる沢那の手首を握った。固く、固く……。岩石を握り潰すほどの勢いで握り締めた。ちなみに私、右手の握力は70キロ近いのよね、黙っていたけど。だって、肉体が強くなかったら 沢那の膝蹴りにだって耐えられないでしょ？

「う、ぐ！ は、離せてメエ！」

「小物のセリフね、精々凍るがいいわ」

私は大気中の僅かな水分を瞬間的に冷却。効果範囲は沢那の右手首のみ。私自身が凍傷にならないように、握っていた手は能力発動直後に離れた。

「う、あつ！」

右手の広範囲に凍傷を負った沢那は、投げ飛ばすように私を解放する。投げ飛ばされた私は空中で一回転をしながら、そのまま綺麗に着地した。沢那は負傷した右手をだらんと垂らし、未だに苦しんでうめき声を上げている。その隙に能力で氷のナイフを作り出し、右手にそれを持つ。

沢那はようやく意識を私に向け、残った左の手のひらを私に向けて、

「西園寺イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

地獄の底から響くような叫び声だが、決して驚きも怖がりもしない。私はただ、可哀想な人を見る目で沢那を見続ける。本当に哀れな女ね……と思いつながら。

右手を潰された沢那は、左手からドロドロに解けたオレンジ色の何かを放つ。ドロドロの金属と思われるものは、渦を巻きながら私を焼こうと飛来してくる。

右手に氷のナイフを持つ私は、左手のひらを溶解された金属に向ける。

それが手のひらに触れた瞬間　ジュウ！　と、聞くだけで火傷しそうな音を立て、金属は固体となって床に落ちる。床への落下により、ゴン！　という金属音が響き渡った。

馬鹿ね……私の能力に液体は無効よ。

瞬間的に冷却して　固体にしちゃえば問題ないじゃない？

「　　ッ！」

金属を冷却して固体した直後、私は迷わず沢那の懐へ飛び込んでいく。沢那は残っている左の拳を振り回し、私の顔面を捉えて打ち込んでこようとすする。

私はその拳を　左手で払いのける。

「　　ッ！？」

絶望に満ちた表情を浮かべる沢那。そんな彼女の腹部を狙って

ズサッ！　と、氷のナイフを根元まで刺し込んだ。

お腹から大量の赤黒い血を流し、徐々に沢那魅咲の体から力が抜け、膝からストンと落ちるように床に崩れ落ちていった。動くなくなった沢那を見下ろし、私はこう呟いた。

「余裕よ、本気の半分も出せば　貴女程度」



## 第218話 氷と原子（後書き）

キャラクターNO002

・ きのしたくれは 木下暮葉 ×10が最高、ナシは無能という意味。

通常モード。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：魔法は苦手だが、総合的にバランスのいい戦士タイプ。

## 第219話 数か月前の因縁

「さて、これで大丈夫かしらね？」

私　西園寺雪乃と原子操作アトムハウンドの沢那との戦いは私の勝利に終わった。

しかし、その戦いのせいで沢那は腹部に深い傷を負ってしまい、放置しておけば今日中には死んでしまうような状態だった。流石の私も、怪我人を放っておけるほど非情にはなれない。ここは医科学研究所付属だけに、そこそこ医療設備は整っているみたいだ。なので、そのまま沢那を集中治療室へ担ぎ込み、応急処置を行った。

まあ、多分だけど……一ヶ月も経てば傷は癒えるでしょうね。

「それにしても、ワクチンね……」

ワクチンというのが、沢那の所属する暗部組織の名前らしい。本来、北部は徳川フラトーン小隊が守っているハズだったのだけど、やはり何者かの襲撃で状況が変化しているわね。

そもそも、徳川フラトーン小隊は既に壊滅していた。

一体……誰の仕業かしら？

「……まあいいわ、次の仕事に移りましょうか」

計画の中止と、AS計画の被験者たちの救出を行いたいけど……でも、それをやるにしてもこの状況下では、あまりにも行動目標が多すぎるわね。

仲間の方も心配だし、それに被験者たちは一応の生命維持が行われている。この施設が戦いの余波を受けて、これ以上破壊されない

限りは生きているハズ。

まずは仲間と合流しましょう。戦力が分散している状況は好ましくない。

とにかく今は 仲間を集めて学園を潰すわ。

その後、私は医科学研究所付属脳神経解析センターを後にし、北部でワクチンの連中と戦っていると思われる、仲間たちを助ける為に北進中であつた。

それにしても、南部は研究所がいっぱいね。

どこの研究所もおそらく、漁つたら狂気の計画が進められていそうだけど……それも後で調べてなんとかしないとね。とにかく私は

あらゆる計画を中止に追い込む。

AS計画も、他の計画も。

そして、どんな手段を使つてでも 佐井学園を倒してみせる。

「……………ッ」

研究所が立ち並ぶ、侵入口から見て南部の地域。ある研究所の影から、おそらく私と同じ年くらいと思われる、それなのに異様な雰囲気放っている一人の男が歩いてくる。

その男には何処か、見覚えがあつた。

「【波動操作】……………ッ！」  
ウェーブハウンド

「名前で呼んで欲しいな。俺にはくがりゅうせい久我劉生せいって名前があるんだが？」

久我劉生……………間違いないわね。

私が学園を離反したあの日に戦つた 五本指の序列第二位。

「何の用か知ら？」

「言わなくてもわかるだろ格下……俺はテメエに恨みがあるんだ」

「そうなの？　そういえば貴方、AS計画だったかしら？　その計画をまとめたレポートに予備品<sup>スベテ</sup>って書かれていたけど、貴方って所詮学園にとっては予備でしかないのね」

「図に乗ってんな……　　ったく、まさか複数の侵入者の中にテメエも居たとは、ムカつくヤツを一度に2人まとめて潰せるのは俺にとつては好都合だな」

「へえ、ムカつくヤツが2人ね。じゃあもう一人が私たちの他に学園を急襲した　　謎の一派の一員なのね」

そこで一旦、Aランク能力者同士の会話は途切れた。久我の顔に怒りが満ちて、次第に彼の拳に力が籠められていくのがわかる。久我ったら、よっぽど私が憎いのね。

それもそうか。あの日久我は　　格下の私に負けたんだからね。

「折角端正な顔してるのに、怒ると醜いわよ？」

相変わらず、久我はイケメンね……金髪のホスト風の男だわ。しかも、今日は佐井学園の緑色の制服とは違う　　紅色のホストスーツを着ているわ。

一体、どういうセンスなのかしら……まあ、似合ってはいるけどね。

「テメエは俺達トレント<sup>トレント</sup>ではなく、この俺　　久我劉生がブツ殺す」

「そう、なら私も　　もう一度格下に負ける悔しさを味あわせてあ



なによこれ……もしかして、火傷している？

「そ、その光は……ッ!？」

「テメエも知つての通り、俺の波動操作はこの世に存在するあらゆる“波”を操作する。振動数、周期、振幅、波長、波数……どれも自由自在に操れるのはご存知だろ？」

「へ、ふふ……一応、前にも貴方とは戦ったからね」

「よし、もう一発撃つてやる　正解を言ってみるんだな」

答えは返ってこない。むしろ問題を出題され、またしても無数の光線が放たれる。四方八方に放たれた光線は建物の壁を溶かし、アスファルトを溶かし、氷の装甲すら貫通してしまう。

ないよりマシと思って、私は氷の装甲何重にも渡って製造したが、真っ白で高熱を放つ光線に全てが貫かれてしまった。それでも、逃げるだけの時間稼ぎにはなったわ……。

やっぱり、ないよりはマシみたいね。

それにしてもあの光線は……久我の能力から考えて、もしかして

「光波……光の、変換？」

「正解、太陽光を変換してるんだ。触れると熱で人体は消し飛ぶが……まっ、夜間の月光じゃここまでの威力は持たねえし、要するに昼間限定の必殺技だな」

言いながら、久我は無謀にも私に向かって走ってきた。なに考えてるのかしら……いくら強いからってその行動　あまりにも無謀

にしてお馬鹿すぎないかしら？

そう思いながら、私は水分を集め 先端が刀のように鋭利な氷柱を製造する。

今度はそれを念力で放ち、久我の額に刺し込んでやろうとした。しかし、

氷柱は久我に触れる寸前に綿と化し、ふわふわと宙を舞うだけになつた。

やっぱりね……久我は超弦理論まで扱う超能力者よ。

素粒子レベルの波として変換し、全く別の物質を作ることだってできるわ。久我はその操作を行つて 氷を綿に変換したのね……でも、ここまでは予想済み。

馬鹿な事に久我は拳を振り上げている。殴るつもりね……愚かな氷の装甲を製造する。さて、拳を突いて痛がりなさい それが貴方の最期よ。しかし、

バゴン！ と、

氷の装甲が粉々に、ハンマーで砕いたような粉々になってしまった。

「……ッ！？」

「無駄だ」

さらに次の瞬間、懐に潜り込んだ久我の左拳が振り上げられる。顔面を守ろうと、反射的に腕をクロスするが、

「ぎゃ、あ……ッ！？」

ガゴツ！ と、ガードを簡単に突破した拳が顎に突き刺さる。それを受けただけで、首がゴキリと嫌な音を上げた。私の体はまるでサッカーボールのように回転しながら、アスファルトの上へと叩きつけられる。

激闘と吐き気、息苦しき、目まいを感じた……けど、多分これは手加減。本人がそうだと言っていないなくても、私にはこれが手加減に感じられた。

もし久我が本気を出していれば 私は今頃肉塊に変わっているハズよ。

「その気になれば拳一つでビルを破壊できる」

「う、く……く、ふっ……！？」

立ち上がる事すら困難になった私は、脇腹に突き刺さった蹴りの威力に負けて、ごろんと仰向けに転がった。口の中に苦い味が広がる。

舌を嚙んだ時の出血と、腹から込み上げてきた血液が混ざり合っている。

私の能力に限界は無い……けど、痛みで集中できず、簡単な計算式さえ組めない。

「さて、テメエはどうやって殺そうかな……？」

まずい……このままだと、本当に 殺されてしまう。

やっぱり前回の勝利はただの奇跡だった。そして、奇跡は二度も起きない。

そんな風に考えて、諦めかけていた。



「西園寺イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
イイイイイイッ！」

その時、

バゴ！ と言う凄まじい打撃音が炸裂し、私の視界から久我の姿  
が消えた。

その代わりに、新しい人影が現れる。

丁度、その人影は飛び蹴りの体勢から着地し、私を抱き抱えた所  
だった。

「 じま、こっちこっち！ 早く、久我が立ち上がる前に！」

また、今度は女の子の声が聞こえた気がする。

ハッキリとは聞きとれなかったが、その声は誰かの名前を読ん  
でいた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお！」

次に聞こえたのは男の雄叫び。僅かに体に伝わってくる震動。

そう……なるほど、今この人は走っているのね。

全力で、駆けて……そして、この声は……やっぱりそういうこと  
なのね……。

## 第220話 下部組織

徳川プラットフォーム小隊をブツ潰した後、オレ達は当初の予定通り、学園内の地下にある巨大な武器庫を破壊する為に二手に分かれ、現在警備の連中を潰しながら地下を突き進んでいる。

オレ 早川悠はアナスタシアのクソアマとペアを組んで、物騒な地下世界を歩く。警備に当たっているのは何処かの傭兵と、佐井学園製の電動鎧プラットフォームに乗った学園の職員達だ。

電動鎧は、『超能力者ではない者が、超能力者に打ち勝つ為の戦術兵器』というコンセプトの下に開発された、人が乗り込んで操作するロボットのようなものだ。

コイツが馬鹿にならねエ戦闘力を誇っているが……まア、オレの敵ではねエ。

「にしてもアンタ、あの機械と随分戦い慣れてんのねえ？」

「まア、電動鎧プラットフォームの性能テストには何度も付き合わされたからな」

「あら、その役目はアンタだったの？」

「ふん、オレ相手に何処まで戦えるかが基準だったらしい……くっだねエ」

しかも、オレは10秒以内に20体を破壊したと言うのに、当時の研究者たちはオレ相手に10秒も持ったから大成功……とか騒いでいやがったな。今思えば馬鹿馬鹿しいというか、あまりにもハドルが低すぎて腹の底から笑っちまいそうだ。

「で、これからどうするんだい？ アンタも随分能力使っちゃまった

でしょ？」

「心配すんな、残り25分……十分だア」

楽勝だつてんだよ佐井学園……オレは今まで何を恐れていやがったんだ。制限時間というハンデがある状態でも、ここまで優勢に戦っているじゃねエかよ。

血を見たくなかったのもあつたが……。

何も……こんな事なら特異点潰しだつて、やらなくてもよかつたんじゃないか……。

「……チツ」

「それにしても、何やら不気味な気配がするね……」

「……はン、オマエも気付いていたか」

そう、さつきから異様な気配がするのだ。ここに入ったその時から、オレが考え事をしている最中にもずっと、その気配は消えることなく 今も続いているのである。

「コソコソしてねえで出てきな！ テメエらはアタシらがブツ潰してやるよ！」

アナスタシアがコソコソ隠れているクソ野郎共へ叫びかけたその時、ザサ、という異音が響いた後に複数の影が、四方を囲んで逃げ道を完全に塞ぎやがったのだ。

「傭兵が30人、電動鎧が10体……随分な戦力だ。ンで、オマエが<sup>パワードスーツ</sup>一団を率いる隊長みてエな存在かア？」

一団の中から現れた、戦闘服を着ているものの、どうい理由かヘルメットだけを外している筋肉質な女が、指の関節を鳴らしながらこちらに近づいてくる。

ポニーテールの、いかにも軍人って雰囲気なの女だ……クソゴツいなこの女。

「襲撃者……貴方達はどうせ知っているのだろう？ 私たちはトレントに雇われた、下部組織というヤツだ」

「トレント……おかしいわね、こちら辺の警備を行っているのは、確か念力同好会のハズなんだけど？」

「彼らには別な任務に回ってもらった。君らは4人を排除するのは我々だ」

「その言い草……まさかっ」

「チツ、近藤達もコイツら相手に戦ってんのかア」

ソイツはまずいな。あの野郎共は単なる傭兵ならともかく、超能力者と対等に戦う為にに開発された電動鎧パワードスーツの威力を知らねエ。油断して殺されているかもしれねエな。

ま、連中が死のうが知ったこつちねエが。

とりあえず、この筋肉女に質問だけしておこう。

「一つだけ聞かせるオ……そのトレントってのは誰がまとめているんだア？」

「君は知らないのかい？ 確か……【波動操作】ウェーブハウンドだったか？」

ウェーブハウンド  
波動操作だとオ……………？

チツ、そオカ……………トレントはそのクソ野郎がまとめてるんだなア？  
面白エ……………どっちにしても、ソイツを潰せるのはオレだけだ。な  
ら、オレは。

「アナスタシア、オマエ……………泥人形ゴレムがあればコイツら潰せるよなア  
？」

「まあ、そうだけど……………って、アンタはどうすんの？」

「ああ、そろそろ　あ……………のクソ野郎を潰そうってなア……………」

アナスタシアは複雑な表情を浮かべ、しばらく黙りこんでしまっ  
た。

が、覚悟を決めたのか

「行きな、誰だか知らねえけど……………アンタにとってソイツは好敵手ライバル  
なんでしょ？」

「案外アツサリ行かせるんだな、オマエ」

「ここはアタシが食い止める。アンタは好敵手ライバルに勝ってきな！」

「はん……………そんじゃまア、粗大ゴミの解体作業を　始めるとしま  
すかア」

その宣言の直後、オレは首筋にある変換機のスイッチをONに設  
定し、風の操作を行ってロケットの如く加速する。空中で右足のみ  
を伸ばし、眼前の傭兵の顔面を捉えた。

瞬間、ゴツ！ という、硬いものを砕くような音が炸裂する。傭兵は少なくとも、目測で10メートル以上は遠くへ飛び、ダン！ という痛々しい音を立てて、背中を壁に叩きつけた。

それを確認した直後に着地を行い、瞬間的に暴風の膜を全身に張り巡らせる。傭兵や電動鎧パワードスーツから放たれた弾丸を全て反射する。弾丸はオレの体を貫くどころか 撃った自分達の体を貫いて、殆ど生身の傭兵達は鮮血を流して床に倒れ込んだ。

相手が混乱している隙を突き、オレは再び風の操作で加速、出口を目指す。

後はこの場合は アナスタシアのヤツに任せるとしよう。

さアて、と……今から泣いて土下座させてやるよオ 久我の三下ア。

### ラウル・ゲリエSide

地下の武器庫にて、俺と近藤さんはペアを組んで敵と戦っている……んだけど、一体これはどういうことなのだろうか。俺達の敵は念力同好会、主に念動力テレキネシスの使い手で構成され、基本的に殆ど武器を使わないと言うのが上層部の報告だったけど……。

なんで、俺達の敵は武装した人と 変なロボットのようないかなんない？

オマケに兵隊はともかく、あの変なロボットの戦闘力は尋常じゃない。

「Father Son Holy spirit Amen  
御父と御子と精霊の御名によりてアーメン」

儀式用のバチを頭上で叩き合わせ、オグンの力で作り出した鉄矢を、ロボットの装甲が薄いと思われる上面を狙って攻撃する。

これまでの経験で、俺の鉄矢は正面装甲を貫く事が出来ない。仮に破壊できても、精々装甲の一部を溶かしたり、中途半端な穴を開ける程度に終わってしまう。しかし、上面は基本的に視界を確保するためにガラス張りとなっている。多分防弾ガラスなので、銃弾は防げるのだろう。

しかし、砲弾並の威力を誇る俺の鉄矢は 防ぐことが出来ない。

「波アアアアッ！」

近藤も威力強化の術式を組み上げ、日本刀だけでロボットと互角に戦っている。彼の攻撃は頑丈なロボットの防弾ガラスを突き破り、中に乗っている人の脳を真っ二つに切り裂く。

「やれやれ、俺も負けていられないね ツ！」

言いながら、バチを頭上へ上げた その時だった。

突然ガシツと、右の手首を頭上に持つていく前に誰かに掴まれしまった。

「しま ツ!?」

まずいと思った俺は、無理に振りほどこうとはせず、左腕の肘を勢いよく引いた。

打撃音と同時に、ゴキゴキと言う嫌な音が響いてくる。

そして数秒後、ようやく右の手首が解放されたので 俺は咄嗟に後ろを向いた。

「げっほ、ごほっ！ げほげほっ！」

咳き込みながら、お腹ほ押さえて蹲っていたのは 佐井学園の制服を着ている、褐色の肌に肩にかかる程度の黒い髪の毛、木の板に黒光りする鋭い物が刻まれた、剣とも棍棒とも捉えられる武器を持った少女である。佐井学園の制服を着ている……と言つことはこの生徒か。

いや、でもあの武器、俺の記憶が間違っていないければ、あれはマクアフィテル。木の板に黒曜石の刃を刻み込んだ、マヤアステカの戦士が使っていた木剣だ。

そして何より あの子自身にも見覚えがある。

「貴女は……もしかして、ミキストリ？」

「お久しぶりです、先輩」

ミキストリ。

俺がサヴェイトに入る前、米国に潰された魔術結社で面倒を見ていた 俺の後輩だ。



## 第220話 下部組織（後書き）

キャラクターNo003

くにむねいぶき

・ 国宗伊吹 ×10が最高、ナシは無能という意味。

通常モード。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：ナシ

知力：

敏捷性：

地位：

総評：女子高生にしては実力は高い方、そこらの不良よりは強い。

## 第221話 先輩と後輩

祖国ハイチは独立以来安定期というものがなく、国民も大半が貧困で苦しみ、俺も日本では小学生のころから家の為に仕事を行っていた。そんな中、俺は魔術と言うものに触れ、賃金も待遇もよかつたという理由で、メキシコにある魔術結社【メシーカの太陽】の一員となった。

メキシコ政府の直轄部隊で、その任務は軍と共に麻薬組織の取り締まりを行う事。

主に地元のアステカ系の魔術師や、ブードゥー教の流れを汲む魔術師で構成され、最盛期には100人を超える魔術師が組織に所属していた。

しかし3年前、反科学的な魔術組織の巨大化は、次第にメキシコ政府の不信感を募らせ、アメリカのCIAも魔術師の危険性を説き始め、次第に組織の予算は削減されていった。

それでも組織はしぶとく存続し、勢力を保ち続けたが、

去年の冬、サヴィエトの魔術師がニューヨークで爆破テロを起こした。

アルファ隊との交戦で発生した爆発が、世間ではそう捉えられたいらしい。最初の頃こそ中東で活動するテロ組織によるものと思われていたが、やがてテロ事件には【メシーカの太陽】が関与しているとアメリカのお偉いさんは言っただけらしい。

その事がきっかけで、やがては米軍が介入する事態に発展。

組織はウシユマル遺跡付近にて、大半の魔術師が殺害された為、壊滅した。

俺と彼女 ミキストリは、生存した数少ない元組織の魔術師なのである。

「ミキストリ……」

「確か組織壊滅の原因にして我らの敵　　サヴィエトに身を置いた  
ハズでしたが？」

「サヴィエトからは、とつくの昔に身を引いたよ……」

「そうだったのですか、それはこちらとしても都合がいいですね」

「どういう……意味なんだい？」

「ラウル先輩、私は何故　　倒すべき科学側に身を置いていると思  
いますか？」

俺達は基本、科学を妬み嫌っている。科学によって開発された武  
器に蹂躪され、科学によって開発された生物化学兵器で苦しみ、科  
学によって開発された爆弾で粉々にされた。

本来、科学と俺達は敵対関係にある……のに、ミキストリは何故  
……？

「先輩との接触を図る為です」

「お、俺との……？」

「先輩は佐井学園を襲撃する……という情報がありました、その情  
報が正確であるか、そして先輩との接触のために　　私は超能力者  
になりすましていたのですよ」

「超能力者って……君は魔術師だ、超能力なんて……」

「当然使えません。ですが、魔術で誤魔化す事なら出来ます」

「第一、佐井学園は魔術師を狙っているという話が……」

「問題ありません。一応素性は隠していますが、ここでの名は鳥栖美樹とすみです」

表情一つ変えずに淡々と話を続けるミキストリ。

俺との接触が目的だというのはわかったけど、でもどうしてだろうか。何が目的で彼女は俺との接触を図ったのだろう。しかも、憎き相手に化けてまで……。

それに、俺が佐井学園を襲うという情報は一体、どこから漏れたんだ？

「……貴女は誰の指示で動いているんだい？」

「ケツアルコアトルですよ」

その名前を聞き、思わず表情を歪めてしまった。

何故ならケツアルコアトルという人物は俺達の上司だった人だから。

「……彼、生きていたのかい？」

「ええ、テポポチトリ先輩が生贄となりましたので」

「生贄……か、アステカの魔術だね」

「そういうわけです」

アステカではどうも、人間を生贄にする人身御供と言うのが神事らしい。俺の信じるブドゥー教でも動物を生贄にすることはあるが、アステカの社会ではどうも違うようだ。

アステカでは祈りの為に 新鮮な人間の心臓が必要なんだとか。

「さて、単刀直入に先輩へ用件を伝えますが……」

「なんだい？ 組織が再結成でもされたのかい？」

「それは羨ましい事ですが、残念ながら違います」

と、言ってきた瞬間、

マクアフィテルを構えたミキストリが、殆ど瞬間的に間合いを詰めてくる。鋭い黒曜石が刻まれたマクアフィテルは俺に向かって振り下ろされ、反射的に避けた俺のすぐ横を斬る。空間を刻んだことによる僅かな風と、身の危険を感じた俺は、咄嗟に彼女との距離を取る為に後ろへ跳躍した。

続けるように、ミキストリが俺との間合いを詰めてくる。俺は身を守ろうと、咄嗟に頭上でバチを叩き合わせ 魔術で薄い鉄板を製造した。

ズガツ！ と、薄い鉄板がミキストリの斬撃を浴びる。

斬撃を受けた個所が捲れ上がっている……引き切られたかのようだ。

そう、マクアフィテルは叩き切る剣ではなく 引き切る剣なのだ。

「どういつつもりだい？ ジャガーの戦士ごっこ……ではなさそうだね」

「単刀直入に言います。死んでください、先輩」

死んでください……だって？

どうしてミキストリが俺を殺そうとするのか、その意味を考える暇もなく、ミキストリのマクアフィテルが横薙ぎよこなに振られる。俺は咄嗟に身を屈め、そこから匍匐前進を敢行。ミキストリは凹凸の剣つるぎを薪割りのように振り下ろす。

足を開き、どうにか斬撃を回避した所で、俺は再びバチを叩き合わせた。

生まれた3つの鉄矢は、高射砲のようにミキストリの頭部を狙って射出される。

反射的になのか、ビクツ、と体を震わせながら彼女は数歩後ろへ後退する。その隙を突くように立ち上がった俺は、バチを叩き合わせる物ものを製造した。

「鋭い剣ですね……エペですか、それは？」

「生憎、スピード命な男なんで……俺にはこれが使いやすいんだよね」

エペとは、貴族が好んで使っていた剣の一種。細くて軽量で片手でも持てる、まさにスピード重視の実戦的な剣だ。使用方法は切るのではなく、突く。

刃先をミキストリへ向け、彼女の腹部を狙って突き進む。

「さて……ッ！」

エペを握る右手を突き出し、ミキストリの体へ突き刺そうとするが、ミキストリは突撃を回避してマクアフィテルを振り回してきた。咄嗟にエペを構え直し、マクアフィテルを受止める。細い割に頑丈

な剣は、マクアフィテルの重みある斬撃に耐える事が出来た。

何度も刃と刃が交差し、互いに攻撃を繰り返しながら俺は彼女へ話をかけた。

「説明してもらおうかな、君が俺を殺そうとする理由を……ッ！」

「簡単なことです。一瞬でもサヴィエトに貢献した裏切り者を殺すだけです」

マクアフィテルが地球を割れと言わんばかりに垂直落下。それを受け流し、ミキストリに生まれた隙を文字通り、エペという細身の剣で勢いよく突く。

狙いは外した。微かに刃が彼女の腹に触れ、皮膚を切って彼女に苦痛を与える。

「う、あ……ッ！　せ、先輩……この……ッ！」

「無駄だよ。君は身体能力は高いけど、剣術には疎いようだ……俺には勝てないよ」

それが唯一の救いであった。普段から近藤さんに扱かれている俺と、剣術素人のミキストリとは圧倒的な差があった。ミキストリの腕前では俺には多分勝てないだろう。

「そう、ですね……ですが、先輩の敵は私一人ではないのですよ？」

「……どういう意味だい？」

「私が鳥栖美樹を名乗り、トレントに所属している以上　仲間として利用出来る人もいるのです」

「トレント……念力同好会ではないのかい？」

「そんなものと一緒にしないでください。それにしても形勢は明らかに不利ですし……先輩、一旦退かせてもらいますね」

「なっ、ミキストリ　う、あアアッ！」

ミキストリがマクアフィテルを天へ掲げた瞬間　眩い閃光が周囲を包み込む。

目が痛い、焼けるような感覚に襲われ、咄嗟に両手で目を押さえる。

やがて光は収まり、視界も回復してきた所で前を見ると……。

「い、ない……？」

そこにミキストリの姿はなかった。

やられたね……刻み込まれた黒曜石は時には槍としても活用できる。何らかの光を反射させることによって、対象物にその光を浴びせる事が出来る……アステカ式魔術の一種だね。

上手い術者はそれで攻撃もできるらしいが、今のは逃走用の光か……。

「ミキストリ……」

俺を殺すのは大いに結構。一度はサヴィエトに身を置いたのも事実だし、サヴィエトの得になる仕事もしようとはした。ただ、藤島圭介という男が強かった為に失敗したが……。

でも、どうして彼女なんだ……。

何故、彼女が戦わなければならぬんだ……。



近藤さんとトレントの下部組織が交戦を続ける中、俺は一人放心状態であつた……。

### 明智凧紗 Side

学園西部、私は校舎側を移動している。確か西部には白藤が居るハズだ……戦いの物音が聞こえないということは、既に白藤とワクチンの戦いは終了しているらしい。

だけど、白藤は瞬間移動テレポートを使えるハズだ。戦いが終わったら、真っ先にその魔法を使ってやってきそうなものだが……。

と、その時 壁に凭れかかる一人の少女を目撃した。  
見知つた顔だつた。

「白藤！」

私は叫びながら少女に駆け寄る。傷だらけの白藤が気絶している。脈もまだある、呼吸も整っているので、恐らく本当に気絶しているだけだと思う。

右の手首がおかしい、どうやら右手首を骨折しているようだ。そして、白藤から数十メートル離れた所に  また一人少女が倒れている。

彼女は手と足と頭から血を流している……けど、命に別条はなさそうだ。

状況から察するに相打ちか、どちらかが勝利した後気絶したか。だけど、白藤のほづが軽傷みたいだし……恐らく勝つたのは白藤だろう。

「とにかく、後方へ運んだほうがよさそうだ」

今の白藤は戦闘不能だ。戦闘が行えない状態では危険極まりないし、敵が来ていない今のうちに退避させておいた方がいいだろう。後で雪乃と会った時に言わなければな……。

「……ッ!?」

凄まじい悪寒を感じ、白藤から離れたまさにその時である……私  
がいた場所に、一発の銃弾が撃ち込まれ、アスファルトに当たった  
銃弾は何処かに跳ね返ったらしい。

咄嗟に周囲を見回すと、校舎屋上の影から黒ずくめの人影が見え  
た。

「……そこか!」

サッカーボールと同程度の大きさの炎弾えんだんを作り出し、野球のボ  
ールを投げるピッチャーのように炎弾えんだんを狙撃兵へ放つ。爆発と同時に  
悲鳴が響き渡ってきた。

しかし、それで終わりではないようだ、

ゾロゾロと 建物の陰から武装した黒ずくめ達と、数十体の口  
ポットが現れる。

まずいぞ、アレは電動鎧パワードスーツ……対能力者戦を想定して開発された、  
佐井学園の科学技術の結晶体のような最新兵器の一種だぞ。それが  
数十体……しかも、その周りには複数の黒ずくめ達が銃口をこちら  
に向けている。分が悪いつてレベルじゃないぞ……っ。

「なぞ、な……っ!」

「ん……し、白藤ッ!？」

背後から声が聞こえたので、少し後ろを確認すると　白藤が立ちあがっていた。

白藤は右手首を押さえ、力が入っていない足で体を支えている。少しでも衝撃が加われば倒れてしまいそうなほど、今の白藤は弱々しい。そして同時に　白藤の声を初めて聞いた。

普段言葉を発しない口で喋って……白藤、かなり無理をしているみたいだ……っ。

「わ、たしも……戦っ……っ!」

本当に初めてだ……白藤の声を聞いたのは。

確かにこの距離で携帯を見せられても、私の視力では文字が読めない……が、そもそも白藤が口で喋って事なんて今までなかった。これはある意味　大事件なのかもしれない。

「白藤……」

とりあえずどうする？

白藤は戦いたいらしいが……今の彼女はボロボロだ。とてもじゃないが、今の彼女に戦闘能力があるとは思えない。だから私は白藤が戦うことには反対だ。でも、なんだろう……あの強い意志を感じる光のような眼差しは。まるで、何か重大なモノを背負っているような。

断りづらいぞ。私もこれ以上佐井学園絡みで、あの変態に迷惑をかけたくないと言う思いで戦っているだけに　その眼差しは胸の奥に突き刺さるものだぞ。

反則だぞ……白藤っ。

「わかったぞ、仕方ない……前衛は任せろ　白藤！」

そんな反則者に　私は協力をすることにした。  
フレンドの仲間として。

そして、大切なモノを背負う者同士として　。

## 第221話 先輩と後輩（後書き）

キャラクターNO004

・ あけちなぎ 明智凧なぎ ×10が最高、ナシは無能という意味。

通常モード。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：有する能力は微妙だが、身体能力の高さで実力は高い。また、  
頭脳も明晰で様々な方面で地位もそこそこ高い。

## 第222話 久我劉生

ここは佐井学園の何処なのだろうか。俺は傷だらけの西園寺を背負い、木山と一緒に学園のどこかをコソコソと移動していた。さっきの、ガラの悪い感じの男に見つからないように。

あの野郎が何者かは知らないが、西園寺がこのザマなんだ……多分、俺や木山が戦ったってどうにもならない。肉の破片が飛び散り、もつと悲惨な結果を招くだけだろう。それでも、西園寺を助けて逃げる事なら出来た。あの野郎に不意打ちを喰らわせ、その隙に西園寺を救出したのだ。

あの野郎も西園寺に勝っていたから油断していたんだろう。

ホント……飛び蹴りが入ったのは奇跡だな。

だけどあの野郎、飛び蹴り程度でくたばるような ヤワなヤツではねえだろう。

「雪乃、雪乃！」

「おい西園寺、しつかりしろよ」

ここまで逃げれば大丈夫だろう、と思った俺と木山は立ち止まり、とりあえず西園寺を地面に寝かせて彼女の様子を見る。ぴくぴくと動いているので、気は失っていないみたいだ。

「う、く……はは、やっぱり……あなた達だった……のね？」

虚ろだった目にも、ようやく光が入ってきたような気がしたが、それでも全身が小刻みに震えているので、おそらく彼女はかなりのダメージを受けたのだろう。

よく見れば肌も赤い。微妙に火傷をしているのかもしれない……

…。

「雪乃、大丈夫？」

「大丈夫、よ……もう能力を使えるくらいには回復したわ」

言いながら、西園寺は俺と木山の肩を借りて立ち上がる。これは強がりだな……肩を借りなければ立ち上がれない程に弱っているのに、西園寺は無理やり立ち上がったんだ。おそらく、支えるものがなくなってしまうえば、今の西園寺は再び地面に倒れ込んでしまうだろう。

それほどまでに弱っている。足腰もふるふる震えているように見える。

この野郎……無理しやがって。

「雪乃……まさか、もう久我と戦いに行くの？」

「久我？ 誰だよソイツ、さっきのあの野郎か？」

「え、そうだけど？ 浜島が蹴っ飛ばしたアイツが五本指の一人久我劉生だよ」

「おいおい、アイツ強いんだろ？ 第一万全な状態でも勝てなかったのに、今の西園寺じゃ……」

ていうか、出来れば俺だってあの野郎とは会いたくねえよ。だって俺、アイツの顔面に不意打ち喰らわせたんだ。多分ダメージにはなっていないと思うが、やっぱり相手は怒るじゃん？

つまり、今アイツと会えば……俺は ぶち殺し確定じゃねえか。

「心配しないで、久我は後回しだわ……作戦を練らないとあの男には勝てないわね」

「勝つってテメエ……どうやって勝つんだよ、あんな化け物相手に……」

「あたしも浜島と同じ意見だよ。あれって本当に勝てる相手なの？」

「一度だけ勝った事があるわ……つまり、久我だって無敵の存在ではないのよ」

久我に一度だけ勝った西園寺って……やっぱり西園寺も十分化け物だ。

でも、その西園寺がフルボッコにされていたんだから……。

やっぱり、久我って野郎は怖いなあ……ああ嫌だ、会いたくねえ……。

「……けど、そいつは後回しにするんだろ？　じゃあ俺達はこれからどうするんだ？」

すると、西園寺の表情が一瞬暗くなっただが……やがて希望に満ちた真剣な顔を向け、

「凧紗達と合流後、AS計画阻止の為に　破壊工作を開始するわ」

「え、AS……計画？」

俺は再び、意味不明な単語を聞いてしまった。

近頃は専門用語が多くて　ヤンキーの俺には理解がし難いモンだぜ。



久我劉生Side

俺はバイクで移動して、学園内にある売店が立ち並ぶエリアへ移動していた。広い佐井学園には複数の売店が存在し、その中でもここは特に栄えた商店街のような場所である。また、近くには学食とも言えるレストランも存在しており、俺はその中の席に座り込んだ。その中には、外国人の血が混ざっているという鳥栖美樹の姿もあった。

「久我さん、どちらに行っていたのですか？」

「侵入者の排除だ……チッ」

「その様子ですと……」

「ああ、失敗した。西園寺もムカつくが……あの野郎、俺の顔面蹴りやがったな」

まったく痛みのない、蹴られた箇所を軽く左手で触ってみる。蹴りの威力はそこそこ鍛えた野郎並ではあったが、所詮は素人のレベルだろう。だが、不意打ちでも俺を蹴ったのは事実。それだけで今にも暴れたくなるほどムカつく。ブツ殺したくなるほどにムカツク……。

「あの野郎ムカついた、西園寺とまとめて殺し決定だな」

「今からでしょうか？」

「ああ、だが下部組織の連中から通報があった」

「何の通報ですか？」

それを聞かれたその時、俺はホストスーツのポケットから携帯電話を取り出す。口頭で説明するののも一つの手段だが、いちいち面倒なので、鳥栖にはその画面に表示された文字を見せた。

鳥栖は画面を覗き込む  
やべえな、こういうシチュエーションは好きかもしれねえ。

「新たな侵入者3人、全員が能力者、念力同好会の壊滅……」

3人の能力者と思われる連中が佐井学園に侵入し、そちらの警備に回っていた念力同好会が殆ど壊滅したそうさ。やれやれ、新勢力か……一体どこのクソ野郎が攻めて来たんだ。今日は狙ったように侵入者が現れて、いちいちム力つく事を繰り返しやがるな。

まあ、念力同好会自体は小規模だし……侵入者も大した能力者ではないだろう。

「これを潰すのでしょうか？」

「ああ、徹底的にな……お前はどっする？」

「これから戦線に戻ります。準備は完了しましたので」

「そうか、まあ精々頑張れや。こっちはこっちの仕事をする」

「はい、お気をつけて」

「そつちも無理はするな」

鳥栖に向かつて手を振りながら、俺はレストランの階段を下りる。念力同好会をこの短時間でブツ潰した連中も気になるが、所詮は大した能力者ではないだろう。ソイツらを潰した後は西園寺と足癖の悪いヤツだ。特に後者は俺の顔面を蹴った……これはもうグチャグチャコース確定だ。

そして、そいつらを全て倒した後は。

「エアオペレーション【大気操作】……早川悠か……」

ミネット・ローランSide

リーリヤ隊長からの指示で、ミネット達アルファ隊もヴィンペル隊の手伝いの為、ミネットはあの人が普通っていたと言う佐井学園へ潜入した。

もちろん、ミネットだけでは力不足なので、今回は2人の協力な助っ人がいる。

「相変わらず、昴の能力は綺麗だわ。あのクソツタレ共の攻撃が七色に変わるんだもの」

「物質であれば何でも破壊からな、俺の能力はそういうものなんだ」

緑色のワンピースを着ている、左右の中央でまとめ、両肩にかかるくらいまで伸ばした金髪を持っている、右目が赤で左目が青のオッドアイの少女。

アイリス・オースティン。

ミネットと同じアルファ隊所属で、木下先輩と同じ特隊員の一人。もう一人、何処かの制服と思われる紺色の学ランを着ている黒髪の少年。彼の名前は北野昂きたのすばるでアイリス先輩の協力者であり、同時に親友でもあるらしい。

ミネットの目から見たら、2人は恋人同士にしか見えないけどね……。

「アイリス先輩、この後はどうするんですか？」

ミネットは本来の口調を我慢し、目上の人に敬語で質問をする。  
「ごく当たり前の事なんだよ。」

「そうね、とりあえずヴィンペル隊の連中を遭遇しちまおうかしら？」

「俺も同じ意見だな。仲間が多いほうがいいだろう」

「うん、それじゃあ高い魔力を探せばいいんですね」

「ええ、お願いするわ ミネット」

任せて、ミネットはこれでも索敵の達人なんだよ。  
戦闘は不得意だけど、その分サポート系の術式は数多く覚えてい  
るんだから。

だからあの人も、もっとミネットを頼ってもいいのに……。  
今頃何しているのか、とっても心配なんだよ？

「強い魔力を持つ人が数人います。でも、魔力は殆どないけど、近くから殺気が」

ミネットはある一点　とある建物の屋上付近を見ながら報告する。

そのあたりから、凄まじい殺気を感じるからだ。アイリス先輩と北野さんも、ミネットが警戒している建物の屋上を見上げる。やがて、屋上に柄の悪い金髪の男が現れた。

「失礼、そこの一団」

言い終わると、柄の悪いホスト風の男は建物から飛び降りる。どう見ても、この建物は5階ほどの高さがあったのに、その屋上から飛び降りても　男はとても綺麗に着地する。

魔法……ではないね。ひよっとしてあの人、超能力者なのかも。ということ、さっきの人達と同じ　敵？

「すごいわね今の……ところで、貴方はどちら様？」

アイリス先輩がミネット達の先頭に立ち、ホスト風の男に接近してゆく。

「久我劉生<sup>くがりゅうせい</sup>、一つだけ言ってもいいかな？」

「なにかしら？」

柄に合わない笑顔だね……もしかして、あの人猫かぶりしているのかも。

と、そんな風に考えていた　、

「テメエらが念力同好会ブツ潰した事は分かってんだよ、クソボケ」  
刹那、急に凶悪な本性を現した男が、その膝を凄まじい勢いで突き上げた。

ズゴン！　と言う衝撃と、骨と内臓が砕けるような嫌な音が響き渡り、アイリス先輩はたったの一撃で何メートルも吹き飛ばされる。激しく背中を近くに生えていた木にぶつけて、そのままアイリス先輩はぐったりと、意識を失って崩れ落ちてしまった。  
うそ、あの……アイリス先輩が……たったの一撃で？

「あ、アイリス先輩っ！」

「な、お前……よくもアイリスを！」

「ちょっと不調だったか。あの女……まだ生きてるな」

「おい、こっちはお前に聞いているんだ。いきなり何をするんだ」

「それはこっちのセリフだな。テメエらは何故学園に侵入した？俺は学園の人間で、侵入者を排除しろつてのが俺の任務らしく、んで……一番厄介そうな女から始末したわけだ。ソイツ　特異点なんだろ？」

一番厄介そうって……確かに、アイリス先輩はこの中では最強の存在だけだ。

でも、ひどいよあの人……こんなのとてないよ、あんまりだよ。

「さて、次に厄介そうなのは……テメエだな」

「……ッ!？」

久我劉生と名乗るホスト風の男は、ミネットに凶悪な顔を見せると近づいてきた。ゆっくり確実に恐怖を煽りながら、ポケットに手を入れ狂気的な笑みを浮かべて。

ミネットは一応、魔法のステッキを構える。

通じるかは分からないけど、一応水の魔法を放ってやるんだよ。

「させるかよ……お前っ!」

北野さんが拳を固く握り締め、かなりの速度で久我の懐へ潜り込む。

しかし、久我は笑顔を崩さない。

「引っ込んでろ、雑魚」

宣言の直後、久我は固く握った五本の指を北野さんの顎へ打ち込む。ゴキッ! という衝撃が炸裂すると、北野さんはぐるんと空中で何回も回転しながら、やがては地面に落下する。

背骨が砕けたのではないか、と言っほどの痛々しい嫌な音が炸裂した。

「ぐ、ああ……ッ!」

「北野さん!」

苦しさのあまり、北野さんは顎と背中に手を伸ばしていた。

久我は再びミネットに近付いてくる。

何を語りながら……。

「第四位を倒した程度ではしゃぐな、物質崩壊。マターコラプス テメエの能力は触れなきや何の意味も成さないだろ？ 理論上は人体の崩壊も可能だが……処理しきれない速度でぶん殴っちまえばこっちのモンじゃねえか」

ミネットは確信した……久我劉生は 滅茶苦茶強い。

アイリス先輩も北野さんも、みんな一撃でやられてしまった。あの腕力は多分能力によるものだと思うけど……それでもすごい。アレに2人も負けてしまったんだから……。

緊張が走る。同時に嫌な汗が噴き出てきて、背筋も凍り、全身がビクビク震える。それでもミネットは魔法のステッキを構えて、久我を睨みつけてみる。

「さて、テムエを殺した後に残り2人もぶつ殺すか……」

「し、死なないよ……ミネットは絶対 貴方なんかには殺されないんだよ！」

「そうか、大した自信だ……では、そろそろ殺すが今のが遺言でいいのか？」

久我はバキバキと拳を握り締め、凶悪そうな顔がより凶悪なものへと変貌する。ミネットも水の術式を組み終え、最大出力でそれを放とうと思った。

しかし、その必要はなかった。

新たな轟音がガゴオン！ と佐井学園中に響き渡る。凄まじい風が吹き荒れる、木々が折れそうなほどに揺れて、ミネットもどこかに吹き飛ばされそうになった。これは烈風、衝撃波にも近いソレが突然吹き荒れた瞬間 久我劉生が烈風に吹き飛ばされていた。

ダン！ と、久我劉生が建物の壁に叩きつけられる音が炸裂する。



そんな中で、ミネツトは 何処か懐かしい声を聞いていた。

「まったく、学園の犬やって雑魚いじめてンじゃねエよ。三下ア」

それはジーパンを穿いた、赤と黒の縞々カットソーの男。現代的な杖を右手に持ち、色素が抜けたような真っ白な髪を持つ、もやしのように細くて弱そうな少年。

かつて、佐井学園最強と言われたあの人の姿と声 。

「もっと面白エことしよオぜ？ 今からオマエと徹底的に遊ンでやるからよオ」

## 第222話 久我劉生（後書き）

キャラクターNo005

・早川悠 はやかわゆう ×10が最高、ナシは無能という意味。

能力使用を前提。

攻撃力：

（能力あり、素の攻撃力は低い）

防御力：

（能力あり、素の防御力は低い）

体力：

（体力はないが、能力を使うにはあまり関係ない）

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

（能力あり、素の状態では走れるかも微妙）

妙）

地位：

総評：素の能力は普通の高校生よりも遥かに低いが、能力を使えばチートキャラと化する。流石は佐井学園最強と言われただけの事はあるだろう。

## 第223話 殺した本心

俺と近藤さんはトレントに雇われた、と思われる下部組織の連中を撃破し、武器庫を破壊する前に身を休めていた。そうせざるを得ない状況になってしまったからだ。

「大丈夫かい近藤さん？」

「ああ、なんとかなあ……チツ」

左肩から血を流し、悔しそうに舌打ちをする近藤さん。どうやら戦闘中に敵の襲撃を受け左肩を負傷してしまったらしい。刀を思うように扱えなくなってしまう、戦力も低下した上に近藤さんのプライドはズタズタだ。この程度の相手に負傷した事が悔しいようだ。武士道……なのかな。俺にはよくわからないけど……近藤さん。

「早川という強力な戦力もいるし、一旦戦線を離れたほうがいいんじゃないかい？」

「大丈夫、右腕さえ残ってりゃあ十分戦えるのよな」

柄に収めた刀を地面につき、右腕に力を入れて近藤さんは立ち上がった。

それにしても、近藤さんも心配だけど……あのミキストリは一体？  
彼女は どうして、今更俺なんかの前に立ち塞がったんだろうか？

…？

「それよりお前さん、さっきの小娘はなんだったんだ？」

「あの子かい、あの子はなんというか……俺の昔の知り合いだね」

「は〜ん。まっ、深い事は聞かないが、その子の気配がさっきからするのよな」

「ええ、それくらい俺だつて気付いているよ」

気配で気付く所が剣術の達人らしいけど、俺だつて全く無力なわけではない。これでも魔術師の端くれなんだから、魔力を感じる事で誰が何処にいるかを知ることが出来るんだ。

ミキストリの魔力は何度も感じて覚えたから、どんな魔力かも把握はしているが……今感じているこの魔力は間違いなく、そのミキストリだろう。

ミキストリは　そのコンテナの陰に隠れている。

「いい加減出てきたらどうだい、ミキストリ！」

コンテナに向かって叫びかけると、その陰から一人の少女が現れる。

ミキストリだ。

マクアフィテルを構えた褐色肌の娘が、静かにこちらへ接近してきた。

「先輩、出直してきました」

「遅かったね、ミキストリ……」

「ええ、色々準備がありましたね」

バタバタという足音が階段のほうから聞こえてくる。周囲を確認

してみると、黒ずくめの傭兵達が階段を下りてやってきたようだ。傭兵達は俺達を包囲すると、銃口をこちらに向けてきた。

「やれやれ、準備というのは傭兵の召集か」

「いくら有能な魔術師とはいえ、これではラウル先輩も多勢に無勢でしょう」

確かに、近藤さんが負傷している今　この人数を相手に戦うのは厳しいね。

やれやれ、ミキストリめ……本当に面倒なことをしてくれる。しかし、

「ねえ、ちょくつとアタシも混ぜてくれねーかしら？」

どうやら、神は俺達を見捨ててはいなかったようだ。

黒曜石のナイフを右手に持つ、少し血を流した民族服を着ている女が現れる。彼女は同じザスローンのアナスタシア。土属性、特に召喚魔術を得意とする天才魔術師だ。彼女は向こうの敵を掃討して爆弾をセツトした帰りなのだろう。ピンチの俺達を見かけて助けに来たらしい。

「アナスタシア……」

「ラウル、その女はアンタがやりな。アタシは近藤と2人で傭兵と戦うから」

「けど、こんな所じゃ泥人形ゴレムは作り出せないし、貴方は召喚魔術以外は……」

「まあ見てなさい。傭兵なんか　　体術と黒曜石のみで制圧可能よ」

「ああ、俺らに任せておけよ」

「アナスタシア……近藤さん……」

そうだよ、アナスタシアはかなりの実力者。でなければ、今彼女は生きていないし、仮に生きていても助けにこようとは思わないうろ。だから　彼女は頼ってもいいはずだ。

はは、これで俺は　ミキストリ一人に集中してもいいんだね。

「2人とも、ありがとう」

「例なら後、行くぞアナスタシア！」

「言われなくてもっ！」

近藤さんとアナスタシアは凄まじい勢いで飛びかかり、遂に傭兵達との戦闘を開始。

俺はただ一人、ミキストリと対峙する。

ミキストリは左手で自分の髪を触り、爽やかに靡かせた。

「結局、先輩と私の一騎討ちになってしまうのですね」

「その方がこちらとしても都合がいいんでね。さて、どうする？」

「……仕方ないですね、この際　死ぬ覚悟で先輩に立ち向かいませす！」

服の中からバチを抜き取るうとした瞬間、アステン式の剣、マク

アフィテルを両手で握ったミキストリが、地面を蹴ってほんの一瞬でこちらとの間合いを詰めてくる。咄嗟の事で、儀式用のバチさえ握る事が出来なかった俺は、横薙ぎに振るわれたマクアフィテルを間一髪で回避する。

左へ跳躍し、その勢いで地面をゴロゴロと転がる俺。ようや動きが止まると、立ち上がって周囲を見回してみる。何か、見えそうなものはないのか？

そう考えているうちにも、ミキストリはマクアフィテルを振り下ろす。それをバックステップで回避しながら、俺は引き続き周囲の確認を行っていた。

「無駄です、不意を突かれた先輩は殺される運命にあります」

マクアフィテルの斬撃を回避しつつ、ミキストリの弱点や周囲を探る。やはり、ミキストリは剣術に疎い上に小柄なので、マクアフィテルに振り回されている感じがあった。

ところが、肝心の俺には武器がない。このままでは、剣術素人にさえ抵抗できない。

「う、わ……ッ!？」

間一髪、マクアフィテルの鋭い黒曜石が俺の髪を数本切り裂いた。

「先輩……まだ後輩に殺されるだけ、幸せだと思ったほうがいいですよ」

「何故なんだ……何故君は俺を狙うんだ!」

「前にも言ったでしょう。これはケツアルコアトルの命令なんです」

「それは分かっている。だけど、君は俺を簡単に殺せるのかい……君にとって俺は、その程度の存在だったのかい!？」

ミキストリは俯き、肩をぶるぶる震わせていた。ぎりつと齒軋はしりしながら顔を上げ、今にも決壊して涙が溢れだしそうな瞳で俺を睨みつけて、

「仕方なかったんですよ！ 私だって、先輩のこと好きですよ……大好きなんです！ でも、ケツアルコアトルが立ち上げた新たな組織は先輩の排除を私に命令しました。命令に背けば私も裏切り者として排除されるんですよ？ そんな状況で 私は何をどうすればいいのですか!？」

「ミキストリ……」

彼女はそんな覚悟で戦っていたというわけか……気持ちを殺して任務を遂行し、俺を殺さなければ自分が殺されてしまう。そんな背景から、本心を押さえ込んでまで……。

ケツアルコアトル……どうやら、俺は本当の敵を発見したようだね。

「ミキストリ、ごめん……俺がサヴィエトなんかに所属しなかったら、君に辛い想いをさせる事はなかったんだよね……」

「そうですね……先輩が、先輩がお金と自己保身の為にサヴィエトに手を貸したから 組織は先輩を狙うことになったのですっ!」

「本当……俺は馬鹿な男だ」

俺は静かに歩き始め、ミキストリへと近づいていく。既に瞳から



雫が零れ、ずっと震えているミキストリは頼りない手つきでマクア  
フィテルを両手で握った。

「こ、こないで……こないで、ください……せ、先輩……っ」

言葉では俺を拒んでいるが、俺はその言葉を全く聞きいれずに歩  
き続ける。

ミキストリ……俺は君を　放っておくことが出来ないんだ。

「いや、来ちゃ……ダメです、私は、私は先輩を……う、ああああ  
あああああっ！」

糸が切れたように泣き叫び、ミキストリはヤケクソ気味にマクア  
フィテルを構え、無茶苦茶に走って俺へと近づいてくる。近づけば  
俺を殺してしまう……そんな感じで俺を拒んだのか。

とにかく、早く彼女を止めてあげないと。

彼女を安心させてあげないと。

「ミキストリ……」

俺は彼女の全てを受け入れる。だから、俺はこの場からは決して  
動かない。

ダン！　と地面を踏み付けたミキストリが、必殺のマクアフィテ  
ルを振り上げる。しかしそれは狙った一撃ではなく、感情的で滅茶  
苦茶な荒い一撃であった。そう推測しているうちに振り下ろされた  
マクアフィテルを、俺は上半身を振るだけで簡単に避けた。

そして、今の動作で隙だらけになったミキストリの腹部へ、握つ  
た拳を叩きこんだ。

「……ッ!？」

ドゴン！ という衝撃がミキストリに伝わる。大きな衝撃が伝わったと同時に、ミキストリは力を失いマクアフィルを地面に落とす。ミキストリ自身も倒れ込みそうになったが、彼女は俺に向かって倒れて来たため、自分の体と両腕で抱きしめることに成功した。胸元に倒れ込んだミキストリは、弱々しい手つきで俺の服を掴んできた。

「……………どう、して……………ですか？」

「ん、なんだい？」

「先輩、私は……………先輩を殺そうと、したんですよ……………？」

「それは、態々聞く必要もないんじゃないかな？」

俺はより強く、ミキストリを抱きしめて、

「君が好きだという気持ちに　　変わりはないから」

「せん、ぱい……………っ」

ミキストリの服を掴む手の力も強くなり、俺の胸に頭を押し付けてくる。

久しぶりだな……………この感触、俺とミキストリはただの先輩後輩ではなかった。日本で言うところの確かりア充というヤツか……………いや、普通に恋人と言ったほうがいいかな。だけど……………何故、あんなに優しくかったミキストリが刺客として送られ、恋人だった俺を殺そうとしたのか。

ケツアルコアトル。何故あの温厚な人が残虐な人へと変貌してし

まったのか。

どうやら、俺はケツアルコアトルの新組織と向き合う必要がある  
そうだね……。

そして必ず救ってみせるよ。ミキストリを、その新組織の手から  
。

## 第223話 殺した本心（後書き）

キャラクターNo006

・ミネット・ローラン ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：アルファ隊の中でもそれほど強くはないが、伊吹など鍛えて  
いる普通の人間よりは遥かに強い。

## 第224話 因縁のライバル対決

「痛ってえな」

オレ 早川悠は風の操作で烈風を吹かせ、久我をぶつ飛ばしてやったが、久我はむくりと立ち上がって視線をこちらに向ける。そうだ……そう来なきゃ面白くねエよなア。

「久しぶりに会ってみれば……やっぱりテメエはムカつくヤツだな」

「それはこつちのセリフだ。相変わらずブルっちゃって学園の番犬やってんだなア？」

「吠えてる犬<sup>ボチ</sup>。テメエは確か、そのガキの為に三原のヤツを殺したらしいが……そのガキ守つてりゃ善人になれるとも思ってるのか？ だとしたら、テメエはとんだ馬鹿だぜ」

「ハア、下手な挑発しやがって……いいぜ、今から面白エ事教えてやるよオ」

言いながら、オレは右手に持っていた現代的な杖を投げ捨てる。チラつと確認すると、ミネットがその杖を回収し、大事そうに抱え込みやがった。

ハッ、別にあんな杖……いくらでも代用品があるつてのになア。まっ、杖を守ってくれんのは正直助かるし、あのガキにしては珍しく役に立っていると言えるだろう。

さアて、そろそろ面白エ事をしてやるとするかア。

「なア、知りてエか？ 一流の殺し屋がどんなモンなのか」

「この俺にご教授するつもりか。大した自信があるのだな」

「ああ……今から教えてやるから　よく体に染みつけてくたばるんだなア」

そこでオレは足の裏で風の操作を行い、ロケットのような推進力で前進する。近くにミネツト達がいる事を考えれば、あまり派手な技は使えねエ……なら、近づいて血祭りあげる。

飛び蹴りの構えをとった直後　ドゴッ！　と言う鈍い音が響き渡り、弾丸のような靴底を叩きこまれた久我は後方へ吹き飛ばされる。バリバリと生い茂る木々を破り、終いには体育館倉庫と思われる建物の壁を突き破って、中にある危惧をバキバキと破壊する音が連続した。

しかしなんだ……妙に手応えがねエ。

まさか、久我の野郎……能力で今の一撃を防いだのかア？

「分かってるだろ早川。俺はあらゆる波を操る能力者だ」

破壊された体育館倉庫からそんな声が聞こえ、久我がその中から姿を現す。驚くことに久我は全くの無傷であり、余裕の笑みさえ浮かべていた。

さらにもう一つ、メルヘンな事態が発生しやがった。それは翼、眩しいほどに真っ白く光り輝いている、天使のとも違う6枚の異形の翼が久我の背中から伸びているのだ。

久我はゆったりと、6枚の翼を羽ばたかせる。

「なら、今の場合は重力波を操作すればいい。それでダメージを大幅に軽減できる」

「多芸な野郎だ、ンで……その似合わねエ翼はカツコつけかア？」

「俺の翼は見世物じゃねえ。普段は発現しねえが、どうも能力をフルに使うと翼が生えてくるらしい。それで回答だな、この翼は音波、光波、重力波、地震波、津波……あらゆる波の集大成で、なんで発現するかは知らねえが、少なくともテメエの能力よりは万能の力を持つ翼だ」

要するに、自分の意思で発現させた翼じゃねエってわけか。なるほど、だがどつちにしても似合ってるエ上にメルヘンすぎて気持ち悪い。オマケにおかしくて腹が痛エよ。

ここはアレか、腹ア抱えて笑ってやンののが正解かア？

「今から見せてやろう。この俺こそ 本来の最強である証拠を」

「面白エ、見せてみるオ……三下ア」

轟！ と空気を切り裂く音が響く。それは久我の背中から生えている6枚の翼が、稲妻のように伸びてきた音である。6枚の翼が俺を叩き潰そうと、凄まじい勢いで振り下ろされる。直撃の寸前に風の操作を行い、殆ど一瞬で上空30メートル程まで飛び上がった。

ゴバア！ と、翼がアスファルトを砕き、凄まじい衝撃で建物の窓ガラスが割れ、何やら地面がグラグラと揺れている。あの野郎オ……衝撃波と地震波を同時に操作したのか。

それとも、あの翼がそういう効果を持っているのか？

「ッ！」

鳥のように翼をためかせ、天使のように飛翔する。その速度は思いのほか速く、一瞬にして久我とオレの距離は5メートル程にま





「避けちまいそつだ」

「そオ言うわけだ。わかつたかア三下？ オマエが第1位になれねエ理由が」

「甘いな早川。今から見せてやろう……。テメエの常識は俺に通用しねえ」

6枚の翼が更に輝きを増し、久我のクソ野郎はどんどん神々しくなっていく。だが、どんな波だろオが所詮は波に過ぎねエ。必ず抜け道はある、その抜け道をオレは知っている。だからオレはいくら久我が輝こうが、決して動じない。オレの能力は 久我の波動操<sup>ウェーブハン</sup>作を必ず粉碎する。

「オーケー。今からオマエを竜巻に放り込んでやる」

空中で風の操作を行って、ミサイルのように久我の懐へと飛び込んだ。そのまま突き進んで久我の心臓を握りつぶし、久我の死体を竜巻に放り込んでやろうと思ったのだ。

しかし、

「テメエの常識は絶対に通用しねえ」

再び8本の真っ白い光線が放たれ、咄嗟に止まって空気の膜を全身に張り巡らせた。

「ッ!？」

軽く平手で胸を押されたような感覚を感じ、思わず久我との距離をとったオレ。一体これはどういう事なんだ。電磁波が オレの

空気の膜を通り抜けやがっただと？

「チツ、絶縁破壊かア……？」

「そんなチンケなものじゃねえよ。ところでテメエは超弦理論ちようげんりろんつてのを知ってるか？ 弦理論げんりろんに超対称性ちようたいししょうせいつて考えを加えて拡張したもんでな、まあ要するに素粒子やクオークの先を説明する理論の一つだ」

「物理学の勉強が足りてねエな。それがオレを攻撃する理由に繋が  
んのかア？」

「勉強が足りてねえのはテメエのほうだ。そこに抜け道ぬきみちがあるんだ  
ぜ」

6枚のメルヘンな翼がさらに輝きを増し、久我の能力が最高出力を叩きだす。よほど複雑な計算を行うと見たが、あの野郎……超弦理論ななかでオオするつもりだ。

どう足掻こうが オレの能力を突破する事は出来ねエぞ。

神々しい翼で羽ばたき、その余波で何故か真っ白な光線が放たれた。何度も同じ手使ってんじゃねエぞと思いつながら、空気の膜を張り巡らせて光線を押さえつけてやった。

だが、その行動を待ってましたと言わんばかりに 久我は薄く笑っていた。

「 最期だ」

「ッ！？」

その言葉を聞いた瞬間 ズドン！ という鈍い音が全身に炸裂

する。光波は空気の膜で防いだハズだと言つのに、どういふわけかオレはダメージを受けていたのだ。

全身がゴキゴキバリバリと嫌な音を立て、万全の防御態勢で構えていたオレの体が、無理やり30メートルも下にある地面に背中から叩きつけられた。

「あ、ごっぱアがああアあああ……ッ！」

「ゆ、悠！」

「来るなア……クソガキ！」

駆け寄ってきたミネットを抑制した直後、オレは首を上にかかし、神々しい翼をはためかせて降り立つ久我を睨みつける。ムカつくほどに余裕そうな笑みを浮かべ、オレを見下している。

格下のクソ野郎が、調子に乗りやがって……だが、今のは何だったんだ？

「超弦理論に基づき物質を素粒子レベルの波として変換すれば、何が出来ると思つ？」

「……ッ!? オマエ……まさか、全く別の物質を……ッ!?」

「流石に理解出来たか。そういうわけで、テメエの膜は破ろうと思えばいつでも破れる」

「……チッ！」

地面に這いつくばった状態で、握った左右の拳をアスファルトに叩きつける。それは単なる悪あがきでも負け犬の遠吠えでもなく、

大気の操作で四つの竜巻を巻き起こしたのだ。

威力はどれもF5級、全てを破壊し尽くす悪魔のような渦巻き状の上昇気流。

しかし、久我は6枚の翼で自分を包み込み、竜巻を受けてもビクともしない。何故かその場で丸まり続けて動かないのだ。あの翼……一体どういう原理で生まれているものなんだ。

風撃が終わると、久我はゆっくりと神々しい翼を広げた。

「クソツタレ……ッ！」

今度は竜巻で砕かれたアスファルトの破片を蹴り飛ばし、風の操作で米軍が試作したレールガン以上の速度で飛ばした。しかし忌々しい翼が振るわれ、翼と破片が接触すると、破片の軌道が下方に逸れてしまい、久我の数センチ手前に落下し、地面に小さな穴を開けただけであった。

「残念だったな格下……本来は俺のほうがテメエより上位なんだよ」

「……格下、上位？ 笑わせんじゃねエよ三下」

「なに……？」

オレの言葉に反応し、久我は眉をひそめる。

「オマエはその程度が限界だ。それ以上の事は何も出来ねエ」

「……はん、格下の癖に随分威勢がいいじゃねえか。俺様に失礼だろっ？」

「どっちが格下か、徹底的に思い知らせてやるよ 三下がア！」

「無論、テメエだ！」

久我は神々しい翼を飛ばたかせ、オレは風の操作を行い、両者は殆ど同時にお互いを叩き潰す為だけに前方へ駆け出す。久我は重力の操作を行っているのか、やたらと動きが速エ。だからと言ってオレの速度が負けているわけでもねエ。

互いに音速を超える速度で突進し、能力を籠めた右腕を敵に向かって伸ばした。

「永遠に格下やってろ、久我ア！」

「引き摺り下ろしてやるよ、早川ア！」

大気と波動。

二つの強大な力の交差は、ドバン！ という轟音が炸裂した一瞬だけ。

それで オレと久我の勝負は決した。

## 第224話 因縁のライバル対決（後書き）

キャラクターNo007

・西園寺雪乃 ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：全体的に能力が高く、身体能力も高いのでかなりの強キャラ。  
これでも久我や早川よりは圧倒的に弱い。

## 第225話 神にも等しい力vs説明不能な闇の力

「はい、悠」

オレは杖を持っているミネットに近付き、それを受け取った。戦闘中もこのクソガキは杖を抱えていたらしく、おかげで瓦礫の中から杖を探す手間が省けた。杖を受け取り、それを右手に持ったオレは魔力エネルギー変換機のスイッチを通常モードに戻した。

それからもう一度、クソガキの事を睨み付ける。

ビクツと肩が震え、一歩だけ後退りをしやがった。

怒られるとでも思ってたんだろオが……コイツは怒る気も起きねえな。

「で、オマエはこんな所で何してやがったんだ？」

「え、えっと……アルファ隊の仕事なんだよ？」

「仕事だア？」

「う、うん！ ミネットだってアルファ隊の魔法使いなんだよ。お仕事くらい当然かも！」

それを聞いた後、オレはミネットに背を向けて、

「ふん……程々にしとけ。でないとオマエも死ぬぞ」

「う、うん……今回はありがとうね、悠」

「……チツ」

そのまま杖をつき、ボロボロのアスファルトの上を歩く。その上で、久我劉生がうつ伏せになって倒れていた。今は生えていないが、さつきまで背中から伸びていたあの6枚の翼はあらゆる波動の集大成らしく、あの翼こそが超弦理論の操作を可能にする媒体だったらしい。

光波を衝撃波に変換したり、自身の防御や破片の軌道変更も、全てはあの神々しく輝いていたメルヘンな翼が原因で、オレはソイツの力によってダメージを受けたようだ。

だが、そこまで解析しちまえばこっちのモンだ。

その波動が発生出来ない環境を作り、仮に発生したとしても、オレが影響を受けない防護策を張り巡らせちまえば 久我の能力なぞ大した怖いモンじゃねエンだよ。

最強とは何なのか。

単に能力が強けりやいってモンじゃねエ。

一番大切なのは相手の能力を解析し 自分がどう戦うかだろ  
が。

「にしても、無様な格下だなア？」

弱点を突かれ、旋風の中心に出来る真空で皮膚を切刻まれた久我の体から、まるで不思議な術式を発動させる為の魔法陣を描くように、大量の血が壊れた地面に広がっていた。

もしオレが藤島<sup>アイツ</sup>なら、久我を見逃してこの場を立ち去るだろう……が、オレはそんな容赦ってモンは知らねエし、この世界には情けも躊躇いも何もねエンだ。

だから、オレはズボンのベルトから銃を抜いた。

「あばよクソ野郎、悪イが容赦はしねエ」



拳銃の引き金に人差し指が触れる、念のためにしゃがんで近づき、銃口を久我の頭に突きつけてやった。これで終わりだ……久我劉生って存在はこの世から消えてなくなる。

半ば学園の最終兵器と化していたコイツを殺せば、学園に勝利したも同然。

「ま、藤島ヒノにやられるよりは遙かにマシだろオ？」

これで山場は越えられる。後は学園長の首さえ掴めば学園を潰せる。勝利を確信し、人差し指を動かして引き金を引こうとした、一歩手前で、

「待って、悠！」

「ちよ、待てよアンタ！」

「貴方、その手を一回置きなさい」

耳障りな声の数々が同時に響いてきた。そちらに目を向けてやると、そういえばそこで伸びていた学ランの野郎と、緑色のワンピースを着たオッドアイの女。

そしてミネットがまっすぐこちらに走ってくる。

「悠！ なにも殺す必要はないと思うんだよ！」

「あ？」

「ああ、この子の言う通りだ。その必要は俺もないと思う」

「アイリスも同じ意見ね、このクソ野郎はこちらで身柄を回収しち

まうから」

オッドアイの女……こちらってどついう意味なんだ？

見た所学園とは関係なさそうだし、何より非科学的な雰囲気を放つてやがる。

しかもクソガキの知り合いか……なら、学園ほどふざけた奴ではねエだろう。

「こちら？　なんだオマエ、何処かの組織の人間か？」

「アイリスはアルファ隊の特隊員よ……貴方は確か、早川悠ってやつだったかしら？」

「アルファ隊ねエ……ソイツはオレに詳しくて当然だな」

「言っとくけど、アイリスは貴方を超憎んでいるわ……仲間の仇が」

「……そオかい、死ぬまで憎んでろ」

仕方ねエというより、当然の結果だ。文句なンざあるわけねエ……ただ、コイツらは何故久我の殺害を中止させようとするんだ。このクソ野郎はここで殺しておいたほうがいい。素直に捕まるほど大人しいヤツじゃねエし、必ず脱獄の手段を発見するだろう。

拘束は危険だ。なら残る道は一つ　それは死だ。

オレはもう一度拳銃を構えたが、銃を持つ左手の手首をクソガキに掴まれてしまった。

「離せクソガキが、コイツを生かしておいても得にはならねエ」

「ダメ、ミネットは絶対貴方を離さないんだよ」

「ふざけんな。オマエらがこの三下を安全に管理できるとは思えねエ。コイツはその気になれば世界中の軍隊と戦っても勝つような野郎だ。そんな野郎が大人しく捕まって、大人しく牢獄で体育座りをしているとは思えねエ。何よりオレの進む道に生存はねエ　だからコイツはここで殺す」

生存ルートなんてモンは甘すぎる。本来戦いつてのは生と死しかねエが、生とは勝ち取って得る宝物であって、敗者には死の道して残されてねエ。それは自然界においても同じだ。

だが今の社会はこの法則に逆行し、みんな仲良しのおふざけグループだが、裏社会でそのルールが通用すると思ったら大間違いだ。裏社会とは　常に自然界のルールに従ってるモンなんだよ。

今の社会の自然への逆行は、やがて人類滅亡を招く。今の人間からしてみれば、邪悪な考えだの非人道的だのと文句を言われそうだが……コイツは紛れもねエ事実だ。

仲良しこよしはいずれ破滅を招く。押れ合いグループに未来はねエ。

だからオレは、一切の容赦をしねエで自然の流れに従う。  
それが　本物の道ってモンだ。

「悠……あなたは一体、何の仕事をしているの？」

「オマエには関係ねエ、死体を見たくなかったら目を逸らせ」

「関係あるもん！　ミネットは悠を心配してるんだよ？　だから、関係あるよ……」

「余計な心配すんじゃねエ……オマエはもっと悲惨な地獄を見てエのか？」

「だからって……あなた方一人が泥を被る必要なんかないんだよ！それに、こっちの拘束技術とレムリアの拘束技術は全然違うんだよ？ 牢獄内に拘束用術式が張り巡らされていて、多分悠の能力でも突き破れないハズだよ。だから悠、いくら極悪人だって殺す必要はな　　ッ」

ミネットは全てを言い終えることが出来なかった。  
その前に、

ドバア！　と、久我劉生の背中から突然　　6枚の翼が伸びてきたのだ。

翼は一気にこちらへ放たれ、咄嗟にオレは空気の膜を張り巡らせた。そもそもアレが電磁波の一種かどうか不明だが、電磁波の一種である事を前提に膜を張り巡らせたのだ。

しかし、久我が突いたのはオレではない。

ミネットの目が信じられないくらいにまで見開かれ、口からもドロリと、普通なら出てくるハズがねエ血が流れ出ている。その状態で、ミネットはゆったりと目を下に向ける。

オレもミネットと同じ部分を見ると　そこには久我の神々しい翼。

刃物のように変形した翼が、ミネットの脇腹を貫いていたのだ。

「ミネットー！」

「お、おいミネットー！」

オレは呆然と立ち尽くし、ミネットの知り合いである男女は名前を叫んだ。そしてミネットの背後で翼を生やした久我が、ゆっくりと立ち上がり　　うっすらと笑みを浮かべていた。

「甘いぜ早川……さつさと殺さねえから無駄な物を失っちまうんだ」

「お、オマエ……ッ」

「あ、このガキ？ 心配するな、俺もボロボロで急所を外したからな。多分今から病院にでも運べば全治3ヶ月コースだろうが……残念だな、俺はこのガキを殺す事にした。テメエの甘さに反吐が出そうになってよ、それがムカついたから テメエの大事なものをぶつ殺す事にした」

言いながら、久我は真っ白く輝いている翼をゆさゆさと揺らし、ミネットの脇腹に開いた傷口を徐々に広げていく。翼が揺らされる度に、ミネットは苦しそうに絶叫していた。

次第に全身から力が抜けていくのが分かる。  
瞳まで、活気を失い虚ろになっていく……。

「や、める……」

「聞こえねえよ。にしても残念だ……テメエほど裏社会のルールを熟知しているヤツも珍しいと思ってたんだが、まさか……これっぽちも理解していなかったとは。それとも、このガキがお前を止めちまう存在だったのか？ だとしたら、このガキが死ぬとテメエにとっては得になる。邪魔をされずに 悪党の道を走る事が出来るんだからな」

そういうことが、この野郎がミネットを攻撃した理由は……それなのか。つまり久我はさつさとトドメを刺さねえオレに失望して、それを妨げていたクソガキを殺すことにした。それでオレをマシな人間にしてから、自分の能力使ってオレをブツ殺そうと……ざ、け

んなクソツタレ。

確かにオレは、クソガキの言葉で手を止めてしまっほど　甘いヤツだった。

「やめるオ……三下がア！」

「聞こえねえ！　テメエがそこまで腰抜けだったとは、それじゃあ殺す価値もねえ！　やっぱこのガキを排除して　テメエをもう一度目覚めさせてやるよ！」

だがな、そんな都合で　このガキが死んでいい理由にはならねエだろ……ッ！

「ふ、ぶけんじゃねエぞ……格下がアアアアアアアアアッ！」

「格下はどつちだ！？　このガキに甘やかされて甘くなったテメエのほうで格下だ！　さあこの俺を殺してみる！　どうしてもこのガキを助きたいなら、テメエは俺を殺せばいい！　それが俺達のやり方ってモンだろうが！　甘えてんじゃねえよ……へタレで腰抜けの三下小僧がア！」

だが、結局あのガキが地獄を見ているのはオレの責任だ。たとえ、あのガキやあのガキの知り合いに止められても、引き金を引く度胸を見せていれば　こんな悲劇は生まれなかった。

あのガキを守る事が出来ず、あのガキの命が危ねエ事になった。だからこそ、

だからこそ、オレは　全てを捨てて久我と戦うことにした。

もう他には何も望まねエ……久我を殺してクソガキの命だけを助ける。

それを邪魔するヤツは 誰であろうとブツ殺す。

「が、ぐ……アアアッ！」

脳が左右に割れたような気がするほどの、凄まじい頭痛が脳全体に広がり、恐ろしいまでの吐き気が胃の中から込み上げてくる。全身がガクガクと震え、心臓が破裂しそうなほど痛く、背中に刀で刻まれた  
ような激痛が走り 。

そこで オレの意識は途絶えていた。

## 久我劉生Side

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおおおッ！」

なんだこれは……早川の背中から漆黒の翼が生えてきやがった。  
オレの無意識に生えちまえ翼のそれとは違う、輝きもなければ希望も何もねえ。翼の数こそたったの2枚だが、噴射にも近いその翼からは凄まじい邪気を感じる。良心のカケラすら感じられねえ……あるのは邪心のみ。

一体、大気をどう操作したらこうなるかは知らねえが、とにかく  
すげえ。

「すげえ、すげえじゃねえか早川！ 甘いっつったのは謝っとくぜ、





早川でも防御や干渉が不可能な 新物質の操作が可能になるのだ。

「見たか早川ア！ 俺は神にも匹敵する力を持つてんだ。テメエの翼は、絶対の勝利を得られる鍵にはならねえんだよ！」

「それは貴方の思い込みね」

「……あ？」

鬱陶しい声が聞こえたので、振り返ってみると オツドアイの雑魚女が、瀕死の重傷を負っているガキを抱えて座り込んでいたのだ。

なに言っただあ目の目ん玉おかしいガキは……俺の思い込みだと？

「笑わせるな、今の俺に不可能はねえ」

「あるわクソ野郎。所詮、貴方の能力は科学の域を逸していない程度のもの。アイリスはこれでも魔法使い、神様の力と言うものは何度か見てきたけど 貴方のレベルを遥かに超えるものが全てよ」

「ざけんなよクソが。神なんていると思っただのか？ だが、今の俺は存在しねえ神様に匹敵する力を手に入れたっつてんだ。あくまで俺が言う神は表現に過ぎねえんだ」

「残念ね、クソツタレ科学もこの程度とは……神はいるわ、そして貴方の力を遥かに上回る。そもそも貴方の力は波動だの超弦理論だの、科学的に説明できる範囲内ではない。その組み合わせで新たな物質を創った所で 所詮科学は科学よ。私からしてみれば、その早川悠クソツタレの黒い翼の方が よっほど科学的に説明できないと思

うわ」

本当になに言ってるんだろうな、このオッドアイの女。ひよっとしてアレか、宗教のやり過ぎで頭がイカレちまった口か。言う事も全て非科学的だし、大体神なんてものは存在しねえ。存在するのだとしたら科学の力で解明可能だろう。でも、神の存在は一向に明らかにならない。

神は科学的に説明が出来ない。

俺は科学的に説明出来ないものを 絶対に信じねえ。

だからこのオッドアイの女は、オカルトマニアのクレイジー女だろう。

「まあ見てろオッドアイ。俺の波動操作は必ず<sup>ウェーブハウンド</sup>大気操作を粉碎する。その後 テメエにも神にも匹敵する力を打ち込んでやるよ」

そして、俺は再び暴走した早川を睨み付ける。早川は相変わらず殺意に満ちて、今にも俺を殺す為に攻撃を仕掛けてきそうな雰囲気だ。だが、それも上等……俺は早川を粉碎する。

先手を打つても無駄だ。今の俺には 世間の常識が通用しねえんだから。

「ははは、はっははははははははははははははははッ！」

笑いに笑いながら、全力を籠めた6枚の翼を早川に叩きつける。光の速度で放たれた、新物質の塊を 早川は防げねえだろう。勝った、これで俺の逆転勝利。余裕だっただよ……早川程度！

ぐしゃり、と。

凄まじい勢いで、肉体が潰れるような音が響き渡った。

「……な、ん……だと……ッ？」

しかし、それは早川の肉体が潰れたのではなく 俺の肉体が潰れた音であった。

正確には俺の翼が早川に触れた瞬間、俺の肉体が崩壊し始めたのだ。それもドロドロと液体のようではなく、引き千切られたかのように、右腕が根元からボトリ、と地面に落下する。

消えたのは右腕だけじゃねえ。

続いて右足、さらには左足までもが同様に失われていく。

「ぐア、がアアアあああああああああああああああああああああああ  
ああああッ！」

クソ……残ったのは左腕だけかよ。

どうなってんだ……全然理解できねえ。

早川のアレ大気との操作とは全く違う……全く新しいエネルギーを感じる。

「ま、さか……ッ」

早川が一步一步ゆっくりと近づいてくる。そんなギリギリになつてから、遂に俺は早川がどういう存在なのか。何故、早川が俺の上に立つ存在だったのか。その答えが分かったのだ。

「は、は」

「ッ！」

「テメエの正体。そうか、テメエが……魔道能力者……ッ！」

そつだ、という返事はない。

そもそも、今の早川に理性なんてものは存在しない。  
やがて、破壊的な翼が振り下ろされて       ッ！

.....。

第225話、神にも等しい力vs説明不能な闇の力（後書き）

キャラクターNO008

・白藤早苗（しらいづみ） ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：防御力や体力はないものの、瞬間移動（レポート）と武器の併用で実力はかなり高い。

## 第226話 白い少女

勝敗は一瞬にして決した。

さつき久我の攻撃で瀕死の重傷を負ったミネットは、即席の防御術式と、アイリス先輩のルーンを用いた回復魔法でとりあえずは助かったんだよ。まだお腹がズキズキと痛むけど、歩けるくらいまでには回復できたし、魔法って便利だよな。

ミネットは戦いの勝者である悠に駆け寄り、倒れた悠の頭を持ち上げ、自分の膝を枕にするように頭を置いてあげた。悠はぐったりと眠っている、まるで眠り姫かも。

一応悠は男の子って設定みただけけどね。  
でも寝顔がちょっと女の子に見えるかも。

「悠……よく頑張ったね」

ミネットは悠の額にそっと手を触れ、そのまま優しく悠の額を撫でてあげた。それでも悠は全く目を覚まさず、ぐっすりと深い眠りにっている。

そんな中、北野さんとアイリス先輩が、悠が開けた大きな穴へと近づいて、

「うわっ、グロ……」

「昂、失礼よ。彼、まだ息はある見たいだからくたばっちゃいないみたいね」

ミネットも一旦悠をそっと地面に寝かせ、クレーターの中身を確認する。悠の黒い翼が作った大きなクレーターの中心に、肉の塊が隕石のように落ちていた。それは右腕と両足を失い、残った左腕も

全く原型を留めてらず、右目も抉れて全身から大量の血を流していた。

殆どハンバーグのような状態と化したその人物。

久我劉生。

悠と戦ったその人物は、瀕死の重傷も負いながらも 辛うじて呼吸を続けていた。

「アイリス先輩……その、どうするんでしょうか？」

「そうね、一応アルファ隊の下部組織に送りつけようと思うわ。一度同期の隊員に科学者がいて、その人が医療分野で技術提供をしている所があるから、多分その医療技術を駆使すれば命だけは助かるんじゃないかしら？」

それって木葉さんのことなんだろうなあ……ってミネットは推測してみる。

木葉さん、地味な所で仕事しているよね……陰のサポーターみたくかも。

「アイリス……こ、これ助かるのか？」

「心配しないで、レムリアの技術なら助かるハズ。まあ……一命は取り留めても永遠に満身創痍かもしれねえーけどね」

「と、とりあえずこの人は回収、なんだよね？」

「それがアルファ隊の掟よ。どんなクソツタレでも殺さず 回収する」

「う、うん！ それじゃあ回収作業はミネットと仲間で行うね！」

「ええ、任せたわ」

悠の事も心配だけど、悠は殆ど外傷が見られないから多分大丈夫かも。仮に危険な状態だとしてもアイリス先輩の魔法で治せるはずだし、でも……アイリス先輩が嫌がるかも。

と、とにかく……悠は気絶しているだけだから、多分平気だと思うんだよ。

「アイリス、俺達はこれからどうする？」

「そうね……とりあえず、ここが一番偉い人のケツにダイナマイトを打ち込みましょう」

「あ、相変わらず下品な言葉使うなお前……まあ、俺達の次の標的は学園長だな」

「その学園長さえ屈服させれば、佐井学園との戦いは終結するのでしょうか？」

「おそらくな。ただ、この状況だから警備はすごいと思うぞ」

「大丈夫、アイリスだって特隊員　ただの雑魚傭兵程度なら敵じゃないわね」

それぞれの次の行動が決まり、今からそれを実行する。佐井学園攻略戦はミネツト達以外の別な組織の介入もあるらしいけど、何だかんだでミネツト達に有利な方向で進んでいた。

もうちょっとだけ頑張ろう。

佐井学園攻略は　もう目前なんだよ。



「あれ、アイツは？」

「そういえばいなくなったわね」

「え、2人ともどうしたんですか？」

2人がキョロキョロと首を振り回し、何かを探しているようだったので、ミネットは2人に近付きながら聞いてみた……が、2人がなにを探していたのか、それはすぐにわかる事だった。

さっきまで悠がいた場所に 誰もいないのだ。

「あ、あれっ!?! 悠は!?!」

さっきまで気絶していたのに、一体どこにいったんちやっただろう。多分、あの足だとそう遠くへは行けないと思うんだけど……。

「ああ……まあいい、早川ってのは俺達を探しておくよ」

「えっ、本当ですかっ?」

「ミネットにとっては大事な人なんでしょう? アイリスにとってはムカつくクソ野郎だけど、それでも大切に想っている人がいるんだから 助ける価値は十分あるわね」

「あ、ありがとうございます……なんだよっ」

2人の優しさに、ミネットは思わず涙が流れ出てしまいそうになった……。

さ、さて……悠も気になるけど、まずはお仕事しないと。

うっ……まだお腹痛い……っ。

早川悠 Side

「クソツタレ……」

頭がガンガンする。とにかくクソガキ達の世話になるわけにはいかねエと、起きあがって奴らから離れるだけ離れたが……コイツは相当重傷かもしれねエな。

なんだ、この頭痛と異様なまでの吐き気は。どう考えても風邪じやねエぞ、もつと悪い病気に感染しちまったような、そんな感覚に陥っている。

それに……アレはなんだったんだ？

オレの背中から生えていた　あの真つ黒い翼は？」

「……………っ」

ポケットから携帯電話を手に取り、ザスローンの誰かに報告すべきか……と思つたが、まアそんな事をしなくても大丈夫だろう。残り魔力残量は10分。ハッ、楽勝だア……これだけあれば学園の主要な人物や、学園長の首を切り落とすのには十分すぎるぜ。

さアて……どう動こうか、恐らく学園長の身の周りの警備は堅い事だろう。なら、どこかから武器を奪って潜入するってのが一番確実だな。

今のオレには武器がねエ……そして能力に頼る事も出来ねエ。ならばどうするか。

武器を敵から鹵獲する以外に方法はねエだろ。

「とりあえず、久我のクソ野郎が率いたいた連中の死体でも漁るか」

これまで散々ぶつ殺してきた傭兵なら、大量の武器と弾薬を身に持っているハズだ。ソイツらの装備を奪っちまえば、ある程度の武装組織とは戦えるハズだろう。

オレは先程、トレントの傭兵達と戦った場所へ進路を変更し、歩きたそうとした。

しかし、

バガン！ という爆発音が聞こえた。

ここより東南に位置する、研究施設が集中しているエリアからである。

「あ？」

学園長の首を切り落とすのが先か……と思っていたが、今の爆発……兵器によるものと言うよりは能力者の悪戯にも見えるな。コイツは一応、調べておいたほうがいいかもなア。

「少しだけ寄り道するか……クソツタレ」

オレはここより東南に位置する研究施設群へ進路を変更、先程の爆発の原因と、何者によって起こされた爆発なのかを調べる為杖についてゆっくりと歩き始めた。

俺達は明智達と合流をすべく、まずは学園の東部へ向かったのが…… 玄関などが破壊された総合研究博物館があるだけで、彼女達の姿はそこにはなかった。多分、ここでの戦いはとっくの昔に終わってしまったのだらう。続いて、俺達は学園西部 校舎側を目指して移動した。

こっちはかなり生々しいな……。  
ボロボロの連中が沢山だ、力尽きて倒れている黒ずくめ達も大量である。

その中に 。

「おい2人とも、あれって明智と白藤じゃねえか？」

俺が指差した校舎の壁のあたりで 明智と白藤を肩を寄せて休んでいたのだ。

「ほ、本当だわ……間違いないわね」

「おい！ 雪乃ー！ 早苗ー！」

木山が大声で叫ぶと、明智が右手を大きく横に振って返事をしてくる。どうやら俺達の所に行く力も残っていないようなので、こっちに来いと手で合図しているのだらう。

俺達3人は明智と白藤の下に駆け寄り、2人の様子を窺った。  
まず目に入ったのは ボロボロの白藤の姿である。

「おい、大丈夫かよテメエら？ つーか白藤、テメエ……手首折っ

てるじゃえかよ」

【戦傷した、でも歩けるから兵器】

「風紗は大丈夫なのかしら？」

「私は疲れたただけだぞ。それより雪乃……お前も相当怪我しているみたいだぞ？」

「私は……大丈夫よ、必ず久我は倒してみせるわ」

さっきの金髪ホスト風チンピラ野郎か……アイツも滅茶苦茶強いからなあ。つか、さっき向こうから凄まじい爆音が聞こえてきたけど、それってあのチンピラ野郎の仕業なのだろうか？

俺と木山を除けば、フレンドのメンバーは殆ど怪我人。明智も疲れているし、元気な俺と木山だって戦闘向きとは言えねえ……クソッ、これじゃあ勝ち目がないんじゃないかねえか？

「とりあえずこの後どうすんの？ あたしは正面攻撃は危険だと思うけど？」

「そうだな……戦力の殆どは怪我人だぞ。私も疲れて戦えるかどうかは微妙だ」

【一応、瞬間移動は出来るよ】

「私は、まだ一応戦えるわ」

「お、俺は……五体満足だぜ？」

ああ、戦力として使えそうなのが怪我人の西園寺だけかよ……やっぱりまずい、このままじゃ打倒佐井学園って夢は敵わねえぞ。一体この後どうすりゃいいんだよ……。

いよいよコレ、詰んだんじゃないかねえのか？

「……ッ！ 誰か来るぞ！」

いきなり明智がキツと表情を厳しくする。

誰か来るって……武術の達人明智が 誰かの気配を察知したってのか？

「まさか、久我かしら……っ？」

「可能性は一番高いよ、雪乃どうするの？」

「ま、任せなさい……同じ失敗は二度もしないわよ」

そうは言っているけど……あの久我、滅茶苦茶強いんだろ。失敗と言っか……一言でそうまとめられる次元を遥かに超えていると思うんだけど。

と、考え事をしている間に 気配の主の姿が見えてくる。

「う、そ……」

「ま、まさか……冗談なの、か？」

【あ、あの人……っ】

「えっ、雪乃。あの人って確か……」

俺以外の女子メンバーは驚愕していた。

それは胸や股間など、大事な所と腕の一部や脚の一部に包帯を巻き付けただけの、雪のように白い髪の子を持つ少女であった。フレンドにいる女の子たちも相当レベルが高いけど、今現れた女の子も高レベルな感じだけ……若干冷たい雰囲気を持ちながら、柔らかさうな可愛さも持っている。

赤い瞳に、髪と同じく雪のように白い肌……。

やべえ、可愛いし……身につけているものが包帯だけだから、なんか……エロい。

だけど、女の子の登場を　フレンドの女子は喜んではいなかった。

「い、伊吹……なのか？」

というか、何故か明智の口から　伊吹という女子と思われる名前が出てきたのだ。

もしかして、その伊吹ってヤツに滅茶苦茶似ているのか……あるいは本人なのか？

一体どういふことなんだろうか……そもそもあの子、なんで服を着ていないんだろう？

疑問は深まるばかりであった……。

## 第226話 白い少女（後書き）

キャラクターNo009

はまじまさと

・浜島雅人 ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：ナシ

知力：

敏捷性：

地位：

総評：一時期は不良グループをまとめていた事、圭介にもある程度苦痛を与えたことから、そこらの不良よりは強いレベル。しかし能力者に対しては無力である。



## 第227話 正体

突然、俺達の前に姿を現した 包帯一枚の雪のように白い少女や、やべえ……これ、興奮を抑えるのが精一杯なんだか。男の子の俺にはその恰好、流石にハードすぎるぞ。だけど、西園寺を始め、女子メンバーの表情は一向に柔らかくならず、むしろあの少女に警戒しているようにも見える。どうして、そんなに危険そうには見えねえけどな。

いや、包帯一枚で外を歩くのはある意味危険かもしれねえけど……。

「浜島達は下がってて、私がどうにかするわ」

「ゆ、雪乃!? 平気なの?」

「そうだぞ、ここはみんなで行ったほうが……」

「大丈夫、私はこれでも五本指の一人よ。万が一の事もあるから……任せて」

そう言い残し、西園寺はゆっくりと包帯のみの少女へ接近していった。

両手の拳は硬く握りしめられ、目付きも戦場へ赴く兵士のようだ。西園寺……テメエ、何そこまで警戒してんだ。相手は女じゃねえかよ……?」

「誰ですか貴女は? 伊吹……ではないのでしょうか?」

「……どうして」

「……えっ？」

「どうしてこんな目に遭わなきゃいけないの……どうして兄さんも不幸になっちゃうの？」

「あ、貴女……なにを言ってる……？」

いまいち状況が分からねえけど、包帯だけの少女は今にも泣きだしそうなほどに、哀しそうな表情を浮かべていた。瞳には水滴が溜まり、わなわなと体が震えている。それはとても弱々しい女の子の姿であったが、それでも西園寺は驚くだけで 警戒を解こうとはしない。

「あなたの……せいなの？」

「な、なによ……貴女に何があったかは知らないけど、どういってもりなのかしら？」

「聞いてよ、あなたのせいなの？ 私と……兄さんが不幸になっちゃった理由は……？」

何処までも哀しそうに、今にも沈んでしまいそうな少女が西園寺に歩み寄る。少女に警戒している西園寺は、ジリジリと迫ってくる少女から距離を取ろうと、一歩ずつ後退りをしていた。

そこで俺もようやく感じたのだ 包帯だけの少女の妙な威圧感  
を。

「……まずは、事情を聞かせてもらおうかしら？」

緊急回避というヤツなのだろうか。

困っていた西園寺は、とりあえず少女の話を書く事にしたらしい。  
しかし、

「……………どうして、どうして答えてくれないの…………？」

「そ、それはその……………なんて言えばいいの…………？」

包帯だけの少女は事情を聞かれても、全く答えてくれない。それなのにどうしてって、そりゃあ西園寺が困るのは普通だな。こつちは事情も知らないんだ。何を言えばいいのか、そんな心を読む能力を持っているわけじゃねえんだから 分かるハズがねえだろ。

「……………やっぱり、あなた……………なんだね」

「さ、サツパリ意味がわからないわ。そもそも貴女とは多分初対面よ？」

「やっぱり……………そうだったんだ。兄さんと私を不幸にした……………諸悪の根源……………っ！」

少女の虚ろだった瞳に明確な力が籠っていくのがわかる。今、少女が西園寺に向けている感情は間違いない敵意だ。その敵意が何処から湧いたのか、何故西園寺に向けているのか。その理由はサツパリ分からねえけど……………これはまずい、あの子相当歪んでいる上に怒っている。

そして、遂に

「が、はあ……………ッ!？」

包帯だけの少女が右腕を動かしただけで、西園寺の腹部にドス黒い何かが衝突する。たったのそれだけでゴキゴキバリバリという嫌な音を立てて、西園寺は数十メートルも吹き飛ばされる。

しかし、背中を校舎に叩きつける前に一回転し、バランスを立て直しながら、彼女はどうか校舎の壁ギリギリのあたりで華麗な着地に成功したのだ。

「ッ！」

だが、それだけでは少女の怒りも治まらなかったのだろうか。

少女は両手を空に向かって上げると、先程まで青空が広がっていたのにも拘わらず、突然闇のようにどす黒い黒雲が、空を黒と灰色一色に染め上げる。続いてバリバリという轟音と、反射的に<sup>まぶた</sup>瞼を閉じてしまうほどの凄まじい閃光。

それでも頑張つて目を開けてみると、無数の紫色に輝く稲妻が黒雲から伸びて、学園中の避雷針や樹木等に落雷しているのだ。なんだこれ……西園寺だけを狙ってる感じではねえな。

「う、ぐう……なに、この力は……っ？」

「雪乃！」

「西園寺、平気か？」

かなり弱ってはいるものの。それでも立ち上がったきた西園寺。俺と木山はそんな西園寺に駆け寄って声を掛けるが、西園寺は俺と木山を退かせ、再び少女へ近づいてゆく。

明智はこの混乱の中、負傷者の白藤を守る事で精一杯の様子だ。

「まさか、貴女は……【<sup>ダイクエネルギ</sup>暗黒活力】……？」

ダイクエネルギー  
暗黒活力？

それってもしかして、ここで言う能力名みたいなものなのだろうか。

「もしかして……感情能力者はもう完成していたのかしら……？」

感情能力者……これまた聞いた事のない単語である。まあ、この学園に来てから、聞いた事のない単語を聞く機会が増えたんだけど。でも、感情能力者ってのは初耳だな。

だけど、感情能力者ってどういう意味なんだ？

こ、ここは……木山とか明智とか、超能力に詳しくそうなヤツに聞くしかない。

「木山、明智！ 感情能力者って一体なんなんだよ！？」

「あたしも知らない！」

「えっ？ あ、明智は……？」

「私も、そんな種類の能力者は聞いた事がないぞ……っ」

「そ、そんな……」

それじゃあ、感情能力者の存在を知っていたのは西園寺だけだったのか。そういえば西園寺は南部へ向かったはずだが、地図を見る限り あそこには研究施設が集中していたはずだ。

ひょっとして西園寺、そこで何か情報を掴んだのだろうか？  
だとしたら……なんで今まで黙っていたんだよ。

「う、があ……あ……ッ！」

「雪乃おっ！」

包帯だけの少女を、真つ黒の気体　暗黒の気体が包み込んでいた。刹那、少女を包んでいた暗黒の塊が右手に集中し、レーザー光線のようにどす黒い塊が西園寺へ照射される。どういう痛みを感じているかまでは知らないが、西園寺の表情は苦悶に満ちていた。

暗黒の気体を受けた服の生地が焼けるように失われる。

腹部あたりの生地を失い、西園寺のお腹や背中が丸見えだ。

「くっ、ふざ、けるな……っ！」

苦痛に耐えきつた西園寺は体勢を立て直すと、能力で数個の電ひびを製造する。能力によって砲弾の如く射出された電は、迷うことなく包帯だけの少女を捉えて突き進んだ。しかし、少女を包み込む真つ黒い気体が少女の姿を完全に隠してしまった。

それでも電は進路を変えず、真つ直ぐ黒い気体に突っ込んでいく。しかし、じゅぼん、と毒物に肉が入り、その肉が溶けてしまうような音が聞こえる。

暗黒の気体の中から少女が再び姿を現すが、少女は全くの無傷。流血どころか、体のどこも汚れてはいなかった。

「なによ……これ、強制的に氷が溶かされ……いや、氷が消滅した！？」

おいおい、蒸発したってんなら理解できるけどよ……西園寺の言い分だと、完全に水分自体が失われた感じだぜ。あの暗黒の気体……一体どうなってやがるんだよ。

説明不能だ。俺が馬鹿なせいかもしれねえが、あの少女の力は説

明不能だぞ。

「雪乃、退いてろ！」

と、叫びかけてきたのは明智。

両手に発火能力パイロキネシスで生み出して炎弾えんだんが灯っている。

「火傷しろオオおおっ！」

明智はくるん、とをバレエの踊りのように体を回しながら、華麗に炎弾えんだんを放つ。包帯だけの少女はワンパターンな事に、再び暗黒の気体で全身を包み込む。だが、そのようなワンパターン戦法でも明智の炎弾えんだんを防ぐには十分であった。

炎弾えんだんも西園寺の雹と同様、触れた瞬間に消えてなくなったのだ。やがて暗黒の気体は少女を包み込むのをやめ、刃のように変形する。鋭く変形したどす黒い気体が縄のようにウネウネしながら、徐々に明智や西園寺へ接近してゆく。

もうダメだ　と思われた、その時。

「ッ！」

シユ、と一瞬で西園寺と明智が消えて、暗黒の刃が地面を大きく抉り取る。一瞬、気体に触れて2人とも消失してしまったのかと思っただが、どうもそれは違うらしい。

後ろを見てみると、西園寺と明智は白藤の左右に立っていたのだ。

「し、白藤………？」

「ありがとう、助かったわ……ッ」

どうやら、2人は白藤の瞬間移動テレポートに助けられたようである。それにしても、あの少女……どう対処すればいいんだよ。

西園寺だって5本指の一人だったのに、まるで実力が違うじゃねえか。

「は、浜島っ！」

「……ッ！」

そして、そんな事を考えていたのが俺達の僅かな油断。気体……と呼んでもいいのかも分からない物質で作られた、暗黒の気体のよな刃は俺と木山に向かって振り下ろされる。

気付いた時には手遅れ。西園寺と明智が駆け出し、白藤も能力を発動させようとするが、このままでは間に合わない。クソ……やべえ、ここまで……なのか？

「ッ！」

覚悟を決めて、木山を抱き寄せ　　瞼を力強く閉じた。

が、

その時　ドバン！　という、大地を揺るがす凄まじい轟音が炸裂する。

「う、あああああああああああああああああああああああああああ  
ああっ！」

あまりの衝撃に、俺と木山は遙か後方へ吹き飛ばされ、校舎の壁に背中を強打する。

全身に広がる衝撃に、思わず表情を歪めたが……。



「まったく、面倒臭い事になってんなア……メルヘン野郎の次はヤン  
デレ少女かア？」

その時 救いとも地獄とも捉えられる、狂気の塊のような声が  
耳に入ってきたのだ。

## 第228話 暗黒活力（ダークエネルギー）

コイツがさっきの爆発の原因か……というか、コイツは早川はやかわきり錐夏オレの妹で、確か3年くらい前に三原のクソ野郎に捕まり、回収されて研究材料にされたらしいが……。

ハッ、面白エ……まだ生きていたのか。

しかも、随分メンヘラなクソ野郎に構っちまったなア？

オマケに、包帯一枚で外歩くような露出狂にもなっちまったか。

「オマエは錐夏か。まだ生きていたとは予想外だったなア？」

「……兄さん、久しぶり。うん、私は生きているよ」

何の計画のモルモット実験動物にされたか知らねエが、運よく命まで奪う計画には利用されず、中途半端にぶち壊されて生きてるって感じたな。それはそれで可哀想だぜ、死にきれねエってのも苦痛だろオし。にしても、一つだけ気がかりな事があるな。

「ダークエネルギー暗黒活力か……宇宙全体に広がる、あらゆる正体不明な負のエネルギーを自由自在に操作する、科学者も頭を悩ませる能力だが……オマエにはそもそも、その能力をそこまで使いこなせる器は持っていないかったハズだ」

錐夏は精神的に不安定で、その点は超能力者として失格と言えるだろう。あまりにも弱過ぎると超能力がトラウマとなる可能性があり、伸びるものも伸びなくなるからなア。

才能のあるなし以前の問題だ……だから、錐夏はそこまで強い力を使えねエ。

ハズだったんだがな。コイツは一体どオなってやがるんだ？

「全部……兄さんが不幸だったから。私は負の力で能力が強化された……」

「負の力ねエ……どんな実験されたか知らねエが、オマエの目的はなんだ？」

「私の、目的……？」

「回答次第じゃミンチ確定だがな、正直に答えろ」

「私の、目的……わからない」

「わからねエだと？」

散々考えておいて結局はそれか。まったく……誰に似たんだかふざけた妹だ。つかよオ、この一緒にいるとオレまで暗くなっちまう、この異様な空気は何なんだア？

どう考えたって、錐夏が放っているとしたか思えねエが……何の力が働いてやがる。

「兄さん……ただ、私は 恨みを晴らしたい」

「恨みだア？」

「私と兄さんを不幸にした 諸悪の根源をこの世から消したい」

一見正しい事を言っているようだが、コイツの人格から考えると、単なる虐殺シヨーを行いたいと言っているようなものだ。だからその言葉を認めた瞬間、際限のねエ大量虐殺が始まり、関係のねエ一

一般人にまで被害が及ぶのはほぼ確実だろうな。

何よりコイツ、オレが不幸だと思ってるのかア？

何を根拠にオレを不幸にしてるってんだ。もしかして悪の道を突き進む兄の姿が、錐夏にとっては不幸にしか見えなかったと言うのか。

だとしたら余計な心配だ……その道は　オレが選んで突き進んでるんだよ。

だからオマ工程度に　道を塞ぐ権利なんてねエぞ。

「そかい……なら、オレはオマエを排除する」

「えっ……？」

「余計な世話なんだよ。オマエの考える不幸ってのはオレの突き進む道だ。それを邪魔しようとしてんじゃねエ、悪党の道ってのはオレが選らんだ道だ。オマエに係のある話じゃねエ……だからオレを道を塞ぐようだったら　オマエはここから消えてもらう」

オレはポケットのベルトから拳銃を取り出し、ソイツの銃口を錐夏へ向けた。こんなもので錐夏の息の根を止めれるとは思っていいエし、そもそも錐夏をブツ殺す気もねエ。

急所を外すくらいの技術なら、もう日頃の訓練と実践に身につけている。急所を外し、錐夏の戦闘能力を奪つちまうだけでいいんだ。それだけでオレはオレの道を開く事が出来る。

しかし、この程度で錐夏がソイツを許すとは思えなかった。

「兄さん……あはは、そうか……そうなんだ。兄さんも……学園の悪い虫に毒されちゃったんだね」

「あ？」

支離滅裂な事を錐夏は一人で呟いている。

端から見ていればこの女、かなり痛エメンヘラのヤンデレ妹だなア。

「そつだよね……人は不幸を望むはずがないもん。兄さん……可哀想だよ」

「……オマエ、人の話聞いてたのかア？」

そもそも、オレはもう光の道には帰れねェんだ。ならどうするか……暗黒の世界で陰からクソガキや関係ねェ野郎を守るってのが、悪党の役目だろオが。

今の錐夏はソイツを妨害する存在だ。妹とは言え、見逃すわけにはいかねェ。

「兄さん……今から体の中を　お掃除しよう？」

錐夏はニツコリと、虚ろな瞳であるにも拘わらず、何故か口元が薄く笑っていたのだ。

やベエな……コイツは相当危険なタイプだ。

ひよつとすると、久我のメルヘン野郎より100倍は危険かもなア。

「お断りだ。オマエに掃除されるくらいなら　オレがオマエを掃除する」

「言わない……兄さんはそんな事、絶対に言わない　私の知ってる兄さんじゃない！」

「はア、クソツタレが……学園の悪い虫に毒されてるのはどっちだ？ オマエだろオが」

「違う、私は純潔……今の兄さんは 学園に洗脳されちゃってるんだよ……っ」

「弁解の余地ナシってかア？」

「ははは、あはは……じゃあ、私が食道も、胃の中も 全部ぜんぶ綺麗にしてあげる」

「まったく、残り魔力残量は10分しかねエのに……まっ、一瞬で消してやるよオ」

残り10分しか能力が使えねエ事と、学園長の首を切り落とす必要もある事から、出来るだけ能力の使用は控えてエンだが、ダイクエネル暗黒活力相手にそうも言つてられねエ。さっきまで錐夏と戦っていた西園寺のクソ共は気絶中、武器は拳銃しか持っていねエ。

そもそも、西園寺はボコボコにされていたし、錐夏に武器は通じねエだろう。

なら、オレのエアオペレイション大気操作を使い、一瞬で勝負を決めるしかねエ。

そう思い、オレは首筋にある電極に手を伸ばし、素早くスイッチを切り替えた。

戦闘を前提とした 能力使用モードへ。

「だから、逃げないでね 兄さん」

その瞬間、気体と捉えてもいいのか微妙な黒煙……いや、やつぱり気体か。とにかく説明不能な闇に染まったどす黒い気体が発生し、徐々に錐夏の体を包んでいく。なるほど、アレがダイクエネルギ暗黒活力の塊みた

いなものなんだろうか。あの気体から凄まじいエネルギーを感じる。いや、エネルギーだけではねエ……同時に殺意まで感じられた。錐夏ア……オマエ、何処でそんな力の操作を覚えやがった？

「それじゃ、お掃除開始だよ」

刹那、漆黒の気体がウネウネとヘビのように動きながら、やがてそれは複数のギロチンへと変形を遂げる。ギロチンと化したどす黒い気体が、オレの首を斬り落そうと一斉に落下する。正体不明の物質の塊みてエだが、果たして暴風の膜で吹っ飛ばす事が出来るだろうか。

この位置から飛び上がるのはむしろ危険なので、瞬間的に暴風の膜を張り巡らせる。

刹那、ギロチンはオレと接触し 再び単なる暗黒の気体へ戻されたのだ。

なるほど……暴風の膜で対処可能なモンだったのか。

「あ、れ……？」

「ハッ、まさかオマエ……妹の癖にこのオレの存在 忘れちゃったんじゃないエよなア？」

オレは笑いながら、地面をコン、と右足で蹴りつけてやった。

地面が割れ、複数の岩石が風の力を宙を舞う。ソイツはゆっくりとオレに近付き、オレは地中から掘り出した岩石に裏拳を当て、岩石を錐夏に向けて砲弾のように放ってやった。

「あぎやははは！ きゃっははは！」

面白エように岩石が飛んでいくか、錐夏は決して避けようとはし

ない。ただ、漆黒の気体で全身を包み込んだだけで、その場から動かないのである。

「ほらほらアツ！」

何発放つても避けようとはしねえ。

しかも気体に触れた瞬間、岩石は太陽にでも触れたかの如く消滅していくのだ。

どオ言う原理だアレは……クソツタレ、一瞬で片付けねえと制限時間が危険だ。

「……ハツ、互いに攻撃が届かねえってか」

「届くよ兄さん。兄さんの攻撃は届かなくても 私の攻撃は兄さんに届く」

「なに言ってるんだオマエ？ オマエの攻撃はオレの能力で反射出来るだろオが」

「兄さんの能力は大気操作系。なら、風の防御で防げない物質を放てばいいだけ」

すると、上空から紫色の稲妻が轟音を上げながら落下してくる。

なるほど、確かに雷つてのは風の防御で防ぐ事は出来ねえが 空気の防御ならどうだろうか。

稲妻が命中するが、空気の膜が作用し オレの体に凄まじい電撃は届かない。

「馬鹿かオマエは……気体だろオが雷だろオが結果は同じなんだよ！」



ドン！ と風の操作を行い、腕を伸ばしながら錐夏へ接近戦を仕掛ける。どうやら遠距離攻撃は不思議な気体で防がれちまうらしいし、ならば近距離から酸素を奪ってやる。

「さらなら新物質がいいんだね。うん、いいよ　ダイクエネルギー 暗黒活力の本領発揮だね」

オレは錐夏の懐に潜り込むが、錐夏は拳のように変形させた漆黒の気体を、オレの体をぶん殴る為だけに放ってくる。オレは一旦動きを止め、暴風の膜を張り巡らせた……ハズだったが。刹那、ドガン！　と言う鈍い衝撃が脳を揺さぶった。

「が……い……ッ!？」

反射が……効いていねエ……ッ!？

どオなつてやがるんだ、クソツタレ……まさか三原の真似事。いや、暴風の膜の隙を突かれたという感覚はなく、むしろ全く効果を発揮しなかったと表現した方が正しい。

つまり　錐夏の攻撃は暴風の膜を無視して、オレの皮膚を削ぎ取ったのである。

「だ……あ……ッ!？」

続く第二撃は切刻むような一撃。腹部を抉り取られる感覚に陥り、気付いた時には数十メートルはぶっ飛ばされ、何かの建物の壁に背中を強打していた。

さらに錐夏は漆黒の気体を槍のように変形させ、それをこちらへ放ってくる。

「おおオ！」

オレは風邪の操作を行って、バネのように地面から飛び上がった。右か左か、どちらに逃げるかで迷ったものの、右には西園寺の仲間と思われる二人、左にも西園寺と……数人がいた。その両サイドに逃げるのは危険と判断した為、オレはあえて風の操作で数十メートル上空へと飛んだのだ。

続いて西園寺達を守る為、オレは破壊されるであろう佐井学園の校舎を中心に、凄まじいまでの烈風を吹かせる。西園寺達を助ける義理はねエが……ついでに救ってやるよ。

そして、その瞬間 佐井学園の校舎は錐夏の攻撃で木端微塵に砕け散る。

無数の残骸が散らばり、西園寺達へ降り注ぐようとしている……が、先に吹かせておいた烈風が鉄筋やコンクリーの塊の落下を防ぎ、結果的に西園寺達の命は救われた。

まっ、それもオレが助かるついでだ……。

オレは瓦礫の山の一番高い所に着地し、そこから錐夏のいる場所を見下ろす。

「……チッ」

ようやく気付いたが、頭の横からドロリと何かが流れる感触があった。

口からも同じ感触がある……クソツタレ、気付かぬ間に負傷していたみてエだな。

「兄さん、ねえ……どうしてそこまで抵抗するの？」

「むしろ問おうか。なんでオマエはオレの道を妨害するんだ」

「兄さん、諦めようよ……今の兄さんは私に勝てないよ?」

「なに寝言言ってるんだ三下。オレが学園最強だって事、忘れちゃったんじゃないのか?」

「確かに、その人達よりは強いよ……でも、結局兄さんは兄さん」

「……なにが言いてエ?」

「結局、兄さんは既存の物理法則に従った超能力しか使えないってことだよ」

錐夏がそう言う。ズバア! と、一気に漆黒の槍が無数に放たれる。

それはまるで地獄絵図。得体のしれない物質である事を考慮し、オレは回避の準備を行った。

そう……ここからが、これからが 本当の戦いの始まりである。

## 第228話 暗黒活力（ダークエネルギー）（後書き）

キャラクターNO010

あけちみつひで

・ 明智光秀 ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：腕力は高いが、基本的に万能タイプ。本当なら暮葉一人でも倒せるレベル。

## 第229話 最強・無能・共闘

う、く……いてて、クソ……いつの間にか凄まじい事になっているな。俺　浜島雅人は背中を強打した時の衝撃があまりにも強く、いつの間にか気絶していたようである。どうやら、俺以外のみんなも気絶しているようだ……クソッ、結局何がどうなったんだよ。

とりあえず、一番近くで寝ているのは木山……ってオイ。  
木山のヤツ　頭から血を流しているじゃねえか。

「お、おい木山……しっかりしろ！　木山！」

「……っ」

クソッ、起きねえ……だけど呼吸は整っているし、本当に気絶しているだけだろう。他の連中はどうなったんだろうか……って、なんで後ろにあった建物が瓦礫の山になってるんだ？

それと、俺達が寝ている場所の上空で　何故瓦礫が空中に浮いているんだ。

「じ、ばあ……ッ!？」

「無駄だよ兄さん……兄さんじゃ、私には勝てないから……」

不意に声が響いて来たので、俺はそちらに視線を向ける。誰かと女が戦っている、その声からおそらくは男だろう。何者かが包帯だけの少女と戦っているのだ。

俺は瓦礫の山を掻き分けて、戦場を確認しようとする前に出る。

そして、この目に映ったものは　激戦を展開する白髪の男女であった。

「な、なんだ……アイツら？」

包帯だけの女も凄まじい強さだが、押され気味の男のほうも信じらねえよ……物凄く速いスピードで移動したり、時々飛んだり竜巻を起こしたりしていねえか？

という事は、あの戦っている男も超能力者……なのか？

「が……おあ……ッ!？」

「あはは、ねえ……早く解剖させてよ。兄さんを掃除しないといけないから……」

「ぐっ……ナメてンじゃ、ねエぞこの 三下がアアッ!」

白髪というのか、銀髪というのか、包帯だけの少女に良く似た髪の色の方は、這いつくばった状態で両手の拳を地面に叩きつけ、見る者を圧倒するどす黒い竜巻を発生させた。2人が戦っている場所から俺がいるこの場所は、20メートルは離れているハズだ。

しかし、それでもあの竜巻に吸い込まれそうである。

まず、い……何かに掴まらねえと 竜巻に巻き込まれちゃう。

「……ぐっ!」

咄嗟にコンクリートの塊に掴まったはいいが、それでも竜巻に吸い込まれそう。男が生み出した竜巻は進み始め、包帯だけの少女を包み込もうとする。

しかし、少女を包む暗黒の気体が膨張し ボゴア! という、耳を裂くような轟音を炸裂させながら、逆に竜巻を掻き消しやがった。

ば、化け物同士の戦いだけ……あの包帯だけの少女が一番化け物だ。

このままじゃ、あの男のみならず　いずれ俺達も殺されちまうよ。

元々最初に狙われていたのは俺達だし、もしあの白髪野郎が負けちまったら……。

「……っ」

おそらく、あの戦いに俺が飛び込んだ所で　俺は多分役に立てない。

次元が違うんだよ……あの化け物たちとは。俺は単なる人間の不良で、アイツらは化け物じみた能力をバカス力撃ちまくる超能力者で、この差はあまりにも大きすぎる。詰められない差だ、勝てる見込みなんざ殆どねえよ……でも何故だ。ここで退けねえのは何故なんだろうか？

と、その時。

すべての人がてめえらを見離すと思ったら大間違いだ。

かつて、誠和大学で遭遇した　俺とは違う学生の男の言葉が、自然と浮かんでくる。

全員が見捨てる事はねえだろ。たとえ世論から激しい批判を受けても、周りのヤツらはてめえらを庇うハズだ。

言葉と同時に、あの顔まで脳裏に浮かんできやがった……ハハツ、そうだよな。あの言葉は俺に対するものだったけど、確かにその通りだ。

誰か一人を、全員が見捨てるわけがねえ……今がその状況じゃね

えか。

西園寺を、明智を、白藤を、木山を、そして……あの戦っている男、さらには何らかの原因で歪んでしまったあの少女を 助けたいとは思わねえのか？

見捨てていいと思ってるのか？

あの野郎……ハハ、ようやく言葉の意味と俺に足りねえものが理解できたぜ。

ここに来て、俺はズボンのベルトから拳銃を取り出す。

「こんなモンで役に立てるか知らねえけどよ……」

俺が持っているのはダブルアクションタイプの旧式拳銃だ。

本当、こんなもので超能力者と戦おうってのが間違っている。けどよ、俺は……俺はたとえこんなものしか持っていないなくても、今更引き下がる気はねえ。弾薬は既に弾倉に装填済みだ。こういう場所だからいつ襲撃されるかも分からねえし、いつでも撃てる状態で持ち歩いている。

俺は引き金を引き、撃鉄を発生させる。連動して弾倉が回転し、やがて弾薬が発射位置まで移動したのか、弾倉が固定される。同時に、引き金が定位置に戻ってきた。

発射準備完了だ……狙いは包帯だけの女。

殺しはしねえ、殺す勇氣もねえ……だから狙うのは脚だ。

この拳銃で撃つても風穴が開く程度で済むだろう……よく狙いを定めるんだ。

「頑張れよ俺、この程度じゃねえだろ……俺は男だろうが」

人を撃つってのは初めてだが……戦場で迷っている暇なんかねえ。とにかく、脚を狙って撃てばいいじゃねえかよ。俺はじつくりと、少女の脚に照準を合わせて……。



「く、喰らえ……クソオオオオオオオオッ！」

刹那、

タン！ と言う乾いた音が響き渡り、弾丸は一直線に少女の脚を狙って進む。だが、少女は直撃の寸前にどす黒い気体に全身を包み、一発の銃弾は完全にこの世界から消失してしまった。

「くそっ!？」

まさか、不意打ちでも弾が通じねえのかよ……これは弱った、どうしよう。しかも銃声と飛んでいった弾丸のせいで、包帯だけの少女に居場所がバレちまった。少女は暗黒の気体に自分の身を包み込んだまま、静かに一歩ずつ、こちらに迫ってくる。

それだけで嫌な汗が噴き出てきて、全身が震え始める……くそっ、ここには木山も西園寺も明智も白藤も、みんな気絶している状態で倒れているんだ。

もしこのまま俺がここに居れば、少女の攻撃で全員殺されてしまう。

だ、だったら……そうなる前に 俺が飛び出してやる！

「畜生オッ！」

俺は文句を言いながら瓦礫を飛び越え、自ら戦場へと飛び込む。

少女は俺と白い男に警戒しつつも、暗黒の気体を解いて姿を現した。

それでもどす黒い気体は少女の周囲を漂い、不気味な光景を演出している。

「あれ……まだ、生きてたの？」

「……て、テメエ……近づくなよ！ 近づくと撃つぞおらぁッ！」

「邪魔くさい……」

すると、少女が暗黒の気体を槍のように変形させ、無数のソレが俺を襲う。

「ひ、いッ！」

容赦なく襲ってくるそれから、俺は全力で走ったり跳躍したりで逃走を図る。弾丸のような速さで放たれる暗黒の槍だが、未来予測位置さえ分かっていたれば回避は可能だ。

結局、俺は全ての槍の回避に成功し とうにか生き延びる事に成功する。

気付けば俺、自然に少女と戦っていた男の隣に並んでいた。

それでも気を抜かず、俺は再び少女に銃口を向けた。

「オマエ、さっきそこで伸びてた野郎だろ？」

「えっ？ あ、ああ……そうだけだよ。起きたらこうなって……どうなってんだよ？」

「知るかクソボケ。チツ、そこで大人しくしていれば、助かっていたかもしれないエのにな」

ヤケクソ気味に言い放つ白い男だが、残念だったな。

「生憎、俺は大人しい人種じゃねえんだ……アンタ、助太刀するぜ」

「つかオマエ、ちゃんと戦力になんのかア？」

「心配すんじゃないよ。それよりアンタ、一発逆転の必殺技とかねえのかよ？」

あんまり期待はしていねえけど、持つてて欲しいよな……必殺技。もしあつたらさ、ヒーローものみたいに強敵に逆転勝利できるじゃねえかよ。

でも期待は出来ねえ……ここは現実、俺ら人間には限度がある。

「……あるにはある」

ところが、白い男の口から漏れた言葉は意外なものであった。

「……ま、マジかよ!？」

「ああ、ただソイツを使うには演算処理に時間がかかる。前は短時間で出来たんだが、脳にダメージを負って、機械の補助を受けても演算能力が低下してるから、処理に時間がかかるんだ……残念だなア、ソイツは今じゃ実戦には使えねえよ」

マジかよ……けど、男の言葉が正しけりゃ ソイツは時間を掛ければ使えるんだろ。

だったら、十分有効な戦術兵器じゃねえかよ。

「オーケーわかった。テメエはソイツの準備をしな。その間の時間は俺が稼ぐからよ」

「本気で言ってるのか？ オマエじゃ錐夏の手は無理だ」

「それでもやるつつつてんだよ。いいからテメエは演算処理つてのを始めるよ」

「……チツ、面倒臭エ」

さてと、時間稼ぎか……上等だ、やってやるうじやねえかよ。

要はあの野郎の準備が終わるまで、1秒でも長く包帯だけの少女から逃げればいい。俺がやるべき事はたったそれだけだろ。それくらいなら……俺だってできるぜ。

俺も少しは役に立たねえと　フレンドの一員として情けねえだろ。

こうして　死ぬかもしれない時間稼ぎが始まったのである……。

## 第229話 / 最強・無能・共闘（後書き）

キャラクター No.011

ながひちあきひ

・永刈晃 ×10が最高、ナシは無能という意味。

マジッククロース

魔法衣服を着ていない素の実力。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：ナシ

知力：

敏捷性：

地位：

総評：何らかの格闘技をやっていたらしく、ヤンキーの中では強いほう。しかし所詮は喧嘩番長レベル。

## 第230話 時間稼ぎ

くそつ、なんて任務を引き受けてしまったんだろうか……俺。普通に考えたらあんな化け物に勝てるわけがねえし、白い野郎が必殺技を発動するまで時間を稼げるわけもねえ。だけど、今その役目が出来そうなのは俺だけだ。しかも、ここまで来てしまった以上後には引けない。

やるしか、ねえな……。

だけど大丈夫だ。

超能力者だつて

無敵つて訳じゃねえ。

「ハーツハハハ！ 俺を殺したかったらここまで来いやあああああああああッ！」

隙を見て駆けだした俺は、西園寺達が倒れている瓦礫と化した校舎ではなく、その反対側にあつた別な建物の陰へ走り込んだ。超能力者と正面からぶつかつても勝ち目はない。それに、俺の役目は超能力者を倒す事ではなく、あくまで必殺技発動までの時間を稼ぐ事だ。

そう、時間さえ稼げばいいんだ……。

だから、少しでも自分に有利になるように 逃げ回つたって何の問題もねえ。

「……………」

バギン！ と警棒でガラスを割り、窓を飛び越えて建物の中へと侵入する。屋内には大きな黒板と水道付きの黒い机が複数。さらに試験管やわけのわからないものまで沢山置いてある。どうやらここは理科室らしいな……隠れ場所も多いし、武器になりそうなものも

多い。

全く、都合のいい場所に逃げ込めたぜ……。

「……どこ？ 出てこないと……建物ごと壊しちゃうよ？」

ジャリジャリと、ガラスの破片を踏む音と同時に、包帯だけの少女の声が聞こえた。脅しのつもりなんだろうか、それともガチで破壊するつもりなんだろうか。

どっちにしても、長居は無用みてえだな。

丁度、俺は教卓に隠れているが……何か使えそうなものはねえか？

俺は机の上を探したが、その時 右手にペットボトルのようなものに触れた感覚があり、今度はそれを掴んで、自分の目の前に持ってくる。

フツ化水素……ハツ、中々危険な物質じゃねえかよ。

コイツって確か、すぐには効果は現れねえだろうが……まあいい攻撃手段ではあるう。

俺はベルトに挟んである拳銃の装填も行い、全ての準備が完了したところで、

「おおおおオオオあああああああああああああッ！」

教卓の下から一気に飛び出し、包帯だけの少女を目がけて突っ走る。少女は暗黒の気体をギロチンのように変形させて、俺の首でも切り落とそうとしている。しかし、そんな事をさせる前に、俺はフツ化水素入りの容器のフタを開け、フツ化水素の気体を少女に向かって放つ。

19.4度を超えていた為に沸騰した、刺激臭のする危険な気体が少女を襲う。

だが、少女は咄嗟に全身をどす黒い気体で包みこんでしまった。くそっ、これじゃ皮膚にフツ化水素が触れたか分からねえだろ…

…ッ。

「さようなら」

「……ッ!？」

暗黒の気体の裂け目から少女の顔が見えた瞬間、少女は一言冷たく言い放つ。それはあらゆるものの終了宣言。少女は気体をギロチンのような形状に変形させ、それを振り下ろしてくる。圧倒的な威力で放たれたそれから逃げる為、衝動的に理科室の扉を開け　この部屋から飛び出す。

背後からズドン!　という凄まじい轟音が響いてきたが、そんな事など気にせず、とにかく俺は少女から逃げる為に校舎の中を走り続ける。

玄関は何処だ……下手に校舎を逃げ回るよりも、外に出たほうが安全かもしれない。おそらく少女は俺を殺す為に、校舎の隅々を探すだろうしな……。

とにかく、少しでも時間を稼がねえとな。

俺が生きる為にも、あの少女の暴走を止める為にも　。

「あつた、玄関だ!」

玄関を発見し、ペースを整えた長距離用の走り方から、後先を考えない短距離用の走り方へと走法を変更し、タックルをし掛けてガラスを突き破る。

激しく割れたガラスが地面に散乱するが、気にせず俺は走り続けた。

「ねえ、どうして逃げるの?」



「ッ!？」

しかし、俺の逃走作戦は失敗に終わったようである。  
どういうわけか 既に俺の背後には包帯だけの少女が佇んでいたのだ。

「て、テメエ……なんで!？」

「知りたい? ガラス……割ったよね？」

「ま、まさか……」

「うん、あなたが外にいるのはお見通し」

「……クソッ!」

どうすりゃいいんだよ……今から逃げるつつつてもよ、俺を捕捉した敵に背中を見せるのはあまりにも危険すぎる。まずいなこれは……これからどうやって戦うべきなのだろうか？

「あはは、ねえ……早く死んじゃおうよ。そっちのほうがかきつと楽になれるよ?」

「……生憎、俺はまだ死にたくねえんだ」

「なんで? 楽になれるし、余計な不安を感じる必要だつてないんだよ?」

コイツはどうして……ここまで簡単に死ね死ね言えるんだよ。

「……うるせえ」

そう疑問に思ったからこそ、言い放った一言。

少女は意外そうな表情を浮かべ、明らかに驚いている。

そんなに珍しいかよ……死ねって言われて反抗する事がよ。

「どうして？ 苦痛も不安も感じる必要はないんだよ……不幸にもならないんだよ……？」

「そうかよ……けどな、そんなのテメエの勝手な言い訳だろ」

明らかに、一瞬包帯だけの少女の肩がびくん、と震えた。

「そりゃあ俺だってよ、好きで不良やってたわけじゃねえよ。テメエの言う通り、色々苦痛も不安もあってよ……だから好き勝手暴れて、いろんな連中に迷惑かけて。自分で自分の首を絞めているだけかもしれないけど、俺達はそうやって居場所を見つけてたんだ」

「……だから、何？ 結局は……死んだ方が楽だよな……？」

「ハッ、そうかもな……結局俺が存在しなければ、俺達のせいで怖い思いをした藤島葵も居なかったろうし、俺だって今感じている恐怖を味わう必要もねえだろ」

本当、今になって思えば馬鹿げているぜ……反省した所で許されるハズがねえし、俺は永遠に悪人のレッテル貼られるんだらうけど。それでも、馬鹿げているとは思えるようになった。

いくら上の奴が怖いからって、罪もねえヤツを襲うのはダメだよな……。

だけど全てを失ったわけじゃねえ。得られたものだって数多かつ

た。

だからこそ 少女に言える事がある。

「ただどな、大切なのは死じゃねえ。一番大切なものは生きてるって事実だろ！ 俺みてえな人間のクズが言うセリフじゃねえけどよ、それでも言っつてやるよ！ 生きてなきゃ幸せも感じられねえだろうが！」

ギリギリと、包帯だけの少女が齒軋りをする。

肩も震え、悔しそうに拳を力強く握りしめている。

彼女から発せられているどす黒い気体も 何故だか勢いを増していた。

「私に、幸せなんか……来るハズがないよ？ 兄さんは幸せに出来るかもしれないけど……私は無理。私が兄さんと私を不幸にする存在を排除しても、私は私自身を幸せには出来ないよ……ッ」

「テメエ……そこまで分かってて、なんでこんな事になっちゃまったんだよ！」

わかる……聞くまでもねえさ。コイツがどうしてそんな行動に移っちゃまったのか、まだ大人には短すぎるって言われる人生の中で 何度も失敗してきた俺だから、痛いほどに分かる。

「無理、だよ……私、化け物だよ？ こんな悪い性格の持ち主だよ？ こんな化け物が……邪魔を排除した所でどうやって幸せになれるのよ……ッ？」

「……幸せってのはな、自分で掴み取るものなんだよ。もちろん他のヤツの支えもねえと掴み取れねえけどな、結局は自分の努力

が一番大事だ。今のテメエにはそれがあんのかよ？ それさえあればテメエだつて幸せになれるだろ」

「無理、だよ……だつて、結局……私一人だから……っ」

少女が辛い想いをしている。その顔は今にも泣き出しそうな子供のように、今の彼女には夢も希望も残っていない。彼女が望んだところで 誰もそれを助けてはくれない。

傍にいてくれるヤツもいない。つまり彼女は孤独で それがとても辛いんだ。

「一人……？ ンなわけねえだろ……テメエには兄つて家族がいるだろ。それだけで一人じゃねえつてのが何で分からねえんだ。確かに、あの兄貴はテメエの相手をしてくれるかわからねえけど、結局テメエは一人じゃねえんだ。作ろうと思えばテメエにだつて友達は出来るんだよ！」

「無理、無理だから……っ」

「無理無理言つてんじゃねえ！ 俺も昔はそういうヤツだったけどよ、人つてのは変わるんだよ！ 俺は変わっちゃまったからテメエの前に立つてんだろ！ テメエのような馬鹿みたいに強い奴相手に、大した実力もねえのに立つていられるんだろ！ もう少し前向きになつてみるよ……テメエの人生はまだ終わつてねえんだよ」

全く、なんだか俺……今、どうしようもねえヤツにしか見えないな。

過去に自分がそうだったつてのによ、それなのに説教してるんだぜ、これじゃあ、周りからは変わったつて所詮は馬鹿つてしか見られねえだろつな。

「ただ、同時に不思議な気分でもある。まるで　かつての自分に説教しているみたいだよ。ああそうだよ……人ってのは、キツカケさえあれば変わるんだ。俺は、警察じゃなくてフレンドに拘束されたから　それがいい機会だったんだろうな。」

「無理……だから、私に機会はない……機会を与えてくれる人なんていない。兄さんも、結局は私を排除しようとするんだから……結局、私に　機会なんて訪れない……ッ」

「まったく、ホントに面倒くさい女だな……機会なら今あるじゃねえかよ。」

「少なくとも、俺はこの子を憎いとは思っちゃいねえ。昔の自分を見ているような気分だ……だったら、俺が言うべき事は一つしかねえだろ。」

「今が機会じゃねえのかよ？」

「……えっ？」

「友達になら　俺達フレンドがなってるってやるってんだよ」

「……うそ、そんなわけ……だって、私は……っ」

少女は未だに信じられない様子だが、信じさせるのに一つだけいい方法がある。俺はそれをやる為だけに、少女に信じてもらう為に武器を捨ててゆっくりと歩み始めた。

向かう先は　少女の目の前。

「私は……化け物、みんなを襲って……全てを破壊して、不幸の元

凶で……っ」

色々震える口で言いまくっているが、気にせず俺は少女に近付いてゆく。

ベルトに挟んでいた拳銃も、特殊警棒も、武器になりそうなものは全て捨てて、

「大丈夫だ、今の俺は武器を持っていない　お前と戦う力なんて最初から持っていない」

嘘にしか聞こえないかもしれないが、それでも安心させようと少女に語り掛ける。少女の震えは全く止まらず、俺が一步步くと少女もまた一歩、後退りをする。

どうやら、もう少女にも戦意は残っていないらしい。

勝った……この時俺は　勝利を確信した。

「ダメ、だよ……不幸が感染<sup>うつ</sup>するよ……近付いちゃダメだよ……っ」

そんなわけねえさ。

やがて、少女の背中が　樹齢もあれそうな大木に触れる。

少女の後退りはそれで終了し、俺が少女に迫るだけとなった。

震える体、苦痛に耐える哀しそうな顔……そんな少女に　俺はもっと近づいて、

「ほら、証拠だ……これでも信じられねえか？」

ぎゅ……っ、と、温かく、優しく、包み込むように　俺は彼女を抱きしめた。

しばらくは怯えていた少女だが、やがては俺の胸に顔を埋めていく。

「テメエは一人じゃねえよ……」

言いながら、少しずつ少女を抱く腕の力を強める。

少女の柔らかな感触と、薬品の臭いの中に紛れた女の子の匂いが俺を刺激してくる。

やべっ、これ……俺には強烈だったかもしれねえ。

「今日から俺、テメエの友達第一号だから……そういつわけでもしくな」

「……うん」

でもまあ……別にいいか、とにかくここは我慢しておこう。

友達第一号が　せっかく作った友達を裏切るわけにはいかないからな。

その後、俺は1分ほど少女を抱きしめ、その後俺はとある場所へと向かった。念の為、少女を見つかりづらい場所に隠しておいて、俺はただ一人　やり残した仕事をする為に歩いたのだ。

その場所とは、白い野郎や西園寺達がいる　校舎の瓦礫がある場所である。

「おい、アンタ……必殺技の準備は出来たのか？」

「ハッ、残り15秒だってんだよ……待ってる、すぐにぶっ放して

やる」

「……その必要はねえな」

「……あ？」

白い野郎は明らかに不機嫌そうに、表情は薄いものの、かなりの驚きを見せていた。

「終わったんだよ、戦いが」

「……どオ言う事だ」

質問され、俺は白い野郎に向かって歩き出す。

俺は交差するように白い野郎の横に並び、こう言い放ってやった。

「俺が説得したんだ。だからもう　あの子との戦いはお終いだ」

そこでようやく　タイミングを見計らった少女が陰から姿を現す。

そこには戦意も殺意も感じられない。

ただの　純粹な少女が俺の背後、白い野郎の目の前に佇んでいる。

俺は体ごと少女のほうへ向けて、少女の顔を見る。

「兄さん……ごめんなさい。もう私……兄さんとは戦わない」

「そういつわけだ。テメエ、アイツへの攻撃は中止だ」

「……チツ、面倒臭エ」



しばらく悩んだ末、白い野郎は能力使用中断したようである。落ちていた杖を拾うと、首筋にある謎のスイッチを押した。多分それが戦いの終了の合図だったんだろう。

俺はそこで、少女に顔を向けて 静かに微笑んだ。

「……これで、終わりだな」

## 第230話、時間稼ぎ（後書き）

キャラクターNO011

・船木健太 ふなきけんた ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：ナシ

知力：

敏捷性：

地位：

総評：永淵には劣るものの、ヤンキーの中では強いほう。しかし所詮は喧嘩番長レベル。

## 第231話 勝者達が得たもの

その後、浜島って名前だったか……錐夏の暴走を止めた野郎と話し合い、オレ達トレントが学園長の首を切り落とす役目を引き受けた。ソイツの所属するフレンドの主要戦力は殆ど負傷者で、組織としては壊滅状態。簡単に言えばもう戦う力は残されていねえらしい。そこで、まだ全員が戦闘可能状態であるオレ達の出番……なハズが。

おっ？ アンタはさっきの黒い翼の……？

学園長……だったかしら？ そのクソツタレはアイリス達が捕えたわ。

目の前には、自信たっぷり立っている北野昂って野郎とアイリスって女がいる。その奥には縄で縛られ、口にガムテープを張られたハゲ頭の学園長の姿があった。

まっ、結局学園長はアルファ隊に拘束され、北野達は後始末の為に学園に残り、オレ達は報告の為に一旦隠れ家に戻る事になった。現在、オレ達は黒のワンボックスカーに乗っている。

その中で一つ 気になる事があるのだ。

「ンで、ラウル……オマエに甘えているその女は誰なんだ？」

「ああ、この子？ まあ、なんというか……俺の彼女だよ」

「えへへ、先輩……っ？」

「チッ、彼女作ってる余裕があったのか、オマエには？」

「あははは……」

あははじゃねエよ……こっちは死ぬ気で働いてたつてのに、コイツら……どオやらオレがクソ忙しい時に遊んでやがったんだな。

「ちなみにその子の名前はミキストリ。今日からアタシらと行動を共にするからよろしく頼むよ」

「チツ、つまり新入りか……」

ザスローンってのは新入りもOKな組織だったのか。まア……戦力が増えるンなら、オレとしても全く文句はねエが、足を引っ張るってンなら容赦なく切り落とす。

それがたとえ、ラウルの彼女だろオがな。

にしても、ラウルの知り合いって事はあの女……魔法使いなのかア？

「いやあ、まつ、ミキストリちゃん加入もめでてえが、戦いが1日で終わって、しかも俺達の勝利ってのもめでてえ話なのよな」

そう言ったのは近藤だが、日本刀を持つ右手とは逆に左手には一枚の冊子。さらに、複数の書類やケースに収容されたメモリも、近藤の近くに置いてある。

「なんだコレ……少なくとも、ここに来る時にはこんなモノはなかったハズだ。」

「オイ近藤、その書類の山と大量のメモリはなんだ？」

「ああコレ？ 佐井学園の重要書類とか、機密のデータとか、そん

なものなのよな」

「どさくさに紛れて回収したのか。よくもまア警備の堅い学園東部を攻めたモノだ」

「ああ、潜入したのは俺じゃない。これはラウルとミキストリちゃんのお陰なのよな」

ラウルとミキストリって女が……？

ハッ、そういえば思い出した……ラウルは人の体を複製する魔法を使えるらしい。得意とする宗教魔術とは違う見てエだが、使い勝手はかなりいいらしいな。なるほど……学園東部を警備するヤツに成りすましちまえば、戦わずに重要資料を回収できる。

考えたモンだ……。

ミキストリって女も、ラウルと似たような魔法が使えるんだろか。

まっ、正直どオでもいい……。

「ねえ早川、アンタ……ホントによかったの？」

「なにがだ？」

ぼーっとしていたその時、不意を突かれるようにアナスタシアに声をかけられた。

なんだあの女……珍しく、人の事を心配しているみてエだな。

「アンタ、妹と再会したんでしょ？ ホントにアンタと一緒に住まなくてもよかったの？」

「……どオ言う意味だ？」

「だってアンタ……家族でしょ？ ザスローンの上だって鬼じゃないわ、条件さえ満たしてしまえばアンタ、その妹と一緒に暮らす事だって可能だったのよ？」

なるほど、そういう意味で心配していたっのか。

アナスタシアめ……オマエは家族想いのいいヤツらしいな。

だがなア、オレは錐夏と一緒に過ごす事は出来ねエ……。

「お断りだ」

「な、なんでなのよ？」

それは別に、オレが錐夏の事が嫌いだからとか、家庭の都合や錐夏が危険だからとか、そんなチンケな理由なんかじゃねエ。もっとアイツの事を考えた上で出した結論だ。

「アイツはようやく、居場所ってのを見つけたんだ」

「居場所ねえ……」

「オレの所にいるよりは、そっちにいたほうが幸せってモンを掴めるだろ？」

「……アンタ、意外と家族の事想ってたのね」

「チツ、くっだらねエ」

オマエにだけは言われたくねエよ……。

というか、ザスローンのメンバーには言われたくねエな。ザスロ

ーンってのは、どうも複雑な事情を抱えた魔法使いが数多く所属し、その殆どが家族絡みらしいからなア。

まっ、ラウルのクソ野郎は違ってみてエだが……しかし、家族かア。そんなモン……とっくの昔に三原のクソ野郎が消しやがったからなア。

オレと錐夏を除いて。

「まっ、今日はぱあーっと宴会でもやろう。ミキストリちゃん加入祝いも兼ねてなあ」

「ちょ、近藤さん！ ミキストリは未成年だよ！？」

「先輩、私は別にお酒平気ですよ？ 日本酒というものにも興味があります」

「ほら、ミキストリちゃんだってそう言ってんだ。ラウルもがばあーっと飲めばいいのよな」

「アタシは酒好きだし、宴会やるなら当然参加するわ」

「しかし、相変わらずザスローンってのは押れ合いグループだなア。」

「ところで宴会って、オレも参加しなきゃいけないのか？」

「オレは未成年だし、しかも酒は苦手なんだが……。」

学園へ向かう際に乗ってきた盗難車に乗り、俺達は古宇坂に戻って早速、白藤や西園寺などの負傷者を病院へ運んでから、残りの俺を含むメンバーは白藤家かくれがへと向かった。

鍵は白藤が入院前に明智に手渡され、出入りは自由である。つか、女の子の家に勝手に出入りするつてもどうかと思うが、まあ……本人の許可があるんだ、別に問題ねえか。

その後俺は錐夏と名乗る少女を、俺達の居場所であるフレンドの一員にするよう、フレンドのリーダーである西園寺に掛け合ってみたのだが、どうやら別にいいよとの事らしい。他のメンバーもそれについて、異論もないみたいだし、こうして錐夏はフレンドの一員になったのである。

「つで、明智……本当にテメエの家でいいのか？」

「ああ、私の家はそこそこ広いからな。家族が一人増えたと思えばむしろ嬉しいぞ」

「け、けどテメエ……兄貴の事は嫌いなんだろ？」

「まあ……けどな、兄貴は兄貴で錐夏は錐夏だ。錐夏はアイツとは別人だぞ」

「……そっか」

あの兄貴……そこまで悪いヤツには見えなかったけどなあ。まっ、過去になにがあったか俺は知らねえけど、他人を好く嫌うつてのは、それを思う本人の問題だからな。

俺なんか口出しすべきではないだろう。

錐夏は今、白藤のベッドで寝ているが、その間に錐夏の宿泊場所



が決定した。

今日から錐夏は 明智の家で寝泊まりするようである。

「は、浜島……っ」

「あ、なんだ木山？」

木山が背後から離しかけてきたが、何だか普段の木山と比べると違和感を覚える。

コイツ、こんなもじもじするようなヤツだっただろうか？

いつもの活気な木山とは違い、何故か今の木山は 恥ずかしそうに俯いていたのだ。

「あ、あんたってさ……その、なんて言えばいいのかな？」

「あんだよ、お前らしくねえな……いつも通りハッキリ言っちゃまえ  
よ」

さくらんぼのように赤く染まった頬、単に恥ずかしそうだった表情も変化する。次第に上目遣いをしながら不機嫌そうに、ギリギリと歯軋りをしていた。

「やっぱ、いつもの木山とは違うな……っか、なんで不機嫌なんだろうか？」

「やっぱ、なんでもない！」

「あ、お……おい！」

ぷすつと僅かに頬を膨らませていた木山は、ぷいつ、と後ろを向いてしまい、荒々しい足音を立てて居間から出て行く。やっぱり変

だな、戦いに疲れておかしくなっちゃまったのだろうか？

「浜島も、藤島には劣るが……中々鈍いやつだな」

「あ？ 明智……今、何か言った？」

「いや、聞こえてないなら別にいいぞ」

「そうか……」

「なんだかみんな変だな……確かに佐井学園での戦いは激戦だったし、疲れるのは当然の事だと思うんだけど、頭がおかしくなるほどの疲れだったのか？」

「まっ、俺は逃げ回っていただけだし、前線で戦っていたコイツらは違うのかもな。」

「それにしても佐井学園、かぁ……今後、あの学園はどうなるんだろうか。早川悠ってヤツに後の事を任せたいのはいいが、その後どうなったか……やっぱり関係者としては気になる所だ。」

「けどまあ……バッドエンドではねえだろう。」

### ミネット・ローランSide

ミネットは回復魔法である程度の傷は癒えたけど、それでも傷は深いらしい。結局、後始末はアイリス先輩や北野さんに任せて、ミネットは集中治療室行きなんだよ。

「あゝあ……退屈だよ。あの人にもリーネさんにも会えないし……」

はあ。悠、あの人は今頃何処で何をしているんだろう。あの人の障害となっていた学園は、殆ど解体されたも同然。今回の戦いもテロリストによる爆破テロという事にされるらしいし、あらゆる証拠も隠滅するらしいんだよ。

特に科学技術はロジーナが利用できないものかって、残された施設や資料、そして行き場を失った科学者たちを回収しているらしい。本当に利用できるかはわからない。

でも、世の中にバれて大変な事になるよりはマシだと思うんだよ。

「はあ、悠……早く帰って来て欲しいんだよ」

また、リーネさんと3人で一緒に暮らしたいな。

その日までちゃんと待っているから、悠　いつかは帰ってきてね。

### リーネ・ディートリッヒ Side

東京ではどうも、ボクが知らない間に、ミネットちゃん達が佐井学園と交戦。そこで激戦を繰り広げた末に、ミネットちゃん達が佐井学園に勝利したらしいの。

ボクは木葉さんに研究を手伝って欲しいと言われ、その為、一旦ロジーナの奥地にある木葉さんの研究所に戻り、木葉さんの助手として活躍すべく　準備を進めていた。

……と言っても、もう準備は完了なの。

「木葉さん！ リーネ・デイトリツヒ、ただいま到着なの」

「ご苦労かな。リーネ、君がここに来るのも久々かな」

「えへへ、ずっとミネットちゃんと一緒に暮らしていたの」

「もう一人の居候は元気かな？」

「それが悠ちゃん、最近全然家に帰ってこないの」

「まあ、彼も仕事があるらしいからかな。その証拠にミネットちゃんが人を保護してきたし」

「ひ、人……？」

最初は何の事なのかサツパリだったけれど、ボクは木葉さんに案内されて、奥の研究施設へと足を踏み入れる。ここって確か、傷の手当てを行う培養液がある施設だったハズなの。木葉さんが開発した医療機器の一つだけど、一体どうしてここに案内されたの……？ そう思いながら部屋に入ると、その中で一台の機械が作動している。

培養液を入れる為の医療機器なの。

機械の中は緑色の培養液が満タンで、その中に 満身創痍の男性が入っていた。

その人は片腕と両足、右目を失い、左腕もぐにゃぐにゃに曲がっている。

「じ、これ……ミネットちゃんか？」

「おそらく、彼をここまでボロボロにしたのは早川悠のほうかな。」

「一体、この人がどんな人かは知らないけど……でも、ウチは何としてもこの人を復活させたいかな」

「ど、どうして……なの？ 確かに命は大事だけど、でもこの人今にも……」

「危険な状態なのはわかっている。けど、いかなる人でも救うのがウチの信条。そして何より 彼を救えば超能力者のサンプルが手に入るかな？」

「さ、サンプル？」

「うん、科学技術の結晶体である超能力者を利用すれば 医療に役立つかもしれないかな」

流石木葉さん、そこまで考えていたただなんて……相変わらずすごい人なの。というかこの人って悠ちゃんと同じで、超能力者だったの……？

えっと、名前は……書いていないけど、能力名かな……何かが書いてある。

日本語……かな、見慣れた文字なの。

彼の事を語っているのであろう、書類の一枚には大きくこう書かれていた。

ウェーブハウンド  
波動操作。

## 第231話 勝者達が得たもの（後書き）

キャラクターNo013

・チャンピオン陳炎彬 ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：ミネットより強く、実は意外と実力者なのだが、早川との差が圧倒的すぎる為、全然目立てなかった不憫な人。

## 第232話 秋のある日の日常

ロシア、イルクーツク郊外の私のお城。そうですね……考えるのも面倒ですし、アンガラ川のすぐ近くにあるという事で、アンガラ城とでも名付けておきましょう。私　アリーナは、リアアやヴァシレフスキーらと共にとあるを計画を立案、その実行準備に明け暮れています。

今日も計画実行の為に忙しいですが、それ以外にも　重要な仕事があります。

藤島圭介。このアレクサンドルの子孫を捕え、その者の首を直ちに切り落とす事。

皇帝の子孫なんか要りませんよ、この世界に……。  
何故なら　私が世界を支配するのですから。

「そういうわけで、藤島圭介拘束を頼めるかしら　邪炎のサラマ  
ンダー」

「元よりそのつもりである。久々の戦は気合いを入れて掛かるつもりだ」

白を貴重とした赤っぽい服を着ている、茶髪の筋肉質な爽やか中年。邪炎のサラマンダーは巨大なメイスを片手に持ち、硬派な表情を浮かべて私に迫ってきました。やれやれ、いくら爽やか系なキャラクターとは言え、ここまで真剣ですとむしろ暑苦しい。

でも、よろしい事ですね。

最近彼は硬質のノームを粛清してしまうなど、勝手な行動も目立っています。私に対しては絶対服従のようですし、もはや彼だけが唯一戦力となる魔術師ですね。

しかも彼は気に入らないものですが、彼は教会から認定を受けた

聖人です。

さらに彼は赤の軍神としての特性、精霊の力も持っています。要するに 彼は並の魔術師よりも遥かに強いのです。

「頼もしいですね、流石は聖人です」

「ただの聖人ではない。精霊の力を持つ特殊な聖人だ」

「おっと、そういえばそうでしたね」

「今回の戦ではおそらく、敵側もあの聖人を送ってくるだろう……が、その時に見せてやろう。私がただの聖人ではない証拠を」

所詮は教会に毒された愚か者ですが……まあ戦力になるのならよしとしましょう。とにかく今回は彼に頑張ってもらい、なんとかしても藤島圭介を捕えてもらいます。

藤島圭介……シルフとノームを倒したようですが、彼は倒せるでしょうか？

彼は今までの魔術師とは 全く違う存在なのですから。

## 藤島圭介 Side

今日は9月14日、ここ数日は非常に平和であった。

佐井学園で爆破テロがあったり、新学園長が開発科を来年度から廃止するなど、不可解な事件が発生したものの、学園で何があるうが直接俺に影響があるわけではない。まあ、あの開発科がなくな



つたんだから、明智や西園寺。そして狙われている魔法使い達にしてみれば安心だな。

でも、魔法使いでも超能力者でもない俺からしてみれば、大した影響ではないし……結局俺はこの数日間、というより半月ほどは、超平凡な日常生活を満喫していたのだ。

いやいや、やっぱり日常っていいよね。

夏休みは連続して魔法使いと戦わされたし、たまには伸び伸び休んでいたいぜ。

ここ数日は俺にとっても暮業にとっても本当、心身ともに休まるよ。

「だから魔法少女というものはな、魔法のカードを扱う少女の事を言くと僕は思うんだ！」

「カードキャプターかよ、随分と懐かしいネタ引つ張ってくるな」

「しかも、大吾の言う魔法少女ってありがちだよな。俺はやっぱりかめはめ波もビックリな凄まじい魔法をぶっ放す」

「な はかよっ！？ お前達の魔法少女のイメージって二次元限定かよ！？」

俺の絶叫に大吾の全身がピクンと動き、凄まじい勢いで顔を近づけてきた。

「ちょ、大吾……顔が近すぎるわ、まだ残暑も厳しいし………すげえ暑苦しい。」

「むしろ圭介、僕が二次元意外の例をあげると思っのか！？」

「ですよー、お前は完全二次元派だもんな」

「じゃあ、圭介の魔法少女のイメージってなんだよ!？」

えー、俺の中でも魔法少女かあ……まあ、リアル魔法少女が家に居候していたり、魔法少女で構成された部隊つてのが現実しているけど。でもなあ……それってやっぱ極秘だよな。第一暮葉が魔法少女ですなんて言っちゃったら、アイツの居場所が失われる可能性だってある。

特に大吾とか重原とか……コイツらには絶対言わないほうがいいだろう。

「それが聞きたきゃお前、ちょっとマミってみろ」

「圭介の魔法少女のイメージってそれかよ！ ていうかマミったら僕死んじゃうわっ!」

「まあ、確かに魔法少女だよな。というか、俺の中では過去最高傑作だと思うよ」

魔法少女ねえ……春ぐらいまでなら、普通に笑って話せる内容だったんだ。でも、俺の前に暮葉が現れて以降 笑える内容じゃなくなっちゃったんだよなあ。

あれ、そっいえば暮葉は何処だ？

最近休み時間になるとちよくちよく消えるけど……友達付き合いが忙しいのか？

近くに暮葉がないだけで不安になる俺も重症だが……今頃何してるのだろうか。

すごく……気になる。

「はい！ というわけで、今から伊吹と圭くんをくっ付けちゃう作戦会議を始めます！」

お昼休みのことなのです。最近友達が一気に増えて嬉しいなと思う反面、校内でけーすけ様と一緒にいられる時間が減って、寂しいな……って思っていたら亜紀さんに呼ばれ、拙者は食堂へ向かい、そこで亜紀さん達と一緒にお昼を食べていました。

そんなある時、唐突に亜紀さんがとんでもない事を叫んでしまったのです。

「は、はあ！？ ちょ、亜紀……あなた、なに言ってるのよっ!？」

「あれえ〜？ 圭くんの事はどうでもいいの？」

「え、あ、ち……違う！ アイツはどうでもいいのよっ！ で、でもどうでもよくはッッ」

すっかり紅潮している伊吹さんは、支離滅裂な事を叫んでいました。伊吹さん、前々からずっと思っていましたけど、やっぱり伊吹さんはけーすけ様の事が……。

そして拙者は今、伊吹さんを応援しなくてはいけない立場にいます。

「……………」

不思議と気分が重くなってくるのです……。

もちろん拙者だって、伊吹さんに幸せになつて欲しいんですけど……で、でも……っ

「じゃあ、圭くんが誰かに盗られちゃってもいいの？」

「と、盗られるって……あ、あの馬鹿で変態なアイツと好き好んでつるむ人なんて……」

「それがさ、あたし大吾から聞いたんだよね。圭くんって結構モテるらしいよ？」

「そそそ、そんなわけないでしょ！？ 大吾の情報なんて信じちゃ負けよっ！」

「これが意外とガチなんだよねえ。凧紗は前に圭くんが好きだって発覚したし、同じ写真部の後輩なんかにも好かれてし、最近じゃ白藤だって圭くんが甘え気味じゃん？」

それは拙者もわかっているのです。けーすけ様達と一緒に合宿に行った時も、その後の日常を過ごす中でも。けーすけ様は意外とモテる人なのです……本人に自覚はないみたいですけど。

で、でも、拙者は思うのです。けーすけ様、女と知ると見境がないのです。誰であろうと助ける善人なのは分かっていますけど、特に女の子に対しては優し過ぎるのです。もきゅ……一度、けーすけ様のあの性格は徹底的に矯正したほうがいいかもなのですよ。

で、でないとその……いつかけーすけ様が誰かのものに。

「……………」

「それとも誰かに盗られる前に、あたしが圭くんに告白しちゃおうかなー？」

「だ、だめっっ！」

伊吹さんは顔を真っ赤にすると、バン！ とテーブルを叩いて叫び、立ち上がりました。

亜紀さんは多分、冗談で言ったのだと思うのです……。でも、伊吹さんの必死さを見て、少し困った顔をしていました。

「う、嘘だよ嘘。別にあたしは圭くんにそんな感情ないから、ねっ？」

「そ、そう……っ」

少しほっとしながら、でもまだ不安に思っているのか、哀しそうな表情を浮かべながら、伊吹さんは静かに椅子に座りました。伊吹さん……やっぱり本気みたいなのです……。っ。

「正直に言って。伊吹は圭くんの事が好きなんですよ？」

その問いにうん、と頷いた、借りてきた猫のように静かになっていた伊吹さん。

なんだかその顔も、りんごのように赤くなっていました。わかっていましたけど……うう、伊吹さんまでライバルだったのですか……。っ。

「じゃ、圭くんと恋人になりたい？」

「……う、うんっ」

「じゃあ決まりっ！ あたしは伊吹の幸せの為に全力を尽くすよ！」

亜紀さんは笑顔になり、伊吹さんの背中を右手に当てました。  
気のせいかな、伊吹さんも恥ずかしそうにしながら 微笑んでい  
るような気がします。

「……………ありがとう……………亜紀っ」

「よし、それじゃあ早速作戦を考えよう！」

もきゅ……………伊吹さん本気なのです。

もしも、拙者がけーすけ様に告白したら、伊吹さんは……………。  
おかしいのです、別な友達は他人を気にしちやダメって言ってい  
ましたけど……………でも、気にしないほうが難しいのです。拙者に伊吹  
さんを傷つける真似は出来ないのですっ。

で、でも……………拙者もこのままは嫌なのです。

どうしましょう……………どうすれば、いいのでしょうか……………？

「……………はあっ」

しかも拙者、今回一度も喋っていないのです……………。

## 第232話 秋のある日の日常（後書き）

キャラクターNo014

・アナスタシア・アベルツェフ ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：体を鍛えており、アスリート並の身体能力を誇っている。魔法のほうもゴーレムを召喚する強力なものだが、それ以外の魔法が使えないのが難点。

### 第233話 危惧する者達、危機感が全くない者達

アルファ隊の日本支部は長野県の地下。この国の軍隊がかつて掘ったという、松代大本営跡地に支部を置き、この地区でのアルファ隊の行動などを統括しています。

リーリヤ リーリヤ・コステイリナは現在、自分の武器である聖杖ジエールズを丁寧に磨いていると同時に、通信用の護符を利用してとあるお方と通信を行っています。

それはリーリヤの上司である人物 ヤコフ・ベリチュコフ。連邦特殊情報総局の局長を務める、実年齢以上に見た目が若く見える中年男です。

と、言っても通信用の護符で会話をしている故、相手の顔は見えないのですが……。

「ふん、所で硬質のノームが死んだ……という報告がヴィンペル隊からあったのだが？」

「はい、それは事実です。とリーリヤは驚愕を露わにします」

硬質のノームはヴィンペル隊が抱える暗部組織からの攻撃を逃れ、今も生きていると言うのが最後の報告でしたが……どうもそれは誤報で、真実はもっと残酷なものだったのです。

実はあの後、ポルトガルのセトウーバル近郊の森林地帯にて、たまたまそこで活動していたヴィンペル隊の隊員が、興味深いものを地面から掘り出したのです。

それは、硬質のノームの遺体。

損傷が激しく、既に腐敗も始まり、肌の色が変色し始めていたそ



の遺体は、確かに硬質のノームが死んだ……というメッセージをリーリヤたちに伝えてくれました。

すぐに遺体は総局内にある科学技術局へ送られ、解析が行われま  
した。

その死因は……。

『しかも、遺体を解析した結果　彼は強力な魔術を受けた形跡があった』

『はい、それも事実です。とリーリヤは肯定します』

『やはり、邪炎のサラマンダー……同じ赤の軍神であるノームを瞬時にあの世に送る力』

『聖人の力と、精霊の力の二つを持っています。とリーリヤは説明します』

『その名は伊達ではなかった……という事だな』

硬質のノームは我が隊の特隊員でさえ手こずる上に、あの藤島様が初めて気絶なさるような強烈な一撃を放った、少なくとも並の魔法使いでは勝利不可能な達人です。にも拘らず、同じ精霊の力を持つ魔法の天才が、サラマンダーには簡単に殺されてしまったのです。風剣のシルフ、硬質のノームも十分脅威的な魔法使いです。

しかし　邪炎のサラマンダーはそれ以上の脅威度でしょう。

『確か子孫の下には、住み込みで君の部隊の隊員が子孫の警護に当たっているらしいが』

『はい、しかし今回は厳しいでしょう……と、リーリヤは残念な意

見を述べてみます』

『なるほど……その隊員も中々の実力者と聞くが、サラマンダーの実力は本物だ』

『はい、現状での勝利は難しいでしょう。と、リーリヤは率直な感想を述べてみます』

今の状況はあまりにも不利です。これだけ戦力が分散している状況だと、あの聖人が襲ってくればまず間違いなく 各個奮闘した所で簡単に撃破されてしまう。

だからこそ今、力を合わせて戦うことが重要なのだと思います。

『それで君はどう出るつもりなんだ？』

『戦力を日本に集中しますが……それでもダメな場合は 』

『ま、まさか……君が戦場へ赴くのか？』

『……はい、聖人と互角に戦えるのは聖人だけ、とリーリヤは思っております』

一般の魔法使いではサラマンダーには確実に勝てない。どんなに優秀な魔法使いであっても差は大きいのです。例えるなら、同じ兵器でも500年前の兵器と現代の兵器なら、使い方にもよるのかもしれないが、圧倒的に現代兵器のほうが破壊的な力を持っているでしょう。

一般の魔法使いとサラマンダーとでは、それと同じくらいの差があるのです。

しかし、サラマンダーと戦うのが聖人であればどうでしょう？

少なくとも 惨敗という結末は回避できるハズです。

『確かに、君も聖人だ。その力は圧倒的だが……勝てる見込みはあるのか？』

『五分五分……いえ、負ける確率の方が高いでしょう。とリーリヤは分析します』

『そ、それでは意味がないではないか？』

『あります、考えてみてください。相手も聖人ならリーリヤも聖人——リーリヤが勝つ可能性もありますので、とリーリヤは力強く言い放ちます』

どれほどの確立で勝つか負けるか、正直リーリヤにも検討が付きません。サラマンダーとはシルフとの戦闘があったあの日、一度顔を合わせただけですからね……。

しかし、私が戦う意味はあると思います。

『……本気でやるつもりか？』

『既に戦闘に備え、術式じゆしきを準備しています……とリーリヤはここだけの話をします』

『そうか……こちらも全力でサポートしよう。負けるなよ リーリヤ君』

『その願いに応えられるとは限りませんが、万が一、サラマンダーとの戦闘に発展した時は命を賭けます。とリーリヤは覚悟を決めます』

そこで通信用の護符は効力を失い、ただの紙切れとなりました。リーリヤはそんな紙切れなど全く気にせず、首から提げている八端十字架を右手で触れました。

この魔装具……と言っても、シルフは魔道書のようなもの、なんて曖昧な表現をしていましたが……果たして、この魔装具は効果を発揮するのでしょうか。

邪炎のサラマンダー！

貴方はおそらく、リーリヤが18年間の生涯戦った中で 最強の敵となるでしょう。

藤島圭介 Side

放課後、またしても暮葉がいないが……多分晩御飯までには帰るだろう。暮葉の心配ばかりをしていた俺は現在、写真部の部室へと向かっていた。

写真部……つつつても、大した活動はしていないんだけどな。

そんな事を考えつつ、俺は部室のドアを開ける。

「失礼しまーす」

ドアを開け、部室の中に入るが……おかしいな、浅間部長の姿がないような気がする。それにあかりの姿も見えない。いるのはパソコンの前に青山さんだけか……。

「あれ、今日は青山さんだけなのか？」

「……………」

あれー、無反応だな……………というかヘッドホンしているし、聞こえてないのかな？

青山さんが真剣な表情で画面に向かっていている。一体なにしているのだろうか。ひよっとして写真家になるという夢を叶える為 パソコンで編集作業でもやっているのかな。

ちよっと楽しみかもしれない。どうせ気付いていないし、画面見ちゃいますか。

「なあ、なにしてんだ？」

軽い気分で聞きながら、俺はパソコンの画面を覗き込む……………が、アレ？

これはなんというか……………編集とは全く関係ない気がする。

とりあえず、ヘッドホン取っちゃうか……………青山さん慌てそうだし、面白そうだ。

というわけで、俺はパソコンからヘッドホンを抜いてみた。

『せんぱ……………お腹、熱いの……………あ、んっ……………いつ、うくっ……………あ、は……………っ』

『う、すじい……………』

『あ、あうっ……………先輩……………先輩の……………奥に……………きて……………ボク、ボクの中、いっぱいにして……………』

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ！？」

CG見た時点でわかったよ、わかってたんだけど興味があったんだ。だからヘッドホンを外したんだけどさ……し、失敗だった。これは外さないほうが良かったかもしれない。  
ちくしょう……やっぱりエロゲーかよっ!?

「……っ!?!? せ、先輩……ど、どうして先輩が……っ!?!?」

青山さんがヘッドホンを外し、目を白黒させている。

俺が背後にいた事と、急に音が大きくなった事に相当ビックリしたらしい。

「部活だからだよ! ていうか青山さん、なに部室のパソコンでエロゲーやってんの!?!?」

「え、えと、その……これは……お、お勉強です……っ!?!?」

「勉強って……エロゲーから何を学ぶんだよ?」

「……えと、先輩がどんなシチュエーションで悦ぶか……その研究を……っ」

「だからお前、後輩ルート攻略してんだな!? 先輩先輩って、後輩の女の子が甘くエッチな声で言うルートを選びやがったんだな!?!?」

青山さん……前々から変態だとは思っていたけど、まさかここまでとは。正直学校でエロゲーをプレイするだなんて、浅間部長と大差ないかもしれないぞ。

俺でさえ、学校ではPNPのギャルゲーまでで自重しているのに。

「……ちなみに、先輩の大好きなゆ ソフトですよ……？」

「俺の好きなブランドだからいいって問題じゃねえよ！」

ていうか、なんで俺の好きなエロゲメーカー知ってんのこの人。  
まさか葵か、いや、葵以外には考えられないぞ。ていうかそれ以外  
だったら青山さん アンタ相当怖い人だよ。

「……あ、あの……先輩？」

「な、なんだよ……」

「エロゲーって面白いですね……っ！」

「ぬがっ!?! あ、青山さん現実に帰って来い！ 帰ってこーいっ  
！」

「……で、でも実際面白いですよ？ ストーリーもよしCGもよし  
エロもよしですよ……？」

俺の知っている青山さんは、満面の笑みを浮かべてエロゲー絶賛  
する子ではない。このままだと青山さんが浅間部長化してしまう。  
それだけは、どんな手段を使ってでも止めなければ。青山さんには  
綺麗なキャラで居続けて欲しいんだ。絶対に 変態キャラにはさ  
せないからな。

ほ ほむ見たいに変態ちはやさんなんて 変態淑女敵な扱いは  
させないからな！

「あ、青山さん知ってるか？ エロゲーやり過ぎると早死にするら

しいぞ?」

「……え、ええっ!? ほ、ほんと……ですか……っ?」

「ああ、神はこう言いました エロは程々にしとけと!」

ぶっちゃけ神様そんな事言っていないだろうし、俺神様なんて知らないし、そもそも神様なんて信じていないんだ。でも、間違った事は言っていないと思うんだ。

そりゃあね、俺だって変態紳士だが それでも一日エロは一回のみ。

これでも自重してるんですよ。日柄一日中脳内ピンク色だと思ったら大間違いだ。

そもそも年中ピンク野郎ってのはな

「あんまエロゲーばかりおっていると、世の中から突き放されちまうぞ?」

まあ、一日一回はやってる俺が言える言葉じゃないけど……。でも、青山さんには浅間部長みたいになって欲しくないんだ。

「……だ、大丈夫です! わたし……先輩にさえ突き放されなければ……っ」

「友達とかはどうでもいいのかよ!??」

「そ、そんな事……ないです。みんな大切ですけど……先輩が一番大切なんです……っ!」

一見感動的なセリフを言っているように聞こえるけど、さっきま



でエロゲーをプレイしていたという事実と、スピーカーから流れている女の子の喘ぎ声で全てが台無しだぜ……。

「にしても、先輩……っ」

「なんだよ今度は？」

「そ、その……えと、なんと言うか……」

急に口ごもる青山さん。

なんだかその顔も、りんごのように真っ赤になっていく気がした。

「……その、覚悟は……できました」

「えっ、何の？」

すると青山さんは震える小さな人差し指で、パソコンの画面を指差す。当然、エロゲー起動中のパソコンの画面には、男女があくんな事をしている、子供NGなCGが表示されている。

さらに、声優さん必死の演技　女の子のアレな声も室内に響いている。

「青山さん、そういうのは恋人同士でするものだと思うんだけど？」

「……大丈夫ですっ、今の世の中　セツ　スフレンドというものが存在しますから……っ！」

うわっ、とうとうこの小説にも伏字出てきたよ。

確かにセフレってあるけどさ……でも、それ作るの一部の人だけだよな？

少なくとも俺は作らないぞ。俺は現在暮葉一途なんです！

「せんぱい……っ」

青山さんがジリジリと接近してくる。やべえ……あれは間違いない雌の顔だ。正直俺の心が揺らいでしまうほど、今の青山さんの表情は強烈。まるで誘っている女という感じだが……。

俺にはわかる。青山さん エロゲーのヒロインの真似してやがる。

ていうかその、これってまたアレか。

女の子に襲われちゃう的な展開なのか？

第233話 危惧する者達、危機感が全くない者達（後書き）

キャラクターNo015

・セルゲイ・ベレゾフスキー ×10が最高、ナシは無能という

意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：魔法使いとしては下位。魔法を使えないリーネには勝つていたが、早川悠の前には無力であった。

## 第234話、滅茶苦茶な放課後

エロゲーのボイスが部室内に響き渡る中、何を思ってしまったのだろうか……青山さんがギリギリと俺に近付いてくる。これはまずい、青山さんが葵レベルの事をしようとしている。

まさか、この俺を襲おうとは……フッフ、甘いな青山さん。

葵の計画は自力での脱出が困難だが、青山さん……お前はまだ甘いぜ。

何故だかわかるか……それはだな、態々考えるまでもない事だ。

「残念だったな」

俺は右手を背中に回し、丁度俺の背後にあるドアへ手をかける。

ラッキーだぜ、丁度ドアの所へ後退りしていたとは、コイツは本当に好都合だ。

なぜなら、これで遠慮なく　この場から逃げられるからな。

「俺の純潔は俺が好きだと思ったヤツの為にあるんだよ！」

陸上選手もビックリな勢いで駆け出し、廊下を走りながら大声で叫んだ。だから甘いつて言ってるんだよ青山さん。俺は逃走百戦錬磨の男、逃げる事に関してはプロ級だと思ってるぜ。

「……せ、先輩……ま、まだ終わってないですよ……っ!？」

「終わる以前に始まってもしないねえだろ！」

「むう……先輩、わたし……絶対諦めませんからね……っ!」

できる事なら諦めて欲しいよ。そして、普通に友達のままでもいい……青山さん、早く俺の事を諦めてくれないかな。ああ、あのい子だった青山さんは一体どこへ？

そんな事を考えながら、俺は放課後の校舎を全力疾走していた。

それから数分後、気がつけば俺は生徒会室の前に来ていた。生徒会室かあ………そういえばうちの高校の生徒会って、謎が多いよなあ………。

なんたって、今まで生徒会長の姿を見たヤツがないんだもんな。いつも副会長が頑張ってるけど、生徒会長………一体何者なんだろうか？

「ぐへへ、ここがええのかー？ ええっ？ ここがええのかあー？」

「や、やめろすみにゃん！ いい加減にしないと う、わっ！？」

「ナギちゃん、ここが弱点があっ！」

「や、やめろと言っているだろうがっ！」

「やめられない止まらない。私の中でナギちゃんはエ センなのだ  
ー！」

「わ、私はエ センと同じ価値かっ！？」

生徒会室の中から扉越しに聞こえる、我が校の風紀委員と変態ガチ百合淑女の声。多分この中で変態が風紀委員にマッサージをやっているんだろう。うん、そうだと俺は信じる。

むしろそれ以外は………まあ、見たいよね。しかし、結局………。

「……なにやってんだ、アイツら？」

まあ、気にしたら負けだと思っただ。うん、気にしたら負けだ……俺は生徒会室の前で何も見ていないし、聞いてもない。俺は真正銘何事にも無縁なカタギである。

よし、それじゃあ青山さんと、生徒会室の中にいる2人に見つかる前に　帰るか。

大吾や重原の姿はない。暮葉も部活には来なかったし、小坂や伊吹の姿もなし。

おそらく全員帰ってしまったのだろう。他のクラスのヤツもいないし、仮にいたとしても部活で忙しいだろう。これは……しまった、俺ぼっちじゃねえか。

この調子だと葵やあかりもいなさそうだし、今日は寂しく一人下校か。一人下校も以前までは普通だったのに、最近はそれが寂しく感じるな。人の感情って不思議だよな。まあ、そんな事は今更どうでもいいとして、今日は早く帰って新作ゲームの攻略作業を行うとしますか。

そんなわけで俺は玄関で靴を履き替え、校舎を後にした……のだが、

「なんだ……この騒ぎ？」

外に出た瞬間、グラウンドにサッカー部だの野球部だの、体育会系の部活に所属する野郎共が野次馬のように集まっている。どう見てもアレ、何かを見物しているっぼいんだけど……一体アイツらは何を見物しているのだろうか。それが気になったので、俺は現場に向かうことにした。

すみません、と謝りながら、俺は人ごみを掻き分けて人ごみの中心へ向かう。

苦勞して突き進むと、一旦人ごみが切れる。そうか、ここが人ごみの中心か。

やっとの思いで到達した俺は、その中心点を見る為に目を凝らす。

「オラア！ テメエらの筋肉は見世物かよ！？」

「それともなに？ 俺達が怖いつての？」

「マジかよ、体育会系つてのも超ツマラネーなあ？」

青系のブレザーの制服でしかも馬鹿……ああ、わかった。駅前の東高の連中だな。昭和中期こそ偏差値は初芝よりも上だったらしいが、今では落ちぶれてご覧の有様。今風ヤンキーとチャラ男とギャル達の巣窟となり、初芝の生徒とは当然折り合いが悪い。

一応、初芝は市内一の進学校だからな。

そういうのにムカつくヤツもいるんだろう。

それにしても相手は3人か……まっ、3人くらいなら大丈夫かな。

「すみません、これ持っててくれないっすか？」

そう言つて、俺はたまたま隣にいた野球部の男に携帯電話と腕時計を渡す。特に携帯電話なんて簡単に壊れるからな、戦いには不要な代物だぜ。

「お、お前……まさかやる気なのか？」

「黙つて見てるわけもいかないだろ？ 悪いけど、教師来ないか見張つてくれ」

「あ、ああ……」

東高の連中とは何度かやり合った事があるけど、大した強くはなかつた気がする。とりあえず腕は痛むが、筋力100%にしてさつさと終わらせちまおう。

ここは校庭だし面倒だし、何より 教師に見つかったら停学確定だからな。

「ぎゃああああああああつ！」

「ぐぐ、ぼア ！？」

「いででで！ ちょ、らめええええええええええええええええつ！」

な、なんだ……なんとなく<sup>まがいた</sup>瞼を閉じて、ポケットに手を突っ込んだまま戦場へ行こうと思っただけ、突然ヤンキーさん達の痛々しい叫び声が聞こえてきた。

悲鳴は未だに続いており、時々反撃しようとするヤンキーさんの怒声も聞こえるが、結局無駄弾に終わっているらしい。悲鳴から察するに、ヤンキーさん達はボコボコにやられている。どこのどいつにやられたかは知らないが……と思いつながら、俺は目を開けてみた。

「ああ、圭介」

「い、伊吹……？」

そこには制服姿で竹刀を構え、ヤンキーさんを踏んづけている伊吹の姿があつた。態々駅前の東高から殴り込みにやってきたヤンキーさんは、既に満身創痕の重傷者。まあ、伊吹の事だから手加減はしているんだろうが、相変わらず派手にやりやがるなあ……伊吹も、そう、伊吹の実力は隠れ気味だが 実はそこの不良よりは遙



かに強いのだ。

「コイツら……もしかしてお前がやったのか？」

「ああ、面倒だから私がやっと思ったわ。あんたは戦う必要ないわよ」

「いや、そりゃそうだろうけど、お前……大丈夫なのか？」

「一応部長の許可はあるわよ？」

「部長！？」

今まで伊吹が剣道部の部長だと思ってたんだけど、違うのかよ。ていうか、部長が喧嘩OKするだなんて、剣道部って一体どんな部活なんだよ。他校との試合が近いから鍛えておけて通達があったのかもしれないけど、剣道部なのに喧嘩で体鍛えてどうするんだ？ま、まあ……あまり面倒な事にはならなかったし、これでいい……のか？

「コラアアアアッ！ 何の騒ぎだあああああっ！？」

後者の方から響いてくるハスキーボイス。

姿は見えないが、おそらくガタイのいい教師が数人全力疾走している事だろう。

「やば……伊吹、逃げるぞ！」

「い、言われなくてもわかってるわよっ！」

俺は伊吹の手を引き、強引に彼女を引きずりながら走り始めた。

周囲には体育会系の部活の人が沢山いた為、俺達の姿は教師陣には見られていないだろう。多分、翌日俺達があの場合で何をしていたのかは聞かれないハズだ。とにかく、今はこのまま学校からできるだけ離れよう。

喧嘩で停学だなんて 洒落にならねえからな。

こうして、俺と伊吹はその時の勢いに任せ 延々と走り続けたのだ。

あ……腕時計と携帯電話、回収するの忘れた……………。

ま、まあ……いや。野球部には島原がいるし、後で島原に回収頼もう。

しかし携帯預けたまま忘れるとは……不幸だ。

## 第234話、滅茶苦茶な放課後（後書き）

キャラクターNo.016

・ジャンボ鶴屋 つるや ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ

魔法（超能力）：ナシ

知力：

敏捷性：

地位：

総評：明智でも一撃で倒せれないなど、タフさだけはある様子……  
というより普通の人よりは遥かに強い。

## 第235話 どうみても夫婦です、本当にあり(r y

伊吹と共に逃げる事5分、全力疾走を5分も続けていたせいか、俺も伊吹も既に体力の限界を感じていた。はあ、無駄に疲れた……ペース無視の全力疾走ってホント、すぐ疲れるよね。

普段体を鍛えている伊吹でさえ、既に息があがっている。それにしても……息切れしている女の子って何かエロいよね。どうでもいい話かもしれないけど……。

ていうか俺、伊吹でなんちゅー事考えてるんだか。

「はあ、はあ、ここまで逃げれば教師も追って来ねえだろ……っ」

「危なかったわね……さっきの声、多分あなたの苦手な野原よ？」

「野原くんかあ、確かに一番の危険人物だよな」

俺にとって野原くんとは最も危険な人物である。だって殴ってくるし、何もしていなくても因縁つけてくるんだもん。脅威以外の何者でもないよ、とにかくあの人は苦手だぜ。俺のフジマレータ一方藤島モードが全く効かないし。全く、学校から逃げたのは正解だったな。

「そつえば、あんたこんな時間まで何してたのよ？」

「俺？ 俺はまあ、部活だけ……お前は今日も剣道部か？」

「今週の土曜日に他校との練習試合があんのよ。不良と戦ったのも鍛錬の為の部長命令」

「デンジャラスな部活や……」

部長が修業の為に不良との交戦を命じるとか、世紀末でもねえよ……。

「言つとくけど、こんなの日時用茶飯事よ？ 月に一回だけど、部長主催のヤンキー狩りなんて街の清掃活動もやってるし、初芝剣道部って実は地域の為になってんのよ？」

「ほうほうそうかそうか……って、ヤンキー狩り!？」

ヤンキー狩りってやっぱリアルですよ？

最近バカ売れしたモンスターを狩るゲームでやる、あの狩りと同じ意味だよな？

えっ、まさかやるの？ 剣道部がヤンキーさんを狩っちゃうんですか？

「な、なによ？ 褒めても何も出ないわよ？」

「褒めてないわ！ 害虫駆除のボランティア的なノリで恐ろしい事言うなよ!？」

「だ、大丈夫よ。圭介なんか心配されなくったって、ちゃんとノルマは達成できるんだから」

「ああ、お前は心配してない。むしろヤンキーさんが心配だ……」

ツツパリ伊吹ちゃんvs街のヤンキーさん。永淵レベルの不良ならわからないが、そこらのヤンキーさんが相手なら、蜂の巣にRP G-7を撃ち込むのに近い、ヒトラー総統もビククリな一方的な大量虐殺になってしまうだろう。剣道部……恐ろし過ぎる。

もしかして、永瀨殺したのって伊吹なんじゃ……？  
い、いや……流石にないか。というか、伊吹じゃないと信じたい。

「にしても、最近暇ねえ。街の不良が全然暴れないし……」

「お前達が虐めているから、ヤンキーさんも怯えて外出なくなっ  
たんじゃないのか？」

「そ、そう？ だったら私達 やっぱり少しは地域の為になっ  
てるわね！」

「何とも言えねえ……」

確かに最近ヤンキーに絡まれる事も減ったし、街でもあまり見  
けない。なるほど、伊吹ら剣道部の人達が警察以上に活躍したお  
かげで、ヤンキー達が大人しくなったんだな。でも、その裏で一体何  
人のヤンキー達が血を流した事やら……ある意味いい事だけど、あ  
る意味残酷かもしれない。

伊吹、あれほどヤンキーが苦手だったのに……。

とりあえず、殴り込みしてない事だけは祈っておこう。

「とりあえず伊吹、一つだけ聞いてもいいか？」

「ん、なによ？」

「暮葉と葵がどこ行ったか知ってるか？」

「葵ちゃんは知らないけど、暮葉ならあかりと遊びに行くって言っ  
てたし、多分葵ちゃんも暮葉達と一緒にじゃないの？」

「そつかあ」

それじゃあ帰りはちよつと遅いかな。葵のゲテモノ料理は食べたくないし、だけどその状況で暮葉が遅くなるなら、葵も必然的に遅くなるだろう。万が一に備えるのも悪くは無い、帰りにスーパー寄って焼きそばの材料くらい買ってこうかな。

それとも、半額弁当の為に狼たちと殴り合いでも……って、現実じゃありえないか。

とにかく万が一に備えて、材料の用意くらいはしておいた方がよさそうだ。

「俺、帰りに買い物してこうと思うんだけど、お前は どうするんだ？」

「えっ？ わ、私！？ 私は、その……っ」

そこで恥ずかしそうにする意味がわからんが、どうせ俺と伊吹は隣同士。ここで別れたって何の意味もないし、そもそも一人で帰宅と言つのも寂しいもんだ。

よし、ついでだ。コイツに買い物付き合ってもらおうとしよう。

「お前も一緒に来るか？」

「……ふえっ!？」

「お前も晩飯の材料とか買うだろ？ それにどうせ家は隣だし、お前が嫌じゃなかったら用事済ませちゃおうぜ？」

「……わ、わかったわよ。仕方ないわね……あ、あんたがそこまで言うんなら特別よ！ 特別にあんたに付き合っただけあげるんだからっ」

「！」

頬を膨らませた、いつも通りのツツパリ伊吹ちゃん。今の所は特に変わった様子もない普通の伊吹なのだが……俺は未だに伊吹に関して 気になる事があるんだ。

それはある夏の日、体育館倉庫で言われた一言。

そして、サン・ジュリアン教会で聞きそびれた彼女の本音。

伊吹は一体 俺の事をどう想っているんだろうか。

「今回でそれ、わかるだろうか……」

「んっ？ 圭介、なんか言った？」

「なんでもねえよ。それよりさっさと行こうぜ」

暮葉の事も気になるが、とうとう聞くことが出来なかった伊吹の本音の気になる。

俺は暮葉とのことよりもまず 伊吹の本音を知る必要がありそう  
うだ。

“マックスバリユエ”。

日本全域に展開するスーパーで、品ぞろえこそ微妙な気もするが、家から一番近いと言う理由で利用頻度はNo.1。藤島家の食卓は大抵ここで売っているものを使用している。多分、伊吹もここで買い物をしているはずだ。この店はこの辺の住民には欠かせない、大変重要な場所なのだ。

俺と伊吹は野菜コーナーへ向かい、俺はキャベツを手取る。俺的に焼きそばにはキャベツが欠かせないと思うんだが、まあそれは人によると思うんだ。

でも、俺はキャベツ入り焼きそばが好きなんだよ。



伊吹もそれがお気に入りのようで、俺が手に取ったキャベツを念入りに調べていた。

「ちよ、圭介。こっちのほうが新鮮よ？」

「えっ、マジで？」

「このキャベツ、芯が微妙に黒ずんでるじゃない」

やたら真剣な表情を作って指摘してくる。

確かにこのキャベツ、少し芯が黒ずんでいる気もしないでもないが……。

「それって重要なことなのか？」

「なっ、重要に決まってるでしょ！ あんたの集めてるゲームの1829倍は重要よ！」

「なにその半端な数字！？ ていうか、キャベツに見分け方なんてあるのかよ？」

「あるわよ、いい？ 芯が黒ずんでいたり、割れているものは新鮮じゃなかったり、とにかく良質じゃないのよ。こっちのキャベツは色もツヤも完璧だし、芯の大きさも500円玉程度で丁度美味しいハズよ」

「お前詳しいな……キャベツ博士かよ」

「じよ、常識よっ！ 多分……っ」

多分かよ……まあ、主婦の間では常識なのかもしれない。俺も時々、焼きそば大好きな伊吹の為に焼きそばを作ってやったりするが、基本的にはド素人だしなあ。

ぶっちゃけ、どれが新鮮が見極める能力は殆どゼロなんですたい。

「でもまあ、そこまで詳しくかったらアレだな。お前と結婚した旦那さんは幸せだろうな」

「けけけけ結婚って!? い、いきなりすぎるわよばか圭介っ!」

「確かにいきなりかもしれないけど、お前なら将来いいお嫁さんになれると思うぞ?」

「で、でも……っ! その、物事には順序があつて、私とあんたは……っ」

伊吹の顔が、熱病を患ったかのように一面真っ赤に染まっていく。濡れた紅色の瞳に俺の姿を映し、その瞳は迷う人みたいにキョロキョロと、不規則に左右を往復する。

何も、これは俺と結婚するって話ではない。そもそも、誰かと結婚した場合で、本当に結婚するという話をしていたわけではない。

それなのに、伊吹は否定はしつつも、何かを期待するような態度を取っている。

もしかして……本当に俺の勘違いじゃない……のか?  
ごくり、と唾を飲み、少し試してみようと思った。

「ま、まあ……もしかしたら、お前と結婚するかもしれないな」

「け、圭介と……結婚……っ」

そこからは、ツツパリ伊吹ちゃんとは別人であった。

赤面した顔が微かにふわりと笑顔になり、頬がうっとりゆるんだ。胸にあてた手も強く胸に押しあてられ、まるで好きな人に好きと言ってもらった、恋する乙女のようなようであった。

やっぱり、伊吹は本当に……そういう事なのか？

「ねえ、圭介」

「なんだ？」

「買い物終わったらさ、ちょっと付き合ってくれ……？」

あの伊吹が微かに笑いながら、俺を誘うだなんて……やっぱり変だ。こんなのいつもツツパリ伊吹ちゃんじゃない。と言う事はやっぱり、伊吹って俺の事が。

確証なんかないけど、何となくそんな気がするんだ。

今までの行動。普段は見せない仕草、妙に麗しく見える彼女。

そのどれもが普段は見せない、俺にしか見せない 特別なものに見えたんだ。

「わかった、だったらさっさと買い物済ませようぜ」

本当にそうだとはい限らないけど、そう思うと心臓がバクバク鳴り始めてくる。

だけど、どうしよう……もし、本当にそうだとしても、俺は……

第235話 どうみても夫婦です、本当にあり（ry）（後書き）

キャラクターNO017

わしおありすけ

・鷲尾有資

×10が最高、ナシは無能という意味。

マジッククロース

魔法衣服着用時。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

マジッククロース  
（魔法衣服の分）

魔法（超能力）：ナシ

知力：

敏捷性：

地位：

総評：強化されており、かなりの実力を誇る。意外と強キャラである。

## 第236話 言えなかった事

伊吹に連れてこられた場所は夜の海浜公園。遠くにぼんやりと、おそらく東京のものと思われる街灯りと、夜の東京湾を航行する船舶の灯りが、夜の海浜公園をより神秘的に彩る。

人の気配は全く感じられず、どうやら今、公園にいるのは俺と伊吹だけらしい。海浜公園というだけにリア充には人気で、2、3組はいると思っただが。今日はいないな……夜の公園に女の子と2人つきりつて、これ……実は結構桃色なシチュエーションなのではないだろうか？

いくら相手が幼馴染の伊吹とは言え、俺のセンサーが反応しないわけがない。

俺は今、体の奥から溢れ出る欲望を、必死に押さえ込んでいた。

もしも今、目の前にいる人が暮葉だったら俺、耐えられるだろうか？

「……うん、ここなら人もいないわね……っ」

静かに伊吹が呟くものの、あまりに小さな声は波の音と、吹き荒れる潮風によって掻き消されてしまった。これでは小さい声で何かを呟かれても、聞き取ることが出来ないな……。

「なあ、話って一体なんなんだ？」

「べ、別にその……大した用事じゃないけど、その……だ、大事な話よ、大事な話……」

コイツも本当に素直じゃねえな。

永瀬との一件以降、ずっとこんな感じだけど……いい加減こっち

が辛いよ。

特に最近は何も言いたくない事を寸前に殺して、無理している感じがあつて……。

「うん。とりあえず、話があるならハッキリ言ったほうが楽になれると思つぞ?」

「わ、わかつてるわよ!」

そろそろ夜だし、もしかすると暮葉と葵が家に帰っているかもしれない。2人を心配させるわけにもいかない、俺は早く家に帰らなければならない。

「え、えつと……話つてね、ポルトガル行った時覚えてる?」

「覚えてるよ」

観光ではなく、赤の軍神と戦いにわざわざ海外まで行ったんだから。伊吹と一緒に来ていたのは予想外だったけど、あんな強敵と戦った災難な日 忘れられるわけがない。

そういえば、最近サヴィエトも大人しいけど、一体何してるんだろうなあ。

「ほら、その時その……変なおっさんに襲われる前にあんと私、話したでしょ?」

「そういえばお前、結局何を隠しているのか聞いてなかったな」

「だ、だからそれよそれ……黙つとくのも嫌だし。だから、その……今言つわよ」

「お、おう」

硬質のノームと戦う前にしていた話の続き……か。正直に言おう、俺はこの展開をずっと待っていたんだ。これでようやく　伊吹の本音を聞くことが出来るから。

赤面した伊吹が恥ずかしそうに口ごもっている。

伊吹の性格的に、やっぱり中々言いだせないらしいが……が、頑張れっ。

ていうかなんだ、俺の心臓までバクバク早くなってきた。

「ま、前にも言ったけど、その……わかんないのよ。何年経ってもあんただった理由が、どうして気付いていて、言おうと思っても言えなかったのか……その、私は、あんたが」

ついに教会で聞くことが出来なかった、伊吹の本音が明らかになる。

と、思っていた。

しかし、伊吹が全てを言い終える前に　口を止めてしまったのだ。

一体どうしたのだろうか、と思ったが、その理由に俺が気付いたのも、伊吹に遅れること大体5秒前後くらいだろう。不自然なまでに静かで、無人の風景に得体の知れない悪寒を覚え、一瞬俺の体も恐怖で固まってしまった。しかし、いつまでもそうしているわけにはいかない。

そう思った俺は、思わず伊吹に危険を呼びかけようとする。

しかしできない。

そんな事をする暇がなかったのだ。

「警告は与えたはずだ」

声が聞こえる。

闇の中から、おそらく男のものと思われる、野太く渋い声が響き渡った。

「貴様にはいくつかの選択肢があつたはずだ」

夜の公園を僅かに照らす街灯が、男の姿に光を当てる。男は筋肉質ながら、爽やかな雰囲気を持っている中年で、白を基調とした赤っぽい服を着た、巨大なメイスを片手に持つ不審者だ。

俺を睨み付ける厳つい顔つき。スポーツで鍛えたとは思えない、実戦的な肉体。まるでどこかの軍人のような屈強な男は、ズンズンと大きな足音を立てながら、徐々に近づいてくる。

「戦闘か逃走か……この場では後者が当たり前の選択だと思うのだが。しかし貴様は違った」

知らない顔ではない。

俺はその男の事を少しだけながら、知っている。

そいつの姿を瞳に捉えた瞬間 全身から嫌な汗が噴き出てきた。

「お前……まさか……ッ!？」

8月17日。俺の拘束と、古宇坂攻略の為に攻め込んできた風剣のシルフを、横取りするかのように回収していった、あの化け物みたいな茶髪の中年男。

シルフと同じく、赤の軍神の一人でもある人物。



「邪炎のサラマンダー。以前、貴様に名前を名乗ったハズだ」

その名を聞いた瞬間、俺は反射的に拳を握り締める。いつ襲ってきてもいいように、いつでも動き回れるように、身を引き締めて男の事を睨みつけた。

同時に俺の隣に並んだ伊吹も、背中から竹刀を取って構える。

彼女は赤の軍神に関する詳しい事情は知らないだろうが、邪炎のサラマンダーという異様な名前と彼が右手に持つ、あの巨大なメイスを見て 仲間ではないとはわかったのだろう。

邪炎のサラマンダーは左手を腰にあて、フツ、と小さく息を吐くと、

「愚かだな。女連れで私との対峙を希望するとは……貴様は相当愚かだ」

「なんだよ……お前っ」

さっきから独り言ぶつくさ言いやがって。

愚かだって？

どっちがだよ……思い出したけど俺、考えてみれば。

「てめえだっけ愚かじゃねえのか。てめえの仲間2人は誰にやられたと思っただよ？」

「……ふん、確かに貴様だな。私も貴様は普通ではないと思っっている」

「だったら、怪我する前に引いてくれねえか？」

「それも選択肢の一つだろうが、そういうわけにはいかなか」

やがて、サラマンダーは巨大のメイスを天を突くように突き上げて、

「教えてやるぞ。聖人に喧嘩を売れば どんな目に遭うかを」

## 第237話 聖人の力

夜の海浜公園で、伊吹の本音がやっと聞けると思ったのに……ちくしょう、とんだ邪魔が入りやがったぞ。しかもアイツは確か赤の軍神の一人だったな。少なくとも、シルフやノームと同等かそれ以上の力を持っているのだろう。苦戦は必須みたいだが……ここで引く気はねえ。

赤の軍神つつつても、同じ人間である事には変わりねえ。

恐ろしく強いのはわかってはいるけど、何処かに付け入る隙はあるハズだ。

シルフとノームだってそうだったんだ……だったら、アイツだって同じハズだ。

「圭介、ちょっとだけ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「赤の軍神って何よ。結局アイツはあんたの敵なの？」

「赤の軍神ってのはサヴィエトの組織らしい。俺達を狙っている事には変わりねえよ」

「そう……だったら私も一緒に戦うわ」

ニヤリと口元を歪ませ、より慎重な構えを見せた伊吹。

伊吹を傷つけたくはないし、出来れば戦わせたくはねえけど……

無理だな。

おそらく、核兵器が降ってこようが 今の伊吹は止まったりしないだろう。

「……わかった、無理だけはすんなよ！」

「お互い様よ！ 後ろは私に任せなさい！」

暮葉は……まあ、あかり達と遊んでいるんだ。来るわけないか……でも、伊吹と一緒に戦ってくれると言っているし、伊吹だって武術の心得はあるんだ。

浅間部長と一緒に戦うよりは100倍マシだぜ。むしろ、伊吹は頼れる存在だ。

「貴様も残酷だな。一般人の女を戦闘員として利用するとは……愚かな」

「利用してんじゃねえ、伊吹は俺の大事な仲間だ」

「そ、そうよ。あんた、そんな事言っつて圭介を痛めつける気なら本気で叩くわよ！」

「私の任務は藤島圭介の回収である。特別痛めつけるつもりはないが、貴様が刃向かうつもりであれば、メイスの使用はやむを得ないであろう」

あの巨大なメイスと、何を使ってくるかはわからないが、邪炎つて事は炎か。とりあえずアイツの魔法にさえ気をつければ問題はなさそうだ。

大柄で筋肉質だし、そこまで動きが速いって事はないだろう。格ゲーによくいる、力で押すタイプと見た。だったらこっちは俺の戦略と伊吹のスピードで勝負だ。

「ぐ、オオおおおッ！」

「……ッ！」

ほぼ同時に俺と伊吹は駆け出して、サラマンダーの懐深くへと潜り込んだ。俺の前に竹刀を構えた伊吹が走り、横薙ぎに竹刀を振り回す。風を切り裂く音と共に凄まじい速さで、サラマンダーの脇腹に薙飛ていひの一撃が加えられる。ハズであった。だが、

閃光。

「ッ!？」

視界を潰すような閃光が俺達を襲う。俺達から視界を奪って、その隙に巨大なメイスで攻撃するって作戦だろうか。それなら我武者がむし羅やに走れば攻撃は当たらない。

という考えは甘かった。

眩い閃光の直後に俺達を襲ったのは、皮膚を焦がすような熱波と、ハンマーで全身を叩かれたような

衝撃波。轟！　と言う鼓膜が破れそうな爆音が炸裂する。

「がアああああああッ!？」

焼き魚になった気分次いで、衝撃波によって全身の骨が砕かれた感覚に陥り、さらに背中が激しく地面に叩きつけられる。俺の体はトラックに轢かれても無事だったり、常識外れなほど頑丈なハズなのに、何故か　今の一瞬で身動きが取れない程のダメージを受けてしまった。

指先は動くものの、腕が上手く動かない。頭がガンガンする……

吐き気もひどい。

「げっほ、げほっ！ ごほ……ッ！」

薄れる意識の中、ボロボロになって竹刀を地面に突いて、殆ど気合いと根性だけで伊吹が立ち上がるうとしてるのが見えた。体を支えるのは力強い華奢な腕に、弱々しい華奢な脚。伊吹は全体重を竹刀に乗っけて、後は腕力だけで立っている。非常に不安定な状態だ。

「ちなみに、古宇坂市外周にはアルファ隊が集結していた。どれも精鋭魔術師達であったが、私はそれらを全員退けてきた」

アルファ隊を……全員、だつて？

なんだそれ、サラマンダーさんよ……てめえは化け物かよ？  
ていうかアルファ隊って事は……まさか……ッ！

「アルファ隊って……あんだ、まさか暮葉を！？」

伊吹も同じ事を考えていたのか、俺が言いたかった事を変わりに叫んでくれた。それにしても伊吹のヤツ、俺がこんな状態だったのに随分元気だな。

俺より前にいたのに、当たり所が良くてダメージが軽かったのだろっか？

「暮葉？ ふっ、あの特隊員か……まだ遭遇はしていない」

「……で、でも！ 要はあんだ、暮葉の仲間を全員殺したのね！」

「殺しはしない。無駄な殺生は私の主義に反する」

「この……あんだ、絶対に許さない……ッ！」

怒りを露わにし、全身に力を入れ、竹刀を地面から抜き取る。ようやく伊吹は己の脚力のみで立ち上がり、再びサラマンダーを攻撃する為に、傷だらけの竹刀を両手で構えた。

「中々根性のある女だな。しかし、一組織を滅ぼす相手にどう立ち向かうつもりだ？」

「私は、これでも 剣道部の主将よ！」

「つまり意地というわけか」

「友達の仲間を痛めつけるヤツ、圭介を痛めつけるヤツになんか絶対に負けないッ！」

それに対し、サラマンダーの回答は「そうか」の一言であった。同時に、サラマンダーの足の裏が爆発し、この目で捉えきれない速さで、弾丸の如く伊吹の懐へ潜り込む。巨大なメイスを右手に持っているにも拘わらず、動きは伊吹の何十倍、いや 何百倍も速いかもしれない。

伊吹は咄嗟に竹刀を構え、ダッ！ と大地を蹴って駆け始めた。やがて、伊吹の目の前に姿を現したサラマンダーと、がむしゃらに前へ進んでいた伊吹が激突する。

伊吹の動きは速い。ハッキリ言って、俺のジャブよりも遥かに速いだろう。

しかし、サラマンダーはその上を行っている。動きが全く見えな。爆発が発生した瞬間に姿を消している。いや、正確には動きが速いだけなのかもしれないが……。

「ち、くしょう……全然見えねえっ！」

見えていないのは伊吹も同じである。つーか、アレが見えるヤツはいないと思う。マサイ族の連中でさえ、サラマンダーの動きは捕捉できないだろう。

それほど素早い動きを　サラマンダーは平然と行っているのだ。

「う、あああああああああああああああああああああああああああああああッ……！」

聞こえてきたのは少女の悲鳴。

悲鳴というより、断末魔と表現したほうが正しいかもしれない。

苦しみ、痛み、あらゆる苦が籠められた悲痛な叫び声が、夜の海浜公園に虚しく響き渡る。

「伊吹！」

ゴドン！　と言う、大岩を高所から落としたような轟音が炸裂する。それは伊吹が俺の目の前に落下してきた音であった。メイスで脇腹を殴られたのであろうか、傷が出来ている。それも真つ赤な鮮血がドクドクと溢れ出ている。左腕が変な方向に曲がっている気がする。

それになんだ　口からも血が溢れ出ている。

「けい、す……け……っ」

口から血の塊を吐きだし、弱々しい声で俺の名前を呼びながら、伊吹は右手で俺の服をゆっくりと掴んできた。力は全く入っていない。触れれば崩れ落ちてしまうそうだ。



その程度の力しか出せない程に　伊吹は弱っている。

「心配するな、みねうちである。病院へ運べば一ヶ月で治るだろう」

「てんめえ……ッ！」

明確な怒りをサラマンダーにぶつける。

その一方で俺は迷っていた。

こんな化け物相手に　どうやって戦えばいいのかを。

「さて、次は貴様だ。降伏の意思を見せないのであれば、攻撃を続行するぞ」

俺と邪炎のサラマンダーでは　ケタが違いすぎる。

風剣のシルフや硬質のノームだったら、まだ俺の目でも動きを追う事は出来た。攻撃だって強力だったけど、そこに全く隙がないわけではない。隙があったり付け入って、2、3発殴り返す事だって出来たんだ。だけど、コイツは違う。そんな事が出来る次元を遥かに超えてやがる。

でも、だからと言って　。

「ふ、ざけんな……まだ俺は倒れてねえぞ！」

降参する理由になんかならねえだろ。

敵わないのは分かっている。殴り返す事だっておそらく無理だろう。だけど……アイツは俺の大事な幼馴染を、国宗伊吹というまだ高校生の女の子に　重傷を負わせやがったんだ。許せねえ……殴り倒さなきゃ気が済まねえよ！

「そうか、ならば　攻撃を続行するだけである」

ドバア！ と、足の裏で大爆発を起こしたサラマンダーが、またしても目に見えないような凄まじい速度で俺に迫ってくる。見えていないけど、近づいてくるのは分かっている。

そんな風を感じた直後、サラマンダーが目前に現れる。

そう認識した時には、既に特大のメイスがバットののように振り回されていた。

「ご、ばア……ッ!？」

ズドン！ と、砲弾が直撃したかのような轟音が炸裂する。体が真っ二つに引き裂かれるような激しい痛みを襲われ、力を失った俺はゴロゴロと、吹き飛ばされて地面を転がっていた。

く、そ……意識が。で、でも……ここで諦めるわけにはいかない。  
「げっほ！ ごほ、お、エア……ッ！」

血の塊を吐きだしながら、どうにか俺は立ち上がった。

ハハ、こんなの……痛みなんか、毎度の事だから……慣れてんだよ。

「やはりタフだな。今のを喰らって立ち上がった者は貴様で5人目だ」

要は5人もバケモノがいるって事かよ……ちくしょう、強い。この男……まさかここまで強いとは思わなかった。なんだこの強さのインフレ……同じ赤の軍神とは言っても、この邪炎のサラマンダーは他の2人とは格が違う。なんで同じ赤の軍神で　ここまで差があるってんだよ。

だけど、俺だってな　策がなくなっただけじゃねえんだぞ。

全身の筋肉という筋肉に力を込め、バキバキと肉体が悲鳴を上げる。

激痛が走る一方で 全身に力がみなぎってくるような気がした。

「ほう、筋肉の出力を上げたか。体が丈夫だと化け物じみた事が出来て便利だな」

「うるせえよ……クソツタレがアアアあああああああああああああああッ！」

これが通じないならサラマンダーには勝てない。最後の賭けだ……全ては筋力100%の俺の腕力に賭けてやる。そう思いながら、俺は一直線にサラマンダーの懐へ飛び込んだ。

速い、と感じたのか、サラマンダーの眉がぴくんと動いた。だが、それだけだ。驚きもしなければ動揺もしない。それでもお構いなしに俺は突っ込んで、勢いよく前へ跳躍する。

助走をつけて、さらに体重を全て乗せた、筋力100%の渾身の一撃。

それを打ち込む為に顔面を捉え、硬く握り締めた五本の指を叩きこんだ。

しかし。

パシン！ という、一際大きな甲高い音が響いて 拳は受け止められてしまった。

サラマンダーの大きな平手が 全力全開の拳を受け止めていたのだ。

「ッ!？」

信じられねえ……今まで、コイツで何人も野郎をぶん殴ってきた

たのに。大抵のヤツは100%の拳を受けたら　完全に伸びちま  
ったっていうのに。

だけどサラマンダーは違う。初めてだ……筋力100%の拳を受  
け止められたのは。

「いいパンチだ。だが、私には　八エが止まった程度にしか感じ  
んぞ」

「……ッ！」

それが最後のセリフ。

自分の身長の2倍はあるであろう、巨大なメイスを持ったサラマ  
ンダーが、そのメイスを用いて恐るべき一撃を放ってくる。ズガン  
ッ！と、容赦なく腹部に突き刺さった。人体にぶつけるものとは思  
えない轟音が炸裂し、20メートル以上は吹き飛ばされてしまっ  
た。

それだけでは済まされず、バゴン！　という何かを砕く音が炸裂  
したと同時に、背中にとんでもない激痛を覚えた。ようやく動きが  
止まり、それから数秒後に状況の確認を行う事が出来た。

公衆トイレ。

俺は20メートル先にあったトイレの壁を突き破り　そこでよ  
うやく止まったのだ。

「あ……う、はあ………ッ」

口の中に鉄の味が充満する。体の感覚が殆どない、痛みすら感じ  
ない。ハハッ、コイツは完全に神経が逝っちまったみたいだな。頭  
もクラクラして、意識がなんだか途切れそうだ……。

それでも、サラマンダーは徐々に近づいてくる。やばい……殺さ  
れる……ッ！

「けーすけ様あああああああああああああああああああああああ  
あッー!!」

それは、突然にやってくる。

詳しい感触は神経がマヒしていてわからないものの、何かに掴まれた感じはした。優しく包容力のあるもので、サラマンダーの強烈の攻撃とは違う。何より今の声には聞き覚えがあった。

ビュオ！ という音が聞こえる……これは、風の音……なのか？

「おまえ……は……？」

薄れる意識の中、ぼやけてよくわからない目に ぼんやりと人の姿が映った。

多分、女の子で……髪は桃色で……ああ、誰だかわかったよ。  
誰だかわかったけど、俺の意識はその時点から 次第に失われていく。

## 第237話 聖人の力（後書き）

キャラクターNO017

・近藤政信 （こんどうまさのぶ） ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：俊敏で、身体能力も高い戦闘のプロ。

## 第238話 敗北からの決起

ふん、逃してしまったか。

私　邪炎のサラマンダーは、藤島圭介を戦闘不能に陥れる事に成功。あと一步の所で拘束できる予定だったが、とんだ邪魔が入ってしまったな。

しかも、今のはアルファ隊の木下暮葉か。一応、こちらのリストにも敵側の強力な魔術師として登録されている、アルファ隊に10人しかいない特隊員の一人である事は把握済みだ。

なるほど、中々動きの速い小娘であった。おそらく、風の魔術を利用して、それで自分自身を加速させているのだろう。シルフなどと似たようなやり方だな。まあ、風の魔術を得意とする点では2人は共通しているな。しかし、不意を突いて標的を救出するとは、中々やり手ではないか。

しかし、恐れるような実力ではない。

魔力サーチをかけて追跡し、次に会った時には確実に仕留める。

我が前に立つ意味は　即ち死である。

「ふん、精々今は藤島圭介を救出できたと思って、安心しているがよい」

今日中には回収しにゆくぞ。敵側も私と同じ、聖人を送ってくるだろう。決して勝てない相手ではないだろうが、同じ聖人となればそれなりに戦いが長引く可能性がある。

最も、私も強者との戦闘は好きだが　今回は戦闘が主な任務ではないのだ。

「……ん？」

電話であるか。

相手はリリア……アリーナの唯一の友達の、あの小さな女の子の事だな。

「リリアか」

『サラマンダー……だよね？』

「いかにも。私は邪炎のサラマンダー、赤の軍神の一人である」

『よかった……あ、あの、お仕事のほうはどうなった……？』

ふん、仕事の話であるか。おそらくリリアはアリーナから命令を受け、私に電話をかけてきたのであろう。まあよい、正直な事を言え何の問題もない。

「妨害が入った、標的はおそらく病院にいるだろう。私はこれからそこを襲撃する」

『……もしかして、手当たり次第病院を破壊するの？』

「まさか、私は無駄な殺生は嫌いだ。標的くらい、こちらで確認してから襲撃する」

魔力のサーチは比較的簡単な術式だ。素人の魔術師でも簡単に組めるもので、私くらいになれば東アジア全体から、魔力サーチで標的を発見する事が出来る。

簡単な作業なのだ。

だからこそ、無駄な殺人をしなくても 標的を制圧する事が可能なのだ。



『……なるべく穏便に、ね?』

「それは極秘の命令であるか。それともアリーナからの命令か?」

『私の独断専行……アリーナには内緒だよ?』

「そうか、心がけておこう。こちらにも必要以上の破壊は望まない」

標的さえどうにかしてしまえばよいのだ。あくまで私の標的は藤島圭介、しかしそれ以外の関係のない一般市民が傷つく事は、私としても許せない。だからこそ、私はリアの独断専行に協力する事にしたのである。アリーナの命令では 確実に一般市民も犠牲になるからな。

「間違いない。公園で暴れていたのはアイツだ」

「ちよつと待て……アイツ、この前テロリストを回収したヤツじゃないか?」

「動くな! 手を挙げる!」

ふん、いきなり現れた制服の集団……日本の警察であるか。

「失礼、治安維持組織が出動してきた。リア、これにて一旦電話を切るぞ」

『敵? なるべく……殺さないでね』

「さて、手加減はするが 生きるか死ぬかは彼らのタフさ次第

だ」

そこで私は携帯電話のボタンを押し、リアとの通話を切った。おそらく、次にリアに電話をかけるのは事後報告の時であろう。さて、本格的な仕事へ移る前に。少しだけ、日本の警察とやらと遊んでやるとしようか。

### 木下暮葉 Side

夜中の9時ごろ、ここは千葉の病院。

古宇坂市内の病院を選ぶという手段もあつたのですが、まず間違はなく、邪炎のサラマンダーは拙者達を探すために、病院という病院を探しまわるでしょう。つまり、古宇坂市の病院ではあまりにも不安要素がありすぎるのです。そこで、少し離れた千葉市の病院へ2人を搬送しました。

最も、いずれはここも見つかるでしょう。単なる時間稼ぎにしかありませんが……。

「木下、一応外周を見回ってきたけど、まだサラマンダーは来ないわ」

話をかけてきたのは、同僚のアイリス・オースティンさん。拙者と同じく、アルファ隊にたった10人しかいない特隊員の一人なのです。

長い金髪に、赤と青のオッドアイという、なんだか不思議なお方なのです。

「よかったです。その……けーすけ様と伊吹さんの容態は……？」

「医者の話によると、2人ともかなりの重傷だわ。特に国宗伊吹って女だっけ？ あの女は左腕は骨折しているし、脳震盪に全身の至る所の間接が脱臼、全身を打撲しているらしいわ。まっ、医者は今も油断できないって言ってたし、サラマンダーのクソツタレにやられた女は相当危険な状態よ」

伊吹さん……赤の軍神、しかも聖人のサラマンダーなんかと戦うから。けーすけ様と違って伊吹さんは普通の人間なのに……で、でも。拙者が悪いのですよね……。

拙者がけーすけ様の傍に居れば 伊吹さんもけーすけ様もあんな目に遭う事なんか。

そつだ、けーすけ様は？

けーすけ様はご無事なのでしょうか？

「それでは、けーすけ様のほうは……？」

「子孫のほうも重傷よ。出血多量で血が足りてねえし。まっ、輸血すれば問題ないらしいけど、他にも全身打撲や脳震盪。骨は折れてないみたいだけど、間接も右肩と左足首の脱臼。それから内臓も少し危険な状態らしいけど……でもまあ、子孫の場合回復速度も速いのでしょうか？」

「はい、けーすけ様はその、大怪我しても翌日には治っている人なので……」

「だったら子孫のほうは大丈夫だわ。やっぱり問題は女のほうね……」

どう考えても伊吹さんのほうが、見た目も重傷そうでしたしね……  
…伊吹さん、もう少しで体育祭が始まるのに。この事を知ったら、  
皆さんテンションが下がってしまうかもなのです。

けーすけ様だって、とつてもとつても心配なのです……。  
いくら回復速度が速いとは言え、そんなに早く回復する保証はないのです。

「木下、気持ちはわかるわ。でも……今はしょぼくれてる場合じゃないと思う」

「……わかっているのです。邪炎のサラマンダーを倒さない限りは」

「わかってるじゃないの。そうよ、あのクソツタレを倒さない限りは平和は訪れない」

拙者達がしょぼくれている暇なんてないのです。今、ここで泣こうが怒ろうが、いずれにしてもそのうち邪炎のサラマンダーは襲撃してきます。

しかし、病院には沢山の患者さんと　けーすけ様と伊吹さんがいるのです。

2人は重傷者。安静にしているても危険な状態だというのに、戦いの余波に巻き込まれてしまっは本当に命を落としかねない。絶対に2人を巻き込むわけにはいかないのです。

2人を巻き込まず、こちらから先制攻撃を仕掛ける。  
ただでさえ不利なのに、防衛戦では余計にこちらが不利になります。

ですので、不意を突いて　サラマンダーを怯ませる必要があるのです。

「全力を尽くしましょう アイリスさん」

「ええ、アルファ隊始まって以来の大作戦ね」

「確か、日本支部の隊員全員が集まっているのですよね？」

「隊長が苦勞したらしいわ。殆どが一日以内にここに集結したわ」

「やれるでしょうか……総力を挙げてぶつかって サラマンダーに勝てるでしょうか？」

「さあ……でも、やってみなきゃ わからないわね」

これから始まるのは試合でもなんでもありません。

ただの殺し合い。負ければ死ぬ ルール無用の戦いなのです。

拙者達アルファ隊は、その殺し合いを 聖人サラマンダーに挑んでやります。

勝ってみせます……勝って、けーすけ様の仇を討ってやるのです  
!

## 第239話 邪炎のサラマンダー

拙者 木下暮葉は、他のアルファ隊総勢20人ほどの人達と共に、千葉市内にある火力発電所付近の広い空き地に集合していました。なんとというか、人気の少ない場所がここ以外に思い浮かばなかったのです。発電所が戦闘の余波を受けて壊れちゃいそうですが…。

でも、この敷地は広いのです。

少しくらい派手に戦っちゃっても、多分大丈夫だと思うのです。

「木下、邪炎のサラマンダーの情報が少しだけわかったわ」

「ほ、本当ですか、アイリスさん!？」

「誰だったかしら？ アマデーオって元サヴィウトのクソツタレが掴まっていたじゃない。あの人と電話が繋がって、ソイツが少しだけサラマンダーの事を知っていたわ」

ここにきてアマデーオの名前が出てくるとは、あの人……どうやら、サヴィエトに身を置かなければ生きていけない状況だったらしいのですが、今頃何をやっているのでしょうか。

少しだけ気になるのです。でも、生きてはいるみたいなのでね。

「邪炎のサラマンダー……ですか」

「ウエセックス出身の傭兵で、昔は神聖教で十字軍を率いていたらしいわ」

「何故、神に仕える者がサヴィエトなんか……?」

「何かしらの事情があるのでしょうか。サヴィエトには訳わけが多いのよ」

「訳あり、なのですか……」

世の中には色々な人がいますが、追いつめられると進む道は限られてきます。多くの人が似たような行動を選択しますが、魔法使いの場合はサヴィエト入りする事が、それなのでしょうね。

「それで、彼は数多あまたの戦歴があるわ。ただ、民間人への被害を最小にしようとしたり、傷ついた同僚と同じ目線から向きあったり……完全に血も涙もない人ってわけじゃないらしいわ」

「……ひょっとして、サラマンダーは善人なのですか？」

「善人、なんて表現はできねえーわね。甘いクソ野郎ってのが妥当な評価かしら？」

それでも、戦場という気を抜けない場所にいながら、邪炎のサラマンダーという人物は善行を行うほどの余裕があるのです。それについて、数々の伝説を残しています。

全く……化け物なのです。

「けーすけ様も伊吹さんも……どうしてサラマンダーと戦っちゃったのですか……」

「と、ところでアイリスさん。その、アマデーオは他に何か言っていますでした？」

「他に？」

「はい！ その、サラマンダーに弱点は期待しないのですが……その、戦闘スタイルです。武器とか流派とか……」

拙者がそう問うと、アイリスさんは瞳を閉じて、深く考え込んでしまったのです。

はわわ……ど、どうしましょう。

もしかして、一番肝心な事を聞いていなかったのでしょうか？

「……そういえばこんな事を言っていたわ。アマデーオのクソツタレが」

「ど、どんな事……なのですか？」

「アマデーオは高速移動、局地的な大爆発など、単純ながら脅威的な魔法を使ってくるわ」

「他にも、技は秘めていそうなのですね……」

「ええ、そこまでならサラマンダー以下の一般魔法使いでも、出来るヤツはきつというわ」

高速移動なら拙者でも出来るのです。風の力を使えば、普通に走るよりも速い速度で移動する事はできます。局地的な大爆発ですと、無属性、あるいは炎系の魔法使いが得意なのです。

ですが、その二つの力を同時に使える魔法使いは希少なのです。

「それでは、邪炎のサラマンダーは……」

「彼の名前、サラマンダーについて考えてみようかしら」



「サラマンダー……確か、火の精霊の事……なのですよ?」

「ええ、その名の通り　サラマンダーは炎系の魔法を得意とする魔法使いなのです」

「炎系の魔法なら、大爆発の使用は理解できますが………」

ですが、炎系の魔法で高速移動なんて出来るのでしょうか。燃やす、爆発させる、などの単純作業は誰にだって出来ます。ですが……高速移動は常識的に考えると不可能なのです。

もちろん科学的根拠はありませんよ。これは魔法、非科学なのですから。

にしても、炎系の魔法で高速移動は普通　無理な話なのです。

「その爆発がキーポイントだわ」

「……えっ?」

「爆発の衝撃を利用して　サラマンダーは高速移動を可能にしているの」

拙者が呆気にとられていたその時、アイリスさんはとんでもない事を言いました。

爆発の衝撃を利用して……。

「で、でも!　そんな事をすれば普通は死んでしまうのです!　衝撃波ですよ?　普通、爆発の衝撃波を喰らえば死んでしまうか、死なないにしても重傷は確実なのです!」

「アイリスだつて信じがたいと思つたわ。でも……事実らしいのよ。彼はね、その衝撃波に耐える屈強な肉体を持っているわ。それが聖人つてヤツらしいから……」

聖人……ですか、そういえばリーリヤ隊長も聖人の一人らしいのですが、ひよつとしてリーリヤ隊長ならサラマンダーに勝てるのでは……？

つて、あの人は滅多な事では戦場に現れないのです……期待するだけ無駄なのです。

「……どうすれば、サラマンダーに勝てるのでしょうかね」

「正攻法では100人でも200人でも勝ち目がないわね。でも木下」

「な、なんででしょうか……？」

「アイリスは開発したのよ。聖人に打ち勝つ　新しい魔法を」

思わず目と口を見開いてしまった今の一言。

聖人つて……あの、化け物みたいな強さを誇る人に打ち勝つ……新たな魔法？

「ど、どんな魔法なのですか!？」

「口で説明するのは面倒ね。ただ、文字リッをテキストにいじつていたら偶然出来たわ」

「偶然の産物……なのですか？」

「心配しないで。術式はちゃんと脳にも書物にも記憶しているわ」となると、拙者達がサラマンダーに勝つ方法は一つみたいなのですね。拙者達がうまくサラマンダーを引きつけておいて、隙を突いてアイリスさんが 新たな魔法を放つ。

対聖人用の新魔法。効果までは不明なのですが……期待してみる価値はありそうです。

藤島圭介 Side

う、く……。  
瞼がぴくぴくと動いている……痙攣けいれんかな、と思ったけど……はは、どうやら自分の意思で動いているみたいだ。少しだけ、体が回復してきたみたいだな。

それより、目が覚めて思ったけど……この暗い空間は一体何処なんだ。

「……そうか、俺……負けたんだっけ……？」

ここはサヴィエトの幽閉施設……なのかもしれないな。あーあ、調子に乗ってサラマンダーが売ってきた喧嘩を買っちゃったが、伊吹を巻き込んで俺もボコボコにされてしまった。最低だ、俺は幼馴染を守る事も、サヴィエトには捕らわれないという 暮葉との約束も守れなかった。

「……あれ、葵？」

何故か、俺が寝ていた場所……多分ベットと思われる所の隣に机があつて、椅子に座っていたと思われる葵が伏せている。寝ているのだろうか……ていうか、葵がなんでここに？

葵まで……サヴィエトの捕縛対象だったのだろうか。そういえば、以前誠和大学で葵も連れ去られていたし、ひよつとしたら……葵も連中のリストに乗っているのかな。

ただ、ここでまた一つ 疑問が沸いてきたのだ。

俺達がもし、サヴィエトに捕縛されているんだとしたら……なんで、縛られていない。どうして俺も葵も身動きが自由に取れる状態なのだろうか。

まあ、俺は点滴が繋がっているから……。

「……っ」

ちょっと待て、なんで点滴なんか繋がっている。

もしサヴィエトに捕らわれたのだとしたら、治療なんてされないはずだろうに……。

「もしかして、ここって……っ」

カーテンは閉まっている……が、隙間から街灯りらしきものが見えている。俺の横には台の横に乗っかっている旧式のテレビ。さらにベッドには『藤島圭介様』という文字。

ちょっと待て……ここって、どう見ても病院じゃねえか。

「戦いは……アイツは？」

邪炎のサラマンダー。

伊吹。

アルファ隊。

暮葉。

色々な単語が頭に浮かんでくる。脳が正常に動き始めたらしいな……今頃、邪炎のサラマンダーは何をしているのだろうか。伊吹は結局どうなってしまったのだろうか……？

「……悪い、葵」

言いながら、ブチッ！と、点滴を抜く。一瞬鋭い痛みを感じたものの、全身に響いている鈍い痛みよりは遥かにマシだろう。というか、痛みを感じるって事は神経も元に戻ったみたいだ。

体は……う、ぐっ、痛え……だけど、全く動かせないってわけではねえな。少なくとも手すり代わりのものさえあれば、自走は可能だ。歩いているうちに俺の体質もあるだろうし、どうせ次第に回復していくことだろう。トラックに轢かれても平気なんだ……どうって事ねえよ、これくらい。

「邪炎の……サラマンダーか」

恐ろしい化け物だった。筋力100%の力が全く通じないんだもん。増してや、今の俺は満身創痍なんだぜ。絶対勝てないのは分かってたんだ……。

でも、やらなきゃいけないんだよ……。

「待っている、暮葉」

多分、暮葉はサラマンダーの所へ向かっている。ようやく思い出したけど、俺を助けたのは多分暮葉だろう。暮葉はアルファ隊の仲間と共にサラマンダーと戦っているハズだ。

暮葉を助けねえと。伊吹の仇をとってやらねえと……サラマンダ

ーを殴らねえと、俺の気が済まねえってんだよ。俺は全身を襲う激痛に耐えながら、なんとかベットから起きあがる。そのままフラフラとした足取りで、壁に手を突くことでようやくバランスを保った。

「今、助けに行く……俺がサラマンダーを……倒してやるッ」

勝てるわけのない戦い。

それでも、俺は挑みたかった。

俺のプライドが敗北を許せないし、なににより 守りたいものがあつたから。

## 第240話 総力を挙げた激戦

私 邪炎のサラマンダーは、現在古宇坂を出て千葉市という場所へ来ている。古宇坂市において警察や自衛隊と交戦。最初に現れた警察は拳銃や機関拳銃で身を固めており、防弾性の高い盾まで構えて連中もやってきたのだが、戦闘の結果はなんとも無残なものであった。

後に現れた自衛隊もシルフの時とは違い、何処かの駐屯地から1世代か1.5世代くらい前の戦車に最新式の歩兵装備など、そこそこ充実した装備で私に向かってきたというものの、それでも1時間もせずに彼らは撤退を初めてしまったのだ。

最も私を相手にし、撤退という選択肢を選んだのは正しい事なのである。

現代兵器というのは、やたらに金のかかるものになってしまったらしい。自衛隊の上層部が政府の人間かは知らぬが、このままでは軍備や人員の無駄遣いと判断したのであろう。

そう上層部が判断するほど、あまりにも一方的な勝敗であったが……。

「案外、馬鹿ではないのだな」

手際のいい撤退である。専守防衛という……言ってしまうと、本土決戦に徹する組織だけにそこらへんは上手であった。同じ軍人として素直に感銘を受け、称賛しようではないか。

さて……そろそろ藤島圭介を探すでしょうか。

ここは千葉市の火力発電所付近であるな……ここら辺で魔力のサーチを行い、おそらくこのあたりの病院にいるであろう、藤島圭介の居場所を突き止めてやろう。

しかし、その後方から 何者かの気配を感じた。

「……その必要はなかったのか？」

適当に痛めつけてはおいたが、藤島圭介も馬鹿であるな。先程の戦闘で、私と藤島圭介には圧倒的な差があると証明したハズなのだが……まさか、まだ私と戦うつもりであるか。

それとも、日本人らしく土下座でもしにきたのであるか？

「まあよい、5秒以内で出てこい。傷が痛むのであれば手を貸そう」

そうは言ったものの、藤島圭介は全く姿を現さない……いや、待て。気配は複数。それも全員藤島圭介のものとは違うではないか。おまけに魔力のサーチをかけてみた結果、どれも藤島圭介を遥かに超える魔力を持っている。これはまさか、アルファ隊ではないのだろうか？

「なるほど、そちらは私の行動に不満を持っているのであるな？」

確か、アルファ隊の任務は藤島圭介の守護であったか。面倒であるな……私にはやるべき事が山積していると言うのに、こつも戦いが続くのは流石に面倒と感ずるのである。

まあよい、来るなら来るがよい……すぐにメイスで潰してやるぞ。そう言いたかったのであるが、それを言う前に、

ドバン！ と。

何者かが不意に水と思われる魔術を行使してきたのだ。

不意に放たれた水は複数に分裂した、ブーメランのように私へと迫ってくる。その水で人間の皮膚を切刻もうという魔術であるか。なるほど、流石はアルファ隊である。どんなに小さな少女であつて



もそこそこの魔術は使えるのだな。そうでなければ面白くないのだ。しかし、その一撃は無駄である。

私は咄嗟に右の手のひらを突き出し、轟！　と言う凄まじい音を立てて、オレンジ色に輝きながらあらゆる物を破壊し、焼きつくす炎の柱を繰り出す。

水のブーメランは全て、私の火炎旋風に掻き消されたのである。

「そ、そんな！？　ミネットの魔法が効かないんだよ！？」

「属性的には有利なハズなのに……と、とにかく下がっていて欲しいのです！」

「あ……き、木下先輩っ！」

続いて飛び出してきたのは……ほう、木下暮葉。アルファ隊に10人しかいない、特隊員の1人であるか。詳しい事はわからぬのであるが、どうやら魔法少女らしくかぬ刀使いであるか。

ならば、私も魔術は行使しないのである。

「ッ！」

瞬間。

ガツキイイ！　と、金属と金属がぶつかり合って、火花が激しく散りばめた。私のメイスと日本刀が鏝迫り合いをしているのだが、変であるな。本来であれば私のメイスの打撃に、日本刀が耐えられるハズがないのである。強度的にどれほどの達人でも、これほどの物を受止めるのは無理だ。

使用者以前に、使用している武器そのものが持たないのである。

「その刀は……」

「一期一振は簡単に折れないのですよ……何重にも強化術式を張り巡らせているのです」

険しい顔をしながら、彼女は私の殴打を必死に受け止めている。強化術式。そのような魔術は何処にでもあるものだが、極めれば凄いものである。アルファ隊には面白い隊員がいるのであるな。武器がソレであれば木下とも多少は楽しめそうである。

「折角リリーさんに頼んで強化してもらった、一刀両断の必殺刀ひっさつとうなのです。その威力を味わうがいいのです 聖人ほけもの！」

「野蛮であるな。不意打ちをし掛けてきた上に、強化した刀を使ってくるとは」

「貴方の方が野蛮なのです！ よくも……よくも、けーすけ様を……ッ！」

藤島圭介の名を呟き終えた瞬間である。木下は咄嗟に後ろへ10メートルほど跳躍し、そこから上空30メートル程の高さまで、殆ど一気に跳躍したのである。私はそんな木下を逃さず、木下を撲殺する為に爆発の衝撃波を用いて、音速を超える速度で木下に迫った。私はそこでメイスを横薙ぎに振り回し、木下など真つ二つにしよつと試みた……が、どういふわけであろうか。木下は半歩遅れて反応し、再び刀でメイスによる打撃を相殺する。

「ッ！」

そこで、後方から木下の仲間と思われる連中が放った、魔術の大軍が押し寄せてきた事に私は気付いたのだ。ここでメイスを振り回

せば、隙となり、木下から斬撃を喰らう羽目になる。  
ならばと思い、ズオ！ と、私は右方向へ爆発による高速移動を  
実行する。

「……………何？」

「……………ッ！」

アルファ隊の連中が複数待機していた事も、複数の魔術が放たれた事も、その中に大変珍しい術式が合った事も、私は決して驚きはしなかったが……………ただ一つ、驚くべき事がある。

そう、それは 木下が私の速度についてくる事だ。

木下は特隊員とは言え、単なる人間……………聖人である私の速度に追いつけるはずがない。

これは木下の実力か……………それとも、小細工によるものなのか？

「天神無双木下流“天下統一”！」

「……………ッ！？」

木下が一瞬だけ私を追い越し、眼前で止まって私を停止させた瞬間 そのような意味不明な事を叫んだのである。それは宣言、そう 貴様を殺すと言つ殺害宣言であった。

ドガバアッ！ と、恐らく音速は超えているであろう刀の動きに合わせ、それによって生まれた鋭い風圧が、刀以上の速度で私の体を切刻もうとしている。

なるほど、確かに必殺奥義である……………だが、

「 遅いのである」

ブオオツ！ と私はメイスを一度振り下ろしただけで、木下の攻撃は掻き消される。メイスを振り下ろした事による衝撃波が、木下の風の斬撃を無効化しているのだ。

「ッ！？」

「驚くのも無理はない。貴様の一撃は見事であった」

「そんな……必殺の奥義が……っ」

「確かにそれは、一般の魔術師程度あれば簡単に敵を殺せるであろう」

しかし、木下は最も重要な事を忘れているのだ。

そう、私と戦うにおいて 最も忘れてはならない事を。

「だが、私は聖人だ。一般の魔術師とは訳が違うのだ」

「……ええ、わかっているのです。拙者達と貴方には天と地ほどの差がある事くらい」

「天と地では生ぬるい。差は間違いなくそれ以上である」

「確かに……そうかもしれません。ですか……」

その時。

ガクン！！ と、私の動きは何か封じられたかのように停止した。

「ぐ……ッ！？」

体が動かない………どういう原理であるか。この魔術は見た事も聞いた事もない、全く新種の魔術ではないか。おかげでどういう術式であるか理解が追いつかない。

何故、私の動きが強制的に停止されているのであるか？

「………あれは？」

ふと下を見てみると、複数のアルファ隊の中の一人。緑色のワンピースを着ていて、金髪の赤と青のオッドアイの女が。剣の刃先をこちらへ向けている。それ自体は脅威ではないのだが、驚くべき事は彼女の前方にいる、長髪で髭を生やした。剣を構えた筋肉質の男だ。

何処かで見えた事がある。

以前、こちらの世界の魔術について調べていた時、何かで見た神話の神だ。

「我が神々の中で、最も美しい眉目秀麗な豊穰の神。それは王家の始まりにして、国家に安泰と豊かさを齎した平和の象徴。それは実り豊かな恵まれし王にして、妖精たちの支配者。その役は平和、手段は絶対の勝利。顕現せよ、この世に勝利と豊穰と平和を齎せ」

ユングヴィの幻想

「ッ！」

ユングヴィ………思い出した。北欧神話………豊穰の神、フレイの事であるか。しかしあのオッドアイの少女は何を企んでいる。とてもじゃないが、それで私を倒せるとは思えない。

「行け！ 勝利の剣を握りし戦士よ！」

「………ッ！？」

体が動かないというのに、剣を構えたフレイがこちらへ接近してくる。速い……まるで聖人級の速度であるぞ。アルファ隊に神の力の一部を扱える者がいるとは……誤算であった。

だが、それでも私を破れぬぞ。見た所、あの神の力はかなり劣化しているものだ。

オリジナルと比べて 大幅にパワーダウンしている。

ならばどうするか。決まっている こちらも少しだけ力を見せるのみだ！

## 第240話 聖人流落

ユングヴィの幻想。サモン

それはアイリスこと、アイリス・オースティンが開発した幻影を召喚する術式。アイリスの出身地に古くから伝わる、北欧神話系の術式で、発動の為に塚状の儀式場を用意しなければならないという、超がつくほど面倒な制約があるわ。もちろん、塚が破壊されればそれでおしまい。

術式は崩壊してしまうのだけど……その為に、塚には隠蔽用術式や防御用術式を何重にもかけているわ。その際にちよこつとだけ文字インの勉強をしたのだけど……。

偶然。

文字ルンで遊んでいたら発見したのよ 対聖人用必殺魔法が。

それがコイツよ。

「……何故だ!？」

邪炎のサラマンダーのクソツタレも、これには流石に驚きを隠せないみたいね。邪炎のサラマンダーの動きを封じているものは、道具でもなんでもないわ。道具でヤツの動きを封じれるなら、こんな苦労はしないもの。でも、所詮サラマンダーは聖人だわ。

聖人は信仰の模範となる信者に対して、教会から贈られる称号のこと。その信仰を得る為には一般人では考えられない程の修行を積み、努力に努力を重ねて聖人になったハズ。

なら、もしもその途中の過程を一時的に崩してしまえば？

もしも、聖人を一時的に並の魔法使いレベルに弱体化させてしまえば？

既存のルールを全て捨て、新たな法則を組み上げる。

それがアイリスが開発した対聖人用必殺術式

ホ・ハギアスレウマ  
聖人流落。





「ここで死んでいた」

邪炎のサラマンダーの口が歪む。

なに、あのクソツタレは……ただの聖人ってどういう意味かしら？  
だってあなたは　その聖人じゃなかったのかしら？

「しかし、私は赤の軍神でもある。その意味が貴様らに分かるかね？」

ユングヴィの勝利の剣をバキツ！ と、親指と人差し指だけで文字通り、真つ二つに折ったサラマンダーの左手が動く。巨大なメイスを持つ右手も、アイリス達へ向けられた。

「もきゅ、まさか……精霊の力まで持っているのですか!？」

「貴様は木下であったか。正解だ……我が名の通り、私は精霊サラマンダーの力を持つ」

精霊の力と聖人の力、その二つを持つ者って……なにそれ、卑怯じゃない。

なるほど、そういうわけね……つまり邪炎のサラマンダーは、聖人としての力を封じられても精霊としての力までは　封じられていない。

「さあ、手土産だ……貴様ら全員にプレゼントしてやるぞ」

ドツパア！ という轟音が、火力発電所の横にある広い空き地に響き渡る。閃光が発生した直後にユングヴィの体が吹き飛び、ゴキゴキバリバリメキメキという痛々しい音も響く。

って、こ……この音、アイリスの体から……ッ!？

「がつ、アアあああああああッ！」

咄嗟に塚状の儀式場に張り巡らせるのと同じ感覚で、自分の体にも防護術式を張り巡らせたと言っのに、鉄道車両に轢かれたような体をバラバラにしかねない衝撃が炸裂する。気付いた時にはアイリスは地面に倒れ、首から下が土や砂に埋もれ、身動きが満足にとれなくなっていた。

そんな中、ズシンズシンと、人外の怪獣のような足音が聞こえてくる。

サラマンダーだわ……歩く度に足の裏で爆発を起こしているのかしら？

「少しも楽しめなかったぞ。残念だが、アルファ隊もやはりこの程度であったか」

「く……ッ！」

「終わりだ。悔しければ、あの世から藤島圭介拘束を阻止してみろがよいぞ」

メイスを構え直しながらも、サラマンダーは腐った魚を見る冷たい視線を向けている。ヴァインペル隊だったらここでお終いね……彼らは元々拠点防衛用の組織。

大した秘密兵器は持っていないわ……でも、我がアルファ隊はこれで終わりではない。

「勝った気になるのが少し早いんじゃないかしら……邪炎のサラマンダーさん？」

「……なるほど、貴様の言つとおりである」

納得したのか、サラマンダーは<sup>まぶた</sup>瞼を閉じながら、静かにアイリスに背を向けた。

「感謝するがよい。貴様らの最終兵器がお出ましのようだぞ」

本当に最終兵器よね……。

サラマンダーのクソツタレを倒せそうなのは、実際あの人しかないしね。

アイリス達では力不足でした……後はお願いします 隊長。

リーリヤ・コステイリナSide

ギリギリ間に合ったみたいですね……。

リーリヤは周囲を見回します。木下暮葉、ミネット・ローラン、アイリス・オースティン……全員の名前を呼ぶと時間がかかりますが、とにかく皆さんはよく頑張りました。邪炎のサラマンダーという化け物を相手に、よくリーリヤが到着するまで持ち堪えたと思います。

ですので、後はお任せください……リーリヤが責任を持って彼を撃破しますので。

「やはり現れたか、聖人よ」

「一つ質問しますが、リーリヤの仲間に戦死者はいませんか？ と、

リーリヤは真剣な表情で貴方に問います」

「案ずるな。貴様の仲間はみねうちで終わらせてある」

「そうですか、と、リーリヤは少しだけ安心しました。しかし、貴方がリーリヤの大切な仲間達を滅茶苦茶にくれた事実には、変わりはありませんね……と、リーリヤは最も大事な事を確認します」

「愚問であるな。我が前に立つ敵に攻撃して、何が悪いと言っただね？」

「それ自体に問題はありません。問題はその相手がリーリヤの仲間である事と、リーリヤは今の疑問に対する回答をします」

「そうか……」

初めてな気がしますね……邪炎のサラマンダーが口元を緩ませ、僅かに微笑み、満足そうに頷きました。まるで、リーリヤの登場を待っていたかのようなですね。戦いが好きな傭兵の彼は、相手が聖人であればようやく一方的ないじめではなく、本物の戦いが出来ると思ったのでしよう。

確かに、聖人同士であれば、能力値に大差はないでしょうね。

最も、サラマンダーはただの聖人ではありません。

精霊の力も持っている故、私のような単なる聖人では彼の力には及ばないでしょう。

ですが、

「一つだけ確認する、私はただの聖人ではない。貴様はただの聖人であるが、その差はどれほどのものだと思います？」

「承知の上で貴方に喧嘩を売っているのです……と、リーリヤは回答します」

「そうか、では 私と戦う覚悟はあるのだな？」

「はい、リーリヤもそう簡単にはやられませんので……と、リーリヤは答えます」

左手で首元の八端十字架型の魔装具に触れる。右手だけでジャラジャラと、先端に神々しく輝く黄金の装飾品が取り付けられた、聖杖ジェーブルを構える。よく見てみましょう、聖杖ジェーブルには装飾品のほかに、極細のワイヤーが巻いてあります。

これも、私の得意な小細工の一つです。

私は聖人の力に加え、さらに上位の敵に対しては 小細工で差を埋める卑怯者です。

しかし時に、卑怯は素晴らしい戦力になります。

簡単には負けませんよ……邪炎のサラマンダー。

## 第240話 聖人流落（後書き）

キャラクターNo018

・アマデオ・ベルサーニ ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：身体能力は低いが、魔法の天才であり、総合的な戦闘力は非常に高い。

## 第241話 聖人と聖人の死闘 前編

人類が扱う兵器の中で、最も強力なものとは一体なんだろうか。核兵器……確かにそれは強力なものです。威力ばかりではなく、攻撃された周囲は放射能汚染によって死の土地と化し、大変住みにくい場所となってしまうでしょう。リーリヤの祖国であるロジーナにだって、大陸を切り裂くようなものや、月の半分を破壊出来るようなものまであります。

ですが、どれも人類でも可能なレベルでしかありません。今、千葉という場所にある火力発電所の横の空き地に響く轟音は 人類の常識を遥かに超えるであろうものでしょう。

ぶつかり合うだけで大地が揺らぎ、東京湾の波が荒々しく立ち、火力発電所の建物がギシギシと歪んでいく。悲鳴に悲鳴、衝撃の余波と余波。全てが常識を遥かに超越しています。

リーリヤこと、リーリヤ・コステイナと邪炎のサラマンダー。  
リーリヤ達、聖人の衝突が この世を震撼させていました。

「おおオあああッ！」

咆哮と共にサラマンダーの左の手のひらかな放たれたのは、爆発的な炎弾。直径100メートルにもなる炎の弾は、まるで小惑星のようにこちらへ落下してきました。

まずいですね……このエネルギー。こちらの世界の文献を一度目に通しましたが、ツングースカ級の大爆発が起きるかもしれません。ここは火力発電所のすぐ隣。夜間とは言え、火力発電所には職員がいるかもしれません。さらに市街地も近いですし、炎弾を食い止めなければ……ッ！

「……………ッ！」

聖杖ジェイズルに巻いてある極細のワイヤーが、儀式を行う時の魔法使いのように、空中で魔法陣のようなものを描く。魔法陣となつたワイヤーから現れたのは水。ガブリエルと言つたほうが一般的なのでしょうか、リーリヤは正教会の人間なのでガウリイルと称しましょう。

ワイヤーで描かれた魔法陣の意味は西の方角、青色、水の元素。要は、魔法陣を介する事によってガウリイルの力の一部を 利用しているわけなのです。

バオオ！ という爆発音が炸裂し、激しい水流は爆発的な炎弾を相殺しました。

「我が炎弾を水で防ぐとは。貴様も中々の使い手であるな」

「そちらが精霊の力を使うのでしたら、こちらは神の力の一部を利用させていただきます、とリーリヤは宣言します」

「ふん、小細工師が」

「それはリーリヤにとって褒め言葉ですと、リーリヤは喜びを露わにします」

こうして語っている最中でも両者は激突、交差しています。リーリヤの聖杖と、サラマンダーのメイスがぶつかり合い、ガギィツ！ と言う金属音と同時に火花が散っている。強いて普通と違う所を上げるとすれば、その火花が落下しただけで 地上で小さな爆発が発生しています。

「武器から飛び散る火花にすら意味があるのですね……と、リーリヤは関心します」



「貴様の方こそ、その杖は奇妙であるな……何故メイスの衝撃を受けても折れん？」

「そうですね……」

そこで大きく跳ね上がり、一気に上空300メートルの地点に到達しました。温度が低下しているのが肌で分かる。今頃、風を切る音がサラマンダーに響いた頃でしょう。

その高さから、リーリヤは聖杖を上から下へ、大きく振り下ろしました。杖の先端に取り付けられた装飾品が、杖本体とぶつかり合っつて、ガチャガチャと言う音を立てている。そこに意味はありません。

「この聖杖はこういう代物だから、とリーリヤは質問に回答します」

次の瞬間、杖の前に先端が鋭く、サラマンダーを睨み付けるかのような、彩度の低い緑色の物体が現れました。その数4個、鉛筆のような形状のその全長は約7メートル。

今度は杖を前へ突き出すと、その物体はサラマンダー目がけて飛翔。

「ッ!？」

直後、周囲を包んだ閃光はおそらく、メイスとアレが衝突した時のものでしょう。

サラマンダーは今の一瞬でメイスを振り回し、彩度の低い緑色の、金属の杭から自分の身を守ったようです。流石です、今のあれを防ぐとは……やはり一筋縄ではいきませんね。

しかも、リーリヤが杭を放った場所には既に、サラマンダーの姿

はありません。気付いた時にはリーリヤの前方、大体10メートル程にいました。

今の一瞬で杭を防ぎ、ここまで飛び上がったのですね……。決して崩れない厳つい顔。

しかし、その頬には一筋の切り傷が出来ており、僅かに血が滲み出ていました。

「やはり貴様も聖人であるな。同じアルファ隊でも、ここまで差があるものか」

頬から滲み出ている血を人差し指ですくい、指先でメイスに血液を塗る。単なる銀色だった巨大のメイスの一部に、僅かな血液が付着していました。

「今のは青銅であるか？」

「鋭いですね、とリーリヤは関心します」

「……ふん、ロジーナ正教会の術式であるな」

「貴方はレムリアの人間な上に、元々神聖教最大宗派のロマリア聖教の関係者……東方のこちらと西方の貴方は敵同士ですし、東方の魔法も研究もされていたみたいですね。と、リーリヤは関心してみます」

「当然だ、そちらの事は分かっているのだ」

双方はかつて一緒の巨大な宗教だったのですが、同じ宗教内でも対立が生じ、数百年前にロマリア聖教とロジーナ正教を含む正教会は分裂。以後、双方は独自の発展をしてきました。

リーリヤが持つ聖杖ジェズルも、正教会で発展した魔装具の一種です。元々聖杖ジェズルは権杖であったものが変形したもので、その意味は青銅の杭。

そう言えば、こちにの世界にも似たような話がありましたね。最も、こちらの世界では杭ではなく、蛇だったような気がします。が……。

まあ、簡単に言えば 神話の再現を行うのが聖杖ジェズルの役目です。

そして、その力を引き出すのが使用者 つまりリーリヤというわけなのです。

「では、そろそろ本番に入りましょうか？ と、リーリヤは提案します」

「そうであるな。そろそろこちらも 体が温まってきた頃だ」

「それでは、ウォーミングアップを終了します、とリーリヤは宣言します」

「よろしい。今から行われるのは本物の戦い。死んでも文句ナシの決戦である」

バゴアオツ！ と言う爆発音が炸裂する。それは爆弾によるものではなく、サラマンダーの足の裏が魔法で爆発した音です。彼は、その衝撃波を用いて加速しているみたいですね。

「ッ！！」

メイスが振るわれても、リーリヤは聖杖ジェズルを構えるばかりで、その場から走ろうとも跳躍しようともしません。ただ、メイス

が寸前に来るタイミングを窺うばかりです。  
そして、遂にチャンスは訪れました。

「……何？」

左目だけを大きく開け、若干悔しそうな表情を浮かべて彼はそう呟きました。通常ならメイスの一撃で、リーリヤの体は遙か遠くへ突き飛ばされていたはずです。ところが、サラマンダーのメイスはリーリヤの体に直撃せず、寸前で動きが止まっていました。

サラマンダーが力を入れても動きません。何かに引っ掛かっているかのようです。

「ワイヤー、だと……ッ？」

「リーリヤは卑怯者です、とリーリヤは自虐します」

すると、今度は胸元の八端十字架が輝き始めました。それは眩しく、神々しく、太陽の光のようでもあります。リーリヤが装備している魔装具の一つでもある、八端十字架。

その意味を考えれば、その効果は容易にお分りかと思えます。

「う、ぐ……ッ!？」

八端十字架が輝くと同時に、サラマンダーが左手を心臓部分に当て、突然聞いてもらえないような声を漏らし、苦しみ始めました。おそらく、内部から圧迫されるような感覚に陥り、うまく力が出せなくなっているはずでしょう。仕方ありません、そういう魔法を使いましたので。

「終わりです。と、リーリヤは勝利宣言します」

聖杖ジェズルは、巻いてあるワイヤーがメイスの動きを封じているので使えません。

最大の武器は敵の武器を封じ、最大の八端#ハツツウヘ十字架は敵の動きを封じています。

ですが、それで手が尽きたわけではありません。リーリヤは邪炎のサラマンダーという化け物を相手にしているのです。今までの小細工でしたし、小細工は確かに大切です。しかし、小細工だけで敵に勝てるという考えは甘い。あまりにも甘すぎるのです。

今からリーリヤは、聖人としての力。即ち本命を使います。成功すれば、リーリヤはサラマンダーに勝てます。

その為にまず、襟元に左手を持っていき、服の中から一枚の白紙を取り出します。

「偉大なる智天使ヘルヴィム。その力の一部よ、顕現せよ！」

瞬間、背中が焼けて裂けるような激痛に襲われました。しかし、本当にリーリヤの背中が裂けたわけではなく、聖人としての力が最大に達したからです。

「その真つ赤な四枚の翼。貴様、智天使の力を……？」

「確かに言ったハズです。ウォーミングアップはここで終了……と、リーリヤは指摘します」

「それが貴様の真の力であるか……」

「ええ、それでもただの聖人ですよ……と、リーリヤはやけくそ気味に言い放ちます」

要は、リーリヤの体に天使の力を宿し、脅威的な魔力を得ただけです。それも、効果は一時的なものですし、完璧に天使になれたというわけでもありません。

しかし、これで実力は五分五分。

ようやく サラマンダーと互角に渡り合えるレベルに達したのです。

「さあ、さっさと決着をつけましょう……と、リーリヤは貴方を急かします」

サラマンダーの武器は極細のワイヤーで封じてあります。ワイヤーは聖杖ジエズルに取り付けているものなので、ワイヤーを巻いている以上は使い物になりません。しかし、リーリヤの武器が聖杖ジエズルだけと言いつ切るのは、素人の考えでしょう……。

リーリヤは卑怯者。常に何処かに武器を隠し持っています。

さらに今、八端十字架の意味の一つ。斜めの線は足台。窒息死を防ぎ、罪人を足台で固定し続ける事によって、罪人を長い間苦しませると言うものがあります。

リーリヤはこれを真似て、シルフにも仕掛けた魔女殺しの術式を開発。

八端十字架の意味を参考に、特定の魔力を持つ罪人を圧迫します。決して、その罪人が死に至らない程度に……そう、死ぬ事が出来ず、しかも苦しいのです。今、サラマンダーにはこれを仕掛けてやりましたので、恐らく彼は今 通常よりもやや弱っているハズです。

武器を封じ、本人の能力を低下させ、その隙に リーリヤは第2の武器で敵を叩く。

聖扇リピタ。

それを用いて 時間がないので一瞬で勝負を決めます。

第241話 聖人と聖人の死闘 前編（後書き）

キャラクターNo019

・ラウル・ゲリエ ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：総合的には優秀な魔術師だが、暮葉達には及ばないレベル。

## 第242話 聖人と聖人の死闘 後編

聖杖ジェエズルのワイヤー、魔女殺しの術式などの小細工。そして、智天使の力というリーリヤの聖人としての力の本命。動きを封じられた今、サラマンダーを倒す絶好のチャンスです。

リーリヤは聖杖ジェエズルから手を離すと、背中に生えている赤黒い翼を羽ばたかせる事によって大きく跳躍。直後、眼下に映ったのは点ほどの大きさに見えるサラマンダーの姿。リーリヤは空中で先程まで聖杖を持っていた右手を開き、同時に歯を食いしばりました。

右手が熱い、心臓が押し潰されそうなほど苦しい。

やはり、リーリヤが聖人とは言え……智天使の力は体への負担が大きいですね。

仕方ありません……早急に決着をつけましょう。

「……ふんっ！」

サラマンダーが勢いよくメイスを振り回すと、地上で大爆発が発生する。その爆発をこの目で確認したその時、既にサラマンダーはリーリヤの眼前まで飛び上がっていました。

サラマンダーの持つメイスには何も巻かれていない……予想通りですね。サラマンダーはワイヤーを無理やり引き千切ったみたいですね。まあ、ワイヤーは無数の予備がありますし、こうなる事は既に計算済みでしたので、改めて驚くような事態ではないですね。

冷静に状況を判断し、全身に襲いかかる苦痛を我慢する。  
手に焼けるような痛みを感じました。

ですが、直後。

新たな武器が現れ、リーリヤはそれを右手で握り締めました。



それは扇状のものながら、杖にも見える黄金に輝く聖なる扇。あらゆる害虫から聖体を守ってきた儀式用の祭具。本来は武器ではないですが、リーリヤはこれを武器として用います。

それがリーリヤの 真の力ですから。

「ようやく本命を行使するのであるか」

「何度も言わせないでください。ここからが本番です、とリーリヤは再度忠告します」

その宣言の直後、リーリヤは聖扇リピタ。ヘルヴィムが描かれている、本来は奉神礼などに用いられる物の変形した魔装飾を横薙ぎに払い、直後、地を突くように上から振り下ろしました。

聖扇リピタが一度振られれば、黄金色に輝く残像が残りました。さらに上に横、下に斜めと聖扇リピタを払い、描かれた残像が八端十字架を描いていく。

「この手順を量産。父と子と聖神、リーリヤ・コステイリナの名により、アミン！」

「ッ!？」

サラマンダーが驚いたのも無理はないでしょう。先程描いた八端十字架が、サラマンダーを包囲するかのようになり、四方八方に分裂したのです。無数の八端十字架が逃げ道を塞ぐ。更にリーリヤは聖扇リピタをサラマンダーに向かって突き、その動きに合わせて八端十字架が動きました。

ズガアアッ! という壮絶的な、常識を遥かに超えた爆発音が炸裂。

衝撃波という常識を無視した、破壊と救いの波が四方八方へ伝播しました。

アスファルトは砕け、電柱はなぎ倒され、発電所の設備も一部が吹き飛ば。おそらく発電所の職員に被害はないとは思いますが、後始末が大変そうですね……。

「この程度であるか、ただの聖人よ」

「……ッ!？」

まさか……魔女殺しで体が弱っているハズなのに、今の一撃に耐えたですって？

化け物め。一撃必殺にならなかったのは非常にまずいですが……。

「まだ、負けたわけではありません、とリーリヤは敗北を否定します!」

赤黒い4枚の翼を羽ばたかせ、聖扇リピタをより強く握り締めながら、爆発的な速さでこちらに向かってくるサラマンダーの迎撃に向かいました。サラマンダーのメイスが振るわれ、断続的な爆発が空中で幾度となく発生。しかし、リーリヤは聖扇リピタを扇いで爆発から身を守りました。

リピタを扇ぎながら突き進み、同時に小細工の準備を進める。一瞬で、開いている左手を用いて服の裏から白い紙を取り出し、何も描かれていない紙を口に銜えます。

瞬間、紙に文字が浮かび　リーリヤの左方に木製の車輪が生まれました。

単なる車輪ではなく、車輪の中にもう一つ、車輪が存在する神聖なる車輪。

左手でその車輪を軽く押すと、  
バオオッ！ という爆発的な音と同時に、車輪がサラマンダーの  
顔を捉えました。

「小細工は通じんぞ」

ゴバアッ！ という激突音が炸裂すると、車輪は単なる木片と化  
していました。

確かに、車輪自体はメイスの攻撃に耐える程、頑丈には作られて  
いないですよ。

しかし あくまで車輪は智天使の乗り物です。

「その余裕が隙になるのです と、リーリヤは警告します！」

車輪を破壊するという動作を行っていた、その隙を突いてサラマ  
ンダーに接近し、リーリヤはサラマンダーに向かって聖扇リピタを  
振り下ろしました。

直後、複数の爆発音が炸裂する。

聖扇リピタの聖なる一撃と、サラマンダーの破壊の一撃が衝突、  
交差しました。

爆発の煽りを受けて、リーリヤとサラマンダーは大きく後ろへ仰  
け反る。リピタとメイスが衝突した時に、何らかの衝撃を受けたの  
でしょうか…… 口の中に血の味が充満しています。

いや、違います…… 防御の動作に忍ばせて攻撃も並行した……？

「……ッ」

手ごわい……ここまでの使い手でしたとは。

覚悟はしていましたが……想像以上の化け物ですね。

「大したものだな」

飛びかかって来てメイスを振り回し、リピタとメイスが激しくぶつかり合う中、武器と武器が衝突しあう金属音と、サラマンダーの爆音に紛れてサラマンダーの声を通る。

「我が攻撃を相殺し、私と互角以上の勝負が出来る……貴様の實力は本物だ」

だが、とサラマンダーは続け、

「貴様の魔術、余程体に負荷がかかるらしいな」

その指摘に思わず、リーリヤは動きを一瞬だけ止めてしまいました。それではまずいと思って動き出した時には手遅れ。サラマンダーは数十もの炎弾を放ってきました。

「く……ッ!？」

聖扇リピタを扇ぐ事によって、瞬時に八端十字架を描きます。描かれた八端十字架とサラマンダーの炎弾が衝突し、鼓膜が破れそうなほどの轟音と、体を消し去りそうな衝撃が炸裂する。

しかし、リーリヤはその衝撃に耐えて とうにかこの場を離脱しました。

「……ッ!」

地面への着地と同時に駆け出し、地面に落ちていた聖杖ジェーズルを回収。

右手に聖扇リピタ、左手に聖杖ジェーズル。

二つの聖なる武器を握り締め、上空から炎弾を放ってくるサラマンダーを睨みました。

「ふっ！」

サラマンダーが息を吐く音が響いてくる。上空にいるのに……すごい声ですね。しかしそれは安堵の息ではなく、単なる掛け声のようです。

頭上にオレンジ色の巨大な、円形の炎の塊が現れました。

おそらくリーリヤとの距離は上下数百メートル。

しかし、この位置にしながら 火傷しそうなほどのふくしゃねつ放射熱を感じました。

「封じなければ……ッ！ と、リーリヤは強い使命感を感じます！」

もしも、あの燃える星が衝突すれば、この国の広い範囲に被害が及ぶでしょう。その最悪の事態を避ける為にも、あの燃える小惑星を力でねじ伏せる必要があります。

その為に 右手で聖扇リピタを扇ぎ、左手で聖杖ジェーブルを振り回す。

「この手順を量産。父と子と聖神、リーリヤ・コステイリナの名により、アミン！」

右方と前方に無数の八端十字架。

左方と後方に無数の青銅の杭。

さらに、聖扇リピタと聖杖ジェーブルを交差させてました。

カキイ、という甲高い音が響き渡って、

「サラマンダアアああああああああああああああああああああああ

ああああああッ！！」

生まれてから5回目くらいの絶叫をし、右方と前方に広がる八端十字架。左方と後方に広がる無数の青銅の杭。そして、交差した聖扇と聖杖から放たれる　黄金色の光線！

莫大なエネルギーと共に、それらは勢いよく燃え盛る小惑星へと向かった。

全力と全力の激突。

ピカアッ！　という真っ白い閃光と同時に　地球が大きく震えてしまいました。

大爆発という表現では現し切れない爆発。

世界の一大事の中、全身を砕くような衝撃を受け  
.....。

### 木下暮葉Side

な、にが..... あったのでしょうか？

ふと気がつけば、拙者は瓦礫の中に埋まっていました。その瓦礫から脱出すべく、残り少ない魔力を使用し魔法を発動。風の力でどうにか瓦礫を吹き飛ばし、拙者は再び立ち上がりました。

しかし、眼前に広がっていた光景は.....。

「こ、れは..... 一体..... っ？」

大地が砕け、荒々しい岩肌が地面から顔を覗かせています。それだけではなく、確か先程まで健在だった八ズの火力発電所が、単なる瓦礫と化してしまっていました。

発電所が……もきゅ、これじゃ日本の何処かで停電が起こっちゃいますよ……。

「……ッ！」

そして今更気付いた事……全身に感じている鋭い痛みと鈍い痛みが混ざった、苦痛以外の何者でもないひどい激痛。ようやく神経が元に戻ったのでしょうか……体が痛み始めてのです。

ガシャン、という音が聞こえました。

激痛で持っていられなくなり、一期一振を片手から落としてしまった音なのです。

さらに拙者は 衝撃的な光景を目にしまいました。

「愚かである。私も無駄な殺生はしない。その発電所に職員が居ない事も確認済みだ。あの燃える星がここに衝突したとて、この土地が吹き飛ぶだけであり、決して市街地に被害が及ぶ事はない。アルファ隊の聖人よ……貴様は無駄に土地を守り、無駄に傷つき、無駄に戦力を低下させただけだ」

「う、く……っ！」

リーリヤ隊長が……あのリーリヤ隊長が サラマンダーに押され気味なのです。

ロジーナ……いえ、レムリアでも10本の指に入るリーリヤ隊長が、サラマンダーという恐ろしい傭兵上がりの魔法使いを相手に 実力で負けているのです。

サラマンダーは服が汚れ、顔や腕に小さな傷があるだけなのです

が……リーリヤ隊長は誰がどう見たって重傷なのです。口からは血の塊を吐きだし、頭からも大量の出血。ロジーナの民族衣装も血が滲んで赤黒く変色していました。ひどい怪我、と言わざるを得ないのです……。

「どうした、ただの聖人よ。まさか先程の衝撃で戦闘不能になったわけではあるまい」

「当たり前です……げほっ！ ごほっ！ リーリヤは……まだ負け  
てはいません、とリーリヤは敗北を更に否定します……ッ！」

しかし、リーリヤ隊長の眼光は決して衰えません。

その眼光が消えない限り、リーリヤ隊長はサラマンダーに立ち向かうのでしよう。

でも、拙者だって……こんな戦い、黙って見ていられないのです！

「まったく……隊長は、相変わらず一人で……無理するタイプよね  
……っ」

「……ッ!? あ、アイリスさん!？」

ガタゴトという物音は、アイリスさんが瓦礫を掻き分ける音でした。血を流し、リーリヤ隊長と同じく苦しそうに歯を食いしばっていたアイリスさんが、拙者の横に並んだのです。

「ねえ木下。あのクソツタレを倒すついでに……教えてあげないかしら?」

「教える……ですか?」



「ええ、アイリス達の莫迦<sup>ほか</sup>な隊長に 救いの手というものをね」

その言葉を聞き、拙者はうん、と首を縦に振りました。

チャンスはきつとあります。そのチャンスを拙者達は決して逃しません。

リーリヤ隊長、待っていてください 今助けに行くのです！

## 第243話 強い意思

あたい 浅間あかりは、夜の千葉市をトボトボと歩いていた。葵や木下先輩と遊んでいたのはいいんだけど、突然木下先輩はいなくなるし、圭介のヤツがいきなり入院しやがるし……んで、あたいは一足先に帰ろうとしたんだ。ところが、街中の警備が堅くなって人の流れが悪い上に、夜になるといきなり停電して電車が止まってしまったのだ。

だーちくしょう、結局兄貴に迎えに来てもらう羽目になるのかよ……。

「はぁ……」

今日はなんか最悪だ……圭介は入院しちまうしさ、何度も職務質問されるし……あたいが何かやったのかよ。電車まで止まって帰れないし……。

唯一の救いは、兄貴が車の運転免許を持っていた事だな。

とりあえず、兄貴が車を運転すれば古宇坂に帰る事は出来るしな。ちなみに、葵のヤツは今日は圭介に付きっきりでいたいらしく、病院で宿泊するつもりらしい。

「おい、あつちすごいらしいぞ。発電所が爆発したらしいぜ?」

「マジかよ!?!」

は、発電所が爆発って……一体何が起こってるんだよ。

兄貴はまだかよ……よくわからないけど、あたい怖いぞ。なんだかよくわからないけど早く千葉から立ち去りたいぞ……あ、兄貴。早く来てくれよ……っ。

と、思ったその時だった。

不意に、前方の暗がりから人影からふらつと出てきた。なんなんだアイツ……まるで大怪我でもしているみたいな感じだぞ。頼りない足取りに、今にも倒れ込んでしまいそうで……その上挙動不審って何処の不審者だよ。色々危険な事になっているし、警察に突き出したほうがいいのか？

と、最初は思ったのだけど……何故か、ソイツの姿に見覚えがあったのだ。

「け、圭介！？」

ソイツの姿が街灯に照らされると、あたいは慌ててソイツに駆け寄った。

だってコイツ……圭介だから。入院しているハズなのに……そういえば、圭介はいつもの制服や時々着ている私服ではなく、薄い緑色の……病院のパジャマみたいなのを着ている。無理な動きで解けた包帯からは血が滲み出ている、出血が多いんだろうか……顔色まで悪く見える。

目もおかしい……虚ろだし、左右で瞳孔の開き方が違う。

な、なんだよ……圭介、ボロボロだろ。

こんな状態で病院から脱走してきたの……？

「なにやってんだよ圭介！」

「……あ、あかり……か？」

苦しそうに、圭介は力が抜けた体を支えようと壁に寄り掛かる。それでもズルズルと圭介は崩れ落ちていき、結局は地面に座り込んでしまった。

はあ、はあ、と苦しそうな荒々しい呼吸を続けている……。

「自分でやってる事わかってるのか!? 圭介は重傷者なんだぞ!」

「……行か、ないと……っ」

「な、ど……何処に?」

圭介はあたいの話を聞くつもりはないのだろうか……突然動きだし、地べたと壁に手をつけて立ちあがる。頼りない足取りで立ちあがり、辛うじてという感じで圭介は歩き始めた。

「暮葉……多分、戦ってる……助けに、行かねえと……っ」

断片的な言葉だけ……要は木下先輩が誰かと戦っているって事だろ。どうして圭介がここまで重傷を負ったのかまでは、医者も説明不能だっけって聞いたけど……多分だ。多分だけど、その木下先輩が戦っている相手に 圭介はボッコボコにされてしまったんだろ?

夏休みに入る前から薄々思っていたんだけど……圭介、やっぱり

「助けるって……その体で誰かと戦うつもりなのか!? 馬鹿だろ

! 早く病院へ戻れよな!」

「……………」

「言っとくけど、あたいは圭介が怪我をしているから言ってるんじゃないぞ」

「……っ？」

「あたいは圭介が何を無理して、そこまで命と身を削りながら、何の為に、どんなヤツと戦おうとしているのかわからない……だけどそんな強敵と戦うのは反対だ！」

圭介は黙ってあたいの言葉を聞いていた。

黙っていてくれるのは……好都合かもしれない。

あたいも勢いをつけて 圭介に叫ぶ事ができるから。

「そもそも、圭介が首を突っ込む必要があるのか？ 違っだろっ！ そんな危ないヤツは、もっと専門的なヤツが相手をするべきだろ！ とにかく、圭介が自分から傷つく必要なんてないんだからな。もうすぐ兄貴が車を持ってくるから、その車に乗って病院へ戻れよな」

……あれ、何か違うぞ？

圭介を心配して言ったつもりんだけど……なんか、これ……違う。

「あ、かり……」

「病院で待つてる葵の気持ちにもなってみろ。どんな気持ちで病院に泊りがけで、圭介の事を看病していると思ってるんだ！ なんていっつもいっつも、圭介だけは一人で無理するんだよ！」

やっぱり……そうだったんだ。

あたい……あたいは あたいの為にこんな事を言っているんだ。人として最悪だぞ……こんな怪我人を目の前にしているというの

に、怪我人の心配じゃなくてあたいが安心するために。それだけの為にあんなセリフを叫んでいた……ホント、最悪だぞ。

あたいは……。

「……葵には悪いと思ってるよ」

「……えっ？」

「もちろんお前にも、伊吹にも、暮葉にも……自分でも今の行動は馬鹿げていると思う」

崩れ落ちそうであるにも拘わらず、圭介の体に明確な力が籠っていく。いや、正確には力なんて殆ど入っていないのだろう。ポロボロの体で力を入れるのは、多分無理だからな。

「けど、戦わなきゃいけないんだ……」

本当に力が入っているのは肉体じゃない　　圭介の中身だぞ。

「誰の為なんかじゃねえよ……俺は、暮葉を助けたいから暮葉を助けるんだ。伊吹に重傷を負わせやがったヤツを殴りたいから、殴りに行く……そんな自分勝手な理由だけど、だからこそなんだ……俺はその為だったら　何度でも立ちあがってやる」

今の圭介は気力と精神力だけで動いている。圭介自身を支えている芯が、圭介の体に動けという無理な指令を出している。それが……満身創痍の圭介を動かしているんだ。

本来、あたいても動きを封じられそうな状態なのに、逆にあたいが引きずられてしまいそうなほどのパワーを、圭介の強い信念が引き出しているんだ……。

「馬鹿にしか見えねえかもしれないけど……これが藤島圭介おれってやつなんだ」

異様に強い力で腕を動かされ、とうとうあたいは圭介を離してしまった。離さなければ自分が転んでしまうからだ。強い、今の圭介……重傷者なのに滅茶苦茶強い……ッ。

「だから俺は行く……事情は後で話すから、あかり……行かせてくれ」

「け、圭介……っ」

と、その時だった。

ギギッ！ と、荒々しいスキール音が車道から響いてきた。旧式の車が、ライトを照らし 駐車禁止の標識を気にせず路上に停車している。

「あかり！ ふ、藤島君……ッ!？」

人の目の前で堂々と違法駐車をした車の中から、背の高い金髪の男が降りてきた。

あたいの変態兄貴……やっと、ここまで来てくれんだな……っ。

「あ、兄貴!？」

「よかった、あかり……君が無事なだけでもよかったよ。今、この街の発電所のほうで大きな爆発があったらしい。被害状況はまだ分かっていないけど……とにかく非常事態だ。早く家に帰ろう」

「あ、当たり前だっ！」

あたいだって、こんな場所には長居したくない。したくないんだけど……でも、どうしてもあたいにはこの街から 退く事が出来ない理由があるんだ。

「ふ、藤島君？」

圭介は地面を這って、弱々しい手つきで兄貴のズボンに掴まった。体は満身創痍という言葉がお似合いな程にまでボロボロだけど、それでも圭介の眼光の輝きは衰えない。強い意思と、強い信念が圭介自身を止めようとしなかった。そしてそれは あたいでもきつと止められない。

「お願い、します……その、発電所には……暮葉が、います……」

「き、木下君が？」

「だから、お願いします……車で、俺を……発電所まで、運んで……くださいっ」

「な、何を言っているんだ君は！？ そんな体で……送ってくから君は病院へ戻るんだ！」

変態兄貴の反応はあたりまえのものだ。

あたいだって、さっきまではそうだったぞ……でも、なんでだろうな。圭介からあんな言葉を聞いちゃったら、いや……言葉だけならまだ、あたいは圭介を止める気でいただろう。でも、圭介から滲み出ているただならぬ気迫と、絶対に諦めないというその気持が、あたいを変えてしまった。



それに、あたいだって……木下先輩を助けたいぞっ。

「兄貴……ッ！ あたいからもお願いだ……発電所までいってくれ！」

「……あ、かり？」

「あかりまで……何を言って？ あそこは危険だ！」

言っと思っただよ……だつたらあたいだって、強硬手段に出てやる。覚悟しろ兄貴。兄貴だつたら絶対に耐えられないんだからな。

そういうわけで、あたいは背伸びして兄貴の胸倉をガシリと握り締めて、

「いいから行けよな！ もし行かなかつたら、これから兄貴の事を妖怪ロリコンマスターって呼ぶんだからな！」

「ひ、ひい！？ こ、興奮するけど勘弁して！？ わ、わかつた……行くからヤメテエッ！」

ふっ、兄貴はチョロいな……そう思いながら、あたいは圭介のほうへ顔を向け、呆然としている圭介に向かって微笑みかけた。

圭介、あんたの道はちよつとだけ あたいが開いてあげたんだからな。

さ、事情は後で圭介から聞くとして、行こう 木下先輩が居るハズの発電所へ。

……にしても、あたい……なんなんだろうな。

ひよつとしてまだ 藤島圭介あの人を諦められていないんだろうか……

……？

## 第243話 強い意思（後書き）

キャラクターNo020

・風剣ふうけんのシルフ ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：身体能力はやや低い、精霊の力を持つだけに魔法の威力は凄まじい。

## 第244話 戦場へ行く男

浅間部長の運転は相変わらず荒々しく、時々体がズキッと痛んだが……まあ、正直あのまま歩いて行くよりは良かっただろう。あのままだと、場所もわからなかったしな。俺　藤島圭介は浅間部長が初めて役に立ったと思っていた。浅間部長……マジGJです。さて、そろそろ爆発があったという火力発電所に到着する頃だ……ひよっとしたら事故による爆発かもしれないが、それでも俺は信じている。

ここにきつと　暮葉がいるであろう事を。

「ここまでで……いいかい？」

浅間部長が車を止め、額から汗を流して俺に聞いてきた。ここは……確かに、発電所の施設っぽいんだけど、みれは一体どうしたっけ言うんだらうか？

単なる空き地が　妙に荒れ果てていた。

「これ、は……？」

全身至る所に感じる痛みを我慢しながら、俺はドアを開けて車から降りてみる。車から降りても眼前に広がる景色に変化は無い……ここは戦場、荒れ果てた大地が広がっているだけだ。そして、ゴアアッ！　と言う爆発音が炸裂し、生温かい風が吹きつけてきた。

やっぱり……戦いは続いている。

暮葉はきつと　サラマンダーの野郎と戦っている。

「ありがとう……部長、あかり」

「い、いいけど……君はこれからどうするつもりだい？」

「圭介……あんた、ホントに……行くつもりか？」

浅間部長もあかりも乗り気ではないな。あかりは止める気はなさそうだけど、それでも俺が戦場に行くのは嫌みたいだ……って、そんなの当たり前か。

普通、こんな所に飛び込もうとするヤツがいたら……誰だって止めているだろう。

「行かなきゃいけないんだ……あそこには暮葉がいる」

「ほ、ほんとに……木下先輩がいるの……？」

「確証はねえけど、多分な……それに　暮葉と戦っているヤツには恨みがあるんだ」

「う、恨み……？」

邪炎のサラマンドー……てめえだけは絶対に許せねえ。

伊吹を痛めつけやがって、そして今　ソイツは暮葉を痛めつけているだろう。

「ま、待てよな！　圭介っ！」

怒りをまだ見えぬ敵に向けながら、歩き始めたその時だ。あかりが、強い眼差しを俺に向けてくるあかりが　俺が進むべき道に立ち塞がったのだ。

どういう事……なんだ。あかりは、俺を認めてくれたんじゃ……

ないのか？

「あかり……？」

「行く前に説明しろよな……その、圭介が一体、誰と戦っているのか……」

ああそっか、そういえば後で説明するって言ったよな。あかりとしては俺や暮葉が誰と戦っているのか、一刻も早く知りたいんだろ……」

「悪い、今はそれを説明している場合じゃねえんだ」

「で、でも！　じゃないとあたい納得できないぞっ！？」

「心配するな……ちゃんと、戦いが終わったら説明するから……っ」

本当は説明する気なんてないんだけどな……。

あかりはただの一般人、こういう馬鹿げた事に関わるべきではないと思う。

「けど、この場を突破するには　嘘をつくしかなさそうだ。」

「ま、待って　」

あかりを押し退け、戦場へ向かおうとした……その時であった。ビガアッ！　という閃光と、一步遅れて莫大な轟音が炸裂したのだ。衝撃波が体に激しくぶつかって来て、全身から嫌な音が響き渡る。一瞬で両足が地面から引き剥がされ、そのまま綿埃わたぼろこのように何十メートルも後方へ吹き飛ばされていく。

爆発の煽りを受け、俺の前に立っていたあかりまでこちらに転が

ってきた。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああッ!」

地面に叩きつけられ、俺は絶叫する。

ただでさえ背中に鈍い痛みを感じているというのに、夜空を眺めている俺の目には人影らしきものが映り、その人影は俺に照準を合わせているかのように、俺を目がけて落下してきた。

「が、は……アッ!？」

続いて炸裂したのは、肉と肉が激しくぶつかり合う音。数十キロにも及ぶ肉の塊が高所から落下してきて、俺の身体に只ならぬ衝撃が加わる。骨がゴキゴキと嫌な音を立て、内臓がぐちゃりと押し潰されたような感覚に陥る。普段の俺ならどうって事はないが、今の状態じゃ流石に辛い。

しかし同時に、  
小さな唇の、しかし柔らかな感触が痛みに紛れて、傷だらけに唇に感じた。

肉の重みの苦痛よりも、その柔らかく、熱い感触に俺は反応して……。

ドクン。

不意に心臓が高鳴った。

それだけではない。

直前までサラマンダーを倒す事を考えていたからなのだろうか、少女の唇と俺の唇が触れ合った事に体が反応し、血が……体の芯にじわっと集まっている。

これって、不幸なのか幸運なのか……？  
まあ、面倒な事になっちまったんだろうけど……ある意味幸運なのかもしれない。

「うう……うにゃっ!？」

痛みで唸っていたあかりも、ようやく今の状況を理解してようである。唇と唇が触れ合っていた事実に気づくと、あかりは極度に赤面して飛び退いてしまった。

少し離れた所から、うるうるとした瞳でこちらを見ている……。

「け、けいしゅけえ……っ?」

ぐはっ!

ちよ、なにその声……俺のアームストロング砲が反応しちまったじゃねえか。

ていうか、あかりとしちゃったぞ……日本語で接吻とか言うヤツを。

どないしよう、責任重大だけど……でも、まあいいか。

「ありがとう、あかり……おかげで……聖人と互角の勝負が出来そうだぜ」

「あ、ありがとうって……圭介、あたいの事……っ」

キスをしてしまったのはマズい事だが、本当にラッキーと言わざるを得ない。運よくサラマンダーを倒す事を考えていた俺自身も、ナイスタイミングだと褒めてやりたいぜ。

念じながらキスをした事により、俺に掛かっているリミッターが解除された。満身創痍で黙っているだけでも苦痛だったのに、今な

ら何でも出来そうな気がするぜ……。  
この感じ、この有り余るパワーに湧いてくる闘志……いいぜ、これなら勝てる！

「よし、待つてる　暮葉！」

そう叫びながら、俺は物凄い勢いでスターティングブロックすら使わず、大地を蹴って広大な空き地を走り始めた。ビュオツ！という凄まじい風を感じる。すげえ……コイツは、ロケット並の推進力があるかもしれない。しかも、その風圧に耐えられるこの肉体……。

今の俺の身体能力……ひよっとして聖人クラスかもしれねえぜ。

「何度も言っているであろう　効かぬのである！」

再び莫大な轟音と、あらゆる物を破壊し尽くす衝撃波が体に吹きつける。今度は衝撃波を喰らっても吹き飛ばさず、力むだけで衝撃波を受けても　その場から動きすらしなかった。

「あそこか……」

立っているのは……あの白と赤の服に筋肉質で、茶髪の厳つい顔の持ち主。爽やか中年と見せかけて実は硬派な傭兵である邪炎のサラマンダー。やっぱり立っていたか……アイツが倒れていない事はわかっていた。だから俺はここまで来たんだ、アイツを倒すためにな。

サラマンダーの他には3人の少女が立っている。両手に武器を構えた金髪の……って、あの人って確かアルファ隊の……一度顔を合わせて程度だが、間違いない。

アルファ隊の隊長　リーリヤさんじゃねえか。



他には同じく金髪の小柄な子で……あの子は知らないな。  
でも、もう一人……刀を構えた制服の女の子は……間違いなえ  
暮葉だ。

「いい加減理解せよ、ただの聖人よ。たとえ仲間と共に戦った所で  
結果は変わらん。私は聖人の力に加え、赤の軍神として精霊の力を  
持つ。二重の意味で聖人であるのだ」

「わかっていきますよ、と……リーリヤは不満をぶつけます」

「貴方、本当にクソ野郎ね。その程度の障害で アイリス達が退  
くと思うのかしら？」

「拙者達は絶対に諦めないのです！」

「ふん、精々足掻くがよい……ッ！」

まずい、リーリヤさんも暮葉も緑色のワンピースの子も……みんな  
ポロポロだ。サラマンダーにも多少傷が出来ているように見える  
が、三人がかりでもその程度の怪我しか負わない。

化け物だ……サラマンダーは本物の化け物だな。

そんな化け物の攻撃を、満身創痍の女の子達が避けたり防ぎきれ  
るわけがない。

まずいと思った俺。

しかし、頭で考えるよりも先に足が動き始めて

「暮葉アアアあああああああああああああああああああああああ  
ああああああッ……！」

咆哮と共に、飛び出した俺は硬く握り締めた右の拳を　　メイスイ  
に向かって突き出す。

ドゴン！　と、拳と金属の塊が激突した。

拳にジンジンという激痛を感じたものの、それが致命傷にはならない。流石……解放された俺の力はサラマンダーにも通用する。メイスイを拳だけで迎撃する事が出来たぜ……。

「…………ツ！？」

少女達の肉体を吹き飛ばし、単なる肉塊にするハズであった一撃を、弱いと思っていた俺の拳一つで防がれたサラマンダー。多分、サラマンダーのプライドはズタズタであろう。相変わらずメイスイを片手で握りながら、驚愕した様子で一步步後退りをしてゆく。

「けーすけ様あっ！」

「…………あ、貴方は…………？」

「ふ、藤島様……と、リーリヤは意外な人物の登場に驚愕します……っ」

続いて聞こえてきたのは少女達の声。それに反応した俺は、サラマンダーが攻撃してこない事を確認すると、口元を歪ませ、微笑みながら少女達のほうへ振り返った。

「遅くなっちまったな、みんな」

一言謝罪をいれると、柄を持ち替え、刀の刃先を後ろに向けた暮葉が駆け寄ってきた。

今の彼女は一言で現すなら、助けが来て喜んでるわけではなく

怒っている。

「け、けーすけ様っ！　なんで病院から抜けだしてきたのですかっ！？」

「決まってるだろ、そんな事」

えっ、と暮葉は言葉を漏らす。呆気にとられて、口をぽかんと開けている暮葉に、

「俺達は友達だろ」

本当はそれ以上になりたい。そんな気持ちが溢れ出てきて、今にも自分の意思に反してぼろっと言葉が出てしまいそうだ。それでも、そんな感情を必死に押し殺して、俺は言葉を続ける。

「お前がそうであるように、俺も友達の危機は見逃せねえんだよ」

それが理由だ。

そんな単純明快なことなんだ。

俺が　奴と戦う理由ってのは。

「今からお前を救ってやる……いや、お前だけじゃねえ。お前の仲間も……全ての人も！」

覚悟はとっくの昔に決まっている。

これは誰かが可哀想だからってわけじゃねえ……俺がやりたいからやっているんだ。

それが俺の　信じて突き進むべき道だからだ！

## 第244話 戦場へ行く男（後書き）

キャラクターNO021

・三原寅彦 みはらのりひこ ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ。

魔法（超能力）：ナシ。

知力：

敏捷性：

地位：

総評：天才的な頭脳と、脅威の身体能力を持つ天才科学者。

## 第245話 解放の力

火力発電所があったって、浅間部長からは聞いていたんだけど……  
： 本当にここに発電所があったとは思えないくらい、土地は荒廃していた。

ひどいもんだな……空襲後の都市の映像を見ているようだ。けど、さっきの俺や伊吹とサラマンダーの戦いでは、海浜公園がここまで荒れる事はなかった。一体、この土地でどんな戦いが繰り広げられていたと言うのだろうか。とにかく、死闘が展開されていた事に違いはねえ。

そして俺も　これから、サラマンダーと死闘を行おうとしていた。

「藤島圭介、分かっているのであるな……我が前に立つその意味が」

「さあな、だけどこれだけは言える……てめえは伊吹を傷つけた」

「伊吹……ふん、貴様の幼馴染か」

「そして今、てめえは暮葉の事も痛めつけていた」

「……つまり、何が言いたいのだ？」

「ああ、結局俺が言いてえのは一言　てめえだけは絶対に許せねえ」

びくん、とサラマンダーの体が反応する。

俺が言った事は、相手にとってはよっぽど意外な事だったのかも  
しれない。

齒向かう事すら馬鹿馬鹿しくなるような、圧倒的な力を持っているというのに、それでも怒りという感情をぶつけて　　齒向かうとする俺が目の前にいるから。

そんな俺は、サラマンダーがどう反応しようが止まらない。

「これがてめえのやり方だってんなら、てめえはここで俺が　必ずぶっ倒してやる！」

しかし、宣言を聞いてもサラマンダーの顔色は変わらない。むしろ、しょうもない事を聞いてしまった後のように、サラマンダーはつまらなそうにため息をついたのだ。

「愚かであるな……実力の差が理解できぬのか？」

「てめえが強いのは分かってる。正直、人の攻撃で死ぬかと思ったのは初めてだった」

「そうか、ならばなおさら　　私に挑む理由が理解できぬのだが？」

「実力差なんて関係ねえよ……俺はてめえがム力つく。だからてめえを殴るっつってんだよ」

感情ばかりの、ひよつとしたら虚勢だったかもしれない叫び声。でも、いいんだ。

それでもいいんだ。俺にはまだ、サラマンダーと戦う気があるのだから。まだあの強敵を前に齒向かう勇気が残っているんだから、その事実さえあればそれでいいと思っているんだ。

サラマンダーは左手を腰に当て、ふう、とつまらなそうに息を吐いた。

「よいのであるな？」

「上等だっつってんだよ……聖人野郎！」

「ふん……精々」

瞬間。

ズバアッ！ と、サラマンダーの足の裏で大爆発が発生し、

「足掻くがよいのである」

宣言と共に、轟！ と、火の海すら一瞬で吹き飛ばし、再び新たな火の海を生み出すような爆発を発生させたサラマンダーが、数十メートルもの距離をほんの一瞬で詰めてきやがった。

流石に胃の中から喉にかけて、ぞわりとして緊張が這い上がる。それでも、力が解放されると視力も向上しているのか、サラマンダーのバカみたいなきが 俺には見えていた。

「ッ！！」

ギリギリだった。

ものすごくギリギリで、判断が0.1秒でも遅れていればまずかった。でも、サラマンダーが横薙ぎに振り回した巨大なメイスを、俺は右へ跳躍する事でよけたのだ。

「おおおおおおおおおッ！」

そこで無意識に叫び、目を瞑って玉砕覚悟で右手を振り上げた。どこを狙って拳を放っているのかすら理解できていない、そんなしよつもない拳である。サラマンダーのような化け物相手に、こんな

捨て身の素人ナツクルが通じるとは、俺も思っていなかった。  
思っていなかったのだが、

ぐしゃり、と。聞きたくもない嫌な音と同時に、拳に鈍い感触を  
覚える。

恐る恐る目を開けてみると、サラマンダーの体が大きく後ろへ仰  
け反っていた。

「……………えっ?」

「う、ぐお……………ッ」

殴れた……………?

あのサラマンダーに右ストレートが入った……………ハハッ、なんだよ。  
解放モードってやっぱりすごいじゃねえか。さっきの戦いじゃ拳は  
届かなかったし、仮に届いたとしても、サラマンダーの手のひらで  
受け止められてしまっていた。でも、今は違う……………明らかに威力が  
向上している。

これなら 街の不良と時々やっていた喧嘩と変わりないぜ。

「ぐ、おおおおおおおおおおおおおおおッ!」

殴打を受けた衝撃で倒れ込んでいたサラマンダー。俺はそんな彼  
を見ると、仰向けに倒れていたサラマンダーの鳩尾を踏みつけよう  
と、叫び声と共に大地を駆ける。

「ぶ、んッ!」

しかし、

踏みつけようと飛び上がる前に、サラマンダーは倒れたままの状



態でメイスを振り、その攻撃を避けようと、俺は反射的に後退りしてしまった。

そうこうしている隙に、サラマンダーはメイスを突いて立ちあがったしまった。

「ここまで決定的な一撃を放ってくるヤツは久しぶりだ……その力、まさかとは思うが？」

「なんだと思っただよ、てめえは！」

「……ふん、そういう事が。やはり貴様もアレクサンドルの子孫……というわけか」

すると、サラマンダーは先程までメイスを右手だけで構えていたと言っのに、今度は左手も使って両方の手でメイスを構え始めた。と言っ事は……今までのアイツは本気じゃないってのか？

「ここからは遠慮はしないぞ。その身が聖人並の能力を誇る以上容赦はせん」

「上等だ、クソツタレがアアあああああああああッ！」

サラマンダーの筋肉が膨れ上がったように見えたが、俺には関係なかった。とにかくサラマンダーをぶん殴り、気絶させてアルファ隊にでも身柄を突きつけてやりたい。病院送りにされた伊吹の仇を討ってやりたい。そんな事しか頭にないので 何も考えずに俺は突っ込んでいたのだ。

瞬間、ガギイッ！ と。拳と金属が激突し合う莫大な音が炸裂する。

痛え……骨が砕けたかもしれねえ。で、でも……メイスは受け止

めたぜ。

サラマンダーは初めて、明確に驚愕した表情を浮かべていた……その直後、

「ぐ、オオおおアあああああああああッ!?」

ガクン! と。大きくサラマンダーが前へ動いた。それは自らの意思ではなく、何らかの衝撃で無理やり動かされ、体に激しい衝撃がかかっているかのようであった。拳をメイスに突いていた俺にも衝撃が伝わり、只ならぬ、じわじわとした痛みが伝わってきた。

まずいと思つて、咄嗟にメイスを体を離す。

その時、俺の瞳に映ったものは。

「藤島様、助太刀します、と。リーリヤは援軍として駆け付けます」

「き、さま……ッ?」

リーリヤ隊長が黄金色に輝く扇状の武器と、前回彼女と会った時にも持っていた、先端にジャラジャラと大量の装飾が装着されている杖状の武器が、サラマンダーの背中を殴打していた。

俺とは格の違う、聖人の一撃を直に受けたのだ。ダメージは大きいのだろう。

「天神無双木下流“天下統一”!」

「行け! 勝利の剣ツバキを握りし戦士よ!」

さらに、サラマンダーが怯んでいるその隙を突くかのように2人……いや、正確には1人の武士ともう1人の召喚獣のようなものが、咆哮と共にサラマンダーへ斬りかかった。

暮葉の刀は音速は軽く超えているだろう……って、その動きが見えている俺も、十分普通じゃないとは思うけど。とにかく、暮葉の斬撃をサラマンダーはメイスで必死に防いでいる。そんな必死のサラマンダーへ、さらに金髪オッドアイの少女が操る幻影が　勝利の剣を振り下ろしてきた。

「……ッ！」

咄嗟にメイスから左手を離し、離れた左手を勝利の剣へ伸ばす。

サラマンダーもやはりとんでもない化け物で、暮葉の攻撃を防ぎながら　なんと勝利の剣を握り締めたのだ。

しかし、

「……ッ!?!」

自分が間抜けである事に気付いた時には　既に時遅しと言ってもいだろう。

暮葉の攻撃は終わったものの、右手に持つメイスは防御で精一杯。一方、左手は金髪オッドアイの少女が操る幻影の攻撃から、自分の身を守る為の防衛で精一杯。さらに、そんなサラマンダーヘリーリヤ隊長が飛び込み、扇状の武器と杖状の武器を大きく振り回した。

サラマンダーは殆ど反射的に、メイスで二つの打撃を防いだ……しかし、やっぱりサラマンダーのほうが危機である事には変わりない。

「もきゅ　ッ！」

ただでさえ身動きが封じられていたサラマンダーに、さらなる脅威が襲いかかる。

暮葉が　サラマンダーの両足を拳で握り締めたのだ。

足を掴まれ、左右の手は開いておらず、その上、

「ついでに言いますと、今の貴方はリーリヤの魔女殺しの術式で、並の聖人レベルにまで魔力の出力が低下しています、と。リーリヤは今の貴方の状況について説明します」

「ま、まさか……体の調子がおかしいと思っていたが……ッ!？」

「少々効果が出てくるのが遅かったと思っっていますが……よしとしましょう。要するに、今の貴方はリーリヤ達では倒せなくても押さえつける事くらいなら出来るのです、と。リーリヤは補足説明します」

何がなんだかよくわからないけど、要はリーリヤ隊長の魔法に助けられたって事だな。

初めて、サラマンダーの額に汗が流れている気がする。目で見た分かるほどに、聖人に加えて赤の軍神の力を持つ化け物に小刻みに震えていた。

魔法で弱り、手段も自信も失った今のアイツは、怖い存在なんかじゃねえ。

「けーすけ様! トドメは、けーすけ様が刺してください!」

その言葉と同時に、俺はゆっくりと歩き始める。

キツ、と前方を睨むと、サラマンダーが俺からの攻撃から逃れようと、必死に暮葉達を振り払おうとしているものの、リーリヤ隊長の力が強すぎるようだ。弱っている上に、油断できない2人に襲われている今、圧倒していたハズの聖人さえ振り払う事が出来ないでいる。

動けない事を確認し、俺はシュダツ! と。

殆ど残っていない、カスのような力を振り絞って、

「歯を食いしばれよ、聖人」

体を封じられ、身動きが全く取れないサラマンダーの顔が凍りついた。

炎とは全く反対の 青く、寒い、絶望の色が浮かんでいる。

自信のじの字すら消え失せたサラマンダーに、俺は獐<sup>どうも</sup>猛に笑い、

「コイツが、伊吹をやってくれた 恨みだアアあああああああああああああッ！」

瞬間。

邪炎のサラマンダーの厳つい顔面に、俺の硬く握られた拳が突き刺さった。

ゴツゴツしている屈強な肉体も、解放された俺の力のせいなのかあるいは、リーリヤ隊長が彼の力を弱らせていたせいなのか、サラマンダーは勢いよく砂利の上を、手や足を乱暴に叩きつけられながらゴロゴロと転がっていた。

やがて、その動きは完全に止まり 邪炎のサラマンダーから力が失われた。

## 第246話 勝者の翌日

それは邪炎のサラマンダーを撃破した翌日の事。

邪炎のサラマンダーはアルファ隊に拘束された……らしいが、な  
んでもアルファ隊の不手際かサラマンダーが強すぎたのか、あの男  
……途中で拘束術式を破って逃げてしまったらしい。

どんな化け物だよ、と思いつつも……まっ、とりあえず一難は去  
った事だし、俺はようやく戻ってきた平穏な日々を満喫……はして  
いなかった。

それは何故かというところ……、

「お兄ちゃん！ いくら回復が早いからって、入院直後に脱走って  
どういう神経なの!？」

「あんた……結局、赤の軍神って何者なのよ？」

「それで、あの時けーすけ様は解放モードでしたが……誰とキスさ  
れたのですか？」

「はあ、結局俺は入院かよ………」

あたりまえだ、と突っ込んでくる暮葉達。

なにこれ……特に暮葉が怖いんですが。

さっきから誰とキスしたか迫ってくるんだけど、言えるかよそん  
な事……ここで言ったら葵や伊吹に殺されそうな気がするぜ。なに  
より、暮葉がさらに怒りそうで怖いよ。ただでさえ、伊吹には同じ  
アルファ隊に所属する人の回復魔法をかけて、伊吹の怪我は殆ど完  
治状態だと言うのに。

それに対し、俺は何の処置も施されず、結局狭苦しい病室に殆ど

監禁状態。

「……まあいいわ、私ジューズ買ってくるわ。あんたも何か飲む？」

「俺？ 大岩井のりんごで」

「それじゃあ、拙者はサイダーをお願いします！」

「そつ、じゃあちよっくら行ってくるわね」

「あつ！ お姉ちゃん、葵も付き合っよ！」

別に回復魔法をかけられて、殆ど完治状態とは言え……まだ伊吹の容体が不安定である事には変わらない。ここ数日は絶対安静、少しでも暴れば傷口が開いてしまうかもしれない。

その為、葵は伊吹を気遣ったの行動か、伊吹に付き添う事にしたようだ。

伊吹も葵も部屋から出てしまったが……って事は、まさか暮葉と2人つきりか？

お、おい……これってチャンスじゃねえか？

今までタイミングがないか探っていたが、中々2人つきりになれなかったし……ひょっとしたら今日はイケるかもしれない。頑張れ男、藤島圭介。チャンスがあれば攻勢に出るんだ。

「はあ……そういえば、結局サラマンダーって逃げちまったんだろ？」

「は、はいっ、その……リーリヤ隊長の魔女殺しの術式が解けてしまったみたいで……っ」

「って事は、またあの聖人はけものが襲撃してくんのか？」

「もきゅ……その可能性は大なのです……っ」

しまった、何となく当たり障りのない会話から初めて、そこから暮葉との2828イベント発動の予定だったのに……なんとというか、暮葉が完全に落ち込んでしまった。

いやいや、でもサラマンダー脱走って暮葉のせいじゃないような……？

「うーん……まあ、お前が気にする必要はないんじゃないのか？」

「もきゅ？ な、何故……ですか？」

意外な事を聞いたかのように、暮葉の目が見開かれた。

「別にさ、サラマンダーが逃げたのはお前のせいじゃないんだろ？ 確かにアルファ隊って組織全体では反省すべき事かもしれないけど、お前個人がそこまで深く気にする必要はないと思うぞ」

そこでわしゃわしゃと、俺は暮葉の髪を優しく、犬を可愛がるように撫でてあげた。

なんだろう、俺の中ではわんこなんだよね。暮葉を動物にした場合のイメージって。

「……ッ！？」

暮葉は一瞬びくん、と跳ね上がる。顔色も赤く、緊張の色の染まったが、すぐにガチガチに固まっていた顔や体はふにゃん、と気持ちのよさそうに力が抜けていった。



まるで、何年も飼っている哺乳類のようだな。

「もきゆう……これ、なんだかいいですね」

「そうか？ 気に入ってくれたんなら、もうちょっとやっけてあげてもいいぞ」

「はい、お願いしますっ」

即答な上に上機嫌。

よかった……もう、サラマンダーの事なんて気にしていないんだろっな。

仮にアイツが攻めてきたとしたら、また俺がアイツをぶん殴ればいい。解放モードになる為には誰かとキスをする必要があるけど、その相手は。。

って、まだそんな事が出来る仲でもねえか……。

「けーすけ様っ」

「なんだ？」

「ありがとうございます」

「……気にするな、礼を言いたいの俺のほうだよ。暮葉がいなかったら俺、多分今頃サヴィエトの牢獄にいただろうから……ありがとう、暮葉」

えへへ、と笑いながら、暮葉がゆっくりとベットに上がってくる。白い、独特の匂いを放っている病院の布団に体を入れて、暮葉は俺の右半身に凭れかかっていた。

丁度肩のあたりに、暮葉のふにやりという、柔らかな感触の頬が当たっている。何とも言えない衝動に駆られた俺は、左手を暮葉の右の腰へ持つていく。

左腕には暮葉の温かさ、丁度暮葉のお腹が当たっている。鍛えているので引き締まっているけど、やっぱり女の子のお腹は柔らかいんだな。

そして、残った右手は暮葉の背中に回し、そっと、ゆっくりと撫でてあげた。

ていうか……あれ？

これって、リア充がよくやるキスの体勢じゃないか？

暮葉はふにゃん、と。目を細めてうつとりしている様子だが……ええっ、ひよっとしたらこれって本当に行けるんじゃないだろうか？こ、ここで引いたら男じゃないよな、俺……男なら行くべき、だよな？

「……暮葉」

「なーに、けーすけ様？」

このやりとり……間違いない、まだ俺達正式ではないのだが……俺は確信した。

これは その正式まで辿りつける。

「俺、暮葉の事が」

「木下がどうしたというのだ、藤島」

暮葉木下暮葉木下藤島……あれ？



「うるさい！ 女遊びも程々にしておけ、この変態藤島あつ！」

「ぎゃあああああああああつ！？ にゅ、入院しても不幸だあああああああああつ！」

その後、俺がどうなってしまったのかは……思い出したくもないのであえて言わない。

ただ、海の藻屑もくず同然の状態となったのは、言うまでもないだろう。ちくしょう……結局告白失敗した、不幸だ……。

## 第246話 勝者の翌日（後書き）

キャラクターNo022

・硬質（じょうしつ）のノーム ×10が最高、ナシは無能（むにょう）という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：身体能力はシルフと同等レベルだが、土の精霊の力を掌（つかさど）るだけにやはり手強い相手。

## 第247話 さらなる騒乱へ

私は敗北し、そして捕虜となったのだ。

しかし、私には拘束されている暇などない。あの子が待っているのだ……ロシアというこの世界の国で、人を救っても誰にも見向きもされなかった あの子が。

「さ、サラマンドー！」

ここはロシアのイルクーツクにある、サヴィエトが建てたという宮殿の近く。おそらくこの国の宗教なのだろう、教会が丁度私の眼前に聳え立っていた。不思議であるな……まるで、ロジーナ正教の建物のようだ。いや、殆どそのまま……一体この世界というのはどうなっている？

まあ、そんな事より……今、私に声をかけてきたのは小さな少女である。

「リリアであるか」

「う、うん……私はリリアだよ」

アリーナの唯一の友人……とは言うが、気になる所である。何故、このような善良な人間が友人であると言うのに、アリーナという人物だけが邪悪に染まっているのか。

長年の疑問だ。このリリアは何故 あの子の邪心に満ちた者と行動を共にしているのだ？

「その怪我……」

「敗北は誰にでもある事だ。準備を整え次第、私は再び藤島圭介の所へ向かう予定である」

「ま、まだ……やるの？」

「当然である。主の命令に従い、報酬を貰う……それが傭兵であるのだ」

しかし、サヴィエトもおかしなものである。総有主義という思想を基軸としながら、何故我々赤の軍神や政府上層部は特別待遇なのだ。矛盾しておる……これではまるで、貧乏人から金を巻き上げて我々だけが、金持ちの生活を満喫しているだけではないか。

間違っているな……やはり。

金というものは、その者の努力に見合った分だけ払われる。

努力さえすれば貰える金は増えて行く、そういうものであるように……やはり、この総有主義は個人的には間違っていると思う。そして何より この組織そのものが最も間違っている。

藤島圭介、彼を拘束した後に 組織そのものを潰すべきである  
うか？

そろそろ考え時であるな……。

と、私が考え事をしていたその時 一つの足音が聞こえてきた。

「貴様が負けてしまいますとは連中、中々の腕っ節みたいですね……風剣も硬質も敗北し、邪炎の貴様まで敗北してしまいましたとは……久々にアドレナリンが沸騰してゾクゾクしてきましたわ」

イルクーツクにある教会の近くに響く、びちゃびちゃと、雨も降っていないというのに水溜りを歩いているような、不思議な足音を立てて近づいてくる女の姿。

来てしまったか……思わず、私は嫌な顔を浮かべてしまった。

「聖波せいばのウンディーネ……貴様は確か、同志レニナより待機命令が下されていたはずだ」

「相変わらず貴様に笑顔はないのですね、つまらない男ですわ」

クールな雰囲気、歳は先程交戦した藤島圭介と同程度の少女であろう。私よりも圧倒的に年下でありながら、それでも赤の軍神を束ねる頂点のような存在。

「貴様は何を企んでいるのだ？」

「朕ちんの目的を聞いてどうするつもりですか？ 貴様は所詮朕の手下でしょう、まさか反逆などと言ってくだらない事を考えているおつもりならば、朕は貴様の炎を消火してさしあげますわよ？」

「相変わらず、おかしな喋り方をする女だ……現時点で貴様に反逆するつもりはない」

「そう、それなら一応安心できますわね」

生意気な子娘であり、それでもって不可解極まりない小娘である。この女、ウンディーネは何故か年中髪の毛が濡れている………それどころか、全身が年中濡れているので、服まで年中びしょびしょだ。ここまで年中濡れている女は今までに、実例も単なるうわさ話でも聞いた事がないぞ。それに、この女には色々謎が多い。

ここにいる、アリーナの友であるリリアでさえ この女の素性を知らないのだ。

「で、貴様は何を企んでいると言うのだ」



「風剣のシルフの風の魔術も、硬質のノームの大規模震災術式計画も、そして圧倒的な力を持つはずの貴様ですら、その計画は悉く失敗に終わっていますわ。貴様はまだアレクサンドルの子孫という、イレギュラーな存在と交戦するおつもりようですが、果たしてそれは有意義な事なのでしょうか？」

確かに、手段という手段を敵にぶつけた事は確かであり、あらゆる手段を行使しても敵を屈服させる事は出来なかった。その点では、これ以上こちらに手段がない事は確かである。

だが、納得いかないのである……聖波のウンディーネよ。

「結局貴様の考えている事が良く分からぬのであるが？」

「これだから脳筋は嫌いですわ。ですから、朕はこう考えていますわ」

青色の濡れた長い髪を靡かせながら、

「アレクサンドルの子孫なんて、どうでもいい存在なんですの」

な、に……と。私も隣に佇むリリアも息を詰まらせていた。

言葉どころか、単語の一つ一つが理解できぬ。何故だ……あれほどのイレギュラーな存在をどうでもいいの一言で済ませてしまう、その腐った感覚は一体どこから……？

「な、なんで……？ あ、あの人は重要！ ……だと思っただよ？」

「ふふふ、リリア……そもそもアレクサンドルの子孫の回収を提案したのは貴様ですわよね？ それが何の為であるか、貴様自身がよ

くわかつている事だと思えますが……」

「なんだ、と……藤島圭介の回収指示を下したのは、アリーナではなくリリア……？」

「それでは、リリアは何の為に藤島圭介の回収を指示したのであるか……？」

「私は……ただ、アリーナに元に戻ってもらいたくて……っ」

「元に戻って……リリア、それはどういう事であるか？」

「そ、その……アリーナはね、本当はああいう人じゃないから……その」

アリーナという人物は何度か顔を合わせた事があるのだが、まさに氷の女王という名がピッタリの冷徹な小娘であった。だが今、リリアの口から放たれた ああいう人ではないという言葉。

それはつまり、アリーナ本来 あのような人格ではない……という事なのか？

「もしも、そうだとすれば一体、あの小娘には一体何が……？」

「私がそんな事を考えていると、眼前でウンディーネが冷たく笑い、

「そう、要は貴様の勝手な都合で、アレクサンドルの子孫を狙っているのでしょうか？」

「か、勝手な都合……じゃない！ アリーナの……アリーナの為にやっってるんだよ！？」

「そこまでして、貴様は友人を元の姿に戻したいんですの？」

「あ、あたりまえ……だよ。私は……アリーナの親友だから！」

そう、とウンディーネは軽い口調で返事をする。リリアの必死の叫びを何とも思っていないのである。そして、ウンディーネの口から放たれた言葉は

……。

バゴン！ という壮絶な音が炸裂する。

それは、リリアの背中が 教会の門に激突した音であった。

「あ、が……あ……ッ？」

もはや言葉を発する余裕もないのだろう……朦朧まごころとしているであろう意識の中、リリアは辛うじて声を発していた。瞳も虚ろであり、今にも消えてしまいそうな少女の魂。

何故、あのような善良な娘が……友人思いの良い子がこのような目に……？

単に友人の事を心配し、やり方はどうであれ……その為に藤島圭介を回収し、何らかの目的を果たそうとしていた、神の子も関心するであろう、そのような娘を……我が前に立つ小娘は。

「貴様……ッ！」

「おや、朕に敵意を向けるとは……自殺するおつもりですか？」

「……ふん、それは貴様にも言えている事だ。我が前に立つ意味が理解出来ぬのであるか？」

今の私にメイスはない。あのメイスは日本での戦闘で紛失してしまっただが……武器が無くても必要があれば戦うという者が兵隊であ

る。私は拳を構え、ウンディーネの顔を睨み付ける。

「それでも、格闘技の心得はあるのである。」

「言い返しますの。貴様のほうこそ　朕に齒向かう事の意味を理解していませんか？」

「……ふん、貴様は単なる人間だ。出来る事には限度があるだろう」

「そうですね……朕は確かに人間。故に本命を行使出来る時間も限られていますわ」

「限れた強さなど、強さのうちに入らぬぞ」

限られた強さしか持っていなかったからこそ、私に及ばなかったアルファ隊の聖人もいたくらいである。そんな強さは強さのうちに入らない……即ちウンディーネは知れたもの。私は手のひらをウンディーネの顔へ向ける。丁度、視界に自分の手のひらが入り、ウンディーネの顔が隠れた。

手のひらに凄まじい熱を感じるが、火の精霊の力を持つ私には大した熱には感じない。

「しかし、これだけは忠告しておきますわ」

「何であるか、ただの人間よ」

「そうね」

ウンディーネが軽い口調で喋り始めた。

そこで私は、信じられないものを目にしてしまつ……そう、本当に信じられん。

ウンディーネが今、この場で行っている事が 人間技ではなかったのだ。

「満身創痍の聖人如き、朕の敵ではないのですの」

その瞬間、全てが消失した。

私の目ですら、ウンディーネの全身が青白く輝いた事以外は確認出来なかった。次に目を覚ました時には既に、近くにあったハズの教会が吹き飛んでいる。いや、それどころか……イルクーツクの街が半分ほど、吹き飛んでしまったのではないかと思うほどに 荒廃していたのだ。

それも、私も含めて瓦礫も何もかも、全てが水浸しの状態であった。

「これ、は……ッ!？」

「朕は水に帰れば魂を失うんですの。それを恐れているからこそ、朕は水そのものを掌つかさる事によって 聖人さえ玩具おもちゃのように扱える力を手にしましたわ」

なんとという理由であるか……それは精霊ウンディーネの事であり、貴様のような小娘の話ではないのである。そんな事はともかく、私はとある事が気になって仕方が無かった。

リリア。

彼女は一体、先程の爆発的な水の後 どうなってしまったのであるか？

「……ッ!？」

「無駄ですわ、今の貴様は日本での戦闘で満身創痍。増して、朕の

属性と貴様の属性とでは、貴様の属性では明らかに分が悪い。相性最悪の攻撃を直に受けて、貴様が無事であるはずがありませんもの」  
確かに……現状の私では、これ以上の戦闘行動は不可能であるな。  
しかし、ウンディーネの目的を聞かねば。  
そして、その目的次第では　この小娘の暴走をこの場で止める必要がある。

「二つ、聞かせてもらおう……一つ目は、貴様は何者であるか？」

「朕は聖波のウンディーネ……この世の7割を占める水を掌る精霊にして、赤の軍神の頂点である自然を極めた波の乙女ですわ。その起源は妖精の書で提唱した時より遙か2000年前、朕の親が流した涙によって、星気面という精神世界で生まれましたわ」

即ち、人間が語り継いでいるウンディーネよりも、起源は遙か昔であると言うのか。

それは面白い事を聞いたな……それでは、そろそろもう一つの質問をしようか。

「二つ目は、貴様の目的は何であるか？」

「朕の目的は単純明快。現在、アリーナ・ウラジミール・ロヴナ・レニナの体を借り、魔力を回復させている魔族の皇帝を復活させ、その肉体の入手が朕の目的ですわ」

「魔族……皇帝……？」

「知らないとは言わせませんの。貴様も御存知でしょう……我がサヴィエト亡命政府の赤軍は、魔族や妖怪を兵隊として運用している

部隊が存在している事を」

そういえば、そういう野蛮な部隊が存在している噂を聞いた事があるな。まさか、その噂は本当だったというのか。ウンディーネの目的は、もはや藤島圭介という次元を越しているのか？

この女は、一体どういふつもりで魔族の力を？

「それは、アリーナが皇帝カイザーの力の一部を使用できる。いえ、アリーナの人格そのものが皇帝カイザーのものだからですわ」

「……洗脳、であるか？」

「似たようなものですわね。正確には乗っ取りというヤツでしょうが……とにかく、朕にとってアレクサンドルの子孫はどうでもいい存在。いえ、むしろ朕の野望達成には不必要な存在ですの。不必要だからこそ、誰かが手違いで彼を殺してしまうという、最高の展開を望んでいましたのですが……残念ですわ。誰も殺してしまうどころか、逆に敗北しているではありませんか？」

そうか、そう言う事であったのか……聖波のウンディーネ。貴様が我々、赤の軍神が藤島圭介を標的とした際、何も言わずに笑顔でいた理由は、そういう事であったのか。

つまり、我々は踊らされていた。この小娘の思惑通りに動いていた……そして、敗者となった我々は既に用済みであり、この小娘にとっては不要な廃品であると……笑えぬ冗談だ。

何処までもふざけた小娘である。

まさか、野望達成の為に、魔族の皇帝カイザー復活を目指しているとは。既にそれだけで、神に対する反逆……許せぬ愚行である。

「既に革命の準備は出来ていますわ」

「革命……?」

「ええ、朕はこの世界の人間を利用しますわ。サヴィエトも所詮、朕の目的達成の為の手段ですし……とりあえず、サヴィエトの思想に合わせて この世界の旧ソ連の残党を利用させてもらいますの」

「それで革命を起こすつもりであるか……歴史の逆行であるな」

「革命を起こし、新生ソビエト連邦を建国。それが朕の目的の第一歩になりますわ」

「ロジーナだけではなく、こちらの世界の国まで巻き込むつもりであるか……ッ！」

「だから何だと言うのですか？ 所詮、この世界の人間が苦しむだけの話ですの」

この女……芯から腐っているのである。

これで私も決心した……私はサヴィエトを離反する事にする。

そして、何が何でも 聖波のウンディーネの暴走を止める事にしました。

「……残念であるが、貴様の野望は叶わん」

「何故ですの 死にぞこないの貴様に何が出来ますの?」

「宣告しよう、貴様の息の根は必ず私が止めてやる」

「……上等ですわ、執行猶予を与えましょう……9月30日に決起



しますので、ロシア政府を転覆する前に朕を食いとめてみなさい。  
それまで怪我人との勝負は　お預けいたしますわ」

セリフを吐き捨てたウンディーネは、私に背を向けた瞬間　ゴ  
バアッ！　と。巨大な水の球体を魔術で精製し、その中へ、発車ギ  
リギリの車両へ飛び込むように身を投じる。ウンディーネを包み込  
んだ水の球体は、完全な球体になった後に　音速を超える速さで  
ロシアの空へ姿を消した。

私はただ、歯を食いしばりながら空を眺め　敗北の屈辱を味わ  
っていた。

聖波のウンディーネ。

赤の軍神の頂点は　どうやら強敵のようであるな。

「はん。立派な決心ねえ？」

声が聞こえた。

後ろへ振り返ると、リリアを抱きかかえ少女が立っていた。

風剣ふうけんのシルフ。

「私の心まで熱くなってきたわ。アンタ、やっぱりいい面構えして  
んじゃない？」

「……シルフ、怪我と魔女殺しの後遺症は治ったのであるか？」

「はあ？　アンタにしては力が入ってない声ね。治癒は終わった。  
風剣ウインドソードの修理が終わって、後は再び魔装具としての能力さえ持たせち  
まえば　私はいつでも出撃可能よ」

「その子は……リリアは無事なのであるか？」

「私さあ、不完全な状態で魔術使ってこの子助けたのよねえ？」

「つまり、命に別条はないのだな」

「はん。そういう事よ」

風剣のシルフは他人を救う事を恐れている。それをかつて行つたからこそ、彼女は周囲に見放されてしまい、孤独な一時を過ごしていた。そんな世界を根底から変えてやりたいからこそ、態々赤の軍神に所属し、シルフという精霊の力を手にしたのである。

そんな彼女が親友を助けた一件以降　初めて他人を救つたのだ。これは彼女にとって、大きな一歩であろう。

そして、シルフの自信は決して折れない。

「さて、サラマンダー。当然アンタ、私に付き合ってくれるのよね？」

「……付き合つ？」

「決まってるでしょ。一緒にあの　　<sup>クンファマ</sup>　　ウンディーネを殺しちゃおうよ」

うつすらと笑いながら、シルフは宣言する。

「……当然だ、手を組もう　　風剣のシルフ」

「ええ、アンタだけは頼りにしてるわ　　邪炎のサラマンダー」

そして、私とシルフは同盟する。

全ては救いの為。  
そう、諸悪の根源

聖波のウンディーネ殺害の為に……………。

## 第247話 さらなる騒乱へ（後書き）

キャラクターNO023

とくがわいえのり

・徳川家則 ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ。

魔法（超能力）：ナシ。

知力：

敏捷性：

地位：

総評：【殺しのプロ】と呼ばれていただけに、身体能力の高さは三原並み。

## 第248話 ヌイギリスへ

ここは日本から遙か遠くにありながら、日本と同じく島国であり、かつては7つの海を支配したという輝かしい歴史を持つイギリス。その首都であるロンドンの郊外には、本初子午線の通る旧王立グリニッジ天文台の建物が残されている。

1990年代にケンブリッジに移転して移行、観光客以外にここを訪れる者は、精々施設の整備を訪れる人など、専門職の者くらいしかないであろう。

しかし、今日のグリニッジ天文台は何処か不自然であった。敷地が完全に封鎖され、建物の中もカーテンなどで完全に隠されているのだ。

「不気味な光景であるな……」

私 邪炎のサラマンダーは、来るべき聖波のウンディーネとの最終決戦へ向けて、シルフと共にイギリスにあるグリニッジ天文台へ訪れていた。

ここに我が敵 聖波のウンディーネの息がかかっている組織が存在しているのだから。

「しかし、ウンディーネクンアマもよくやってくれるわねえ？」

「全くである。我々への対策か この世界の暗部にまで手を出そうとはな」

「しかし同時に馬鹿でもあるわ。私達って元赤の軍神でしょ？ こちの世界の魔術師なんか敵じゃねえつつつてんのよ」

私とシルフはサヴィエトを離反し、本拠地を求めて英国を訪れたのだ。それは私もシルフも元々はウエセックスの出身であり、この英国がウエセックスに相当する国家であるからだ。

要するに、この土地は我々の故郷に似ている故 非常に過ごしやすいのである。

ところが、ウンディーネのヤツも準備が良いのである。

我々が英国へ訪れる事を察知していたのか、大層な連中を用意していたのだ。

「魔術結社か……」

「天文台跡を本拠地にしてるって、こっちの魔術師は何考えてんのかしらねえ？」

「秘匿性は低いが見晴らしがよいのであろう」

「けど、敵襲されやすいんじゃないのお？ ま、何重にも防御結界を張っているみたいだケド」

「それだけ自信があるのであろう。己の魔術の腕前にな」

魔術結社、我々の世界 レムリアにもそういうものはあったな。私も傭兵時代、魔術結社に雇われる事もあれば、魔術結社を潰す為、女王陛下本人に雇われる事もあった。レムリアの魔術結社は統一性がなく、どれも独自の路線で進んでいたが……どうやらこちらの世界の魔術結社は違ってみたいであるな。

昨日英国を訪れて以降、2箇所ほど魔術結社を解散に追い込んだのであるが……どこも似たような形式の魔術を行使し、結社名も似たり寄ったりであった。

聞くところによれば、彼らはとある魔術師の事を尊敬しているよ

うだ。

アレイスター・クロウリー。

こちらの世界では有名な魔術師らしく、その実力は50人束になっても勝てぬほど。

「しっかし、連中が尊敬するアレイスターって野郎、どんなヤツなのかしらねえ？」

「アレイスターは既に故人である。既にこの世に存在しない人物の事を気にした所で、状況は一向に好転しないであろう」

「まっ、確かにそうねえ。とりあえず、魔術結社ってあと何社なワケ？」

「把握している結社数は15。そのうち、10社はレムリア人討伐を掲げている」

「異世界人は邪悪……ねえ。まっ、どーせウンディーネの働きかけのせいなんでしょうけど」

「全く、我々にとっては迷惑な話である」

そして、眼前のグリニッジ天文台跡は、とある魔術結社の魔術要塞である。一見小型であるが中々上手い防御術式が張り巡らされている。

おそらく、戦車砲で砲撃しても、戦車砲の砲弾が砕け散ってしまふであろう……この世界の魔術師も少しは出来るようだ。最も、私やシルフと互角に戦えた者はまだ居らぬが……。

「さて、そろそろ……この魔術要塞を破壊するでしょうか」

「破壊しちまえば連中も、私らに気づいて地下から湧いてくるでしょ」

「天文台なのに、天文台の建物ではなく、地下に本拠地を築くとは……奇妙であるな」

まあよい……そんなことより、早急に魔術結社を潰してやろう。我々の行動には魔術結社は邪魔以外の何者でもない。  
シルフの復活した風剣。ウインドソード  
そして、私の新たな武器で 邪魔者を破壊し尽くすのである。

リーリヤ・コステイリナ Side

さて、困ったものですね。

リーリヤは現在、長野県の松代大本営跡地に置いた日本支部にてある問題が発生したせいで大忙しなのです。おかげで、今週のイツ Qが見れなかったじゃありませんか……。

ですが、仕方ありませんね……そうも言っていられない事態が発生しましたし。

これは、こちらの世界で活動している 全レムリア人の危機ですから。

『リーリス・コステイリナ。魔術結社問題はどうなった？』

「ヤコフ・ベリチュコフ……徹夜で作戦を練りましたと、リーリヤ



は目を擦りながら答えます」

『て、徹夜とは……ご苦労だった』

聖杖ジェーブルにペタリと貼つてある、通信用の護符が光り輝いています。これは現在レムリアでお酒を飲んでいるであろう、連邦特殊情報総局の局長と通話を行っているからです。

本日は9月20日。

6日前の邪炎のサラマンダー問題については、ひとまず安心という所でしょう。

確かに彼は逃亡を図り、実際に隙を見て逃げ出してしまいました。しかし、諜報員の報告によりますと、その後の彼の活動はあまり聞かされておりません。

ただ一つ、不確実な情報がリーリヤの耳に入ってきました。

邪炎のサラマンダー、及び風剣のシルフの離反。

それが本当か、まだわかりませんが……確かにそんな情報は入ってきました。風剣のシルフと邪炎のサラマンダーがサヴィエトを離反し、2人で行動を共にしているという情報です。

しかし、誤報の可能性もありますし、今後……調べていく必要がありますね。

ですが、今はそんな事よりも

「昨日から活発化している魔術結社討伐には、こちらも特隊員の派遣を検討しています、と。リーリヤは作戦要綱を伝えます」

『なるべく、行動が表にバレないような頼む。おそらく我々の存在がバレてしまえば、世界は我々よりも魔術結社側の味方をするだろう』

「ですが、敵の魔法使いも中々の使い手です、と。リーリヤは忠告します」

『短期決着は不可能なのか？』

「サヴィエトの件もあります。国内の警備を手薄にする事にリーリヤは反対です、と。リーリヤは己の考えをぶつけてみます」

『確かにそうだな……こちらも、装備の提供くらいならすぐにも行える』

「ありがたいです、と。リーリヤは素直な気持ちを伝えます」

しかし、どうしていきなり魔術結社が暴れ始めたのでしょうか。それも、レムリアの魔術結社ではなく、こちらの世界の魔術結社が我々レムリア人を害悪だとしています。そもそも彼らはどのようなルートでリーリヤ達の存在を知り、そして害悪であると決めつけたのでしょうか？

総局の方と連携して、詳しく調べてみる必要があるそうですね……。

それから今後戦闘を行うのですし、彼らについても調べる必要がありますね。

例えば、彼らに魔術を教えたと言われる、この世界で最強の魔法使い。

アレイスター・クロウリー。

彼がどういう人物か。

彼がその後の魔法使いに与えた影響。

既に故人であるハズの彼が 最近日本の長崎で目撃された未確認情報の確認。

「予想よりも、大事になりそうですね、と。リーリヤは一人呟きます……」

さて、リーリヤはやるべき事をやった後 長崎へ向かいました。

アレイスター・クロウリー。

対魔術結社戦と並行して 彼の生死をリーリヤが突きとめてやります。

## 第248話 イギリスへ（後書き）

キャラクター No.024

・ 沢那魅咲 さわなみさき ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ。

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：身体能力も高く、上位の西園寺に勝てる可能性を秘めているが、油断しがちで本来の実力よりも弱いという、残念なタイプ。

## 第249話 平穏な一日

9月20日。

丁度1週間前……いや、微妙に1日多いような気もするが、1日は24時間。168時間に24時間を足した所で大差はないだろう。今から1週間後、3日間日程で行われる、修学旅行を前に初芝高校の一大イベントが控えている。3日間もかけて行われる 大規模なイベントが。

そして、今週の俺こと藤島圭介は気分がいい。それは何故かと言うと、

「つかさ、体育祭ってテンション上がらね？」

「圭介にしては珍しいね、行事に関心を示すだなんて」

「そういえば僕の記憶だと、圭介って去年も体育祭は張り切っていたよな」

「ひょっとして、圭介って脳筋キャラなのかな？」

「重原……てめえ、わかってねえな」

だって、体育祭ですよ体育祭？

陸上競技はもちろんのこと、球技や近所の神社の伝統でもある綱引き。さらに陸上競技の一種ではあるものの、地域活性化も目的の一つだったりする借りもの競争がある。種目は多種多様で一人最低二種目は参加する必要があるが、俺にとってはそんな事はどうだっていい。

ぶっちゃけ、運動するのは面倒臭い。

でも、体育祭だぜ？

体を動かせば体温が上がり、必然的に薄着になる……つまりだな。

「女の子が薄着になるだろうが！」

「なっ！？ け、圭介……お前、まさか……体操着に萌えるタイプだったのか！？」

大吾が思いつきり後退りし、驚愕した様子が叫んでいる。

「今更驚く事じゃねえだろ！ これでブルマーだったら文句はねえよー！」

「確かに……これが二次元だったら、僕もウハウハじゃねえか！？」

「運動している女の子かぁ……確かにいいよね、汗ばむ女の子って何かいいよね」

「そうだろうそうだろう、と俺は2人に同意を求めようとしたが……その必要はないな。」

2人とも、どうやら自分で気付いたようである。

スポーツ少女がいかに素晴らしい存在であるかに！

「マジで黒ちゃん！？ それマジな話！？」

「大マジだ！ 今度の体育祭 二人三脚あるんだぜい！？」

「おお！ って事はアレかい、上手くいったら女子と当たるんやな！」

「巨乳の子と当たつたら　いいねいいね最ツ高だねエ！」

黒木が一方さん化する……ていうか、アイツらも体育祭楽しみにしているんだな。しかも楽しみにしている理由が、若干俺と被っているって……。

まあ、仕方ないよね。俺も黒木も男なんだ……ポロリとか、ラッキースケベとか、薄着で汗ばみながら運動している女子とか。期待しないほうがおかしいぜ……。

なんせ、俺らは健全な男子高校生。

男、いや　人間はみんな変態だから仕方ないんだ！

「けど、体育祭って実際大変だよ？」

「そうだなあ。全員、皆が見てる前で戦うんだぜ？　僕みたいなインドア派は恥かくだけだね」

「俺もねえ……格闘技の大会みたいなのがあれば、優勝する自信はあるんだけどねえ」

そうだなあ……。

大吾はオタクの完全インドア派。100メートルを走らせた時のタイムは、体育教師が我が目を疑うほどに遅いし、実際去年の体育祭じゃ使い物にならなかつた気がする。重原も、身体能力は高い上に頭もそこそこのいいのだが、重原が得意なのは格闘技のみなのだ。

それが球技や陸上競技となれば話は別。

そして俺も、部活は文化系でスポーツに関しては素人だし……。

「でも、圭介ってトレイルランで1位取ったじゃないかい？」

「ああ、あれってまぐれじゃねえのか？」

「まぐれで取れるんだったら、僕なんてまぐれで二次元の世界に行けるぞ？」

「圭介は陸上競技に参加すればいいんじゃないかな？」

「陸上競技ねえ……」

いつそ体育祭の種目でありながら、古宇坂市主催の借り物競争にでも参加しようかな。

ただ、その借り物競走……噂だと滅茶苦茶難易度高らしいんだよなあ……。

ああ、困った……ていうか、一週間前なのに出場種目が決まっていないって……。

まあ体育の授業で、球技や陸上など、ある程度の事はやったけどな。

「……はあ」

「鬱だ……」

「体育祭、つまらなそうだね……」

結局、俺達野郎共は女子の体操着姿にしか目がない。つまりどういふ事かと言うと、体育祭自体にはさほど興味がない……というより、面倒臭くて結構憂鬱であった。

そして放課後。

大吾も重原も帰ったようだし、今日は部活の活動日でもない。そういうえば、さっきまでいたハズの暮葉すら見掛けないのだが……暮



葉のヤツ、一人で帰っちゃったのだろうか？

現在、校内に残っている人は、体育祭に向けて練習中の人か部活やってる人くらい。

先生に説教され、こんな時間まで残っているヤツは多分、俺だけだろうなあ……。

「はあ、まさか2日入院していた事で怒られるとは……」

邪炎のサラマンダー。

赤の軍神の一人にして、聖人でもある化け物だ。アイツとの戦いで多くの人が傷つき、しかも俺が入院後、暮葉の機嫌が悪かった為に回復魔法をかけてもらえず、結局俺は病院での治療と自分の回復力のみで復活したのだ。しかし思いのほかダメージが大きく、完治に2日もかかってしまった。

元々成績の悪い俺にとつて、2日の欠席は大打撃以外の何者でもない。

ただでさえ、テストの成績が悪かったのだ。

怪我による入院は仕方ないが、あまり無茶はするな……と、先程説教されたのだ。

「無茶って言われても……」

仕方ねえだろ、サヴィエトは俺……いや、暮葉達の事だって狙っているんだ。戦わなかったらもつと悲惨な結果を招いちまうだろ。そこで無理をしなかったら 負けてしまっただろ。

しかし考えてみれば、俺……無茶をしないと戦えない程度なんだよな。

サラマンダーはアルファ隊に掴まっていない。また襲撃してくるかもしれない。

サラマンダーだけではない。赤の軍神はもう一人残されている……

…。  
「そのままじゃ……ダメだよな。」

「……ッ」

拳を握り締め、窓越しの秋空をぐつと睨んだ。

強くなる必要がある。そんな事はわかっているんだ……わかって  
いるんだけど、一体どうすれば強くなれるんだよ。格闘家に挑んだ  
事もあったけど、練習にすらならなかった……。

どうやら、俺は既に普通の人よりは強くなっているらしい……が、  
それでも、邪炎のサラマンダーには勝てなかった。ああ……こんな  
時に聖杯でもあればなあ……聖杯戦争。

うん、やっぱりサーヴァントは女の子タイプがいいよね。

って、f t eの話している場合じゃねえだろ……。

「はあ、ホントに聖杯とかあったら、サヴィエトとか敵じゃねえの  
になあ……」

「サヴィエトがどうしたんだ？」

え……やべえ、つい独り言を言っていたら誰かに聞かれた……っ  
て、こ、この声？

一瞬ヒヤリとしたが、聞き覚えのある声だったので、俺は首だけ  
左へ向けた。

「あ、明智？ あと……」

「……なによ？」

凜々しく佇む我が校の風紀委員 明智凧紗。

その横に、むすつ、と。不機嫌そうにこちらを睨んでいる少女が立っている。

「い、伊吹？」

「うん、こうして藤島と話をするのは久々な気がするぞ」

「私も、なんかあんたと会話をするのは久々な気がするわ」

いや、お前ら病院にいたじゃん……。

伊吹は病室違ったけど、明智……お前は俺をボッコにしたハズだぞ？

そのせいで俺、無駄に入院期間が延びただけ……約24時間くらい。

「……んで、何か用か？」

「それはこっちのセリフだぞ」

「そうよ、あんた……悩みでもあんの？」

「悩みつつわれても……」

悩みねえ……ていうか2人とも、やっぱりさっきの独り言を聞いていたんだな。

「……大丈夫だ、わかっている。無理に話さなくてもいいんだぞ」

「えっ？」

「サヴィエトの事だろ？ もちろん、私だって黙ってはいないぞ」

明智が言いながら、俺から視線を逸らし、なんだか微笑みながら空を眺めている。しかし俺には明智の言葉の意味がわからない。明智……結局、何が言いたいんだ？

「圭介、私も風紗もあんたや暮葉の事情やサヴィエトの事とか、大体の事は暮葉から聞いたわ。私らなんかで力になれるかわからないけど、でも私らはあんた達の味方だから」

「な、なんだよ急に？」

面と向かって味方宣言されたら、その……恥ずかしいじゃねえかよ。

「なんだよって……言葉のままだぞ」

「そうよ、後ろは任せなさいって言ってんのよ」

「だから藤島、戦うなどは言わないぞ。どうせ言ってもお前は絶対に言う事聞かないからな」

「そういうわけだから、あんたは突き進みなさい。私らはあんたの背中を支えてあげるから」

……わかったぜ。

ようやく、伊吹と明智が何を言いたいのかがわかった。それがわかったからこそ、芯から温かくなったような感じになったよ。

「　　ありがとう、2人とも」

伊吹も明智も、本来ならサヴィエトなんかとは無縁なハズだ。にも拘らず、2人は芯から温まるような事を言ってくれた。それはなんだか、言葉で現すのは難しいけど……。でも、なんか　いいなって思った。

信頼できる仲間がいる。

その事実があるだけでも　実はとても幸せな事なのかもしれない。

## 第249話 平穏な一日（後書き）

キャラクターNO025

・志熊大志しくまたいし ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ。

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：能力は凧紗よりも若干優れているが、それ以外は一般人レベル。

## 第250話 女たらし藤島圭介

「そうだ、2人とも今度の土日のどっちか空いてるか？」

俺や伊吹と明智の家は方向が違うので、明智とはコンビニ付近のT字路でお別れだ。

その別れ際、不意に彼女がそんな事を聞いてきた。

「俺は毎日暇だけど？」

「暇人アピールしてどうすんのよ……まあ私も用はないけど」

結局伊吹も暇なんじゃねえかよ……そう言う俺が一番暇人なのが。それにしても、友達って居ても休みの日に遊ぶ事って滅多にないよな。もしかしたら、俺だけなのかもしれないけど。

うん、きつと俺だけだ。

リア充のグループは多分、休日になれば殆ど友達との遊びに時間を使っているだろう。

休みの日に友達と遊ぶのはリア充だけだ……と思っていたのだが、

「なら木下も連れてうちに来るといいぞ。爺さんが久々にお前と暮葉の顔見たいって言ってたし、折角だから伊吹も一緒にどうだ？」

「な、凧紗の家って大きいんでしょ？ ホントに行ってもいいの？」

「全然構わないぞ……と、というか大歓迎だっ」

ただ友達を家に誘っているだけなのに、妙にそわそわしている明智。もしかして、明智って友達を家に招待するのが初めて……なわ

けないよな。少なくとも俺と暮葉は招待されたし、ついでに明智の親父さんにとり憑いていた明智光秀を撃破。だから光昭さんに俺達は気に入られたのだ。

だから、初めてではないハズなのに……なんで？

俺の事を何度もチラ見していたような気もするが、多分気のせいだろう。

「伊吹、どうする？　ちなみに明智ん所の飯はうまいぜ？」

「ふ、藤島……お世辞はいらないぞっ」

「お世辞じゃないって。あの豪華な食卓、お前が作ってんだろ？」

「そ、それはそうだが……っ」

「ホントにうまかったから、もっと自分に自信持てよ。そのほうが明智らしいぞ？」

「　　ありがとう」

頬を赤らめ微笑みながら言われたその一言は、何故だか心が温まるものだ。

しかしその時、背筋が凍るような不気味な気配を感じた。

「また口説いてる……ばか圭介………ッ」

気配も気になっていたが、それ以上に気になる声に反応して振り返る。視線の先には不機嫌そうに腕を組み、俺から目を逸らしている伊吹の姿があった。



「伊吹、どうした？」

「……なんでもない！ 私も行くから今日はもう帰るわよっ！」

「えっ？ ちょ、痛えっ!？」

不意に伊吹に手を握られるが、その手に籠められた力が半端ではない。見掛けに反してなんて握力の強い子なんだ。体質的に体が丈夫な俺なのに、力強く握られた手が軽く痛い。そのまま俺は伊吹に引きずられ、次第に明智との距離が遠くなっていく。

伊吹に引つ張られ、転ばないようにバランスをとりながら、俺は明智の様子を窺った。

「……伊吹？」

次第に遠のいてゆく明智は、なんだか思わせぶりな表情を浮かべている。やっぱり伊吹がなんで怒っているのか気になるらしいが……しかし本当になんでだろう？

場所は変わって、ここは閑静な住宅街にある藤島家の前。結局ここまで伊吹に手を握られたままだったが、未だに伊吹は目を合わせてくれない。もう、あれから10分近くは経ったのに、伊吹のヤツは一体何に怒っているんだろうか。その理由はわからないが……多分原因は俺だろう。

ていうか、それ以外に考えられない。

明智の言葉で怒るとは思えないし、やっぱり俺の何気ない発言が原因だろうか？

「い、伊吹……?」

「……………」

「ちょ、頼むからスルーだけは勘弁してくれっ！」

「……………なに？」

ようやく俺の言葉を聞いてくれたいいが、返ってきたのは機嫌の悪そうな声。しかも顔すら合わせてくれず、伊吹は背を向けたまま、相当に機嫌の悪そうな雰囲気垂れ流していた。

「……………ごめん」

「……………何に謝ってるの？」

「俺が原因……………だよな？」

「……………」

そこで黙ると言う事は、やっぱり俺が原因であるらしい。

俺、何か気に障るような事言っただけ……………？

記憶はないが、無意識に口から漏らしてしまったのかもしれない。

「……………あんたにしては鋭いわね」

またですか、それ何度も言われたような……………。

俺ってそこまでニブチンなのか？

「じゃあ、あんたが何やってか言ってみてよ」

「えっ？　そ、それは……………」

それがわかってたら苦労しねえよ……わからないから悩んじゃうんだ。わかっていたら最初に何をやらかしたか言っているさ。ああ、本当……俺は何を言ってしまったんだろうか？

答えられずに視線を逸らしていると、やがて伊吹のほうからはあ、と。ため息が聞こえ、

「やっぱ、圭介は圭介ね……っ」

「……………」

露骨ヌグツに呆ムれられてしまったが、仕方ねえだろ……本当に全く思い出せないんだよ。

「……………はあ、もういいわ」

「はい？」

伊吹の口から信じられない言葉が放たれたので、思わず聞き返してしまった。確かにもういいわって聞こえたけど、伊吹ってこんなにアッサリ許す子だったっけか？

「だ、だからもういいって言ってるの。ほんつとあんたって耳悪いわね」

「う、うっせ黙れ！」

別に俺は難聴ジヤビタナとかじゃねえよ。

聴力検査は正常だったし、ちゃんと今言ってた言葉だって聞こえてたっつーの。

……まあ、聞き返した時点で聞こえていないと思われるのは、当然の事だろう。

「圭介は難聴だから仕方ないわよね……許してあげるけど、その代わり条件があるわ」

コイツの中では俺「難聴のお爺ちゃんなのか？」

「っか今なんて言ったコイツ？」

「じよ、条件？ なんだそれ？」

条件。

それをクリアしなければ、今回の罪(?)を許してくれないというわけだ。伊吹もツンツン突っぱね「ツツパリ少女だからなあ……」  
どんなキツイ試練が待ち受けている事やら。

「<sup>ばっ</sup>罰ゲームよん」

うげえ……罰ゲームかよ……

なんだよ、3回回ってワンか？ それとも全裸で町内3週させるつもりか？

はあ……逃げたい。そして穴があるなら入りたい……。

「そんな胸張らんでも……てめえはどこぞのビリビリ中学生かよ。  
っか……胸小さっ」

「なんか言っただあ！？」

「い、いえ何でもございません！ 罰ゲームですな喜んで受けま  
すよ超悦びますよハハハ！」

怖え……。

暮葉ほどじゃないにしろ、伊吹も貧乳なほうだが……指摘するのはやめておこう。

「ば、罰ゲームで喜ぶってあんたマゾなの？」

「馬鹿野郎！ 女の子に罵ののしられる？ 我々の業界じゃご褒美なんだよー！」

「……変態」

まるで死んだ魚を見るような目で俺を捉え。冷たく一言を放つてくる。だけど今更変態って言われた所でどうとも思わないぜ。何故なら俺は変態、もっと言うならば変態紳士だからだ。

変態？ フッフ……ソイツは俺にとっては褒め言葉だぜ。

「んで、罰ゲームって何するんだよ？ 言つとくが、俺に出来る事なんて限られてるぞ？」

「大丈夫よ、私があんたを監禁するだけだから」

「What's that？」

「だから。私が圭介を監禁するの、私の家に」

「……なん、だと？」

伊吹はパソコン持っていた気がするが、確かパソコンのスペックは低かったはず。伊吹の家にあるパソコンでは、スペックが低すぎ

てエロケープレイは不可能であろう。しかも、伊吹は比較的早く寝る子である。寝る子の割には背も胸も小さ……げふんげふん。

とにかく、国宗家の消灯時間は早い。

従って深夜アニメの視聴は困難であり、録画する環境もあるか微妙。

……あれ、国宗家での監禁プレイって結構精神的にキツくないか？

「な、なあ。罰ゲームの内容変更しない？ 他の事はなんでもやるからさ」

「えっ？ じゃあ私の家で監禁と全裸でランニング、どっちがいい？」

「……惨めなボクを監禁してください、伊吹お姉様」

「よろしい！ いい子いい子」

俺よりも背の低い、しかも強気な割に涙もろい女の子に頭を撫でられるとは……しかも自分で惨めなボクなんて言っちゃまったし。本当に惨めだぞ……俺。

でも、全裸で町内ランニングするよりはマシだろう。全裸ランニングは下手すりゃ警察沙汰で停学確定だぜ。死んでもそれだけは嫌だよ、まだ監禁されるほうがマシだ。

こうして、俺は国宗家に監禁される事になってしまった。色々言いたい事はあるが、とりあえずこれだけは言わせてくれ。

どうしてこうなった？

## 第250話 女たらし藤島圭介（後書き）

キャラクターNo026

・白梅くわいばい ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：

防御力：

体力：

魔力：ナシ。

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：能力は強力だが、攻撃性がない。その分を高い身体能力で補っている。

## 第251話 自家発電

相変わらず綺麗に片づけられ、無駄という無駄がない国宗家。もちろん我が家だって玄関や廊下や居間、そしてトイレくらいは綺麗に片づけているが、それ以外は結構アウトだ。俺の部屋は無数の漫画やラノベ、棚にも集めたフィギュアを飾っているなど、結構ごちゃごちゃしている。

葵の部屋だって、それが美少女から美少年（大体お兄ちゃんキャラ）になっただけで、俺の部屋と大差はないし、最近暮葉の部屋を覗いたら、お菓子の袋が散乱していた気がする。

そう、我が家はわりと汚いほうなのだ。

しかし国宗家は違う。

無駄がなく、片付けられてシンプルな内装となっている。

ここは伊吹の部屋だが、精々どっかの歌手のポスターを飾っている程度。本棚も俺のとは違ってきちんと50音順、あるいはアルファベット順に並べられ、学習机には埃一つない。

A型は細かいとよく言われているが、伊吹……本当に細かいな。

「あ、あんまりジロジロ見ないでよっ」

「悪いっ」

とりあえず謝っておいたが、それでも気になるよなあ……。

そりゃあ綺麗っていう意味もあるが、やっぱりねえ……一応伊吹も異性である。

基本、男という生き物は異性の部屋に入ると 緊張しちゃうものなんですよ。

「……で、罰ゲームって何やるの?」



「なに言ってるんの？ もう罰ゲームは始まってるわよ？」

「そうかもしれないけどさ、これだと単に俺が遊びに来ただけみたいだろ？」

「……あんた、そこまで虐められたい？」

「違う違う、ちょっと疑問に思ったただだよ。あんまり深く考えなくてもいいって」

まあ、確かに苦痛ではあるよな……ぶっちゃけ言うтусごく暇だ。自分の部屋とは違って、ここには暇潰し出来るものがない。一応一階にはパソコンが置いてあったのだが、どうやら国宗家共有のパソコンらしく、パスワードもかけてあるらしい。まず伊吹からの使用許可は下りないだろうし、人の家のパソコンを使うのも正直どうかと思う。

家にラノベを取りに行きたい気分だが、考えてみれば監禁中にそれは無理だよな。

「はあ、暇だ………」

「圭介、一階のパソコン使う？」

「えっ、いいのか？」

「別にいいわよ。あんたのパソコンみたいに見られたら困るもの入ってないし」

悪かったな、見られたら困るものばっかパソコンに入れてて……。

男子高校生なら、むしろエロ画像とか入ってるほうが普通なほう  
だろ。

「そんじゃあ使うけど……パスワードは？」

「ん、待って。私も一緒に下降りるから」

伊吹も同行か……って、人にパスワード教えるわけにもいかない  
からな。とりあえずパソコン起動は伊吹に任せておくとしよう。

つか、伊吹……パソコン使えたんだ。

それから数分後。

古い上にスペックも低く、その割に色々と中に詰め込んでいる為  
か、パソコンの起動にはやたらと時間がかかってしまった。しかし  
これで　ようやくネットが出来るぜ。

伊吹は二階、自分の部屋だな……よし、エロサイト行こう。伊吹  
の親父は何度か顔を合わせた事があるが、若干小太りのあのオッサ  
ン……おそらくあの人は変態だ。娘がいるからってフィルタリング  
をかけるような人ではないハズだ。頼むぜ国宗のオッサン　俺は  
アンタを信じてるぜ。

「確かこのサイトにエロゲのCGが　　ぶ、はっ！？」

きたああああアアあああああああああッ！

ナイスだよ、マジでGJだよ国宗のオッサン。

アンタは神だ。共有PCなのにフィルタリング無しとか……ホン  
ト神がかつてるよ。

「さ、沙弥かわええ……沙弥たんマジギやおぎやおー！」

詳しくはキ ラギGOLD STARをプレイするといいぜ。ちよっとおバカなキャラってなんか可愛いよね。あと、電波ソングって物によるけど狼 が恋をしたは神だと思っんだ。

やばい……他人のパソコンなのに、俺の欲望が勝手に右手を動かしゃがる。

「くそっ、どつかにティッシュはないのか？」

ああもう我慢出来ん。

伊吹は……見てないよね？

アイツはきつと、自分の部屋で音楽でも聞いているのだろう。

今のこの状況なら 自家発電してもバレないぜ！

「ティッシュ確保、ぎゃおぎゃおな沙弥のエロCG準備OK……」

後はズボンを下ろすだけ。

フフフ……今、俺の脳内にはムフフの三文字。ムフフ……俺は男だ。男たる者ピンクい事が好きなのは仕方が無いぜ。というわけで行くぞ、ヘブン状態を目指して

まずはズボンを下ろして

「なにやってるの……？」

「ッ!？」

聞こえるはずのない声が聞こえ、恐る恐る振り返ると 伊吹がぼかんと佇んでいた。

おそらく彼女の目には、ズボンとパンツを下ろして半ケツ状態の俺と、デスクに置かれた使用目的が不純すぎるティッシュ。極めつけには画面に映っている沙弥のエロCG。

これはひどい、うん……弁解の余地はないね。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ！！」

叫んだのは伊吹ではない 俺である。

こういうのって、先に叫んだほうが勝ちだと思っただ。確かに俺は男だが、男だって叫びたい時は叫ぶんだよ。女の悲鳴は武器になるか、もしかすると男の悲鳴も武器になる可能性が……そんな限りなく低い可能性を信じて、俺は腹の底から大地を揺るがすような勢いで叫んだ。

しかし、伊吹が一気に顔を赤く染め、段々わなわなと震えて

「なんで圭介が叫ぶのよ!？」

「う、うるせえ! 変態! ド変態! DA変態! 変態大人!」

「変態はあんたでしょ! 人の家でその、な、なにしようとしてんのよ!？」

どうしよう、素直に自家発電って言うてしまえば楽かもしれないが……そうだ、俺ってひよっとしたら天才かもしれない。今、すごくいい事を思いついてしまったぞ。

「いいか伊吹、これは神聖なる儀式なんだ……」

「ぎ、儀式?」

「ああ、知っているか? 古代オリンピックじゃ女や子供や奴隷は参加できなかった。そして競技は不正を防ぐために全裸で行われた。

古代ギリシャの格闘技でも、不正防止の為に全裸で試合が行われた。それだけじゃねえ、かつて神事は裸で行われていたんだ！」

世の中の常識だぜ……古代オリンピックの選手は全裸だったってな。そうさ、こういう事実があるからこそ、俺は最悪の展開だけは回避できるルートを選べたのだ。

俺はさらに熱く拳を握り締め、伊吹を力強く直視しながら叫び続けた。

「そして、俺が今からやろうとしていた事も神事。欲とは必要なものであれば危険なものでもあり、そんな校舎の邪な欲は人を暴走させかねない。そんな事態を防ぐためにも、自家発電という神聖なる儀式は毎日行わなければならぬ。神事と犯罪防止の側面を持っているんだ！」

俺の乏し過ぎる知識をフルに活用し、それっぽく説明してみたが……自分で思っただけでなんて滅茶苦茶な理論だ。どこぞのカルト教団かよ……まあ、どうでもいいけど。

いや、どうでもよくないな。はたして伊吹は今の叫びを　　どう捉えるであろうか？

それによつては俺の運命が決まる　　。

「そ、そんなわけあるかあああああああああああああ  
！！」

真っ赤な顔で涙目になりなつて、唇を震わせていた伊吹が突然叫び出した。あはは、俺が考えた滅茶苦茶な理論は通用しなかつたか。ですよー、多分古代ギリシャ人だつて納得しない。日本ならまだしも禁欲的な国なんかに行つちやつたら、俺は今頃処刑されているだろう。

とりあえず、脱げかけていたズボンとパンツを穿き、俺は次の動作に移った。

土下座。

そう、土下座　しかもジャンピング土下座である。

「すみませんでしたオナ禁するから許してくれえエエええッ！」

今思ったんだけど、なんで人のパソコンでエロCG見ようと思ったんだろう……俺。

つくづく、自分という生き物は馬鹿だなあ〜と思った瞬間であった。

## 第251話 自家発電（後書き）

キャラクターNO027

・くがりゆうせい久我劉生 ×10が最高、ナシは無能という意味。

攻撃力：（能力込み）

防御力：（能力込み）

体力：

魔力：ナシ。

魔法（超能力）：

知力：

敏捷性：

地位：

総評：実力は大体早川と互角、早川より若干身体能力が高い。

## 第252話 大脱出作戦

パソコン使用禁止令。

それが何を意味するか、諸君は理解できるであろうか？

「……暇だ」

そう、暇なのだ。

現代っ子である俺は日夜パソコンの電源が付いているほど、中毒者なのだ。そんな俺がパソコン使用禁止令なんか喰らって、耐えられるはずがない。確かに、パソコン使用禁止令が発令となったのは俺のせいだ。流石に人のパソコンでエロ画像はないからなあ……ああ、やつちまったよ。

本当に暇だ、このままじゃ腐っちまうよ……。

「……待て、いい事思いついた！」

そうだ、このまま腐ってしまうくらいなら 国宗家から脱出しようではないか。

大体、ここは俺の家の隣じゃないか。いくら伊吹からの罰ゲームだからって、パソコン禁止な上にラノベ無し遊び道具無しはキツすぎる。こんな状況に耐えられる人なんて、昭和生まれの人が機械を知らない人くらいだろう。俺もそっちの人種だったら、今回何の苦もないのだろう……。

だが、生憎俺は小さい頃からパソコン触れていた現代っ子。パソコンのない世界というものを知らない俺は、今の状況が耐えがたくて仕方ないんだ…… やっぱ我慢できん！

伊吹は……確か、今風呂入ってるよな。

今がチャンス。流石の伊吹も全裸で外には出れないだろう……あ、



普通出れないか。

とにかく、伊吹が風呂場から動けない今こそ 最大のチャンスである。

「……すまん、伊吹っ」

一言、聞こえるはずのない謝罪の言葉を呟いてから、俺はこっそり玄関へと向かう。靴を履いてからは簡単だ。家というものは外からの侵入は難しいが、中から出る事は簡単だ。

開場だつて、ノブの近くの鍵を少し回すだけで出来る。

がちやり、という音が聞こえると同時に、ドアは力を加えれば開くようになる。さてさて大つてつけるほど大袈裟おおげんかな事でもないが、大脱出作戦は成功だな。

外に出た俺はゆっくりとドアを閉め、小走りで国宗家の門を超えようとする。ごく普通の庭付き一軒家なので、門までの距離はそこまで遠くはない。精々自動車一台分であろう。そんな短い距離でさえ移動するのにやたらと緊張する。脱出作戦って簡単なようで難しいぜ……精神的に。

ガタッ、

家の前を通っている道路へ足を踏み入れようとした、その時である。

今、何か聞こえたよな……しかも体のどこかが物に当たった感じだ。暗くて散らかっている場所を歩く時にはありがちな事かもしれないが、それが単なる民家で聞こえたから怪しい。

しかも、確かあつち風呂……。

「ま、さか……ッ」

よくエロサイトでガチ盗撮モノとかネットに落ちてるけど、まさか……そんなサイトに投稿する動画を撮影すべく、どこぞの変態さんが伊吹の入浴シーンを……。

「伊吹……ッ！」

ちくしょう、ナイスタイミングで脱出しようとしたぜ俺。もし、あのまま我慢して伊吹の家にいたままだったら変態盗撮犯を見逃す所だった。待つてる盗撮犯……てめえの都合通りに行くと思つたら大間違いだ。必ず捕まえて伊吹の入浴シーンネット流失を阻止してやる。

「おいてめえ！」

狭い庭を全力で走り、伊吹の家の風呂があるあたりまで移動する。しかし、コンクリートブロックが積み重ねられているだけで人の姿はなく、気配さえ全く感じられない。

クソッ、まさか逃げられちまったのか……？

いや、待て……そもそも盗撮犯なんていたのか？

窓すら開いてないし、もしかしてブロックベイが勝手に崩れ落ちただけなんじゃ？

「……………」

あれ……ちょっと待て、この状況……まさかとは思いますが。

俺が最も変態に見えるのでは？

「ッ!？」

ズバーン！ と、勢いよく浴室の窓が開け放たれ。暑そうな湯気

がもくもくと浴室から放たれるその中から、裸の伊吹が姿を見せたのは多分……ラッキーだけど悲劇の始まりだろう。

「……にゃ？」

「……えっ？」

明らかに空気が凍りついた。まるで氷河期、全地球が凍結してしまつた大惨事のようなのだ。

しかし、俺の目頭と股間だけは熱くなつていくような気がした。そう、窓を全開にして外を確認している伊吹は生まれたままの姿。それも、入浴中で火照っている上に濡れ濡れだ。髪や肌がびしょびしょに濡れており、気のせいか顔も赤くなっているような気がした。何より小ぶりながら形の整つた伊吹の双丘に、思わず目を奪われてしまった。

綺麗だ……。

伊吹の裸なんて見るのは数年ぶりだが、やばい……子供の頃よりずっと……。

「うにゃあああああつ！？ ば、ばば、ばかえろ圭介のばかあああああああああつ！！」

顔を真っ赤に染めた伊吹が、恥ずかしさのあまりか大声で叫んでいた。まずい、このままじゃ俺が逮捕されちまうじゃねえか。とりあえず弁解だ……は、話せばわかるハズだ。

「お、落ちつけ伊吹！ とりあえず落ちついて話を聞いてくれ！」

「うるさい、ばか圭す

ッ！？」

たまたま持っていた石鹼を投げつけようと、伊吹が一步前に乗り出した。その時だ。

ずるり、と。窓枠にかけていた足を滑らし、支えを失った伊吹が窓から落下する。

そこにたまたま佇んでいた俺へ、急降下爆撃機の如く、

「!?」

ドゴォ！ という壮絶な音と共に、俺は勢い余って草むらの上へと転がる。下がアスファルトではなく土であった事と、後頭部への衝撃を最小限に止める事が出来たので、幸い背中に少しだけ痛みを感じる程度で済んだ。だが、突然の出来事に思わず<sup>まぶた</sup>瞼を閉じてしまったのだ。

何が起こったのか、予想は出来るが想像が出来ない。それが事実なのか確かめるべく、俺はゆっくりと左、次いで右の<sup>まぶた</sup>瞼を開けていく。

最初は目がぼやけていたが、次第に視力が回復してきた時、ようやく事態を把握できた。

「ん、あ……いた、あ…………？」

左手で自分の腰を撫でながら、痛そうに<sup>うな</sup>唸る伊吹。足を滑らせ、落下してきたのだから痛くて当然だろう。別にそれは普通の事だし、特に問題視する必要もない。何故なら、怪我をする以上に危ない事態に発展している事に、俺はいち早く気付いてしまったのだ。

俺に覆いかぶさるように倒れ込んでいる伊吹は、当然濡れ濡れの全裸である。

体は火照ってとても温かいが、彼女の体についている水滴は冷たく感じた。彼女の顔は俺の胸に埋まっており、彼女が呼吸をするた

びにふうふうと、程良くくすぐつたくて気持ちいい。

視線を下ろすと……うわぁ、綺麗な背中だ。白く、絹のようにしなやかで、無駄毛という無駄毛が見当たらない。剃っている……わけではなさそうだな、本当に生えていないらしい。

さらに、俺はその下へ視線を　　って、俺は変態かつ!?

「……ええっ!?!」

ようやく事の重大さに気付いた伊吹は驚きを隠せず、バツと起きあがってしまった。

ていうか伊吹さん、その……起きると丸見えなんだが……?

「　　っ!?!」

伊吹もその事にしたのか、慌てて顔を真っ赤にしながら再び伏せてきた。くそっ、出来ればずっと見ていたかったが……まあ、無理ですよ。

というか、早くなんとかならないかな。暮葉や葵に見つかったら打ち首獄門確定だ。

「い、伊吹……俺、目え瞑ってるからその間に……なっ?」

「……ばか」

「……えっ?」

今、馬鹿って言われたような……?

しかもしがみ付く腕の力がさらに強く、体もさらに押し付けられてきた気が……。

「ほんと……あんたって、馬鹿……っ」

「……ごめん。物音が聞こえたから盗撮犯だと思って……ホントにごめん……」

少なくとも、今の俺には謝ることしか出来ない。信じてくれないかもしれないし、実際その可能性のほうが高いけど……黙っているよりはマシだ。

「別に、もういいわよ……気にしてない、から……っ」

顔はこちらに向けているが、決して目を合わせようとはしない。だからと言って不機嫌そうには見えないし、相変わらず顔は赤い。やっぱり、恥ずかしいんだろう……ていうか、俺もそろそろ理性がヤバい……。

「それより風邪引くぞ。ちゃんと目は瞑ってるから早く家の中入れよ」

全身びしょ濡れの状態でしかも全裸だ。風邪はひくだろうし、何よりそろそろ……。

は、早く……早く行ってくれ。俺は永渕みたいな強姦魔にはなりたくない。

だ、だから早く　早く俺から離れてくれっ。

「……ねえ、圭介さ……興味、ないの？」

「はあ、何のだよ？」

「だ、だから……さ。あんたは、パソコンも本棚もベッドの下もア

しなのに、その……」

「……っ！？」

どきん、と。一瞬胸を鷲掴みされたかと思っただが……まずい。本  
当にその、そろそろ我慢するのが辛いぞ。だってその、伊吹が変な  
スイッチでも入ったのか、何か……求めてきてるような？

「……お前、何言ってるんのかわかってるのか？」

「わかってるわよ！ 私だって滅茶苦茶恥ずかしくて……で、でも、  
こんなあんただけよ！」

そりゃあ誰でもだったらビッチじゃねえか……流石の俺でもそれ  
は引くぞ。

いや、俺だけって時点で十分変だけど……。

この感じはやっぱり気のせいじゃない……な。

だからこそややこしいモンだ。それがわかってたら ツ！

「……きゃっ！？」

一瞬だった。

得体の知れない悪寒を覚えた俺は、思わず上に押し掛かっていた  
伊吹を突き飛ばし、自分も急いで地面を転がったが、次の瞬間  
バガツ！ と、地面に数センチの小さな穴が開いた。

穴と言うよりは窪みに近いが、それを作る為にはかなりの力が必  
要だ。

ちくしょう……こう大事な時に、何処のどいつの悪戯いたづらだよ。

「い、たた……っ」

「伊吹！ 大丈 ぶはあっ！？」

伊吹を心配して咄嗟に振り向いたはいいが、彼女を直視するが出来ない。吹き飛ばされて背中を叩き付けたらしく、彼女は壁に凭れかかり、しかも開脚していたのだ。

要は丸見え。

女の子の一番大切な所まで 意図はしていないが見てしまったのだ。

「 そのこの女が野蛮人を通報し、社会的に抹消してくれると思っ  
ていたんだけど」

声が聞こえる。

口調は男っぽいのが、甘く幼い声はどう聞いても女の子のものである。同時に、小さな足音を立てながら近づいてくる人影が見えた。身長や年齢は葵と同じくらいであろうか。

「 そう上手くはいかないみたいだね。というわけで、僕が君を  
抹殺するでしょう」

やがて闇が拭われる。決してこの場がライトアップされたわけではなく、俺達を照らしているのは街灯りや、国宗家の風呂の灯りくらいだ。ただ、相手が薄闇の奥からこちらへ近づいてきただけ、ただそれだけのはずなのに。

その姿を見た瞬間、

俺の思考はほんの一瞬で止まってしまった。

「ちよ……な、なによ……これっ！？」



「う、そ……だろ？」

俺も伊吹も驚きを隠せず、伊吹は叫ぶだけだが、俺はマトモに言葉が口から出ない。

現れた刺客しやくの顔は見覚えがある……というより、かなりの仲良しな気がする。

確か俺はその子に告白されて、今も俺を落とそうと頑張っているらしいが……なのに、

「なん、で……」

本当になんで、

「なんで魔法なんか使えるんだよ 青山さん！」

いつもの大人しそうな笑顔ではなく、不敵な笑みを浮かべて青山さん。しかも、その右手にはどういいうわけか 白銀に輝く怪しい柄をした金属製の杖が握られていた。

## 第253話 青山さん？

風呂場の方から聞こえた異音も、俺が伊吹に襲われかけたのも……まさか、青山さんが仕組んだことだったと言っのか。しかし気になる事がある……この青山さん、何処がおかしいぞ。

仮に青山さんが伊吹に嫌われるような事をさせる場合、目的は恋敵を減らす為。しかしあの青山さんの目的は何か、俺の事を野蛮人と言って排除しようとしているし、口調も何処か変だ。何より青山さんは一般人で、少なくとも魔法使いなんてカテゴリーには入っていないハズだ。

それがなんだ……さっきの青山さん、今は明らかに魔法だ。

確かに俺は素人だけどさ、ああいうのは何度も見てきたし……だから間違いねえ。

アイツは青山さんじゃねえ      ツ！

「……誰だ」

「ん、何を言っているのかな？」

「誰だっつってんだよ      てめえは!？」

過去に重原が似たような目に遭っていた。あの時は確かハイチ出身の魔法使いで、宗教魔術の他に複製っていう変な魔法を使っていたが……コイツもあの時の野郎と同じなのか？

青山さんの体を複製した上で      コイツは俺達に喧嘩を売ってる  
つてののか？

「ふーん、君は短気だね……後輩に裏切られるのがそんなに心に響いたかい？」

「ふざけんな、てめえは青山さんじゃねえだろ！」

「とんでもない。僕はその青山さんだけど」

「わかってんだよ、前にも似たような事があつたからな。てめえは青山さんの体を複製して、仲間の振りして俺らに近付こうとしてるだけだろ！」

そして問題はコイツの所属組織だ。何が目的で俺を野蛮人として  
いるのか、そもそも抹消するって所でサヴィエトではないだろう。  
連中はあくまで俺の回収が目的だったはずだ。サヴィエトが抹消し  
ようとしているのはアルファ隊や、ロジーナ現政権であり俺ではな  
い。  
という事は……コイツ、少なくともサヴィエトの魔法使いではな  
い。

「……はあ、下手に魔術に精通している素人はこれだから困る」

「なに……?」

「幸い、後ろの君の幼馴染はチンブンカンブンのようだが……藤島  
圭介だったかな? 君は居てはならない異界からの侵略者だと言っ  
たのに、どうして何気ない日常生活を送っているんだ?」

「し、侵略者……?」

「おや、効き覚えがないかい? 確か、君は報告書では異界の皇帝  
の子孫……らしいけど、皇帝の子孫がこちらの世界に潜伏している  
という事は、結局君は侵略者って意味なんだよね」

コイツら……どうして俺がアレクサンドルって奴の子孫だと知っているんだ。しかもこの言い方だとサヴィエトの人間ではないし、少なくともコイツは異世界人ってわけではなさそうだ。

だったら、俺を知っている理由って……しかも、侵略者だと……？

「……てめえ、何様のつもりだよ」

「何様って、一応今の僕……いや、組織や組織に協力する組織は世界の番人って所だろうか」

「そんな理由で……たったそれだけの理由で青山さんを巻き込んだのかよ!？」

「侵略者退治と比べてしまえば、この世界の一人が犠牲になるのが関係ないと思うが?」

ここで俺は確信し、体が震えるくらいの激しい怒りを覚えた。

そもそも、俺が侵略者であるという根拠はあるのか。自分達がこの世界の番人であるという根拠があるのか。そんなあるかもわからない妄想に囚われて、コイツは俺を社会的に抹消しようとした上に青山さんまで……許せねえ、このクソ野郎 絶対に許せねえ。

「ナメてんじゃねえよ てめえッ!」

全身が熱く、脳味噌が沸騰しているような気がする。怒りに任せて駆け始め、五本の指を粉々に砕く勢いで握り締める。距離は5メートル、飛び込めばすぐの距離である……が、

「いいのかい」

言葉は、拳が顔面を捉えたと同時に始まる。

「この体、本物の青山さんの体だけど」

「ッ!?」

それは嘘かも知れない。だが完全に頭に血が上っていた為にまともな思考が出来ず、右の拳が魔法使いの鼻っ柱を突く寸前に、反射的に踏みとどまってしまった。

寸止め。拳は魔法使いの僅か1センチほど手前で止まっている。

「フツ、そこで躊躇うあたり 君はまだまだ素人だね」

ぐるん！ と、金属製の杖が横薙ぎに襲いかかってきた。俺は咄嗟に身を屈めてそれを避けようとする。杖は頭上を通過し、余波の小さな風が髪の毛を靡かせた。

所詮は魔法使い…… 身体能力は低い、と。  
そう思った俺は一気に黙らせようと飛びかかる…… が、

ゴツ!! という重たい衝撃が回避したハズの俺の鳩尾に直撃してきた。

この魔法使いは二刀流のようなものなのか。そう思った俺は魔法使いの体を見るが、特に武器を持っているわけではなさそうだ。拳で殴っても、あの細腕でこんな痛みを感じるハズはない。

「……て、めえ。その杖……ッ!?」

「もうバレたのか、早いね。君は魔法使いとしての素質があるんじゃないかい？」

素質以前にそれしかねえだろ。

思い出してみれば、アマデーオも風剣のシルフも武器を持っていた。ソイツらは確かその武器には何らかの意味があつて、意味があるからこそ、己の魔法の精度を上げているらしい。アイツらが言っていた事が正しいとすれば、この魔法使いが使う杖も何らかの意味があるハズだ。

「魔装飾……そういえば、彼らは魔装具まそうぐつて言っていたかな。まあ、どちらも同じものだから呼び方は自由だよ。これね、僕達魔術師つて所詮は人間だし、いくら極めようが限度つて物があるんだよね。フリーハンドと定規くらいの差がね」

「要は、その魔装飾つてヤツで魔法の精度を補つてんのか？」

「流石は鋭いね。魔術的記号に一致する道具を用いて、それに僕らの魔力を流しこめば粗悪品でも魔装飾にはなるよ。まあ、僕の杖は強度を考えて一応スウェーデン鋼を用いているけど」

魔法使いつてのは本当不便な連中だな。いや、魔法は便利かもしれねえけど……結局軍隊と同じで道具使わないと強くないのか。まあ、そんな事は今はどうでもいいんだ。

それより、問題はその杖と青山さんの体の事だよ。イヤらしい意味じゃなくて、コイツは確かこう言っていたな。青山さんの体は本物だつて……それつて一体どういう意味なんだ？

「てめえが魔法使いなのはわかったけど、結局てめえは何者なんだよ」

「僕？ ああ、僕はハーバート・ピアース。得意分野は近代西洋儀

式魔術……んで、一応【朱色の陽射し】って組織の人間なんだけど、とりあえず警告しておくね」

聞いたことがない組織名に続いて警告って……結局コイツは何者なんだよ。

そもそも、【朱色の陽射し】って一体なんなんだよ。

「君の敵は僕だけではない」

「ッ!？」

「【黄金の夜明け】を御存知かな？」

「【黄金の夜明け】？」

「かつてこの世に存在した巨大魔術結社だよ。その流れを汲む組織の大半がね、僕らみたいに君を害悪だと認定して……というわけだから、精々君は殺されないように頑張ってね」

魔術結社なんてわけのわからないことを言いながら、魔法使いは俺に背を向ける。敵に背を向ける時点でおかしいとは思ったが、その時の俺は何かの作戦だと思っていた。だが、男は次第に暗闇の中に紛れこむように、次第にその姿が遠のいてゆく。

「おい待てっ!」

「待たないよ、今の僕は完全に不利だからね。そういうわけで一旦身を引くからヨロシク」

叫んだ次の瞬間　ズゴンッ!　と、胃液を逆流させるような衝

撃が伝わり、激しい痛みには耐えられず、俺は蹲すくまった状態で地面に落ちてしまった。

「け、圭介っ！ ちょ……し、しっかりしなさいよ、圭介っ！」

いつのまにか、タオルだけ巻いていた伊吹……何処にタオルがあったのやら。ていうかタオルがあるなら最初からしてください。いや、濡れ濡れ裸にタオルも十分エロいけど……。それにしても、ハーバートだっけ……アイツ、なんで逃げたんだ？

「けーすけ様っ！ 伊吹さんっ！」

痛みも治まってきて、でも地面が冷たくて気持ちが悪くて起きあがれない俺の耳に、ソプラノボイスの元気で可愛い声が聞こえてきた。

ああ、なるほど……そういう事か。

ハーバートめ……勝てないって判断したから逃げやがったのか。

「もきゅ！？ 2人とも大丈夫なのですか！？ し、しかも伊吹さんその恰好……っ！？」

「えっ？ ふ、あにゃ……こ、これには色々わけがあんのよ！」

「暮葉、俺達は全然大丈夫……だけど」

「そういえば……、」

「もきゅ？ どうされたのですか、けーすけ様っ？」

「いや、その……お前の後ろにいる奴ら 誰？」



そう、暮葉の後ろには2人の男女が並んでいたのだ。男は特徴という特徴はないが、女のほうは先端を縛った紫のストリートヘアでしかも……サーベル、だよな……右手持ってる剣は。

服装は普通だけど、持ってるものが普通じゃないし、何より暮葉と一緒にいる……そういえば隣にいる男も細身だけど、喧嘩強そうだな……格闘技やってた雰囲気だぜ。

「私？ 私、リリー・アトウォーター。暮葉と同じくアルファ隊の一員だけど？」

「んで、俺は新川夢……お前が噂の藤島圭介、なのか？」

あれ、少女は暮葉の同僚で、少女と一緒にいた男は俺の事知ってる……。

なにこれ、すっごく嫌な予感しかしねえ……。

もしかして今回の騒動……身内だけで解決できるような甘い問題とは違うのか……？

## 第254話 近代西洋儀式魔術

「おおすげえ！ この家……映画のDVDがいっぱいある！？」

「夢ったら、いつも映画見てるわね」

「仕方ないだろ、それが趣味なんだよ。おっ、これリリーの大好きなコンドーじゃないか？」

「あっ！ ほ、ホントだシュ ちゃん！」

「……リリーも物好きだよな」

ある者は趣味に浸<sup>ひた</sup>り、

「ちょ、勝手に物色しないでよ！」

ある者は訪問者の行動を怒り、

「この混乱に紛れて、パソコンでアニメでも見るか……」

ある者……というか、俺は混乱に乗じて禁止されているハズのパソコンを起動し、何処かのサイトでアニメを視聴しようとしていた。そう、ここは国宗家である。

あの後、俺の家には葵がいるだろうし、彼女を巻き込むわけにはいかないので、伊吹の家で暮葉達から事情を説明してもらおう事になった。ところが家に入ってみればこの通り。みんなハーバートの事なんてすっかり忘れており、それぞれ趣味に浸っていたりそれを注意していたりしたが……、

「みなさん！ いい加減本題を思い出して欲しいのですっ！」

いい加減堪忍袋の緒が切れたのか、突然暮葉が怒りを籠めた大きな声で叫んだのだ。

そりゃあまあ、普通は怒るよね……皆さん自分勝手に趣味楽しんでらっしゃるし。

しかも、今は色々大変な事態になっているというのに……。

「なあ暮葉。アイツらはその本題ってヤツ、知ってんだろ？」

「も、もきゅっ!? は、はいっ！ リリーさんも新川さんもこちらの関係者ですのっ」

「だったら、暮葉が説明してくればそれでいいんじゃないか？」

「そ、それはそうなのですが……っ」

「頼む、俺は暮葉から聞きたいんだ」

「もきゅっ!? ふえ、にや……そ、そうなのですか……っ?」

ぶわっ、と。暮葉の顔が赤みを帯びてゆく。

「ああ、だから頼む 暮葉」

「もきゅ……そ、そういう事なら仕方ないですね。ほんと、けーすけ様は困ったちゃんなのです」

くうう……何に照れてるんだか知らないが、赤くなっている暮

葉たんカワユス。

……あかん、今の俺は超キモイだろうな。  
少しは自重しようぜ……俺。

「魔術結社って御存知でしょうか？」

それは突然の事であった。

先程まで赤くなっていた暮葉が、いきなり真剣な顔になって話し始めたのである。

「魔術結社？ そっぴや、ハーバートがそんな事言ってたよな。禁<sub>イ</sub>書<sub>ン</sub>目録の話か？」

「いえ……その、現実の話なのですっ」

魔術結社と言えば、アニメやゲームでよく登場するモンだけど……  
現実って。そんなモンが現実に存在するのかよ。まあ、異世界や魔法少女が実在するんだし、あっても変じゃないが。

「拙者も今回知った事なのですが、こちらの世界にも魔術結社というものが存在しているらしいのです。その多くが19世紀末にイギリスで創設された、黄金<sub>S</sub>の夜明け<sub>M</sub>の流れを汲むものらしいのです」

「黄金の夜明け……？」

「カバラを中心に、当時ヨーロッパでブームを起こしていた東洋哲学や薔薇十字団伝説、錬金術など色々な物を習合させた教義を持つ組織なのです。確か……今アルファ隊でも話題になっている、アレイスター・クローリーがかつて所属していたらしいのですが……」

アレイスターって……あれ、そんなキャラインックス禁書目録にいたよな。  
あの、機械の中で逆さまになっている人……えっ、ちよつと待てよ。

「暮葉……アレイスターって実在人物なの？」

「もきゅ？ そ、そうらしいのですよっ？」

「マジで？ もしかして学園都市にいるんじゃないね？」

「……けーすけ様っ、アニメの見過ぎなのですっ」

「……さーせん」

いや、でも正直驚きだ。あのアレイスターが実在人物だったなんて……まあ、どうせオカルトに走りまくっていたししょうもない人だったんだろうけど。

うん、俺は魔術サイドの人間じゃないから分からないぜ。

「んで、その黄金のナントカってヤツの流れを汲む魔術結社が、今回の黒幕か？」

「一概には言えないんですけど、多分そうだと思うのです」

マジかよ……サヴィエトだけでも手いっぱいだったのに、今度は魔術結社か。今年に入ってからどれだけ組織に狙われてるんだよ……俺。まるで政府に都合の悪い人間が、どこぞの殺し屋に命を狙われているみたいじゃねえかよ。いくら皇太子の子孫だからって、そこまで俺って重要なのか？

しかも、皇太子つつつても異世界の国だし……。

「この世界じゃ何の権力もない、単なる高校生だつてのに……。」

「はぁ……んで、やっぱり連中の狙いは俺か？」

「いえ、拙者達も含めた異世界人全員らしいのです」

「い、異世界人全般？」

「彼らは拙者達を異界からの侵略者だと信じて疑わないようなのです」

「マジかよ……っーかその情報を連中、どっから手に入れたんだよ」

「それがわからないのですよ。だから拙者達が今忙しいのですっ」

ぶつぶつと口を尖らせ、不満を漏らすように暮葉は呟き続けた。

暮葉……相当機嫌が悪いな。

まるで、何か予定を仕事で潰されたかのようなのである。

「それで、ハーバートはなんで青山さんに……？」

「うーん……拙者も詳しい事はわからないのです。ただ、黄金の夜明け系の魔法使いは近代西洋儀式魔術を得意としているらしいのです」

「近代西洋儀式魔術？ あれ、それってアマデーオが……」

「多分、今頃アマデーオに尋問が行われているはずですので、詳細は後ほど明らかになると思います」

ここでアマデーオの名前が浮かび上がるとは、随分懐かしいなとは思いつつ、俺は近代西洋儀式魔術とはどういうものかを考え始める。考えるつつつても俺は素人だし、基本的にそういう知識は厨二病系アニメで覚えたものだし、それが本当なのかすら怪しいぜ。ただ、怪しげな儀式を行う事だけは確かだな。

アマデーオはその儀式を再現する魔法を行使し、俺達を苦戦させたんだ。

ハーバートの青山さん化も、多分何らかの魔術的儀式によるだとは思っけど……。

「はあ……結局どうすりゃいいんだよ」

「魔術結社は基本的にイギリスにあるのです」

「まさかとは思いますが暮葉さん。イギリスに行きますなんて言わないでせうね？」

「け おん映画じゃあるますし、突然ロンドンとかだったら……マジで泣くよ？」

「だって明日平日で学校だし、今は夜だし 今日中に帰れねえじゃん。」

「にゅふふ、何を言っているんですかけーすけ様っ」

暮葉が楽しそうにニコツ、と。まるで太陽を見ているかのように笑みを浮かべる。その素晴らしい笑みは思わず、笑顔を守ってやりたいと思うほどであった。

「ですよね 暮葉だって今からイギリス行きは困るもんね。」

「英国3泊5日の旅、もう決定事項だったりするのですっ！」

暮葉の笑顔を見つめていたら、自然と笑顔になっていく……なんてこともなく、今の発言で今までの喜びがリセットされ、思わず絶句してしまった。

ちよつと待て、3泊5日イギリス旅行……だと？

「えっ！？ ま、マジでイギリス行かなきゃダメなの！？」

「はい、その……けーすけ様、拙者達……友達、なのですよ……っ？」

「お、おう。そんなのあたりまえだろ？」

「にゅふふ、でしたら 拙者に付き合ってくださいすよねっ！？」

ぐわっ、コイツ……満面の笑みで友達という立場を利用してようとしている……ッ！

そりゃあさ、行けるんなら行きたいよ、イギリス。

変態紳士の本場だし、観光名所も沢山で何より暮葉と一緒に……しかし、

「ちよつと待て！ 学校はどうすんだよ、学校は！？」

「心配しなくても、特欠扱いなのですよ」

「……なんで？」

「インターンシップってありますよね、2年生が全員行くものなのですけど」



ああ、それなら俺も10月に予定している。インターンシップというのは、要は職業体験というヤツであり、最近はどこ的高校でも行っているらしい。大体秋の今頃に行われ、俺を含めて10月に職場に行くヤツが多いのだが、中には9月中旬に職場に行く者もいるらしい。

しかし、そのインターンシップがどうしたってんだ？

「実は前々からアルファ隊が工作を行っておりまして、けーすけ様の日程を拙者と同じく、明日から3日間に変更させてもらったのですっ」

「な、なんだってえっ!？ け、けど。インターンに行かなきゃダメだろ!？」

インターンシップは全員強制参加であり、行かなければ単位を貰えないのだ。つまりサボれば留年は確実だし、職業というだけに将来の就職にも影響することだ。

「大丈夫なのですっ! その為に新川さんとリリーさん呼んだのですからっ!」

「……はっ?」

つまりどういう意味だつてのよ。

サッパリ意味がわからん、ただいまコ ンドー視聴中の2人がなんだって言うんだよ。

「でっすっかっらっ。あの2人に拙者達の身代わりをやってもらうのですよっ!」

「……ねえ、それ何十パーセントネタ？」

「100%真実なのですっ！」

「……不幸だ」

マジかよ……インターシップの日程を勝手に変更された上に、実際に職場に行って働くのは身代わりかよ。しかもアイツら……俺達と初対面なのに、俺達を演じられるのか？

「つーか、それってバレねえのか……？」

「大丈夫だと思うのです。リリーさんは無属性魔法の達人ですし、そういう偽装魔法は得意なハズなのです」

「……せ、洗脳でもするつもりか？」

「にゅふふ、近いかもですねっ」

笑顔で軽く答えるだなんて……暮葉、いや　アルファ隊って超怖え。

「それと、リリーさん達の監視役として　伊吹さんも一緒にインターンなのでっ」

「ちょ、おまつ！？　伊吹の日程まで変えやがったのか!？」

「いや、伊吹さんは元々拙者と同じなのですよ?。」

マジかよ……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0702u/>

---

魔法少女に会っちゃった場合

2011年12月7日07時52分発行